BLEACH El fuego no se apaga.

更夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ.

【Ｎコード】
Ｎ７２５３Ｎ

【作者名】
更夜

【あらすじ】
黒白の世界に燈る一色。長い長い時を生きる中で喪失してしまった実感を求める彼は、黄金の女性と出会う。その出会いは彼に力と、求めるものを得られるかも知れない舞台を齎した。喪失の証たる穴をその胸に穿ちながら戦う彼は、失った実感を取り戻すことができるのだろうか・・・・・・
※Ａｒｃａｄｉａ様との二重投稿の作品になります。

感想制限をはずしています。

BLEACH El fuego no se apaga. 1（前書き）

独自設定、解釈が含まれます。
上記に伴い時系列が不安定な部分があります。
根本的に破綻しているということは無いとは思いますが、気になる点がありましたら指摘してください。

第1話は世界観の説明が主になります。

BLEACH El fuego no se apaga. 1

夜の闇が世界を覆い尽くしている。

暗い暗い闇色の空、星の瞬き一つ無いその空にはまるで薄笑いを浮かべたような三日月だけが爛々と輝き、その空の黒に相反するような純白の砂で出来た荒涼とした砂漠だけが、その世界を形成する全てだった。
黒と白、たった二色だけで彩られ、それ以外が排除されてしまったような世界は、何も無いがゆえに美しさすら感じる。
生命というものがまるで感じられない世界は、生きた人間が住まう世界ではなかった。
人間が住む世界を現世と呼ぶのならば、この世界はその反存在と言えるだろう。

その世界は堕ちた魂の行き着く先、死して人から人ならざる化け物となり人の魂を喰らう異形、心を失い、その胸に喪失の証たる孔を空け、その堕落した本性を白い髑髏の仮面で隠したモノ。

『虚(ホロウ)』

そう呼ばれる災厄の具現達が住まう永遠の夜がこの世界。

『虚圏(ウェコムンド)』それが永遠の夜が支配するこの世界の名だった。

その虚圏の漆黒の空を一直線に横切るものがある。
それは異形の怪物『虚』ではなく、かといって漂う雲でもなく、それは間違いなく人の形をしていた。
その人影が旋風の如く駆ける、そう、その人影は間違いなく空を駆けているのだ。
そこに本当は地面があるのではないかと思わせるほどしっかりとその足で空を踏みしめ、その足の一蹴りで前へと進む。
その一蹴りは爆発的な推進力となり、一歩、また一歩と人影は進む。
それは空を駆けるというより、むしろ本当に空を飛んでいると思わせる様な姿だった。

その人影は女性の形をしていた。
その身体には白い衣を纏い、背中には幅の広い鞘に収まった刀のような物を背負い、金色の髪は風に翻り月の燐光を浴びて淡く輝く。
腹部から胸の下半分までもが顕になった白い衣から覗く褐色の肌は、皇かに、そして煌めくように。
顔の下半分がその衣に隠されてはいるが、金色の睫に縁取られた翡翠色の瞳からは、凛とした強靭な意志が見て取れた。
総じて美しいと表現していいであろう成熟した女性の姿をした人影は、見た目とは裏腹にその実、余りにも危険な存在であった。

それは現世に住まう人間にとっては言うまでも無く、そしてこの虚圏に住まう虚にとっても同義だった。
彼女が悠々とこの夜空を駆けているのがその証拠と言えるだろう。
虚にとって人間とは捕食の対象でしかない、獅子が獲物を刈るが如く、絶対的な力を持って一方的に捕食する。
捕食する者とされる者、殺す側と殺される側、それは覆ることの無

い摂理なのだろう。

しかし、おおよそ人の形、空を駆けている時点で普通ではないのだが、しかし人型をした彼女は殺されること無く夜空を駆ける。
では何故彼女が襲われないのか、何故殺されないのか、その答えは簡単だ。
絶対的な力を持ったものが捕食者、殺す側と定義するのならば、今この場所で最もそれに当てはまる存在はこの空を駆ける彼女なのだ。
それは見た目の話ではなく内側の話、人の形をしているがその中身は人とはかけ離れている存在。
此処は虚園、異形の化け物たちが跋扈する夜の世界、そう、それは彼女とて例外ではない、彼女も等しく虚と同じ化け物なのである。

その空を駆ける女性、名を『ティア・ハリベル』と言う。
彼女は人ではなかった、そして虚でもなかった。
いや、そのどちらでもあったモノとも言えるのかも知れない。

『破面（アランカル）』それが今の彼女を表す言葉。
虚として自らの本性を隠すための仮面を剥ぎ取りその本性を晒し、自らの魂の限界を超える事で、更なる力を求めた異常なる集団。
それが破面である。

人の魂が墜ち虚が生まれる、そして生まれた虚の胸には例外なく孔が穿たれている。

それは魂が墜ちた際に失われた心の跡だと言われ、虚はその喪失した心を埋めるために生きた人間の魂を喰らうのだ。
初めに最も親しかった者を、最も愛していた者の魂を喰らい、それでも足りずにそこから手当たり次第人間の魂を欲するようになる。
しかし、そうして魂を喰らい続けても喪失した心を埋めることは出来ず、失った渇きだけが虚を支配していく。
そしてその衝動が著しく強い虚は、遂には同胞たる自身と同じ虚を喰らいはじめるのだ。
同胞を殺し、喰らい、共食いを続けていった虚は折り重なり、混ざり合って一体の巨大な虚へとその姿を孵る。
曰く『大虚(メノスグランデ)』

通常の虚の何倍もの体躯と何十倍もの霊力を持つ大虚には三つの位階が存在し、最も下の位階『最下級大虚(ギリアン)』全てが同じ外見、黒い外套に身を包んだ巨躯の大虚、多くの虚が混ざり合ったため、思考すらままならず、理性と呼べるものは無くただ本能のみで行動する赤子のようなものだ。
しかし、まれにその大虚の中に『個』を持った固体が存在した。
その固体は同じ最下級大虚を捕食し、力を増大させ、遂にはその上位存在へ姿を変える。
『中級大虚(アジューカス)』身体は最下級大虚より一回りほど小さく、個々に違う姿を持つ最下級大虚を統率する存在、そして彼らも更なる共食いを続け、その連鎖は更なる強大な存在へと昇華する。
それは『最上大虚(ヴァストローデ)』
殺戮と共食いの螺旋、その負の連鎖は下へ下へと続く螺旋連環、そしてその螺旋の先端から零れ落ちた、一滴の結晶とでもよべばいいのか、この広大な見果てぬ夜の世界虚圏にも数体しか存在しないとされている、闇の結晶へと至るのだ。

彼女、ティア・ハリベルはかつて人であり、人として死を迎え虚として再びの生を受けた。
虚として生きた彼女は多くの魂と、また多くの同胞達を食み、大虚へと至った。
彼女は長い時間をかけ、殺し、喰らい、最下級の証たる黒い外套を脱ぎ捨て、白い『鋼皮(イエロ)』に身を包んだ中級大虚へとその姿を変えた。
さらにさらに長い時間を掛け、肥大した肉体は洗練されるかのように小さくなり、遂にハリベルのその大きさは人間と変わらないまでに小さく、しかしその力は中級大虚とは比べ物にならないほど強大なものとなった。

そう、彼女は至ったのだ、『最上大虚』へと。

最上大虚へと至った彼女は同じメスの大虚を仲間とし、虚園で生きていた。
ハリベルは無闇に他の大虚を殺める事は無かった。
『誰かを殺める事で力を得ようとは思わん。犠牲を強いれば、いずれ自分達も犠牲を強いられる。』
そう考えたハリベルは、襲ってきた大虚は撃退し、それが逃げれば追わず、殺さず、喰らうこともしなかった。
ただ仲間とともに生きる時間、それはかけがえの無い時間、しかし、それは永遠には続かない幻の時。

突如として現れた異常な大虚、仮面が割れたその大虚は圧倒的な力を持ってハリベルの世界を破壊した。
その大虚は以前ハリベル達を襲い、撃退し逃がした大虚だった。
その大虚に成すすべなく敗れ、仲間は無残に大地に倒れ、ハリベル

自身も満身創痍だった。
ハリベルは自分の考えを呪った、自分があんな考えを持たなければ仲間達をこんな目に合わせることは無かったと、悔やむハリベルに無情にも敵の終焉の一撃が迫る。
しかしその一撃はハリベルを捉えることは無かった。

ハリベルの目の前でその大虚は身体を両断され絶命していた。

驚くハリベル、自分が手も足も出なかった相手が一瞬にして殺された事実、それも驚きだが更に彼女を驚かせたのは、それを行った者達の姿だった。

その男達はこの常闇の世界である虚圏にいるはずの無い存在だった。
人の形をしたそれは、現世に生きる人間ではなく、現世とも虚圏とも違う第三の世界『整(プラス)』と呼ばれる善の霊魂、虚からして見れば餌としての価値しかないそれらが住む世界、名を『尸魂界(ソウルソサエティ)』
その世界を守護し整を襲う虚を打ち倒す者、現世の霊を導く魂の調停者『死神』それが彼女の前に現れたのだ。

本来居るはずの無いものがこの夜の砂漠に降り立っていた。
この虚圏は居が跋扈する虚の世界、それ以外の者が侵入したのならばその存在はすぐさま駆逐され、白の砂漠に赤い染みを作るだろう。
しかし、その死神は彼女より少しだけ高い位置の砂丘から彼女を見下ろしていた。
その立ち姿からは虚に対する恐れや、自らが敵地とも呼べる場所の直中で、唯一人だけと言う危機にあると言う気配は微塵も無く、唯泰然とそこに立つのが当然の如く、彼女を見下ろしていた。
黒い着物の上に白のコートのようなものを羽織を纏ったその男、口元に浮かべた笑みが余裕から来るものか、それとも何らかの喜びから来るものかを推し量ることは、そのときの彼女には出来なかった。

彼女は見てしまったのだ、その男の瞳を――

この虚園の空、星は無く唯全てを呑み込んでしまうのではないかという深い闇色の空、この世で最も暗い色だと言えるそれよりも尚、男の双瞳は暗かった。
唯の一瞬目が合っただけでその暗い闇に囚われ、底無しの沼に沈み込むように這い出すことも、逃げることも叶わず唯深く深く沈んでしまいそうな錯覚。
初めて感じる根源的恐怖、暗く重く恐ろしいほどの闇、唯の死神が抱えるには大きすぎる闇、その男はそれを有していた。

「――もっと強い力が欲しいだろう?君の仲間たちのためにも――」

男は静かにハリベルに話し掛ける。
周りの音は消え、その男の言葉だけが周囲に響く。

「力を持てば仲間に犠牲を強いることも無くなる、それが君の理想のはずだよ。理想の姿を目にしたいとは思わないかい?」

「何なんだ・・・・・・貴様は・・・・・・」

「あの大虚に力を与えた者だよ。我々と共に来るといい、君を理想の下へと導こう・・・・・・」

この男『藍染惣右介』との遭遇により、彼女ティア・ハリベルは大虚以上の力を得ることとなる。
それが破面化、虚としての魂の限界強度を突破し、死神へとその魂の存在を近づけ更なる力を得る術。
そして彼女は居の仮面を脱ぎ捨て、人間から化け物へと変わったその肉体を、再び人と同じ姿に変え、しかし人とも虚とも隔絶された力を手にした。

ハリベルは空を駆ける。
彼ら破面には藍染から一つの指令が出されていた、曰く『最上大虚を探し出せ』
この余りに広大な虚圏の砂漠から、数体しか存在しないとされている最上大虚を探し出す
余りにも困難な指令、それでも彼ら破面はそれを実行しなくてはならない、藍染からの命である。
それだけで理由は十分なのだ、従わなければ待っているのは『死』
そう、彼らの殺生与奪はその全てが藍染の持つ圧倒的なまでの力によって握られているのだ。

しかし、本来これはハリベルが行う任務ではなかった。
ハリベルのように力を持つ破面は、本来このような探査任務にはつかず、藍染に従わない反乱分子の殲滅などが担当なのだ。
このような探索任務には下級の破面が行うのだが、その破面が何時までたっても戻らない。
その後何体かの破面を向かわせるもその全てが一体たりとも戻ることは無かった。
向かわせた破面はどれも最下級の出来そこないだったが、唯の大虚

に遅れをとることはあり得ない。
同じ最下級大虚でも、破面化した者とそうでない者の間には、明確なまでの力の差が生まれるのだ。

そのこと如くが戻らない、離反したかあるいは殺されたか、前者ならばそれで良しハリベルクラスの破面から見れば、雑魚がいくらいなくなろうと問題ではない。しかし後者ならば話は変わってくる。
破面化した最下級大虚を退けるだけの力、それを持った者が居るという事になる。
少なくとも中級大虚、もしかすれば最上大虚が居る可能性もある、そうなれば下級の破面をいくら送った所で無意味だ、それゆえハリベルが探査任務に選ばれたのだ。

ハリベルが件の探査区域に指しかかると、小さな変化が起こった。
それは奇妙な光景だった。
永遠の夜の暗闇が支配する虚園にほんの少し明かりが見えるのだ。

「あれか・・・・・」

ハリベルはそう一言呟くと、その明かりを目指してより一層速く空を駆ける。
その先に何があるのか、今は何一つ分からない。
しかし、ハリベルの眼は臆することなく、唯真っ直ぐにその光を見据えていた。

空を駆ける黄金の女性は出会う
それは世界には無い一色
本来あり得ないが故にそれは美しく
それ故に異質なるモノ
その邂逅が行き着く先は・・・・・・

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．１（後書き）

読んでいただきありがとうゴザイマス。
この小説はＡｒｃａｄｉａ様にも同じモノを投稿しています。
多くの方に読んでいただき、自分の糧としたいと思いコチラにも投稿させていただきました。
よろしければ感想などいただければ幸いです。

辺りを照らす明かり、力強く佇むそれは炎だった。

それは炎の柱とでも言えばいいのか、太い炎の柱が轟々と燃え盛り１０m程の高さでま聳え立っている。

明らかな異常、異質な光景にもハリベルは決して動揺しなかった。

白い砂と黒い空、それ以外無い虚圏でこの燃え盛る紅い柱は、色彩と言う概念を失ったかのような世界に彩りを取り戻そうとしているかのようで、しかしそれ故に世界には受け入れられない、異質な存在だった。

ハリベルはその炎の柱を確認すると上空からゆっくりと、しかし油断無く降下し。その柱の中ほどの高さで止まる。

尚も轟々と燃え盛る炎を見据えるハリベル。

するとその炎の柱の中からハリベルの前に、ゆっくりと白い仮面が浮かび上がってきた。

それは人間の頭蓋骨、というよりむしろ草食動物のものを模したように縦長で、下顎骨の無い頭蓋骨の仮面だった。

それが炎に浮かび、ハリベルを見ていた。

「何だ・・・・・また客か？　最近は忙しくていけねぇな・・・・・まぁ暇にならないと思えば儲けもんなのかねぇ」

その仮面はハリベルの姿を確認すると、そう言ってククッと少し笑う。
それはその炎の柱がハリベルに対し、まったく脅威を抱いていないということをハリベル自身に認識させるには、十分なものだった。

「貴様は虚か？」

自身のことをまるで見下した態度、それでもハリベルは任務を優先した。
あくまで冷静に、何事にも心を揺らさずに居る事、それがハリベルのスタンスであり、その自制心がこの無礼な虚を一刀の下に沈めるという選択をとどまらせた。

「ハァ？　何だよ、この仮面見えてんだろ？　だったら虚以外あり得ないだろうが」

何を当たり前のことをといった風に炎の柱は語る、明らかにハリベルを馬鹿にした態度で語るそれはさらに続ける。

「それともアンタはこの虚圏で虚以外の奴に合った事があんのか？　それともこの形が気になるか？　そんなもんは瑣末なことだろ、肉が見えなきゃ虚じゃぁないとでも？　ハッ、狭い了見だな、そんなんじゃぁ直ぐに死んじまうぜ？」

ハリベルの眉が僅かに動く、ハリベルとて相手が虚だということは判っている。
その奇妙な姿―炎に覆われているのかその肉体は見えない―に疑問

を覚えはしたが、そんなことは確かに瑣末なことだ。
任務ゆえの確認事項、ハリベルはそれを行ったまで。
しかし、それをああもこちらを馬鹿にしたように返されては、如何なハリベルといえど多少の怒りを感じざるをえなかった。

「・・・・・では貴様は最上大虚か？　それとも中級大虚か？
答えろ」

言葉と共に威圧もかねた霊圧がハリベルから放たれる。
威圧目的とはいえ、それはただの虚ならばそれだけで魂を押しつぶされ、絶命するほどの霊圧だった。
そんな彼女の霊圧の中、それを一身に受けながらも炎の柱は一切臆することなく、それが涼風だといわんばかりに、その炎も揺らぐ事無く燃え続けている。

「ハッ、最近来る奴らはそればっかりだな・・・・・知らねぇよそんなもん。最下級じゃないってぇのだけは確かだがな、俺が最上だと言えばアンタは信じるのか？　そもそも中級だ最上だって階級に意味があんのかよ。」

そんなハリベルの問を鼻で笑いながらそう語る炎の大虚、少なくとも最下級ではないと語るその大虚は言葉の意義をハリベルに問う。
相手が語る言葉をお前は全て信じるのかと、答えは往々にして否だろう。
それはこの世界ではあまりに愚かな行為なのだから。

「階級で自分が上だ、下だと騒ぐなんてぇのは小物のすることだ。

喰いたい時に喰って殺したい時に殺す、所詮化け物の俺達に、階級なんか必要ねぇんだ。俺達虚の中で、上か下かが判る時があるとすれば、それは相手を殺したときか、テメェが殺された時だけだろうが、馬鹿が。」

ハリベルのコメカミ辺りに薄らと青筋が立つ。
此方を侮り、見下したような態度に極めつけは馬鹿呼ばわり、許し難いものを見つけてしまったハリベルは、しかしその驚異的な自制心で自身を押さえ込む。
彼女の使命は「最上大虚を探し出す」こと、その可能性があるこの大虚は彼らの居城たる『虚夜宮（ラス・ノーチェス）』へと連れ帰らなければならない。
そして彼女にはもう一つ、確認しなければならないことがあった。

「では最後の質問だ・・・・・我等が同朋達をどうした？」

そう、元々この任務についていた破面の消息を、彼女は確認しなければならない。
そして目の前の大虚はそれを確実に知っている。

「なんだぁ？　アンタのお仲間が何処にイっちまおうが俺には関係ねぇよ、そもそもなんで俺に聞く、逃げ出しただけなんじゃねェのかよ」

「貴様は私を見て”また”と言った、それは少なくとも一度は私のような者が来たという事だ。そして最近来る”奴ら”が同じ質問をする言った、という事はそれが複数だということだ。唯の虚が何体もそんなことを聞きに来ることなどあり得ない、指令を帯びた我等が同朋以外はな。」

ハリベルの思考の冷えた部分は、この大虚の無礼な発言の中からしっかりと事実を導いていた。
そしてそこから確信を持って答えた。
この大虚が同朋達の行方を知る鍵であると、もっともその結末もハリベルは凡そ予想はついていたが・・・・・・

「ハッ、怒らせてこっちのペースに乗せようとも思ったが、存外こっちの話も聞いていやがる、面倒くせぇヤツだぜ。・・・・・・確かにアンタのお仲間は俺の所に来たぜ、アンタと同じ様に答えてやれば、全員直ぐにキレて斬りかかって来やがる。ちょうど退屈してたもんだからよぉ、ちょっと遊んでやったのさ。」

またハリベルの問を鼻で笑いながらあっさりと認める大虚、そしてやはりかとハリベルは納得する。
ここに来る途中『探査回路(ペスキス)』と呼ばれる霊圧による探査をかけたが、他の破面の霊圧は探知できなかった。
そしてこの大虚の発言をみるかぎり、遊んだとはほぼ殺したと同義であろうとハリベルは悟った。
ただの大虚が最下級とはいえ破面を相手取り打倒する、それも複数回にわたって、だ。
それだけでこの大虚がどれだけ強力な力を有している証明となるだろう、そして先ほどからの会話で、言葉による説得はこの大虚には向かないとも感じていた。
どうしたものかと悩むハリベルを他所に、大虚はさらに言葉を続ける。

「大体退屈凌ぎの為に遊んでやったヤツのことなんか一々覚えてる

わけねぇだろ。退屈凌ぎの玩具なんてもんは、動かなくなったら用済みだろうが、そうなればもう俺には関係ねぇのさ。だから俺は言ったぜ？何処に”逝(イ)っちまおうが”関係ないってな！」

瞬間、ハリベルの目が細まり鋭さを増す。
あの大虚は何を言ったとハリベルは自問する、玩具と、動かなくなったら用済みと、そう目の前の大虚は言った。
それはハリベルにとって許されざる言葉だった、たとえ出来そこないとはいえ名も知らぬ同胞の破面達は、この大虚にとって明確な敵ではなく、唯の暇を潰すための玩具であったと、それは戦闘ではなく唯の遊戯であったと目の前の大虚は言い切ったのだ。
自ら斬りかかったとはいえ、彼らは戦士として戦うことは出来なかったのだ、彼らに待っていたのは予想外の結末、
一方的な蹂躙だったのだろう、玩具相手に戦う者などいない。
暇つぶしの相手とされて死ぬ、それを彼らが弱いせいだと誰が言えるものか。
戦士として戦いの中で死ぬことは叶わず、その死に誇りは無く、唯惨めに屍を晒しただけ。
それはハリベルの戦士としての矜持が許さなかった。

「・・・・・そうか、では一度だけ聞こう。　私と共に我が主の下へ来る気はあるか？　そうすれば今以上の力を得る機会を与えよう」

「ハッ、お断りだね。どうしても連れて行きてぇってんなら、態々そんなこと聞かないで力ずくでそうしろよ。言ったろ？　言葉も、階級も、そんなもんは意味は無ぇ。今、この時、この瞬間で最も意味があるものは”力”以外に存在しない！　アンタの力を見せろよ

！　俺の退屈を癒してくれよ！　今までの奴らは歯応えが無かったし、直ぐ壊れちまいやがった。だがアンタは違う！　その程度の霊圧が最大じゃ無ぇんだろ？　見せてみろよ！　アンタの力をヨォォ！！」

その叫びと同時に今まで柱のように真っ直ぐに聳えていた炎が歪み、その霊圧の爆発と共に四方へと広がりたちまち辺りは業火に包まれた。
天を焦がさんばかりの勢いで燃え盛る炎、そして発せられる熱は、息をすれば気道が焼け、中から燃え尽きるかのような灼熱。
その炎を眼下に、ハリベルは少し俯いたまま背に担いだ刀の鍔にある穴に指を掛ける。
そして勢い良く引き抜かれた刀はその勢いのまま一回転し、ハリベルの右手にその柄が握られる。
その握られた刀は奇妙な形だった、非常に幅の広い刀身でありながらその刀身の真ん中の部分が空洞となっている。

ハリベルはその右手で奇妙な刀を握り、空いた左手でゆっくりとその上着のジッパーを上げる。
肌蹴る白い上着、その下から現れたのは顔の下半分を隠す牙の付いた仮面、それが首から胸の上部を覆い隠すように存在していた。
そして顕になった右の乳房の内側には『４』の刻印、そしてゆっくりと顔を上げるハリベルの目は、明確な敵を見るそれとなっていた。

「忠告はした・・・・・言葉での説得は無理だと判断し、以降は力で捻じ伏せ、捕縛して虚夜宮まで連れて行く。名も知らぬ大虚よ、貴様が退屈凌ぎと、玩具だと言ったものの力を、思い知るがいい。」

次の瞬間黄金色の柱が天を衝く、ハリベルから発せられた黄金色の霊圧が、まるで空間そのものを震わせるかのように広がり、大気は悲鳴を上げる。
それを見た炎の大虚は臆するどころか、歓喜していた。

「ククククッ、ハッハハハハハ！！　その霊圧、最高だぜ女ァ！名は何だ！最高に気分がいい！きっとこれから始まるのは最高の暇つぶしだ！だから覚えておいてやる、女ァ名前を教えろ！」

ハリベルの放つ霊圧に臆する事無く、それどころか歓喜している、その姿を見てハリベルは思う。
この大虚にとって戦いとは本当に唯の退屈凌ぎなのだろうかと。
この大虚が行き着く先、それは惨めな死ではないのかと、理性を持ちながら獣のように生き、力を持ちながらそれを暴としてしか振えず、戦士としての矜持も知らず、戦いに誇りすら持ない。
ただ殺し合い、負けて無為の死を遂げる、余りにも無為な死を。

「破面『Ｎｏ．４』　第４十刃（クアトロ・エスパーダ）　ティア・ハリベルだ・・・・・・・
私も貴様の名を覚えてやろう、力ずくでも良いがな。」

「ハッ、上等！俺の名はフェルナンド、フェルナンド・アルディエンデだ！　アンタを殺す男の名だ。　刻んだか？　俺は刻んだ！アンタの名を、俺自身に！　さァ始めようぜティア・ハリベル、楽しい殺し合いの始まりだァァァァァ！！！」

炎は津波となってハリベルに襲い掛かる、それを迎え撃つべくハリベルも駆ける。
そして、戦いの幕は開いた。

紅い津波と黄金の閃光
大地は爆ぜ、大気が啼く
波が踊り、黄金が謡う
生き残り、さらに深く相手を刻むのはどちらか
見守るものは誰もいない
唯、闇色の空に座す月だけが、その行方を知る以外には・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 2（後書き）

戦いの幕開け

BLEACH El fuego no se apaga. 3

紅い景色、見渡す限りの紅、紅い炎の海が辺り一面に広がっている。
その紅い海は命を生み出し、育む母なる青き海とはまさしく逆、近づくもの全てに等しく死を与える生命の終焉、それはまるで冥界の海。
その海は明確な殺意を持って命に敵対し、その波は触れるもの全てを焼き尽くし、呑み込み、灰にしようとうねり荒ぶる。

その海の上を人影が駆ける。
襲い来る荒波を避け、時にはその手に持った刀で波を切裂きながら、その海の上を駆け巡る。
放たれる斬激は、その一太刀一太刀の全てに必殺の威力が込められた一撃であり、しかしその一撃は未だ相手を傷付ける事叶わずにいた。
それは海とて同じ事であり、彼の炎の波は触れるものを全てを焼き尽くし、一瞬のうちに灰へと変える筈が、その悉くは避けられ、また切裂かれ、未だ相手に掠り傷一つ負わせることが出来ないでいた。

フェルナンド・アルディエンデとティア・ハリベルの争いは、互いに有効な一撃を与えられぬまま、時だけが過ぎていた。

「ハッ、何時までもチョロチョロと逃げ回ってんじゃねぇよ！　デカイのは霊圧とその乳だけか？　オラオラ！　もっと俺を楽しませろ！」

膠着状態の中、フェルナンドから放たれる言葉と共に、ハリベルに向けて幾つもの炎の波が四方八方から押し寄せる。
それは最早波というより壁と表現できるほどの高さ、ハリベルの何倍もの高波が彼女を押し潰し、海へと引きずり込まんと迫る。
しかし、ハリベルはそれを難なく避け、または刀で切裂き、その炎の包囲網から脱出する。

「貴様こそこんな単調な攻撃では、いつまで経っても私を捕らえる事など出来ないぞ。それが全力か？ならば連れ帰る価値も無いな」

「言ってろ！　せっかくの暇潰しなんだ、いきなり全力出す馬鹿が何処にいるよ。アンタは自分の心配だけしてな！俺は加減が苦手でねぇ、焦がす程度なんて器用な真似は出来ねぇぞ。一発当たればアンタは死ぬが、いくら斬られても俺は死なねぇよ！」

フェルナンドの炎を斬り付けながら語るハリベルの攻撃を、まったく意に介さずにフェルナンドは炎をハリベルに向ける。
そう、互いに有効打がないという状況でありながら、二人の立場には明確な差が存在していた。
今や炎の海と形容出来るほど膨張したフェルナンドの炎は、半霊里に届くほどにまでになり、放つ炎の波は触れればその命を瞬く間に焼き尽くす地獄の業火。
何時か呑み込まれてしまえば、ハリベルとて無傷ではすまないだろ

う。
代わってハリベルの放つ斬撃は、確かに威力として必殺の一撃といえるだろう。
炎すら切裂くそれは、しかしフェルナンドに致命的な一撃とはならなかった。
炎をいくら斬ろうとフェルナンドはさして怯む様子を見せず、まして負傷した様子など皆無だった。
攻撃が当たれば相手は傷つくフェルナンドと、攻撃をしても相手は無傷のままのハリベル、このままの状況が続けばどちらが優勢といえるかは、一目瞭然であった。

「まァいいかげん避けられてばっかりってのは面白くねぇ。少しばっかり本気でいくぜ？　避けるんなら、うまく避けるんだな！」

フェルナンドがそう言うや、ハリベルの足元の炎に変化が現れる。
ただ燃え盛っていただけの炎の一部が各所で渦を巻くように収束し、その渦の中心から太い円錐状の槍のように姿を変えた炎が、そこかしこからハリベルを下から串刺しにせんと迫る。
炎の海からはる太い幹のような槍、それは今までのように”面”として相手を押し潰そうとする炎ではなく、”点”として相手を貫こうとする攻撃。
炎の波をそのまま太い円錐状の槍の形に変化させることで、炎と込められた霊圧は上がり、相手を貫くための速度と殺傷力を上げた攻撃。

その速度に眼を見張るハリベル、そしてそれに込められた霊圧を察知すると、今までのように切裂くことは今のままでは困難と判断し、その場を飛びのく。
そして次の瞬間にはハリベルの元居た位置を、フェルナンドの複数

の槍が交錯するように貫いていた。

「・・・・これが貴様の本気か？　残念だ・・・このような騙し討ちが本気などと言うのならば程度が知れる。貴様に殺された同胞達への手向けに此処で散るがいい。」

フェルナンドの炎の槍を避け、フェルナンドの仮面へと向き直るハリベル。
そして放たれた言葉は落胆だった。

確かにこの炎の大虚は強いとハリベルは感じていた。だが今までの攻撃を鑑みるに、それは霊圧に限ったことなのではないかとも思っていた。
確かに一撃の威力は非常に高く、まともに喰らってしまえば自身とてダメージは避けられないだろう。
しかしその攻撃は単調なもので、毎回同じようなタイミングで迫ってくる波を避けることは、ハリベルにとっては余りに容易なことだった。
そしてあの炎の槍、速さ、込められた霊圧は見事なものだったが所詮は騙し討ち、少なからず本気を出してあの程度ならば、戦力としては不合格だとハリベルは判断した。
蛮勇を奮うだけの獣など必要ないのだ、その程度の存在であったかとハリベルは哀れみの視線を向ける。
そして、戦力として不合格ならば消す。
実際ハリベルにとって斬れない相手だからといって苦戦しているという事はなく、フェルナンドを倒す手段など彼女はいくらでも持っているのだ。
これ以上何も出ないのならば、彼に玩具として殺された同胞達に、せめてもの手向けとしてこの炎の大虚の亡骸を捧げようと、ハリベ

ルは刀を握る手に力を込める。
戦士として散れなかった者への手向けとして、彼の大虚を捧げる為に。

「ハッ、騙し討ちねぇ、戦いは正々堂々ってか？　・・・・・まったく呆れるぜ。じゃぁなにか？　正々堂々戦って死んだらそれもやむ無しってか？　くだらねぇな、まったくもってくだらねぇ。化け物同士の戦いに、そんな考えはクソほどの価値も無ぇ！！　死んだらそこで仕舞いだろうが！　真正面から潰しても！　後ろから串刺しにしようと！　殺された方が間抜けなんだよ！！」

仮面の下の炎が割れ、巨大な口のように開き、ハリベルの言葉を真っ向から否定するフェルナンド。
燃え盛る炎はより一層その勢いを増す、それはフェルナンドの感情と同期しているかのように荒ぶっていた。
片や戦いとは戦士と戦士が誇りを賭けて戦う真向勝負と捉え、たとえ倒すべき敵においても戦士の矜持と誇りを持って、正面からぶつかる事をよしとするハリベル。
片や戦いとは愉しむもの、そして持て余すほどの時間を消費するための遊戯、そこには綺麗も汚いもなく、最後に戦場に立っていた者こそが正しいと、その過程で戦いを楽しみ、快楽を得るフェルナンド。
戦うという行為の捉え方がまったく違う二人、故に相容れない、故にその戦いは自然と熱を帯びる。

「それに俺の槍を避けてずいぶんいい気になってるみたいだがな、あんなもんは避けられて当然なんだよ！本番はこっからだ！」

フェルナンドの言葉と共に、ハリベルの目の前で交差するように佇む炎の槍に変化が現れる。
何本もの炎の槍のいたる所から、更に枝分かれするように幾つもの円錐の槍が、彼女目掛けて飛び出してくる。
急な展開にハリベルが後ろに飛び退くと、槍は更にその本数をましながらハリベルを追い、眼下に広がる炎の海からも無数の槍がハリベルを貫かんと飛び出す。
避けても避けても迫り来る無数の炎の槍、それに追われるハリベルを見てフェルナンドは叫ぶ。

「だから言ったろうが”うまく避けろ”ってよ！　アンタが俺の力の底を探ってるのなんてこっちはお見通しなんだよ！　この炎はまさに俺自身、俺の意思でどんな形にも姿を変える変幻自在の炎だ！　アンタが見たかったもんは見れたかよ！それじゃぁアンタはコイツで詰みだ！」

ハリベルを囲むように迫る槍の大群。遂に避けきれず、かえってその手に持つ刀で切り裂く事もできず、遂にハリベルは刀で槍を受け止める。
しかし槍を止めることが出来ず後方へと押され、槍はハリベルを貫かんと更にその勢いを増す。
それを押し留めようとするハリベルに影が射す、天に座す月の燐光を遮る影、直感的に振り返るハリベルの目に飛び込んできたのは、今までで一番大きな炎の壁だった。
槍を受け止めたままのハリベルが一直線にその壁へと向かう、そして次の瞬間にはハリベルはその炎の壁へと無数の槍と共に突き刺さり、その姿は壁へと埋没し見えなくなった。

「クッ！」

壁が迫る一瞬、ハリベルの口からそんな苦渋の声が漏れた、それは自分の浅はかさを恨む声、戦士としてあるまじき行為をした自身への叱責。

ハリベルは理解したのだ、目の前の大虚が演じていたのだと。

力を持ちながらもその使い方を知らない愚かな大虚を、そうする事でハリベルのほんの少しの油断を誘っていたのだと。

単調な攻撃も、容易く切裂けた攻撃も、全ては考えられたものだった、そしてあの槍を避けた瞬間確かにハリベルは、愚かにもフェルナンドを侮ったのだ。

――蛮勇を奮うだけの獣と

しかし、その実全てはフェルナンドの計画、愚かを装い、手を抜いて攻撃を避けさせハリベルに自分を侮らせ、相手が此方を侮った瞬間に素早く反撃。

避けた攻撃、終わった攻撃と注意の逸れたその槍からの奇襲めいた二段攻撃、その枝分かれする槍を避けるハリベルをその槍を持って誘導し、前面に意識を集中させることで、後ろの壁の発見を遅らせ、前面を槍、後ろを巨大な壁で覆い挟撃する。

それがフェルナンドが強いた勝利への道だったのだ。

そしてその壁はハリベルを呑み込み、今は静かに、まるで彼女の墓標のように聳える。

「ハッ、これで仕舞いだティア・ハリベル。アンタは強いが俺が勝つ！　一瞬でも侮ったアンタの負けだ。俺の炎に焦がされて、塵一つなく消えちまいな！　俺を侮った自分を呪いながらな！　アンタにとっちゃ不本意だろうがな！　それでも、勝ったのは！　俺だ！」

その墓標に向かってフェルナンドは自分の勝利を叫ぶ。
今はもう絶命したであろう相手に宣言する。
暇潰しにはちょうど良かったと、しかしほんの少し残念だともフェルナンドは思っていた。
彼女、ティア・ハリベルの力はこんなものだったのだろうか。
こんなにも簡単に殺せてしまうような存在だったのか。
最初に彼女を見た時、彼女の霊圧を感じた時、フェルナンドは直感的に感じていた、最高の殺し合いができるという確信を。
だが結果は不完全燃焼と言わざるをえない、フェルナンドは自分の直感が外れたことに、言い知れない不快感を感じていた。
自分の空虚を満たすのは、きっと彼女だと感じていたが故に・・・・・

だが次の瞬間異変は唐突に起きた。
彼女を押し込めたはずの炎の墓標から一条の光が空に向かって飛び出した。
それは天の月を射抜かんばかりの黄金色の光の柱、そしてその光のが収まると、墓標は真っ二つに割れていた。
そしてその黄金色の柱が放たれたであろう場所には、同じく黄金色の霊圧を纏った人影が浮かぶ。

「何・・・だと!?」

その人影を見たフェルナンドから言葉が零れる、信じられないと、有り得る筈が無いと、自らの炎に巻かれ、貫かれ、押し潰されたはずの人物がそこに居た。
今までこんなことは一度たりとも無かった、何故生きているのか、どうやって自分の炎を防いだのか、フェルナンドには理解できなかった。
そんなフェルナンドに対し、黄金色の人影、ティア・ハリベルはゆっくりと口を開く。

「侮ったことは詫びよう、フェルナンド・アルディエンデ、これは私の不徳以外あり得ない。そしてお前がただの愚かなだけの大虚ではないことが判った。此処からは私も相応の力を持って戦おう、それが戦士としての礼というものだ」

炎の海は驚愕する
終焉の炎に焼かれても尚死なない者が居る
この炎の海に沈められても尚蘇る者が居る
それはかの海にとって未知なるモノ
それは恐怖を運ぶものか、それとも・・・・・・

聳える壁はその中腹から真っ二つに割れていた。
巨大な壁を割ったのは、外側からの力ではなく内側からの力、しかし、内側から破裂するように割れたその壁は、その内側に生命に存在を許さぬはずの業火の壁。
触れる全てを消し炭へと変え、ましてその内にあるものなど有象無象の区別など無く、塵一つ残さなずこの世から消滅させる獄炎であった。
その壁を真っ二つに割ったハリベルは悠然とその場に立っていた。
その服に多少の焦げ後は見えるものの、その身体は五体満足で、炎によって与えられた火傷などは皆無だった。

フェルナンドにとってそれは異常なことだった。
今まで、この炎を手に入れてから今この時まで、こんな事は起こったことは無かった。
彼の炎に呑まれて生きている者など居なかった。彼の炎に触れて、無傷の者など居はしなかったのだ。
何より彼を驚かせていたのは、ハリベルの放った光によって彼の”炎が消し飛ばされている”という事だった。

「アンタ・・・・・一体何しやがった・・・」

混乱と同様の中に居るであろうフェルナンドは、存外冷静な自分に

驚いていた。
何故生きているのか、何故無傷なのか、どうやって脱出したのか疑問は尽きなかったが、フェルナンドにとって最も理解できない現象である”炎の消滅”という事態。
フェルナンドの炎は唯燃えているだけの純然たる炎ではない、彼の炎は彼の放つ霊圧そのものとも云えるものであり、その全てがフェルナンドの思いのままに操ることができる。
霊圧は斬れるものではなく、斬られたからといって消えてなくなるわけではない。
フェルナンドにとって彼の霊圧と炎は同義なのだ、それがハリベルの放った光によって消滅している、今までに無い現象にフェルナンドは冷静にならざるを得なかった。
此処で愚かにも思考を放棄し、敵へと襲い掛かることは死へと繋がる蛮行だった。

「その質問は何に対してだ？　私が生きていることか？　どうやって生き延びたかと言うことか？　それとも・・・・・・貴様の炎が消えてなくなってしまった事に対してか？」

「っ！！」

まるで思考を見透かされたような返事に、思わず息を飲むフェルナンド。
未だ自らが裂いた壁から動かずに、フェルナンドの仮面が浮かぶ高く迫出した炎に正対しているハリベルの返答は、そのどれもがフェルナンドが求めるものであった。
そして、今の彼女からは先ほどまでフェルナンドが感じていた自身に対する侮りは一切なくなっていた。

「私が無傷だったのは単純な話だ、貴様の炎の殺傷能力以上に自分に纏わせる霊圧を上げただけの話だ。多少服は焦げてしまったが問題ない、そして私が貴様の炎から抜け出せた理由と貴様の炎が消し飛んだ原因はコレだ」

そういうとハリベルは刀の切先をフェルナンドの仮面へと向ける。
次の瞬間、刀の切先へと急激にハリベルの霊圧が集まり、拳大の球形を形作る。
膨大な霊圧の収束、それを見てフェルナンドはハリベルが何をしたのか、そしてこれから何をしようとしているのかを理解する。
それは大虚以上の虚に許されたモノ、膨大な霊圧を持つからこそ行える技、放たれるそれは生命を刈り取る事だけを目的とした死を招く閃光。

そしてハリベルの一言で、黄金の球体からその死招く光は解放された。

「――　虚閃（セロ）」

言葉と共に放たれた黄金色の光線、それは拳大の球体から発生し、一気にその太さを増しフェルナンドの仮面の浮かぶ炎を、一瞬のうちに呑込んだ。
数瞬の後、ハリベルの放った虚閃は次第に細くなっていき、その後にはそれが通過したことを示す痕を残した炎だけが残っていた。

「今までの戦闘から見るに、貴様の炎は霊圧によって操られているようだ、斬れば他の炎と霊圧が結合し、消えることは無かった。故

に斬撃で切り刻むより、霊圧を用いた攻撃によってその霊圧ごと消し飛ばした。そうして霊圧ごと霧散させてしまえば、さすがに再び操ることは出来まい」

ゆらゆらと燃え続ける眼下の炎の海に語るハリベル。
ハリベルが取った行動は、その全てがいたってシンプルなものだった。
炎に捲かれたのならば、その炎よりも強い霊圧を発する事でダメージを防いだだけの事。
斬撃などの物理的攻撃が効果が薄いのであれば霊的な攻撃、霊圧を用いた攻撃へとその方法を変えただけの事。
それは無理やりに発する霊圧を上げた訳ではなく、本来発しているそれに戻したというだけの事。
そしてそれにより導かれる結果は見ての通り、そしてその答えは単純『地力が違う』たったそれだけの事、それは余りに単純だが、それゆえにそれを破ること、その差を埋めることは難しい。

「霊圧は消えていない、まだ生きているのは判っている。続けるか、それとも此処で止めるかの返事を聞かせてもらおう。フェルナンド・アルディエンデ」

燃え続ける炎の海に再びハリベルが語る。すると、ハリベルの両脇に聳えるもはや墓標としての意味をなさなくなった壁が、ゆっくりとその根元に広がる海へと還っていく。
そしてそれと反比例するようにハリベルの眼前へと炎が海から迫出し、ハリベルの前で止まり、そこからフェルナンドの仮面が浮かび上がる。

「ハッ、何が『消し飛ばしただけ』だ、とんでもねぇ霊圧込めて撃ちやがって。唯の大虚の虚閃ぐらいじゃ俺の炎は消えないってのによ、アンタのお仲間だってこんな事は出来なかった。それにあの二射目・・・・・さすがに俺も多少肝を冷やしたぜ、まったく」

そう心底呆れたように語るフェルナンドの言葉に、ハリベルが返す。

「ほう、肝を冷やしたということは、あれには危険を感じたということか。やはりその仮面は炎とは別で特別ということか・・・・・で、返答はどうする？続けるか、止めるのか。」

フェルナンドが言ったとおり彼の炎を消し飛ばすのは難しい、それは彼の霊圧が他の大虚に比べ、かなり強いこと――とはいっても大虚の中での話だが――に由来する。

彼自身、自分が中級か、あるいは最上に至っているのか判っていないようだが、どちらであったとしてもその霊圧の強さゆえ、相手の攻撃――虚閃のような霊圧的砲撃ー――によって炎が散り散りになることはあっても、霧散してしまうことは無かった。

それだけハリベルの放った虚閃、そしてそれに込められた霊圧は凄まじいものだったのだ。

そしてハリベルの言ったこともまた真実だった。彼にとってその仮面は確かに特別なのだ、仮面こそが彼を証明する全てだった。

「チッ、余計なこと言っちまったか・・・・・まぁいいさ、返事はもちろん続行だ！　アンタだってあんだけの霊圧込めた虚閃が何十発も撃てるとは思えねぇ。それに楽しそうじゃねぇかよ！　やっぱり俺の直感は間違ってなかった、アンタ最高だぜティア・ハリベ

ル！やっぱりアンタとなら最高の暇潰しができる！　俺の空虚を満たすのは、やっぱりアンタだ！！」

フェルナンドが選択したのは続行だった。
己の攻撃は、最早相手に決定的なダメージを与える事は叶わないかもしれない、代わりに相手は此方にダメージを与えられる手段を示した。
立場の逆転、しかしフェルナンドは止まらなかった。
それよりも戦闘が始まる前に感じた、一度は裏切られたとも思った自身の直感が、やはり外れていないことに歓喜していた。
それは彼にとってハリベルこそが最高の暇潰しの相手であると言う直感。
それは彼にとってハリベルこそが、その空虚な胸のうちを埋めてくれるかもしれないと言う直感。
その穿たれた喪失の証、ポッカリと空いたその穴をハリベルならば埋めてくれると言う直感。

それこそがフェルナンドが求めるもの、戦い、殺し、喰らい、そして戦う、その無限螺旋の中でフェルナンドが感じた空虚。
生きる事への『飽き』
なんの変り映えもしない世界への『飽き』
かといって、易々と殺されて終われるほど弱くも無かった彼の不幸。
それを癒してくれるかもしれない存在を彼は見つけたのだ。
今まで壊してきたどんな相手とも違う、こちらが壊されてしまうかも知れない相手、しかしそれ故に埋められるかも知れないと、実感出来るかもしれないとフェルナンドは思う。

そう――自分は今生きているのだという実感を

それを戦うことでしか、殺すことでしか感じられない彼は、それを癒す術を見つけたとしても未だ不幸ともいえなくも無いが

フェルナンドの叫びと共に、炎の海から無数の火柱が立ち上る。
そしてその全てがハリベルに向かって襲い掛かる。
ハリベルはそれを見て「そうか・・・・・・」と一言呟くと、臨戦体制を整える。
そして次の瞬間には火柱の群れがハリベルを呑込むかに思われたがそれはならなかった。
ハリベルの姿が一瞬ぶれたかと思うと、その場からその姿が消え去った。

「な、何だと!?」

その場から消えたハリベルにフェルナンドは驚愕する、今までの戦闘である程度ハリベルの速度は測れたつもりでいたフェルナンドにとってそれは想定外の事態だった。
そして、その一瞬の驚愕と停止をハリベルが見逃すはずは無かった。

「何処を見ている？　コッチだ」

その声の発生源はフェルナンドの仮面の真上、瞬時にハリベルはそこまで移動していたのだ。
そして彼女の右手に握られた刀の切っ先には、すでに黄金色の球体が完成し、その主の号令を待つように光を放っていた。
声が聞こえ、反射的に回避行動をとったフェルナンドの仮面を、未

だその射線上に捉えながらそれは解放さた。

「虚閃」

真上から放たれたそれは迫出していた炎を貫き、炎の海を貫き、その下にある虚圏の砂漠すら貫いて爆発を起こす。
その爆発によって巻き上げられた砂煙、その中で視界を遮られたハリベルに向かって殺気が走る。
一直線に心臓を目掛けて迫ったそれをハリベルは刀で受け止める、何故か正面から放たれたそれはフェルナンドの炎の槍であったが、今度はその槍の威力に押されるようなことは無かった。
槍を刀で受け止めたハリベルは、そん場から一歩も後退する事無く立っている、本来の霊圧を解放したハリベルにとってそれは造作も無いことだった。
しかし、同時に微かな違和感をハリベルは感じていた。

徐々に砂煙が晴れるとそこには虚閃を間一髪で避けたのであろうフェルナンドの仮面が炎に浮かんでいた。

「高速移動ってか・・・・・・消えたんじゃねぇかと思うほどの速さだな、なかなか捕まえるのに骨が折れそうだぜ。ホラ次ぎ来いよ！　直ぐに一発お見舞いしてやる！」

ハリベルがまるで消えたように見えた理由、それは『響転（ソニード）』と呼ばれる破面が使う高速移動術である。
それを用いたハリベルの奇襲を間一髪で避けたフェルナンドは、怯むどころか更に苛烈にその猛を燃え上がらせていた。
猛るフェルナンドに呼応するように彼自身ともいえる炎の海もより

一層燃え上がる。

「それは私の響転を見切るということか？やれるものならやってみるがいい。・・・・・それよりも何故正面から攻撃してきた？あの状況なら貴様なら背後から仕掛けるものだと思っていたが」

フェルナンドを多少挑発するように語るハリベル、それは見下した発言ではなく、純粋に破って見せろと言う意図を含んでいた。
そしてハリベルは先ほど感じた疑問を口にする、あの自らの攻撃で視界をふさいでしまった一瞬、下策であったことは認めざるを得ない。
あの瞬間、今までの彼ならば確実に後ろから攻撃が来ると踏んでいたハリベルは、背後に神経を集中させていたが、実際攻撃がきたのは正面、その攻撃に逆に虚を衝かれた。
結果として防いだものの、それは先ほどまでの彼の言動や、行動原理からは違和感を感じるものだった。

「ハッ、別にたいした理由は無ぇよ。唯何と無くだよ何となく、雑魚なら別だがアンタは違う。アンタみたいに強い奴は初めてなんだ、よくわかんねぇけどアンタとは正面からやった方が楽しそうな気がしたんだよ。俺の直感がそう感じたってだけの話だ。さぁ、お喋りは此処までにしようぜ、此処から先は殺し合いだ！俺に実感させてくれよ！俺を満たしてくれよ！なぁ！ティア・ハリベルゥゥゥゥ！！」

その言葉と共に炎の波が、火柱が、槍が再びハリベルへと迫る。
それを見ながらハリベルは思う、確かに言葉は無粋だと。
今は目の前の大虚だけに集中しよう、この大虚との戦いに興じよう

と、ハリベルの中の戦士がそう言っているような気が彼女にはしていた。
そして目の前の大虚に現れた僅かな変化を見極めようと。

「貴様のその願いかなえよう。私の全霊を持って貴様を打倒する。
往くぞフェルナンド・アルディエンデ！」

戦いの第二幕が開く
それは互いの全霊を持って挑む戦舞台
戦いの歌が響き、戦士たちは互いの命をかけて舞踊る
紅と黄金はぶつかり合う、どちらかがどちらかを呑込むまで
その舞を止める事はないだろう
それ故にその舞は、命削るその舞は、きっと美しいのだろう。

「ウォラァァァァァァ！！！」

裂帛の気合と共にフェルナンドが炎を放つ、自然に燃え上がるそれではなく、意思を持って獲物の命を刈り取らんとする炎。
辺り一面を覆い尽くす炎海から飛び出し、うねりを伴いながら上昇したそれは炎の竜巻を思わせ、標的目掛けて急降下する。
尋常ならざる速度で標的であるハリベルへと迫る炎、それを見たハリベルは、その手に持った刀を切っ先を下にして掲げる。

直後、炎はハリベルに直撃・・・・・しなかった。

渦を巻く炎は、ハリベルの掲げる刀に遮られ、ハリベルの身体に届く事は無かった。
炎と刀の一瞬の拮抗。そう、それは本当に一瞬の拮抗だった、競り負けたのは炎のほうだった。
炎を受け止めた刀をハリベルは何事も無かったかのように振り上げ、炎の竜巻はそれだけの動作でいとも容易く押し戻され、それどころかその刀の威力に四散して、大小の塊へとその姿を変えてしまった。

今までならこうも簡単に炎が散る事は無かった、いかなハリベルがその霊圧を解放したからといっても、依然唯の斬撃ではフェルナンドの炎を切裂きこそすれ、このようにバラバラの状態にもで追い込む事はなかった。

そう”唯の斬撃”　だったならば

今、彼女の振るっている刀には真ん中の部分に空洞がある。
その部分には彼女の霊圧を集める事ができ、空洞に霊圧を集める事で彼女自身の斬撃を更に強化する事ができるのだ。
物理的な斬撃に霊圧的な補助を加える事で、威力と霊圧的攻撃の特性を持たせることでハリベルは彼の炎の竜巻を粉砕したのだ。

ハリベルの振るう刀の軌道をなぞるかのように黄金の帯がその後を追う。
空洞から漏れ出した霊圧が尾を引き、それを伴って戦うハリベルは本当に舞っているかのようだった。
第三者から見れば美しいその舞も、その刀を向けられた者からすれば、その美しい舞は即ち死を招く舞いと同義だった。

分散した炎に向けてハリベルがその光の帯を伴う刀を向ける。
ハリベルは刀の刃を上にして、切っ先をその炎に向けたまま顔の横辺りまで刀をもっていき、刀の背に左手を添える。
そして弓を引くように刀を持った右手を引き絞り、狙いを定め、限界まで引き絞ったその右腕に捻りを加えながら刀を突き出す。

「波蒼砲（オーラ？アズール）」

放たれた突きの威力に乗って空洞に集められた霊圧が飛び出す。
その霊圧は弓に番えられた矢が放たれるかのように、一直線に炎の塊へと向かい、それが突き刺さると同時に炎の塊は爆散、跡形も無く消え去っていた。

全霊を持って戦うと宣言したハリベルの戦い方は、冷静で冷徹で理性的に構築された戦いだった。
確かに霊圧を込めた虚閃を撃ち続ければいつかはフェルナンドを倒す事だろう。
しかし、それには膨大な霊圧がかかる事もまた事実、フェルナンドがどれだけの炎を持っているかわからない今、目先の利と安易な手段に頼った戦いをハリベルは良しとしなかった。
全霊を持って相手をするということは、何も相手の土俵で戦う事ではなく、ティア・ハリベルという戦士の戦い方をもって戦うということ。
そして、それを破って見せろというハリベルからフェルナンドへの隠れた挑戦状でもあった。
さらに、ハリベルの目的はフェルナンドを殺す事ではないのだ、あくまで彼を虚夜宮へと連れて行き藍染に引き合わせること、殺してしまえばそれは出来ない、故に無力化することを念頭に置いた戦いが要求されていると言う事もあった。
それ故にこの戦法、炎を分散させ、波蒼砲で消して殲滅する事で此方の霊圧の消費を抑えながら、フェルナンドの炎と霊圧を削り、戦闘不能状態まで追い込む。
ハリベルはそれに徹していた。

対してフェルナンドは圧倒的な攻撃力で蹂躙する様な戦いを好んでいた。
力と力がぶつかり合う、その鬩ぎ合いの中にこそ、表裏一体の勝負の中にこそ生きる実感はあるのだと考えていた。
ハリベルの虚閃をからくも避けたとき、一瞬でも死を感じた。死を

感じるという事は、今この瞬間を間違いなく生きているという証明であり、その瞬間こそフェルナンドが求めた生の実感だった。
だがその実感を更に強いものにしてくれるであろう相手は、霊圧を削る事のみを目的とした行動を繰り返す。
そして今仕掛けた攻撃も、響転によって避けられ、忌々しい刀によって四散し、消し飛ばされた。

（クソッ、チマチマと面白くねぇ・・・・・だがブチキレるだけじゃぁあの女には勝てねぇ。かといってこのまま無闇に攻撃したところで、炎を削られてこっちはジリ貧だ。・・・・・だがまだあの女はこっちの大事なところには気付いちゃいねぇ、それは僥倖だが、実際俺の攻撃が通ったところでダメージがあるかも怪しい。だがこんな戦い方認めるわけにはいかねぇ！必ずあの女に一泡吹かせてやる！）

フェルナンドはそう決意すると――ある意味ハリベルの思い通りではあるが――それを実行するべく行動を開始する。
燃え盛る炎海からフェルナンドの意思によってまた竜巻が立ち昇る、しかし今度はそれが一本、また一本と増えていき遂には４本の竜巻がハリベルを囲むように立ち昇る。
その威容を見てもハリベルは動じることもなく、それどころか小さく溜息をつく。

「一本でダメなら四本か・・・・・少し単純すぎるぞ、この竜巻をいくら増やしたところで私には届かない、届いたところで私の霊圧を超えられなければ私自身には届かんぞ？」

ハリベルが口にするそれは余りにも真実、数が増えようと、それが

触れようと、今のハリベルにとっては問題ではないのだ。
この絶対優位の中でもハリベルは決してフェルナンドを侮らない、同じ愚を行うことは無い、それどころかこの状況をフェルナンドがどうやって覆すのかを楽しみにすらしていた。
彼女にとってもそれは異常な事だったが、この大虚はそれが出来ると、それだけの力をもっているとハリベルは確信していた。

かえってフェルナンドはハリベルの言葉に答えない、というより今はそんな余裕は無かった。
フェルナンドにとってこれは気付かれる訳にはいかないのだ、バレればそれだけで致命的な弱点を曝しているのと同じ事となる。
故に沈黙、言葉を語れば気付かれる、そういう直感を持った相手とフェルナンドは対しているのだ。
大きく動いたが故の弱点の露呈を、フェルナンドは隠そうとしていた。

そんなフェルナンドのあからさまな変化をハリベルが見逃すはずも無い、今まであれほど饒舌だった相手の突然の沈黙、何もないと思う方がおかしな話である。

(何だ？　急に黙り込んで何を考えている・・・・・・更なる攻撃か、それとも何かを待っているのか・・・　いや、こんなことは考えても無意味だな。何が来るにせよ冷静に対処すれば問題はない。さぁ、何を魅せる、フェルナンド・アルディエンデ)

ハリベルの思考は『見』　様子見である。

戦いにおいての思慮深さと、慎重な行動を旨とするハリベルらしい結論。
全てに対して冷静さを失わず、合理的に対処すれば危機は乗り切れる。
彼女を倒す手段があるとすれば、その冷静な思考以上の意表をついた一撃か、いくら冷静で合理的に対処しようとも防ぎきれないような圧倒的な力であろう。

互いが語らず睨みあう中、先に動いたのはフェルナンドだった。ハリベルを囲むようにして聳えていた竜巻の一本が、ハリベルに向かって襲い掛かる。
ハリベルはそれを今までと同じように刀で防ごうと迎え撃つ、そして炎と刀はぶつかり合い拮抗する。
そして炎と刀の拮抗は崩れ、炎は競り負け、またも粉々になるはずだった。

「何!?」

その声を発したのはハリベルだった、今まで容易く押し返す事ができた炎の竜巻を押し返す事ができないのだ。
何故かは解らないが竜巻の威力が格段に上がっている。
そしてよく目を凝らして竜巻を見れば、それは今までのように炎が渦巻いているだけのものではなく、フェルナンドの放つ炎の槍のように高密度に収束された炎が回転しているのが見えた。

(密度を上げて威力を増したか、だがこの程度ならば押し返せる!)

竜巻の正体を見切るやそれを押し返そうと霊圧を上昇させるハリベル、それによって竜巻は押し返されるが今までのように四散する事はなかった。
だが、竜巻を押し返したハリベルに別の竜巻が迫り、間髪置かずまた別の竜巻が迫る。
そしてハリベルはその炎の竜巻に囲まれ、その包囲網がハリベルを逃がすまいと四方から迫る。

（クッ、私をここから出さない心算か？　だが一体何が目的だ、こうも攻め立てられては虚閃で吹き飛ばすことも出来ん・・・・・・そうか！狙いはそれか！）

フェルナンドの意図を見切ったハリベルが唯一箇所開いている上空へ脱出しようと駆ける。
しかしその脱出口も４本の竜巻の先端がぶつかり合うことで完全に閉ざされる、逃げ場なし。

「遅ぇよ、ティア・ハリベル！」

声がしたのはハリベルの真下、炎の海に浮かぶ仮面、そしてその炎が燃え上がり、二つに裂けるとそれは龍の顎の様に大きく開き、その開かれた顎の中には膨大な霊圧が込められた砲弾があった。

「なにも虚閃はアンタの専売特許じゃぁ無いって事さ！　喰らいやがれぇぇ！！」

放たれるのはフェルナンドの炎と同じ紅い霊圧、それが今や炎の檻と化した空間を埋め尽くしていく。
しかし、ハリベルとて唯それを待っているほど愚かではない、再び上に上昇し、檻を破るべく霊圧を集める、そしてその収束が終わる前に檻の天蓋が崩れた。
いや、崩れたと言うよりは４本の竜巻が融合し、ハリベル目掛けて突撃してきたのだ、下からは特大の虚閃、上からは高密度の炎の嵐、逃げ場はない。

「ならば迎え撃つのみ！」

決意と共にハリベルは切っ先を下に向けて虚閃を放ち、霊圧を解放して襲い来る炎の嵐に備える。
そして訪れる極大の爆発、炎の檻はそれに耐え切れず四散する。
フェルナンドの炎と虚閃、ハリベルの霊圧と虚閃、その全て一箇所でぶつかり合い激しい爆発と爆風が発生する。

ハリベルはフェルナンドの虚閃の勢いと爆風でかなり上空まで吹き飛ばされていた。
霊圧の防御と、虚閃で虚閃を迎え撃って威力を殺したとはいえ、自身の霊圧も混ざり合って炸裂した白髪を受けてはハリベルとて無傷ではいられなかった。

上空から虚圏の砂漠を見る、見渡す限りの白の中で一箇所だけが未だに紅い、それはフェルナンドが生きているという証明だった。
「しぶといな？？？」そう零すハリベルの声には楽しさが滲んでい

た、それは予想外のダメージを負った事への驚きか、フェルナンドが自分の予想道理の力を持っていたことに対する喜びなのか
そんなハリベルがあることに気付く、上空からはじめて見たフェルナンドの炎海、その規模が明らかに狭くなっている。
そして見た。半霊里ほどあった炎の海は今や半分を少し上回る範囲、ハリベルを囲い炎の檻を形成していた竜巻は見る影も無いほど細くなり、あらぬ方向へと拉げていた。
そして炎の竜巻がゆっくりと海へと還る、すると炎の海が僅かだが確実にその範囲を広げたのだ。
ハリベルはそれを見逃さなかった。

（急激に上がった炎の威力と密度・・・・・・　なるほど、そういうカラクリか、ならばどうするか・・・・・・　このまま行けば終わりは近い、だが本当にこのまま終わっていいのだろうか・・・）

フェルナンドは消耗していた。未だその炎は大地を覆っているが、その範囲は確実に狭くなっている。
今の一撃でどれほどダメージを与えられたかもわからない、仕留めきる事などできてはいないだろう。
だが、確実に一泡吹かせてやることは出来たと、それがまず第一歩だとフェルナンドは奮い立つ。
これからの戦いのためにも、まずは霊圧と炎の消費をどうにかしなければならないとフェルナンドは考えた、しかし、こればかりは急激に回復する事などありえない。
まして炎の方は尚更だとフェルナンドは内心愚痴る、取り敢えずの応急処置として、もはや原形を留めていない炎の竜巻を自身の身体に戻す。

これで霊圧の回復と、炎が戻った事により若干炎海が広がった感覚をフェルナンドは感じた。

「後はあの女がどれだけダメージを負ってるかだが・・・・・・」

「私がどうかしたか？　フェルナンド」

零した呟きに答えが返ってきたことに、もはやフェルナンドは驚かなかった。
それは当然の結果、あの程度死死ぬなどとは微塵も考えられない存在。
服はボロボロになり、身体にも多少のダメージは負っているようだが、そんなものは相手にとってさして気になる程のものでない事もフェルナンドは理解していた。

「お互い随分ボロボロになったものだな・・・・・・唯の大虚にこんなに梃子摺るとは思ってもみなかった」

「・・・・・まるでもうこれで終わったみてぇな言い草だな、勝手に俺までボロボロにするんじゃねぇよ。アンタはこれから俺がもっとボロボロにして殺してやるんだ、減らず口叩いてないでかかって来いよ！」

ハリベルの言葉、それは純粋な驚きと唯の大居にとっては賛辞とも取れるだろう、だがその言葉を認めないといわんばかりに殺すと明言するフェルナンド。

しかしその言葉はハリベルに対してというより、むしろ自分に対しての言葉、そうして声に出して宣言する事で自身を奮い立てようとする。
そんなフェルナンドにハリベルはあくまで冷静に、自らの見た事実を語る。

「そういきり立つな・・・・・・　上空からは随分はっきり見えた。貴様の炎が狭まっているのも、貴様が炎を吸収、いや、元からあった場所に戻したと言うべきか。収束していた炎を戻して炎が広がる様を見たといえば伝わるのか？貴様が炎を産み出していたのではなく、総量の決まった炎を操る様子が見えたよ」

遂にバレたか、とフェルナンドは内心苦々しい思いで溢れていた。
炎を産み出す者と、炎を操る者、同じ炎を扱う者でもそのあり方は違ってくる。
産み出す者は、無限ではないにしろ霊力が続く限り際限なく炎を生み出し、操り、戦う事ができる。
対して操る者は、今、持っている内包した炎こそが全てであり、いくら霊力が優れていようともそれが無くなってしまえば戦う事ができない。
後者であるフェルナンドはこの発覚を避けたかった。彼自身膨大な炎を内包する存在ではあった、しかし、今ある炎が無くなれば、それだけで自分が無力と成り下がる事を理解していた。
フェルナンドがどれだけの炎を産み出せるのかが判らなかったからこそ、ハリベルが霊圧を温存した戦いをしていたと言う事も理解していた。
だがそれが判ってしまった今、ハリベルは目の前で燃えている炎の全てを駆逐するだけでいい、霊圧を温存する必要はなくなったといえる。

「もはや勝敗は見えた、これ以上続ける事は自殺と同じだ。理性があるのならば退く事を学べ、お前は、負けたのだ・・・・・・」

ハリベルの残酷な宣言が響く。
そう、完全なる敗北、もはやフェルナンドに逆転の芽はない、いきなり霊圧が増える事も、新たな力に目覚めるなどという事はありはしない。
残酷なまでの敗北という事実、だが、だからといってそれを受け入れられるほど、フェルナンドは大人になりきれていなかった。

「そうかい・・・・・一つだけ、アンタの間違いを修正しといてやるよ。俺は”炎を”操ってるんじゃねぇんだ、言ったろ？　この炎は”俺自身”だと、それはそのまま言葉道理の意味さ、俺に肉体は”無い”。　この炎は俺の姿が長い年月の内に変化したもんだ。だから簡単に操れるし、元は肉体だから霊圧も発してる。そしてこの炎が消えるって事は、即ち俺が死ぬって言う事と同義なんだよ。」

「ならば尚の事止めておけ、悪戯に死を急ぐのは愚かな行為だ。貴様は大虚でありながら私に一太刀浴びせた、それは評価に値する。私と共に来いフェルナンド、私がお前を戦士にしよう」

フェルナンドの独白を受けて、ハリベルは尚の事だと終わりを告げる。
この眼下の炎が消えればフェルナンドは死ぬ、ならば彼は今まで文字道理命を削って戦っていたという事、この炎海こそが彼の全て。
今この場で失うには余りに惜しい存在、大虚でありながら上位の破面であるハリベルと紛い形にも戦える力。

未だ荒削りとはいえ、戦士たる資質を充分に持っている彼をハリベルは失うわけにはいかなかった。
刀を持っていない左手を差し出す、私と共に来いと、この手をとれと。

「……素直にその手を取れるほど、俺が大人じゃねぇってのはもう判ってんだろ？　それに、俺は今漸く感じられそうなんだ……　俺は今を生きているんだって実感を。馬鹿みたいに長い時間を生きる俺達が、当たり前だと忘れちまうような…　そんな感覚を俺はずっと求めてきたんだ。……俺は馬鹿だからよぉ、戦う事しかそれを感じる術を知らねぇんだ。だから俺は退けねぇんだよ……　戦って、このまま死んでも俺が今を生きたということが感じられんなら、俺はそっちの方がいいんだ。　だから！　俺はァァアァ！！！」

フェルナンドは咆哮する。
それに呼応するように、彼の仮面を中心に炎海の炎の全てが飛び上がり、猛烈な速さで霊圧の暴風を伴い集まっていく。
範囲が狭くなっていたとはいえ、膨大は量の炎が一点に集中し、嵐と共に小さく圧縮されていく。
その暴風が収まった後に残ったのは、今までの無形の炎ではなく、確固たる形を持った炎、「炎の馬」が空に佇んでいた。
体高は３～４ｍ程の巨大な馬、肌も、蹄も全ては赤い炎で構成され、その鬣は燃え上がる炎そのままにゆらゆらとたなびいていた。
一点に集められた炎と霊圧、今まで眼下に広がっていた炎の海が全て内包されたその姿、威風堂々としたその炎馬の顔には、この炎の絶対支配者たるフェルナンドの仮面があった。

「その姿・・・・・それがお前の切り札という事か、どうしても続けるというのか？　これ以上はいくら私でも殺さぬように戦う事などできないぞ？」

「完全収束するとこの姿になっちまうんだよ。これだって半分くらいの炎しかないしょぼくれたモンだがな……　それにさっき言っただろうが、退くぐらいなら実感できる方をとるってよ。それに殺さない用にだと？始めっから誰もそんな事頼んでねぇんだよ！そういう心算で来いよ！俺はこれに全てを賭ける！俺の最後の攻撃だ、受けてもらうぜ！　ティア・ハリベル！」

炎馬となったフェルナンドから赤い霊圧と炎が彼を覆うように噴出している。
最後の一撃、退いて永らえるくらいならば、ここで全てを出し切るほうを選ぶ、潔さとも無謀とも取れる行為。
しかし今のフェルナンドが持つ不退転の覚悟だけは本物だろう。

その気合と覚悟を受けハリベルは静かに瞳を閉じる。
このまま戦えば彼を殺してしまうかもしれない、故にこの一撃を避け、消耗した彼の四肢を落としてでも、無理矢理にでも虚夜宮へ連れていく事が任務を全うする事を考える上でもっとも合理的な選択。
だがそれでいいのかとハリベルは自問する、目の前であれだけの気合と、力と、そして覚悟を見せ付けられ、尚正面から受けずに戦うのか？それが戦士ティア・ハリベルの戦いなのか？

否、断じて否、相手の覚悟をこうも見せられ、それに答えられないような者は自らを戦士と呼ぶ事は出来ない。
挑まれた最後の勝負、それに背を向けるなどありえない、それは自

分の戦士としての矜持に、そして何より相手の覚悟に泥を塗り、踏み躙るのと同じ非道。
事ここに至っては此方も相応の覚悟と、相応の技をもって答えるのが戦士の礼。

カッと見開かれたハリベルの瞳。
其処には戦士として相手を倒すという決意以外存在しないような、苛烈な覚悟を秘めた瞳があった。

「ならばもはや何も語るまい、互いにこの一撃をもって幕としよう。この虚閃は特別だ、我等の中でも一部の者にしか許されない至高の虚閃。これを受けて消える事を誇りに思うがいい、フェルナンド・アルディエンデ。」

そう言うとハリベルは自らの刀で指を切る。
一筋の赤い傷、流れた血は刀身を伝い刃にいきわたり、次いでその刀はフェルナンドへと向けられその切っ先に霊圧が収束する。
切っ先へと集まる霊圧に巻き上げられるように、刃に付着した彼女の血が霊圧と混ざり合いそれを切欠に唯の虚閃とは比べ物にならないほど膨大な量の霊圧が収束する。
１m程にまで巨大化した霊圧の塊を掲げたままハリベルは問う

「準備はいいか、フェルナンド。私の今撃てる最高の虚閃だ。その身に受けることを誇るがいい」

「ハッ、上等！アンタこそその虚閃が貫かれて自分が消炭にならないように、精々力を込めるんだな……　往くぜ！　ティア・ハリベル！」

言葉と共にフェルナンドが霊圧と炎を纏い疾走する。
四肢から爆発的な推進力が発生し、その一駆けでフェルナンドの姿は赤い流星と見紛うばかりの一条の光へと変わる。
一直線にハリベルへと迫るフェルナンド、至高の虚閃をもってそれを迎え撃つハリベル。
かくして両者の小筒の瞬間が訪れる。

「ウルァァァァァァァァ！！！！！」
「王虚の閃光（グラン・レイ・セロ）」

全霊を賭けた流星と至高の砲撃、衝突の瞬間全ての音が消え去った。
夜の世界、虚圏に朝が訪れたのではないかという程の閃光が生まれ、その後に置き去りにされた爆発音が響く。
衝突によって発生したエネルギーは砂漠を覆うドームを作り出し、辺りを覆う。
そして、閃光が収まりだし、高純度の霊圧同士の衝突によって発生したエネルギーが収まり、そしてその後に残ったのは夜の静寂と、巨大なクレーターだった・・・・・・

衝突
閃光
爆発
後に残ったものはあるのか
生の実感を願った彼は
それを得て消えたのか
彼の孔は、未だ穿たれたままなのだろうか・・・

虚圏の白い砂漠が抉り取られる様にして出来たクレーター、膨大な量の光と、爆発で発生したエネルギーは次第に終息し、辺りは一瞬の夜明けから、また永遠の夜へとその姿を戻しつつあった。

抉られたクレーターからは未だ砂煙が上がり、その様はその瞬間を見ていない者をしても、その威力の凄まじさを雄弁に語っていた。

だが、誰が思うだろう、この異常な光景、大地は抉れ、砂は隆起し、未だ残る霊圧の残滓は、近づくのを躊躇うほど。

そしてこれを成したのがたった二人、しかもたった一撃の衝突の結末であるという事を。

両者がまさに全霊をかけた一撃、己が命を賭けた者と、その覚悟に応えようとした者、覚悟と覚悟の衝突、それこそがこの場に広がる景色の理由であった。

クレーターから立ち昇る砂煙が次第に収まりだす。

晴れつつある砂煙に映し出される影は二つ、一方は女性の形をした影、そしてもう一方は何とも形容しがたい形、人では無く、反って動物でも無く、形を成していない形、何かの塊という表現が一番適切ではないかと思われる影。

煙が晴れる、そして影は隠されていた実体を表す。

女性の形をした影は、黄金の髪に翡翠色の瞳、褐色の肌を白の衣で

包んだ美しき破面、ティア・ハリベル。
形容しがたい影は、轟々と燃え盛り、焼き尽くす紅い業火の大虚、フェルナンド・アルディエンデ。
この巨大なクレーターを生み出した二人は、互いの必殺の一撃を生き延びていた。
生き延びたという点で二人は同じだろう、しかしその状態はまったく違っていた五体満足とまでとはいかないまでも、自らの足で大地に立つハリベルと、まさしく全身全霊を込めた特攻とハリベルの王虚の閃光を真正面から受けたフェルナンドは、もはや炎馬の形態をとる事ができなく、炎の身体を維持する事しかできないでいた。
体を左側を正面に半身の構えで油断無く佇むハリベルと唯己を維持するだけのフェルナンド、もはや戦闘は困難どころか完全に不可能の状態、ここに二人の戦いの決着は着いた。

「チッ、結局このザマか・・・・・俺の全てを賭けたって、アンタの命に届かねぇ。　かといって生きた実感が得られたわけでもねぇ、唯ボロカスになって、無様に死んでいく訳だ。　ハッ、笑えるな・・・・・」

フェルナンドは笑う、無様な自分を嘲笑う、全霊をかけた攻撃でもハリベルの命を奪うには足らず、求め続けた生の実感も結局得る事はできなかった。
ハリベルとの戦いの中で、ギリギリの勝負の中で確かに感じた感覚、戦いの喜びと、命と命のぶつかり合いの中で感じた生の実感。
この一撃で自分は死ぬだろう、だがそれでも自分が、この一瞬を生きたと感じられるならばそれでいいと思い放った最後の突撃、迎え撃つハリベルの攻撃を受け、その只中を突き進むなか彼が感じたのは、生の実感ではなく死の恐怖だった。
今まで死を体感しても感じなかった恐怖、それが彼の中でブクブク

と膨れ上がっていった、死にたくないと感じた自分が生き残っている現状、それは自身が恐怖に負け退いたという事だとフェルナンドは思っていた。それ故にハリベルの命に届かなかったと、恐怖に退いた一歩、それがフェルナンドには屈辱的で、それ故に愚かで無様な自分を笑ったのだった。

「笑えるだろ？　ティア・ハリベル、俺はビビっちまったのさ。テメェが望んだものを手に入れようとしたその時に、俺は退いちまった。無様に・・・・・・生き残ったんだ」

自らの苦々しい思いを口にするフェルナンド。
己の一撃を正面から受けようと対したハリベルに、己の愚行を伝える。
そうしなければフェルナンドの気がすまなかった、最高の一撃、最高の殺し合い、それを自分が台無しにしたと、フェルナンドはハリベルに告げようとしたのだ、少し前の彼ならば考えられない行為、戦いというものへの向き合い方がフェルナンドの中で少しだけ変わっている、その証拠だともいえた。

「貴様の言いたい事は判った。だがそれの何が悪い、恐怖を感じた事の何が悪いというのだ。恐怖を感じない者など狂った獣と同じだ、恐怖を感じて尚戦場に立てるかどうか、戦いの中に身を置けるかどうか、それが戦士と獣を別ける境界だよ、フェルナンド」

「だが、俺は戦いの中で退いちまった。アンタは最高の一撃を放ったのに、俺はアンタに掠り傷一つ負わせてねぇ。それは俺が退いちまったせいで、それはアンタが言う戦いを侮辱した事にはならねぇのかよ？」

フェルナンドの苦々しい思いを、それど何処が悪いのだとハリベルは一蹴する。
戦いの中で恐怖を感じる事、そんなものは誰しもが感じている事なのだ、今までそれを直視してこなかったフェルナンドにとっては、それはさぞかし衝撃的で、屈辱的な事だったのかもしれない。
それは彼が戦いを愉悦の為だけに用いていた為でもあり、自身よりも強いものと相対した事が無かった為でもあったのだろう。
故に彼は初めて感じた感情である恐怖を受け入れがたかった。
ハリベルは言う、恐怖を感じる者と感じない者の違いを、恐怖を感じない者は唯の獣であると、恐怖を感じて尚戦場に立つものは戦士であると、故にお前は戦士であるとハリベルは確信した。

「確かに貴様は戦いの中で恐怖を感じた。だがそれならば何故逃げなかった？　向かってくる私の攻撃から身を翻し、かなた遠くまで飛び去ってしまわなかった？　貴様は恐怖を感じながらも私の攻撃の只中を進んだ、それの何処が戦いを侮辱する？　貴様は恐怖を感じながらも逃げ出さず、貫いたのだ貴様の覚悟を、そしてそれは私に届いた」

そう言ってハリベルは今まで半身にしていた身体をフェルナンドに正対させる。
そうして今までフェルナンドにとって死角となっていた彼女の右腕には、彼女の纏う白い衣は肩口から先は無く、刀を握った手から、腕、肩にかけての所々を熱傷が覆っていた。フェルナンドの全身全霊を賭けた最後の一撃は、間違いなく彼女に届いていたのだ。

「チッ、まったく・・・・今まで右側を隠してたのはそういう訳か、こんなボロカスになった相手にまで自分の傷を隠すとは随分慎

重なことで。やってられねぇな、まったく」

それを見るやフェルナンドは毒づく、自身の圧倒的有利、それどころか完全な勝利の中でも決して油断しないハリベルの振る舞いに、呆れを多分に含んだ言葉をかける、だが、その声には喜色が浮かんでいた。

いや、それもあるが、その喜びの最たる理由はきっと別、自身の一撃が彼女に届いていたという事実のためかもしれない。

「その言葉は褒め言葉として貰っておこう。戦いにおいて自分の弱味は見せない、戦士の心得の一つだ、覚えておけよ」

「ハッ、そうですか、クソッ、俺の負けで幕って事か・・・・・・だが悪い気はしねぇな。　初めて負けたってのに不思議なもんだぜ・・・・・さぁ止めを差せよティア・ハリベル、戦いに、殺し合いに、その最後にはどっちかの血が流れねぇと、それは永遠に終わらねぇぞ」

戦いに、殺し合いに幕を引けとフェルナンドはハリベルに告げる。命と命のやり取りの中で、どちらも生き延びるなどという事はありえない。

全てが丸く収まるなどという綺麗事は、大昔の御伽噺の中だけの所詮紛い物の幻想に過ぎず、現実はどちらかが血を流し、その命の火を消さなければ終わりにはならないのだ。

故に殺せとフェルナンドは語った。

「それはできない。貴様は私と共に来てもらう、それに貴様が言ったのだろう？　連れて行きたければ力ずくでそうしろと、それだけ

の力を私は示した心算だが、それともう少し痛めつけられたいか？」

「なっ！　アンタどういう心算だ！　ここで俺を殺さねぇと、この殺し合いは終わらねぇと言っただろうが！何処に連れて行く心算かは知らねぇが、そこに連れて行っても、俺はアンタの命を狙うかもしれねぇんだぞ」

止めは差さない、ハリベルはそう答えた。
それはハリベルにとって当然の選択、元々彼女の使命はこの大虚を虚夜宮へと連れて行くこと、途中彼の意気に流され戦いに熱が入ってしまったのもまた事実ではあるが、それとこれはまた別の話なのだ。
そして使命以上にハリベルはフェルナンドを気に入っていた、初めにあったような、何者にも噛み付くむき出しの爪や牙の雰囲気は今はなく、禍々しい雰囲気も感じられない、まるで憑き物が落ちたような彼ならば、きっといい戦士となるとハリベルは感じていたのだ。
当然そのハリベルの返答が気に入らないフェルナンド、彼にとって戦いの終わりは常に何かの死によって締め括られるものであって、それが存在しないという事は、戦い自体が終わっていないという事。
そんな中途半端が許されるはずがないと、止めを差せと、差さなければ自分はお前の命を狙うと吼えるフェルナンド。
だが、ハリベルは確信していた、次に自分が放つ言葉を聴けばこの炎の大虚は確実に虚夜宮に行くと言う事を。

「それならば問題ない。いくら貴様が強くなろうとも、私が貴様に敗れる事などありはしないからだ。よく見ろ、そんなに消耗して私に負わせた傷が熱傷程度、私の命を奪うには、少々足りな過ぎるの

ではないか?この程度で命を狙うなどと口にするとは・・・・・・・
呆れてものも言えんな」

大げさに肩を落とし、最後には溜息のおまけをつけて放たれたハリベルの言葉、言っている言葉の全ては事実ではあるのだが、その言い方が余りにもフェルナンドを見下し、そんな事も判らないのかといった態度だった事は言うまでもない。
最初にフェルナンドがハリベルにとった態度そのままに言い放ったそれは、意外とそれを根に持っていたハリベルの意趣返しでもあり、フェルナンドを動かすには十分すぎるものであった。

「ほぅ・・・・・それじゃあ何か?俺がいくら強くなってもアンタは殺せねぇと・・・　俺程度に負ける訳が無ぇと・・・　俺の言ってる事が口先だけだと・・・そう言いたい訳だ・・・・・・・・・・・・・・・　上等じゃねぇかコノヤロウ!!　何処にだって連れて行きやがれ!!　そこで強くなって必ずアンタを俺の足元で跪かせて、今の発言を後悔させてやろうじゃねぇか!!　馬鹿にした態度とりやがって!　クソ!　頭にきた!　オラ何してんだ!　さっさと連れて行きやがれ!!　ティア・ハリベル!!!」

フェルナンドの感情に呼応して彼の炎が怒髪天の勢いで燃え盛る。
余りにも単純・・・・・・ハリベル自身ここまで効果覿面とは思っていなかった為一瞬面喰ってしまう程の態度の変化。
ハリベルにとった自身の態度など棚上げにして怒るフェルナンドは早く連れて行けとハリベルをせかす。
これにてハリベルの任務は一応の達成を見たが、この後に起こるであろうことを思うと一瞬頭が痛くなるハリベルであった。

戦いは一応の幕を見る
紅い炎は満身創痍の中で
新たな境地の入口に立つ
その指針たる黄金は
この後の激動を未だ知らない

何処までも広がる虚圏の砂漠、遮るもの無く、、暗い夜空と白い砂漠の境界線が視線の先に緩やかな地平線を曲線をえがく、それは何処まで行こうとも途切れる事はない。
その見果てぬ白の砂漠に聳えるものがある、それは虚圏の自然に存在しない直線と、地平線と同じ曲線によって形作られ、全てを砂漠と同じ白で彩るそれは明らかに人工的に作られたものだった。
巨大、それしかその建造物を形容する言葉は無かった。視界に捉え、それに近付こうとしても一向に近付いた気がしない。
余りの大きさゆえに距離感は崩れ、砂漠以外の比較対象の少ない虚圏ではそれを修正する事すら出来ない。
視界に捕らえているのに近付けない、現実として存在しているはずなのにまるで幻の様なその建造物、それこそが破面達を従える者、藍染惣右介の居城であり、破面達(アランカル)が巣食う美しくも危険な宮殿、『虚夜宮(ラス・ノーチェス)』であった。

ハリベルはフェルナンドを伴ってその虚夜宮のある場所に居た。
虚夜宮『玉座の間(ドゥランテ・エンペラドル)』　宮殿の主である藍染惣右介が破面に命を下す場所。
その中央でハリベルとフェルナンドは、他の破面達が遠巻きに見守る中でこの宮殿の主を待っていた。
フェルナンドはこの虚夜宮に来る間に多少回復はしたものの、本来

彼が持つ霊圧、そして炎には遠く及ばない状態であった。
ハリベルの横で仮面が収まる程度の炎の塊となり浮かぶフェルナンド、そしてその彼に注がれる眼、眼、眼。
視線から感じる感情は様々、値踏みするような視線、特に興味も無いといった視線、面白そうだという視線、あからさまな敵意を含んだ視線、そしてその他の大多数の視線から感じるのは、嘲り、嘲笑といった視線だった。
そしてその嘲笑と嘲りの視線はフェルナンドだけではなく、彼の隣にいるハリベルにも向いていた。

「オイオイオイ、第４十刃サマともあろう御方が、そんなゴミみたいなヤツを連れてくるのにそんなにボロボロになったのかよ。これは天下の第４十刃も地に堕ちたってもんだな！」

誰とも無くそんな声が聞こえる、それに次いで次々と同じような内容の言葉が飛ぶ、そしてそこかしこから隠そうともしない笑いが起こる。
現状のフェルナンドの霊圧をだけ見て格下だと決め付けた者による言葉、それが誰だったかは判らない、だがそれに同意するような笑いが広がる。
それは同時にハリベルに対するものでもあった、そんな格下の大虚に梃子摺ったばかりか、手傷を負わされて帰ってきた十刃、唯の破面ならばこれほどの嘲笑は受けなかった、彼女が十刃であるが故にそれは起こったのだ。

『十刃（エスパーダ）』　破面の中で1~10の数字の刻印を身体に刻み、No.11以下の破面を支配する権限を持つ破面。
その序列の決め方は至って単純、その破面が持つ”殺戮能力の高い

順”　それだけだ。
力こそが総てである彼らにとってそれは単純であり、最も理にかなった序列の決め方であった。
だがしかし、その十刃の一人、しかもＮｏ．４という上位の十刃が手傷を負って帰ってきた、さぞかし強い大虚、それも最上大虚を連れて来たのだと思えば、その彼女の隣にいるのは仮面の浮かんだ火の玉一つ。
発する霊圧もそれほど大きいものではない、それは即ち彼ら破面にとっては取るに足らない雑魚であるという証、その雑魚に十刃が手傷を負わされて帰ってきた、力を信じる彼らからしてみればそれは許されない事であった。
故の嘲笑、そんな雑魚に傷つけられるとは笑わせると、そんな雑魚は自分達でも容易に殺せると、そしてそんな力の無い者が十刃などと笑わせると、そんな声が聞こえてくるような笑いそれが少しずつ広間に満ちる。

そんな笑い声の中ハリベルは瞳を閉じ唯じっとその場に立っていた。
その笑いは確かに聞こえるが、それは取るに足らない事、言いたい者には言わせておけばいい。
そして自身がこの隣にいるフェルナンドに傷を負わされた事は、紛れも無い事実であり、それは彼らにとっての十刃という力の絶対性を失わせかねない事実でもあった。
故にハリベルはその笑いの中で己の未熟さを再確認していた。

だがそんなハリベルの隣でその笑いに耐え切れそうに無い者が居る。
フェルナンドは機嫌が悪かった、唯でさえここに連れて来られる前にハリベルに「お前では私に勝てない」と言われ頭に来ているところに、まるで自分が見世物になた様に奇異の視線を向けられ、最後には嘲笑の嵐、平静で居られる方がどうかしている。

フェルナンドは耐え切れずハリベルに語りかけた。

「おいアンタ、こんなクソみたいな奴らに言いたい放題、笑わせ放題にしといていいのかよ？少しは頭にこないのかよ、えぇ？」

「笑いたい者は笑わせておけばいい。それに貴様に傷を負わされたのは事実だ、彼らの言葉には一理ある。十刃としての席に居ながら、その責の重さを私が理解しきれていなかった、私の未熟さが招いた事だ、何を言うものでもない。」

「ハッ、違うな、アイツ等みんなアンタが妬ましいのさ。大した力も無ぇクセに、誰かが失敗すりゃぁそれを声高に叫ぶ、テメェが強くなる事よりも誰かの足を引っ張る事しか考えてねぇ、物陰に隠れて姿を見せずに女々しいことこの上無ぇ、そういう程度の低いクズなんだよ。」

周りに憚る事無くそう言い放つフェルナンド。
そんなフェルナンドの言葉は、笑い声が満ちる広間に異常な程良く通った。
瞬間笑い声が消える、そして嘲笑の視線はその総てが、殺意の篭った視線へと変わった。
空気が張り詰め静まり返る広間、その一瞬の静寂を打ち破るように、一体の破面がフェルナンドとハリベルの前へと歩み出る。

「オウ、誰が物陰に隠れてるって？　雑魚が言うじゃねぇか、オレ達が足を引っ張る事しかできないクズかどうか、テメェ自身に判らせてやってもいいんだぜ？」

そういってフェルナンドを挑発する破面、身体は異常に大きく、鎧のように肥大した筋肉を身に纏い、動物のサイの骨のような仮面の名残をその頭に着けた破面、人型というよりはむしろまだ虚に近い形状をしたその破面はフェルナンドの仮面に顔を近づけてそう言った。

その視線には怒りが満ちており、そしてそれは明らかに格下を見る目つき、根拠の無い自信と相手を侮る愚かな態度、そんなサイの破面をハリベルが嗜める。

「止めろ。この大虚は藍染様に引き合わせることになっている、その邪魔をすれば容赦せんぞ。」

「黙っててもらおうか第４十刃サマよ！　こんな雑魚にそのザマじゃオレは十刃なんて認められないね。十刃は力を持ってるからオレ達は従うんだ、それが示せないヤツは十刃じゃないんだよ！」

第４十刃であるハリベルに対して、憚る事無くそう叫ぶサイの破面。彼が言った事は十刃以外の下位の破面が思っていた事だ、破面にとっては力こそ総て、それが示せない者に従う理由がどこにあるとＮｏ．１１以下の破面たちは思っていた。

そしてその破面達は、彼らをクズ呼ばわりした火の玉の大虚を、サイの破面が殺すのを見たがっていた。

「それじゃぁ藍染サマに引き合わせる前に、オレがコイツの強さを見てやるよ！　雑魚なんか会わせたって仕方ないからな！」

周りからの期待の視線を感じたのか、サイの破面はニヤニヤと笑いながら両手を広げて宣言する。

そう声高に叫ぶサイの破面に賛同するように多くの破面が叫ぶ、「やっちまえ」、「ブチ殺せ」と。
広場を喧騒が支配する、殺意の篭った視線がフェルナンドへと集中する、その中でフェルナンドは何も感じないような態度でハリベルと話していた。

「おい、アンタ、これは殺っちまっていいのか？　相手の力も測れねぇクズだ、死んじまっても問題ないだろ？」

「あぁ、私の言う事は聴かないらしいからな、お前がそう言わなければ、私が殺していた所だ。　だがもうすぐ藍染様がいらっしゃる、殺るなら手短にな」

「ハッ、時間を掛けるなだって？　笑わせんなよ、こんなクズ一匹消すのに時間なんか掛かると思ってるのか？」

広間を埋め尽くす怒号の中、フェルナンドとハリベルはそんなもの気にも留めない様子で語り合う。
その内容はいたって単純、目の前の愚か者をどうするか、という問題。
フェルナンドにとって機嫌の悪いところに、更に追い討ちをかけるかのように出てきた目障りな相手。
ハリベルにとっては十刃である自らの命に従わない破面、ただ笑われている内ならばよかったが、明らかな命令違反を見逃すほどハリベルは優しくはない。
そして二人の出した結論は、この破面の殺害だった、まるで肩に落ちた埃を払うかのような気軽さで、二人はそれを決定した。
それを目の前で聞いていたサイの破面は、怒り心頭といった様子で身体を震わせ直後大きく拳を振りかぶる。

「ふざけた事言いやがって！　今すぐブチ殺してやる！！」

叫びと同時に振りかざした拳をそのままフェルナンドの仮面目掛けて振り下ろす、その拳には霊圧が込められ、鎧のような筋肉と相まってその破壊力は見るも明らかだった、そして仮面へと拳が当たると思われた瞬間、フェルナンドの炎が弾けた。
炎は瞬時に膨れ上がり、瞬く間に大きくなると、そのままサイの破面を呑み込んでいた。

「ギャァアああアァァぁァアあぁァァァァァ！！！」

炎に呑み込まれ、火達磨になった破面が断末魔の叫びを上げる。
だがそれも一瞬、次の瞬間にはもうその声は聞こえない、身体を焼く炎の痛みに耐え切れず、叫び声を上げるために大きく開かれたその口からフェルナンドの炎は身体の中へと入り込み、気道を焼き、肺を焼き、臓器を焼いた。
焼き爛れた喉は最早声を発することは無く、外側と内側の両方から焼き尽くされたサイの破面、すでにそこには炎だけがその場で人の形のまま燃え盛っていた。
呑み込んだ破面の形が次第に失われ最後には炎だけとなると、炎は次第に収まり、フェルナンドはまた先ほどと同じ火の玉の形に戻りハリベルの隣へと移動する。
広間に音は無かった、ほんの一瞬で総てが決着してしまったのだ、先ほどまでフェルナンドの前にいたサイの破面は今は居ない、その欠片すら残されていない、血痕すらなく、ただ彼が立っていた床に炎で出来た焦げ後が僅かに残っているのみだった。
その静寂の後に来るのはやはり怒号だった、目の前で同胞を焼き尽

くされた破面達が一斉に叫びだしたのだ、様々な罵声が飛び交う、ありえないと、霊圧から考えてそれはあり得ない事なのだと、何か裏があるに決まっていると、そしてその総てに共通するのが「殺せ」という一つの意思だった。
まさに一触即発の気配、そしてそれは到底押さえ切れるものでは無くなりつつあった。
だが、その喧騒は一瞬で静まる、この男の登場によって。

「――やぁ、皆、遅れてしまってすまない。」

怒号と罵声が飛び交う広間に、さほど大きく発せられた訳ではない言葉が響く。
それはその男が持つ圧倒的な存在感、カリスマによるものか、それともこの場にいる総ての破面が根源的に抱える恐れによるものかは判らない、だがその一言だけで、広間は静まり返り、あれ程騒いでいた破面たちもそのなりを潜めた。

破面達がいる場所よりも、かなり高い位置に設けられた玉座に男がゆっくりと座る。
その玉座にはそこに広間から上るための階段は無く、断壁の上にあるそれは彼等とその男が隔絶された存在であることを示しているかのようだった。
破面達がまとう衣とは趣が違うものを身に纏った男、白を基調とした破面の衣に対して、男が着ているそれは黒を基調とし、その上から白の羽織を着た男、柔和な顔立ちで、常に笑みを浮かべてはいるが、その眼鏡の奥に誰よりも深い闇と欲望を詰め込んだ男、本来この虚圏と敵対する存在、尸魂界（ソウルソサエティ）の死神でありながら、彼ら破面を産み出し支配する男、藍染惣右介その人であった。

「おかえりハリベル、任務ご苦労だったね、待たせてしまってすまない。尸魂界を出るのに少し手間取ってしまってね。」

「いえ、私こそ藍染様の御前にこのような無様を曝し、申し訳なく思います。」

先ほどまでの喧騒の理由を藍染は問わない、無論ここは彼の宮殿、事の顛末の総てを彼は知っている。

だが、そんなものは彼にとって小さな出来事、ただ粛々と己の目的だけに邁進する彼にとって、それは余りに小さな出来事だった。

故に彼は問わない、そして表面だけの労いをハリベルにかけた、心からの言葉ではないそれ、だがそれも仕方が無い事、藍染惣右介にとって”こころ”などというものは、理解の外にあるのだから。

「いいさ、それで彼なんだね？　君にその傷を負わせたという大虚は。」

「はい、この傷は間違いなくこの者との戦闘で負ったものです。戦闘によってこの者の霊圧も極端に減衰し、現在はその大半を失っている状態ですが、御覧になられていた通り、最下位の破面クラスならば問題なく対処できるようです。」

周りを囲む破面達が一斉に息を呑む、放つ霊圧から雑魚だと決め付けていた大虚が、実はその霊圧の大半をハリベルとの戦闘で使い果たし――実際はハリベルに消し飛ばされたのだが――ていたという事実。

そしてその大半の霊圧を失った状態で最下位とはいえ破面を焼き殺したという事実。

奇異の眼から殺意の篭った目へと変わったそれが、今度は恐怖を映し出していた。

「そのようだね、名を聴かせてくれるかい？　荒ぶる炎の大虚よ。」

言葉と共に一面を霊圧が襲う、藍染から放たれた霊圧が、まるで総てを押えつけるかのように降り注ぐ。

笑みを浮かべ、頬杖をついたまま放たれるその霊圧の大きさに「ヒッ」と何処からとも無く小さな悲鳴が漏れるほどの霊圧の中で、フェルナンドは怯む事無く藍染の顔を睨み付ける。

「フェルナンド・・・・・フェルナンド・アルディエンデだ。あんたが俺に力をくれるのか？」

「力を得られるかどうかは君次第だよ、フェルナンド。　我ら破面は君を歓迎しよう。」

「そうかい・・・・・一つ確認だが、俺が力をつけてこの女を殺したら、アンタはどうする？」

歓迎の言葉を述べる藍染にフェルナンドが問う、自身がハリベルを殺したならばお前はどうするのかと。

一瞬藍染の顔から笑みが消え、代わりに多少の驚きが浮かぶが、それもまた直ぐにいつもの笑みへと戻った。

「驚いたな・・・・・君はハリベルを殺すつもりでココに来たの

かい？　君がそれだけの力を付けたのならば、君の好きにするといい。だがきっとハリベルもそう簡単には殺されはしないよ、そうだろう？ハリベル。」

「無論です。まぁ、今のままでは相手にすらなりませんが。」

驚きながらも、いや、面白いものを見つけたといった風に殺害を容認するという藍染。
彼にとってはこれもまた余興に過ぎないのだろう。
そして、ハリベルの迎え撃つという発言に、フェルナンドは隣で「その言葉忘れんじゃねぇぞ」と念を押していた。
こうしてフェルナンドが虚夜宮で破面の一員となることが認められた。

だが、フェルナンドの加入のみでこの場が終わる事はなかった。

「ハリベル、実は一つ君に伝えなければならない事があるんだ。破面Ｎｏ．３、『第３十刃（トレス・エスパーダ）』　ネリエル・トゥ・オーデルシュヴァンクが失踪した」

王の言葉
それは絶対の宣誓
それに間違いはなく故に完全

駆け上がる階段
空席を埋める黒い翼
そしてそれは血によって贖われる

BLEACH El fuego no se apaga. 7（後書き）

スペイン語の訳は合っているかかなり怪しい・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 8

――破面Ｎｏ．３『第３十刃（トレス・エスパーダ）』ネリエル・トゥ・オーデルシュヴァンクの失踪

それは任務で虚夜宮を空けていたハリベルにとって衝撃的なことであった。
自分よりも一つ上の位階、第３十刃であり、理性的で聡明、破面でありながら戦いを好まない性格をした彼女。
しかしその戦闘力は他を圧倒するほどの力だった。
その姿はハリベルにとってある意味理想的であった、戦う事は目的ではなく手段でしかなく、力を誇示するだけの戦いは獣のそれと変わらない。
自らを戦士と捉え、また自身も戦士であろうとしたネリエルの在り方は、無為の犠牲を好まないハリベル自身共感できる部分もあり、十刃の中で最も信のおける存在であった。
言葉を交わす機会も多くは無いがあった、彼女と彼女の従属官（フラシオン）が語り合う姿は主従を越えた信頼という未知の感覚ををハリベルに感じさせていた。
そしてそれはどこか好ましいものだとも。

その彼女の突然の失踪、　ありえない・・・・・・そんな言葉がハリベルの頭に浮かぶ。
そもそも彼女が姿を消す理由が無いと、上位十刃として破面をまとめる事、また、戦いを好まぬ故に命が失われる事を嫌い、仲間を助けるという破面、いや、虚を含めた虚圏に棲む者の中でも稀有な行動をとる彼女。
理性あるが故に戦いではなく、対話を持って事を成そうとする彼女の姿勢は、虚夜宮に新たな秩序をもたらすきっかけとなる筈だった。
そしてネリエル自身そうなればいいと語っていた、それを成さずして、それを放棄するように彼女が消えるなどありえない。
では、何者かによって殺されたのか、それもまたあり得ないとその考えを斬って捨てるハリベル。
彼女は十刃だ、それもハリベル自身よりも上位の十刃、戦闘で敗北する事などほぼあり得ない。
そして一度戦闘となれば、戦士として相手と向かい合い、命を奪ったその後もその命を背負う覚悟を持って戦う、そんな彼女が、まさに戦士たる彼女が、唯の戦闘で負ける筈等がない。
だが現実として彼女はその行方をくらましていた。　何故だ　そんな呟きがハリベルの頭に木霊する。

「・・・かい・・・・？・・・　聴いているかい？　ハリベル。」

思考の海に沈んでいたハリベルの意識が急激に浮上する。
下を向き、考えに耽っていたハリベルが顔を上げると、玉座に腰掛けたままの藍染が、笑みを浮かべたままハリベルに声をかけていた。

「申し訳ありません、少々考えに耽っていました。御前での無礼、お許しを。」

「構わないさ、そんな些細な事で君たちを罰したりはしないよ。ネリエルのことは残念だが、今は大事な時期だ。十刃の欠けは許されない、空席は埋められなければいけない。」

「お待ちください藍染様、せめてもう少しの間探査を続けて頂けないでしょうか、彼女がいきなり消えるなど・・・・・・」

藍染が暗にネリエルの捜索をしないと言った事に、ハリベルは待ったをかける。

確かに十刃に欠けが許されないと言う事は、ハリベル自身理解している、だがそれでもネリエルが失踪する理由が余りにも見当たらない。

何か裏に在るのではないかと考えるのは、むしろ自然な事に思えた。

それゆえにハリベルはネリエルの捜索を嘆願した。

「どうかおｎ「居なくなっちまったヤツなんかどうだっていいだろうが！　グチグチうるせぇんだよ！　ハリベルさんよぉ！」

ハリベルの言葉を阻むように、ハリベルよりも少し高い位置、短い長方形の柱の上に腰掛けた一体の破面がハリベルの言葉を遮った。

「ノイトラ・・・・・・」

そちらにハリベルが視線を向けると、そこには一体の破面がニヤニヤと笑みを浮かべながらハリベルを見下ろしていた。

外見は長身痩躯、黒い髪は肩まで伸び、手首には金色のリング、ゆったりとした袴に爪先の曲ったブーツを履き、左目には黒い眼帯、

切れ長の細い眼でハリベルを見下し、大きく開かれた口の中に見える舌に『８』の刻印、ハリベルの言葉を遮った破面の名は『ノイトラ・ジルカ』　破面Ｎｏ．８　『第８十刃（オクターバ・エスパーダ）』　の席に座る男である。

「大方テメェが十刃の器じゃなかったって事に気付いたんだろうさ！　潔く身を引いて、外の砂漠に消えたんじゃねぇのかよ。」

「貴様・・・・・それ以上彼女を侮辱すれば許さんぞ・・・」

「俺がテメェに許してもらう必要は無ェよ。メス同士の庇い合いか・・・反吐が出るぜ、ココにも！　戦場にも！　メスの居場所は無ェんだよ！」

ハリベルの視線に殺気が滲む。
前々からネリエルとハリベルに対して何かと噛み付いてくるノイトラを、ハリベルは常日頃は無視していた。
だが今回のネリエルに対する侮辱、そして自身とネリエルをメスと罵り、両者の戦士の誇りを傷つけたノイトラに、本来冷静で思慮深いハリベルでさえ自身を抑えられなくなっていた。
ノイトラはその視線を受け止め、ニヤついた顔はそのままにそれに答えるように睨み返し、腰を浮かせて臨戦態勢をとる。
その二人の様子に下位の破面達は震え、ハリベルとノイトラ以外の十刃は、我関せずといった態度でその様子を傍観していた。
それは無論フェルナンドにもいえることで、御託はいいから早く始めろという気配が彼の炎から溢れていた。

「二人とも、其処までだ。」

一触即発の気配の二人、その二人を強大な霊圧が襲う。
藍染から放たれる霊圧にハリベル、そしてノイトラもそれに耐えられるように足に力を込め、踏ん張るようにしてそれに耐える。
彼ら十刃をしてもそうして意識して耐えなければ、簡単に膝を着いてしまいそうな濃密な霊圧の波濤、それを苦も無く発する藍染。
互いに意識を藍染に集中していなければならない状況に追い込まれ、必然的に一触即発の事態は回避される。

「十刃の私闘は厳禁だと言った筈だよ、そんな事で十刃を欠く事はできない。そしてハリベル、ネリエルの事は既に決定事項だ。僕が決めた、それが理由だよ。わかるね？」

「・・・・・はい、出過ぎた申し出お許しください。」

言外に反論は認めないという藍染の言葉、霊圧と共に放たれたそれは、ハリベルに藍染と出会った時のあの感覚を思い出させるのに充分なものだった。

「判ってくれて嬉しいよハリベル。ノイトラ、君もいいね？」

ノイトラにも同様に声をかける藍染、それをノイトラは「ケッ！」と小さく悪態をついて顔を背ける、余りに不躾な態度にも藍染は笑みを崩さない、そんな事は気にしないといった風でノイトラに更に声をかける。

「あぁ、それとノイトラ、悪戯は愉しかったかい？」

その言葉に顔を背けていたノイトラの目が一瞬だけ大きく見開かれる、そして藍染の方を見れば彼はいつもの笑みを崩さず、いや、ノイトラの反応を愉しむかのように微笑んでいた。

そう、藍染はノイトラに告げたのだ、自分は総てを知っていると。

ネリエル・トゥ・オーデルシュヴァンクをノイトラ・ジルカが殺そうとした事を知っていると

苦虫を噛み潰したような顔で藍染を睨むノイトラ、そしてその視線を受けて尚笑みを浮かべる藍染。

自身がネリエルの頭をその仮面ごと割り、彼女の従属官と共に砂漠へと投げ捨てた事実を知っていると、この男は告げているのだと。

そしてノイトラは悟った、先ほどの言葉には更にもう一つ藍染の意思が隠れていると、悪戯はバレれば終わり、次はないという事を。

同時に、この男にとって自分が覚悟と決意を持って行った行為は、悪戯という一言で済んでしまう程取るに足らない出来事だったのかという悔しさと怒りがノイトラの中に渦巻いていた。

藍染の浮かべるその笑みは、自らの手の内で必死に足掻く者達を慈しむ様な笑みにも見え、またその命を自由に刈り取る事ができる愉悦の笑みにも見えた。

「さぁこの話はこれでお仕舞だ。　空席になってしまった第3十刃の席には、ハリベルに座ってもらうことになる、いいね？」

反論など出ない、出るはずが無い。
先ほどの霊圧、喩え自身に向けられたものでは無いとしても、その余波だけで下位の破面は沈黙し、十刃にしても、上の席が空いたのならば当然全員が繰り上がるのだから、文句などありはしない。
気骨のある下位の力ある破面達からしてみれば、自分が十刃に入る機会が回ってきたようなものだ、喜びこそすれ反論などありえない。

「第３十刃の席、確かに承りました。」

ハリベルがその場で膝を着き、藍染に頭を垂れる。
フェルナンドはそれをつまらなそうに眺めている、彼の目的は力を得ることで、それ以外はさっさと終わらせて貰いたいと言うのが、正直な感想だった、だがそれをこの場で口に出さない辺り、彼も多少なりとも空気は読める様だった。

「頼むよ、ハリベル。　ではハリベルの昇位に伴って、空席になってしまった第４十刃について話し出す。
誰もが順番道理に十刃が昇位するものだと思っていた。
いきなり下位の破面が第４十刃に抜擢されるなどあり得る訳が無く、ハリベルの隣にいる大虚など論外だ、未だ破面化すらしていないものを十刃にすえるなどさすがの藍染でもしないだろうと、順当に下位の十刃が繰り上がっていくのだろうと、この広間にいる総ての破面が考えていた。

ハリベルが広間の中央からフェルナンドを伴って移動する、それを見届けて藍染は空位となった第４十刃について話し出す。
誰もが順番道理に十刃が昇位するものだと思っていた。
いきなり下位の破面が第４十刃に抜擢されるなどあり得る訳が無く、ハリベルの隣にいる大虚など論外だ、未だ破面化すらしていないものを十刃にすえるなどさすがの藍染でもしないだろうと、順当に下位の十刃が繰り上がっていくのだろうと、この広間にいる総ての破面が考えていた。

「頼むよ、ハリベル。　ではハリベルの昇位に伴って、空席になってしまった第４十刃についてだが・・・・・・」

彼らの主を除いては

「第４十刃には彼になってもらおうと思う。　入ってくれ。」

「ハイ。」

藍染の言葉に鷹揚の全く無い声が返される。
藍染の座る玉座の後ろの暗い通路から浮き上がるように人影が現れる。
まるで血の通っていない雪のような肌、痩せた体つき、黒い髪に緑色の瞳、両目の下にまるで涙を流しているかの様な仮面紋（スティグマ）が奔り、頭には角の生えた兜のような仮面の名残を残し、コート状の白い衣をキッチリと着こなした破面が藍染の座る玉座の横に立つ。
その緑の瞳はまるで何も写さない硝子球の様で、一切の表情が変わらないその破面からは、生命というものがまるで感じられなかった。
”人形”その表現がもっとも彼の今の在り様を形容するのに相応しい言葉であり、しかしその破面の放つ存在感は人形のそれとは言えず、この場にいる破面総てにその存在を刻み付けるのに充分足りるものだった。

「紹介しよう。彼が新たに君たちの同胞となった破面、『ウルキオラ・シファー』　だよ。　そして次の第４十刃だ。」

ウルキオラ・シファー、それがこの破面の名前だった。
藍染の紹介に、その隣で手を後ろで組んだまま佇むウルキオラ、た

った今表れたその彼が第４十刃に任命された、それがどれほどの出来事なのかウルキオラとフェルナンド以外の総てが理解していた。
十刃、それも上位の席に、いきなり現れた者が座る、本来その力を認められてこそ座れるその位置にいきなり現れた者が座る、その異常性。
それを理解しているからこそ、殆どの者が藍染のその行動を理解できないでいた。

「そうだね、君たちの疑問はもっともだ。ではどうだろう？　今から十刃を除いた者達と彼が戦って、彼に勝てた者がいればその勝者が第４十刃となる。破格の条件だろう？」

藍染の言葉に広間がどよめき立つ、たった一体の破面を殺すだけで上位十刃の席が転がり込んでくる、下位の破面からしてみれば確かには格の条件だった。
更に十刃の参加はなし、いいところを圧倒的な力を持つ十刃に奪われる事もない、本来ありえない絶好の機会、そうなればこの戦いに参加しないわけが無い。
そこかしこから我こそはと思う破面が歩み出る、広間は多くの破面で埋め尽くされた。

「では始めよう。いいね？　ウルキオラ。」

「ハイ、藍染様。」

藍染への返事と共にウルキオラが玉座のある位置から飛び降りる。
後ろで組んでいた手をコートのポケットに突っ込み、その白いコートの裾をはためかせながら静かに床へと着地するウルキオラ。

周りに居並ぶ自分よりも一回りから、大きいものでは二回りほどの体躯をした破面たちを一瞥し、眼を伏せて呟く。

「塵だな・・・・・・」

塵、その一言が合図だった。
居並ぶ多くの破面が一斉にウルキオラに向けて襲い掛かる。
自らの拳で、或いはその手に持つ刀でウルキオラを抹殺せんと襲い掛かる。
一対多、多勢に無勢、圧倒的な戦力差と物量作戦によって、ウルキオラの命を刈り取り、自らが十刃になろうとする彼らの目には己の欲望のみが浮かび、ウルキオラという破面を見てはいなかった。
見えているのは十刃となった自らの姿、戦いの中で自らの夢想に溺れる破面達。
ある意味で彼らは幸せだったといえるかもしれない、己の思い描く最高の瞬間を見ながらその命を自らも知らぬうちに鎖したのだから。

その一言は合図だった。
藍染が見下ろす広間一面に無数の赤い花が咲き誇る合図、圧倒的な戦力差で命を刈り取ったのはウルキオラの方だった。

ある者は首と胴が離れ、またある者は縦に、または横に一刀の元に両断されていた、ウルキオラが行った事は何も特別ではなかった、移動し、斬る。
たったそれだけの行為、ただそれが余りにも速過ぎた為、斬られた者は自らが斬られた事も、また死んだという事も認識する間も無く絶命したのだった。
そこかしこで赤い花が咲く中で、ウルキオラはその白いコートに一

滴の赤も付ける事無く広間に佇む。

「申し訳ありません藍染様。加減したのですが、この塵共は俺の想像以上の塵だった様です。」

何時抜刀したのか、その右手に持った刀を鞘へと戻しながら藍染へと謝罪するウルキオラ、加減して攻撃したがそれでも殺してしまったという彼に藍染は満足そうに微笑む。

「問題ないよウルキオラ。あの程度で殺される様では、彼らに元々十刃としての資格はなかった。それに君の言う塵の中にも力のある者はいただろう？」

「確かに・・・・・・」

そう言ったウルキオラが振り返る、赤い花が咲き誇る中でその一体だけが五体満足にその場に立っていた。
ウルキオラの攻撃を防いだの、その刀を左腕で支えるようにして身体の前に構え、肩で息をしている破面がそこにいた。

水浅葱色の髪、痩せ型ではあるが筋肉質の体つきでその腹部には孔が開き、前を肌蹴させた短めの白いジャケットのような衣を纏い、右の頬に右顎を象った仮面の名残をつけたその破面。
野生、そんな言葉を連想させる雰囲気を持つその破面はウルキオラの一撃を耐え、その命を永らえた。
好戦的なその目付きは、肉食動物のそれと酷似し、その眼光は未だウルキオラをしっかりと捉え、睨みつけていた。

「君は確か・・・破面Ｎｏ．１２（アランカル・ドセ）　グリムジョー・ジャガージャックだったね？　どうだい、生き残ったのは君だけのようだがまだ続けるかい？」

未だウルキオラを睨みつけるグリムジョーに藍染は声をかける。
今やこの勝負、いや、藍染からしてみれば喜劇としか言いようが無いその舞台に立っているのは、グリムジョーただ一人。
続けるにしろ、ここで終わりにするにしろ、藍染にとってはどちらでもいいのだ。
数瞬の後グリムジョーはその刀を納め、ウルキオラと藍染に背を向け広間を出て行く、藍染、そしてウルキオラには見えない彼の顔には、弱い自分を呪う呪詛と、いつか這い上がりその喉笛を噛み千切ってやるという貪欲なまでの野望が入り混じっていた。

「では、これで正式にウルキオラが第４十刃だ、異論は無いね。」

藍染の言葉に広場の破面は沈黙をもって答える。
それを受け取った藍染は、いつも道理の笑みを浮かべる。
ウルキオラの力を認めさせるのと同時に、増えすぎた破面をこの機会に処理する、それが藍染の狙いでもあった。
既に十刃はほぼ完成形の破面といえる段階へと至っている、それならばそれ以外の実験体は処分してしまおうと藍染は考えていた。
そしてそれは計画道理に実行され、藍染は利だけをてにした。
だがその藍染の予想外の出来事も起こった、ウルキオラの攻撃からたった一体だけ生き残った破面、グリムジョー・ジャガージャック。
下位の破面の中にもまだ力を持ったものはいる、藍染にとっては興味深い出来事だった。
全てを掌握できるだけの力を持った自身、しかしそれでもこの世の

総てを知り、統べるには未だ至らない事が、藍染には面白くて仕方が無い事だった。

沈黙の中一陣の光が奔る。
それはウルキオラへと一直線に向かい、彼へと当たる直前に彼の腕によって叩き落された。
床へと突き刺さったそれは、高密度の炎の塊だった。
ウルキオラはそれが飛来した方向を見る、それは先ほど第3十刃となったハリベルの隣、ゆらゆらと燃える炎の塊から撃ち出されたものの様だった。

「アンタ強いな、　そのうち俺の相手もしてくれよ。」

そう語る炎の塊を、ウルキオラはその硝子の瞳で映し出す。
無言で炎を睨むウルキオラと、ウルキオラの力を見て猛るフェルナンド、そしてその様子を見た藍染は、その笑みを一層深めるのだった。

形無きモノ
其は炎
形あるモノ
其は炎
無から有への転生

受肉

あげる叫びは歓喜のそれか

BLEACH El fuego no se apaga. 8（後書き）

そして全ては藍染の掌の上。

「では皆、今日はこれでにしよう。ハリベル達以外は解散してくれ。」

藍染のその言葉で、玉座の間に集まっていた破面達は散り散りに解散する。
次第にその場にいる者の数は減り、そして閑散とする広間にはハリベルとフェルナンドを残すのみとなった。
それを確認すると藍染は玉座から立ち上がり、「ついて来たまえ」
といって玉座の後ろの通路に消えていった。

「行くぞ、フェルナンド。」

そう言ってフェルナンドに声を掛けたハリベルは、一息に玉座のある位置まで跳び上がる。
そのハリベルの言葉に面倒臭そうに「あいよ」とだけ答え、フェルナンドもそれに続きゆらゆらと舞い上がった。
玉座の後ろに続くその通路は一直線に長く続いていた。
何の装飾も無く、ただ点々と照明があるだけの薄暗いその通路をある程度進むと、フェルナンド達の前に開けた空間が現れた。
床は黒、そして四方を囲む壁と天井は白、広いその空間の中心に藍

染が一人、フェルナンド達の方を向いて佇んでいた。

「良く来たね二人とも、では早速フェルナンドの破面化を始めようか。」

その場で軽く両手を広げる藍染、眼鏡の奥の暗い瞳、そしてその顔にはまるで張り付いているかのような笑みがあった。

『フェルナンド・アルディエンデ』

大虚としての位階は不明、しかしその力は大虚でありながら偵察任務中の出来損ないの破面を圧倒する。

性格は非常に好戦的、しかしただ己の力を振り回すだけの粗野な戦い方ではなく、自らの意思で力を制御し、最善の勝利の形に持っていく高い頭脳を有している。

特筆すべきはその炎、身体を構成する霊子の総てが炎に変化しており、故に肉体と呼べるものは存在しない、物質として存在しているのはその仮面のみで、その他の総ては炎の塊である。

その炎は形状、密度、温度などを自在に変化させる事が可能、霊圧を用いる事でその変化の精度は上がり、霊圧と混ざり合った彼の炎は、離れてもある程度の操作は可能である。

炎を収束させる事により、その威力は上昇する、完全に収束すれば帰刃(レスレクシオン)前ではあるが上位十刃に多少のダメージを負わせることが可能である。

現在はその有する霊圧、炎の大半は失われており、本人曰く全開状態の半分以下とのこと、その状態で最下位の破面を瞬時に焼き尽くす程の力を有している。

これが藍染がハリベルから聞いた報告の内容だった。
藍染の眼を引いたのはやはりその身体の構成、肉体というものが存在せず、その総てが霊子の段階から炎に変わっている。
今まで多くの大虚を見てきたが、フェルナンドのような大虚は思い当たらなかった。
故に今回の破面化は未知の部分が多く、それ故に藍染にとっては有意義な実験となる。
失敗したところでそのデータは手元に残り、成功すれば新たな破面が一体その配下に加わる。
基本的に藍染惣右介という死神は常に利を手にするように立ち回る、自らはリスクを犯さず、他を動かし、誘導し、欺き、そしてその結果として生まれたものの上澄みのみをその手中に収める。
彼にとってこれは実験でありそして遊戯、普通ではつまらない、何か未知の目新しい事象は起こらないものか、それが藍染の笑みの奥に潜む感情だった。

「なぁ、　あ～っと藍染だっけ？　一つ聴きてぇ事があるんだが、そもそも破面ってのはなんなんだ？」

手を広げ笑みを浮かべる藍染にフェルナンドは当然とも言える疑問をぶつける。
そもそもフェルナンドは破面というものについてほぼ何も知らないのだ、知っている事といえば破面は大虚が変化したものだということ位であった。

「フェルナンド、藍染様を呼び捨てにするとは不敬だぞ。」

藍染を呼び捨てにしたことで、フェルナンドの隣にいるハリベルがそれを嗜める。
それが気に入らないのか、フェルナンドはハリベルに食って掛かる。

「あぁん？　じゃぁアンタは初めて会ったヤツをサマを付けて呼ぶのかよ。　俺は良く知りもしねぇヤツをそんな風には呼べないね。」

「藍染様は我ら破面の主だ、そのお方に敬称をつけるのは当然だろう。」

「そもそも俺はコイツに仕える為にココに来たんじゃねぇ。アンタを殺す力をくれるって言うからココに来てんだ。」

言い争う二人、多少置いていかれている藍染が二人をなだめる。

「いいんだよハリベル、その程度の事は。　そうだね、フェルナンドにはまず破面というものがなんなのかを知ってもらう事にしよう。」

そういうと藍染は中指で自らの眼鏡を少し上げ、フェルナンドに問いかける。

「フェルナンド、君が知っている破面というものは、大虚から昇華した存在という事は理解しているね？」

その問いに炎に浮かぶフェルナンドの仮面が縦に揺れる、それは肯定を意味しているのだろう。
それを受け藍染は更に話を進める。

「ではフェルナンド、君は死神のことは知っているかい？　私のように黒い着物『死覇装（しはくしょう）』を着ている人型の魂魄が死神だ。」

「あぁ、何度か現世にも尸魂界にも行ったからな。大して強くもなかったがな。」

そう答えるフェルナンドに藍染は「そうだろうね」と貼り付けた笑みではなく、本当に可笑しそうに笑う。
フェルナンドの感想が余りに彼の中で、的確に死神というものを捉えていたのだろう。
藍染にとっても、またフェルナンドにとっても死神というものは、力なく取るに足らない存在であるという事が。

「その死神には基本的な戦い方として斬術・白打・歩法・鬼道の四つがある。俗に言う『斬拳走鬼（ざんけんそうき）』　そしてそのどれもが鍛えた分だけ強くなる訳ではないんだ。それぞれ限界強度があり、極めれば何時かは死神の魂魄の強度の壁にぶつかる、それが即ちその死神の限界という事になる。」

「で、その死神の限界の話がどうやって破面に繋がんだよ。」

「まぁそう慌てないでくれ、限界というものはなんにでも存在する。それは君にも、ハリベルにも、――無論僕にもだ、だが死神がそれを越える方法があるんだよ・・・・・・　それが『死神の虚化』だ、

死神と虚、相反する存在である二つは、しかしその魂魄だけを見れば実に似通っているんだ。死神としての限界を超え、虚に近付く事でその魂魄はより高みへと昇る事ができるのさ。」

死神の虚化、互いが互いを滅ぼさんとし、そうあることが当然であると定められているかのような関係の両者が歩み寄るような行為、それは最早禁忌としか言いようが無い事象。
だが人は愚かにも禁忌と言う言葉に引かれる、誰かに強く止められれば止められるほどそれは魅力を増し、美しさを増し、そして妖しさを増す。
誰しもがその禁忌の魔力に耐えることはできず、何時かは手を伸ばしてしまう、結局は遅いか早いかの違いなのだ。

「だからそれが何だってんだよ。俺は虚だ、死神じゃねぇ、そんな話と破面が関係あるのかって聴いてんだよ。」

破面とは何かを問うフェルナンドに対し、藍染は死神とは何か、そしてその限界とその突破法を語る。
全く噛みあわない両者の会話、しかしその実藍染はフェルナンドの問いに既に答えていた。
死神と虚、その関係性、それこそが藍染がフェルナンドに伝えた事だったのだ。

「判らないかい？フェルナンド、君も知っていたじゃないか、破面は虚が昇華した存在だと。そして僕は先ほど言った筈だよ、死神には限界があり、それを突破する方法が虚化だと。そしてこうも言った、虚と死神、一見して相反する存在の両者は、しかし魂魄だけを見れば似通った存在であると。」

藍染が笑みを浮かべてフェルナンドへと語る。
そしてその笑みは語っていた、もう判っただろう？と、それこそが君の求めた答えだと、そして君がこれから手にする力の正体だと。
ゆらゆらと燃えるフェルナンド、一瞬の静寂の後、フェルナンドが口を開いた。

「なるほどねぇ・・・・・・破面ってぇのは死神の逆、虚がその魂魄の限界を破って力を得たって訳だ。『虚の死神化』それが破面て訳だな・・・」

「その通りだよフェルナンド、君の隣にいるハリベルも、そして広場にいたほぼ総ての破面も、僕の虚の死神化の技術を用いて破面化したんだ。破面とは虚が死神に近付き、人と同じ姿を得た者。虚の限界を超え、その力の核をそれぞれの斬魄刀に封じた者、力の増加量はそれぞれだが、弱くなる事はまずありえない。姿形が必ずしも人間のそれになるわけではないが、力のある者はたいていは人型だよ。」

破面というものについて藍染は語る。
死神がその限界を超えるために虚に近付くならば、その逆もまた然り、虚が死神の力を得て進化した存在こそが破面であると。
虚としての力の核を斬魄刀と呼ばれる刀に封じる事で、人の形になるという事。
そしてその力は往々にして破面化する前より爆発的に増大する事。

その説明を聞いたフェルナンドはしばしの間考えた。

破面が虚の死神化によって生まれた事はわかった。だがそれで本当に強くなるのか、フェルナンドは疑問だった。
フェルナンドが戦った死神は皆弱く、そんなものに近付けば自身も弱くなってしまうのではないかと思ったのだ。

「なぁ、本当に死神なんかに近付いて強くなれるのかよ？　そもそもその斬魄刀とやらに力を封じちまったら戦いづらくなるだろうが。」

「僕も不本意ながらその死神なのだけどね。　死神にもある程度は力を持った者もいる、今の君を殺す事が出来るものも少なくは無いだろう。近付くというよりも、死神の力を掌握するとでも考えていればいいよ。　それと斬魄刀の件だけど、力というのは常時解放していれば何時かは尽きてしまうものだ、虚の君たちは普段霊圧で力を抑えているけれど、それは余り効率の良い方法とはいえない。死神というのは刀の形に能力を封じる事で、霊圧の消費を抑え制御しやすくしているのさ。」

そういうと藍染は「見せた方が早いかな」と言い、自らの斬魄刀に手をかける。
そして、張り付いた笑みのまま引き抜いた斬魄刀を逆手に持ち、体の前で掲げる。

「これが僕の斬魄刀だ、破面達とは少し違うが良く見ておくといい、力の解放というのもがどういうものか。――砕けろ、『鏡花水月』」

藍染が自らの斬魄刀の名を呼ぶ、『鏡花水月』それと同時に藍染の刀から濃い霧が噴出し、部屋に充満する、そして足元には水が流れ

出し床一面を覆う水溜りのように広がった。
一瞬の内に変わった景色に驚愕するフェルナンド、隣にいたはずのハリベルすら見えない、しかし驚きはそれだけでは終わらなかった。彼の目に藍染の姿が映る、先ほどと変わらぬ位置に藍染は立っていた、そう立っていたのだ藍染が”二人”

「「どうだい？　フェルナンド、これが僕の斬魄刀『鏡花水月』の能力」」

「「辺りに立ち込める霧と流水が光を屈折、乱反射して虚像を作り出す」」

「「霊圧知覚すら狂わせる霧の中で、虚像と実像が入り乱れ相手を同士討ちさせる」」

「「これが僕の斬魄刀の能力だよ」」

二人の藍染が同時に自らの斬魄刀について語る。
同時に動く二つの口から、同じ声が重なるようにフェルナンドに語りかける。
そのどちらも同じ笑みを顔に貼り付け、どちらからも霊圧や気配は感じられる。
どちらが本物か全く見分けがつかない二人、そして両者が全く同じ動きでその手に持つ刀を鞘に収める。
すると辺りの霧も足元の水もその総てが一瞬で消え去り、元の空間に戻っていた。

「どうだい？　フェルナンド、今のが斬魄刀の解放、ひいては僕の力の核だ。こんなものを常日頃から解放しているわけにもいかなく

てね。君だって常にその炎を全開にしている訳ではないだろう？効率の良い制御の方法が能力の斬魄刀化と思えば悪くは無いのではないかな。」

自らの力、斬魄刀を解放してフェルナンドに説明する藍染。
フェルナンド自身死神に近づくという事に少し引っかかった程度の疑問だったため、これ以上追求しようとは思っていなかった。
彼が此処、虚夜宮に来たのはあくまで力を得るため、ハリベルを殺すという目的のため、今のままではそれは叶わず、かといってこのまま破面化して直ぐ戦いを挑んでもそれは叶わないだろう。
だが幸いにもこの虚夜宮には破面が溢れている、中にはハリベルと同等の者もいるだろう、破面としての力をつけ再びハリベルに挑む、それが今のフェルナンドの目的だった。
故に破面化というものが本当に信用足りえるか、力を手に出来るかが不安でもあったが考えてみれば隣にいるハリベルは破面だ、自分を破ったのが破面という存在であるならば、その力は疑うものではないとフェルナンドは結論付けた。
破面というものがどういう存在であるか、という点が判ったという事はフェルナンドにとって収穫であった、何も知らぬままに流されるのは彼の性分に合わなかったからだ。
フェルナンドは破面化することを藍染に告げる、元から破面化しないという選択肢など存在しないのだから。

「判った、じゃぁさっさと破面化とやらをやってくれ。」

「あぁ、いいとも、　では破面化の術式を開始するよ。なに、時間は掛からないさ、次に目覚めるときは君もハリベルたちの同胞だ。」

藍染が片手を挙げる、するとフェルナンドを囲むように紫電を纏った細く黒い柱が床から飛び出す。
それに囲まれたフェルナンドを次は、白い正五面体の結界が包み込む。
フェルナンドを包み中空に浮かぶ結界の中は見えない、柱の中の結界はゆっくりと回転し、柱の放つ光を反射している。

「藍染様、これは・・・」

今まで見た事が無い破面化の術式にハリベルは藍染に戸惑いの声をかける。
藍染はその声を聴き、「あぁ」と笑いながら一言呟くとそれを説明する。

「これは初めて使う術式でね、本来破面化というのは簡単に言ってしまえば大虚の肉体を、虚のそれから死神に近い存在へと組み替える様なものなのだけれど、フェルナンドにはその肉体がない、だからそれを再度構成しなければいけないのさ。破面化の技術自体は既にほぼ確立しているから、それほど危険というわけではないよ。」

そう説明する藍染の瞳には明らかに好奇の感情が浮かんでいた。
何事も無く終わっても良い、何か起こってくれても良い、むしろ何か起こってくれ。
新たに手にした玩具を試すかのような藍染、彼にとって命とはすべからく弄ぶために存在するのだろう。
そう、きっと自らの命すらも。

フェルナンドが五面体の結界に包まれて数刻が経った。
依然結界はゆっくりと回転し、柱には紫電が纏わり付く様にしている。
静寂に包まれる部屋の中には、ときより紫電から発せられる乾いた破裂音だけが響いていた。

「そろそろ仕上げだ・・・・・・」

藍染の言葉と共に状況は変化した。
ゆっくりと回転していた結界は徐々にその回転を早める。
柱に纏わり付いていた紫電は一斉に結界へと向かい、紫電は結界へと衝突する。
衝突によって生まれたエネルギーが風を巻き起こし、部屋の中を駆け巡る。
その風の中心で結界は更に回転をまし、その回転の残像によって結界は球を描く。

「さぁ、生誕の時だよ、フェルナンド・アルディエンデ。」

回転する球体、そしてそれに降り注ぐ紫電の雨、そしてその衝突に耐え切れず、遂に球の結界は罅割れ、崩壊した。

そしてその中から現れたのは人。
浮かぶようにして存在した結界が壊れ、そこから放り出されるようにして現れた人。
意識が無いのだろうか、力の入っていない手足を放り出す様にした

まま床へと落下していく、数瞬の後その人は床へと激突するだろう。
それを飛び出したハリベルが間一髪で受け止め、床への激突は回避された。

ハリベルに抱き抱えられる様にしている人、意識を失い眠っているかのようだった。
ハリベルと同じ黄金色の髪、眉も睫毛も黄金、短めのその髪は逆立ち後ろへと流れていた。
その体は線が細く痩せ型で、筋肉も余り付いていないその身体は見た目以上に軽く、力を入れれば容易く壊れてしまいそうだ。
顔には左の眉から、コメカミの辺りを通って左目の下を沿うように存在する仮面の名残、それは彼が破面であるということを証明するものだった。
顔立ちはなかなか端正で、その額の中心には紅い菱形の仮面紋が残っていた。

「これはまた・・・・面白いことになったね・・・」

ハリベルの腕の中で眠るその”少年”を見て、藍染は今日一番の笑みを浮かべるのだった。

手に入れたのは巨大な力、過去が霞む戦う力
それを振るうは幼き童子、紅い力の鬼童子

立ちはだかるは金の女神、高きに座る金の女神
振るう力の行く先は・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 9（後書き）

『主人公破面化する』の回でした。
中身は大人、姿は子供って感じですかねｗ
破面化の術式、その風景については完全に妄想の産物です。
体の造りが普通じゃないから包帯グルグル巻にはできないし
そもそも包帯巻いたら燃えちゃうしｗ

そして密やかに催眠は完了されるｗ

感想お待ちしてます。

破面の頂点に君臨する十体の破面　「十刃（エスパーダ）」
彼らには様々な特権が与えられている。
Ｎｏ．１１以下の破面に命令を下し支配する権限、その中から「従属官（フラシオン）」　と呼ばれる直属の部下選ぶ権限、そして虚夜宮の天蓋の下にはそれぞれに宮殿が与えられる。

余りにも巨大すぎる構造物である虚夜宮、その中にはこれもまた巨大な構造物がいくつも存在し、虚夜宮の天蓋には、不可思議にも虚圏の明けぬ夜空とは真逆の澄んだ青空が広がっている。
その青空の元、それぞれの十刃は与えられた宮殿でその日々を過ごす、その力に磨きをかける者、ただ何もせず時間が過ぎるのを待つ者、自らの興味の対象を探求する者、十体の十刃の十通りの過ごし方が其処にある。

その中の一つ、『第３宮（トレス・パラシオ）』その名が示すとおり、第３十刃を主とする宮殿である。
そしてその宮殿は前主を失い、新たなる主を迎えていた。
今その宮殿の広間に二つの人影が存在した。

「おいアンタ・・・・・コイツは何の冗談だ?」

「此処は第3宮と呼ばれる場所だ。私が第3十刃になったことで此方に移る事になった。」

「そんな事聴いてんじゃねぇんだよ・・・・・」

「では何故此処にお前を連れてきたかということか? 破面化の術式後、気絶していたお前の面倒を診る様にと藍染様からのご命令だったのだ。」

「誰がそんな説明しろっつったよ! 俺が聞きてぇのは! 何でこの俺が! こんな!人間の!ガキみたいな姿に! なってるかってことだァァ!!」

第3宮の中に、フェルナンドのある意味魂の叫びと呼べるものが木霊する。

彼にとってみればそれは当然の叫びだったといえよう、破面化の術式から目覚めた彼は、何故かその姿を人間の少年のそれへと変えられていた。

鏡を見たフェルナンドは愕然とした、ハリベルと同じ襟や袖口を黒く縁取られた白い装束、黄金の髪と眉、左目の周りに残る仮面、額の中心には小さな菱形の模様、そして鏡の中からこちらを見る己の炎と同じ紅い瞳。

そこまではよかった、しかし明らかに幼さを残すその顔、身体は細く、余計な肉どころか力強さを全く感じさせない細い腕と脚、目線も低くハリベルを見上げる自分、余りにも不条理、硝子細工で出来

たいとも簡単に壊れるであろうその鏡像。
その姿は彼の精神からは余りにも不釣合いで、幼く、脆い人間の脆弱さを象徴するような未完成なその身体は、力を求めるフェルナンドには、到底許容できるものではなかった。

「あぁ、そんな事か。藍染様はお前の破面化に伴って新たな術式を試したと仰っていた。それはお前の炎を肉体に再構成するというものだった様だ、だが、お前の肉体たる炎は大半が失われた状態だった。そのまま術式を行ったため、現存する炎だけを用いた肉体の再構成が行われ、そのような子供の姿となったということだ。」

フェルナンドの憤慨を他所に、ハリベルは淡々と現在のフェルナンドの状況を説明した。
藍染の試した術式、破面化に伴う肉体の再構成術式である。既存の破面の総ては肉体のある大虚から破面へと変化したものだ。
大虚としての肉体からそれぞれの持つ大虚としての能力の核、そして肉体的特長を抜き出し斬魄刀へと封じる、そしてそれ以外の肉体は霊力の消費を抑えるため往々にして収縮し、その大きさを人間サイズにまで落とす。
彼ら破面も元をたどっていけば人間であり、それ故に大虚としての力の核を取り出した肉体が最も安定するのはその力を得る前の姿、即ち人間の姿という事なのだ。
しかし、総ての破面が完全な人間の姿となるわけではなく、確実に人間型になるのは最上大虚のみ、残りの二階級は破面化しても完全な人間の姿になれるかどうかは判らず、能力の低い、そして知能の低い者程人ではなく、虚に近い姿となる。
何故上位階級の大虚の方が人型となりやすいのか、といった理由は未だ解明されてはおらず、霊力の過多や、それまでに捕食した虚の数などの仮説は立てられて入るがどれも信憑性に欠けるものであっ

た。

フェルナンドはその肉体そのものがすでに消失しており、その能力である炎とその身体は同一の存在となっている。
それ故に能力の核を抜き出した炎を肉体へと再構成するという工程が必要となった。
しかし、此処で問題が発生した、藍染の試した術式はその術式の開発者の意図を完璧に再現し、炎の再構成を行った。
今その術式にある全ての炎を肉体へと再構成する、それ自体はなんら問題のない事、しかしフェルナンドの炎はハリベルとの激闘によりその絶対量を半分以下にまで減らしていた。
術式は其処にある炎の全てを再構成する、其処にある炎を肉体へと再構成した、フェルナンドの半分にも満たない”減少した炎”を。
完全な状態とは言いがたいまま再構成された炎、少ないままの炎では当然何らかの問題が発生する。
そしてその術式が少ない炎から再構成される最も合理的な形を選定した、炎の量に見合った被験体のサイズ縮小である。
結果としてフェルナンドの見た目は人間の子供、１２～１４歳程の少年のそれへと変わっていた。
ある意味では減少した炎での破面化に於いても人型――子供ではあるが――になったフェルナンドの力の強さが伺える出来事ではあった。

「そんな事だと!?　ふざけんじゃねぇ!!　こんな姿まっぴらだ!　こんな生き恥曝させやがって、元に戻せ!こんな姿じゃ強くなった訳がねぇ!」

しかしフェルナンドは自らの現状を認めることが出来ない。

憤慨此処に極まり、怒髪天を衝く勢いでハリベルに捲くし立てるフェルナンド、それをやれやれといった風で眼を閉じ二、三回軽く頭を振っるハリベル、尚も騒ぎ続けるフェルナンドに遂にハリベルが実力行使に出る。

「いい加減落ち着けフェルナンド、まだ話の途中だぞ。」

「ぐおぉぉぉ～！　何しやがる！　放しやがれ！」

がっしりとフェルナンドの頭を鷲掴みにして力を込め、強引にフェルナンドを持ち上げるハリベル。
女性に少年が頭を掴まれ片腕で持ち上げられるという光景、現実ではまずありえない光景が展開されていた。
フェルナンドはそのハリベルの腕を何とかはずそうと頭を掴む腕を両手で掴み力を込めるが、そんな事でハリベルが手を放すはずもなく、そのままの体勢でハリベルは話を続けた。

「いいか、お前がその姿になったのは炎の総量が減少したまま破面化したからだ。故に炎が回復していけば、人間が成長するようにその体も成長するだろうというのが藍染様のお考えだ。貴重な体験だぞ？　我等は多少の力の増加はあってもその姿が成長するなどという事はない。既に完成された肉体を持っているからな、しかしお前は違う。我等と同じ存在でありながら成長する破面、それがどのような変化をもたらすか、藍染様はたいへん興味を示しておられたよ。」

淡々と事の経緯を説明するハリベルを他所に、頭を掴まれている手

を外そうともがくフェルナンド。
ジタバタと身体を動かすがその程度でハリベルが揺らぐはずも無く、その頭は一向に捉えられたままだった。
その必死の姿を見たハリベルは、その余りの必死さに「フッ」と小さく笑い声をもらす、そしてそれを聞いた瞬間フェルナンドの中で何かが切れた。

「放せって・・・・・・　言ってんだろうが！！　クソがァァアァァあアァァァ！！！」

咆哮と共にフェルナンドから霊圧が放出される。
ハリベルが漏らした笑い声を”嘲笑”と受け取ったフェルナンドから吹き上がる紅い麗圧。
その紅い霊圧は彼の怒りの感情と相まって激しく立ち上り、第3宮全体が揺れているかのように錯覚する程の圧力を備えていた。
フェルナンドを中心に外へ外へと広がる圧力、その霊圧にハリベルは驚きというよりは、むしろ感心していた。
半分以上の炎と霊圧を失い破面化したフェルナンド、その姿は子供であり、その見た目からハリベルも多少なりとも不安を覚えていた。

（霊圧と炎を失ったままでの破面化で力が落ちているのではないかと思ったが・・・・・どうやら杞憂だったようだな。感じる霊圧は大虚だった頃のものと比べて上昇している、これでまだ万全の状態でないとは・・・・・先が楽しみだな）

不安が杞憂だった事に安心するハリベル。
自分が傷を負ってまで連れて来た大虚が、この程度であるはずが無いという感情が今、目の前で放たれる霊圧によって証明されていた。

ハリベルの間近から吹き上がる霊圧、その勢いは凄まじいの一言に尽きるだろう。
それを形容するならばまさしく炎、フェルナンドというものを形容するにはそれ以外には無かった。
荒々しく燃え上がり、大地を焼き天を焦す、その炎は見るものを引き付け、しかし近付きすぎればそれは容赦なく総てを焼き尽くす。
その雄々しさこそハリベルがフェルナンドに見た戦士の姿、何者にも怯まず敵の事如くを打ち払う雄々しき戦士、今はまだその片鱗しか見えずともいつかそうなる、いや、自分がそうしてみせると思うハリベル。
ハリベル自身にもわからないその使命感が彼女の中には芽生えていた。

そう決意するハリベルに異変が起こる、正確には異変が起こったのは腕、フェルナンドの頭を鷲掴みにしている手に熱が奔る。
それは一気に広がり、それを感じたハリベルは瞬時にその手を離しフェルナンドから距離をとった。
そして今までフェルナンドを掴んでいた手を見てみれば、その手からは薄っすらとだが煙が上がっていた。
フェルナンドの霊圧と共に発生していた熱が、ハリベルの掌の鋼皮へと伝わり、その熱はハリベルが瞬時の判断でその手を放さなければ彼女の掌を黒く焦していたであろう程の熱量だった。

「ほぅ、霊圧が熱を持っているのか、それともその身体から発せられるものなのか・・・やはりお前は普通の破面とは違うようだな、フェルナンド。」

「黙れよティア・ハリベル・・・・・・この俺を見下して笑いやがって、もっと力を着けてからと思ったが止めだ。とりあえず一発殴らねぇと俺の気が治まらねぇ。」

ハリベルを睨むフェルナンド、腰を落とし状態を低くしたその姿はまるで人の姿をした肉食獣、そしてその少年の姿には余りにも似つかわしくないその眼、殺意を存分に含んだその眼で射抜かれているハリベルはそれを涼しげに受け止める。

「まったく・・・・・・ではやってみるがいい。同じ舞台に立った事で私とお前の差がはっきりと判るだろう、破面の戦いを教えてやる。」

「その澄ました顔ぶん殴ってやるよ！！」

言うやいなやフェルナンドが床を蹴ってハリベルへと飛び出す。左腕を前に突き出しながら右腕を振りかぶり、真正面からハリベルへと迫るフェルナンドの目には最早ハリベル以外映っていない。ただ真正面から突進するフェルナンド、渾身の力で握り締められた拳は、しかしハリベルの顔を捉える事は無く空を切り、上体を軽く反らしただけのハリベルにいとも簡単に避けられる。

ハリベルに攻撃を避けられたフェルナンドはそのまま床を磨る様にして着地し、返す刀で再びハリベルに迫るがそれもまた避けられる。ハリベルは身体を逸らして、またはフェルナンドの拳を払いその軌道を変えてその総てを避けた。

その場から一歩も動かないハリベルを中心にフェルナンドが何度も飛び掛るが、その拳は悉く避けられ空を打つ。

それでも怒りに任せ繰り出されるフェルナンドの拳、しかし何度目かの交錯でその拳は避けられるのではなく、ハリベルの片手で掴まれ受け止められる。

「歯を食い縛れよフェルナンド・・・・・・」

拳を掴まれた状態のフェルナンドにハリベルがそう呟く、拳を掴まれその状況から脱出しようとするフェルナンド、しかしハリベルがその隙を与えるはずも無く、次の瞬間にはハリベルの右の拳がフェルナンドの腹部に突き刺さっていた。

「ガハッ！」

フェルナンドの肺から無理矢理に空気が外へと押し出される。
身体の一部を固定されたまま受けた衝撃は逃げ場を無くし、総てがダメージとしてフェルナンドを襲う。

「我ら破面の皮膚は鋼皮（イエロ）と呼ばれ、霊圧によってその硬度は増し、それは一種の盾であり鎧となる。そしてその硬度を攻撃に使用するだけで大抵の敵は打ち払える。その威力は・・・・・今、身を持って知っただろう？」

掴んでいたフェルナンドの拳を離しながら語るハリベル。
フェルナンドはそのまま床に片膝を着き、片方の手を床につけもう片方の手で腹部を押さえる。
苦悶の表情を浮かべるフェルナンド。
フェルナンドは困惑していた、その腹部に広がる感覚、突き刺さった拳の衝撃とそこから広がるじわじわとした刺す様な感覚、長い間彼が忘れていた感覚。
炎の身体はいくら斬られても問題なく、たとえ消し飛ばされたとしてもどうという事はなかった。

しかし今、たった一撃の拳によってもたらされた感覚、久しく忘れていたその感覚、呼び起こされたその感覚は『痛み』だった。

「どうした、もう終わりか？　今まではあの炎の身体がお前から戦いの痛みを遠ざけていた。しかし今、肉体を持ったことでそれは再びお前の中に甦った。今までのような己の特性に頼った戦い方ではお前自身の身を滅ぼすぞ。」

『痛み』フェルナンドにとって久しく忘れていたその感覚、炎の身体はそれを感じることは無かった、しかしこれから破面として肉体を持って戦うということは、即ち痛みを持って戦うということ、今までのフェルナンドはそれが無いゆえ怒涛の攻撃が仕掛けられたとハリベルは言う。
そしてそれはフェルナンド自身の身をも滅ぼすと。

「上、等だ・・・　これが痛みだってんな・・・ら、これを感じるって事は、俺は、まだ死んでねぇって、事だろが・・・・・・ならそれも悪くねぇ、それに・・・・・・誰がこれぐらいで終わるかよ！！」

フェルナンドの腹部を押さえていた手に紅い霊圧が集中する。
それはみるみる収束し紅い宝玉を作り出してゆく。
至近距離からの虚閃、いかなハリベルとはいえこの距離から破面化したフェルナンドの虚閃を喰らえばダメージは避けられない。

しかしその虚閃が完成し、ハリベルへと向けてその光の奔流を解き放つ前に、フェルナンドの身体を衝撃が襲った。
その場から吹き飛ばされる様に一直線に壁へと向かい、そのまま壁

へと激突したフェルナンドは壁にめり込み、その衝撃で亀裂が奔った壁が崩れ落ちる。
未完成のまま炸裂した自分の虚閃と、ハリベルが放ったであろう攻撃の二乗の衝撃がフェルナンドを貫いた。
その壁へと歩み寄るハリベル。

「今の技は『虚弾（バラ）』と言う自身の霊圧を拳に集め、固め打ち出す技だ。威力はそれほどでもないが、その速度は虚閃の二十倍、発動に掛かる時間も少ない。怒りに任せて大きな力を振り回せば勝てる訳ではないのだよフェルナンド・・・・・と言ってももう聞こえてはいないか・・・」

フェルナンドに言葉をかけながら崩れた壁の瓦礫に歩み寄り、その瓦礫の中からフェルナンドを引きずり出すハリベル。
片腕を掴み上げられたフェルナンドは特に酷い外傷は無いものの、霊圧の炸裂と衝突によって完全に意識を失っており、首も手も足も力なくだらりと垂れ下げた状態だった。
破面化によってフェルナンドが手に入れた力は霊圧、能力ともに破面化以前のものより上昇していた。
だが、不完全な炎によって形成されてしまった不完全な肉体は、本来彼が万全の状態で得るそれよりも脆くなってしまっていた。
フェルナンドの虚閃と本気ではないにしろハリベルの放った虚弾、その霊圧の衝突には凄まじいものがあった。
ハリベル自身は威力が低いと言うが、それはあくまで彼女の基準であり、十刃以下の破面からすればそれは必殺の威力と言えた。
その虚弾と自身の虚閃の両方の霊圧が直撃したフェルナンド。
しかし以前のままの彼、炎というエネルギーの塊としての彼ならば耐えられた衝撃は肉体、それも不完全なものを手にしたためにその威力に耐え切る事ができなかったのだ。

「少々やりすぎたか・・・・早い段階で自分の現状を知らせておいたほうが良いと思ったのだが・・・この身体で虚閃を撃とうとするとは、無茶をする・・・」

フェルナンドの現状を藍染より知らせられていたハリベルは、フェルナンドにこの事を教えようと戦った。実際霊圧も炎も減衰してしまっているフェルナンドに本気でかかる心算はなかったが、フェルナンドが虚閃を発動しようとした事で虚弾で応戦し、結果意識を刈り取ってしまったのだった。

（先ほど感じた霊圧は確かに上昇していた・・・・・だが肉体の方がこれでは霊圧に肉体が耐えられないかもしれないな。この先どうなる事か・・・）

フェルナンドの現状を肌で感じ確認したハリベルはフェルナンドの今後を案じる。

破面化による霊圧の上昇に身体がついてこない、それは即ち全力での戦闘はできないという事、出来たとしてもそれは自らの体が自らの霊圧によって蝕まれるというリスクを背負った命がけの所業。

だがハリベルが案じているのはそのリスク自体ではなく、そのリスクを容易く実行してしまう彼の気性。

時に戦いの中でそのリスクを背負う事は必要だが、フェルナンドの場合それを容易く選んでしまい結果自身を死に至らしめてしまうだろう。

”生きている”という実感を得るには、死に際する必要があるというフェルナンドの考え方、その危うさをハリベルは危惧する。

必ずしも死に際する事だけが、戦いに生きる者の生を実感する術で

は無いというのに。

「それはあの大虚か・・・」

思案するハリベルに広間の入り口から彼女へと声をかける者がいた。虚ろな緑色の硝子の瞳、それに感情は無く、写る総てに何の関心も無いといったそれでハリベル、そしてフェルナンドを見据える破面、ウルキオラがそこに立っていた。

「貴様、確かウルキオラと言ったか・・・何のようだ。新参の貴様が私に用事などあるはずもない。」

「確かに俺はお前に用などない。しかし、藍染様からお前への言伝を預かっている。お前が拾ったその塵は、当分お前が面倒を診ろとの仰せだ。用件は以上だ。」

藍染の言伝を告げるとウルキオラは踵を返し、その場から立ち去ろうとする。

「待て、何故貴様はフェルナンドの事を気にかけた。」

フェルナンドを床へと下ろし、立ち去ろうとするウルキオラをハリベルは呼び止める。

この広間に入ってウルキオラが最初に反応したのはフェルナンドのことだった。
何がウルキオラの琴線に触れたのかは判らないが、彼は破面化したフェルナンドを見てそれは本当にあの炎の大虚かと確認したのだ。
それはウルキオラにとって、フェルナンドは何か特別な存在なのではないかとハリベルは考えていた。

「・・・・・俺に楯突いた塵が破面化した姿がそれかと確認しただけだ。だが破面化してもやはり塵は塵のままだった様だがな」

「塵か・・・確かに今のフェルナンドは貴様から見ればそうかもしれんな。」

「”今の”ではない、塵は”永遠に”塵のままだ」

フェルナンドを塵と罵るウルキオラ、いや彼にとって力無い存在は総て塵であり、それは有ろうが無かろうが全く問題にならない存在なのだろう。
今のフェルナンドはウルキオラにとってそういう存在、取るに足らない存在なのだ。
ハリベル自身今のフェルナンドでは、この目の前の破面に対抗する事ができない事は理解していた。
しかしハリベルのフェルナンドに対する評価はウルキオラのそれとは違っていた。

「確かに塵ならばな・・・だがフェルナンドは原石だ。今は無骨だがいずれ輝く、私がそうしてみせよう。」

”原石”今はまだ荒々しいその力と幼い身体は不釣合いで、どこか自らの死を望んでいるような気性は歪だが、それを乗り越えたとき必ず輝く原石。
ハリベルにはその確信が有った、戦いの中で初めて感じた恐怖に真っ向から立ち向かってみせる覚悟を見せたフェルナンド、それがどれだけ稀有な事か、逃げ出す事ができたものに立ち向かえる力、それは何よりも強く、何よりも尊いものなのだ。
それを持つフェルナンドは、いつかこの目の前の虚ろな瞳の破面にも届く力を秘めていると、ハリベルは確信していた。

「塵も石も変わらない、路傍に転がるそれなど、俺にとって価値が無いという点ではな・・・・・・言伝は確かに伝えた。」

それだけ言い残すとウルキオラは二度と振り返る事無く第3宮を後にした。
その後姿を見ながらハリベルが呟いた。

「コイツはいずれ貴様の視界に嫌でも入る事になるぞ、ウルキオラ。」

手に入れたのは破壊の力
己が身すら焼く破壊の力

慟哭する獣
踏み躙られた牙
研ぎ澄まされた爪は彼の者の喉を裂く

BLEACH El fuego no se apaga. 10（後書き）

ハリベルに容赦なくボコられる主人公・・・・・・
これも全ては彼の成長のためなのです。
ウルキオラも登場させてみましたがキャラ掴めてるか不安だ・・・・・
ウルキオラならこんなこと言いそうだなぁ～って感じの台詞回しですがどうでしょう？

主人公の容姿が厨ニだと気付いた作者より・・・・・・

「クソッ！！」

吐き捨てられた言葉と共に前へと蹴り出される脚、その脚が砂漠に乱立する巨大な円柱の一部を粉々に粉砕する。
虚夜宮の天蓋の下に広がる砂漠で、破面Ｎｏ．１２（アランカル・ドセ）グリムジョー・ジャガージャックはその湧き上がる怒の矛先を見出せず、その身の内に激しく荒ぶる感情を溜め込み続けていた。
彼のその怒りの理由は数週間前にあった一つの出来事、たった一体の破面に自分と同じ十刃以下の『数字持ち（ヌメロス）』が大量に殺されたのだ。

それもただ一方的に、そして圧倒的に。

その大量殺戮の引き金となったのは彼らの主、藍染惣右介によって出された一つの提案『この破面に勝てた者には第４十刃の席を与える』というものだった。
十刃以下の者達にとってそれはまさに破格の条件、グリムジョーに

とってもそれは同じであり自らの力で十刃の座を勝ち取る絶好の機会、彼がそれを目の前にしてそれに手を伸ばさないなどという事はありえなかった。

”力”、それこそがグリムジョーが信じる唯一にして無二のものであり、自らの力にも絶対の自信を持っていた。

広間の中央へと歩み出た破面はグリムジョー以外にも大量に居た、その総てが転がり込んできた好機を逃すまいという野心を剥き出しにし、藍染の横に立つその破面、ウルキオラを見ていた。

高い位置にある藍染の座る玉座から、音も無く広間の床へと降り立ったウルキオラは、その広場にいる破面達を一瞥すると一言呟いた。

「塵だな」と。

明らかにその場にいる者たちを見下したその言葉、激昂にたるその言葉、その一言で戦いは始まりそしてそれは直ぐに終わった。

否、其処に戦いと呼べるものは一瞬たりとも存在しなかった、ウルキオラの言葉を切欠に彼へと襲い掛かる破面達は攻撃に移る動作の最中、既に絶命していたのだから。

そんな刹那の惨殺劇をグリムジョーが生き残ったのは偶然だった。

ウルキオラの言葉に怒りを覚え、他の破面同様に彼に向かって襲いかかろうとした瞬間、グリムジョーは己の探査回路を何かが掠めるような感覚を覚えた。

その正体はウルキオラが放つ霊圧だったのだろう、その場を支配するように一帯総てを覆い尽くすような重苦しい霊圧ではなく、ただ薄く研ぎ澄まされた様なまるで針のようなそれ、それを感じたグリムジョーの頭が考えるよりも早く彼の身体が反応した。

正しく野生の勘とでも言えばいいのか、それは我武者羅に抜き放った刀を前に翳し霊圧を解放する、そして次の瞬間訪れる衝撃、何か

が見えたわけではなくただ前に出した刀は、グリムジョーの命を刈り取らんとしたウルキオラの刃を偶然にも防いだのだった。

それがグリムジョーには我慢ならなかった。
自らが本能的に察知した命の危機、そしてそれを回避しようと抜き放った刃は確かにグリムジョーの命を繋いだ。
しかし、自らの命を危機へと追いやったウルキオラの刃は、明らかに手加減されていたものだとグリムジョーは判ってしまったのだ。
ほんの一瞬の間に大量の破面を斬殺するだけの力を持ったウルキオラが、ただ我武者羅に突き出した刀にその攻撃を阻まれるはずは無い。

では何故グリムジョーが生き残っているのか、それはウルキオラが『相手を殺すつもりで』攻撃した訳ではないからだった。
ウルキオラはただ試しただけだったのだ、広間にいる破面達がどの程度の者なのかを、自らが振るった刀にどの程度対応できるかを見ただけ、無論避けねば命を刈り取る軌道で放たれた刀をどう避けるのか、それを見ただけなのだ。
結果としてその場にいたグリムジョー以外の数字持ち破面は皆絶命してしまった、唯の小手調べの一撃で。
そしてその小手調べの一撃に命の危機を感じ、唯必死に防ぐ事しかできなかった自身の”弱さ”にグリムジョーは怒っていた。
その怒りは渦を巻き、荒れ狂い、グリムジョーの身の内でのた打ち回り、今も彼を焦がし続けていた。

「いい加減に落ち着いたらどうだグリムジョー、そうして荒れたところで何も変わりはしない。」

「アァ？　ウルセェぞシャウロン、ぶち殺されたくなかったら黙ってろ・・・・・・」

グリムジョーのやや後ろ辺りに佇んでいた破面がグリムジョーを諌めようと声をかける。
左目を覆い、横長に伸びた兜のような仮面、面長で痩身の破面、シャウロンと呼ばれたその破面は手を後ろに回し腰の辺りで手を組んで、彼を睨みつけ、ドスの利いた低い声で凄むグリムジョーに更に言葉を続ける。

「そういう訳にもいかない。お前は我らの王なのだ、破面化する前の我らを従え、その身の内に我らの血肉を取り込んだお前が、こんな事で何時までも燻ってもらうわけにはいかｎグァッ！」

「黙ってろって言ったろうが・・・俺は今機嫌が悪い、ホントに殺すぞ・・・・・・」

荒ぶるグリムジョーを諌め様としたシャウロンの首を、グリムジョーの右手がめり込むほどの力を込めて締め上げ、その言葉を遮る。
もう少し力を込めれば如何に破面の体と言えど首は折られ、命は潰えるだろう。
燻っているなどということはグリムジョー自身わかっていた、現実として己が力より遥か高みに居る者が現れグリムジョーの信じてきた”力”というものをいとも簡単に打ち砕いていった。
敗北、それも今まで経験したことのない程圧倒的なそれをグリムジョーのプライドは許容しきれず、しかしどこかでそれを受け入れてしまっている自分が居るようで、その敗北を受け入れている自分がグリムジョーにとって何よりも恥ずべき存在であり、怒りの根源であった。

「ッ殺し・・・たければっ、殺すが、良い・・・・・・グッ、しかし、それで、その・・・怒りが、ッ収まらない、ことはッ、おまえ自身が・・・・・・一番わかって、いるだろう・・・・・・グハッ！」

「ッ！　ウルセェって言ってんだろうが！！クソが！」

首を締め上げられ今にも折られそうになって尚、シャウロンは言葉を止めず、その両目はしっかりとグリムジョーを捉えていた。
まるでなにか見透かされているようなその視線にグリムジョーはギリッと奥歯をかみ締める。
声を荒げ、グリムジョーは首を掴んでいたシャウロンを円柱へと投げつけた。
背中から円柱へと叩きつけられるシャウロン、円柱には蜘蛛の巣のように罅が入り、地面に倒れこむシャウロンに崩れたその破片がパラパラと降り注ぐ。

「ゴホッ！ゴホッ！ッハァ、ハァ・・・・・お前は、数字持ちなどで終わる器ではない。ゴホッ！我らの王としていずれ十刃となる存在だ、何時かはあのウルキオラすらも凌駕する・・・・・そうあって貰わなければ我らの王足りえない。」

よろよろと起き上がり、掴まれていた首を摩りながらシャウロンはグリムジョーにそう告げた。
シャウロンと、他に数体の破面は破面化する前からグリムジョーと行動を共にしていた。
大虚として最上級を目指していた彼らは同じく大虚のグリムジョーと出会い、その強さこそ自分達を牽引する王たる存在とし、彼に付

き従っていた。
しかし何時の頃かグリムジョー以外の大虚達は自らの限界を感じ、最上大虚へと至る事を諦めた。
それ故に、力を得ること叶わず、進化の道半ばで立ち止まってしまった自分達より遥かに強大な力を得た王が、こんなところで立ち止まってしまうのは我慢なら無かった。
それが今この場にいない他の者達の総意だとシャウロンは思っていた。

「チッ、ごちゃごちゃとウルセェヤツだ。・・・・・そうだ、俺こそが王だ！　いずれウルキオラの野郎には借りを返す、総てはそこからだ。」

そう、総ては其処からなのだ。敗北を感じたのならばその原因をなくせばいい、敗北を消すには勝利以外ありえない。
即ちウルキオラを打倒して地に這い蹲らせ、その頭蓋を踏み潰す、それ以外この屈辱と怒りを静める方法などありはしないと。
グリムジョーは思う、そのためには力がいる、更なる力が、圧倒的な力が、総てを超越する純粋な破壊の力がいると。
渦巻いていた怒りはその向かう先を見出し、グリムジョーの瞳には総てを破壊する狂気が宿っていた。

「それでこそ我等の王だ。この場にいないイールフォルトやエドラド達も喜ぶだろう。」

「あぁん？　何だよ、ヤツ等まだ回復して無ェのか。」

「あぁ、未だ全快には至っていない。この様な事・・・いったい何が目的なのか・・・・・・」

「そんなものは関係ねぇよ。襲ってくるなら返り討ちにして殺してやるだけだ。」

そう、この場にはシャウロン以外のグリムジョーに付き従う破面はいない。

その総て、いや、グリムジョーとシャウロン以外の数字持ちは、程度は違えど負傷し、その回復を図っていた。

その原因となったのは少し前から始まったある事件、数字の大きいものから順に何者かに襲われ、そのこと如くが打ち負かされ傷を負っていた。

独りになったところを狙われ一対一で勝負を挑まれる、唯それだけの出来事。

始めは破面同士の唯の小競り合いの延長かと思われたそれは、段々とその襲われる数字が小さくなるにつれ、噂として虚夜宮全体へとひろまって行った。

しかし、多くの者が襲われているのに誰一人としてその姿形を語ろうとしない、基本的に破面はプライドが高い、虚(ホロウ)より大虚(メノス)、大虚より破面(アランカル)となまじ強大な力を持っているが故にそれが破られるという事は、先のグリムジョーの例のようになかなかに許容しがたい事なのだ。

それ以前に誰が自分が負けたことを声高に語りたがるものか、それ故にこの襲撃犯の姿は未だ謎のままだった。

「残る数字持ちも私とお前のみ、用心に越した事はない、暫くは独りにならないことだ。」

「用心だ？　そんなモンは必要ねぇよ、俺に楯突くヤツは誰だろうと殺す。それに鬱憤を晴らすにはちょうどいい相手だ。」

いずれ自分達の前にも現れるであろう襲撃犯、それに対して警戒しておけと言うシャウロンの言葉に、グリムジョーは獰猛な笑みを浮かべて答えた。
グリムジョーの中に仲間がやられた敵討ち、などという考えは欠片も存在していない、今あるのは闘争を求める本能。
ウルキオラを超える更なる力を求めるグリムジョーにとって、その力を得るための手段とは闘争以外なかった。
相手を殺しその命を奪う、それこそが自らの優生を証明する手段であり自らの力を確認し、また高める唯一の手段だとグリムジョーは考えていた。
ならばこの犯人は丁度良いと、自分以下の総ての数字持ちを打ち倒すその力、その命を奪う事は己の中で確実な力となって戻ってくる。
グリムジョーの中に用心や警戒といったものは無かった、あるのはこの犯人が目の前に現れるのを心待ちにする感情、それだけが彼の内を占めていた。

早く来い、早く俺の目の前に、俺がその喉笛を噛み千切ってやる、と。

「あまり侮るなよグリムジョー、相手は手だれだ。足元を掬われかねんぞ。」

「俺がやられるとでも思ってるのかよ？　テメェは自分の心配だけしてやがれ、狙われてるのはテメェも同じだぜ。」

「・・・・・分かっている。私とてそう易々とやられはせん。」

互いに己が立場を確認する二人、残る数字持ちは自分達のみ、今までの犯人の傾向から独りの時を狙い番号の大きいものから襲う。
グリムジョーの番号は『１２』、シャウロンは『１１』、数字持ちの番号は単純に破面として生まれた順番で決まる、数字の小さい者ほど古く、大きい者ほど最近になって生まれたという事だ。
しかし小さい数字の者が死亡、或いは戦力にならない場合はその数字は剥奪され番号は繰り上がる。
よって従属官となり、数字持ちとしての上位にいる必要がなくなったなどの例外はあるが、数字が小さい者ほどその実力は高くなり、そう容易く倒すことはできなくなる。
この場合数字の上ではグリムジョーよりシャウロンの方が上になるが、実力から言えばそれは逆転する。
破面化の折、未知の事象にいきなり自分達の王を曝す事を良しとしなかったシャウロンが、その身をもって破面化の安全性を確認したため、グリムジョーよりも先に破面化したシャウロンの数字の方が小さいのだった。
数字の上では次に狙われるのはグリムジョー、しかし、この犯人が見ているのが数字ではなく別のものだとしたら、或いはその順序は反転する可能性を孕んでいた。
それを踏まえたうえでシャウロンも気を引き締めていた。
そんなほんの少し張り詰めたような空気の二人に突然声が降ってきた。

「よう、話は済んだかよ？　だったら今度は俺と遊んじゃぁくれねぇか？」

唐突にかけられた声に驚き、その声の主を確認すべく声のする方を

向くグリムジョーとシャウロン。
虚夜宮の天蓋に存在する紛い物の太陽を背にするように、その声の主は聳える円柱の上に片膝を立てて腰掛けていた。
逆光になり姿ははっきりとは確認できない、しかしこの距離までグリムジョーとシャウロンの探査回路を掻い潜って接近したその人影、二人は自然と身構えていた。

「テメェ・・・・・何者だ・・・」

「ハッ、随分と殺気だってるねぇ、言ったろ?ちょっと遊んじゃァくれねぇかって。コッチにもそれなりに事情ってもんがあってよ、さっさと終わらせてぇんだわ。　なぁ?破面Ｎｏ１１．（アランカル・ウンデシーモ）シャウロン・クーファン、破面Ｎｏ１２．（アランカル・ドセ）グリムジョー・ジャガージャック。」

視線に殺気を滲ませて睨むグリムジョー、人影はそれを鼻で笑うと『遊んでくれ』と言う。
二人の番号と名前を言い当てた上で、だ。

「貴方が数字持ちを襲って回っている犯人ですか?何故この様な事を、全く持って理解不能です。」

「別にアンタ達に理解してもらう必要は無ェんだよ。コッチの事情はアンタ達には関係無ェ、そもそも世界なんてそんなもんだろが、無関係で理解の外の出来事で世界は満ちてんだよ。」

「・・・襲撃犯ということは否定しないのですね。では私達も襲いに来たと考えていいのですね?」

殺気を滲ませて相手を睨み続けるグリムジョーに代わってシャウロンが話し始める。
数字持ちを襲う、恐らくはあの人影がその犯人なのだろう、現に襲撃犯かとシャウロンが尋ねたが肯定も否定もしなかった。
その行為にいったい何の意味があるのか、シャウロンには分からなかった。
自らの力の誇示か、何者かの差し金か、はたまた更なる別な理由か、それを尋ねたところで答えが返って来る筈もなく、その問は無関係と言う言葉で切り捨てられた。

「ハッ、確かに否定はしねぇな。今んところやったヤツ等は全部ハズレでねぇ、アンタ達二人の内どっちかがアタリじゃねぇとコッチとしては割に合わねぇんだよ。」

「ハズレ?それはどういう意味ですか?」

「弱かったって意味だよ。全くハナシにならねぇ、コッチだって好きでこんな面倒くせぇ事してる訳でもねぇのに、その上愉しむ事も出来やしねぇんじゃぁ時間の無駄だぜ全く。まぁいいや、そろそろ始めようじゃねぇか。ヨッと!」

戦ってきた全ての数字持ち達をハズレ、弱いと斬って捨てたその人影。
決して数字持ち達の全てが弱い訳ではない、十刃には遠く及ばないものの唯の破面がその総てを一人で倒せるほど弱くも無いのだ。
それをして尚この人影はそれを弱いと言う、そしてその言葉に嘘偽りはない、本当にこの人影が襲撃犯だとしたら数字持ち達はこの人影に総て敗北しているのだから。

いい加減話すのに飽きたのか、円柱の上から人影が飛び降りた。
高所から飛び降りたというのにその人影はふわりとしゃがむ様に着地し、足元の砂がほんの僅かに舞い上がる。
舞い上がった砂が光を反射し、その白い光の中に降り立った人影がゆっくりと立ち上がる。

グリムジョーとシャウロンの瞳は驚愕で見開いていた。
降り立った襲撃犯、短めの金色の髪、左目を縁取るようにして存在する仮面の名残、そして額の中心にある菱形の紅い仮面紋、比較的標準的な破面の白い死覇装の袖を上腕の中程で折り、黒い裏地が関節のあたりまで覗いている。
猛禽類を思わせる鋭く紅い瞳が二人を射抜き、その腰に斬魄刀は挿していないもののその外見だけを見れば破面であることは疑いようが無かった。
しかしその降り立った襲撃犯は明らかに幼く、大人とは到底言えず、少年と言う言葉がその姿を形容する一番正しい言葉に思えた。
その容姿は二人が想像していた襲撃犯のそれから大きく逸脱し、いっそ何かの冗談だと言われたほうがよほど納得がいく事態だった。

「・・・・・本当に貴方が襲撃犯なのですか？とてもそうは見えないようですが」

シャウロンはその姿を見た素直な観想を口にする。
いや、誰もがそう言うだろう。目の前の少年はその何倍もの体躯を持ち、何倍もの霊力を持つ破面を打ち倒したと言うのだ。
そんなシャウロンの言葉を聴いた襲撃犯の少年は心底落胆し、つまらなそうにその言葉に答えた。

「なんだ、結局アンタもその程度か・・・・・興醒めだ、アンタ

も今までの奴等と同じで見た目に惑わされる三流ってことか。まぁ仕方ねぇ事かもしれねぇな、こんな形じゃぁよ。悪かったな、さっさと終わらせて帰らせて貰うわ。」

少年の落胆振りに困惑しながらも身構えるシャウロン。
見た目で惑わされる三流、そう評価された事に多少の不快感を感じながら、尚もシャウロンの瞳には疑念が篭っていた。
シャウロンとて少年の見た目だけで襲撃犯かどうかを疑ったわけではない、その身のこなしは強者のそれであることは分かる。
しかし少年から感じる霊圧はそれほど大きくなく、所詮子供が霊圧を解放してもそれほど大きくなるとも思えず、斬魄刀すら携帯していない姿は戦いに身を置く者として考えられない浅慮、一対一の状況を作ったとして一度ならば勝利を掴めようが、多くの破面総てに勝てるとはとてもではないが考えにくかった。
本当にこの少年が襲撃犯なのか？　本当は犯人は別にいて、この少年は此方の油断を誘う罠ではないか、シャウロンの頭に多くの可能性が浮かんでは消えていく。

しかしシャウロンがそれ以上思考することは無かった。
彼が最後に見たものは、自分の想像を軽く超える霊圧を放ち、眼前へと迫った襲撃犯の少年の紅い拳だけだった。

「またハズレか・・・この姿で油断してたってのを差し引いてもいくらなんだって脆すぎんだろ。あの女ならこんな一撃軽く避けやが・・・・クソッ、思い出したくも無ぇ事思い出しちまったぜ。」

シャウロンを一撃の下に叩き伏せた少年、殴り飛ばされたシャウロンは砂漠の地面と平行に移動し、乱立する円柱の一本にその身体をめり込ませていた。
その打ち負かした相手の姿に不満を述べながら、一人自ら思い出したであろう不快な記憶に顔を歪め、足元の砂を軽く蹴る少年。

結局シャウロンは対応を間違えたのだ。
自らグリムジョーに対し侮りは足元を掬うと諭しておきながら、襲撃犯の姿を見て彼はどこかで侮ってしまった。
明らかに自分より小さく、脆いその姿、感じる霊圧も大きくない、自分が負ける要素がどこにある、と。
故に彼は目の前の少年から半ば意識を反らし、自らの思考に没頭してしまった、脅威足りえないモノから意識を逸らし、居もしない別の脅威の存在を自らの中に作り出してしまったのだ。
結果として彼は今その意識を闇へと落とし瓦礫の山へと埋められてしまった。
破面とは決してその姿形で力の優劣が決まる事などありえない、戦闘となれば尚の事、根拠の無い自信、自負を持ち込めば忽ちにその命は潰えるのだ。

「で、アンタはどうするよグリムジョー・ジャガージャック？一応”力”は見せたつもりなんだがな、というよりアンタがハズレの場合全滅だ、それだけは俺も避けた　ッツ！！」

思い出した不快な記憶と折り合いをつけた少年がもう一人の標的、グリムジョーに話しかけながら振り向く。
少年にとってシャウロンはハズレだった、いや、総ての数字持ちが彼にとってハズレだった。

だが最後に残った一人、グリムジョーだけは違うと少年は確信していた。
少年は見ていたのだ、あの硝子のような緑の瞳の破面によって創られた斬殺空間から、たった一人だけ生き延びたその破面の姿を。
故に少年は期待していた、此処で退いてしまう様な相手ではない事は分かっている、今までの戦いは総て消化試合のようなもの、ノルマをこなしただけの事、しかし、これから始まるのは唯一自分が望んだ事、それだけのために此処まで続けてきたのだと少年は再確認していた。
軽口を叩きながらもその胸は期待に踊る、早くしろと早鐘を打つ。
言葉と共にグリムジョーの居る方へと振り返る少年。

次の瞬間、鮮血が宙を舞った。

砂時計を返そう
流れは逆転し
現在から過去へ

地に伏す少年は
見据えた未来で
何を得るのか・・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 11（後書き）

時系列が曖昧な原作、それが更に曖昧な今作。
ウルキオラ登場から数週間後のお話でした。
グリムジョーは常に力に渇望しているイメージ。
シャウロンは敬語オサゲ。
この少年は・・・・・言うまでもないかｗ

ちなみに主人公の名前の付け方ですが、炎の馬の姿からイメージし、
炎の馬→赤い馬→赤い馬といったら赤い跳ね馬→スペイン→世界王者って感じでつけましたｗ

――時間は少し遡る

破面化の後、怒りに任せてハリベルへと挑み、結果軽々とあしらわれてしまったフェルナンド。
戦いの中で気絶し、意識を失うという愚を曝した彼は、その意識が戻るとすぐさま再びハリベルへと挑みかかった。
しかし、再び挑みかかったとてその実力差が埋まるはずもなく、それどころかダメージを負った身体はフェルナンドの意思に反し、思うとおりには動かず、まさに致命的ともいえる隙を何度もハリベルに曝してしまう。

そして結果は何度も繰り返される。
飛び掛り、返り討ちにあい、意識を失い、気が付けばまた飛び掛る、それを幾度繰り返しただろうか、いい加減その無意味な繰り返しに辟易したのか、それともフェルナンドを心配してなのかは判らないが、ハリベルがフェルナンドの攻撃を避けながら彼に話しかける。

「・・・もう止したらどうだフェルナンド、いい加減お前も分かっ

ただろう、己が”暴”を振り回したところで私には届かないと。それでは大虚だった頃のお前以下だぞ、頭を冷やせ。」

そう言いながらハリベルはフェルナンドの拳を払い、拳を払ったその手でそのままフェルナンドの手首を掴むとフェルナンドの攻撃の勢いを利用し、自らの力も上乗せしてフェルナンドを背中から床に叩きつけた。

止めとばかりに床が陥没するほどの威力で叩きつけられたフェルナンド、その身体は殴られ、蹴られ、壁に床にと叩きつけられ無数の傷が覆う、まさに満身創痍といった状態だった。

フェルナンドの頭側に立って彼を見下ろすハリベルの言葉はもっともなモノだった。

今のフェルナンドは唯我武者羅に、何も考えずハリベル目掛けて突進する事しかしない猪だった。

本来の彼は戦いを愉しみながらも、自らの勝利のための道筋を考え、それを実行する賢さを秘めていた。

しかし今の彼は怒りに支配されたように唯目の前のハリベルに飛び掛るだけ、そこに策と呼べるものは無くただ己の力を振り回しているだけの、言ってみれば子供の喧嘩、いや、それ以下の状態に見えた。

「・・・ウルセェよ、そんなもんアンタに言われなくても判ってんだ。だがな・・・一度始めちまったからにはそう簡単には退けねぇだろうが。終われねぇだろうが。・・・・・・そういうもんだろうがよ。」

「・・・不器用なヤツだ。退く事を学べ、と言っただろう・・・・・・まぁ、言っても無駄だとは思うがな」

フェルナンドの怒りはとうの昔に収まっていた。
そして今の自分がどう足掻こうが、目の前の女性に届かない事も判っていた。
では何故挑み続けたのか、怒りが冷めているというのに、ダメージを追った身体ではハリベルに敵わないと理解しているのに、何故挑み続けたのか。

それはケジメだった。
たとえ怒りに身を任せ、我を忘れての行動だとしても、自らが先に手を出して始めた戦いに勝てないからといって背を向けることを、フェルナンドは良しとしなかった。
頭では判っている、このまま続けたとて自らが勝利を掴む事は不可能であると、しかしこれは、これだけは”理”で割り切れるものではなく、フェルナンドのそれよりももっと奥の部分が割り切ってしまうことを拒否していた。

それはどんな事にも共通する理念、始めたからには終わらせなければいけない、そして迎えるその終わりは自分の都合の良い様に終わらせてはいけない、結果としてそうなるのではなく、結果を捻じ曲げるように自ら中断するなどという事は、それだけでそこに至る総ての過程を腐敗させ、無価値で醜悪なものへと変えてしまう。

そして、フェルナンドにとってそれは戦いに最も持ち込んではいけないものだった。
戦いとは”死”と隣り合わせ、それ故に”生”を実感できる場所、フェルナンドにとって戦いとはそういうものなのだ。
自ら仕掛けた戦いを自ら止めると言う事は、”死”から逃げる事、即ち”生”の実感を諦める事、故にそれはフェルナンドにとって”

死”なのだ。
戦いの最後は必ずどちらかが血を流し、どちらかが地に臥す。
それこそがフェルナンドの知る戦いであり、フェルナンドにとって勝てないからといって退くなどという事は許容できない事だった。

故にケジメ、実際ハリベルがフェルナンドを殺すと言う事は現時点でありえない。
ならばこの自らの愚かな行いにどうケジメをつけるか、結局戦うという事に背を向けられない、”死”に、そして”生”に背を向けられないフェルナンドがとった行動がこれだった。
意識を失うような状態まで戦い、実際意識を失って気が付けばまた戦って、そうして身体は悲鳴を上げ、やがて立つ事すら間々ならなくなり、それでも立ち上がりハリベルへと向かって拳を、脚を振りぬき、そして倒れて、遂には起き上がることすら出来ない状態になる。
戦いに敗れたものは”死”、それに準じた状態まで己を痛めつける、それがフェルナンドの結論だった。

いよいよ動けなくなったフェルナンドにハリベルが話しかける、不器用なフェルナンドを見て砂漠での死闘でも言った『退く事を学べ』と言う言葉を再び口にするハリベルは、しかしそんな言葉をフェルナンドが素直に聴くわけがないと理解していた、その白い衣で隠された口元にはきっと苦笑が浮かんでいる事だろう。
フェルナンドのその不器用さは決して嫌いではないと思うハリベル、そんなハリベルの言葉にフェルナンドは床に大の字になったままハリベルに答える。

「ハッ、判ってるじゃねぇか。それに俺も言ったろうが、俺はそんな大人じゃな・・・・・チッ、締まらねぇな。」

ハリベルの言葉を鼻で笑い、同じように砂漠で口にした台詞で返そうとするフェルナンドだが”大人”という言葉で自ら地雷を踏んだらしく、バツが悪そうに舌打ちをする。
そんなフェルナンドを見てハリベルはまた苦笑を浮かべる。

そんなやり取りの後、ハリベルは今まで以上に真剣な眼差しでフェルナンドを見つめる。

「フェルナンド・・・」

「あん？　何だよ、笑いたきゃ笑いやがれ、クソ面白くもねぇ・・・」

「そうではない・・・・・・　フェルナンド、この戦いはこれで終わりだ。だが、お前がこれから力を付け、それを存分に使いこなし、何れまた私を殺そうと挑んでくると言うのならば、その時は私の持てる総ての力で相手をしよう。その為に私の元で学んでみる気はないか？」

床からハリベルを見上げるフェルナンドの瞳が驚きで大きく開かれる。
それもそのはず、ハリベルは自らを殺すと宣言したフェルナンドを傍に置き、更にその彼に戦いを教え、鍛えようと言うのだ。
命を狙っていると公言する相手を鍛えるという理解しがたい行動、フェルナンドの驚きは当然の事だろう。
自分を見下ろすハリベルの瞳をフェルナンドはその鋭い瞳で射抜く。
フェルナンドが見上げるその瞳には、その言葉が冗談の類ではない

事を示す真摯さがあった。
決して自分が殺される筈がない等という侮りではない。
ともすれば自分が殺される、そういった可能性を充分に理解して尚の発言であると、純粋にフェルナンドを鍛え、強くしようという意思がその瞳からは伝わってきた。

絡む二人の視線、数秒か、それとも数分か、その状態のまま二人は見詰め合う。
そして最初に言葉を発したのはフェルナンドだった。

「・・・・・アンタやっぱり変わってるな。普通自分のことを殺すなんて言ったヤツは遠ざけるもんだろうが、それを近くに置いて更に鍛えようってンだがらよ・・・・・まぁ、近くに居たほうが俺としちゃぁ何かと都合が良い。イイぜ、その誘い、乗ってやるよ。」

フェルナンドはハリベルの提案を受けた。
それは確かにフェルナンドにとって都合が良い提案であったし、それ以上に自分に真正面から向けられた言葉を無視できるほど、彼が腐っていなかったという事だったのだろう。
何の打算もなく、策謀もなく、唯純粋に向けられた感情に背を向け逃げるような事は、フェルナンドにとって忌諱すべきものだった。

「そうか・・・では身体が治ったら早速始めよう。お前は破面化して本当に間もない、まずはその身体に慣れる事と、自分の能力を見極める事からはじめる。手始めに十刃以下の数字持ちを全員倒して来い。ただし殺すな、それが終わったら次の段階に入る。」

「アァ？　なんだよ、アンタより弱い奴等とやりあって意味なんか

あんのかよ？　アンタが俺の相手をすればそれで済む話だろうが。」

誘いを受けたフェルナンドに対し、ハリベルは早速一つの課題を出した。

『十刃以下の数字持ちを全員倒す事、ただし殺害は不可』その内容にフェルナンドは異を唱える。

今、目の前に現時点で虚夜宮第三位の実力を持つハリベルが居る、だが何故それより下の者、弱い者と戦わなければいけないのか、最もな疑問であろうそれをハリベルは斬って捨てる。

「今のままでは私も加減し損ねてお前を殺してしまいかねん。それにお前はその肉体での戦闘経験が少なすぎる。戦いの勝敗を決するのは霊圧の大きさでも、武器の強さでも、能力の優劣でもない。総ては経験だ、お前はまず己を知らなければならない、相手である私を知るのはそれができてから、と言う事だ。」

ハリベルのその言葉は、結局のところ今のフェルナンドではどう足掻こうとも自身に勝てないというものだった。

それは破面としての強さもさることながら、今のフェルナンドに圧倒的に足りていないものが在るということだと、それが経験だと語るハリベル。

破面化して間もないフェルナンド、更に今までの特性上、肉体を用いた戦闘の経験はほぼ皆無、それ故にまずはそれを知る事からはじめろとハリベルは言う。

己の有利は何か、そして不利は何か、霊力は、霊圧はどの程度なのか、現在の肉体の特性、耐久力、移動速度、膂力、自らの限界、使用できる力、それに伴うリスク、それを補う策、上げればそれに際限はなく、そのどれも今現在フェルナンドが知らない事だった。

己を知らずして勝利なし、故に数字持ちとの戦闘でそれを見極めろとハリベルは言っているのだ。

「チッ、こんなザマじゃァどんだけ吼えたところで無駄だな。やってやろうじゃねぇか数字持ち狩り、少しぐらいは愉しめそうな奴はいるんだろうな？えぇ？ハリベルよぉ」

「殆どが冷静な貴様なら楽に倒せる程度だ、解放されれば多少梃子摺るだろうがそれも経験だろう。あぁ、それと・・・・・・コイツはこの試練が終わるまで預かっておく。」

「あぁ？その刀がどうしたよ、そんなもん俺は知らねぇぞ。」

渋々、と言うより現状叩き伏せられ指一本動かせるような状態でないフェルナンドは、ハリベルの言葉を了承する。
それを聴いてハリベルは思い出したように壁際まで移動すると、そこに立て掛けてあった一振りの刀を持ちそれをフェルナンドの眼前へと突き出した。
白い鞘に納められたその刀、その鍔には炎のような模様が描かれ、柄の部分もまた炎のように紅い拵えだった。
見せられたその刀、全く見たこともないその刀、知らないはずのその刀、しかし何か惹きつけられる様な感覚をフェルナンドは覚えた。

「まったくお前は・・・藍染様の御説明を聞いていなかったのか？これはお前の斬魄刀だ、虚としての力の核を封じた刀、即ちお前の力の核だ。」

掲げた刀を説明するハリベルの表情に呆れが混じる。

フェルナンドが惹かれるような感覚を覚えるのは当然の事なのだ、何故ならそれは元々一つであったもの、己の内に存在していたもの、刀という物質へと変貌しようともそれは変わらない、己の一部であり総てだったものだったのだから。

「ケッ、そうかよ。まぁ精々丁重に扱えや、この俺の一部だ、ぞんざいに扱えば独りでにアンタに斬りかかるかもしれないぜ？」

己の刀、力の核だと告げられたフェルナンドは、特に気にした様子もなくそれを取り上げられることを受け入れた。
それに驚いたのはハリベルだ、フェルナンドのことである、真実を告げればきっと「返せ」と騒ぐだろうと予想していたが結果としては逆、あっさりとそれを受け入れてしまった。

「驚いたな、これはお前の物なのだぞ？　それを手元に置かなくていいのか？それもこれから数字持ち達の相手をしなければいけないというのに。」

「構わねぇさ、数字持ちとやらを倒せば済むだけの話だろうが、それに刀なんか必要ねぇさ。テメェの事を知るにはテメェの身体だけでやった方が良いだろうがよ。」

若干戸惑ったハリベルがフェルナンドに理由を聞いてみれば、フェルナンドはさも当然と言った表情で答える。
自らの身体を、己を知るのに今は武器は邪魔だと、己の肉体と言う面での性能を見るのに武器は必要ないと。
武器はその手に握っただけで、そして振るっただけで相手を傷つける、それは力であるし、戦いはより力があったほうが有利ではある。

しかしその安易な力に頼っては、何れ破滅を呼ぶ。
武器の強さを己の強さと勘違いし、増長し、己を磨く事を止めてしまう。
それでは意味がない、今フェルナンドがやるべき事は大きな力を得ることではなく、その大きな力を受け止める器を作ること。
そのためには己の肉体に付加する形での力の増加はまだ必要ではない、あくまで己の内にある物のみで事を成すべきだとフェルナンドは考えたのだ。

「お前がそう言うのならば構わん。それが数字持ち達に対する侮りでないことを祈ろう・・・それとフェルナンド、数字持ちの中でも奴だけは、破面Ｎｏ１２．グリムジョー・ジャガージャックだけには気をつけろ。あれは数字持ちの中でも別格だ。」

「グリムジョー？　・・・あぁ、あの広間で一体だけ生き残ったアイツか、そんなもん言われなくても判ってんよ。アイツは最後だ、愉しみは後に取っておかねぇと。なぁ、ハリベルよォ。」

ハリベルが唯一警戒しろと付け足した破面グリムジョー、広間でのあの殺戮の時までハリベルは彼の存在を知らなかった。
しかし、あの新たなＮｏ４．、ウルキオラの攻撃を必死ながらも受け止め、命を永らえたその実力はハリベルの中でも評価に値した。
あれは一介の数字持ちが対応できるレベルの攻撃ではなかった。
ハリベル達十刃から見てウルキオラが手を抜いているのは明らかだったが、それでもあの攻撃は速かった。
それを紛いなりにも防いだグリムジョー、十刃には未だ届かないまでも、その実力は他の数字持ち達からは抜きん出ていると言えるだろう。

それを聞いたフェルナンドは気を引き締めるどころか、愉しそうに笑う。
フェルナンドとてあの広間にいたのだ、ウルキオラの攻撃も、そして生き残ったグリムジョーのことも覚えているだろう。
それをして尚愉しみだと笑うフェルナンド、その幼いつくりの顔に全く持って似合わない猛禽類の様な鋭い瞳は、既に獲物を捕らえているのだろう。

「ククククッ、嗚呼、今から愉しみで仕方ねぇなぁ。」

自然と笑い声が漏れる、そして身の内で燃え上がる魂の猛りを、フェルナンドは確かに感じていた・・・・・・

狂喜する
襲い来る獣の爪
それをして尚狂喜する

狂気する
襲い来る熱風の渦
それをして尚狂気する

ちょっとしたおまけ

「・・・・・そういえば先ほどから随分と馴れ馴れしく私の名を呼んでいるなフェルナンド、仮にも私に師事するのだ、敬称ぐらい付けたらどうだ。」

「お断りだね。俺はアンタの下に付いたんじゃねぇ、立場はあくまで対等だ。それにアンタだって随分と前から俺の名を馴れ馴れしく呼んでんじゃねぇか。御相子だろうがよ、そんなにハリベルって呼ばれるのが嫌だってんなら『ティア』とでも呼んでやろうか?えぇ?」

「なッ!ティアだと!?誰がそんなことを言った!私は敬称を付けろと言ったのだ!」

「・・・・・何そんなに動揺してんだよ・・・ちょっとした冗談じゃねぇか。止めろよな、そんな反応されっとコッチまで気まずくなんだろうが」

「五月蝿い！お、お前が余計な事を言ったのが原因だろうが！・・・・
もういい！敬称は要らんし呼び捨てで構わん。ただし・・・・・・・
分かっているな？」

「オ、オゥ・・・そう睨むんじゃねぇよ。ッたく分かってんよハリベル、これでいいだろうが、全くおかしな奴だぜ。」

「ハァ、誰のせいだと思っているんだ、まったく・・・・・・・」

BLEACH El fuego no se apaga. 12（後書き）

グリムジョーとのバトルの前に巻き戻しですｗ
フェルナンドの矜持、そしてちょっとしたおまけの回でした。
原作では無口（というか喋る機会が少なかった）なハリベルですが
此処ではよく喋ります。
ハリベルのキャライメージが崩れた方、申し訳ない。

BLEACH El fuego no se apaga. 13（前書き）

2010. 11. 14業名を追加しました。

飛び散った鮮血は白い砂漠に紅い染みを残した。

シャウロンを降したフェルナンドは、最後に残った標的であるグリムジョーに振り返る。

結局のところハリベルの言ってよこした課題は、フェルナンドにとって思った以上に有意義なものだった。

確かに数字持ち、それも数の大きなものはフェルナンドにとって取るに足らないものだったが、しかし自らの身体を知る事や、昔の身体との感覚のズレ、戦い方の違いなどを知るには丁度いい相手だったとも言えた。

口では全員ハズレだったと言うフェルナンドだが、数字が小さくなるにつれ、中には多少の苦戦を強いられる者、解放されれば多少なりとも梃子摺る事もあった。

そしてその総ての経験が糧となり今フェルナンドの内にある、それを存分に振るえる相手も目の前にいる、待ち焦がれた再会とこれから始まる至高の時間にフェルナンドは歓喜していた。

「で、アンタはどうするよグリムジョー・ジャガージャック？一応力は見せたつもりなんだがな、というよりアンタがハズレの場合全滅だ、それだけは俺も避けた　ッ！！」

グリムジョーに話しかけながら振り向くフェルナンド。
半ばまで振り返り、視線だけを先にグリムジョーへと向けた彼の視界に入ったのは、まさに眼前まで迫ったグリムジョーの指先だった。
ほんの数瞬の後にはその指先はフェルナンドの眼球に達し、それを楽々と突き破り、恐らくそれでも止まらず頭蓋を貫き、そしてその中身をあたり一面へと撒き散らす事だろう。

考えるよりも早く身体は反応する。
正しく眼前に迫った危機に、フェルナンドは瞬時に頭をずらしてそれを回避しようとする。
しかし高速で繰り出されるその突きを完全に避けきる事はできず、グリムジョーのその貫き手によってザックリとそのコメカミ辺りを抉り取られてしまう、それでもこの奇襲を避けられる辺り、フェルナンドは己が身体を完全に掌握したという事だろう。

頭をずらして攻撃を避け、その場で軽く屈みながらグリムジョーを見上げるフェルナンド、グリムジョーの方も右腕を伸ばした状態でそれでもその貫き手を避けたフェルナンドを見失う事無く、しっかりとフェルナンドを見据えていた。
刹那の交錯、見上げるフェルナンドと見下ろすグリムジョー、絡み合う視線。
しかしそれも一瞬、フェルナンドは弾かれる様に後方へと飛ぶとグリムジョーと距離をとる。

「人が話してる最中だってぇのに攻撃か・・・随分とまぁ手癖が悪りぃんだな、グリムジョーさんよぉ。」

距離をとったグリムジョーを睨みつけながらも、口の端を少し上げ、皮肉を零すフェルナンド。
対するグリムジョーはそれに言葉を返すでもなく、多少腰を落とした低い体制を保ったまま濃厚な殺気を漂わせ無言でフェルナンドを睨みつけている。
皮肉げな笑みを浮かべたフェルナンドと唯無言で睨みつけるグリムジョー、それが両者の最初の邂逅であった。

グリムジョーが最初に件の襲撃者の姿を確認した時に抱いた感情は”怒り”だった。
何故なら襲撃犯を名乗るソレは明らかに子供の姿をしていた。
グリムジョーを前にして『遊んでくれ』と、暗に『自分と戦え』とそう発したその声はどこかまだ高い印象を与える音で、その顔の作りも未だ幼いという言葉が適当であった。

唯一違ったのは幼さとは無縁と思えるその瞳、鋭い刃物のようなその瞳、触れるもの総てを切裂き、その血を湛えたかのような紅い瞳。
そしてその瞳に浮かんでいたのは”喜色”だった。
それは命を刈り取る事を愉しむものではなく、ただ純粋に戦う事への喜びを滲ませていた。
戦いへの衝動、どちらが強いかという単純な解を得るためだけに拳

を、刀を、持てる力の総てをぶつけ合える事が楽しくて仕方がないという喜び、それがその紅い瞳に満ちていた。

グリムジョーはそれが気に入らない。
自分を前にして、自分という王を前にしてそれに楯突き、更には自分との戦いを愉しもうとするその瞳が気に入らない。
グリムジョーにとって自分こそは”狩る者”であり、相手は”狩られる者”なのだ、相手はただ悲鳴をあげ、肉を裂かれ臓腑を撒き散らし無残に屍を曝すだけ存在なのだ。

それが喜色を浮かべた瞳で自分を見ている、自分を格上ではなく明らかに対等としてみている。
それは許されない事、弱肉強食、自然の連鎖、摂理を捻じ曲げるかのごとき行為。
その瞳を向けられていること自体がグリムジョーの怒りを加速させる。
自分との戦いを愉しもう等というふざけた思考が許せない、愉しむなどと考えた事を後悔させてその息の根を止めてやる。
グリムジョーの頭の中をその考えが占めていった。

そう考えていたグリムジョーの目の前で、襲撃犯の霊圧が一瞬膨れ上がり、シャウロンが殴り飛ばされていた。
しかしグリムジョーにとってそんなことはどうでも良い事だった、身体は既に駆け出し、引き絞られた右腕は渾身の力と速度でもって、襲撃犯の頭を貫かんと打ち出されていた。
必殺のタイミングで打ち放った貫き手は、寸前で避けられ相手の命を奪うまでには至らなかった。
しかし全く当たらなかったという訳ではなく、襲撃犯に傷を残していた。

右手の先から赤い雫がポタポタと流れ落ちる、それは実感、相手の命を傷つけたという殺意の証明。
息の根を止めるには至らなかった、しかしこれで良いともグリムジョーは思っていた。
自分との戦いを愉しもうとしたその考えを折り、四肢の総てを千切って切り刻み、許しを請うその口を踏み潰し、心臓を引き摺り出して眼前で握り潰す様を見せ付ける、絶命するその瞬間まで後悔させるのだ、グリムジョー・ジャガージャックという存在を舐めた事を。

（ブッ殺してやる、クソガキィ！！）

渦巻く感情のまま、グリムジョーは怒りを湛えたその瞳で襲撃犯を睨み続けていた・・・

――

一瞬の交錯はそのまま静かに戦いの火蓋を切って落とした。
方やそのコメカミ辺りから血を流しながらも、どこか愉しげにその顔に笑みを貼り付けるフェルナンド。
方や体制を低くし、獲物を狙う肉食獣の如き雰囲気を漂わせ、その獲物たるフェルナンドを睨み続けるグリムジョー。
静かな睨み合い、二人の戦いは静かな立ち上がりを見せていた。

「ハッ、ダンマリかよ。まぁいいさ、コッチも別に御喋りに来た訳じゃぁねぇ。俺はフェルナンド、フェルナンド・アルディエンデだ、

つい最近破面化したばっかりでねぇ。よろしく頼むぜ？先輩。」

「ッ・・・・・・・・・・・・・」

辺りをグリムーの猛烈な殺気が包み込んでいるその中で、その殺気を一身に受け止めているであろうフェルナンドは、それを意に介さぬ様な素振りでグリムジョーに自らの名を名乗った。
グリムジョーはそんなフェルナンドの言葉にもやはり何一つ言葉を返さなかったが、フェルナンドに叩きつけられる殺気は先程よりも更に強いものになっていた。

フェルナンドは両の拳を軽く握り目線よりも少し低い位置で構える、そしてその口元に浮かぶ笑みが皮肉を込めたそれから変わる。
全身に叩きつけられる殺気、それを受けてフェルナンドの身体の内から湧き上がるものがあった、それは純粋な歓喜。
強い者と戦えるという事、命を削りあうような戦いができるという事、その末に得られる実感、それ以上のものなどフェルナンドの中には在りはしなかった。
フェルナンドの口角が上がる、ニィっと白い歯が覗く口元と、相手を射抜く瞳が作る笑顔は何とも凶悪なものだった。

拳を構えたフェルナンドと、両手を開いたまま少し腰を落とし、腕を下ろしたままのグリムジョー。
次の瞬間睨みあう両者から霊圧が吹き上がり、両者の足元の砂が爆ぜる。
一瞬の内に互いに手の届く領域の中まで移動した両者、最初に動いたのはグリムジョーだった。
手を開き、まるで爪を立てる様に力を込めたそれを、フェルナンドの首を横凪にするように振り抜く。

フェルナンドはそれをしっかりと確認して紙一重で避けると、更にグリムジョーの懐に大きく左足を一歩踏み込みその腹部を目掛けて右の拳を打ち込もうとする。
フェルナンドとグリムジョーの身長差では頭部を狙うことは難しい、シャウロンの時のように相手に油断があれば別だが今のグリムジョーにそれは無い、故に的としても大きい腹部を狙うフェルナンド。
充分な体勢で打ち出されたそれは、或いは先程シャウロンを一撃の下に沈めたそれと同等か、それ以上の威力を有していた。
しかしグリムジョーはその拳を左の掌で受け止めると、がっしりとその拳を掴みそのまま腕一本で力任せにフェルナンドの身体を頭上へと持ち上げ、そのまま一気に振り下ろした。

拳を掴まれたまま今まさに地面へと叩き付けられようとしているフェルナンド、地面と言っても砂地であるため例え叩き付けられようとも重大なダメージを負う事は無いだろう、だが態々叩きつけられてやる必要は無いと、自分の拳を掴んでいるグリムジョーへもう一方の拳を叩き込む。

「オラ！」

狙いは”手”さらに正確に言えばフェルナンドの拳を掴んでいる”指”、其処へ強烈な一撃を叩き込んだ。
掌全体から腕でなら受け止められる衝撃も、たった一本の指で受けきれるはずも無くグリムジョーはほんの少し顔を歪め、拳を掴んでいた手を離した。
拳から解放され、フェルナンドの叩き付けられる筈だった身体は宙へと抛り出された、そのまま宙で一回転しながら砂漠へと着地するフェルナンド、片手を着きながら地面を擦り、砂煙を立てながら着地したフェルナンドはグリムジョーを確認しようと顔を上げる。

すると強烈な爆発音と共にグリムジョーの足元の砂漠にクレーターが出現した、それはグリムジョーが砂漠をその足で踏みつけた衝撃で誕生したものだった。
グリムジョーが踏みつけた場所に出来たそのクレーター、そこは本当ならば叩きつけられたフェルナンドの頭部があったであろう場所だった。
もしフェルナンドがあのまま拳を掴まれ、その状態から脱出できなかったとしたら今頃彼の頭は砂漠を穿ったその力を受け、グリムジョーの足の下で無残に弾けていた事だろう。

「・・・・・・・・・フン。」

少し顎を上げてフェルナンドを見下ろすようにしたグリムジョーが、嘲笑うかのようにフェルナンドを見て鼻で笑う。
グリムジョーが態々砂漠を踏みつけたのは、一種の意思表示だった。
お前など一撃で殺せるのだという事、お前はそうやって必死に逃げなければ直ぐに殺されるという事、大地に臥しているお前とそれを見下ろす自身、それこそが本来のあるべき姿であり、覆る事のない事実であると。
しかし、そんなグリムジョーの姿を見ながらフェルナンドは己の昂りを感じていた。

（チッ、オレの事を見下して随分とまぁ嬉しそうだな。それにしても判っちゃいたがこれはなかなか・・・・・簡単にオレの拳を受け止めるかよ……だがまぁまだ始まったばっかりだ、愉しもうぜ？グリムジョーよぉ）

五秒にも満たない交錯は、完全にグリムジョーに分があった。

フェルナンドはグリムジョーの最初の一撃を容易に避けたものの、返しの一撃を容易く受け止められ更にそのまま捕らえられてしまった。
そして拳を掴まれたまま片腕で掴み上げられ、その手を外す事が出来ていなければ勝負は既についていたかもしれなかった。

先の一瞬で、単純に肉体的な力という部分に関して、フェルナンドは現状グリムジョーに遠く及ばないという事が証明された。
だがそれも当然と言えるかもしれない、多くの数持ちを倒してきたフェルナンドではあるがその身体は少年そのもの、対してグリムジョーは細身ではあるがその身体にはしなやかな筋肉の鎧を纏わせている。
身長、体重、筋肉量、骨格、あまりにも違う二人の肉体、フェルナンドがグリムジョーに対して力負けしてしまうのはある意味道理とも言えた。

だが、だからといってフェルナンドが容易く勝ちを諦めるかといえば、否だ。
そもそもフェルナンド自身グリムジョーや他の破面等の成熟した身体と比べ、自分の身体に肉体的な力で有利な点が無い事は判っていた。
小さく、細く、凡そ成熟とは程遠いその身体は、どう足掻こうとも力負けしてしまう。
ではフェルナンドはどのようにして数多くの数字持ち達を打ち倒してきたのか？
肉体的な力が足りない、ならばどうするか。
答えは単純である、足りないのならばそれを補えばいいのだ。

依然、余裕の態度を崩さずに居るグリムジョーにフェルナンドが襲い掛かる。
その場から動かないグリムジョー、フェルナンドは真正面からグリムジョーへと突っ込みその拳を打ち出すが、それはグリムジョーの右腕に難無く阻まれる。
しかしフェルナンドの攻撃はそれだけで終わらない、拳の連打、それはまるで拳の弾幕、打つごとに回転を上げるかのようなその連打を、グリムジョーはその右腕一本で防ぎ続ける。

「チッ！」

舌打ちと共に今まで拳を受け続けていたグリムジョーが動いた。
力任せに右腕を薙ぎ、フェルナンドの攻撃をはじき返すとそのままフェルナンド目掛けて前蹴りを放った。
その蹴りはフェルナンドの腹に見事に入り、フェルナンドの体はくの字に折れ曲がると、その蹴りの勢いのまま弾き飛ばされる。
しかし見事に蹴り飛ばされた筈のフェルナンドは、にもかかわらずふわりと砂漠に着地した。

（蹴りの感触が軽い、あのガキ・・・俺の蹴りが当たる寸前に自分で後ろに飛びやがった。小細工だけは上等らしいな……）

グリムジョーはその蹴りの感触から、フェルナンドに然したるダメージが無い事は判っていた。
あまりにも軽い感触、本来ならば骨の二本や三本ならば折れても可笑しくない威力だったそれの感触とは、あまりにかけ離れていた。

故に相手が戦闘を続行するのになんら支障が無い事も分かっていた。

「オイ、クソガキ。　それがテメェの全力か？随分デカイ口叩いた割には情けねぇな。地べたに這い蹲ってみっともなく謝るなら今のうちだぜ？」

嘲笑うかのようにフェルナンドを挑発するグリムジョー、実際此処までグリムジョーにとってフェルナンドは脅威にはなりえていない。

発する霊圧こそそれなりのものだが、あくまで”それなり”である し、未だグリムジョー自身に目立った外傷は皆無であった。

それゆえの余裕、身のこなしこそ目を見張るものがあるがそれだけ、故に余裕、グリムジョーの口元が愉悦の笑みで歪に歪む。

「ハッ、まぁそう焦んじゃねぇよグリムジョー。どうにも俺は寝てたみたいだ・・・・・アンタのお陰で漸く目が醒めた、こっからはちょっとばかり本気で行く、ぜ！」

そんなグリムジョーの挑発を鼻で笑い飛ばし、フェルナンドはしゃべり終わると同時に再びグリムジョーへと突っ込む。

またしても正面から挑みかかるフェルナンド、それはあまりにも愚直、あくまでも正面から打倒する事のみを目的としているかのようなその行動は、大虚だった頃の彼からしてみれば考えられないものだったろう。

正面から斬りかかろうと後ろから突き刺そうと結果は同じ、卑怯だと罵られようが勝利した方が正しいというフェルナンドの根本的な考えは恐らく変わってはいない。

だがハリベルとの真正面からのぶつかり合いが、フェルナンドに小

さな変化をもたらしていた。
取るに足らない相手ならばそれでもいいだろう、しかし己の目的、”生の実感”というものを得られるような戦いに、フェルナンドは後ろから突き刺すような戦い方を選ばなくなった。
己の目的に真摯に向き合った時、それにたどり着くための手段は恐らくはそれではないとフェルナンドの奥底の部分が感じたのだろう。
故にフェルナンドは真正面からグリムジョーへと挑む。

再びその拳でグリムジョーを攻撃するフェルナンドだが、今までと同じように右腕がそれを阻む。
しかし今回はそのまま拳の連打が始まるのではなかった。

拳を防いだグリムジョーの左膝が曲る、それはフェルナンドの左足の蹴りが内股側からグリムジョーの膝の裏を突き刺し、無理矢理に膝を曲げた為であった。
突然の出来事に驚くグリムジョーを他所にフェルナンドの攻撃は止まらない。
左膝を打ち抜いた蹴りは戻る事無くそのまま弧を描くように跳ね上がり、体勢を崩したグリムジョーの顔を目掛けて襲い掛かる。
フェルナンドの踵がグリムジョーに迫る、太刀の一撃にも似たその回し蹴りをからくも避けるグリムジョー、しかしフェルナンドはまだ止まらなかった。
フェルナンドは振り抜いた左足の勢いを利用し、更に身体を支えていた右足を踏み切ると体幹を軸に独楽の様にぐるりと体を回転させる。
踏み切りと回転の勢いを利用し、一撃目の蹴りより更に威力を増した右の足刀が再びグリムジョーに迫る。

（もう一発、だと！？）

体勢を崩されたところを更に無理に蹴りを避けたグリムジョーは、最早そのフェルナンドの右足を避ける事はできなかった。
吸い込まれるようにフェルナンドの右足がグリムジョーの顔に直撃する、衝撃が脳を揺らす、しかしそれを耐えたグリムジョーは怯まずに返す刀、その右の拳がフェルナンドを襲う。

（チッ！　『旋（ヴォルティス）』の入りが浅いか！）

直後、襲うグリムジョーの拳を両腕を十字に交差させ、その一撃を受け止め吹き飛ばされたフェルナンドが砂漠に着地する。
しかしそこでフェルナンドを不運が襲った。
着地と同時に砂に足を取られ、体勢を崩すどころか後ろに倒れ込みそうになってしまったのだ。

「ッ！！」

倒れそうになる身体を咄嗟に右手で支えるフェルナンド。
これを見たグリムジョーはそれを好機と捉え、フェルナンドとの間合いを一気に詰め覆いかぶさるように上体を屈め、右腕を振り上げた。
そこには今、正に振り下ろさんとされる手刀、それが自分を舐めた罪に対する断罪の刃だと言わんばかりの殺意を込めて放たれる時を待つ。

「死ね！　クソガキィ！！」

或いはそれは当然の行動ではあった。
戦いの最中に体勢を崩し倒れこむという本来ありえない出来事、その致命的な隙を見逃さずに己の好機として活かし、戦いを決する。
本来ならばそれは正しい行動だった。
しかし今この場でそれは正しい行動とは言いがたかった、眼を曇らせたのはその殺意かそれとも傲慢なまでの自尊心か、目先の勝利、愚かなる者へ死を与える瞬間を前にして、グリムジョーはそれに酔ってしまったのだ。

それが罠であると疑いもせずに。

「ハァァア！！！」

裂帛の気合と共にフェルナンドが仕掛ける。
倒れたと”見せかけて”大地に着いた右手を支えにし、片腕で逆立ちをする要領で下半身を持ち上げ、その勢いのまま自分の射程圏内に入ってきたグリムジョー目掛けて、下から右足で蹴りを繰り出したのだ。
それを自らの失態を装う事で再び自分の射程圏内へと再び収めたその頭部へと奔しる、作戦は成功しその蹴りはグリムジョーの頭部へと再び吸い込まれるように迫る。

（何、だと！！？）

驚愕の表情で迫り来るそれを見るグリムジョー、彼からしてみればそれは予期せぬ反撃だった。
相手は体勢を崩し最早死に体、それに自分が止めを刺すというまさにその瞬間に自分の下から蹴りが伸びて来ようとだれが思おうか、攻撃の態勢に入っているグリムジョーはその蹴りを大きく避けることができない、故に首だけを動かし何とかそれを避けようとする。

「ウォォオオオ！」

グリムジョーから零れる叫び、常の彼からは想像も出来ない必死さを感じさせるそれは、自らが負けることを認められないが故のものだったのだろうか。
そしてその必死さは実る。

フェルナンドの間隙の一撃はグリムジョーの頬を掠めるのみに留まり未だグリムジョーは健在であった。

「フン、惜しかったなクソガキ、だが、これで終いだぁぁ！！！」

相手の一撃が不発に終わり最早その体勢からの反撃などありはしないと、グリムジョーは勝ち誇ったような笑みを浮かべてフェルナンドを見下ろし、その手刀を振り下ろそうとする。

「　――『裏（アトゥラス）』――　」

何事かフェルナンドが呟く、しかしグリムジョーにそれは届かない、完殺の瞬間を前に他に気を裂く理由など無いのだ。
しかし、その瞬間グリムジョーは自分の頬を一陣の風が撫でたような気がした。
野生の勘、とでも言えばいいのか、グリムジョーは自らのそれに従い攻撃を止め全力でその場から飛び退く。
直後に聞こえたのは轟音、見ればフェルナンドの右足の踵が砂漠に突き刺さりその周りに先程自分が作ったようなクレーターが出来ていた。

（一度吹き抜けた蹴りが戻ってくる、だと！？）

瞳を大きく開き、驚愕の表情を浮かべるグリムジョー。
そう、それ以外に今グリムジョーの目に映る光景を説明する方法は無かった。
フェルナンドは最初に打ち上げた蹴りが避けられると、支えにしていた右腕に力を込め蹴りの勢いを止め、さらに体の重心を後方に抜くことで飛び出した蹴りを再び呼び戻したのだ。

先程の回転蹴りと今回、傍から見れば同じ変則的な二連続蹴り、しかしその威力は違ってくる。
グリムジョーにとって、先程の回転蹴りは予想外だったとはいえその目で捉え、来る事が分かっていた。
来る事が分かっているという事は、それに対して対応できるという事だ、避けるなり耐えるなりの選択が出来る、グリムジョーの場合耐えるという選択が出来、結果反撃に出る事ができた。

では今回の蹴りはどうか、同じ二連続の蹴りではあるが、後頭部を狙ったその二撃目をグリムジョーは捉えていなかった。
来ると分かっていないのだから避けるという選択は無く、さらに耐えるという選択も無い、それは攻撃に対しそれを全くの無防備状態で受けるということ、それはあまりに無謀な行為。
今回はその”野生”によって救われたが、もしあのまま戻ってきた二撃目を喰らっていたのなら、一瞬ではあるがグリムジョーの意識は飛んでいたかもしれない。

「ハッ！　『弧月（クレシエンテ）』の、それもその『裏』まで避ける・・・かよ。・・・・・ククッははははははは！！！イイねぇ最高にイイ！今まで雑魚しか相手にしてねぇ分余計にイイぜ！あの女もそうだし、あのいけ好かねぇ緑目野郎もそうだ！此処には俺の望を叶えられそうなヤツがゴロゴロしていやがる！」

そんなグリムジョーを他所にフェルナンドは狂ったように嗤いだす。
純粋な喜び、攻撃を避けられたというのにそれが嬉しくてたまらないといった風のフェルナンド。

「さぁもっとだ！もっと！もっと！！アンタの力はそんなもんじゃないはずだ！魅せてくれよ！焦げ付くような魂の咆哮をよぉぉおお！！！」

叫ぶフェルナンド。
その表情は最早少年ではなく、ただ戦いに餓えた獣のそれだった・・・・・

砂漠に立つ二体の獣
知りたい事は唯一つ
どちらが強いか
唯それだけ

２０１０．１１．１４業名追加

BLEACH El fuego no se apaga. 13（後書き）

フェルナンドVSグリムジョー開始です。
子供と大人の喧嘩ですが、子供を侮ってはいけません。
思いもよらぬ反撃を受けますw

フェルナンドが使った技ですが、陸奥ですw
門も刻も大好きなんです。
キャラなし技のみではありますが、今後もちょくちょく出す予定です。

※上記に伴い小説情報を更新

BLEACH El fuego no se apaga. 14（前書き）

2010. 11. 14業名追加

「ハハハハハハハハハハハ！！！」

狂ったような笑い声が響く。

その声の主はフェルナンド、己が必殺のタイミングで放った技が避けられてしまったにも拘らず彼は笑う。

それは虚勢等ではなく、ただ単純に嬉しくて仕方がないといった笑い声だった。

フェルナンドは先の一撃を放った瞬間、完璧に”入った”と確信していた。

グリムジョーに対して放った蹴りは彼の視界から外れ、そして”戻る”蹴りはその意識からも外れた正に奇襲と言えるものだった、しかしグリムジョーはその完璧な奇襲を避けたのだ。

それはフェルナンドにとって想定外の出来事であったが、同時に喜

ぶべき出来事でもあった。

己の確信を覆す相手、それが目の前にいる。

それがフェルナンドは嬉しくてたまらなかった、ザックリと抉られたコメカミの痛みなどとうに感じなくなっていた。

想定道理の戦いなどつまらない、予定調和の戦いに意味など無い、戦いとは常に己の想像を裏切り続いていくもの、それを超えて相手を打ち倒してこそ戦いは真に意味を持ち、そうでなければ面白くないと。

「テメェ・・・・・さっきのアレは何だ、蹴りが戻って来るだと？ふざけやがって・・・・・・」

一人歓喜の高笑いを続けるフェルナンドに、グリムジョーは憎憎しげな視線をぶつけながら話し掛ける。

グリムジョーが先程の攻撃を避けられたのは、彼の無意識の産物だった。

ほんの一瞬感じた感覚、それに頭が反応する前に体が反応した、瞬時に自らの攻撃を中断するとその場から全力で飛び退いたのだ、結果としてグリムジョーはフェルナンドの攻撃を避ける事に成功した。

だが、グリムジョーにとってそれは信じられない事だった、自らが感じた感覚、その場から飛び退く事を即決させた感覚、それは間違いなく”恐怖”であったのだ、幼い容姿、そして愚かにも自分との戦いを愉しむと謳った一体の小さな破面に、一瞬とはいえ恐怖したのだ。

グリムジョーはその身に滾る怒りと同時に、フェルナンドという奇妙な破面を計りかねていた。

「ハッ、別にふざけてる心算は無ぇよ。コッチは不本意ながらもこんな形（なり）なもんでね、周りに比べてどうにも力は落ちる。まぁただ馬鹿みたいな殴り合いも嫌いじゃねぇんだが、非力な俺が手っ取り早く相手を殺るにはどうするか、と思って考えた結果ってぇ訳だ。お気に召したかよ、グリムジョー？」

グリムジョーの問にあっけなく答えるフェルナンド。
そう、少年の姿をしているフェルナンドにとって、戦闘の中で最も相手との差が生まれるのは純粋な”力”であった。
例外も居るが、大抵が成人した人間と同じような容姿をしている破面、その大抵の破面と少年の姿をしたフェルナンドではどうしてもその筋力量、骨格などから振るえる力に差が生まれる。
破面達の戦闘とは基本的には、己の霊圧と膂力に頼った力押しである。
力と力のぶつけ合い、人の姿をしていたとしても、大虚という”獣”であった時の方が圧倒的に長い彼らにとって戦闘とはそういうものなのだろう。
知性を持っていたとしても、長い年月で染み付いたその本能というべきものはそう簡単に消え去りはしない。

それはフェルナンドとて同じであった、ハリベルから言い渡された数字持ち（ヌメロス）を全員倒すという試練を始めた頃は、真正面からの力押しで楽に対応することができた。
しかし、数が小さくなるにつれ”差”が明確になっていった。
決してフェルナンドが弱い訳ではない、むしろ霊圧などはフェルナンドのほうが勝っているような相手に苦戦する事が多くなった。
それは単純な力負けだった、フェルナンドのゆうに3倍はありそう

な体躯の破面、その体躯に見合った猛烈な力を振り回すだけの相手にフェルナンドは苦戦したのだ。

フェルナンドにとってそれは屈辱だった。
明らかに格下の相手に苦戦を強いられる自身、それも総ては単純に力が弱いと言うだけの事でだ。
だがだからと言って不平不満を漏らすことをフェルナンドはしなかった、奥歯を噛締めその屈辱に耐え、考えたのだ。
”力が弱い”それを今すぐに変える事は出来ない、ならばどうするか、どうすればこの体で奴等を倒す事ができるのか、そう考えた末にフェルナンドがたどり着いた答えのうちのひとつが”研鑽”だった。

ただ力をぶつけるのではなく、どのように力をぶつけるか、相手の何処その力をぶつければ効果的なのか、それらを行うのに最も適した動きとはどんなものか、その動きは戦いの中のどの瞬間に起こすのが最適なのか。
数字持ち達との戦闘の中でフェルナンドは少しずつそれらを試し、吟味し、付け足し、または切り捨ててそれを創り上げていった。

いかに効率良く相手を壊すか、それだけを追求して。

そして産み出されたのが、攻撃を受けた瞬間その方向に自ら跳び衝撃を和らげる体捌き『浮身(フロタール)』であり、体を独楽の様に回転させた二連蹴り『旋(ヴォルティス)』であり、逆立ちで蹴り出し、そして一度飛び出した蹴りが戻って来る変則の二段蹴り『弧月(クレシエンテ)』といった『業』なのだ。
未だ完成には遠く、数もそう多くないその技こそがフェルナンドが研鑽の後に得た”力”だった。

「チッ、まぁいい・・・・・テメェがどんな攻め方をしようが関

係ない、俺がテメェを殺すっていう結果は変わらねぇ。強いのは俺だ！」

フェルナンドをしっかりと見据え、グリムジョーは宣言する。
フェルナンドの放つ技は確かに脅威ではある、自分の意識の外や、思いもしない場所から向かってくる攻撃はどうしても対応に遅れが出る。
だがグリムジョーにとってそれは二の次となっていた、身に滾る怒りのままに殺そうとした相手に感じた一瞬の恐怖、格下だと思っていた相手が急に自らと同等の位置にまで上がってきたような錯覚、それを振り払うように自分の方が強いとグリムジョーは宣言したのだ。

「あぁそうさ、それでイイぜグリムジョー。アンタは”ホンモノ”だ、あの女には『殺すな』と言われたがそんなものは関係ねぇ、そんな加減をして勝てるほどアンタは弱くない。本気のアンタを倒してこそ意味があるんだ、アンタを倒して俺は更に強くなる。」

「俺を倒す、だと？　相変わらず俺に勝てる気でいやがる・・・・・・その態度が！眼が！気に入らねぇんだヨォォ！！

グリムジョーの叫びと共にその霊圧が開放される、今までの比ではないその奔流、フェルナンドの肌を突き刺すような殺気と共に放たれるその霊圧の凄まじさは、グリムジョーが本気であるという事を如実にものがたっていた。

「ハッ、勝てる気かって？　そんなもんは当たり前だろうが！何処に始めから敗ける気で戦うヤツがいるよ！必勝の覚悟もなしに戦い

に挑む馬鹿野郎は、どんな世界でも真っ先に死んで逝くって決まってんだ！はじめようぜグリムジョー、こっからは、殺し合いだァァァァ！！」

霊圧を開放し、その身体から放つ圧力を何倍にも膨れ上がらせたグリムジョーにフェルナンドはまるで怯む様子など見せず、それどころか今で以上にその顔に笑みを刻み付けてグリムジョーに迫る。
そのフェルナンドに対し、グリムジョーは先程までの余裕の態度とはまるで違う、隙などまるで無い体勢でそれを正面から迎え撃った。

霊圧を更に開放したグリムジョーに対し、フェルナンドは先程のままの状態でそれに挑む。
普通に考えたのならばフェルナンドの攻撃は霊圧を増したグリムジョーに然したるダメージを与えることは出来ないだろう。
グリムジョーとてそれは分かっている、どう足掻こうと目の前の小さな破面の攻撃は自身に届くことなどありはしないと、しかしグリムジョーにその事実から来る侮りは無かった。
この目の前に迫る破面、フェルナンド・アルディエンデはそんな事実など軽々と乗り越えてくる、グリムジョーの第六感がそう強く感じていたのだ。

フェルナンドの拳がグリムジョーに迫る、大きく振り被るのではなく、小さな動きで突き刺すように鋭く放たれるその拳、しかしその拳は当然のようにグリムジョーによって防がれる。
しかしそれは始まりの一撃、針のように鋭く、速い拳が幾度もグリムジョーを襲い続ける。
決して一撃で相手を打倒するための拳ではないフェルナンドのそれ、

しかしこの一撃一撃の積み重ねがグリムジョーの精神を削り、ほんの少しの隙を生み、その隙を逃さず捉える事で相手を沈める。
フェルナンドが行っているのはそういう作業だった、燃え盛る己の感情の中にあって恐ろしく冷静な一部分が、相手を打倒する最も効率的な動きをフェルナンドに取らせていた。

「チッ！」

十数回にわたるフェルナンドの拳の連打によってグリムジョーの体勢が一瞬崩れる。
フェルナンドはその一瞬を見逃さず、大地を蹴り、体勢の崩れたグリムジョーの顔面へとその拳を走らせた。
電光の様なその拳、しかしフェルナンドの拳はグリムジョーの顔を捉える事は無く、頬を掠るのみに終わる。

その一瞬の交錯を逃さず、今度はグリムジョーが仕掛ける。
フェルナンドの拳を避けたグリムジョーはそのフェルナンドの拳の勢いに沿う様に顔を、そして体をその場で回転させ、振り向きざまにフェルナンドの頭部を薙ぐ様にその腕を伸ばす。
霊圧を纏い、五指を開き爪を突き立てるかのようなそのグリムジョーの一撃、本来のフェルナンドならばその攻撃の当たる瞬間自らその方向へと跳び、威力を半減させるだろう。

しかし今彼の身体は大地にその足を着けていない。
身長差のある相手への攻撃のためフェルナンドはどうしても跳び上がる必要があった、故にその体は中空にあり、そこに足場は無く結果としてグリムジョーの攻撃をモロにその身体に受けるほか無いのだ。

「クソッ！」

「ッ！！」

呟く言葉と共にフェルナンドの首筋の辺りにグリムジョーの一撃が叩き込まれる。
鈍い衝撃音と共にフェルナンドの身体が吹き飛ばされ、二回ほど砂漠を跳ねて止まった。
砂埃に隠れるフェルナンドの身体、それをグリムジョーは油断無く睨みつける。

「さっさと立てクソガキ、あれぐらいで死んでないのは分かってる。それともそうやって地に這い蹲ってるのが好きなのか？アァ？」

大地に臥すフェルナンドに、グリムジョーはまるで立ち上がるのが当たり前といった風に挑発する。

「・・・・・誰が、地に這い蹲るのが好きなもんか、よっと！」

そんなグリムジョーの言葉に軽口を叩きながら、フェルナンドが軽々と立ち上がる。
パンパンと服についた砂を軽く叩いて落としている姿は、先程の攻撃など全く効いていないようにも見えたが、しかしその口元には確かに血が滲んでいた。

「さっきの隙はワザと、かよ。　さっきの御返しの心算か？やってくれるねぇ、まったく。」

「フン、テメェこそ完全じゃないにしろあの状態でよくアレを防げたもんだ。キッチリ土産まで置いていきやがって・・・・・・」

そう言うグリムジョーの腹部には、フェルナンドが付けたであろう蹴りの痕が残されていた。

先程グリムジョーが見せた一瞬の隙、それはフェルナンドがしたのと同じように相手を誘い込む罠だった。
連撃を受ける中でグリムジョーは僅かに怯んだようにみせ、フェルナンドの攻撃を自身の頭部へと向けさせる、フェルナンドとグリムジョーの身長差では、どうしてもフェルナンドは跳び上がらなければその拳はグリムジョーの頭部にとどかない。
一度自らの攻撃を後方に跳ぶことで無力化されたグリムジョーは、ワザとフェルナンドを跳ばせ、足場の無い中空へと誘い出し仕留め様としたのだ
その思惑は見事的中し、グリムジョーの一撃はフェルナンドを捕らえることに成功した。

しかしフェルナンドも然る者、間一髪片腕をグリムジョーの攻撃と己の頭部の間へと捻じ込んでこれを防ぎ、大地という足場が無いのならば別の物を使うまでだといわんばかりに、最も近くにあるグリムジョーの”身体を”蹴る事でその身に受けるであろう彼の攻撃の威力を可能な限り削いだのだ。

そしてその蹴りはグリムジョーの腹部にその痕を残すほどの威力であった。
これは一つの事実を示す、『フェルナンドの攻撃は霊圧を増したグリムジョーにとどく』という事実、それは本来ならばあり得ない事、

それを可能としたフェルナンド、それは一重に彼の決意、”覚悟”の差と言えた。

元々フェルナンドの数字持ち狩りには一つだけルールと呼べるものがあった。
それは彼がハリベルから言い渡されたもの、『殺すな』というたった一つの縛り、フェルナンドはそれを律儀にも守っていた。
いや、守っていたというよりはそれに値する相手が居なかったというべきか、殺す価値が無い、自らの命を賭して打ち倒すべき相手ではない、数字持ちとはフェルナンドにとってその程度の相手だった。
故に”倒す”という選択、言い換えれば”殺さないようにする”という事、それはフェルナンドにとって”手加減して戦う”という事と同義だった。
もちろんあからさまに手を抜いていたわけではない、どちらかといえばそれは内面的な話、ほんの少しの気構えの違い、それだけだ。

だが今、フェルナンドの目の前にいる数字持ちは違う。
他の者とは明らかに隔絶した力を持つ数字持ち、そんな相手を前に”倒す”などという気構えで勝利を得られるほど、彼らの住む世界は優しくはない。

故に”殺す”

”倒す”心算で繰り出した技と、”殺す”つもりで繰り出した技、全く同じ技だとしてもそれは別物だ。
それは気構えの差、決意の差、覚悟の差なのだ、そしてその“差”は明確な威力の差として現れる。
そうして放たれたフェルナンドの攻撃は、グリムジョーの霊圧の鎧

を穿ち、そしてその身体に傷痕を残したのだった。

「フン、まぁテメェの蹴りがとどいた事は正直それ程驚く事じゃねぇ。この程度の蹴りたいして効いてもいない・・・・・だが何故霊圧を開放しねぇ、この上まだこの俺を舐めていやがるのか?」

霊圧の鎧を破られた事にグリムジョーはなんら動揺していなかった。それ以上に彼が気になったのはやはり霊圧を開放しないフェルナンドだった、纏った霊圧とその体術のみで自身の身体を傷つけたことは脅威ではあるが、霊圧を開放すればそれはもっと容易に行える筈であった。
だがフェルナンドはそうはしない、あくまで今の霊圧で戦い続けているのだ、或いは意識的にそうしているかのように。

「ハッ、別にアンタを舐めてるわけじゃねェよ。今の状態でもアンタに俺の攻撃はとどくんだ・・・それにアンタは相手に霊圧を開放しろと言われたら素直に従うのか?だが、それにしても最高に愉しいぜ、戦いはこうでなくっちゃな、このゾクゾクする感覚、この先だけに俺の求めるものがある。俺の力がこの程度かどうかは、アンタ自身で確かめな!」

「吹いたな・・・・・・この・・・クソガキがァァアアアア!!!」

叫ぶグリムジョーがフェルナンドへと向けて奔る。
倒れるのではないかというほど低い前傾姿勢、地を走る獣の如く疾走するグリムジョーが瞬く間にフェルナンドへと迫る。
対してフェルナンドはその場で構えたまま動かず、グリムジョーを

迎え撃つ。
その射程へとフェルナンドを捕らえたグリムジョーは、その速度を生かしたまま腕を振り被り、そのままフェルナンドを殴りつけた。
グリムジョーの鉄槌の如き一撃をフェルナンドは避けようとも、迎え撃とうともせずその腕を交差させて防ぐが、そのあまりの威力にそのまま後方へと吹き飛ばされる。
だがグリムジョーの攻撃はその一撃では終わらず、吹き飛ばされたフェルナンドにすぐさま追い付くと更に別の方向へと吹き飛ばした。

もう一撃、もう一撃と何度も防御の上から殴りつけられ、弾かれる様にその都度派手に吹き飛ばされるフェルナンド、実際にはグリムジョーの攻撃が当たる前に半ば自ら跳んでいるため、派手に吹き飛ばされてはいるが見た目ほどのダメージは無い。
だが完全にそれを殺しきれている訳ではなく、ダメージは蓄積し、何れはその防御も崩されてしまうだろう。

（チッ、さっきのグリムジョーのヤロウの一撃、何とか防ぎはしたが未だにダメージが抜けやしねぇ。コッチは不抜けた蹴り一発を返した程度、単純な力は向こうの方が上、か・・・・・イイねぇ、これが戦いってもんだ。　自分から死地に一歩踏み込まなけりゃ先が無ぇこの感覚、悪くないぜ。）

そう、フェルナンドは今、避わ”さず”に受けているのではなく、避わ”せず”に受けているのだ。

グリムジョーの頭を狙った先程の一撃を、フェルナンドは腕で防ぎ、相手を蹴る事で跳び、その衝撃を削る事には成功していた。
だが、フェルナンドの身体は元々耐久力が高いほうではない、その身体の頭部へと抜けた衝撃、防御に使用した片腕は未だ回復には至

っておらず、結果としてフェルナンドはただ防御を固めるしかなかった。
しかしこれは袋小路、耐久力の低い身体は防御にはむかず、ダメージは蓄積し続け、更に挽回の機会は失われていく。

そんな状況の中、フェルナンドは自分の口元が緩むのを押さえ切れなかった。
危機的状況に追い込まれているにも拘らず、それがフェルナンドには愉しくてたまらないのだ。
この命の危機を求めているかのように。

「ウオラぁぁァァアアアア！！」

そのフェルナンドに迫るグリムジョー。
迸るその霊圧と叫び、その一撃でフェルナンドを仕留めんとばかりに更に加速して迫る。
振り上げられた右腕が振り下ろされればフェルナンドとて無事ではすまないかもしれない。
それを見てフェルナンドは交差させていた腕を解き、何時も道理の構えへと戻した。

無謀とも取れるその行為、今まで防御を固めていたが故に耐えていられた攻撃も、それを解いてしまえば耐えられるわけが無い、更にフェルナンドの身体は未だ回復も不完全、そんな身体でいったい何が出来るというのか。

（防御を解いただと？　諦めでもしたか？・・・・・・いや、奴に限ってそれは無ぇ、何か仕掛けてくる気か・・・・・・フン、関係ねぇ！勝つのは俺だ！）

防御を解いたフェルナンドに一瞬困惑するグリムジョー、しかし次の瞬間にはその思考を捨てその右腕に込める力を、そして霊圧を更に強める。
何を仕掛けてくるかなど考えるだけ無駄であると、何をされても総て力で捻じ伏せてやると、勝つのは自分であると相手に、そして自身に証明するために。

「オオオォォォォォォ！！」

「ハァァァアアアア！！」

互いの気合がその叫びへと変わる。
迫り来るグリムジョー、待ち構えるフェルナンド、そして激突は瞬く間に訪れた。

二人の霊圧の衝突はほんの一瞬の閃光と鈍い激突音を生んだ。
そして閃光が晴れた後、二人は未だその足で虚圏の砂漠にに立っていた。
唯一つ、違う事があったとするならば、グリムジョーの鳩尾にフェルナンドの肘が深々と突き刺さっている事だけだった。

「ゴフッ！」

グリムジョーの口から血塊が吐き出される。
霊圧の守りと鋼皮の守り、その二つの守りを突き抜けてもたらされた衝撃、半ば意識が飛ぶほどのそれを受けて尚グリムジョーが立っ

ている理由は、最早意地だけだった。

衝突の瞬間、最大限に引き絞られたその右腕を解放し、フェルナンドをその拳で射殺さんとするグリムジョー。
その拳を迎撃するように、それに合わせてフェルナンドも左の拳で応戦する。
奔る二人の拳が互いの間でぶつかり合う、その力が拮抗したのはほんの一瞬だった、体格、膂力、纏う霊圧、その総てにおいて勝っているのはグリムジョー、そのグリムジョーの拳がこの競り合いに勝つのは自明の理であったろう。

当然のように撃ち負けるフェルナンド、しかしフェルナンドは渾身の力でもってグリムジョーの拳を上方に逸らす事に成功した。
受けることが出来ない拳を逸らした、今のフェルナンドの状態ならばそれでさえ充分だろう、普通に考えれば此処から仕切り直し、新たな活路を開く切欠を掴んだと言えるだろう。

だがフェルナンドにそんな思考は存在しない。

グリムジョーの拳を上方に逸らしたフェルナンドは、そのままガラ空きになったグリムジョーの胴体へと踏み込む。
そしてグリムジョーの拳を打ち上げた左腕を畳みながらひねり込み、突き出した肘を打ち上げる様にしてグリムジョーの胴体の中心、鳩尾へと叩き込んだのだ。
技としての威力と、グリムジョー自身の突進力を利用し、カウンターで入ったフェルナンドの肘打ちは、間違いなくグリムジョーの命を奪おうとする一撃に他ならなかった。

「くそが・・・・・・　クソがぁぁアアあああああああ！！！」

朦朧とする意識の中、グリムジョーは意地と自尊心のみでその掌に霊圧を集中させる。
爆ぜるそれは大虚、破面の持つ霊圧の砲撃『虚閃』、それをこの至近距離で炸裂させたのだ。
込められた霊圧も少なく、かろうじて虚閃といえなくも無いその砲撃、本来の戦いならば意味を成さないほどの威力のそれ、しかし今のフェルナンドには充分な威力であり、さらに疲弊したフェルナンドにそれを避ける術はない、グリムジョーの虚閃に呑まれフェルナンドは大きく後ろへと吹き飛ばされる。

吹き飛ばされたフェルナンドは、砂漠に着地すると同時によろけて倒れそうになるのを必死に堪える。
見ればそれはグリムジョーも同じのようで、互いにふらつきながらもその眼光の鋭さだけは失ってはいなかった。

「ハァ、ハァ、ハァ・・・・・ハッ、もろに、『朔光(オスクーロ・ルス)』を喰らって、反撃してくるっ、てか・・・・・まったく、アンタは最高だな。正直、あれで仕留めたと思ったんだが・・・・・チッ、癪だがしょうがねぇ、どうやらアンタを殺すには、もう一歩死地に踏みこまなけりゃぁいけねぇらしい。」

「・・・・・何言ってやがる、テメェのそのふざけた言い草は・・・その、一歩とやらを踏みこめば、俺に勝てるって言ってるのと同じだぞ・・・・・馬鹿が。」

互いに傷だらけの二人、しかし実際にはグリムジョーよりもフェルナンドのほうが遥かに負っているダメージは大きかった。

元々耐久力のそれほど高くない身体に加え、度重なるグリムジョーの攻撃と虚閃を受けた結果と、そしてなにより相手を殺すつもりで放つ技は、同時にフェルナンド自身も傷つけていた。
グリムジョーの纏う霊圧を突き破るという事は実際容易な事ではない。
それこそ先程の肘の一撃『朔光(オスクーロ・ルス)』も、グリムジョーの突進力を逆手に取ることで漸く実現したものだった。

しかし、それと同時にフェルナンドの左腕は使い物にならなくなっていた。
グリムジョーの拳を逸らすためにぶつけ合った拳はその瞬間に砕けないまでも骨に罅が入り、そのまま『朔光』によって鳩尾へと叩きつけた肘も、グリムジョーの霊圧と鋼皮の壁にぶつかり同じような状況だった。

それでもグリムジョーを殺すまでには至らなかったフェルナンド、自らの左腕を犠牲として放った攻撃では彼を殺すに足りないという事実。
故にフェルナンドは更に力を求める、だがそれは諸刃の剣でもあった。
それは彼の体質に起因する事象、耐久力の低いその身体は外的な要因による破壊に脆弱であるのと同時に、”内部的”なものにも脆弱であった。

『霊圧の開放』

破面のみならず、虚、大虚、死神に至るまで霊的な生物が自然と行うその行為、内なる霊力を外部へと発するそれ、それすらもフェル

ナンドの身体を傷つけるのだ。

無論全くそれが出来ないというわけではない、ある一定以上の霊圧を開放するとその霊圧はフェルナンド自身に牙を向く様に身体を蝕み、結果緩やかにフェルナンドの体は”自壊”していくのだ。

普通ならば開放をその一定以下に収めればいいと考えるだろう。

だが、彼らのいる世界は普通ではないのだ、戦う事、命のやり取りが日常、当たり前の世界で、力に制限がかかっているということはそれだけで不利な事。

自らの死を案じるばかりに殺されるのでは本末転倒、それは”逃げ”の思考、フェルナンドの中にそんな思考は微塵もありはしない。

目の前にいるのは間違いなく強敵、それは即ち”求める先”が見えるかもしれない敵、フェルナンドの中にハリベルとの闘いで感じた感覚が蘇る。

ならば何を迷う事があると、いや、そもそもフェルナンドに迷いなどないのかもしれない。

単純に敵を打ち倒す為の、殺す為の手段として他の破面と同じように霊圧を開放する、彼の場合そこに自らが”自壊”していくという事象が追加されるだけなのだと。

故にフェルナンドが取る選択肢は唯一つ。

「だったら魅せてやるよ！　俺の”力”を！　俺の本気の霊圧ってヤツを！グリムジョー！あんたのその眼に、焼き付けてやるぜェェェエエエ！！！」

天に向かってフェルナンドが吼える。

その咆哮に呼応するようにフェルナンドの奥底から膨れ上がってい

く霊圧、尚も膨れ上がるそれはフェルナンドという人型の器に収まりきらず、極限まで押し留められた霊圧は、遂に外側へと爆ぜるように溢れ出す。

その奔流はまるで業火のようだった。
暴れ狂う紅い霊圧、大気はその霊圧に焼かれ、焦がされているかのように震え啼く、その紅い濃密な霊圧の中心に立つフェルナンド。
その紅い業火は、まるでその主たるフェルナンド自身すらも焼き尽くさんとするかのように狂い猛る。

そんなフェルナンドの姿を見つめるグリムジョー。
その眼に映るのは先ほどと同じ小さな破面、しかしその破面が纏う霊圧は尋常ならざるものだった。
その放つ霊圧だけを見るならば、明らかに彼の全力の霊圧を凌ぐそれを纏う破面、先程まで自分を殺す等というふざけた事を言い放っていたその破面は、今正にそれを実行できるという事を、その霊圧を持って証明したのだった。

グリムジョーは恥じた、舐めていたのは自分のほうだったと。
グリムジョーは認めた、王たる自分とこの目の前の破面は同等の力を有していると。
そんな後悔の念の中、ふとグリムジョーは自分の表情の変化に気付く。

「フ、フハハハ」

グリムジョーは嗤っていた、それはもう獰猛な笑みを浮かべていた。
その理由は決まっている、彼の目の前の破面、その破面が魅せた凄まじき力がグリムジョーを奮い立たせる。

グリムジョーもフェルナンドと同じなのだ、強くなりたい、何者よりも強くなりたい、その先に己の求めるものがあるのだから、と。

方や”王”を目指し、方や”生”を求める。

互いが求めるものを手に入れるには強者の存在が欠かせない、それを打ち倒し、乗り越えなければ求めるものは永遠に手に入らない。そしてそれは今互いの目の前にいた、互いが互いを強者であると認識し、乗り越えるべき対称だと認識したのだ。

語る言葉はもうそこには存在しなかった。

互いに一歩ずつ歩み寄る、最早二人の足に走る力は無い、いや、走ることに力を裂くくらいならばその力を相手を打倒する事に使おうと歩み寄る。

フェルナンドから溢れ出る霊圧に呼応するかのように、グリムジョーの霊圧も大きくなりそしてフェルナンドのそれもまた強まる。

本来持つ霊圧を超えたその力、純粋に殺す事だけを目指す二人が、互いの力を引き出しあうという妙。

迸る霊圧同士が触れ合い、弾け、それでも一歩ずつ近付く二人。

遂に互いの手がとどく距離まで近付いた瞬間、二人の拳が同時に奔った。

二人の拳が互いに突き刺さる。

防御など一切無い、相手の一撃を防ぐくらいならば相手より一撃多く放り込むまで、といった風に全力で殴り合う。
紅い霊圧を纏ったフェルナンドの拳は、グリムジョーの霊圧を突き破りその鋼皮に叩き込まれる。
打ちつけた拳はその膨大な自身の霊圧に守られ、傷つく事は無かった。
対してグリムジョーも、己が水浅葱色の霊圧を纏わせた拳でフェルナンドを殴り続ける。

そこに華麗な技や、相手との駆け引きは存在しなかった。
唯両者共に足を止め、一歩も退かぬという気を滾らせ、相手をその拳の射程におさめたまま殴り続けるだけ。

「ククククク」

「ハッハハハハ」

互いの口から漏れるのは、苦悶のうめき声ではなく笑い声。
最早二人の間にあるのはこの瞬間のみ、唯この瞬間が愉しくて仕方が無いという感情のみ、強者との戦いに魂が震えることの歓喜のみだった。

「ゴホッ！クハッ！クハハハハハァ！」

「フハハッグハッ！ハッ！フハハはハは！」

辺りに響くのは拳が肉を撃つ鈍い音と、二人の嗤う声だけ。
互いに一歩も引く事無く、その場で殴り合いを続ける二人、それが

永遠に続くかのように思えるほどの戦い。
しかし、永遠は幻想でしかない、互いの精神の高揚に対して、肉体がそれに追いつかなくなっていく。
フェルナンドは積み重ねたダメージと、自身の解放した霊圧によって蝕まれながらの戦闘に身体は悲鳴を上げ、グリムジョーもまた先程の戦闘によるダメージと霊圧を纏ったフェルナンドの拳によるダメージは限界を超えようとしていた。

自身の限界を悟りながらも二人はそれを続ける。
朦朧とする意識の中、一発殴られた事に反応して一発殴り返す、互いに一度も倒れず殴り合いを続ける二人は最早ボロボロだった。
だが止める者は何処にもいない、例え居たとしてもこの二人は止まらないだろう。
求めるもののためならば自らの死すら厭わない、自分というものを通すためならば死しても構わない、死ねば求めたものを手には入れられないという矛盾を抱えながらもそれ以外を知らない。
どこか似ている二人だからこそ、目の前にいるもう一人の自分に負けることは許されない。

顔は腫れ上がり、口も切れ血を流し、立っている事すら容易ではなくなった二人が動いたのはほぼ同時だった。
二人共何処にその力を残していたのかというほど、ボロボロの身体から想像もつかないほど強力な一撃が奔る。
これが最後の一撃、必殺、必滅の一撃である事は誰が見ても明らかだった。
打ち下ろすように迫るグリムジョーの拳と、打ち上げるように伸びるフェルナンドの拳、互いを捉えた拳が同時に両者の顔面に突き刺さる。

首から先が吹き飛ぶのではないかという衝撃が二人を襲う、打ち下ろされ、または打ち上げられた衝撃を必死に堪える両者、互いに倒れまいとするのは意地のみだった。

見上げるフェルナンドと見下ろすグリムジョー、その構図はくしくもこの戦いの始まりと同じものだった。
絡む視線、互いにボロボロになった相手を見やる。

「ハッ・・・・・・・」

「フン・・・・・・・」

嗤う、ただ相手を見て自然と零れたその笑み、互いが何を思ったのかは分からない、だがその嗤う声と同時に二人は崩れ落ちるように倒れた。
最早何処にも欠片ほどの力も残っていないというように、膝から砕け、同時に地に伏す二人。
だが倒れ方は、二人とも前のめりだった。

見下ろす女神
決着を迎えた戦い
女神の前に現れる

嵐を呼ぶ男

混沌空間顕現

２０１０．１１．１４業名追加

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．１４（後書き）

ＶＳグリムジョー完結篇です。

気概だけで威力変わんのかよ、という方もいるかと思いますが、
ＢＬＥＡＣＨ、いや、ジャンプクオリティをもってすれば可能でスｗ
要は『やる気があれば何でもできる』というご都合主義だと思ってください
無論やりすぎには注意が必要ですがねｗ

次回は今までと少々趣の違うお話になるかと思います。では～

BLEACH El fuego no se apaga. 15（前書き）

2010.09.28内容を微妙に改定

フェルナンドとグリムジョーの一戦、壮絶な殴り合いの果て二人は同時に倒れた。
そこに敗者はおらず、勝者もまたいなかった。

そんな二人の傍へと上空から降り立つ人影があった。
その人影は二人の傍へとふわりと降り立つと、一つ小さな溜息をつく。

「まったく・・・・・見事にボロボロだな。だから別格だ、と言っただろう。それを相手に馬鹿正直に真正面から挑めばどうなるかなど判っていただろうに・・・・・・」

倒れているフェルナンドにそう語りかけるのはハリベルだった。

少しの間少し時間を戻そう。
自身が下した『数字持ち（ヌメロス）を総て打ち倒せ』という試練をこなすフェルナンドをハリベルは影から見ていた。
虚夜宮のそこかしこで数字持ち達と戦うフェルナンド、ハリベルはその光景を遠く離れた場所から自身の査回路（ペスキス）を用いて見ていた。
探査回路の扱いに長けた彼女だからこそ、フェルナンドの戦う姿を手にとるように見ることができた。

初めこそ力押しの下級の破面のような戦い方をしていたが、そのままですべてを打倒せるほど数字持ちも弱くはなかった。
幼く、不完全な身体は、圧倒的な膂力の前に軽々と吹き飛ばされる、そんな状況の中でもフェルナンドはあきらめた様子は見せず、劣る力を補おうと戦う方法を考え始めた。
それは次第に洗練されてゆき、無手によって相手をどう倒すべきかを追求した動きは、ハリベルすら時に感嘆するほどのものだった。

順当に数字持ちを倒していくフェルナンド、だがその戦いは次第に熱を失っていき、作業感が強まっていった。
それもそのはずだった、相手はフェルナンドの容姿のみを見て侮り、油断していた、それは彼にとってとてもつまらない事のようだった。
そんな戦いが続けば自然とその気勢も萎えていく、それはフェルナンド本人にすら判らない僅かな感情の下り坂、しかしハリベルから見れば、そのままその先に居るであろうグリムジョーに挑むのはあまりにも愚かな行為だった。

グリムジョーとの一戦を前にし、ハリベルは常の通り探査回路を用いて戦いを見るのではなく、その眼でフェルナンドの戦いを確かめようと密かに上空で待機していた。

そんなハリベルの眼下に現れたフェルナンドは、案の定下り坂の感情を抱えたままグリムジョーとＮｏ．１１の破面と相対した。

Ｎｏ．１１の破面を軽くあしらうとそのままグリムジョーへと向き直ろうとするフェルナンド。

しかしハリベルから見ればその仕草はあまりにも迂闊で気が抜けていた。

あの苛烈な炎の大虚だった頃の彼ならば、こんな隙など曝すわけも無いというほど無警戒にグリムジョーに背を見せるフェルナンド。

数字持ち達との戦いは確かに彼に強さをもたらしたが、弱者との戦いが続いた結果、彼の中に僅かな、ほんの僅かな慢心が生まれていた事をハリベルは悟った。

結果としてフェルナンドはグリムジョーの背後からの攻撃をからくも回避したものの、傷を負う事となった。

ハリベルからしてみればそれは当然の結果、なんら驚く事などありはしない当然の結果だった。

その後も不用意な攻撃をグリムジョーに捕まり、あわや頭を踏み抜かれそうになるフェルナンドをハリベルは唯見下ろす。

慢心により自ら招いた危機、今後の糧となるであろうそれ、しかしこの危機を乗り越えられねば総ては無意味である。

（どうしたフェルナンド、お前の力はその程度ではあるまい。この程度の危機、乗り越えて魅せろ）

そう内で呟くハリベルの言葉が届いたかのようにフェルナンドが攻勢に出た。

変則的な回転蹴り、さらには倒立からの二段蹴りによって流れを掴むフェルナンド、しかしそれは惜しくもグリムジョーに避けられて

しまう。
だがその直後、フェルナンドに劇的な変化が訪れる。
上空に居るハリベルにすら判るほど明らかに変化したフェルナンドの気配、戦いに打ち震える歓喜、そして必殺の気概がハリベルには感じ取れた。

（ようやくだな・・・・・だがこの気配、私は殺すなと言っておいたはずだがやはり無理だったか。いや、今まで一人も殺していないほうが僥倖だったのだろうな・・・・・）

そんなハリベルの思考を他所に戦いは加速していた。
先程以上に霊圧を増したグリムジョーがフェルナンドに猛攻を仕掛ける。
それに為すすべなく曝されるフェルナンドだが、刹那のタイミングによるカウンターによって逆にグリムジョーに大きなダメージを与えた。
しかしグリムジョーはそれでも倒れず、フェルナンドに虚閃を撃ち込んだ。

（あれは・・・・・少々まずいな、死にはしないだろうが今のフェルナンドではまともに動けるかどうか・・・・・ッ！！あの馬鹿者！あんな状態で霊圧を全開にするだと！？本当に死ぬぞ！）

グリムジョーの虚閃を何とか耐えたフェルナンドは、己の持つ霊圧を全開で開放していた。
それに驚愕するハリベル、それもそのはず彼女は知っているのだ、その危険性を、フェルナンドにとって全開での霊圧の開放は自らの肉体を崩壊させ、命を削っているのと同義であるという事を。

その状態のままグリムジョーと殴り合いを始めるフェルナンドを止めるべきか、ハリベルは一瞬迷うが首を横に振りその考えを否定する。

（・・・・・あれは安易な選択ではない。今までの戦いで苦戦する場面はいくつもあった。だが、ただの一度もお前は霊圧を開放しなかった。この戦い、グリムジョーという破面が相手だからこそ、お前は開放を選択したのだな。そこまでして勝ちたいか、フェルナンド・・・・・それを止める？この私が？フッ、無粋だな、私は止めん。戦士としてのお前の戦い、決着のときまで見とどけさせて貰おう。）

眼下では既にボロボロになった二人が未だ殴りあっていた。
一発殴っては一発殴り返され、一発殴られては一発殴り返す。
そんな殴り合いはあまりに無骨で、粗野で、華麗ではないがなぜか美しいとハリベルは思っていた。
そして互いに最後の一撃が両者同時に入り、崩れ落ちるのもまた同時であった。

（決着だな・・・・・見事だ、お前の戦いは見せてもらったぞ、フェルナンド。）

倒れ臥すフェルナンドへの賞賛の言葉と共に、ハリベルはゆっくりとそのフェルナンドの傍へと降りていった。

砂漠へと降り立ったハリベルは二人へと近付くと、倒れている二人の小さい方、フェルナンドの袴の帯に手をかけると軽々とそのまま持ち上げる。
気絶し、全身の力が抜けているフェルナンドは、両手両足をだらりと下げたままピクリとも動かなかった。
そのフェルナンドをハリベルは軽く上へと持ち上げ、一瞬帯から手を離すと、そのままフェルナンドの腹部の辺りを脇に抱えるようにして持ち直した。
そしてフェルナンドを確保したハリベルの視線は、地に臥すもう一人に注がれた。

「さて、コレは回収したが問題はもう一人の方をどうするかだな・・・・・連れのＮｏ．１１の方も直ぐには回復すまい、どうしたものか・・・・・・」

悩むハリベル、本来ならば彼女がグリムジョーを気にかける必要は無い。
数字持ちのトップといえど、上位十刃のハリベルとでは立場が違いすぎる、このまま放置されても文句など言えるものではないのだ。
だがハリベルはそうしようとはしなかった、フェルナンドの死闘、あれはこの破面だったからこそ実現したものであり、この戦いはフェルナンドにとって欠かせないものであった。
フェルナンドの成長を望むハリベルにとって、それを齎したグリムジョーをこのまま放置するというのは、些か気が退けるものがあった。
かといってさすがにフェルナンドを抱えたままグリムジョーほどの体躯の破面を抱えて移動は出来ない。
いっその事引き摺って行くか？などという考えがハリベルの中に浮

かび始めた頃、それは現れた。

「ジャ――ン！ジャンジャジャンジャジャンジャーン・・・ハ――ン・・・ヘイッ！美しい淑女（セニョリータ）なにかお困りですかな？それならば吾輩！　破面Ｎｏ．６第６十刃（セスタ・エスパーダ）！ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカヂッ！！・・　・　・～～～～～！！！！」

聳える円柱の上から飛び降り、自らから奏でるリズムに乗って現れた男は、自分の名前を名乗りながら盛大に舌を噛んだようでその場でのた打ち回っていた・・・・・・

目の前で繰り広げられる混沌とした光景、人間で言えば４０歳程の男性が自分の名前を言えずその舌を噛み、砂漠の上を痛みにのた打ち回り、砂埃を立てながらゴロゴロと転がりまわる様は、はっきり言って見るに耐えない、いや、目を逸らしたくなる光景だった。

それをただ見据えるハリベル、その光景を見ても特に動じた様子もないが、彼女のその視線は正に氷のように冷え切っていた。
そんなハリベルの視線に気付いたのか、男が砂埃を払いながら立ち上がる。

「（な、何のリアクションも無い方が吾輩傷付くのだが・・・・・・）ウォッホン！改めまして美しい淑女（セニョリータ）、吾輩は第６十刃、ドルドーニと申します。美しい淑女におかれましてはご機嫌麗しゅう、第３十刃、ティア・ハリベル殿とお見受けいたしますが、何事かお困りですかな？」

ハリベルのあまりの冷たい視線とノーリアクションに一瞬たじろぐ

男、『ドルドーニ』とフルネームを言う事を諦めたその男は、ハリベルの前に向き直ると手を胸元に持っていきながら恭しくその頭を下げ、ハリベルに対して一礼する。
その仕草は、先程まで砂漠をのた打ち回っていた男とは思えないほど洗練された動きだったが、先程までの残念な光景が全てを台無しにしていた。

「第６十刃・・・・・たしか、ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオだったか、貴様、何故こんなところに居る。」

「おぉ！　吾輩の名を覚えて頂けているとは感激の極み、美しい女性とは外面だけでなく内面から輝くものだとは知ってはおりましたが、正に溢れ出る知性の輝きとでも申しま・・・・・・・・・・・し、失礼、此処は吾輩の居城、第６宮（セスタ・パラシオ）の敷地内でして、そこで大きな霊圧の衝突が起こりましたゆえ何事かと向かってみれば、この少年（ニーニョ）と若者（ホベンズエロ）が闘っているではありませんか、止めようかとも思いましたが、なかなかどうして”熱い”戦いをしている。止めるのは無粋と、吾輩見ていることにした次第です。」

ドルドーニの歯の浮くような世辞をハリベルが一睨みで黙らせる。

ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ、破面Ｎｏ．６第６十刃（セスタ・エスパーダ）、人間で言えば４０歳ほどの男性、１９０ｃｍ程はあろうかという長身、白い死覇装（しはくしょう）の袖の辺りにフリンジを付けて着飾り、そしてその死覇装を破らんばかりに隆起した鍛え上げられた筋肉と相まって、その体は更に一回り大きく見える。
額当てのように残された仮面の名残、髪の色は黒く短めに切り揃えられ、口髭と顎鬚を生やし紳士然とした態度を好む、破面としては古株であるが、未だ十刃の地位に座している。

というのがハリベルがこのドルドーニという破面に対して持つ情報の総てであり、それも外見と所作からの推測の上に成り立つ部分もあった。
だが、なんともこれほど饒舌に話すタイプとは考えていなかったのか、ハリベルも多少面食った状態だった。

黙っていれば何時までででもしゃべり続けそうなドルドーニを黙らせ、その場にいた理由を問いただしたハリベル、聴けばこの場所は彼の居城たる第6宮の敷地であり、そこで霊圧の衝突を感知、確認に来ればフェルナンドとグリムジョーが戦っていたというのだった。

（ホゥ、この男もしや・・・・・・）

そしてその後に続いた言葉がハリベルの琴線に触れた。
曰く、止めようかとも思ったが、あまりに”熱い”戦いゆえ、止めるのは無粋とその場で見ていた、と。
大方の反応として、己の居城の庭先で暴れる者を見つければ、問答無用で止めようとするのが普通である、しかしこのドルドーニという男はその暴れている者の暴れっぷりが気に入ったからと見ていたと言うのだ。

普通の対応とは明らかに違うそれ、しかしハリベルには少しその気持ちがわかった。
フェルナンドとグリムジョーの戦いはそれだけ惹きつけられるものがあった、殴り合う二人、たったそれだけの光景、しかし実力の伯仲し合う者同士が、その今持てる全力を持って相手を踏み越えようとする様は見るものを放さない凄まじさがあった。
それを”熱い”と表現したドルドーニ、二人の戦いぶりから感じ取

った凄まじさ、魂に訴えかけるようなそれを表現するのにそれは的を射たものだった。
そしてそれを感じ取れるこの男も、内にその”熱さ”を秘めた戦士なのではないかとハリベルは考えていた。

「なるほど、貴様がここに居る理由は判った。だが、貴様に手を貸してもらう理由が私にはない。コレは私の弟子のようなもの、そしてそこに転がっている男はコレが戦った相手、コレの後始末ぐらい私がつけねばな。」

コレ、と脇に抱えたフェルナンドに視線を向けながら、ハリベルはドルドーニの提案を断ろうとする。
フェルナンドは認めないだろうが、ハリベルにとって自分の弟子のようなものでもあるし、転がっているグリムジョーはその弟子の成長を促した者、弟子の不始末は師の不始末、ならば自分が何とかしなければいけない、と踵を返しグリムジョーを拾い上げようと手を伸ばそうとするハリベルに、ドルドーニが物凄い勢いで迫る。

「い、いけません！美しい淑女（セニョリータ）！貴方のようなうら若き女性がこのような野獣の如き若造（ホベンズエロ）に触るなんて！いけません！断じていけません！美女と野獣より、美女と紳士の方が画になります！おっとそれは関係ないですが、いや、なんと言うかもう断じてノン！嗚呼、この男のむさ苦しい臭いが、貴方の死覇装に移り貴方の天上の花の如き芳しき香りが失われたとあってはこのドルドーニ！死んでも死に切れません！そもそも！その吾輩が変わりたいほど羨まし過ぎる格好で抱えられている少年（ニーニョ）も、貴方の弟子だと言うから泣く泣く見逃しているというのに、その上この若造まで貴方に触れられる栄誉に

預かれると言うのなら、私が少年と殴り合えばよかった！！！」

ブンブンとまるで子供が駄々をこねるように腕を振りながら一息に捲くし立てるドルドーニ。

最早その姿に紳士たる優雅さの欠片も無く、その目から血の涙でも流しそうなほど必死な姿、後半は最早何を言っているのか判らない支離滅裂な事を口走ってはいたが、要するにハリベルがグリムジョーを運ぶのが気に入らないと言う事のようだった。

途中ハリベルの脇に抱えられているフェルナンドが羨ましいという発言もあったが、この男の冗談だという事にしておく。

「・・・・・ならばどうしろと言うのだ、貴様がこの男を運ぶとでも？」

ドルドーニの勢いに若干押され気味のハリベル、ならばお前が運ぶのかとハリベルが問えばドルドーニはあっさりと答えた。

「もちろんです美しい淑女。そもそも女性の荷物を持つのは紳士の務め、このような若造の一人や二人や十人や十三人運ぶのは、吾輩にとって造作もないこと。それに吾輩の宮殿のほうが此処からは近い、この若造も、瓦礫の下の若造もこのドルドーニが責任を持って介抱いたしましょう。」

腰に手を当てながら胸を反らし、もう片方の手を胸の前に持って来るようにしてポーズをとりながらドルドーニが高らかに宣言する。

ハリベルに運ばせるぐらいならば、グリムジョーも、そして瓦礫の下敷きとなっているシャウロンも自身が面倒を診る、と。

そう言うやドルドーニは「失礼、美しい淑女」と一言ハリベルに頭を下げると、グリムジョーへとピョンピョンと軽くステップを踏みながら近付く、そしてグリムジョーの死覇装の首の辺りを猫を持ち上げるように親指と人差し指でつまむ。

「ハッハッハ～。残念だったな若造、美しい淑女の変わりにこの吾輩がお前を診てやろうではないか！」

何故か勝ち誇ったように気絶しているグリムジョーに話しかけるドルドーニ。
そうしてドルドーニは自然に、ごく自然に、まるで床に落としたモノを拾うかのように自然な仕草で、グリムジョーの身体を腕を伸ばしたまま自身の頭上高くまで持ち上げたのだ。

（ッ！　あの男・・・・・自分とそう背丈の変わらない男をああも簡単に持ち上げるとは・・・・・伊達に十刃の座にいる訳ではないということか・・・・・・）

ハリベルが驚くのも無理はなかった。
ドルドーニとグリムジョー、身体の大きさで言えばドルドーニの方に分があるが、身長はさほど変わらない。
その者を片手で持ち上げる膂力、ドルドーニが纏う筋肉の鎧が見せかけではなく、鍛え上げられた実戦の為のモノだということをその行為がものがたっていた。

ハリベルはふと思う。

今まで自分は上だけを見ていたと、自分より下にいる者は身内以外には目もくれず、ただ上を、力を求めていたと。
己の理想のためには力が要る、二度と仲間が犠牲になる事が無いよう、それを実現するための力をただ求め続け、下を見ることを怠っていたと。

だが今、目の前にいる男、下位の十刃であるこの男も充分に力を持っている。
それがどれほどのものかは判らない、しかしそれは天賦の才ではなく、己に満足せず、鍛錬を重ねた末の強さである事がハリベルにはわかった。
男の持つ”厚み”がそれをものがたっていた、多くの苦汁を舐め、敗北を経験しながらも諦めず強者へと挑み続けた生き様の”厚み”。
軽薄な言動の裏に確かに存在するそれをハリベルは見ていた。

（この男も、グリムジョーも、そしてフェルナンドも、下を見ればこのような者達がまだまだいるのだろう。フェルナンドという存在を目にしていながらも私は気がつかなかった・・・・・・私も存外余裕の無いことだ・・・・・理想を追うばかりに周りが見えていないとは・・・こんな私がフェルナンドの挑戦を”受けてたつ”だと？フッ、笑わせるな・・・・・・コレはもう一度、己に更なる磨きをかけなければなるまい・・・・・・）

気が付かなかった、いや、気付こうとしていなかった現実。
下から頂きを目指し階（きざはし）を上る者達、力を、才を持ちハリベルの居る場所を、そして更にその上を目指す者達がいるということ。
それに気付いたハリベルは今一度その気を引き締める。
もう一度己を鍛えなおし、下から昇る者達の壁たらんがために、と。

「礼をいう。ドルドーニ、貴様のおかげで私は気が付くことができた。」

そうしてこの事実に気がつかせてくれた張本人、ドルドーニに感謝の言葉を述べるハリベル。
感謝されたほうのドルドーニといえば、そのハリベルの言葉に目は点となり、ポカ～ンと口をあけたまま放心状態となっていた。

「・・・・・・ッハ！な、なんともったいないお言葉！こんな襤褸切れが如き若造を運ぶだけの事に礼など不要です美しい淑女！」

放心状態から復旧したドルドーニが慌ててハリベルに答える。
ハリベルの礼をグリムジョーを運ぶ事に対してと勘違いしたのか、滅相もないとどこか恐縮した様子のドルドーニ。
片手に持ったグリムジョーを振り回しながら世辞を繰り返す。
そんな世辞がひと段落し、ドルドーニが瓦礫に埋まるシャウロンの元に向かおうとする前、彼がハリベルに向き直り話しかけた。

「それにしても美しい淑女（セニョリータ）は良い弟子をお持ちですな。少年（ニーニョ）のあの戦いぶり、まだまだ荒削りにも程がありますが、見ている者を熱くさせる、ただ愚直に進むそのさまは見ていて実に面白かった。吾輩も久しぶりに血が滾る思いでしたな。」

そう言ってハリベルに抱えられているフェルナンドへと視線を落とすドルドーニ。
その視線、瞳の奥には紳士然とした振る舞いとは別の、嵐のように激しい戦士の姿が映っていた。

ドルドーニの戦士の部分がフェルナンドとグリムジョー、二人の死闘によって奮い立っていた。
そしてその顔は今までのようなおどけた表情ではなく、戦う男のそれだった。

「・・・・・おっと、コレは失敬。このような顔は女性の前で見せるものではありませんな。」

「いや、そのふざけた顔より先程の方が幾分かマシだった。」

「ハッハッハ、これは手厳しい。しかしその少年は本当に面白い、いつか戦ってみたいものですな、無論吾輩が勝ちますが。」

自分の顔が戦士のそれになっている事に気付いたドルドーニがハッとして慌てておどける。
そんなドルドーニの慌てぶりに、ハリベルは先程の表情のほうがマシだったと皮肉気に答えた。
互いに小さな笑いが漏れ、ドルドーニがおどけたように空いているほうの手を上げ、降参のポーズをとる。
そうして放たれた最後の言葉、何気ないその言葉に、いつか戦ってみたいというその言葉に、ドルドーニの本心が隠れているであろうことにハリベルは気がついた。

所詮戦いに生きる者は、それでしか互いを計れず、知る事もできないという事なのだろう。

「その言葉、コレが聴けば直ぐにでも貴様の元に飛んでいくだろうな。」

「ハハ、残念ながら今の少年（ニーニョ）では吾輩の相手にはなりませんよ。・・・・・強く育ててください、その少年は伸びる。育て方次第で際限なく、何処までも、ね。ではそろそろお暇します、ではアディオス、美しい淑女（セニョリータ）。」

去り際におどけた顔ではなく、戦士としての顔で真剣にハリベルに言葉を伝えるドルドーニ。

『強く育ててください』と、それはフェルナンドのためを思っての言葉であるのと同時に、いつかこの先自分がフェルナンドとまみえることがあった時の事を幻視した言葉だったのかもしれない。

そう言って片手でグリムジョーを掴んだまま恭しく頭を下げたドルドーニは、円柱から飛び降りてきたときと同じリズムを口ずさみ、ステップを踏みながらシャウロンの埋まる瓦礫の方へと跳んでいった。

その後姿を見ながらハリベルは小さく呟く。

「ドルドーニか・・・・・・フッ、喰えん男だ・・・・・・」

そう一言呟き、踵を返すハリベル。

フェルナンドを脇に抱えたままふわりと砂煙も立てずに飛び上がると、一路自らの居城たる第3宮へとその足を進めるのだった。

姦しい
嗚呼姦しい
姦しい

女三人寄らば姦し

BLEACH El fuego no se apaga. 15（後書き）

いやね、本当はね、全然別の話書くつもりだったんですよ？
それがどうにも・・・・・・

ドン・パニーニが自重しなくてｗ

ちょろっと出すつもりが暴れる暴れるｗ
キャラが勝手に動く感覚？ってやつですか、筆も進むんで１話分になっちゃいました。

おどけた部分と真剣な部分を表現できていたらいいな～

これでストックが切れたので、更新が少し遅くなります。

BLEACH El fuego no se apaga. 16（前書き）

2011．06．22名前を公式に変更。

BLEACH El fuego no se apaga. 16

白い部屋。
床、天井、四方の壁、その総てが白一色の部屋。
それ程広いわけではないが総てが白で統一され、床と壁の境目が曖昧なその部屋は一瞬距離感を失うような部屋だった。

その部屋の中心、これまた白い寝台の上に横たわる少年。
純白の衣を身に纏い眠る少年、その皺一つ無い衣とは反対に、その身体にはそこかしこに傷痕が残っていた。
その傷を癒やすためなのか眠り続ける少年、その彼が眠る寝台を囲むように三体の人影が立っていた。
丸みを帯びたその人影は女性のようで、その中の一体が呟く。

「・・・・・ホントにコイツが？」

「そうらしいね、とてもそうは見えないけど。」

「でも事実は事実ですわ。」

物珍しそうにしげしげと少年を見る人影達、その視線の先にいる少

年は未だ眠ったまま動かない。
本当は死んでしまっているのではないかと思えるほど微動だにしないその身体、顔立ちは整っているゆえ、横たわるその姿は人形のようだった。
そんな三体の人影の中、少年の顔を覗き込むようにして見ていた一番背の低い影が勢いよく上体を起こす。

「アタシは信じられないね！　こんなガキがアイツに勝てるわけがねぇ！」

「勝ったんじゃなくて引き分けたんだよ、アパッチ。それぐらい覚えときな！」

「うるせぇんだよ！　ミラ・ローズ！」

「なんだと、このヤロォ！」

声を張り上げるアパッチと呼ばれた影を、三体の中で一番大きな影、ミラ・ローズが制するが効果は無く、逆に小さな諍いが起こる。
そんな二人を一歩下がってみている最後の人影が、服の袖でその口元を隠しながら大声で罵りあう二人に話しかける。

「およしなさいな、二人とも・・・・・・はしたないわ。まるで品性というものを感じないわね。」

「「ンだと！スンスン！てめェコラ！！」」

スンスンと呼ばれた最後の人影が、二人を嗜める、というには些か

辛辣な言葉を二人にぶつける。
そんなスンスンの言葉に、今まで喧嘩腰で罵り合っていたアパッチとミラ・ローズの二人が同時にスンスンの方へと顔を向ける。
二人の視線を向けられたスンスンの方は、私は何も言っていませんといった風でそっぽを向いていた。

「スンスン！　あんたはどう思うのさ！　ホントにこんなガキがグリムジョーに勝ったと思えるのかよ！」

「だ・か・ら！勝ったんじゃなくて、引き分けだって言ってんだろうが！この馬鹿女！」

「だから、およしなさいと言っているでしょう。私だって驚きましたわ・・・・・　でも他ならぬハリベル様がそう仰られたのよ？それだけで私達にとっては充分なのではなくて？」

そのスンスンの言葉にグッと押し黙るアパッチ。
それもそのはずだった、彼女たちにとって信じられない出来事であっても、それを自分たちに告げた人物は彼女らがただ一心に信じ、忠節を誓った人物。
その人物、ハリベルの語った言葉を疑うなどという事は、彼女らにとって不義であり、不忠であり、許されざる大罪であるのだ。
彼女達、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンの三体の破面は、彼女達が破面化するずっと以前より、その主たるハリベルすら最上大虚だった昔より彼女に仕え、共に虚圏の砂漠を駆けた者達。
主の命を絶対とし、傍を離れず、剣として、また盾として主への忠誠を示す者。
彼女達は、第３十刃（トレス・エスパーダ）ティア・ハリベルの誇り高き『従属官（フラシオン）』なのだ

から。

ハリベルが彼女達の前にこの眠れる少年を抱えて現れたとき、この少年は身体中が傷だらけで、服は破れ、意識を失っていた。
抱えられている少年は言うまでも無くフェルナンド・アルディエンデである。
彼女達が一体この少年はなんなのかと問えば、数週間ほど前ハリベル自身が虚圏の砂漠へと赴き、連れて来た大虚が破面化した姿だと言う。
その言葉に彼女達は驚いた、その大虚は大虚でありながらハリベルに手傷を負わせた恐るべき存在であるからだ。
そんな彼女達を前にハリベルが発した言葉が、彼女達を更に驚愕させた。

「コレは私の元で鍛えると決めた。　手始めに今まで従属官を除いた総ての数字持ちと戦うように言ってあったのだが、最後に戦ったＮｏ１２．　グリムジョー・ジャガージャックとの戦闘でこの有様だ。何とか”分けた”様だが、身体の損傷が大きい、下官に伝えて回復させてくれ。」

驚愕、それ以外彼女達の感情を表す言葉は無かった。
自らを傷つけた者を鍛えるという主の言葉もそうであるし、何より彼女達を驚かせたのが『グリムジョー・ジャガージャックと”分けた”』という一言だった。

ハリベルから見ればグリムジョーという破面はそれ程脅威ではない。

しかし彼女達からしてみればそれは別だ。

破面の序列において従属官だから、といって能力が高いわけではない、従属官とは数字持ちの中から十刃が選び直属の兵とした存在、力は数字持ちとさほど変わりはしないのだ。

もちろん十刃に選ばれるだけあって基本的に戦闘力は高い、だがそれはイコール”数字持ちの中で最強”　という訳ではなく、現時点でその言葉に最も当てはまるのはグリムジョーであろう。

従属官であろうとも彼に勝てるものはおらず、引き分ける事も難しいのではないかという十刃以下の密かな考え。

己の力を信じ戦う彼らにとって決して口に出してはいけない考え、零すは己の非力を曝す愚かな行為、しかし覆しがたい本当の感情、それはアパッチをはじめとした彼女達も同じであった。

そんな彼女達の考えをハリベルの一言はあっさりと破壊したのだ。

彼女の脇に抱えられた少年が、グリムジョーと引き分けたという一言が。

到底信じられるものではないその言葉、他の誰かが吐いたならば一笑にふすであろうその言葉、しかしその言葉を放ったのは己が信義の剣を捧げた尊き主。

信じられない、しかし疑う事は許されない、二律背反、そんな感情が彼女達にこびり付いていた。

「……まぁそれもしょうがないですわ、貴方達二人の小さな脳でハリベル様の高尚な御言葉を理解しろという方が酷でしたわね、ゴメンナサイ。」

信じられないがやはり信じるしかない、そんな一瞬沈みかけた場の空気を和ませようとしたのか、それともただ思った事が零れただけなのか、スンスンからまた辛辣な言葉が漏れる。
恐らくは後者であろう、語尾についた謝罪の言葉は完全な棒読みで気持ちのかけらも入っていなかった、そして何気なくアパッチだけではなく、ミラ・ローズまで馬鹿にしているあたり、彼女にはある意味『毒舌家』として天性の才があると言えなくもない。

「「てめぇスンスン！　アタシに喧嘩売ってんのか！」」

またしても声をそろえ、互いの額に青筋を浮かべながら叫ぶアパッチとミラ・ローズ、反目し合っているが、意外と気が合うのかもしれない。
そしてその二人の怒りを理解した上でまたスンスンが言葉の爆弾を投下し、喧騒は次第に大きくなっていった。

「お前達、一体何の騒ぎだ・・・・・・」

ハリベルが治療を終えたフェルナンドがいる部屋へと、その中で自分の従属官が言い争いをしていた。
もっとも、正確にに状況を説明するならば、アパッチとミラ・ローズの二人が大声で叫びスンスンに食って掛かるが、当のスンスンは何処吹く風のようで、隣で大声を上げている一方に食って掛かれば売り言葉に買い言葉、二人の感情の勢いは増し、そこにスンスンが焚き火に木をくべるより性質が悪い言葉の燃焼促進剤を投げ込み、また二人がスンスンに食って掛かるという無限地獄がそこには展開されていた。

「「ハ、ハリベル様!?」」

大声を張り上げていた二人、アパッチとミラ・ローズが同時に入室してきたハリベルに気がつき、慌ててハリベルに向き直る。
そんな二人を他所にスンスンはハリベルに軽く一礼し、二人の横にスッと並んぶ。
その顔には『暴れていたのはこの二人で私は関係ございません』といった表情が浮かんでいた。

「一応此処には怪我人がいる。あまり大きな声は出してやるな、いいな?」

「「ハイ・・・・・申し訳ありませんでした。」」

そんなハリベルの窘めるうな言葉に頭を下げ謝罪するアパッチとミラ・ローズ、沈痛な面持ちの二人の隣に立っているスンスンが、追い討ちとばかりに呟く。

「ホントにもう、お馬鹿さん達ね・・・・・・」

（（後で覚えとけよ！スンスン～！！））

そう呟いたスンスンのほうへ頭を下げた姿勢のままアパッチとミラ・ローズが首だけを回し、物凄い形相で睨みつける。

ハリベルに窘められた直後という事もあり大げさに反応できない二人、歯をギリギリと噛締め、視線だけでこの後やり返してやると語る二人だが、当然のようにそっぽを向いているスンスンであった。

「・・・・・まぁいい。　で、具合はどうだ？フェルナンド。」

「ハッ、まぁそれなり、って所だな。　寝覚めは最悪だったがな。」

その声に寝台のほうへと振り返る三人、そこには先程まで眠っていたはずの少年が起き上がり、寝台の端に片膝を立てて腰掛けていた。

それは間違いなく寝台に横たわり、瞳を閉じ、生気なき人形の如く眠っていた少年、しかし今三人の瞳に映るそれは別物だった。

皮肉気に歪んだ口元、一気に血色のよくなった肌、そして圧倒的なまでの意思と存在感を放つその鋭い紅い瞳、それを見て三人は理解した。

これこそがこの少年の真実の姿、先程までの壊れそうな人形は幻だったのだと、主たるハリベルに一太刀浴びせ、数字持ち最強のグリ

ムジョーと引き分けたという破面、フェルナンド・アルディエンデの真の姿だということを。

「で？　ハリベル、このギャァギャァとうるせぇ女共は一体なんなんだ？傍でこれだけ騒がれたんじゃぁおちおち寝てもいられねぇぞ。」

フェルナンドは驚きの表情で自分の方へと振り返っているアパッチらを指差しながら、ハリベルに話しかける。
それも当然の疑問であろう、傷ついた身体は治療を施されたとはいえ全快には程遠く、その自らの傷を癒すためフェルナンドの身体は意思とは関係なく休息を欲していた。
そしてフェルナンドの身体は眠る事で余計な力の消費を抑え、より早い回復を行おうとしていたのだ。
しかしその眠りは妨げられる、体の治癒を優先させるため深くへと沈み込んだ意識を何かが無理矢理に引き上げるような感覚、一度それに気付いてしまえば例え無視しようとして耳に届くその喧騒、そしてそれは意識の浮上と共により大きく、鮮明に届く。

かくして覚醒へと至ったフェルナンドの意識、あまり良い目覚めとは言いがたいそれ、その原因を作った者達が一体何者なのかを知りたいと思うのはごく自然な事だろう。
そしてフェルナンドの背後から薄らと立ち昇る”怒気”も、きっとごく自然な事だろう。

「すまんな、フェルナンド。だがそう怒ってやるな、彼女達は私の従属官、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンだ。大虚の頃より私と共に歩んできた私の”仲間”だ。」

「〝仲間〟、ねぇ・・・・・・」

その怒気を隠そうともしないフェルナンドをハリベルは軽く宥めながら、アパッチら彼女の従属官を紹介した。
大虚の頃より共に歩んできた仲間、そう紹介されたフェルナンドは彼女の従属官一人ずつに視線を移す。

最初に視線を向けたのは、一番大きな声を張り上げていたアパッチと呼ばれた破面、額に仮面の名残が一本、角のように残り、肩口辺りで切り揃えられた髪の色は黒、左目の周りを縁取るように仮面紋（スティグマ）が残り、左右の瞳の色が違っていた。
死覇装は比較的標準なもので、半袖で淵が黒く、手には手袋を嵌めており、両の手首には大きめの腕輪が嵌められていた。
そして恐らくは短気で攻撃的な性格であろうことは、先程までの言動で明らかだった。

次に視線を向けたのは、これまた先程のアパッチと同じように大声を上げていたミラ・ロースと呼ばれる破面、頭部、そして首に仮面の名残を残し、背の中ほどまで伸びた黒髪には全体的にウェーブがかかっている。
身長は高く身体つきは筋肉質、そしてその身体を見せ付けるかのように非常に露出度の高い服装、上腕と腰の辺りに宝石のような装飾品を付け、斬魄刀は腰には挿さず、その手に握られている。
こちらもアパッチ同様攻撃的な性格であろうが、まだ落ち着いた雰囲気といったところだろう。

最後の一体はスンスンと呼ばれる破面、髪飾りのように頭部に残る仮面の名残、黒髪で腰にまで届くかといったほどの長髪、前髪は真っ直ぐに切り揃えられ、右の頬に桃色の仮面紋が点々と縦に三つ並

んでいた。
死覇装はロングのワンピースのようで、腰の辺りにベルトのようなものが二本交差しており、特徴的なのは膝まで届くかという長い袖、癖なのかその長い袖で口元を隠すようにしている。
前の二人とは違い、言葉遣いは丁寧でどこかしとやかな雰囲気を出してはいるが、その丁寧な言葉で紡がれるのは相手の神経を逆なでする為だけの言葉であり、毒舌に関しては天性のものを持っているようだ。

「そうさ！あたしがハリベル様、第一の従属官！エミルー・アパッチ様よ！」

それぞれを値踏みするようにしてみていたフェルナンドの方へ、アパッチが一歩踏み出しながら声高に叫ぶ。
胸を反らせ、親指で自分の胸元を差しながら、自慢げに、そして誇らしげに自らがハリベルの従属官であるとフェルナンドに示した。

「ハッ！馬鹿をお言いでないよ！　アタシ、フランチェスカ・ミラ・ローズこそがハリベル様、第一の従属官さ！」

アパッチの叫びを隣で聞いていたミラ・ローズが、それを鼻で笑う。
どうにも『第一』という部分が引っかかったのかコチラも一歩前へと踏み出し、フェルナンドに自分こそがそうだと宣言するようにアパッチと同じように胸を反らせ、自慢げにハリベルの従属官であると名乗った。

「いやですわ二人とも、遂に数まで数えられなくなるなんて・・・・

・・お初にお目にかかりますわ、私がハリベル様の真の第一従属官、シィアン・スンスンです。この二人はそのオマケですわ。」

前の二人にワザと哀れむような視線を向けるスンスン。
こちらもミラ・ローズ同様『第一』という部分が気になったらしく、その称号は自分こそが相応しいと『真の第一従属官』という言葉で他の二人との差別化を計ろうとしているようだった。
さらに二人をオマケ扱いし、感情を逆なですることも忘れないスンスンであった。

「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」

三者ともに自分こそがハリベルの第一従属官であるとして譲らない、それぞれがそれぞれを無言で睨む。
半眼で睨みあう三者、アパッチとミラ・ローズはギリギリと歯と歯を擦り合わせイラついた様子で、スンスンは口元を隠しているので表情は読みずらいが、「貴方たち何を言っているの？」という感情がその瞳からありありと伺えた。

「あたしだ！」「アタシさ！」「私に決まっていますわ。」

同時に声を上げる三者、本来従属官の中で立場の上下などありはしない、従属官は皆同じ十刃直轄の兵である事に変わりは無いのだ。
彼女たちとてそれは知っている、他の十刃の従属官がこの様な事で争っていたら笑い飛ばしている事だろう。
しかし、いざ自分達の間でそれが起これば話は別だ、他の二人より立場が下なのが嫌なのではなく、他の二人の上に立ちたいというわ

けでもない。
ただ他の二人に劣っていると認めたくない、彼女たちの中にあるのはそれだけなのだ。

他の二人に劣っているという事は、それだけハリベルの役に立てないという事、それは彼女たちにとってこの上ない罪なのだ。

アパッチもミラ・ローズもスンスンも大虚の時代は、ただ『メス』であるが故に『オス』の大虚の標的となっていた。
固体の統計的に、メスの大虚は他に比べ身体が小さい、故に大型のオスの大虚の標的となりやすいのだ。
殺し殺される事が当たり前の虚圏の砂漠で、メスの大虚がただ一匹で生き残る事は至難の業、それは三人にとっても例外ではなく、狙われ、襲われ、それでも生き延び、しかしもうどうしようもない状況になった時、自らの死を確信した時、彼女は現れたのだ。

自分よりも小さく、自分よりも細く、自分よりも脆そうに見えた彼女は、自分を遥かに凌駕する莫大な霊圧を放ち、自分が覚悟した死の瞬間を呆気なく振り払ってしまった。
同じメスの大虚、しかし自分からでは未だ遠く、遥か向こう、たどり着けるか判らない場所である『最上大虚（ヴァストローデ）』に、そのメスの大虚は到達していた。
その出会いは彼女たちそれぞれにとって自らの理想との遭遇であった。
強く、ただ強く、何者よりも強く、逃げる事無く、怯える事無く、虚圏の砂漠をいく姿、それが彼女たちの理想。
その理想の姿であるハリベル、彼女と共に虚圏の砂漠を生きる内に彼女たちは互いに話し合うでもなく、それぞれその内に同じ思いを決意した。

この人の役に立ちたい、この人の為に生きたい、この人が進みたいと思う道を支えてあげたい、と。

三人は決してそれを互いに口に出したりはしない、本当に大切な思いや決意は己の中にしっかりとしまって置くものだから。
どんなに強い決意でも、言葉で零し、形を持たせてしまえば途端に色あせてしまう。
言葉に出す事で強まる決意とそうでないもの、不退転の覚悟と秘めたる決意、安っぽい言葉に乗せてしまえばその決意の重さまで軽くなってしまう。
故に三人はその決意を口には出さない、その秘めた決意は三人にとって己の命より思いのだから。

だから彼女たちは常に張り合う。
どんな些細な事でも、他人からすればどんなにくだらない事でも、この二人にだけは負けられないと、自分が一番ハリベルの役に立ち、ハリベルの為に生きているのだと、そう証明するために。

「あたしだって言ってんだろうが！　このデカ女！！」

「アタシに決まってるだろうが！　単細胞！！」

「いい加減にしてくださいます？　私に決まっているのですから、低脳同士、二番と三番を取り合ってくださいまし。」

「「根暗は黙ってろ!!!」」

「ネ、根暗・・・・・・」

秘めた決意は大したものだが、それを証明するための手段が些かそれを霞ませるような罵り合いを続ける三人。

最早互いの悪口が入り始めたそれは、収まりがつかない状況へと加速しているようで、それを目の前で繰り広げられている寝起きのフェルナンドにとっては苦痛以外のなにものでもなく、かといって軋む身体では割って入る事も叶わずただ一言「うるせぇ・・・・・・」と力なく呟くぐらいの事しかできなかった。

「・・・・・フ、・・・フフ、フフフフフ。いいですわ!それならこの際誰が一番なのかハッキリさせようではありませんこと?お馬鹿さん達には言葉が通じないようだから肉体言語で教えて差し上げますわ!!」

アパッチとミラ・ローズに『根暗』と言われてさすがにショックを受けたのか、俯いていたスンスンが急に笑い出し、ガバッと勢いよく身体を起こすと、この際誰が一番なのかハッキリさせようと言い出した、『根暗』発言で怒りのボルテージが一気に振り切れたようだ。

「いいぜ!　やってやろうじゃないか!ボッコボコにしてやんよ!!」

そのスンスンの提案に待ってましたと言わんばかりにアパッチが同意する。
左手を右の肩に置き、右腕をブンブンと回しながら「ちゃっちゃとはじめようぜ！」と声を張り上げている。
その顔は獰猛な笑顔で、戦うことが本分である破面のある意味ただしい姿と言えた。

「こんな狭いところでやれる訳ないだろうが、この単細胞め！外に出るよ！　逃げるなら今のうちだぜ！」

「誰が逃げるか！」

「そうですわ！　私に歯向かった事を後悔させて差し上げますわ！」

「ハッ！上等！」

このままフェルナンドの寝台のある部屋で戦いを始めようとするアパッチをミラ・ローズが制する。
かといって戦い自体を止めるのではなく、もっと広い場所で決着を着けるということのようだった。
逃げてもいいぞというミラ・ローズの挑発にアパッチも、そしてスンスンもその意気を増していく。

そんな三人を黙ってみていたハリベル、さすがにこのままにしておくのはマズイと考えたのか三人を制止しようと話しかけた。
三人とも常からこのようないざこざは多々あるが、ハリベルの前で此処までそれが大きくなるのは珍しい方であり、見ていたハリベルも止めるのが少し遅れたが、ハリベルの言葉は素直に聞く三人である、どうとでもなるとハリベルは考えていた。

「お前達、いい加減にやめな「「「ハリベル様は黙っててください！！！」」」いか・・・・・・」

予想外の返答に面食らった様子のハリベル、制止の言葉に喰い気味で入ってきたその言葉にハリベルの思考はほんの一瞬停止する。

「オラ！じゃぁいくぜ！」

「お馬鹿さん達に世の厳しさを教えて差し上げますわ。」

「「てめェスンスンぜってェ泣かす！」」

ギャァギャァ言い合いながら部屋を出て行く三人、その声が遠く小さくなるなか部屋に残されたフェルナンドと立ち尽くすハリベル。急に静かになった部屋、何故か気まずい空気の中、なんとなしか哀愁が漂うハリベルのその背中にフェルナンドが話しかける。

「あれがアンタの”仲間”ってぇやつか？　随分とまぁ・・・・・・賑やかだねぇ」

「まぁ、な・・・・・・」

フェルナンドの言葉にどこか力なく答えるハリベルだった。

片割れの牙が戻り
双牙を得る

才無き者よ
貫け

BLEACH El fuego no se apaga. 16（後書き）

前話の予告の詩もどき一行目だけで一話になりました。
ドルドーニに続きよもや三人娘まで暴れるとは・・・・・・
ほのぼの？のなかに一瞬のシリアスがはいっていればいいな
三人の苗字（？）は完全に作者の妄想ですw

三人の掛け合いはこんな感じで大丈夫だろうか？
スンスン壊れ気味か？

BLEACH El fuego no se apaga. 17（前書き）

今回は多分読みづらいです。
内容はグチャグチャです。
それでも読んでやろうという方ありがとう。

アパッチ、ミラ・ローズ、スンスン、ハリベルの従属官三人がいなくなった部屋に残されたフェルナンドとハリベル。
若干影がかかったようなハリベルの背中、従属官三人に邪険にされたのがよほどショックだったのか、心なしか肩も少し落ちているような気がする。
普段の毅然とした態度でいる彼女からはなかなか想像し辛いその姿、事”戦い”という部分に関しては何処までも厳しく勇ましい彼女だが、一歩そこから離れると突発的な出来事や、感情の触れ幅が多少大きくなるようだ。

生きるため、戦うしかなかった彼女にとって今手にしているこの環境は、初めてのことも少なくないのだろうか。
戦士として完成されている故に、それ以外の部分が追いついていないような、そんな印象を受けるどこか、人間くさい彼女の姿、しかしそれも次第に霧散し、常の彼女の纏う雰囲気へと戻っていった。

「さてフェルナンド、その身体、未だ全快には程遠いだろう?今は

もう少し休め・・・・・・　どうした?そんな顔をして・・・・・・」

起き上がってはいるものの、未だフェルナンドの身体がボロボロであることをハリベルは理解していた。
故にもうしばらく休めと言うハリベル、しかし見ればフェルナンドは奇妙な表情をしていた。
常に自信に満ち、皮肉気に歪めた口元をした表情ではなく、半眼でやや視線を落としたようにしているフェルナンド。
苛烈な彼の雰囲気はそこには無く、ただ何事か考え込むような表情は、日頃の彼と明らかに違うものだった。

寝台に腰掛け、立てていた片膝に肘を乗せ頬杖をつき、どうしたと問うハリベルのほうへ視線を向けずそっぽを向いたままフェルナンドが答える。

「別に大した事じゃねェよ・・・・・・　ただ、俺はグリムジョーの野郎に”負けちまった”んだな、と思っただけさ。」

ハリベルの方に視線も向けず答えたフェルナンド、その言葉にハリベルは驚いた。
”負けた”フェルナンドの口から出たその言葉、結果だけを見れば相討ちによる”引き分け”といえる先の死合、しかしフェルナンドはソレを負けと言い切った。
彼が負けたと口に出した事もそうだが、ハリベルを驚かせたのはそのあまりにあっさりとした言い様だった。

負けるとは死ぬ事。

それがフェルナンドの戦いの哲学。
その彼が3度も負け、そして生き延びたのだ。
ハリベルの知る、いや、ハリベルが考えるフェルナンド・アルディエンデという破面の性格から考えれば、今”負けた”などという事をそう簡単に口走るはずも無く。
そしてなによりそれを口に出したときの表情は、もっと憤怒や屈辱に歪み、大きな感情の爆発を伴うものであるはずだった。

だがしかし、今目の前であっさりと”負けた”と口にする彼の表情は、憤怒も、屈辱も一切窺うことはできなかった。
強いてその表情を表現するならば”惚けている”、簡単に言えば”ぼーっとしている”という状態であった。
あまりにハリベルの想像と違うフェルナンドの態度、しかしその口から負けたという言葉が出た事もまた事実、故にハリベルは問う、その問の答えも全て判った上でそれでもフェルナンドの口からそれを聴く為に。

「ほう・・・・・　両者同時に攻撃し、両者同時に地に倒れ、両者同時に気絶した。見事なまでの”引き分け”の様に見えたがお前はそれを”負け”という。何故だ？　”勝ち”では無いにしろ”負け”より”引き分け”の方がマシだと思うがな・・・・・」

それはどこか甘い言葉、負けではなく引き分けでもいいのではないか、傍から見れば結果は引き分けに見えた、ならばそれでいいではないか、と。
あえてそう口にするハリベル、これでその言葉に乗ってしまうようでは自分の見込み違い、すぐさま此処から放り出して以降一切の関りを持たない、そんな考えを内に抱きつつ、しかしフェルナンドが

そんな愚か者ではないとどこか確信めいた予感を持っての言葉。
その言葉にフェルナンドは顔を背け、頬杖をついたまま答える。

「何が”引き分け”だ・・・・・・　コッチは出せる全力を出し切ってボロクソになったが、アノ野郎は解放どころか斬魄刀すら抜いてねぇ。それでも野郎を倒したから”引き分け”だ、なんて恥知らずもいいような事口が裂けてもいえるかよ。あれは俺の”負け”なんだよ。」

発する声にもあまり鷹揚は無く、ただ淡々と事実のみを口にするようなフェルナンド。
しかし、その口から発せられた言葉はハリベルの考えたとおりのものだった。

確かに結果だけを見ればフェルナンドとグリムジョーの死合は”引き分け”で幕を閉じた、が、その内容を今一度良く見ればその評価は確実に変わってくる。
業をもって戦うフェルナンドと、霊圧による肉体強化で戦うグリムジョー、両者の戦いは霊圧で勝るグリムジョーが勝つかと思われたが、業を巧みに用いたフェルナンドが一矢を報い、フェルナンドの捨身の霊圧解放により戦いは五分へ、そして両者相討ちでの引き分けとなった。
客観的に先の戦いを見ればこんなところだろう。

しかしこの戦いには大きく欠けた部分がある。
肉体、あくまで人型としての戦闘ならばまだいいだろう、だが『破面』という存在の、戦いでの真骨頂はそれではないのだ。
破面化と共に別れたもう一つの姿、斬魄刀という刀の姿に押さえ込んだその本性、破面化で高位への昇華した肉体に更に己が力の本性

を回帰させる事、『帰刃（レスレクシオン）』それこそが破面の戦いの真骨頂なのだ。

もう一度戦いを振り返る。

フェルナンドとグリムジョーは互いの”拳足をもって”戦った、最後まで、力尽き倒れるその時まで”殴り合って”戦ったのだ。

刀を持たないフェルナンドならばそれは当然、己の武器はその拳と足のみなのだがら。

しかしグリムジョーは違う、その腰にはしっかりと己の分身たる斬魄刀を挿しているのだ。

フェルナンドは”拳足をもって全力で”戦った、だがグリムジョーからすれば”斬魄刀を使わずに”戦ったのがあの死合なのだ。

出せるギリギリの力をもって戦ったフェルナンドと、ある意味余力を残していたグリムジョー。

だがグリムジョーも決して無意味な余裕から斬魄刀を抜かなかったわけではないのだろう。

グリムジョーからすれば自分を舐めた態度で挑んでくるフェルナンド。

そのフェルナンドが斬魄刀を持たず、使わない状況の元、自分だけがそれを抜き放ちあまつさえ解放して戦うなどという事を、グリムジョーのプライドが許さなかったのか。

あくまで同じ土俵の上に立ち、同じ条件下でフェルナンドを殺す事で自分が上であると証明して見せようとしたのかそれは定かではない。

結果、余力を残す形となったグリムジョーと相討ちとなったフェルナンド。

全力は出し切った、しかし相手に全力を出させる事ができず倒れた、そんなものは負けだろうとフェルナンドは言っているのだ。

そんな言葉を零すその姿はやはり常の彼とはあまりに懸離れていた。
戦いの結末に、勝敗にこだわるフェルナンドが、どこか自分が負けたことなどどうでもいいような態度をとっている。
ハリベルにしてもそれは不可解ではあった。

「ならばどうする？　その傷が癒え、グリムジョーの傷も癒えればまた直ぐにでもお前はヤツに挑むのか？」

ハリベルは更にフェルナンドの奥深く、その考えを覗こうと質問する。
一体彼が今何を思い、考えているのか、それを知らねばハリベルがこの場所に来た本当の目的を果たす事などできなくなっていた。

「わからねぇ・・・・・・それがわからねぇんだよ、ハリベル。いつもの俺なら今すぐにでも飛び出して、野郎に殴りかかってるはずだ。だが、今の俺にその気はねぇ・・・・・・　俺はどっかおかしくなっちまったのかねぇ。アンタとやり合った時みたいにビビッて引いた訳でもねぇ・・・・・・じゃぁコイツは何だ？　すっきりしねぇこの感じは何だ？空虚とは違うこの重てぇ感情は一体なんだってんだよ・・・・・・」

ハリベルの問にフェルナンドから言葉が零れる。
グリムジョーに挑むのかと問われたフェルナンドの答えはなんと『否』だった。
負けたという屈辱、彼ならば耐えられないであろうそれをして尚フェルナンドは挑まない、挑む気がないという。

そうしてハリベルの問に答えるにつれ、フェルナンドの表情に変化が現れる。
半眼で惚けていたような表情から徐々にだがその顔に別の表情が形作られていく。
頬杖をやめ、しかしその視線は落としたままでその手を胸の前へと持ってくると、純白の衣を片手で強く握り締める。

そして胸の中心を掴むようにしているフェルナンドに浮かぶ表情は”困惑”だった。
自分が何故グリムジョーに挑もうとしないのか、それは一体何故なのか、そして掴んだ胸の更に奥にこびり付くようにしてある、重い重い感情の正体は一体なんなのか、その全てをフェルナンドは計りかねている様だった。

ハリベルはそんなフェルナンドを黙って見つめる。
フェルナンドの抱える感情、その正体、グリムジョーという破面と戦った事で生まれたソレ、その理解しきれない感情の荒波、ハリベルはソレを見抜き、どこか嬉しくもありまたどこか寂しさも感じていた。

「ハリベル、アンタならコイツが何なのか分かるのか?アンタとの戦いで感じた”恐怖”とは違うこの感情がなんなのかを・・・・・・」

顔を上げたフェルナンドがハリベルに問う、この不可解な感情はなんなのかと。
彼がはじめてハリベルと戦い、そして初めて負けたときに感じた感情、命削る戦いの中でハリベルの一撃にその身を曝した瞬間に感じた初めての感情

”恐怖”

フェルナンドは今自分の内にあるこの不可解な感情がその恐怖に近しく、だがしかし非なるものではないかと感じていた。
故にフェルナンドはハリベルに問う、自分にはじめて恐怖を齎した彼女ならば、この似て非なる感情を知っているかもしれないと考えた故に。
そんなフェルナンドの問にハリベルは静かに答えた。

「・・・・・ソレは”畏れ”だ。フェルナンド、お前はグリムジョーを畏れているのだ・・・・・・」

「ッ！　ふざけんな！　俺はアイツにビビッてなんかいねぇ！！」

ハリベルの答えはフェルナンドの考えを否定した。

”畏れている”

ハリベルの口にしたその言葉、”恐怖”と”畏れ”言葉は違えどその意味はほぼ同じ、それ故にフェルナンドはその言葉を否定する。
自分はグリムジョーを恐れていないと、ソレは恐らくフェルナンドの本心からの言葉であるし、ハリベル自身もソレは分かっていた。
アノ戦い、グリムジョーはどうか定かではないが、フェルナンド自身は心底愉しくて仕方がなかったのだろう、己と同等の力を持ち己の全力を持ってして打倒しきれるかわからない相手、伯仲した実力のもの同士の戦いそれは格別のものがある。

だがそれ故に、そんな戦いであったが故にハリベルは確信していた、

フェルナンドが”畏れ”ていると。

”恐怖”と”畏れ”、言葉は違えどその言葉の意味はほぼ同じ、ならばこの場でその言葉それぞれが示す内容こそが重要であり、ハリベルの言う”畏れ”と、フェルナンドの言う”恐怖”には明確な差が存在していた。

「確かにお前はグリムジョーとの戦いの中で”命を失う恐怖”を感じながらも、それに屈する事無く戦い抜いた・・・・・・だが、戦いが終わり、こうして目を覚まして冷静にその戦いを振り返った時、お前は気付いてしまった。自分とグリムジョーの“差”に、グリムジョーに手加減されていたかもしれないという現実に・・・・・・」

「うるせぇ!! 俺はそんな事考えちゃいねぇ!勝手に俺の事を分かった風な口を効くんじゃねぇよ!!」

“命を失う恐怖”
戦いに身を置くものにとって決して切り離す事のできない感情、そして切り離してはいけない感情。
戦士と獣を別ける境界線、分水嶺であるその感情、フェルナンドの言う恐怖とはそれのことなのだ。
その感情を胸に抱きながらもフェルナンドは戦ったのだ、グリムジョーという強き破面と、同等の力を持つと思った相手だからこそその全てを出し切り勝利しようとしたのだ。
しかし、それ故にフェルナンドに芽生えた新たなる感情、ハリベルはフェルナンドの再度の否定を無視して言葉を続ける。

「いや、お前は”畏れている”んだフェルナンド・・・・・・グリムジョーという破面を、この虚夜宮に来て初めて”対等”な戦いが

出来た相手が更なる力を持っていたという現実、自分が対等だと認めた相手が自分以上の力を持っていたという現実・・・・・・」

「止めろ・・・・・・　黙れ、ハリベル・・・・・・・」

ハリベルが紡ぐ言葉の一つ一つがフェルナンドの内面を暴いていく。
安易に踏み込むべきではない領域、それを暴かれる不快感がフェルナンドの内にじわじわと広がっていく。
それに不快感を感じるという事実、それこそハリベルの言葉が真実であるという証明。

ハリベルは言葉を紡ぐ、彼女とて不快感を感じている。
己が内を他者に暴かれるという不快感と同等のそれ、他者の内に土足で入り込み暴き立てるという非道。
しかしそれをして尚ハリベルは言葉を止めない。
フェルナンドという破面が向き合わなければならない現実を伝えるために。

「お前は”畏れ”ているんだ・・・・・・　自分が対等だと認めた相手に、自分が全力で挑み戦った相手に、“力”を使うに値しない、その”価値が無い存在”だと、そうグリムジョーに失望されているのではないかという事に対する畏れ・・・・・・それがおまえのその感情の正体だ。」

「ッ・・・・・・・・・・・・・・」

ハリベルの継げた言葉に押し黙るフェルナンド。
それはハリベルが語る言葉によって己の感情の正体に気付き、それ

を認めたが故の沈黙だった。

価値が無い存在、それは必要とされず、あってもなくても同じである存在、故に無価値、故に、存在しない存在。

対等の存在である、それだけの力が自分にはある、その自負の裏で相手にその価値なしと、それに足る存在ではないと思われ、そして失望される悲しさ。

そしてそう思われているかもしれないという恐怖、フェルナンドの中にあるのは”命を失う恐怖”ではなく、自身が”取るに足らない存在という恐怖”、グリムジョーに失望されたという”畏れ”だとハリベルは言った。

『好敵手』という言葉がある。

同等の実力のもの同士、戦えばどちらに勝利が訪れるかなど分からず、ほんの小さな切欠、瞬間がそれを左右するほど実力の伯仲した者同士のことを指さす言葉である。

フェルナンドはグリムジョーと戦う中で、無意識に彼の事を好敵手であると、この者だけには簡単に負けることは出来ないと、そう感じていた。

それは互いの戦いに向かう姿勢が、どこかに通っていたためなのかもしれない。

互いに目指すものの為、それを妨げるモノ、立ちはだかるモノの全てを悉く粉砕し、その身が朽ち様とも決してそれを諦める事ができない不器用さ。

似通っているからこそ、だからこそこの者だけには負けられない、その思いがフェルナンドに強く根付いていた。

しかし、相討ちの末気絶し、目覚めたフェルナンドが冷静にあの戦いを思い返すと、其処にあるのは無様な”負け”という結果だけだった。

戦う事に、グリムジョーという対等の存在と戦う事に夢中で、フェルナンドが気付けていなかった現実が其処にはあった。
そして同時にこみ上げてきた感情、自分は加減されて戦い、いい様にあしらわれ、そして負けた、と。
更なる力をその身に持ちながらそれを使うに値しない、その価値が無い存在であると、そう思われているかもしれないという現実が其処にあり、それはフェルナンドにとってあまりに悔しく、そして怖ろしい事だったのだ。

ハリベルほどの実力者に挑み、加減される事と、グリムジョーという恐らく対等であろう者に挑み、加減され負けるという事。
その違い、フェルナンドとて口では『アンタを殺す』と言っているが、実際今のままでそれを成す事が不可能であるとも分かっていた。
それ故に己を鍛え、ハリベルの誘いにも乗り、こうして力を付け様としているのだ。

しかし、グリムジョーはおおよそ今の自分と同等であるとフェルナンドは考えていた。
同等の実力者、虚夜宮で出会う初めての相手、その相手に手を抜かれていたかもしれないという現実。
それがフェルナンドを苦しめる、手加減された事もそうであるし、何より自分が好敵手だと思った相手に、自分の存在を認めさせる事ができなかった己の“弱さ”。
自分が認めた相手であるが故に、その相手に失望され、蔑するモノとして見られる事をフェルナンドは恐れたのだ。

「・・・・・・・・・・・・　そうさ・・・・・・俺は野郎を倒す事も、認めさせる事も、刻み付けてやる事もできなかった。じゃぁ俺はどうすればいい・・・・・・　グリムジョーの野郎は俺にその力を残したまま戦いやがった。なら俺はどうすればいい・・・・・・

野郎に俺という存在を刻み付けるにはどうすればいい、今のままじゃぁダメだ。今のままじゃ野郎の前に俺は・・・・・・　立てねぇ・・・・・・」

沈黙の後にフェルナンドから言葉が零れる。
それはグリムジョーを恨む言葉ではなく、己の力不足を、不甲斐なさを、己の弱さを嘆く言葉。
畏れることは己の弱さで相手を失望させてしまったこと、それを拭い去るには今のままでは不可能だと、今のままでは先の二の舞、いや、それ以下の結果は目に見えている。
故に今のままではグリムジョーの前に立つことはできないと、フェルナンドは苦々しく言葉を紡ぐ、そしてその悔しさのあまり強く握られた拳からは、紅い雫が滴っていた。

そんなフェルナンドの姿を黙って見ていたハリベルが、フェルナンドの腰掛ける寝台に近付く。
その瞳は何を思うのか、真っ直ぐにフェルナンドを見据えていた。

「悔しいか、フェルナンド・・・・・・　自分の力がヤツに届かない事が、自分の力をヤツに示せなかった事が、自分の弱さ故に相手を落胆させてしまったかもしれない事が・・・・・・」

「・・・・・　あぁ、悔しいね・・・・・・　ハリベル、アンタに負けた時よりも・・・いや、今迄で一番悔しい。アノ野郎にだけは負けられねぇ、グリムジョーの野郎にだけは・・・・・・このままじゃ終われるわけがねぇ・・・・・・」

ハリベルの言葉に悔しさを滲ませながら答えるフェルナンド。

惚けた様な、どこか他人事のように自分を語っていた彼の姿は其処にはなかった。
負けたことへの屈辱や怒りはやはり無い、しかし今、彼にあるのは悔しさ、不甲斐なさ、そして絶えぬ闘志だった。

「そうか・・・・・　ならば”コレ”を取れフェルナンド。この一振りを持って己の内の”畏れ”、断ち切るがいい。」

そう言ってハリベルは、その手に先程から握っていたモノをフェルナンドの眼前へと示した。
それを見たフェルナンドの瞳が大きく開かれる。

「そいつは俺の・・・・・　だがハリベル、俺はまだそいつを取る訳にはいかねぇ、俺はまだ・・・・・・」

フェルナンドの眼前にハリベルが差し出したもの、それは”刀”だった。
ただの刀ではない、それはもう一人のフェルナンド・アルディエンデといっても過言ではないモノ、フェルナンドという破面の本性、本質、本能を詰め込んだ一振り、ただ一振りだけの彼だけの斬魄刀だった。
しかしフェルナンドはそれを取る事に躊躇いを見せた、それもそのはず、その刀をとるための条件を彼は満たせていないのだ。

『数字持ちを全て倒す』
それがこの刀を手にする条件、しかしフェルナンドはそれを満たしていない。
グリムジョーとの戦いを彼本人が”負け”であると認識している以

上、それを取る事はできないのだ。
躊躇うフェルナンド、しかしそんな彼にハリベルは辛辣な言葉を浴びせる。

「フェルナンド・・・・・・　お前のその意地と誇り高い姿勢は賞賛に値する。しかしその意地が、誇りが、今お前の枷となっている。何故躊躇う、あの者に己を認めさせようとするお前が、私に悔しいと言ったお前が何故躊躇う。誇りを守る事は尊い事だ、だが誇りに縛られ道を誤るのは愚かな事だ。目の前に、お前の目の前に強くなれる可能性があるというのにそれを取らないのは誇りではない、お前の求めるものは何だ?そのために必要なものは何だ?　その意地を通すことか?本当にそうなのか?」

ハリベルの言葉に彼女らしからぬ熱が篭る。
躊躇いを見せるフェルナンド、何処か覇気のないフェルナンド、そんな彼をハリベルは知らない。
ハリベルの知るフェルナンドは烈火の如き戦士なのだ、その彼が今見せる姿をハリベルは好ましいものと思えなかった。
そんな彼女の思いが更に紡がれる。

「私はお前がこの”刀”を持つに相応しい者となったと、ただ力という”刃”を振り回すだけの愚か者ではなく、それを制する”鞘”を持った戦士となれると感じた。故にコレを渡す事に決めた、私がそう決めたのだ。どうしても自分の意思でコレを取れないというのなら、私が押し付けたと思えばいい、仕方なく受け取ったに過ぎないとでも思えばいい。だがらコレを取れフェルナンド・・・・・・
私に、これ以上そんな姿を見せるな・・・・・・」

フェルナンドへと紡がれるハリベルの思い。
それはフェルナンドの成長を認める言葉、刀を取るに足りると、私に挑むに足るであろう資質を見せたと、ハリベルはそうフェルナンドに言ったのだ。
だから刀を取れと、一時の意地に流され可能性を閉ざしてくれるなとハリベルは諭す様に語り掛ける。
どうしてもダメならば自分が押し付けた事にしてもいいと、そうまでしてハリベルはフェルナンドのこの状態を解消しようとする。
それは彼のためでもあるし、何より彼女自身のため、烈火の戦士の消沈を彼女は見ている事ができなかった。

そんなハリベルの言葉を黙って聴いていたフェルナンド。
瞳を閉じ、考え込むようにしてその言葉を聴いていたフェルナンドがゆっくりとその瞳を開き、真っ直ぐハリベルを見つめ、そしてバツが悪そうに小さく舌打ちをすると、ハリベルの言葉に答えるように言葉を返す。

「・・・・・いいか、コレは俺の意思だ。　決してアンタに押し付けられたわけでも、仕方なくでもねぇ。俺が俺の為に決めた事だ、だからハリベル・・・・・・アンタこそ、俺の前でそんな顔するんじゃねェよ・・・・・・」

そう言ってフェルナンドは眼前に差し出されていた刀を手に取る。
フェルナンドにしっかりと握られたその鞘、肌に吸い付くように自然にその手の内に収まるそれ、もう一人の自分と出会ったような、欠けていた一部が戻ったような奇妙な感覚をフェルナンドは覚えた。
彼が、彼の意思で、彼自身の為に取ったその刀、それはフェルナンド・アルディエンデがまた一つ戦士として成長した証でもあった。
そして何よりそうさせたハリベルこそが彼の成長の重要な因子だっ

たのだろう。

フェルナンドが見たハリベルの表情、それはフェルナンドに己の小さな意地を曲げさせるに足るものだったのだから。

刀を取ったフェルナンドをハリベルはどこかほっとしたような表情で見つめる。

しかしその柔和な雰囲気はまた直ぐに霧散し、戦士としての顔の奥に隠れてしまった。

「フェルナンド、少し刀を抜いてみろ。」

戦士ハリベルがフェルナンドに刀を抜いてみる様促す。

フェルナンドは言われた通りその紅い柄に手をかけると、鞘から刃を少し引き出した。

引き出された鈍色の刃、何の変哲も無いその刃、フェルナンドはそれをじっと見つめ、一頻り見つめ終わるとゆっくりと刃を鞘に戻した。

「何が見えた・・・・・・・」

「・・・・・俺だ、俺が見えた。　荒れ狂うような猛火、立ち昇る炎の渦、猛々しい炎の、海・・・・・」

ハリベルの問いかけにフェルナンドが答える。

その鈍色の刃に映るもの、他者が見てもそれは見えず、その持ち主たるフェルナンドゆえか、それとも彼の成長の証なのだろうか、刃

に映りこむ己の瞳の奥、それとも刃自身にか、或いはその両方なのか、フェルナンドにはハッキリとそれが見えていた。

猛々しい炎の海、火柱が立ち昇り、紅い波がうねる雄々しき炎が。

「それが、それこそが本当のお前の姿だ。　見失うなよ、フェルナンド・・・・・・」

「あぁ、俺はもう見失ったりしねぇ、俺は強くなる。強くなってヤツにも、そして、お前にも俺を、刻み、付けて、やる・・・ぜ・・・・・・」

刃に映るその姿、それこそが本当の自分である。

ハリベルはそれをフェルナンドに告げた、そしてそれをもう見失うなとも。

己という存在の体幹、それさえ失わなければ倒れる事はない、フェルナンドアルディエンデという存在は常に在るとハリベルは伝えようとしたのだ。

そんなハリベルの言葉にしっかりとその瞳に意思を灯して答えたフェルナンドだが、ボロボロの身体、そして無理矢理覚醒していた意識は限界を迎え、遂にそのまま寝台へと倒れてしまう。

あまりにも急に眠りに落ちてしまったフェルナンド。

それは無意識の緊張から解き放たれた故なのか、単純に肉体的に限界だったのか、今はそれを知る必要も無かった。

そんなフェルナンドの眠る寝台に、ハリベルが一歩ずつ近付く。

ゆっくりと小さな寝息を立てるフェルナンドを見るハリベル。

其処には己の弱さを悔いていた戦士も、また強き烈火の戦士もおらず、ただ一人の少年が眠っていた。

そんなフェルナンドの寝台にゆっくりと腰掛けるハリベル。
そしてフェルナンドの髪に指を掛けると、ゆっくりと、そしてやわらかくその手で梳る様に撫でる。
何を言うでもなく、ただフェルナンドの髪をすくハリベル。
その瞳は戦士のそれではなく、ただ優しさを湛えている様に見えた。

そして、ゆっくりとした時間だけが過ぎていった・・・・・・

獣の王

目覚めたそこは
混沌空間

嵐の男

眼に映るは
未来の闘争

BLEACH El fuego no se apaga. 17（後書き）

読んで頂いて本当にありがとうゴザイマス。
これを読んでくれた貴方は勇者です。

まぁ今回のこの暗～い話になった理由なんてものがありまして
理由は一重に作者の精神状態の悪さ。
この1～2週間で人の死というものに考えさせられる様な出来事が多々ありました。
”死”そのものも然ることながら、遺族の悲しみというものをモロにみてしまい、
精神が引っ張られ気味になってしまいました。

そんな中書いているものだからまぁ筆は進まないし
内容はなんだか暗くなるし、精神状態が作品に影響するようではダメなのかな・・・・・・
今回は恐らく賛否両論。

でも何でもいいからこれを吐き出さないことには前に進めない気がしまして
自分なりに乗り越えていこうと投稿しました。
作者の我儘をお許しください。

彼が目を覚ますと、其処に見えたのは偽りの青空ではなく、白い天井だった。
予想とは違う光景、しかし彼はそのことを然程気にするでもなくその視線はただ天井を見ていた。
恐らく彼が今”視て”いるのは天井などではなく彼の意識が失われる直前の風景、前後不覚、意識を失う前に自分が何をしていたのか、それを彼は思い出そうとしていた。

誰かが笑う声、金色の髪、自身の激しい怒り、それらが少しずつ彼の記憶の奥から浮かび上がる。
浮かび上がるそれは次第に鮮明になり、ぼやけていた出来事の輪郭もその形を取り戻すように再度形作られていく。
痛みと驚愕、強烈な意思、そこで彼は自分が戦っていた事を思い出す。
そしてその相手を思い出そうと更に記憶の奥に踏み込もうとした瞬間、見えたソレによって彼は全てを思い出した。

彼が見たそれは”瞳”
彼を射抜かんばかりに見据えるその瞳、それは血を湛えたかの様に色濃く、しかし一方で何処までも澄んでいる瞳、その者の意思を何よりも強く感じさせるその瞳。

紅い紅いその瞳を彼は思い出したのだ。

「ッ！　クッ・・・・・あのクソガキ・・・・・・」

全てを思い出し、急激に身体を起こした彼だがその身体の痛みに顔を歪ませる。
襲う痛みは戦いのそれ、紛れも無くあの少年との戦いによって生まれた傷による痛みだった。
動けないというわけではない、しかしその身体に確実に違和感を残すほど、少年の拳は彼にダメージを与えていた。

一つ少年に対して悪態をついた彼は、自分の置かれた状況を確認する。
彼が今まで眠っていた場所は少年と戦った青い天蓋の下ではなく、どこか屋内の一室らしく、白い壁に囲まれた部屋には小さな四角い窓が一つあるだけだった。
痛みは残っているもののその身体は確実に回復しており、この状況下それが何者かの手によるものであることは明白だった。
みれば彼が着ているのは少年との戦いで破れ、ボロボロになった彼の白い死覇装ではなく、多少趣向は違うものの一般的な白い死覇装に変えられていた。

何故自分がこんな場所にいるのか、此処が何処であるのかすら分からない状況、その状況を打開するため彼が自身の探査回路（ペスキス）を奔らせようとした瞬間、彼の耳に誰かの声が聞こえてきた。

「待っておくれ吾輩の美しいお花さん、そんな仕事など抛って置いて吾輩と午後のお茶など愉しまないかい？なぁに心配は要らない、何せ此処は我輩の城、何人たりとも吾輩たちの甘い時間を邪魔など出来ないさ。」

「こ、困ります第６十刃様・・・・・・」

「おぉ何たる事、第６十刃等と堅苦しい・・・・・・そんな呼び名などやめて、『ドルドーニ』と吾輩に優しくささやいておくれ美しいお花さん。十刃と下官、階級と立場に隔てられた二人の恋・・・・・・まさに現世の文学に記されていた『ロミオとジュリエット』なる物語そのまま！　隔てられた二人の恋は今まさに燃え上がる！さぁ！　今こそ愛のくちづけを・・・・・・」

「ヒッ！　い、いい加減にしてください！！」

「ンボハ！！！」

おそらく彼のいる部屋の入り口の前で行われていたであろうその会話。

どうやら男が女に言い寄り、迫ったところを返り討ちにされたようだ、なにせ彼の部屋にその言い寄っていたであろう男が、物凄い勢いで転がり込んできたのだがら。

部屋の床で小刻みに動く男、その男を入り口の辺りで見ていた女、どうやら下官であるその女は床に転がる男を一瞥すると「フン」と鼻を鳴らし、そっぽを向きそのまま歩き去ってしまった。

「ぬおぉ・・・・・・　この角度、的確に顎を捉える慧眼、そして

この威力、申し分ない・・・・・・美しいお花（フロール）さん、吾輩と共にその平手で十刃の星を目指さないか？ひいてはそのために吾輩とお茶でも・・・・・・・・・・・・ま、待っておくれ吾輩の美しいお花（フロ）さん（ール）～～」

男は入り口に背を向けたままゆっくりと膝立ちになり、何事か呟くと後ろを振り返る。
しかし言葉をかけていたであろう女の姿は既にそこには無く、慌てて床を這うようにして入り口に近付くが女の姿は遥か遠くとなっているようで、四つん這いの体勢で伸ばされた片手は空を掴み、その姿は哀れとしか言いようが無いものだった。
そのままガックリとうな垂れる男、全体的に影を背負うようにしているその男の姿はどこか薄く、希薄にも見えた。

「アァ・・・・・・　また一つ吾輩の恋が散っていった・・・・・・・・吾輩が欲しいものは何時だって吾輩の手から滑り落ちていくのか、なんという無情・・・・・・その辺り、欲しいものを手に入れた君はどう思うかね？　破面（アランカル・ドセ）Ｎｏ．１２　グリムジョー・ジャガージャック君。」

「ッ！」

完璧に女性にフラれたであろう男が、四つん這いの体勢からゆっくりと立ち上がり振り返る。
先程までの軽薄な振る舞いではなく、洗練された立ち居振る舞いを見せるその男、両手でその口髭を整えながら向き直る男の姿は紳士然とし、見る者にその男の品位を伺わせる。

がしかし、その男の頬に付いた”真っ赤な紅葉の葉”のおかげで、その全ては台無しとなっていた。

彼、グリムジョー・ジャガージャックは驚いていた。
いきなり彼のいる部屋に転がり込んできた男、ただ騒々しいだけならばグリムジョーとてこれほど驚きはしなかった。
グリムジョーが驚いているのはもちろん目の前の男の”紅葉の葉”などではなく、その男の存在自体。
ただの破面ならば問題はなかった、数字持ちの実質的一位であるグリムジョーを知らぬ破面はそうはいなかったからだ。
しかし先程の女の発言がグリムジョーに驚きを齎していた。

”第6十刃（セスタ・エスパーダ）”

確かにあの下官の女はそう口にしたのをグリムジョーは聞き漏らさなかった。
あの場所にいたのはあの女と目の前の男のみ、必然的に誰が第6十刃なのかは分かるというものだ。
目の前の男こそ自分より遥か上、別次元の実力を持ち、この宮殿『虚夜宮（ラス・ノーチェス）』の主、藍染惣右介の十の剣の一角を担う者なのだとグリムジョーは理解した。
そしてその十刃が自分の名を知っている、それは異常な事だった。
そして何よりグリムジョーを驚かせたのはその破面の最高位たる十刃が、彼を助けたという事実だった。

「テメェ・・・・・・　なにが目的だ・・・・・・」

目の前の十刃に対してグリムジョーが、訝しく思う感情を隠しもせず問いかける。
それも当然といえよう、そもそも十刃が一介の数字持ちを助け、治療する理由が彼には見つからなかった。
彼らが住む世界は慈悲や情け、助け合いなどという感情とは隔離された世界。
目の前で死に掛けている者がいても視線を向ける事も無く、助けを求められればその声が耳障りだと頭を踏み潰される、そんな殺伐とした世界なのだ。
そのなかにあって自分が助けられたという事実、漏れなくその世界の理の中で生きてきたグリムジョーにとって、それは理解不能な行いだった。

「おやおや、命の恩人に対してなんと言う口の聞き方。まだまだ”若い”な、そんな事では吾輩のような立派な紳士にはなれんぞ青年。目的かね？　そんなものありはせんよ、しいて言うならば”目的”ではなく”対価”というべきか。な～に、人の城の庭先で殴り合っていた君達の戦いを観戦させて貰ったのでね、その対価として傷を治してあげたまでさ。」

グリムジョーの問に人差し指を立てて横に揺らしながら、軽く彼を窘める男。
グリムジョーにとってそんな男の言葉など届くはずも無く、重要な部分だけが彼の耳に届いた。
男は見ていたという、グリムジョーとあの少年、フェルナンド・アルディエンデとの戦いを、そしてそれを見た対価として自分を治したのだと。
グリムジョーの中にフェルナンドとの戦いの記憶が蘇る、そしてその表情は苦々しいものへと変わっていった。

しかし、そんなグリムジョーに構わず男は話し続けていた。

「なかなか良い戦いだったのでね、いいものを見せてもらっておきながら、それを創り上げた者をそのまま抛って置くのは吾輩の紳士道に反する。故に君を吾輩の城、第6宮(セスタ・パラシオ)まで招待したというわけだよ。あぁ、吾輩とした事が名を名乗るのを忘れていた、吾輩の名はドルドーニ。藍染様より『6』の数字を賜りし、嵐を呼ぶ男!ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオであ～る！　・・・・・・・・・・・・ヨシ！」

自分の名を言い終えた後に何故か小さくガッツポーズをする男。
第6十刃、ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ、それがグリムジョーを助けた男の名だった。
グリムジョーにとって今はまだ雲の上の存在である十刃、それが何故自分とフェルナンドの戦いに興味を持ったのかは定かではないが、グリムジョーにとってそれはあまり好ましいものではなかった。
それは要するに見られていたという事だ、あの戦いの一部始終を、グリムジョーからしてみればあまりに無様なあの戦いを。

「いやはや、少年(ニーニョ)もなかなか頑張ってはいたが、やはりまだ君の方が強いようだ。斬魄刀も抜かずにあの少年の猛攻を防ぎきり、倒してしまったのだから。あの戦い、両者共に倒れはしたが、内容を見るに君の”勝ち”、といったところかな。」

そんなグリムジョーの感情を他所に、ドルドーニが先の戦いを振り返る。

結果的に両者相討ちとなりはしたが、その内容、そしてなによりグリムジョーが斬魄刀を抜かず拳足のみを持ってフェルナンドを打倒したという点をドルドーニは評価し、あの戦いの勝者はグリムジョーだったという私見を述べた。
おそらくある程度の実力者が見れば先の戦いはそう評価されるであろう、勝ったのはグリムジョーである、と。

しかし、その評価は他ならぬ勝者の言によって否定される。

「俺の”勝ち”だと？　ふざけんじゃねぇぞ・・・・・・十刃の眼はとんだ節穴だな。」

「・・・・・ほぅ、あれが”勝ち”ではない、と・・・・・・では一体なんだというのかね？　斬魄刀を抜かず、解放もせず、あえて少年（ニーニョ）と同じ舞台で戦う事で己との力の差を少年に思い知らせようとしたのだろう？今頃少年も分かったのではないかな、君との差を、それも含めて君の”勝ち”なのでは？」

勝者による勝利の否定、勝者に似つかわしくない苦渋の表情、それは何故の事か。
グリムジョーのその言葉にドルドーニが問いかける、その顔は偽りの仮面（ひょうじょう）を脱ぎ捨てた、戦士の顔となっていた。
そのドルドーニが問う、グリムジョーが勝利を否定する理由はなんなのかと。

グリムジョーはフェルナンドとの戦いの中で斬魄刀を抜こうとしなかった。
それは一重に彼のプライドがそれをよしとしなかったのだ、無手で

挑んでくる相手、自分を舐めたような態度で挑んでくる相手、その相手に自らの愚かさと無力さを判らせる為に、グリムジョーはあえて斬魄刀を抜かずに戦っていた。
拳によって、相手の最も得意とする戦いにおいて勝利し、絶望を与えた後に殺す、グリムジョーはそう考えていた。

「”勝ち”じゃなきゃもう一つは”負け”に決まってるだろうが・・・・・斬魄刀を使ってねぇ？　解放してねぇ？そんなものは後から取ってつけた言い訳じゃねぇか。あのクソガキに俺は全てにおいて勝っていた、力も、体躯も、経験も、全てだ。・・・・・だが俺は倒れた、俺より弱いヤツと戦って倒れた、その時点で俺の”負け”だろうがよ。」

二人の人間がいるとしよう。
片方は一流の格闘家、もう片方はただの人間、その二人が戦ったとしてはたしてどちらが勝つだろうか？
結果は簡単だ、格闘家が勝つだろう。
だがもしも何らかの要因で、自分が倒れるのと引き換えにただの人間が格闘家に膝を着かせたとしよう、それでも格闘家は自身の勝利を叫ぶ事ができるだろうか？
答えは否だ。
周りがいくら”勝ちだ”といっても関係ない、本人のプライドがそれを許さない。
その勝利に手を伸ばせばそれは二流、自身の戦いに正面から向き合わず目先に栄光に囚われる愚行、一流と二流の境界線。

閑話休題、グリムジョーが言う”負け”とは後からいくら状況を整理し、客観的にその戦いを分析して勝敗を決しようともそれは無意味だという事。

どちらが強かった、どちらが優れていたなどという事はまったく関係ない瑣末な話だという事。
戦いの決するその瞬間に立っていた者こそ勝者でありそれ以外は皆、敗者だという事なのだ。
故にグリムジョーはドルドーニの言葉を否定し、自身が”負けた”と言ったのだ。

（なるほど・・・・・　この青年（ホーベン）、ただの獣（ベスティア）かとも思ったが吾輩の思い違いのようだ。後々の楽しみがまた一つ増えたな・・・・・・）

そんなグリムジョーの言葉を黙って聴いていたドルドーニは、密かにグリムジョーへの評価を改めていた。
”獣”それがドルドーニのグリムジョーへの評価、理性ではなく本能でその爪を振るい、その本能の赴くまま眼前の敵を殺しつくす獣、それがドルドーニが見たグリムジョーという存在の核だった。
しかし、グリムジョーの勝者と敗者についての考え方を聞いたドルドーニはそれを改める。
勝者と敗者、つまり勝ちと負け、その概念、獣には”負ける”という概念などない、”勝つ”以外に生き残る術などないのだから。
故にどのような勝利にも喰らいつく貪欲さがある、しかしグリムジョーは己の”負け”という概念を持つ。
己の敗北を認める精神、己にとって傷としかならないそれ、だがそれを曲げられないその自身のプライドに対する高潔さ、それは獣ではなく戦う者に共通する勝負への向き合い方だった。
獣の性を律する戦士の片鱗を、ドルドーニは見ていた。

「ならば君はどうするのかね？　もう一度少年と戦い、次こそは完膚なきまでに叩き潰し、完璧な勝利を得ようというのかい？」

「あぁ？　そんなもん当然だろ。　あのクソガキは俺が殺す！・・・・・だがそれは今じゃねぇがな。」

「なぜだね？　今ならば確実に君が勝つではないか。」

グリムジョーという破面に興味を持ったのか、ドルドーニは更に彼に問いかける。
彼にとって負けである戦い、フェルナンドとの戦いをどう決着させるのか、という問にグリムジョーは至極当たり前といった風で答えた。
歯向かう者、立ち塞がる者の全てを殺して進むかのようなグリムジョー、当然フェルナンドとの決着はつけなければならないと、しかしその彼がフェルナンドとの戦いは今すぐではないと言った。

何故今ではないのか、今戦えばグリムジョーは確実に勝てるだろう。
先の戦い、フェルナンドとグリムジョーの相打ちという形で決着を見たが、それはフェルナンドが薄氷の上を進み掴んだ奇跡の結果。
油断も驕りもない万全の状態のグリムジョーが初めから全力で戦っていれば、今のフェルナンドでは勝ち目はない。
それは誰しもが分かりきっている事でもあった。
確実な勝利を目の前にそれに手を伸ばさないグリムジョー、それが何故なのかが彼の口から語られる。

「あのクソガキは癪だが強い。　あのクソガキが今より強くなってあの忌々しい業が完成し、斬魄刀を持ち、解放し、そして最も強くなった時、その時こそ俺がヤツを殺すのに相応しい瞬間だ。あのクソガキの全力の全力をこの俺が破壊してこそ、俺の強さが証明される。」

そう、グリムジョーはフェルナンドとの戦いに臆したわけではない、むしろその逆、フェルナンドとの戦いを、フェルナンドという破面を殺すその瞬間に今から奮い立っているのだった。
故に今すぐ決着をつけることはしない、グリムジョーはフェルナンドという破面が更に成長し、力を付け、万全で最高の戦力を持ったその時、その最高の戦力の全てを凌駕して勝つと、そうする事で自身の強さを、より高みに昇るのが自分であると証明しようとしているのだ。

「俺はまだ強くなる・・・・・・　血肉を切裂き、血肉を喰らい、より高みへ駆け上る。あのクソガキが追い着けない高みまでな・・・・・・その時はオッサン、アンタの喉笛も俺の牙で喰い千切ってやるよ。」

グリムジョーの中にある確信、自身の更なる成長の気配、皮肉にもフェルナンドとの戦いの中でグリムジョーは、自身の内に本来自分で操れる以上の霊力の存在を自覚していた。
己の内に未だ眠っていた更なる力、フェルナンドを殺す事だけを考えた純粋な願いに反応したかのように呼び覚まされたそれ。
それを自覚したとき、自身の更なる成長をグリムジョーは確信したのだ。
それは高みへと昇るための力、誰にも追い着かせずに力によって駆け上る階への切符、それを手にしたグリムジョーは何時かその階を上った先にいるであろうドルドーニに宣戦を布告する。
未だ見上げる存在であるドルドーニと同じ高さに立ち、その牙を持って打倒してやると。

そのグリムジョーの言葉を受けたドルドーニの顔に笑みが浮かぶ。
それは壮絶な笑み、口角は釣り上がり、だが瞳は鋭くグリムジョーを射抜く。
ドルドーニからすれば今はまだ取るに足らない数字持ちの一人、その数字持ちが自分と同じ”力の高み”まで這い上がり、そして彼の喉笛を食い破り、その座を奪い取ると宣言しているのだ。

ドルドーニにとってこれほど愉しみで待ち遠しいものなどなかった。
戦士として戦う事、そしてより高みを目指す事、ドルドーニとて第6の座で満足しているわけではない。
誰にも見せぬその内には、未だ頂点である第1位を狙う野心が渦巻いていた。
グリムジョーの宣言はドルドーニの抱える野心と同じだ、己の限界を区切らない、より高みを目指す者に最も必要な事がそれだ。

高みを目指す者の心意気、ドルドーニはグリムジョーからそれを感じていた、そして何時か本当に彼が目の前まで迫るであろう確信と、その時に行われるであろう戦いが待ち遠しくあった。

「大きく出るじゃないか若造（ホベンズエロ）が・・・・・・　いいだろう。吾輩の前に立つまでに精々その牙を研ぎ澄ませておきたまえ。」

グリムジョーの宣戦に対してドルドーニはそれを真正面から受ける。
紳士然としていても所詮彼もグリムジョーやフェルナンドと同じ、戦いの中を進む事しか出来ない化物なのだ。
何れ来る戦いを前にそれに思いを馳せるドルドーニ、対してグリムジョーはそのドルドーニの態度を余裕と受け取ったのか、小さく舌打ちをして立ち上がると、壁に四角く穴が開いただけの窓のほうへと歩いていく。

「余裕かよ・・・・・・　クソ忌々しいオッサンだぜ。必ず吠え面かかせてやる・・・・・・・」

「おやおや気を悪くしたかね？まぁそれもしょうがない、吾輩の力の前では君もそしてあの少年（ニーニョ）も霞んでしまうのは仕方のないことさ。いやそもそも力以前にその存在感が違う！　見給え！このオーラを！　吾輩の城の者達はおそらく余りに恐れ多いのだろう、誰も吾輩を直視できない様子だ。だがしかし！いくら吾輩が万能でもこの溢れ出るオーラだけは止められないのだ！嗚呼、吾輩を見られない女性（フェメニーノ）たちが不憫でたまらないよ。」

グリムジョーが零した呟きに反応したドルドーニだが、なぜかその言葉は段々と違う方向へと向いていく。
自信ありげに胸を反らし、様々なポーズを取りながらグリムジョーへと言葉をかけるドルドーニ、しかし当のグリムジョーは小さな窓の前で袴のポケットに両手を突っ込んだまま、外を見続けていた。
グリムジョーにお構いなしに動くドルドーニ、ほんの先程までの戦士の表情はなりを潜め、女性に張り倒されていた彼が表に出ている様子だった。

そんなドルドーニを完全に無視していたグリムジョーが何事か思い出したように振り返り、ドルドーニに話しかける。

「おいオッサン。」

「なんだね？　ツッコミも無しにこの吾輩を完全スルーしておいて、しかもオッサンとは心外な。吾輩のことはオッサンではなく紳士（セニョール）と呼びたまえ！紳士（セニョール）と！」

「チッ、うるせぇオッサンだな、テメェほんとに十刃だろうな？・・・・・まぁいい、オッサン。　アンタ最初に俺が『欲しいものを手に入れた』とか言いやがったな、あれはどういう意味だ？」

ドルドーニの発言の事如くを無視し、グリムジョーは自分が聞きたかった事だけを口にした。

『欲しいものを手に入れた』

ドルドーニは確かにグリムジョーに最初に話しかけたときそう言った。

だがグリムジョーにはそれの見当が付かなかった、自分が一体何を欲し、何を手にしたというのか、それがグリムジョーにはわらかなかったのだ。

故にグリムジョーはその発言をしたドルドーニにその意味を問うた。

一体彼が何を欲し、何を手にしたのか、その答えを持つドルドーニはグリムジョーのその言葉に一瞬虚を衝かれた固まると、笑みを浮かべる。

先程のような獰猛な笑みではなく、自分だけが答えを知っているという愉悦の笑み、そしてその笑みが消え、真剣な表情となったドルドーニはその問に答えた。

「君は欲し、そして手に入れたではないか・・・・・その力を存分に振るえ、その上で尚立ち上がり、君の命を脅かすかもしれない存在を。吾輩のように上ではなく、君以外の数字持ちのように下でもなく、〝対等〟の力を持ち、鎬を削る事ができる相手を。あの少年という〝好敵手〟を。」

ドルドーニが言ったグリムジョーが欲し、手に入れたもの、それはフェルナンドという破面の存在だった。
グリムジョーは強い、数字持ちに並び立つものはなくその力は圧倒的だった。
しかしそれ故に力を存分に発揮できる相手がいなかった、いくら強いといってもそれはあくまで数字持ちの中での話し、十刃クラスは次元が違う。
一人で強くなるには限界がある、一人で到達できる場所は彼が目指す高みには届かない、もう一人、同じく高みを目指し、伯仲した実力を持ったものが必要なのだ。
他の誰でもなく、ただ一人この者だけには負けられないという存在、それこそが今、力を求めるグリムジョーには必要だった。

最高の力を持ったフェルナンドを倒すといった事もそれを裏付ける。
それはグリムジョーの中でフェルナンドが、自分の全力を出して打倒するに相応しい存在だということ。
フェルナンドという破面がその領域にまで到達するという確信が、彼の中にあるということ。
それは即ち、グリムジョー・ジャガージャックは、フェルナンド・アルディエンデという破面を”対等の存在”と認めているという事に他ならなかった。
故にそれは”好敵手”足りえる存在であるとドルドーニは考えたのだ。

「あァ？　何を言うかと思えばとんだ思い違いだぜ、オッサン。俺があのクソガキと対等？　寝言は寝てから言いやがれ。」

「おっとこれは辛辣だ。　まぁ吾輩がそう思っただけの事、認めたくないならば構わんよ。・・・・・・難儀なものだね、君のその生き方は。」

ドルドーニの考えをグリムジョーは否定する。
彼にとってフェルナンドとは殺すべき存在で、それが対等、好敵手などというのはありえない事で、さらに自身がそれを認めているなどということは、それこそ認められないことだった。
多少の殺気を滲ませるグリムジョーにドルドーニはわざとらしく両手を上げ、降参のポーズをとる。

グリムジョーとフェルナンド
本人たちの知らぬところで互いが互いを好敵手としている。
フェルナンドは言わずともかな、グリムジョー自身はそれを認めていないが、フェルナンドという破面の存在を強く意識している事は間違いないだろう。
互いが互いを乗り越え、更に上を、力の高みを目指す。
片方がその終わりなき階を一歩上に踏み出せば、もう片方は更に上へとその歩を進める。
螺旋を描くその階を一歩でも、一瞬でも先へと。

「チッ、訊くだけ無駄だったな・・・・・・　帰るぜ。」

「まだ休んでいた方が懸命だと思うがね。　少年（ニーニョ）の拳は効いただろうに・・・・・まぁ吾輩なら平気だがね！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ウゼェ・・・・・　」

ドルドーニの言葉の意味を確かめたグリムジョー。
その言葉の意味は彼にとってあまり意味をなすものではなかった、

最早何も訊くことはないとグリムジョーはその場から去るとドルドーニに告げる。
対してドルドーニはグリムジョーの身体を気に掛けていた、重症ではないにしろその身体は未だ休息を必要としているのは明白だった、それゆえ気に掛けるような言葉を掛けていたのだがいつの間にか自慢にすり替わっている辺りがある意味彼らしい。
そしてドルドーニはグリムジョーに背を向けるようにして立つと、改めてグリムジョーに話しかける。

「フッフッフ、青年(ホーベン)よ。　君は力を求めているのだろう?今以上の更なる力をその手にし、そしてあの少年(ニーニョ)を、更にはこの吾輩をも打倒しようとするその心意気!吾輩感動した!　見ればあの少年にはそれはそれは美しい師匠(マエストゥロ)がいる様子。そこで吾輩は考えた、あの少年の好敵手たる青年にも、師匠たる存在が居てもいいのではないか!そしてその役目はこの吾輩ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ以外ありえない!さぁ青年よ!　より高みを吾輩と共に目指そうではないか!!!・・・・・・・・・・・・・・・・むん?・・・・・・　なんと〜〜!!!」

グリムジョーに背を向けたままドルドーニが熱く語り始める。
その内容は奇しくもフェルナンドとハリベルのそれと同じ、というよりそのままであった。
フェルナンドとハリベルの関係を見たドルドーニは、密かにそれをうらやましく思っていた。
本来の破面にはありえないその関係性、そのなかで師が弟子を鍛え、そして師もまたその弟子の姿に新たな発見をする。
ドルドーニにはそれがとても美しく見えた。

そして今目の前には、力を求め、高みを目指す一人の破面がいる。
その青年のひめたる力、心意気、それを見抜いたドルドーニはグリ

ムジョーの師になることを宣言したのだ。
しかしドルドーニの熱い宣言が終わっても一向にグリムジョーから返事は返ってこない。
何事かあったかとドルドーニが振り向くと同時に驚きが襲う。
眼が飛出るのではないかというほどの驚き、そこには既にグリムジョーの姿はなく、無残にも破壊され、とても見通しの良くなった壁だけが残されていた。

それはドルドーニが熱くその思いを語っている間に、さっさと窓のある壁を蹴破って外へと出て行ってしまったグリムジョー特製の出口だった。

それを半ば呆然として見ているドルドーニ、彼のグリムジョーの師匠になる計画は、彼の城の壁諸共無残に崩れ去ったのだった。
しばらくしてその状態から復旧したドルドーニ、見通しの良くなった壁の際まで進むと外の景色を眺めながら呟く。

「フラれてしまったな・・・・・・　やはり吾輩の欲しいものはこの手から滑り落ちるようだ。・・・・・・まぁフラれてしまったものはしょうがない、吾輩はただ待つのみ、青年（ホーベン）が吾輩の前に来るその時を、な。」

師としてグリムジョーを導き、強くする事は叶わなかったが、もう一つの楽しみ、何時か来る戦いの時を思いドルドーニは小さな笑みを浮かべる。
その時は持てる全力でグリムジョーを叩き潰そうとその胸に誓うドルドーニ、そして彼は「さてと」と一言呟いて、砕けた壁の欠片を拾い集め、壁を修理し始めた。

自らの城を自分で修理するその後姿は、やはり哀れなものだった。

牙
相手を裂くための力
牙
しかし己をも裂く力

才無くば鈍
才有らば煌

戦士よ

貫け

BLEACH El fuego no se apaga. 17. 5（後書き）

え～１８話の前に挟んで見ました。

１７話の内容に対し、グリムジョーはどう思っているのかを保管するのが目的
だったのですが、やはりパニーニが暴れた・・・・・・
彼のキャラ崩壊は確実に侵攻している気がする・・・・・・
やりすぎたかな？　どうだろう？

そして何気にグリムジョーも今一掴めてないかも
彼っぽさが出せていない気がするな～、その辺りどうでしたか？

ちょくちょく出した『下官』というのは、原作で１０番に頭を潰された人や、藍染に報告をしていた人の事です。
ある意味での独自設定ですね。
十刃や数字持ち、戦闘特化の破面を武官とするならば、彼らは文官にあたります。
実際ああいうのが沢山居ないと、虚夜宮を維持できない気がしまして出してみました。

スペイン語辞書買いましたｗ
分かりやすいね、ネットで調べると読みが出てこないからかなり助かってますｗ

白く、広大な空間が広がっている。
ずべてが白い空間、四方に壁、天井があるところを見るとそこは屋内なのだろう、しかしその広さに不釣合いなほど柱の数は少なく、高い天井と相まって非常に大きな空間が作り出されていた。

その広大な空間に響く音があった。
金属と金属がぶつかった様な甲高い音、そしてそれと同時に散る火花。
それは剣戟の音と光、その広大な空間の丁度中心辺りで断続的に発生するそれを、発生源より少し離れた位置で見る人影がある。
人影の数は3、そのどれもが丸みのある女性の姿をしていた。

3つの人影の正体、彼女達三人は第3十刃(トレス・エスパーダ)ティア・ハリベルの従属官、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンだった。
3人は大きな白い正方形の石材のようなものが積み重なった上にそれぞれ座り、音と火花が散る方を黙って見つめている。

いや、黙って見つめている事しかできない、といったほうが正しい

のか。
座っている、といっても彼女達三人の中で誰一人、まともに座っている者はいなかった。
アパッチは大きな石材の上に仰向けになり、首と両腕をだらりと石材の端から投げ出し、逆様になった視界で件の方向を見つめ、ミラ・ローズは更にその逆、石材の上でうつ伏せになり、両腕をたらして顔だけを上げている、一番まともなスンスンでさえその石材に寄り掛かるようにしてかろうじて座っているといった風だった。
これは決して彼女たちの行儀が悪いという訳ではなく、彼女たちがそうならざるを得ない状態である、という事だった。

一体何故か、それは至極簡単な事、彼女たちは今”疲れている”のだ。
それはもう彼女たちは疲れていた、それこそ今の状態から指一本、動かす事すら億劫になるほど疲れていた。
彼女たちがそんな状態になってしまった理由、それは彼女たちの主、ハリベルにあった。

今から数日前、彼女たちは小さな諍いから遂に互いへの実力行使に出た。
日ごろの小さな小競り合いの積み重ねがそこへ来て爆発したのだろう、第3宮の外の砂漠でそれはもう激しく戦った。
女同士の戦いというのは怖ろしいもの、”引く”という事がないそれは延々と続き、互いが顔を腫らし、その体力が尽きるまで続いた。
そして体力の消耗と共に頭が冷えてきたのか、このあまりに無意味な争いが終息へと向かったとき、彼女達に冷水の如き言葉が投掛けられた。

「終わりか？」

声の主は、丁度彼女たちの背後に立っていた。
その声が誰のものであるか瞬時に理解した三人、ゆっくりと振り返ると、そこには腕を組み、氷のようなその瞳に怒りを滲ませたハリベルが、仁王立ちで待ち構えていた。
私闘を好まないハリベル、なにより三人がハリベルの制止を無視し、争いを始めたことがハリベルを怒らせていた。
更に言うならば、三人に『黙っていてくれ』と言われたショックが、彼女の怒りに火をつけたのかもしれない。
いや、おそらくそれが最たる理由だろうが、そんなハリベルの怒りの理由はさておき、三人はそのままハリベルの前で正座をさせられる、反論は一切認めない、というハリベルの気配を察知したのか物凄い速さで正座する三人、そしてそこから始まるのは説教だった。

制止を無視したことの叱責から始まり、私闘の愚かさ、従属官のあり方へと話は続き、更には日頃の三人の小競り合いへの叱り、生活態度への指摘、それぞれの戦い方の欠点、そしてそもそも戦士というものはというハリベルの戦士論まで、その説教はそれこそ三人の争い以上に延々と続いた。
ようやく説教が終わり半ばぐったりとした三人、しかし、ハリベルのお仕置きはまだ始まったばかりだった。
そのまま彼女達の性根を叩き直さんと、後に彼女達に”地獄”とまで言わせた特訓が開始されたのだ。
まずは腕立て、腹筋、スクワットなどの筋力トレーニングを各５００×１０セット、その後斬魄刀素振り１００００回、響転による１ｋｍダッシュ２０本、霊圧解放状態の維持等など多くのメニューを漸く終え、息も絶え絶えに倒れ臥す3人に、ハリベルの死刑宣告が

告げられる。

「では最後に、『虚夜宮（ラス・ノーチェス）外周部を1周』して終わりとする。」

その言葉に愕然とする三人。

今彼女たちが居る砂漠、青空の下の砂漠、しかしそこは”屋内”なのだ。

虚夜宮という言い表す言葉がないほど巨大な建造物の中、それが彼女たちの居る砂漠なのだ。

その虚夜宮の外周を回るなどどれほど時間がかかるか分からない、しかし彼女達の目の前でそれを告げた人物の眼は、明らかに本気の眼だった。

そして彼女達は数日を掛けてそれを達成し、今この空間で動けないほど疲弊し、未だ続く剣戟の光を見ているのだ。

「なぁ・・・・・・」

そんな3人のうち、仰向けでいるアパッチが他の二人に声をかける。

しかしそのアパッチの声にすら、反応するのが面倒なのかミラ・ローズもスンスンも無言だった。

「なぁってばよ！」

「なんだよ、ウルセェな・・・・・・」　「なんなんですの・・・・・・」

それでも二人に声をかけるアパッチに、ミラ・ローズとスンスンは面倒そうに答える。
それもしょうがないと言えよう、地獄の特訓が漸く終わったかと思えばハリベルにこの第3宮の『練武場（フォルティフィカール・ルガール）』に連れて来られ、休息もないまま件の剣戟を見せられているのだ。
見ながらも少しでも休みたい、というのが三人の共通の認識だろう。
それでも声を掛けたアパッチ、それには彼女なりの理由があった。

「アイツ・・・・・・・・・・・・・・・　本当に強いのか？」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

アパッチのその問に二人は無言だった。
それは他の二人も口に出さないまでも思っていたこと、目の前で繰り広げられる剣戟、それを行っているのは片方はもちろんこの第3宮の主ハリベル、そしてもう片方は破面Ｎｏ．１２　グリムジョー・ジャガージャックと引き分けたとされる破面、金色の髪と紅い瞳の少年、フェルナンド・アルディエンデだった。
それぞれの斬魄刀を抜き放ち、刃を交える二人、響く音と飛び散る火花からその一撃には強烈な力が込められているのが分かる。
しかし、アパッチをはじめとした三人は、今まさにその斬魄刀を振り被り、ハリベルへと叩きつけるフェルナンドの姿を見て思っていた。

あの破面は本当に強いのか、と。

彼女達から見ても、その体躯の何処からそれ程の力が出るのかとい

うほど、フェルナンドの刃には力が乗っていた。
攻めるフェルナンドと受けるハリベル、ハリベルが自ら受けに回っているというのが正しい表現だが、それは今然程関係のないことだった。
フェルナンドの放つ一撃はそれこそその全てが、必殺の一撃、と言って過言ではないほどの威力を有している、有してはいるのだが、彼女達から見ればそれだけなのだ。

ハリベルの配下という事もあり、彼女達はそれなりに刀の扱いに長けている。
それぞれ得物は違っても、その根底たるものは皆同じ、故に判るのだ、フェルナンドが刀を扱っているとは言いがたいという事を。
今のフェルナンドは、ただ力任せに刀を振り回し、相手に叩きつけているだけに過ぎなかった。
斬魄刀を手に入れ日が浅いという事を差し引いてもあまりにも粗野、言ってしまえば今のフェルナンドは、その手に握るのが刀であろうが、ただの棒切れであろうが変わらない戦い方をしているのだ。

故に彼女達は思ってしまうのだ。
本当にこの破面は強いのか、本当にこの破面はグリムジョーと引き分けたのか、そして本当にこの破面は自分達の主、ティア・ハリベルが鍛える価値がある存在なのか、と。
そう彼女達に思わせてしまうほど、フェルナンドの振るう刀には”才”というものが感じられなかった。

――――――――

従属官である彼女達にすら見抜けるフェルナンドの”才”の無さ、

それがその主たるハリベルに見抜けないはずも無かった。
初撃、彼女の刀とフェルナンドの刀がぶつかり合った瞬間、彼女は既にフェルナンドに”刀の才”が無いことを見抜いていた。
初めて彼方を握り、初めて刀を振るう、そんな初心者とも言うべき状態の者の振るう刀の一撃で、その”才”の有り無しを判断できるものなのか疑問は残る。
しかし、何事にも“才”のある者は”煌く”のだ。
まるでそうする事が当然といった風で、何十年、何百年、と先人が積み重ねてきた工程を吸収し、昇華する。
知らぬはずの事を昔から知っているかのように行える、それは刀の扱いであったり、太刀筋であったり、間合いであったりといった、長年の経験の上で身につくもの、それを”才”というものは一足飛びで吸収していく。

だがしかし、ハリベルはその”才の煌き”をフェルナンドの刃に見出す事はできなかった。
ハリベルから見るフェルナンドの振るう刃はあまりにも無骨、しかしそれは刀に振り回されている、というわけではない。
己の意思でその刀を振るい、その上で尚その刀は無骨極まりないのだ。
その刀は鍛えればある程度の強さにはなる、しかし、その全てが二流止まり、超一流との戦いにおいて、”刀”を用いた戦闘でフェルナンドが勝利できる可能性は皆無であろうと、ハリベルは見ていた。

「・・・・・フェルナンド、お前に刀の才能は無いな・・・・・」

フェルナンドが大きく振り被り、力任せに振り下ろした刀をハリベルが弾く。

それにより後方へと飛ばされるフェルナンド、フェルナンドが着地し、距離が開いたところでハリベルが切り出す。
才能が無いという一言、それは今まさに力を、彼の者に己を刻み付けんが為の力を欲するフェルナンドには、残酷とも言える宣言だったかもしれない。
しかし、ハリベルはあえてそれを口にし、フェルナンドにそれを告げる。
それがフェルナンドの今後を考えたとき最も合理的な選択である、刀に固執する事無く、刀の才無き者なりの戦いを早くから考える事の方が後の飛躍へと繋がると彼女は考えたからだ。
対してフェルナンドはそんなハリベルの宣言に特に顔色を変える事も無く、その手に持った刀を二、三回軽く振るとそのまま鞘へと納めてしまった。

「ま、そうだろうな・・・・・　コイツを握った瞬間にそんな事はわかってたんだ。俺に刀(コイツ)を扱う才は無ェ、力任せに振ってはみたが、俺はアンタの太刀筋を見ちまってるからな・・・・・ヒデェもんだぜ、我ながらよぉ。」

さすがに才が無いなどと言われれば、如何なフェルナンドといえども落ち込むか、怒るかと思っていたハリベルに返って来たのは、余りにもあっさりとしたフェルナンドの対応だった。
ハリベルはその対応の仕方に眉をひそめる。

先日、一度目を覚ましてから再び眠りに付いたフェルナンドは、順調すぎる程順調に回復し、自らが特訓を課していた彼女の従属官の帰還と時を同じくして、この練武場で初めて刀を合わせるはこびとなった。

刀を合わせる前、フェルナンドからは先日のような無気力感や惚けている様な気配は既に感じず、どうにか壁を乗り越えたものと思っていたハリベル。
しかし今、自らの”才”の無さを思い知ったフェルナンドが纏う気配が、何処と無く先日のものと似通っている、そう感じたハリベルに一抹の不安がよぎる。
乗り越えたものと思っていたフェルナンドの抱える”畏れ”、考えてみればそれはそう簡単にそれが乗り越えられるはずのものでもなく、安易にそう判断した自分をハリベルは悔いた。

「フェルナンド・・・・・・」

なんと声を掛けていいか判らない。
そんな感情が、零れた言葉からありありと伺えるようなハリベルの声。
だがフェルナンドはそれすらもあっさりと吹き飛ばした。

「あぁん？　何だよハリベルその顔は。　別に俺は落ち込んでなんかいねぇぞ？刀(コイツ)をうまい事使ってやれないのは悔しいが、別に刀(コイツ)だけが戦いの手段ってぇ訳でもねぇだろうが。それによ・・・・・・
俺にはまだ”コイツ”が残ってる。」

どこか沈んだ様子のハリベルの顔を見たフェルナンドは、ガシガシと頭を掻きながら、おそらくハリベルが考えているであろう事を否定した。
本当にフェルナンドは落ち込んでいる訳ではなかったのだ。
彼の中でグリムジョーに対する”畏れ”についてはとっくに整理がついていた。

それは何も難しく考える必要など無い事だった、力が届かない、力が示せないのならば強くなればいいのだと。
貪欲に力を求め、業を磨き、その上でグリムジョーの前に立ち、刻み付ければいいだけの話なのだと。
悩みなどというものは意外と簡単に晴れてしまうもの、そして晴れてしまえば後は進むだけの事なのだ。

ハリベルにフェルナンドがどこか沈んでいるように見えた訳は、彼が言ったとおり『刀をうまく使ってやる事ができなかった』という事が理由だった。
刀の柄に手を置くようにして、そう語ったフェルナンド。
己の分身たるこの刀には何一つの非は無い、それを扱い、その刀剣としての力を十二分に発揮してやる事ができない自分、それが悔しいと、使いこなしてやる事ができない自分の非才が悔やまれると、フェルナンドはそう言ったのだ。

その吹っ切れた態度、そして己の非才を嘆かないフェルナンドの態度に驚くハリベル。
そうして驚いているハリベルへと向けられたモノ。
刀だけが戦いの手段ではないと、そして何より自分にはコレがあるとハリベルに示すように、強く握られたそれがハリベルに向けられる。
それはフェルナンドが破面化してから積み上げてきたものが宿るモノ、何十体もの破面を打ち倒して来た彼の武器。

ハリベルに向けられたそれは”拳”

何千、いや何万と振り貫き、鍛え上げたそれ、未だ道半ばであるそれ、しかしフェルナンドという破面を語る上で既に重要な因子と成りつつあるそれ。

数々の数字持ちを打ち倒し、あのグリムジョーにすら届いたその拳は、明らかに”煌き”を放っていた。

たしかに”刀を極める”という才能は、フェルナンドにはないのかもしれない。

しかし、それを補って有り余る才能が、”無手を極める”という才能がフェルナンドにはあるのだ。

フェルナンド自身どこかでそれを自覚している。

己の積み上げてきたものの宿る拳は、それだけで信頼に足る彼だけの武器、それがある故にフェルナンドは、自身の”刀の才”の無さに嘆く事はなかったのだ。

（杞憂だったか、まったく・・・・・・お前には驚かされてばかりだ、フェルナンド。確かにお前の”拳（ソレ）”は、煌きに満ちているよ・・・・・・）

自信に溢れ、拳を突き出すフェルナンドの姿に、ハリベルは自身の不安が杞憂だった事を悟り、安堵した。

フェルナンドの”畏れ”ていることは、グリムジョーに自身を認めさせることが出来ず、また、落胆させてしまったのではないかという畏れ。

ソレを克服するには強くなるしかない、そうする事でしかその畏れを断ち切る術はないのだ。

ハリベルが言わずともフェルナンドはソレを理解していた。

そして自ら強くなる為の道を見つけ出していたのだ。

「・・・・・・　なんだよ、ヘコんだかと思えばニヤつきやがって・・・・・・まぁいい、仕切りなおしだ。こっからが本番だぜ？」

「いいだろう。　私もお前の業がどれほどのものか、興味があった。来い、フェルナンド。」

沈んだかと思えば直ぐに和らいだハリベルの表情に、逆にフェルナンドの方が怪訝な表情になる。
観察眼とでも言えばいいのか、ハリベルの目元と雰囲気のみで、彼女の感情を大まかに読み取るフェルナンド。
そして刀を納めた状態で、戦いを再開しようというフェルナンドに、ハリベルはそれを受けて立った。
元々彼女もフェルナンドの業に興味があったのだ。
上空、第3者の視点から見ていても、フェルナンドの業は奇抜なものだった。
機先を制するという点では抜きん出ているそれ、第3者の視点だからこそ理解できた部分もあり、それがもし当事者として、いや、業を受ける側としてその場に立っていたならば、自分はどれほど対応できるのか、ハリベルはそれが知りたくなってしまったのだ。

「ハッ、じゃぁ遠慮なくいくぜぇぇえぇぇっと、なんだぁ!?」

間合いを詰め、今まさに飛び掛らんとしたフェルナンドを驚きが襲う。
腰に挿した彼の斬魄刀、それが突然光を放ったのだ。
フェルナンドの霊圧度同じ紅い光、斬魄刀を包み込むようなその光が収まると、そこには形が変化した彼の斬魄刀が在った。
今までごく一般的な刀の形をしていたフェルナンドの斬魄刀、しかし紅い光に包まれ、再び彼の眼に入ったそれは”刀”と呼ぶには少々形が違いすぎていた。
前と同じなのは白い鞘と紅い柄の拵えのみ、その長さは刀というよ

りは脇差に近くなり、鍔は無く、柄尻に紐が通る程の穴が開いていた。
刀身の幅も広くなり”刀”というよりは、どちらかといえば”鉈”に近い形状へと変化していた。
刀よりも総じて小型になったフェルナンドの斬魄刀、しかし突然に現れたその変化、それをハリベルは冷静に説明した。

「フェルナンド、その斬魄刀の変化は珍しいものではない。死神のそれとは違い、我々破面の斬魄刀の形状は画一的なモノではないのだ。その持ち主の最も得意とする戦闘の型、元あった力の象徴などその形は千差万別、お前の斬魄刀の変化、お前ならばその意図がわかるはずだ。」

破面の斬魄刀は、必ずしも”刀”としての形を保っているわけではない。
ハリベルの持つ斬魄刀でさえ、非常に幅広で、更にその中心部は空洞になっている。
刀剣という分類に収まらないものも多々あるのだ、それは破面ごとの戦闘方法、破面化前の力の象徴、精神の具現化などによる斬魄刀の変化が原因としてあった。
それが今、フェルナンドの斬魄刀に起こった現象、その変化が意味するもの、フェルナンドはいち早くそれを理解すると、ニッと嗤う。

「さすがに俺の分身だ、良く分かってる。　コレなら動き回っても邪魔にならねぇ。」

そう言うとフェルナンドは、腰の横に挿してあった刀をそのまま腰の後ろへと移し、二三度その柄尻を軽く叩く。

拳、そして脚、武器を持たず無手による戦闘を選択したフェルナンドにとって、嵩張り、動きを阻害する恐れのある刀は邪魔にしかならなかった。
その点、今の斬魄刀の形状は刀と比べ小型である事から、無手による戦闘に対する支障は軽減されたと言っていいだろう。
フェルナンドに合わせた斬魄刀の変化、彼にとってそれは利に働いていた。

「さて、刀(コイツ)もいい具合になった所ではじめるか？ハリベルよぉ」

「私の準備は既に出来ている。　いつでも掛かって来るがいい。」

「ハッ、上等ォォォオオ！！」

気勢を上げ、フェルナンドがハリベルの下へと駆ける。
両の拳を握り締め、その”才の煌き”を握り締め、それを見せ付けんとハリベルに迫る。
そして待ち構えるハリベルもまた、フェルナンドの”才の煌き”がどれ程のものか、その身をもって確かめんとしていた。

――――――――――

「なぁ！」

「「・・・・・・・・・・・・」」

「なぁっていってんだろ！」

「「うるさい！」ですわ！」

興奮した様子で声を上げるのはアパッチ、それをミラ・ローズとスンスンが同時に黙らせる。
その様子は先程の無言でいた時と違い、アパッチ同様どこか興奮しているようだった。

アパッチら三人は先程の体勢のまま動かず、というより動けずにフェルナンドとハリベルの戦いを見続けていた。
先程フェルナンドの太刀筋等から、彼の強さに疑問を持ったアパッチの問に、ミラ・ローズとスンスンは答えなかった。
それは判断に困ったが故の無言、その刀捌き、太刀筋、間合い、どれをとってもフェルナンドに強者たる資質を、彼女達二人は見つけられなかった。
だが、彼女達が判断に踏み切れなかった理由、それは他ならぬハリベルの存在、主ハリベルがその手で鍛えると言った者が本当にこの程度なのか、その思いが彼女達二人に判断を留まらせていた。
それはアパッチも同じ事で、自分では判断のつかない事に二人の意見を聞いてみようとしたが、返って来たのは無言、結果判断は保留という形で戦いの行方を傍観する事となっていた。

その意思の保留状態が急激に変化したのは先程。
フェルナンドがその刀を鞘に納め、更にその刀が変化した頃からだった。
三人はフェルナンドが刀を納めた時点で、彼が戦う事を諦めたと考えていた。
”非才”そのあまりにどうしようもない事実が、彼に戦いを続ける事を諦めさせたのだ、と。

しかし現実は違っていた。
刀を納めながらも三人に伝わってくるフェルナンドの闘志に、些かの揺らぎも無かったのだ。
訝しむ様にフェルナンドを見る三人、そしてその三人の眼に映るのは拳を突き出したフェルナンドの姿だった。
それは如何なる事か、三人にはフェルナンドが、ハリベルに対して拳で挑むと宣言しているように見えた。
だがそれは余りに愚かな事、実力の遥かに上、そしてその手に刀を握る彼女たちの主ハリベルに対して、格下であるフェルナンドが無手で挑む、それを愚かと呼ばずしてなんと言おうか。
だが彼女達が愚行と称するそれは、紅き光の発現により現実のものとなった。
光に包まれたフェルナンドの斬魄刀、そしてその刀を挿し直すとフェルナンドはハリベル目掛け一直線に駆け出したのだ。

そして今、彼女たちの目の前で繰り広げられる戦い。
それは彼女達三人の予想を覆す光景だった。
その手に持った刀を振るうハリベル、その太刀筋は一言で言えば”流麗”、流れる水の如きその切っ先は止まる事無く、舞うが如き刀捌きで迫るフェルナンドを迎え撃つ。
対するフェルナンドは無手、迫り来るハリベルの刀をまさに紙一重で避わし、隙あらば懐に飛び込み拳を、蹴りを繰り出す様はまさに”猛火”。
相容れぬ性質が産み出す二人の激しい戦い、そして際立つのはフェルナンドの存在だった。

刀を持っていた時とはまるで別人、武器を手放して強くなるという理不尽が、彼女達の目の前で戦っていた。

振るわれる拳は未だどこか無骨さを残してはいるが、明らかに生きた拳、刀の非才とは比べ物にならない才能、それが宿る拳だった。
主たるハリベルに無手で挑み、尚対等に戦っている、振り下ろされる刀にその身を曝しながらも一歩も引かない姿勢、それは明らかな”強さの証明”、一瞬たりとも目を離せないその戦い、どこか興奮した様子でその戦いを見る3人の中ではすでに、フェルナンドという破面は”強者である”という評価が下されていた。

「うぉっしゃぁぁあああ！！」

食い入るように戦いを見ていた三人のうち、アパッチが突然大声を上げる。
仰向けだった体を勢い良く跳ね上げ、白い石材の上に立ち上がると、両手をあげて気合の叫びを上げた。
そしてその眼は大きく開かれ、爛々と輝いていた。

「ど、どうしたのさ、アパッチ。」

「かわいそうに・・・・・・　遂におかしくなってしまったのね・・・・・」

いきなりの事に驚くミラ・ローズと、アパッチがおかしくなってしまったと、ワザとらしく涙を拭うフリをしながら語るスンスン。
そんな二人にアパッチは興奮冷めやらぬといった風で捲くし立てる。

「うるせぇよ、　スンスン！　決まってんだろ、アイツと戦いに行くのさ！アイツ強ぇよ！　アイツと戦えばきっとあたしももっと強くなれる！強くなるには強いヤツとやり合うのが一番だろ？だから

アイツと戦うのさ！あんたたちはそこであたしが強くなるのをボケッと見てな！」

そう言って戦う二人の方へと駆け出すアパッチ。
それを後ろから見ていたミラ・ローズとスンスンだが、抜け駆けはさせないと慌ててその後を追っていった。

フェルナンドとハリベル、二人の戦いはアパッチら三人が乱入する形で幕を閉じた。
いきなり戦いに乱入してきた三人を怪訝に見つめるフェルナンドと、それを叱るハリベル。
叱られて尚フェルナンドと戦いたいという三人、それを困り顔で見つめるハリベルと、あっさりそれを了承するフェルナンド。
では誰からはじめるかと決めようとすれば、我が我がと例の如く三人が揉め始め、それを見ていたハリベルが、仕置きが足りなかったかと特訓の追加を決め、項垂れる三人。
面倒だからまとめて掛かって来いと三人に言うフェルナンドと、その言葉に意気を増した三人の戦いが始まる。

行っているのは手加減無しの戦い、互いが全力でぶつかり合い、その強さに磨きをかける。

男一人と、女四人、戦う事で互いを認め合う、そんな第3宮の日常がそこの日からはじまっていた。

暴虐の嵐
理由等無く
答え等無く
ただ理不尽に
蹂躙す

BLEACH El fuego no se apaga. 18（後書き）

まったくそう見えないけどこれ一応日常編です。
そして今回の話のキーは
『いかにしてフェルナンドに刀を持たせないか』です。
クロス内容そして陸奥の使い手であり無手で戦うフェルナンド、しかし破面は斬魄刀を持つ
刀があるのに使わないとはコレ如何に？ということで彼の才ダネ（わかるかなぁ？）を切りましたw
才能の煌き云々は、作者の私的すぎる意見ですからね～

ついでに悪乗りして刀を変化させたw
だってねぇ、陸奥ならコレじゃないとね～
後悔？ないよ？・・・・・・・・・・・・たぶん、きっと、おそらく。

地獄の特訓メニューはこれじゃぁ軽すぎるかな？
破面の体力の基準が分からん・・・・・・

そして次回！　恐竜ついに登場の予定です。では～

「ゲヒャ、ゲヒャヒャ、ゲヒャヒャヒャヒャヒャヒャ！！！」

破壊された床や柱、辺り一面に耳障りな笑い声が響く。
その声に滲むのは喜色と愉悦、他の感情など皆無、心底愉しくて、可笑しくて仕方が無いといったその嗤い声。
天を仰ぐようにして笑う声の主、その大きな笑い声は辺りに反響し、更に大きくその場を支配する。
そうして嗤う声の主の足元には、倒れ臥す人影が三体。
そしてその人影は、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンの三人だった・・・・・・

『十刃（エスパーダ）』

虚夜宮に居る全ての破面の中ならたった十体、彼らの主であり創造

主たる男、藍染惣右介によって選ばれた精鋭中の精鋭。
たった十しかないその席は、彼らにとっては狭き門の先にあるその席、だがその席に至るための選出方法は極めて単純で、しかしその方法は彼ら破面ならば、いや彼らが破面だからこそ、その誰もが納得する理由があった。

”殺戮能力の高さ”

それだけ、ただそれだけが十刃になるための条件、生きた年月、人格、序列の高さ、そんなものは二の次どころか三の次、必要なのはその余りにも単純な一つ、しかしその一つは彼ら破面にとって何よりも優先され、何よりも意味を持つ絶対の真理だった。

そうして選ばれた十体の破面、Ｎｏ．０からＮｏ．９までの数字を与えられた彼らには、それぞれに司る『死の形』があった。
人間が死にいたる要因、それが『死の形』、十刃一体につき一つ、その十刃の能力、思想、存在理由でもあるそれ。
その十刃の全てがそれに内包されている、といって過言ではないその形、それは彼らを表す言葉であると同時に、人間がどう足掻こうとも逃れる事のできない、不可避の終わりそのものだった。

『老い』、『犠牲』、『虚無』、『諦観』、『野心』、『陶酔』、『絶望』、『強欲』、『憤怒』

人間が避けて通る事のできない事象達、それを内包する十刃。
そして最後に残った『死の形』、それに対応する十刃は、未だ狂ったように笑い声を上げ続けるその声の主だった。

「これは・・・・・・　一体何があったというのだ・・・・・・・」

ハリベルがその巨大な広間『玉座の間（ドゥランテ・エンペラドル）』に入った瞬間目にしたのは、倒れ臥す己の従属官の姿だった。

十刃、そして藍染のみが参加する衆議、定期的に行われるそれに出席するため、ハリベルは一人で行動していた。

その衆議の後、藍染自らが十刃以下の破面への指示等を伝えるため、玉座の間へと他の破面は集まる手はずになっており、彼女の従属官であるアパッチ、ミラ・ローズ、スンスン、そして何故かフェルナンドも一足先に玉座の間へと移動していたはずだった。

アパッチ達の乱入により中断となった手合わせより、数ヶ月の時が経っていた。

あの後もフェルナンドとハリベルの三人の従属官はよく手合わせをし、その度にフェルナンドに倒され、アパッチなどが大声で悔しがるのが第3宮の常の風景となっていた。

だが今、その常の風景とは似ても似つかぬ光景、目の前の玉座の間に広がる惨状、それを見た彼女を困惑が支配する。

その場には他にも多くの破面がいた、その中で何故自分の従属官が傷つき倒れているのか、どのような経緯を辿れば今、目の前にある光景へと繋がるのか、理解、そして思考の外であるその光景に、ハリベルは立ち尽くしていた。

「よう・・・・・・　随分と遅かったじゃねぇかよ。」

そうして立ち尽くす彼女に、少し高い位置から声がかかる。
声の主は腰の後ろに鉈のような斬魄刀を挿した、金髪と紅い眼の少年、フェルナンドであった。
フェルナンドはハリベルの方へ視線を向ける事無く、倒れ臥すアパッチら三人から視線を外さずに、ハリベルに話しかける。
円柱状の構造物が立ち並ぶ一角に陣取ったフェルナンドは、その上で胡坐をかき、頬杖をつくようにして三人のいる広間の中心を見ていた。

「フェルナンド、何なのだこれは!?　あの娘達に一体何が・・・・・」

どこか取り乱した様子で、フェルナンドの隣へとハリベルが響転をつかい一瞬で移動する。
その常の彼女らしからぬ様子が、彼女の動揺を如実に物語っているようだった。
そんなハリベルの様子を横目で確認したフェルナンドは、また直ぐ視線を戻し、簡潔に、そしてありのままの状況を説明した。

「何の事はねェよ。　アイツ等が三人がかりであのデブに飛び掛って返り討ちにあった・・・それだけの事さ。」

「なん・・・だと・・・・・・・!?」

フェルナンドの淡々としたその言葉、それが簡潔にハリベルの耳に状況を伝える。
彼女の耳にはアパッチらが自分から飛び掛ったと聞こえた、ただそれだけの事だ、と。

ならば一体彼女達は誰に飛び掛ったのか、ハリベルの視線がもう一度地に臥す彼女達の方へと向けられる。
地に伏す彼女の従属官、そしてその倒れる三人の中心辺りにその人影は立っていた。
何故今まで聞こえなかったのか、辺りに響く醜悪で耳障りな嗤い声、その発生源は彼女の視線の先、つまりはその人影だった。
そしてその人影を確認したハリベルの瞳が、驚愕で大きく開かれる。

「何故だ・・・・・・　何故ヤツがここに居る・・・・・・」

ハリベルから言葉が零れ落ちる。
それは否定の感情を含む言葉、今彼女の視線の先には、居るはずの無い者が映っていたのだ。

「なんだよ、お前あのデブの事知ってるのかよ。」

相変わらずハリベルの方へと視線を向けず、フェルナンドがハリベルに問う。
ハリベルが零した言葉から、彼女が件の者の事を多少なりとも知っているとみたのだろう、そしてその問にハリベルが答える。

「ヤツは・・・・・・　ヤツの名はネロ。　ネロ・マリグノ・クリーメン・・・・・・破面Ｎｏ．『２』　第２十刃（ゼクンダ・エスパーダ）だ・・・・・・」

その人影の名をハリベルは苦々しく口にする。
その者の名はネロ・マリグノ・クリーメン、破面Ｎｏ．２　そして第２十刃であるとハリベルは言った。

その人影、ネロと呼ばれた破面はとにかく大きかった。
身長はゆうに２ｍを超え、肥大したかのようなその身体は、異常に隆起した筋肉、そして脂肪に覆われており、重鈍な印象を見る者に与えていた。
白い死覇装は上半身全てを覆うことは出来ず、腕から肩口の辺りまでで一杯、そして胸の中心にはその身体にみあった大きな孔が開いている。
髪、そして瞳の色は緋色、長く伸びたそれは手入れなど皆無なのであろう、逆立ち、まるで獅子の鬣のように後ろに撫で付けられ、背の中程まで伸び。
恐竜の下顎を模したかのような仮面の名残が首から垂れ下がっていた。
右頬から額にまで至るように、二本の線が交差しながら菱形を作った紫色の仮面紋が奔り、そして己以外の全てを見下しているかのようなその緋色の瞳が、喜色に彩られながらアパッチ等を見下ろしていた。

「アレが、ねぇ・・・・・　それで？　何であのデブがここに居るのをそんなに驚く。十刃なんだろ？アレ。」

相変わらず頬杖をつきながらフェルナンドがハリベルに問いかける。
十刃だというのなら、この玉座の間に居てもなんら疑問など無いのではないか、と。
衆議に出ていなかった、などという些細な事でハリベルがあれほど驚くはずも無いと、フェルナンドは考えたのだ。

「ヤツは・・・・・　そもそも自分の宮殿から出てくること自体稀なのだ。何があろうと、それこそ藍染様がお越しになられていよ

うとヤツには関係無い。自分以外の他者の存在などヤツにとっては塵芥も同じなのだ。自分の思い通りにならない事などヤツには存在しない、思い通りにならなければそうなる様にしてしまうのだ、力ずくで・・・な。・・・そして忌々しい事に、そうできるだけの力がヤツにはあるのだ。」

フェルナンドの問にハリベルは先程と同じ苦々しい口調、表情のまま答えた。
その声には明らかに嫌悪が混ざる、それはハリベルと、ネロという破面が永劫相容れぬ存在である事を滲ませていた。
規律、そして戦士としての礼を重んじるハリベル、しかしネロは違っていた。
規律も礼も何もかもを壊し進む、全て己の思い通り、その他を蹂躙し生きるネロ。
それは真逆、反転の方向性、進む道は決して交わる事のない平行線、ハリベルの語る声にはそれ故に彼女には珍しい他者への明確な嫌悪が含まれていたのだ。

「ゲヒャヒャヒャヒャ！！　弱ェ！　弱すぎるゼ！オラどうした！　立て！この雑魚メスが！さっさと立ってオレ様をもっと愉しませて・・・・・みせろコラァ！！」

そうしてハリベルがフェルナンドに状況を確認にしている間に、広間の中心で変化が起こる。

醜く耳障りな嗤い声を上げていたネロ、一頻り嗤い終え、今度は倒れ臥す三人に罵声を浴びせる。
しかしその罵声にすら三人は反応しない、いやできないのだ、既に三人の意識は闇へと沈んでいる、だがネロは止まらなかった。
動かない三人を見るや、動かない事が悪いと言わんばかりに、自分を愉しませろと罵りながら丁度目の前に倒れていたミラ・ローズを躊躇無く、そして容赦無く蹴り飛ばしたのだ。
路傍に転がる小石の如く蹴り飛ばされたミラ・ローズは、そのままの勢いで柱に激突し、床に投げ出されるように転がった。

「テメェも！　・・・・・テメェもだ！オレ様が立てって言ってんだぞ！死んでいようが立ち上がれ！　このクズ共が！！」

ミラ・ローズだけでなく、アパッチ、そしてスンスンまでをも容赦無く蹴り飛ばすネロ。
だが決してその蹴りで死んでしまわぬ様に蹴る彼、もっと自分が愉しむために加減しているようだった。
そしてその口から吐き出される言葉は、余りにも理不尽、死して尚立ち上がれ、自分が命じているのだからそれが当たり前だ、と。
その暴虐極まりない振る舞い、その場にいる他の破面は囃し立てるでも止めるでもなくただ無言、目を逸らし、ただその暴虐の嵐が過ぎ去るのを待つのみだった。
しかしそれを攻めるものは誰もいない、何しろ相手は第2十刃、数字持ちと更にそれ以下である彼らにとって万一、いや億に一つの勝ち目もなく、飛び掛ったとて今目の前で繰り広げられる惨劇の、哀れな道化となるのは明白なのだ。

その光景を見て一人、ハリベルは拳を強く握り締める。
眉は険しくなり、襟に、そして仮面に隠されたその下の唇も強く噛締められている事だろう。
何かを必死で堪えているかのようなハリベル、そんな彼女の姿を横で感じ取ったのか、フェルナンドはハリベルに視線を向けぬまま話しかける。

「なんだ？　助けに行かねぇのか？　あのままじゃ下手すりゃアイツ等・・・・・死ぬかもしれないぜ？」

ありのまま、思った事を口にするフェルナンド。
必死で堪えるハリベルに、何故抛って置くのかと、助けに行かないのかと問いかける。
そして最後にこのまま行けば死ぬと、自分の大事な従属官は死んでしまうぞとハリベルに現実を突きつける。

”死”という言葉にハリベルはほんの少し、小さく反応した。
だがそれを何故か無理矢理押えつける、そして戦士としての貌をしたハリベルは、アパッチ等従属官に対して、そしておそらく自分に対しても残酷な一言を口にした。

「あの娘達は自分から手を出した。　相手の力量も測れず、己が力量も弁えず・・・な。その代償があの姿だ・・・・・　あの娘達が自分で選択した姿だ、私が割って入り、助ける道理が・・・・・・・無い・・・・・・」

それはおそらく彼女にとって苦渋の決断だったのだろう。
何よりも、何よりも規律と、そして戦士としての礼、在り方を重ん

じるが故の決断。
自分から挑んだ戦いならば自分で決着をつけるべきである、ハリベル、そしてフェルナンドにも共通する心構え。
戦士として己の戦いに責任を持つという事、それはハリベルの従属官である三人にも当然言える事であり、故にハリベルは彼女たちを助けないと決断したのだ。

たとえそれが感情というものを押し殺した決断であろうとも。

対してフェルナンドは、そんなハリベルの苦渋の決断にもなんら反応を示さなかった。
相変わらず隣にいるハリベルに視線を向ける事はなく、ただ三人の方だけを見据えているフェルナンド。
そして「そう・・・かよ。」と小さく呟くと、フェルナンドはゆっくりとその場で立ち上がった。

「ま、お前がそう決めたんなら俺は何にも言わねぇよ。・・・・・・じゃぁ俺はちょっくら行って来るわ。」

そう言うとフェルナンドは円柱の上から飛び降り、アパッチ等のいる方向へと歩き出した。
それを見たハリベルが驚き、慌てた様子でフェルナンドを止める。

「待てフェルナンド、一体何をしに行くというのだ。」

「あぁ？　決まってんだろうが、あの三バカを回収しに行くんだよ。お前が行かねぇって言うんなら、俺が行くしかねぇじゃねぇか。」

制止するハリベルの言葉に、フェルナンドはその場で振り向き、それが当たり前だと言わんばかりの態度で答えた。
”三人を回収しに行く”　この状況でそれは”助けに行く”　と言っているのと同義だった。
フェルナンドから出たとは思えぬその言葉、他者に対して手を差し伸べるかの如き行為。
その発言に驚きを深めるハリベル、しかし一方でそれは余りに無謀な事、向かう先は暴虐の渦も同然の場所、いかなフェルナンドといえどその渦から逃れる事など出来るはずも無い場所なのだ。

「止めろフェルナンド・・・・・・　今行けばお前まで殺されかねんぞ・・・・・・」

故にハリベルは止める。
その余りに無謀な行為を止める。
十刃は、それも上位十刃は別次元なのだ、その中でも更に異質な存在に立ち向おうとするフェルナンドのそれは、”勇”ではなく”無謀”だと。
制止の言葉をかけるハリベル、それにフェルナンドは背を向け、そしてまったく別の言葉を返した。

「そういえば一つ言い忘れてた事があったな・・・・・・アイツ等があのデブに飛び掛った理由だけどよ・・・・・・お前だぜ？　ハリベル。」

「なに？　一体どういう・・・・・・」

「”淫売”、あのデブはアイツ等の目の前で、お前の事をそう言ったんだ。実力じゃなく身体を使って藍染に取り入った淫売女、って

な・・・・・それを聴いた瞬間アイツ等ブチキレてヤツに飛び掛ったんだわ。・・・・・それであのザマさ。」

「なん・・・だと・・・・・・・・？」

フェルナンドが語るこの事態の根源、始まりは、たった一言の侮蔑の言葉だった。

玉座の間へと突然姿を現した第２十刃たるネロの姿に、辺りにいた破面は困惑、そして戦慄していた。

破面ならば誰もが知っているその異常性、現れた災厄、彼等に緊張が奔っていた。

しかしその緊張など無意味な事だった、ネロは目に付いた破面に次々と難癖をつけては殺していく、それは余りに一方的、弁明の余地無く掻き消えていく破面達、そしてそれを嘲うかのようなネロの姿。

その行為に理由も、そして意味も存在などしていないのだろう、ただその時、殺したいと彼が思ったからそうしているだけ、感情を理性で抑制する、それがこの男には存在していないかのような、その一瞬の感情が先走り続けるような暴虐の振る舞い、しかしそれを止めようとした者がいた。

それがアパッチ等ハリベルの従属官三人だった。

常よりハリベルから戦士としての在り方、そして戦う者への礼というものを教えられた彼女たちにとって、今目の前で行われている一方的な命の搾取は、とても見過ごせるものではなかったのだ。

ハリベルの教えに従い、戦士としてネロの前に立つ三人、そしてネロは彼女達の姿を見て暫し考えたようなそぶりを見せると、口元を歪め、心底可笑しそうに彼女達に言い放った。

「ゲヒャ、メス共、お前等の事知ってるぜ？”元第４（クアトロ）”の奴隷だ

ろ？しっかしあのメスもうまくやるもんだぜ、実力が無ぇもんだから無駄に育った身体つかって十刃になっちまうんだからよぉ。えぇ？　今だって藍染の野郎にしな垂れかかって御奉仕中か？とんだ淫売女だぜ、テメェらの御主人様はよぉ！！」

嗤う、愉快そうに、心底愉快そうに耳障りな嗤い声を上げるネロ。
吐き出されたのは侮蔑と嘲笑の言葉、ハリベルを貶めるためだけの言葉、そしてそれを聴いた瞬間彼女達は自らの斬魄刀を手にし、ネロに飛び掛っていた。
自分達のことならばいい、いくら馬鹿にされようが構わない。
だがしかし、コレだけは許せない、許す事ができないと、主たるハリベルを馬鹿にし、貶め、その存在を辱めるようなその言葉だけは許せない、と。
相手が第2十刃だと彼女達は理解していた、その実力が自分達が届かぬほど上である事も理解していた、だが目の前の者は言ってはならぬ事を口にしたのだ、それに対して実力が上だからなどという理由で彼女達は引かない、いや引けない、彼女達の誇り、彼女たちの夢であり、理想であるハリベルを馬鹿にされたまま引く事などできなかったのだ。
彼女達はハリベルが、尋常ではない鍛錬によって今の地位を勝ち取った事を知っている。
メスだがらと卑下され、それでも一歩一歩、力を示し、積み上げた地位だと知っている。
それ故に彼女達は許せない、その言葉だけは許せなかった。
ハリベルの積み上げた”誇り”に泥を塗る、その言葉が許せなかった。

清廉潔白、高潔なハリベル、その従属官であるという誉、それが彼女達にとっての全てなのだから。

そうして自体は冒頭の結末へと戻る。
怒りに燃えようとも、決死の覚悟を持とうとも、そんな事で埋まるほど彼女等と十刃との溝は狭く、そして浅くないのだ。
無残にも倒れ臥す三人、悔しさと申し訳ないという思いを抱いたまま、彼女達の意識は墜ちていった。

明かされた真相にハリベルは更に強く拳を握る。
掌に爪が食い込み、握った拳から血が滴るほど強く、その拳を握る。
彼女に広がるのは自責の念、またしても自分のせいで彼女の周りに犠牲が生まれた事への後悔。
犠牲なき世界を自分が求めるほどに、犠牲が生まれるという矛盾。
それを生む自らの弱さ、自分が弱いばかりに強いてしまった犠牲、自分を慕い、思ってくれた者が自らの犠牲となってしまう。
ならば自分は一体どうすればいいのか、苦悩がハリベルを苛む。

「別にお前が悩むような事じゃねぇさ。　アイツ等は自分のやりたいこと、通したい筋を通したにすぎねぇ・・・・・・だがよぉ・・・　アイツ等の姿を見て、助けに行かなかったのは頂けねぇな。お前の立場も、心情も分かるさ、だがよぉ・・・アイツ等はお前の『仲間』なんだろ？　目の前で仲間がやられてるのを見て立場だの心情だの矜持だの……　んなモンは二の次じゃねぇのか？」

自らを責めるハリベルにフェルナンドが投掛けた言葉は、慰めではなかった。

自分の従属官が、それ以上に『仲間』だと言った者が倒れている。
それを見て何故直ぐに助けに行かないと、その姿を目にした時、その場の自分の立場や矜持などというものは関係無いのではないのか、と。
フェルナンドはハリベルに背を向けたまま問い、更に言葉を続ける。

「俺はずっと一人だった。　虚圏の砂漠でたった一人殺し合いの螺旋の中にいた・・・・・だがお前は違う、アイツ等っていう『仲間』がいた。俺はアイツ等とまだ数ヶ月の付き合いだ、だがアイツ等を見て俺にも『仲間』ってモンがどういうものか、ぼんやりとだが判った気がする。アイツ等は何を捨ててでも、それこそテメェの命を懸けてでもお前の”誇り”を守ろうとした。それが『仲間』ってヤツなんだろうな・・・・・・」

たった一人だったフェルナンド、彼が自分以外の存在と、これ程長い間いたのは初めてのことなのだろう。
そうしてフェルナンドがハリベルと三人の間に見たもの、それが彼が初めて見る『仲間』の姿だった。
その朧げな像を語るフェルナンドにハリベルは無言だった。

「勝てねぇなんて事アイツ等だって判ってただろうさ、だがそれでも戦わなきゃいけねぇ時ってもんがあるだろうよ。テメェの譲れねェもんの為に戦わなけりゃいけねぇ時があるだろうがよ。その結果が今のアイツ等の姿だ、俺は負けるのはキライだが、今のアイツ等の姿は悪くねェと思うぜ。それに比べて・・・・・・　この前お前は俺に誇りで道を誤るのは愚かだと言った。じゃァ今のお前は何だ？　テメェを偽ってまでその”戦士の在り方”なんてもんに拘っていやがる・・・・・・くだらねぇな・・・　まったくもってくだら

ねェゼ・・・・・・今のお前は、俺が殺す価値もねェよ。」

そう言って歩き出すフェルナンドに、ハリベルは声を掛ける事が出来なかった。

『仲間』

何よりも守ろうと、そのために強く”力”を求めた存在を、彼女は己の矜持のために切り捨てようとしたのだ。
己の矜持の為に、ハリベルはその感情を無理矢理に押さえ込んだ。
フェルナンドはそれを「くだらない」、と一言で斬り捨てた。
そして今のハリベルは自分が殺すに値しない存在であると、フェルナンドはその言葉を叩きつけたのだった。

守るべきものはなんなのか、戦士としての矜持か、十刃としての立場か、それとも己の感情か。
ぐるぐるとハリベルの頭を巡る思考の波、何故自分は力を求めたのか、何故自分は誇りを尊ぶのか、何故自分は彼女達を見てすぐさま飛び出せなかったのか、何故、何故、何故、何故、巡る思考は渦を描く、しかしその答えは一向に出ない。

（私は・・・・・・　私はどうして・・・・・・）

螺旋の思考に埋没するハリベル。
その下向きの螺旋、先に答えはあるのか、もしかしたら答え等無いのかもしれない、そして答えがあるとすればそれはその先でなく、もっと別の場所にあるのかもしれない。
俯くハリベル、そしてフェルナンドは更にその歩を進めていた。

「・・・・・　なんだぁ？　もう終いかよ。奴隷の躾もまともに出来ないのか、あの淫売女は・・・・・・　メスの存在理由なんてモンは！オスをどれだけ愉しませるかって事だけだろうが！木偶（デク）に用はねぇ！　死ね雑魚メス共が！」

相変わらず倒れた三人に罵声を浴びせ続けるネロ。
しかしそれも飽いたのか、その拳を目一杯振り上げ、近くに転がっていたスンスンの頭に振り下ろそうとする。
今までのように愉しむための加減は無く、その頭部を叩き潰すためだけに振るわれるその拳、動かなくなったのならば要らないとばかりにそれを振り下ろさんとするネロ、だが次の瞬間彼のその貌に強い衝撃が奔り、ネロはその手を止めてしまった。

「ようクソデブ。　動かねぇコイツ等とやってもつまらねぇだろ？俺が相手をしてやるからかかって来いよ。」

そうしてネロに声を掛けたのはフェルナンドだった。
身体に辺りを焦がすように燃え盛る紅い霊圧を纏い立つフェルナンド。
スンスンが殺されそうになったその瞬間、フェルナンドは響転によって一気にネロへと近付き、その勢いのまま跳び上がり、全力でネロの頬を蹴り抜いたのだ。
対して蹴られた方のネロは拳を振り上げたまま止まっていた。

そしてゆっくりと空いているほうの手がフェルナンドに蹴られた頬へと伸びる。
二三度頬を触ったネロは、振り上げていたほうの拳を下ろし、両手を下げた状態で、沈黙していた。

（チッ、クソが・・・・・・　霊圧解放して蹴ったってのにまったく効いてねぇ・・・・・・こりゃ厳しいかもしれねぇな・・・・・・）

沈黙するネロを尻目にフェルナンドは内心舌打ちをする。
攻撃の瞬間、フェルナンドは己の霊圧を全開にして攻撃していた。
フェルナンドにとって霊圧解放は諸刃の剣、強すぎる霊圧と、逆に不完全な肉体、肉体は自身の霊圧に耐え切れず自らの身体にも牙を剥くのだ。
それでもフェルナンドは霊圧を解放して攻撃した、それは今までフェルナンドが冷静にアパッチ等がネロと戦う姿を見て、そして彼女等を嬲り続けるネロを見て出た結論、霊圧を解放せねば自分の攻撃は届かないという結論故だった。
しかしその結論故の攻撃も、さしてネロにダメージを与えた風でもなく、フェルナンドはこれからの戦いが厳しいものになると確信していた。

フェルナンドが内心で覚悟を決めている間に広間に変化が起こっていた。
ネロが暴れ、砕いた床や柱の欠片が弾けだしたのだ。
ネロを中心に広がるそれ、そして沈黙していたネロが不気味に呟きだす。

「蹴った？　このオレ様を？　このオレ様が蹴られたのか？あんな

小蠅に？　・・・・・・・・・・・・・・　許せねェ・・・・・・・・許せるはずがねぇ・・・　いや、許されねェ、許される筈がねェェェェェェェエエエ！！！！！」

突然の咆哮と共にネロの莫大な霊圧が爆発する。
それはネロを中心に、その周りのものを吹き飛ばすほどの圧力をもっていた。
それにより壁際まで吹き飛ばされるアパッチ等三人と、その場で何とか耐えるフェルナンド。

「小蠅がぁ！！　テメェ如きゴミムシがこのオレ様に触れただと？許されねェ！！　オレ様は”神”だ！　テメェ等如きカスは！このオレ様が許しているから生きていられる！そのカスがオレ様に触れたどころか蹴っただと？大罪だ！　大逆だ！　死んで詫びる事すら許されねェ！！いや、カスの存在そのものが許されねェ！ここに居るカス総てが同罪だ！　テメェを殺したら他も全て皆殺しだ！　”神”に逆らった罰を受けろ！カス共がァァァああ！！！」

咆哮、その異常とも言える自尊心により自らを”神”と称するネロ。
他の破面の存在すら自分が許しているから存在できている、と豪語する彼。
自らの力を、そして存在を絶対と信じて疑わない精神、しかしその異常な自尊心と歪んだ精神には歯止めが無く、際限なく加速した彼は、遂にはフェルナンドのみならず、この場にいる破面全ての抹殺、という余りに理不尽な答えを導き出した。

その言葉で玉座の間は恐慌状態へ陥った。
我先にと逃げ出す破面達、出口に殺到する彼らの姿はまさに必死、

しかしそれもそのはず、彼等が如何に戦いに生きる生物だとしても、
やはり死にたくないのだから。
そうして玉座の間に残ったのは、ネロとフェルナンドを除き十数体
となっていた。
未だその中心で霊圧を噴出し、叫び続ける男。

彼の名は破面Ｎｏ．２『ネロ・マリグノ・クリーメン』、藍染惣
右介の第２の剣であり、十刃の第二位、第２十刃（ゼクンダ・エスパーダ）に座す者、そして
その彼が司る死の形、人が避けえぬその形、彼を表すその形、それは

『暴走』

暴虐の嵐
総てを呑み込む

埋没する女神
答えは何処か・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 19（後書き）

何とか今週中に投稿できました。

今回登場したのがアンケートを元に作ってみたキャラ「ネロ」です。
なんと言うか、自分で書いているのですが、コイツ絶対いい死に方しないな、と思ってしまいました・・・・・・
皆様に、うわぁ～何コイツ？　と思っていただければある意味狙い通りです。
現状は見た目、性格も劣化版ヤミーな感もありますが、今後違いを出せればと思います。
解放はいま少しお待ちください。
アイデア協力して頂いた皆様感謝です。

司る死の形ですが、ネロは『暴走』、ドルドーニが『野心』です。
ドルドーニはさておき、ネロのほうは表現できていたでしょうか？
感想お待ちしてます。

BLEACH El fuego no se apaga. 20（前書き）

場面の切り替わりがちょっと見辛いかも・・・・・・

”暴力”、まさにそうとしか表現出来ない程の霊圧の暴風、虚夜宮『玉座の間』に、それは吹き荒れていた。
その発生源は広間の中心で叫び、喚き散らす巨大な人影、ネロ・マグリノ・クリーメン。
頬を蹴られた、いや、触られたというそれだけの出来事が、この暴力的なまでの霊圧の渦を作り出していた。

その霊圧の中心から少し離れた位置、広間の中に在って円柱状の構造物が立ち並ぶ場所、ネロの霊圧解放により崩れたその場所に未だ立ち尽くすハリベルの姿があった。
ネロに挑みかかった事により、返り討ちにされ倒れた彼女の従属官、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスン。
その三人を、己の従属官である三人を見殺しにしてしまうところだった彼女、その事実が彼女を苛み続けていた。
そしてフェルナンドに突きつけられた言葉、「仲間がやられているのに何故直ぐ飛び出さなかったのか」という言葉が、彼女の思考の中で広がり、彼女を思考の海に埋没させていった。

（何故私はあの娘達を見殺しにするようなことを・・・・・そん

な事が許される筈が無い・・・・・・　では何故だ？・・・私は”力”を求めた、”力を”求めそれを示し、十刃の座まで上り詰めた・・・・・それに私は固執したというのか？　立場に、責に固執するあまりあの娘達を犠牲にしてしまったのか？求めた”力”が、示した”力”が私を縛るというのか・・・・・ならば・・・　ならば私が”力”を求めた事自体が間違いだったというのか・・・・・・・・）

ハリベルはひたすら自問を繰り返す。
理解しがたい己の行動、その理解できない行動を理解しようとひたすら思考し、自問した。
結果としてアパッチ等従属官達を見殺しにするところだったハリベル、それがそもそもの間違いであるのは言うまでも無かった。
では何故そうなってしまったのか、今ハリベルにその答えは無く、ただ繰り返される自問は己への呪いと化す。
負の思考連鎖、考えれば考えるほどに深みに嵌るそれ。

ハリベルは自問する、自分は何故”力”を求めたのかと、求めたのは自身の理想の為、そして自分はそれを手に入れたと、辛酸を舐め、傷つき倒れながらも”力”を手にしたと。
そしてその”力”に見合う立場を得、そしてその立場に、そして責任に恥じぬ振る舞いをしてきた、と。
しかし現実に目の前に広がった光景、傷つき倒れ臥すのは己の従属官、それはまさしく彼女に再びの理想の崩壊を告げる光景だった。
それは手に入れた立場に、地位に、そして負うべき責任に重きをおいた、いや、固執してしまった彼女への罰なのだろうか。
上に立つものが負うべき責任、その重さ、それが判るハリベルだからこそ、判り過ぎてしまう彼女だからこそ陥った悲劇、そしてなにより戦う者としての在り方を尊ぶ彼女だからこそ陥った悲劇、それ

が彼女に襲い掛かったのだ。

故に彼女は思う。

ならば、理想を追い求め手にした”力”が何の意味も持たず、それにより得た地位と責が自身を縛り、今再びこの悪夢のような光景を見なければいけないというならば、そもそも自分が”力”を求めた事すら、”力”を手にした事すら間違いだったのか、と。

彼女、ティア・ハリベルは”力”を、それも強大な”力”を手にした。

しかしそれは何のためだったのであろうか、彼女が手にしたものは一体何のための”力”だったのであろうか、彼女が求めたものは、理想は、”力”によって得られる地位だったのか、それともその”力”と共にその内に築き上げた戦士としての誇りと在り方だったのか、だがそれは『否』だ。

真に彼女が求めたものは、その理想は、”力”を手に入れることでも、戦士としての誇りと在り方を全うする事でもないのだ。

未だ悩み続けるハリベル、負の思考、螺旋、連鎖、その只中にいる彼女は未だ”答え”に届かない。

しかし時間は無限ではなく有限、むしろそれは迫り来るのだ。

迫り来る時間、それは彼女に更なる悲劇を齎す秒読み、そしてハリベルに時は然程残されてはいなかった。

「グォオォオォオォオオオオ！！！　死に曝せ！！薄汚ねぇ小

蠅がぁアァァアアア！！！」

雄叫び、咆哮という言葉すら生ぬるい怨嗟を含んだその叫び、それと共に繰り出された拳に尋常ではない霊圧を纏わせたネロの一撃が床を粉々に粉砕する。

粉砕されたのは先程までフェルナンドの立っていた床、フェルナンドはその攻撃を紙一重で避けるが、込められた凄まじい霊圧の余波でその場から吹き飛ばされてしまう。

（クソ！　霊圧だけで吹き飛ばされる・・・かよ。）

吹き飛ばされたほうのフェルナンドは、その事実に悪態をつく。

自身とて霊圧を解放しているにも拘らず、それをして尚吹き飛ばされたネロの霊圧の凄まじさ、余波を受けるだけで身体が軋む程の威力、グリムジョーとすら真っ向から殴り合いを行えた霊圧解放状態のフェルナンドが、簡単に弾き飛ばされた事実からそれが如何に凄まじいかが伺える。

対して吹き飛ばした方のネロは、未だフェルナンドが死んでいないと見るやその巨体に似合わぬ速度でフェルナンドへと肉薄し、再びその拳を振り下ろす。

その拳には鍛錬を積み重ねたような洗練された動きは皆無だった、本能のみで振るわれる拳、ただ殺す為に振るわれるだけのそれは、まさしく暴力の具現であろう。

それに対し反撃を試みるフェルナンドだが、ネロの纏う圧倒的な霊圧の前にそれはあまりに無力、フェルナンドは拳と蹴りを数発ずつネロに対して叩き込みはしたが、そのどれもが急所を狙い捉えたにも拘らずネロは無傷だった。

結局のところ霊力、霊圧を用いて戦う破面、虚、そして死神の三者において共通する事柄がある。
それは、戦いとは戦闘の技術も然ることながら霊圧の大きさによる『霊圧の戦い』が大きく関わってくる、という事。
霊圧の高さは有利に働く事は多々あるが、それが不利になるという事はまず無い。
高い霊圧はそれだけで相手に対しての大きな有利となり、戦闘におけるひとつの勝利の要因となりえる。
それだけが勝敗を分けるか、といえばそれはありえない、だがあくまでひとつの要因として純然と存在する『霊圧の戦い』、そして今フェルナンドとネロの間で、その戦いはネロの圧勝だと言わざるを得なかった。
それでもフェルナンドは攻撃の手を緩めない、ネロの大振りの一撃を避わしては拳を放り込む。
それには彼なりの目的がった。

（アイツ等は・・・・・・大分離れた、か・・・・・・これでこっちの目的は達成、だな・・・・・・にしてもハリベルの奴、ウジウジと悩みやがって・・・・・・テメェが譲れねぇことなら、他の事なんてのはかなぐり捨てちまえばいいものをよ・・・クソッ、イラつく。）

戦いの中、探査回路を使い三人の位置を確認するフェルナンド、そして彼の目的は最早半ば達成されていた。
アパッチ等三人を回収するのが彼の目的、何故そうしようと思ったのかは定かではないが、結果としてフェルナンドは彼女等を助ける事を選択した。
そして方法はどうアレそれは既に完了したといっていい状態だった。
怒り狂ったネロが解放した霊圧によって、彼女たち三人はそれぞれ

遥か壁際までその身体を吹き飛ばされていたのだ。
結果としてネロの手の届く範囲から離脱した三人、そして彼女等の代わりにネロの新たな標的となったフェルナンドの存在により、彼女等はその命を繋ぎとめたのだ。

そんなフェルナンドに過ぎる思い、それはハリベルの姿だった。
何かを悩むように、そして必死に押さえ込むようにするハリベルの姿、そんな彼女の苦悩する姿はフェルナンドからすれば然も無い事だった。
彼女の考えやその悩みをフェルナンドは判っていた、判った上でフェルナンドにとってそれは然もない事なのだ。
それも当然だろう、彼は自分の欲求、求めるものにはとても素直なのだ。
求めるものが手に入る、その可能性があるのならばそれを一切躊躇わない、その彼から見て自分を押えつけるハリベルの姿は、その思いは判るが理解できないものであった。
そんな彼女の姿勢にフェルナンドはどことない不快感と、消化しきれぬ様な複雑な思いを感じていた。

束の間の思考、それは現状からの意識の乖離、しかしそれは彼らしからぬ一瞬の”緩み”、戦闘の最中に別の事にその思考を裂くという愚行、命がけの戦いの中でその一瞬の隙は、超一流の戦いの中では”隙だらけ”であると言い換えてもいいものだった。
そしてそれは確実にその一瞬を捉えた。

「余裕じゃねぇか・・・・・・　小蠅がよぉ。」

「ッ！　カハッ！！」

フェルナンドにとってまさに一瞬の隙をネロは確実に捉えていた。
フェルナンドの背後から張り手の要領で、その大きな手がフェルナンドの身体を床に叩き付けた。
避ける隙すらなく無残に叩きつけられるフェルナンド、その身体が床にめり込むほどの威力、そして霊圧の猛威による圧力はその一撃でフェルナンドの身体を戦闘が困難なほど傷つけていた。

「ゴフッ！　ゴホッ！　ゴフッ！」

ネロがその手を退け愉悦の表情を浮かべる中、フェルナンドはうつ伏せの状態から仰向けへと何とか体勢をかえる。
そしてその直後、内臓に損傷を負ってしまったのか、フェルナンドがその口から何度も血の塊を吐き出す。
体勢を変え、そして血を吐くフェルナンドの姿を先程までの怒りは何処へ行ったのか、というほどニンマリと、まるでそのフェルナンドの姿が滑稽であるかのように醜悪すぎる笑みを浮かべるネロ。
苦悶の表情を浮かべるフェルナンドを眼下にするネロ、しかし彼がこの程度で止まる筈などなかった。

「漸くだ・・・・・・　チョロチョロと逃げ回りやがって小蠅が。テメェみてぇなゴミムシは！オレ様の前で飛ぶ事すら許されねェ！
二度と飛べねェ様に潰してやる！こうやって！！　何度も！　何度も！　何度もなァ！！」

そう言うとネロはフェルナンドの頭を鷲掴みにして掴み上げ、その

ままフェルナンドの頭を床に叩きつけた。
砕ける床がその衝撃の凄まじさを物語る、だがそれは一度では終わらなかった。
フェルナンドの頭を掴んだまま叩き付けたネロは、再びフェルナンドを持ち上げると先程同様床に叩き付けたのだ。
何度も、何度も、何度も、何度も、何度も、加速するように繰り返し行われる凶行、そしてそれが愉快で仕方が無いといった風に狂った嗤い声を上げるネロ、狂った暴力がその場を支配していた。

思い悩むハリベルの耳に届いたのは轟音だった。
”力”という彼女を構成する柱の一つが揺らぐ中届いたその音、それはまさにフェルナンドがネロの一撃の下に叩き伏せられた音だった。
そして落としていた視線を上げた彼女が見たのはまたしても悪夢だった。
フェルナンドを叩き伏せたネロが、狂ったように嗤いながら何度もフェルナンドを叩きつける光景、それは彼女に近しい者がまたしても犠牲となるその光景だった。

「ッ！　フェルナンド！！」

咄嗟に出た言葉と踏み出された足、そして伸ばされた手、それに気付いたハリベルはその瞳を大きく開いた。
不測の事態、咄嗟の出来事というものは、その者の本質を見る上で非常に有効な出来事だ。

いくら理性で捻じ伏せようとも、押えつけ、自制し、そして目を逸らそうとも、咄嗟に出てしまう”理性”ではなくその者の”感情”による行動。

そして今、フェルナンドが曝されている暴力とその光景が、ハリベルの”感情”による行動を引き出したのだった。

その伸ばされた手は、踏み出した足は一体何のためか、フェルナンドの危機に無意識に出たそれは何のためなのか。

それは『守る為』だ。

彼女の、ハリベルの理想は”力”を得る事でも、地位を得る事でも、まして誰かに認められることでもない。

立場などは後からついてきたものだ、誰からも認めてもらわなくても構わない、そして”力”とは目的ではなく手段でしかなかったのだ。

彼女の理想は『仲間が犠牲にならぬ事』、犠牲を強いれば何れ自らも犠牲を強いられる、自ら誰を殺める事も無く、仲間の為に他者の抑止力となり、そして盾となり『守る』事、それが彼女の理想の姿なのだ。

求めた”力”に、立場に、在り方に固執するあまり彼女が忘れていた事、求めたのは”力”ではなく”守る”事だった。

”力”とはそのための手段、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンの三人を、自分に付き従いそして支えてくれた彼女等を、『仲間』を守る事こそが彼女の、ティア・ハリベルの真の願いだったのだ。

（あぁ・・・・・　本当に簡単な事だったのだな。何一つ関係ないのだ、私の内にあったこの願いに、思いに比べれば・・・な。お前の言うとおりだったよフェルナンド、私のくだらない固執が全て

を曇らせた・・・・・それに気付かせてくれたのはお前だ・・・・・故に、お前を死なせはしない！）

瞳を閉じたハリベル、暗く重たかった彼女の内側は、今や晴れやかに澄み渡っていた。

簡単で、単純で、しかし忘れがちになるほど当たり前で些細な願い、後から後からと迫り来るものに覆い隠されるようになりがちな、しかし本当に大切なたった一つの願い。

それを再確認したハリベル、そしてそれを思い出させたフェルナンド、そして一瞬の瞑目の後、ハリベルの瞳が開かれる。

それは決意の瞳、それは覚悟の瞳、今だ行われる凶行を見据えハリベルは大きく一歩を踏み出す、決して死なせはしないという思いを胸に。

ハリベルは思う、”力”に固執したことは間違いだったと、しかし”力を”手に入れたことは間違いではなかったと。

それがあるから今、自分は彼の元へ駆けていけると、力無く止める事叶わず唯見ているのではなく、己が力をもって彼を救うために駆けて行ける、と。

いまだ半年の付き合いに満たない彼女と彼、言葉を交わすより拳と刀を交わした方が多いかもしれない二人、しかし彼女にとって彼はもう『仲間』だった。

ならば守る、何をおいても、それが彼女の理想であり求める些細な、しかしかけがえの無いものなのだから。

「ゲヒャヒャヒャヒャヒャ！！　死ね！　死ね小蠅が！このオレ様

に！　”神”に逆らった報いを受けろ！頭蓋が割れ！目玉が飛び出し脳漿が零れ！無様に変わり果てた姿で許しを乞え！　”神”の前に跪け！　そうすればその頭を一息に踏み砕いてやるぞ？ゲヒャヒャヒャヒャ、ヒャ・・・・・・　あん？なんだぁ？　何処に消えやがった？」

口汚い言葉でフェルナンドを罵りながら、ネロはその手を止めず、フェルナンドを床に叩きつけ続けていた。
ネロにとってこの凶行は当然の行為、自身を神と称して憚らない彼にとってそれに逆らったフェルナンドに対し、罰を与えるのは当然の事だった。
何度も叩きつけ、次第に頭蓋に罅が入り、砕け、飛び散る感触を夢想するネロの顔は、命を刈り取る優越感と、娯楽を愉しむが如き喜色が溢れるその心根の醜さを表すが如き笑顔が浮かんでいた。

しかしそのネロに違和感が走る。
その手にしかと握り、存分に叩きつけていた筈のフェルナンドの身体がいつの間にか彼の手の内から消えているのだ。
ネロは自分でも気付かぬ間に殺してしまったかと、陥没した床を見やるがそこにフェルナンドの姿は無く、周囲を見回す。
そして彼が視線の先に捕らえたフェルナンド、彼は自分の足で立つ事無く、何者かに抱えられるようにしてそこにいた。

「なんだ元４番、そのクソムシはオレ様が罰を与えている最中だ・・・・・そこに置いてさっさと消えろ淫売女！・・・・・・あ～ぁ、そういえばそのゴミムシもお前が飼ってるんだったな、じゃァそれはテメェの色小姓か？こいつはイイ！　淫売にはお似合いだ！」

ネロが見たのはハリベルに抱えられたフェルナンドの姿だった。
左の脇に抱えられるようにしているフェルナンド、そしてハリベルの右手にはなぜか彼女の斬魄刀がしかと握られていた。
そのハリベルの姿を見たネロは彼女に、そしてフェルナンドにすら侮蔑の言葉を惜しまない。
自分以外の全てが彼にとって下の存在、それを罵って何が悪いと言わんばかりの彼の態度、しかしハリベルは冷静に、冷え切った声で呟いた。

「・・・・・・　愚かな・・・・・・・」

「なんだと？　良く聞こえなかったなぁ、　このオレ様がなんだって？」

ハリベルの口から零れたその言葉、ネロはそれを聞き漏らす事無く彼女に問う、その答えを間違えばおそらく次はハリベルがフェルナンドと同じ目に合うであろうその問、しかしハリベルは真っ向からそれを言い放った。

「愚かだ、と言ったのだ、ネロ・マリグノ・クリーメン。その言葉も、振る舞いも、そのその全てから愚かさが滲み出ているぞ。」

「そうか・・・・・・　どうやらテメェは死にたいらしいな、元４番。」

ネロに対しまったく引かずに言い放たれたハリベルの言葉、ネロという存在を全否定するようなそれ、その言葉は明らかに彼に突き刺すための言葉であり、その効果は充分、ネロは手を組み骨を鳴らし

ながらハリベルの言葉に青筋を立て怒りを顕にする。
だがそれすらもハリベルからすれば愚か極まりない行動に見えていた。

「やはり愚かだ・・・・・・　自分が斬られている事すら気付いていないとは・・・な。」

「あぁ？　何を言って・・・・・・　なっ！　無ぇ・・・・・・オレ様の指が無ぇ！！　この売女がぁぁあ！！！やりやがったなぁあ！！！」

ハリベルの握る斬魄刀から一滴の雫が落ちる。
それは血の雫、ハリベルはフェルナンドを掴むネロの手の指の一本を、その斬魄刀を持って斬り落としフェルナンドを助け出したのだ。
それはあまりに一瞬の出来事、興奮状態だったネロは己の指が落とされた痛みすら感じる事無く今に至っていたのだ。
ネロは眼前で手を組み指の骨を鳴らす仕草をするその時まで、自分の指が一本落とされている事に気づかなかった。
そしてそれに気がつくや訪れる激昂、触れられただけで引き起こされる理性の暴走と暴力の渦、それが指を落とされた等という事態となれば如何ほどのものか、しかしそれを前にハリベルは一歩も引く事は無かった。

それは唯一心に『守る』と決めた彼女の強さか、何者にももう二度と傷つけさせないと、アパッチも、ミラ・ローズも、スンスンも、そしてフェルナンドも、誰一人自分の目の前で傷つけさせてたまるかと言う彼女の強い決意がその場を引く事を許さなかった。

激昂し、喚き散らすネロ。

そしてその原因を作ったハリベルに、自身の体の一部を斬るという大罪人に神罰を与えるべく動き出そうとする。
しかしその直前、数箇所ある出入り口から暴虐の舞台と化した広間に、数体の人影が足を踏み入れた。
そしてその惨状と、中心に居りその原因であろうネロを確認すると、その中の一体、がっしりとした身体つきの老人が声を張り上げた。

「この悪ガキが！！　暴れるなら他でやらんか！！儂の往く道を瓦礫で埋めるとは何事じゃい！！！」

「うるせぇ！　叔父貴は黙っててくれ！この売女オレ様の指を斬り落としやがった！　殺さねぇとオレ様の気が収まらねぇんだよ！！」

ネロに叔父貴と呼ばれたその老人、そして彼に続くように、また別の入り口からも人影が中心、ネロの方へと集まる。
その数は老人を含め”８体”、一様に個性と異彩を放ち、ネロの霊圧吹き乱れるこの場所にあって顔色一つ変えぬ豪胆さ、それだけでこの８体の人影の強さが伺えた。

「・・・・・・・・・・・・・」

「無意味な・・・・・・・」

「なんと粗暴な・・・・・・・　まったくもって美しさというものが無い・・・」

「藍染様の宮殿に傷をつけるとは・・・・・・・・浅慮が過ぎるのでは？　第２十刃殿。」

「ケッ！・・・・・・」

「これはずいぶんとハデニヤッタモノダネ。」

「なんだよ終いか？　もっとやれよ、つまらネェなぁ。」

思い思いにその惨状への感想を口にする人影たち、唯の破面ならばその言葉すら口に出来ない状況、それでも彼等は平然としていた。
それは一重に自負が在るゆえ、己の力に対する絶対の自負、唯の破面ならば戯言のようにしか聞こえないそれは、彼等には当てはまらない。
彼等は示したのだ、この虚夜宮に巣食う全ての破面にその実力を、その圧倒的な力と殺戮能力を。
彼等こそハリベル、そしてネロと同じ破面の頂点の一角を担う者達、十振りの剣、暗黒の座を担う魔獣、『十刃』なのだ。

破面Ｎｏ．１『第１十刃』（プリメーラ・エスパーダ）”大帝”　バラガン・ルイゼンバーン

破面Ｎｏ．２『第２十刃』（ゼグンダ・エスパーダ）ネロ・マリグノ・クリーメン

破面Ｎｏ．３『第３十刃』（トレス・エスパーダ）ティア・ハリベル

破面Ｎｏ．４『第４十刃』（クアトロ・エスパーダ）ウルキオラ・シファー

破面Ｎｏ．５『第５十刃』（クイント・エスパーダ）アベル・ライネス

破面Ｎｏ．６『第６十刃』（セスタ・エスパーダ）ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ

破面Ｎｏ．７『第７十刃（セプティマ・エスパーダ）』ゾマリ・ルルー

破面Ｎｏ．８『第８十刃（オクターバ・エスパーダ）』ノイトラ・ジルガ

破面Ｎｏ．９『第９十刃（ヌベーノ・エスパーダ）』アーロニーロ・アルルエリ

破面Ｎｏ．”１０”『第”１０”十刃（ディエス・エスパーダ）』ヤミー・リヤルゴ

以上十名をして『十刃』、折れる事なき創造主藍染惣右介の剣達、その十刃が今荒れ果てた『玉座の間』で一堂に会していた。

そうして十刃がそろい踏みした玉座の間、しかしネロの暴走は止まりはしなかった。

老人、バラガンの言葉に反しハリベルに襲い掛かろうとするネロ、しかし再び、先程よりも大きさを増した声がネロに降り注ぐ。

「だからお前は阿呆なのだ!!!　唯振り回すだけで何も考えておらん!蟻の方がお前より幾分マシじゃわい!・・・・・・それにそろそろ終いの時間じゃ・・・・・・」

一喝、唯気に入らないとその拳を振り回すネロをバラガンが一喝する。

しかしそれは彼のため、と言うわけではなくそれを見ることが不快

極まりない、という唯それだけの事だった。
そして何かに気がついた様にバラガンが事の終わりを告げる。
ネロはその意味がわからない様子だったが、次の瞬間否応無しに理解した。

「縛道の九十九　“禁”　」

広場に静かに響いたその言葉、それと同時に変化は劇的に現れた。

「ッ！？　クソ！　なんだこいつは！！」

声を張り上げたのはネロ、見れば彼の腕に、いや全身に分厚く黒い帯のようなものが巻きつき、更にその上から鋲が突き刺さる事で彼を拘束していた。
しかし拘束されたネロはその有り余る力を持ってそれを引き千切ろうとする。
だがそれも更に響いた言葉によって無意味なものとなった。

「縛道の九十九　二番　”卍禁(ばんきん)”　初曲『止綯(しりゅう)』、弐曲『百連閂(ひゃくれんさん)』、終曲『卍禁大封(ばんきんたいふう)』」

一息の内に紡がれた言葉、まるで歌うように連なった言葉はそれだけでネロを完全に拘束した。
『止綯』により何処からか発生した布はネロの顔以外を何十にも包み込み、『百連閂』で数十本に及ぶ鉄串がネロの身体に突き刺さり完全に固定、そして『卍禁大封』で空気中の霊子を集束し出来上がった巨大な石柱がネロの身体を押さえ込み、その場に捻じ伏せ拘束

したのだった。

「クソ！　クソ！　なんだってんだ！　畜生！」

最早もがく事すらできないネロ、地に這い蹲らされた彼、そしてその彼の遥か上から声が降って来た。

「久しいね、ネロ。　こうして顔を合わせるのはどれくらいぶりかな？」

「テメェ・・・・・・」

その声の主を睨みつけるように見上げるネロ、その怒りの感情を隠そうともしない彼は、それを声の主へとその視線に乗せてぶつける。しかしその視線を真正面から受けた声の主は、その顔に貼り付けた柔和そうな笑みを崩す事無く、ただネロを見下ろしていた。

声の主は”神”を自称するネロにその力を授けた者、彼いや、彼等全ての”創造主”たる者。

この広間にいる全ての破面の視線先に居るのは、目を逸らす事が許されないほどの圧倒的存在、その後ろにもう一人、破面ではない者を従えた男、藍染惣右介の姿だった。

暴虐が過ぎ去り
十の剣は集う

時は満ち
全ては掌の上

世界を崩し
いざ、天の座へ

BLEACH El fuego no se apaga. 20（後書き）

フェルナンドものっそいボコボコになるの回。

そしてもうちまちま出すのが面倒だから
いっそのこと一気に出してみる事にしたｗ
まぁみんな一言しか喋ってないけどね～（どれが誰の台詞かわかったかなぁ？
十刃そろい踏み、そして密かに5番はオリキャラだというオチ

前半アレだけ苦悩していたハリベルが
後半は空気になってしまったのは一重に作者の力量不足、悔やまれるなぁ・・・・・・
ハリベルの答えは一応この様な形にしてみました。
おそらく賛否あるかと思います、それなりにうまく落とせたと思うけど・・・・・・

今回時間の流れが微妙にうまくいってない感がありましたがどうでしたか？

BLEACH El fuego no se apaga. extra（前書

１０万ＰＶ突破とお気に入り１００件突破のお礼として番外編書いてみました。
本編の長さに比べると大体半分くらいの短いものですが内容的には濃いです。てかウザいですｗ
息抜き程度に読んでください。

諸君お初にお目にかかる、吾輩の名はドルドーニ、全ての女性（フェメニーノ）の従属官にして虚夜宮、いや虚圏一の伊達男！

抱かれたい破面ランキング1位！（まぁ自称ではあるが・・・・・・）違いの解る男！　紳士　ＯＦ　紳士！

第６十刃（セスタ・エスパーダ）　ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオであ～～～る。

本日は吾輩の華麗で優雅な一日というものを、諸君に特別にお見せしよう。
吾輩のように優雅でどこか渋さ漂う立派な紳士を目指すそこの君(ウステー)！
！その目を皿のように見開いて吾輩の一挙手一投足を見逃さぬようその目に、そして記憶に焼き付けたまえよ！

吾輩の一日、それは優雅な一杯の紅茶から始まる。
虚夜宮の天蓋、偽りの空というのは少々無粋な感もあるが、吾輩の瞳にはしっかりとその天蓋の向こう、全てを飲み込んで余りあるような虚圏の暗く深い夜空が写っているので心配など無用さ！
そうして我が宮殿、第6宮の下官が紅茶を運んできた。
その下官はもちろん女性だ、朝から男のむさ苦しい顔など見ては一日陰鬱に過ごさねばなるまい？

「ありがとう。美しい小鳥(アーベ)ちゃん、どうだい？このまま吾輩と優雅なお茶の時間をすごさないかい？」

紅茶を持ってきてくれた小鳥ちゃんをお茶に誘う。
一人で飲む紅茶もいいが、目の前に美しい人がいた方がイイに決まっているだろう？
しかし小鳥ちゃんは、吾輩と目を合わせることも無く、しかしどこか冷たい目をしてそそくさと出て行ってしまった・・・・・・
さ・て・は・　吾輩のあまりの凛々しさとお茶の誘いに気が動転し、なんと答えていいか判らず部屋を飛び出してしまったんだね小鳥ちゃん！
なんという初心！　恥ずかしがり屋さんの小鳥ちゃんだ、その恥ず

かしさを誤魔化すためにあえて、あ・え・て・あんな目をしてしまったんだね、あぁ吾輩はなんと罪作りな男なのだ、また一人女性のハートを射止めてしまったよ。

さてお茶の時間も終わった、次は何をしようか・・・・・・
うん？　仕事は無いのかと？まぁあることはあるのだがね・・・・・・
・　十刃の仕事は『戦う事』さ。
故に藍染様よりご命令が無い限りは、こうして待機するより他選択肢など無いのだよ。
かといってだらだらと一日を過ごすのは紳士の道に反する、常に華麗で優雅な吾輩に暇な時間など無いのだ、ではどうするか・・・・・・
・
そうだ！　今日は特別に君たちに吾輩の”弟子（アプレンディス）”を紹介しようではないか！
いやなに先日それはもう美しい淑女と出会う誉が在ったのだが、その際に拾ってきた破面、残念ながら男だがなかなかどうして見所のある者だった。
それ故この吾輩が直々に鍛えてやろうと考えたのだ、しかしこの破面がまたじゃじゃ馬で・・・・・・
この吾輩の弟子にならないか？　と誘ってみれば壁を蹴破って帰ってしまう始末、さすがにあの壁を修理していたときは惨めだった・・・・・・
しか～し！！　その程度で諦めるほど吾輩のハートは脆くない！例え虚閃の直撃を受けようとも、吾輩のこの燃えるハートを壊すことは出来ないのだよ！！
さぁそれでは吾輩の弟子である破面、グリムジョー・ジャガージャックの元へ行こうではないか！

「やぁ我が弟子グリムジョー（アプレンディス）！　師匠（マエストゥロ）である吾輩、ドルドーニが来てやったぞ！」

「・・・・・チッ、またウルセェのが来た・・・・・・」

アレこそが吾輩の弟子グリムジョー、どうだいなかなか強そうだろう？ま、吾輩には遠く及ばんがね！
それにしても師匠を前にして舌打ちとは・・・・・まだまだ反抗的な態度だね、だがしかし！それすらも許容する吾輩の器の大きさ！　コレこそが我輩の紳士たる所以といってもいい！
まぁそれはさておき、吾輩は彼に何か特別な事を教えているわけではない、唯、戦うだけさ。
なに？それの何処が師匠かと？　ノン、ノン、ノン、言葉で教え、手取り足取り教えた事など戦場ではまったくの無意味さ、戦いの中で編み出したもの、身に付けたものだけが真に戦場で意味を持つのだよ。

「では行くぞ！　我が弟子よ！」

「ウルセェんだよ！　弟子になった覚えはネェ！！」

「まだ言うか！　人にものを教わるのは恥ずかしい事ではないぞ！いい加減吾輩を”師匠”と呼びたまえ！！」

「誰が呼ぶか！　変態がぁぁああ！！」

彼、グリムジョーのいいところはその苛烈なまでの攻撃性と、貪欲な姿勢、いうなれば野心、ある意味吾輩に共通する部分ではある。だが彼の悪いところは素直でないところ、いい加減吾輩の事を師匠と呼んでくれてもいいだろうに、まったく・・・・・・

確かに、いきなり彼の前に現れて吾輩が師匠だと言ったときの、彼のまるでゴミを見るような視線は今も忘れられんが・・・・・・それはまぁいいか。

そもそもあれかね？　彼は現世の秋葉原なる魔窟発祥のツンデレというやつかね？それともツンツンか？　意味は良く判らんが吾輩そんな気がする。

それにしても最近はやるようになった・・・・・師匠として感慨深いものがある。

だがまだまだ、そう易々と超えられるわけにはいかんのでね、ほんのチョットだけ本気で相手をしてやろうではないか！

フハハハハ、受けてみるがいい！　この肉体美より繰り出される、華麗なる脚技と剣技の乱舞を！！！

「ふぅ、では今日はこの辺で終わりにするとしようか。次に吾輩が遊び・・・ゲフン、ゲフン、”稽古”を付けにくるまでに少しはマシになっておきたまえよ、では、アディオス！我が弟子（アプレンディス）～～。」

「グッ・・・クソがぁ・・・・・・」

いやはやなんとも、大人気なく少々本気でやりすぎてしまったか、弟子は砂漠に這い蹲っているよ。
それなりにやるようにはなったが、まだ吾輩の前に立つには足りないな。
考えてみれば吾輩もおかしなことをしているものだ、吾輩を倒し、第6十刃の席を奪うといったこの男を鍛えている、というのだからな。
何れ来るその戦いが愉しみで、そのために、最高の戦いのために敵になるであろう者を鍛える、か・・・・・・
きっとあの美しい淑女（セニョリータ）　も同じような思いを抱いているのだろうか・・・・・・

はっ、もしやこれは共通の話題を手始めにした恋の予感なのか！？
それならば僥倖、彼を拾ったのは成功だったな！もしや吾輩”あの者”のように先見の力を手に入れたのか？
待っていてください美しい淑女（セニョリータ）もう直ぐ貴方のドルドーニがお傍に参りますよ～～。

さて、弟子に修行をつけてやった後はシャワータイムだ。汗臭いままでは女性に嫌われてしまうだろう？
さすがに此処はお見せするわけには行かない、いろんな意味でダメだからね。
では暫し失礼するよ。
まぁその間暇だろうから、吾輩の美声を聞きながらまっていてくれ

たまえ。

「ジャーーーン、ジャンジャジャン、ジャジャンジャーーーン、フンフンフーン、フフンハーーン、フフーっ！！痛い！　シャンプーが目に！　目に入ってしまった！痛い！地味に痛い！染みる～！百歩譲って痛いのはいいが地味なのはいや～～！！」

・・・・・・・
・・・・・
・・・
・

やぁ、諸君お待たせしたね。
え？　目は大丈夫かだって？　何を言っているんだい、吾輩がシャンプーが目に入って悶えるなどという無様を曝すわけが無いじゃないかぁ。
吾輩いつも現世のシャンプーハットなる装備を装着してシャワーを浴びるからね！ホントだからね！

・・・・・・まぁいい、これからは宮殿とその周辺の見回りだ。
こんな事は十刃の仕事ではなく従属官の仕事なのだが、あいにく吾輩に従属官は居ないのでね。
なぜかって？　男の従属官などむさ苦しいだけでダメさ！なら女性ならばどうか、と？　チッ、チッ、チ、解っていないね。
女性を従属官などと縛りつけるなんて事は、吾輩の道に、紳士の行いに反するのさ。

覚えておきたまえ、女性は”縛る”ものでなく”愛でる”ものなの

だよ。

「やぁ美しいお花(フロール)ちゃん、今日も一段と美しい、どうだい吾輩とお茶でも・・・・・・」

「また会ったね、美しい小鳥(アーベ)ちゃん、日に二度も会うとはまさに奇跡としか言いようが無い、ということおで吾輩とお茶を・・・・・・」

「これは美しい子猫(ガート)ちゃん、気まぐれついでに吾輩とお茶・・・・・・」

・・・・・言っておくがこれはあくまでコミュニケーションの一環だからね？
決してやましい気持ちがあるとか、綺麗な女性とお茶がしたいとか、お近づきになりたいとかそういう不純な動機からじゃないからね？
現に声を掛けた全ての女性から「ごめんなさい」って言われてるんだからね・・・・・・

しかし吾輩諦めない！
第６十刃の地位を使えば女性を従わせる事もできる、だがそんなものは下衆の行いだ。
吾輩は紳士、力で従わせるなどという無粋は許容できるわけが無い！
あくまで女性のために生きる男！　それが吾輩ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ！頑張れ吾輩！　負けるな吾輩！

さて見回りも終わった。
此処からは吾輩の鍛錬の時間なのだが・・・・・・
申し訳ないが此処から先を見せるわけには行かないのだ。
別に実力を隠したいだとか、秘密の特訓をしているだとか、そんな理由ではないのだが、駄目なのだ。
それは何故か、と？　ふむ、では一つ訊こう。

君たちは白鳥という鳥を知っているかい？　白く、大きく、そして優雅な美しい鳥だ。
白い翼は光を浴び煌くように輝き、両翼を広げ空を飛ぶ姿は美しく、そしてどこか雄々しさすら感じさせる。
そして水に浮かぶその姿は、まさに”優雅”という言葉が具現したかのごときそれ、見るものを離さない、惹きつける様な魅力を感じさせるのだ。

だが知っているかい？
彼等はその優雅に水に浮かんだ姿と裏腹に、その水の下では必死にその足を動かしているのだ。
一見彼等は優雅そのものだろう、しかし、見えぬ位置では、水の下では必死にその水を掻き、沈まぬよう、そして溺れぬように足掻いているのだ、その必死さを微塵も見せずに、ね。

吾輩はそうありたいと思う。
努力する姿や、泥にまみれる姿が無様だとは言わない。
彼等にとっての”美しい姿”とは、我等にとっての”強き姿”と同義なのだよ。

強者は自分が如何に努力したという事を口には出さない、なぜならそれは当然の事なのだよ、やって当たり前、強くなるには、そして強いままで居るにはそれは当然なのだよ。
彼等白鳥にしてもそれは同じさ、水面下で足掻くのは当然の行為、その足を止めれば沈んでしまうのだ、深い深い水底へと、ね。
吾輩はまだ沈む訳にはいかんのでね、吾輩はあの者を待たねばいかんのだよ、あの者が目の前に来るその時まで、十刃の椅子に座り続けていなければならないのさ。

あの者は、グリムジョーは確実に強くなっている。
それなのに吾輩が弱くなっては話にならんだろう？血を吐くほどの鍛錬を重ねようとも、あの者の前ではそれを見せるわけにはいかない。
吾輩は師匠だからね、迫り来る弟子にそう易々と乗り越えられては面目が立たないさ。
あの者の前、いや、他の誰の前でも吾輩は常に華麗で優雅で在らなければいけない、それが吾輩の紳士たる道。

故に吾輩は白鳥のようでありたい。

さてそれではここまでだ。
吾輩の華麗で優雅な一日は此処まで。
ここからは吾輩の水面下の時間。
必死になって水を掻かねばいけない時間なので、ね。

あぁ一つ言い忘れていた。この話は、吾輩と君との秘密（セクレート）、だからね？

BLEACH El fuego no se apaga. extra（後書き）

ある意味この小説の中で異彩を放つ存在、ドルドーニがメインでした。
作者の思いつく限りのネタ、というか笑ってほしいポイントを入れてみました。
無視され、それをいい方にと勘違いしつづけるドルドーニ、何このポジティブシンキングって感じですw
基本ウザいドルドーニ、でも真剣な部分もあるというのを表現できていればいいなぁ

グリムジョー弟子フラグはこんな具合でどうでしょうか？
押しかけ弟子ならぬ、押しかけ師匠ですw

それと初めて一人称で書いてみました。
書きはじめと終わりがまったくわからなかった・・・・・・
描写も出来ないから頭の中の風景を表現しきれているか不安だよ・・・・・
一人称で書いてる作者さんはホントすごいわぁ
おかしな点などあれば報告願います。

感想お待ちしてます。

BLEACH El fuego no se apaga. 21（前書き）

何故か難産だった・・・・・・
後書きとフェルナンドの台詞を多少変更しました。（２０１０．１０．３１

BLEACH El fuego no se apaga. 21

BLEACH El fuego no se apaga. 21

放たれる圧倒的な霊圧、唯そこに立っているだけでその場は彼に支配され、誰もその男から視線を外す事ができなくなっていた。

集う視線の先にいる男、暗めの茶色い髪、黒い淵の眼鏡の奥、髪と同じ茶の瞳にこの上ない暗黒を宿し、一見柔和そうに見える笑みをその貌に貼り付け、しかしその笑みは優しさからくるものとは真逆の性質を持っていた。

破面達が纏う白い衣とは違う黒い着物、『死覇装』をその身に纏い、その上から白く裾の辺りに文様をあしらった羽織を着た男。

その姿は『人』、虚圏に住む虚のような化け物でなく、それでいて破面でもなく、現世の脆弱な人間でもなかった。

その男は『死神』、魂の調整者、そして虚と破面と敵対する者、しかしその男は破面にとって敵対する相手ではなかった。

なぜなら彼こそが破面という存在を生み出した張本人、彼らに破面化という更なる力を与えた彼らの創造主。

計り知れぬ霊圧と、底知れぬ頭脳と智謀をもって全てをその掌に納

めんとする男。

『藍染惣右介（あいぜんそうすけ）』

尸魂界（ソウルソサエティ）と呼ばれる善なる霊が住まう世界においてその中心、瀞霊廷を守護する『護廷十三隊』、その『五番隊隊長』である死神。

しかしその一方で己が目的のため破面を組織し、その頂点に君臨する彼らの創造主である。

破面達を、それも彼らの頂点たる『十刃』をその眼下に納め、藍染は泰然とその場に立っていた。

そして、その中心で藍染の放った『鬼道』によって組み伏せられているネロへ、藍染が声を掛ける。

「本当に久しいね、ネロ。　君は第2宮から出てこないから顔を見れて嬉しいよ。」

そう口にした藍染の顔は依然として笑顔、傍から見たその笑顔は実に優しく、本当にネロに合えた事がうれしいといった風に見えた。

しかし、この藍染惣右介という男の本質からすればそれは明らかに上辺だけ、ネロという破面の組み伏せられた姿か、はたまた未だその拘束を外そうともがこうとする彼の姿に向けられたものか、もしかするとそれすら違うのかもしれない。

藍染の浮かべる笑み、それには圧倒的に感情というものが欠落していた。

そう、彼の浮かべる笑みは感情からくるものではなく、あくまでそういう”貌の形”をつくっている、というだけなのだろう。

この男、藍染惣右介にとって笑顔とは、実に有効な手段の一つでしかない。

この貌の形を作っていれば大抵の相手はそれだけで自分との距離が近付いたと誤認し、簡単に手の内を曝す、そして曝させる事も容易であるという事、親しさから来る彼からすれば理解不能な”無条件の信頼”というものを得やすく、またその信頼という不確かな関係に答えてやる事で相手は彼を更に深く信頼し、そして心酔していくのだ。

心酔、そしてそれは力無き者達にとっての『憧れ』へと姿を変える。そうなれば後は簡単、ほんの少しの言葉の誘導と、彼に都合のいい情報だけを渡してやれば、『憧れの隊長』を疑うものなど居はしない。

あとは藍染の思うまま、まるで道化のように彼の掌で踊り、哀れにも壊れ消えていくのだ。

藍染惣右介にとって最も理解から遠い『憧れ』という感情を抱いたまま・・・・・・

そうして藍染の偽笑と言葉を向けられた破面、ネロは藍染の言葉など関係なく吼える。

「テメェ藍染！　邪魔すんじゃネェよ！　こいつを解け！そして俺にあの女を殺させろ！！」

己の感情と衝動のみを完遂させるため、何とかもがこうとしながらも藍染に吼えるネロ。

彼を拘束する術、もがく事すら間々成らないそれは『鬼道』という死神の術、主に攻撃に用いる『破道』と、防御、捕縛等に用いる『縛道』の二種の術体系から成るものの総称である。

そして破道、縛道とも一から九十九番までの術があり、数字が大きくなる毎にその威力は大きくなる。
ネロを拘束する術は『縛道の九十九”禁”』、縛道の最高位の術であり、『封殺型』と呼ばれる捕縛した相手をそのまま攻撃する事ができる縛道のなかでも珍しい”攻撃する縛道”である。
現在のネロはその封殺型の最終段階まで至った状態で拘束されていた、本来彼の頭上に出現した石柱により相手を圧殺、消滅させる術ではあるが、使用者である藍染の意思により、押し留める状態で待機させている。
しかし使用者の霊圧により威力を大きく左右される鬼道、そして今回ネロを拘束する縛道を使っているのは超絶的な霊圧を持った藍染、死神の使う最高位の術に藍染の霊圧が加わったそれは、ネロが独力で抜け出せるほど軟ではなかった。

「それは困るな・・・・・・　ハリベルは大事な十刃だ、もちろん君もだよ、ネロ。そして今、十刃に欠けは許されない・・・・・・時が来たのだよ。　長い間あの死神達の児戯に付き合ってきたがそれも終わりだ。天の時、地の利、人の輪、その全てが今私に揃いつつある。もう少しで全てが私の手に落ちてくるのだよ・・・・・・」

掌を上にし、前へと差し出すように伸ばす藍染。
それはもはや自分が動かずとも、その伸ばした掌に欲するものは落ちてくる、全ては綿密な計画の下、時を費やし、舞台を整え、欺き利用し、育てた道化達によってその掌へと運ばれてくる結実を、自分は摘み取れば済むだけという絶対の自信、それがその掌からは伺えた。

「そんなもの関係あるか！　オレ様は！　今！あの女を殺したいんだよ！！　俺の指を斬り落としたあの女を！」

「困ったな・・・・・・　どうにか気を納めてはくれないかい？バラガン、君からもネロに落ち着くよう言ってくれ。」

時が来た、という藍染の言葉、しかしネロはそんなものに興味はないとハリベルを殺させろと喚き散らす。
そんなネロの姿に困ったと口にしながらも、実際そんな様子など微塵も見せない藍染。
そうして喚くネロを落ち着かせるようにと、藍染はバラガンという名の破面に話を振るった。

バラガンと呼ばれた老人の破面、彼こそ十刃の頂点である『第1十刃（プリメーラ・エスパーダ）』”大帝”バラガン・ルイゼンバーンであった。
白い髪に髭、皺の刻まれた顔など見た目は確かに老人、しかし大きくどっしりとした体躯とそれに見合った強靭そうな筋肉に覆われた身体は、彼を唯の老人という区分に納めるのを躊躇わせる程のものだった。
頭部にはまるで王冠を模したかのような仮面の名残と、白地に黒い毛皮をあしらったコートを纏い、腕輪、そして腰に付けた飾りは豪奢で位の高さを伺わせ、眼光は非常に鋭く、左の顎、そして額から右目を潰すように奔った傷は数々の戦いの経験を物語り、強大な体躯、そして放たれる存在感と重みはまさに老将かはたまたそれ以上、”王たる者”の風格を存分に宿したその姿は、まさに十刃の頂点に相応しき者であった。

「なんじゃい。　ボスの霊圧で黙らせれば済む話じゃァないか、まったく・・・・・・ネロ!!　お前もいい加減黙らんか！　駄々をこねる餓鬼じゃァあるまい!指の一本程度でギャァギャァ騒ぐな!!　」

「叔父貴は黙っててくれって言っただろ！　あの女を殺さないと俺の気はおさまらネェ！！」

話を振られた方のバラガンは、藍染がまったく困っていない事などお見通しではあった。
しかし一応は自分達のボスという事になっている藍染の言葉と、何より目の前で喚き散らすネロに業を煮やしたのか、ネロを黙らせようとする。
しかしそのバラガンの言葉も興奮した様子のネロには届かず、ネロはバラガンの言葉を聞き届けなかった。
そのネロの反論、それを聞いたバラガンの額やコメカミに幾本もの青筋が走り、直後玉座の間が揺れるほどの大音量が発生した。

「この・・・　馬鹿垂れがぁぁぁあああ！！！いいか！　これは儂の“命令”じゃ！　反論は許さん！大人しくしろ悪餓鬼めが！！！」

発せられたその大音量、怒気を存分に含んだそれが辺りに木霊し、玉座の間を満たす。
それを直接に向けられたネロはもとより、周りにいた十刃達すら顔をしかめ、中には大げさに耳を塞ぐ仕草をする者までいたが、藍染だけは以前その貌の形を崩さなかった。
明らかなバラガンの怒りを見せられ、さすがのネロも自分の置かれた状況がまずいとものだと漸く判断したのか、もがこうとするのを止め大人しくなる。

「チッ！　・・・・・わかった、悪かったよ叔父貴。叔父貴の顔に免じて暴れるのは止めてやる、感謝しろ藍染。」

「あぁ。　わかっているよ、ネロ。」

バラガンに一喝され遂に暴れるのは止めるというネロ。
しかしその藍染に対する物言いは未だ上から、あくまで傲岸不遜、
自らの創造主ともいえる藍染に礼をとらぬその態度は不敬とも言え
るものだったが、藍染はそれすら許容しているかのようにネロに対
して礼を言う。

バラガンの言葉には従い、藍染には不遜な態度をとる、それはネロ
の中では藍染よりもバラガンの方が強いという思いがあるからだっ
た。
ネロはバラガンのその圧倒的なまでの殺戮能力を知っている、如何
な最強たる自分の力をもってしても敵わないほど圧倒的な力、バラ
ガンがそれを有しているが故にネロはバラガンだけには従うのだ。

彼が、ネロが信じるものが”殺戮の力”であるが故に。

しかし少なくともネロの中での藍染は違った。
戦闘、殺戮の能力よりも目を引くのはその言葉、相手を唆し、操り、
陥れて斃すような詐術の類、そればかりがネロの目には映る。
それは彼にしてみれば裏でこそこそと動く鼠の様で、それが自分達
の創造主であり頂点に立つ者であると彼は認められなかったのだ。
故にネロは例え藍染の術で地に這い蹲らされようとも、その傲岸不
遜な態度を崩さなかった。

ネロが藍染によって拘束され、バラガンにより一喝されている後ろでハリベルは、手に持った斬魄刀を鞘へと戻し抱えていたフェルナンドを両手で床へとそっと下ろしていた。
みれば床へと横たえたフェルナンドの身体は傷だらけ、そして幾度も打ち付けられた頭部からは大量の出血が見て取れた。

（すまなかったフェルナンド・・・・・・　本来ならば私がしなければいけない事を・・・・・・そうすればこんなにボロボロになる必要もなかったろうに・・・・・・・）

意識を失い横たわるフェルナンドの姿は、本来ならば自分がなっていたかも知れない、いや、なっていなければいけない姿であるとハリベルはその白い死覇装と仮面によって隠された唇を強く噛む。
フェルナンドの出血は確かに多く、己の霊圧によって傷ついてはいるが幸い、と言っていいのか命の危機とまで至っていないのがハリベルの唯一の救いだった。
そんな彼女に正面から近寄ってきた人影が声を掛ける。

「少年（ニーニョ）は・・・無事、なようですな、美しい淑女（セニョリータ）。まったくもって少年も無茶をする・・・・・・よりによって彼に手を出すとは・・・だが女性を助けるために体を張るとはやはり見所がありますな・・・・・」

「貴様、ドルドーニか・・・・・・・」

正面から近付いて来たのは、何時ぞやフェルナンドとグリムジョーの戦いの折に現れた第６十刃、ドルドーニであった。

彼は横たわるフェルナンドの姿を確認し、一応無事であると確認するとどこか安堵の表情を浮かべハリベルに話しかけた。
十刃クラスともなれば得手不得手はあるにしても、離れた戦場の戦いを大まかにではあるがその探査回路を用いて知る事ができる。
ドルドーニはそれほど探査回路の扱いは得意ではないが、掴んだ霊圧の揺れは一つは明らかにネロのものと判り、それに三つの覚えのない霊圧がぶつかり、更にその後つい最近見知ったばかりの霊圧、フェルナンドの霊圧がぶつかったのは判っていた。
そうして玉座の間に入った瞬間、壁際に投げ出されるようにして倒れる三体の女性と、傷つきハリベルに抱えられるフェルナンドの姿を見てドルドーニは全てを悟ったのだった。

「理由はわかりませんが、少年（ニーニョ）のとった行動は無謀、であると同時に尊いものだと吾輩は思いますぞ。師として誇っていい。」

ドルドーニがハリベルに言葉をかけるが、その言葉に彼女は首を横に振る。

「誇れるものか・・・・・・　私の愚かさをコレは見抜き、その犠牲となるところだったのだ。私はコレに教えられてばかりだ・・・・・」

「・・・・・ならば尚のこと誇るべきでしょう。少年がそうなったのもまた、貴方が師であったからなのだから・・・・・・」

ドルドーニはフェルナンドの行動は無謀であるが、尊くもあるとハリベルに語る。
どう足掻こうとも勝てる相手ではない、しかしその相手を前に己を、

己の意思を貫くために挑む事は尊くもあり、同時にそれは彼の師として誇ってもいいことではないか、と。
だがそれを否定するハリベル、しかしドルドーニはそれすらも誇れと、フェルナンドが起こした行動、ハリベルの言う愚かさを見抜いた事実、それは彼の成長の証でも在りそれは師であるハリベルが彼に齎した変化、彼の師であるのならば彼の成長は誇ってやるべきだ、と。
だがそのドルドーニの言葉を否定する言葉が、ドルドーニの後ろから放たれる。

「無意味な・・・・・・　あまりにも無意味だ、その少年は・・・・・・」

「どういう事ですかな？　第5十刃（クイント・エスパーダ）アベル・ライネス殿・・・・・・」

ドルドーニの後ろから放たれた言葉は、傷つき倒れているフェルナンドを全否定する言葉だった。
それにドルドーニが言葉を返す、その声は常の彼に似合わずどこか硬い響きを宿していた。

「第3十刃の従属官達が第2十刃に殺されそうになっているのを、その少年は無意味にも助けようとした。勝てぬ相手に挑むのは無意味だ、戦いは勝てねば無意味なのだ、意思？誇り？他が為の戦い？そんな不確かなもののために戦うのは無意味極まりない。あの状況

での正しい選択は”従属官達を諦める”事だ、そうすればその少年は無意味に傷を負う事などなかった。」

あまりにも冷徹に冷淡に言い放たれる言葉、それを言い放った人物こそ第５十刃『アベル・ライネス』であった。
アベル・ライネスという破面を一目見た時、まず目に付くのはその仮面だろう。
両の目を隠し、鼻先へ向かって鳥の嘴の如く尖る様に前へと伸びたその仮面には、抽象的に描かれた”目”が仮面の先端を基点に四つ放射状に並んでいる。
目が隠れているためアベルからこちらを見ることは出来ない、出来ないはずなのだが何故か見透かされたような、或いはただの仮面の文様たる四つの”目”がこちらを見ているかのような錯覚に陥る、そんな不快感を見るものに与えていた。
髪は黒く短めで先端が跳ね上がり襟足だけが長く伸びており、背丈はそれほど高くなく、しかし足元までを覆い隠す袖付きの外套の様な白い死覇装を着込んでいる為、その身体つきまでは定かではなかった。

「ほ～う。　あのお嬢さん方（エッラーダ）は美しい淑女（セニョリータ）の従属官でしたか・・・・・・さすがは”千里眼”ですな、良く”視えて”いらっしゃる。しかし無意味・・・ですか・・・・・・　現に少年（ニーニョ）は傷つきながらもお嬢さん方を救っている。それすらも無意味と仰るのか？

「それは結果論に過ぎない、第６十刃。　私はその少年の行動自体が無意味だと言っている。」

「あの娘達を救ったフェルナンドの行動の何処が無意味だというのだ！」

自分と同じように衆議に列席していたにも拘らず、まるでこの事態を眼前で目撃したかのように詳細を知っているようなアベルに、ドルドーニは感心したような風で二、三回手を叩く。
だがアベルの無意味という発言が彼の中で引っ掛かったのか、フェルナンドは自らがネロの前に立つ事でアパッチ等ハリベルの従属官を救った事になるのではないか、とアベルに問う。

しかしアベルはそれを一刀の元に切り捨てた。
確かにそうかもしれない、フェルナンドの介入で彼女等は救われはした。
しかしそれはあくまでも結果的にそうなった、というだけの話であり、そもそもアベル自身はそのフェルナンドがとった行動そのものが無意味だとドルドーニに答えるが、その発言に噛み付いたのはドルドーニではなくハリベルだった。

「らしくないな、第3十刃。　激昂か・・・・・自分に向けるべきそれを私に向けないで貰いたい。そもそもその少年が無意味に傷ついた原因は貴方だろう？」

「クッ・・・・・」

無意味であると、これほどまでに傷ついたフェルナンドの行為が無意味であると、そう言われてハリベルは黙っている事ができなかった。
常の彼女らしからぬ感情の昂ぶり、自分でもそれを押さえ切れなかったのだろうか、それとも自分に対する怒りすらその昂ぶりに乗せて吐き出してしまいたかったのか、アベルへとハリベルは声を荒げ

ていた。
しかしアベルはまるでハリベルの感情すら見透かしたように淡々と、屑々と、まるでハリベルの激昂など気にも留めない様子で返す。
そして返された言葉はあまりにも客観的、それを受けたハリベルは己の拳を握り、黙るしかなかった。

「私が無意味だ、と言ったのはそもそも格上である第2十刃に挑んだその少年の浅はかさだ。偶々運よく攻撃が当たっただけ、運よく第2十刃の霊圧解放で従属官等が吹き飛び、結果運よく離脱したというだけ、俯瞰で見れば先の一件はそんなものだ。偶然の産物、勝機もそれに至る道筋もなにもかもがないまま戦いに挑む事を、無意味と言わずになんと言えというのだ？貴方達は。」

淡々と告げられる事実、危うい中繋いだ命、それがアベルが認識する現状のフェルナンドの姿だった。
最初の一撃は避けられたかもしれない、ネロの霊圧解放でそのまま死んでいたかもしれない、弾かれた先が安全だとは限らない。
そのどれもがありえたかも知れない”もしも”の可能性、ただ助けると飛び出したフェルナンドの行いはアベルから見れば無意味で無謀なだけだった、と言う事なのだろう。

「言いたい事はわかりましたよアベル殿。　・・・・・まぁ少年もお嬢さん方も助かったのだから良いではありませんか。それよりも、やはりすごいものですなその”千里眼”は、それとも今回の事は”先見”で知っておられたか？いやなに吾輩つい最近”先見”でもしたかのような拾物をしたのに気がつきましてそもそもあれは初めて美しい淑女にお会い・・・・・・・・・・・・・」

アベルの言はドルドーニにも理解できた、そのあまりに事実と事象を客観的に分析したそれは相手に否応無しでその無謀さを突きつけるのだ。
そうして暗くなりそうだった場をなんとか持ち直そうとドルドーニが矢継ぎ早に話し続ける。
それは彼なりのハリベル気遣いだったのだろう。
そうして話しながらもドルドーニは思う、確かに客観的な事実だけを見ればフェルナンドの行為は無駄だったのかもしれない、しかし、その行動に至ったまでの感情と、その感情を持つまでの成長は決して間違いではないと、無意味ではないとも彼は感じていたのであった。

バラガンの一喝によりネロは暴れるのを止める。
そうしてその様子を確認した藍染が下げていた手を軽く振る、するとネロの上に鎮座していた巨大な石柱や彼を拘束していた布や帯は、その霊子の結合が解かれ、はらはらと霧散し、消えていった。
そうして拘束具から抜け出したネロは立ち上がると、肩を回すようにしながら首をゴキゴキと鳴らしながら藍染を見上げる。

「大事無いかい？ネロ。　急だったものだからあまり加減してあげる事ができなかった、悪かったね。」

自身の術による拘束から抜け出したネロを気遣う素振りを見せる藍染。

相変わらずの形を保った貌とその見え透いた言葉に、ネロは一つ舌打ちをした。
暴虐極まり、己の欲望のみを優先するネロの在り方から考えれば、これほどあっさりとした終わりもない。
それはある意味ありえない事、いくらバラガンの命令といえどこれほど簡単にネロは引き下がるだろうか、何者よりもその強さへの自負に溢れる彼が斬られてそう簡単に抜き放った暴刃を納められるだろうか、その一分の疑念、そしてやはりその疑念は現実のものとなる。

「まぁ叔父貴の命令だ、此処で暴れるのは止めてやる。だがなぁ・・・・　あの女を殺すのは別だぜ？藍染！！」

上からの物言いで在りながら不承不承といった風でこの場で暴れるのは止めると言うネロ。
しかし間を置いて続けられた言葉は、彼がなんら諦めていない事を如実に物語っていた。

一直線にハリベルへと向かうネロ。
あくまでその場で暴れるのは止めたが、ハリベルを殺すという行為自体を止めるとは言っていないと、嬉々としてハリベルへと突撃する。
それが暴れている、という事なのだが彼にそれを考える理性が今はない。
そのネロの姿に誰もが一瞬対応に遅れる、驚き、呆れ、諦め、傍観、そういった感情が飛び交う広間にあってハリベルだけはネロの暴走を捉えていた。
拘束されたからといって相手から注意を逸らす、などという愚行をハリベルがするはずもない。

予想外の感情の揺れはあったがギリギリ許容の範囲内、もとよりあの程度でネロを逃す心算などハリベルには欠片もなかった。
ネロが挑んでくるというのならばそれはハリベルにとって望むところなのだ。
ハリベルへと迫るネロ、迎え撃つハリベルは素早く斬魄刀を抜き放ちフェルナンドを背にして立つ、しかしその上位十刃同士の激突という前代未聞の状況は、思いもよらぬ一撃によって遮られた。

ネロを迎え撃とうと構えるハリベル、霊圧を高め激突の瞬間へと備える彼女の感覚を何かが掠めた。
刹那の出来事、それが何なのかとハリベルが思った瞬間、眼前から迫っていたはずのネロが轟音と共に床へと叩きつけられていた。
一瞬何が起こったのか判らなかったハリベル、しかし次の瞬間にはネロが叩きつけられている理由を、彼女は驚愕と共に理解していた。
叩きつけられたネロの前に立つのはハリベルが良く見知った紅い霊圧、先程まで意識を失い自分の後ろに横たわっているはずの人物、フェルナンドであった。

「少年(ニーニョ)!?　一体何が起こったというのだ・・・・・・」

ドルドーニは突然倒れたネロと、その前に立つフェルナンドの姿に驚きを隠せなかった。
つい先程までハリベルの後ろにいたはずの彼が彼女の前、ネロを叩き伏せて立っている。
そしてその瞬間も、どうやって其処に現れたのかもドルドーニは捉えきれていなかった。

「上空に跳び上がり一回転、落下と霊圧の解放の威力を乗せ、タイミングをずらした踵落としの二連撃を第2十刃の頭頂部に連続で叩き込んだ・・・か。・・・・・しかしこの霊圧・・・・・・あの少年、無意味にその命を散らした・・・か・・・・・・」

ドルドーニと違いアベルはその”特異性”によってフェルナンドの動きをほぼ完璧に捉えていた。
アベルの言う通りフェルナンドは上空へと跳び上がると、落下の勢いを乗せた踵落としを連続でネロの頭部へと叩き込み、まったく予想だにしない強力な攻撃によってネロは床へと叩きつけたのだ。
そしてフェルナンドを捉え切ったアベルは、そのフェルナンドの放つ霊圧を”視て”彼の死を予見していた。

「クソデブが・・・・・・好き放題殴りやがって・・・・・・それに、この女を殺すだぁ？・・・・・・ふざけんじゃねぇ・・・ふざけんじゃねぇぞ・・・・・・殺してやる・・・骨すら残さねぇ。
テメェの薄汚ねぇ存在そのものを消してやる・・・・・・」

フェルナンドはどこか様子がおかしかった。
常の彼以上の強い言葉を使い、なにより放たれている霊圧は異常極まりないほど強大なものだった。
全力の更に上、常軌を逸した量の霊圧を放つフェルナンド、しかしそれは彼にとって”死”を意味するほどの量だった。
流れ出ていた血はその霊圧の奔流によって蒸発し、傷は広がり、其処から流れる血もまた直ぐに蒸発してしまうほどの密度と熱を持ったその霊圧。
頭部に受けたダメージにより、彼の肉体が、そして無意識の精神が致死に至らぬよう押さえていた霊圧解放の箍、それが外れた事によ

り流れ出した、フェルナンドの身体が受けきる事ができない程の爆発的霊圧によりフェルナンドは一時的にネロに対抗できるだけの力を得たのだ。

例えそれが生命を燃やし尽くす所業であったとしても。

そうしてネロを叩き伏せたフェルナンド、しかしそれだけでフェルナンドは止まらなかった。

そのまま攻撃を仕掛けるのかと思いきやそうはせず、代わりにその腰の後ろに回した鉈のような斬魄刀に手をかけた。

「ッ！　止めろフェルナンド！！　それはお前にはまだ早すぎる！！」

刀に手をかけるフェルナンドの姿を見て明らかに動揺するハリベル。

動揺と言うよりは焦りを色濃く見せるハリベル、彼女は知っているのだ、フェルナンドがその斬魄刀に手をかける事の意味を。

フェルナンドに刀を扱う”才”は無い、その彼が斬魄刀を抜こうとする理由など他には一つしかないのだ。

『刀剣解放』

刀の形に閉じ込めた己の力の核を、再び肉体に宿す破面としての真の戦闘形態の解放、今フェルナンドが行おうとしているのはそれなのだ。

しかし現状傷つき、何より未だ不完全であるフェルナンドの肉体では、己の力の核を受け止める事などできない。

もし今のまま解放すれば、逆に己の核の膨大な霊圧に肉体が耐え切れず、肉体の方が消滅してしまうだろう。

それが判っているハリベルは必死にフェルナンドを止めるよう声を張り上げ、彼の元へと駆ける。
しかしフェルナンドは止まらない。

「この女はな！　この俺が殺すんだよ！！　他の誰にもこの女は渡さねぇ！！　ポッと出が…横から出てきて邪魔するな！テメェにこの女は殺させネェ！！」

精神の箍が外れたフェルナンドは叫びながら斬魄刀を抜き放ち、逆手に持ったそれを頭上高く掲げる。
ハリベルは間に合わない、彼女が止めるよりも早くフェルナンドはその終焉の力を解き放ってしまう。
それでもハリベルは駆ける、こんなことで失うにはあまりにも惜しい才能、そしてそれ以上に『仲間』を失いたくないという思いが彼女を走らせる。
だが無情にもそのときは訪れた。

「『刻(きざ)めぇぇぇえ！！　ヘリ・・・ォ・・・・・・ゥ・・・ぁ？・・・・・・・・・・・」

まさに今、フェルナンドがもう一人の自分の名を呼ぼうとする瞬間、ハリベルより早くフェルナンドの下へ辿り着いた者が居た。
それは男で、その男がフェルナンドに懐から出した小瓶に入った液体をかける、するとフェルナンドは一瞬のうちに意識を失い、背後に立ったその男に受け止められるように倒れてしまった。

「あららぁ～。この坊(ぼん)ホンマぼろぼろやわ、無茶しよるなぁ。」

倒れるフェルナンドを受け止める男、緊迫した雰囲気の中その男は
飄々とし、その場の空気にそぐわない存在に見えた。
白よりも銀色に近い髪をしたその男、藍染と同じ黒い着物に此方は
袖のない羽織を纏い、藍染とは違う種類の薄笑いを浮かべるその男。

『市丸ギン』という名のその男によって、この場は終着を見ようと
していた・・・・・・

蛇の毒が命を救う
匣は閉ざされた
そして罅は砕け
不死鳥が現れる

BLEACH El fuego no se apaga. 21（後書き）

いろいろ出してみた回。

バラガンとネロの関係、そしてもう一人のオリキャラ『アベル』に
真面目ドルドーニ
さらにはブチギレフェルナンドとまさかの解放未遂事件、終いには
ギンまで・・・・・・

『アベル』に関してですが『ネロ』があんななので、真逆の感じに
してみました。
冷淡、冷徹、冷静、そして特異（？）な能力持ちなキャラです。
ネロはヤミーと、そしてアベルはウルキオラとカブってるかな？
まぁその辺の差はおいおい出せれば・・・・・・いいなぁｗ

フェルナンドがネロに使った技は陸奥の業です。
この流れで業の名前を言うのはおかしいので、次の機会に言わせま
す。
今までの分の中でも業名を言わせようと思いますので
次回更新の際にはそちらも更新・・・・・したいですｗ

フェルナンドの解放ですが今回はお預けです。
とりあえず解号は『刻め』にしました、相手にも自分にもその戦い
を刻み付けるという意思表示、みたいな感じで
まぁもしかしたら変えるかもですけどねｗ

あと補足というか言い訳を一つ。
血が蒸発するのにギンが使った液体が蒸発しないとは是何ぞ？
それは簡単、ご都合主義だからさｗ

感想待ってます。

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．２２（前書き）

今回は大量の独自設定が含まれます。
整合性が取れているかは謎ですが、良かったらどうぞ。

黄金の女神と緋色の暴君の激突は、紅い鬼童子によって阻まれた。
激情の中、紅い鬼童子はその命を燃やし尽すかの如く振舞う。
行先は”死”、しかし赤い鬼童子はそれを躊躇わない。
その凶行を止めたのは、銀色の蛇が持つ毒だった・・・・・・

「いやぁ～、ホンマに無茶しよる坊(ぼん)やなぁ～。2番サンに君が勝てる訳ないやんか。」

気を失ったかのようなフェルナンド、血だらけの彼の身体をその両肩を掴んで支えるようにしながら、まるで世間話でもしているかのような気軽さでその男は喋っていた。
目を引くのはやはりその髪の色、若者の外見にそぐわない白色の髪、いや、白色というより寧ろ銀色に近いそれは目元を多少隠す程度の長さで整えられ、光の反射によって一層際立って見えた。
着ているのは黒い着物、刀ではなく何故か脇差のみをその腰に挿し、そして袖は無いが藍染と同じ白の羽織を纏い、そしてその羽織の背

中には『三』の文字が染め上げられていた。
糸の様に細められた目と持ち上げられた口角、男が現れてから常に浮かべているのは藍染と同じような笑み、しかしこの男の笑みは藍染の笑み(ソレ)とは違い意図的に作られたというよりは、もっと別のような。
覆い隠すのではなくそれ以外を知らない、というような印象を見る者に与えるその男。

彼の名は『市丸　ギン』

破面ではなく『死神』であり、藍染と同じ『護廷十三隊』においてその『三番隊隊長』を務め、なにより藍染自身がその”才能”を見つけ出し部下とした麒麟児であり、言うなれば藍染の右腕、矛盾と誤解を承知で言うのならば藍染惣右介がもっとも”信”を置いている人物であった。

「すんません藍染隊長、勝手に割って入ってもうて。チラっとしか見てへんけど、なんやオモロそうな坊やからこのまま死なすんは、どうにも惜しくなってしまって・・・・・・」

フェルナンドの肩を支えたまま、玉座から見下ろす藍染にダラリと頭を下げるギン。
”面白そう”、ギンがフェルナンドの自身の命を無視した凶行を止めた理由はそれだけだった。

藍染より一足先に玉座の間へと着いていたギンは、玉座の後ろにある通路の出入り口に寄り掛かりながら今回の事の一部始終を見ていたのだ。
三体の破面が圧倒的な暴力の前になす術なく曝され続ける、それを見ていたギンが何を思ったのかは定かではない。
ただその圧倒的な暴力を振るう破面、第2十刃ネロ・マリグノ・クリーメンが振り上げた拳を見たギンは唯、「終わりやな・・・・・・」と小さく呟いていた。
それが振り下ろされるのは時間の問題、そしてそう間を置かずして三体全てが死ぬだろうと予想し、ギンはその場を去ろうと踵を返す。
しかし、今まさに振り返らんとしたギンの視界の端が捉えた光景は、彼の想像の斜め上をいっていた。
拳を振り上げたネロの顔目掛けて、小さな破面が蹴りを叩き込んだのだ。

「ハ？」

思わず零れた呟きは、ギンの心境を如実に物語っていた。
仮にもネロは第2十刃、それに単身挑みかかるその小さな破面、そして何よりその行動が、ギンには今まさに死に瀕していた三体の破面を救おうとしているかのようにも見えた。
破面同士の繋がりとは”力の上下”のみなのだと考えていたギンにとって、その光景はあまりに予想外だった。
力無き者は淘汰される、そんな破面の世界にあってその小さな破面がとった行動はあまりに異常だった。
それ故ギンは通路の奥に向いていた足を止め、広間の方へと向き直る。

そして広場でネロの顔を蹴った小さな破面は高らかに、そして明らかに挑発するように言葉を紡いでいた。
見上げるほど大きな相手を見下すように、”「ようクソデブ。動かねぇコイツ等とやってもつまらねぇだろ?俺が相手をしてやるからかかって来いよ。」”と。

「なんやオモロそうな坊(ぼん)やなぁ～」

発せられたその言葉が全てを物語っていた。
その姿を見たギンの口角が常よりも更につりあがる。
それ以外知らない貌に更に喜色の度合いを増した笑みを浮かべ、眼下の小さな破面を見つめるギンの姿が其処にあった。

そうして小さな破面フェルナンドに興味を持ったギンは、そのフェルナンドの命の危機とも呼べる状況を打開した。
彼が誰よりも早くフェルナンドの下に駆け付けたのは、なにも速かったという訳ではなく、ただフェルナンドから目を離していなかったという事が大きい。
誰もがハリベルとネロの激突に意識が向く中で、ギンだけはそれよりもフェルナンドを見ていたのだ。
だがそれは心配というよりは寧ろ期待、あれで終わりか?もっとないのか?というギンの興味の視線が結果誰よりも早くフェルナンドの動きを気付かせ、誰よりも速く動き出す事ができた、というだ

けの事だった。

「いいんだ。　そんな事で君を咎めはしないよ、ギン。寧ろ止めてくれた事を感謝するよ、その彼はいろいろと”特別”だからね。」

謝罪するギンに対し藍染はそんなものは必要ないと答え、それよりもそのギンの行動に感謝するぐらいだ、と言った。
”特別”、藍染の口から零れたその言葉の意味とは何か、それはまだ定かではなく、それすらもこの藍染惣右介という男の詐術という可能性を多分に含んでいた。

「そんなら良かった。　そしたら坊は治療ｓ・・・って、危ないなぁ、いきなり。」

藍染の許しの言葉にギンは下げていた頭を勢い良く上げ、そんな事などあったかといった雰囲気で飄々と振舞っていた。
そしてボロボロのまま気を失っているフェルナンドを治療させようとしたギンだが、その彼の首目掛けて閃光が奔った。
それは刀による一撃、ギンはそれを避けるとその一撃を放った者に先程と同じ、飄々とした雰囲気のまま話しかける。
咄嗟の事でフェルナンドの肩を放してしまったギン、そのまま床へと崩れるかと思われたフェルナンドの身体はその刀の一撃を放った者にしっかりと抱き止められていた。

「貴様・・・・・・　市丸。　一体フェルナンドに何をした・・・・・」

フェルナンドを抱きとめているのはハリベルだった。
刀を構え、その切っ先をギンへと向けたまま語る彼女の言葉には、明らかな怒気が含まれていた。
それもそうだろう、目の前で失われるはずだった彼女の『仲間』、解放によって死ぬ事はなかったがギンの行動によってまるで”死んだかのように”倒れた彼の姿を目にして、ハリベルは平静ではいられなかったのだ。

「なにすんねや４番サ・・・・・あぁそうやった、今は３番サンやったね。　昇位しはったんやろ？僕も三番なんや、同じ三番同士仲良うしような？」

「そんな事はどうでもいい。　何をしたと聞いている・・・・・」

そうして隠さず怒りを向けるハリベルに、ギンはやはり飄々と、向けられたその感情に気が付かないような素振りで、そして今し方彼女がその手に持つ斬魄刀ハリベルによって、自分の首を落としに来た事すらなかった事のように振舞う。
そうしてどこか掴み所の無いギンを前に、しかしハリベルはその雰囲気に流される事なく彼がフェルナンドに、自分の『仲間』に何をしたのかと問いただした。

「そんな事って・・・つれへんなぁ～。　ま、ええわ。何をした、言われても坊(ぼん)が大分危なそうやったから”この薬”をつこうたんや。『穿点』ゆう死神の薬でな、ホンマなら一滴で充分なんやけど君ら破面(アランカル)にちゃんと効くか判らへんかったから、一瓶まるごとつこたんや。効果は・・・　まぁ見ての通りやな。」

硬く、警戒を解かないハリベル、そんな彼女の様子を見て残念そうに肩を落とすギン。
しかしそれも束の間、未だ刀を向けるハリベルにギンはその懐から、彼の掌に収まるほど小さな薬瓶を取り出しハリベルへと見せる。

『穿点』、そう呼ばれたその薬瓶の中身、それは死神が用いる薬だと説明するギン。
穿点と呼ばれる薬は本来は一種の麻酔薬であり、液状でなく揮発させ、気体として吸入させて手術などの治療の際の麻酔として使用する薬である。
しかし皮膚などから液体のまま吸収した場合その者の体内での霊子の運動に過度に作用し、霊子の運動は急激に低下、その霊子の変化に伴い大抵の者は一滴皮膚に付着しただけで、卒倒してしまうほど強力な薬でもあった。

それを一瓶まるごとフェルナンドに使ったというギン。
本来一滴で卒倒するほど強力な薬を一瓶使い切る、というのは危険な行為ではあった。
しかし死神と似通っているといっても元は虚である破面達、本当に穿点が、死神の薬が効くという保障は無く、急を要する状態であったフェルナンドを止める為止む無く一瓶全てを使用したのだった。

「・・・・・・　無事、なのだな？」

「心配せんでエエよ、ただ気を失ってるだけや。どっちかゆうたらそのボロボロの身体の方が危ないわ、はよう治療せんと僕が助けた意味なくなってまうで。」

ギンに対し、フェルナンドは無事なのかと確認するハリベル。

ギンが使った薬や、その効果などハリベルにとっては本当はどうでもいい事だった。
本当に彼女がその感情を顕にしてまで知りたかった事、気がかりだった事は、フェルナンドが無事なのかどうか唯それだけだった。
『仲間』というものを再確認した彼女にとって、今一度、目の前でそれを失うのは耐えられない事であった故に。
そうしてフェルナンドの無事を確認するハリベルに対しギンが返した答えは肯定。
それを聞いたハリベルは、ギンに向けていた斬魄刀を下ろし背に背負った鞘へと器用に納めた。

「そうか・・・・・・　刀を向けた事は詫びよう。コレが世話になった。」

意識の無いフェルナンドを支えるようにしながら、ハリベルがギンへと頭を下げる。
ギンのほうはそのハリベルの姿を見てどこか謙遜したような風で軽く手を振ってそれを止めさせた。

「ええって、僕がすきでやった事やから。　その坊オモロそうやんか、こんなしょうもない事で死なれたらつまらんやろ？」

そう言ってハリベルに笑顔で語りかけるギン、本当にただ面白そうだから助けたというだけの理由で彼はフェルナンドの命を救ったのだった。
フェルナンドが、そしてギンが割って入った事によってネロとハリベルの戦いは回避された・・・・・かのように見えた。
ハリベルに最早戦う気はなく、フェルナンドは意識を失い、もとよ

りギンは二人の戦いなどどうでも良かった。

だが一人、屈辱と怒りとその傲慢なまでの自尊心によって今にも爆発してしまいそうな男がいた。

「しょうもない事だと？　オレ様を蹴ったならいざ知らず、オレ様の指を斬ったならいざ知らず、この”神”たるオレ様の頭を二度も足蹴にしたその小蠅の行為がしょうもない事だと？ゲハハ、そうか・・・・・　お前等全員、よっぽど死にたいらしい・・・・・・・・・なら死ね・・・今死ね・・・直ぐに死ね・・・・・・・今、此処で、死に絶えやがれ！ゴミ共がぁあアァァあアア！！ウオォォォオァァアアァァアアアア！！！』

床に叩きつけられた、というあまりに予想外の出来事によって今まで沈黙していたネロが一気に起き上がり、喚き散らし咆哮した。
彼にとってそれはありえない事、”神”たる自分の上からその頭を踏みつけるかのごとき攻撃が降ってきたのだ。
目の前の獲物であるハリベルへと集中していたネロは、その振ってきた二対の踵に気付く事ができず、結果その頭頂部に直撃を許してしまった。

そしてそれは彼に理性を放棄させるのに充分たる出来事であった。
ネロにとって最早フェルナンドが、ハリベルがという問題ではなくなっていた、目に映る全てが彼にとって殺すべき愚者にしか映らなくなっていたのだ。
そうして最も手近にいるギンへと拳を奔らせるネロ。
しかしギンの方はそれを避ける素振りすら見せず、相変わらずの笑顔のまま一言、小さく呟いた。

「あんまり”オイタ”が過ぎると怒られてまうで？」

小さく、けれど周りにいる者にしっかりと聞こえたその呟き、それはネロに宛てたものか、それとも彼が単に思った事を口にしただけなのか。

しかしその呟き程度でネロは止まるはずも無く、奔る拳はギンへと吸い込まれていく。

小さな呟きはそのまま彼の遺言となってしまうかに思えた、しかし次の瞬間その呟きに答える者がいた。

「その通りだ。　少々目に余るな、ネロ。」

静かながらも威厳に満ちたその声、それと同時に暴れまわるネロの胸の前、正確には彼の胸に空いた孔の前に指の先程の小さな正方形が現れた。

現れた正方形、そして変化は劇的に訪れる。

その小さな正方形が四方へと瞬時に弾けたのだ、弾け、膨大な光を発しながら広がるそれは光の帯となり、眩く発光する帯びの表と対照的にその裏側はその光を吸い込むかのごとき暗黒だった。

四方へと広がった帯はその方向性を一方向に、ネロの方へと揃え彼を幾重にも包み込むように覆い隠す。

光と闇の帯び、それに包まれていくネロ、そして包まれていく彼の姿は次第にその場の景色と同化していき、まるで断末魔のような叫びだけを残し最後にはネロの姿はなくなっていた。

静まり返る広間、その静けさは叫びが聞こえなくなったせいか、それともネロという暴虐の徒が消えてしまった事への驚きか、そうして静まり返る広間の破面たちの視線が注がれる先は、玉座に座りながら片腕を軽く前に出している藍染の姿だった。

「藍染様、アレは・・・・・・」

そうしてその場にいる全ての者の疑問を代弁するかのように、緑の瞳と雪の肌をもった破面、ウルキオラが藍染に問いかけた。
その問に藍染は然も無い事のように答える。

「あぁ、アレは君たちも知っている『反膜の匪（カハ・ネガシオン）』だよ、ウルキオラ。といっても君達十刃に渡している物とは少し違う、通常の反膜の匪は一つの閉次元に対象を幽閉するのだけれど、アレは連続した閉次元に対象を幽閉するんだ。一つ閉次元を破った先にはまた違う閉次元が、その先にもまた、といった具合に閉鎖された次元を意図的に捻り。連環状に並べ、更にそれ自体も閉じている、という事さ。言うなれば『連反膜の匪（カハ・ネガシオン・アタール）』と言ったところかな。」

そうしてウルキオラの問に答える藍染。
『反膜の匪』というのは藍染が十刃それぞれに与えた物であり、その用途は部下の処罰に使用するための道具だ。
対象の霊体を永久的に閉次元に幽閉することが出来るこの匪、数字持ちクラスではその閉次元から抜け出す事はかなわず、かといって霊体である彼等は霊子の濃い場所では呼吸するだけで存在し続けられる、故に餓えて死ぬことも無く永遠に閉じ込め続けられるのだ。
しかし反膜の匪は部下の処罰用に造られた側面が大きく、それ以上

の霊圧を持つ十刃クラスへの使用は考慮されていない、故に対象の霊圧如何では自力で抜け出す事も可能なのだ。

しかし今回藍染がネロに対して使った『連反膜の匪』は違う。十刃クラスたるネロならば、2～3時間で通常の反膜の匪の閉次元を破り、抜け出してしまうだろう。

だがその抜け出した先がまた閉次元なら、それを抜けた先もまた同じ、その先も、その先も、と連続して続く閉次元に閉じ込められたとしたらどうだろう、その全てを破壊し抜け出すというのは、現実的に不可能に近いのではないだろうか。

それこそが連反膜の匪の特異性なのだ、そしてその特異性は同時に一つの事実を物語る。

藍染はその意思一つで、十刃を永遠に幽閉する事が可能である、と。

「一つ宜しいでしょうか藍染様。　第2十刃殿は永遠に閉次元に囚われる、という事でしょうか。それでは十刃に空席が生まれるのでは？」

藍染の説明に対して一人の十刃が質問を投げかける。

髑髏の耳飾と首飾り、頭頂部にとげのような仮面の名残を残した浅黒い肌の大男、角張った顎に黒い仮面紋が奔り、眉は無く厚めの唇、服の上からでもわかる筋肉質な体形、後ろ手に腕を組みその手に斬魄刀を握ったまま藍染へと正対するその男は、第7十刃（セプティマ・エスパーダ）『ゾマリ・ルルー』だった。

「心配は要らないよ。　”鍵”さえあればコチラからなら何時でも扉を開く事ができるようにしてあるからね。だがネロには当分は中に居てもらう。　少し頭を冷やしてもらおうと思ってね、あのまま

では玉座（ここ）の間が崩壊してもおかしくなかった。私としても苦渋の決断だったよ。」

ゾマリの問にまるで他に手は無かったかのように話す藍染。
それこそ彼の実力を持って磨れば手などいくらでも在るのだ、唯彼の中で単に効率的に事を進めるには連反膜の匪が一番良かった、というだけの話、ネロをこの場から離す事と、連反膜の匪自体の起動、実証実験も兼ねての運用情報の蓄積、常に彼の元には”利”のみが残る、そうなるように立ち回るのが藍染惣右介の習性、とも言えた。

そうして離し終わると、藍染は玉座から立ち上がり二回ほど手を打ち鳴らした。
響くその音が更に彼への注目を集めさせる。

「さて・・・・・　こうも誰もいないのでは私が話す意味も無いかな。今日はこれで解散とし、後日改めて集まってもらう事にしよう。では解散だ・・・・・・　ハリベル、君もフェルナンドを置いて下がりたまえ。彼の治療は私がしよう。」

「　お待ちください藍染様っ！・・・・・・！！」

ネロの暴走により閑散となった広間、数えるほどしか居なくなった破面達だけに話をしても意味は無いと、藍染はこの場は解散すると決した。
そしてハリベルを呼び止めると、フェルナンドを置いて下がるように云いつける、彼自身がフェルナンドを治療するから、と。
それに対しハリベルは難色を示した、それを伝えようと彼女が言葉を発した瞬間、まるで天井が振って来たかのように彼女はその場で

押しつぶされるような感覚を味わっていた。
それは嫌というほど良く知るもの、藍染惣右介の放つ霊圧にほかならなかった。
それ自体が物理的に存在しているかのような圧倒的密度と量、それが彼女の上に今圧し掛かっていたのだ。

「私は”下がれ”と言ったよ、ハリベル。　今回の事は君にも責任がある、暫くは従属官と共に宮殿でゆっくり謹慎していてくれ。心配は要らない、フェルナンドは必ず治すよ、いいね？ハリベル。」

有無を言わさぬ霊圧の波濤、自身の望む答え以外は必要無いとでも言うかのようにハリベルへとその霊圧を向ける藍染。
決して全力を出して、必死になってその霊圧を出している様子は彼には無い、それこそが彼の信の実力を物語っていた。
先の折ネロはその教唆と詐術にたけた頭脳に目がいき、見落としているのだ、藍染惣右介は”力”を持って破面を支配しているという事を。
それを今身を持って味わっているハリベル、彼女の中でも葛藤はあったろう、しかし確実に、フェルナンドの身を案じるのならばその答えは自ずと導かれた。

「クッ・・・・・　申し訳、ありません・・・でし、た。・・・・・出過ぎ、た申し出・・・お許しくだ、さい。

そうして彼女が折れた直後、その押し潰すかのごとき霊圧は嘘のように消え去った。
そして藍染は依然として笑顔のまま彼女を見下ろす。

「ありがとう、ハリベル。　わかってくれて私も嬉しいよ。では皆、後日会えるのを楽しみにしているよ。ギン、彼を頼む。」

そうしてハリベルに形ばかりの礼を告げた後、藍染はギンへとフェルナンドを連れてくるよう命じ、その玉座の裏に在る通路に消えていった。
藍染が居なくなった事により、ハリベル以外の十刃もそれぞれ自分の宮殿へと引き上げていく。
そして残ったハリベルにギンが近付き話しかける。

「ほんなら坊は預からせてもらうわ。・・・・・心配いらへん、ちゃぁんと治して貰うよって。」

「すまん・・・・・　頼む・・・・・」

ハリベルが抱きとめるようにして支えていたフェルナンドの身体を、ギンはゆっくりと持ち上げた。
そうして持ち上げたフェルナンドの身体は想像以上に軽く、それを今まで支えていたハリベルが気付かないはずも無く、そのどこか不安さを感じさせる瞳を見たギンは、常の笑顔とはまた別の、笑顔では在るのだが真剣な雰囲気をその身に纏わせハリベルに心配ない、と言った。
対してハリベルは唯一言、すまんと、そして頼む、というに留まった。
それだけで彼女の思いは伝わったろう、そしてギンはそれ以上彼女に声をかける事無く、藍染の消えた通路へと入っていった。

「あぁ、来たね、ギン。」

振り返るようにして部屋へと入ってきたギンを迎える藍染。
その藍染の前には一つの装置、人一人がゆうに入れそうな円筒状の透明な筒、そしてそれに繋がる無数の管と、なにやら良くわからない装置の類がギンの目の前に広がっていた。

「は～、いったいコレなんですのん？　藍染隊長。」

フェルナンドを抱えたままそう口にするギンに藍染はその装置を説明する。
要約すると円筒の中に対象者を入れ、意図的に霊子の濃度を増した薬液で満たす事で対象者の外傷、また霊子的欠損の修復と、それに伴う霊圧の回復を行う装置、という事のようだった。
研究者ではないギンにとって半分も理解できない内容だったが、フェルナンドの治療に使うという事はわかったようだった。

「では、始め様か・・・・・・」

フェルナンドの身体を円筒に納め、装置を起動する藍染。
どこか嬉々とした様子なのはフェルナンドの破面化の際と変わらなかった。
治療はする、しかしその結果何が起こるのか、何も起こらないのか、起こるのならば何が起こるのか、彼にとってわからない事、予想の

つかない事ほどの”娯楽”は無いのかもしれない。
全てにおいて誰よりも抜きんで、先んじて解ってしまう藍染にとって普段わからないという事に触れる機会は少ない。
故にこの状況は彼にとって久々に触れる不確かであり、やはり”娯楽”なのだ。

それが例え他者の命を弄ぶ行為であっても。

円筒の中が薬液で満たされる。
その中をたゆたう様に浮かぶフェルナンド、その身体は過度の霊圧解放により崩壊が始まっていた。
傷口が裂け、そして人体ではありえない罅がその傷口から奔っていた。
肉体というよりは、朽ちていく石像の様な印象を受ける痛々しいフェルナンドの姿、それは代償の姿なのか、己の生命というものを省みずそれを火にくべ燃やし尽くしたが故の結末の姿、その一歩手前の状態が今のフェルナンドだった。

「藍染隊長、一つ聞いてもエエですか？」

「なんだい？　ギン。」

嬉々として作業する藍染にギンは一つ疑問を投げかける。

「どうしてそこまで坊(ぼん)を気に掛けはるんです？」

ギンの言う事は至極的を射ていた。

そもそも何故藍染がコレほどまでフェルナンドに肩入れするのか、他の者にそれは理解できない事だろう。
その問に藍染は特に考え込む事も無くすんなりと答えた。

「君と同じだよ。　面白そうだからさ、彼は非常に興味深い個体だ、その存在自体が奇跡じみているんだよ。奇跡などという安い言葉を使いたくなるほどに、ね。」

面白そうだから、藍染もギンと同じにフェルナンドに他とは違う何かを見出していた。
しかし藍染がギンと違うのは、ギンがフェルナンドの”在り方”に興味を抱いているのに対し、藍染はその”存在”の方に重きを置いているような、内面、精神はどうでもいい、あくまでその外郭としての”存在”が彼に興味を抱かせているようだった。

「やっぱりそう思いはりますか。　いやぁ～一目見てピンと来たんですわ、オモロい子ぉやって。イヅルとはまた違う種類ですけどね。」

「あぁ、彼は非常に興味深いよ、そして何より彼は私の”駒”として相応しい。重要な部分になりえる可能性がある。」

「重要な、ですか？　そりゃまたいったい・・・って、なんやなんや？」

微妙にずれている二人の会話、見ているものがほんの少しずれているのだろう、そして藍染が口にした”重要”という部分を聞こうとギンが再び藍染に話しかけたときある変化が起こった。

フェルナンドの入った円筒に満たされた薬液から無数の気泡が上がり始めたのだ、それは加速度的に量を増していく、それは見たされた薬液が何らかの理由で沸騰しているという事を表していた。
そしてその理由など一つしかない、フェルナンド、彼がこの事態を巻き起こした理由だった。

「どうやらフェルナンドの身体が大量の熱を発しているようだね。薬液に満たされた霊子で穿点の効果が弱まったようだ、更に霊子を吸収して霊圧が急上昇している。これは装置が持たないな・・・・・・ギン私の傍へ・・・」

藍染は冷静に状況を把握していた。
現状に至るでの経緯を瞬時に把握し、それを余す事無くその頭脳に記憶する。
そして熱源たるフェルナンドの身体は更に身体中に罅を刻み、今にも砕けんほどとなっていた。
肉体が砕ける、それは”死”以外の何者でもない、そしてそれはフェルナンドに迫り、そしてその時は訪れた。

「縛道の八十一『断空』」

石が、硝子が砕け、割れるような音と共に残酷にもフェルナンドの身体が砕けた。
終焉の音、生命の終わりの音が響き、そしてその直後、罅の奥からまるで噴出すように紅い紅い炎が大量に噴出した。
それは一瞬で円筒を満たし、更に溶かし尽くして外へと飛び出す。
部屋を満たさんとばかりに荒れ狂う炎の奔流、しかし藍染は縛道の術によって自身の前に出現させた薄い光の壁によってそれを完全に

防いでいた。
その壁に阻まれながらも尚も荒れ狂う炎、そして荒れ狂うようだった炎は次第に弱まり、そして収束し、部屋の中心で２ｍほどの火球となり落ち着いた。

荒れ狂っていた炎が一点に集まったそれは、炎と霊圧の塊だった。
集まり、尚も燃え続けるその火球、まるで小さな太陽が其処に顕われたのかという程の熱量を放ちながら回転するそれ。
それを藍染は光の壁越しに見ていた。

「藍染隊長、あれは一体なんですか？」

火球を指差しながら訪ねるギン、それは当然の疑問だった。
フェルナンドの身体からあふれ出た炎、本来、破面として肉体を失ったフェルナンドは”死んでいる”。
しかし目の前の小さな太陽からは明らかにフェルナンドの霊圧を感じるのだ。

「あれ”も”フェルナンドさ。　・・・・・ギン一つ聞くが、魂魄が”最も安定する形”というのは知っているかい？」

「そりゃもちろん、”人型”です。」

「その通り、人の魂が種として最も長く、連綿として積み上げて来た形、それが”人型”だ。人間だろうと死神だろうと、そして虚だろうとそれが本当は一番安定する形なのだよ。」

魂の形、それが最も安定する形、それは人型であると藍染は語る。

人間という種族が積み上げて来た年月、そして親から子へと受け継がれるように連なる遺伝によって、魂の最も安定する形は”人型”なのだ。
人間、死神はもとより破面（アランカル）も元を辿れば人間の魂魄である事に変わりは無い、それ故力あるは面達は破面化の際人型をとるのだ。

「彼、フェルナンドは少し変わっていてね、大虚だった頃は肉体が無かったんだ。それ故自分の最も安定した形、というものも判らなかった。炎を収束すると馬の形になるそうだが、それはおそらく炎となる前の彼が馬の形をした虚だったのだろう。しかしそれすらも忘れてしまうほど彼は不安定な存在だったのだよ。」

大虚だった頃のフェルナンドの状態を語る藍染。
炎とは即ち無形である、確たる形の無い流動する”力”の塊、それを自我を持って己が身体としていたのがフェルナンドだった。
そしてそれはひどく不安定なものだと藍染は言うのだ。

「彼の破面化の際、私はいつもとは違う術式を試した。炎を用いて肉体を再構成する、という術式、しかしこの術式には欠点があった。それは現状の炎のみで再構成を行ってしまう点だ、彼はハリベルとの戦いで消耗していた。そのまま破面化を行った為彼の肉体は不完全に、小さく脆い少年のそれになってしまったのだよ。」

「はぁ〜、それでこんなちっこい破面になってもうたんですか。」

フェルナンドという炎、その再構成と欠陥、ギンにそれを語る藍染だがその瞳はギンを見ておらず、未だ燃え盛る火球を見ていた。
消耗した炎による不完全な身体、それが現状のフェルナンドだった、

そして藍染は更に言葉を続ける。

「先ほど言った魂の形、それはその魂魄が最も安定する形だ。だがもし、魂の形とそれが入る器の形が違っていたら・・・・・・器は溢れる魂を受けきれず、その重さに耐えられず何時かは割れてしまうだろう。そして今フェルナンドに起こっているのはまさにそれさ。ネロによる肉体への過度負荷、そして箍の外れた精神、回復を始めていた彼本来の霊圧が一気に噴出し、結果、彼の器(肉体)は崩壊してしまったのさ。」

そう、魂と肉体の差、それがフェルナンドに起こった自称を全て説明する鍵だった。

肉体が魂を完全に受けきれていないという事実、小さな器に大量の水を入れれば零れるのは明白、そして魂という名の”重み”を持ったその水は何時か器を壊してしまう、霊圧を解放したフェルナンドが負傷するのはそのためだったのだ。

しかし、破面化よりおよそ半年、霊圧も回復してきていたフェルナンド、その彼にネロという破面が加えた尋常ならざる肉体への負荷と、おそらく彼がこの虚夜宮に来た最たる目的を邪魔されるという精神的な負荷が相まって箍は外れ、魂の水は一気に器たる肉体へ降り注いだのだ。

そしてフェルナンドの肉体はその圧倒的な圧力によって崩壊してしまったのだ。

「ほんならあの火の玉が坊(ぼん)ゆうことですか？でも、あれやと破面いうより大虚に戻ってしまったみたいやなぁ。」

「いや、そうでもないさ。　フェルナンドの魂は自身が最も安定する”人型”というものを知った。そして須らく魂は安定を望む、私

の考えが正しいのならば・・・・・・始まったようだね・・・・・・」

その藍染の言葉が契機となったかのように、火球に変化が起きる。
２ｍ程だった火球は更に小さく、その円の中心へ向かって収縮していった。
そして火球が収縮するにつれ現れるのは人間の四肢、その末端である手であり足であった。
尚も収縮を続ける火球、そして見え始めたのは腕であり脚であり、そして頭部と続き、遂に火球はまるでその肉体の胸に空いた孔に吸い込まれるかのように消え去り、その場に残ったのは一人の”青年”だけだった。

細身の身体、身長は１６０～１７０ｃｍ前後か、線は細いがその身体はしなやかさと力強さを備えたような筋肉に覆われていた。
髪は金色、短めで後ろに跳ね上がるよう流れ、後ろ髪だけは他と比べ少し長めであった。
胸の中心には黒い孔が穿たれ、額の中心には紅い菱形の仮面紋、左の眉からコメカミ、左目の下を添うように残った仮面の名残は健在で、今は閉じられている瞳はきっと燃えるような紅だろうことを予見させた。

そこには成長したフェルナンド・アルディエンデという名の破面が確かにいた。

「あららぁ、一気におおきゅうなってもうた。」

ギンが眉を上げ、驚いたような素振りで呟く。
彼にしてみれば予想外の結末だろうそれ、しかしもう一人の男、藍染は少し違っていた。
ギンの前に居る藍染は驚き、というよりも寧ろ歓喜の色を濃くしたような雰囲気。
所詮彼にとって”娯楽”以外の何者でもない今回の出来事だが、その結果は上々のものと言えたのだろう。
喜色を浮かべ、藍染が小さく呟く。

「やはり君は面白い、フェルナンド・アルディエンデ・・・・・・」

一層深い笑みをその貌に刻み付けた藍染が、フェルナンドの再誕を祝福していた。

蘇りし紅
十の剣に刻まれし
童子の躍動の記憶
剣達は何を思う・・・・・・

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．２２（後書き）

難産過ぎた・・・・・・
いろいろ出しすぎた前回、おかげで筆が進まない・・・・・・
そして結局今回もいろいろやらかした感はアリ。

まずは前回最後の最後で登場させた『市丸ギン』についてというか喋り方あってるのか？キャラ掴めてるのか？と疑問符のまま書きました。
雲みたいなキャラだと改めて実感。

『穿点』の設定や『連反膜の匪』は独自です。
出来るだけ違和感無いものに仕上げた心算だけどどうでしょうか？
ご都合主義ではあるけどねｗ

魂云々についても独自です。
そしてフェルナンド成長フラグ回収、大体１７～１９歳くらいの人間で言えば身体が出来上がったあたりと思ってください。
これでいろいろ動かしやすくなったかな。（主に戦闘面で

前回の後書きで業名を言わせると書いたんですが、なにぶん新話で手一杯状態でまったく手をつけられません。
ちょっとした修正で済むと思う（希望的観測）ので、今日か明日の夜にはｕｐしたいと思います。

些細なことでもいいので、感想お待ちしております。

「陛下、何か良い事でも御座いましたか？」

玉座での一件の後、第1十刃（プリメーラ・エスパーダ）バラガン・ルイゼンバーンは自身の宮殿へと戻り、数多の骨が組み合わさって出来た豪奢な椅子に腰掛けていた。
その後ろには装飾なのか赤い布が幾重にも折り重なるように天井から下がり、入り口からその椅子までを長く一直線に真っ赤な絨毯が敷かれ、その絨毯の両脇に膝を折り、頭を深く下げて居並ぶ彼の従属官達。
その中で最もバラガンの座る椅子に近い場所にいた、剣歯虎の頭蓋の仮面を被った三つ編みの従属官がバラガンへ話しかける。
そして数瞬の沈黙の後、バラガンがその鋭い視線を件の従属官へと向ける。

「・・・・・わかるか・・・」

バラガンの口から紡がれたのは肯定の意。
従属官の語った事に対してやはりわかるか、とその口元を僅かに緩め答えた。

「はい、衆議より御戻りになられてからの雰囲気が幾分、和らいでおられました故。」

「フン、大した事でわないわ。　ネロの阿呆（アホウ）がボスに灸をすえられただけじゃい・・・・・・」

「はぁ・・・・・　第2十刃（ゼグンダ）が、ですか・・・・・・では”良い事”というのは一体・・・・・・」

従属官の”雰囲気が和らいだ”という言葉を鼻で笑いながら、バラガンはネロが藍染によって幽閉された事を明かした。

虚夜宮全体で見ればある意味大事件であるそれを、大した事ではないと切り捨てるバラガン、そんなバラガンの態度に幾分困惑しながらも従属官は、彼の雰囲気を和らげた”良い事”というのは何かと訪ねた。

その従属官の言葉にバラガンはまたも数瞬沈黙し、そして小さくクックッと笑ったかと思うとそれを話しはじめた。

「なに・・・　ネロの馬鹿垂れが金髪の童（わっぱ）に良い様に叩き伏せられよったのだ。”力”をただ”暴”として振り回す事しかできん彼奴にはいい薬よ・・・・・・それにしてもあの童・・・・・・　ハリベルの奴が随分気にしていたようじゃったが何者か・・・・・・」

従属官に己の機嫌のいい理由を話すバラガン。

それはネロがあまりにもいい様に叩き伏せられたことが理由だった。

”叔父貴”、とバラガンの事を呼ぶネロ、初対面でネロはバラガンが第1十刃だと知るといきなり彼へと襲い掛かった。

虚夜宮で一番強い第1十刃、それを殺せば自分が最強だと証明できる、実に短絡的で単純な思考、しかしそれは戦う事しか知らぬ彼等にとって真理に近いものだった。

結果、なす総べなくバラガンに返り討ちにあったネロ、真っ向から

力で捻じ伏せられたネロにとって初めての経験（敗北）、そして自分より強いとバラガンを認めた彼はバラガンの事を”叔父貴”と呼ぶようになっていた。
そうしてバラガンに対し一応の敬意を払うネロをバラガンも気には掛けていた、しかしその後もネロの振る舞いは癇癪を起した子供と同じだった。
その認識はバラガン以外の十刃、そしておそらくは彼らの創造主藍染も同じであろう。
しかしそれでもネロが第2十刃の地位でい続けられる、それは彼がそのどうしようもない性格を補って余りある”力”と、真なる力を持っているが故でも在った。

しかしそのネロが叩き伏せられる、それも子供の外見をした小さな破面に、だ。
それは意思無く、ただ感情の赴くまま暴れるだけのネロに訪れた転機であると、バラガンは考えていた。
振り回すだけでは駄目だという事を知る転機、”暴”を”理”でもって制し、戦う事こそが本来のあり方であることを知る転機であると。
しかしその転機を生かすも殺すも結局はネロ次第、幽閉された閉次元の中で少しでもネロが考えるという事を学べば、と思うバラガン。

そしてもう一つ、そもそもネロを叩き伏せたあの小さな破面、あれは一体何者なのかという事。
一瞬の、それこそ燃え尽きる前の蝋燭の火の如き一瞬の力、おそらく命と引き換えであろう力でもってネロを叩き伏せた少年、第3十刃であるハリベルがやけに気にしていたが一体何者か、バラガンの内に残る疑問、しかしそれはあっさりと解決する。

「金髪の童・・・・・・・・・　おそれながら陛下、それはおそらく『フェルナンド・アルディエンデ』という名の破面で御座いましょう。番号は未だ与えられておりませんが、先頃起こった『数字持ち狩り』を行った張本人である、という噂が虚夜宮全体でまことしやかに囁かれております。」

「ほぅ・・・・・・　あの童が、のう・・・・・・」

バラガンの疑問に答えたのは跪いている従属官の中の一体、頭頂部から目元、鼻先にかけてと、顎の線に沿うように顔のほとんどを仮面で覆われている長髪の従属官だった。
その従属官が語るのはその金髪の童の名はフェルナンド・アルディエンデ、数ヶ月ほど前に起こった『数字持ち狩り』なる事件を起こした張本人である、というのだ。
それを聞いたバラガンはその言葉に多少驚いた様子だった。
バラガンもその事件事態は知っていた、だが所詮数字持ちの諍いであり、十刃、それもその頂にいる自分には関係の無い事と深く知ろうとはしなかった。
だが、彼の従属官が言う事が本当であればあの少年はたった一人で数字持ち全てを倒した、という事になるのだ。
数字持ち、といっても人数は多い、与えられる数字の最大がＮｏ．９９、現在その数字を持つものがいるかは不明ではあるが、その中から従属官を差し引こうとも、少なく見積もっても数十名近くいることに変わりは無い。
それをあの少年がたった一人で全て倒したという、俄かには信じられない事ではあるが、実際その片鱗を見ているバラガンにとってその事実は素直に受け入れられるものであった。

「フハハハハ、なるほど、あの童がそうなのか！確かに光るものは

持っておったわ・・・・・・ならば、一つ試してみる・・・か。」

バラガンは一つ大きく笑うと何事か納得したように頷く。
そして玉座のまでの一件を思い起こし、その記憶の中のフェルナンドの中に煌く”力”の片鱗を確かに見ていた。
そうしてバラガンは手を自分の顎に持っていき、二、三度その顎に蓄えた髭を撫でると口元を歪ませ、鋭い目付きで何事か思案するのであった・・・・・・

―――――――――

第４十刃（クアトロ・エスパーダ）、ウルキオラ・シファーは彼にあてがわれた宮殿の一室にて瞳を閉じ、佇んでいた。
部屋というものはその部屋の主の内側を映し出す鏡だ。
几帳面な者はその隅々までが整理され、逆に大雑把な者は乱雑に、精神が充実している者の部屋は明るく、病んでいる者は暗く淀んだそれとなる。
そして今、ウルキオラが佇むその部屋は、殆ど何も無い、装飾というものをまったく排した部屋だった。
それほど大きいという部屋ではない、しかしあまりにも何も無いゆえその部屋は実際よりも大きく見えた。
在るのは一脚の椅子と、切れ込みのように縦長に空いた採光用の窓

だけだった。

その部屋がもし彼の内面を写しているとするならば、彼の内側は“空(から)”なのだろう。
何を求めるものでもなく、ただ淡々と、そして粛々と与えられたものだけを完遂する。
そこに自己の考えなどというものを挟むことすら彼には思いつかない、ただ粛々と主たる藍染の命だけを実行する、それが彼の存在する理由の全てなのだ。

瞳を閉じ佇むウルキオラ、その瞼に映る景色、それは玉座での出来事だった。
ネロとフェルナンドという二人の破面が起した事の顛末、実際にはネロが原因であるのだが今更何を言ったとて何かが変わるわけでもない。
そして争う二体の片割れの姿を見るのは二度目、正確には三度目ではあるが彼にとってそんな事はどうでもいい。

そう、どうでもいい事なのだ。

ウルキオラにとって玉座で起こった一件は所詮どうでもいい、瑣末な出来事にほかならなかった。
第2十刃と塵の諍い、周りはどうあれ彼、ウルキオラのこの事柄に対する認識などその程度だった、どちらが有利だった、どちらが優勢で結果どちらが勝利者と言えた、などという安い評論じみた事を彼はしない。
結果も、それに至る過程も知る必要など無い。
瑣末、瑣末の極み、ウルキオラにとって必要なのは藍染の命令を完遂する事であり、その他の出来事、それこそ他者の生き死に等は瑣末過ぎる出来事にほかならないのだ。

しかしその瑣末に過ぎない出来事がウルキオラの内から消えなかった。
思い返すウルキオラの瞼に移るフェルナンドの姿、何故か血塗れの彼、そして何故かその血塗れの彼は強大な力で第2十刃を叩き伏せる。
叩き伏せたネロを前に何事か叫ぶ彼、ウルキオラの理解の外に在るそれは感情の発露だろう、理性で押えつける事ができないその叫び、それはフェルナンドという破面の奥の奥、その更に奥である彼の最奥にある存在、容無(かたち)く、触れる事も見ることもできないが確かに存在するであろうそれが引き起こす叫びと”力”。

『心』

情報としては知っている、そういうものが存在するのだという知識をウルキオラは持っていた。
頭を割っても見えず、胸を裂いても見つからないそれ。
その現実としてその目で視る事も、その手で触る事もできない存在、あまりにも不確かなそれをウルキオラは理解できなかった。

瑣末な出来事の中に潜む小さな疑問。
フェルナンドという破面が見せた不可解な”力”、そしておそらくそれを引き出したであろう『心』という不確かな存在。
その疑問はウルキオラの内に小さな棘となり刺さった、命令のみを遂行する機械に近かったウルキオラの内側に芽生えた興味という感情。

『心(こころ)』とはなにか？

瞳を閉じ佇むウルキオラ、その”解”を求め思考に埋没する彼がその”解”にたどり着くのは、まだずっと先の事だった・・・・・・

―――――――――

「生き延びた・・・か・・・・・・」

第5宮、その中でも一際高い塔の最上階で、その宮殿の主、第5十刃（クイント・エスパーダ）『アベル・ライネス』は小さくそう呟いた。

アベルは自身の持つ”千里眼”なる能力によって、玉座の間を去った後、藍染によって連れて行かれたフェルナンドの状況、そして変化と再誕の全てを”視て”いたのだった。

『諦観』、アベルが象徴する死の形、諦めというそれは肉体ではなく精神の緩やかな死を意味していた。

アベルにとって諦めとは何事にも期待しないという事、期待というものには何の根拠も無く不確定であると同義であり、不確定とは即ち事象の揺らぎであるとし。

個人の利己的な感情が多分に含まれたそれは往々にして裏切られ、その揺らぎにより生まれた不必要な事柄は、結果として更に必要以上の無駄な労力を生む。

アベル・ライネスはそれを好まない。

期待、希望、安易にそして安直に信じたくなるそれは不確定であり参考に値せず、それにより生まれる揺らぎ、更にそれを解消する為の必要以上の労力、必要以上という事は即ち不必要、余剰であるそれは無駄でしかなく故に無意味である。
ならば初めから何事にも期待せず、いや、初めから余剰など無いとするならば残るのは必然性のみであり、完全である。

アベルの根底に流れるのはそういった思考、歪な考え、しかし本人が強く信じれば他者はどうあれそれが本人にとっての真理なのだ。

そして今日、そんな考えを持つアベルの前に一体の破面が姿を現した。
『フェルナンド・アルディエンデ』、直接会う事は初めてであったが、アベルは随分と前からフェルナンドの事を知っていた。
虚夜宮の其処彼処で起こる戦闘霊圧の衝突、あまりにも頻発するそれをアベルは無視していた。
理由は簡単、必要ないからだ、それを態々調べる事も、ましてや止める事も、彼にとってはあまりにも無意味で不必要極まりないものだった。

しかしここで彼の”千里眼”が災いする。
あまりにも”視えすぎて”しまうそれにより、アベルは嫌がおうにもその衝突を”視せ”てしまうのだ。
結果、各所で起こる霊圧の衝突に必ず居合わせる小さな破面の存在を、アベルは知る事となった。

その小さな破面が各所で起した衝突、そして今日愚かにも第2十刃

へと挑みかかったという愚行も、アベルにとってあまりに理解できないものだった。
戦う事で強くなる、他者を助けるため戦い傷つく、アベルにとって無意味極まりない行為達。
多くの敵と戦を経験し、力を付けたとてそれに如何程の意味があるのか、破面も、そして死神達も持てる力の最大は決まっている。
上限が決まったもの同士の戦いにおいて勝利するのはより力の大きいものだ、力無い者がいくら努力という自己満足を重ねたとて結果は見えている、なのに何故その無意味な行為に時を費やすのか、と。
広間で第6十刃ドルドーニに語ったように、他が為の戦い、結果として自身に深い傷と死を招くような行為は無意味である、と。

アベルにとってあまりにも理解不能は行為を繰り返す破面、フェルナンド。
そして玉座の間で最後にアベルが見たのは、箍が外れたかのように荒ぶり、遂には己が霊圧の定められた限界を遥かに超えて放出し、死を迎えるであろうフェルナンドの姿だった。
それは他者にとっては美談と成るかもしれない、しかしアベルにとってそれは無為、談するに値しない無意味な結末であった。

藍染直下の配下、市丸ギンによって運ばれるフェルナンドの身体、治療すると藍染は語ったがそれが本当に為されるのか、それとも死してしまうのか、アベルはその結末を見届けるべく”千里眼”によってフェルナンドを追う。
それは自らが無為とした結末の行く末を確認するための作業、このまま小さな破面フェルナンドが死すならばやはり自分の考えは正しいと、そしてもしもフェルナンドが生き延びたとしても、アベルの中で行為自体の無意味さが消えたわけではなく結果、一体の破面が生き延びたというだけの事なのだ。

そして確認の結果は後者だった。
アベルが”視た”のは死の淵より舞い戻った、いや、死して尚蘇ったフェルナンド・アルディエンデの成長した姿だった。

「あの少年・・・いや、今は青年と言った方が適切か。彼は命を繋いだ・・・・・・しかしそれに意味はあるのか？強く、そして雄々しく変わったその姿、彼はまた戦いに身を投じそして傷つき倒れる。何処までいってもそれは変わらない、無意味な死・・・・・・そんな結末に意味などあるのか・・・・・・」

アベルの呟き、自問を続けるかのようなそれを繰り返す。
フェルナンドは生き残った、無為の死を迎えるはずだった彼が生き残った事実。
彼の行為の無意味さは消えずアベルの心理は未だ揺るがない、しかし思慮深いアベルはその生き残ったという事実の意味を考える。
死す筈だった者が生き残った、それに意味はあるのかと、この後もこの生き残った破面は同じ事を繰り返すかもしれない、それに意味はあるのかと、変らぬ行い変らぬ結末を迎えるであろう命に意味はあるのか、と。

「いや、それを論ずるならば、そもそも私たち破面という存在に意味はあるのか・・・・・・」

アベルの自問は続く、ただ一人、塔の最上階で呟かれるそれに答えるものは、誰もいなかった・・・・・・

第６十刃（セスタ・エスパーダ）であるドルドーニは自身の宮殿である第６宮へと戻るため、玉座の間がある建物の廊下を歩いていた。

その道中、思い返されるのは、やはり鮮烈に記憶へと刻まれたフェルナンドの姿。

傷つき、意識を失ってい倒れた彼が突如としてネロを叩き伏せるという出来事だった。

ドルドーニにとって第２十刃ネロ・マリグノ・クリーメンとは、あまり好きにはなれない部類の男だった。

粗野である、粗暴である、粗雑である、そんなことはまだ我慢できる話だ、しかし戦いにおいて、そして常においても他者に対する敬意というものを欠片も見せないネロ。

他者、特に女性の意思を第一に尊重するドルドーニにとって、そのあまりに身勝手で相手を見下し蔑むようなネロの態度は目に余るものがあった。

しかし、現実としてドルドーニにそのネロの蛮行を止める術はなかった。

第２と第６、間にあるのは三つの数字のみ、だがそれは果てしなく広く、遠く、そして深い渓谷のようにドルドーニとネロの間に横たわっていた。

ドルドーニとて今のままで終わるつもりなど毛頭ない、彼の司る死の形は『野心』、己の身引裂かれようとも上を目指す事をやめない貪欲なまでの欲望を指すそれなのだ。

だが今日、ドルドーニの前で彼以上にネロを止める術を持たないはずの破面が叩き伏せたのだ、傍若無人の極致たるネロ・マリグノ・クリーメンを。

その光景は鮮烈、そしてその鮮烈さは同時にドルドーニの内に火を灯す。

（少年……　君は強い、力ではなくその精神が。君が生きるのか、それともこのまま死んでしまうのか、吾輩にはまだ分かりはしないがもし、もし君が生きていたならば吾輩は……　やはり君と戦ってみたい。　ただ純粋に戦士として君と……）

その灯った火の熱さを感じながら歩くドルドーニ。

そして少し進むと彼の眼に廊下の壁に寄りかかるようにして佇む一体の破面の姿が見えた。

「どうしたね？　我が弟子（アプレンディス）。まさか吾輩を待っていたのかい？　それは殊勝なことだ、褒めてつかわそう。」

壁に寄り掛かるのは水浅葱色の髪をした野獣の気配を纏った男、グリムジョー・ジャガージャックだった。

ドルドーニの言葉に何も返さず、ただ一つ舌打ちをするグリムジョー。

そしておどけた様子だったドルドーニは、グリムジョーの前を通り過ぎた辺りで足を止め、背中越しに彼に再び話しかける。

「・・・・・・・・心配かね？」

主語を欠いたその問、それにピクリと反応するのはグリムジョー、そして大きくそれを否定する。

「遂に頭がおかしくなったな、オッサン。　何で俺があんなクソガキの心配をしなくちゃならねぇ。」

ドルドーニの言葉を否定し、その言葉が的外れだと言わんばかりに笑うグリムジョー。

しかし、背を向けたままのドルドーニは「ふむ」と小さく零し、顎を摩るような仕草をしながら言葉を続ける。

「吾輩、”少年（ニーニョ）が”心配か、と訊いた覚えは無いのだが・・・ね。」

そのドルドーニの言葉に目を見開き、直後苦々しく顔を歪ませるグリムジョー。

それはある意味での証明、口では心配していないと言うグリムジョー、しかし心配していないと言いつつもその内では心配、とまではいかずともやはりその存在を強く意識しているという証明にほかならなかった。

それもそうだろう、グリムジョーの身体に何発もの拳と蹴りを叩き込み、自身もグリムジョーの攻撃をその身に受け、尚立ち上がり打倒しようと向かってくる小さな破面、最後は両者共に倒れ決着が着かなかった相手フェルナンド。

格下であるフェルナンドに意識を失わされた、という屈辱がその戦いを自身の”負け”であるとしたグリムジョーが、その”負け”を齎した相手を意識しないわけが無い。
何時の日か更に強くなったフェルナンドを打倒し、完膚なきまでの勝利を手にすると誓ったグリムジョーが、フェルナンドを意識しないわけが無いのだ。
そうして苦々しい顔のままのグリムジョーを他所に、ドルドーニが話題を帰る。

「そういえば何故こんな所に？　まさか本当に吾輩を待っていたのかい？」

そう、ドルドーニの疑問は其処だった。
何故グリムジョーがこの場所にいたのか、それもまるで自分が来るのを待ち構えていたかのように、だ。
初めはそんな事はありえないとも考えたドルドーニだが、何時までもその場から去らずにいるグリムジョーを背に、或いはの可能性を口にしていた。

「・・・・・・　一つ訊きてぇ事がある。」

ドルドーニの問にグリムジョーは更なる問で返した。
訊きたい事がある、その言葉にドルドーニは言葉では答えず、沈黙でその先を促した。

「今の俺と、さっきのクソガキ、戦ったらどっちが勝つ・・・・・・」

その質問は単純で、しかしグリムジョーにとって何よりも重要なものだった。

グリムジョーはあの場残っていたのだ、ネロの叫びに多くの破面が逃げ出し、霊圧吹き荒れたあの広間に残った十刃以外の数少ない破面の内の一体として。

そうしてその場に残ったグリムジョーが目撃したのは、自分との戦い以上にボロボロになったフェルナンドが、あの第2十刃ネロをその攻撃をもって叩き伏せるという場面だった。

衝撃、それはその場にいる全ての破面に共通する衝撃ではあった、しかし、グリムジョーにとってその衝撃は計り知れないものでもあった。

ほんの数ヶ月前、自分より下でありながらグリムジョーに迫る実力を見せたあの小さな破面が。

互いにボロボロになりながら戦ったあの小さな破面が、第2十刃を叩き伏せるという現実、今日まで過ごした時間は同じ、その中で自身が成長し、更なる力を付けたという自負があったグリムジョーに、それはあまりに衝撃的な光景だった。

故に知りたい。

自分とフェルナンド、今戦って強いのはどちらなのかと、シャウロン達に聞いたとてまともな答えは返ってこない、故にグリムジョーとて癪ではあるが、上位の実力者であるドルドーニにその問の答えを求めたのだった。

「少年（ニーニョ）のあれは命を燃やした特攻だよ。一概にあれが少年の実力とも言えまい・・・・・しかし、”今の”青年（ホーベン）と”先程の”少年が戦ったら・・・か。その問の答えは、吾輩が答えねば解らない事かい？」

「ッ！・・・・・・」

グリムジョーの問にドルドーニは答えた、冷静に先程のフェルナンドの力を分析し、それが常時発揮されるようなものではないと答える。

だが、その答えは最後の明言を避ける、”今”と”先程”と言う言葉を強調したドルドーニ、そして問いを発したグリムジョーに返す。

この問に答える必要はあるのか、と。

この問の答えなど、もうその内にあるのではないの、と。

そのドルドーニの言葉に息を呑むグリムジョー。

そうなのだ、誰かに問うという行為、そしてそれが自身の行いや行く末に関わる場合、往々にしてその問の答えは既にその内に出ているのだ。

理解できないものを問うのではなく、どうしたらいいのか、どちらがいいのかといった選択を問う時、その答えは内にあるのだ。

問うというかたちでの確認作業、自信がない分を他者の意見で埋め、その”解”の確実性を高めようとする、それが今グリムジョーが行った問の正体であった。

グリムジョーの中に在る答え、それが自身の勝利か、はたまた敗北かは断定できない。

だが苦々しく、その眉間に寄せた皺を一層深くし、ギリッと奥歯を強く噛締めるグリムジョーの姿が全てを物語っているともいえた。

そしてそのグリムジョーに追い討ちをかけるかのように回答者、ドルドーニはその言葉を続ける。

「まぁいい。あえて答えるのならばやはり青年（ホーベン）の”負け”だろう。
”今の”　・・・・・そうして自分の力に疑問を持っている青年では、”先程の”、唯一つだけを純粋に思う少年に及ぶはずも無い・・・・・・」

グリムジョーに背を向けたままのドルドーニ、その口から放たれるのは辛辣な言葉。
今、現在のグリムジョーではフェルナンドには勝てない、それは”力”が及ぶ及ばない以前の問題。
己の力が他者に勝っているのかそれとも負けているのか、そういう考え方をしている時点でその者は既に敗れている。
戦いに生きる者、生と死の境界に立ち続ける者が信じるべきは己の”力”、その己の”力”に疑問を持つ、即ち核たる柱が揺らいでいるも同義である。
負けているかもしれない、負けるかもしれない、そんな気概で戦いに望めば結果はひを見るより明らかだ。
まして相手は唯一つのために己の命すら平気で燃やし尽くす事を厭わない相手、それにそのような気概で望む、あまりにも無謀、あまりにも愚かしい、ドルドーニの言葉にはそれが詰まっていた。

以前苦々しい表情のままのグリムジョー。
何一つ語らず、ただ拳を握り締める。
過去、フェルナンドがグリムジョーに語った言葉、必勝の覚悟も無しに戦うものは死ぬ。
それがグリムジョーのうちに甦っていた。
そのグリムジョーにドルドーニは背を向けたまま一歩踏み出し、そして言葉をかける。

「着いて来るがいい我が弟子(アプレンディス)よ。”今の”ままで勝てぬというのならば強くなればいい。その疑問を感じるのならば、それを感じなくなるほど強くなればいい。己の内に揺るがぬ柱を創れ、疑う余地の無い強固な柱を創れ。そうして少年(ニーニョ)に、吾輩に挑むがいい。」

そう言い残し歩き出すドルドーニ。
振り返らず歩くドルドーニの姿を、その背を見るグリムジョー。
数瞬の後、彼は小さく舌打ちをしてポケットに手を突っ込み、その後を追う。

そうして歩く二人の後姿は、本当に師と弟子の様であった。

剣に刻まれし記憶
残るは四
陶酔、絶望、欲望、憤怒
剣思うは紅の記憶か

BLEACH El fuego no se apaga. 23（後書き）

忙しい・・・・・・
面倒な仕事ばかりが襲い掛かってくるかのようだ・・・・・・
まぁそんな事はどうでもいいのですがｗ

今回は各十刃の描写です。
それぞれが何を思い、どうするのかを書いてみました。

ハリベルは謹慎中、ネロは幽閉中ということで除外です。
次も残りの十刃の話をちょこちょこ書こうと思います。

それと漸く、と言いますか以前行ったアンケートから
業名をスペイン語で言わせる、というものがやっと書けました。
書いたと言っても業名入れてチョット書き換えた程度ですがｗ
訳は厳密には合っていませんが、そこはオサレだと思ってくださいｗ

気軽に感想、質問などお待ちしております。

追伸、キャラの魔改造は何処まで許されますか？
孤独な二人の妄想が爆発中、早く登場させたいｗ

２０１０．１１．１４

祈りを捧げる。

下賜された宮殿、その頂よりも更に上に見えるのは空と見紛うばかりの天蓋、その巨大な天蓋を突き抜けるように聳える通称『第五の塔』、その中でも一番高い塔の先、座禅を組み、指を複雑に曲げ、その両手をそれぞれ膝の上に置きながら瞑目し、星無き黒天にただ祈る。

第7十刃（セプティマ・エスパーダ）『ゾマリ・ルルー』はそうしてただ黙々と祈りを捧げる事を日課としていた。

捧げる祈りは一人のために、暗く冷たい闇空に輝く月よりも更に上に座す彼らの創造主、藍染惣右介へ。

それはゾマリにとって当然の行為。

”王”、それを奉るのは彼にとって当然の行為なのだ。

絶対的な支配、それを彼の前でいとも簡単に見せ付ける藍染惣右介。
その霊圧で、或いはその智謀によって他者を意のままとす、取り方はそれぞれあるだろう、しかしゾマリにとってその支配者たる藍染の姿はどこか神々しくさえ思えた。

”王”

支配者として君臨する者への称号。
それを冠するのに藍染以上に相応しい存在など無い、とゾマリに確信させるほどの圧倒的なその支配。
初めから”反抗する”と言う気概すら浮き出ぬほどの存在感と、膝を着き、傅く事が当たり前の行為にすら感じるその威容。
それを他の何一つを用いずに己が身から発する”気”のみで容易く実現してしまう藍染。

”支配”という能力に通じたゾマリだからこそ解るその”格”の違い。
支配者、”王“という名を冠するために生まれてきたのだとすら感じさせる藍染、それを奉る事にゾマリはなんら疑問を感じなかった。
簒奪、理想、利用、自由、服従、美学、我欲、破面が藍染惣右介の元に集いそして集団として形をとるという奇跡、その中に渦巻くそれぞれの感情、十いれば十の思惑があり、百いれば百の思惑がある。
その全てを内包した集団を支配する藍染、そしてゾマリが藍染の元に傅く理由は”崇拝”に近い感情、そしてそれに酔うゾマリが其処にはいた。

ただ黒天を仰ぎ瞑目するゾマリ。
それは神聖なまでの祈りの時間、無心に、ただ無心に祈るゾマリ、しかしそのゾマリの内をよぎる異物の影があった。
よぎるそれは紅い影、燃えるような紅がゾマリの祈りを乱す。

『フェルナンド・アルディエンデ』、その小さな破面は恐れ多くもゾマリが崇拝する藍染の目の前で、傅くどころか彼を無視し、第２十刃を叩き伏せたのだ。
ゾマリにとって重要だったのは第２十刃たるネロを叩き伏せたという事実よりも、未だ数字すら与えられぬ存在でありながら、偶然にも藍染の前に立つ栄誉を授かりながらもそれを意に介さず、無視するようなフェルナンドの行いだった。
精神の高揚、肉体的疲労、身体的肉体的限界に伴う視野狭窄、おそらく理由など上げ始めれば切りは無いのだろう。
しかし、そんな理由など関係なく、藍染という”王”を前にしたのならば傅く事こそ臣下の礼、それを蔑ろにした存在であるフェルナンドはゾマリの中で不興を買っていた。

「フェルナンド・アルディエンデ・・・・・・あの炎の大虚・・・ですか。　今回といい、あの時といい・・・・・・無礼という言葉を知らないようですね・・・」

閉じていた瞳を静かに開きながら言葉を零すゾマリ。
思い返されるのはフェルナンドをはじめて見たときのこと、フェルナンドが未だ大虚であった時分、虚夜宮へと連れられ藍染に始めて謁見したときのことだった。
その場にいたゾマリはある意味驚愕していた、それは当時第４十刃だったハリベルが負傷して帰ってきた事でも、それに連れられてやって来た炎の大虚が最下級の破面を一瞬で焼き尽くした事でもなく、その炎の大虚が藍染に対し、まるで対等かのように振舞う姿に、だった。
ただの大虚が虚夜宮、いや、虚圏全ての”王”足る者と対等に構える、それはゾマリにとって、その”王”を崇拝し、崇め奉るゾマリ

にとってもはや”罪”ですらあった。

そして今回の出来事、おそらく傷つき瀕死の重傷を負ったであろう”罪人”フェルナンド・アルディエンデ、しかし”死んだであろう”等という不確かな予想をゾマリはしない。

ゾマリ・ルルーという破面の本性はあくまで冷徹なのだ。

希望的観測、根拠なき想像であるそれをゾマリは好まない、本当に始末すべき者はその手に握った斬魄刀で、そして自らの手でその首を刎ねるまで、彼の中で決して死にはしないのだ。

「罪は償われなければなら無い・・・・・そして罪人とは、須らく死をもって断ずるべきもの。そして・・・その役目は”王“の御使いたる、この私にこそ相応しい・・・・・・」

両の膝に置いていた手を広げるように闇空へと大きく伸ばすゾマリ。

その身に天に広がる空から振る暗光を浴びるかのように、そして発する言葉はまるで神からの啓示を受けたかのように紡がれていた。

罪人を断罪するは御使いの役目、自らを御使いと称するゾマリ、崇拝から盲信、そして遂に狂信へと至ったそれは時に一人歩きした自己解釈によって歪な結末を生む。

他者が見れば些細な出来事も、決して許せぬ大罪へと姿を変えるのだ。

ゾマリの瞳に映るのは御使いとして、王の尖兵として王の行く手を阻む者を、そして王に仇なす罪人を断じる自身の姿。

そのなんと崇高な事かとゾマリは一人愉悦に浸る。

「私は御使い、王に仇なす罪人を断ずる斬首の剣・・・・・・あぁ、

その崇高なる使命、啓示は下った・・・後は・・・誅すのみ・・・・・・」

自らが発する言葉の一つ一つが、啓示そのものかのようにそれを噛締めるゾマリ。
その瞳はそれに酔うかのように細められる。

第7十刃、ゾマリ・ルルーその司る死の形は『陶酔』・・・・・・・

――――――――――

「や、やめ、助けてくｒグボァ！！」

巨大な三日月が一つの命を奪う。

三日月を振るうは長身痩躯、異常に細い身体つきをした黒髪の破面、左目には眼帯を、そして鋭い右目には苛立ちを浮かべそれを隠そうともしないその男。
腰布から大きめの輪が連なったような鎖を垂れ下げ、その先にあるのは今し方、名も知らぬ破面を屠り肉塊へと変えた黒い三日月。
長身であるその男をしても巨大と言わざるを得ないソレ、三日月の

内側に刃があり、その背から長く伸びた棒状の柄、戦斧や鎚の方がよほど近いような形状をしたそれこそ、この男の異形の斬魄刀であった。

「チッ！・・・・・・」

一つ舌打ちを零す男、砂漠に下ろしていた三日月の斬魄刀を柄の先端を持ち、軽々とその肩に担ぎ上げ腰を下ろす。
その男の異形たる斬魄刀、刀としての常軌を逸した大きさの斬魄刀を、いとも簡単に持ち上げる男の膂力の凄まじさ、しかしそれすら彼にとってなんら誇るべきものでもなかった。

先の舌打ち、それは今や肉の塊へと姿を変えた破面への落胆。
何の歯応えもない相手、最後には命乞いという戦士として最も醜く恥ずべき行為を曝し死んだ破面への侮蔑の溜息。
降りかかった火の粉、自分と相手の実力も計れず威勢ばかりいい相手だった、それを払いのけただけの男にとって、それは彼の抱える苛つきを加速させるだけの出来事だった。
故に溜息の後、男がその肉塊に対して思考する事はなかった、いや、今から一瞬の後には既にその肉塊を作った事すら忘れているだろう。
それほどこの肉塊は男にとってどうでもいい物だった。

三日月を担ぐ男、名はノイトラ、第8十刃（オクターバ・エスパーダ）『ノイトラ・ジルガ』、ただ”最強“の二文字と”死”を追い求める男である。

「随分と荒れているな、ノイトラ・・・・・・」

そうして不機嫌を撒き散らすノイトラの前に一人の破面が現れる。

黄土色の神をした端正な顔立ちの男、額に金冠の様に仮面が残り、右の頬には水色の仮面紋が刻まれている。
服装はほぼ一般的な死覇装、腰に下げる斬魄刀はノイトラのもの程ではないが奇形であり、西洋風の造りで刀身の途中に環の形をした刃があるというなんとも変った斬魄刀だった。

「・・・・・テスラか・・・　何の用だ・・・・」

ノイトラに『テスラ』と呼ばれたその破面は、破面Ｎｏ．５０『テスラ・リンドクルツ』
自身の苛つきをぶつけるノイトラの前にたった彼は、ノイトラを気遣うように話しかける。

「何かあったのか？　いつものお前らしくないぞ・・・・・・」

「あァ？　俺らしいだと？　テメェに俺の何がわかる。殺されたくなかったら消えろ、目障りだ。」

らしくない、という言葉にノイトラが噛み付く。
その人物の一定の行動原理から外れること、それを”らしくない”と定義するならばそれはいい迷惑だ。
そもそも自分の考える自分らしさと、他者の考えるその人らしさ等というものは始めからずれている。
そのずれている他者が定めたその人”らしさ”という枠からはみ出したからといって、一々気にされるのは可笑しな話なのだ。

ノイトラは枠に嵌められる事を嫌う、それも他者が勝手に定めたノイトラという破面の枠に嵌められる事を嫌う。

それは定められた枠から自分が出られない、と他者に言われている様で、自分の限界を他者が勝手に見定め、決め付けている様で、そうして枠に嵌められている事で自分がその中だけに納まってしまうかのようで我慢ならないのだ。
自分の限界を決めるのは自分のみ、そもそも自分に限界などなく、一度限界を定めればいくら足掻こうともそれ以上の存在には届かないのだ。
故にノイトラは怒る、テスラの定規によって測られ自分というものを語られたが故に。

殺気と共にぶつけられた言葉、しかしテスラはそれに怯む事無くノイトラの前に立ち続けた。
彼とてただ何と無くこの場に来たわけではない、ある一つの覚悟と決意を持って、今ノイトラの前に立っているのだ。
そしてその覚悟の下、決意した言葉を彼は口にした。

「・・・・・いや、引くわけにはいかない。今日はお前に頼みたい事があるんだ・・・・・・・・僕を・・・　お前の従属官（フラシオン）にしてくれ。」

「なに？　ついに狂ったか、テスラよォ。　俺は従属官なんかいらねぇ、そんなもんは戦場で邪魔になるだけだ。」

テスラの願い、それは自身をノイトラの従属官にしてくれ、というものだった。
しかしノイトラはその願いをあっさりと断った。
彼にとって従属官、言うなれば『仲間』といった存在は邪魔でしかなかった。
それはノイトラが求める最高の戦いという場所に容易に水をさす異

物、そもそも彼が求める”最強”という名の称号を手に入れるのに、仲間といった『補助』など必要としていないのだ。

唯一人、一個体としての”最強”、それこそがノイトラの求めるものなのだから。

「だいたいなんで俺を選ぶ、他にいるだろうが、例えばぞろぞろと従属官を侍らせて大将気取りの”堕ちた王様”とかがよォ。」

そう言ってクククッと笑うノイトラ、彼の言う”堕ちた王”とは第1十刃バラガンの事、彼は元々王だった、この虚圏全ての王だったのだ。

しかし、藍染惣右介という名の絶対的支配者の降臨により彼は王の座から堕ち、支配する側からされる側へとその立場を落としていた。

「違うんだノイトラ、僕は唯の従属官になりたいんじゃない。お前の従属官になりたいんだ。」

ふざけたように笑うノイトラの前で、テスラは真剣な眼差しで告げる。

ニヤついた笑みを浮かべていたノイトラからも笑みが消える、テスラの真剣な雰囲気、それが彼が本気であるということをノイトラに伝えていた。

そのノイトラの雰囲気を感じ取ったテスラ、そして彼は理由を話しはじめた。

「僕は・・・・・・　負けたんだ。　小さな破面だった、子供の姿をした破面、しかし一目で強者だとわかる雰囲気を発するその破面

に僕は負けた。善戦した心算だったんだが、懐に入られてからは一瞬だったよ、自分が殴られたのか、それとも蹴られたのかすら判らないほどに・・・ね。」

一人語るテスラ、それを黙って聞くノイトラ。
辺りは静かだった、先程まで命終わる断末魔が響いた場所とは思えないほどに。
テスラの独白は続く。

「確かに彼は強かった、しかしそれ以上に僕が愚かだった。相手が強者だと判って、そして戦う気だと判っていたのに、受ける側に回ってしまった。それで勝てるはずもない、そして解放すらせず挑んでくる相手に合わせるように自分も解放しなかった、始めから全力で攻めなければ結果など見えていた、というのに・・・ね。」

己の負けた記憶、その状況を淡々と離すテスラ。
相手の強さも然ることながら、それ以上に自分の愚かしさを呪う彼、それもそのはずだった。
戦いとはある意味主導権の取り合い、そしてそれは往々にして攻め合いである。
熟達した者、或いは圧倒的強者ならば、相手の攻撃を受ける事で逆に流れを掴む事もできるだろう、しかし未だその領域に至っていない彼等にとって戦いとはやはり攻め合いなのである。
そしてテスラは主導権をとる事ができず、結果敗北したのだった。

「チッ！　何が結果が見えていた、だ！　テメェの負けを分析して何が楽しい！戦場で気を抜いたテメェが負けた、それだけの事だろうが！敵は殺すんだよ！！　姿形も、上も下も関係ねぇ！自分が敵

だと定めた奴は、なにをしてでも殺すんだよ！それが出来ねぇテメェの”甘さ”が不様な負けに繋がったんだ！」

ノイトラが叫ぶ、負けたことを受け入れたように話すテスラに、業を煮やしたのかノイトラが叫ぶ。
評論家を気取って何が楽しいと、敵と定めた者は殺さねばならない、その覚悟がない”甘さ”がお前に負けを呼び込んだのだ、と。
激昂するノイトラ、その怒りはテスラだけでなく自分にも向けられていた、彼の目の前で”最強”へと挑む小さな破面、そしてその破面は一瞬だがそれを凌駕した。
それはノイトラが求める自身の姿、それを他者に体現されるという屈辱、テスラへの叫びは己への鼓舞、殺せ、殺せと、邪魔するものは殺して進めと己を鼓舞する叫びでもあった。

「そうだ、そのあり方こそ僕がお前の従属官になろうと思った理由だ。僕は”甘い”、負けたというのにそれを受け入れられてしまうほどに、ね。でもお前は違う、唯一念に”最強”を目指すお前は違う、他の何も持たず、邪魔する者を屠り、唯強さだけを追い求める姿、僕にないそれをお前は持っている。だから僕は誰よりも近くでそれを見てみたい、お前が”最強”を手にするその瞬間を。」

己の”甘さ”、それを自覚しているテスラ、そしてその”甘さ”とは無縁のノイトラ。
故にテスラは見てみたいと言う、”甘さ”というものを一切持たないノイトラが手にする”最強”というものを。
それを誰よりも間近見るために、自分を従属官にしてくれと頼むテスラだが、ノイトラはやはりそれを否定する。

「うるせぇ野郎だ、”甘さ”なんてもんを持ち合わせてるうちは、天地がひっくり返っても、俺がテメェを従属官にすることは無ぇよ。」

それは事実上、テスラを従属官にすることは無いという事。
自己というものを形成する内在的な要因、そのうちの一つ、良くも悪くもその人物の一部を削り取らない限り願いを叶える事は無い、という宣言。

ノイトラはこれでテスラが諦める、と思っていた。
そう簡単に変る事などできない、それは人でも破面でも同じ事、そもそも”甘さ”などという中途半端を持ち合わせている者を傍に置くなどということはノイトラにとって本当に考えられない事でもあった。

「・・・・・わかった・・・」

顔を伏せ俯くテスラ。
見た目から消沈しているかのように見える彼の姿を見てノイトラは、やはり諦めた、と思う。
それも当然だろう、やはりそう簡単に”甘さ”を斬り捨てるなどという事はできないのだ、と。
しかし、そのノイトラの考えをテスラの”覚悟”は上回っていた。

腰に挿していた刀を抜き放つテスラ。
そして刀を握りなおすと、あろう事かその切っ先を自身へと向け一息にその切っ先で自分の右目を貫いたのだ。

「ッな！　テメェなにしてやがる！？」

そのテスラの行動に思わず驚きの声を上げるノイトラ。
それもその筈だ、消沈したかと思えばいきなり自分の目を貫く。
奇行ともいえるそれを目にした驚き、しかしテスラは自らの目を貫いた刀を退き、冷静に話し始める。

「ッツ！・・・・・・　これが、僕の”覚悟”だ。僕の”甘さ”は、今貫いた右目と共に死んだ、それに・・・隻眼になれば、少しはお前と同じ景色を見られるだろう？」

テスラの覚悟、己の右目を潰してまでも、破面といえど潰れた目に二度と光は戻らない、それをしてでも”甘さ”を捨て従属官になろうとする覚悟、残った左目がまるで炎を宿したかのように熱を持ち、ノイトラを射抜く。
対してノイトラもその左目の炎を確かに感じていた。
目を潰したからといってテスラの持つ”甘さ”が本当に消えたとは思わない、しかし、それをやってのける気概、己の”甘さ”を捨てるための一種の儀式かのようなそれ、それを間近で見たノイトラの内に多少の変化が起きていた。

「チッ！　馬鹿が・・・・・・　付いて来たきゃ勝手にしな、だが俺の邪魔をしたら容赦なく殺す、いいな。」

そう言い放ち、立ち上がるとテスラに背をむけ歩き出すノイトラ。
そしてテスラはその後に続く。

その瞬間、もうテスラに右目の痛みなど無くなっていた。

―――――――――――

漆黒の闇だけがある空間。
虚夜宮の天蓋の下では逆に珍しい暗闇、その中に響く醜悪な音。
鈍く、重く、裂けるように、折れるように、引きずり、捏ね、潰すように響くその音、そしてそれに混じる咀嚼音。
他の何も必要ない、それこそ先程見た紅い霊圧の破面など気にも留めずに、一心不乱に喰らいつく。
そう、暗闇の奥にいる者はたった今食事中なのだ。

「ネェ、今ノデ何体メ？」

「二万四千五百二十八体目だ。」

語り合う声が二つ、しかしその闇の奥にいる影は一つだった。
その影、丈の長いコートのような死覇装、そしてその襟や裾、袖口に布をふんだんに使った飾りを付け手には手袋を嵌めていた。
そしておそらく通常の人体構造から言えば頭があるであろう場所にそれはあった。

言うなれば巨大な試験管、その中には薄紅色の液体が満たされ、其処に二つの拳大の玉が浮かんでいる。
そう、その球こそこの影の頭だった、破面として完全な人型では無い、それはその者が最上大虚で無いという事を示す証であり、しかしそうでありながら浮かぶ二つの球にはそれぞれ『9』の刻印がしっかりと刻み付けられていた。

暗闇で食む者、名を第9十刃（ヌベーノ・エスパーダ）『アーロニーロ・アルルエリ』、十刃の中で唯一の”下級大虚（ギリアン）”階級の破面である。

人としての容を凡そしか持ち合わせていないアーロニーロ。
その最たるは、巨大な試験管に浮かぶ球体の頭部だろう。
浮かぶ二つの球体、それが彼の頭部、その球体それぞれに人格が存在し、一つの身体に二つの人格を持つ。
だが、二重人格者などとは違い、どちらかが表に出ているという訳ではなく、常に二つの人格が表層で存在しあっているのだ。

それは元々そういう容（かたち）として生まれたのか、それともそうならざるを得なかったのか、それは定かではない。
二つの人格、そして薬液のような液体に浮かぶ二つの球体は、それぞれ違った性質を持っていた。
一つは知的で思慮深そうな印象を、もう一つは幼く直情的な印象を見るものに与える。
もし、彼等が一つから二つに分かれたとするならば、それが分断の基準だろう。
二つを分けるのならば”理性”と”本能”、そしてその二つが分かれて存在しているからこそ、彼等は彼等として今も存在しているのだ。

「今ノ虚、面白イ能力ヲ持ッテイタネ。」

「あぁ、メタスタシア、とかいったか。　いや、志波海燕と言った方がいいな。」

「ソウダネ、ヘタナ大虚ヨリヨッポド強イヨ。コノ死神。」

彼等が今し方咀嚼し終えたのは虚だった。
他の破面はどうかわからないが、彼等にとって食事とは虚を喰らう事であり、それは彼等にとって何よりも重要な事であった。
そうして喰らい終えた虚、しかし今回の虚は少し変っていた。
その虚は明らかに違うものに見えた、化物、異形である虚とは違う外見、それはアーロニーロ達破面に近い”人型”をしていたのだ。

その虚を食らった後、アーロニーロの持つ”能力”が伝えた事実、その虚は死神と戦い、自身の持つ能力によって死神の霊体と融合した、という事だった。
そしてその死神の姿を乗っ取った虚は、しかし死神の仲間によって討たれ、虚圏へと戻ったのだった。

「今回は”アタリ”だったな・・・・・・　この戦闘力、なによりこの死神の知識、」

「ソノ全テガ僕ラノ”力”ニナル。」

喰らった虚が偶々持っていた能力、その能力の贄となった死神、そしてその全てを喰らったアーロニーロ。
彼の頭部のひとつが試験管の硝子に接するように近付き、そして試験管から頭部の一部が外へと出る。
尚も外へと出ようとする頭部、しかしその外へと出た部分は最早醜

い球体のそれではなかった。
外と内、試験管の硝子を境界とし、二つの世界でその頭部はまったく違う外見を有し始めていた、それは球体ではなく人間の顔、黒髪は跳ねる様にその人物の快活さを表し、精悍な顔立ちはその人物の在り方を如実に物語っていた。

其処にもう試験管の頭部を持った異形はいなかった。
居るのは唯一人、死神。

「これでオレが、”志波海燕”　だ。」

嗤う死神、おそらく本当の彼が一生することが無かったであろう、醜悪な笑みを浮かべる死神が其処にいた・・・・・・

―――――――――――

「あ～～つまんねぇ。　あそこで止めるかよ普通、つまんねぇったらねぇ。」

床に横になりながらそう呟くのは巨体。
ネロと同等の巨体、人の下顎骨の形をした仮面の名残、濁赤色の眉

とそれと同じ色の仮面紋が目元に挿されていた。
横になりながら手を伸ばし、大皿の上に載った料理を無造作に手で掴むとそのまま口へと放り込む。
巨体ゆえほんの4～5回手を伸ばせば皿の上から料理は無くなり、しかし彼が何を言うでもなく次の料理が運ばれてくる。
彼こそ残る最後の十刃、第１０十刃（ディエス・エスパーダ）ヤミー・リヤルゴであった。

先に彼が呟いたそれは玉座での出来事、ネロとハリベル、そしてフェルナンド、三者の戦いの結末が彼には不満だった。
内容が、理由が、そういったものはヤミーには関係ない。
唯不満、藍染の手によって強制的に終了となってしまった先の戦い、それが彼にとって不満なのだ。
理由は簡単。

”つまらないから”　だ。

ヤミーにとって先の戦いは暇が潰れる絶好の喜劇であり、それ以外の勝ちを彼はその戦いになんら見出しては居なかった。
他人が死のうが生きようが彼にはまったく興味はない、だがやり合うなら派手にやれ、自分が楽しめるほど派手にやれ、それでどちらかが死ねば最高の喜劇だ。
その程度にしか先の戦いを捉えていないヤミー、しかしそれは藍染によって止められ有耶無耶の後にその場は終わった。

気落ちした、というよりはどこか不完全燃焼、不満な気持ちを残したまま自分の宮殿へと戻ったヤミー。
床に無造作に横になると、彼が何も言わずとも彼の前に運ばれる料理。
ヤミーも何も言わず唯それがあるのが当然といった風で、料理に手

を伸ばす。

一見ただだらだらしているようにしか見えないその姿。
しかしこれも彼なりに理由というものがあった、彼にとって今は雌伏の時なのだ。
今は食べ、そして眠り、蓄えなければならない、それが今の彼にとっての戦いである、とも言えた。

一見何もせず、ただ時を浪費しているかのような状態であるそれこそが、ヤミーにとって”力”を得る一番の近道なのだった。

また一つ皿があき、下官が無言でヤミーの前に皿を置く。
しかし、ヤミーはその皿に手を付けず、あろう事かその皿を持ってきた下官を殴り飛ばした。
下官と十刃、最早比べる事すら無意味であるほどその力の差は歴然、結果その下官は頭部、それどころか上半身全てを消し飛ばされ絶命した。

「馬鹿が、俺はこれから寝るんだよ。それくらい分かれクズ。」

理不尽、あまりにも理不尽、しかしそれこそヤミーという破面を表すかのようなその行動。
彼にとって格下の者など、それこそ同属たる破面であろうが関係なく、そして躊躇うことなく殺す対象でしかない。
理由などあってないようなもの、そも理由など必要ないのだ彼に。

体勢を変え、下半身だけになった下官と、その血に浸った料理に背を向け眠るヤミー。
そのヤミーの背で他の下官が、もしかしたら自分だったかもしれな

い下半身と料理を下げる。
彼らの思いは唯一つ。
『どうか今、この”獣（ヤミー）”が目覚めませんように』という一心だけだった。

躊躇
射抜かれるは自身
刺さるは言葉、それとも・・・
黄金の女神
紅との再開

BLEACH El fuego no se apaga. 24（後書き）

難産、というか後半はやっつけ感がつよいかも。
7番8番はすんなり、9番もまぁまぁ、問題は10番だった・・・・・
10番だけ中身なんてあってないような話になってしまった。
それぞれの話の長さは、作者のキャラへの理解度に比例しております。

活動報告にも書きましたが、8番の話は個人的には意外と気に入ってます。

てゆうか最近主人公一切喋ってない・・・・・・
というか話の中に出てはきても現物が一切出てない・・・・・・
次は登場させる予定です。
ハリベルのリアクションに期待されている方も多そうなので頑張ります。
ちゃんと書けるかな～　荒れてたら申し訳ない。

玉座の間、破面の創造主、藍染惣右介の目の前で起こった暴虐の坩堝から数日。

第2十刃、ネロ・マリグノ・クリーメンが幽閉された、という噂と共に虚夜宮には平穏が訪れていた。

それは此処、第3宮（トレス・パラシオ）でも変らず、しかし虚夜宮全体は平穏であれどここに居る者達の内は、決して穏やかではなかった。

「イテテテて・・・　クッソ～、ネロの野郎め～～！」

身体を動かすと奔る痛み、その痛みにそれを自身に与えた者の名を忌々しげに呼ぶのは、肩口程の短い黒髪、左右違う色の瞳を持った女性、『アパッチ・ユニコーニオ』。

「五月蝿いね。　痛いのはみんな一緒なんだよ・・・少しは静かにしなよアパッチ。」

そのアパッチの恨み声に反応し、それを窘めるのは筋肉質な身体つき、ウェーブのかかった黒髪を背の中ほどまでのばした女性、『ミラ・ローズ・アマソナス』だった。
そしてそれに続くように最後の一人が言葉を発する。

「そうですわ。　その耳障りな声は傷に障りますの。」

「テメェ！スンスンふざけんじゃねッ！　イテテ・・・・・」

最後の一人、ミラ・ローズよりも長い黒髪、頭に髪飾りのような仮面の名残を飾り、長い袖で口元を隠しながらアパッチに対し毒舌を発揮するのは『スンスン・サーペント』、そのスンスンの言に噛み付くアパッチだが、痛みによってそれどころではない様だった。

彼女等三人、第３十刃（トレス・エスパーダ）ティア・ハリベルの従属官（フラシオン）は無謀にも第２十刃ネロに挑み、なす総べなく返り討ちにされ、その傷を第３宮の一室で三人並んで寝台に横たわり、癒していた。

繰り広げられるいつものやり取り、アパッチとミラ・ローズの小さな小競り合いにスンスンが毒舌で割って入り大きくなるいざこざ。
しかし、そのいつものやり取りも今日この場に限っては、語弊はあろうがどこか精彩を欠いている印象を受けるものだった。
それは彼女等が傷付き臥せっている、ということも一つの理由としてあろう。
だが、本当の理由、彼女等が常の快活で活発な雰囲気を纏っていない本当の理由は別にあった。

その理由はやはり彼女等の主、ハリベルへと帰結するもの。
彼女等の内にあるのは悔しさ、そしてそれ以上にハリベルに対する

申し訳ない、という気持ちだった。

彼女等の主ハリベルは私闘を好まない。
理由無き争いは獣のそれと同じ、理性を持ち、己の”力”を律する戦士たる者は，無闇な戦いは避けるべきであるとするハリベル。
その彼女の従属官たるアパッチ等もその考えを充分理解し、そうあろうと振舞ってきた。
しかし、玉座の間で今や彼女等の怨敵とすら言えるネロが放った言葉は，彼女達の怒りを瞬時に業火へと変じさせた。

彼女等とて判っていたのだ、私闘の愚かさ、そして相手と自分達の実力の如何ともし難い”差”の存在を。
それでも挑まずには、いや、殺そうとせずにいられなかったのだ、尊敬し敬愛するハリベルを”淫売”と呼んだ憎き者を。

結果として彼女等は当然とも言うべき敗北を喫した。
傷つき、倒れ臥してからの事を彼女等は覚えていない、しかし自分達が目指す戦士としての在り方に反した事だけは判っていた。
アパッチ等三人に後悔はなかった、もしあの場でネロの言葉を甘んじて受け退いていたら、彼女等はその不義から二度とハリベルの目を見ることはできなかっただろう。
しかし戦士としての在り方に反したものまた事実、それはアパッチ等にとって今まで自分達にその在り方を説き、導いてくれたハリベルに対する裏切りですらあった。
故の後悔、申し訳なさが満ちる彼女等の内、だが現実としてこうして生き残り、かといってネロを倒せたわけでもない彼女等、ハリベルの為、彼女の”誇り”を守るための戦いだった、しかし彼女等の前に立ちはだかる問題もまた、ハリベルであった。

「・・・・・ハリベル様・・・　やっぱり怒ってるよな・・・・・

・」

「「・・・・・・・・・・・・・」」

意を決し、今まで三人の誰もが避けていた話題を口にしたのはアパッチだった。
それを聞いたミラ・ローズとスンスンは黙り込む、おそらく二人とてアパッチと同じことを考えていたのだろう。

「怒ってるな・・・　きっと・・・・・・」

「えぇ、教えを守れず、その上生き恥まで曝してしまっては・・・ね・・・・・・」

沈黙の後アパッチに同意するミラ・ローズとスンスン。
己を律する事もできず、かといって相手を討ち取る事もできず、討ち死にすらできなかった彼女等。
結局のところ三人ともハリベルにあわせる顔がないのだ。
そして彼女等にある一抹の不安、”怒り”ならまだいい、だがもし、最初に見るハリベルの顔に映るのが”怒り”ではなく”落胆”だったら。
それはアパッチ等三人にとって恐怖でしかない、主の為、ハリベルのために生きると決めた彼女等にとってそれは恐怖なのだ。

「「「　ハァ～～～～～～　」」」

奇しくも三人が同時に溜息をつく。

だが、邂逅は避けられず、その時は刻々と迫っていた。

―――――――――

「・・・・・・・・・・・・・・・フゥ・・・・・・」

響くのは靴音と溜息のみ。
一定の間隔で続くそれは、既に大分長い時間続いていた。
ハリベルは自分の宮殿の廊下を、正確にはアパッチ等彼女の従属官が休んでいる部屋の近くの廊下を、何度も行ったり来たりしていた。
それは躊躇いの感情、ただ彼女達に、自分の従属官である彼女達に会う、ただそれだけの事が躊躇われる。
理由などハリベルにも判っているのだ、それは自分の愚かさが生んだ罪であると。

彼女は自分の中の矜持、戦士としての在り方と誇りに囚われるあまり、自らの従属官を見殺しにしてしまうところだった。
だがそれはフェルナンドという替え難き存在により回避する事ができた、しかしそれはただ彼女等の命が助かったということであり、ハリベル自身が彼女等を見殺しにしてしまったかも知れないという事に変りはなかった。

そしてフェルナンドが危機に曝された時、自分の”本当の願い”というものを思い出したハリベル。
その願いを、『仲間』というものを再確認した彼女であったが、それ故に躊躇いが生まれていた。
なんとしても、何を措いても”守る”という決意は、確かにハリベルの内に何よりも深く刻まれたろう、しかし深く刻まれたが故にその対象たるアパッチ、ミラ・ローズ、スンスンの三人に今顔を合わせ、なんと言えばいいのか、彼女には判らなくなっていた。

戦士としての在り方、ハリベルはそれに固執した、しかし彼女はその在り方自身は今でも間違ってはいないと思っている。
間違ったのは自分自身、そう在ろう、そう在らねばならないと無意識に思い込み、自身をその枠に押し込めていた自分自身なのだと。
そして彼女が積み上げて来た戦士としての在り方や、それを誇りに思う事は間違いではないと。

だが、彼女の従属官である三人がそれに反したからといって、ハリベルに彼女達を責める権利はない。
そもそも彼女達に非はないのだ、在り方を強要してしまった自分、それに従ったまでの彼女達を責める権利など無いとハリベルは考えていた。
ならば気さくに、ただ「加減はどうだ?」と聴けばいい、切欠などその程度で充分なのだろう。
しかし今のハリベルにそれは出来なかった。

《何故?　何故助けてくれなかったのですか・・・・・・》

そんな台詞が彼女には聞こえた気がした。
それは幻聴であろう、しかしハリベルにとってそれは現実あり得る事であり、ハリベルの内より木霊するそれを彼女の従属官達は言う権利を持っているのだ。
それは恐怖、戦いの中で感じるそれとは別の恐怖。
『仲間』故に、大切な存在であるが故にもしそれを言われたら、という恐怖は計り知れない。
大切だ、と再度自覚したからこそその言葉はハリベルを抉るだろう、故の躊躇い、何度も何度も廊下を足早に行き来するハリベル、自分はこんなにも臆病だったのかと自覚するほどの躊躇いが其処にあった。
戦場ではなく、ただあの三人に拒絶される事がこれほど怖ろしい事か、と。

しかし何時までもこうしていたとて事態は好転するはずもない。

「・・・・・・・・・・　ヨシッ・・・・・・」

小さく呟くハリベル、その呟きは己への鼓舞だった。
彼女等は自分を許さないかもしれない、なじられ、罵倒され、拒絶されてしまうかもしれない。
それでも構わない、それでも自分が謝らねばならない、と。
ただ一言「すまない」と、自分のせいで傷つけてしまった彼女等に謝らねばならないと。
そうしなければ、きっと自分は一生彼女等に真正面から向き合う事ができないのだから、と。

意を決し踏み出すハリベル。
邂逅は直ぐ其処まで迫っていた。

―――――――――――

コンコンと扉を叩く音がする。

「は～い、開いてるよ。」

その音に反応し、ミラ・ローズが入室を許可する。
三人しかいない部屋、他の二人、アパッチとスンスンもさしてそれを咎める事はない。
第３宮、十刃の宮殿であるこの場所に客など来る筈もなく、ミラ・ローズはおおかた下官かなにかだろうと思い気軽に許可を出した。
当然の行為であるそれ、なんら不自然でもないその行為、しかし彼女は失念していた、此処が誰の宮殿であるか、唯一人、下官ではなくこの部屋を訪れる可能性がある人物がいた、ということを。

扉を叩く音がしてから数瞬、やや入室の許可が下りて後間を空けてゆっくりと扉が開く。
そしてその扉から入って来たのは、焦げ茶色の服を着た下官ではなく、白い死覇装を着た人物、スラリと伸びた手足、褐色の肌が死覇装に栄え、金色の髪は艶やかにその人物の頬を撫でていた。

「あっ・・・・・・・・・」

三人のうち誰ともなしにそんな呟きが零れる。
それは何時か来る邂逅ではあった、それが今訪れたに過ぎない事、
彼女達の前に現れたのは下官ではなかった。
彼女達の主、敬愛する主、ティア・ハリベルが彼女達の前に立っていた。

そして訪れるのは沈黙、二、三歩入った入り口辺りに立つハリベルと、それぞれ寝台の上で上半身を起し硬直している三人。
普段ならば彼女等にこんな沈黙が訪れる事はない、ただ今だけは、この微妙なシコリを抱える今だけは、違っていた。
沈黙が部屋に満ちる、四人それぞれに何とかきっかけを作ろうとしてはいるようだがうまくいかず、声を発そうとしては躊躇い、止めてしまう、といったことを繰り返していた。

それがどれほど続いただろうか、一瞬だったかもしれないし、長い時間だったかもしれない、だが、いい加減このままではマズイと全員が思った頃、意を決しまるで頃合を見計らったかのように全員が同時に声を上げた。

「「「「ハリベル様!」」」」　「お前達・・・」

「「「「申し訳ありませんでした!」」」」　「すまなかった・・・・・」

全員が同時に声を上げ、そして頭を下げていた。
謝罪、何を措いてもまずは、と全員がそれを口にする。
互いを大切に思うからこそ、相手に対する裏切りとすら取れる行為をしてしまった事への謝罪を、言い訳も何もなくただ申し訳ないという気持ちを伝えなければならないと。

「「「・・・・・・え？」」」

頭を下げる四人のうち、先にその異変に気がついたのはアパッチ等三人の方だった。
確かに彼女達に聞こえたのは”怒り”による叱責ではなく、「すまなかった」、という謝罪の言葉だった。
恐る恐る頭を上げる三人、そして目に飛び込んできたのは自分達の主が、よりにもよって部下である自分達に深々と頭を下げる姿だった。

「え？　ちょっ、えぇ！？」

「御止めくださいハリベル様！　何故私達（わたくし）などに頭を下げられるのですか！」

「そうです！　止めてください！」

混乱するアパッチ、そして寝台から身を乗り出さんほどの勢いでハリベルに止めてくれと懇願するスンスンとミラ・ローズ。
それもそのはずだ、彼女等が覚悟していたのは叱責であり、まさか自分達の主から謝罪されるなどということは、露程も考えてはいなかったのだ。

頭を下げるのをやめてくれという二人と混乱状態の一人、しかしハリベルはその頭を下げたまま言う。

「いや、愚かだったのは私だ。　お前達は何一つ悪くない、”守る”と誓いながら戦士としての在り方に固執するあまりそれを忘れ、お前たちの危機を救う事もできず傷つけさせてしまった・・・・・・どうか、許して欲しい・・・・・・」

ハリベルの口から語られるのは彼女等が思っていたのとは真逆の言葉だった。

悪いのは全て自分だ、と語るハリベル、しかし彼女等にとってそれは違うのだ、悪いのはハリベルではなく自分達、真に頭を下げ許しを請うべきは自分達なのだ、と。

「違いますわ！　悪いのは私達（わたくし）の方です。誇り高きハリベル様の従属官たる私達が、私闘にはしった事こそ責められるべきですわ！」

「スンスンの言うとおりです！　ハリベル様は何も悪くない！アタシ達が馬鹿だったんです！　申し訳ありませんでした！」

スンスンとミラ・ローズは叫び、再び頭を下げる。

ハリベルは何も悪くないと、悪いのは自分達だと叫び頭を下げる。

悪いのは、責められるべきは自分達だ、だから顔を上げてくれと願うかのように頭を下げる二人、そしてその二人に続くように、いや、二人以上に悲痛な叫びがそこに木霊した。

「やめてくれよ・・・・・・　なぁ・・・やめてくれよハリベル様！　何で謝るんだよ！　悪いのはあたし達だろ!?なのになんで謝

るんだよ！　それなのになんで、なんで・・・・・・・　なんでそんな風に震えてるんだよ！あたし達が好きなのは！　誰にも負けない”強い”ハリベル様なのに！なんで！」

混乱の中、アパッチが見たのは頭を下げ、その肩を小刻みに震えさせているハリベルの姿だった。
アパッチにはそれがどこか幻にすら見えた、ありえないと、自分の知っているハリベルは、理想像たるハリベルがこんな姿を自分達に見せる筈は無いと。
アパッチの言葉にスンスンとミラ・ローズも再び顔を上げる。
そして眼にするのはアパッチの言葉通りのハリベルの姿、それは二人、いや、三人にとってとても衝撃的な光景であった。

「私は・・・・・・　お前達を傷つけさせてしまったことが、そしてそれを許してしまいそうだった自分が許せない。故にもう二度とあんな事はさせはしない。・・・だが同時に私は怖いんだ・・・・・・　お前達を失う事が、そして今、お前達に拒絶されるかもしれないと思うと、私は怖くてたまらない。」

独白、己の内にある弱さ、本来誰にも見せるべきではないその弱さ、しかしそれを見せられる相手を前にハリベルはそれを語る。
自分が怖れる事は何か、決意と、そして再認した尊さゆえの恐怖に苛まれるハリベル。

「そんな事ある訳ない！　あたし達がハリベル様を拒絶する何である訳ない！あたし達はハリベル様が来るなといっても何処までだって着いていく！」

「そうです！　そんな事、怖がる必要なんてこれっぽっちもないです！アタシ達はハリベル様の従属官なんですから！」

アパッチとミラ・ローズが矢継ぎ早にハリベルの言葉を否定する。
ありえないと、自分達がハリベルを拒絶するなどということはありえないと、それは誇りなのだ、彼女等にとっての。
ハリベルの従属官、その地位にいることが彼女等の誇りなのではなく、彼女の傍で彼女を支える事が、共に道を歩む事が彼女等の誇りなのだ。

「ハリベル様、顔を上げていただけますか？」

スンスンが静かにハリベルにそう頼む。
ハリベルもその言葉に漸く下げていた頭を上げ、三人と目を合わせる。

「私達（わたくし）は常にハリベル様のお傍にいますわ。そして今回と同じ事があればまた同じように行動するでしょう。」

「それは・・・・・・」

静かに語るスンスン、常の毒気も無く、しかし口元を隠す癖はそのままにハリベルを真っ直ぐ見据えて語る。

「それが私達の”誇り”だからです。　ハリベル様に教えて頂いたもの、そして自らが考え実践していく上で生まれた”誇り”ですわ。それによってまたこうして傷つく事もあるでしょう、でもそれをハ

リベル様が気に病む必要はありませんわ。ハリベル様はただ一言『付いて来い』と言って下さればいいのです、そうすれば私達は何処までも、そして何時までもお傍にいますわ。」

スンスンの言う彼女達の”誇り”、それはハリベルのために生きるという誇り、彼女に害をなし貶めようとする者のこと如くを排する事、そして常に彼女の傍で彼女を守り通す事、それこそが従属官たる三人の”誇り”なのだ。
そして自分達の傷を気に病む事は無いと、ハリベルにはただ一言、その一言をくれれば自分達は何処までも共にいけると。
必要とされている、という感覚、それだけがあれば自分達は貴方のために生きられると。
そんな自分達が貴方を拒絶するはずが無い、とスンスンはハリベルに伝えたのだった。

そのスンスンの言葉に力強く頷くアパッチとミラ・ローズ。
それを見たハリベルは思う、やはり自分は愚かで、しかしそれ以上に幸せなのだろうか、と。
最早多くを語る必要など無く、それでもただ一言、このすばらしき従属官達に言葉を送ろうとハリベルは口を開く。

「お前達・・・・・・　本当に・・・ありがとう。」

そう言って再び頭を下げるハリベル、しかしそれは謝罪ではなく感謝の礼だった。
それを見たアパッチが悪戯な笑みを浮かべる。

「だ・か・ら、頭下げないでくださいよ、ね？ハリベル様。」

その声に顔を上げるハリベルだが、目に映るのは歯を見せニカッと笑うアパッチ、そしてミラ・ローズとスンスンの二人もまた笑顔だった。
それを見たハリベルもまた「フッ」と小さく笑う。

「これは一本とられた・・・か。」

そう零したハリベルの言葉で部屋の空気からしこりは取れ、常の彼女達の雰囲気へと戻りつつあった。
互いの想いというものを再認した彼女等、その結束は今後更に強固となるだろう。
だが今は、ただこの掛替えの無い時間を過ごす事だけが、彼女達にとって何より重要であった。

「よう、しぶとく生き残ったじゃねぇか、三バカ。」

その四人に、正確には寝台へ横たわる三人へと声がかかる。
四人がそちらに視線を送る、そして入口に立ち、三人へと声を掛けた男性の姿をその目に納めた。

ハリベルと同じ金色の髪、短めで後ろに跳ね上がるように、そして少し長めの後ろ髪は紐でぞんざいに縛られ一纏めにされている。
白い死覇装は袴はハリベルらと同じ様式で、しかし靴は履いておらず裸足、上着は袖が七分丈、正面はファスナーになっており、それを腹の中ほどまで下げ胸の中心に開いた孔が見えていた。
背の高さは大体１６０～１７０ｃｍ程度か、男性にしては小柄であるがその身体つきは華奢ではなく、しなやかで強靭そうな筋肉に適度に覆われていた。
そして何より目を引くのはその瞳、紅い、紅い瞳が四人を射抜くかのように鋭く彼女等を見据えていた。

「あ、アンタ・・・　もしかしてフェルナンドかい？」

その青年にいち早く話しかけたのはミラ・ローズだった。
青年にフェルナンドか？と問う彼女、まさに半信半疑だった、自分の知るフェルナンドはどう考えてもあそこまで大きくなく、もっと華奢な子供の姿なのだ。
では何故ミラ・ローズが青年をフェルナンドだと思ったのか、それは青年が言った『三バカ』という台詞によるもの、常フェルナンドはハリベルの従属官である三人を一纏めに呼ぶときは『三バカ』と呼んでいたのだ。
何度彼女等が拳を交えた”注意”を行おうともそれが改善されたためしは無く、結果、そう呼ばれる事が定着してしまった呼び名。
そしてそれを呼ぶのは唯一人、フェルナンド・アルディエンデいがいありえなかった。

「へぇ～、よく判ったじゃねぇかよ。で、どうだ？　クソデブにこっ酷くやられた感想は。」

自身の変化をいち早く見抜いたミラ・ローズに感心しながらもフェルナンドは彼女等三人に近付いていった。
スッ、とハリベルの横をすり抜けて、だ。

「おいコラ、フェルナンド！　デカくなったからって調子に乗ってんじゃないよ！いい加減『三バカ』って呼ぶの止めろ！」

近付いてくるフェルナンドに向かっていち早く食って掛かったアパッチ。
いい加減その呼称は止めろと怒鳴るがフェルナンドは何処吹く風だった。

「そうですわ、フェルナンドさん。おバカなのはこの二人だけです、一括りにされては私（わたくし）心外ですわ。」

「「テメェ、スンスン！喧嘩売ってんのか！」」

アパッチの言葉に同意するように話すスンスン。
しかし内容はまったく違う、バカなのは自分以外の二人だけで自分は違う、一緒にされては迷惑だといわんばかりに言う彼女。
どうやらもうその毒は復活し、常のように二人へと振り撒かれている様だった。

そうしてギャァギャァと騒ぐ面々をハリベルは一歩下がった位置から見ていた。

目の前に広がるこの光景、喧騒、静謐とは無縁とも思える光景ではある、しかしこれが自分が望んだ光景でもあると、ハリベルは思っていた。

（守ろう・・・・・　私はこの光景を、何時までも・・・この命が続く限り。）

決意とは覚悟、そしてそれは自分との契約、誓いである。
誓いも新たにハリベルは、己の理想を求める事を決意した。

しかしそのハリベルにも一抹の不安は残る。
それはフェルナンドの事、彼女は彼を落胆させてしまったのだ、あの玉座の間で。

《今のお前は、俺が殺す価値もねェよ》

フェルナンドがハリベルに言い放ったその言葉、それがハリベルに未だ不安を残す。
愚かだった自分、それを認め乗り越えた今の自分、果たして今の自分は値するだろうか、再び彼の前に、フェルナンドの前に立つ者として値するだろうか、と。
喧騒、たった四人の喧騒を見つめるハリベル。
その守るべき風景の中に今や確かに居る一人の青年、その青年にとって今の自分はどう映るのかと、ハリベルはそれだけが気がかりだった。

「ハッ！　あいも変わらずうるせぇヤツラだ。・・・・・で？

憂いは晴れたかよ、ハリベル？」

喧騒の中、フェルナンドが不意にハリベルのほうへと振り返る。
振り返った肩越しに見える彼の表情、どこか人をくった様な薄い笑みを浮かべ、力強く、しかしどこか澄んだ紅い瞳でハリベルを見る。
『憂いは晴れたか』、その言葉に込められたフェルナンドの思い、それにハリベルはなんと答えようかと暫し悩む。

言いたい事は多くあった、傷の加減はいいのか、どうしてあんな無茶をしたのか、だがその言葉のどれもがどこか違う気がハリベルにはしていた。
だから、ただ純粋に、再びの邂逅で自然に浮かんだその言葉をハリベルは口にした。

「あぁ、晴れたよ。　・・・よく戻った、フェルナンド。」

着飾った言葉ではない、気の利いた台詞という訳でもない。
だが、それが今、ハリベルが最も伝えたい一言だった。
無事に戻った『仲間』に対し、ただ一言伝えたかった言葉はそれだけだったのだ。

そんなハリベルの様子を見たフェルナンドは、一瞬だが口角を上げ笑みを深くしていた。

「そうかい、晴れたかい。　ならいいさ、それでこそハリベル、ってもんだ。」

そしてフェルナンドが発したその言葉、それだけでいい、それだけでハリベルには充分伝わっていた。
故にそれ以上をハリベルは語らない、後は来るべきその日のためにただ研鑽を積むのみなのだから。

一度は脅かされた日常、紆余曲折の後、それは再びこの場所に戻る事ができたのであった・・・・・・

「そういえばフェルナンド・・・・・・」

再開より程なくして、なにか思い出したかのようにハリベルはフェルナンドに話しかける。

「あぁ？　なんだよ。」

その言葉に身体ごと振り返り、ハリベルへと向き直るフェルナンド。
ハリベルはフェルナンドの正面まで近付くと、その手をフェルナンドの頭の上に載せ、ポンポンと二回ほど軽く叩く。
そしてなにかを確認したように「ふむ」と小さく呟くと、どうにもズレた事を口走った。

「お前・・・・・・・・・　少し背が伸びたか？」

「「「・・・・・・・・・・・・・・・え～～・・・・・・・・・」」」

なんとも言えない微妙な空気がその場を支配する。
アパッチ等三人ですら気が付いたフェルナンドの見紛うばかりの成長。
フェルナンドからすれば念願の著しく成長した、本来あるべき姿に戻った今の身体。
それがハリベルにしてみれば、ただほんの少し背が伸びた程度になってしまっていた。
戦士として完璧であるハリベル、しかし一歩底から離れると途端になにかがズレてしまう様だった。

「ほぅ・・・・・そうか、そうか、そうか・・・やっぱりその辺はアンタらしいよハリベル・・・・・どうにもアンタは、俺の、神経を、逆撫でするのが、うまいらしい・・・・・上等だ！　今すぐ此処でぶっ殺してやる！！」

ポンポンと頭を叩かれた体勢のまま俯いていたフェルナンド、その怒りが一気に膨れ上がる。
それを察知したアパッチ等三人は痛む身体をおして、フェルナンドの身体にしがみ付く様にしてそれを押さえ込んだ。

「落ち着けフェルナンド！」

「そうだ！ハリベル様のアレは、今にはじまった事じゃねぇだろが！」

「そうですわ！　落ち着いてくださいまし！」

必死に止める三人、それを何とか振り切ろうと「放せ～！！」と叫びながらもがくフェルナンド。
そんなフェルナンドの様子をハリベルはまるで理解できず、小首を傾げるようにしていた。

「一体何を怒っているんだ？　お前は。」

心底わからない、といった風で呟くハリベルを他所に、フェルナンドの叫びは虚夜宮へと響き渡るのだった。

値踏み

興味

好奇心

代償の支払

雷光は今、輝く

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．２５（後書き）

連休というのは偉大だ。
何せこの短期間で本編が更新できるのだからｗ

今回は三人娘とハリベルの関係。
そして最近本人の出番がほぼ皆無だった主人公の登場でした。
ハリベルに関して言えば、ちょっと精神的に揺らぎが大きいかな？
とは思いましたが
感情表現が乏しいだけで、ちゃんと感情がある、というのを表現したかったためこんな風になっちゃいました。

そして今回は二段オチとなっています。
一段目でキレイな感じで、終わりか？と見せかけて
二段目でちょいぶっ飛んで、天然降臨って感じですｗ
別々ではなく一段目の後に二段目が来た、という流れであります。

ハリベルさんのリアクション楽しみにしてくださっていた方々、こんなんでどうでしょう？
ご満足いただけたでしょうか？

それと、活動報告には書きましたが、Ａｒｃａｄｉａ様の方でそろそろ１０万ＰＶが見えてきました。
それに伴い次は感謝の番外を、と考えています。
前回の番外（Ｄの暴走ｗ）とは大分違ったものを予定していますので、お楽しみに。

BLEACH El fuego no se apaga. extra2（前

番外編となります。
誰がメインかは直ぐわかると思いますが、お楽しみください。

■は狼

果てなき砂漠で唯独り、孤独を食んで彷徨い歩く

■に近寄る者あらず

近寄る者は皆全て、■のせいで死に絶える

■は狼、砂漠に独り

誰か■に笑っておくれ・・・・・・

■は一体誰だろう？
あまりに長い時を生きたせいか、最早自分の名前すら思い出せない。
知っているのは極僅か、此処が何処かという事と、自分が”独り”だということだけ。
一体何時から自分は”独り”だったのか、それを考え、思い返すのが馬鹿らしくなるほどそうだった事だけは解っていた。
誰も■に近寄っては来ないんだ。
だってそうだろう？

誰も、自分から死にたがる奴なんて居ないんだから。

皆、死んでいくんだ、■の近くに来ると皆。
理由なんて解り切ってる、■のせいだ。
この強すぎる霊圧、全てはコレのせい、コレがあるから皆、死んでいく、皆、皆、死んでいく・・・・・・
何で■だけ、何で■だけがこんなめに合うんだろう？
別に強い事に拘りは無かったんだ、ただいつの間にか、それこそ他者を寄せ付けないほど■は強くなっていた。
理由なんてものは解らないし、今となっては知りたくも無い。
ただ目の前にある現実は非情で、■に近付く奴らは皆、■の霊圧に耐えられなくなり、魂が削れて死んでいくだけだった。

弱い奴が羨ましかった。
個々に強大な力を持たず、害される恐怖に怯えて生きる奴等、だけどそれ故に、弱い故に群れていられる。
自分以外の誰かと共に居る事が出来る、そう、奴らは皆、”独り”じゃないんだ・・・・・・

羨ましかった、何よりも、■の強さと引き換えに、その弱さを欲してしまうほどに。
贅沢だ、傲慢だと罵る奴も居るかもしれない、でも■は心底そう思っているんだ。

持つ者と持たざる者、力ある物と無い者、持たざる者が持つ物を、力ある者を羨むのと同じくらい■は持たざる者を羨んでいるんだ・・・・・

だけどそれは叶わない、今更手に入れてしまったものを放り出す事は叶わない。

結局■はどうしようもなく、何も出来ず、この砂漠を彷徨い”孤独”の中に居るしかないんだ・・・・・・

嗚呼、■は一体何のために生まれてきたのか。

誰ともまみえず、ただただ果てしない白い砂漠を彷徨うためだけに生まれて来たのか。

ただただ、こうして”孤独”の中で生きていく為に生まれて来たのか、もしそうならそれのなんと残酷な事だろうか。

そんな■に、最近解った事がある。

”孤独”とは”死”だ。

”孤独”とは、”独り”とは誰にも知られていないという事に等しい。

誰からも認知されず、誰からも認識されずただ存在する存在。

誰の記憶に残る事もなく、ただ生命という活動を続ける存在は本当に”生きている”といえるだろうか？

その命ある霞のような存在は、そもそも生命体であるといえるのだろうか？

■にはそうは思えない。
そして何より”孤独”は押し潰すんだ、少しずつ、じわじわと、■の精神を押し潰すんだ。
求めるものは遠ざかり、また、求められる事もなく、それは自分という存在の価値の否定でしかないだろう。
そんなものに耐えられる筈がないんだ、無価値な存在を許してくれるほど、どんな世界も優しく出来てはいないのだから。
今までそれに耐えてきた、”孤独の重さ”に■は耐えてきた、だからといってこの先もずっとそれに耐えていられるのか?出来るかもしれないし出来ないかもしれない、それが訪れるのは百年先か千年先か、それとも明日か、もしかしたら数分後かもしれない。

それは恐怖だ、耐えられない”孤独”など恐怖以外の何者でもないだろう。
その恐怖を前に■に一体何が出来る?　何も出来やしない、ただそれに押し潰されて死ぬだけだ・・・・・

また途方もない時間が過ぎた気がする。
でもそれは気のせいで、本当はまだほんの少ししか時間は過ぎていないのかもしれない。
まぁ結局のところ同じだろう、時間なんてもう意味がない、終わりが近付いているんだ。
■には解る、もう直ぐ自分は”孤独”に耐え切れなくなるだろう、ということが。
誰よりも、それこそ生きる命というもののなかで誰よりも長く、”孤独”と付き合い続けた自分だからこそ解るその時。

それを前に自分が何をすべきか考えてみた、だけどそんなもの考えつきはしない。
することなんか何もないんだ、ただ受け入れてやればいい、それでこの長い”孤独”ともさよならなんだから。
だがもし、もしも悔やまれる事があるとすれば、一度でいい、一度でいいから

誰かと手をつないでみたかった・・・・・な。

もう駄目だ!耐えられない・・・・・・
”独り”は嫌だ!”孤独”は嫌だ!もう”独りぼっち”は嫌なんだ!
何で■ばっかりがこんな目に合う?どうして?どうしてなんだ!
一緒に居たいだけなんだ、ただ誰かと、自分じゃない誰かとただ一緒に居たいだけなんだ。
それは、そう思う事はいけない事なのか?ただ誰かと一緒にいたいと願う事が、そんなにいけない事なのか?
もう充分だろう!■は充分”孤独”の中にいただろう?もう嫌なんだ!嫌なんだよ!
誰か・・・・・・誰でもいい・・・・・・■を此処から救ってくれ。

■の傍で、■だけに笑顔を見せてくれよ・・・・・・

それが誰にも届かない事なんて解っていた。
だけどもう誰かに縋るしかなかった、でも現実って奴はやっぱり何

処までの非情で、そもそも誰も■に近づけないんだから助けなんてありはしないんだ。
だったらもう、この耐えられない”孤独”から抜け出すには自分が、■自身がどうにかするしかない。
恐怖を前に、ただ受け入れるだけだと思っていたものに抗ってやるんだ。
そして”独り”じゃなくなるんだ。

仮面に手をかける。
顔を覆う仮面に両手をかけ、力を込める。
どうすればいいかなんて解らなかった、ただそうすればなにかが起こるという確信だけがあった。
それをした後、■がどうなるかなんて解らない。
それでも、たとえ■という存在が死んだとしても、”孤独”じゃなくなるなら、”独り”じゃなくなるなら、そっちの方がよっぽどマシだろう。
仮面が軋み、罅割れる、それでも力を込める事をやめることはない。

おそらくコレを剥いだ時、自分が消えるであろう直感が奔る。
それは本能の警告なのか、自分という存在の消滅に対する警告が直感として脳裏を奔り抜ける。
それでも止めない。
数瞬の後には仮面は剥れ、■という存在は消えるだろう。
でも、それでも、なにかが残る気がする。
そしてそれはきっと”孤独”ではないと■は思う。

高い音が響く、それが自分の仮面が剥れ、砕けた音だと認識するかしないかで、■の意識は白に染まった。
消えていく意識、その中でただ思う事がひとつ、理由は解らないがただ浮かんだのはたった一言。

『おめでとう』　という言葉だけだった。

―――――――――――

『俺』が目覚めて最初に見たのは、薄い黄緑色の髪をした小さな子供だった。
そして一目見て直感した、コイツは俺だ、と。
片割れであり、俺自身であり、そしてもう一人、という俺以外の存在であると。

「・・・・・・名前はあるか？」

「・・・リリネット。　・・・・・・あんたこそ名前なんかあるの？あたしだったくせに。」

「・・・・・・スターク、だ。」

リリネット・・・か、いい名前じゃないかと内心で褒める。
そして俺も自分の名前を答えた、ただそれだけのやり取りが俺の内

に響く。
俺にとってそれは独りじゃないんだと、俺じゃない誰かが傍にいるということを確信できた瞬間だったから。

『あたし』を呼ぶ声がする。
顔を上げるとそこには黒髪のデカい男が座っていた。
見て直ぐ解った、この男があたしの半身だって事が、もう一人のあたし以外のあたしだっていう事が。
名前を聞きながら、こっちに大きなボロボロの布切れを放り投げる男、名前はスタークっていうらしい。
その布切れを羽織ながらあたしはスタークに訊いた。

「・・・スターク、　・・・・・これから何するの・・・？」

そんなあたしの疑問にスタークはただ一言、「何だってできるさ・・・」と答えた。
だからあたしは更に訊いた。

「じゃぁ、どこへ行くの・・・？」

スタークはさっきと同じ、ちょっとぶっきらぼうな態度で「どこへでも」と答える。
そっけない態度、だけど不思議と嫌な感じはしなかった。

それはスタークがあたしだからなのか、それとも別の理由なのかよくわからなかったけど、今はそれでいい気がする。

「一緒に行こうぜ・・・・・・どこまでも・・・・・・」

スタークの言葉に、一緒という言葉にあたしは自然と笑っていた。
一緒、初めて誰かに言ってもらえたその言葉が、あたしには嬉しくてたまらなかった。
立ち上がるスタークに続くようにあたしも歩み寄る。

そうしてスタークの横に立って、スタークの手を握った。
スタークは一瞬驚いた顔をしたけど、ちゃんと手を握り返してくれた。

その握った手から、あたしは初めて自分以外のぬくもりを感じたんだ・・・・・・

俺（あたし）は狼

果てなき砂漠をふらふらと、往くあてもなく彷徨い歩く

俺（あたし）に近寄る者あらず

近寄る者は皆全て、俺（あたし）のせいで死に絶える

俺（あたし）は狼、砂漠を歩く

だけど俺（あたし）は”独り”じゃないんだ・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. extra2（終）

Ａｒｃａｄｉａ様での掲載で、『もう直ぐ１０万ＰＶ越えるよ記念』
という
なんとも微妙なタイミングでの更新をコチラでもｗ
だってしょうがないじゃない、思いのほか速く書けちゃったんだか
らさｗ

さて、今回の番外編。
記念も然る事ながら半分は作者がもう我慢の限界だった、という部
分も御座います。
孤独な二人をはやく書きたい、でも登場はまだ・・・・・どうした
たものか
という時にこの番外を思いつきました。

語られている部分も少なく、半分以上は捏造でありますが
自分なりにこんな感じではないか、と想像しながら書いてみました。
愉しんで頂ける内容になっているでしょうか？

■の表記は迷いましたが、二人になる前の性別がわからなかったの
でどちらとも取れるよう
このような表現になりました。

リリネットの最後の台詞はお気に入りですｗ

感想をお待ちしております。

２０１０．１１．２３

フェルナンド・アルディエンデの日常は自由だ。
その日の気分によって、その行動は大きく変ってしまう事もしばしばあるほど彼は何にも縛られない。
生活の基盤、というか衣食住の全ては彼が現在やっかいになっている第3十刃、ティア・ハリベルの下で充分事足りている。
フェルナンドの方もただやっかいになっているのも癪だ、と彼女の従属官の戦闘訓練などの相手をすることも少なくない。
だが、そうして彼が自分で決めた事以外、彼は何一つ縛られる事はなかった。

日がな一日屋上で寝転がり、天蓋に映る偽物の空を眺めてみたり。
フラッといなくなったかと思えば二、三日後に何事もなかったかのように戻ってみたり。
それをハリベルがいくら問い詰めようと、ヒラリヒラリと追及を避わし煙に巻き、まるで掴み所のない雲のように彼女をあしらってしまうのだ。

そして今日も、フェルナンドは思い立ったように第3宮を後にし、虚夜宮の天蓋の下に広がる砂漠を何処を目指すでもなく歩いていた。別に目的があった訳ではないのだろう、あえて理由を問われれば、「なんとなく」と答えるしかないようなそんな思い付きの散歩のようなものだった。

だがしかし、その何となくの行動が、フェルナンドの下に些細な厄介事を呼び込んだ。

「・・・・・で？　アンタ達いつまで俺の後を付いて来る心算だ？いい加減鬱陶しいんだが・・・な・・・・・」

フェルナンドが軽く頭を掻きながらそんな呟きを零す。

フェルナンドが今立っているのは何処とも知れぬ白い砂漠、打ち捨てられたような太い柱や瓦礫が、そこかしこに散在する場所だった。

おおよそフェルナンドだけしかいないその場所、しかしそのフェルナンドの呟きから少し間を置いてそれらは現れた。

柱の影、瓦礫の影から現れたのは、フェルナンドと同じ白い服を着た破面たちだった。

そのどれもが成長したフェルナンドの身体と比べてもより大きく、屈強な身体つきをした破面達、それらがフェルナンドを囲み、まるで逃がさぬよう包囲するかのように佇んでいた。

「フェルナンド・アルディエンデだな？」

「ハッ！　ようやく・・・かよ。それにしてもぞろぞろと・・・一体俺に何のようだ？」

その内の一体、長い金髪で顔の殆どを仮面で覆い隠した破面がフェルナンドの名を呼び、本人かどうかを確認するように話しかける。
それを鼻で笑いながら、顕われた見知らぬ破面達を、ぐるりと見回すフェルナンド。
その全てが険しい表情をし、明らかに自分に対して敵意を抱いているという事をフェルナンドが理解するのに、それほど時は必要としなかった。

（ったく、殺気滲ませてまぁ・・・しっかし何なんだ？コイツ等・・・・・　こんだけ大勢に恨まれるような事した覚えは・・・・・・そういえばある・・・な、まぁお礼参り、ってのが妥当な線か・・・・・）

内心、何故自分が殺気を向けられているのか見当が付かなかったフェルナンド。
なにか自分が恨みを買うようなことをしたかと考えてみれば、あっさりとその答えは出た。
『数字持ち狩り（ヌメロス）』、ハリベルの指示と自身の研鑽の為に行ったそれ、それによりかなりの人数を倒したフェルナンドである、恨みを一つも買っていない、という方がふざけた話ではあった。
それに思い至り、改めて自身を囲む破面の顔を見るフェルナンド、しかしそこで彼は違和感を覚えた。

（・・・・・違う・・・な。　あの時戦った奴等じゃねぇ・・・・・・なら本当にコイツ等何者だ・・・？）

そう、フェルナンドを囲む面々は、彼が打ち倒してた数字持ちでは

なかった。
ならば一体彼等は何者なのか、フェルナンドの内にかすかな疑問が残る。
そんなフェルナンドを他所に一人の破面が声を上げる、しかしそれはフェルナンドの疑問に対する答えでは当然なく、開戦の合図だった。

「その”力”、試させてもらう。」

その長髪の破面の言葉と共に、フェルナンドを囲むうちの一体がフェルナンドに向かって正面から突進する。
しかし、フェルナンドはその破面を視界に捉えているにもかかわらず、何の反応もせず立っているだけだった。

結果から言えばその破面は”違えた”のだ。

真正面から挑む様は勇敢ではある、しかしそれは下策であろう、それはフェルナンドに対してという訳ではなく、どんな戦い、どんな相手に措いてでもそうなのだ。
格下が格上に挑むというならば、真正面は下策中の下策でしかない。
そう、その破面は”違えた”のだ、どちらが”上”で、”下”なのかを。
そして結末はあっさりと訪れる。

「グハッッ！！」

あまりにも哀れな断末魔を残し吹き飛ばされる破面。

真正面から対格差で押し潰しにかかったその破面、しかしフェルナンドはそれに動じる事無く、相手の攻撃が届くよりも早く相手の顎、胸部、そして鳩尾に連続で蹴りを見舞っていた。
それは何の変哲もないただの蹴りであり、業（ワザ）という程のものですらないただの蹴りだった。
しかし連続といってもほぼ同時と見紛う速さで繰り出されたその蹴り、衝撃自体もほぼ同時であり、三乗の威力で破面は吹き飛ばされ、その意識を手放していた。

「まぁなんだっていいか・・・　アンタ達が俺に仕掛けてきた、それが重要だ。それに丁度良かった、コッチも少し試したい事があってよぉ。いい練習台が転がり込んできたもんだぜ、まったく・・・・・」」

襲われた、というのにフェルナンドは相変わらず自然体のままで、構えようとしなかった。
そしてあろう事かその転がり込んできた厄介事を、歓迎するかのような態度をとるフェルナンド。
だが、そんなフェルナンドの態度を見ても彼を囲む破面達は殺気を強めることこそすれ、激昂し、後先もなく飛び掛ってくるようなことはしなかった。
それは強烈な自制心か、或いは激昂すら凌駕するほどの強制力なのか、どちらにせよフェルナンドには関係のない話ではあった。

周りを囲む破面達、最初の一体が倒されて後、それほど間を置かずに別の破面がフェルナンドへと挑みかかる。
先程の光景を見ていたであろうその破面、正面から仕掛けるようなことはせず、フェルナンドの周りをぐるぐると回り彼の死角、死角へと移動する。

対してフェルナンドはあいも変わらず自然体のまま、ただ立っているというだけだった。
一見隙だらけに見えるその姿、しかしフェルナンドの周りを回る破面は、一向に仕掛ける様子を見せなかった。

ただぐるぐると回るだけの破面、機を伺い続けるその破面は今、手を出さないのではなく出せないのだ。
見えるのは打ち込んだ瞬間倒される自分の姿のみ、何処から攻めようとその姿しかその破面には思い浮かばなかった。

そんな破面とフェルナンドの視線が一瞬合う。
その視線に、紅く鋭いその視線に一瞬過ぎった闘気、それにその破面は瞬間耐える事ができなくなり、堪えきれず攻めに転じた。
フェルナンドの頭を狙った一撃、しかしそれはあえなく避けられる。

その一撃を避けたフェルナンドは、頭の横を通り過ぎた破面の手首を握ると、旋風の如き素早さでその破面の懐に身体を潜り込ませ、もう片方の手で袖を掴むとそのまま背負い込むようにその破面を投げ、頭から砂漠へと叩きつける。
砂漠、砂といってもやわらかく弾力に優れている、という訳ではない。
力こそ分散されるが、頭から叩きつけられれば叩きつけられた者の意識、そして下手をすれば命を刈り取る事すら簡単なのだ。

「さて、これで二人目・・・っと。　しかし今のは思ったより今一だな・・・・・場所に左右されるってのがうまくねぇ・・・・・・」

難無く二人目も倒すフェルナンド。

頭から叩きつけられた破面は顔の半分ほどを砂漠に埋没させ、痙攣していた。
動いている事から殺してはいないようだが、とうのフェルナンドといえば何事か思案するように、コメカミの辺りを指で掻きながら考え込んでいた。
だが、そんなフェルナンドの思案など関係ないとばかりに、更にもう一体の破面が輪から進み出る。
それに気付いたフェルナンドは訝しむ様にその破面を睨みつけ、話しかけた。

「また一人だけでやる心算か？　来るんなら全員で来たほうがまだマシなんじゃねぇか？えぇ？」

「不正解（ノ・エス・エサクト）。　コチラにはコチラの事情、というものがある。貴様には関係ない。」

フェルナンドの問に答えたのは進み出た破面ではなく、最初と同じ長髪の破面だった。
周りを囲めるだけの人数、その数の有利というものを彼等は生かそうとしていない。
それがフェルナンドには理解できなかった。
最初はしょうがない、二度目もまぁ許容範囲だろう、しかし三度目、此処までくれば自分達と相手の実力差がどれ程のものか判る、というものだ。
おそらく実力でフェルナンドに劣っているであろう彼等、ならばその不足を補うには、自分達が現状フェルナンドに勝っている部分で補うというのが定石であり、そしてそれは今、『数の有利』以外なかった。

だが彼等はあくまで一人ずつフェルナンドに挑んでくる。
矜持か、信念か、或いは別の何かなのか、とにかく一人ずつ挑んでくる彼等に対するフェルナンドの疑問、それに対する長髪の破面の答えはただ「事情はあるが、貴様には関係ない」というそっけない回答で答えられた。

「そうかい・・・・・・　まぁ、俺としても練習台が多いに越した事はないんだが・・・な。」

そう呟くとフェルナンドはやや半身気味に体勢を変え、両足を開き、両腕をやや拳を開いた状態で目線より少し下にし、初めて構えを取った。
そして構えると共にフェルナンドから発せられる”気”、霊圧ではなく、ただ気迫が発せられているだけだが、その場にいる者は肌が粟立つような感覚を味わっていた。
そして思う、目の前にいるのはただの破面ではないと、それは今までの動きで判ってはいた、しかし実感として今、彼等は感じているのだ。

この破面は普通ではない・・・と。

それでも、それが実感できていても彼等が退く事はなかった。
囲みから一人出てきてはフェルナンドに挑みかかり、呆気なく倒されるという繰り返しを続ける。
最早それは個人の意思、というよりももっと大きなものに突き動かされているような様相を呈してきた。
おそらく金髪の破面がフェルナンドに言った、「コチラの事情」と

いうものが大いに関係しているであろう事は明白であり、しかしそれはフェルナンドにとってはまったく関係のないことであった。

挑みかかってくる破面達、一対一の連続が続く中、フェルナンドはそれに飽きる事無く寧ろ愉しむようにそれを続けていた。
そうして戦うフェルナンド、最早戦っていると言えるかすら疑問ではあるが、そんなフェルナンドの戦い方に次第に若干ではあるが変化が現れる。
拳脚を用いた”打撃”をもって戦ってきたフェルナンド、しかし今、フェルナンドは打撃を主体としながらもそれに新たな要素を加えた戦い方をし始めていた。
それは先程破面を頭から砂漠へと叩きつけた投げ業であったり、拳といった近接攻撃よりも更に内側の間合い、肘による斬撃にも似た一撃を相手に見舞う事もあった。
更には相手の手足の関節などを、稼動方向とは逆に曲げて間接を極める事や、またそのまま骨を折るなどといった相手の外部的破壊以外の内部的破壊を目的とした戦闘方法も模索している様子だった。

そう、それは模索、フェルナンドは今、本当にこの襲い来る破面達を練習台として使い模索しているのだ、自分の戦闘スタイルというものを。
それは数字持ち狩りの時にも行った研鑽の延長線上にある物だった。
だがしかし、あの時と今でフェルナンド自身が決定的に違っているもの、それは”体格”だ。

子供の身体と、小柄ではあるが大人の身体、それには大きな差が生まれる、一つは筋肉や骨格の量や強度、もちろん上昇した霊圧もそ

の一つに数えられるだろう。
だが、戦闘において近接格闘を主体とするフェルナンドにとって最も重要な点は、身体的成長によって得た”射程距離の延長”であった。
射程距離、格闘でいえば拳や蹴りが届く距離といえばいいのか、身体が成長したことによりフェルナンドのそれは子供の姿のときと比べ飛躍的に伸びていた。

成長した身体、伸びた手足、模索とは即ち昇華であり、フェルンドがいい練習台だと言ったのはこの点がやはり大きかった。
今までと同じ動作を今までと違う身体でする、それに伴う感覚的な差異を埋め、さらに成長によって可能となった動きを確認する。
今までどおりの動き、しかし今のままでいることをフェルナンドは良しとはしない。
昇華とは今以上という事、それをフェルナンドは貪欲に目指しているのだ、普段飄々とした態度をしてはいてもその本質、”生”の実感を求め戦うという彼が求めるのは戦うための”力”なのだから。

「今のも違う・・・な。　とどめの前に一拍入るのはよくねぇ。それにただ背負って投げるだけじゃぁそもそも投げる必要が無ぇ・・・か。」

また一体、フェルナンドへと挑みかかった破面が倒れる。
今度の破面は一番初めと同じように、フェルナンドに背負われるようにして投げ飛ばされた。
しかし、今度は頭から叩き落すのではなく、背中から砂漠に落とすようにして投げるフェルナンド。
衝撃は確かにあるだろうが、それのみで相手を倒すほどの威力はその投げにはどうしても乗りづらかったのか、投げられた破面はその

衝撃に耐えてみせた。
だが次の瞬間、砂漠へと投げ伏せれれたその破面が目にした光景、その破面が意識を失う直前に見た光景は、まさに眼前にまで迫るフェルナンドの足の裏だった。

フェルナンドは相手を砂漠へと叩きつけると、仰向けに倒れる相手の顔面をその足で強かに踏みつけたのだ。
顔を踏みつけられた相手は一瞬大きく痙攣し、その後意識を失ったかのように動かなくなった。
だが、殺してはいない。
フェルナンドは先程から相手をしている全ての破面達を意識を刈り取るまでに留め、命まで奪う事まではしていなかった。

「そもそも決着なんてもんは一瞬だ・・・・・投げた、蹴った、倒した、これだって一瞬には多い。理想は全て同時に・・・か、いや、それが一連の動作に組み込まれていればどうだ?・・・・・・そうか、ならついでにもう一つ入れてみる・・・かよ。」

一人考え込むフェルナンド、模索するのは新たなる自分の戦い方。
こうして戦う中で彼はそれの糸口を掴み始めていた、朧気に見えるのは理想、相対した敵をどうすれば完殺できるかという事を追求した理想の動き、ただ殴って倒す、蹴って倒すのではなく、絶命に至るまでの間で更に殺している、そんな”修羅”の如き理想像。

囲みの数はもう数人ほどしか残っていなかった。
最早突破は容易く、そもそも捕らえられているというよりは自分からこの場に留まっている、と言った方が正しいフェルナンド。
そして彼の前にまた一体、破面がすすに出て挑みかかってくる。
さすがに今までの戦いをその目で見ていたその破面は、ある意味で

善戦していた。
それはフェルナンドが今も思考にそのおもきを裂いている、ということが一つと、彼、フェルナンドが見計らっているという理由があった。

そうとは知らず自分が圧していると感じたのか、その破面は攻勢を強める。
不用意、繰り出されてくる拳、蹴り、その全てがフェルナンドからすれば不用意極まりないものに見えていた。
破面はその肉体自体が武器となる、鋼皮（イエロ）と呼ばれる鋼鉄のような皮膚と圧倒的膂力を持って相手を打倒できる身体、振り回せばそれだけで拳は凶器と化すだろう。
だが、その既に凶器である拳を更に凶（まが）つものに、殺すために研鑽するフェルナンドにとってそれはあまりに不様で不用意であり、愚かしく映っていた。

そしてフェルナンドが動く。
またしても不用意に伸びていた拳を避け、そのまま相手の手首を掴むと、掌が上に向くように反して握るフェルナンド。
そして其処から終わりまではまさに一瞬だった。
手首を掴み、旋風の速さで相手の懐へと潜り込み先程と同じように投げを打つフェルナンド。
しかし、先程とは違い、手首を掴んでいない方の手で袖は掴まずそちらも手首へ、両手で手首を掴み、相手の二の腕辺りを自分の肩に乗せて担ぐようにして投げを打つ。
その破面の腕、掌を上にして掴まれた腕がフェルナンドの肩を支点とし、その肘は本来曲る方向とは逆、逆関節状態で無理矢理に曲げられ、挫かれ、そしてそのかかった力に耐え切れず腕の骨は折れた。
そうして相手の腕を極め、そして折りながらも止まらず投げを打つフェルナンド。

投げ飛ばされた相手は天地が逆転し、頭が下、足が上という逆様の状態、そしてその頭部は砂漠へと吸い込まれるように墜ちて行く。
そのまま叩きつけられても、また万が一立ち上がろうとも腕を折られ、戦う事は不可能であろうその破面。

しかしフェルナンドは、先程垣間見た朧気な姿を今、己うちに確たる姿として確立し、それを実行した。
フェルナンドの内に雷光が奔る、天から地へまさに神速にて降る雷（いかずち）の光、そしてそれがフェルナンドに”力”を与える。
腕を極め、投げ、そして折った相手の頭が砂漠へと突き刺さるまさに直前、フェルナンドは逆さになった破面のその顔に、真正面からまさしく雷光の如き下段蹴りを突き刺したのだった。

極める、投げる、折る、蹴りまでの一連の動作の中に集約した要素達。
それぞれが単体ではなく一連の動作の中に納まり、連動し、調和しているということの重要性。
その一撃をもって相手を完殺する為だけの動き、荒削りではあるがまた一つ、フェルナンド・アルディエンデの求める”力”が業へと昇華し、その姿を現した瞬間だった。

「コイツは良い・・・な。　まだまだ甘いが・・・・・・『雷（トゥルエーノ）』、とでも名付けるか、単体じゃなく、一連の動作として集約し、殺す・・・か。悪くねぇ、まぁ悔やまれるのは殺しちまったって事ぐらい・・・か。」

自ら生み出した新たな業の感触に満足したかのようなフェルナンド。
『雷（トゥルエーノ）』と名付けられたその業は、また一つフェルナンドの”力”と

なり強さの証明となった。
しかしフェルナンドが視線を向ける先、其処に転がるソレを見ながら彼は一瞬悔いるような顔を見せた。
其処に転がるのは死体、腕があらぬ方向へと曲り、そして顔は潰れ鮮血に染まり動かないそれは死体以外の何者でもなかった。
そしてソレはフェルナンドの業の犠牲となった存在であり、フェルナンド自身まさに編み出したばかりの業に加減など出来るはずも無く、全力ではなったそれは容易にその破面を絶命たらしめたのだった。

「感傷かい？　フェルナンド・アルディエンデ。それとも殺した事を後悔しているのか？　不正解（ノ・エス・エサクト）！愚か過ぎるぞそれは。　そんな事では、君の”評価”は最低だと報告せねばなるまい。」

そんな一縷の後悔を漏らすフェルナンドに、長い金髪の破面が声をかける。
顔の殆どを仮面で隠し、口元意外はほぼ見えていないが、その口元には明らかな嘲笑が浮かんでいた。

「ハッ！　別にコイツラが自分からやりに来たってぇんなら何も問題ねぇさ、キッチリ殺してやるよ。・・・・・だがな、”覚悟”も何も無ぇでただ命令されたから戦うなんてのまで相手にしてられるかよ。”覚悟”の無ぇのまで背負える程、俺の背中は広くねぇ。それにそんな中途半端をいくら殺したところで、俺の欲しいモンは手に入るわけがねぇ。」

長髪の破面の言葉を鼻で笑い、フェルナンドが悔いの理由を話す。
本来、フェルナンドは殺す事を躊躇わない。

それは戦いというものの中で見せる躊躇いとは”死”を招く源であり、そもそも戦いとは互いに自らの勝利と、そして”死”を覚悟して臨むべきものであるというフェルナンドの考えに基づくものだった。

しかし、先程から相手をしている数多くの破面達、だがフェルナンドにはその中に一人としてその”覚悟”の視える者はいなかった。
それは自らの勝利、そして”死”を考えていないという証であり、自らの意思で戦場に立つ者としてあり得ない行為であった。
ならば何故彼等は戦場に、フェルナンド・アルディエンデという男の前に立ち塞がったのか、それが自らの意思でないとするならば、答えは他者の意思によってということに、つまり”命ぜられて”戦場に立っているという事となる。
それが誰の意思か、何の目的があるのか、そこまではフェルナンドにはわからない。

だが、フェルナンドにとって彼等が彼らの意志でこの場にいない、ということだけで充分だった。
己の意思なき者、”覚悟”なき操り人形などいくら殺したところで、彼の求めるものは手に入るわけがないのだ。
自己と自己、拳と刀、そして魂と魂、その全てをかけ戦ったその先だけに彼が求めるものはあるのだから。

故にフェルナンドは彼等を殺す事はしなかった。
そして悔いたのは殺した事ではなく、”覚悟なき死”を背負ってしまった事へのそれであった。

「なるほど・・・・・・　求めるのはあくまでも高潔な戦い、ということか。いいだろう、合格だ。フェルナンド・アルディエンデ、とある御方が貴様に会いたいと仰せだ、謁見の許可を誉れと思い、

大人しく我等に着いて来い。」

フェルナンドの言葉から彼の意思を読み取ったのか、長髪の破面は納得したように頷くと、フェルナンドにとんでもない発言をぶつけてきた。

それはフェルナンドと合いたいと言う者がいる、誰かは明かさないが光栄な事だから大人しく言う事に従え、というなんとも不遜な言葉だった。

有無を言わさぬ発言、逆に感謝すら求めているような物言い、それを浴びせられたフェルナンド。

そんな物言いに、このフェルナンド・アルディエンデという男が謙り、跪き、感謝の言葉を述べる姿が想像できるだろうか。

言うまでもなく答えは『否』だ。

そもそもフェルナンドは誰にも縛られない。

ハリベルに戦う術を教わる事はあっても決して”下”ではなく、あくまで”対等”として接し、創造主たる藍染にすらその態度を変える事はなかった。

そんなフェルナンドに対して上から物を言う、そんな相手に対するフェルナンドの答えはやはり判り切ったものだった。

「ハッ！　寝言は寝て言いやがれ。　アンタ等のご主人様が誰かなんて俺は知らねぇし、知る必要もねぇ。態々雑魚をあてがって物見遊山気分が知らねぇが、底が知れる。会いたいなら呼びつけんじゃなくて、テメェの足でテメェが来い、そう伝えろ。」

そう言い残すとフェルナンドはその場から立ち去ろうと歩を進める。

フェルナンドにとってもうこの場に留まる理由は何一つなかった、

この場で彼は予想以上の収穫を得ていた。
模索と昇華、その前段階程度捉えていた彼にとって、この場で得た一つの到達点への導(しるべ)、そして得た新たなる”力”、それだけで彼には充分でありその他は余分であり、その余分の極致がこの不遜な招待だった。

「・・・・・それは困る。　これも我等が陛下の望み、逃がすわけには行かない、多少手荒な事をしてでも連れて行かせてもらう！」

立ち去ろうとするフェルナンド、しかし長髪の破面は当然それを良しとはしない。
彼の言葉に呼応し、フェルナンドを囲んでいた破面達は一斉に動き、フェルナンドの行く手を塞ぐように立ち塞がる。
歩を止めるフェルナンドの前に生まれたそれは壁、一対多の壁であった。

彼等はこの時初めて『数の有利』を活かしたのだ、いかな日の前で一対一で圧倒的に、そして次々と仲間を打倒するこの男であっても、これだけの人数で一息に攻めれば勝てる、と。

そんな夢想を彼等は描いていた。

「勝てる・・・・・そう思ってるな?だったら俺も容赦はしねぇ、俺の間合いに入れば・・・殺す・・・・・・」

その彼等を夢想から一気に現実へと引き戻す言葉が紡がれる。

高揚した精神に冷水を掛けられたかのように一息に、彼等は目の前の破面を注視した。
彼等に見えるその破面の顔は、しかし紡がれた言葉とは裏腹の無表情に近いものだった。
殺す、という強い言葉を口にしながら、その顔は静かな湖のように静けさを湛えていた、それが逆に彼等に恐怖を刻む。
その静けさ、しかしその破面が、フェルナンド・アルディエンデが放つ“気”は、紡がれた言葉が本当であると告げている。

間合いに入れば殺す

それが真実であると彼等は理解する。
そして彼等の恐怖の源はゆっくりと、彼らの壁に向かって再び歩を進める。
誰が最初に動いたかはわからない、しかし気がつけば壁を形成していた全ての破面が左右に別れていた。
その中心、ぽっかりと空いた壁の穴を、フェルナンドは悠々と進む。
だがその前にたった一人、立ち塞がる者がいた、それは長い金髪をしたあの破面であった。

「逃がしはしない、と言った筈だ・・・・・」

そう口にし、腰を落として抜刀の構えをとる金髪の破面。
対してフェルナンドは淀みなくその歩を進め、間合いを詰める。
次第に詰まる二人の間合い、互いの間合いは近付き、そして重なる。

瞬間動いたのは長髪の破面だった、鞘に添えていた手の親指で斬魄刀の鍔を弾き、それを起爆剤として一息に刀身を抜き放とうとする。

「なん・・・だと!?」

しかしそれは叶わなかった。

抜き放とうとした長髪の破面の刀は、その刀身の中程までしか鞘から顕われる事はなかった。

柄を握った腕に力を込める長髪の破面、しかし刀は一向に抜ける気配は無い、そう、抜けるはずがないのだ。

彼の斬魄刀は今、フェルナンドによって完全に押さえ込まれているのだから。

フェルナンドは間合いにはいった相手が刀を抜くと同時に更に間合いを詰め、その足の裏で刀の柄尻を押さえ抜刀を阻止していた。

本来ならばこのままもう一方の足で跳び上がり、相手の顔を蹴りぬくなどしてとどめを刺すのだが、フェルナンドはこの長髪の破面に関してはそうはしなかった。

「アンタ・・・・・・　今、一回死んだぜ・・・わかったか？　俺とアンタの“差”が、己と命令の”差”がよぉ。アンタは殺さないでおいてやる。　だから必ず伝えろ、さっきの言葉をアンタのご主人様に・・・な。」

そう言い残し、長髪の破面の斬魄刀の柄を踏み台にして跳び上がり、その場を去るフェルナンド。

長髪の破面はそれを追う事はしなかった。

その場に残された長髪の破面、ギリッという奥歯を噛締める音だけがそこに残った。

勅命の重さ
跪く流断の士
血染めの衣
座してこそ王である

BLEACH El fuego no se apaga. 26（後書き）

な、何とか書けた・・・・・
活動報告にも書いたけど、ホント土曜出勤とかないわぁ～
間に合ったからいいけどね。

今回はフェルナンド（大）の戦闘でした。
そしてまた一つ”陸奥”を手に入れた主人公であります。
読んだことある人には伝わると思うのだけど、読んだことがない人には伝わりづらいかな、どうだろう？
逆一本背負いから腕を折りつつ頭を蹴る、って簡単に書けないのがつらい所か。

そして明日あたりにまたアンケートを実施したいと思っています。
今回はストーリーというより、もう少し違った部分についてとなる予定です。
Ａｒｃａｄｉａ様に関わる内容もありますが、気軽に答えて頂ければと思います。

それでは自分はこれからスパロボ（Ｌ）をしなければならないのでｗ　では～

荘厳、そして重苦しい雰囲気がその場を支配していた。
それを醸し出すのは豪奢な椅子にどっしりと座った一人の老人。
老人といってもその腕は太く屈強な筋肉に覆われ、胸板も厚く、老人であると判断できるのは年輪の如き年経た皺と、白い髪と蓄えた髭、そして重みのあるその言葉があればこそだろう。

「なんぞ言いたい事はあるか・・・・・フィンドール。」

響く声に鷹揚はない。
その言葉からは何の感情も読み取る事はできなかった。
座したまま肘掛に寄り掛かるようにして頬杖をつき、第1十刃(プリメーラ・エスパーダ)“大帝”バラガン・ルイゼンバーンはその腰掛ける椅子より数段下がった場所で傅く、男にそう問うのだった。

傅く男、頭頂部から顎に至るまで顔の殆どを仮面で隠した、長い金髪の破面(アランカル)、名をフィンドール・キャリアス、第1十刃バラガンの従属官の一人にして、此度バラガン直々の勅命を受け、その任に就い

ていた男である。
その任務とはたった一人の破面をこの場に連れてくる、という傍から見れば至極簡単なもの。
だがその破面、彼の仕える王が興味を示すだけあって非常に厄介な存在であった。

名をフェルナンド・アルディエンデ、半年ほど前に現第3十刃（トレス・エスパーダ）ティア・ハリベルが、直々に虚圏の白砂漠より連れ帰った大虚。

曰く、第3十刃を大虚でありながら追い詰めた。
曰く、その霊圧は上位十刃を凌駕する。
曰く、数字持ちの全てを一人で倒した。

挙げればそれこそ限が無いほど、その破面、フェルナンド・アルディエンデにまつわる噂が飛び交っていた。
良くも悪くも注目の的、と言う事なのだろう。
だが噂とはえてして尾ヒレがつくもの、飛び交うそれを全て鵜呑みにできるわけではないし、往々にして誇張されて伝播するものだが、しかしその全てが嘘という訳でもないのだろう。
現に彼等の王はその噂の主に興味を示している、そして彼等の王は見たというのだ、その破面が第2十刃を叩き伏せる様を。

故にフィンドールへとその命は下った。

『件の破面の実力を見定めよ。　そして儂の前に連れて来い。』

フィンドールへと下ったのはその一言のみ、しかしそれは王の勅命、

それを拝命したフィンドールは最下級の破面、というよりは破面モドキとも呼ぶべき者達を掻き集め、フェルナンドの力を見定め、多少手荒なまねをしてでも彼が頂く王の御前へ連れて行こうとしたのだ。
しかし、結果的にそれは見事に失敗し、冒頭の場面へと帰結したのだった。

「早よう答えんか。　何故、あの童(わっぱ)が此処に居らん・・・・・・」

重い言葉、それが傅くフィンドールの背中に圧し掛かるように降る。
フィンドールの頬を一筋の汗が流れる、唯目の前にいるというだけで圧しかかる重圧は相当のものだった。
王の御前、その前に傅くのは彼一人、それが何を意味するのかなど明白であり、しかしバラガンはあえてフィンドールに問う。
そしてフィンドールは意を決したかのように早口に捲くし立てた。

「申し訳御座いません陛下！　奴めが一人となるのを待ち、モドキ共を使って奴めを囲み一体一体ぶつけ、奴めの力を見ましたところ、はっきり申し上げて想像以上で御座いました・・・・・・モドキ共では手も足も出ず、まるで弄ばれるかのように次々と倒され、それもほぼ全てのもどきを殺さずに無力化するというふｚッ！！！」

捲くし立てるフィンドール、しかしそれは突如遮られる。
誰かが口を挟んだわけではなく、唯一つの出来事がそれを遮ったのだ。

彼が傅くその直ぐ隣の床に、深々と刺さった巨大な戦斧の一撃によって。

「戯けめが・・・・・　儂が何時、言い訳をしろといった。それ、早よう答えろ・・・・・・・　童（わっぱ）が居らんのに、何故、貴様だけ戻った。」

言うまでも無くその床に戦斧を投げつけ、深々と突き刺したのはバラガンだった。

豪奢な椅子に座したまま、そして頬杖をついたまま空いた片手の力のみで投げつけられたその戦斧、だがそうして投げつけられた斧は明らかにフィンドールを一撃の下に両断する威力を有していた。

問に答えず、ただ言い訳を捲くし立てるフィンドールの言葉を止めるのに、それ以上効果的なものは無かっただろう。

そしてバラガンは改めてフィンドールへと問う。

何故、フェルナンドがいないのかと、何故、彼がいないのにお前だけが此処に戻ってきたのか、と。

「大方あの童（わっぱ）にいい様にあしらわれたんじゃろうて・・・・・・不様よのぅ、フィンドール？　敵わず、殺されず、死ねず、不様を曝すしかできん・・・・・・それでも儂の従属官（フラシオン）か！　馬鹿垂れめが！！」

広間をバラガンの怒声が満たす。

任を果たせず、ただ手勢を失い、負けて戻った従属官。

彼から見ればあまりにも不様であるその姿、それに声を荒げる事をバラガンは押さえ切れなかった。

「よいか！　二度と儂の前で不様を曝すな！　曝せば次は、その斧が貴様を叩き割るぞ！」

「・・・・・御意に。　しかしこのフィンドール、その時は陛下の御手を煩わせる事は御座いません。自らこの首、刎ねて御覧に入れます・・・・・・」

怒声を上げ己が従属官の失態を責めるバラガンであったが、その怒りに任せフィンドールを殺してしまう、等という事は無かった。
その場の感情に流される者は上に立つ資格などない、いくら荒ぶろうとも大局を見据えるものこそ王足りえるのだ。
その点で言えばバラガンは間違いなく王であろう。
不様を曝した部下、しかしそれを曝したのは数多くいる従属官の中でも上に属する者、そういった実力者がそう簡単に配下に加わる可能性は低い。
故にバラガンは許しを与える、上に属するが故に誅さねばならない場合もあるが、バラガンにとって今回の出来事はある意味予定調和の下の結果、とも言えた。

そしてフィンドールもそのバラガンの言葉に更に深く頭を下げ、そしてもしもの時は自ら首を刎ねると宣言した。
それは彼なりの気概だったのだろう、忠誠を誓う王に不様を曝すという屈辱、そして二度もそれに耐えられるほど彼は厚顔ではないようだった。

「フン！　多少の気概は残っておるようじゃのう。まぁ良(よ)いわ・・・・・　してフィンドール、あの童、どれ程のものであった・・・・・？」

フィンドールが見せた気概に多少バラガンの怒気も納まる。
そしてフィンドールに対して、件の破面、フェルナンドの事を問うバラガン。
フィンドールが先程矢継ぎ早に述べた言葉の中にあった、彼が今回投入したというモドキ達の全てをフェルナンドが無力化したという言葉、しかしそれはバラガンからしてみればフェルナンドの強さを測る目安には程遠かった。

バラガンは一度、フェルナンドの”力”を目にしている、はっきり言ってモドキ程度で相手が務まるとは到底思えはしなかったのだ。
しかし、例え務まらずとも、今回はぶつける事にこそ意味があった。
ぶつけたモドキ全てが打ち伏せられ、殺されようともバラガンの戦力に毛先程の揺るぎも出ない。
バラガンが見たかったのはそのモドキ相手に、フェルナンドがどうするのか、という事だった。

いなすのか、逃げるのか、倒すのか、それとも殺すのか、明らかに実力が下の者をぶつけてこそ、その者の戦いに於ける本質は見えてくる。
バラガンが見たかったのは”力”ではなく”本質”。
故に従属官の中でも上位に位置するフィンドールにその任を任せたのだ、フェルナンドの本質を見極めさせるために。
そしてフェルナンドが、自らの配下足りえるか否か、という事を試すために。

そう、第1十刃バラガンは、未だ番号すら持たないフェルナンド・アルディエンデという破面を、自らの”戦力”としようとしていた

のだ。

「・・・・・奴めの戦闘方法は徒手空拳、霊圧による攻撃を積極的には用いず、斬魄刀すら抜かず、己の肉体強化のみで相手を打倒する事を主眼に置いた戦い方をする破面で御座いました。自ら攻め打倒する事、また相手の攻撃を逆手に取り倒す事、そして霊圧ではなく己の”気”のみでその場を制する気迫、霊圧自体は定かではありませんが、近接格闘という部分では抜きん出ていると考えられます。」

バラガンの問にほんの一瞬間を置き、フィンドールが語りだす。
その間は彼の苛立つ感情を押さえ込むための間だった、語らねばならないのは忌々しき者の事であり、しかし忌々しくも自らの王への報告に私情を挟み、捻じ曲げる事は彼には出来なかった。

「モドキ共は一体を除いて生存、しかしその全てに甚大なダメージを負わせておりました・・・・・奴めに何故殺さないのかと問えば、覚悟も無く・・・・・ッ覚悟も無く、命ぜられ戦う者を殺しても意味が無い・・・と。」

一度言葉を詰まらせながらも話し続けるフィンドール。
それはフェルナンドが彼に示して見せた事、そして屈辱の記憶、ただ命令されたから戦う、そんな事では死ぬぞ、というフェルナンドの顔が忌々しくもフィンドールの脳裏をよぎる。
しかし現にフィンドールがこの場に未だ生きていられるのは、一重にフェルナンドが彼を見逃したという事の証明だろう。
いや、見逃したという言葉すら温い、”死”とは背負うもの、そし

て命ぜられたまま戦う彼、フィンドールを殺しその”死”を背負う事をフェルナンドは良しとしなかった。
そう、見逃したという言葉は温い、フェルナンドにとって彼は背負うに値しない存在、今彼が生きているという事はそう言われているのと同義なのだ。

「ほぅ・・・　あの童（わっぱ）、なかなか言いよるわ・・・・・・それで？
あの童、儂の誘いをなんと言って断りよった・・・・・・？」

「ッ！　・・・・・・そ、それは・・・・・・・・・」

フィンドールが語るフェルナンドの言葉を聞き、バラガンは蓄えた立派な髭を撫でながらクックッと笑った。
そして、バラガンは遂に核心部分へと足を踏み入れようとする。
フィンドールにとって此処からがある意味で、一番の山場であろう。
王に、この絶対王にあの言葉を伝えなければならないのかと、不様を曝した自分に見せたあの怒気、身震いする程のそれを発した王にあの言葉を告げなければならないのかと、その後の王の反応、最早フィンドールにそれは想像すら出来なかった。

「何じゃい。　言うてみせぃ・・・・・・」

「お、畏れながら陛下！　奴めが申した事は、陛下の御耳に入れるのが憚られるほど無礼極まりない言葉、御耳汚しとなりましょう。
それに奴めは”力”こそあれ、その気質は決して陛下の御為にはなりえませぬ！寧ろこの第1宮に不和と不興を招く事は必定！　どうか！　どうかお考え直しを！」

フィンドールは必死に訴える、あの者は危険だと、フェルナンド・アルディエンデという破面は彼の王をしても決して御せる者ではないと。
それは敗北による僻みなどではなく、ただ純粋に彼が感じたフェルナンドという男の在り方から導き出された答えなのだろう。
取り方によっては王への反逆とも言える出過ぎた物言い、それをしても尚フィンドールはバラガンに思いとどまるよう進言したのだった。
しかしその懸命ともいえる進言も、バラガンに意味を成すことはなかった。

「違えるでないわ、フィンドール。　儂は貴様に意見など求めておらん、貴様は唯、童(わっぱ)の言葉をその口で語るカラクリよ・・・・・・・この場で貴様の価値は、それ以外残っておらんと知れぃ・・・・・・・」

まさに両断、そもフィンドールの言葉などバラガンに届くはずもなく、バラガンはその言葉に込めた圧力を増すようにしてフィンドールに語る。
おそらく次にフィンドールが口を開く時、バラガンの望む事を口にしなかったのなら、いかなバラガンとて彼を殺すだろう。

忠節を尽くせぬ従属官など、彼にとって何の価値も無いのだから。

「……畏まりました……　奴めは畏れ多くも、陛下の招致の御言葉を一笑に伏し、不遜にも、陛下の事など知る必要はなく、この様にモドキ共をあてがって力を測る事は命じた者の底が知れる、と……

そして・・・そして、自分と会いたいのならば呼び寄せるのではなく、陛下に自ら足を運ぶように伝えろ…と。そう、申しておりました……」

バラガンの言葉に、ついにフィンドールはそれを口にした。
偽証は許されない、内容は包み隠さず、しかし出来る限り丁寧な言葉へと置き換えて、フェルナンドの言葉をバラガンへと伝える彼。

そしてフィンドールは彼以外の従属官が、驚愕する雰囲気を肌で感じていた。
それはそうだろう、とフィンドールはその雰囲気に一人納得する。
この虚夜宮のどこに第1十刃“大帝“バラガン?ルイゼンバーンの言葉を一笑に付し、あまつさえバラガンに命ずるかの如く振る舞う破面がいるだろうか。

いるはずがない、それが彼らバラガンの従属官達の共通した認識であり、数多いる破面のほぼ全ての認識でもあった。
しかし今、例外が生まれたのだ、破面の頂点たる階級である十刃でもない、それどころか数字すら持たない一介の破面がそれをしたという事実、それを知った彼らに驚くな、と言う方が無理な話であった。

傅くフィンドールと、驚きに染まる従属官達、そんな彼らに何かが割れたような、そして崩れるような音が届く。
音の発生源は当然彼等から見て上段に位置する場所、正確にはそれは肘掛の先端が砕ける音であり、その肘掛は腰掛ける者によって粉々に握り潰されていた。

それを見た全員がその身を固くする。
肘掛けの先を握り潰し、背を丸めて俯いているのは彼らの主たるバ

ラガン、見ればその肩はワナワナと震え、それが彼等には今にも爆発する火山の鳴動にすら見えた。
最早この先何が起こるのか、今だ傅くフィンドールにも、そして周りに控える他の従属官達にも予想がつかなかった。
だが、一つだけわかる事はこの火山が噴火する事だけは必定である、という事だけだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・クッ・・・・・・・」

そして彼等が恐れていた瞬間が訪れようとしている。
だがその場から逃げ出す事は許されるはずも無く、ただその瞬間を待つ事しかできない彼等、訪れる噴火の最前線でそのマグマを浴びる事だけが、彼等にできる唯一の事だった。
そして時は訪れる。

「・・・・・ククッ・・・フハハ・・・・フハハハハハハハハ！！！あの童(わっぱ)！　この儂によう言いよったわ！その物言い、儂に自ら来いという気骨！フハハハハ！　儂に対して欠片の物怖じも見せん態度、やはりあの童(わっぱ)は面白いわい！」

訪れたのは、物みな焼き尽くす灼熱のマグマではなく、豪胆で高らかな笑い声だった。
笑っているのだ、バラガン・ルイゼンバーンは笑っているのだ、自らの呼び声に応えず無視するどころか逆にお前が来いと、そう伝えられたその言葉に彼の王は笑っているのだ。

それに困惑するのは彼の従属官達だった。
おそらく物理的な破壊すら伴うであろう怒りが顕われるであろうと

思っていた矢先に、響くのは高らかな笑い声、肩透かし、というよりは最早何が起こったのかの理解すら彼等は追い着いていなかった。何故笑っているのか、自分が侮られているというのに何故それを笑うのか、困惑する彼等、だがバラガンは一人ご満悦の様子だった。

「愉快、愉快。　解るか？貴様達・・・・・あの童はこの儂に喧嘩を売っておるのよ。それもハッタリでのうて本気で儂に勝てる気でおる。・・・・・・　なんとも愉快、こんな事をしよった輩はネロの阿呆(アホウ)以来じゃ。まっこと愉快よのぅ・・・・・・」

一頻り笑った後、バラガンはその意味を従属官達に明かした。

バラガン・ルイゼンバーンは王である、今やその地位こそおわれているが、その精神と纏う威厳に些かの蔭りも見せてはいなかった。立場が、生まれが王を決めるのではない、王足らんとするその気概のみがその者を王たらしめ、臣下はその者を王として尽くすのだ。その点で言えばバラガンは正しく今も王であった。

だが王とは同時に孤独なものだ。

尽くされ、崇められ、祀られ、何時しか神が如く昇華する存在、それが王である。

本人とは無関係に、上へ上へと祀り上げられ、何時しか対等と言える存在は何処にもいなくなってしまう。

バラガン自身はそれに微塵も違和感を感じる事はなかった、自分は王であり、そうあることが当然だと考える彼にとって祀り上げられる事は、極自然な事であった。

だが、同時に退屈である、ともバラガンは考えていた。

天上に座す事が当然である自分、だが誰一人いないその場所は退屈で、いつしか飽いてしまうのだ。

そんなバラガンの座す天上に、ある時扉を打ち破り、土足で踏み入ろうとする者が現れる。
その者は彼を前にしてこう言い放ったのだ、「お前の席をオレ様に寄こせ。」と。
バラガンにある種の衝撃が奔っていた、退屈に喘いでいた精神は一息にマグマの熱さを取り戻し、眠りについていた力が歓喜の叫びを上げるのを彼は聞いた。
その後の戦いはバラガンにとって愉快この上ないものとなった。
そしてそれを齎したのは現第2十刃ネロ・マリグノ・クリーメンであり、バラガンがネロを多少なりとも気にかけるのには、その事が少なからず影響していた。
自分の退屈を消して見せた、という事が。

そして今日、また一人天上の扉を、だがこちらは扉を蹴破るだけ蹴破って、お前など知らないとその場から去っていくという、方法でバラガンに火をつけようとしていた。
どちらも不遜極まりない態度、だがそれ故にバラガンにとっては稀有な者であった。
かたや座を寄こせと言い放ったネロと、かたやお前の都合など知った事か、会いたければ自分で来いと言い放ったフェルナンド。
バラガンを格上として扱うどころか片方は歯牙にもかけぬ物言い、そして両者に共通する溢れ出る自身の力への絶対の自負、それを自分へと向けられた矛から見て取ったバラガンには愉快でたまらなかった。

「そ、それでは陛下、奴めに会う為に奴めの下へと向かわれるのですか？」

予想外のバラガンの反応に、多少面食らった様子のフィンドールがバラガンへと問う。
これほど興味を示しているバラガンの様子、今すぐフェルナンドの下へと向かうと言い出しても決して不思議ではなかったろう。
しかしフィンドールへと返された言葉は、やはり王たるバラガンらしいものであった。

「戯けめが・・・　何故儂が童相手に出向かねばならん。王とは座してこそ王よ・・・・・・　流され、揺られ、グラつく樹に何が実る？張る根を持たぬ樹は大樹にはなれぬ。　王とは頂点であり、樹の幹であり、そして根よ。儂という幹に茂る枝葉である貴様達ならばわかるであろう、そのしなやかな頑強さが・・・な。」

王とは座してこそ王、王という存在の一つの本質、誰にも揺るがされる事がないその様、頂点であり中心であるその王の様こそが強固な国家を形成する一つの要因である。
故にバラガンは動かない。
自分から会いに行ってしまえばそれはバラガンの敗北であり、王の敗北は没落への第一歩でしかないのだから。

「それに、もう少し童の”力”も見てみたい。御誂え向きにそろそろアレの時期じゃろうて、問題はどうやって童を引っ張り出すか・・・じゃがな。」

バラガンが言葉を零す。
顎を摩るようにして眼光鋭く何事か思案し始めるバラガン。

その瞳は老人でも戦士でも、そして王ですらなく、ただ血を好む獣のそれであった。

―――――――――

「さて・・・　今日こそは吐いてもらうぞ？フェルナンド・・・・・・」

ちょっとした厄介事の後、第3宮へと戻ったフェルナンド。
しかし戻った矢先、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンの三人に取り囲まれ、そのまま腕を組んで仁王立ちするハリベルの前へと連れてこられていた。

「吐け・・・　と言われても、吐く事がねぇから吐きようがねぇよ。」

多少うんざりした声でハリベルに答えるフェルナンド。
確かに彼からすれば今日あった事は別段大した事ではなく、しかしある意味では大した事であったが彼にそれを言う気は毛頭なかった。
そんなフェルナンドの様子に堪りかねたのか、ハリベルではなくア

パッチとミラ・ローズが声を上げる。

「おいコラ！フェルナンド！　アンタ何時もふらふら何処ほっつき歩いてんのさ！」

「そうだよ・・・・・・　あんたいったい何やってんだい？」

そうして問い詰めようとする二人にフェルナンドは素っ気無く「関係ねぇよ。」と一言返すだけだった。
しかし尚も食い下がろうとする二人、しかしそれをスンスンが手で制し、替わりに彼女が質問をぶつけてきた。

「フェルナンドさん、私別(わたくし)に貴方が何処で何をしていようと特に気にはなりませんの。でも今日は別ですわ・・・だって貴方・・・・・・」

そうして何時も癖で隠している口元を、更に隠すような仕草を見せるスンスン、見れば眉間にも多少の皺がよっていた。
それが何故なのか、理由は最後の一人の口から明かされた。

「血の臭いがする・・・・・・な。　今までこんな事はなかった、誰を殺した・・・フェルナンド・・・・・・」

血の臭い、ハリベルがそう口にすると三人も一様に顔をしかめる。
ハリベルからしても今回は状況が違っていた、いつも2，3日居なくなることはあったが、フェルナンドが血の臭いをさせて帰ってきたのは今回が初めてだった。

理由は解らない、だが最近の彼は無闇に誰かを殺すような者ではないと、ハリベルは感じていた。
大虚の頃のような毒気は抜け、頓に最近はどこか達観しているかのような、飄々とした雲の如く振舞うフェルナンドを見ていただけに、今回のそれは際立って見えた。

「殺した事前提・・・かよ。　まぁ間違っちゃぁいねぇけどな。なに、ちょっくら加減をしくじった、それだけの話さ。」

「いいから詳しく話せ・・・・・・・　言って置くが今日は逃がさんぞ？」

「・・・・・・チッ、まぁしょうがねぇ。血生臭い俺が悪い・・・ってか・・・・・・」

自分が誰かを殺した事前提で話が進んでいる事が、なんとも面白そうに軽く笑うフェルナンド。
そして内容は暈(ぼか)しに暈したが、理由を話した彼の言葉を、だがハリベルはそれだけでは許さず全て話せと言い切った。
そして念を押すように言葉を紡ぐハリベルに、遂に観念したのかフェルナンドは今日あった厄介な出来事の方を話して聞かせた。

「・・・っとまぁそんな所だな。」

「判った・・・・・・　だがあまり大事は避けろ、フェルナンド。時期が時期だ・・・　要らぬ恨みは買わずにいろ・・・・・・」

厄介事の仔細を聞いたハリベルは、その血臭の理由に納得する。
言うなれば正当防衛、彼の場合ある意味過剰防衛気味ではあるが、

それならば仕方が無いと納得するハリベル。
しかし同時にフェルナンドに多少の注意もした彼女、当然フェルナンドは彼女のその言葉が気になった。

「恨みは買うな・・・時期が時期・・・・・・か。おいハリベル、なにかあるのか？　お前にしちゃぁ珍しい発言だと思うんだがな・・・・・・」

ハリベルの放った言葉、その全てが今後に何かが起こる事を示唆していた。
だがそれにフェルナンドは心当たりがない、故にハリベルに何が起こるのかフェルナンドは聞いたのだ。

「・・・・・そうか、お前は今回が初めてだった・・・な。虚夜宮では定期的にある事が行われているんだ、それこそ今日お前が纏っているソレよりももっと血生臭いものではあるがな。」

ハリベルがフェルナンドに語る言葉、フェルナンドが初めて目にするその行事、数多いる破面達が己の欲望のみを原動力とし、血で血を洗う虐滅の渦、勝利者には栄光を、そして敗者には挫折と死を齎す二極の宴。

「強奪決闘（デュエロ・デスポハール）。それがもう直ぐ始まるのだ・・・・・・」

咆哮と血の海

血の海に沈む贄

贄の上に立つ栄光

栄光の産声

産声は全て自分だけの為に

BLEACH El fuego no se apaga. 27（後書き）

今回はいつもより若干短めです。（2~3KB程w

前回久しぶりにメインだった主人公がまた端っこに追いやられてます・・・・・・

バラガン陛下が今回の主役。

原作より若干性格が丸くなっている感アリです。

王様っていうか殿様みたいな話し方になったよ・・・・・・

織田信長チックな感じw

彼の従属官はとりあえずフィンドールと、もう一人くらいしか今まで描写していません。

今後どれくらいバラガンが出てくるかは不明ですが、彼の従属感、とくに若干一名ものすごく濃いのがいますが・・・・・・出した方がいい？薔薇筋w

そして、今回の最後で独自設定を入れてみました。

あると思うんですよね~こういうの、原作じゃなかったけど。

轟音が世界を揺らしている。

それは幾重にも折り重なり、そして互いが共鳴し音量を増した声の津波だった。

喧騒、そして数多の感情の坩堝と化したその場所で、二体の破面が激しく戦っていた。

その姿は人間というより寧ろ獣に近く、その姿からその二体の破面が刀剣解放、”帰刃（レスレクシオン）”状態で戦っているのは明白であった。

本来ならばソレは許されない。

虚夜宮、彼ら破面が住まう尋常ならざる巨大構造物、その天蓋の下での平時の刀剣解放は禁じられているのだ。

それは破面全てに対しての禁であり、十刃（エスパーダ）、数字持（ヌメロス）ちに対してもそれは同様だった。

禁じられてはいるのだが、かといって彼等がそれを律儀に守っているのか、と問われれば言葉を濁すより他ないだろう。

集団として形を成しているだけでも奇跡じみている彼等破面。

その個々の行動まで完全に縛る事など不可能であるし、なにより”力”を誇示したがる者達に、それを見せるなと言って素直に従うは

ずもないのだ。
さすがに十刃クラスでそれはないだろう（する必要がないとも言える）が、階位が下がるにつれその傾向は顕著であった。

しかし今、互いに本来の性（さが）を回帰させた姿で戦う二体の破面は、禁を無視しているという訳ではない。
今日、この場、この時に措いてはその禁は解かれ、彼等はその身の内にある全てをもって敵対者に挑む事ができるのだ。

今、この場で行われているのは解き放たれた魔獣達の宴、栄光を手にする為だけに、栄光を手放さぬ為だけに、敵対者を血の海へと沈めるその儀式。

『強奪決闘（デュエロ・デスポハール）』　この血に塗れ滴る宴はそう呼ばれていた。

一際大きな歓声が上がる。
二対の破面が戦う砂漠、円形でその直径はおおよそ１００ｍ程、それを囲むようにせり上がった高い壁があり、その上部、円形の壁を一周する形で多くの席が並んでいた。
だがその席に座しているものは少なく、皆一様に立ち上がり声を張り上げていた。
歓喜、賞賛、妬み、僻み、嘲笑、怒声、罵声、あらゆる感情が混ざり合ったそれは一つとなり轟音と化していた。

「勝負あり。　勝者Ｎｏ．７５マーズ・マーズ（セテンタ・イ・シンコ）。　これによりＮｏ．７１バルロ・スーサイダル（セテンタ・イ・ウーノ）の号をＮｏ．７５が強奪、以降彼の者をＮｏ．７１とする。」

轟音の中一つの声が宣言する。
戦う二体以外にもう一人、誰よりも近くで二体の激しい戦いぶりを見続けていた褐色の肌の男、その男が片手を高く掲げそう宣言したのだ。
片方は血を流しながらもその足で砂漠に立ち、もう片方は相手と、そして自らが湛えた血の海に沈んでいる。
それは決着の光景であり、どちらが勝者で敗者なのかを何よりも如実に語る光景でもあった。

それゆえの宣言。
決着を告げたその言葉にまた一際大きな音の津波が押し寄せる。
その音の波の中で、勝者たる破面はその足で、敗者たる破面は下官達に引き摺られるようにその場を後にした。
後に残った血の海も、そう時を置かずして白い砂漠に吸われ、消えてしまう事だろう。
だがそれを待つ事はこの場ではありえない。
餓えた魔獣達はまだ、続々とこの場で戦い互いの”号”を奪い合うのだ。

彼ら破面に与えられた番号とは単純に生まれた順番である。
しかし、Ｎｏ．１からＮｏ．１０の番号のみは違う、それは特別な数字、抜きん出た殺戮能力を持つ者のみに与えられるその称号、羨望の的、それ故力を示したい者は少しでもその番号へと近付こうと上を目指すのだ、他者を殺し、その番号を奪う事によって。
そして、『強奪決闘』とは読んで字の如く、強奪するための戦いである。
それは勝者が敗者の全てを強奪するという単純な決闘、下位の者が勝てば”号”とを奪い、上位の者が勝てば”命”を奪う。

そして間違ってはならない事がひとつ、この戦いは”入替”ではなく”強奪”である、という点だ。

負けて”号”が下がるのではなく、”号”は奪われ、奪われた者に残るものは何もない、その命すらも奪われる。

例え運よく生き残ったとしても既に今まで築いた地位は奪われた後、残っているのは惨めな敗北という結果のみ。

仕掛ける側も、そして受けて立つ側も必死の覚悟無しにいられない、まさに全てを賭けた奪い合いなのだ。

「・・・これが『強奪決闘』だ。　下位の者が上位の者を指名し、上位の”号”を賭けて戦う。勝敗はどちらかの死亡か戦闘不能、もっとも戦闘不能はめったにないがな・・・・・・そして途中で降参するという事は認められない。上位者は”号”を、下位者は”命”を賭けて争うのだ・・・・・・どうだ、　理解したか？　フェルナンド・・・」

他の破面、数字持ちやそれ以下の破面達より高い位置に設けられた各十刃専用のテラス席から、行われる戦いを見下ろしハリベルがそう呟く。

その瞳に映るのはかつての自分が居た場所、駆け上がるために戦い、力を示し続けた場所だった。

「まぁ・・・な。　ようするに唯の喧嘩だろうが、それならこんな盛大にやる必要も無ぇよ。」

ハリベルの言葉に素っ気無く答えるフェルナンド。
彼にとってこの強奪決闘は特に意味を見出せないものであった。
彼は立場に拘りを持たない、誰かが決めた順番、上だ下だと階級に拘ることを彼はしない。
戦いたいのならば戦えばいい、他人が決めたルールに従う事などない、それがフェルナンドの考え方なのだ。

「第一、番号に何の意味があるってんだ？　番号をひけらかして自分が上だ、なんて言うのは三下だけだ。俺達の中で上か下かが分かるのは、相手を殺したときか、テメェが死んだ時だけだろうがよ。」

そうしていつかの台詞を再び口にするフェルナンド。
半年をかけて成長した彼だが、根底に流れるものはやはり変化していないという事だろう。
戦いに、そして己の目的の為に全てを賭ける熱さと、戦うという事にかけてのある種の冷酷さという部分は彼を構成する重要な因子であった。
そして、そう言いきったフェルナンドをハリベルは見据え、そしてまたその視線を会場の方へと戻す、そこではまた新たな戦いが始まっていた。

「そう言ってやるな、フェルナンド。　皆がお前のようではないのだ、現に私も高みの地位を目指した。そうしなければ手に入らないもの、そうならなければできない事、というものもあるのだ・・・・・」

そうして地位を否定するフェルナンドを軽く窘めるハリベル。
たしかにただ戦うという点で言えば地位など不要なものだ、しかし、それ以外の事ではそれも不要とは言い切れない。
ハリベルで言えば彼女の目的、理想は『仲間を守る事』であり、その為には自分がただ強いだけでは駄目なのだ。
自身の強さはもちろんの事、いざという時に仲間を守ってやる事のできる強さ以外の”力”、地位という誰にも解りやすい記号、その地位の庇護下に居る彼女の仲間に手を出せばどうなるか、という抑止力としての地位、理想を求めた彼女には地位とはやはり必要なものだったのだ。

そうしてハリベルに窘められたフェルナンドは「そうかい。」と気のない返事を返しただけで、彼女の言に納得している様子はなかった。
フェルナンドにも、そしてハリベルにも譲れない部分であろうそれ、故にその話は此処まで、それ以上続ければ下の決闘とは無関係の戦いが始まる可能性を孕んでおり、それはフェルナンドが、そしてハリベルが望むかたちでの始まりではなかった。

「・・・・・おう、ハリベル。そういえばさっきからあそこで審判気取りの野郎は誰だ？どうにも破面には見えねぇんだがな・・・・・」

「うん？・・・あぁ、あれは東仙統括官だ、審判ではなく立会人、といったところか。市丸ギン同様、”死神”としての藍染様の部下にあたる。」

半ば強引ではあったがフェルナンドが話題をかえる。
フェルナンドに問われた人物へと眼をやり、ハリベルが答える。
そこには砂漠と同じ白い羽織と、砂漠に映える黒い着物を着た人物が立っていた。

ハリベルが東仙統括官と呼んだその男、名を『東仙要』、褐色の肌をし、細身の身体つき、髪型が特徴的で髪をある程度の量で小分けにし、それを頭皮に添って三つ編みのようにして編みこんでおり、最後は後頭部で一つに纏めている。
首には襟巻き、手には指が見える形の黒皮の手袋、そして目元には眼鏡というよりゴーグルに近いものを掛けており、その視線は伺えなかった。
白い羽織には背中に『九』の一文字が染め抜かれており、藍染の『五』、市丸の『三』同様、彼が尸魂界（ソウルソサエティ）に措いてそれを守護する護廷十三隊の九番隊隊長である、という事を示していた。

「〝死神〟・・・か。　・・・・・・　しかし、随分と変わった足運びをするもんだな、アイツ。」

そうして眼下で激しい破面同士の戦いに、着かず離れずの距離で動く東仙を見るフェルナンド。
彼が見た東仙という男の動きはどこか不思議なものだった。
安い表現だがまるで後ろに目があるかのように動くのだ、数字持ち同士の戦闘によって発生する余波、ときに後ろから襲うそれを東仙は顔を向けることもなく避わすのだ、まるで何処に何が在るのか判っているかのように。

「気付いたか、フェルナンド。　東仙統括官は生来盲目であるそうだ、それ故気配を感じる事に長けている。おかしな言い方だが、彼

には自分の回り全てが”視えて”いるのだろう。」

「なるほど・・・ねぇ。　なら・・・・・・こんなのは・・・どうだ？」

ハリベルの『東仙が生来盲目である』という言葉を聞き、フェルナンドは彼の足運び、そして所作に納得した様子だった。
そしてなにか思いついたように笑みを浮かべ、テラスの淵まで進むと、眼下にいる東仙に視線を向ける。
次の瞬間、今まで目の前の破面達に注視していた東仙がフェルナンドの方を振り向いた。
目の前の戦いを見る事を放棄し、突如振り向いた東仙の視線の先に居るのは、どこか不敵な笑みを浮かべたフェルナンド。
彼にそのフェルナンドの笑みまでが”視えた”かは定かではない、しかしその光なき眼（まなこ）で東仙はフェルナンドを見据えると、眉をしかめ、そしてまた目の前の戦いへと意識と視線を戻したのだった。

「まったく・・・・・・　あまりふざけるな、フェルナンド。彼は冗談が通じるような人柄ではないぞ。」

「別にふざけちゃいねぇさ。　ただあの死神が”ホンモノ”か、って事を確認したかっただけだ。」

呆れたようなハリベルの声、しかしフェルナンドはそれに対しても不敵な笑みを崩さずに答える。
彼がしたのは単純な事だった、気配を感じる事に長けているという死神東仙、それを試すかのごとくほんの一瞬、絞りに絞った”殺気”をフェルナンドは東仙に向けてはなったのだ。

声の波と渦巻く感情が荒れ狂うこの場において、極僅かな自分へと向けられた殺気、隣にいたハリベルならばまだしもはたして東仙がそれに気付く事ができるか否か、フェルナンドはそれを見ようとしたのだ。
結果として東仙は見事にその殺気に気が付いて見せた、それも迷う事無くこの大勢の破面の中から彼だけを”視た”のだ。
それは気配を感じるという事以上に、東仙要という死神の能力の高さをフェルナンドが知るのに充分なものだった。
そしてその強さはフェルナンドにとって好ましいものであり、彼は笑みを深めるのだった。

一方フェルナンド達の眼下に広がる壁に囲まれた砂漠ではまた一つ戦いが終わり、そして先程とは違う破面達が戦っていた。
そのどちらもが既に帰刃状態、砂漠には巨大な一本角をもった海象を模した姿、上空には翼を広げた長く鋭い嘴の、巨大な啄木鳥の姿があった。
人と獣が半々というより獣の割合がかなり多いその姿、獣性を色濃く戻した姿は本能の形であろうか。
睨みあう両者、どちらが仕掛けたのか、どちらがその”号”を奪うために挑み、”号”を守るために受けてたったのか、今やそれを知る事に幾許の意味も無かった。

結局のところこの強奪決闘の場に立った時点で、どちらかは全てを失うのだ。
今現在どちらが上位でありどちらが下位なのか、それは数字の上での優劣だけを示すのみであり、これより繰り広げられるであろう戦いの表面的な優劣に等しい。

挑んだ者は勝てるという確信のもと挑むのであり、受ける者は拒否は許されずとも負ける気などありはしない。
強奪決闘の場において数字、”号”は奪う為のものであり、上下を示すものでは既に無いのだ。

勝った者が強いという純粋な闘争のみがその場所にはあり、他は霞む、いや、欲望だけはその場で更に輝きを増すのだろう。

「ギギャァァアア！！」

「グオォォオオォオオ！！」

両者が同時に咆哮する。
それは威嚇であり同時に自身への鼓舞、全てを賭けたこの場で、そもそも戦場において気圧されるという事は敗北を意味する。
互いに勝つと、それ以上に殺すという一念の下火蓋は切って落とされる。

両者の攻撃方法は奇しくも似通っていた。
海象はその力強い一本角で、啄木鳥は鋭いその嘴で攻撃を仕掛ける、両者とも相手を刺し貫く事に特化した武器を持ち、刺突から薙ぐような動きで相手を仕留めにかかる。
だが攻撃が似通っていても互いが得意とする戦場が違っていた。
上空の啄木鳥と砂漠の海象、空と陸にそれぞれ陣取った両者、それ故戦闘は刹那的な交錯となり、互いに相手を傷つけはするものの、それは決め手を欠くものであった。

決定打を欠いた戦い、それはどちらにとっても不本意であり、間延びした戦場はそれだけで気勢を削ぐ。

故に互いに示し合わせたかのように両者が動く、啄木鳥は今まで滞空していた位置より更に上へと上昇し、海象は上半身を大きく持ち上げるとその勢いで砂漠の砂へと潜っていった。
上空という開けた空間で、啄木鳥は加速をつけた一撃を放とうと、海象は砂漠を海とし、その中を泳ぐ事で勢いを増して飛び出し貫こうとする。

充分に加速を増した両者、急降下する啄木鳥を砂漠の海から飛び出した海象が迎え撃つ。
共にその攻撃を避ける事はしない、自身を一つの弾丸とし、避けるくらいならばこの一撃で仕留める方を選んだ両者、そして交錯する二つの流弾。
衝撃の後にあるのは互いに貫き、貫かれた両者の姿だった。
鏡合わせの様に互いを貫きあった両者、そして片方にとってそれは、攻撃を加えたのと同時に相手を捕らえた瞬間でもあった。

捉えたのは海象、結局のところ武器としたものの差が勝敗を別けたのだろう。
嘴で貫いた啄木鳥はその後の攻撃手段を持たなかった、しかし海象は違う、突き刺したのはあくまで角であり、それで仕留められずとも二の矢を海象は用意していたのだ。
開かれた口には禍々しい光を放つ光球があった、それに気付く啄木鳥だがもう遅い、放たれた極光は啄木鳥の身体を腹から上下に分断し、光を受け、最早肉塊となった下半身（それ）は無残に砂漠へと落下するのみだった。

角に残った上半身を首の一振りで地へと投げ捨て、一瞥すると帰刃状態を解く海象、砂漠へと着地する頃には最早そこにいるのは海象ではなく人型の大男だった。

「勝負あり。　勝者Ｎｏ．５７（シンクエンダ・イ・シエテ）　ネトラ・クエルノ。　挑戦者Ｎｏ．６９（セセンタ・イ・ヌエベ）　トレイト・トーバーを退け強奪を阻止、現状在位とする。」

その判り安すぎる勝敗、その結果、東仙が片手を掲げ決着を宣言する。

それにより大きく揺れる会場、勝者は何を語るでもなく片腕を天へと突き上げ、それにより音の波はより一層大きくなる。

勝者はその場を後にし、何も語れなくなった敗者は下官達によって肉片として処理された。

この虚圏において命とは育むものではなく殺すものであり、日常的にそれを繰り返したこの場にいるほぼ全ての破面においてそれは娯楽に等しかった。

広義の意味では同じ存在、仲間と呼んでいいものが一体また一体と目の前で、それも同じ同胞によって殺される様を嬉々として歓声を上げる彼ら破面は、やはりどこか決定的ななにかを失い、そして壊れてしまった存在なのかもしれない。

それでも彼等はそれを止める事はしない、何故ならそれが彼らの日常だからであり、今重要なのは”号”を奪い”力”を示すほか無いのだから。

「おっと、下も決着らしい・・・・・・にしてもアイツ等解放するとああいう形（なり）になんのかよ。アレなら俺も少しは楽しめた・・・か。」

「確かに・・・な。　だがそう侮るものではない、彼等は共に在位

の者、しかし強奪決闘は”号”を”奪う”戦い、そして”号”を奪われながらも生き残った者もいる・・・・・そういった者は怖ろしいぞ、なまじ一度負けを知っている分もう二度と負けられないという狂気に駆られているからな・・・・・・」

啄木鳥と海象の戦い、それを眺めながら呟くフェルナンドは、どこかつまらなそうな顔だった。

眼下で”号”を賭けて戦う者達はある意味で知った顔、自分が一度下した相手であるからだ。

帰刃状態で戦う彼等、フェルナンドとの戦いでその姿を見せられた者は少ない、何せ小さな姿のフェルナンドを見た彼等が抱くのは一様に油断であり、フェルナンド自身相手に十全の力を出させる等という事をするはずも無く、苦戦を強いられる場合もあったが、”業”を確立しはじめた頃からは勝負は早期に決する場合が多かった。

それをどこか悔やんでいるかのようなフェルナンドの物言い、それは全員と帰刃状態で戦っていたのならば、あるいはもう少し自分も戦う事を楽しめたかもしれないという欲なのかもしれない。

しかしそれはもうかなわぬ夢、彼等が今更解放してフェルナンドに挑んだところで、フェルナンドに対抗できるかといえば難しいだろう。

彼等とて成長しているはずではある、であるのだがフェルナンドの成長はその比ではない、そして彼等が刀剣解放という手段をとるように、フェルナンドにもあるのだ、彼等と同じ手段が既に・・・・・・

そんなどこかつまらなそうにするフェルナンドに、ハリベルが一つ釘を刺す。

そのフェルナンドの様子も仕方が無いとしながらも、この強奪決闘のもう一つの顔と言うべき部分を語るハリベル。
それは奪われながらも生き残った者、という存在。
決して多くない彼等は、しかしその彼等全てを奪われたのだ、今までいた場所からいとも簡単に転げ落ち、路傍の石に混じり、見下していた者に見下されるという屈辱と絶望、それは焦燥を呼び恐怖となり、いつしか狂気を帯びるのだ。
狂気を帯びた者とは怖ろしい、凶(まが)つ獣となった彼等、その狂気は時に想像以上の力をその者に齎し、再び階を駆け上がるのだ。

そして一人、狂気の獣がこの強奪決闘の場に姿を現した。

「続いて挑戦者、番外(エクセテシオン)イドロ・エイリアス。　そして強奪に指名したのは・・・・・・　Ｎｏ．１２(ドセ)　グリムジョー・ジャガージャック。」

その男が円形の砂漠へと姿を表すと、半数の者が笑い、もう半数が野次を飛ばしていた。
「負け犬」、「恥曝し」、「負け残り」、様々な罵声の嵐、しかし東仙がその男が指名したものの名を告げた瞬間、その全てはどよめきへと変った。
その只中にいるその男は長身の割には背中を丸め、猫背になっているせいかそれほど大きさを感じさせず、黒く長い髪に隠れたその瞳は、どこか虚ろで幽鬼のように佇んでいた。

彼、イドロ・エイリアスは元々Ｎｏ．２０(ベインテ)に在位していた破面だった。
しかし、前回の強奪決闘、フェルナンドがまだこの虚夜宮に来る前に行われたそれで、彼は”号”を奪われたのだ。

奪ったものの名は『ルピ・アンテノール』、そのときの戦いは上位であるイドロを、ルピが一方的に弄るという散々たる内容であり。見ているものの誰もが、このままイドロは殺されるものだと思っていた、だが現実は違っていたのだ。

「ごめ～ん。　僕もう君で遊ぶのあきちゃった、だ・か・ら～ちょっと寝ててくれる？」

イドロがその場で聞いたのはそんな台詞が最後だった。
次に目覚めた彼は全てを失っていた、地位を示す”号”は既に無く、残ったのは命と、奪われながらも生き残った者に打たれる烙印『番外』だけだった。
彼とて負けて生き残る気などなかったのだ、だが彼の意思など関係なく彼は生かされてしまった。
敗者、弱者の生死の選択権は常に勝者が持ち、その勝者たるルピは彼を生かす事を選んだ、だがそれは慈悲などという生易しく驕った感情ではなく、ただそうした方が相手にとって屈辱的だからという悪意から来るものだった。

そしてその悪意は見事に実を結び、イドロは侮蔑と嘲笑の渦に突き落とされる。
それはおそらく地獄の日々、今まで下だった者は遥か上に座り、路傍の石同然だったものと同格、いや、それ以下の扱い。
イドロの精神が荒み、影を宿すのにそう多くの時は必要ではなかった。

その彼が再び強奪決闘の場に立つ、そして目指すのは自らの”号”を奪った者ではなく、更にその上、実質的に数字持ち（ヌメロス）の頂点である

男、グリムジョー・ジャガージャックだった。
何を思い彼がグリムジョーを選んだのかは判らない、しかしその虚ろで暗い瞳に浮かぶ感情は、地位や名誉を望む者のそれではなく、寧ろそんなものに興味を示していないような印象を見る者に与えていた。

どよめきの中、座席が設けられた壁の上から一体の破面が飛び降り、砂漠へと降り立つ。
特徴的な水浅葱色の髪、それと同じ瞳は鋭く、しかし静かに砂漠の中央に立つイドロへと向けられていた。
ポケットに両手を突っ込んだまま歩く男、グリムジョー。
幾分顎を上げ、同じ砂漠に立ちながらも相手を見下すようにしている彼に対し、イドロは目を合わせずやや前方の砂漠を見ていた。
歩を止めるグリムジョーの前には猫背のイドロがいた。
グリムジョーより長身であろうイドロは、しかし背を丸めている為その背の高さはグリムジョーと同じか少し低く見え、その風貌からは弱々しさすら漂っている。

その二人の丁度中間のあたりに陣取った東仙、特に両者を見ることもなく、片手を上へと持ち上げる。
東仙はあくまで立会人であって審判ではない、そもそもこの強奪決闘に明確なルールは一つしか存在せず、反則も何も存在しないこの戦いに審判は不要なのだ。
東仙はただ立ち会い、勝利者の名を告げ、そして明確に決められたルールを破ったものを粛清する為だけに彼はいるのだ。

「それでは・・・・・・　始め！」

東仙の号令と共に彼の手は下へと振るわれる。
それは戦いの火蓋を切って落とし、血の海と肉片を作り出すことの合図だった。

「フフ・・・・・　グ、グリムジョー・ジャガー、ジャック。お、お前をオレは殺さない・・・・・・　殺さな、いで、奪ってやるんだ・・・・・・」

目の前にいるグリムジョーを見ようともせずにイドロが呟く。
それは彼の意思表示であり闇深い精神の顕現、だがグリムジョーはそんなイドロの言葉に何の反応も示さなかった。
だがイドロの方はそれすら意に介さず、一人口を動かす。

「お前、から奪っ、て・・・　同じ、屈辱を味わっても・・・らうんだ・・・・・・あははぁ～。」

常軌を逸した笑みを浮かべてグリムジョーの顔を見るイドロ。
これがイドロの目的、数字持ち最強のグリムジョーをどん底に叩き落すためだけに、彼はこの場に立ったのだ。
日々の嘲笑、屈辱に彩られた精神は歪み、そのイドロの歪みは奪った者へではなくそれよりも上に座して自身を見下す男、グリムジョーへと向けられていた。
見下ろすならば奪う、上に立つのならば奪う、奪って奪って、そして屈辱を味わうがいい、と。
陰鬱な日々は精神を捻じ切り、あらぬものどうしを繋げ、瞳は暗く、異彩と狂気を放った。

だがグリムジョーはそんな狂気に彩られたイドロを前に顔色一つ変えず、ただ一言、明確に呟く。

「さっさと来い・・・・・・『番外』。」

見下すすように放たれたその言葉、それがこの戦いの本当の幕開けを告げる言葉だった。

滑(ぬめ)る泥の闇

湖の静謐

水底の獣

目覚めて振るわば

狂い裂き

BLEACH El fuego no se apaga. 28（後書き）

ある意味自分も予想外の展開。
フェルナンド戦う気ゼロ
引っ張り出そうにもやる気なし
変りにグリムジョーが出張ってくるという展開です。

そして今回名前だけ沢山出てきましたが、再登場の予定はなしですｗ

数字持ちの数字に関してですが、本来は単純に生まれた順です。
この作品では、それ以外の意味も持たせてみたいと考えてみましたが
ファンブック等の番号を見る限り、無理があるのは明白
一護達が虚圏突入後最初に戦った破面（アイスリンガー？）が確か
１９番だし。
しかし書いちゃったからなぁ・・・・・・
原作との齟齬は埋めたいけど、これはこれでありなんじゃないかと
無理矢理納得してみる。

最後に今回行ったアンケートにお答え頂きありがとうゴザイマス。
リクエストの件も節目毎に書いていければと思います。

そして、もし今回自分が行ったアンケートで不快な思いをした方が
いましたら謝罪を。
活動報告『ぬぉ～～』でも書きましたが
言い訳をすれば不安だったというのが全てですが、しかしアンケー

ト自体が不快（というか痛い）という方もいる様子。
やらかしたのは自分ですので、申し訳ないです。

今後はもう少しものを考えてから投稿しようと決めました。
稚拙なものですが、少しでもこの作品をよくすることで謝罪になればと思います。

BLEACH El fuego no se apaga. 29（前書き）

今までで本編最速更新かも

幕を開けた戦いは、大方の予想を覆す展開を見せていた。
振るわれる刀、おおよそ正しい構えや、足運び、刀の軌道とは一目見て違うといえるそれが砂漠に鈍く光る。
ゆらりゆらりとまるで刀の重さに任せて腕を振るっているようなその姿、一見何の力も篭っていないようなそれが一太刀、また一太刀と繰り出され、攻め立てるように振るわれ続ける。

その振るわれる刃に曝されている方といえば、ただ不規則に襲い来るその刃を避わして、避わしてを続けるのみ。
あまりに不規則、そして変則的なその刃の軌道に戸惑っているのか、反撃らしい反撃を見せていなかった。
彼の身体の直ぐ傍を通り過ぎていく切っ先、振るわれる方は無表情にそれを眺め、振るう方は嬉々として刃を振るい続ける。

Ｎｏ．１２　グリムジョー・ジャガージャックと、番外位イドロ・エイリアスの戦いは大方の予想を覆し、イドロが攻め立て、グリムジョーが反撃もなく避け続けるというある意味異常な光景を作り出していた。

「これは・・・・・・　どうにも理解できんな・・・・・・・」

「　あの野郎・・・・・・・」

そんな不可解な光景を、フェルナンドとハリベルは先程と同じテラスから眺めていた。
己が好敵手と定めた相手の名が呼ばれ、フェルナンドはその戦いを見るべくテラスの端へと、ハリベルもそれに続く形で眼下の砂漠を見ていた。
だが戦いが始まってからというもの、フェルナンドの目当てであるグリムジョーは一切反撃らしい反撃をせず、ただ相手の攻撃を避け続けるのみ。
そのあまりに不可解な光景にハリベルは困惑を浮かべ、フェルナンドの方はなんとも言いがたい怪訝な表情をしていた。

「・・・どう思う？　フェルナンド・・・・・・」

ハリベルからフェルナンドに投げ掛けられる問、しかしフェルナンドは「知るかよ・・・・・・」、と答えるのみ。
問うたハリベルからしても理解できないのだ、フェルナンドとてそれは同じ事なのだろう、だが問わずにいれなかった彼女を責める事は出来ない、それほど彼らの眼下で繰り広げられる光景は不可解だったのだ。

その光景は端的に、そして簡潔に言ってしまえばグリムジョーが格下であるイドロに圧されている、というもの。

これがただの数字持ち同士の強奪決闘（デュエロ・デスポハール）だというのならばいい、だが今戦っているのは明らかに他と一線を隔す実力を持ったグリムジョーであり、それが元Ｎｏ．２０であるといっても格下のイドロに攻め立てられるような様は、ある種異様なのだ。

そうして攻め立てられるグリムジョーを見下ろす二人、その二人に背後から声がかけられる。

「これはこれは美しい淑女（セニョリータ）、こんな血生臭い場所で出会えるとは吾輩なんたる幸運。こうしてお目にかかれるだけで吾輩今日一日、いや、今週の間は天にも上らん程の上機嫌で過ごせる事でしょう。なにせ美しい淑女はこの虚夜宮、さらに外の砂漠を含めた虚圏随一の美貌の持ち主、吾輩の『嗚呼、美しき女性破面番付』では既に殿堂入りでありますからな！」

ハリベルとフェルナンドの二人の背後から現われたのは、短い黒髪に丁寧に整えられた口髭と顎鬚の、屈強な壮年の男、第６十刃（セスタ・エスパーダ）ドルドーニであった。

その声に振り向く二人、だがドルドーニはといえば振り向いた二人にお構い無しに、ハリベルへ歯の浮くような台詞をこれでもかと繰り出していた。

とうのハリベルは、そのドルドーニの言葉に特に反応も見せず、そしてフェルナンドはといえば何か奇妙な生物でも見つけたかのような顔で眉をひそめ、目の前の生物を見ていた。

「おいハリベル。”コレ”は何だ・・・・・・？」

そう言って目の前の生物、ドルドーニを指差しながらハリベルに問いかけるフェルナンド。

指を指されたドルドーニは、「吾輩を指差すとは何事か！」と両腕をばたばたと動かし、地団駄を踏みながら怒るがフェルナンドはその姿を一切意に介さなかった。

それはハリベルも同じ事で、しかし問われたハリベルは、「あぁ」と何事か納得し、フェルナンドの問に答える。

「そういえばお前はまともに彼に会うのは初めてだったか・・・・・・彼はドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ、私と同じ十刃の一人にして『第６』の席に座す男だ。」

ハリベルの言葉に多少の驚きをフェルナンドは見せていた。

フェルナンドとドルドーニ、すでに邂逅を果たしているはず両者ではあるがそれには明確な違いがあった。

それはフェルナンドがドルドーニを知らない理由と直結する、なぜならドルドーニが彼の前に現れるとき、フェルナンドはいつも意識を失っていたのだ。

それは最初のグリムジョーとの戦いの後であり、第２十刃ネロとの戦いのあとでもそうだった。

意識を失っているのだから、当然その間のやり取りや、その場にいた人物の事など憶えている筈もなく、結果フェルナンドにとって今回の邂逅がドルドーニとの初対面という事となった。

「お初にお目にかかるね、少年（ニーニョ）。吾輩が第６十刃　ドルドーニである。敬意を込めて紳士（セニョール）ドルドーニと呼び給え。」

対してドルドーニといえばハリベルの言葉に胸を張り、なにやら数回ポーズを決めながらフェルナンドに挨拶するが、自ら自称する”紳士”としてその行動が適切かどうかは疑問だった。

「少年・・・か、チッ！　それで？　十刃のオッサンが一体何のようだ？」

なんとも面倒臭そうなものが表れたといった表情でドルドーニを見るフェルナンド、そしてぞんざいな態度で何故ドルドーニが来たのかを尋ねる、当然『紳士ドルドーニ』とは呼ばなかったが。
その態度は確かにドルドーニという未知の存在によるものもあるだろう、しかしその実はもっと別、具体的には眼下で繰り広げられる戦いが気になり、相手をするのが面倒であるという部分が大きかった。

「むぅ・・・　少年まで吾輩をオッサン呼ばわりとは・・・・・・青年（ホーベン）といい、まったく最近の若者というのは敬う事を知らんようだ、嘆かわしい事であるな。そもそも今の君らが在るのも吾輩達、先達の破面がいればこそだという事を考えて貰っても吾輩、何の罰も当たらないと思うのだが？」

「・・・・・ドルドーニ。　貴様本当に何をしに来たのだ・・・・・？」

フェルナンドの自身の扱いに不満なのか、ドルドーニが愚痴を零し始める。
しかしそれすらももう一人、ハリベルによって無残にも流され、ド

ルドーニは盛大に肩を落とし、わざとらしく溜息をついて見せるがそれに対する反応はやはりなかった。

「うおっほん！　あ～吾輩もこの戦いには少々興味があってね。何せあそこにいる青年とは何分浅からぬ仲、ということさ。」

気を取り直したドルドーニは一つ咳払いをすると、フェルナンドとハリベルのいるテラスの端まで歩み寄り、二人同様眼下の戦いを見据える。
その視線に捉えられているのは黒い幽鬼、イドロではなく水浅葱色の髪の男、グリムジョーであった。

「ほぅ、では貴様にあのグリムジョーが師事している、という話は本当だったのか。」

「師事、と言えるかどうかは判りませんが、手合わせをしているのは間違いでは在りませんよ、美しい淑女。」

ハリベルの言葉、それは風の噂で聞いた話し、第６十刃にＮｏ．１２が師事している、というものだった。
グリムジョーという男を知っているものからすれば、それは明らかに眉唾物の話し、あれほど自尊心の高い男が誰かに師事する、誰かの下につくなどということはありえない、と。
だが現実ハリベルはドルドーニの言葉と、彼の視線からそれがただの噂ではなく真実であると確信した。
それに対しドルドーニは曖昧ではあるがそれを認める。
その曖昧さは自分が師として認められているかどうかという部分も然ることながら、それが事実であった時、グリムジョーという男の

今後を彼なりに考えたものだったのだろう。

「師匠・・・ねぇ・・・・・・　じゃぁ”アレ”もオッサンの指示かなんかかよ・・・・・・」

ハリベルの師匠という発言、それにフェルナンドは小さく呟くと、そちらを向く事すら惜しいと下を見据えたまま、ドルドーニの方に視線は向けずに彼へと問う。

その視線の先では相変わらず圧されている様に見えるグリムジョーの姿があった。

揺らめく切っ先は、もう少しでグリムジョーの鼻先を掠めるのではないかというほどの距離を通り過ぎていく、斬魄刀を振るうイドロの方はわざと当てない様にしているのか、そうしてギリギリで避けるグリムジョーの姿を愉しんでいるのか、嬉々として刃を振るい続けていた。

ドルドーニはそんな眼下の様子を見やると、ほんの少し口元に笑みを浮かべフェルナンドに答える。

「少年は、どうであって欲しいのだね？」

「あぁん？　そいつは一体どういう意味だよ・・・・・・」

悪戯な笑いを浮かべながらフェルナンドにそう問いかけるドルドーニ。

その視線は先程までのふざけた態度を感じさせず、どこかフェルナンドを品定めしているかのようなそれだった。

対してフェルナンドはその言葉に眼下へと向けていた視線をきり、

ドルドーニの方を見据える。
訊いて答えが返ってくるとも思っていなかったが、質問で返されるのは予想外だったのだろうか、フェルナンドの方もドルドーニの真意を探ろうと瞳は逸らさない。

「言葉通りの意味なのだが・・・ね・・・・・・まぁ”アレ”は吾輩がなｎッ、おや、どうやら動きがあったようだね。」

ドルドーニは話しかけた言葉を切り、視線を眼下へと戻す。
フェルナンドの方もドルドーニを見ていたが、眼下での霊圧の変化を感じ取り視線を戻していた。
ほんの一時目を逸らしただけで眼下の状況は一変していた、そこには爆ぜた霊圧によって弾かれたのか、やや壁際まで後退したグリムジョーと、そして中央には黒髪のイドロ・・・・・・ではなく、うねる白い異形が陣取っていた。

――――――――――

「ひはっ！　ひはひゃひゃ。　どう、した～　１２番。当たるぞ～　もう少し、で当たるぞ～、ひひゃひゃにゃひゃ！」

狂った笑い声を上げながら斬魄刀を振るうのはイドロ・エイリアス。
対してその標的となっているグリムジョー・ジャガージャックは、
己の腰に挿す斬魄刀を抜く事すらなく、ただひたすら自らに襲い掛
かる刃を避け続けていた。
彼へと襲い来る刃は一言で言えば”蛇”のようだった。
ゆらゆらとその牙に乗る真意を隠しながら獲物に近付き、虚を突く
かのような一撃で丸呑みにする。
逃げる獲物を必要に追い、決して逃がす事無く、獲物がどんなに離
れようとも何時しか追い着く粘着質の殺意、それがイドロの刃には
こびり付き、それ故に”蛇”なのだった。

袈裟懸けに放たれた斬撃は、半ばで刺突に変化しさらにそれが刃を
返して首を薙ぎに来る。
身体が大きく沈んだかと思えばその実沈んだのは身体だけ、長い手
に逆手で握られた刃は上からグリムジョーを襲い、避けられれば躊
躇いなく斬魄刀を手放し、持ち替えて追撃をする。
そしてその全ては相手の死角からの斬撃だった。

それは虚実という戦いの機微を無視した”虚”のみの剣技、それを
態とグリムジョーに当てないようにして放つイドロ。
刃がその身の直ぐ傍を通り抜ける、ほんの少しでも踏み込んでいれ
ば肉は裂け、血潮が弾けるであろうギリギリの距離を狙い澄まして
放つイドロの行為は、相手を仕留める為のものでなく、ただ相手の
恐怖を煽る為の行為だった。
彼がその”号”を剥奪されたときに感じた感情はやはり恐怖であり、
イドロはグリムジョーを座から堕とす事よりも、まずはそのグリム
ジョーの顔が恐怖に歪む顔が見たいと、斬魄刀を奔らせる。

”号”などもはやイドロにとって何の意味もなく、目的は奪う事の

みであり、得る事など眼中にないのだ。

「お、オレを『番外』と呼んだ・・・のに～。手も、足も、出ないのか？　ふふひゃ！　も、しかして、避けるのがうまくて・・・12番になれたのか？あはひゃひゃふひゃぁぁ～！！」

「・・・・・・・・・・・・」

気勢を増すイドロと無言のグリムジョーという構図は、それを見ている数字持ちの誰しもが予想していないものだった。

いくら変則的な刀捌きだとしても、それのみでグリムジョーがあそこまで圧し込まれるというのはおかしいと、ならばそれは刀捌き云々ではなく、純粋にグリムジョーよりイドロの方が強いのではないかと、そう疑念を抱かざるを得ない光景、彼らの前で繰り広げられるのはそれが真実なのではないかと錯覚してしまうほどの出来事だった。

一度抱いた疑念は急速に膨らみ、もしかすればグリムジョーは腰に挿した斬魄刀を抜かないのではなく、抜けないのではないか、その隙すら見つけられぬほど二人の力は隔たっているのではないかという妄想すら生み出していた。

そうした多くの疑念の目が見守る中で、しかしイドロはそれに流される事なく、ただ自分の目的と愉悦の為だけにその”蛇”を振るい続ける。

鎌首を持ち上げ、身を縮ませ、一息に飛び出し喰らいつく、それを避け続ける相手の姿、暗い暗い虚ろな瞳が今や爛々と輝き、しかし

その輝きは暗さを増したが故の狂気の輝きだった。

彼の瞳に映るのは目の前のグリムジョーの顔が恐怖に歪む一瞬の顔、だがそれは彼の夢想であり、現実のグリムジョーは一切の表情というものを見せていなかったが、それすらイドロには関係ない。

彼が見ている夢想は彼の中の現実であり、彼がこの場に立っているのはその夢想を己以外の現実とするためなのだ。

「感じるか？グリム、ジョー・・・背後に近付く、オレの、気配を・・・・・聞こえるか？お前に迫る足、音が・・・・・・俺が、引き摺り落としてやる。　肩に手を掛け、一気に・・・後ろに・・・引いてやる・・・・・・その先に足場なんてないんだぁ～　・・・ふひゃ！落ちるぞ、堕ちるぞ、墜ちるぞぉ。　一息に地の底まで・・・・・真っ、逆さまだ、あひゃひゃふひゃひゃひゃ！！」

「・・・・・・・・・・・・」

己の夢想と高まる感情、捲くし立てる言葉に酔いしれる様なイドロ。

見えるのは奈落へと落ちるグリムジョーの姿、かつての自分の姿、それを今度は自分が上から眺める姿。

なんという愉悦、なんという歓喜、なんという快楽、それが彼の内側を掻き毟る。

はやく見せろと掻き毟るのだ。

対してグリムジョーは無言、イロドの異常性に隠れてはいるが、これもまた異様な雰囲気をかもしていた。

無言であり無表情、おおよそ感情というものを表に出さないそれは、戦士としては一流なのかもしれないが、それだけに彼らしさという部分では違和感を拭えなかった。

「どう、した？　声も出ないか？　・・・・・・ならもっと・・・もっと、もっともっと！声が出ないように・・・してやる！『詰(なじ)れ！七頭蛇(キリム)！』」

イドロが更なる”力”を解放しようと動き出す。
手にした斬魄刀を逆手に持ち、それを自らの左胸へと一息に突き立てたのだ。
明らかな凶行、だが吹き出るべき血潮は見て取れず、破れた服の下にあるのは空洞であり、斬魄刀は胸の孔を通過しただけだった。
そして訪れる変化、名を呼ばれ、そして突き立てられた彼の分身はその力を回帰した。

爆発する霊圧の余波で弾かれるように壁際あたりに追いやられるグリムジョー。
それでも彼の表情に変化はない、そして爆ぜた霊圧とそれに巻き上げられた砂がたち込める中、その砂に映るうねるような影、それが晴れるとそこには背中から六つの蛇の頭を生やしたイドロの姿があった。
上半身の死覇装はなくなり、代わりにその身体は鱗に覆われ、足と指の爪は鋭く尖って曲り、見れば彼の顔自体も人と蛇が半分ずつ混ざり合ったように変化していた。
爬虫類独特の鋭く、縦に裂けた瞳は相変わらず暗さを色濃く宿し、シュルシュルと時折見える先が割れた舌が不気味さに拍車をかける。
背の六つの蛇は一つ目で、それぞれがうねりながら獲物であるグリムジョーを見つめ、舌なめずりを繰り返す。

帰刃状態となったイドロ・エイリアスは、その不気味さを更に増した姿でグリムジョーの前に立ちはだかった。

「どう、だぁ？　感じるか？　恐怖を・・・・・・これか、ら思う存分味わうんだ、ふひゃ！　殺さない、ぞ・・・どんなに、喚いても、殺さない。　生きたまま、お前の全、てを奪ってやるんだ～ひゃひゃ！」

刀剣解放し、強大となった自身の霊圧と身体、それに酔いしれながら夢想を加速させるイドロ。
最早彼にとって、自分の勝利は疑うべきものではなくなっていた。
この姿を見ても一向に動こうとしないグリムジョーの姿、それにかつての自分を重ねるイドロ、恐怖し動けなくなる身体、精神は既に屈し、断命の一振りを待つのみの自分、それが今のグリムジョーの姿だと彼は疑わなかった。

「オレの、刀一本避け、るのに・・・精、一杯だった、お、お前が、この、六頭の蛇を・・・避けられる、はずもない。ふひゃ！弄ってやるぞ、弄ってやるぞ。　四肢に噛み付き、胴を締め上げ、折れ、ないギリギリで・・・首も、締め上げるんだぁ～ふひゃひゃひゃ！！」

そう宣言し、グリムジョー目掛けて駆けイドロの背に生えた蛇達がその身を伸ばし、一斉に襲い掛かる。
イドロに狂気の笑みが浮かぶ、奪う瞬間の愉悦、相手の命を掌握し、生かすも殺すも全てをその掌に納め転がすような快感、イドロに溢れるのはそういった感情だった。
挫折と、屈辱と、虚無と絶望、その果てにあったのは羨望と嫉妬、そして復讐だけだったのだ。
しかし狂った精神による復讐、自分と同じもの全てを味あわせるた

めだけの復讐、その先などイドロにはない、目的が復讐であってその後など考えもしないのだ。
ただただ、その為だけにイドロはこの日まで生きてきたと言っても過言ではなく、その成就を前に夢想に浸るのは致し方ないことだともいえた。

グリムジョーへと迫る彼、背中で鎌首を持ち上げた蛇達はその身を引き絞り、そして一息にグリムジョー目掛けてその牙を奔らせる。
イドロが指摘したとおり、刀一本を避ける事に終始していたグリムジョーが六匹の蛇を避けられるとは思えず、それを見ている数字持ち達も、認めたくはないが自分達の最強の象徴が敗北する様を想像する。

しかし、夢想も想像も等しくはその者だけが見る幻であり、現実は何時だってそんなものを越えていくものなのだ。

グリムジョーへと迫るイドロの蛇、四方、いや六方から迫るそれはまるでグリムジョーに覆い被さるかの如くうねり来る。
それぞれに一つ、計六つの目がグリムジョーを捉えていた、しかし彼等蛇達がグリムジョーを捉えようとした瞬間、彼等の目を眩い蒼の閃光が覆い、それが彼等の見た最後の光景となった。

「この程度か・・・・・・　つまらねぇ・・・所詮は『番外』だな・・・・・・」

そんな呟きが会場全てに聞こえた気がした。
それだけ辺りは静まり返っているのだ、目の前で起こった光景に、グリムジョーが放った極光によって。
それは単純な虚閃であり、しかしその威力は絶大、ポケットから出した手に集まった凶悪なまでの霊圧は瞬時に砲弾を形成し、グリムジョーはただ掌を返し迫り来る蛇に向けてそれを放っただけで、イドロの蛇達はその頭を消し飛ばされたのだった。

「い、一体、何が・・・・・・　何故だ・・・オレの・・・オレの、刀を、避けるだけしかで、きなかったのに・・・・・・そんな・・・そんな、馬鹿な・・・・・・・」

それに狼狽するのはイドロ、当然だろう、今まで自分が圧していると思っていた彼、もう少しで自分の描いた夢想の極地に至るはずだった彼、しかし目の前の現実は刀剣解放した自分の最たる攻撃手段が、一瞬にして消し飛ばされるというものだったのだから。
彼にあるのは疑問だけだろう、自分の刀を避けるだけしかできなかった男が反撃を、しかも圧倒的な反撃を繰り出したのだから。
そんな彼の疑問、そしてそれに答えられるのはこの場では唯一人だった。

「あぁん!?　誰が避けてたって?　クズが・・・テメェの攻撃があのクソガキに、ちょいとばかり似てるかと思って付き合ってやったが、駄目だったな・・・・・テメェのはクズの戦い方だ、正面から勝てないから裏をかくクズの戦い方、真正面から殺す事だけを考えてやがるあのクソガキとは似ても似つかねぇ・・・・・」

イドロの疑問にあっさりと答えるグリムジョー。
彼は言うのだ、避けるしか出来なかったのではなく、ただお前に付き合ってやっただけだと、そうでなくては誰がお前のような者の相手などするものか、と。
グリムジョーが最初にイドロの剣技を見たときに思った事は、“似ている”だった。
その奇抜な動き、自分の意識の外から襲い来る攻撃、流れの中で変化する一撃一撃が似ていると、自分に刻み込んだあの忌まわしい少年のそれに。
それ故に彼はあえて刃を避け続けるという選択をしたのだった。

「う・・・うぁ、あぁ・・・・・・」

「テメェの刀は俺を激しくイラつかせた・・・・・・楽に死ねると思うなよ？　『番外』。」

グリムジョーがその身から殺気を放つ。
濃密なそれはまるで物質になったかのようにイドロに圧し掛かる。
一歩一歩イドロへと近付くグリムジョーの姿を、イドロはただ呻き、見ていることしかできなかった。
彼には判ってしまったのだ、どちらが強者で弱者なのか、引き摺り下ろすと息巻いていた自分のなんと愚かしい事か、と。
もう、目の前の死から逃れる事はできないのだと。

グリムジョーは怒っていた、忌まわしき少年と重なって見えたその刃、それは来るべき決着のための試金石になるはずだった。
だがそれは失敗であった。
避け続ける事を選択したグリムジョーがその刃に見たのは、その刃に重ねた拳から感じたものとは似ても似つかないものだったのだ。

フェルナンドの拳から感じるのは”熱さ”、ただ相手を打倒し、真正面から殺す事だけを純粋に貫く”熱さ”だった。
しかし、先程まで目の前で振るわれていた刃から感じるのは”熱さ”とは違うもの、相手の裏をかき欺いて落しいれてやろうという”卑屈さ”だった。

あまりにも不快、そしてそれは重なったあの少年の”熱さ”を濁らせ、自分とあの少年との戦いに泥を塗るものに彼は感じた。
ならばもう必要ないと、見せられるものがそれだけなのならばもう死ねと、グリムジョーは無理矢理に押さえていた自身の獣性を解放する。
無表情は消え去り、殺気の滲むその顔はイドロの狂気など霞むほどの凶気が浮かんでいた。
ただ目の前の不快を破壊する、刀など必要ない、この爪で引き裂き、侮辱した事を後悔しながら死んでいけ、そんな思いを存分に滾らせてグリムジョーはその歩を進めるていった・・・・・・

―――――――――――――

「やはり・・・か。」

「ハッ！　当然だろ。　あんなふざけた戦い方しといて圧されてる、

ってのが無理があるぜ。」

テラスからそのグリムジョーの虚閃を見ていたハリベルとフェルナンド、互いに口にするのは”意外”ではなく”当然”という感情が篭った言葉。

彼等初めからグリムジョーが本気でない事はわかっていた。

他の数字持ち達とは違った意味での困惑、どうして圧されているのかではなく、何故無理矢理あの程度の相手に付き合うのか、という事だった。

そして何より二人に不自然さを覚えさせた事柄が一つあったのだ。

「ほぅ・・・　美しい淑女（セニョリータ）はともかく、少年（ニーニョ）は気付いていたのかい？青年（ホーベン）の戦い方に。」

「・・・・・馬鹿にしてんのか？　オッサン。あんなもん誰が見たってふざけてんだろうが、態と相手の刀に踏み込む・・・なんてよ。」

ドルドーニが揶揄するようにフェルナンドに話しかけるが、それをフェルナンドは当然知っていたと答えた。

ドルドーニはともかくとして、ハリベルとフェルナンド、この二人がグリムジョーの戦い方を見て明らかに不自然さを感じた最たる理由。

それは、グリムジョーは迫り来るイドロの刃に退いて避けるのではなく、逆に踏み込んでいる、という事だった。

イドロがグリムジョーの身体のギリギリを狙い繰り出していた刃、だがグリムジョーはそれの上をいき、自ら踏み込んで更にその身の際まで刃を近づけていたのだ。
そんな事をする理由など見ている者に判る筈もなく、しかしそれが出来るという事はグリムジョーにはイドロの刃が完全に見えているという事に他ならず、そうしてグリムジョーが踏み込んでいることにイドロが気付いていない時点でこの二人の”差”は明確であり、勝敗など考えるだけ無駄な事だったのだ。

「さて・・・　もう見るものはねぇな。　俺は先に帰るぜ、ハリベル。」

「おや？　いいのかい？　結末を見なくても。」

グリムジョーが虚閃を放ち、その力を見せ始めるとフェルナンドはテラスからはなれその場を後にしようとする。
それにドルドーニはこの先を見なくてもいいのかと訊くがフェルナンドは背を向けたままヒラヒラと手を振り「見なくても判る」と一言残してその場から出て行ってしまう。
残されたドルドーニはなんとも不思議なものを見ている気がしたが、それにハリベルが小さく笑って答えた。

「なに・・・滾っているのだろうさ。　自分の好敵手と定めた者が自分を意識している、それはアレにとって何よりも嬉しいのだろう・・・・・一度は落胆させたかもしれないと思った相手が、その実自分の事を刻み付けていた・・・ならば自分は更に強くならねば・・・とな・・・・・・」

「なるほど・・・・・　見なくても判るのではなく、その実このまま見ていれば今、死合いたくなってしまう・・・と。それは両者ともまだ望むべきものではない・・・と。いやはやなんとも”熱い”ですな、少年は。」

ハリベルが語るフェルナンドの本当の理由、それは結果が判るから見ないのではなく、それ以上に今やるべき事ができてしまったからだという事だった。
それはただ力を求め、更なる強さを手に入れること、自分が定めた好敵手、一度は相手にとって自分は価値がないと思い、そしてそう思わせてしまった自分を悔いた彼にその相手が見せた爪痕。
自分は刻み込んでいたのだと、そして自分も深く刻み込んでいると、そう確信し彼は、それならばやる事はひとつだとその場を後にしたのだ。
ただ来たるべき時、恥じぬ戦いをするために、と。

一人その場を後にし、廊下を歩くフェルナンド、その耳に届くのは世界を揺らす歓声の轟音、それは決着の知らせでありどちらが勝者なのかなど想像の必要すらなかった。
それを背にしながら歩く彼の拳は強く、強く、そして硬く握り締められているのだった・・・・・

それぞれの思惑
望通りの結果と
叶わぬ使命
臨む舞台と
相容れぬ者よ

BLEACH El fuego no se apaga. 29（後書き）

王道です。テンプレとも言います。
圧されてた方が勝つのです。
そして戦いの結末はあえて書かないのです。
判りきってはいますがねｗ

最初の二人の会話が後半への伏線っぽくなってればいいなぁ。
そしてやっぱりドルドーニは出て来るよねｗ
ていうかもうこの二人はセットだよねｗ
ヤツは勝手に喋るから書きやすいよ。

そしてコチラではあまり関係ないかもですが
Ａｒｃａｄｉａ様の方で、次回更新よりチラシの裏からその他板へ
移動を考えてます。
アンケート結果で多少の勇気をもらいましたｗ

地響きのような音が鳴り止まぬ会場。
それは強者だけに送られる賛辞であり、その声の内容が賞賛であれ罵声であれそれは関係なく、それをその身に一身に受けているという事が既に強者、そして勝者である事の証明に他ならなかった。

そんな強者のための賛美歌が鳴り響く会場の廊下を、フェルナンドは一人歩いていた。
硬く握られた拳、口元に浮かべた笑み、そして鋭さを増した眼光が彼の昂ぶりを如実に示していた。

それもその筈なのだ、フェルナンド・アルディエンデという破面が自身の存在に深く刻み込んだ者のうちの一人、一度は対等と思い、しかしその実互いに持つ”力”は大きく隔たり、それ故戦いの中で落胆を与え、自分という存在を刻み付ける事が出来なかったと思っていた男。
その男、グリムジョー・ジャガージャックが自分と同じようにその

身に、フェルナンド・アルディエンデという存在を刻み付けていた、という事実。

相手の斬魄刀に自ら踏み込み、態と紙一重で交わして見せるその度胸と技。

そしてそれが出来ると言う事は即ち、相手の攻撃の全てに後の先が取れるという事に他ならず、それを自分の拳に見立てたと言う彼の言葉、フェルナンドにはそれが自身への挑戦状に聞こえていた。

これ位ならば避わせると、自分に掠るどころか逆に殺すと、そして・・・・・お前はこの程度ではないだろうな？　・・・と。

グリムジョーにその意思があったかは定かではない。

しかしフェルナンドがそう受け取った以上それが彼にとっての真実であり、その事実に彼の血潮は沸き立っているのだ。

（いいぜ、グリムジョー・・・・・　こいつは喧嘩だ。気取ったもんは何一つねぇ。　ただの喧嘩をしようじゃねぇか・・・・・・）

フェルナンドの口元の笑みが一層深くなる。

彼にとって戦いに大儀や正義、そもそも理由も必要ではないのだ。

強者が目の前にいる、どうしようもない強者が目の前にいる、そうなれば彼の持つ選択肢は一つしかない。

彼が求める”生きている実感”は彼にとって戦いの中にしかなく、それを感じるにはより強い者と戦う他に、彼は術を知らないのだ。

望むのは最高の舞台、いや、正確には場所など何処でもいい。

向かい合った両者がいれば、そこが最高の舞台となる。
それに臨むにはもっと、もっともっと強くなるのだと、そしてグリムジョーに、更にはあの女にも勝つのだと決意も新たに廊下を歩くフェルナンド。
だがその歩みを遮る者が現れる。

「少々待ってもらいましょう、フェルナンド・アルディエンデ。」

唐突に掛けられた声は、フェルナンドの行く先を遮るようにして現れた男から発せられたものだった。
東仙要と同じ褐色の肌、しかしこちらの方が明らかに強靭そうな身体つきをしており、前掛けが垂れ下がったような上着は、その隆起した肉体の形をなぞっていた。
耳には髑髏を模した飾り、眉はなく厚めの唇をし、後ろ手に組んだ手には斬魄刀が握られている。
そしてその体躯ゆえか、それとも別のものなのか眼前のフェルナンドを見下ろすようにして立つ男、その男に行くてを遮られたフェルナンドは歩を止め、その男と相対した。

「なんか用かよ。　・・・・・それよりまずテメェは誰だ?俺は今機嫌がいい・・・　だからくだらねぇ事で呼び止めんじゃねぇよ。」

おおよそ初対面の相手にとるべきものではないフェルナンドのその態度、明らかに相手にすることが面倒だという事を隠そうともしない彼。
だがそれも仕方が無い、フェルナンドが言うとおり彼は今機嫌がいいのだ、それも最高に昂ぶった状態、それが削がれてしまうのは誰

だって気分のいいものではない筈だ。

「なるほど・・・・・・　やはり貴方は礼儀を知らぬ”獣”のようですね・・・」

そんなフェルナンドの態度に、その男はあからさまに落胆と侮蔑の態度を示す。

目を伏せ、軽く頭を左右に振りそう口にする男、それは挑発の類ではなく心底そう感じているような態度だった。

「ハッ！　言ってくれるぜ。　ならテメェはどうなんだ？初対面の相手に名も名乗らねぇ、それとも名乗らねぇのがテメェの礼儀か？」

自分を馬鹿にしたような態度をとるその男に、フェルナンドは怒る事はせず、逆に皮肉気な笑みを浮かべて言葉を返す。

名前も名乗らず相手の礼儀知らずを嘆く、そんなお前こそ礼儀知らずではないのかと、そんなお前に礼儀を語る資格があるのかと。

フェルナンドの言葉に男は若干の驚きを見せ、しかしそれは直ぐに霧散し表情から消えていた。

「確かに・・・一応考えるだけの頭脳は持っているようですね。・・・・・いいでしょう。　私の名はゾマリ、崇高なる絶対支配者、藍染惣右介様より恐れ多くも『7』の数字を下賜されし愛の忠臣、『第7十刃（セプティマ・エスパーダ）』ゾマリ・ルルーです。　本来ならば貴方のような獣が言葉を交わすことすら出来ない存在ですよ。」

「チッ、十刃（エスパーダ）、十刃（エスパーダ）、十刃（エスパーダ）・・・か。どいつもこいつもうるせぇなぁ、それで？　その偉い第7十刃サマが俺みたいな、はみ出し者に

何の御用でございますかねぇ、っと。」

その男、第7十刃　ゾマリ・ルルーは高らかに宣言した。
半分はフェルナンドに指摘された礼儀としての名乗り、そしてもう半分はその自身が発する言葉に酔いしれながら。
彼にとって『7』という数字は何より特別なものであり、彼にとっての絶対者である藍染から下賜されたその数字は、誇るべき称号であり同時に藍染への忠節の証であった。

対して、フェルナンドはそれをウンザリした表情で見ていた。
階級、位階、順番、上下、ここにいる者は二言目にはそれを語る、フェルナンドにはそう感じてならなかった。
それは今まで強奪決闘（デュエロ・デスポハール）という戦いを見ていた、というせいもあるのだろう。
上だという証明である番号、フェルナンドにはひどく曖昧で無意味に見えるそれをさも誇らしげに、そして絶対のものとして謳う目の前の男に彼は辟易していた。

最高だった気分に水を刺した男、気落ちしたそれをこれ以上落したくないのか、フェルナンドは適当に相手が好くであろう態度であしらい、その場を去ろうとしていた。
まぁそれがどうにも嫌味が込められてしまったのは、仕方が無いことなのだろうが。
そのフェルナンドの態度にゾマリは表面上特に反応した様子を見せず、そして宣言した。

「はみ出し者・・・・・・　言いえて妙ですね。その自覚があるのならば話は早いでしょう・・・・・フェルナンド・アルディエンデ、私と強奪決闘の舞台で戦いなさい。言っておきますがこれは要

望ではなく命令です、罪人は断罪せねばならない、そして衆目の下で首を刎ね、曝す事でしか罪を償う術はないのです。」

一方的であり高圧的に語られたその言葉、フェルナンドを罪人とし、その処刑を見せ付けるためだけに強奪決闘の舞台に上がれというその言葉。

それは即ち、自分に殺されるために戦えと言っているのと等しく、しかしゾマリの言葉に戯れの感情は微塵も挟まれておらず、彼が本気で、その余人が聞けば戯言と笑われるような事をフェルナンドに命じているということを伺わせた。

だがゾマリはフェルナンドという破面を知らない。

そもそも誰かに命ぜられればそれが何であれ、否と答えるのがフェルナンドなのだ。

誰にも、そして何にも縛られない彼、おそらくこの虚夜宮で藍染に次いで権力と実力を持つ第1十刃、”大帝”バラガンの言葉すら意に介さず、逆に命ずるほどの豪胆さを持つフェルナンドに対し、真っ向から”命令”だと言い放てば彼がなんと答えるか、彼を知る者ならば想像に難くないものといえるだろう。

そしてフェルナンドの口元が皮肉気に歪んだ。

「いいぜ。　やってやるよ、テメェと・・・な。」

予想とはえてして覆されるために在るというのだろうか、フェルナンドが口にしたのは”否定”ではなく”肯定”だった。

それは気落ちしたにせよ昂ぶっていた精神によるものか、それとも

ただ目の前の男が気に入らないのか、はたまた純粋に戦いたいのか、それは定かではない。
だが今重要なのはフェルナンドがゾマリの言葉を受けたという事であり、それは即ち十刃という虚夜宮の一角に挑むという事に他ならないということだった。

「・・・・・解せませんね。　殺す、と言われているのですよ？　それとも罪を償うつもりになりましたか？」

あまりにもアッサリとその勝負を受けたフェルナンドに、言い出した本人であるゾマリも若干怪訝な表情をする。
それもその筈、首を刎ねると、殺すと、そう言われているにも拘らず、彼の目に映るフェルナンドは笑みを浮かべているのだ。
獰猛な笑み、正しく獣の笑みであるそれを浮かべるフェルナンド、そのフェルナンドはそんなゾマリの言葉を鼻で笑う。

「ハッ！　そもそもその罪とやらに思い当たるもんが無ぇよ・・・・・だがな、売られた喧嘩は買うさ。　大層なお題目で飾っちゃいるが、要するに俺が気に喰わねぇんだろ？だから殺したいんだろうがよ。　なんなら俺は今すぐでも構わねぇぞ？」

「なるほど・・・・・・　この崇高なる私の使命を、喧嘩などという低俗なものでしか捉えられないとは・・・・・・下賤な獣めが・・・・・」

何の事はない、フェルナンドはただ売られた喧嘩を買っただけだと、そう言い切った。
相手が誰だろうと関係は無い、それが十刃だろうが、数字持ちだろ

うが、死神だろうが、それ以外の誰だろうが彼には関係ない。
”覚悟”を持って自分と相対した者がいる、己の意思でもって決断し、自分と相対した者がいる、それは既に彼にとって敵でありそれならば彼が取る選択肢は一つ、叩き伏せる事だけなのだ。

そんなフェルナンドの”喧嘩”という言葉にゾマリは隠す事無く侮蔑と嫌悪の視線を向ける。
崇高な使命、それが犯されたような感覚を味わうゾマリ、常の丁寧な口調から地金が覗いたかのような呪いめいた言葉が漏れる。
だがそれすらも押さえ込み、またしても丁寧な口調に戻し語りだすゾマリだが、心中は穏やかではなかった。

「いいでしょう。・・・その思い上がった態度とその命を代価として粛清してあげます。ですが先程のＮｏ．１２の戦いで今回の強奪決闘は終了、それを曲げてまで貴方を断罪して差し上げる程、私は暇ではありません。この次まで生まれた事を後悔しながら死の時を待っていなさい。」

それだけ言い残すとゾマリは響転でその場から消え去っていた。
最早一秒たりともその場に、フェルナンドと同じ場所に居たくなかったのだろう、そしてその場に残されたフェルナンドは誰もいなくなった廊下で一人呟く。

「そうさ・・・こいつは喧嘩だ。　それに・・・・・・アイツ等とやる前の肩慣らしには丁度よさそうだ・・・・・・」

ゾマリが去った廊下、そこには彼が言ったとおり一匹の”獣”が、その牙を覗かせていた・・・・・・

―――――――――

強奪決闘の会場は轟音に満たされていた。
しかし、その会場の中心に一人立つグリムジョーにそれは聞こえない。
ポケットに手を突っ込んだまま、眉間に深い皺を刻みつけ立ち尽くす彼。

まずもってその言葉に興味が無かった、それは賞賛でありこの場においてはそれに酔う事はなんら不思議でない筈だが、彼にあるのは胸に支える消化不良の思いだった。
歯向かって来た相手はグリムジョーにとって彼をイラつかせる事だけに終始し、結果として彼が思うよりも更に呆気なく、そして脆くもその屍の半ばを消し飛ばされ、断末魔の叫びのまま固まった顔を乗せた首を彼の足元に転がしていた。

それは何一つ得る事のない戦い、得たものがあるとするならばそれは不快感のみであり、苛烈な炎の記憶を霞ませ、濁らせるという愚かしい結末だった。

「チッ！・・・・・・」

グリムジョーから舌打ちが零れる。
最早自分より弱い者と戦う事に彼は意味を見出せていなかった。
対等な相手、そして上で彼を見下ろす者達、自分が戦うべき者はそちらであり、自分の持っている力のすべてはその者達と戦う事で己の強さを証明し、”王”として君臨するためだけに用いられるべきだとグリムジョーは考えていた。

（つまらねぇ・・・・・・　もっとだ、もっと・・・俺が求めてるのはこんな雑魚との遊びじゃ無ぇ。こんな雑魚をいくら殺しても意味が無ぇ・・・証明するんだ・・・　俺こそが”王”だと。　誰も寄せ付けねぇ圧倒的な”王”だとな・・・・・・）

ポケットに入れられた彼の手が強く握り締められる。
戦いは終わったというのにグリムジョーの目は今だ獲物を捕らえているかのように鋭く、いや、捉えているのではなく求めているのかもしれない、彼の野望、”王”となるために通らねばならぬ戦いの相手を、全力で戦い、雄叫びを上げるような勝利が訪れるような相手を。

血が沸き立つような、意思とは関係なく肉体が歓喜し、魂が叫ぶような戦い、それに勝利する事で”王”へと至る階をまた一歩登る。
全ては通過点であり、しかしそれなくして彼の求めるものは決して手に入らない。
彼の求める”王”とは玉座に座して見下ろす王ではなく、全ての戦いに誰よりも先んじてその身を投じ、その全てを微塵に薙ぎ払う”戦の王”なのだ。

ならばそれに至るには戦うしかなく、戦って戦って戦い抜く事が、唯一の方法だった。

（そうだ・・・・・　俺は”王”になる。　立ち止まる事は在り得ねぇ、立ちはだかる者全てを薙ぎ払って進むのが”王”だ。牙は研いだ、柱は突き立てた、なら・・・・・その喉笛、喰い千切らせてもらうぜ、オッサン。）

決意、決心、そして覚悟、気は満ち、また期は満ちたという思いがグリムジョーを満たす。

彼の中で成されたそれ、彼の視線と共にその意思と不完全燃焼の矛先は、最近嫌というほど覚えた霊圧の持ち主へと向けられる。

そう、彼の中では最初にその鍛え上げた牙を、爪を突き立てる相手は決まっていたのだ。

突然現われては自分を打ち倒し、地に這わせ去って行くその男、高らかな笑い声を上げながら余裕を見せ付けるその男、そしてその男と戦い、立ち上がるごとに自分が強くなっていく事を実感する日々。

そうして磨き上げた強さは、その男に全て叩きつけるために磨き上げたものなのだ。

その人物は彼が立つ砂漠よりもずっと上から彼を見下ろしていた。

顔に張り付いた笑みは壮絶で、グリムジョーを品定めするように、そして矛が向けられた事が愉しくて仕方が無いという顔をしていた。

グリムジョーは唯その人物を、『第６十刃（セスタ・エスパーダ）』ドルドーニを見据えるのみであり、ドルドーニもまたグリムジョーを唯見下ろすのだった。

見下ろすドルドーニの顔から伺えるのはたった一つ。

『待っていた』という一つのみ。

だがその間には語る言葉は存在せず、また必要でもなかった。
それは二人が求めたものであり、いつか来るはずのもの、避ける必要は無く、寧ろそうなる事を望みその時のために研鑽を積んだもの。
どちらかは確実に倒れるだろう、だかそれがどうしたと、それこそが自分達の望だと言わんばかりに両者の気が静かにぶつかる。

二人の間に言葉は無い、しかし、決戦は今此処に約束されたのだった・・・・・・

――――――――――

「なんじゃと・・・？　がはは！　そいつはいい、手間が省けたわい。」

いくつかある十刃専用の観覧席でも一等豪華な席で、バラガンは繰り広げられる強奪決闘を見物していた。
本来この場は数字持ち達にとって”号”を上げるための場所であるのだが、十刃から見れば芽のある数字持ちを従属官とする見本市の側面も持っていた。
無論、十刃達もこの強奪決闘の対象ではある。

しかし十刃に挑む数字持ちなど早々現われるわけもなく、現われたとしても勝てる者などまずい無い。
バラガンが記憶している中で最も最近十刃になったのは第８十刃ノイトラ・ジルガであり、数字持ちでありながら第８の”号”を奪った数少ない例の一人でもあった。
だがそれも随分と前の話であり、結局のところノイトラの様な例は稀で、数字持ちの中では”号”を上げる事も然ることながらこの場で活躍し、従属官として取上げられる事を目的とするものも居るのだった。

バラガンは多くの従属官を抱え、その中でも序列を設け一つの王国、または軍としての機能を持たせていた。
そのバラガンにとってこの強奪決闘は部下を増やす機会でもあり、必ず足を運び、自らの目でそれを見物していた。
だが今回の強奪決闘は特に目を引くものも無く、最も見たかったあの金色の童も自ら出る様子は無く、数字を持たない彼を指名するものも居らず、舞台に引っ張り出す方策も浮かばぬ故に今回は見送り、次回自身の従属官の誰かしらをあてがおう考えていたバラガンに、ある意味吉報が齎された。

それは端的にいえば第７十刃　ゾマリ・ルルーが金色の童、フェルナンド・アルディエンデと戦うという報告だった。

バラガンにとってそれは僥倖だった。
十刃の一角、それが彼の童フェルナンドと戦う、自分の従属官より明らかに強いであろう十刃ゾマリならば、フェルナンドの実力を確かめるのになんら問題はないだろうと。
決してバラガン自身の従属官が弱いというわけではない、だが十刃を前にしては些か見劣りしてしまうのはしょうがない事であり、彼の目的のためにはより強者をぶつける事の方が都合がいい、という

だけのことなのだ。

「ゾマリの奴もうまい事動いてくれたもんじゃな・・・・・さてあの童（わっぱ）、奴を前にしてどう戦うか・・・・・ククク。」

自然とバラガンから笑みが零れる。
それは優しさではなく獰猛な獣の笑み、繰り広げられる戦いはおそらく最高の見世物となるだろうという直感。
いや、直感というよりそもそも自分が興味を持った童、フェルナンドが絡んでいる時点で最高の見世物である事は確定している、と言ってもいいとさえバラガンは思っていた。
あとはそれがどういった見世物になるのか、舞劇か、喜劇か、それとも悲劇か、それはまだ誰にもわからない。

だができるなら、とバラガンは思う。
見たいのは美しい舞ではない、見たいのは涙を誘う三文芝居ではないと。
彼が見たいのは刃から赤が滴る狂乱の殺劇なのだ、刃が肉を裂き、骨を断ち、血潮を舞い上げ空を染める。
流れた血は憎しみを加速させ、憎しみは更なる惨劇を呼び、その末に立つのは血塗れの勝者、”大帝”バラガン・ルイゼンバーンが望むのは何時だって血に濡れた舞台であり、逆に言えばそれ以外の全ては彼が望んでいない、三流の結末でしかないのだ。

「さて童よ・・・・・　お前は儂になにを魅せる？・・・・ククククク、ぐははははははは！！」

―――――――――

今回の強奪決闘は、グリムジョーの戦いを最後に幕を閉じた。
数字持ちの中から此度の強奪決闘において、十刃に挑戦するという者は出ず、十刃の中でも”号”を奪い合うという事は起きなかった。
多くの破面に比較的に何事も無く終わった、とされた今回の強奪決闘。
だがこの何事も無くという一言の中にはこの強奪決闘で死んでいった者達が含まれており、彼ら破面にとっては亡き者、死者の存在は語るべきものに在らず、語るべきはどうやって殺したかという事であり、それはやはり彼等が血を好む存在であるという証明であった。

「随分と嬉しそうだな、ドルドーニ・・・」

観覧席を共に後にしたドルドーニに、ハリベルが話しかける。
彼女の隣を歩く男、ドルドーニの顔は彼女が指摘したとおり、随分と嬉しそうだった。

「いやなに、美しい淑女（セニョリータ）と道中を共に出来れば、どんな男とてこのような顔になりましょう。まっこと光栄な事ですなぁ。」

そんなハリベルの言葉にドルドーニはいつも通りのおどけた風で答

えるが、ハリベルはそれを見て小さく笑う。

「フッ、嘘をつくものではない。　あの破面、グリムジョーの挑戦がよほど嬉しかったのだろう？」

小さく笑ったハリベルが口にした言葉は、おそらく真実だろう。
ドルドーニがその顔に喜色を滲ませる理由、それは一重にグリムジョーからの無言の挑戦状ゆえだろう。
それは彼の望んだ戦い、いくら隠そうとしても隠し切れない猛々しい戦士としての彼が望んだ戦い、それがもう直ぐ実現するというのだから。

「はは、お見通し・・・ですかな。　青年（ホーベン）は強い、彼は私と手合わせをすればするほど強くなっていきます。それが吾輩には愉しみで仕方が無かったのですよ。いつかこの青年と”全力”で戦う時が来ると思うと身震いさえした、互いに全力を出す事無く戦っていましたがそれも終わりです。次にこの強奪決闘の舞台でまみえる時は吾輩の全力を持って応じる所存ですよ。」

なんとも嬉しそうに語るドルドーニ。
最初はハリベルとフェルナンドを羨み、無理矢理彼の元に押しかけ、師を気取っていた。
しかし、そうして彼と戦うにつれ日毎に強くなっていく彼の姿に、ドルドーニは本当に師として彼に接するようになっていった。
彼、グリムジョーが自分をどう思っていたかは判らない、だがそれがどうしたとドルドーニは思う。
師として敬われようが、怨敵として恨まれようが、結果として彼が強くなれば構いわしないと、その先にある戦いが在るのならば他は

何もいらないのだと。
常に貪欲に、己の欲望のために、抱く野心のためにドルドーニは動く。
グリムジョーにとってドルドーニが壁であるのと同時に、ドルドーニにとってもグリムジョーは壁なのだ。
自ら創り上げた強大で強固な壁、それを乗り越えてこそ自分の野心の先、第1位の座に至るのだと、自らの力を高めるためにはより強大な障害が必要なのだと、そのためにドルドーニは自らの首筋に牙を突きたてると明言したグリムジョーを鍛えたのだ。
見込んだ才の先を見たいという欲と、自らの野望を試すために。

「そうか・・・・・・　その気持ち、判らんでもないがな・・・・・・」

ふと零れたハリベルの呟き、ドルドーニがグリムジョーと相対する事を心待ちにするように、ハリベルもまた、フェルナンドとの再戦を待っているのだ。
手合わせはする、手を抜くことはない、だがそれは殺し合いではないのだ。
破面全てにいえるのはその力は全て”殺す”事だけに特化しており、それ以外の戦いで全力など出るはずも無い。
ハリベルとフェルナンド、互いに全力で殺しあう事を決めている二人、おそらく相対せば最後に立っているのはどちらか一人だけだろう。
そのときが何時来るかは今だ判らない、だが隣で昂ぶる男の気持ちはハリベルにはよく判り、そして羨ましいものでもあった。

そうして歩く二人に、一つ甲高く張り上げられた声が響く。

「おうおう第３十刃サマ！　今日はあの死に損ないのガキじゃなくて、十刃の古狸を侍らせてんのかぁ～？ケッ！　第３十刃サマともあろう御方が随分と尻軽でいらっしゃる。ケケケケケ！」

ハリベルに不躾な言葉を浴びせるその男は、壁に寄り掛かり、甲高い声で笑っていた。
肩ほどの長さの黒髪に左目には眼帯、細すぎる手足と顔に貼り付けるのは相手を見下し、嘲うかのような笑みだった。
おおよそ異形としかいえない三日月形の斬魄刀を携えたその男が、その斬魄刀でもってハリベル達の行くてを遮る。

「・・・ノイトラ・・・・・・　貴様、私に何の用だ・・・・・・・・・」

彼女に話しかけたのは『第８十刃（オクターバ・エスパーダ）』ノイトラ・ジルガ、見下ろすようにその釣りあがった瞳でハリベルを射抜く。
ハリベルの声に硬いものが混じる。
それは不躾な物言いによるものか、それともいつかのネリエルを侮辱した事によるものなのかは定かではないが、彼女が不快感を顕にするのは珍しい事でもあった。

「別に？　メスに用事なんかねぇんだよ。　た～だ～、随分と節操が無い様子だから御注進を、と思っただけだ。ケケケ！」

「貴様ッ・・・・・・」

何処までもふざけ、不躾な態度をとるノイトラ。
彼がそうする理由はただ一つ、ハリベルが”メス”だから、という一点のみだった。
彼の持論は”メスがオスの上に立つな”であり、第3と第8という位階の差は彼にとって到底、認められるものではなかったのだ。

「まぁまぁ、美しい淑女。　そのような顔は貴方には似合いませんよ？・・・・・それにしても第8十刃クン。　君の物言いはあまりに無礼ではないかね？ここは大人しく下がって隅で縮こまっていたまえよ。」

不快感を顕にするハリベルの前に進み出るようにして、ドルドーニが前に立つ。
そうしてドルドーニはハリベルを見下しているノイトラを、わざと見下すような態度をとった。
彼は”女性は全て愛でるもの”という信念の元に行動する男であり、ノイトラの態度は些か彼の信念からは看過できないものであった。

「うるせぇ！　第1世代の骨董品がしゃしゃり出てくんじゃねぇよ！」

「これは面白い事を言う。　君は第8、私は第6、ではその骨董品より位階の低い君は、それ以下という事になるねぇ。」

「ッ！　このクソ狸がぁ！」

ノイトラの言葉を冷静に受け流すドルドーニと、ドルドーニの言葉に激昂するノイトラ。
この辺りは長い時を生きているドルドーニに歩があるといえた、ドルドーニにとって今だ若造であるノイトラを手玉に取ることなど容易い事なのだ。
若さゆえの直情的な振る舞いと、年経た老獪さ、この場においてはその老獪さが若さを上回った、ということだろう。

正しく一触即発の空気、互いに十刃同士、私闘は禁じられているとはいえ若さはそれを容易く破る。
床に下ろしていた斬魄刀を肩に担ぎ、そしてノイトラの斬魄刀を握る手に力が篭る。
ドルドーニの方も自然体にみせて、若干腰を落し備えていた。

だが、その激突を止める新たな人物が現われる。

「止めておくといい。　それは無意味だ。」

響いた声に鷹揚はなかった。
ただ淡々とした事実だけを口にしている、といった風で放たれるその言葉はハリベル達の後方から歩いてくる人物から放たれていた。
袖付きの外套で身体を覆い隠し、鳥の嘴を思わせる仮面で顔すらも隠し、その姿は一種異様であり仮面に刻まれた”目”の文様がそれを一層際立たせていた。
その場に現われたのは　『第5十刃（クイント・エスパーダ）』　アベル・ライネスだった。

「この場で争う事にどんな意味がある？　矮小な自尊心を傷付けられた事への怒りか？矜持によって許せぬ者への粛清か？そんなものは無意味だ。　私たちの存在理由は藍染様の剣として外敵を討ち滅ぼす意外存在せず、そのように破面同士で争う事に意味などありはしない。無意味とは即ち不要だ、不要な事をするのは極めて愚かでしかないぞ？第６十刃、第８十刃。」

そう語りながらもアベルはその足を止めず歩き続ける。
足を止めて語る事に意味を見出せないのか、それともこの会話をすること自体本意ではないのかは定かではない。
そうして歩くアベルはハリベルの脇を何事も無いかのように通り過ぎようとしていた。

「第５（クイント）！　邪魔すんな！　それともテメェも殺されてぇか！」

「それこそ止めておけ、我等の数字が持つ意味を知っているだろう？この序列は殺戮能力の高さ、そしてそれはどちらがより強いかを全ての破面に判りやすく見せ付けるものだ。　”５”と”８”、どちらが上かなど考えずとも判るだろう？無意味なことだ。貴様は勝てんよ・・・何故なら・・・・・・」

威嚇するように声を上げるノイトラに、アベルは特に反応を見せず、放たれた言葉のみに淡々と答えた。
ノイトラにいくら強い言葉を放たれようとも、アベルがそれに動じる事はなかった。
そもそも動じる必要が無かった、アベルが語ったとおり二人の位階は差がある。

”5”と”8”という数字が示すそれは、しかしそれはあまりにも大きいのだ。

ハリベル、そしてその前に立つドルドーニの横を粛々と通り過ぎ、ついにノイトラの領域にまで歩を進めるアベル。
それはノイトラの斬魄刀の届く範囲であり、彼が一刀の下に叩き潰せるという範囲であった。
それでもアベルの歩みに些かの淀みも無かった、それはノイトラにこのアベルという破面が本当に自分(ノイトラ)が勝つことが出来ないと確信しているという事を理解させるのに充分だった。

一端言葉を切ったアベル、そしてノイトラの横を通り過ぎる瞬間、ノイトラだけに聞こえる大きさで何事かを呟いた。

直後ノイトラの瞳が大きく見開かれる。
それは驚愕の表情と共に、そしてギリッと奥歯を噛締めるとその顔は瞬時に怒りへと変わっていた。

「グラァァアアァァアアアアアアアア！！！！」

叫び、腹の底からこみ上げた怒りは喉を伝い、外界へその怨嗟をぶちまける。
担いだ斬魄刀を振り上げ、そして一息にアベルへと振り下ろすノイトラ。
衝撃で通路は崩れ、粉塵が辺りにたちこめる。
だが、その斬魄刀が振り下ろされた先にアベルの姿はなく、見えるのは床が抜けだいぶ下の階まで吹き抜けとなった穴だけだった。
怒りに燃え、肩で息をするようなノイトラがハリベルとドルドーニに向き直る。

「命拾いしたな・・・・・・　決めたぜ・・・テメェ等の前にあのクソ忌々しい5番を殺す。」

それだけ言い残すと、ノイトラは三日月の斬魄刀を引き摺るようにしてその場を後にした。
もはや彼の目にはハリベルも、ドルドーニも映っていなかった。
映るのは忌々しき外套の破面、ノイトラの内面を狙い済ましたかのように抉ったその破面アベルの事だけだった。

（殺す・・・殺す、殺す、殺す！　オレを腰抜け扱いしたアイツをぶっ殺してやる！！）

ノイトラにあるのは最早その一念のみ。
それほどまでにノイトラを激昂させたのはアベルの去り際の一言。
それは自尊心を抉るには充分な一言だった。
誰も知らぬはずのそれ、しかしアベルはこう言ったのだ。

「何故なら・・・・・・・　格上を倒すのならば、後ろから頭を割らねば勝てんのだろう?」と。

魔獣
理は無く
情は無く
あるのは本能と
血を好む性

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．３０（後書き）

３０話になります。
実際それ以上書いてますが、数字上は３０です。
勢いで始めたのに良くもったものです。　ホント。

今回はいろいろ詰め込みすぎた感はありますが
形になっているでしょうか？

今回でなんとなく今後の流れが、皆さんにも見えたかと思います。
え？　前から分かってた？　ですよね～～ｗ

それと、Ａｒｃａｄｉａ様の方で掲載板をチラ裏から、その他に移動しました。
こちらには直接の関係はありませんが、一応ご報告をば。

ちなみに今回は１２，０４３文字、おそらく今までで一番多いですｗ

BLEACH El fuego no se apaga. extra3（前

番外編３つめです。
これだけメイン扱いのキャラなのに、まぁ掴み辛いったらないね。

俺は妬まない。

俺は喰らわない。

俺は奪わない。

俺は傲(おご)らない。
俺は惰(あなどら)らない。
俺は怒らない。
そして俺は

何一つ欲する事はない。

腕を振るえば、目の前の塵(ゴミ)は消える。

それは何の事はない作業だ、何一つ考える必要など無い。
何故歯向かうのか、何故命乞いをするのか、俺にはその理由が理解できない。

俺は塵に何も求めていない。
それは当然の事だ。
塵と語らうなどという事は在り得ない、そもそも塵の言葉を聞き取る術を俺は持たない。
目の前で叫ぶ塵、俺の耳に届くそれはただの雑音。
大音量のそれは俺をただ煩わせるだけだ、だから俺は腕を振るう。

振るえば音は消えていく。
指先に温いものが残るが、気にはならない。
何故ならそれは放っておけば、直に冷めてしまうからだ。
そして俺は湧き出た塵共を払い終え、虚夜宮（ラス・ノーチェス）へと戻るだけだ。

「コロニーの殲滅、規模は大きかったが良くやってくれたね・・・ウルキオラ。」

「いえ、お褒め頂く程の事ではありません。」

俺達の主である藍染様から送られる言葉、それに小さく頭を下げる。
だが、そもそも俺はお言葉を頂く様な事等何一つしていない。
命ぜられたとおり藍染様に反旗を見せたコロニーの一つを消した、
俺がしたのはそれだけだ。
特に時間を割いたわけでも、また時間をかけたわけでもない。
俺がしたのは沸いて出た塵共を、端から消すという作業のみ、塵を
払うのに時がかかるはずもなく、終了したそれを誇るほどの事でも
ない。
瑣末だ、何もかもが。

「あぁ、そうだね。　君の相手をするには、彼等は些か脆弱過ぎた

かな？」

「お言葉ながら、塵に強弱は存在しません。」

藍染様のお言葉を否定するのは意に反するが、それもしょうがない事だ。
脆弱、藍染様があの塵共をそう表現されたのは判る。
あれは脆弱という言葉すら当て嵌まらないほど脆かった。
しかし、”脆弱”という表現が存在するのならば、逆に”強靭”な塵も存在するという事になる。

それは在り得ない。
塵として生を受け、塵として生き、塵の中で生きるアレ等は塵にしかなれず、塵とは取るに足らない存在だ。
その中に俺達に通用する”強靭さ”などあるはずが無い。

故にアレ等は、諸共に取るに足らない存在なのだ。

「成る程・・・・・君にとって彼等の中の優劣など、参考に値しない、ということか・・・」

「ハイ、その通りです。考える意味がありません。」

明確な解。
アレ等の強弱を論ずる事自体に意味がない。
アレ等塵共の強弱は、アレ等の中でのみ通用する稚拙な関係性だ。
この世全てに通じる”強さ”の基準があれらには欠落している。

どちらが強いか、どちらが上か、声高に喧伝し、そしてそんなものに拘るアレ等はその時点で塵だ。
塵共の自尊心、塵共の虚栄心、その何もかもが俺の目には愚かに映る。
いや、愚かという言葉すら温いか、愚かというよりも思考にはさむ事も無いそれ。
俺にとって、塵共は理解の外の存在なのだ。

「では彼はどうだい？　フェルナンド・アルディエンデ・・・・・・君の眼に彼はどう映ったかな？」

「・・・・・・・・・・・・」

フェルナンド・アルディエンデとはあの破面の事だろうか？
第2十刃、ネロ・マリグノ・クリーメンと意味も無く戦い、しかし一瞬だが打ち倒したあの破面だろうか？
別に俺にとって奴はどうという事は無い存在だ。
そもそもその出来事自体が俺にとって瑣末でしかない、それに関わる人物などやはり俺にとっては瑣末なものなのだから。
瑣末の極みだ。

奴が生きようが、死のうが、俺に興味は無い。
たかが破面一匹死んだところで、それが俺に何の関係があると言うのか。
在りはしない。
俺はただ藍染様の命を忠実に実現するだけだ。
それ以外に必要な事などない。

だが・・・・・・

「藍染様。　・・・一つ御訊きしても宜しいでしょうか。」

何故か俺の口は勝手に動いていた。

「おや？　めずらしいね、君が疑問を持つというのは・・・何が訊きたいんだい？　ウルキオラ。」

何故か藍染様は常よりの笑みを深くしていらっしゃられた。
俺がなにかに疑問を持った、ということが興味深かったのだろうか。
だが、そんなものは今俺が一番思っていることだ。
俺は一体どうしたのだろうか、口が、喉が、勝手に動き音を発する。
理性で止めようとするがもう遅い、それは外界へと放たれ、意味を持ってしまった。

「・・・・・『心』　とは、なんですか？」

放たれたそれに藍染様は驚いている様子だった。
今まで見たこともないような表情、それほど俺が放った言葉は意外だったのだろうか。
それは放った本人である俺とて同じだった。
何故こんな事を訊いているのか、何故それを知ろうと思ったのか、

それの方が俺には疑問だった。

「・・・・・・『心』か・・・　何故それを知ろうと、知りたいと思ったんだい？」

藍染様は少し考え込むと、俺にそう尋ねてきた。
そんな事は俺が知りたかったが、藍染様に訊かれたからには答えねばならない。
俺が何故そんなものに興味を示したのか・・・・・・
そう考えると、浮かんだのは瑣末な者であるはずのあの破面の叫びだった。

「あの破面・・・・・・　第2十刃と一瞬同等の力を出したあの破面、本来その全てにおいて劣っているはずのあの破面が引き出した力。霊圧でもなく、能力でもなく、内側から引き出したようなあの力。理論的な手段ではない力の発露、それを可能にする存在が『心』である、という超常の知識ある事を俺は知っています。」

口を突いて出た言葉はすらすらと、まるでそう語ると決めていたかのように紡がれていく。
自分でもわからないが、どうやら俺は狂ったようだ。
意味の無い疑問、意味の無い問、そんな不要なものを求める・・・・・・我ながら理解できない。

藍染様はただ黙って俺の言葉を促す。
俺は狂った発言を尚も続けるしかない。

「胸を裂いても視えず、頭蓋を砕こうとも視えず、だが存在すると、すくなくとも人間はそう信じている、という知識を俺は持っています。何故そんなものを信じるのか、何故そんな曖昧なものが存在できるのか・・・・・・俺には理解できません。」

「・・・故に知りたい、と・・・・・・そういう事かい？　ウルキオラ。」

「ハイ・・・・・・・」

藍染様が俺の言葉の最後を受ける形で、説明は終わった。
理解出来ない存在。
本来ならば理解する必要がないのならば、そのまま捨て置けばいい。
少なくとも今までの俺ならそうしていただろう。
だが、なぜかこれだけは捨て置く事ができなかったのか、疑問は理性と関係なく放たれてしまった。
それもこれもあの破面のせいなのか、だとしたら余計な事をしてくれたものだ。
おかげで俺は狂い、壊れたのだから。

「・・・・・すまないね、ウルキオラ。　残念だが私はその”解”を持ち合わせていない。何故なら私にとっても『心』等という都合のいい存在は、”理解の外”でしかないからね。・・・・・・しいて言うならばそれは”幻想”だよ・・・それは理性を感情という揺れで表現した紛い物だろうね。」

藍染様の答えは、俺の”解”とはなりえなかったか・・・・・・

それも当然か、如何に藍染様が全能とて、存在し無いものを理解する事はできない。
人間は容易くそれを口にし、安直に存在を信じるがそんなものは本当は存在しないのだろう。
所詮は人間の信じるもの、それを理解しようというのが間違っていた・・・か。

「いえ、『心』というものが存在しない、という事が判っただけで問題ありません。お時間をとらせました。」

これ以上藍染様にお時間をとらせるわけにも行かない。
この場は一礼し、下がる事を選択する。
背を向け、大扉の前まで来ると、藍染様は何故か俺に声をかけられた。

「そうだ、ウルキオラ。『心』が存在しないというのなら、君はフェルナンドのあの力は、一体何処からきたと思う?」

背中にかけられたその言葉。
確かに心が存在しなんと言うのならば、あの破面の力の出所は別のものとなる。
それは一体なにか、藍染様は俺にそれを訊いているのか。
それとも俺の矛盾をつくことで疑問を残そうとしているのか、だがそれはもう俺の中で決着がついている。

「あの破面の力、それが何処から来たとしても俺には関係ありません。・・・塵に強弱は、存在しないのですから・・・・・・」

それだけ言い残すと俺は部屋を後にする。

そうだ、関係ない。
それが『心』だろうが別のなにかだろうが、俺の前に立ちはだかる事はありえない。
所詮は塵、払わずとも放っておけば地に堕ちる。

それでも俺の前に現れるというのなら、腕を一振り、それで全ては終わるのだから・・・・・・

俺は妬まない。
俺は喰らわない。
俺は奪わない。
俺は傲(おご)らない。
俺は惰(あなどら)らない。
俺は怒らない。
そして俺は

何一つ欲する事はない。

視ろ。

世界に意味を求めたとて。

所詮無意味を悟るだけ。

だから俺は欲さない。

欲する事さえ無意味と知るから。

BLEACH El fuego no se apaga. extra3（終

ということでリクエストして頂いた中から、ウルキオラメインでの番外です。

ウルキオラっぽくなっているだろうか？
人気のキャラだから怖いなｗ

こんなのウルキオラじゃない！
とか言われたらどうしよう・・・・・・

詩は４０巻と２２巻の巻頭の詩を弄ってみました。
それっぽくなってるとは思うけど、”喰らう”とか”奪う”は意図がずれてるか？

気軽に感想頂ければ幸いです。

BLEACH El fuego no se apaga. 31（前書き）

あけましておめでとうゴザイマス。

日頃読んで頂いている方も、初めてお読みいただく方も居られるとは思いますが。

本年も『BLEACH El fuego no se apaga.』をよろしくお願いします。

「せやぁぁぁああ！！」

気合充分に振り下ろされる一撃。
高く跳び上がり、大上段から一息に振り下ろされたそれは、狙い違わず標的の脳天目掛け叩き付けられる。
しかし、それは標的の脳天を割るに至らない。
刃の腹を手の甲で叩かれた事でその軌道はずれ、刃は標的の足元の砂を割り、吹き飛ばしながらも深々と突き刺さった。
そして深く刺さった刃は一瞬の硬直を意味し、その一瞬は致命的、その体勢のまま横合いから蹴り飛ばされてしまう。

「シッ！」

大上段からの攻撃は防がれたが、今だ標的を狙う手は絶えない。
次の攻撃は正面からではなく標的の死角から。
『叡』と呼ばれる斬る事よりも突く事を主眼に置いた三叉の剣、そ

れが死角から標的を襲う。
迫るそれを標的は慌てる事無く蹴り上げていた足を素早く戻し、二度三度と連続して繰り出される死角からの突きを上体を振って避わすと、最後にしゃがむ事でそれを避け、通り過ぎた釵を握る腕をとるとそのまま背負い、投げの途中で手を離すことで投げ飛ばす。

「だっしゃぁぁああ！！　もらったぜ！フェルナンド！！」

叫びと共に現われるのは三人目、攻撃は二段ではなく三段構えだった。
正面から注意を引き、その隙と死角をつくことで体勢を崩し、そこにとどめの攻撃を見舞う。
三人目はその両手に持った奇怪な刃を振り被ると、そのまま体勢の崩れた標的、フェルナンド目掛けて投げつけた。
投げをうった直後の体勢、崩れたそれに奇怪な刃が高速回転しながら、狂い無くフェルナンドへと迫る。
当たる、と仕掛ける三人が思った瞬間フェルナンドはその崩れた体勢から上へと跳び上がり、回転し迫る刃を避けてしまう。

準備も、順序も、拍子もその全てがほぼ完璧だった三人の攻撃、しかし間違いがあったとするならば、それは一般的な敵を前にした完璧であり、三人が相対しているのはその尺度には納まらない人物だったという事だろう。

先程までフェルナンドがいた位置を回転する刃が通過し、そして弧を描くようにそれを投げた者の元へ舞い戻る。
みれば別々、順々に襲い掛かってきた三人が一箇所に纏まっていた。
それは彼女等が意図した事ではなく、フェルナンドがそうなるよう

に蹴り、投げ、避けた結果であり、戦いの最中それだけの余裕が彼にあるということを示していた。

「だぁ～～！！　今のはイケると思ったのに！　避けんじゃないよ！フェルナンド！」

自分に迫る刃を避けるな、というなんとも無茶な事を叫ぶのはアパッチ。

地団駄を踏みながら悔しがるアパッチ、彼女にしてみれば最高のタイミングで放った刃が、どうにもあっさりと避けられた事が気に入らないらしく、そんな文句をフェルナンドへとぶつけているようだ。

「普通は避けるだろうがよ・・・　それにお前・・・・・・不意打ちする相手に態々叫んで攻撃の瞬間を教えてどうする？まぁ、俺は避けやすかったが・・・な。」

「なッ！　・・・き、気合だよ！気合！ここぞって所で気合入れんのは当然だろ！」

フェルナンドはそんなアパッチの理不尽な怒りに、ごく普通に対応する。

無視しても良かったが、そうなるとそれはそれで五月蝿いと最近では学んだ彼、しかししっかりと皮肉を返す事は忘れない。

その皮肉も一見皮肉ではあるが、聞き様によっては彼なりの助言であるのだが、アパッチの性格上それを素直に受け入れられるはずも無く、苦しい言い訳を口走る。

そんな彼女の姿に残った二人、ミラ・ローズとスンスンは揃って「

馬鹿だねぇ・・・」、「おバカさんですわ・・・」と呟いていた。
だがそんな呟きを零す二人にも、フェルナンドはしっかりと意識を向けている。

「お前等も他人事じゃねぇぞ？　ミラ・ローズ、一撃で仕留められる威力はいいが、避けられた後に追撃の一つも入れられねぇようじゃぁ、いくら陽動でもお粗末だぜ？スンスン、テメェも死角から突きの連続は結構だが、もう少し変化を入れろ。死角から単調に攻めたんじゃ意味が無ぇだろうが。」

残った二人にも同様の助言をするフェルナンド。
最近では漸く『三バカ』から個々の名前を呼ぶようになっている様子だ。
彼の言葉にミラ・ローズ、そしてスンスンも痛いところを疲れたといった顔をする。
結局三人がかりで彼に傷一つ負わせる事が出来なかった、という事に変りはなく、それはとどめを担当したアパッチの責任というよりも、それまでに関わった三人すべての総合力で彼に劣っていた、という証なのだ。

そうして苦い顔をしているミラ・ローズとスンスンに、それ見たことかとアパッチが食って掛かる。
しかしそれは彼女にも同じ事であり、結局いつもと同じ三人寄らば姦しい、という状態へと移行していく。
三人の喧騒、誰が悪いというわけでもなく罵りあう三人。
そんな彼女達の姿にフェルナンドは溜息を零す。

「・・・・・　頼むぜ、お前等・・・・・・・さっさと強くなってくれなけりゃ、何時までたっても俺の鍛錬にならねぇだろうがよ・・

・・・・」

溜息に続いてフェルナンドが零した言葉、それが今、彼が彼女等に彼らしくもない助言までして戦っている理由だった。
先頃行われた強奪決闘（デュエロ・デスポハール）、そこで見た一つの戦いが、フェルナンドの闘志に火をつけていた。
交わしたわけでもない一方的な約束、いつか必ずまみえると決めている相手の力、そしてそれに呼応するように彼自身もまた更なる力を求めているのだ。
そのためには何が必要か、答えは簡単で強くなるには戦うしかない、というものだった。
一つでも多く戦う事、それだけが彼にとって強くなるための方法であり、その為に彼はハリベルの従属官である三人と戦っていた。
戦っていたのだが、三対一の状況でもフェルナンドは戦いを優位に進める。
三人が”連携”しているようで、結局のところフェルナンドにとってこの戦いは”一対一を三回”しているのと同じであり、それならば彼に負けはありえないのだった。

「ハリベル。　なんならお前もコイツ等と一緒に戦うか？コイツ等ならそれぐらいで丁度だろう？」

フェルナンドは振り返るようにしてその場にいるもう一人、彼女等従属官の主であるハリベルに話しかける。
ハリベルは少し離れた位置の、砂漠に突き刺さって折れたような柱の上に立ち、フェルナンド達を見ていた。

「それは少々この娘達を侮り過ぎているな、フェルナンド。確かに

連携としては褒められたものではないが、この娘達は私の”最強”の従属官だ。私には、この娘達が他のどの十刃の従属官にも劣らぬという自負がある。」

フェルナンドの軽口にも似た言葉に、ハリベルはしっかりと、そして明確に言い放つ。

彼女等は私の”最強”の従属官である、と。

それはハリベルの過大評価でも、自身の自尊心から来るものでもなく、ただ純然とした事実として彼女の口から放たれた言葉だった。
それはハリベルから従属官であるミラ・ローズ、アパッチ、スンスンへと向けられた全幅の信頼の証。
例え今目の前でフェルナンドに軽々とあしらわれ様とも、それは些かの揺るぎもみせてはいなかった。

「なるほど・・・”最強”ねぇ・・・・・・　悪くない響きではあるな。それに・・・・・・　どうやらお前のおかげで、少しは”マシ”になったみたいだし・・・な。」

ハリベルへと振り返っていたフェルナンドが、再び三人の方へと向き直る。
振り返る前から背中にそれを感じていたフェルナンドは、口元に笑みを浮かべ振り返った。
浮かべた笑みは嘲笑ではなく喜び、背中に感じていたそれは振り向き、眼前にしたことでフェルナンドはより強くそれを感じ取る。

振り向けばそこには姦しく騒ぐ彼女等の姿は無かった。
その眼は今まさに振り向いたフェルナンドだけに向けられ、そしてそれには強い意志が見て取れた。

姦しく騒いでいた彼女等に届いたハリベルの言葉。
たった一言のそれが、彼女等を今、劇的に変えているのだ。

彼女等の主は言った、”私の最強の従属官”と。

彼女等の主は言った、”他のどの従属官にも劣っていないという自負がある”と。

その言葉は彼女等にとって至高の言葉であり、そして決して裏切る事のできない言葉でもあった。
故に彼女等の瞳のは力が宿る。
その言葉を賜ったこの場で、これ以上主に不様を曝すわけには行かないと。

「悪いね、フェルナンド。　勝たせてもらうよ。」

「えぇ・・・　ハリベル様にあれ程の言葉を頂いて、これ以上の失態は許されませんもの。」

「あぁそうさ。　アタシらの”本気”を魅せてやるよ！」

ミラ・ローズ、スンスン、アパッチ、それぞれの決意、それぞれの意地、それは唯一へ集約し、それを言葉に乗せフェルナンドへとぶつける三人。
フェルナンドはそれを黙って受け止め、黙ったまま、そして微かな

笑みを浮かべたまま拳を構える。

三人もそれぞれに刀を構えなおし、そして・・・解き放った。

「喰い散らせ！『金獅子将（レオーナ）』！！！」

「突き上げろ！『碧鹿闘女（シェルバ）』！！！」

「絞め殺せ・・・『白蛇姫（アナコンダ）』。」

それは解き放つ謳（コトバ）であり、それによってフェルナンドの眼前では三つの霊圧の爆発が起こった。

巻き上げられた砂は砂煙を起し、そしてそれが晴れるとその隙間から現われる三つの影。

正しく獅子の鬣（たてがみ）の如く足元の砂漠に届くまでに伸びた黒髪、身体を覆うのは正しく必要最低限の鎧のみであり、それ以外は肌が顕になった格好で、右手に握られた両刃の刀は巨大、分厚く、大きく、刀剣の種類でいえば日本刀というより西洋の剣といったほうが適切なその刀を携えていた。

口元から覗くのはこちらも獅子の如く長く伸びた犬歯、そして眉間にはバツを描く仮面紋（エスティグマ）が刻まれたフランチェスカ・ミラ・ローズ。

額の中心には短い角、そして額の両端から後方へ、中ほどから三本に別れ、弧を描く様にして伸びた鹿を思わせる長い角が生え、身に纏うのは白の死覇装ではなく、茶色い毛皮のツナギのような服。

両手の爪は鋭く伸び、左目を縁取るように刻まれていた仮面紋は右

目にも刻まれ、その目じりに稲妻のような文様が加わったエミルー・アパッチ。

上半身には見た目大きな変化は見られなかったが、その下半身は最早人型のそれではなく蛇そのもの、まさしく半人半蛇のその姿身の丈は三人の誰よりも大きくなり、そして見た目変化の無い上半身の相変わらず長い袖は、時折不自然に蠢いている。
髪飾りのようだった仮面はそのまま大きくなり、右目の下にあった三点の仮面紋が左目の下にも同じく刻まれているシィアン・スンスン。

それが彼女等、第3十刃　ティア・ハリベルの従属官達の帰刃状態（レスレクシオン）の姿だった。
彼女等の虚という”化物”としての本来の姿と力を回帰させたその姿、明らかに殺傷能力を増した姿と跳ね上がった霊圧は、殺戮のための力だった。

「なるほど・・・な。　それがお前達の本当の姿、本当の力って訳だ・・・・・・」

だがフェルナンドはその殺戮の力を前にして笑っていた。
彼女等が解き放ったその力は、まず間違いなく彼自身に向けられるというのに彼は笑っているのだ。
別に気がふれた訳ではない、ただ彼は喜んでいるだけ。
漸く自分も”戦う”事ができる、ということに。

睨みあう四者、交わす言葉は無く、そして砂漠は弾けた。

それまで三人の攻撃を待っていたフェルナンドが、初めて自ら攻める。

アパッチを目掛けて走るフェルナンドは瞬く間にその距離を詰め、加速と共に拳を打ち出す。

対するアパッチもフェルナンド目掛け突進し、上半身と首を使い、その大きな角を振り被るとフェルナンドの拳目掛けて叩き付けた。

「ハッ！」

「へへッ！」

衝突と衝撃、そして拮抗する角と拳、そしてそれを見て両者から小さな笑いが零れる。

だがそれはほんの束の間、彼を狙うのは一振りではなく三振りの刃なのだ。

アパッチと拮抗するフェルナンドに影かかかる。

上、それは日差しを遮り、上空から振り上げた巨大な剣を振り下ろそうとするミラ・ローズの姿だった。

その細腕の何処にそれを振り回す力があるのか、と思わせるほどの巨大な剣。

その重量と落下、増した霊圧と膂力によって、先程と比べ物にならない威力のそれがフェルナンドへ振り下ろされる。

先程フェルンドは避けられる事を考慮して、二の太刀も考えろと言

ったがそんなものは必要ないと、初太刀で両断すれば済む話だと言わんばかりのその刃。
フェルナンドは拮抗していたアパッチの角を拳を開いて掴み、そのまま自分の方に引き寄せ彼女の顔面に膝を叩き込む。
だがミラ・ローズの剣は今まさに振り下ろされようとしており、如何にフェルナンドでもそれを完全に避けきる事は出来ない状況となっていた。

「チッ！」

フェルナンドから舌打ちが零れる。
最早避ける事は不可能、さすがにあの刃をただ受ければ腕の一本は持っていかれるかもしれないと、内心考えた彼はそれならばと、自分目掛けて降りてくるミラ・ローズへと向かって跳び上がった。

「なに！？」

跳び上がる事で距離を潰しに来たフェルナンドに驚くミラ・ローズ。
しかし彼女もその剣を止める心算はなく、来るなら来いとそのまま振り下ろした。
振り下ろされる刃、だがフェルナンドは尚もミラ・ローズに迫り、なんとその刃をその身に受けた。

受けた、といってもそれはミラ・ローズの剣の鍔元を無理矢理肩辺りに当てて威力を殺し、その身に刃は食い込んだものの両断までには至らないという出鱈目な受け方であった。
それを目の前にしたミラ・ローズは声も出ないといった様子、しかしフェルナンドがそれを逃す事はなく、そのまま彼女の顎に掌底を

打ち込むとそのまま掌底の勢いで砂漠に叩きつけようとする。

そしてミラ・ローズの体を砂漠に叩きつけるその瞬間、最後の一人が狙い済ましたかのようにフェルナンドへと迫る。

まさしく地を這うようにして彼へと迫るのはスンスンだった。

下半身を波打ち、くねらせ、音も無くフェルナンドへと近付き、彼が攻撃をする瞬間を狙い攻撃を仕掛ける。

彼女の長い袖が蠢き、その中から巨大な蛇の頭が勢い良く飛び出す、口を大きく開きその牙を覗かせフェルナンドを丸呑みするかのように彼へと迫った。

さすがにそのタイミングでの攻撃を捌く事はフェルナンドにも出来ない。

ミラ・ローズに打ち込んだ掌底で砂漠に叩きつけそれとは逆の腕で、迫る蛇を受け止める。

蛇はフェルナンドの腕に噛み付き、その牙を深く彼の前腕に突き立てていた。

「捕まえましたわ、フェルナンドさん・・・・・」

蛇を放ったスンスンが小さくそう呟く、”捕まえた”、確かに彼女はそう言った。

しかしフェルナンドからすれば捕らえたという意味がわからなかった。

捕らえたからどうというのか、捉えることが決着という訳でもあるまいに、と。

だが、その捕らえたという言葉の意味を彼は直ぐに理解した。

彼の眼に映る赤い霊圧、それは砲弾となり彼目掛け放たれていた。

放ったのは最初に倒したアパッチ。
それは額から血を流しながらも立ち上がり、強い意志の篭った瞳でフェルナンドを見据え放った虚閃（セロ）だった。

捕らえたとはこういう事だった、この虚閃から彼を逃さぬという意味での捕らえたという言葉。
此処に至るまでの流れは先程と同じ、囮を用いた陽動、しかし今回は一度倒したという相手がとどめ役という虚を突いたものだった。
個々の能力の上昇と、ハリベルからの気合がこの状況を作り出していた。

腕の蛇を振り払うには些か時が足りないフェルナンド。
迫る砲撃は数瞬の後に彼に着弾する、だというのに彼の顔には笑みが浮かんでいた。
そしてその笑みを浮かべたまま彼は赤い光に呑まれていくのだった。

「ざまぁみろ・・・・・・　やってやったぜ。」

虚閃の着弾による砂煙が立ちこめる中そう零すのはアパッチ、彼の膝が顔面に入った瞬間、意識が飛びそうになるところを気合だけで耐えた彼女は、見事彼に一矢報いた。
そんな彼女に近付くスンスンと、頭をさする様にしているミラ・ローズ。
ミラ・ローズの方は掌底と叩きつけられた衝撃によるダメージがま

だ残っている様子だったが、スンスンの方はアパッチの虚閃でフェルナンド諸共蛇が消滅してしまったが、それは”一匹”のみの話でそれほど深刻という事ではない様子だった。

「イタタ・・・　まったく、あんな剣の受け方した奴なんて、あたし初めて見たよ・・・・・・」

「本当に出鱈目な殿方ですわね・・・・・・でも、漸く借りは返せましたわ。」

そんなスンスンの呟きに三人はそれぞれ頷いた。
さすがに解放までして無傷でいられたのでは、彼女等の沽券にかかわるといった所なのだろう。

「それにしてもアパッチ・・・あんたちょっとあの虚閃は強すぎやしないかい？いくらなんでも殺したりでもすればマズイだろ・・・・・」

「あぁ？　可笑しな事言ってんじゃねぇよミラ・ローズ。アレくらいでアイツが死ぬわけねぇだろ。」

いくら沽券にかかわるといっても、解放状態での虚閃の直撃は大丈夫なのかと心配するミラ・ローズに、アパッチはさも当然といった風で答えた。
それは撃った本人が一番わかっていると、それほど加減したつもりもないが全力ではない虚閃、そしてそれを受けたのはあのフェルナンドなのだ、と。
それは奇妙な信頼、ある意味確信と言ってもいいアパッチの直感だ

った。
そしてそれは直ぐに証明される。

「ハッ！　悪くねぇ・・・な。　久しぶりだ、この感覚はよぉ。」

砂煙がはれたその先に居た彼はやはり健在だった。
腕を盾にしたのだろう、片腕は焼け焦げたような痕が残り、腕には蛇に噛まれた傷、肩には剣を受け止めた刀傷と満身創痍とはいはなくとも傷だらけのフェルナンドがそこに立っていた。
その姿を見たアパッチは「ホラ見ろ」と何故か得意げな様子をしていたが、それは今関係なかった。

「どうだ？　フェルナンド・・・・・・　私の従属官は強かろう？
いい加減お前も”本気”を出してやってはどうだ？」

それは柱の上から彼女等の近くまで移動していた、ハリベルから放たれた言葉だった。
その口ぶりはどこか自慢気で、しかし言葉は彼女の従属官からしてみれば意外なものだった。

「ま、確かに・・・な。　これ位なら俺も”本気”でやってやってもいい・・・かよ。」

フェルナンドがそう零した直後、彼から霊圧が吹き上がる。
紅い紅い霊圧の怒涛、吹き上がるそれは明らかに強者の霊圧だった。
それをみて彼女等は漸く理解した、このフェルナンドという破面は解放した自分達を相手に最低限の霊圧のみで戦っていたのだと。

そして自分達が彼に傷を負わせた事により、彼は自分達に対して本当の力で臨もうとしているのだ、と。
三人の目が自然と鋭くなる。
それは臆しているのではなく、真正面からその霊圧に対するため、そしてどうすればそれに勝てるかを考えるためだった。

そして、誰が提案したわけでもなく、相談したわけでもなく、三人は同じ結論にいたり、それを口にした。

「ハリベル様・・・・・・　使います。」

ハリベルにそう告げたのはミラ・ローズだった、”使う”とただ一言だけ告げる彼女。
他の二人は何も言わない、そしてハリベルも”何を”とは問わない。
何をしたいのか、何を使うのか、フェルナンド以外の四人は判っているのだ。
ハリベルから言葉は無い、しかし無言を肯定ととった三人は行動を起す。

右手を左腕に添えるアパッチ、その巨剣を左脇に当てるミラ・ローズ、そして左腕を前に突き出すスンスン。
フェルナンドはそれを黙って見つめる、何かするのは目に見えている、しかしそれを止めるような無粋を彼は好まない。

そして、彼の目の前で行われたのは奇行、ある者は腕を引き千切り、ある者は腕を斬り落し、ある者は腕を捻じ切る。
千切られ、斬られ、捻られ、体から離れただの肉塊と変ったそれを三人は上へと放り投げる。
そして謳うのだ、誕生の謳を。

「「「　混獣神（キメラ・パルカ）！！　」」」

放り投げられたそれぞれの腕が空中で一つになる。
混ざり合う三つの腕、次第に原形を止めなくなるそれは新たな形を創り出す。
そして産み出されたのは、形容しがたい異形の怪物だった。

人とも獣ともつかないその外見、楕円の穴が二つ、眼のように開いただけの白い仮面、そこから生える二本の角。
黒い髪、というよりは鬣の方が表現として近しい大量のそれが腰まで生え、上半身を強靭そうな筋肉で覆ったその異形。
下半身にはびっしりと体毛が生え、足は人のそれではなく動物の蹄をし、尾の部分には蛇をはやしている。
腕を捧げた三人の特徴を残しつつも、それはなお異形の怪物。
そう思わせるのはその異形がまとう雰囲気によるものか、意思を感じさせないその気配、ただただそこに居るだけで気味が悪いその気配、深く暗い目のくらむ大穴を覗いたかのような、そこに自分が落ちていくような錯覚を覚えさえるその気配が、その怪物を異常と認識させるのだろうか。

「『混獣神』、アタシ等の左腕から創った、アタシ等のペット。名前は『アヨン』、・・・・言っとくぜ、フェルナンド・・・アヨンは死ぬほど強いぜ？」

静かに語るアパッチ、その怪物の名をアヨン、彼女等が自らの左腕

から創り出した異形。
そしてアパッチは自らの前で紅い霊圧を吹き上げるフェルナンドに、明確に言い放った、『アヨンは強い』と。
そう語る彼女の瞳には、誇張や自惚れは一切無かった、それは彼女の語った言葉が真実であるということを示し、彼女が、いや、彼女等がこのアヨンという異形の力に絶大な自信を持っている、という事に他ならなかった。

「強い・・・か。　イイじゃねぇかよ、強けりゃ強いだけイイに決まってる。求める先を得るための強さ、あの野郎に勝つための強さ、そしてハリベル・・・お前に勝つための強さを俺は求め続ける。戦い抜いたその先に、強さを得たその先にお前が居るなら俺は全てを薙ぎ倒して進んでやるよ・・・・・・」

アヨンは強い、その発言にフェルナンドは笑みを深める。
身体に傷を負いながら放つ霊圧に一分の陰りも無く、それどころか霊圧は増しているかのように吹き上がり続ける。
それは彼の決意、彼の誓い、必ずお前の前にたどり着くと、そして求めるものを手に入れてみせるという表れなのか。
そしてその霊圧を前に異形は叫んだ。

「グオオオおオオオガガオオオオオゴオオオォォォォオオオオオオオオ！！！」

大地を揺らすほどの叫び、その叫びは異形を更に異形たらしめていた。
鬣の中から血走った目玉のようなものが現われ、そして首から鎖骨

までが裂けそこに巨大な歯が並んだ口が現われる。
その大きく開かれた口から吐き出される大音量。
その叫びが何を意味するのか、そんなものは誰にもわからない。
だが、その叫びが何かしらの感情から来るものであり、それがフェルナンドに対するものであろうことだけは判っていた。

異形の怪物、アヨンがフェルナンドへ襲い掛かる。
アパッチ等三人の誰が命じたわけでもなく、ただ目の前にいたフェルナンドへアヨンは襲い掛かった。
その巨躯に似合わぬ異常な俊敏さ、大木のような腕が振り被られ、大振りでフェルナンド目掛けて放たれる。
だが、傷を負っているといっても相手はフェルナンドなのだ、いくら速かろうとも何の細工もない正面からの大振りが彼を捕らえられるはずなど無い。
迫ったそれを左手で受け流すように外へと払うフェルナンド、しかし異常はそこで現れた。
フェルナンドは突如左側から悪寒を感じる。
理由は判らない、ただ危険だと彼の直感がそう告げていた。
アヨンを払った腕で防御を固めるフェルナンド、こうしなければいけないという彼の本能的な部分がそうさせたのか、そしてそれは正解であった。

彼を衝撃が襲う。
今まで感じたどの衝撃よりも凄まじいかのようなそれ、それは彼の左側、固めた腕の防御の上から齎され、その防御はいとも簡単に破られ突き抜けていた。
その衝撃によりいとも簡単に吹き飛ばされるフェルナンド。
そして着地した先で彼が見たのは、腕の関節があらぬ方向に曲っているにもかかわらず、平然と立っているアヨンの姿だった。
折れている、通常ならば確実に折れている曲り方をしたその腕、だ

がアヨンは平然と、そしてその腕は何事も無かったかのように元へと戻ってしまった。

そう、フェルナンドを襲った衝撃は払われた腕の間接を曲げ、繰り出されたアヨンの拳によるものだった。
おおよそ生物としてありえないその攻撃、防げたのは僥倖だったとしか言いようが無いだろう。
本当に防げたと言えるのならば、だが。

（チッ！　左腕は死んだな・・・・・・骨が砕けていやがる・・・
肋骨も何本かいってるな、拳一発でこれ・・・かよ。　こいつは出鱈目だ・・・・・・だが・・・・・・）

アヨンの一撃、それだけでフェルナンドの左腕は使い物にならなくなっていた。
腕の骨は無残に砕けているだろう、そしてそれだけに留まらず肋骨、もしかすれば内臓の損傷もありえるかもしれない。
技術でも、技でもなく、ただ純粋な膂力のみで成されたその傷跡、生物としてありえぬその異常性がフェルナンドに多大なダメージを与えていた。

「言ったろ？　フェルナンド、アヨンは強いってな・・・・・・早く止めねぇと死ぬぜ？」

「あぁ、悪いことは言わない。　止めるなら今のうちだよ。」

「フェルナンドさん。　今回ばかりは私も二人に同意ですわ。」

左腕を押さえるようにして立つフェルナンドに、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンがそれぞれ声をかける。
彼女等は誰よりもアヨンの強さを知っている、それを前にすればいかにフェルナンドといえど苦戦は避けられず、そして今、左腕を実質失った彼に最早勝ち目など無いと彼女等は知っているのだ。
だがそんな彼女達の純粋な心配も、今のフェルナンドには余計な世話でしかなかった。

「黙ってろお前等・・・・・・　今から漸く楽しくなって来るとこだろうが。アヨン・・・だったか？　お前強いな・・・・・・強くて強くて、俺は・・・・・・ハハッ！俺は、笑いが止まらねぇよ。お前なら・・・　お前なら、俺の本当の本気を出してもよさそうだ・・・・・」

彼は笑っていた。
左腕を砕かれ、肋骨を折られ、虚閃の熱傷と刀傷と噛み痕をその身体に刻みつけながら笑っていた。
力を得るための戦い、追い込まれている自分、そして追い込んだ相手、その存在が彼を震わせる。
笑みが深くなる、刻まれた笑み、口角は上がり歯が覗く、しかし眼は鋭さだけを残し相手を射抜き、瞳にはこれ以上ない熱が篭る。
それはただの笑みでなく”獣の笑み”、獰猛な獣の笑みだった。

左腕を押さえていた手を離すフェルナンド。
左腕はただ肩からぶら下がっているだけで、だらりと垂れ下がる。
そして空いた右手を腰の後ろへ伸ばし、そしてそこに挿した斬魄刀に手を掛け、一息に抜き放つ。
引き抜かれた鈍色（にびいろ）の刃、研ぎ澄まされたそれはやはり彼自身であり鋭さが際立つ。

逆手に持ったその刃を高く高く、掲げるように頭上へと伸ばすフェルナンド。
誰もが、アヨンすらその姿に、目を奪われたかのように動かなかった。
そして一番高く掲げた姿で、勝ち名乗りのような拳を突き上げたその姿で、彼はその名を呼ぶのだった。

「刻め・・・・・・『輝煌帝（ヘリオガバルス）』！！！」

牙を研ぐ
爪を研ぐ
終着であり通過点
座すは暴風
その時の為

今はまだ

ただ、師弟として・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 31（後書き）

今回は戦闘描写が多かったかな。
うまく伝えたい描写が伝えられてればと思います。

解放後の姿、そしてアヨンの姿が伝わるか不安。
自分は分かってるからいいけれど、知らない人に文字で伝えるというのは
かくも難しいことかと、痛感しております。

そして今回書いててふと疑問に思ったことが・・・・・・
アヨンの大きさってどれぐらいですか？
乱菊の腹をつまめるほど大きいと思ったら、拳が雛森の胴体くらいになったり
桧佐木を握ってみたりと安定しないんだもん・・・・・・
公式設定がほしい。

それと……解放しちゃいましたw
太陽神↓アポロン↓ヒュペリオン↓ヘリオス↓ヘリオガバルスという流れかな。
漢字の方は「煌帝」ははじめから決まってて、後は某侍鎧アニメから拝借ですw（古！

決して1ターンに一度シンクロモンスターを吸収したりはしませんw

２０１１．１０．０６直したとばかり思っていた、三人娘の名前を公式に変更。

「具合はどうだ？　お前達。」

入室と共にそう声をかけるハリベル。
その部屋はいつかの白い部屋、寝台が三つ置かれた白い部屋であり、その寝台にはやはりいつかと同じ面々、彼女ハリベルの従属官であるアパッチ、ミラ・ローズ、スンスンの姿があった。

「具合と言われても、別段悪いところはありませんわ。ハリベル様。」

ハリベルの言葉にそう答えたのはスンスン、見れば確かにその顔の血色は良く、病気という訳ではなさそうであったがその左腕には肩まで包帯が何重にも巻かれており、そしてそれは他の二人にも同様に言えることのようであった。

「そうですね、アヨン(あいっ)を呼ぶと大概腕はこうなりますから・・・・・・まぁ今回は少し長引きそうですけど・・・・・・」

スンスンに続いて話すのはミラ・ローズ。
ハリベルにその包帯で巻かれた腕を軽く見せるようにしながら、心配する必要は無いと告げる。
その実彼女等の左腕は重症といっていい状態であったが、主に心配を掛けまいと彼女等はそれを口にすることは無い。
彼女等の左腕に巻かれている包帯、だがそれは怪我や負傷によるものではなく、彼女等の”切り札”を使用したための傷だった。

『混獣神 ”アヨン”』

彼女等ハリベルの従属官三人の左腕が混ざり合う事で産まれる超常の獣、左腕三本から異常に肥大した肉と霊圧が産み出され誕生するその獣は”切り札”という言葉に相応しい圧倒的な破壊力を持っていた。
だが大きな力はそれに伴って反動、リスクを生む、彼女等がペットと呼称するアヨンの場合はリスクの一つとして、産みの親である彼女等の命令を絶対遵守することは無いという事がある。
産み出す事は出来ても彼女等従属官達にそれを御する術はない、アヨンという獣に理性や思考があるかは判らないが、アヨンは自らの思うままに行動するのだ。
いくら強く強大であろうとも、御する事のできないものはそれだけで欠陥品であり、戦力としての不安点である。
だがそれでも彼女等の”切り札”とされるのは、それすら補うほどアヨンが強力である、という事なのだろうが。

そしてもう一つ、産み出した後の反動、それが彼女等の腕に巻かれた包帯の理由だった。
アヨンを再び己の身体へと戻す、三本の腕へと戻すにあたり、戻し

たその腕は通常では考えられないほどの損傷を負っている。
筋繊維の断裂、腕各部の骨折、裂傷など、外部、内部に至るまで傷が腕を覆うようにしているのだ、それはアヨンという超常の獣の放つ霊圧と、肉体を省みぬ酷使によって刻まれた爪痕にほかならなかった。
だが見方によってはその程度で済んでいる、という見方すらある。
腕三本、反動も傷も三等分、アヨンという獣を呼び出したということに比べれば安いリスクといえる。
まぁそれでも当分の間彼女等の左腕は使い物にはならないのだが・・・・・

そして、彼女等の腕が使い物にならなくなっている原因はもう一つあった。

「てか何なんですかハリベル様！　フェルナンドの”アレ”は！反則！　あんなの反則だぜ！」

ミラ・ローズに続くように最後の一人、アパッチが叫ぶ。
腕を振り上げ、寝台から飛び出さんばかりの勢いで叫ぶアパッチだが、その直後、振り上げた左腕は重症という言葉通りの痛みを存分に発揮し、アパッチは顔を青ざめさせ寝台の上をのた打ち回っていた。

そうしてアパッチが腕の痛みも忘れて憤慨するもの、それが彼女等の腕が本来以上に使い物にならなくなっている理由だった。
アヨンによって酷使されたアヨン自身の身体、その酷使された状態を彼女等はその身に腕の形に戻して受け止める。

それはアヨン自身の酷使であると同時に、アヨンが負った傷まで彼女等が引き取るということであった。

アヨンが腕へと戻る際の身体状況がそのまま彼女等に引き継がれる。そして、今回アヨンが彼女等によって腕へと戻された時、アヨンは身体の全身を、いや、内側の臓腑に達するほどの熱傷が覆っていた。所謂丸焦げ状態、その状態のアヨンを戻した彼女等の左腕は、アヨンによる爪痕と同時にその熱傷まで引き継いでいたのだ。

そしてそれは直前までアヨンが戦っていた相手、フェルナンド・アルディエンデによって成されたものであった。

「まぁアレの元々の姿を思えば当然と言えば当然、なのだがな・・・・・それにしても、まったく　凄まじい男だよ、アレは・・・・・・」

そう言って、アパッチの”反則”という言葉に苦笑を浮かべるハリベル。

そうして白い部屋にある窓の方へと歩くと、その窓から眼下に広がる砂漠を見る彼女。

そこに広がるのは白い砂漠と異様な光景。

所々が大きく、深く陥没した砂漠、それはただ砂漠が陥没したという訳ではなかった。

陥没したその全ての表面が粒状の砂ではなく、硝子のようにな個体で満遍なく覆われ硬質化していたのだった・・・・・・

―――――――――

拳を振るう。
青年は拳を振るう。
ただ目の前の男を打倒する為に、青年は拳を振るう。

それを受けるのは壮年の男。
男は独特の片足立ちの構えを取り、青年の強烈な攻撃を受け続ける。
それはその二人の男にとって既に日常、といっていい風景だった。
青年は強くなるために、壮年の男は強くなった青年と戦う為に、ただそれだけの為に彼等は戦っていた。
その二人の間にあるのは他に混じるものの無い純然たる”渇望”だけ。

”戦い”というものへの渇望だけだった。

「フハハハハ！！　今日は随分と拳が奔っているではないか青年（ホーベン）！
いや、逸っている、と言ったほうがいいかい？」

荒れ狂う拳の青年、グリムジョー・ジャガージャックの攻撃を捌きながら壮年の男、ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオはそう叫んだ。

”逸っている”、並々ならぬ勢いで繰り出されるグリムジョーの攻撃をドルドーニはそう評した。

攻撃の威力も然ることながら、繰り出される彼の拳はその一撃に込められた”熱”が違っていた。

ドルドーニの言葉にグリムジョーは言葉を返さない、逸っていると言われたその拳の”熱”を語る事は無い。

しかし、その”熱”の来る所をドルドーニは知っていた。

「やはり彼の霊圧は、君を滾らせるのに充分足るものだったようだ・・・ね！」

叫ぶドルドーニ。

そして言葉の最後と共に放たれた前蹴りの一撃で、グリムジョーを吹き飛ばし距離をとった。

そう、グリムジョーの拳に宿る”熱”とは滾る彼の闘志の表れであり、それをドルドーニは先頃感じた一つの霊圧によるものであると言ったのだ。

広大な虚夜宮の片隅から放たれた霊圧、それを感じ取ったドルドーニは瞬時にそれが誰の者であるかを悟った。

それは言葉で表そうとすれば熱気であり炎のような霊圧、熱く猛るそれはドルドーニの知る一人の破面（アランカル）の霊圧だった。

霊圧の持ち主は彼が気にかけるもう一人の”強き者”、フェルナンド・アルディエンデであり、それはドルドーニが気にかけるのと同

じか、それ以上にグリムジョーにとっては避けて通れぬ相手の名であった。

「どうしたね？　青年。　先程からまったくしゃべる気配が無いが・・・これではまるで吾輩が一人でしゃべり続けているなにやら可哀相な人物だと、多くの誤解を孕んだまま伝わってしまうのだがね・・・・・」

ドルドーニの蹴りによって距離をとらされたグリムジョー、そしてそんな彼に対するドルドーニの言葉にも彼は無言だった。
その拳から伝わる”熱”に似合わぬ口数の少なさ、さすがにドルドーニも不審に思ったのか気になる様子でグリムジョーに再び話しかける。
ワザとらしく肩を落とすドルドーニ、それが恐らく誇張した演技であろう事は誰が見ても明らかであり、出来ればふれたくもない手合いではあるが、そのふざけた態度にグリムジョーは漸く口を開く。

「あのクソガキは関係無ぇ・・・・・・」

「おぉ漸く話す気になったかね。　これで吾輩の可哀相な紳士イメージは払拭された、というものだ。だが・・・　関係ない・・・か・・・・・どうにも納得しかねる回答・・・ではあるねぇ。」

顎に生やした髭をなぞる様に撫でながら、ドルドーニは値踏みするような眼でグリムジョーを見る。
「関係ない」、グリムジョーはそう言いはしたが、ドルドーニからすればその言葉はあまり信に足るものではなかった。
他の、他の破面ならばいざ知らず、このグリムジョーという男がフ

ェルナンドの霊圧を感じられないはずがないのだ。
そしてドルドーニが感じたフェルナンドの霊圧は想像以上に強力であった、おそらく帰刃（レスレクシオン）したと思われるその霊圧、その強力な霊圧を感じたであろうグリムジョーがそれに対し、何の興味も感想も持たないなどという事は、ドルドーニの中でいっそ嘘だと断じてもいいものだった。

そうして二人が沈黙する。
不機嫌な様子で睨みつけるグリムジョーと、何故か楽しそうに彼を見るドルドーニ。
この二人の間に語らいというものはそう多くない。
言葉を語り合う暇があるのならば、時はそれに費やすのではなく戦い、強くなる事に費やすのがこの二人の常。
言葉を語るのも戦いの中で、その殆どはドルドーニの一方的なものではあったがそれも多くはないといえるだろう。

傍から見れば少々変っている二人の関係。
ドルドーニはグリムジョーを”弟子”であるとしながらも、グリムジョーがドルドーニを”師”として認識しているかは謎だった。
彼は誰に問われようともドルドーニの事を語ることはしなかった。

それこそ彼に付き従うシャウロンをはじめとした、大虚時代からの配下にもそれを語る事はなく、問われても「お前には関係無ぇ」の一言で済ませてしまう始末。
不審に思うグリムジョーの配下達であったが、日に日に着実に、そして明らかに強くなっていくグリムジョーの姿を間近で見ることでその不安感は消えていった。
彼等にとって理由など何でもいいのだ、彼等の”王”は日を追う毎に強くなっていく、彼等にとって重要なのはその一点でありそれが何故かという事はそれほど重要ではなかった。

そう重要ではないのだ。
重要なのは呼び名ではなく本質であり、言葉に出さずともそれはそこにあるのだから。

「チッ！」

沈黙を破ったのはグリムジョーの舌打ちだった。
舌打ちと共に顔をそっぽに向ける彼。
不機嫌、というよりは寧ろ面倒だといった様子の彼、そんな彼をドルドーニは依然楽しそうに見ている。

「確かに、あのクソガキの霊圧は感じた。　悪くない霊圧だ・・・・・だがな・・・　今の俺に必要なのはアイツじゃ無ぇ。」

グリムジョーは静かに語る。
感じたフェルナンドの霊圧、それを”悪くない”としながらもそれは今自分には必要ではないと、彼はそう言ったのだ。
彼にとって避けて通れぬ相手の霊圧、彼の気質から言えば”悪くない”というのはある意味賛辞とも取れる言葉ではある。
しかしそう言いながらも彼はその霊圧を放つ者を今必要ないというのだ、それは一体何故か、ドルドーニも楽しそうな顔は崩さずともどこか怪訝な雰囲気を漏らしていた。

「おいオッサン。」

「何だね青年？　というかオッサンではなく紳士（セニョール）、もしくは師匠（マエストゥロ）と呼び給えと吾輩何度も言っているだろう・・・・・・」

グリムジョーはドルドーニへと逸らしていた視線を向ける。
ドルドーニはおどけた物言いをしながらも、その瞳は決してふざけている様子ではなかった。

「黙ってろよ・・・いいか、俺がオッサンと手を抜いて戦（や）り合うのは今日が最後だ・・・・・・次は・・・　次に戦（や）るのは”戦場”で・・・だ。」

ドルドーニの瞳が僅かに見開かれる。
グリムジョーの発した言葉、それは何時かの強奪決闘（デュエロ・デスポハール）で叩きつけられた”挑戦”を明確に言葉にしたものだった。
無言の挑戦と無言の承諾、言葉無く、しかしそれにより交わされた”戦いの契り”、その後もこうして手合わせを続けていた二人にとってこのグリムジョーの言葉は”終わり”を告げるものだった。

「・・・・・　手を抜いて、か・・・　互いに剣は抜けども解放はせず、霊圧を用いた技も使わず、肉体だけで戦うのは確かに限界ではある・・・・・・言われてみればこんなものは”ママゴト”と同じだねぇ・・・・・・いや、どこかで気付いていた、と言うべきかな。」

グリムジョーの言葉にドルドーニは静かに答えた。

手を抜いて戦う。

ドルドーニにとって位階では格下であるグリムジョーが放ったその言葉、ただそれだけを訊けば随分と傲慢なものに聞こえるそれ、しかしドルドーニにそれを咎める様子や、怒りを覚える様子は無かった。

ドルドーニ自身わかってたのだ、手を抜いて戦ってるという意味を。

二人は互いの肉体のみを持って戦い続けていた。刀剣解放も、虚閃に代表される霊圧を用いた技も使わずに、霊圧による肉体強化のみで戦い続けた二人。

それは強くなる為の一つの方法論であるのと同時に、”全力を出してしまわぬようにする”というある種の制限でもあった。

片や虚夜宮十強の一角である第６十刃（セスタ・エスパーダ）、片やその十刃に最も近いとされる破面、その二人が全力で戦ってしまえばどうなるかなどは、想像する必要すらないほど明らかだった。

そもそも虚夜宮の天蓋の下での刀剣解放は慣例として禁止であり、その時点で全力を出すことなど出来はしない。

だがそんなものはあくまで慣例であり、第４十刃以上に課せられた厳守と比べ緩いものではある。

それでも十刃クラスの霊圧の衝突は虚夜宮に影響を齎すのは明白、それ故に解放や霊圧技の使用をドルドーニが禁止していた。

だが、それは結局のところ微温湯の中の戦いでしかない。

確かにグリムジョーとドルドーニの実力差があるうちならばいいだろう。

しかし日に日に強くなるグリムジョーの力、互いの差が埋まるにつれその戦いは熱さを、命を削るという熱さを無くして行くのもまた

事実だった。
その無意味さ、それをドルドーニも、そしてグリムジョーも判っていたのだ。
互いが互いに求めるのは、互いの全てを賭けた戦い、互いにそれを望み、誓った二人にとってその前に微温湯に浸かるというのは、その後の熱を奪ってしまうかもしれない行為だった。

「オッサン、アンタを倒して俺は上に行く。アンタの居る席を奪うぜ・・・だがそんなもんじゃ終わらねぇ。　俺が目指すのは”王”だ、　”戦いの王”だ、　その為に・・・その為に俺は、アンタを越えて行く。」

それはグリムジョーの宣言だった。
ただ己の力を振り回す獣そのものだった彼はもうそこに居なかった。
それは己の中の獣を殺したと言うことではなく、己の内に獣を内包した戦士となった証。

静かに、だが紡がれた言葉には絶対の自信が漲っている、そしてその自信は彼の瞳からも伝わっていた。
それはただの虚勢ではなく、自身の実力を知りそれに裏打ちされた自信。
薄く細いそれではなく、撓まず、曲らず、折れない精神の柱によって支えられたものであった。

「言う様になった・・・・・・　だがそう易々と譲れるほど、吾輩のいる場所は易くは無いよ、青年。だが・・・こうして挑まれたならばそれに答えるのが紳士の務め。改めて青年の挑戦を受けよう。
　そして吾輩の”全力”を持って青年の相手をすると誓おうではないか！」

グリムジョーの宣言に、ドルドーニもまた宣言する。
全力をもって戦うと、微温湯ではなく、第６十刃に上り詰めた自身の持てる全てを持って戦うと、ドルドーニは高らかにそう宣言した。
ドルドーニの顔は愉悦に満ちる。
待ち望んだものはもう直ぐ彼の元に訪れると、愉悦を浮かべながらもその瞳には燃え盛る闘志が炎を灯している。

所詮彼等はどこまでいっても戦士なのだろう。
戦うことでしか己を証明できず、理解できず、他者と交わる事も出来ない不器用な存在。
言葉の語らいで表現できず、語るならば互いの拳を、刃を通して語らう事しか出来ない不器用な存在。
だがそれは、だがそれはどこか羨ましくもある、そんな在り方だった。

「なら今日はもう終いだ。　次ぎ合う時は殺し合い・・・・・・簡単に死ぬなよ？　オッサン。」

「ふん！　吾輩を一体誰だと思っているのだね?吾輩は第６十刃ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ!虚夜宮の嵐を呼ぶ男にして全女性(フェメニーノ)の従属官!女性が吾輩を待っていてくれる限り吾輩は死んでも蘇るのだよ！ハハハハ！！」

おどけたドルドーニの態度とそれを面倒そうに眺めるグリムジョー。
それは常通りの姿、そして恐らくは最後の日常の姿。
次に互いがまみえるのは、ただ奪い合う事だけしかない決闘の場であり、そしてどちらかが奪われるのだ。

グリムジョーが踵を返す。
ドルドーニに背を向けその足を踏み出そうとした瞬間、ドルドーニはその背に声をかける。

「おぉ、忘れるところだったよ青年。　少年（ニーニョ）の霊圧が君の拳を逸らせた原因ではないとするならば、一体何がそうさせたというのだい？」

それはドルドーニの疑問だった。
彼はグリムジョーの逸る拳の原因は、フェルナンドが発した霊圧を感じたためのものだと思っていたのだ。
だがグリムジョーはそれを否定した。
では一体何が彼の拳を逸らせたのか、この場を逃せばこうして言葉を交わすことは無くなる、最後にドルドーニはそれが知りたかった。

「・・・大した理由じゃねぇ・・・・・・」

「ならば教えてくれてもいいではないか、青年。」

ドルドーニの問にグリムジョーは背を向けたままで答える。
一瞬の間の後、己の拳の逸りは大した理由ではないと、それだけを答えた。
それに対してドルドーニもならば教えてもいいだろうと食い下がる。
沈黙、グリムジョーの答えを待つドルドーニと、何事か迷うグリムジョー。
そしてやはり舌打ちをすると、グリムジョーは答えた。

「本気でアンタと戦(や)りあったら・・・そう思うと俺の中の”獣”が表に出てきた・・・・・それだけの話だ。」

それだけ答えるとグリムジョーは響転(ソニード)でその場を後にした。
残されたドルドーニは目を丸くしたまま立ち尽くす。

フェルナンドの霊圧、それが彼の拳の逸りの原因だと思っていた。
だがそうではなかった。
自分が、自分との戦いが彼の拳の流行の、”熱”の正体だった。

「・・・・・クッ・・・・ククククッ・・・・・・」

声を漏らしながら俯くドルドーニ。
そうか、そうだったのかと。
彼の拳から感じた”熱”の来るところは少年(フェルナンド)ではなく、自分だったのかと。
それ程までにあの青年は自分と戦う事を望んでいるのか、と。

「ククククッ・・・・　フハハハハハハ!!いいだろう青年!　吾輩はその”熱”に全力で応える!君の内にいる”獣”がその爪を!牙を!存分に振るい吾輩の内なる”嵐”と共に咆哮するような!そんな戦いを吾輩としようではないか!!!」

逸り猛るその拳、その拳とまみえることが今のドルドーニには待ち遠しかった。
互いの存在を喰らうために戦う事が待ち遠しかった。
その後にあるのは死かも知れない、だがそんなものは今考えること

ではないと。
今考えるべきはどうすれば彼の”熱”に応えられるか、という一点であり、それ以外は今はいらないのだ。
最早その約束の時に焦がれてるかのような自分が、ドルドーニには愉快で仕方が無かった。

嗤うドルドーニ、その声はただ歓喜に満ち満ちていた・・・・・・

暴悪
暴威
暴虐
暴慢
暴君の帰還

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．３２（後書き）

今回はいつもより短めです。（大体７８００文字くらい

フェルナンドの解放を楽しみにしていた方、申し訳ないです。
フェルの解放姿はもう少し先なんですよｗ
前回で名前を、そして今回は雰囲気だけですね。
解放姿、アヨンフルボッコは妄想でお願いします。

そして今回のメインは
グリムジョーとドルドーニは改めての宣戦布告でした。
この二人の関係、書き始めた当初はこうなることを予測もしていなかったなぁ。
軽い気持ちで何故か人気ｗのドルドーニを動かしまくったらこうなった。

白を基調とする虚夜宮（ラス・ノーチェス）においてその部屋だけはそれに反し、黒が全てを染め上げていた。
床、壁、天井、取り囲む六面全てが黒であり、そして装飾は何一つ無い言うなれば黒塗りの匣のような部屋。
その部屋にいるのは三人の男、やや癖毛の茶色い髪の男、糸のように細い目をした白銀髪の男、黒髪を編みこんだ浅黒の肌の男の三人。
それは虚夜宮における最高権力者達、『創造主』藍染惣右介とその部下である市丸ギン、東仙要の三人であった。

彼等三人がこの虚夜宮に揃うのは非情に稀な事だった。
その理由の一つとして彼等が本来所属する組織とその中での彼等の立場、というものがある。
彼等は”死神”と呼ばれる魂の調停者である。
死神とは現世で死した魂を『尸魂界（ソウルソサエティ）』へと導き、現世の霊なるものをそれを害する存在、『虚（ホロウ）』から守る存在。
そして死神とは”瀞霊廷（せいれいてい）”と呼ばれる尸魂界の中枢を守護する組織、護廷十三隊に所属している。

護廷十三隊に数多いる死神、その中で最も強く、信厚い者がその背

中に”一”から”十三”の各数字を背負った『隊長』である。
今、この黒塗りの部屋に居並ぶ三人、藍染、市丸、東仙、彼等はその最も強く、信厚い者である護廷十三隊各隊の隊長なのだ。

その彼等が今、本来死神が行き来することが出来ない虚圏（ウェコムンド）にいるという事実。
それは即ち尸魂界における護廷十三隊隊長三人の不在、ということでありそれは通常の組織からすれば由々しき自体のはずであった。
しかし、現実に三人は虚圏に居り、そしてそれは尸魂界に知られることも、また不在による影響を与えることも無かった。

それは何故か。
まず理解しなければいけないのは隊長という者の持つ”力”だ。
死神の中でたったの十三人しかいない隊長、その中のどの一人をとっても一般的な死神と比べること自体無意味と思わせるほど隔絶した、霊圧、知識、戦闘技術を有している。
一般的な大虚（メノスグランデ）を相手にしても、最下級大虚（ギリアン）ならばそれこそ多数を相手にしたとて一人で何の問題もなく対処できるだろう。
隊士と呼ばれる一般の死神が束になっても一切の勝ち目が無い最下級大虚すら物の数ではない、それが隊長と呼ばれる者達の実力であり、それは隔絶した”力”の持ち主であるということの証明だった。

その隔絶した”力”を持つ隊長、その中の三人が瀞霊廷、更には尸魂界を離れているという事実。
護廷十三隊という”守護”を目的とする組織からすれば考えられない事実、しかしそれは今許容されているどころか望まれたことだった。

”尸魂界外縁部三箇所にて、大規模な黒腔（ガルガンダ）発生の兆候あり”

藍染をはじめとする三人がこの虚夜宮に揃った理由の全てはこの一報によるものだった。
突如として現われたその兆候。
黒腔とは虚等の虚圏に住むモノ達が尸魂界、または現世へと移動するために用いる通路のようなものである。
彼等だけに用いる事ができるその通路、それの発生の兆候があるということは即ち彼等が現れるということと同義だった。
そしてその大きさはただの虚とは比べられぬほど大きく、大虚の大量出現を死神に予感させた。

この報に護廷十三隊は速やかに隊長三人の”単独派遣”を決定した。
何故単独なのか、大規模な戦闘が予想される場所に何故隊長一人だけが派遣されるのか。
その理由は単純。

”邪魔”なのだ、隊長と呼ばれる者達が”全力で”その力を振るうには他の者は邪魔でしかない。
仲間を、部下を巻き込まぬように戦うという事はそちらに気を裂くということであり、戦闘に集中することを妨げる。
おそらく出現するのは最下級大虚、物の数ではないにしろ或いは中級大虚（アジューカス）も含まれるかもしれないという戦闘において、それは致命的な場面を作る可能性を秘めていた。
故に単独での派遣、そしてそれに抜擢されたのが藍染、市丸、東仙の三隊長だった。
そして彼等三人はそれぞれ別の発生の兆候のあった外縁部へと向かう。

何故か三箇所に分散し、何故か大量発生の兆候をみせ、そして何故か彼等三人が選抜されたが故に。

「宜しいのですか、藍染様・・・・・・」

そう口にしたのは浅黒の肌の男、東仙要。
彼はその光のない眼を言葉と共に藍染へと向ける。
その眼に光は無い、だがその代わりに疑問と不可解そうな意思が宿っていた。

「何がだい？　要。」

藍染はその東仙の問に、いつも通りの柔和そうな笑みを浮かべたまま答える。
何事かを確認するような東仙の言葉に、その言葉の意味するところを判っているだろうにあえて、何の事だ、と問い返した。

「あの者は十刃（エスパーダ）に・・・・・・いえ、藍染様の部下に相応しいとは思えません。あの者は”正義”ではなく”快楽”のためだけに力を使う、私はこのままあの者を幽閉し、破棄する事こそ藍染様の御為と思えてなりません・・・・・・」

「ありがとう、要。　君の忠節には感謝しているよ・・・・・だが彼は必要なんだ、おそらくそれは他のどの十刃にも真似出来ない程・・・ね。」

二人の会話に挙がる人物、それは虚夜宮にいる誰よりも傲慢でいてしかし強者である者、第2十刃（ゼグンダ・エスパーダ）ネロ・マリグノ・クリーメンの事であった。
今はその眼に余る暴威と暴慢な行いによって、藍染に『連反膜の匪（カハ・ネガシオン・アタール）』と呼ばれる十刃専用の懲罰空間へと幽閉されているネロ。
東仙はネロの持つ力以上にその人格は藍染の部下として不適格であり、このまま破棄することを進言するが藍染はその注進を聞きながらもあえてネロは必要だと応える。

ネロの持つ必要性がなんなのか、東仙にそれは理解できなかった。
しかし、彼の盟主である藍染がそう決定した時点で東仙は「藍染様がそう決められたのでしたら・・・・・」と答え、それ以上藍染に進言することを止めた。
彼にとってそれ以上の言葉は主への不敬に当たり、彼の重んじる”正義”に反する行いだったからだろう。
そして口を噤んだ東仙に代わり、もう一人の男が口を開いた。

「まぁ2番サンも随分長い間閉じ込められとったし、ええ加減頭も冷えとるやろ。問題ないんとちゃいますか？」

場にそぐわぬ飄々とした物言いの白銀髪の男、市丸ギンがそう口にする。
彼の言う通りネロが連反膜の匣の空間に幽閉されてから随分と時間が流れていた、如何に怒りに燃えていたネロといえどもこれだけの時間その怒りを持続させる事は不可能であろう。

「あぁ、もう頃合だろう。・・・それに彼には”舞台”に上がってもらわないといけない。」

市丸の言葉を肯定する藍染。
そして藍染はやはりいつもの笑みを浮かべたまま腕を前へと伸ばし指を鳴らす。

たったそれだけの仕草、そして小さく響いた音によって、三人の前の空間が歪む。
歪みは少しずつ大きくなりそして中心の一点へ向け収束し、そこからまるで中空に線を引いたように左右に黒い切れ込みが伸びる。
そして切れ込みはある程度の大きさにまで伸びきると上下へ、まるでゆっくりと口を開くかのごとく空間を押しのけて広がり、その口の中にはこの部屋よりも暗い空間が広がっていた。

そして開いた空間から溢れる霊圧。
風船へと閉じ込められた空気が一息に噴出すように、暗い空間から霊圧が噴出される。
その噴出す霊圧に藍染と市丸は先程のままの笑顔を、しかし東仙だけがその霊圧に眉間に皺を寄せていた。

だが次の瞬間、その噴出す霊圧以上の霊圧、いや、霊圧の塊が暗い空間から飛び出してきた。
そしてそれは開いた空間の真正面に立つ藍染目掛け、寸分違わぬ狙いを定め襲い掛かる。
しかし、藍染はその迫る霊圧の塊を前にしてもその笑みを崩さない。
直後、藍染へと直撃するかと思われた霊圧の塊は二振りの刀によって消滅する。

そして藍染の前には東仙と、そして市丸の二人が背を向け立ちはだかっていた、そう、そもそも飛来する霊圧に対して藍染がその笑みを崩す必要など無いのだ。
彼の両脇に控えていた二人、東仙要と市丸ギン、彼等がいる時点で藍染が傷を負うことなどありえない。
当然のように藍染を庇うように開いた空間の前に立つ二人、そしてその空間の中からゆっくりと囚われの囚人が姿を表した。

「藍染・・・・・　テメェどういうつもりだ!!こんな辛気臭ぇ場所にこのオレ様を閉じ込めやがって!オレ様は”神”だぞ!　テメェ如きが御しきれるとでも思ってやがるのか低能が!今此処で殺してやろうか!!」

現われたのはネロ・マリグノ・クリーメン。
相変わらずの巨体、肥大した筋肉とそれを更に覆う脂肪、後ろに撫で付けただけの緋色の髪と怒りを湛えた緋色の瞳。
ネロは藍染達の予想とは違いその怒りを今まで燃やし続けていた。
だがそれは彼が元々抱いていた怒りとは違うもの、彼の怒りが本来向いていたのは第3十刃ハリベルであり、藍染へではなかった。
しかし藍染のてによって閉鎖空間へと閉じ込められた彼の怒りはハリベルに向けたものもすべて藍染一人へと向いた。

ネロにとってその怒りの矛先はさほど重要ではなく、寧ろ重要なのは抱いた怒りを解消するという行為であり、その為にそれを向ける先など誰でもいい、ということなのだろう。

「貴様・・・・・・　藍染様になんという暴言を・・・・・・今すぐ平伏し許しを請え、ネロ・マリグノ・クリーメン。」

「あぁん？　邪魔すんじゃねぇよ東仙！！　見えねぇその眼、潰されてぇか！！」

ネロの藍染に対する見過ごせぬほどの暴言に、東仙は怒気を隠しもせずにネロに謝罪を命ずるが、ネロはその言葉を聞かず矛先を東仙へと向ける。
ネロにとってこの如何ともしがたい怒りをぶちまけられるのならば、相手は誰でもいいのだ。
閉鎖空間への幽閉は彼に多大なストレスを齎していた。
何せその空間には彼しかいないのだ、一人だけの孤独、ネロにとってそれは問題ではなかったが自分一人しか居ないということは、自分以外の者がいないということ。
それは彼にとって奪う命が無いという事だった。
彼にとって他者の命を搾取するのは”神”として当然の行為だった。
”神”である自分が存在を許しているが故に他者は生きていることが出来る、そしてその許した命を奪う権利を自分が持っていると信じて疑わないネロにとって、奪う命の無い空間は苦痛だった。
そして苦痛は更なる怒りを燃え上がらせ、そして解放された今、彼はそれをぶちまけたくて仕方が無いのだ。
それの対象が藍染から東仙に変ったとて彼に然程の変わりは無い、今はただ一刻も早くこの怒りをぶちまけたい、ただただ肉を潰し、骨を砕き、命を奪う事で満たされたい、ネロの中にあるのはそれだ

けだった。

ネロの叫びに東仙は腰に挿した斬魄刀に手をかける。
東仙にとって藍染への不敬は万死に値する行為であった。
それを当然の行為として憚らないネロの存在は彼には許容できない歪みでしかなく、例え藍染の言葉に背く事になろうともこの男だけはこの場で斬り捨てるべきだと判断したのだ。
ネロはその東仙の気配に下卑な笑みを浮かべる、二人の間に緊張が高まるが藍染にそれを制するような気配は無かった。
だが、もう一人の人物がそれを止める。

「まぁまぁ、2番サンも要もそう気ぃ立てたらアカンて。今日は2番サンを外に出すゆう事で、ちょっとしたお土産があるんや。ね？藍染隊長。」

緊張の高まる二人の間に割って入ったのは、やはり飄々とした市丸だった。
手を広げてまぁまぁと両者を制そうとする市丸、東仙はこれに冷静さを取り戻した様子だったが、ネロの方はせっかく怒りをぶつけられる所を止められ不機嫌さを増すが、土産という言葉にその食指が動いたようだった。

「市丸、テメェも一緒に殺されてぇらしいな・・・・・・あん?待てよ・・・土産だと？　このオレ様を閉じ込めたことへの詫びってか。えぇ?藍染!」

市丸の発した”土産”という言葉に、ネロは怒りを抱えながらもまんざらではない様子だった。

彼からすればこの場で一番偉いのは自分であり、他の三人はずっと下の身分と変わりなかった。
その彼等が自分にたてつくという事がネロの怒りを加速させていたが、その彼等が土産という自らの立場を弁えたものを持参した、という事はネロの虚栄心を擽るに充分なものだったのだろう。

「十刃に欠落を生まない為とはいえ君には不自由を強いてしまったからね。」

柔和な笑みを崩し、いかにも心苦しいといった表情を浮かべる藍染。
それが真実彼の感情によるものか、それとも上辺だけかは言うまでもないが、それでもネロに対し謝罪したという事実はネロにとって当然の行為でありながらも悪い気のしないものでも在った。

「大分自分の立場が判って来たじゃねぇかよ!それで?　そんなもんより土産はなんだ?しょうもないもんだったらまとめてぶっ殺すぞ!」

藍染の態度に満足しながらも強気の姿勢を崩さないネロ。
その態度に再び東仙の怒りが増すが、市丸がそれを宥める。
そんなネロの言葉に藍染は、再びいつもの笑みを貼り付けるとネロに語りかける。

「それなんだが・・・・・・　私達が尸魂界からコチラに来る際に何故か突然大規模な大虚の襲撃が有るという一報があったんだ。私とギン、要がその討伐にそれぞれあたったんだが、不幸にも我々が現場に到着するまでに、現地の住民の多くが大虚の被害にあってし

まってね・・・・・・本当に不幸な出来事だと思わないかい？」

「それがどうした。　ゴミムシ共がいくら死んでもオレ様には関係ねぇよ！」

藍染が語ったのは彼等がこの虚夜宮へと来る際に起こったひとつの出来事だった。

ネロの言葉通りそれは彼にまったく関係なく、そして望むものでもない、だが藍染はそんなネロを「まぁ聞いてくれないか。」と制すると、再びその出来事を語り始める。

「尸魂界外縁部、別々の三箇所でほぼ同時に発生した巨大な黒腔、私達がそれぞれの担当区域に到着した頃にはそこに住んでいた者達は大虚の霊圧に中てられて瀕死となっていたよ。その数は三箇所合わせておおよそ”一万”、外縁部という瀞霊廷からあまりに離れたその場所故に、到着はどうしても遅くなり、結果として未曾有の被害を生んでしまった・・・・・・」

それはあまりに不幸な結末。

発生を察知したにも拘らずそれに間に合うことが出来ず、結果大量の命が失われたという現実。

藍染は俯き語る、ネロはその姿に何の興味も示さず、早く土産をよこせとイラつき始めていた。

だがそのイラつきも、藍染が発した言葉で消えうせた。

顔を上げ、その顔に悲痛な表情ではなく、笑みを浮かべた彼はネロにこう言ったのだ。

「その”一万”の魂を・・・・・・・　ネロ、君の好きにしてくれて構わないよ。」と。

藍染がネロに対して持ってきた土産とは、尸魂界に住まう魂魄一万人分という大量の”命”だった。
食すも良し、犯すも良し、弄るも良し、殺すも良し、その全てをネロが決めて良いという一万の命、それが彼に対する土産と、彼の怒りを御する切り札だった。

もう判ると思うが、偶然にもネロを解放する時に大量の大虚の襲撃があるなどという好都合はありえない。
そもそも破面を支配する藍染が、大虚の百や千を支配できないはずが無いのだ。
そう、この出来事の全ては仕組まれていた、大虚の侵攻も、黒腔発生の箇所も、そして彼等三人が単独派遣任務につくという事も。
そして彼等三人は不幸にも大虚の犠牲となった魂魄を回収し、虚夜宮に持ち込んだのだ。

その全てをネロを御する”餌”とするために。

「ゲヒャ！　ゲヒャヒャヒャヒャヒャ！　悪くねぇぞ藍染。一万の貢物かぁ・・・・・・　ゲヒャヒャヒャ！そんだけいれば充分だろ。殺して、喰って、殺してぇ・・・・・・ゲヒャヒャ！　テメェ等低能にしちゃぁ良くやったほうだろうな、褒めてやるぜ！ゲヒャヒャヒャヒャ！！」

ネロはその用意された餌にしっかりと食いついた。
彼にとって命を奪う、搾取するというのは何にも増した快楽であり、それが脆い魂魄だろうと強力な魂魄であろうと関係は無かった。
どちらかといえば質より量、大量の命が自らの掌に納まりそれを握りつぶすような感覚、命乞いをするそれに一瞬の希望を与えてから突き落とす愉悦と、それがみせる断末魔。
それを想像するだけでネロの顔はニヤけていく、もう藍染達のことは彼には見えていない、見えているのは絶望に染まった弱者の姿だけだった。

「魂魄は全て第2宮（ゼグンダ・パラシオ）に届けてあるよ、後は存分に愉しんでくれ。」

「随分と手回しがいいじゃねぇか！　今回の事はオレ様へ貢物を持ってきたテメェ等の殊勝な態度に免じて、無かったことにしてやる。
”神”の寛大な処置に感謝しろよ！ゲヒャヒャヒャヒャ！！」

先程までの怒りが嘘のように下卑な笑い声を上げながら、ネロはその場から去っていった。
怒りを納めた、いや、怒りを洗い流し、そして愉悦と快楽に浸るための玩具を目の前にぶら下げられたネロ。
あまりにも単純ではある、しかし自らの欲望に忠実に生きるこの男は誰よりもその生を謳歌しているといえるかもしれない。
それによって消えていく数多の命の柱に支えられながら。

「ひゃぁ～。　随分とご機嫌やったなぁ2番サン。僕等が思ってたより簡単でしたね、藍染隊長。」

「あぁ、彼は欲望に忠実だからね。　命さえ奪えるのならば他には何もいらないのさ。」

ネロが去った後の黒い部屋。
市丸は機嫌よく出て行ったネロの姿を思い出し、藍染も同様にその姿に苦笑をもらす。
だが、一人だけその空気に異を唱えるものがいた。

「藍染様・・・・・　私は・・・私は納得しかねます！何故藍染様ほどのお方があのような粗野な者に下手に出るのです！あれほどの無礼、藍染様に対する侮辱の数々！許しがたい！　藍染様、どうか私にあの者を断ずる許可を！」

東仙が叫ぶ。
深き忠節心、それを持つ彼にネロの藍染に対する侮辱の数々は、”悪”でしかなかった。
藍染の前に歩み出て傅くと、一息に捲くし立てた東仙の言葉、それを藍染は笑みを崩さず、それ以上に深めながら見下ろす。

「それは出来ないよ、要。　言っただろう？　彼にはやって貰わなければならない事があるんだ。」

「しかし！」

「それにたった一万程度の魂魄で、彼を生かしておけるのならば安いものさ。もし彼がまだ刃向かう様だったら、流石に殺すしかなかったからね・・・・・・」

東仙の叫びに応える藍染の応えは当然、否。
その藍染の言葉に東仙は不敬、己の”正義”に反すると判っていながらもなお食い下がる。
その東仙の必死の言葉を手で制した藍染は、その真意の一端を語った。
藍染とてその眼に余るネロの行いと態度を良しとしている訳ではなかったのだ。
彼がネロを生かす理由は、単純に必要性があるからというだけであり、その必要性をその愚行の数々が上回れば藍染とて容赦なくネロを切り捨てるというのだ。
不和を呼ぶ獣、主の命を聞かず、ただ全てを壊し喰い散らかすだけの駄獣など、自分の”計画”には必要ないのだから、と。

「いくら言うたかて藍染隊長が考えかえる筈無いやんか、要。無駄や無駄、僕等は黙って藍染隊長の後をついて行ったらエエんや。」

ふわふわと浮かぶような言葉で市丸が、今だ納得がいかない様子の東仙に話しかける。
それでも東仙はどこか不満そうな表情を浮かべはしたが、それ以上藍染に食い下がる事はしなかった。

市丸の言葉、それはある意味的を射ていた。
藍染が”部下”として認めているたった二人の人物である市丸と東仙。

だがそれはあくまで”部下”であり、決して彼の”共犯者”でも、まして”理解者”でもないのだ。
全ては藍染自身が描き、藍染自身が彼の目的の為だけに動いているだけであり、二人からの助言も、中心も、嘆願も、藍染は必要としていない。
故に言葉を重ねたとてそれは無駄であり、彼等二人に出来るのは藍染惣右介の歩んだ道を後ろから歩くことだけ、それだけなのだ。

「そんな事はないさ。　君達の事は頼りにしているよ、ギン、要。」

市丸の言葉に藍染は柔和な笑みを、十人が見れば十人が『人が良さそうだ』と応えるほどの笑みを浮かべてそう言った。
その藍染の言葉に市丸もいつもの薄笑いを浮かべて、「ホンマ冗談がお好きですね。」と応える。

そして藍染が踵を返し、それに続くように二人がその後を追う。
出口へと向かって歩く三人。
藍染はどこか芝居がかった口調で一人語る。

「さて、それでは愚かなる死神達の待つ場所へ戻るとしよう。後は時が満ちるのを、彼等の児戯を眺めながら過ごすだけだ。三流役者の踊る三流の喜劇を・・・ね。」

黒い部屋に差し込む外光。
まるで光に向かって歩くような藍染達の姿。
だがその歩みを進める者達は、世界に暗黒と鮮血の大地を産み出す反逆者。

そして彼等は奪うのだ、安らかな平穏と、眩しかった日常を・・・・・

求めたのは
望んだのは
全て唯一つの事
お前を殺し
アイツを殺し
そして俺は手に入れる
”最強”という名の十字架を・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 33（後書き）

ネロ復活。
なんとも芯がぶれるというか
目先だけしか見えぬ男よ・・・・・・
そんなことだからウチの『東方先生』に阿呆と言われるんだｗ

そしてネロメインの心算が、藍染達の方が目立ったのは気のせいか？
彼等が此方に来るための理由を捏造してみた。
こんな大規模なのはないと思うけどね。

”一万”という数字は適当、実際の総人口がわからん。
まぁ、十万の命を消そうって男が、一万程度気にもとめないかなぁ～と思います。
多いだろうか？少ないだろうか？う～ん・・・・・・

嫌いだった。

彼は自分を見る彼女の眼が嫌いだった。
彼を見る彼女の眼に映るのは、彼に対する〝哀れみ〟だけ、そしてそれは彼が最も嫌悪する感情だったからだ。
彼がいくら叫ぼうとも、彼が何度その刃を向けようとも、彼女が彼と向き合うことは無かった。
見える彼女の背中は彼に敗北感と、言い知れぬ不快感だけを残し、その感情を湛えた刃は終ぞ彼女を捕らえることは無かった。

彼が彼女の額に決意の烙印を刻んだ、その瞬間までは・・・・・・

彼、第8十刃（オクターバ・エスパーダ）ノイトラ・ジルガは砂漠を歩いていた。
一歩一歩砂を踏みしめ、その手に持った腰布から鎖で繋がった巨大な三日月型の斬魄刀を、引き摺るようにして歩く彼。

その眉間と鼻筋には深い皺が刻まれ、眼は血走り、その顔にありありと怒りを浮かび上がらせたノイトラは砂漠を歩く。
今の彼を見れば誰しもが道を開ける、いや、道を開けるのでは駄目だろう、今の彼を見たならば、それを見た誰しもが一目散にその場を逃げ出す、視線が合えば問答無用で殺されると直感させるような、そんな濃密な殺気を彼はその身に纏わせていた。

ノイトラの纏う殺気、その原因はある破面のたった一言の言葉だった。
その言葉は彼にとって屈辱以外のなにものでもなかった。

《何故ならば・・・・・・》

再びあの言葉が、あの声が頭に木霊するのをノイトラは感じていた。
それだけで刻まれた皺はより一層深くなり、奥歯は噛締められる。

《何故ならば・・・・・・》

響く声が語るのは誰も知らぬ出来事。
それはノイトラの決意と、決別との儀式だった。
後ろ暗い思いは何一つ無く、己がより”高み”へと昇るためのその儀式、ノイトラが欲したのは”時”だった。
自分と彼女の間に横たわるのはただ”時”だけ、時をかけた”経験”だけが、ノイトラが確信する自分と彼女を隔てるたった一つの要因だった。
故に、手段など問わず彼はその”時”を手に入れることにした。

自分を哀れみ、情けを書ける視線を送る彼女、ネリエル・トゥ・オーデルシュバンクの頭をその三日月で割り、外の砂漠へと落すことで。

《何故ならば・・・・・格上を倒すのならば・・・》

それは常軌を逸した手段だった。
普通に考えて頭を割られれば死ぬ。
だがノイトラはネリエルの頭を割りながらも、殺さぬよう生かしたのだ。
彼が欲したのは”時”、隔てる”経験”を埋める為だけの時だけが彼の欲したものであり、決着など一切望んでいなかった。
故に彼はネリエルを生かした。
生き残り、力を戻したネリエルを、正面から己の力のみで殺すために。

だが木霊する声の主の一言は、それを全否定した。

《何故ならば・・・・・格上を倒すのならば、後ろから頭を割らねば勝てんのだろう?》

横たわる”時”、それ以外に自分と彼女を隔てるものは無いと信じていたノイトラにとって、それは最上の屈辱だった。
彼にはその言葉は、『お前は彼女に正面から勝つことは一生出来ない。不意を撃ち、眼を晦まし、姑息に策を弄さねば勝てないのだろう?』と言っているように聞こえてならなかった。
自分と彼女に”力”の差はなく、”経験”によって勝敗が決していると信じるノイトラにそれを許容することは出来なかった。
許せない、許せるはずが無い、そんな思いが彼を支配する。
斬魄刀を握る手にはより一層の力が篭り、呼吸は浅く、そして速くなっていった。
怒り、怒りだけが彼を支配する。

(殺す・・・・・殺す、殺す殺す殺す。アイツを殺す、このオレをコケにしたアイツは、このオレを腰抜け扱いしたアイツは、このオレが殺してやる!)

漏れ出す霊圧にそれより更に濃密な殺気を混ぜ、ノイトラは砂漠を歩く。
己の探査神経(ペスキス)によって怨敵の大まかな居場所は判っている、何故か自分の宮殿ではなく、虚夜宮の外、何も無い砂漠から感じる怨敵の霊圧。
だがそれはノイトラにとって好都合だった、天蓋の下での私闘、それも十刃同士の私闘、いや、殺し合いをしようという彼にとってその標的たる者が天蓋の下に居ないという状況は、僥倖だったといえるだろう。
無論その標的が天蓋の下に居るからといって、彼が止まることはない。
結局のところその標的を、怨敵を殺す事だけが今の彼の全てであり、

相手が天蓋の下に居ないのも”偶々いなかった”程度にしか捕らえていないだろう。
保身などノイトラには存在しない。
彼に今あるのは、怨敵、第5十刃（クイント・エスパーダ）アベル・ライネスを殺す、という一念だけだった。

――――――――――

「来たか・・・・・・」

ノイトラの視線の先の人物は、彼に背を向けたままそう呟いた。
その姿にノイトラの目の端が釣りあがる。
怒りの感情は彼の全身をマグマの如き熱を帯びて駆け巡り、解き放たれる瞬間を待つ。
彼の眼に映る白い外套に黒髪の人物、背を向けているにも拘らずノイトラが来るのを知っていた、或いは視ていたかのように声を発したのは、紛れも無くノイトラがその怒りを向ける相手、アベル・ライネスだった。
振り向けばその顔には眼の文様が入った仮面が着けられている事だろう。

「第８十刃、一応訊いておこう。　こんな場所に用事でもあるのか？此処から半径二霊里以内には、私達以外の霊圧は存在しないがな・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・」

背を向けたままアベルはノイトラへと話しかける。
対するノイトラは無言でアベルの背中を睨みつけ、斬魄刀を握る手に力を込める。
その気配を感じているであろうアベル。
しかし声にはまったくといっていいほど鷹揚は無く、淡々と紡がれる言葉からは何一つ感情というものを読み取る事はできなかった。
それはアベルが感情を抑えている、というわけではなく、ただアベルという破面の感情を起伏させる程の事が今この場にはないというだけ。
つまり、アベルはその背後をノイトラに抑えられているという状況にありながら、それをまったく意に介していないということに他ならないのだ。

「無言・・・か。　無意味だ・・・・・・　口に出さねば、声に乗せねば物事は何一つ伝わることは無い。貴様が抱えるその無意味な怒りもな・・・・・・」

「ッ！！　・・・してやる・・・・・・殺してやる。第５（クイント）、俺をコケにしたテメェは・・・オレが、殺してやる・・・・・・」

無言のノイトラをまるで挑発するかのようにアベルが語る。

そして怒りに燃えるノイトラは、そのアベルの言葉に更なる怒りを燃やし、遂に明確にアベルに対する殺意を口に出した。
アベルの言葉によりそう言わされている様に思えるその言葉。
しかしノイトラは、最早そんな些細な事など気にしない状態にまで移行し始めている。
だが、それほどの怒りを抱えながらノイトラはアベルに攻撃を仕掛けないでいた。
荒ぶる霊圧を撒き散らし、血走らせた眼でアベルの背を睨みつけるノイトラが、今だその背中に凶刃を振り下ろさない理由、それはアベルが彼に”背を向けている”という点に尽きる。

怒りに燃えた彼に木霊し続けたアベルの言葉。
格上を倒すのなら後ろから頭を割らねば勝てないのだろうという言葉、皮肉にもそれががノイトラにその手に持った凶つ三日月（斬魄刀）を振り下ろす事を止めさせていた。
このままソレを振り下ろし、後ろから頭を割ったのではアベルの言葉が、ノイトラにとって屈辱的なその言葉が真実であると自ら証明する事になってしまうと。
故にノイトラは背から攻撃する事をその残ったかすかな理性で圧し止め、アベルが振り返るのを待っていたのだ。
彼が受けた屈辱を濯ぐために、その屈辱を与えた相手を正面から叩き殺すために。

だがそれも、たった一言の言葉で崩れ去った。

「ならば無意味に立ち尽くさず、その斬魄刀で私に斬りかかればい

い。・・・・・・せっかく、こうして背を向けてやっているのだから。

それは充分な言葉だった。
アベルの放ったその言葉は、ノイトラを突き刺し、抉り、理性の崩壊と、感情の防波堤を決壊させるのに充分な言葉だった。
ノイトラは自分の中で何かが引き千切れる音を聞いていた。
それは彼が彼として存在するための唯一の鎖が切れる音。
理性を持ち、己の意思で相手を、アベルを殺すために内側で荒れ狂う怒りを繋ぎ止めていた唯一の鎖が切れる音。
故にノイトラはもう止まれない。
切れた鎖は再び繋ぐ事叶わず、荒れ狂う怒りは外界へとその産声を上げた。

「■■■

ることのない殺戮生物に変っていた。
しかしその強烈なまでの一撃は、その”敵”を捕らえてはいなかった。

「無意味だ・・・・・・　いや、不様だな第８十刃。怒りで我を忘れ、不様に霊圧を撒き散らす、無意味で不様で・・・・・醜い霊圧だ・・・・・・　それでは私には欠片の脅威にもならない。」

その声はノイトラの背後から発せられた。
何事も無かったかのように、まるで先程からそこに立っていたと言わんばかりに平然とアベルはそこに立っていた。
ノイトラが放った斬魄刀の渾身の一撃を、アベルは何の事も無く躱したのだ。

ノイトラは背後に立つアベルへと瞬時に振り向くと、そちらへと再び斬魄刀を叩きつける。
再び立ち昇る砂の柱、だがそれも捉えたのは砂漠の砂のみ、アベルを捕らえることは叶わなかった。
怒りに任せ、移動したアベルへと今度は斬魄刀をその手から離し、投げつける。
痩躯の何処にそれほどの膂力が在るのか、と疑いたくなる程の力がその投擲には込められていた。
元々の力に怒りという原初の感情が起爆剤となり、ノイトラはそれを振るう。
それはその全てが”必殺”の一撃、だがその必殺の一撃をもってしてもアベルはそのこと如くを躱し続ける。

「短慮、短絡、短気、その全てが貴様であり、その全てが無意味だ・・・・・解らないのか？　お前が此処に来たのは、私を追ってき

たのでは無く、私が追わせたのだという事すら・・・・・・」

尚も悠々とノイトラの必殺の一撃達を躱すアベルはそう語った。
常のアベルらしからぬ饒舌、この状況では語る事すら無意味だと断じるであろうアベルらしからぬ行動、だがそれをしないということはこれにはアベルなりの意味がある、ということなのだろうか。
そして語られた言葉、それはこの何も無い砂漠にノイトラがアベルを追ってきたのではなく、アベルがノイトラに自身を追わせたという事だった。
そう、何も無い場所に意味も無くアベル・ライネスが赴くはずなど無い。
その行動には意味があり、それはノイトラをこの場所に誘い出す、というためだという事。
攻撃を躱しながら、アベルは更に言葉を続けた。

「貴様が私を狙っているのは解っていた。それはあまりに無意味だが、その無意味で私の宮殿を壊されては更に無意味だ。此処ならばその心配は皆無、無意味に藍染様の思考を煩わせる必要も無い。・・・・・そして、貴様には言葉でなく、その身に教えたほうが早そうだと判断した。」

明確な解は時に無情ですらある。
アベルが語ったのは何も難しいことではない。
ノイトラが自分の命を狙っている事は知っていた、とアベルは言うのだ。
そして、それ自体は問題ではなく、そのノイトラの行動で自分の宮殿を壊されては困る、というそれだけの為にアベルはノイトラを誘い出したのだ。

これもまたノイトラにとっては屈辱的な言葉であろう。
いってしまえばまったく相手にされていないのと同じ、そして自分の命を狙う事がどれだけ無意味かを、アベルはノイトラにその身をもって教えてやると言う。
絶対的な自信、いや、アベルにとって確信によって放たれる言葉は、その全てがノイトラを抉る。

「■■■

そう言ってふわりと着地したのはアベルだった。
ほんの数瞬前までノイトラの斬魄刀を躱し続けていたアベル、しかし今、ノイトラが肩に感じた感触はアベルの持つ斬魄刀が突き立てられようとしたために産まれたものだった。
袖突きの外套、その袖の中から生えている様に刀身だけを覗かせたその斬魄刀。
握る手の見えないそれは、覗く刀身だけを見れば小太刀程度の長さしかなかった。

だが、その斬魄刀が突き立てられたにも拘らず、ノイトラの肩は衣類に穴が開いただけに止まり、その肌からは出血どころか傷さえ付いていなかった。
それは一重にノイトラが持つ特徴によるもの。
ノイトラの鋼皮は他の破面、十刃にかかわらず、更には過去の十刃に遡っても尚、もっとも高い霊圧硬度を誇っていた。
並みの刃では傷一つ付かず、そしてそれにまかせた一方的な戦闘がノイトラの持ち味のひとつでもある。
その歴代最高の霊圧高度を持つノイトラの鋼皮、その鋼皮の前にアベルの刃は彼に傷を付けることができなかった。

普通に考えてそれは敗北を意味する。
相手を斬る事はかなわず、しかし相手の攻撃は自身を捕られれば傷を残す。
大虚だった頃のフェルナンドと、ハリベルの戦いと状況は同じといえるだろう。
ハリベルは霊圧を用いる事でその状況を覆した、しかし、ノイトラにそれが通用するかといえばそれはわからない。
怒りによって撒き散らされる霊圧と、最硬の鋼皮、並みの攻撃が通るとも思えず、何より自らを十刃”最弱”だと言い放ったアベルの刃が通るとは到底思えない。

だが、それすらもアベルに言わせれば、「無意味」だと言う。
自らを”最弱”と呼びつつもその自信、そもそも”最弱”で十刃第5位という事に疑問を感じざるを得ない。

「■■■

す。
近付けば死、それを容易く想像させるノイトラの剣戟、最も彼自身にそうした剣による結界等という事をしようという考えは無い。
ただただ振り回したそれが、結果としてそういう状況を作っているというだけに過ぎないのだ。
まさしくそれは”暴”であり、そして”愚”だった。
才覚による煌きはなく、力だけで振るわれ、更には怒りで濁らせた刀、アベルの言う”愚”とはそういう意味なのだろう。
アベルという破面だからこそ、その”愚”は際立って見えるのかもしれない。

「■■■

その声はまたしても彼の、ノイトラの背後から発せられた。
それもただ背後というだけでなく、彼の剣の結界の内側、ノイトラの背の直ぐ後ろから発せられたものだった。
アベルの声がノイトラに届く、しかしノイトラに振り向く猶予は与えられなかった。

アベルの指がノイトラの首にふれる。

その直後の暗転。
ノイトラの視界が黒く、そして暗く染め上げられていく。
微かに残った糸のような意識も、数瞬の後には脆くも途切れ、暗い闇へと堕ちていくことだろう。
だが、意識の大半を奪われたためにノイトラは自身の怒りの海から覚醒していた。
その彼に淡々とアベルの言葉が届く、そしてそれは妙に静かに、そして確かに彼の耳に届いていた。

「貴様の首、その最も霊圧硬度の低い部分に先鋭化した虚弾（バラ）を数発、同一点に撃ち込んだ。如何に歴代最硬といえどこれには耐えられはしない・・・・・・たとえ”最弱”の私の虚弾であろうとも・・・な。」

そう、アベルは単純に虚弾を撃っただけだった。
ただその狙いが霊圧硬度の最も低い部分を狙い澄ました一撃だったというだけ。
首という神経の集中する場所、そこに受けた衝撃は最強の守りを貫き、意識を根こそぎ刈り取る。
そしてそれを可能としたのは、アベルの持つ”特異点”によるもの

だった。

「霊圧、速力、膂力、そのどれをとっても私は全十刃に劣る。だがそんなものは私には無意味だ。私が唯一貴様達に勝るもの、それは”視る”事だ。

私には霊圧、いや、”霊子の流れが見える”。距離を問わず貴様を取り巻く霊子、貴様が放つ霊子、その鋼皮の霊子密度すらな・・・・・全てが私には視えている。歴代十刃”最高の霊圧知覚”、抜きん出た探査神経こそが私を第5まで押上げた唯一の武器だ。」

語られたアベルの特異点、どれをとっても十刃最弱であると言うアベルを十刃の中位まで押上げた唯一の武器、霊圧知覚。

破面、虚、死神、その全ては須らく霊子によって構成されている。その動き、思考や肉体の反射があるように、霊子にも反射は存在し、それを視る事が出来れば”先の先”を取るのは容易なことなのだ。

そして、霊子を視るアベルにとって相手の攻撃を躱し、また、気付かれずに荒れ狂う霊圧を掻い潜るなどという事は容易なことであった。

その霊子の薄い部分、即ち鋼皮の硬度の低い部分を探すことすらも、その全てをアベルはその探査神経によって知覚していると言うのだ。

「解ったか？　第8十刃。　無意味なのだよ・・・・・・貴様が私に挑むという行為自体がな。　諦めろ、無意味を悟ったならば、覆せないのならば、後は諦め、受け入れる他、道などありはしない・・・・・」

途切れる意識の寸前にノイトラが聞いたのはそんな言葉だった。

純然たる力の差、それをノイトラが信じる”力“という形で見せつ

けそして行為の無意味さを説くアベル。
無情なその言葉を頭に焼き付けながら、ノイトラの糸は切れ、闇へと沈んでいった。

「沈んだか・・・・・・　無意味な事だ、全てが・・・・・・私の行動すらも・・・な。　・・・・・・どうやら貴様の迎えも来た様だ、後一霊里程か、ならばこのまま放置しても問題あるまい・・・・・・」

そう呟いたアベルは、次の瞬間には最早その場にいなかった。
行動の意味、必要性を尊ぶアベルのこの行動は、アベル自身のいうとおりどこかアベルらしからぬものに見える。
本当にこれが、ノイトラに差を見せ付けることが必要だったのか、これによってノイトラが大人しく引くのか、それには何の確証も無い。
意味を求めるアベル、この行動は本当に宮殿を壊されたくないためなのか、それとも醜い霊圧による不快感からなのか、真意を知るものは彼以外なく、誰にもその真意は判らなかった。

―――――――――――

「・・・！　・・・ト・・・ま！　・・・・・・トラ様！ノイトラ様！　ご無事ですか！？」

聞こえる声に意識が覚醒する。
目を開ければそこには物好きにも自分の従属官になりたいと、片目を潰した男が居た。

「テスラ・・・・・・　何しに来た・・・・・・」

上半身を起し、膝を立てて座り直すと声の主に向き直る。
心配そうな表情を浮かべる自らの従属官、テスラ・リンドクルツをぞんざいな言葉で遠ざけるノイトラ。
そんなノイトラの態度も気にせず、テスラは彼に声をかけた。

「ノイトラ様が第8宮から居なくなられたので、微かな霊圧を辿り此処まで追って来ました。」

そう語ったテスラの言葉には、一つだけ嘘が混じっていた。
微かな霊圧などではない、明らかな戦闘状態の霊圧の残滓とそれに混じった濃密な殺気の残り香、定めた主が何者かを殺そうとしてるのは明白であり、最近の彼を見ていれば誰を狙っているかなどテスラには直に解ってしまった。
止めなければ、とテスラが宮殿を飛び出し、次第濃くなる霊圧を辿

った先で見つけたのは殺戮現場ではなく、倒れ臥す主の姿だったのだ。

「一体どうされたと言うのです。　第５十刃は何処にッ！！！」

テスラの頬に衝撃が奔る。
それは第５十刃と彼が口に出した瞬間襲った衝撃。
そしてそれを齎したのは、彼の主であるノイトラ以外ありえなかった。
裏拳で打ち据えられたテスラは、そのまま後方へと吹き飛ばされる。
「何をするのです！」と口に出そうとしたテスラは寸前でそれを止めた、彼の眼に映る主ノイトラ、その目にはありありと怒りと屈辱が滲み出ており、言葉を発せばそのまま殺されるのは目に見えていたからだ。

「俺の前で、二度と、奴の名を、口に出すんじゃねぇ・・・・・・」

「・・・・・申し訳、ありません・・・・・・・・・」

屈辱に歪むノイトラの口から途切れ途切れに語られた言葉、正しく怨嗟の篭ったそれにテスラはそれ以外の言葉を口に出来なかった。
ノイトラの怒りがひしひしと彼には感じられた、空気が肌を刺す様な感覚、それが全身を覆い尽くす。

怒りに歪むノイトラ、拳を握り締め、ギリッと奥歯が割れるのではないかと言うほど噛締めるのは屈辱の味。
これは一体何度目だろうかと、ネリエルもそうだった、決してとどめを刺さないのだ。

十刃に欠けは許されないというそれだけの、たったそれだけのノイトラにとって些細な理由で”情け”をかける。
そしてまた今日、今度はアベル・ライネスによって彼はまた戦いの中で死ぬ事叶わず、”情け”によって生き延びたのだ。

（どいつもこいつも俺に・・・この俺に”情け”なんてクソ以下のものをかけやがる！哀れみ？　慈悲？　塵クズ以下の言葉でテメェを飾り立てやがる！敵は殺して叩き潰す！　そうして生きてきたくせに、考える頭を持った瞬間にそれは”獣”だと御託を並べる！そうさ！　俺達は”獣”だ！　何処までいっても、血を求める本能は消せねぇ！本能に背くのが”戦士”なら、俺は”獣”で充分だ！！！）

情けなどいらない、情けなどかけない。
強くとも、弱くとも、赤子だろうと老人だろうと、戦場にたったなら情けは侮辱だ。
傷を与えておいて情けをかけるのは、自らが相手に刻んだ傷に慈悲という名の塩を塗りこむのと同じなのだ。

「ちくしょうが・・・・・・　ちくしょうが・・・ちくしょうが、ちくしょうがちくしょうが、ちくしょうがあああぁぁぁぁぁぁあああ！！！！ウォアアあアァァァァあアアアァァあああ！！！！」

慟哭の叫び。
その叫びは暗い砂漠に、遠く静かに木霊した。

平穏
小休止
偽物の空
だがそれも
悪くは無い

BLEACH El fuego no se apaga. 34（後書き）

ノイトラブチギレからのボロ負け。

別に作者はノイトラ嫌いじゃありません。
前はちょい嫌いだったけど、これを書くにあたって読み返すと
”戦う”という事に純粋すぎるのかなぁなんて思いました。

オス、メスというという拘りも、ただネリエルへの執着を誤魔化す様にも見えますし。
メスであるネリエルを砂漠に捨てた後、剣を交えられないのが残念だと言ったように
ノイトラの望みは正面から戦い、”最強”を証明することではないかと思いました。

まぁ的外れかもしれないけどねｗ

BLEACH El fuego no se apaga. extra4（前

５０万ＰＶ突破記念として、番外編４を投稿です。
書いといてなんですが、ほぼオリキャラだよ・・・・・・

強くなりたい。

強くなりたい。

あの人のように。

あの人の背を守れるように。

あの人の為に生きれるように・・・・・・

あたしが初めてそいつを見た時、そいつはどっちかって言うと襤褸雑巾に近かった。

死覇装はボロボロ、身体もボロボロ、顔は特に酷くてボッコボコだった。

その癖そのボッコボコの顔は、気を失ってるくせに笑ってる、ヘンな奴だった。

「コレは私の下で鍛えると決めた。」

その後のハリベル様の言葉には、あたしだけじゃなく、ミラ・ローズもスンスンも驚いてた。

襤褸雑巾みたいなチビの破面を抱えて帰ってきたハリベル様は、あたし達にそう言ったんだ。

またなんでこんな奴を、それがあたしの素直な感想。

でもそれも、ハリベル様の次の一言で吹き飛んじまった。

「手始めに今まで従属官を除いた総ての数字持ちと戦うように言ってあったのだが、最後に戦ったＮｏ１２．グリムジョー・ジャガージャックとの戦闘でこの有様だ。何とか”分けた”様だが・・・・・」

これを聞いたときのあたし達の顔は、きっと酷いものだったと思う。
だってそうだろう？
こんなチビが、あのグリムジョーと戦ったってだけでもとんでもねぇのに、”分けた”なんて言われれば誰だって驚くさ。
はっきり言って信じられない、でもハリベル様がそう言うなら信じる、でも信じられない、あん時のあたしは頭ん中ゴチャゴチャだったな。

次に見た時、そいつは寝台に寝ていた。
ボッコボコだった顔は腫れも引いて、いっそ綺麗に整ってた。
綺麗すぎて逆に気持ち悪いくらい、人形みたいな顔して寝てるそいつ。

「・・・・・ホントにコイツが？」
「アタシは信じられないね！　こんなガキがアイツに勝てるわけがねぇ！」
「あんたはどう思うのさ！　ホントにこんなガキがグリムジョーに勝ったと思えるのかよ！」

その時あたしの口から出た言葉は、やっぱり全部疑問だった。
それは今思えば、やっぱり罪深い言葉だ。
なにせあたし達が信じるハリベル様が”白“と言っている物を、本当に”白”か？と疑うような言葉。
ありえないだろ？　ハリベル様を疑うなんでさ。
馬鹿な話だよ。
自分じゃ勝てない相手に、自分より小さいヤツが勝ってはいないにしろ、分けたからって嫉妬してる。
認められなかったのさ、現実を。
ホント、あたしらしくも無いよなぁ。

でもそんな嫉妬の馬鹿らしさは、目を覚ましたそいつの、フェルナンドの眼を見た瞬間に解ったんだ。
燃えるような真っ紅な瞳、あれは”炎”だった。
あぁ、コイツは本当にグリムジョーの野郎と戦ったんだな、ってあたしにも直に解る。
そういう強者の目つきをフェルナンドはしていたから。
チビでガキの癖に妙にデカイ態度、それが強者たるものの雰囲気なのか、それともアイツ自身のモノなのか、そん時あたしには解らなかったけど今ならハッキリ言える。

あれは絶対アイツの性格のせいだね！　間違いない！絶対に！　あ～思い出してもムカつくぜ！

その後は・・・・・・

ハリベル様の”地獄の特訓”だったなぁ。

確かに頭にこれでもかって位血が上ってたのはあるよ。
ハリベル様がなんか言ってたのも、聞こえてはいたんだけどなぁ・・・・・

失敗したぜ、あん時は。

思い出すだけで身体中痛くなるぜ・・・・・・
まさしく”地獄”だったな、あの特訓は。

でもその特訓が終わった後、あたしもミラ・ローズもスンスンも指一本動かすのが嫌になるような疲れの中で、あたしは見たんだ。
フェルナンドの本当の強さ、って奴を。

最初はハッキリ言って、ダメダメだった。
あたしたちから見ても解るくらい、アイツは刀ってモノを扱えてなかった。
あれなら刃の無い棒切れを振り回してたほうが、いっそ様になるんじゃないかって思えるくらい。
あれだけ強い眼をしてるくせに、グリムジョーと引き分けたって言うくせにあれは無いんじゃないか、ホントにアイツが強いのかどうか、あたし達は三人とも半信半疑になっちまってた。

二人の動きが止まって、フェルナンドの野郎は刀を鞘に納めちまった。
実際そん時はそれが当然だと思ってた。
ハリベル様にあんなヘナチョコの剣が通用する訳ないし、やっぱりその程度のヤツだったんだって思ってた。

でも違ってた。
あの馬鹿は、フェルナンドの馬鹿野郎は、ハリベル様に拳を突きつけたんだ。
直後アイツを紅い光が包んだ。
光が収まると、アイツの斬魄刀は一回り小さくなってて、アイツはそれを嬉しそうに撫でると、次の瞬間ハリベル様に突進してた。
それも刀も抜かず、拳でさ。

あぁアイツ馬鹿だ、そん時あたしはそう思った。
だってそうだろう？　あたし達のハリベル様はメチャメチャ強いんだ。
そのハリベル様に素手で挑むのがどれだけ馬鹿なことか、誰よりも近くにいるあたし達には良くわかる。
きっとミラ・ローズもスンスンも、あたしと同じことを思ったに違いないさ。

だけど、そんなあたし達の常識はアイツには・・・・・・フェルナンドには通用しなかった。
ハリベル様は手加減してる、でもそれは殺す、殺さないという部分での手加減、まぁそれ以上もあったかもしれないけど、それはその時そんなに重要じゃなかった。
重要なのはたった一つ。
ハリベル様相手に、フェルナンドの野郎は拳と蹴りで、その五体だけで渡り合ってた、っていう事だけだった。

あたしの眼から見て二人の戦い方は真逆だった。
ハリベル様は流れる水のように、綺麗に舞うように戦う。
水は敵の攻撃を受け流し、時に思い通りに捌き、何時しか自分の流れに飲み込んでしまう。

フェルナンドの攻撃は火だ、それも何でも焼き尽くすような猛火。
阻むものの全てをその炎の一撃で焼き払って進む、何があっても止まらない。

ハリベル様の水はフェルナンドの炎を消すように、フェルナンドの炎はハリベル様の水すら焼き尽くすように、互いに抗い、戦ってた。

その時あたしは多分笑ってたと思う。
多分っていうのは、その光景があんまり鮮烈だから自分の顔がどんなだったかなんて、記憶に残ってないんだ。
あたしはフェルナンドの強さに、五体だけでハリベル様に挑むその気合に、一瞬で魅せられてた。
その強さに自分も近付きたいと、その強さがあればきっと、もっと、ハリベル様の役に立てると思ったから。

「うぉっしゃぁぁあああ！！」

そう思うと叫ばずにはいられなかった。
これで、これでまたあたしは強くなれる、強くなってハリベル様の役に立てる。
それだけがあたしの喜びだから。

ミラ・ローズとスンスンが驚いてた。
スンスンの野郎はまたふざけたこと言ってやがったけど、そん時はあんまり気にならなかった。
強くなりたい、強くなりたい、その思いはその時強くなれるっていう確信に変ってた。

「ハリベル様！！」

二人の間合いが離れた瞬間、あたしはそう叫びながらハリベル様に駆け寄ってた。
ハリベル様は大分驚いた顔、フェルナンドの野郎は・・・・・どうせ「変なのが出てきた」とか思ってたに違いない。

「あたしも！　あたしもアイツと戦(や)らせて下さい！！」

一歩大きく踏み出して、あたしは半分叫ぶようにそうハリベル様に頼んだ。
多少面食らった様子のハリベル様だったけど、何故かあたしの眼を見ると、急になんだか優しい目になって「そうか・・・・・」って呟いた。
そんなあたしの後からミラ・ローズとスンスンも、あたしと同じようにフェルナンドと戦いたいって言い出しやがった。

最初に言い出したのはあたしなんだから、あたしが一番にやるのが筋だって言っても、当然あの二人が譲るわけなんて無い。
何なら先にあんた達から・・・・・なんていつものお決まりの流れになっちまったおかげで、特訓が追加になったけど、そん時は特訓の辛さより目の前のフェルナンドと戦う事の方に目がいってたな。

「一人ずつじゃ面倒だ・・・・・まとめてかかって来いよ、ハリベルのお供の三バカサンよぉ。」

結局誰が一番かで揉めてたあたし達に、フェルナンドの野郎はそう

言い放ちやがった。
今となっては定番の、あのクソ忌々しい皮肉な笑い顔でコッチに手を出し、クイッと手で「来いよ」と言いやがる。
上から目線、思えばあん時からアイツは全然変ってねぇ。
いや、あん時は見た目ガキだったから尚更頭に来たっけな。

そうさ、アイツは・・・・・フェルナンドは変らない。
流されない、揺るがない、靡かない。
そういう所は素直にスゲェって思う、絶対アイツには言わないけど、口が裂けても言わないけど。

結局あの後は三人がかりでいい様にボコられたっけ。
死なない程度に加減してやった、とかあの後言ってたけど、くらった拳はメチャクチャ効いたな・・・・・
でもそれはアイツがあたし達が”女”だからって手加減してなかった証拠だ。
それが少しだけ嬉しかったりもした、でも痛いものは痛い。

「よう。　終わりかよ、三バカ。」

それぞれ床にぶっ倒れてるあたし達。
それにフェルナンドは悠々と立ったままそう言いやがった。
「終わりじゃねぇ！」　そう言ってやりたかったけど、悔しいが特訓の疲れとダメージでホントの限界だった。
でも、だからってこのまま気絶できるか！　そう思って最後の力で腕を伸ばしてフェルナンドに向けた。
それで言ってやったんだ、宣言してやったんだ。

「纏めて、括んな・・・・・　あたしはアパッチ。・・・エミルー・アパッチだ！いいか・・・・・・・・　何時か・・・何時か、ぜってぇ勝ってやる！」

強くなりたい。

強くなりたい。

あの人のように。

あの人の背を守れるように。

あの人の為に生きれるように。

いや、違う・・・・・・

なりたいんじゃない。

強くなるんだ。

アイツのように。

強くなるんだ！

BLEACH El fuego no se apaga. extra4（終）

という事で、以前リクエスト頂いた中から、アパッチ視点でのお話でした。

アパッチが過去を振り返る、というようなイメージで書きましたが、どうでしょうか？

ただ”なりたい”と強さを漠然と望むのではなく。
フェルナンドの強さを見て、自分もそう”なるんだ”と決意する感じ。

５０万ＰＶは、一重に日頃の皆様のご愛読あってのことです。
感謝いたします。
それでは、今後もよろしくお願いします。

青い空を奔る雲は、悠々とその姿を変えながら流れる。
抜けるような蒼はどこまでも終わりなく世界を広げ、その先にある筈の今見えぬ星さえもその手に掴める錯覚を見る者に与えていた。

だがそれは偽り。

その空は行き止まりの空。
何処までも抜けるような蒼は現実ではただの壁、天蓋に施された淡い幻に過ぎなかった。

その偽りの空は破面達の巣くう城、虚夜宮の天蓋に描かれたもの。
いくつもの巨大な構造物とそれを取り巻く広大な砂漠、そしてその全てを悠々と覆い尽くす最早形容できぬ天蓋、という名の空。
虚圏に広がる永遠の夜空とは、まさに真逆の趣。

雲は動き、別れて混ざり、千切れて消えてまた生まれてを繰り返す。
しかし季節の移ろいも時の移ろいもなく、曇りも、雨も、嵐も雪も無くただ永遠の晴天だけを映すその空は、晴れ晴れしくも禍々しい異質な空だった。

何故そんなものが天蓋に施されているのか。
ただ城の敷地を覆うだけが役目の天蓋に、態々空を映し出す必要など無い。
覆うことが目的ならば、ただ無機質な壁面と同じ白い天蓋があれば事足りるのだ。
光無き事が問題なのならば、ただその広大な砂漠を照らすに足りる無数の光源があればいいのだ。

だがその難無く事足りる天蓋の拵えは、本来白いだけの天蓋には華美な蒼。
そしてそれを施したのは、誰あろう藍染惣右介その人だった。
おおよそ実利のみを追求する藍染惣右介という人物。
その藍染が施したというこの青空という名の装飾は、彼らしからぬものにも見える。

装飾、とは飾り立てることだ。
今あるものをより美しく、より豪奢に見せるための作業、天蓋という覆うことが目的のそれに、しかも広大な虚夜宮を覆う天蓋の全面に青空を映す事はまさしくそれであると言えよう。
だが、先も述べた通り藍染は実利を求める、それ以外を欲しない彼が装飾という必要過多を良しとするだろうか、必要性の無いものを天蓋に映し出すだろうか。

そんな事はありはしない。

虚夜宮を覆う天蓋に施された青空、それは藍染惣右介の”眼”だった。

青空より注ぐ光、その光の照らす範囲の全てを、藍染は見る事が出来るのだ。

青空は美しく、穏やかなそれではなく。

藍染が虚夜宮で起こるほぼ全てを自らが掌握するための装置でしかなく。

それが偶々青空だったというだけで、藍染にとってはそれが曇りであれ、夜であれ、雨であれ、夕暮れであれなんら変らない。

重要なのは破面達を掌握する事、そしてその全てを自分は見ていると、知っているのだと彼等破面達に印象付け、その精神を見えない檻へと閉じ込め支配するという、藍染にとっての”利”。

それ以外はただの戯れに過ぎないのだ。

そんな偽りと、畏怖と悪意の空をフェルナンドは一人、寝転がりながら眺めていた。

場所は第3宮、彼がこの虚夜宮へと連れてこられてから今日まで厄介になり続けている第3十刃、ティア・ハリベルの居城であるその宮殿の、一番高い塔の屋上に彼は居た。

そこは彼のお気に入りの場所のひとつ。

巨大な構造物同士が密集せず、広大な砂漠を隔てて点在する虚夜宮では、フェルナンドの居るその場所で彼の視界を遮るものは何一つ無く、見上げればそこには空しか見えなかった。

そこでフェルナンドは両手を頭の後ろで組み、仰向けに寝転がりながら、流れる雲を眺めていた。
青空に映える白は、何者に邪魔される事もなく、悠々と空を泳ぐ。
フェルナンドはただそれを眺める。
特に何をするでもなく、絶え間なく形を変え流れていく雲を眺める彼。

彼はそうして空を眺めているのが嫌いではなかった。
絶え間なく姿を変える雲、時に彼自身にも思いもよらぬ変化を見せるそれら。
その変化に富んだ雲が泳ぐ空を、フェルナンドは日がな一日ただ眺めて過ごすことも、少なくなかった。

決してその手に掴む事かなわず、一つの形に囚われず、その在り様を様々に変化させ続ける雲は、ある種彼の理想像に近かった。
それは内面的な事だけではなく、戦士として、戦う姿勢として、そして彼の目指す戦い方に近い、という事。
決して一つの形に拘る事無く、時々の状況に合わせ変化し、また進化し続ける。
ある種誰しもが求める戦いの理想像、フェルナンドとてそれは例外ではなく、その理想像を彼は雲に見ているのだろう。

だがそれも頭の端で考える程度、彼が此処でこうして空を眺めるのは、ただそうしているのが嫌いではないというだけだった。

「何が見える？」

「・・・・・・　ハリベル・・・か。」

そうして仰向けに寝転んだままのフェルナンドに、何者かが声をかけた。

その何者かは、ある意味誰よりもこの場にいることが相応しい人物。

何故ならそれはこの場所がその何者かの、彼女の居城であるが故、誰もがこの場に居る事に些かの疑問も抱かぬ人物、第３十刃ティア・ハリベルだった。

弱い風が彼女の、フェルナンドと同じ金の髪を軽くなびかせる。

それを片手で押さえながら、ハリベルは一言呟き、そのままその問の答えを待たずフェルナンドの横に座る。

片膝を立て、立てた膝に腕を乗せるようにして座る彼女。

その視線は空ではなく前方へ、フェルナンドの方を向くわけでもなく、何を見るでもなく前を見つめていた。

「何が見える？　フェルナンド・・・・・・」

少し間を置いて、再びハリベルが口を開いた。

それは先程と同じ言葉、空を見るフェルナンドに一体何が見えるのか、と問う言葉だった。

「別に・・・・・・　何か、を見てるわけじゃねぇよ。」

「その割には随分と長い間、見ていたようだったが・・・・・・この空、を。」

視線を合わせず語る二人。
何も真剣な話という事でもない、他愛ない会話。
この二人からすればある種珍しい光景ですらある語らいの姿。

「まぁ・・・な。　何かを見てる、っつうよりはこの広がる空を眺めてただけさ。お前こそ、随分長い間コッチを見てたが・・・なんか用でもあるのかよ。」

「気が付いていたのなら、声の一つも掛ければいいものを・・・・・・」

「それは、俺の台詞でもある・・・がな。」

ただ語り合う二人。
それは何も特別なことではなく、当然の姿。
その会話はなんら実りを求めるものではなかった。
お互いが思ったことを口にする。
それの行き来だけ、それはなんとも穏やかな雰囲気であり、破壊の権化たる破面の巣食うこの虚夜宮には似つかわしくないはずのもの。
しかし、今、この場ではそんな穏やかな空気が、空を行く雲の如くゆったりと流れていた。

「私は・・・・・・　お前が”この”空を好むとは思っていなかったよ。」

ふとハリベルが漏らした言葉。
それは、隣で今も尚空を眺めているフェルナンドの姿を見て、彼女が思ったこと。
この空は見た目とは裏腹に、ただ美しいだけのものではないと彼女は知っていた、そして勿論フェルナンドとてそれは知っていると。
それならば、彼がこうしてこの空を飽きずに眺め続けるというのは、どうにも彼女の中では腑に落ちない部分があったからだ。

「・・・どうしてまたそう思う？」

「・・・・・・　言ってしまえばこの空は、藍染様の”眼”だ。この澄んだ蒼も、たゆたう雲も、その全てはまやかし・・・・・・お前がそういったものを好むのが、どうにも私には違和感があってな。」

フェルナンドの問に素直に答えるハリベル。
そんなハリベルの言葉に、フェルナンドは小さく笑う。

「ハッ！　確かに・・・な。　そう言われると気持ち悪ぃ事この上ねぇが、偽物だろうとなんだろうと、ただ眺めてる分にはいいだろう？止まらず、変化し続ける雲(アイツ等)を見てるのは、悪くはねぇ・・・よ。」

「そういうものか・・・・・・」

「・・・・・あぁ、そういうもの・・・さ。」

ハリベルの問に答えたフェルナンド。
その言葉にはおそらく嘘偽りはないのだろう。
ハリベルの耳に届いたフェルナンドの声は、とても穏やかだった。
遠くから眺めている分には悪くない、そう答えたフェルナンドの言葉。
ここで、”良い”ではなく”悪くない”と答える辺りが、彼の彼らしいところかもしれない。

そんなフェルナンドの答えに、ハリベルはまた小さく呟く。
そしてその呟きに、フェルナンドもまた答える。
まるで当たり前のように続く二人のやり取り、”戦い”という要素を除いてこれほど彼等が語らった事は、今までないかもしれなかった。
互いにその生と”戦い”という要素を切り離すことが出来ない二人、そんな二人が戦士ではなく、ただの一人として語らう。
それはある意味で”師弟”であり、ある意味で”友人”のような関係にも見えた。

「・・・・・聞いた話ではフェルナンド。　お前第7十刃（セプティマ・エスパーダ）と戦う

そうだな・・・・・・次の強奪決闘（デュエロ・デスポハール）で・・・・・・・」

その後も他愛ない会話を続けていた二人。
そんな中、ハリベルがそう切り出した。
仰向けのフェルナンドにハリベルの表情をうかがい知ることは出来ないが、彼にはその声はどこか険があるものに聞こえた。

「あぁ、らしいな・・・・・・・　ただの喧嘩さ、大した事じゃねぇよ。」

「あぁそうだろう。　聞いた話では、第7（セプティマ）・・・ゾマリの方から戦う事を望んだそうじゃないか、まぁ聞いた話ではあるが・・・な。」

「・・・・・・・・・・なんだよ・・・・・・・随分拘るじゃねぇか。」

自分が十刃と戦うというのに、どこか他人事、そしてそれが別段大した事ではないと語るフェルナンド。
そしてその部分にはハリベルも同意なのだろう。
そこに至った経緯や、理由などというものは瑣末な事、紆余曲折を経ようとその場の勢いであろうと、戦うと決めたのならば何を慌てることもない。
ただ一念を、勝つという一念を刻み込めば済む話なのだから。

だが、それとは別にどうにもハリベルには引っ掛かる事があった。
此処へ、このフェルナンドのお気に入りの場所にまで足を運んだ理由の半分がそれである、と言っても過言ではなかった。

「なに、別に拘っているつもりは無い。ただそうと決まったのならば、私に一言あってもよかった・・・そう思っているだけだ。」

「・・・・・・・・・それを拘ってるって言うんだろうがよ・・・・・・」

要するに、そして端的に言ってしまえばハリベルは気に入らなかったのだ。

第7十刃と戦う事が決まったのはいい、その当時派手な行動は控えろと言っておいたが、向こうから戦いを望んだというのならば仕方が無い。

十刃を相手に退かず、それをただの喧嘩だと言ってのける豪胆さは流石とも言えるだろう。

だが、だがしかし、それを一切自分に教えなかったことがハリベルには気に入らなかった。

ハリベルがそれを知ったのはつい最近の事。

従属官であるアパッチ等に、「フェルナンドの野郎、ゾマリ相手にどんな戦い方をするんですかねぇ」と問われたときだった。

最初は何の話かと真剣に悩んだが、よくよく聞いてみればどうにもフェルナンドが第7十刃ゾマリ・ルルーと戦うという事のようだった。

その日、その時、その瞬間までその事実の一切を知らなかったハリベル。

前回の強奪決闘から随分と時間がたったというのに、それを知らなかったというのはある意味神懸かっていると言えなくもない。

それはさて置き、その事実をハリベルは気に入らなかった。
別に二人の関係は、何事も包み隠さず伝えるなどといったふざけた契約を結んでいるわけでもなく。
師と弟子という形でありながらも、その立場は対等でありフェルナンドが、またハリベルが互いに何事か報告しあう必要性もない。
ないのだが、一言言ってくれてもいいだろうというのがハリベルの考えであり、フェルナンドがそれを言ったからといって何があるわけでもないのだが、どこか納得できないというのが本音なのだろう。

「いいじゃねぇか、　もう知ってんだからよ。」

「まったく・・・・・まぁいい。それでどうなんだ？　お前はどれくらい相手の・・・ゾマリの事を知っている？」

拘っているというフェルナンドの言葉を聞き、その理不尽な感情を切り替えるハリベル。
納得いったのかと問われればおそらく否であろう、過ぎた事、だが過ぎた事ゆえに気にかかる。
相変わらず視線を合わせない二人だが、ただの会話にはそれで事足りるのだろう。
寝転がったままのフェルナンドに、ハリベルは件の相手、ゾマリ・ルルーに対しフェルナンドがどれほどの情報を持っているのかと確認する。

戦いとは”個“の持つ力も重要ながら、”個”の情報というものも重要になってくる。
相手を知る事は自らの有利となる、相手の武器は何か、能力は何か、

行動、思考の癖、性格、外見的な特徴と内面的な特徴からおおよその力を読み取る事、そこから対策を立てること、そうした情報のあるなしは戦果に直結する要因の一つだった。

「別に・・・・・　知らねぇし知ろうとも思わねぇな。コソコソ嗅ぎまわるなんてのは性に合わねぇよ。」

「あの者は少々厄介だぞ？　それでもか？」

「それでもだ。　ハリベル、判ってると思うが、もしお前が”それ”を知ってても教えんじゃねぇぞ。」

情報というものの価値、フェルナンドとてそれを知らぬわけでもなく。
しかし必要は無いと答える彼。
それもまた彼らしさなのだろう、弱点を突くのと弱点を探し回るのでは違うのだ。
勿論誰かから教えてもらったそれなど彼に何の価値も無い、もしそうして敵の弱点を知ろうとも彼は例え自らが窮地に立たされてもそれを突く事は無いだろう。
情報の価値と彼にとって価値があるものは違うのだ。

「判っている・・・・・・　念押しなどせずとも・・・な。」

教えるなと念押しするフェルナンドの言葉に、皆まで言うなとハリベルが答えた。
フェルナンドが念押ししたことは、彼女にとっても同じこと。

与えられた情報から得られるのは、何処までいっても与えられた勝利でしかない。
そのどうしようもない無価値を彼女とて判っている、ということだろう。

「そうかい・・・・・・」

それだけ呟くと、フェルナンド再び空を眺める。
ハリベルもまたその隣に腰掛け、頬を撫でるかすかな風を感じていた。
先程までが嘘のように、二人は沈黙し、静かな時だけが流れ始める。
何を語るでもなく、かといってその沈黙に耐えられないという風でもなく。
そもそも互いに気を使いあうような間柄ではない二人、片方は気を使うなどという事とはどこか無縁にすら見える。
飾らない自分、ハリベルにとっては十刃という立場に囚われない姿であり、フェルナンドにとっては常通りの姿だった。

そんな沈黙と静かな時間がどれほど続いただろうか。
隣に、互いが手を延ばせば届く距離にいる他人の存在があるにも拘らず、二人にそれを疎む雰囲気はなかった。

人は誰しも自分の距離、自分の領域を持っている。
その領域は人それぞれ、そして人は誰しもその領域を他者に犯されることを本能的に嫌う。
それは自分というものを無遠慮に侵略され、踏み躙られる感覚、言い知れない不快感、自己を守る壁の崩壊である。

しかし、このおおよそ互いの領域を侵犯している二人にその雰囲気はない。
それは即ち、自らの領域にそのものが居る事を本能的に許している、という事。
その者の存在を己の中で認め、常にある者としているという事。
フェルナンドなどは否定するかもしれないが、それは”友”であるという事なのかもしれない。

「ハッ！　こいつはいい・・・・・・」

沈黙を破ったのはフェルナンドのそんな言葉だった。
なにやら楽しそうにそう呟いた彼、そんな彼の方にハリベルが顔を向けると、彼は笑って上を、空を指差していた。

「見ろよハリベル。　あの雲、アパッチのヤツにそっくりだ。」

言われて空を見上げたハリベル。
そしてフェルナンドが指差した先にある雲を見る。
そこには一塊の雲、一本長く突き出した形の雲を持ったそれ、どうにも形は悪く、千切れかかった雲によりまるで大きく口を開いたアパッチの様だと、フェルナンドは笑う。

「聞けばあの娘が怒るぞ、フェルナンド・・・・・・・・・まぁ、似ていなくもないが・・・な。」

フェルナンドを窘めながらも、そのフェルナンドの言葉にどこか納得してしまったハリベル。
伸びた雲は彼女の角に、そして大きく口を開いたような姿は快活なアパッチの姿を髣髴とさせる、と。
そしてそう思ったとき、フェルナンドが言った”悪くない”という言葉にも、ハリベルは納得していた。
映し出されたそれ、決して本物ではないそれ、しかしこうして眺めるのも、悪くないのかもしれないと。

「あれは・・・ミラ・ローズ。　そんであれがスンスンのヤツってか？ハッ！　あいつ等の間抜けっぷりが良くでていやがる」

指差す先にあるのはそれぞれ獅子と蛇の形に近い雲、絶えず形を変えるそれはその一時の形を歪ませ、なんとも愉快な形へと変化させていく。
それをみて皮肉気に笑うフェルナンドと、それを窘めるもどこかその形に納得してしまうハリベル。
そうして空を指すフェルナンドの隣に座っていたハリベルだが、何事か思案すると、そのままフェルナンドの隣に彼と同じように寝転がる。

「あん？　・・・・・いいのか？　天下の第3十刃サマがそんなだらしない格好をしてよぉ。」

自分の隣に寝転がったハリベルを揶揄するようなフェルナンド。
だが、そんなフェルナンドの言葉など何処吹く風、気にせずそのまま横になり、フェルナンドと同じく空を眺めるハリベル。

「なに、構わんさ・・・・・・　既に一人見ている、と思えばそれが何人増えても変らないだろう・・・・・・・」

寝転がりながらそう口にするハリベル。
確かに彼等の姿はおそらくではあるが最低でも一人には捉えられている。
それは彼等の視線の先に広がる”目”の持ち主、常時その持ち主がその”眼”を用いているかは定かではない。
だが、その”眼”がある以上、見られていると思ったほうが懸命だろう。

それでもハリベルは常の彼女らしくない、だらしないと言われる様な屋上で寝転がるという姿を見せる。
それは十刃という責を負う彼女の本のひと時の小休止。
ただこうしてみたかった、というそれだけの話なのだ。

隣に寝転ぶ彼と同じように。

「それに・・・・・・」

なんともしまらない雰囲気の中、ハリベルが続ける。
二人の視線は空へ、広がる蒼い天蓋の海へ注がれていた。

「それに？」

フェルナンドはそのハリベルの呟きの先を促すようにそう口にした。
視線は空、海を泳ぐ白い雲を捕らえる。

彼にはその雲が、どこか海原をいく雄々しい鮫のようにも見えていた。

フェルナンドが視線を隣にいるハリベルへと向ける。
するとそこにはコチラを見ているハリベルの顔があった。
今日初めて二人の視線が絡む。
紅い瞳と翠の瞳、猛々しさと静けさをそれぞれ湛えた瞳が、それぞれを捉える。
互いの眼を見る二人、そしてハリベルが小さく笑う。

「それに・・・・・　こうしてお前と同じ景色を見るのも・・・悪くない、そう思ったから・・・かもしれん。」

小さく笑いながらそう口にしたハリベルを、フェルナンドはなんとも言いがたい顔になって見つめていた。
だが、それも一瞬、いつも通りの皮肉気な笑みがそれを覆い隠す。
そして、フェルナンドも小さく笑い、視線を空へと戻しながら答える。

「ハッ！　言ってろよ、ったく・・・・・・」

視線を戻したフェルナンドと、それを追うように自分も視線を空へと戻すハリベル。
互いの瞳に映るのは、同じ景色、同じ空。
紅と翠の瞳に映る蒼穹の空。

今はただ同じ空を、同じ方向を向く彼等二人。
だが何時か、互いが向かい合う事を彼等は知っている。

それでも今、二人はこの青空を眺めるのだ。

二人、同じ方向を向いて・・・・・・

僕は満たしたい
この溢れる好奇を
だから君の
命を
犯(イジ)らせておくれ

BLEACH El fuego no se apaga. 35（後書き）

前に行ったリクエスト頂いた中で、『ハリ×フェル的な何か』というのを頂いていたので
番外ではなく、本編で書いてみました。

うまくいっているだろうか。

今回はいつもより若干少なめ。
仕事と予定がある中で
都合二日で書こうとすると、これが限界かな。

何とか週一更新をたもってるけど
来週は怪しい・・・・・・

その場所は暗い地の底。

まるで天上より差し込む光を拒むように、ただ暗黒に塗り固められたかのような場所。

暗黒が溜まるかのようなその場所は、ある種異界と呼ぶに相応しい雰囲気を存分に醸し出す。

だが虚夜宮という人間にとって既に異界であるその場所で、しかしその場所は更なる異界であった。

実際にその場所は地下ではなく、何の事は無いただの部屋だった。

にも拘らず、見る者に暗く、おどろおどろしい印象を与えるのは、その部屋に立ち込める色とりどりの煙のせいか、或いはその部屋の主の狂気によるものだろうか。

誰しもがその部屋の扉を開けることを躊躇する。

何故なら開けてしまえば否応無しに目にしてしまうからだ、自分という存在と明らかに次元の違う狂ったモノを。

「・・・・・・・・・たったの三十二秒・・・か・・・・・・・高々この程度の投薬に耐えられないとは、やはり第一期、それもその残りカスでは脆すぎるな・・・・・・まぁいい。　お前達、コレを洗って薬液に漬けておけ、実験動物の餌くらいにはなるだろう。」

色とりどりの煙を上げるぐつぐつと煮立ったような薬液と、用途不明の器具が所狭しと押し込められ、生物のようにうねる管が無数に張り巡らされた壁面の一室で、その部屋の主はなんとも気軽にそう口にした。
そのあまりの気軽さ故に、その場で繰り広げられている事象すら、軽いものに感じてしまうほどのその言葉。
しかしその実は常軌を逸している。

部屋の中心に備え付けられた椅子。
その椅子に一体の破面が座っていた。
だがその破面はただ座っているだけではなく身体中を拘束され、そして頭の先からつま先までを無数の配線に覆われ、それと同等の数の管が身体中に突き立てられていた。
配線の先を辿れば無数の機械へとつながれ、何かしらを計測し。
管からは絶えず液体が流し込まれ、全身の血管だけが不自然に隆起し波打ち、明らかに正常ではない流れを目視できるほど。
口を大きく開き何かを叫ぼうとするその破面、その叫びは痛みなのか救いを求めるものなのか、だが予め喉を切開されたその破面の叫びは音にはならず唯虚しく口だけが開かれる。
身体中を拘束されているにも拘らずその拘束を引きちぎらんばかりにビクビクと全身が痙攣していたその破面は、一際大きく痙攣を起

すと、口からは大量の泡と涎を、眼と鼻からは夥しい量の血液を、そして身体中の穴という穴から何かしらの体液を垂れ流し絶命した。

十人が見ればおそらく十人が、目を背けたくなるような凶行。

だがこの部屋の主はそれを平然とやってのける。

嬉々としてやってのける。

その凶行を前にして眼を背けるどころか、眼を見開き、その顔に満面の喜色を浮かべながら嬉々として観察するのだ。

目の前の出来事のほんの一部でも見逃さぬように、目の前で起こるかもしれない新たな現象に、まるで乙女のように恋焦がれながら見続けるのだ。

命が悲鳴を上げ続けるその光景を。

そうして狂気に恋焦がれる男、今目の前で命が消えた事を、いや、消した事を当然の犠牲と捕らえるその男の名はザエルアポロ、破面（シエント・ドス）Ｎｏ．１０２『ザエルアポロ・グランツ』だった。

桃色の髪と、それと同じ桃色の瞳。

所々跳ねた様な癖毛はそれなりに整えられ、手には白の手袋を、そしてその身を包むのはまるで医者の白衣のような形状の死覇装だった。

仮面の名残は眼鏡のように残り、彼に理知的な印象を与える。

だがその理知的な印象こそ彼にとっては何よりの仮面、その一見理知的で物静かな風貌からは想像出来ないほどの狂気を、この男はその内から溢れさせているのだから。

「まったく・・・・・・　この程度の破面（サンプル）では碌にデータを取ることもできないか・・・・・・低劣な存在が僕の研究の糧になれる栄光の瞬間なんだ、もう少し、ソソるもがき方をしてくれればいいものを・・・・・・」

その発言は自分の所業に、何の疑いも持っていないことを如実に示していた。
彼にとってそれは当然なのだろう、自分の研究とは何にもまして崇高であり、その過程に自分以外の他者がかかわれること自体が光栄な事だと、それこそその過程に加われるのだから命などいくらでも差し出すものだ、とすら考えているその言葉。
そう、彼にとって命とは彼の目的の為に”消費”される消耗品であり、それ以上の価値など見出されはしないのだ。

「ザエルアポロさまーっ、ザエルアポロさまーっ」

一人低劣と断じた破面が片付けられるサマをつまらなそうに眺めていたザエルアポロに、何者かが声をかける。
その声のほうへ彼が振り向くと、何者かが飛び跳ねるように彼に近付いてきた。

「ルミーナか、なんだ・・・・・・」

ルミーナ、そう呼ばれたのは奇怪な形をした破面だった。
人というよりは寧ろ球形に近い身体、そこから枝のように細い手足と押しつぶしたような醜面の破面がザエルアポロに近付く。
このルミーナと呼ばれた破面はザエルアポロの従属官であった。
本来従属官とは十刃のみに許された支配権の象徴、Ｎｏ．１１以下を支配できるという特権階級であるということを示すための存在である。

だがザエルアポロは十刃ではない。

彼、ザエルアポロが持つ番号は”Ｎｏ．１０２”、一見その数字の大きさから産まれの遅さか、それもと弱すぎるのかと錯覚しがちなその数字。
だが彼の持つ数字は数字持ち(ヌメロス)達の持つ数字とは意味合いが違う。
数字持ちは最大Ｎｏ．９９まで、つまり2桁までしか存在しない。
だがザエルアポロの持つ番号はＮｏ．１０２、”３桁”の数字である。
その本来ならば与えられる事のない数字、しかしその数字には数字持ち達の持つそれよりも尚意味があるのだ。

ザエルアポロは十刃ではない。
この説明には足りない部分がある。
ザエルアポロは、現在は十刃ではない、これが最も適当な言葉である。
”３桁の数字”、その本来ありえない数字は即ち”剥奪の証”、その三桁が示すのは『階級を剥奪されし者』、三桁の数字を持つ者の全てが元十刃。

『十刃落ち（ブリバロン・エスパーダ）』なのだ。

元十刃、その立場によってザエルアポロは従属官を配下においている。

本来ならば十刃落ちになった時点で従属官は支配から解放され、一介の数字持ちに戻るものである。

だが、ザエルアポロの抱える従属官は少々特殊だった。

彼の従属官のその全ては、彼が大虚を改造し、その改造大虚を藍染が破面化したものだった。

そうした工程で生まれた彼の従属官は、数字を持たず、そして破面としての機能よりも従属官としての機能を重視して精製されているため、従属官以外ではその存在意義をなさなかった。

故に限定的にザエルアポロは十刃落ちでありながら、従属官を使役する事を許されているのだ。

「きた！　きた！　イールフォルト！イールフォルトきた！」

その従属官の一体であるルミーナという破面は、ザエルアポロの前まで飛び跳ねながらやってくると、頭の上で手を叩きながらそう叫んだ。

まるで出来の悪い人形のように飛び跳ねるルミーナ、そのルミーナの報告にザエルアポロは「あぁ、そういえば」と呟き、何かに耳を澄ますように耳元へ片手を持っていった。

「・・・・・本当だ、カスの割には最低限、時間通り行動するだけの知性だけはあるらしい。あのカスにしては上出来だろう。」

まるで塵でも見るかのような目つき。
そんな目つきをしたままザエルアポロは管と煙と薬液に満ちた部屋を後にする。
そして向かったのは別の一室。
そこは先程まで彼がいた場所とは打って変わって、普通といっていい部屋だった。
それほど大きくない部屋には、大き目の長机とその両端にそれぞれ置かれた椅子、それぞれの席にはカップに紅茶のような液体が用意されていた。

「やぁ、兄さん。　身体の調子はどうだい？」

部屋に入るなりそう口火を切ったのはザエルアポロだった。
先程までの明らかな侮蔑の視線は消え去り、にこやかな笑顔で両手を広げながら長机の端の席に座る男にそう話しかける。
本当に先程まで命を弄び、それを嬉々として見ていた男とは思えぬその態度。
そして話しかけられた方の男は、ザエルアポロの姿を確認すると一瞬であるが眉をしかめ、眼を細める。

「あ、あぁ。　悪くないぜ、兄弟・・・・・・」

一瞬、ほんの一瞬であるが口ごもるようにしてそう答えたのは、先程ルミーナがザエルアポロへと報告した人物。
名をイールフォルト、破面（クインセ）Ｎｏ．１５『イールフォルト・グランツ』

である。
金色の長髪、頭のやや前辺りから後ろへと仮面の名残があり、痩せ型の体系と端正な顔立ち。
だがその端正な顔も今は若干歪んで見えた。

そしてその名前イールフォルト・グランツ、そうグランツである。
それは何も偶然の一致ではなく明らかな縁(えにし)を示し、互いが互いを呼ぶその呼び名通りの関係。
ザエルアポロ・グランツとイールフォルト・グランツは世にも珍しい破面の”兄弟”なのである。

「そうかい、それは良かった。　僕が治療した甲斐があったというものだね。さぁ、冷めないうちにどうぞ、兄さん。」

なんとも柔和な態度、心底安堵しているかのような態度で兄の前に置かれた紅茶を勧めながら、ザエルアポロはイールフォルトの対面に座った。
にこやかに、唯にこやかに、体調を気遣いその回復を喜ぶ姿は、誰が見ても献身的な出来た弟そのものだった。

「あぁ・・・　いや、なんだ・・・・・・　用意してもらって悪いが遠慮しとくわ。直ぐに戻らねぇと・・・・・・・」

それに対して兄であるイールフォルトは、なんとも歯切れの悪い態度だった。
勧められた紅茶をどこか躊躇うように断り、目の前に座る弟と視線

も合わせようとしない、どこか萎縮しているようなその態度。
いや、それは萎縮などよりももっと直接的なものかもしれなかった。

「いいんだよ、兄さん。　僕が勝手にやった事だ、気にする必要は無いよ。」

「あ、あぁ、悪いな・・・・・・兄弟・・・・・・」

（くそっ！　早く此処から帰りてぇ。　一秒だってこんなヤツの近くにいたら俺は、俺は・・・・・・）

にこやかな弟と、どこか居心地の悪そうな兄。
その一見不自然な構図は、しかし彼等の立場を考えれば当然ですらあった。

兄であるイールフォルトは、数字持ちの中でもかなり小さい数字である”１５”の数字を持っている。
それは彼が早い段階で破面になったということも然ることながら、その数字を今まで守り続ける事が出来た、という事でもある。
だがそれは確かに彼の実力でもあるが、ある種の偶像と神格化によってなされている部分も大きい。

強奪決闘（デュエロ・デスポハール）などの”号”の奪い合いでは、めったなことが無い限り１０番台の破面が指名されることは無い。
それは下から這い上がってくる者にとってその番号は遠く、手の届かない錯覚と、Ｎｏ．１２グリムジョーの存在によって１０番台の破面全体がある種別格だと捉えられている節があるからだ。
グリムジョーと同じ１０番台の破面、実力こそ彼に及ばないものの

おそらくは強いという先入観と、その強者と戦う事で全てを失うというリスクを背負う下位の者にとって、イールフォルトのいる１０番台とはある種禁忌に近かった。

そうしてなんとかＮｏ．１５を守り続ける兄、イールフォルト。
しかしその弟であるザエルアポロは違っていた。

彼の弟は現在Ｎｏ．１０２、非常に大きな数字はしかし、彼の弟が元十刃であるということを何よりも確かに示していた。
それは兄であるイールフォルトにとって喜ばしい事というよりも、むしろ引け目でしかなかった。
弟は今は違うが元十刃、それに引き換え自分は今の地位を守ることがやっと、十刃など夢見ることさえない、と。
そして何より彼が今居心地の悪い理由、それは目の前の弟自身にあった。

「・・・さん？　兄さん？　聞こえているかい？」

「ッ！　あぁ悪いな兄弟、考え事をしちまってて・・・・・」

かけられた言葉に不様にも大きく反応してしまったイールフォルト。
そんな兄をザエルアポロは心配した素振りで気遣う。
取り繕うようなイールフォルトの態度、それにも一瞬の間を置いてだが弟である彼はにこやかに答えた。

「・・・・・・・　いや、いいんだよ兄さん。それにしてもあの時は驚いた、砂漠で兄さんが倒れているんだから。」

あくまでにこやかに語るザエルアポロ。
両手を広げ、本当に驚いたといった態度で語るのは随分と前の光景だった。

それはフェルナンドがハリベルの試練によって、数字持ちを片っ端から狩り倒していた時の事。
数字持ちのほぼ全てがその対象であったため、イールフォルトもその例に漏れずフェルナンドに襲われ見事敗北を喫していた。
おそらくは拳足による打撃、だがそれによって負った外傷は予想以上のものだった。
互いに鋼皮という守りがあるにも拘らず、それがまるで紙か布のような攻撃に曝されたイールフォルトは、己の敗北を知る前にその意識を手放してしまった。

そして彼が次に目を覚ましたのは知らない部屋の中。
蠢く管が壁中を覆い、薬液と機材の山の部屋の中心に据えられた寝台の上でだった。
その光景は彼にハッキリとある感情を刻み込む。
そしてそんな彼にかけられたのは、更に彼を追い込む最悪の声だった。

「目が覚めたかい？　兄さん・・・・・・」

その時、頭から冷水をかけられた錯覚を、イールフォルトは感じた。
振り向いたそこには彼の弟が、ザエルアポロが立っていたのだ。
光が反射した眼鏡によりその瞳は見えない、しかし中指でその眼鏡の位置を直すようにしている彼の口元を、イールフォルトは一生忘れられないだろう。

その喜色に歪んだ怖ろしい笑みを。

そして語られるのは砂漠に倒れていた自分を見つけ、自分が治療したという弟の言葉だった。
だがそんなものはイールフォルトにとってどうでもよかった。
彼は去りたかったのだ、一刻も早くこの場から、この明らかに異質で醜悪なこの空間から。
イールフォルトはザエルアポロが一通り話終えると、すぐさまそこから去ろうとする。
ザエルアポロはそんな兄を止めなかった、しかし最後に去り行く兄の背中にこう告げたのだ。

「傷の治り具合が気になるから、定期的に此処に通ってくれないかな？心配なんだよ、兄さんが・・・・・・」

背中にかけられた言葉は、ある種イールフォルトにとって死刑宣告に近かった。

此処に、この場所に何度も来なければならないのかと、そしてこの弟に何度も合わなければならないのかと。
怖ろしい、怖ろしい、自分の弟が怖ろしい。
イールフォルトにあるのはそんな感情だけ、出来ることならばもう二度と此処に、弟の領域に足を踏み入れたくは無いしかし、しかし花開いた恐怖はその弟の言葉を無視する事さえ出来なくなくさせていた。

「本当に驚いたよ、でももう大丈夫なようだ。感じる霊圧や全体的な霊子組成も問題なさそうだし・・・・・・完治、といっていいだろうね。」

「ほ、本当か!?」

それはイールフォルトにとってこれ以上ない程喜ばしい言葉だった。
問題ない、完治といって言い、それは即ちもう此処にくる必要が無い、という事。
あのおどろおどろしい部屋の近くへと、そしてこの弟の目の前に来る必要が無いという事なのだ。
思わず身を乗り出すイールフォルトに、ザエルアポロはやはりにこやかなままだった。

「あぁ、本当さ。　本当によかったよ、兄さんにとっても、そして僕にとっても・・・ね・・・・・・」

念押しをするように確認するイールフォルトに、ザエルアポロは本当だと再び答える。
そしてよかったと、本当によかったと笑みを浮かべた。
完治した事が兄にとっても、そして自分にとってもその出来事は喜ばしい事だった、と。

だがその最後の言葉はイールフォルトには聞こえなかった。
彼の中には今、もうこの場に来なくていいという喜びだけが満ちており、それ以外のものを、それこそ恐れる弟の言葉を受け入れる隙間などありはしなかった。

「そうか！　じゃ、じゃぁ俺は帰らせてもらうぜ、あばよ兄弟。」

それだけ言い残すとイールフォルトはそそくさと席を立ち、その部屋から出て行ってしまった。
よほどこの場にいることが嫌だったのだろう。
それこそ脱兎のごとく去っていく兄を、ザエルアポロは眼鏡の位置を直しながら見送った。
そしてその顔からはにこやかな笑みは消え去り、塵を見下す視線と、イラつきが浮かび上がる。

「・・・・・カスが・・・　獅子の檻に放り込まれた鹿のように震える姿は、不快でしかなかったな・・・・・・アレが兄だと思うと全身の血液を入れ替えたくなる・・・・・・」

そう言いながら立ち上がるザエルアポロ。
そして先程までイールフォルトが座っていた席の方へと移動しながら、一人呟き続ける。

「あの面積の小さい脳味噌で必死に考えたのか・・・・・出された紅茶に手をつけなかったのはある種奇跡だな。カスにも知能がある、ということが証明された瞬間だ・・・・・」

そう語りながら、カップに満ちた本来ならイールフォルトが飲んだであろう紅茶を一息に飲み干すザエルアポロ。
飲み干した後も別段変った様子は彼には無かった。
それもそのはず、カップに満たされた液体は本当に唯の紅茶だっのだ、イールフォルトは内に渦巻く恐怖により警戒して口をつけなかったが、そんなことはザエルアポロには関係なく、目的は別にあった。

「まぁいい。　ちょうど”箱”が欲しかったところにアレが転がっていたのは僥倖だった・・・・・録霊蟲(ろくれいちゅう)もしっかり羽化していた様だし、なによりあんなカスを僕が自ら治療してやったんだ、卵の百や弐百埋め込まれても文句など無いだろう。精々良い情報を僕に届けてくれよ・・・・・兄さん？」

ザエルアポロの目的、それは兄であるイールフォルトの体内に埋め込んだ自分の作品、録霊蟲と呼ばれたそれが羽化しているか、その経過はどうかという事の確認以外なかった。
傷を癒したのも、こうして手厚くもてなしたのも、全ては自分の作品のため。
治療の際にその傷口から埋め込んだ録霊蟲の卵が彼の兄の霊圧を喰

らい、肥え育っているかの確認。
自分の作品をより遠くへと運び、より多く情報を得るための”箱”を完品に近い状態にするためだけだったのだ。

自らの兄すらも唯の”箱“として見る、そしてそれ以上の価値を見出さない、それどころか価値を与えてやった事に感謝すらするべきだというザエルアポロの考え。
それは破綻している考え方、縁すら、繋がりすら彼にとっては手段としての価値すら見出せるものではなく。
価値とは即ちどれだけ自分の研究を昇華出来るかという一点のみ。
溢れる狂気をどれだけこの世に具現できるか、という唯一点のみなのだ。

「それにしても・・・・・・」

イールフォルトと相対した部屋から、再びあのおぞましい部屋へと戻ったザエルアポロは、誰に話すでもなく呟いた。
ぐるりと見渡したその視線は所狭しと置かれた機材と、薬液が満たされた無数の瓶や、床に転がる人の一部のような部品に注がれる。

「少々手狭になってきたな・・・・・・　十刃でなくとも研究さえ出来れば問題なかったが、このままでは支障が出るかもしれない・・・・・」

明らかに狭いと感じるその部屋を見渡すザエルアポロ。
別段研究さえ出来れば彼には何の問題もない、それこそ彼が十刃の

座を手放したのもそれが理由だ。
十刃とは否応無しに藍染の命によって戦闘に赴く必要がある。
それは最上大虚（ヴァストローデ）の探索であったり、反乱分子の巣の殲滅であったりと多岐にわたる。
しかし、ザエルアポロにとってそれは、唯己の研究に費やす時間を奪われることに他ならなかった。

故に彼は十刃の座を明け渡し、十刃落ちとなってこうして研究三昧の日々を送っているのだ。
だが、その研究に支障が出る可能性が浮上した。
己の狂気を具現していくためには、どうしても場所が、設備が足りないということにザエルアポロは行き着いたのだ。

「十刃か・・・・・・　やはり宮殿規模での施設があるのは大きかった・・・か。まぁいい、十刃なんていつでもなれる。脳味噌まで筋肉で出来ている奴等に僕が負ける理由が無い。誰でも楽にどかせるさ・・・・・・」

そうひとり結論付け、部屋の臆へと消えていくザエルアポロ。
口元に歪んだ笑みを浮かべながら放たれたその言葉は、決して楽観的な予測から来るものでは無かった。
彼の狂気、それはおそらく十刃の誰よりも抜きん出ている。
そしてその狂気は”戦闘力”としての側面でなく、”知識”として抜きん出ているのだ。

そう、彼ザエルアポロは”戦闘者”ではなく”研究者”。
どんな強者であろうと、彼の前では赤子以下へと姿を変える。
それは戦闘者ではなく研究者である故の事実。

時を掛け、その全てを、それこそ相手を構成する霊子一つまで丸裸にし、そして思いのままにその命を奪う事ができる。

そう、彼は研究者。

嘗て唯一人、”戦闘”としての殺戮能力ではなく、”頭脳”から生まれる殺戮能力によって十刃の座を手にした男。

その狂気はとどまるを知らず、そしてまた一人、また一人と、狂気への贄は積まれていくのだ。
おそらく永遠に訪れないであろう、彼の好奇が満ちるその時まで・・・・・

崩れろ

崩れろ

深淵の月

彼方(カナタ)と此方(コナタ)を打ち崩せ

崩れて混ざり混沌を成せ

玉を飲み込め

全てを喰らえ

BLEACH El fuego no se apaga. 36（後書き）

ザエルアポロさん（以下ザポさん）登場。
兄はだいぶヘタれになってしまったけど、兄弟水入らずの楽しい楽しいお茶会ですw

実際ザポさんとイールフォルトってどういう兄弟なんだろうか。
義兄弟はまずありえないし、生前の兄弟か、あるいは孤独な二人のように別れた存在なのか……
そのへんどうよ？久保先生？

何年後かに出るであろう全体的に手抜き感のあるファンブックで、明らかにしてほしい。
投げっぱなしで済ますのはダメだよね。

感想お待ちしてます。
（活動報告も覗いてもらえばいいことがある・・・かも？）

BLEACH El fuego no se apaga. 37（前書き）

間に合った、そしてやっちまったゼ・・・・・・

不可逆にして不可侵。

流れる川の如く、高きから低きへ流れるそれ。

決して止まる事も、ましてや戻る事などありえず。

逆らう事も叶わず、その抗いすらも易々と飲み込み、押し流す奔流。

それは”時間”。

過ぎ去るは早く、思い返せば届かず、そして見果てぬはその流れの先。

誰にも支配される事なく、しかし我等を支配し続ける。

そして歳月は、瞬きの幻想として過ぎ去るのだ・・・・・・

「ンだと!?　コラ!　テメェぶっ殺されてぇのか!?」

「調子くれてんじゃねぇぞ!あぁ!?　テメェこそ殺されてぇか!」

何の事はない喧騒、”力”が支配する世界ではそれこそが正義であり、その正義を持って敵対者を滅するのは道理だ。
そしてこの虚圏、虚夜宮においてもその道理は至極当然のものとされ、”力”による支配と正義が用いられていた。

しかし、虚夜宮においてこういった小さな小競り合いは、最近頻繁に起こっている。
些細な切欠から相手の命を奪い去る結果に、または両者が死亡する結果にまで繋がる、彼等にとっては小さな小競り合い。
常時ならばそれほど頻繁には起こらないその小競り合いが、今の虚夜宮では頻繁に発生する。
それが起こる理由は、今の彼等にその見に持った衝動と、”力”の捌け口が無い事に帰結する。
簡単に言ってしまえば、現在『強奪決闘(デュエロ・デスポハール)』と呼ばれる”力”を示し、”号”を奪い合うという決闘は開催されていない。

公然と、衆人環視の中行われる殺し合い。
”力”を示す高揚と、”号”を得る栄光、そして”命”を奪う快楽と愉悦、破面(アランカル)にとって内に渦巻く快感のほぼ全てを満たせる場所で

ある強奪決闘。
それが行われていないと言う事は、衝動は逝き場を失い、膨れ上がると言う事。
膨れ上がった衝動は些細な切欠で容易にあふれ出し、一度抱える衝動をとどめたという事実は小さな火種で大きな爆発を産み出すのだ。
結果、小さな小競り合いはそのまま流血沙汰へ、そして命が潰えるまでの結果を生む。

では何故強奪決闘が開催されないのか。
それは、開催する者が、正確にはそれを許可するものとの連絡が取れない、と言う事。

彼等の創造主、藍染惣右介がある日を境にこの虚夜宮へと一切の姿を見せなくなったということだった。

ある程度定期的に行われている強奪決闘、しかしそれの開催と許可を出すのは最高権力者たる藍染惣右介、その人物がいなければ強奪決闘など開くことは出来ず、破面が勝手に行ったとしてもそこで得た”号”は何の意味もないただの数字に成り下がってしまう。
故に強奪決闘は行われない。
決闘のための闘技場の門は硬く閉ざされたまま、破面達の殺戮衝動を溜め込むための器は硬く閉ざされたままなのだ。

そう、藍染惣右介、市丸ギン、東仙要の三人はその姿の一切を見せず、時たま送られてくる命令だけが彼等の存在を示すのみだった。
そして藍染惣右介らを欠いたまま時は流れる。

紅い鬼童子フェルナンド・アルディエンデが、第3十刃（トレス・エスパーダ）ティア・ハリベルにこの虚夜宮へと導かれ、”力”と、”好敵手”とそして自らの”求めるもの”の為に業を磨いていたあの日々から、2年の歳月が流れていた・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 37

「此処にいたか、フェルナンド。　何をしている？招集がかかったのだぞ・・・・・・」

其処はいつかの屋上だった。
空はあの時と同じ晴天、其処にいる人物も、そして其処にその人物を探しに来た人物もまた同じ。
違うのはただあの時の語らいから、２年という歳月が流れたという事だけだった。

あの時と同じように屋上に寝転がり、空を眺めている人物を探しに来たのは、ティア・ハリベル。
相変わらず顔の下半分を隠し、煌きを帯びたような金色の髪は少しだけ伸びて、そしてあの時と同じように風に靡く。
金色の睫毛に縁取られた翠の瞳は、変らぬ強さと、そして美しさをもっていた。
そしてハリベルが探しに来た人物は、ハリベルの言葉に面倒くさそうに上半身を起すと、彼女と同じ金色の髪を片手でガシガシと掻きながら彼女の方へと視線を向ける。

「別に俺一人いなくてもいいだろうが・・・・・・今は空を眺めてぇ気分なんだよ。」

そう至極面倒そうに答えたのは、フェルナンド・アルディエンデ。
ハリベルを見上げるその紅い瞳には、苛烈さというより、今は面倒

くさいといった感情の方が強く浮かんでいる
どうにも天邪鬼のきらいがある彼、呼び出しというものにはどうしても抗いたくなるのが性分のようだ。
だがそんなフェルナンドの態度など関係ないとばかりに、ハリベルは言葉を続けた。

「普段ならそれも許そう・・・・・　だが今日は駄目だ。2年ぶりの招集、それも『全員必ず』という厳命付きで・・・だからな。」

「何ならこのまま抛って置いてくれりゃァいいものを・・・・・・・」

ハリベルが告げた言葉にフェルナンドは小さく悪態をつくが、ハリベルの視線が強くなったのを察すると、一つ舌打ちをして立ち上がる。
立ち上がったフェルナンドは、2年前のあのときより幾分大きくなっていた。
それは身長が伸びたということではなく、言うなれば厚みが増したといったところか、身体つきがよりしっかりとし、身体を覆う筋肉はより鍛えられ、量を増したそれが彼を大きく見せる。
そしてハリベルの横まで移動すると、そのまま二人は並んで歩き出した。

「だがよぉ、一体藍染の野郎は今の今まで何してやがったんだ?まぁ、こっちにしてみりゃ、あのやたら胸糞悪い顔を見ないで済むんだから良かったんだが・・・な。」

並んで歩きながら、フェルナンドは隣にいるハリベルにそんな質問を投げかけた。

別にフェルナンドにとってしてみれば、藍染がいようがいまいが特に関係も問題もなく済んでいる。
彼の目的は彼にとってあくまで”戦いの先”にあるモノであり、藍染の存在は必要ではないからだ。
他の破面にしてみれば、何を今更と言った質問ではあるが、ハリベルはそれにもキッチリと対応する。

「それは私にも判らん。　ネロを解放した後、私達に『結実の時が近い』とだけ言い残し、以後は虚夜宮どころか虚圏にすら来られていない様子だ。　”大帝”あたりならば何か知っているかもしれないがな。」

問に答えたハリベルの答え、しかしそれもどこか要領を得ないものであった。
藍染ら死神達は、第2十刃（ゼグンダ・エスパーダ）ネロ・マリグノ・クリーメンを幽閉から解放するとネロを除く十刃を招集し、こう告げたのだ。

『皆、聞いてくれ。　遂に私が待ち望んだ結実の時が来た。だがそのために私達は、当分の間此方に来ることが出来なくなってしまう。だが約束しよう。　次に私達が君達の前に現れたその時は、君達全員が　”最も望むモノ”　を与えよう。』

それだけを言い残すと藍染達は尸魂界へと戻り、以降今日までの2

年間、一切の姿を見せることはなかった。
そしてその言葉はすべての破面が知るところとなり、”最も望むモノ”とはいったい何なのかと葉面達は色めきたった。
結実とは一体何を指すのか、そして自分達が”最も望むモノ”とは一体なんなのか、だがハリベルにそれを知る術はなく、しかしそれを知らぬからと言って彼女はその場で藍染にそれを問うようなことはしなかった。
藍染が話さないと言う事は、自分達が知る必要のないことだと彼女は理解していたからだ。
故に彼女は藍染の意図も、この行動の真意も知らない。
それを素直にフェルナンドへと打ち明けるハリベル。
フェルナンドの方も、それほど興味があったわけでもなく、ただ何と無く訊いた程度の質問であった為、それ以上追求をすることはなかった。

二人はそのまま屋上の縁辺りまで来ると、躊躇いなく飛び降りる。
彼等のいた屋上は、ハリベルの居城である第3宮の頂上ともいえる場所、それなりの高さではあるが彼等にとってそれは脅威ではない。
そのまま宙を蹴るようにして二人は空を駆けた。
追いすがる自らの影すら断ち切る速度で駆ける二人、二人が向かう先は先程まで彼らが居た宮殿を軽々と超える巨大な構造物。
おそらくこの虚夜宮の天蓋が覆う場所からならば、何処からでも見ることが出来るであろうそれは、名を『奉王宮』。
王を奉じる宮殿、いや、自らを王として奉じろと云わんばかりの威容を誇るその宮殿は、正しくこの虚夜宮の王の為の宮殿だった。

その宮殿にあるのは今は空の玉座。
彼等破面の主だけが座る事の許された、荘厳な玉座があるのだ。
そして、フェルナンドとハリベルが、その玉座のある奉王宮へと向かう理由は唯一つ。

2年の間、座る者の居なかった玉座へと帰還するのだ、彼等の”王”が、藍染惣右介という名の黒き王が。

フェルナンドとハリベルが奉王宮の中にある玉座の間へと入ると、其処には既に多くの破面達が集まっていた。
十刃（エスパーダ）、数字持（ヌメロス）ち、十刃落（プリバロン・エスパーダ）ち、そしてその他の破面が玉座の間へと一堂に会する。
周りを見やるフェルナンドの瞳に映った彼等の表情は、それぞれの思惑の数だけあり、藍染の帰還を喜ぶ者、逆に忌々しく思う者、興味がなといった者や興味はあるが表には出さぬようにしている者、それぞれがそれぞれの思惑を抱えこの場に集っていた。

だが、フェルナンドが見たのはそんな彼等に共通する一つの感情、それは”畏怖”。
”王”の帰還は象徴の復活であると同時に、力による更なる絶対支配の再臨でもあるのだ。
あるモノはそれを畏れ、またある者は王の力に恐怖する。
それは即ち、彼等の王が破面という力ある存在達が、一様に恐れおののく感情を見せるだけの力を持った者であると言う証明。
それが藍染惣右介だという事の証明だろう。

そんな畏怖を浮かべる一団を横目に、フェルナンドはハリベルと共に玉座の間の一角へと向かう。
玉座の間には彼等の居る床よりも、かなり高い位置に据えられた玉座以外に椅子などはなく、代わりに様々な形の柱や角張った構造物

などが点々と配置され、それぞれの破面が思い思いの場所に座っている。
そして誰が決めたわけでもなく、玉座に近付くに連れ破面の強さは増し、扉から玉座までを一般の破面、数字持ち、十刃落ち、十刃とその従属官といった順で並んでいた。

それらの破面に目もくれず歩くハリベルとフェルナンド。
だが、フェルナンドはその視線の端にある破面を捉えていた。
水浅葱色の髪をした野性味溢れる男の破面、グリムジョー・ジャガージャック。
捕らえた視線の先のグリムジョーは、フェルナンドが戦った時の彼よりも幾分落ち着いた雰囲気であり、しかし放つ霊圧はあの時のまま触れる者を容赦なく噛み殺す獣の雰囲気を残していた。
そんな彼の姿を見ると、フェルナンドは小さく笑う。
隣にいるハリベルがちらりと彼に視線を送るが、彼の表情を見ると此方は小さく溜息をついて何も言わずに歩を進めた。

フェルナンドはそんなグリムジョーの姿を見られただけで、ある意味此処に来た甲斐はあったと思っていた。
面倒な呼び出し、別に従ってやる理由もないのだが、それでも此処にこなければ見られなかったと、自分と同じように己が目的のため研鑽を積み、明らかに強くなっているグリムジョーの姿を。
ハリベルはそんなフェルナンドの姿を見て思う。
これが、先程まで面倒だ何だと言ってごねていた男のする顔かと、金色の髪の間から覗く紅い瞳は爛々と輝きを増し、今にも戦いたくて仕方がないといった顔。
最近などは戦う事も然ることながら、空や月を眺めることが多い彼だが、やはりその根底にはどうしようもなく戦いを求める性があるのだと、そう確信させるようなフェルナンドの顔が、ハリベルには何故か嬉しくもあり、普段からもう少し此方の顔を見せてくれれば・

・・・・・といった思いもあった。

玉座に近付くに連れ、破面の数は減る。
それは当然の事であり、玉座の最も近くにいるのは十刃とその従属官。
『全員必ず』という厳命が出ているにも拘らず、何名かの姿は今だ見えず、おそらく現われることもないのだろう。

ハリベルとフェルナンドも先にその場へと赴いていたアパッチ等と合流し、今回の命令を出した張本人の帰還を待つ。
本来ならばフェルナンドがこの位置にまで来ることはありえない。
彼は破面化の後も番号を持たず、そしてハリベルと共にいるからといって彼女の従属官というわけでもない。
藍染の命により、彼女の客分として扱われているだけであり、破面としての立場は非常に曖昧なのだ。

だが、誰もそれを声高に叫んだりはしなかった。
そもそも十刃達にとってすれば、たかが破面の一人がその場にいたからといってとやかく言うことでもなく、そしてそれは十刃落ちにしても同じこと。
そして、その後方を取り巻く数字持ち、彼等は苦々しげな視線をフェルナンドに送りながらも、決して叫びはしなかった。
言うなれば彼等は敗者なのだ。
今とは違う、見た目子供のフェルナンドに彼等は悉く敗北を喫している。
そして敗者が勝者に向かって何を叫ぼうとも、それは唯の遠吠えであり、叫べば己が惨めさと愚かさを喧伝するだけの事。

故に彼等は叫ばない、それ以上己の自尊心を傷つけないために。

そうして十刃たちがまばらに座る中、フェルナンドはハリベル達から少し離れた位置で一人石柱に腰掛けた。
別に彼女等から離れた事に意味はない。
しかし其処にはもしかすれば彼なりの矜持があるのかもしれなかった。

彼なりの線引き、彼の中に引かれた線、その先を踏み越える事、それ以上の馴れ合う事はしない、という彼なりの矜持が。

そうして一人座るフェルナンドに、いくつかの視線が向けられる。
一つは　第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルー、　そしてもう一つが第1十刃（プリメーラ・エスパーダ）”大帝”　バラガン・ルイゼンバーンであった。

バラガンの方はなにやら値踏みするような視線で、口元にニンマリと笑みを浮かべながらフェルナンドを見ていた。
その視線からもなにやら愉しげな雰囲気が伺われ、しかしバラガンの後ろに控える従属官の一人からは危惧と敵意がフェルナンドに送られていた。
バラガンの視線の理由、それは彼がフェルナンドに対し、興味を持っているということ。
彼の従属官と末端の兵をフェルナンドにぶつけたバラガンは、その従属官達を軽々と倒したフェルナンドに興味を持った。
そして何より彼の琴線に触れたのは、フェルナンドが彼の従属官に向かってはいた言葉。

自分に会いたいのならば、呼びつけるのではなく自分の足で俺の前に来い。

それはそう易々と口に出来る言葉ではない。
言い放った相手はこの虚夜宮に居るどの破面よりも強力な者、一度はこの虚圏を統べた”王”なのだ。
その人物に対して、喩えそうだと知らずともその言葉を言い放つ気概、それがバラガンには愉しくて仕方が無かった。

だが、バラガンとて”王”である。
来いと言われたからといって、はいそうですか、と行く筈もなく、決して自らフェルナンドに近付こうとはしなかった。
それはバラガンの”王”としての矜持、いや、王としてのあり方そのもの。
”王”は揺るがない、”王”は流されない、そして”王”とは決して屈さない、と。
行けば一度発した己が言葉を曲げることに、そして何より唯の破面一人に”王”たる自分が屈した事になる、と。
故にバラガンはこの2年間、決してフェルナンドの元にいくことはなかった。

まぁ、彼が行かないというだけで、色々とちょっかいは出していたようではあるが。

そしてもう一人、バラガンの値踏みする愉しげな視線とはまさに逆、明らかな敵意と侮蔑の視線を送るものが居る。

それはゾマリ・ルルー、自らを藍染の忠臣と宣言する狂信者である。
ゾマリにとってフェルナンドという存在は、そもそも存在していること自体が罪だった。
自らの創造主にして絶対的なる支配者、藍染に対して礼節も、敬意もなく無礼な態度をとる。
それだけでゾマリにとっては万死に値する蛮行であった。

それゆえにゾマリは決意したのだ。
罪とは罰せねばならぬと、そして罰とは須らく首を刎ねる以外ありえないと。
その結論に達したゾマリはすぐさまそのための行動に移った。
フェルナンドに対し、強奪決闘において自分と戦うよう命じたのだ。
そしてその命にフェルナンドは応えた、そのときの彼の精神の昂ぶりもあったろうが、何より売られた喧嘩ならば買うとフェルナンドはそう宣言したのだ。

だが、ゾマリを不幸が襲う。
藍染惣右介がこの虚夜宮を長きに渡り空けると言うのだ。
それは即ち、強奪決闘が実質行われないということ、それは衆人環視の仲、愚か者を断罪する場を奪われることを意味していた。
しかし、ゾマリが何より不幸に思ったのは藍染惣右介がこの虚夜宮をあけるという事実。
”神”とすら崇拝する藍染の不在は、彼にある種の絶望を与えた。
そしてその絶望は更なる”祈り”と”崇拝”へと姿を変え、2年という歳月によって熟成されたそれらと、それらから来るフェルナンドに対する”憎悪”は留まるを知らなかった。

そんな視線にもフェルナンドは何処吹く風、なんらそれらを気にする様子はない。
気にしたところで仕方が無いのだ、他人が自分をどう思っていようが知ったことではなく、それが戦いたい相手ならばいざ知らず、どうでもいい様な相手ならば尚のこと。
故に彼はそちらを気にする事無く、唯石柱に腰掛けていた。

だが、そんな彼の視線は、たった一つの霊圧によって玉座へと向けられた。

「オォ・・・・・・オオオオオオオオ！」

そんな言葉にもならぬ歓喜をあげるゾマリの声がする。
それは玉座の裏から近付いてくる、一つの霊圧に向けられた歓喜。

そう、彼等の前に今、再臨するのだ。

彼等の”王”が。

「やぁ、皆、久しいね・・・・・・」

そんな気安い言葉と、浮かべた笑みは2年前の”王”そのままだった。

だが今は死神達の着る”黒い死覇装”ではなく、破面達が着るのと同じ”白い死覇装”に袖を通し、黒縁の眼鏡はなく、そして髪を掻き揚げて後ろへと流した姿の”王”。

見た目は確かに変った、しかしその瞳は、眼鏡という薄い硝子が無くなったが故に、よりはっきりと見えるその瞳に湛えられた暗黒の意思は、2年前を遥かに凌ぐ邪悪を浮かべている。

そう、今”王”は再臨したのだ、藍染惣右介という名の”王”が。

誰とも無く雄叫びを上げる破面。
それは歓喜なのか別の何かなのか、彼の湛える暗黒は彼等破面など軽々と飲み込むのだろう。
故に破面達は歓喜するのか、暗黒という彼等の根源をその男に見るが為に。

地鳴りの雄叫びを藍染は片手を上げて制した。
それだけの動作で雄叫びはピタリと止んでしまう。
圧倒的なカリスマ、それがこの男を”王”へと押上げる一つの要因でもあった。

「まずは長らく城を空けた事を詫びよう。　だが皆、喜んで欲しい・・・・・私は手にしたんだ、　世界を”崩す”為の鍵を。」

そう言って藍染は手を懐にもっていき、そして其処から何かを取り出す。
それは掌に収まるほどの小さな球、彼の瞳に浮かぶのと同じ暗黒色の球だった。
手にとったそれを魅せるようにしながら、藍染は謳う様に言葉を紡ぐ。

「これが世界を崩す鍵、名を『崩玉(ほうぎょく)』という。そしてコレこそ君達に私が約束した、君達が”最も望むモノ”なのだよ。」

崩玉、そう呼ばれた小さな球。
だが、破面からしてみれば自分達が”最も望むモノ”がその球だとは思えず、ざわめきが広間を包む。

しかし、藍染はそれなど見越していたかのように貼り付けた笑みを強め、更に言葉を続けた。

「君達の言いたい事は判る。　だが聞いて欲しい、この崩玉は唯の飾りではない。この崩玉には”力”があるんだ、”虚と死神の境界を取り払う力”がね・・・・・・」

その言葉に広間は更にざわめきを増す。
虚と死神の境界を取り払う、それによって生まれるのが破面であり、今更その力を持ち出したとて今既に破面化している自分達に、一体何の意味があるのかと。
自分達が”最も欲しいモノ”はそんなものではなく、もっと直接的なものであると。

「そう、今更な話かもしれない。　だが敢えて言おう。君達は今だ『不完全な破面』である・・・と。」

ざわめきは、どよめきに変った。
不完全、それは完全では無いという事、破面として不完全ということは即ち不良品と言われているのと同じなのだ。
一体それはどういうことか、知能の低いものはその藍染の言葉に怒りを顕にし、考えるだけの知能のある者もまた、その言葉の真意を測りかねていた。

「破面とは本来、『完全な崩玉』をもってのみ完成する存在。しかし君達は私の創り出した『不完全な崩玉』によって産まれた謂わば『不完全な破面』という事なんだ。・・・・・だが安心して欲し

い、私が手にしたこの崩玉と、私の創ったもう一つの崩玉。この二つを合わせる事で崩玉は真に完成し、全てを崩す鍵へと変るのだよ・・・・・・」

どこか芝居がかったように語る藍染。
その言葉に出てきた二つの”崩玉”の存在、彼等破面は崩玉の能力によって産まれる。
藍染がそれを彼等に説明していたかは定かではないが、崩玉によって産まれる事は事実であり、藍染は百年以上前にその事実にたどり着いていた。
しかし、彼の崩玉は不完全だった。
彼は自らの崩玉の為に、多くの死神と、また多くの死神の才を持った者の魂を削り、その全てを崩玉に与えた。
しかし彼の崩玉は完成には至らず、結果彼が生み出した破面は不完全が産み出した不完全な存在になってしまったのだ。
不完全と言ってもほぼ完全に近い不完全、生まれる破面に問題などなく、その力も充分なものではあった、しかしそれでも不完全は不完全なのだ、そしてその不完全と言う事実は破面達にとって大きな衝撃だった。

それは完璧な強さを手にしたと思っていた多くの破面にとっての衝撃。
自分達は虚、大虚、その上を行く優良種であり、負けることなどありえない完璧な存在だと言う夢想。
それが脆くも崩れ去った瞬間なのだから。

モドキや数字持ち達が何処かで持っていた幻想、しかしそれは十刃には存在せずそれほどの動揺は見えなかった。
だがそれでも疑問は残る。

「それで？　ボス・・・・・・　その石ころが、儂等の”最も望むモノ”になる理由はなんじゃい。」

その場にいる破面の中で最も位の高いバラガンが、全てを代表する形で藍染に問う。
彼がしきりに説明する崩玉という名の球、だがそれが”最も望むモノ”であると言う理由が今だ説明されていないという事を。
最もと言うからにはそれ相応のモノであるのだろう？と言外に問うバラガンの視線に、藍染は常通りの笑みで見返すとこう答えた。

「あぁ、そうだね。　では一つと問おうか、”不完全”とはなんだい？」

誰もがその禅問答のような藍染の問に言葉を噤む。

不完全とは何だ？

簡単に考えればそれは欠けているという事。
文字一つ、数字一つ欠けただけでその意味が大きく変ってしまう様に、あくまで完全に近く、しかし決して届かないもの。
永遠に頂点に立つ事ができない、それが不完全。
だが今、それを問うことに意味などあるのか、殆どの破面がそう思い口を噤む中、たった一人声を上げる者がいた。

「・・・　余地がある、ってことだ・・・・・・」

その言葉の発生源に、おそらくこの場にいるもののすべての視線が集まっていた。
視線の先に居るのは石柱に腰掛ける金髪と紅い瞳の破面、フェルナンド・アルディエンデだった。
その集まる視線など意に介さず、フェルナンドは自分より高い位置にいる藍染を見据えてそう答えた。

「不完全、ってェ事は完全じゃぁ無ぇって事だ。そもそも完全なんてもんが在るとも思えねぇが、不完全ならまだまだ上にいける。俺達で言えば”強くなる余地がある”・・・・・・ってェことじゃねぇのかよ?えぇ?　藍染・・・・・・」

フェルナンドの言葉に藍染はその笑みを深めた。
それがすべての破面に、フェルナンドの言葉が藍染の求める答えだと言う事を理解させる。

「そうだよ、フェルナンド。　不完全とは完全になれるという事、そして君達が求める完全とは一体なんだい?君達が”最も望むモノ”とは一体なんだい?　煌びやかな宝石かい?それとも褒章かい?
　いいや違う。　君達が望むのは”戦場”だ、その”戦場”で振るう”力”だ。誰よりも強く、雄々しく、何者をも寄せ付けない強大な”力”だ。」

掌に乗せた崩玉を上へと差し出すようにしながら、藍染が語る。

その言葉は力強く、彼の語る言葉の全ては、まるで太古の昔より定められた法の様に厳粛で、聞くもの全てを引き付け離さない。
圧倒的なカリスマと、荘厳な言葉はまさしくこの男が”王”であることを示す。

「故に私が与えよう。　君達に、戦場で振るう為の”力”を！君達が最も望む”強き力”を！　この崩玉によって君達の境界は打払われ、更なる力と、それによって更なる混沌を世界に満たすそのために！」

それは王の宣誓だった。
眼下に蠢く魔獣である破面、それらを統べる魔獣の王、藍染惣右介。
魔獣たちは更なる力の脈動に歓喜し、”王”はその姿に笑みを深める。
力を増した彼等は世界の脅威となり、そしてその脅威を打払おうと、愚かにも動く者達の姿を想像して。

”王”は一人笑みを深める。

彼だけは、知っているからだ。

すべては、彼のために捧げられる贄ということを・・・・・・

遠吠えの残響

低く

遠く

空へと消える

お前はきっと

優しすぎる

BLEACH El fuego no se apaga. 37（後書き）

キングクリムゾンが発動しました。
もうこれしか手が思いつかなかった・・・・・・
これ以上やるとグダグダになりそうでさ。

前回（ザポさん）からでは想像も出来ないであろうｗ
だいぶすっ飛ばしたゼ！

いきなり原作に追いついてしまうという暴挙をお許しください。
崩玉の設定は確か藍染さんも創ってたよね？

今回はツッコミどころがおおいかも。
不完全云々とかね・・・・・・

最後に活動報告で元気をくれたお二人に感謝、間に合ったよ。

BLEACH El fuego no se apaga. 38（前書き）

同時投稿はダメだった・・・・・・

破面（アランカル）の王、藍染惣右介の帰還と、彼等に告げられた”不完全”という名の事実。
それは彼等に多大な衝撃と、しかしそれ以上の好機を告げる言葉だった。
より高みへと昇るための手段、更なる殺戮をしえる”力”を得るための手段が彼等の前に明示されたのだ。
それを前に心踊らぬ破面など居ない、誰しもが己が更なる”力”の脈動をその身に感じずにはいられない。
奉王宮、玉座の間（レイアドラス・パデュヨンテ・エンペラドル）にはそんな彼等破面の熱気が溢れていた。

しかし、世界はそれほど容易く何かを得られるようには出来ていない。

「皆・・・・・　強き力を前に高揚している所悪いが、一つだけ言わなければならない事がある。この『崩玉（ほうぎょく）』は今はまだ休眠状態、その状態での瞬間的覚醒により君達を再破面化するのだが、ここにいる全てを一瞬で再破面化するのは、いかな崩玉といえども困難な

んだ・・・・・・」
、

自分が得られるかもしれない力を前に、どこか興奮した様子だった破面達に告げられたのは、彼等にとって残念な知らせだった。
彼等の王、藍染惣右介がその手に持つ崩玉と呼ばれる物質、彼が語るにはそれは今だ休眠状態であり、本来の覚醒状態には至っていないということ。
その状態でも瞬間的な覚醒状態にすることで、完全な破面化を行うことは出来ると。
しかし、その瞬間的覚醒ではこの場にいる百を超える破面の全てを再破面化するのは、困難だということだった。

「瞬間的な覚醒と休眠の繰り返しは崩玉に多大な負荷を与え、悪戯に衰弱させてしまう。それは私の望むところではないんだ、無論君達にとっても同じことだろう？衰弱し、弱った崩玉による再破面化など・・・ね。」

藍染が語る言葉は王としての命令というよりも、どこか諭すような言葉に聞こえた。
もしも仮に全員を破面化しようとすればどうなるか、次第力を失っていくその黒い球、それによって再破面化される自分達は本当に”完全”な破面となれるのだろうか、と。
絡めとられるのだ、藍染惣右介の詐術の糸に。

「よって今回は、現十刃（エスパーダ）のみを・・・・・・いや、そうだな・・・・・・　現十刃と、十刃が指名した1体のみを再破面化の対象としようか。皆、異存は無いね？」

藍染ははじめから、全ての破面を崩玉によって再破面化する心算など無い。

そもそもこの崩玉と呼ばれる物質の本当の能力は、ただ虚と死神の境界を取り払うなどといった些細なものではないのだ。

藍染がこの崩玉に求めているのは、この物質の本当の力の方。

彼にとって破面化などは、崩玉が真に目覚めるまでの座興でしかない。

そしてその座興に崩玉を使うのは、十刃クラスの強力な破面のみと決めていた。

故に彼は全ての破面に崩玉は休眠状態であり、過度の使用は衰弱とそれによる再破面化失敗を匂わせた。

失敗するとも、出来ないとも藍染はいっていない。

しかし、衰弱した崩玉を使用する事を藍染が懸念している、と言うだけで破面達は不安に陥る。

そして彼等は言葉により誘導される、君達も同じだろうと、言外に再破面化は失敗の可能性を孕んでおり、君達はそれを望まないだろうと。

そうして嵌められた枷、その後に十刃のみの再破面化の提案。

枷によって動かぬ思考、いや動けぬ思考への提案。

そもそも提案といっても、彼等にとって藍染が口にしたのならばそれは決定事項だ。

あくまで皆が納得した、という形をとっているだけで、全ては藍染の思うまま。

絶対王政による統治、それに逆らうものなどありはしないのだから。

その後粛々と事は進んだ。
今この場にいた十刃達は、藍染が言ったとおり一人一名、破面の名を指定していく。

「そうさのぅ・・・・・・　なら儂は従属官(フラシオン)から・・・・・・ジオ！　貴様を選んでやろう。　儂からの褒美じゃ、儂の為により一層励めぃ。」

そう言って自分の従属官から一人を選んだのはバラガン。
選ばれた従属官は、堪えきれぬのかその顔に笑みを浮かべてバラガンへと傅くと、より一層の忠誠を叫んだ。
再破面化をするのはあくまで藍染なのだが、まるで自分がそうさせているかのような態度のバラガン。
王者の風格、というよりもある種の隠れた意思表示なのかもしれなかった。

「・・・・・申し訳ありません、藍染様。　私は誰も指名する心算はありません。この娘達(こ)から一人だけを遇することなど出来ませんので。」

次に答えたのはハリベルだった。
当然のように第2十刃たるネロがこの場に来ている筈もなく、バラ

ガンに続く形で答えたハリベル。
しかしハリベルは誰も指名することは無かった。
彼女の従属官は三人、大虚時代から従える彼女等の誰か一人を優遇し、再破面化するなど彼女には考えられなかった。

そしてもう一人、彼女の思考をよぎった破面、フェルナンド・アルディエンデ。
だが彼女は彼の名を指名することはしなかった。
彼が自分から求めたのならばいざ知らず、勝手に自分の思いだけを押し付けたところで彼が首を縦に振るとも、ましてやそれに応えるとも思えなかったからだ。

（アレが私の言った通りに動くなどありえん。・・・・・・まぁ、そうであればこそアレらしい、とも言えるが・・・な。）

そんなどこか満足そうなハリベルの答えに藍染はほんの一瞬間を置くと、それを承知した。

「指名しません。」

「同じく。　誰を指そうと無意味です。」

続いて答えたのは第４十刃（クアトロ・エスパーダ）ウルキオラ・シファー、そして第５十刃（クイント・エスパーダ）アベル・ライネスだった。
互いに言葉は簡潔であり、それ以上語る事などないといった雰囲気を纏った二人。
互いに従属官を持たず、誰とも関りを持とうとしない二人にとって

は、そもそも指名する対象自体がいない様子だ。

「それでは吾輩は、破面（アランカル・ドセ）Ｎｏ．１２の青年（ホーベン）を指名させて頂きますぞ！」

その言葉に広間がどよめく。

第６十刃（セスタ・エスパーダ）ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ、彼が指名したのは最も十刃に近いとされる数字持（ヌメロス）ち、破面Ｎｏ．１２グリムジョー・ジャガージャックだった。

そして広間がどよめいた最たる理由は、グリムジョーは次の強奪決闘で第６十刃に対し『十刃超え』を挑む、という噂のためであった。

数字持ちが十刃へと挑戦し、その座を奪う事を指す十刃超え。

第６十刃が自らに挑んでくるであろう者に対し、力を得る機会を与える。

そのある種奇行に広間はどよめいていた。

そして、そのどよめきは次の第７十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルーによって更に大きくなる。

「では私は、破面（アランカル・ナーダ）Ｎｏ．ｎａｄａフェルナンド・アルディエンデを指名します。」

どよめきは大きさを増し広間を満たす。
ゾマリが指名したのは、ある意味この虚夜宮で一時期語り草となった破面の名、フェルナンド・アルディエンデだった。
そして此方も強奪決闘による『十刃超え』が行われるとされた二人だった。
もっとも、此方は事情が違い、ゾマリの方が戦う事を望んでいるということだったが、それを知る者は少ない。

「私だけが藍染様より更なる”力”を賜り、無力な彼の者を処断するのは容易い事です。しかし、彼の者には私と同じ”力”を得るための機会を与え、同じ地平へと立たせた後、絶望と、そして懺悔の言葉を叫ばせねばなりません。」

ゾマリの思考は、フェルナンドをどれだけ完全に罰するかに傾注していた。
同じ地平、同じ機会を得ても自分の方が上であるのは当然であり、どれだけ足掻こうとも超えられぬ存在と、それを生み出した”神”に対する不敬を嘆かせ、懺悔させた後首を刎ねる事。
ゾマリがフェルナンドを指名したのはその為、その為だけに指名したのだ。
彼にとっての大罪人を。

だが、問題なのは指名したゾマリではなく、指名された方のフェルナンドである。
元来彼はこうして誰かに指図されることを嫌う。
そしてなによりだれかに”与えられる”ことを嫌う。
”力”とは己で磨き、高め、身に付けるものであり、誰かに与えられるべきものではないのだ。

フェルナンドは己の名を指名したゾマリには一瞥もくれず、高みにいる男、藍染へと視線を向けるとこう問いかけた。

「藍染・・・・・・　再破面化、ってぇのは誰も皆、同じだけ強くなるのかよ。」

「・・・・・いいや、そんなことはないよ、フェルナンド。あくまで境界を取り払うのが崩玉の力、その先にある個々の”力”がどれ程かまでは判らない。微々たるものか、強大かはね・・・・・・・だが”力”が増すことに変りはないよ。・・・・・・もっとも、君にそれだけの”力”があり、そしてそれを扱えるかもまた、判らないがね。」

フェルナンドの問に一拍置き、そしてどこか挑発的な答えを藍染は返した。
浮かんだ笑みとその言葉は、フェルナンドにこう言っていたのだ。

お前に崩玉によって引き出された力が扱えるのか、そもそもそれだけの力があるのかと。

そんな藍染の言葉をフェルナンドは鼻で小さく笑うと、「上等。」とだけ答え、それ以上何も語らなかった。
その沈黙は即ち了承、ゾマリの指名というよりは藍染の挑発に対し、眼にもの見せてやるといったその態度は、藍染にとっては誤算の上に産まれた嬉しい誤算であり、ゾマリにとってはより怒りを燃え上がらせる起爆剤となった。

「ボクハ・・・・・・　どうでもいい。」

第９十刃（ヌベーノ・エスパーダ）アーロニーロ・アルルエリは、何の興味もなさそうにそれだけ答えると沈黙し、何も語らなくなる。

これでこの場にいる十刃全てが藍染に答えを告げ終えた。

第１０十刃（ディエス・エスパーダ）　ヤミー・リヤルゴは現在虚夜宮に居らず、そして第８十刃（オクターバ・エスパーダ）ノイトラ・ジルガもまた、この虚夜宮にいなかった。

ヤミーの方は単純に外に出ているだけ、しかしノイトラの方は違う。

彼は藍染が長きに渡り虚夜宮を空ける少し前から、虚圏の砂漠へとその姿を消していた。

その理由は誰にも判らない、ただ彼が前回の強奪決闘の後消えたことだけは事実であり、しかし藍染はそれを追求せず十刃のまま在位とし、虚夜宮を離れていた。

彼が何故消えたのか、何時戻るのかは誰にも判らず、しかし藍染は笑みを崩さず言い放つ。

「心配は無いよ。　全ては私の下に集まる様に出来ているからね。」

と。

こうして王の帰還は終了した。

そして最後に王の口から放たれたのは、破面達が待ち望んだ言葉だった。

「皆、長きに渡り内に留めていたであろうその殺戮の衝動を、私が

解放しよう。一週間後、強奪決闘を開催する。　存分に殺しあってくれ。」

その言葉と共に広間は轟音の歓喜に満たされた。
歓喜、歓喜以外の何者でもないその叫び、欲した殺戮の許可が今下りたのだ。
その轟音の歓喜は、暫くの間鳴り止む事はなかった・・・・・・

―――――――――

王たる者、藍染惣右介の帰還より数日。
フェルナンドは虚夜宮の天蓋の上、まるで見果てぬ白い大地のようなその場所で一人夜空と、三日月を眺めていた。

此処もまた、フェルナンドのお気に入りの場所だった。
天蓋に映る青空ではなく、全てを飲み込み、星すらない闇色の空を彼は眺める。
本来ならばこの天蓋の上よりも更に上、天蓋から突き出した五本の塔、通称『第５の塔』と呼ばれる場所の上の方がより空に近い場所ではある。
しかし、その場所には常に先約、というよりも先客がおり、その先客はフェルナンドの存在を疎む者であったため、フェルナンドも態々自分からそれに近付くのも馬鹿らしいと、広い天蓋の上に両手を頭の後ろで組み、横になって空を眺めていた。

あれから再破面化は滞りなく終了した。
一人ずつ別々に、藍染によって再破面化された十刃とその他の破面達。
再破面化後、己の霊圧を確かめるようにそれを解放する者、再破面化後何事も無かったかのように去る者、なにやら考え込んだ風でその場を去って行く者など、その反応は様々であった。
フェルナンドはといえば、再破面化の術式が行われた部屋から出ると、掌を見つめ、握ってはひらいてを数度繰り返すと、一度その掌を強く握って拳をつくり、そしてポケットへと両手を突っ込むと、何事も無い様子でその場を後にした。

「隣、あいてるかい？」

寝転ぶフェルナンド、そんな彼に唐突に言葉がかけられる。
フェルナンドの瞳が一瞬大きく開かれる。
それもそうだろう、その言葉が自分に掛けられるまで、フェルナンドはその人物の存在をまったく感知していなかったのだから。

横を見やるフェルナンド、其処には長身で濡れたような黒髪に顎の先に鬚を生やした男が立っていた。
男は声をかけた相手であるフェルナンドの答えを待たずに、「よっこらしょ」などと大仰に声を出しながら彼の隣に座る。

「・・・・・　あいてる、と言った覚えは無ぇんだが・・・な。」

そうして隣に腰掛けた黒髪の男に、フェルナンドは上体を起して座りなおすとそう言った。
フェルナンドが今まで見かけたことがないその男、フェルナンド自身破面全てを知っているかと言われれば否と答えるが、彼にとってその男は確実にはじめてみる男だった。

気が付いてしまえば、その男の存在は異様だった。
フェルナンドとて自分を過大評価しているわけではない。
ないのだがこれほどの距離に、それこそ自分の隣にまで他者が接近し、それに気がつかないという事はありえない、と。
そしてそれほどの事ができる存在に、今の今まで気がつかない筈がない、と。

隣に座る、というたったそれだけの事、それだけの事で隣にいる男

が尋常ならざる存在であると、フェルナンドは確信していた。

「まぁいいじゃねぇか、お互い暇そうだ・・・・・それにこの場所はお前さんの、って訳じゃないだろ?」

フェルナンドの隣に座った男は、フェルナンドの言葉にそう答えると後ろに倒れるように寝転がる。
その男は隣にいるフェルナンドをまったく警戒する事無く、無防備に仰向けになり、両手を頭の後へ、そして足を組むとなんともリラックスした姿勢で寝転がっていた。
隣で寝転がるあまりにも無防備なその男、フェルナンドは若干困惑気味であったが、皮肉気に口元を歪ませるとこう言い放った。

「なら此処が俺の場所だ、って言ったらアンタはどうするんだ?」

相手の言葉の虚を突く発言、所詮揚げ足取りではあるがフェルナンドは構わずそれを口にした。
此処が本当にフェルナンドの場所だ、という訳などなく、それでもおおよそ初対面であろう自分に此処まで無防備に対する男が、その問に一体なんと答えるのかとフェルナンドは考えていた。
強硬に居座るのか、悪かったとその場を去るのか、それとも自分の方を力づくでも退ける心算なのか、別段答えを期待しているわけでもないが何となく口にしたフェルナンドのその問い。
寝転がった男はそんなフェルナンドの問に、なんともアッサリと答える。

「だったらちょっと間借りさせてくれよ。これだけ広いんだ、男一人寝転がる場所くらい余ってるだろ？」

返された言葉にフェルナンドは一瞬、彼らしからぬ呆気にとられた表情を浮かべる。

今の彼の顔は、いつもならばハリベルや彼女の従属官である、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンがする顔であり、フェルナンドの唯我独尊な言動や、彼の戦い方を見た時の彼女等のと同じだった。

周りは見渡す限りの白い地平、これが屋根の上だという事を忘れさせるようなその場所にいる彼等二人。

そんな場所を自分の場所だ、と言い放ったフェルナンドに、寝転がった男はその広さの中で男が一人寝転がれる分だけを間借りさせてくれと言ったのだ。

この広さを前にたったそれだけで言いというその男、そしてなによりフェルナンドの皮肉に真正面から答えた言葉。

その男の態度はまるで柳のようだった、強い雨にも吹きすさぶ風にもそのしなやかさで全てを受け流してしまうような、そんな雰囲気をその男は持っていたのだ。

「ハッ！　そりゃそうだ、こんだけ広い場所で、男一人分貸せないようじゃぁ、”狭量”もいいとこだぜ。」

呆気にとられた表情だったフェルナンドが、途端に笑う。

この広い屋根の上と、その上でたった一人分の場所だけを求める男、そして嘘ではあるがその場所の持ち主である自分。

これだけの広さの中で一人分しかいらないという男の言葉に、それを拒否したのならば自分はどれほど”狭い”男か。

”狭い”場所だけで良いと言う男を拒否する”狭い”自分、その姿を想像したフェルナンドは、それが面白くて仕方がない様子だった。
それゆえに彼は笑ったのだ、なんとも他人とはズレた笑いのツボかもしれないが、彼もまた彼の気付かぬ所で第3宮（住処）の色に染まったということだろうか。

「お前さん・・・　変ってるな・・・・・・」

隣で笑っているフェルナンドに、寝転がった男は少し驚いたような表情を浮かべた。
彼がこの虚夜宮と呼ばれる場所に来たのはほんの数日前、だがそれでもこの場所がどういう場所かはわかっていた。
同じ種族、いわば同胞たちが集う場所、しかしその同胞たちはお互いにいがみ合い、”力”の優劣によって相手を支配し、また支配された者が転じて支配した者の命を奪う。

彼にとってそれはなんとも物悲しい事だった。
彼にとって、いや、彼と彼の連れにとって、自分以外の”他者”というものはそれだけで”特別”なのだ。
その”特別”をいとも簡単に自分で壊してしまうこの虚夜宮の住人達、”唯、傍にいる”というそのなにものにも変えがたい”特別”を自ら手放していく同胞たちの姿は彼にとっては悲しいものでしかなかった。

それでも彼にとって此処にいる者達は同胞であり、そして”特別”なのだ。

だが、今彼の隣で笑っている背年はどこか違っていた。

この数日で彼が見てきた同胞達、彼等ならばこんな自分の態度を見れば怒りはすれどこんな風に笑いはしないだろうと。
何かが違う、思えばこうして声を掛けたのもこの場所で一人寝転がっていた彼の姿に、どこか近しいものを感じた自分がいたような気がすると、その男は思っていた。

「変ってる・・・かよ。　アンタには言われたかねぇな。それだけ強いのに、それを欠片も見せようとしやがらねぇアンタには・・・よぉ。」

一頻り笑い終えたフェルナンドは、男の呟きにそう答えた。
口元に浮かんだ笑みは皮肉なそれではなく、もっと純粋な感情を見せるものに変わり、紅い瞳には彼らしい強烈な意思が浮かぶ。
それを見た男は一つ溜息をつくと、二、三度頭を掻く。

「別に見せびらかす為に強くなっちまった訳じゃねぇよ。・・・・・・言っとくが、お前さんとは戦らねぇぞ。」

「言ってくれるねぇ。　俺とじゃ戦っても意味がない・・・てか。」

どこかはき捨てるように紡がれた男の言葉。
それは自らの力がどこか疎ましい、とすら思っているような印象を与える言葉だった。
そしてフェルナンドを制する様な言葉を続けた男に、フェルナンドは強い意志を残したままの瞳で言葉を続ける。
そう言いながらフェルナンドは座ったまま腰をほんの少し浮かす。
男の言葉がフェルナンドには、お前では相手にならないと言っているように聞こえたのだ。

しかし、男はそれを知ってか知らずか話を続けた。

「違う。意味がないんじゃなくて、やる心算がないって言ってんだよ。俺とお前さんは言うなれば”仲間”だ。俺の強さは”仲間”同士で殺しあう為のもんじゃねぇんだよ。」

答えた男の声には先程までにはなかった、明確な意思が篭っていた。その意思はフェルナンドの瞳に篭ったそれと同じ、決して譲る心算のないその男の”生き方”そのものだった。
それを見たフェルナンドは一つ息を吐くと、浮かしていた腰を落し座りなおす。
別にフェルナンドにこの男へ襲いかかろうという意思はなかった、だがこれほどの強者がこの些細な動作を見逃すとも思えず、故にその反応によって見定めようとしたのだ、この男の芯なる部分を。

結果それは予想以上のモノをフェルナンドに見せる。
戦いに移行するかもしれない場面、相手が体勢を整えようとするその瞬間にも男は一切動こうとはしなかった。
そして語られた言葉はその男の行動によって裏打ちされた、真実の言葉としてフェルナンドへと届く。

この男の”曲げられない生き方”として。

「”仲間”ねぇ・・・・・・　アイツ等といいアンタといい。まったく、皆揃ってお優しいことだ・・・・・・」

「殺伐としたのよりよっぽどイイだろが。　俺は、静かにダラダラ生きられたらそれで良いんだよ。」

ほんの一瞬訪れそうだった戦いの気配は最早霧散し、静かな夜空の下で二人はその後もまったく身の無い会話を続けた。
二人の会話は弾んでいるとは到底言えないものだったが、それも彼等には丁度良いものだったようだ。
この広い虚夜宮の中でこの日、この場所を選んだ彼等二人、どこか気の合う部分もあったのだろうか、互いに月しかない夜空を眺め語り合う。
そうして暫く語り合ったのち、男の方が何かに気が付いたように身体を起し、立ち上がる。

「っと、どうにも”連れ”が俺を探してるみたいだ、いい暇潰しになった・・・・・・」

男はそれだけ言い残すとそのまま歩き去ろうとする。
だが、数歩進むと「あぁ・・・」と何かを思い出したようにフェルナンドの方へと振り向いた。

「そういえば、まだ聞いてなかったな。　お前さんの名前・・・・・・」

振り返った男は至極当たり前のようにそれを口にした。
初対面の相手、そしてその初対面の相手と何故か長い間語り合っていたにも拘らず、男も、そしてフェルナンドも互いの名前を教えていなかったのだ。
名前とはその人物を表す記号、別段それを知っているからといってその人物を深く知っているか、ということはイコールではない。

だがそれは通過儀礼、他者と他者のかかわりの最初の一歩、それを飛ばして語り合いそれを気にもしていなかった二人、やはりどこか似ている部分がある様子だった。

「・・・・・フェルナンド、フェルナンド・アルディエンデだ。そういうアンタはなんて名だ？」

名を答えたフェルナンド、そして男の方は小さく「フェルナンド・・・ね。」と呟き、踵を返す。
そして二、三歩進んだ後に片手を上げて後ろ手に振りながら、自分の名を口にした。

「スターク・・・・・・　コヨーテ・スターク、だ。」

越えた先に見えるのは
”王”たる己に続く道

今この場で見(まみ)えるのは

手塩にかけた”待望”の士

さぁ

殺し合いをはじめようか・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 38（後書き）

原作に近くなり、漸く”孤独な二人”の片割れが登場。
番外登場からだいぶたったなぁ、長かった・・・・・・
ある意味この二人を出したくて、スタンドを使ったといっても過言・・・・・・ではあるかw

前半部分は大分無理矢理間があるね、自分で読んでも。
独自設定とご都合主義の固まりw
フェルナンドを再破面化するにはこれしか思いつかなかったんだ・・・・
まぁ前半はほっといて、今回のメインは後半なんでw

そしてゾマリは空気がデフォw

活動報告にて「明星」と同時更新を目指すと言いながら
土日の仕事量から無理と判断し、とりあえずコチラだけ更新です。
申し訳ない。

BLEACH El fuego no se apaga. extra5

番外5です。
捏造率高し。

「じゃぁ、今日から私達は〝家族〟ね。」

貴方がくれたその言葉

たったその一言が

私の胸に

響いて消えぬ

「あんたたつは・・・誰っスか・・・・・・？」

私達の前で力なく起き上がったのは、他の誰でもない、変わり果てた貴女だった。
何もかもが小さく縮み、脆く、そして幼い姿へと変ってしまった貴女。
誰よりも優しく、そして凛々しかった貴女の瞳は、今は朦朧として私達を見上げる。
その額から痛々しくも血を流しながら、貴女が口にしたその言葉は。

この世の何より、絶望に近いものだった。

私がはじめて貴女とであったのは、私がまだ唯の数字持ちだった頃。

私と我が終生の友、ドンドチャッカにとって貴女は雲の上どころか、この生涯を費やしたとて届かぬ高みにいる存在だった。
同じ虚夜宮にいながら、言葉など交わせるはずもない貴女と我等。

だがそれは当然の事。
数字持ちの中で中の下である我等と、破面の頂点たる十刃、それも上位十刃である貴女。
交わらない、交わるべきではなく、それを夢見る事さえ無意味に感じる関係。
そんなあまりにも気迫で、いっそ関わる事などあり得ないといってしまった方が正しいような、そんな貴女と私達は、何故かあの日出会ってしまった。

「ゆくぞ！　ドンドチャッカ！」

「おうでヤンス！　ペッシェ！」

掛け声と共に互いの斬魄刀がぶつかり合う。
正確には私の斬魄刀と、ドンドチャッカの金棒のような斬魄刀がだが、それは今どうでもいいことだ。
互いにしっかりと大地を踏みしめ、一心不乱に斬魄刀を振るう。
だがその互いの刀が私とドンドチャッカの体に傷を付けることはなかった、互いの刃は全て相手によって防がれてしまうからだ。
それだけ私とドンドチャッカの間に力の差はなかった。
故にどちらかに形勢が傾くことなどなく、常からこの千日手のような状況は良くある光景ですらあった。

「ヌゥオリャリャリャリャリャリャリャ！！！」

「オラオラオラオラオラオラでヤンス～！！」

傍から聞けばなんと気の抜けた叫びか、しかし私達は何時だって本気で大真面目だった。

別に強くなんて十刃になりたいだとか、そういった考えは私にはなかった。

おそらくはドンドチャッカの方もそうは思っていなかったと思う。

唯私が求めたのは、この終生の友の危機を救えるだけのささやかな強さだけだったのだから。

「ペ、ペッシェ～。　オイラ疲れたでヤンス～～。」

数分打ち合った後、互いに距離をとるとドンドチャッカはなんとも気の抜けた声を上げ、そのまま尻餅をつくようにその場に座り込み、そのまま後ろへと倒れてしまう。

私と違いドンドチャッカは、人間よりも虚に近い形をした破面だった。

簡単に言ってしまえば外見は二頭身、よくて三頭身といったところであり、手や足は大きいにも拘らず其処から胴体へと繋がる腕や脚は極端に細いという、いってしまえば不均衡な身体つきをしていた。

特にその頭の大きさは眼を引き、頭が大きいのか身体が小さいのかがある意味些細な事に感じてしまうほど、初めて見るものには衝撃的であろう。

座り込んで後ろに倒れたのもその身体に対して大きい頭の重さに攣られた感が強い気もする。

そうして倒れこんだドンドチャッカだが、何故か手足をバタバタと動かすと止まり、そして先程よりも更に激しく手足をバタつかせるを繰り返し始める。
一体何をしているのかと流石の私も気になった頃、ドンドチャッカの口からその理由は叫ばれた。

「お・・・・・お、起きれないでヤンス～！ペペペペ・・・ペッシェ～助けて欲しいでヤンス～～！」

「何やっとるんじゃ！　お前は！！」

我が終生の友、ドンドチャッカの醜態に私の魂（ツッコミ）の叫びが木霊する。
急いで彼に駆け寄り、頭を抱えるようにして何とか起してやるとドンドチャッカは「ありがとうでヤンス～」と礼を言う。
その言葉に、別に礼を言われるような事などしていないと私は思った。
何故ならそれは当然の事、友を助けることに理由など要らず、またそれに礼など不要なのだから。
そしてこの光景は私の日常であり、私にとってその日常は居心地のいいものだった。
血の塗り込められたような破面の世界、破面の日常とは即ち戦いであり殺し合いだ。
だが私はそんな日常は好まない、こうしてドンドチャッカと二人で愉しく過ごす事の方が、私にはよっぽど貴重であり、日常だった。

「クス・・・・・・」

その時、小さな笑い声が私の耳に届いた。
自然とその声の方へと視線を向ける私。
そしてその視線の先に立っていたのは、美しい緑色の髪をした女性。

息が止まる。
そんな感覚だった、その方が目の前にいることに、私の息は止まってしまった。
遠巻きに、本当に遠巻きにしか見たことが無かった存在。
その方がその身に日の光を浴びているとするならば、所詮私達は日陰者もいいところだ。
そしてその方の名を、私は半ば呆然としながら呟いていた。

「第3十刃（トレス・エスパーダ）　ネリエル・トゥ・オーデルシュヴァンク・・・様・・・・」

それが私達と貴女の初めての出会い。

ふわりとした長く、美しい髪。
鼻筋から頬へと伸びた桃色の仮面紋（エスティグマ）、大きな瞳は遠巻きに見たときに感じた”強さ”よりも、どこか”優しさ”を感じさせる眼差しで私達を見つめていた。

それはあまりの出来事、本来まみえる事など無い存在が目の前にいるという異常。
ドンドチャッカも同様な様子で、あの時は「アワワワワ」と言葉にならない声を発していた。

呆然とする私は思わずドンドチャッカの頭を支える手を離してしまう。

重力とは偉大なもので、支えがなくなったドンドチャッカの頭は再び床に吸いつけられるように落ちる。

だが今回はその頭と床の間に、私の足があった。

当然頭は重力の力に逆らわずに、そして正確に私の足へと重量を伴って落下する。

「ウォォオオ！私の足がァァああ！　何をしているのだドンドチャッカ！早く起きるのだ！　私の、私の足が下敷きニィィィ！！」

「お、起きれないんでヤンス～！　ペッシェさっさと助けろでヤンス～！」

「ヌォ！？　何気に命令口調で責めて来よったな！？って、その為にまずはこの頭をどけるのだ！」

「だから起きれないんでヤンスよぉ～～」

「ノォォォウ！　これなんていう無限地獄！？」

・・・・・今思えばなんとも初対面で醜態を曝したものだと思う。

だがそれでも貴女はその姿を微笑ましい様子で見守っていた。

それが何故なのか私には判らなかったが、そんな貴女の様子に何故か私は嬉しさにも似た感情を抱いていた。

「貴方たち、何時もとても愉しそうね。」

何とかあの無限地獄から脱出した私達、そんな醜態を曝した私達に貴女は柔和な表情で話しかけてこられた。
そのとき私はその言葉に違和感を感じていた、”何時も”という一言、それは今日だけではなく日頃から私達を知っているということなのではないのか、と。
だがその考えは思い上がりも甚だしいもの。
上位十刃と数字持ち、見上げる者と見下ろす者、そして往々にして見下ろす者は”個”を捉えない。
下にいる者は全て一括り、その他であり、弱者であり、取るに足らぬ存在なのだ。
故にありえないのだと、この方が常から自分達を見ているなどということはありえないのだと、その時の私はその事実を否定した。

「そう、とても愉しそう。まるで兄弟みたいに・・・・・・ねぇ貴方たち？　よかったら私の従属官に・・・・・・いいえ、私の家族になってくれない？」

だから貴女が放ったその言葉に、私は暫し反応できなかった。
ドンドチャッカもまるで顎が外れたかのように、口を大きく開けたまま隣で固まっている。
当然の反応だろう、なにせ目の前にいるのは上位十刃である第３十刃、その第３十刃が私達をその従属官にしようと、いや、それよりも”家族”という言葉を使った意味が私たちには計りかねる事柄だった。

「い、一体何故・・・・・・　何故、私達を従属官などにされたがるのです・・・・・・私達より強い破面など、それこそゴロゴロしているでしょう・・・・・・・」

「従属官ではなくて家族よ。　従わせて隷属させるなんて私には出来ないもの。私はね・・・・・・・　戦う事が好きではないの・・・・・・」

「戦いを、好まれない・・・と？」

私が口にした疑問に、貴女は明確な意思で答えられた。
”従属官ではなく家族”、おそらく強さなど求めていないというその言葉、そして次いで語られた言葉は私達を支配する心算では無いという事を私に感じさせた。
そして最後の言葉、破面としてあるまじき発言であるそれ、しかしその言葉に私は共感を覚えていた。
戦ってなんになるのだ、相手を殺し、自分の優性を見せつけ、その先に一体何があるのかと。

「そう・・・・・・　私達は運よく進化し、理性を取り戻したわ。でも戦う事は”本能”の部類、そして理性を取り戻した私達は本来ならその理性で本能を御さなければいけないと思うの。必要以上の戦いを避けることが、理性を持った私達がするべき本当の姿・・・・・・」

優しく、柔和だったあなたの顔に、どこか影がさしたように私は感じていた。
僅か揺れる瞳は、悲しさを滲ませる。

その悲しみの感情が、私にあなたの言葉が嘘偽りない本心であることを確信させた。
あぁ、本当にこの方は戦いを好まれないのだ、と。

「でも私は十刃、そして十刃の使命は”戦い”・・・・・矛盾してるわね、戦いが好きではないと言ったのに、結局戦う事から逃れられないんだもの・・・・・でもね、そんな時貴方たちを見つけたの。貴方達は何時も愉しそう、この虚夜宮で貴方達の周りだけが、私にはまるで別の世界のようだったわ・・・・・だからね？　私も貴方達の世界に混ぜて欲しいの。」

戦いを好まぬ思いと、戦う事が使命である立場、二律背反の後に貴女は私達を見つけたと言う。
貴女の言葉は全てが私に共感を覚えさせた。

「それは・・・・・私達を従属官にしても、可能なのではないのですか？」

「いいえ、貴方達を押えつけ縛るのでは意味がないと思うの。貴方達はとても自由、それを奪ってしまうのはとても残酷なことだわ。私には出来ないし、する心算もないけれど・・・・・家族っていうのは従い、従わせる様な関係ではないわ。ただ共にいる、そしてそれになんら疑問を感じない、いることが当たり前の関係。そして、それだけで満たされるような関係、私は・・・・・貴方達とそんな風にいられたらいいと思うの。」

私の疑問、その疑問に貴女は笑顔でそう答えた。
私にはその笑顔が眩しかった、美しく、しかしどこか愛くるしいそ

の笑顔がとても、とても・・・・・・
隣にいるドンドチャッカの方を見る、するとドンドチャッカも私のほうを見ていた。
視線が合うと私達は小さく頷きあう。
言葉は要らない、終生の友たる私達の間に、そのとき言葉は必要なかった。
瞳に宿る意思から互いの思いは伝わったのだから。

「私などで宜しいのならば、私は貴女のお傍に・・・・・・・」

「お、オイラもがんばるでヤンス！」

互いに口にしたのは申し出を受けるという意思。
私にも、そしてドンドチャッカにも判ったのだ、この方は強く、しかしどこか儚いと。
故に、その強さに隠れた儚さを、ほんの少しでも支えようと。
そして、貴女はとても嬉しそうにその言葉を下さったのだ。
私に響いて、消えぬ言葉。

「じゃぁ、今日から私達は”家族”ね。」と。

幸福だった、貴女と・・・・・・　ネル様とドンドチャッカと三人で過ごす日々は、私にとってただ幸福だった。
共にいて判ったのは、ネル様はどうにもズレている、というか根は

なんとも言い表しきれない、ふわふわとした方だった。
私達が遠巻きから眺めていた時に感じた印象とは、明らかに違う雰囲気。
ほおっておけば何かしら壊す、叩けば直るといって叩いて壊す、掃除をすればする前より散らかる、模様替えをするといって結局壁をぶち抜く、花に水をやるといってそのまま部屋を水浸しにする等など。
上げれば切など無いほどにネル様は、戦う事意外は壊滅的だった・・・・・

だが、それでも私は、私達は幸福だったのだ。
そんなネル様といられることが、ネル様と共に過ごす日常、戦いのない平和で穏やかで、でも少しだけ騒がしい日常が私には幸福で、何よりも大切なものになっていた。

だが

かけがえの無い幸福な時は

凶月によって

奪われてしまった・・・・・・

凶月の一撃は、私達の目の前で、私達の何より大切な方を切裂いた。
頭から大量の血を流し膝から崩れ倒れるネル様。
それを唯見ていることしか出来なかったのだ。
なんという不義か、なんという無力さか、大切な・・・何より大切な家族を、私達に家族をくれた方を私は守ることすら出来なかったのだから。

そのままネル様と共に私達は虚圏の砂漠へと投げ捨てられる。
だがそれはまだ運が良かった、あのままあの場に残されれば、私達はともかくネル様は確実に奴に、ザエルアポロに捕らえられただろう。
あの狂った男に捕らえられればネル様に再起の道は無い。
故にこれは幸運だと、私は自分にそう言い聞かせるほかなかった。
そうでなければ目の前で横たわるネル様の姿に、私は壊れてしまっていただろうから。

しかし、事態はそれに留まらなかった。

ネル様の身体から霊圧が一気に流れ出す。
器の底が抜けたように、一息に抜け落ちていく寝る様の霊圧、そしてその後に残ったのは幼く変わり果てたネル様の姿だった。
そうして幼くなったネル様、だがその幼い姿で起き上がると私達の方を見上げる。
よかったと、正直私はそのときそう思っていた。
死んでしまった訳ではないと、姿は変られたが生きておられると、それだけでよかった。

だが、放たれた言葉は私を絶望に叩き落した。

「あんたたつは・・・　誰っスか・・・・・・・？」

そして事態は今に至る。
絶望、その思いが私を支配する。

「記憶を・・・なくしておられるのか・・・・・・・・！！」

口をついて出た言葉は、今の全てを物語っていた。
失われている・・・・・・・記憶を、自分が何者で、此処が何処で、そして・・・・・・私達が誰なのかを・・・・・・・
それはまさしく喪失感だった。
失われてしまった、私達という存在を、私達と共に過ごされた全てを。

私達という”家族”を・・・・・・

「ぺぺ・・・ぺッシェ・・・・・・・」

「騒ぐな！」

ネル様の様子に取り乱しそうになるドンドチャッカを諌める。
そしてそれは同時に自分に対しても言えることだった。
なにを・・・・・・なにを絶望しているのかと、事ここに至っては絶望するより先にやるべき事があるだろうと。
記憶を、思い出をなくされたからといってそれで終わりなのか。
それがないならもうお前達はこの方と、ネル様と共にいることはしないのかと自分に問いかける。

否！　断じて否！

記憶が何だというのだ、思い出をなくされたからなんだというのだ、私達がネル様といることに、いたいと思ったことにそれは関係のないことだ。
私は決して強くはない、しかし、だがしかし、大切な者を守れるだけの強さは持っている心算だ。
ならば、やる事など決まっているのだ。

「ネル様は死んだ、記憶を、力を奪われて・・・・・・最早此処に居られるのはネル様ではない。だから・・・・・・・」

決意だ、今必要なのは決意。
何があっても成し遂げるという決意、終わりなどなく、しかし成し遂げてみせるという確固たる決意が。

隣にいるドンドチャッカに、目の前に居られる幼い姿のネル様に、
そして自分自身に宣言するのだ、その決意を。

「お守りするのだ・・・・・・　ノイトラから、ザエルアポロから、
苦痛から、困難から、ありとあらゆる災厄から、このか弱くなられ
たネル様を、命をとしてお守りするのだ。それがネル様を主と定め
た我等の・・・・・・ネル様から”家族”を頂いた我等の、唯一残
された最後の使命だ。」

思えば私達は頂いてばかりだった。
私達はただネル様と共にいただけ、それだけ、私たちばかりが幸福
なときを頂き、ネル様になんら返すことなど出来なかった。
だから私達に残されたのは、この幼く、そしてか弱くなられたネル
様を、この身を賭してお守りすることのみ。
それが私達がネル様に返せる唯一のものなのだ。

「か・・・ぞく・・・・・・？」

不意にネル様がそう呟く、相変わらず額から血を流しながら朦朧と
して私達を見つめるネル様。
その口から放たれた言葉は、私には確かに聞こえた、”家族”とい
う一言が。
ドンドチャッカもその言葉に息を呑んでいるのが判る。
そして幼いネル様は、途切れ途切れに言葉を紡ごうとされる。

「ぺ、っしぇ・・・・・・　どん・・・どちゃ、か・・・・・・たい、せつ・・・・　かぞく・・・・・・・・・・うぅっ・・・・・・頭、痛いっス・・・・・・・」

あぁ、なんという事だろうか。
失われておられない、記憶の全てを、力の全てを失われたネル様。
しかし、失われておられなかった。
たとえこれが、ただ一時のものだろうと私には構わない。
ほんの欠片でも、本当に一欠けらでも残っておられたのならば構わないのだ。
私達という存在が、私達という”家族”という存在が、ネル様の内に残っていたのならば。

「う・・・うぅ・・・・・うをぉぉおおおん！ペッシェ！　ペッシェ～～～」

「あぁ・・・・・・あぁ」

滝のような涙を流すドンドチャッカは、涙を流しながら私の名を呼ぶ。
私もただそれに応えるだけで精一杯だ。
溢れるものを止める事が出来ない。
涙も、感情も、今は止めることなど出来ないのだ。

そっと目の前のネル様を抱き寄せる。
朦朧とされているネル様は、ただされるがまま私の腕の中に納まった。

小さく軽いネル様。抱き締めればそのまま壊れてしまいそうなネル様。
その儚さに私は決意を更に強固にする。
そして腕に収まったネル様に涙声で言うのだ。

「私はペッシェ、彼はドンドチャッカ、そしてお前はネル、ネル・トゥ・・・私の・・・私達の・・・・・・」

貴女がくれた大切な一言を。

「私達の・・・家族だ・・・・・・」

「じゃぁ、今日から私達は”家族”ね。」

貴方がくれたその言葉

たったその一言が
私の胸に
響いて消えぬ

「たい、せつ・・・・・・かぞく・・・・・・・」
貴女が再びくれた言葉
たったその一言に
涙が溢れ

私は誓う
必ず守ると
誓いを立てる

BLEACH El fuego no se apaga. extara5

番外5です。
リクエストしていただいたネリエルトリオがメインとなります。
前回からあんまり空いていませんが、タイミング的に此処しか入れるところがなかった。
この後だと概算で8～10話くらい後ろに行っちゃいそうだったのでw

捏造甚だしいですが・・・・・どうだったでしょうか?
少し無理やり感があるけど、一話に収めるのにはしょうがなく・・・・
難しいですな。

番外なのに本編1話分位あるという不思議・・・・・・

感想など待ってます。

闘技場、それは何よりも純粋な闘争の場。
その場に立てば何よりも意味があるのは、磨き上げた己の”力”のみ。
他が介する余地の無い、純粋な”力”と”力”のぶつかり合いだけが全ての優劣を決し、勝者と敗者の二極を生み出す。

そして今、その勝者と敗者は決していた。

静まり返る闘技場、本来ならば怒号と罵声と喧騒の坩堝たるその場所は今、水をうった様な静けさだけが支配していた。
その静けさの中、衆目の中心に立っているのは一人、片方は地に伏し、流れる血は白い砂を赤に染め上げる。
見下ろす者と見下ろされる者、砂を踏みしめる者と砂を食む者、明瞭なる結末、それは明らかな勝者と敗者の図式であり決着の光景。
誰がどう見たところでその図式に、その光景に、その結末に変化などありえない。

そう、決したのだ。

グリムジョー・ジャガージャックと、ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ。
両者の意地を賭けた戦いが・・・・・・

―――――――――

腕が宙を飛ぶ。

直後闘技場の中に響く悲鳴、しかしその悲鳴はそれを見た者達から発せられる大音量の声によって掻き消された。
胴から離れ宙を舞った腕は回転しながら砂漠へと落ち血を滴らせる。
その悲惨ともいえる光景に闘技場の熱は増し、戦う者もその熱に浮かされるように更なる惨劇を繰り広げる。

『強奪決闘（デュエロ・デスポハール）』、前回よりに2年の時を置いて再び開かれた血塗られた殺戮舞台は、熟成期間を、いや、押さえ込まれ続けた衝動を一杯に湛え、湛えきれずにそれを溢れさせながら狂乱の詩を奏でていた。

「勝負あり。　勝者Ｎｏ．７１（セテンタ・イ・ウーノ）マーズ・マーズ。　これによりＮｏ．（セテ）ンタ

７０セガール・ヴェガリーの号をＮｏ．７１が強奪。　以降、彼の者をＮｏ．７０とする。」

勝ち名乗りが響くと歓声は更に大きいものとなった。
立会人『東仙（とうせん）　要（かなめ）』によってなされたそれ、黒い着物ではなく破面が纏う白い死覇装に身を包み、編み上げて一つにまとめていた髪を下ろした彼は、しかし外見は変ろうとも前回となんら変る様子もなく、淡々と破面同士の殺し合いに立ち会い続けていた。
東仙の言葉にまた一つ温度を上げたような闘技場、しかしその熱は今だ最高潮には程遠い。
いや、おそらく彼等の熱はそのときまで最高潮になることはないだろう。
彼等とて皆知っているのだ、今目の前で行われている下位数字持ち同士の戦い、そんなものが霞んで見えるほどの戦いがこの後待っているということを。

『十刃越え』という最高の殺し合いが待っているという事を。

「フッ！　ハッ！　フッ！　シッ！　セイ！！」

部屋に響くのは息遣いと空気を裂く音だけだった。
その部屋は強奪決闘に出場する者の控え室のような場所、事前に出

場が決まっている者にはこうして部屋が割り当てられ、いざその時までを自由に過ごす事ができる。
決して大きくはないその部屋、その中心で男が一人裂帛の気合と共にその脚を振りぬき空気を裂いていた。
額には薄っすらとだが汗を滲ませ、その瞳は苛烈、ただ一心不乱に空を蹴る様はどこか鬼気迫るものすら感じさせた。

「セリャ！！　ハァ、ハァ、ハァ・・・・・・フゥーッ。　・・・・・・そろそろ時間・・・かね。」

息を切らすほどの動き、一頻りそれを続けると男は止まり、切れた息を整える。
入念な準備運動、身体はおそらくこれ以上ない最高の状態を保っていると、そしてその時に最高の状態で戦闘ができるようにと男は入念に準備をしていた。
それも全てはこれから始まるであろうたった一度の戦いのため、そう、この男にとってその戦いはそれ程の準備をさせるほど重要なものだった。
相対するのは自らが育てたようなものである一人の若者、その若者と最高の戦いをするためだけに、男は今日、この日、この時に自らを最高の状態に仕上げてきたのだ。

「さて・・・・・・　それでは、行くとしようか・・・・・・」

姿見の前に立ち、そこに映る自分の姿を確認して男はそう呟く。
鏡に映る男の姿はいつもと変らない、しかしその内側はいつもより若干の緊張を抱えていた。
そんな若干の緊張の中でも身嗜みを整える事を忘れない男は、姿見

からの離れ際に一度軽く髭を整える。
そして第６十刃（セスタ・エスパーダ）ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオは、約束の場所へ向かうため、その部屋から出て行った。

――――――――――

ドルドーニが控え室から出て行った頃と時を同じくし、闘技場の舞台を挟んだ反対側の控え室にまだその男は居た。
唯一人だけでいたドルドーニとは違い、その控え室にはその男意外にも数人の破面がいたが、その部屋もまた静まり返っていた。
重苦しい訳ではない、だがその部屋の空気は何故か言葉を発する事を躊躇わせるような雰囲気が漂う。
それはその部屋の一番奥で長椅子に前屈みで腰掛け、片手の拳をもう片方の手で包むようにしている男の纏う気によるものか。
眼を閉じ、ただ静かに座る男、何をするでもないその男の雰囲気に周りに控える者達は、知らず気圧されているようだった。

「グリムジョー、そろそろ時間だ・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・」

長椅子に座す男、グリムジョーにそう声をかけたのは彼に付き従う破面の中の一人、シャウロンだった。
シャウロンの言葉にグリムジョーは返事を返すでもなく、ゆっくりと眼を開くと立ち上がり、無言のまま控え室を出て行く。
残された者達にそれを追う者は居ない、それは追ったところで無意味だからだ。
闘技場、その舞台に上がることができるのは彼ひとり、付いて行ったとて彼等に何が出来るという訳でもなく、彼等に出来ることといえば他の破面同様、彼等の”王”が戦う様を眺める事だけだった。

「なぁ兄弟・・・・・・　グリムジョーのヤツは大丈夫なのか？」

グリムジョーの去った控え室に残った破面のうちの一人、金髪の優男風の破面、イールフォルトがシャウロンに話しかける。
その問はひどく抽象的で、しかしそれでもシャウロンには彼の言いたい事が、いや、彼が代表して言ったシャウロン以外の破面の共通の疑問に対する問いとしては充分だった。

「問題はないだろう・・・・・・・　恐らくは・・・だがな・・・・・・」

だがしかし、シャウロンの答えもまた確信に欠けるものだった。
それは問が抽象的だから、というわけではなく問に込められた疑問の全てに彼は明確な答えを持ち合わせていない、ということなのだろう。
彼とて、彼等とて自らの”王”を疑いたくはない、しかしそう思わせるほど彼等の知る”王”と今の”王”の姿は懸離れているのだ。

「シャウロン・・・・・・　俺とてグリムジョーの力を疑うわけじゃねェ・・・・・しかし今のアイツからは昔の気配が感じられん。血を求めるような餓えた野獣の気配が・・・・・・。」

シャウロンの言葉に異を唱えたのは、筋肉質の巨体、鼻の頭に仮面の名残を残した一体の破面、破面（アランカル・トレッセ）Ｎｏ．１３エドラド・リオネスだった。

エドラドの言葉、それが何よりこの場に居る全員の感じる疑問であり、違和感の核心。

グリムジョーはつよくなっている、それはこの場に居る全員が間違いなく感じている事実であり、疑う余地はない。

しかし、そうなっていくにつれグリムジョーから消えていったモノがあると彼等は感じていた。

エドラド曰く”野獣の気配”。

彼等が知るグリムジョーという男は近付く者全てに牙を突き立てるような、その爪も牙も常に血に濡れている様なそんな男だった。

それは狂気であり、しかしその狂気が、全てを殺しつくし己の強さを証明しようとする一種のカリスマが、彼等を惹きつけていた。

しかし、今のグリムジョーに彼等はその狂気を感じられないのだ。

確かに身体から発する気配、一種の凄味という点では昔と今では比べようもない。

しかし表に見えぬ狂気、姿を見せぬ野生、それは等しく彼等にとっての不安であり、彼等はグリムジョーが強さと引き換えに”牙”を折られてしまったのではないかと感じていた。

「・・・・・案ずるな・・・　我等はグリムジョーに従うと決め

たのだ、ならば案ずるな・・・・・・我等の”王”を・・・・・・」

控え室の沸きあがった脚を絡めとるような不安感、シャウロンはその不安を自身の足元にも感じながらあえて言う。

案ずるなと、それは他の仲間にも、そして何より自分自身に言い聞かせるための言葉。

そう、彼等には結局何もすることが出来ない、その不安を内に抱えながらもただ見ている事しか出来はしないのだ、その戦いの行く末を・・・・・・

「続いて挑戦者。破面（アランカル・ドセ）Ｎｏ．１２グリムジョー・ジャガージャック。
強奪に指名したのは・・・・・・第６十刃（セスタ・エスパーダ）ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ。」

東仙の淡々とした言葉に続いたそれは正しく轟音、この日一番の歓声が闘技場を取り巻き、支配する。

２年という時間、その間押し込められていた殺戮衝動は徐々に加速し、今この時をもって最高潮に達しようとしていた。

円形の闘技場、その両端に聳える縦長の巨大な門が同時に開き始める。

そして現れる二人の男、片方は自分に浴びせられる歓声、罵声、謗り、罵りをその身に受けながらもそれら全てを飲み込み、両手を広げ余裕の態度で歩き、もう片方は同じように浴びせられる言葉の波

濤を悉く無視し、ただ前だけを睨み付ける様にして歩く。

一見正反対に見える二人の男、しかしこの場に立っている彼等は同じなのだ。

首に鋼鉄の環をかけられ、それに繋がる鎖を引き千切らんばかりにあらぶる獣、それは獅子であり虎であり、しかしそれ以上の獣に他ならず。

ただその鎖が解かれるのを、首の輪が外されるのを今か今かと待ち侘びる魔獣なのだ。

闘技場の中央まで歩み、距離を保ったまま互いに睨みあう両者。

ポケットに両手を突っ込んだまま、やや猫背で下から睨み上げるようにして相手を見るのは、水浅葱色の髪の男グリムジョー。

対して腰に手をあて、胸を反らせ顎を上げ、見下ろすようにしているのは壮年の男ドルドーニ。

空気は二人を中心にして渦巻くように、その場の全てを惹きつけるようにして旋回する。

「これは『十刃越え』である。　よってこの場に居る者、この場でこれから始まる戦いを見ている全ての者の安全は保障されない。それでもいい者のみこの場に残れ。」

東仙が放った言葉は最終勧告だった。

それはこの場に居る全ての者に放たれた言葉、破面の頂点たる十刃とそれに順ずる者の戦い。

闘技場には結界が施され、内部の戦闘による余波などは観覧席まで届かぬ造りとなっている、しかし、それはあくまで十刃以下の戦闘での話であり、この結界は十刃クラスの戦闘を考慮されていない。

故の最後勧告、これから先は彼等を守る結界は存在しないと考えた

ほうが妥当であり、その十刃クラスの戦闘にその身を曝す覚悟のある者だけがこの場に残れ、という勧告なのだ。

しかしその勧告は、この熱気と狂気に浮かされた闘技場では些か温かった。

だれもその場を去る者など居ない、むしろその言葉に、これから始まる戦闘の凄まじさを予見させるその言葉に闘技場の温度は増すばかりだ。

東仙は一応その様子を確認すると、片手を挙げる。

それだけの所作が全てを物語っていた、切って落とされるという事実を、戦いの火蓋が切って落とされるという事実を。

「それでは・・・・・・」

東仙がその腕を振り下ろす。

その先にあるのは両者の間に張り詰めた緊張の糸、それを東仙はその手刀をもって斬りおとした。

プツン、という音が聞こえたかのような一振り、そして放たれる言葉が後戻りのない開幕を告げる。

「始め！」

瞬間空気は爆ぜた。

東仙の言葉より一瞬のまもなく爆ぜる空気、そして闘技場の中央で

は先程まで距離をもって睨み合っていたグリムジョーとドルドーニが鍔迫り合いの状態となっていた。
見ている者の大半がそれだけで置いていかれた展開、そもそもただ熱に浮かされてこの場に残った者達にこの戦いを見る資格などありはしなかった。
現にそういった者がこうして置いていかれている現実、あまりに実力が違いすぎるのだ、所詮物見遊山気分で残った者と闘技場でぶつかり合う彼等では。

闘技場の中央で拮抗するグリムジョーとドルドーニ。
ドルドーニの方は余裕からなのかそれとも愉悦なのかその顔に笑みを浮かべながら、グリムジョーの方はただ静かに相手を睨みつけながら鍔迫り合う。
だが地力、というよりも膂力で勝るのは明らかに身体の大きいドルドーニ。
鍔迫り合いはそのままドルドーニの方が有利となり、遂にグリムジョーは後方へと弾き飛ばされる。
だがグリムジョーとてただ弾き飛ばされるはずもなく、空中で体勢を整えるとそのまま霊子によって足場を作り再び、今度は上から打ち下ろすようにその刀を振るう。
片腕で力任せに、しかし煌きを帯びたその太刀筋をドルドーニはその刀と、刀の背に腕を押し当てて受け止める。

受け止めた瞬間轟音と共にドルドーニの両足が砂漠へと沈む。
グリムジョーの刀を受け止めた衝撃はドルドーニが踏みしめていた脚をそのまま砂漠へと埋没させるほどのものだった。
まるで大地を揺らすような衝撃、しかしドルドーニはそれを受け止めてもその笑みを崩さない。

そして砂漠は轟音と共に爆ぜる。

砂漠が爆ぜると同時に、今まで上からドルドーニを押し潰さんばかりの勢いで攻め立てていたグリムジョーの身体が真横へ弾き飛ばされ、そのまま砂漠に叩きつけられる。
満足な受身も取れず不規則に転がるグリムジョー、そして壁際まで吹き飛ばされた彼が目にしたのは、その片足を天高く掲げたようにしているドルドーニの姿だった。

（クソが・・・・・　蹴り・・・か？）

恐らくは蹴り、砂漠に埋まったなど何の障害にもならない強力な蹴りを真横から見舞われた、と直感するグリムジョー。
身体が勝手に動き紛い形にも防御は出来ていた、しかしあの状態から蹴りを受けるとは思っていなかった故に遅れた反応、内心それに舌打ちするグリムジョー、だがまだ始まったばかり、戦い始まったばかりなのだ、それにいちいち固執するほど彼は幼くない。
瞬時に頭を切り替えて立ち上がる。

すると視線の先に立つドルドーニは、巻き上げた砂と共に掲げた脚を戻しながら片足立ちになり、空いている手を前へ突き出し、刀を頭上に掲げるような独特の構えをする。
ドルドーニの顔から笑みが消えていた。
先程までの笑いは消え、引き締まった表情でグリムジョーを見据える彼。
その顔、そしてその構えは彼が良く知っているもの、こうして相対した数など数え切れず2年前のあの時よりも更に隙を感じさせないそれは、いっそ打ち崩すのが不可能なのではないかと錯覚するほどだった。

「・・・・・・・・・ハッ！」

だがそんな考えを、自らのそんな考えをグリムジョーは笑い飛ばす。
そんなものは戦る前から判っていたことだと、それを打ち崩し、あの顔に一撃を見舞う事がまず始まりだと。
そして乗り越え、座を奪う事が自分の”道”の始まりなのだと、その為に自分は強くなったのだと奮い立つ。

しかし、奮い立つグリムジョーよりもドルドーニの方が早かった。
壁際に立つグリムジョーに追撃とばかりに迫るドルドーニ。
一息に距離を潰し、再びグリムジョーにその刃を振り下ろす。
グリムジョーはその勢いに圧されるばかり。
尚も苛烈に攻め立てるドルドーニ、しかし攻め立てるのはその刃だけではない。

（チッ！　距離が詰められねぇ！）

刀の間合い、刃で相手を傷つけるのならば、相手を己の刀の間合いに納めなければならない。
如何に相手の間合いを外し己に優位な間合いで戦うか、刀を用いた戦いではこれは重要な因子である。
そして今、グリムジョーは己に優位な間合いを掴むことができず、結果攻め立てられ続けている。

その理由はたった一つ、ドルドーニには刀より間合いの長い”二振りの刃”があったからだ。

グリムジョーの臍の前辺りを空気が切裂く。

もう少し踏み込んでいれば、恐らく鋼皮（イエロ）があろうとも腹が斬られていただろうその一撃。
そしてその一撃により意識が下を向いたほんの一瞬、その一瞬を狙い澄ました鈍色の一撃がグリムジョーの頭部を襲う。
紙一重でそれを避わすも今度は切裂くのではなく、打ち抜くような一撃が彼の胸を直撃する。

「ウグッ・・・・・クッ！」

破面とて体の構造は人間と酷似している。
強烈な胸への一撃は一瞬呼吸を停止させ、受けた衝撃は逃げ場なく身体を駆け巡る。
またしても弾き飛ばされ、それでも視線だけは切らなかったグリムジョーの目に映ったのは、片足を前へ突き出したドルドーニの姿。

そう、ドルドーニが持つ”二振りの刃”とはその脚、その脚から生み出される蹴りであった。

破面というのはその個体ごとに何かしら突出した能力がある。
それは斬魄刀を解放した状態の特殊な能力であったり、解放せずとも使用出来る能力、それは誰よりも硬い鋼皮であったり、誰よりも鋭い探査回路であったり様々だ。
そういった際立って突出した能力を持つ者が、破面の上位を占めている。
そしてドルドーニもまた、その例に漏れない存在であった。

彼は鋼皮も探査回路も響転も、その全てが平均を大きく上回ってはいるが突出して高いという訳ではなかった。

解放状態の能力もシンプルなもので、際立って特殊という訳でもない。
本来ならばそんな彼が十刃の地位に着ける筈もない、しかし彼は第６の座におり、他の追随を許さない。

それは何故か、それは彼が肉体を、更に言えばその肉体を用いた”体術”を極めようとしたからだ。
通常、破面の戦闘というのはその肉体の強度に任せた力押し、または力の核たる斬魄刀を用いた剣技である。
だがドルドーニはそれを良しとしなかった、力押しは彼の美学に反し、剣技は一流ではあるが超一流には足らない。
ならばどうするか、考えた末ドルドーニの至った答えは”体術”それも”蹴技”に重きを置いたもの。
洗練された足運び、美しい軌道から生み出される圧倒的破壊力、優雅さに潜む殺意、彼が求めたのは正しくそういった”洗練された闘技”だったのだ。

他の破面が極めようとしなかったものを極める、それをするのは容易なことではない。
しかしドルドーニは諦める事を知らなかった。
それ故に極められたのだろう、破面という強力な肉体から繰り出される”体術”というものを。
刀でもなく、霊圧による技でもなく、戦闘において間合いというものを支配するにたるその”蹴技”というものを。

そして今、ドルドーニを十刃へと導いた彼の結晶たるその脚は、グリムジョーに向かってその牙を剥き出しにしているのだ。

蹴り飛ばされ間が開き、しかしそれは直に詰められ、そして詰めら

れた間合いはドルドーニが支配する。
それが闘技場の円の中で繰り返される。
十刃への道は易くはない、それをまざまざと見せ付けるかのような光景、その苛烈さ。
おそらくこれがドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオの戦士としての姿、苛烈に、そして激烈に、まさに阿修羅の如く攻め立てる。
その顔に普段のふざけた印象など欠片も浮かびはしなかった。
あるのは目の前の相手を打ち倒すことだけを考える戦士の顔のみ、その意思が、その気が、すべてを物語っている。

お前を倒す、という一念を。

攻め立てられるグリムジョー、間合いを開くことも出来ず、かといって自分の間合いを作ることもできず、ただ防戦を強いら続ける。
そんな如何ともしがたい状況を打破するために、グリムジョーが動いた。
ドルドーニの蹴りが奔る。
グリムジョーはなんとそれを、自身の胴にモロに喰らったのだ。
だがグリムジョーとてただその蹴りを喰らったわけではない、胴へと入ったドルドーニの蹴り脚に素早く腕を絡めて固定する。
そして刀を放り投げると、なんとその掌に蒼い砲弾が形成されていったのだ。
接近戦を仕掛けても駄目ならば退いて遠距離からの攻撃、ではなく更なる近距離、超接近戦を仕掛けようというのだ。
グリムジョーに退くという考えは無い。
退くぐらいならば死ぬ、それが彼なのだ。
故の選択、故の決断、そしてその決断と選択は実る・・・・・か

に見えた。

「やっと・・・かね。　随分と待たせるじゃないか青年（ホーベン）、だが・・・読んでいたよ・・・・・・」

そう、グリムジョーの選択は読まれていた。
年の功、いや、長年の経験の差なのか、それともこの状況を何度も何度も想定した結果なのか。
何にしてもドルドーニはグリムジョーの手を読んでいた。
グリムジョーが砲弾を形成する最中、器用に刀を持ったまま両手を握りその人差し指と小指を立て合わせると、そこに出来た四角形の中には瞬時に赤黒い砲弾が形成された。

「虚（セ）・閃（ロ）」

速い、グリムジョーがそう思った瞬間には既に、砲撃の言葉が放たれていた。
赤黒い霊圧に呑まれ吹き飛ばされるグリムジョー、対してドルドーニは平然とその光景を眺める。
その顔から、その表情から彼の感情を読むことは出来なかった。

砲撃は楽々グリムジョーを壁に、そして結界に叩きつける。
その虚閃の衝撃に揺れる闘技場、砂埃が辺りにたちこめるがドルドーニが視線を切ることはない。
そして砂埃が晴れたその場所には、無傷とは言えずとも今だ健在のグリムジョーが立っていた。

「咄嗟に自身も虚閃を放って、吾輩の虚閃の威力を弱めたのかい？

まぁまぁ、と言ったところかな・・・・・・だが・・・・・・」

冷静にグリムジョーの状況を分析するドルドーニ。
グリムジョーの方といえば咄嗟に威力は弱めたものの、虚閃をモロに喰らってしまったがために多少息が切れていた。
だがそれも一瞬の事、直に平静を取り戻すと近くに突き刺さっていた自分の斬魄刀を引き抜き、再び構える。
しかしドルドーニは、そんなグリムジョーなど意に介していないかのように話し続ける。

「一体何時までそうやって御行儀良くしている心算か知らないが、そんなものは見たくないのだよ。まぁ第1幕はこの程度・・・　それでは・・・・・・・・」

一端言葉を切ったドルドーニは片足立ちの構えを解き、両足で砂漠に立つと刀を天高く突き上げる。
高まる霊圧、空気は螺旋を描いてドルドーニを中心に収束していく。
そして呼び出されるのは、彼がその内に飼い慣らした暴威を振るう魔鳥だった。

「旋(まわ)れ、暴風男爵(ヒラルダ)。」

呼ばれたその名に応える様に、空気は甲高い金切り声を上げて響き渡る。
砂は巻き上げられ、円形の闘技場は暴れ狂う風に支配された。
のた打ち回り、時に壁を削り取らんばかりに暴れる暴風、そしてそ

の暴風の支配者の声が響く。

「さぁ・・・　第2幕の幕開けだ・・・・・・」

判っていた
この結末は
知っていた
この結末は

だが
男とは
それに抗う生き物なのだよ

BLEACH El fuego no se apaga. 39（後書き）

世の中は未曾有の大災害。
でも、書いた。
一人でもこれを待っていてくれる人がいると、自分が思う以上書きます。

災害で日常が様変わりしてしまって、でも思い上がりかもしれないけど
こうして何時も通りに更新して、日常を感じてもらえればいいかな。

まぁ書いてる内容は日常とはかけ離れてるけどね。

BLEACH El fuego no se apaga. 40（前書き）

2011.3.22超微修正。

「さぁ・・・　第2幕の幕開けだ・・・・・・」

砂を巻き上げる暴風の中から放たれた言葉は、どこか荘厳な雰囲気を纏っていた。
グリムジョーの視界を覆う砂嵐、その奥から発せられるその声は彼が嫌でも聞き間違えぬ声色。
だがその声に彼が良く知るふざけた印象は皆無、感じるのは硬く、情の無い冷徹さだけだった。
その懸離れた印象、しかしこれこそがあの男の本性なのだとグリムジョーは理解した、そしてそれを理解すると同時に彼の内でナニカがのそりと起き上がる。
だがそれは微々たる感触、嵐の奥から感じる霊圧を前にした彼はそれを掴む事無く立ち尽くすだけだった。

次第グリムジョーの視界を覆っていた砂嵐が晴れる。
そしてその奥から現れたのは、おそらく彼がこの虚圏で最も多く戦い、最も多く打ち倒され、そして最も多くのモノを魅せられた男。
第6十刃（セスタ・エスパーダ）　ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオという男の、本当の姿だった。

『帰刃（レスレクシオン）』と呼ばれる破面の刀剣解放。
刀の形に封じた己の力の”核”を解放し、自らの肉体に本来の虚としての能力を回帰させた姿。
その姿は正しく千差万別、破面化前の肉体の姿に限りなく回帰する者、人間の容に虚の身体が混ざる者、そして能力としての力を色濃く回帰させる者。
砂嵐の奥から姿を表したドルドーニの姿は、帰刃前の姿と然程違いはなかった。
額当ての様だった仮面はほんの少し大きくなり、両肩から山羊の様な角が生え、そして脚は足首から膝までを覆う鎧が、そして膝から太腿の付け根辺りまでを巻きつくように別の鎧が覆っていた。
外見的な変化から言えば他の破面に比べ、それほど大きな変化は見受けられない。
しかし、明らかな変化が彼の両脇に聳え立っていた。

脚を覆う鎧、その両足首の辺りには煙突状の突起があり、そしてそこから噴出し、噴き上げ、逆巻き聳えているのだ、二本の巨大な竜巻が。

砂が覆う大地から聳えた二本の竜巻、その竜巻に挟まれる様にして立つドルドーニ。
吹き出された風は彼の霊圧と混ざり合い、質量を持っているかのごとく濃密に見える
その竜巻は正しくその名に恥じぬ暴風、しかしそれは暴風でありながら一つの意思の下に統一され、その姿は見る者に恐れと、一方で優美さという相反した属性を備えているようだった。

グリムジョーは初めて見るドルドーニの帰刃に、知らず拳を握る。

その姿は、その霊圧は、今も昔も彼の前に立っていたドルドーニとは比べ物にならなかった。
彼の背に詰めたい汗が一筋落ちる。
いや、背中だけではない、背骨を丸ごと氷柱と入れ替えられたかのような錯覚。
それは恐怖、例えようもない恐怖、今までその男から感じた事のない恐怖を、グリムジョーは確かに感じていた。

だが彼はその拳を握る。
恐怖は感じる、だが退かない、退かないという覚悟が彼に拳を握らせる。
それは”強さ”だ。
恐ろしいものから逃げ出したいという本能を覆す強さ、その恐怖すら打ち倒そうとする強さに他ならないのだ。

そしてその恐怖を打ち砕いてこそ”王”なのだ、その証明なのだ。
これこそが彼の求めた戦いの姿、強大な敵が目の前に立ちそれに誰よりも先に挑みかかり打倒する、彼の目指す”王”の姿、王の戦場。
そう、彼が一心に求めた戦場が今目の前にあるのだ。
そしてこの戦場で勝利してこそ始まる彼の王道、強大な敵を打ち倒してこそ始まる王道が。

「ゆくぞ、青年（ホーベン）。・・・・・避わすなよ？」

ドルドーニの言葉と共に彼の竜巻に変化が起こる。
聳える竜巻、その根元から一つ分かれる様にして新たな竜巻が、い

や、竜巻というよりも風と霊圧の塊のようなものが現われる。
それはただ風の塊ではなく、明確に形を持った存在にも見えた。
蛇のようにしなやかな動き、鎌首を持ち上げたようなそれの先端には鳥の嘴を思わせる意匠が現われ、風塊であるにも関わらず生命を感じさせるようなその外見。
そしてその風塊の発生と同時に、ドルドーニはその場で片足を振りぬき蹴りを繰り出す。
何の変哲もない蹴り、先程グリムジョーが嫌というほど苦しめられた蹴り、それが繰り出されると同時にグリムジョーにそれは飛来した。

蹴りと同時に生まれた風塊、それがグリムジョー目掛けて猛然と襲い掛かったのだ。
ただの風の塊ではない、超高圧の空気の塊と十刃の霊圧が混ざり合ったそれは、本来触れる事の出来ないものに物質としての存在を与え、世界に、そして敵対者を圧殺するだけの質量を与えられていた。
グリムジョーは飛来する風塊に驚きながらもその手に持った刀を使い、それを正面から受け止めようと、いや、受け止めるに留まらず弾き返さんとして迎え撃つ。
両者の激突、それは即ち霊圧の衝突であり発生する衝撃は闘技場を覆う結界では受け止めきれず、余波が四方八方に飛散する。
風塊を受け止めたグリムジョー、しかし想像以上の圧力は彼の身体をその場に止まらせることを許さず、再び壁と結界に叩きつけた。
そんなグリムジョーの様子にドルドーニは高笑いを上げる。

「ふはははは！　そうだ！それでいいのだよ青年！避ける事は即ち逃げる事だ、それが悪いとも腑抜けとも言わないが、今この場ではそれは悪手。どんな戦場でも敵地に踏み込まねば勝利などありはしない！相手が強者ならば尚の事！　今、青年に必要なのは避わす事ではなく、例え傷を負おうとも踏み込むことさ！」

先程までの鬼気迫る様子が嘘のように笑うドルドーニ。
だが笑いながらもその攻撃に緩みなどは生まれず、風塊は尚もグリムジョーを押し潰す。

「グッ・・・・・・　クッそっ、がぁぁぁあああ！！」

押し潰されていくグリムジョーはその圧力に耐え、そして咆哮と共に霊圧と膂力にものをいわせ風塊を弾き返した。
蛇のようだった風塊はその頭と身体の中ほどまでを吹き飛ばされ、霧散していったが、風塊は完全に消えることはなく、残った部分から新たに生えるように、そして失った頭部の辺りの空気を吸い集めるかのようにして再生する。

「良くぞ弾いた、・・・・・・では次は少々重いぞ。暴風の嘴（ビーク・テンペスター）！」

自分のくり出した風の塊を弾かれたというのに、ドルドーニに悔しさの表情ない。
あるのは喜色、自分の攻撃が弾かれた事が嬉しくて仕方ないという、普通に考えてありえない感情が今の彼からはありありと見て取れる。
そしてその喜色に彩られた声は更なる攻勢の一手を告げた。

ドルドーニの両脇に聳える竜巻、そのそこかしこからグリムジョーが弾き飛ばした風塊が勢い良く飛び出してくる。
うねり、或いは荒ぶる様にして生まれ来る風塊達、その一つ一つに込められた霊圧も先ほどの一撃よりも上であり、それがただの蹴りではなく一つの技として完成をみている事をグリムジョーに示すか

のようだった。

風塊が一斉にグリムジョーに向かい疾風の進撃を開始していく。
その数おおよそ十、その全てがひとつの標的であるグリムジョー目掛けて殺到する。
対するグリムジョーはその視界全てを覆う程の猛威の嘴を前にし、しかし退く事はなく前に出る。
彼とてドルドーニに言われずとも判っているのだ、どんな戦いでも前に出ないものに勝利は訪れないと、勝利の果実は常に自らの目の前に、しかし手を伸ばし身体を一杯に伸ばさねば、それに手が届く事となどないのだから、と。

風塊が自分にぶつかるよりも早く自らの手に持った斬魄刀を握り締め、それを風塊へと叩きつけるグリムジョー。
先程とは違い圧されることなく拮抗する姿は、やはり気構え、決意の差なのか。
退かぬという決意が更なる力を彼に与えたかのように風塊と互するグリムジョー。
だが今回の敵は一つではない。
拮抗するグリムジョーを横合いから別の風塊が強襲する。
刀を横なぎにするようにしてそれにも何とか対応するグリムジョーだったが、現状で数の差はそのまま有利不利を表すものだった。
グリムジョーに襲い掛かる風塊の群れは、彼の迎撃を掻い潜りその膨大な圧力で迫り遂にその身体を捉える。

「グハッ！」

腹部に空いた孔、その丁度上辺り、人間で言う鳩尾の辺りに強烈な一撃を見舞われるグリムジョー。

下から突き上げるような風塊の一撃はそのまま彼を上へと弾き飛ばす。
そしてそこに群がるようにして襲い掛かる嘴の群れ、右に左にと弾かれるようにして上空を行ったり来たりするグリムジョーの身体。
その光景は一言でいえば嬲っているとしか見えなかった、強烈な一撃はしかしそれだけで絶命に足るものではなく、まるで親鳥に餌を与えられた雛達が、狩りの真似事でその餌をつつきまわすような、ある種残酷な光景を思わせた。

「どうしたね！　青年！いいようにやられてばかりじゃないか！それでは勝利は掴めないぞ！　身体を満たせ！気構えで！　決意で！　勝利の意志で！　確信で！そして”新たに得たその力”で！　いつまで微温湯の延長でいるつもりだ！此処は戦場、存在を喰らいあう殺し合いの場だという事を自覚しろ！この馬鹿弟子がぁぁあ！！」

まるで嘲うかのようだったドルドーニの言葉は次第熱を帯び、最後には叫びへと変っていた。
ドルドーニは感じていた、最初の数合打ち合っただけでグリムジョーの内にある違和感を。
何故か押さえ込んでいる、それがドルドーニの感じた感触、何を、何故なのかという事をドルドーニは理解していた。
それは彼がグリムジョーと向き合った時間と、彼の内にもあったある種予感めいた感覚。

だが、ドルドーニはそれが気に入らない。
彼が2年もの間待ち望んだこの戦場に、それは何にも増した不純物なのだ。

ドルドーニは自身の感じた予感に従い、一方的とも言える攻勢に出

ていた。
それは勝利するための手段、負ける心算など誰にだってなくそれゆえの攻勢であり、そうしなければ恐らく自分は勝てないという予感がドルドーニにはあった。
だがそれでも、戦いが進むにつれてドルドーニは自らの勝利も然ることながら、目の前で燻る様な男の姿に我慢ならなくなっていった。
あれほど清々しく濃い殺気を滲ませる男が何故か悩んでる、押さえ込んでいる、そんな姿はドルドーニにとって不快でしかないもの。
故にドルドーニは声を発し導き、そしてまた今、声を荒げたのだ。

彼にとって最高な不出来な弟子の為に。

叫びと共に数本の風塊が更なる上空からグリムジョーへと襲い掛かり砂漠へと叩きつける。
それは風塊であるが、同時に男の鉄拳でもあった。
優しく語り聞かせることなど出来ない、言葉は常に足らないもの、故に一言よりも一撃の拳を見舞うのだ。
いい加減に目を覚ませ、と。

立ち上がる砂煙、グリムジョーを叩きつけた風塊は鎌首を持ち上げるようにして砂漠からその頭を引き上げる。
観覧席から見ている数多くの破面達、彼等にとって先程から続く完全な死を思わせる場面の数々。
恐らく自分があの場に立ち、あの一撃を食らったならば確実に死んでいるという確信を持たせる、そんな場面が次から次に彼等の眼前では繰り広げられる。
それが彼等と闘技場に立つ二人の違い。
立っている場所、見ている景色が違いすぎる、それを如実に物語る

光景。
しかし彼等に死を思わせるそんな光景の中でも、光景の中の人物は死ぬ事はなく、再び立ち上がってくるのだ。

「・・・・・弟子に、なった、覚えは・・・無ぇ・・・・・・」

砂煙が晴れる砂漠、上空からの爆撃のような攻撃の爆心地にあってグリムジョーは、膝を折るギリギリといった状態で立っていた。
最早意地、膝はつかない、屈さないという意地が彼を支える。
そしてその口から発せられる言葉もまた彼の意地、弱音など吐かない、吐けない、そういった意地を感じさせる言葉が零れる。

「フン！　あくまでそう言うか・・・・・　だが今はそんな事はどうでもいい。どうだね、ここまで痛めつけられればいい加減判っただろう？青年が勝つには”解放”するしかない、ということが。」

そう、全ての違和感はそこに集約される。
何故グリムジョーはここに至るまでその真の力を解放しないのか、何故帰刃しないのか、身体は痛めつけられ、満足に反撃も出来ない状況、それにも拘らず何故帰刃しないのか、圧倒的な光景の前にそれを多くの破面が忘れていたが、グリムジョーはまだ帰刃、刀剣解放をしていないのだ。
そのドルドーニの言葉にグリムジョーの顔が一瞬曇る。
彼とて判っている、その重要性、その必然性、だがしかし、しかしと彼は迷いを見せるのだ。
そんなグリムジョーの様子にドルドーニは更に言葉を続ける、そして語られるのはグリムジョーの迷いそのものだった。

「それほどまでに与えられた力という事が不満かね?吾輩に情けをかけられたという事が不快かね?それとも・・・・・・　その内に生まれた力が、吾輩を凌駕してしまっているということがうしろめたいのかね!!」

ドルドーニの叫びにグリムジョーはその眼を見開いた。
彼が語った言葉はどれもがグリムジョーの内側を見透かしたかのように、的確に射抜く。
そして最後に語られた事、凌駕してしまっていると、ドルドーニがそう口にしたことがグリムジョーがこの醜態とも言える状況を曝していることの理由だった。

不満ではあった、どこまでも先達として自分を子ども扱いするその男が。
不快ではあった、まるでそうしなければ自分の相手としては不足だというようなその男の態度が。
だが、だがしかし、その男の計らいによって得た機会が、あの黒い宝玉によって齎された力はグリムジョーにとって想像を超えるものだった。
今までの、この瞬間に至るまでの全てが嘘だったかのように増大した己の力、地道に積み重ねるのではなく抜け道のように上昇する力、あり得ない、力を何よりも欲したというのにあり得てはいけないとすら感じるような、そんな力。
そしてなにより彼はその力を得た瞬間に確信めいた予感を得ていたのだ、既に超えてしまっている、と。

自惚れでも無く、自画自賛でもなく、純然たる事実としての予感。
あれほど高く見えた壁を自分はまるでなんの努力もせずに飛び越えてしまったような感覚、グリムジョーにとってそれは恥にも似た感

覚だった。
故にグリムジョーはそれを解き放つことを躊躇ってしまうのだ、与えられて掴んだ力、まるで安易に手に入ってしまった力に頼ることが恥だといわんばかりに。

だが、ドルドーニにとってはそれこそが何よりも屈辱的だった。

「若造(ホベンズエロ)！　お前はいつからそんな”優しさ”を身に付けた！その”優しさ”は向けられた者にとってこれ以上無い”哀れみ”だ！手に入れたのならそれはもうお前のモノだ！手段も、経緯も、そんなものは関係ない！　お前の目指すのは誰にでも優しく手を伸ばす優しき王か？違うだろう！　お前が・・・お前が目指すのは！」

ドルドーニの叫び、それは何よりも真っ直ぐな言葉。
煙に巻くでもなく、おどけるでもなく，ただ戦士としての彼が発する魂の叫び。
彼の知るグリムジョーはこんな残酷な優しさなど持ち合わせない、哀れみなどみせない、強さと力を純粋すぎるほどに求めるのが彼の知るグリムジョー・ジャガージャックなのだ。
故にドルドーニは叫ぶ、彼の目を覚まさせるために、彼に解き放たせるために。
彼が求めて止まない目指す姿を。

「お前が目指すのは”戦いの王”だろう！　敵をなぎ倒し、差し伸べられた手すら斬り落し、全てを破壊する戦いの王だろう！その王に優しさはいるのか？　哀れみはいるのか？必要なものはそんなも

のではない！　必要なのは！その内に眠った荒ぶる獣一匹だけだ！！」

そうして叫ぶ彼の姿は、常彼が求める紳士としての振る舞いからは逸脱したものだった。
しかし、彼をそうさせるほどの思いが今の彼からは伝わる。
誰よりもこの瞬間を待ち望み、誰よりも入念に準備を重ね、最高の状態をつくってまで舞台へと上がった彼だからこそ、相手の不甲斐なさに我慢ならなかったのだ。

その不甲斐なさを突けば呆気なく勝てる。
それこそドルドーニが決着をつけようと思えば、その場面はいくらでもあった。
だが彼はそれをしなかった。
最初はそうする心算だったのだろう、彼の中にあった予感めいた感覚、崩玉による再破面化はドルドーニにそれほどの力は齎さなかった。
それは崩玉との相性なのか、それともっと別の要因なのか、ドルドーニが思い至ったのは別の要因、気構え、いや、もっと素直な”想い”といった部分だった。

勝つ、勝てる、勝って当然、だがしかし。
グリムジョーとの戦いを前に彼の内にあったのはそんな想い。
十中八九、九割九分九厘自分は勝つ、だがしかし、その一厘を埋める事を彼はどうしても出来なかった。
グリムジョーという男の才能、その力が彼にそれを許さなかったのだ。
そのほんの少しの不安、自らの力に対する不安、それを崩玉という物質は見透かしたのだと、再破面後、ドルドーニは一人理解した。

自らを信じられない者に力など得られようはずもない、と。

だからこそ彼は決着を急いだ、勝つためにはそれしかなく、短期決戦による決着、それも解放の暇(いとま)すら与えないと。

その為に彼は入念な準備の下この場に立ったのだ。

体調を整え、余念なく身体を創り、温め、臨んだのだ。

だがどうだ、目の前の青年はそんな自分の覚悟を前にしてもなにやらくだらない事で悩んでいる。

だからドルドーニは方向を変えた、短期決戦ではなくこのどうしようもない馬鹿弟子の十全を引き出してやろう、と。

その上でなんとしても勝ってやるのだ、と。

故に彼は叫ぶのだ、グリムジョーという男を解き放つために。

「解き放て青年！　全てを！　全てを吾輩に魅せてみろ！お前が望んだ戦場だ！　余所を見るな！気を裂くな！解き放ち”獣”となるのだ！」

ドルドーニのぶつける言葉の一つ一つが、グリムジョーの頭を横合いから殴りつけるように響く。

”優しさ”と”哀れみ”、目指すべき姿、その為の力、一足飛びで手にしてしまった力だと思っていたグリムジョー。

しかしそれは誤解なのだ。

崩玉とはその者の内側から”力”を引き出す物質、その者に元から力がなかったのならば引き出される”力”などありはしない。

だがグリムジョーにはそれがあった、そしてそれはただ眠っていたわけではなく、それを引き出すにたる器と、引き出せるだけの才覚

と、そしてたゆまぬ研鑽の上に成り立った確固たる彼が持つべき”力”なのだ。
それを誰に咎められる事があろうか、誰に後ろ指差される所以があろうか。
ありはしない、彼が手にしたのは彼だけが手に出来る力、彼が腹の底から望み、声張り裂けるほど望んだ力なのだから。

「ハハッ・・・・・・」

（そういう事・・・か。　結局俺はまだ微温湯に浸かったままだった、って事。口でデカイ事喚こうが結局は中途半端なチンピラだ・・・・・）

気構えも、決意も、あるものだと思っていた。
だが実際はこの体たらくとグリムジョーから小さく笑いが零れる。
目の前の男はこれ程までにこの戦いに備えていた、だがその男の前に自分が曝したのは不様だけ。
そしてさらに不様にもこうしてまたあの男に教えられる始末、と。

（あのオッサンの言う通りだぜ、　優しさ？　哀れみ？・・・・・・要らねぇんだよ！　そんなもんは！一度敵と定めたなら、ソイツをブッ殺す為に手段なんぞ選ばねぇ！俺を舐めたヤツは殺す！　俺の邪魔をするヤツも殺す！俺の前に立ちはだかるヤツは！　全力でブッ殺すんだ！！俺はそうやって生きてきた！　今までも！これからも！　）

グリムジョーは刀を持っていない空いた手を握り締め、そして力いっぱい脚を殴りつける。

今まで折らぬ様に必死だったその脚は、その一撃によって膝を着くどころか再びしっかり根を張りグリムジョーを支える。
俯いていたグリムジョーの顔が正面を見る、その前に立つドルドーニは彼のその顔を見て満足そうに、そして嬉しそうに壮絶な笑みを浮かべる。

その瞳には迷いはなかった。
そして雑多な感情も無かった。
あるのは一念、ただ一念、目の前の敵を喰らい殺すという殺意の一念だけだった。
息は浅く、心臓は早鐘を打つ、グリムジョーはここへ来て己の昂ぶりと、己がうちで解き放たれる事を待つ”獣”の存在を自覚した。
檻に爪を立て、牙を立て、必死にその檻から抜け出そうとする”獣”の存在。
それは逃げ出すためではなく、ただ殺す為にここから出せという、グリムジョーの殺意の塊。

それを自覚したグリムジョーは笑う。
なら出してやると、その檻から出してやると、そして存分に殺してやろうと笑みを浮かべる。
その手に持った刀、力の核を封じ込めた斬魄刀を鞘の上辺りで刃をねかせて構えるグリムジョー。
そしてその斬魄刀の鍔元辺りに、爪を立てるようにして片手をかざした。

纏う雰囲気が変る。
グリムジョーの纏う雰囲気は先程とは明らかに違っていた。
迷い無く、ただ殺すという一念だけを背負った彼、本来黒い筈のその感情は何故か今だけは清々しさすら感じる。
そしてドルドーニがその内の”暴風”を呼び起こしたのと同じよう

に、グリムジョーもまた呼ぶのだ。
内に荒ぶる”獣”の名を。

「軋(きし)れ！　豹王(パンテラ)！！」

霊圧が爆発を伴うように弾ける。
砂煙が生まれ、しかしその砂煙すら中心から発せられる霊圧の波濤によって直に掻き消された。
立っていたのは蒼い男。
腰よりも遥かに伸びた蒼い長髪は猛獣の鬣を思わせ、右頬の牙を模した仮面は無くなり口元から覗く鋭い牙が猛獣の印象を強くさせる。
体を覆うのは線に合った細身の鎧、身体全体を覆うそれは装飾など一切無く、ただ白一色で防御だけを目的としていた。
手の爪は延び鋭く曲がり、そして何よりその下半身は人間ではなく、長くしなやかな尾を持った獣のそれであった。

多少猫背で立つグリムジョー。
そしてその状態から天を仰いだ彼の口から、咆哮放たれる。

「ウォォォォォォォォォォォォォ！！！」

その叫びは解き放たれた歓喜の叫び。
内側に閉じ込められていた”獣”は今、その全ての楔を解き放ち、咆哮しているのだ。
まるで地響きのような叫びに揺さぶられる闘技場。

だがその中でその叫びを嬉々として見つめるのはドルドーニ。
遂に彼が望むモノは出揃った、これこそが彼の求めたもの、手に入る勝利を一度預けてまで求めたものだった。

先に仕掛けたのはまたしてもドルドーニだった。
脚の一振りと共に待機していた風塊の一つがグリムジョーへと突撃する。
それは様子見ではなく必殺の意を乗せた一撃、それに対しグリムジョーは正面からそれに対峙し、片手で受け止めると無造作に払うようにして消し飛ばしてしまう。
だがそれはドルドーニも予想していた事、解放すればその力が遥かに上昇するなどということは想定済みであり、それによる動揺は彼には無かった。
そう、それによる動揺は。

一払いで風塊を消し飛ばしたグリムジョー、その姿が瞬時に消える。
ドルドーニにとってそれはありえない事、視線を切ったわけでもなく相手が消えるなどということはありはしないと。
しかしそんな思考の余裕など彼には残されていなかった。

ドルドーニの頭部、正確には頬に未曾有の衝撃が奔る。
そのまま何が起こったのかも判らず一直線に壁に叩きつけられるドルドーニ。
パラパラと外壁を崩しながら立ち上がった彼が見たのは、先程まで自分が立っていた場所に蹴りを撃った体勢のまま立つグリムジョーだった。

（なんと・・・・・　吾輩は蹴られた・・・のか？）

グリムジョーの姿を確認するまで、自分が殴られたのか蹴られたのかすらドルドーニには判らなかった。
それ程の速力、獣の下半身が生む人間体など比べるにあたわぬ爆発的加速力。
そうして壁際でドルドーニが見ている景色は、開始直後にグリムジョーが見ていた景色と似通っていた。

「ふふっ・・・・・ふはははは!!　いいぞ青年!これこそ吾輩が求めた戦いだ!　君が求め、吾輩も求め!互いを打倒する事だけを目的にした最高の舞台!然らば交わそう!　血の杯を!!」

自分が攻撃を喰らった事にドルドーニは燃え上がる。
当然だ、これこそ彼が望んだものなのだから、血沸き肉踊るとはよく言ったもの、正しくドルドーニは今その状態だった。
昂ぶりはとどまるを知らず、しかし頭の芯は逆に冷えていき敵対者たるグリムジョーを倒すことだけを考える。

噴出し、逆巻く竜巻は更にその暴威を加速させ、生まれる風塊もまた更なる霊圧によって硬度を増す。
だが、グリムジョーに怯んだ様子はない。
決意の眼差しだけがドルドーニを睨みつける。

動いたのは二人同時だった。
グリムジョーはその身一つで、ドルドーニは風塊の全てと自らも共に駆けていた。
程無くしての激突、奇策などありはしなかった、あるのは真正面からの激突だけ、それ以外の選択肢は彼等二人には最早存在しなかっ

た。
風塊とグリムジョーの爪が激突する。
霊圧同士の衝突は拮抗を生み、しかしそれは一瞬、風塊はグリムジョーの指の間を抜けるようにして四つに裂かれながら消えていく。
風塊を裂きながらもグリムジョーは止まらず、ドルドーニに向かって駆ける。
再び遅い来る風塊のこと如くを払い、叩き潰し、切裂きながら駆ける。

それは何時かの光景、来る日も来る日も繰り返した光景、あの時は結局届かなかった。
だが今度こそ届いてみせる、越えてみせると、その為に手にした力で、手段も経緯ももう関係ない、全力をもって倒してみせると。
ドルドーニもそのグリムジョーの気概が届くからこそ、己の求める戦いだからこそ退かない。
己が風塊の悉くが容易く壊されようとも怯まない、それは結局は能力の技、彼が極めたのは己が身一つで相手を蹴り倒すことなのだから。

そして激突の時は来た。
上から振り下ろすようにその長い脚を叩きつけるはドルドーニ、それを下から迎え撃ち、逆に蹴り殺さんとするのはグリムジョー。
両者の脚はそのまま、何の細工も無くただ力任せに振るわれ、それゆえに純粋に蹴りだけの威力が優劣を決する。

「ヌォォオオオオオオオ！！」

「うぅらぁぁあああああああ！！」

叫び、そして鈍い音が闘技場に響き、霊圧を纏った蹴り同士は押しつぶし、或いは吹き飛ばさんとして鬩ぎ合うのだ。
数瞬の拮抗、そして蹴りよりもぶつけあった霊圧は互いの圧力に耐え切れず反発し、二人の身体もそれと同時に弾かれる。
闘技場の端と端まで弾かれる二人、再び突進しぶつかり合うかと思われたがそうではなかった。

「ふっふはははは!!　やはり最高だよ青年!吾輩の鎧に罅が入るとは思わなかった。・・・・・どうだね？　こうして何時までも戦い合っていたいのはやまやまだが、それでは些か芸が無い。ここは一つ、お互い最強の攻撃を持って雌雄を決す、というのは。」

片膝を折るようにして足を持ち上げたドルドーニ、その脚を覆う鎧には先程まではなかった大きな罅があった。
ぶつかり合った蹴り、弾けたとしてもその衝撃は凄まじく、ドルドーニの鎧にはその爪痕として罅が入ったのだ。
それに驚愕はなく、更に昂ぶりを増すドルドーニ。
そして放たれた言葉は決着の提案だった。
互いに己がもつ最強の技を、それをもって互いの優劣を、雌雄を、勝敗を決そうと言うのだ。

「・・・・・なんだっていい。　勝つのは・・・俺だ!!」

対するグリムジョーはドルドーニの申し出を受けた。
勝つ、その一念がグリムジョーを動かし、殺戮を求める性が退くことを許さない。
決着の方法など些細な事なのだ、今の彼にとっては尚の事、どうあ

っても、どんな方法でもただ勝利だけしか彼には見えていないのだから。

「ならば決そう！　この長きに渡る我等の道を！どちらかが地に伏し！　またどちらかの命が消えようとも構わない！この一瞬に生きられるのならば！　吾輩の生涯に何一つの悔いなど無い！！」

ドルドーニの叫びを皮切りに二人から膨大な霊圧が吹き上がる。
それが語るのは本当にこの一撃が最後だという証、何一つ残さず、その全てを搾り出し、搾りかすを絞って最後の一滴まで出しつくすという気概。
その最後の一滴が決着を分けるであろう確信。
これが決着、彼等の決着の時なのだ、誰も邪魔する者無くただ二人だけの、二人だけが出せる決着の時なのだ。

ドルドーニの脚の鎧から更なる暴風が巻き上がり、それに乗ってドルドーニ自身も上空へと舞い上がり始める。
対してグリムジョーはそのまま、地上で霊圧を噴き上げ両手を合わせるようにして下へと向けていた。
ドルドーニの竜巻は地上を離れ、彼を追うようにして上空へと昇る。
そして二つだった竜巻はドルドーニを挟み込むように次第一つとなり、ただ合わさるのではなく掛け合わせるかのようにその威力は上昇していく。
最早彼自身が一つの巨大な竜巻、そう表現して過言ではない状況、尚加速し、尚込められる霊圧は必殺の構え。
グリムジョーもいよいよその最強の技の片鱗を見せ始める。
噴き上げ、纏っていた霊圧は彼の五指、爪の先へと加速度的に集約し、超高密度の塊へとその姿を変えていく。
爪の先、指、手の甲、腕へと次第伸びて行くその塊は更に長く、そ

してそれは彼の野生の象徴たる獣の爪、敵を引き裂き、喉を掻ききるための武器となっていく。

上空には巨大な竜巻が、地上には十本の光の柱。
激突は避けられず、誰もとめるものは無い決着が訪れる。

「ゆくぞ青年！　我が全霊をその身に受けよ！　暴風の巨嘴鳥（トウカン・テンペスター・フィン）！！！」

「喰らいやがれ！　豹王（デスガロン）の爪！！！」

螺旋の先端をグリムジョーへと定め巨大な竜巻は一息に砂漠へと、対する光の柱はその十の爪光をもってその竜巻を砕断せんとする。
衝突する螺旋と曲線、互いを削りあうようにしている様は正しくそれを操る二人そのもの。
自らの命を削り、相手の命を削る、そうして戦いの中に生きなければ息すら出来ない、そんな彼等。
故に激しく燃やすのだ、誰よりもその命を。

「「うぉぉぉおおおおおおおおお！！！！」」

重なり合う叫び、重なり合う気合、重なり合う中でも自分が上だと譲らない、そんな叫び。
永遠に続くかのような相克はある種彼等二人の望みなのか。
この時間が、この戦いが、この戦場が永遠に続けばどれだけ満たされるだろうかと。

だがそれすらも幻想だった。
そんな想いは幻想、そして永遠を望むのは二人ではなく一人だけ。
片方はそうなればこう言うだろう、「俺は、永遠なんぞいらねぇよ」と。

そう、それが全て。
今、この瞬間の戦いを望んだ者とその先の自分を望んだ者、今という瞬間を求めた者と未来を求めた者。
そして世界は進化し続けるもの、その中で生きる者は、常に未来を見続ける者だけなのだ。
螺旋に爪が食い込む。
そして爪は食い込むに留まらず、遂に巨大な竜巻は砕断され爆発を伴って周囲へと四散した。
それが結末、竜巻が爪に巻けた、それは即ちグリムジョーがドルドーニに勝った、という事実を示すのだ。

砂煙が立ち込める闘技場、その上に立ち、肩で息をするグリムジョー。
文字通り霊圧の全てを込めた最強の技、それを放てば如何にグリムジョーとて平静で居られる筈もない。
だが今、グリムジョーはその”気”を納めてはいなかった。
確かに竜巻は斬った、手応えもあった、だがまだ終わりではない、あの男が地に伏す姿を見るまでは終わりではないのだ。

砂煙は次第に晴れ、そしてグリムジョーの視界も晴れる。
その先に居るのはやはりあの男、今だその脚で大地に立つあの男、ドルドーニだった。
見れば既に帰刃状態ではなく通常の状態、再刀剣化したのかそれとも帰刃状態を維持できなくなったのかそれは定かではなく、重要でもない。

グリムジョーにとって重要なのは、ドルドーニが今だその脚で立っているという事、ならば終わりでは無いという事なのだ。

「ふはは。　まったくもって・・・見事なものだ、こうも容易く吾輩最強の技が破られるとは・・・ねぇ。・・・・・・だがそれでいい、それでいいのだよ青年。君に”優しさ”は必要ない、必要なのは強烈なまでのその本能だ。　”獣”を抑えるな、全ては壊して進むがいい。それが君の決めた”王道”ならば・・・・・・」

語るドルドーニ。
その身体からは最早戦えるだけの霊圧は感じられず、無理に平静を装い話しているのは明らかだった。
だがグリムジョーはその霊圧を納めない、危惧しているわけではない、それが彼なりの礼なのだ。
最後まで”敵”として立ち会うという彼なりの。

「ふん、一丁前に気など使いよって・・・・・だが悪い気はしないがね。　吾輩に悔いは無い、全てが満ち満ちている・・・・・・君の勝ちだ、グリムジョー・ジャガージャック。」

言うなりドルドーニの胸が裂け血が噴出す、そして膝から崩れるドルドーニ。
グリムジョーを青年でも若造でもなくその名を呼び倒れる彼。
それは一人の男が一人の若者を”男”として認めた瞬間だった。

膝から崩れ、その身体を投げ出すように砂漠に倒れるドルドーニは、暗さを増す視界と思考の中にいた。

（判っていたのだ・・・・・・　こうして正面から対峙すれば吾輩は負けるだろう、と。だが今はそれでよかった・・・・・・　あのまま勝っていれば悔いが残る。何故あの時という悔いが一生残る・・・・・そんなものは御免被るよ、　例え負けても悔いは残さん。最後の一撃、吾輩に最早余力は無かった、故に全力を振るえる最後に君と打ち合えた事は吾輩の誇りだよ・・・・・・ありがとう（グラシアス）　我がたった一人の弟子（アプレンディス）・・・・・・・）

地に伏すドルドーニ。
それは決着の光景、しかし闘技場は静寂に包まれていた。
誰もがその壮絶な戦いに魅入られ、声を発することが出来ずに居る。
その中心で今だ砂漠に立つのはグリムジョー。

見下ろす先には地に伏している自分が目指した男の姿。
それを確認して彼は漸く自分の勝利を確信した。
そしてこみ上げる想い、言葉にはならぬ想いはその内に留まりきらず咆哮となって色を持った。

静寂に響く咆哮。
暫くの間、その咆哮だけが闘技場に響くのであった・・・・・・

王の黒き笑み

背中合わせの三日月

戦舞

全てはその掌中に

BLEACH El fuego no se apaga. 40（後書き）

グリムジョーVSドルドーニ完結編。
過去最長じゃないか？これ。

二人の戦いの結末、自分が考えるものとしてはこれが今のいっぱいいっぱいです。
原作の描写、十刃を追われたドルドーニ、崩玉の本当の能力の片鱗。
だいぶいっぱい詰め込んでるな・・・・・・
それで”熱さ”が半減してなきゃいいなぁ

そしてどうでもいいけど、この話の裏テーマ
ドルドーニ最後の授業だったりしますｗ

BLEACH El fuego no se apaga. 41（前書き）

週一更新久々に崩れてしまった・・・・・・

虚空に響く遠吠え、それは静寂が満たす闘技場に残響を残しながら消えていく。

数多の感情をその声にならぬ音に乗せて吐き出す男、グリムジョー・ジャガージャック。

そしてその足元には、肩口から反対の脇に抜けるようにしてその胸をザックリと切裂かれ、倒れ伏す男、第６十刃（セスタ・エスパーダ）ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオ。

いや、先の表現は適当ではないだろう。

正しく言うならば”元”第６十刃。

そうなのだ、彼が地に伏しているという事はそういう事なのだ。

この場は強奪決闘（デュエロ・デスポハール）、互いが互いの”号”と”命”を賭けて競う殺戮舞台、そして第６十刃であったドルドーニという男が地に伏しているという事は彼が敗者であるという事を示し、それを両の脚で砂漠に立ち見下ろしているグリムジョーが勝者であるという証明する。

激闘の末に訪れた結末の光景、そしてその結末に終止符を打つ言葉が叫ばれた。

「勝者あり！　勝者破面（アランカル）Ｎｏ．１２グリムジョー・ジャガージャッ

ク！　これにより第６十刃ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオの号をＮｏ．１２が強奪！十刃越えを認め、以降彼の者を新たなる第６十刃とする！」

十刃越え成る。
普段よりも若干大きく声を上げた東仙によって宣言されたそれ。
誰よりも近く、ぶつかり合う霊圧を避けながらその戦いを見続けた立会人、東仙要。
何者も介入する事叶わぬ戦いに立ち会った男が告げた宣言と、その戦いを例え蚊帳の外とはいえ見ていた多くの破面達。
その眼に焼きついた光景、それが夢や幻の類でなく現実だという宣言が静まり返った闘技場に響くと、闘技場は一気に地響きにも似た轟音に包まれた。
十刃を倒した、数字持ちがそれを成した、例え自分達とは隔絶した力を持っていたとしても、それを成したグリムジョーの姿は彼等にとってある種、希望ですらあったのだ。
故の歓喜、そして強力な力同士の激突は純粋に彼等の本能を揺さぶり、熱は最高潮となっていく。

だがその轟音の嵐の中心にあって、グリムジョーはそれをまったく意に介さない様子だった。
それもそのはず、彼はそんな賛美や歓喜の為に戦った訳ではないからだ、彼が求めたのは”王への道”、その第一歩。
それはこの決着までの過程であり、決着の後などさして意味は無く、彼にとって重要なのは己の力で打ち勝ちそして勝ち取ったという事実だけだった。
故にグリムジョーはその轟音に何一つ応える事無く、解放状態を解いて刀を鞘に納めると、先程と同じ大扉からその場を後にした。

対して地に伏しているドルドーニには、下官が通常の手続き通りそれを処理しようと近付いていく。
そう、それは最早作業、この強奪決闘において勝敗の後地に伏しているのは物言わぬ肉塊にほかならず、下官達もそういった意識でドルドーニへと近付いていった。
だが近付きその肉塊に触れた下官たちが大いに慌て始める。
何故ならただの肉塊だと思っていたものは今だ脈動していたからだ、弱くはあるがそれでも確かに。
その脈動は命の鼓動、ドルドーニという男は肩口から脇に抜けるようにその胸を深く切裂かれようとも生きている、という証拠だった。

下官達は慌てながらも数人がかりでドルドーニの身体を持ち上げ、その場を下がっていく。
死んでいるのならばただ処理するだけだが、生きているとなればその命は救わねばならない。
だがそれは慈悲などではなく、下官にとってそうしなければ自分達の首が飛ぶという事。
彼等破面の命は彼等個人のものではない、その所有権の全ては創造主たる藍染惣右介が握っており、例え敗けたといえど十刃まで上り詰めた者の命を自分達の怠慢で失った、となればその責は彼等の命で償いより他無いからだ。
運ばれていくドルドーニに意識は無い、この後彼が生きるか、それとも死ぬかはまだ誰にもわからぬ事柄であった・・・・・

そうしてドルドーニが運ばれる間も闘技場の熱は収まらず、轟音を響かせ続けていた。
彼等の内にあるのは十刃越えの衝撃も然ることながら、更なる殺戮を求める感情。

それは留まるを知らぬ感情、もっと、もっと、もっとと際限なく膨れ上がる快楽の叫び、より強い刺激を求め続けるあくなき欲望の坩堝その坩堝の中、一等高い席に座していた男が静かに立ち上がると手を叩き、拍手を送る。

轟音と欲望の坩堝に居た多くの破面達、だがその半数が男が立ち上がったことで、更にその半分が耳に届いた上から降る拍手の音に、そして残った全ての破面は静まり返る周りとその視線の先に居る男の姿に叫ぶ事を止めていた。
再び静まり返る闘技場には、一定の間隔で打ち鳴らされる拍手だけが響く。

その音の先、破面達が見上げる視線の先に立つのは藍染惣右介。
暗い瞳に笑顔を造り貼り付けた男、静まり返った闘技場に響いた拍手が少しの間続いたかと思うと、藍染はどこか厳かに声を発した。

「素晴らしい戦いだったよ。　二人には私も心から賛辞を送ろう・・・・・」

にこやかに、そして本当にそう思っていると言わんばかりの言葉が降る。
しかし本当のところではこの男の言葉に真実があるかは判らない、そう誰にもわからないのだ。
あまりにもこの男が超越しているために、あまりにも懸離れているが故に。

「さて、皆。　これ程の戦いを見れば次の戦いにも、否応無く期待が高まるというものだろう・・・・・・」

そうして藍染から放たれたのはグリムジョーとドルドーニの戦いと同じ十刃越え、もう一つの十刃越えについてだった。
だがその十刃越えはどこか毛色が違うもの、互いの全霊をかけた正しく決闘と言っていいグリムジョーとドルドーニの戦いとは、その趣を異にしている。
戦う事を望んだのは片方、その理由もまた酷く歪みをみせ、それを受けてたった者もまたその瞬間の滾りをぶつけるためという、おおよそ意地や信念、誇りをかけた決闘とは言いづらいものであるのだが、それを知るものは少ない。

「ゾマリ・・・　そしてフェルナンドの二人には、先をも越える素晴らしい戦いを期待する事としよう・・・・・・」

そう、藍染の言葉通りこの第６十刃超えの後に控えるはもう一つの十刃越え、第７十刃ゾマリ・ルルー（セプティマ・エスパーダ）対　破面（アランカル）Ｎｏ．ｎａｄａ（ナーダ）所謂番号無しである破面、フェルナンド・アルディエンデという本来あり得ない組み合わせの第７十刃越えが待っているのだ。

この時、藍染の言葉に対し闘技場の閉ざされた扉の前で控えていたゾマリは、藍染から下賜される言葉に対し深々と礼をとっていた。
彼にとってそれは当然の行為であり、”神”からの言葉、彼にとって啓示であるそれを賜ったとなればその胸中は語るべくも無い。
より一層の奮起と、彼にとって忌まわしき大罪人であるフェルナンドを誅する事を更に深くその胸に刻み込むゾマリ、だがそうして扉の前で深々と頭を下げていたのはある意味彼にとって僥倖だったかもしれない。
何故ならばその扉を開け放ったその先、闘技場の円を挟んで反対側の扉の上では、その憎き怨敵が事もあろうに寝そべったまま彼にと

っての啓示である藍染の言葉を聞いていたのだから。

壁際に座り足を投げ出してそのまま後ろに倒れこむようにしているフェルナンド、不遜にも寝そべり瞳を閉じて藍染に一瞥すらくれない様はそれだけでゾマリの怒りの導火線に火をつける、いや、それどころか導火線に火薬をぶちまけ、松明を投げ込むように一息に爆発させるのには充分なものだった筈だ。

その不遜極まりない態度にそれを見た多くの破面達も一様に眼を見開き、そして目を逸らす。

普通に考えてあり得ない、そんなことをしていれば最悪そのまま殺されてもおかしくは無いといえるフェルナンドの態度、そんな相手とは関わり合いになりたくない、と考えるのは如何程も不思議なことではないだろう。

フェルナンドの近くに居た破面達も少しずつ彼の傍から離れるように移動し、遂には彼の回りに不可視の壁が出来たかのように其処だけがぽっかりと人影が消えていた。

そんな様子を睨むのは闘技場の中央でフェルナンドを見上げる東仙要、東仙の思考はどちらかといえばゾマリに近いものがあり、不義や不忠、そして彼の”正義”に悖る者に対して欠片の容赦も無い部分があった。

その東仙の怒りを知ってかしら知らずか、まぁおそらく知っていて無視しているであろうフェルナンド、そんな彼の下に不可視の壁を軽々と踏み越え、靴音を鳴らしながら近づく者があった。

靴音の主は壁の上に寝転ぶフェルナンドへと一直線に近付くと、腕を振り上げそのまま何の躊躇いも無くフェルナンドの頭目掛けて手刀を振り下ろす。

直後、激突音と破砕音が生じる。

音の後少々の砂煙が起こり、そしてパラパラと崩れる壁の角、そして煙が晴れたその壁に手の半ばまで食い込んでいる靴音の主の手刀があった。
一部始終を見ていた破面達からしても何が起こったか分からないという光景、いきなり現われた靴音の主、その金色の髪を靡かせながら近付いたその人物は、同じく金色の髪をしたフェルナンドの頭を何の躊躇いも無く叩き割ろうとしたのだ。
まったくもって理解不能、そんな出来事が起こったその場でしかし、混乱する周りとは裏腹に当事者達はいたって普通だった。

「なにしやがるハリベル。　今のは避けなけりゃ、そこそこマズイ一撃だぜ？」

「なに、避けたのだから問題あるまい・・・・・それに当たったとてそこそこマズイというだけで、死にはしないのだろう？」

「ハッ！　確かに・・・な。　だが当たってやる理由にはならねぇよ。」

混乱は輪をかけて大きくなる。
完全に頭を叩き割ったであろう一撃を放ったのは第3十刃（トレス・エスパーダ）ティア・ハリベル、そしてその一撃はフェルナンドの頭を割る事は無く、首を軽く動かした最小の動作によって避けられていた。
そして交わされる会話、一連の出来事に対してその会話はあまりにも日常という雰囲気を強く醸している。
故の混乱、見ている者達からすれば理解に苦しむ事の連続、しかしそれを他所に会話は続く。

「それで？　人様の頭をカチ割ろうとした理由は何だ？」

「あれぐらいせんとお前は起きんだろう?それに口で言って判らないと判っている相手に言って聞かせるほど、私は愚かではないのでな。」

「・・・別に俺が寝てようが起きてようが関係ねぇだろうが。第一寝ちゃいねぇよ、　目を瞑ってただけだ。」

「それが悪いと言っている。　普段なら許すがこの場は藍染様の御前だ、居住まい位正すのが礼というものだ。」

会話から察するところ、ハリベルが手刀を叩き下ろした理由はフェルナンドの態度を正す為、という事のようだった。
理由だけ聞けばそれは正しく正論だろう、この場において最上位の存在である藍染を前にしてそれを寝転がって、しかも目すら開けずに居るというのは不敬ではある。
あるのだがそれを正そうとした行為が正しいのか、ということは別問題。
寝ているところを起そうという時の選択肢、その一番上に来るのが頭を叩き割る威力を持った手刀というのは如何なものか。
それが周りでその光景を見ていた破面達の総意、彼等とて血と殺戮を好む性はもっているがそれとはまた一線を隔す様なやりとりを平然と行う二人に、彼等は皆たじろぐように一歩下がった。

だが彼等にとって異常な光景に映るそれも、フェルナンドとハリベルの二人からすればある種日常の風景。
若干威力の違いはあれど、フェルナンドに言って聞かせるということを半ば諦めつつあるハリベルは、こうした直接的手段に出ることが多くあった。

だがその致死（注意）の一撃がフェルナンドに対して効果があったか、という部分はまた別の話でもあるが。
ハリベルの一撃と言葉を受け、フェルナンドはそれを小さく鼻で笑うと上体を勢い良く持ち上げ、片膝を立てるようにして座りなおす。

「ハッ！　別に関係無ぇだろうが、座って様が寝て様がよ。第一藍染が咎めて無ぇんだから問題ないだろうが。えぇ？」

「敬称をつけろ、それとそういう問題ではない。藍染様がお前の戦いに期待すると仰っているのだ、私はそれに対して礼の一つもとれ、と言っている。」

「それこそ関係無ぇ。何が素晴らしい戦いだ、グリムジョーの野郎もあのオッサンも誰かに見せる為に戦った訳じゃねぇだろうが。外野があれこれ期待してんじゃねぇよ、野郎は野郎の為に、俺は俺の為に戦（や）るだけだ。」

応酬される言葉のどちらもが、ある種正論ではあった。
ハリベルは”礼”を説き、フェルナンドは”我”を貫く。

フェルナンドにとって周りの視線や評価など露ほども気にかけるものでなく、求めるのも、また通すのも全ては己の内から沸きあがる衝動。
自分に対する他者の期待などは彼にとって煩わしいものでしかなく、それに応える義理も、そして意義も見出せるものではないのだ。
そんなフェルナンドだからこそハリベルは礼節を説く。
半ば言葉で語ろうとも伝わらない事を知りつつも、それを止めることはない。
己を貫く事は難しく、そして時としてそれは無用の敵を多く作り出

す結果を招く。
フェルナンドならばそれすらも薙ぎ倒し進むだろう、だがそれでは何時か彼という存在が磨り減ってしまうようなそんな感覚をハリベルは覚えていた。
故に、それはあまりにも惜しい故にハリベルはフェルナンドに最低限の礼節は教え込むべきだ、と考えていた。
それが彼女の生真面目な性格と相まって、先程のように限度を超える注意にまで発展しているわけではあるが。

そんなフェルナンドの答えにハリベルが更なる追求をしようとする。
だがそれは藍染の言葉によって遮られてしまった。

「いいんだよ、ハリベル。　私は気にならないし、その程度の事で彼を咎めはしないさ。・・・・・それにそれでこそ彼らしい、とも言える。存分に戦ってくれ、フェルナンド。」

ハリベルの行動を遮った藍染の言葉にフェルナンドは、口角を上げ皮肉気な笑みを浮かべただけで答えはしなかった。
だがその笑みは明らかに「言われるまでも無い」という意思を浮かべ、それを見るハリベルは一人小さく溜息をつく。
そしてフェルナンドが壁の上から闘技場へと飛び降りようとした瞬間、今度はその行動を遮るように再び藍染が言葉を発した。

「だがその戦いの前に、私から皆に一つ提案がある。数字持ち対十刃、番号無し対十刃、どちらも皆にとって血の沸き立つような組み合わせだろう。だが・・・・・・　君達は見たくはないかい？十刃対十刃の戦い・・・というものを。」

闘技場は再び静寂に包まれる。
だがそれはほんのひと時の静寂、藍染が落した爆弾の如き言葉。
それは数瞬の間を置いて闘技場の中心に、いや、彼等多くの破面の脳へと直撃し、そして爆発を起す。
内側で起こった爆発、そしてそれは彼等の喉からまさしく魂の叫びとなって、肯定の意を轟かせた。

それはそうだろう、十刃対十刃、本来十刃の地位に着いたものはそれ程上を目指すことは無い。
正確にはその意思があろうとも、それを表に見せる事はまず無い、と言うべきか。
彼等十刃の序列は殺戮能力の高さ、そして隣り合った数字とてそれが持つ力の差は大きいのだ。
例え彼等に上を目指す意思があろうともそれは容易なことではなく、その意思を表し上位に挑むには完全な勝利の確信と自負がなければなせるものではない。
それがあろうともその戦いの後、自分が五体満足であるという保証は無く、最悪勝つには勝ったが十刃に留まることが叶わぬほどの傷を負い、十刃の地位を剥奪されるという本末転倒な結末すらありえる。
それはあまりにも不様な結末、そしてそれを選択するのはあまりにも愚かだ。
十刃に与えられる数々の特権、そして頂点から眺める景色を知ってしまえばそれを失う事は恐怖ですらある。
故に動かない、いや動けない、十刃がこの強奪決闘で同じ十刃を指名するなどと言う事は本来ありえないことなのだ。

だが、その十刃対十刃の決闘が藍染の口から提示される。
それは十刃の位にとどかぬ者達にとって見果てぬ頂の激突であり、そして打算的な者からすれば一度に2つの席が空くかも知れないと

いう事でもあった。
血飛沫舞う殺戮劇、血で血を洗う惨殺劇、そして潰える命と生まれる空席、どう転んだとてその場にいるほぼ全ての破面に利が大きいこの提案と、なによりもその戦いを見たい、という純粋な欲望が闘技場で叫びを上げていた。

その叫びの中、藍染はそれを制するように軽く手を上げる。
ただそれだけの動作で闘技場は再び野静寂を取り戻す、正しく完全なる支配を示すかのような光景がそこにはあった。

「皆の気持ちはわかった。　ではゾマリとフェルナンドの戦いの後に・・・と思っていたのだが・・・・・・どうやらもう来てしまったようだね・・・・・・」

藍染がそう零し、そして視線を下へと向ける。
そこにあるのはフェルナンドが座る壁の下にある大扉、その奥におそらくは藍染が来てしまった、といった者が近付いているのだろう。
一度送った視線を切ると、藍染は黒い笑みを浮かべたまま再び声を発する。

「さて、本来これは予定していなかった決闘だ、十刃にもこの事実は伝えていない。そのなかで誰か戦ってもいいと言ってくれる者はいるかい？」

驚く事に藍染は自分で十刃対十刃を提案しておきながら、まるで組み合わせを決めてなかったと口にする。
そして誰か十刃の中から舞台に上がってくれないか、と。
この場に居る十刃は、バラガン、ハリベル、アベル、アーロニーロ、

そしてヤミーの計5人。
ネロが来ないのは当然、ウルキオラもまた任務によってこの場には居ない、既に地位を追われたドルドーニ、決闘を控えるゾマリを除けばおのずと一人、誰がこの決闘に出場してくるかは判り切っていた。
ならばその相手を誰がするのか、藍染はそれをあえて彼等十刃に任せたのだ。

いや、任せたように見せたのだ。

「ブハハ！　だったら俺が殺ってやｒ「私が、戦いましょう。」んだコラ！　アベル！　横取りかよ！」

最初に大声をあげたのは第１０十刃（ディエス・エスパーダ）ヤミー・リヤルゴだった。
おそらくはグリムジョーとドルドーニの戦いを見て、見ているだけではつまらないといった所なのだろう。
大きく笑いながら名乗りを上げようとしたところ、それを遮ったのはさして大声ではないにしろ明確な意思の篭った声を上げた第５十刃（クイント・エスパーダ）アベル・ライネスだった。

「その無意味な大声で叫ぶな第１０（ディエス）十刃、耳障りだ。それに横取りと言うならば貴様の方だろうな・・・・・」

「あぁん？　どういう意味だコラ。」

十刃用の観覧席、そのテラスから身を乗り出すようにしてアベルに食って掛るヤミーだったが、アベルはもう話すことなどないという

雰囲気でそれを無視する。
そしてヤミーの存在を消し去ったかのように、藍染に話しかける。

「宜しいでしょうか、藍染様。　いや・・・おそらくそれが御望みかと・・・・・・」

藍染に軽く頭を下げ、礼をとった体勢のアベルがそう告げる。
自分が戦う、という事でいいだろうかと、そしておそらくはそれが貴方の望みなのだろうと。
見透かしている、と言うよりは考えを汲み取ったというようなアベルの物言い、そしてそれに対して藍染は笑みを深くして答える。

「あぁ、構わないよアベル。　それが適任というものだろう、君のように聡い部下を持てた事に感謝しなくてはいけないね。・・・ヤミー、君もそれでいいね？」

アベルの申し出を快諾した藍染は、どこか満足そうにも見えた。
所詮児戯ではあるが思い通りに事が運ぶ、というのは誰だろうと悪い気はしないだろう。
そうして戦う事を申し出たアベルに形ばかりの感謝を述べると、ヤミーにはどこか言い含めるように、しかし拒否は許さないといった風で退く事を了承然る。
ヤミーはどこか納得いかない様子ではあったが、渋々藍染の言葉を了承した。

ヤミーが退いた事を確認すると、アベルは再び藍染に一礼しテラスからそのまま砂漠へと音も無く飛び降りる。

白い外套のような死覇装が落下によって靡くが、ゆっくりとした落下速度はそれが靡くだけにとどまり、バタバタと音を立てるものではなく。
落下するというよりは、むしろ水底へゆっくりと沈んでいくかのようにすら見えるアベルの姿。
そして如何程の砂煙すら立てずに砂漠へと着地するその姿は、見る者をどこか近寄らせず遠ざけるような雰囲気を纏っていた。

アベルが闘技場の砂漠に着地するのと時を同じくして、アベルの立っている場所よりも離れている方、フェルナンドの足元にある縦長の大扉が音を立てて開き始める。
扉の奥から空気が流れ込んだのだろうが、幾分砂を巻き上げるようにして起こった風がアベルの髪を揺らす。
幾分の冷気を感じさせるそれは、その扉の奥に居る者の持つ雰囲気ゆえなのか、だがアベルは特に気にする事も無く中央へと向かって歩を進め始めた。

「無意味だ・・・・・・　何もかもが・・・・・・」

歩を進めながら小さく呟くアベル。
それは虚空に消える独り言なのか、それと扉の奥にいるであろう者に対する独白なのか。
『諦観』という死を司るアベル、全てを諦め希望など見出さずただ緩やかに死んでいく精神の死、それがアベルの司る死なのだ。

「私に倒され、今までどうやって私の”千里眼”から逃れていたかはあえて問うまい・・・・・・」

尚も呟くアベル、そしてその呟きに呼応するように開いた大扉の奥から音が響く。
それは鉄がぶつかり、擦れるような音、そして何かを引き摺るような、途切れ途切れに起こる音だった。
踏み出した脚の一歩に応ずるように生じる音、それがゆっくりと、しかし確実に大きくなっていく。

「だがそれは無意味だ。　時を重ねたとて埋まるものなどありはしない。貴様に出来るのは諦めるより他ありはしないのだ・・・・・・」

その音はアベルにも聞こえていた。
もう少しで中央へとたどり着くアベルに対し、その音ももう少しで扉の奥の暗がりから日のあたる場所に出ようとしている。
だがそれをアベルは無意味と断ずるのだ。
もうアベルにはその扉の奥の人物が誰かわかっていた、いや、そんなものはこの闘技場に来た瞬間に判っていたのだ。
この2年間まったく捉えられなかった霊圧がこの会場に足を踏み入れた瞬間、鮮明にアベルには感じ取れた。
その霊圧の持ち主にそんな技能は無く、ならばアベルという十刃最高の霊圧知覚の持ち主に2年の間毛先程の霊圧もつかませない、などという事が出来るのは一人しかいない。
理由もその他一切の何もかもが判らない、何故こんな事をしたのかという疑問すら。
だがアベルにとってそれはさして重要ではなかった。

アベルにとって、全ては無意味でしかないのだから。

鉄と、何かを引き摺る音が止む。
音の主は大扉の外、砂漠へとその足を踏み入れていた。
背を曲げ、その顔は髪の毛に隠れ見ることは出来ない。
肩口程度までだった髪は長く伸び背の中程までに達し、2年の時を置いたせいなのか細い腕や脚も幾分太さを増したように見える。
そして見た目の変化の最たるものはその手にしっかりと握った斬魄刀、巨大な三日月を思わせたそれは大きさを増し、更にはその形状も三日月を二つ、背中合わせにしたようなものへと変化していた。
昔の斬魄刀とくらべ明らかに増した重量であるそれを砂漠へ下ろし、後ろに引き摺った跡が残る。
その姿を確認し、中央へと至ったアベルが呟く。

「そう言っただろう？　第8十刃（オクターバ）よ・・・・・・」

大扉を背にし、どこか幽鬼を思わせるような気配を纏う男。
かつてアベルに挑み、虚圏の砂漠において手も足も出ずに惨敗を喫した男。
そしてその砂漠で慟哭の叫びを上げた男。
第8十刃（オクターバ・エスパーダ）ノイトラ・ジルガがそこには立っていた。

「さぁ、舞台は整った。　アベル、ノイトラ、二人とも存分に・・・殺しあってくれ・・・・・・」

舞台に役者が揃う。
舞台には天上より降る藍染の言葉。
そしてその藍染の顔にはやはり、黒い笑みが浮かぶのであった・・・
・・・

毒蟲の晩餐
黙する蟷螂
黒の橙

白日の下に

その眼、背けるなかれ

BLEACH El fuego no se apaga. 41（後書き）

まずは先週更新できなかったことにお詫びを。
詳しくは活動報告『今週は・・・なし』に書いてありますので参照を。

何とか書きあがった今回。
最初に思い描いていたものとは若干違うけど
コレはコレであり、かな？
久々にフェルとハリベルを書けたしｗ

では、感想などお待ちしております。

BLEACH El fuego no se apaga. 42（前書き）

ご都合と爆弾アリ

時が遡る。

男は屈辱にまみれていた。
半ば自我を失い、その身に溢れていた殺意と怒りに任せて襲い掛かった男。
本当ならば自らの意思で屠りたかっただろう、だが理性の鎖は引き千切られ、暴走した怒りが全てを塗りつぶしていく。
それでも、それでもこの憎き敵を屠れるのならばいい、男は何処かそう思うことで理性を手放す事を認めていた。
しかし男がその自我を取り戻し、そしてそれを闇に沈める直前に見た光景は、血の海に沈む憎き敵の姿ではなく、まるで砂を食む様に砂漠に横たわった自分を見下ろしているであろう、怨敵の足。

目覚めた男はただひたすらに叫びをあげる。
それは怨嗟の叫びか、それもと別の何かなのか、それでもただ判ることはひとつだけ。
ノイトラ・ジルガはアベル・ライネスに手も足も出せずに惨敗を喫した、ということだけだった。

叫び、言葉ではなくその音が尽きるまで叫び続けたノイトラは、一人砂漠に立ち尽くしていた。
傍には彼の従属官であるテスラ・リンドクルツの姿もあったが、今のノイトラにそれを気にする素振りはなかった。
ただただ己の敗北に、それもかつて無いほどの惨敗に彼の内なる業火は燃え盛り、そして彼自身を燃やし尽くしてしまったかのように立ち尽くす彼。
一太刀も浴びせる事無く、そして”情け”という最大の屈辱を施されつながれた己の命、それは正しく恥辱の結末。
今こうして生きている事すら彼にとっては恥であり、いっそその手に持つ斬魄刀で自らの首を刎ねてしまった方がましと思える程、それ程の屈辱の極地に彼は立っていた。
だが同時にノイトラの中にそれを留める思いもあった。
それは”逃げ”だと、勝てぬからといって死を選ぶのは逃げる事だと、そして逃げた先にあるのは”永遠の敗北”である、と。
葛藤、示された二つの道、再び歩くのかそれとも歩を止めるのか、自尊心を守るべきか、更なる屈辱にまみれるべきか、答えなどそう易々度出るはずも無い問がノイトラの内に浮かんでは消えていく。
だがそうして悩むノイトラに、第3の道が示される。

「〝力〟が・・・・・・欲しいかい？」

唐突に響いた声、ノイトラでも、ましてやテスラでも無い第３の人物の声が響く。
その声は破面ならば誰もが知っており、また忘れられるはずもない人物のもの。

「藍・・・染、様・・・・・・・」

ノイトラよりも先にテスラが搾り出すようにして男の名を呼ぶ。
そう、声の主は他でもない藍染惣右介自身であり、ここに居る事はありえない人物。
そして何よりも彼等を驚かせたのは、その人物がこの場にいる事でも、この距離までその人物が近付いてきた事に気がつかなかったことでもなく、その人物からまったく霊圧を感じないという事だった。
あり得ないのだ、霊圧を抑えているのではなくまったく感じない、などということは。
それ故にノイトラ、そしてテスラの顔は驚愕に染まる、その目で捉えているにもかかわらずまるで亡霊でも見たかのように。

「驚かせてしまったかい？　すまない事をしたね、だが許して欲しい。コレを使って私の霊圧を感じられないと誤認させなくては、いかに私でも気付かれてしまっただろうから・・・ね。」

藍染は驚きに染まるノイトラ達の顔から察したように、自分の現状について謝罪を述べた。
そうして謝った後、藍染はその手に持ったものを彼等二人に見せるようにして前に出す。
それは刀、藍染惣右介が持つ斬魄刀であり、銘を『鏡花水月（きょうかすいげつ）』という一振りの刀だった。
その能力は『霧と流水による乱反射で、敵を同士討ちさせる』というもののはずだった。

だがそれは偽りなのだ。

藍染の持つ斬魄刀、鏡花水月。
その本当の能力、それは『 完全催眠 』である。
条件を満たした相手の五感、そして霊感の全てを支配し、対象を誤認させることが出来るというその能力。
蠅を龍に見せることも、最愛の者を殺した敵を最愛の者に見せることも、また、対象の霊圧を感知出来ないと認識させるなどという事も、ある種全てが容易に成し遂げられる、正しく最強、いや、最凶の斬魄刀なのだ。

そうして藍染がその抜きはなった斬魄刀の能力を使ってまでこの場に居る。
その能力を知るノイトラであっても、その理由は判らなかった。
一体何故、何故この男が此処にいるのかという疑問、だがそれより

も、いや、そんな事よりもノイトラには聞きたいことがあった。

「”力”だt・・・　ですか・・・・・・・？」

「無理に敬意を払う必要は無いよ、ノイトラ。それは瑣末な事だ・・・・・　そうだね、もう一度言おうか・・・　”力”が欲しいかい？　ノイトラ。」

そう、ノイトラが聞きたかったのはそれだけ。
藍染の言葉の真意、”力”という存在。
それが欲しいか、という藍染の問の意味だけだった。

「私はね、君を評価している心算だ・・・・・・だが、この先で”力”を得られるかは君次第、そこから生きて出られるかもまた、君次第。眠る事すら間々ならず、終わりの見えぬ闇の中で君の命は常に危機に曝され続けるだろう。それでも・・・・・・　何の確証も無い賭けだとしても、君は”力”を求めるかい？」

謳うように語る藍染の言葉には、それが容易では無いという事を物語る雰囲気が浮かぶ。
何処で、何をするのか、それによってどうなるのか、その全てが闇に包まれている道、おそらくは地獄へと繋がるのであろうその道、それが今、ノイトラに示された第３の選択肢だった。

そして示された第３の選択肢に、ノイトラの拳は力強く握り締められるのであった・・・・・・

―――――――――――――

闘技場には歓声、というよりはどよめきの方が多く響いていた。
第５十刃　アベル・ライネスの対戦相手として現われたのは、第８十刃ノイトラ・ジルガ。
その二人の数字の差、実に”３”。
たった一つ上に上がるだけで、その力の差が現われる破面の世界においてその”３”という数字、そしてそれがただの数字持ちではなく、十刃という別次元の存在においてならば、その数字の表すものが如何に大きいかは想像に難くない。
闘技場を見下ろす殆どの破面は、その巡り合わせに哀れさを感じていた。
なんという不運、勝ち目など無い、と。
だがそれは何処までも的はずれな意見だ。

一般的なものの見方、相対する者通しの力を俯瞰から己の小さな物差しで図った的はずれの縮図。
測るべき尺度が間違っている、そして間違った尺度から生まれるのは間違った絵図面、愚味なる結末の光景なのだ。

そもそもノイトラにとってコレは不運などではない。
僥倖、何にもました僥倖、暗い地獄を生き抜いた彼に降り注いだ光明なのだ。
だが、ノイトラにそれを喜ぶような気配は無い。
入り口で一度立ち止まった彼は、再びその斬魄刀を引き摺りながら一歩一歩中央へ、ゆっくりと歩いていく。
その姿はある種異様さを纏う。
普段、攻撃的で威圧的な印象を与える彼らしからぬその雰囲気、それはアベルにとっても疑問であった。

（なんだ・・・・・？　第8十刃（オクターバ）の雰囲気が明らかに違う。霊子の流れもあの不様な濁流を感じさせない・・・・・というより寧ろ・・・・・）

そう、気配や雰囲気といった個人の感性に由来した感覚ではなく、アベルはその十刃最高の霊圧知覚によって霊子の流れを視る。
故に確固たる確証の下、ノイトラの変化を誰よりも明確に認識し、それゆえに戸惑いを見せていた。
2年前、まさしく醜悪の極みたる霊圧を放っていたノイトラ、だが今アベルに視えるそれは明らかに違う。

（・・・・・淀みが見受けられない。　流れ出る霊圧は最小限・・・抑えている？　この男がか？　力を誇示する事が生き甲斐の様なこの男がか？）

ノイトラが見せる明らかな変化、放たれる霊圧は最小限であり、それは見る者からすればノイトラという破面の存在を一回り小さく誤認させるような、そんな印象を与えるものだった。
だがアベルには更にその先が視えている。
ただ最小限に抑えているのではない、その霊圧の流れはどこに滞留することもなく足元らか頭頂、そしてその上へと抜けるように淀みなく流れ続けているのだ。
上位の十刃ならばいい、霊圧操作に長ける者ならば誰でも出来る事柄だろう。
だが、このノイトラという男がそれをしている、それが何よりアベルにとっての違和感。

巨大な武器、吹き上がる霊圧、誰にあってもその自らの強力さ、強靭さを誇示するようなノイトラ。
それを知っている故に生じる違和感。
別人のような印象を与える彼に、アベルは僅かながら困惑を抱えていた。

「これより、第5十刃（クイント・エスパーダ）アベル・ライネス　対　第8十刃（オクターバ・エスパーダ）ノイトラ・ジルガの強奪決闘を開始する。　しかし！今回は変則的な強奪決闘となる。　よって勝てば”号”を、もし敗けて尚その命をつなげば”十刃落ち（プリバロン・エスパーダ）”ではなく、号を下げる事で十刃在位となることも可能とする。」

立会人、東仙要のこの宣言は数瞬の後闘技場に罵詈雑言の嵐を生んだ。
それもそのはず、うまく行けば一息に二つの席が空くと考えええいた一部の破面からすれば、今の東仙の発言はなんら旨みの無いものだったからだ。
自分達の利己的な皮算用を棚に上げ、そんなものは無効だと騒ぎ立てる破面達。
誇りも何もない、愚かな言葉が飛び交う。
そんな者が十刃の席につけるはずもない、ということすら失念するというその愚かさを、自ら吹聴していることにすら気付かずに。

十刃の中にそんな恥知らずな事をする者など居ないのだ。
あくまでそういった条件がこの決闘にはある、というだけのことであり、それを受けるか否かは個々に任されている。
そして敗けても十刃で居る。などという厚顔無恥は輩は十刃足りえない。
先の東仙の宣言、いや、おそらく藍染からそう言えと言われたであろう言葉が語るのはこういう事だ。

生き残って不様を曝したくばそれで構わない・・・だが、その恥辱に耐えられないならば、命を賭して戦え、と。

アベルに、勿論ノイトラにもその恥辱に耐えられるだけの図太さは

なく。
もともとノイトラはこの一戦にて死のうとも勝つという覚悟を固めており、アベルもまた負ける心算など毛先程もないのだ。
敗北とは死である。
何の共通点もなかった二人に、唯一つ共通していた認識がそれだった。
故にこの戦いの後立つのは一人、先程のグリムジョーとドルドーニのように互いを殺そうとする戦い、だが違うのは死ぬほうはおそらく形すら残さず消え去る、という点だけだろう。

両者の沈黙を了承と取って、東仙がその手を上へと伸ばす。
そして振り下ろすと同時に「はじめ！」と叫ぶ事で、罵詈雑言の嵐の中、アベル対ノイトラの戦いは火蓋を切った。

号令が為されて後も、二人は動かなかった。
ノイトラならば号令すら待たず斬りかかってもおかしくはなかったが、彼は微動だにせず、そして今も動かない。
対してアベルもまた動かなかった。
アベルの戦い方を考えれば、今先に仕掛ける利点は少ない。
霊子の流れを読み、相手の隙を見つけ、最も脆い部分を貫き殺す。
それがアベルの戦い方、先の先という非常に単純であるが最小限の労力で目標を殺す、という事を考えれば理想的でもある。
だが微動だにしないノイトラ、その霊子の流れにこれといって淀みも薄い部分もなく、簡単に言えば攻めあぐねている状況にも見える。

（なるほど・・・・・・　悪戯に霊圧を放つのではなく、最小に抑えることで斑を押さえている・・・といったところか。だがそれは・

・・・・・）

「無意味だ・・・・・・・」

その呟きと共にアベルの輪郭がぶれ、次の瞬間にはノイトラの背後１０m程離れた位置までノイトラを通過するように移動していた。
そして驚くべきはアベルが通り過ぎた後、残されたノイトラの腕に一筋の赤い傷跡が出来ていた、という事。
見ればアベルの白い外套の袖からは白刃が覗き、その切っ先からぽつぽつと滴るのは赤い液体。砂漠に丸い小さな染みをつくるそれは血だった。
そう、アベルはすれ違い様にノイトラの腕を斬り付けていたのだ。

「２年・・・・・　醜かった霊圧は、視るに耐えるものにはなった。だが、それだけでは私には勝てない。　歳月は等しく、私もまた２年間で前へと進んだ。・・・・・お前の鋼皮（イエロ）を切裂ける程度には・・・な。」

２年という時間は膨大だ。
日数にして７３０日、時間にして１７，５２０時間、分ならば１，０５１２００分、そして秒にすれば６３，０７２０００秒。
そしてその膨大な時は誰にも等しく与えられる。
ノイトラにも、そしてアベルにもだ。

この場に居る破面達からしてみれば、このアベルの一太刀は何の変哲もない一撃だろう。
だがそれは間違いだ。

2年前、誰の眼にも触れる事無く戦った両者、そしてその時アベルの刀はノイトラの鋼皮に阻まれ、その肌を切裂くどころか突きたてる事すら間々ならなかった。
アベルの斬魄刀の刃に対し、ノイトラが持つ歴代十刃最高硬度の鋼皮は充分すぎるほどの守りとして機能し、刃を退けた。
だがしかし、2年という歳月を積んだアベルはそのノイトラの鋼皮に対し一矢を報いる。
深くはない、出血もそれ程でもない、だが確かに切裂いたのだ、阻む事を許さなかったのだ、その刃の一撃を。

「霊圧を抑えた弊害、如何に強固といえど鋼皮だけの硬度では、私の刃は防げないようだな・・・・・・第8十刃（オクターバ）。」

そう、その一筋の赤い線はまさしく弊害だった。
霊圧を押さえ込み、淀みなく、そして斑無くそれを纏うノイトラ。
鋼皮の霊子密度の低い部分は霊圧によって補い、今のノイトラは正しく一枚の岩のように強固な存在となっている。
だがその繊細な霊圧操作は彼という破面には不向きなのだろう、御しきれる霊圧は自然と少なく、それ故に彼はアベルの一撃によって傷を負ったのだ。
本来のノイトラはその荒れ狂う霊圧と、それにより強化された鋼皮の硬度という堅牢な守りを下地に力で押し切る戦い方をする。
敢えてそれを捨てたかのような今の彼になら、アベルの研鑽を積んだ刃ならば届くのだ。
霊圧を落とせば斬られ、上げればそこは相手の独壇場、袋小路、前門の虎後門の狼、はやくもノイトラに先はなかった。

そんなノイトラにアベルは更に攻撃を加える。

だが如何に斬れる様になったと言えどノイトラの鋼皮は堅牢、ノイトラも緩慢な動きながら回避を試みる中で致命傷を与えるのは、さすがに至難の業である。
数十回の交錯の後、再びアベルが距離を置くようにしてノイトラに対する。
アベルから視るノイトラの姿は服を切り刻まれ、そして無数の傷をその身に刻みながらもしっかりとその足で砂漠に立っていた。
確かにアベルは致命傷を与えていない、不甲斐ない事であるがそれが十刃最弱たるアベルの現状の攻撃では限界なのだろう。
だが、それでも此処まで痛めつけられているにも拘らず、ノイトラに一切の揺るぎが視られないというのはどうだ。
戦いの始まりに抱えた僅かな困惑、それがアベルの中で徐々に大きくなる。

（・・・・・何故反撃して来ない。　霊子を斑無く纏ったとて勝利は無いと、如何に奴とて理解しているはず・・・・・意地・・・か？　ならば余りにも無意味、それを通してなんになるというのだ、愚かしい・・・・・諦めてしまえば全て楽になるというのに・・・・・）

無意味、アベルには今のノイトラの行動が理解できなかった。
アベルから視てもノイトラに勝機らしい勝機はなく、おそらくはこれからも訪れないと、では何故この無意味な戦いを続けるのかと、考えたところでアベルにそれは判らず、理解も出来ず、ならば考える事すら無意味だとアベルは断じる。
無意味を続ける意味をアベルは理解できないのだ、無意味を悟れば諦めてしまえ、そう考える故に。

そうして己の考えに埋没していきそうだったアベルの耳に、ジャリ

っと砂を踏む音がする。
音の方向に居るのは勿論ノイトラ、そしてそのノイトラから立ち昇る霊圧にアベルは明らかな変化を視た。
歪に歪む、というよりはどこか内側に収縮するように変化していくノイトラの霊圧、そしてその動きは全ての破面に共通するものだとアベルは見抜いていた。

「解放・・・か。　以前よりは理性というものが残っていたようだな、第８十刃。だがそれをしたとて無意味だという事を知るだけだ・・・・・・」

そう呟いたアベルは、ノイトラが開放しようとしていると知りながらそれを阻止しようとはしない。
変化する霊圧ならばアベルが隙をつくなど容易だろう、だがアベルはそれをせず傍観を選択した。
アベルにとって相手が解放しているかいないかすら些細な事、そしてノイトラに無意味を悟らせるには解放させた方がより明確に理解させられると判断したのだ。
その越えられぬ壁というものを。

ノイトラは、片手でその巨大な双月の斬魄刀を頭上高く掲げる。
背中を合わせたかのような月、または湖面に映った鏡合わせの様な月を連想させるその斬魄刀、掲げられたそれはまさしく月そのものでありその引力が辺りの砂を巻き上げる。
そしてその薄い砂の幕がノイトラを包み込んだとき、今日彼ははじめてその口を開き声を発した。

「祈れ・・・・・聖哭螳螂（サンタテレサ）！！」

声と共に今まで抑えつけられていた霊圧は、まるで水瓶を逆さにしたように溢れ出た。
砂の幕は爆ぜ、辺りに砂煙が立ちこめる。
そして疎の砂煙の向こうにアベルが視たのは、まるで巨大な三日月のような影。
その影はしかし三日月ではなく、崩れるようにしてその輪郭を崩し分かれていく。
影を照らし出した砂煙の画面が晴れると、そこには三日月の主である男、ノイトラ・ジルガが立っていた。

側頭部に三日月を模した角を生やし、左目に付けた眼帯は弾け、その下からは虚としての証である喪失の孔が、眉間の辺りから斜めに十字の傷跡のような仮面紋（エスティグマ）が刻まれ、顕になった顔に表情はない。
体に受けた無数の傷跡は刀剣解放による霊圧の上昇で、一時的に跳ね上がった治癒力によって完治していた。
そしてなにより眼を引くもの、それは鎌。
巨大、そして非常に鋭い印象を与える大鎌が実に４本。
そしてそれを掴む人間の腕というよりも、それに甲虫類の外骨格を纏ったかのような硬質な印象を与えるそれもまた４本、ノイトラの身体から生えているのだ。

その銘の通り昆虫の螳螂、その捕食者たる攻撃性をその身に宿したかのようなノイトラの姿。
だがアベルはそれを前にし、些かの動揺も見せてはいなかった。

「なるほど。大した霊圧だ・・・・・・　だが清流のように御しきれる訳でもないその霊圧を私の前で曝した、という事は。諦めたと解釈してかまわないのか？」

そう、アベルの言う通りノイトラの解放は強大な霊圧をあたりに撒き散らしている。
しかしそれは先程の解放前のように、寸分の隙も無く御されていたものとは違い、アベルから視れば斑のあるものであった。
つまりアベルにとっては漸く本来の戦い方の出来る状態であり、それを曝したという事はアベルからしてみれば倒してくれと言っているのと同義なのだ。
そうして語るアベルに対し、ノイトラはただ無言。
どこか不気味さすら漂う態度だが、その理由など推測するだけ無意味だとアベルは斬って捨てる。
曝したならば、それを突かれ様とも文句などあるはずは無いだろう、と。
何の容赦も、慈悲も無く、その薄皮で守られた急所を貫いてやろう、と。

アベルはその霊圧知覚をもってしてノイトラの霊圧の流れ、霊子の流れ、鋼皮の霊子密度までの全てを視る。
溢れる霊圧、確かに均整がとられ垂れ流すのではなく御されているのが良くわかると、アベルは評価するがそれもまだ甘さを多分に残しているとと。
そして４本ある腕のうち僅かながら霊子の流れ、そして量の多い１本を視つけ、それが初撃に用いられる事を察すると、更に鋼皮の霊子密度、霊圧の流れ、勢いなどを加味し最も最適な攻撃部位を導き出す。

（・・・・・皮肉なものだ。　解放したが故に、お前はこの一撃によって死に絶える、とは・・・な。）

最適な攻撃部位を導き出したアベルは、内心そのノイトラの不運を哀れむ。
あのまま、解放しないままいればまだ少しは長く生きられた、と。
だがそれはもしもの可能性に過ぎず、現実にその可能性は美しく見える幻に過ぎない。
非情なる現実、それだけが常に彼等の前には広がり続けるのだから。

アベルが再び響転（ソニード）によってその姿を消す。
そしてノイトラにはその影すら掴むことはできなかった。
ノイトラの探査神経を、掻い潜るようにして移動するアベルを捕らえるのは至難の技なのだ。
知覚から消え去った相手にノイトラは、余りにも無防備にその姿を曝し続ける、防御する素振りすらなくただ軽くその手に握った大鎌を構えたまま。
そしてノイトラの知覚が追いつくその前に、アベルは勝敗を決するために動いた。

アベルが現われたのはノイトラの正面、それもノイトラの間合いをはずしたその完全な内側だった。
そして袖から覗く刃、更にはもう片方のてを袖の上から握った斬魄刀の柄尻にそえ、一息にノイトラの胸の中心、心臓を目掛けて突き出そうというのだ。
アベルが視た、そして導き出した最適な場所、それは人、虚、死神、破面、その全てにおいて共通する絶死の点と重なっていたのだ。
霊圧、霊子密度、そしてそこに至るまでの道筋の全てが出来上がっていたかのようにそこが浮かび上がった。

ノイトラの意思とは関係なく、彼の身体がアベルに殺してくれといっているかのような、そんな場所がこの決着を齎す場所。
如何にノイトラの鋼皮であろうと、如何に十刃最弱であるアベルの刃であろうと、突き立てれば貫き、突き立てられれば死ぬ、まさしく決死、決着の瞬間が訪れようとしていた。

「やっと捕まえたぜ・・・・・・　クソ5番・・・・・・・・！」

その言葉が放たれるまでは。

砂柱、それも特大のそれが闘技場から上空へと生茂る。
その光景を見ていた者達からしても、何が起こったかを理解できない展開。
かろうじてアベルの動きを追えていた者からすれば、まさしく止めの瞬間に起こった異常。
闘技場の砂の大半を巻き上げたかと思えるほどの巨大な柱は、しかし直ぐに形を失い、崩れ、大量の砂煙を撒き散らし砂漠へとその姿を戻していく。
立ち込める砂煙、視界を覆うそれが晴れるか晴れないかという所で、その砂煙の中から声が聞こえた。

「人が大人しくしてりゃァ調子に乗って斬りやがって・・・・・・だがそんなもんは構うもんかよ、えぇ？　第５十刃（クイント）。だが、今のを避けるとは恐れ入ったぜ・・・まぁ・・・・・・」

聞こえるのはノイトラの声、先刻まで黙りこくっていた彼が饒舌に語る。
言葉から察するに今の巨大な砂柱はノイトラによって作られたもの、そしてそれはノイトラの攻撃でありアベルはそれを避けているという事だった。
だが、ノイトラは攻撃を避けられたというのに随分と冷静な様子をみせる。
それは虚勢ではないのだろう、事実として彼には余裕があるのだ。
砂埃が収まりはじめ、ノイトラ以外のもう一人の姿がその輪郭から徐々に現われ始める。
それは勿論アベルの事であり、こうしてノイトラが生きているという事はアベルの必殺の一撃はノイトラの心臓を貫けなかったという

事。

そしてその代償は大きいものだった。

「まぁ・・・・・・　完全に避わせた、ってぇ訳じゃなさそうだがなぁ～。」

完全に晴れた砂埃、そこから現れたのは白い外套の袖をその血で染め上げたアベルの姿だった。

肩の辺りから上腕の中程までをザックリと抉られるように傷を負った左腕、その傷口を押さえるようにして立つアベル。

それはありえない光景、霊子を視、そして流れを読むアベルの能力は一種の予知である。

”先視”と呼ばれるそれはアベルが視た全てを総合的に判断した後、下される予言。

意思に関係なく、霊子の反射すら読み解くアベルが傷を負うというのは異常事態なのだ。

「全て・・・・・・　この、瞬間の為・・・の、罠だった、という事・・・か・・・・・・・」

「布石、と言えよ第５十刃。　くくく・・・くははははは！どうだよ？　テメェが俺を殺せると思った瞬間に、殺されそうになった気分はよぉ！えぇ！」

おかしくて仕方がないといった風で笑うノイトラに対し、アベルは珍しくも苦い表情を見せていた。

そう、全てはノイトラが仕掛けた罠だったのだ。
霊圧を抑え、アベルに対して警戒と対処をしていると思わせ、その対処の不十分さと未熟さ、予想外にもアベルの刃がノイトラの鋼皮を貫いた事すらノイトラに有利に運んだ。
霊圧操作は未熟だ、という印象をアベルに植え付けた後の解放、膨大な量の霊圧を正確に御し切れていない姿を見せることで印象は更に強まり、アベルは不自由な戦いを強いられたこともあり、本来の戦法によって決着を着けるために動く。

その全てが出来上がっていた道筋だとは気付かずに。

解放後、ノイトラは自分に出来る霊圧操作の全てを駆使し、自然に、あくまでも自然な流れとなるように全てを操った。
霊圧の流れ、鋼皮の硬度、更には自分の重心や身体の各部位の力の入れ具合まで、その全てを駆使して罠を張ったのだ。
自分の心臓こそ今、最も自分の弱点である、と。

ノイトラにとってこれは罠でありそして賭けだった。
賭けに負け、少しでも疑問をもたれれば自分は死ぬだろう、という賭け。
心臓意外にも急所などいくらでもある、なによりこの罠に気付かれれば勝ち目は消える。
だがそれでもノイトラはそれに賭けた、霊子に関係なくその意識、神経の全ては眼前に集中しアベルが現われるのを待ち構える。
それ故に動けず、背後から攻撃されればそれこそ心臓が貫かれるまで気が付かないほどに。

そしてノイトラはその賭けに勝った。

アベルが現われた瞬間、ノイトラは内に溜め込んだ霊圧を瞬間的に、そして爆発的に解放する。
2年の間、彼がいた地獄において彼の霊圧は2年前に比べ飛躍的に上昇していたのだ。
それを瞬時に解放する事によってノイトラは、アベルだからこそ隙が生まれると確信していた。

霊子を視るアベル、その目の前で想像を超える霊子が吹き上がればどうなるか。
考えて欲しい、暗闇でいきなり目の前から光を照らされた時、貴方ならどうなるだろうか。
空を見上げ、そのまま太陽を直視すれば貴方の目はどうなるだろうか。
答えは簡単だ、焼きついてしまう。
それに至らずとも一瞬視界は失われてしまうのだ。
アベルに起こったのはそういった現象、霊圧知覚のは人と同じ、知覚の大部分を視覚に頼る人間と同じなのだ。
それ故、目の前で突如として爆発した霊圧にアベルは瞬間その視界を奪われる。
そしてその突然の出来事を把握するため、ほんの一瞬隙が生まれるのだ。
すべてを捉えるかの如き眼が、この時ばかりはアベルに災いを齎す。

一瞬の隙、致命的であるそれを曝したアベルに降り注いだのは、4つの大鎌による渾身の一振り達だった。
間合いが外れていようが関係ない、この一撃の為だけに生きて来たと言っていいノイトラのそれは、視覚を失いながらもその他の感覚でそれを補ったアベルによって避けられはするが、一撃だけ強力な斬撃を与えていた。

これが先の出来事の全て。
いつも通り淡々と勝利を手にしようとしたアベルは、薄氷を踏むようなノイトラの罠に捕らえられ、その螳螂(とうろう)の鎌に首を差し出すところだったのだ。
まさしく執念の一撃、どうすれば勝てるのかという事を、そしてその為に地獄のような場所を生き抜いたが故の一撃。
それが今、ノイトラによって成されたのだ。

「様ぁ無ェな！　何が諦めたのか、だ。俺は！　例え首だけになってもテメェの喉笛噛み千切って殺してやる！俺が！　”最強”だ！！」

叫ぶのはノイトラ。
手に持った大鎌の一振りをアベルへと向け、宣言する。
自分は諦める事はないと、例え力尽きようともその時はお前を道連れにしてやると。
そして、お前を倒し、自分こそが最強であると証明すると。

最強という称号への拘り、おそらく全ての十刃の中でノイトラ以上にそれに拘る者はいないだろう。
戦いの中で生き、戦いの中で死ぬ事を望むノイトラ。
最強とは戦いを引き寄せる称号、故に最強ならば戦いは常に自分の傍にある。
それこそ彼の望み、故に求めるのだ、最強という称号を。

「最強・・・か。　無意味だ、そんなものは。では、お前が敵を全て討ち・・・滅ぼし、屍の山の頂点に立った時・・・・・・誰がお前の”最強”を証明する？　誰もいない、屍の世界で・・・・自分の最強を声高に叫ぶお前のそれを、誰が証明するのだ・・・・・・判

るか？　”最強”などというのは只の言葉だ。、無意味な幻想なのだよ第８十刃・・・・・・」

叫ぶノイトラに腕を押さえながらも、アベルは冷淡に言い放つ。
”最強”などというものは存在しないと、そんなものは幻想で、只の言葉に過ぎないと。
相容れない、何処までも、何時までも、目指すもの、求めるものが違いすぎる両者。
故に彼等は、相容れないが故に抹消しようとするのだ、敵対する邪魔者を。

「ケッ！　テメェの言う事なんぞ知ったことか！最強は証明してもらうもんじゃねぇ！　示すもんだ！判ったら死んどけ！！」

「この問答自体が無意味・・・か。　だが私もそう易々と死ぬ訳にはいかない。今の一撃で私を殺せなかった事を悔やめ、第８十刃！」

振り下ろされたノイトラの大鎌を後ろに跳んで避けるアベル。
腕から流れる血を振りまきながらも、動きは精彩を欠くことはなかった。
そして再び砂漠へと着地すると、袖に隠れたまま左腕の傷を押さえていた右手を離す。
血に染まった外套、その右袖から現われたのはアベルの斬魄刀。
アベルはその斬魄刀を、眼の文様が刻まれた仮面の前に構える。
袖がずり落ち、初めて現われたアベルの右腕は白く、想像以上に細いものだった。
刀を握り、刃を上に向けるようにして丁度視線の先には鍔が来るほどの高さに構えるアベル。

そしてノイトラがしたのと同じように、霊圧を内向きに収束し、銘(な)を呼ぶと共に解放した。

「透かせ・・・・・・『鶚貴妃(スパルナ)』・・・・・・」

解号と共にアベルの霊圧が吹き上がり、螺旋を描いて昇るそれは竜巻となる。

その細い竜巻、垂直に、そして高速で回転するそれ、うねる事無くただ真っ直ぐに伸びるそれは風の柱にも見えた。

巻き上がるその竜巻、それとは別に上空からひらひらと何かが舞い降りてくる。

空に浮かぶようにしてゆっくりと落ちてくるそれは黒く、柔らかかった。

「羽・・・だぁ？」

目の前に降りて来たそれを確認したノイトラがそう呟く。

そう、上空から降り注いだのは“羽”、大量の羽が闘技場の砂漠に降り注いでいるのだ。

そして竜巻にも変化が起こる。

何の前触れも無く、竜巻がその中程から左右に分断され、掻き消される様にして消えたのだ。

現われたのは黒い翼だった。

その翼の羽ばたき一つで自らを包んでいた竜巻を裂き、消し飛ばし、無数の黒い羽を撒き散らすようにして現われたそれは、それだけで

見るものの目を奪うかのように荘厳で、まるで黒い十字架のようにすら見える。
翼を大きく広げたまま、空中に留まるように浮かぶ翼の主、白い外套を脱ぎ捨て、そして顔を覆い隠すようだった不気味な仮面もまた、今の翼の主には存在しなかった。

「何・・・だと・・・・・・・・！？」

その姿を見たノイトラから、自然と声が漏れた。
驚愕、それ以外の感情を微塵も含まないその声色が、ノイトラの動揺を如実に語っている。
だがそれは仕方が無いことかもしれない。
誰がその姿を予想しただろう、一体どれだけの破面がその事実を知っていただろう。
おそらくは一握り、十刃すら知りえたかは怪しいそれは、だが紛れも無い真実として今、彼等の目の前に顕現している。

その黒翼は背中ではなく腰の後ろ辺りから生えており、広げた大きさはおおよそ５ｍ程。
羽ばたけば黒い羽がはらはらと舞い降り、白い砂漠に黒を彩る。
だがその翼よりもなによりも、彼等破面達の目を引いたのはそのアベルの容姿だった。

短く、襟足だけが長かった黒髪は、全体が膝に届くほど長く伸び背中へと流れ、両側からほんの一房ずつが肩にかかるようにして後ろに流れる。

身体の線は細く、肌は病的に白く、白いというより青白いと言った方が適切ではないかというほど。
しかし、その青白く細い線にあっても性を主張するその輪郭は丸みをおび、決して大ぶりではないがそれでも艶やかさが漂う。
肩から背中に掛けては大きく開かれ青白い肌が顕になり、それ以外を覆うのはやや後ろが長く、鳥の尾羽を思わせる優美な漆黒のドレス。
手を覆う手袋は此方も漆黒で、二の腕までを覆い隠し、胸のビスチェと同じラインを保っていた。
そしてその顔には、不気味さの漂っていた眼の文様があしらわれた嘴の仮面はなく、鼻の辺りまでを身体を覆うドレスと同じ漆黒のヴェールが。
そして唇には薄紫色のルージュがひかれ、艶やかであるがどこか怪しさを醸しだす。

「どうした、第8十刃？　それ程この姿が意外だったか？私は今まで一言も、自分が男だと言った覚えは無いのだが・・・な。」

そう、その姿はまさしく女性そのもの。
第5十刃　アベル・ライネス、誰もが男であると、そう考え、決め付け、疑わなかった人物の本当の姿。
中性的ではあったが男であると、外套に包まれ見ることは叶わぬがその内にあるのは男の姿だと、真実疑うことがなかった。
それは固定観念、ネリエル、そしてハリベルという存在がありながらどこかでメスが十刃に立てるはずが無い、という卑下する考えが

多くの破面の眼を暗く濁らせた結果がこの驚愕に繋がるのだ。

そうして驚愕の視線を一身に受けるアベル。

その黒い姿は、美しき花嫁を思わせるが、しかし一方で死を悼む喪服にも見える。

人生の始まりを告げる花嫁と、人生の終わりを見送る喪服の女、相反する属性を今のアベルはその身に纏っているのだ。

浴びせられる視線を露ほども意に介さず、眼下に半ば呆然と佇むノイトラを見る彼女。

「無意味な驚愕、無意味な眼差し、性別などという微々たるものにこれ程までに揺れる・・・・・・あまりに幼く、そしてあまりにも無意味だ・・・・・・」

どこか辟易した様子で呟くアベル。

彼女からすれば性別などというものすら無意味なのだろうか、ただ生物を弐分する記号でしかないのだろうか。

そしてそれに囚われる多くの破面が、彼女にとって無意味に縛られる無意味な存在ということなのだろうか。

「第8十刃、もう一度だけ言おう。　先の一撃で私を仕留められなかった事を・・・・・・悔やむがいい・・・・・・」

舞い飛ぶ黒い嵐
六つの大鎌
一対の翼
啄ばむのか
それとも噛み切るのか
結末は
咆哮に消える・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 42（後書き）

え～あ～何といいますか・・・・・・

女性にしちゃったｗ

・・・・・ハイ、調子乗ってスンマセン。
前々から考えてはいたんです、でも最初の方読み返して”男”って書いてあるの見つけた時は相当焦ったｗ
無意識で書いてんだから始末に終えない。
無論速攻で修正したがねｗ

これが活動報告に書いてあった”爆弾”になるんですが・・・・・・ちゃんと爆弾になっているでしょうか？　バレバレでしたか？

そしてノイトラはね、ほんとはちゃんとした実力で対抗させたいんだけどさ
結局書いていくと不意打ちみたくなってしまって・・・・・・
すまないノイトラよ、作者の想像力が足らないばかりに君に不遇を強いてしまって。
剣ちゃん対東仙的な展開も考えたんだけど、流石にダメかな、ってさ。

次はこの決闘の後編にあたります。
どうやって決着付けっかなぁ～

ちなみに何故か、最長記録更新しました。

ちょうど１４０００文字（文字だけで）になってますｗ

感想お待ち申し上げております。

黒い十字架。

白い砂漠に白い壁、白を基調とする虚夜宮においてその十字架は浮かび上がるように鮮烈で、見る者の目を引く。
だが目を引くのはその異色によるものだけでなく、十字架のもつ美しさ故なのか。
細身に身に付けた漆黒のドレス、それが映える青白いほど透き通った肌、それがまた漆黒を引き立てる相乗の美。
黒い絹糸のように皇かな髪は風に揺れ、さらさらと音を立てるかのよう。
目元を隔す黒のヴェール、唇には薄紫のルージュ、均整の取れた顔立ちと漂う妖しさは例え目元が見えずともその者の美しさを密かに語る。

そう、それは十字架。

天界や、神といった西洋の思想から言えばこの場所は万魔殿、しかしそこに舞い降りたのは神の御印たる十字架。

しかしそれは漆黒の逆十字、天から堕ちた翼持つ女神の肖像、人に仇成す存在である破面、十刃が一。
十刃第５位、アベル・ライネスという名の十字架が降臨したのだった。

「こうして解放したのは何時ぶりだろうか・・・・・・全てが鮮明だ。　視える全てが、風景が、世界が、そして・・・・・・・貴様がな、第８十刃（オクターバ）・・・・・・・」

闘技場へと振り渡る言葉には、紛れもない感情の色が見えていた。
おおよそ、アベル・ライネスという存在から感じられることなど無かった色。
ある種の満足感、高揚といった正の感情が、その色が言葉から感じられる。

「私は貴様を見誤っていた。　私に解放させた事は評価に値する。・・・・・その無意味な驚愕の顔さえ視せなければ・・・な。」

アベルの言葉通りノイトラの顔は驚きに染まっていた。
ただ解放しただけならば彼はこれほど驚かなかっただろう。
解放した姿が如何に特異であれ、彼はこれほど驚く事は無かっただろう。
だが、だがどうしても、彼は冷静を保てる境界線の際までその理性を振ってしまった。
そのたった一つの事柄が、只の記号だと割り切れば済むものが、彼の顔に驚愕を映し出したのだ。

アベル・ライネスが”女性である”という一つの事柄が。

「どいつも・・・・・・　どいつもこいつも、俺の邪魔をしやがるのは皆、”女”ばかり・・・・・・見下し、哀れみ、慈悲という名の自己満足で、俺の牙に泥を塗る・・・・・・」

低く、地の底から搾り出したようなノイトラの声が響く。
アベルの姿を見上げるのではなく、俯く様にして放たれる言葉。
それはノイトラ・ジルガという破面の逆鱗、メスに劣るという事は彼にとって禁忌に等しく、決して許容できるものではなかった。
2年前の彼ならばこのまま理性の鎖は脆くも千切れ、”愚”を曝すだけの獣以下の存在へと成り果てていただろう。

「だがな・・・・・・　だが、そんなもんはどうだっていい。俺は、テメェさえ殺せれば充分なんだよ第5十刃。テメェが女だろうが男だろうが、関係ねぇんだ。」

その手に持った黒い羽を握りつぶすようにして、再び顔を上げるノイトラ。
再びアベルと対峙したその顔に、最早驚愕は、そして怒り狂った気配は無かった。
あるのは純粋な”青い怒り”
敵と自分の区別すらなく諸共に焼き尽くし、触れる全てを消炭にす

るような怒りではなく、ただ己の敵と定めた相手だけを殺す為、理性を保ちながら完全に燃焼する怒りがノイトラに浮かんでいた。

「ほぅ・・・・・・　霊子の揺らぎを見る限り、その言葉、偽ではなさそうだ・・・・・・だが判らないな、メスだからという無意味な理由で前第3十刃を付狙った貴様がどうしてそう言える？2年の間に趣旨変えしたか？」

「テメェに話して聞かせる心算は無ぇ。　それに・・・・・・これから死ぬヤツが聞いたところで、そんなもんは無意味だろうが。」

「・・・・・確かに。　貴様の2年に興味はあれど、これから死ぬ者が語る過去など無意味だ、今貴様が語るべきは、遺言より他あるまい。」

言葉、意地の応酬、そしてアベルの言葉が契機となった。
ノイトラは握りつぶした羽を投げ捨て、砂漠に突き刺した大鎌をその手に握る。
４本の大鎌は振り被られ、その大きさと相まってノイトラ自身の存在感自体を巨大化させていく。
対してアベルは中空に留まったまま微動だにしなかった。
その様子は一見して、ノイトラの攻撃を受けて立つ余裕の現われに見える。
強者たる余裕、上位者として下位の者の攻撃を受けてたつという度量の大きさなのか。

しかし、そうではない。
アベルの攻撃は既に始まろうとしているのだ。

アベルの留まる中空、そこで丁度彼女が背にしている空間が渦を巻くようにして収束する。
否、収束しているのは空間ではなく霊子、収束する渦の数は四つ、そのどれもが掻き集められる様にして中心へと集まり、そしてその収束は何時しかアベルの霊圧と同じ、灰色の破滅呼ぶ砲弾を造り出した。

「啄ばめ・・・・・・収虚閃（セロ・レウニール）。」

アベルがゆっくりと片手を挙げ、ノイトラを指差すように向ける。
するとその令を待っていたかのように、四条の灰光がノイトラを目掛け襲い掛かる。
撃ち下ろされる様なそれは狂いなくノイトラを捕らえ、飲み込むべく迫り、ノイトラは迫り来る灰色の光をそれぞれその手に持つ大鎌をもって受け止めた。
前へと突き出されるようにされた大鎌、腕を伸ばし、渾身の力でもってその光を受け止めるノイトラ。
弾かれそうになる大鎌をその膂力にものを言わせて押さえ込み、アベルの放った四条の収虚閃と拮抗させる。
いや、それだけではない。
ノイトラの足が一歩、また一歩と前に出る。
そう、ノイトラはアベルの放つ収虚閃をその大鎌で受け止めながら、前進しているのだ。
倒すべき、殺すべき相手へと向かい一歩ずつ。

拮抗する灰光と大鎌、その拮抗は進歩だ。
5番と8番、数字でみれば如何程のさも無いそれは、しかし十刃に置き換えれば大いなる隔たりだ。
それが今、紛い形にも均衡を保ち、それだけで終わらず大鎌の男は

その歩を進める。
アベルが全力を出していないのか、それともノイトラが力をつけたのか、理由はどうあれ現実としてノイトラは攻撃を受けながらも退かず、アベルに対抗しているのだった。

―――――――――

そうしてアベルの灰光を受け止めるノイトラを、高みより見下ろす藍染の顔にはやはり黒い笑みが浮かぶ。

「あら～。　５番サンが女の子やったのも驚いたけど、８番サンもやるもんやなぁ。・・・・・藍染様、一体・・・彼に何をしはったんです？」

感嘆の声を上げたのは、藍染の隣に控えていた市丸ギンだった。
彼からしてみれば眼下に広がる光景は、想像以上のものであり、彼が言ったとおりアベルが女性であった事は当然の事ながら、そのアベルに対抗するノイトラの姿もまた、驚きの対象だった。
その市丸の疑問に、藍染は「そうだね・・・・・」と小さく前置きし、語り始める。

「ギン。　君は”蟲毒（こどく）”というものを知っているかい？」

「はぁ、蟲毒・・・ですか？」

「そう、蟲毒・・・・・・　現世において古代では、一つの壺の中で様々な毒虫、更には蜘蛛、蜥蜴や蛙といった生物を閉じ込め、に互いを喰らい合わせ、最後に残った一匹を呪物として用いたそうだ。その思想、私には非常に興味深かった・・・・・・だから創ったのだよ、私も。」

蟲毒という耳慣れぬ言葉に、市丸は聞き返すようにして藍染の言葉を待った。

藍染が語るところ、蟲毒と呼ばれるものは一種の儀式であるという事、”呪い”という非科学、超常の産物を体現させると信じられていた時代において、その蟲毒という手法は用いられていたと。

空腹の中、殺し、喰らい合う。

喰らうのはその血肉だけではなく、その者の持つ毒までも、そしてなにより殺された者の怨念をその身に取り込み、最後に残った一匹を蟲毒と称し完成とする。

藍染はその蟲毒といった呪詛的手法に興味を示し、それを創ったというのだ。

それを聞く市丸は、無言のまま一体何処にそれを、といった視線を藍染に送る。

藍染もその無言の問に答えるように語りだした。

「この闘技場、これこそが私の蟲毒の壺そのものさ。互いに命を懸けて殺しあった者達、勝利者の歓喜、だがそれに倍する敗者の怨念がこの場には満ちている。血肉を撒き散らす戦いの末、死した者の

怨念、勝者を嫉む嫉妬、この場に立つことすら許されない自らの弱さへの蔑視と裏返された鬱屈、まさしく怨毒の壺に相応しいと思わないかい？」

「・・・・・なんやあんまり愉しそうな話とちゃいますね。」

「そうかい？　だが座興とはそういうものさ。しかしね、ギン・・・これではまだ足りないのさ。いかに怨念があれどその器が、肉体が無ければ蟲毒は成立しない。だから私はこの闘技場を選んだ・・・・・ここならば、器を見つけるのに事欠く事はないからね・・・・・・」

藍染の語る蟲毒の内容に、市丸は若干の不快感を滲ませる。
おおよそ趣味が良いとは言いがたいその内容、しかし藍染はそんなことは気にせずに自らの蟲毒を語る。
闘技場という場所、本来ならば命ががけで戦うその場に藍染は、自らの思惑を持ち込んだ。
いや、そうではない。
その藍染の思惑のためだけに、この闘技場は造られたのだ。

「この闘技場の地下にはね、ギン。　特別な結界が構築してあるんだ、魂魄の輪廻を阻害する結界が・・・ね。」

藍染がいとも簡単に口にしたその言葉は、世界に対する反逆の言葉だった。
魂とは輪廻する。

世界に満ちる魂、現世、そして死後の世界である尸魂界（ソウルソサエティ）、まるで天秤のような関係性である二つの世界の魂の均衡は常に保たれているのだ。
それはこの虚圏でも同じ事、死した魂は霊子へと還り、そして長い年月をかけて現世へと輪廻するのだ。
だが藍染はその輪廻すら掌中に納めんとする。
まさしく大逆、それ以外の言葉で形容できぬほどの罪をこの男は、平然とやってのけているのだ。

「ギン、君はどう思う？　生まれ、生き、そして死に、また生まれる。その全てを誰かに管理されているかのように生きる……産声をあげ、再びそれを上げる瞬間に至るまで、私達は支配されている……とは思わないかい？」

「それは……」

「誰に許されてそれを行うのか、誰がそれを望んだのか、誰にも答えることは出来ず、そして私はそれを望まない。　もしそれに、誰の許しも必要ないと言うのなら……私も支配しようじゃないか、その魂の輪廻と言うものを……
この闘技場で死んだ破面達は、一体何処に行くと思う？　皆諸共にその地下の結界に突き落とされるのさ。そして霊子に還り輪廻する事を許されず、其処に満ちた怨念に獲り憑かれ、互いの肉と怨念を喰らい合うのさ……」

瞳の暗さを増したかのような藍染。
その言葉には、彼の真意が、本当が見え隠れしているようだった。
太古よりそう決められていた、均衡を崩すことは許されないと。
だが何故自分がそれに従わねばならないのか、なぜその支配を自分

は受け入れなければいけないのかと。

「ノイトラはね、この2年間その結界の内側でその亡者と怨念を相手に殺し合い、そして喰らっていたのだよ。濃縮された怨念、それを取り込み己の力としたんだろうね。本当にそれが可能なのかは判らない・・・・・だが力とはそういうものさ、自分がそれを”得た”と思った瞬間から、それはもうその手のうちに”在る”という事なのだろうね・・・・・・」

そう言うと藍染は肘掛に肘をつくようにして座りなおす。
もう語ることはないといった雰囲気で、再び眼下で行われる戦いに興じるために。
それを見る市丸もまた、その雰囲気を察したのか声をかけることはしなかった。
只一つ、この男の哀れさを感じながら・・・・・・

―――――――――――

一歩一歩、アベルへと近付くノイトラ。
近付くにつれ、その大鎌で受け止める灰色の光は威力を増していく。

それでもノイトラが歩みを止めることは無かった。
彼がアベルを殺すには、その大鎌のとどく距離まで近付かねばならず、直接攻撃以外に戦闘方法を持たない彼には愚直な前進より他に、選択肢は無かったのだ。

そうして近付くノイトラに対し、アベルはその灰色の虚閃を緩めなかった。
アベルの収虚閃は自らの霊圧の余剰分を収束して放つ技、余りを掻き集めただけの虚閃ではあるが、それ故に霊圧消費は少なく、何よりその照射時間の長さが最大の武器である。
虚閃として放った霊圧すら還元率は大分低いながらも回収し、再びの砲撃とする。
通常の十刃が放つ虚閃に比べ、その時間は倍にも達する長さなのだ。

（遅くはあるが、確実な一歩を選択したか・・・・・・全身の霊圧といい、予想以上の成長を遂げている。・・・・・・評価には値する・・・か。）

虚閃を放ちながらも、ノイトラを観察する余裕を見せるアベル。
自分の虚閃を受け止め続け、尚且つその足を進める。
無理に弾き返すのではなく、受け止め、更には流す事でその身にかかる負担を軽減している様が、アベルには良く視得ていた。
その姿は2年前と同じ男とは想像もつかないほど、確実な成長、そしてなにより精神的な強さが今アベルが視るノイトラにはあった。

「グッ・・・・・・　ウルラァァアアァアアア！！

アベルへと近付いていたノイトラ。
ノイトラはその歩みを止めやや大きめに足を開き、しっかりと砂漠を掴むようにして立つ。
そして大鎌を持つ４腕の筋肉が一回り隆起したかと思うと、大鎌に受けていた四条の光を文字通り四方へと弾き飛ばした。
４本のうち２本は砂漠へ突き刺さり爆塵をあげ、もう二本は斜め上に弾き飛ばされ闘技場と観覧席を隔てる結界へ衝突し、猛烈な光を発する。
中空に留まるアベルにまで届くほどの爆塵、アベルから視ればまるで雲海を視るかの如きそれ、そしてその中から砂煙の尾を引くように勢い良く飛び出してきたのはノイトラだった。
アベルよりも更に上、そこから大鎌を振り被った格好でアベル目掛けて急降下するノイトラ。
４本の凶月の欠片が鈍く光り、、アベルにその刃を突き立てんと襲い掛かる。

しかし飛来する月光の刃を前に、アベルはなんら動く様子を見せない。
それどころか上空から落下するノイトラに対し、一瞥すらくれる様子もなかった。
だがそれはアベルにとってなんら問題ではなく、そもそも今のアベルに視線を向けるといった動作すらそれ程必要ではないのだ。
それを行わずとも、アベルには全てが視えている。

そう、全てが。

ノイトラの刃が数瞬の後にはアベルを捕らえるか、というその時、ついにアベルが動いた。
動いたと言っても彼女がしたのはその翼で羽ばたいた、という只それだけの事。

だがそのそれだけの事が、現状に劇的な変化を齎した。
ノイトラの身体が、アベル目掛けて落下していたノイトラの身体が再び上空へと昇ったのだ、まるで弾かれるように。

（なに！？　なんだ、これは！　クソッ！圧し、戻される・・・・・！）

そのまま体勢を崩したノイトラは、砂漠へと落下し激突寸前で体勢を立て直すと砂漠に突き刺さるように着地する。
不快な事象が自分の身体を襲ったことにノイトラは困惑していた。
確かに自分はアベルに対しその刃を向け、数瞬の後には打ち込んでいたはずなのにそれが叶わなかったと。
なにか巨大なものに圧し戻されるようにして弾かれたのは、一体なんなのかと。
目の前にいたはずの敵はまた上空へと、そしてその敵がした事と言えばただその黒い翼を羽ばたいただけだと言うのに、と。

「解せないか？　何故自分が落されたのか。　簡単な事だ、お前が無意味に発した霊圧、私はそれを流れに乗せ、押し返したのだ。たったそれだけ、しかし効果は絶大。　お前の霊圧が強力になったが故に・・・な。」

簡単な事、アベルはそれをそう言い切った。
ノイトラの発する霊圧、それをアベルはその羽ばたきによって作った霊子の流れに乗せ、そのままノイトラにぶつけたのだ。
言うは易し、行うは難し、相手が無意識に発する霊圧を全て把握し、その流れを予測し、流れを自分の霊圧、霊子を持って誘導し一つの大きな流れとして相手にぶつける。
精密すぎる霊圧操作、全てを視る”千里眼”を持つアベルだからこ

そ出来る技であることは言うまでもない事だった。

「さて・・・・・・　私の収虚閃を受け止め、更には弾き反撃にまで至った事は評価に値する。だが無意味だ・・・・・・　宣言しよう、次の収虚閃の数は”六”だ。どうする？　いい加減出したらどうだ、無意味に隠すその残り2本の腕を。」

見通す、何処までも。

アベルは宣言する、次の収虚閃は六条となると、そしてそれを防ぐにはノイトラが隠しているという腕を出さねばならないと。

外見からそれを判断する事は不可能、それはある種ノイトラにとっての切り札、勝利するために手段の一切を選ばぬノイトラ。

それが奇襲であろうが不意打ちであろうが、彼が求めるのは勝利であり過程ではないのだ。

重要なのは結果、勝利したという結果、敵を殺し、自分の方が強いという事を証明したという結果だけ。

故にノイトラは隠していた、ここぞという時の為のまさしく奥の手を。

「・・・・・チッ！　どこまでも見透かしやがって・・・・・・何でも知ってるって顔して俺を見下しやがる。俺の方が弱ェと決め付けやがる・・・・・・満足か？　俺をコケにして・・・・・・えぇ？満足かって・・・訊いてんだよ！！」

「・・・・・・無意味な問いだな、第8十刃。満足する、しないという問題ではない。　それが私にとって、そして貴様にとっての純然たる事実だ。」

何処までも噛み合わない二人、それは平行線、何処までも、そして何時までも交わる事のない二本の線。
だがその線には“差”がある。
灰色の線は、常に黄色い線の一歩先を往くのだ。
黄色の線が如何に必死に喰らいつこうとすれども、その牙が届く事はなく、牙は空を噛むにとどまるのみ。
追いつけない、追い越せない、故に腹が立つ、故に気に入らない、故に・・・・・・

「うるせぇ!!　事実が何だってんだ!　なら俺が捻じ曲げてやる!テメェが謳うクソ以下の事実を!!　見やがれ!コイツが俺の、全力だァァああ!!!!」

それはノイトラの魂の叫びだった。
突きつけられた事実、そしてそれはおそらく真実なのだろう。
客観的にみてノイトラに勝機は無く、死肉と怨念を糧として身につけた”力”をもってしてもそれは覆らない。
だが、だからと言ってそれを納得する訳がない、出来る訳が無いのだ、彼が、ノイトラが男であるが故に。

彼の目的、それは戦いに生きる事。
呼吸一つとってもそれは常に戦場、戦いの中においてするものであると、そして戦いは更なる戦いを引き寄せ、その連鎖の中自分は死ぬのだと。
戦いを求めるための最強、そして何より死を求めるための最強。
戦いの中で死ぬ事、それ以外は彼にとって恥を曝すことに他ならず、その恥を忍んでまで立ったこの戦場で勝てぬからといって退くことなど、彼に出来よう筈もない。

ノイトラの脇の下、両の肋（あばら）の辺りから４腕と同じ外骨格を纏ったような腕が生える。
それを含め６腕となったノイトラは、更にその増えた腕の手首を返すように動かす。
すると手首の付根から黒い棒状の物体が飛び出し、そしてその棒から跳ね上がるようにして鈍い色の刃が現われ、大鎌となる。
６本の腕、６振りの大鎌、そして先程よりも更に増して吹き上がる黄色に輝く霊圧。
雄々しき姿、まさにそれが彼の全力である、ということを示していた。

そしてそのノイトラに六条の灰光が降り注ぐ。
降り注いだ光はその全てをノイトラの大鎌によって防がれるが、アベルはそれに構う事無く照射を続ける。

「叫び、罵り、粗暴を振舞いながらその実、霊圧は多くを語る・・・・・無意味にもまだ私に挑み、そして勝つと、そう考えているのがその研がれた霊圧から良くわかる。無意味だ・・・・・・　何故諦めない・・・・・・」

「テメェには一生判りゃしねぇよ。　何でもかんでもテメェで決め付けて、始めっから諦めてるテメェにはな！」

降り注ぐ光を受けながらも、ノイトラは一歩たりとも退かなかった。
負けられない、いや負けない、それも違う、勝つのだと、その気概によって降り注ぐうちの一本を掻き消す。
しかしアベルは慌てる事無く次の砲弾を用意し、即座に照射を再開

する。
それすら無意味だと言わんばかりに。

「違うな・・・・・・　私は決め付けているのではなく、理解しているのだ。私に、そして他人に可能な事、不可能な事というものを。」

「それが決め付けてるって言ってんだよ！　霊子が見えるご大層な眼だか知らねぇが、その眼で俺の上っ面と、内臓が視えたら俺の全てを判ったとでも言う心算かよ！クソ５番！」

「・・・そうだ。　それさえ視えれば事足りる。判断材料としては過分とも言えるな。」

冷淡な声が響く。
感情の色を見せたかと思えたその声、しかし今はその色はなりを潜め無色に、そして無機質に変化していた。
怒りと、そして勝つという意気を噴き上げるノイトラに対し、アベルは余りにも平坦。
起伏を見せないその声でノイトラの言葉を肯定する。
霊圧と、霊子の流れと、そして肉体を構成する霊子構造、これだけを視れば全ては済むものと、それ以上何がいるのかと彼女の声は彼女が、真実そう思っていることをその冷淡さで表す。
余りにも歪で、しかし彼女にとっての真実を。

「ふざけんじゃねぇ！！　俺をテメェが計るだと・・・？俺は”最強”だ！　俺は俺の”最強”を！俺自身の手で示す！テメェが端から諦めて、一生出来ねぇ事を！この俺が示してやる！　最初から逃げ腰の腰抜けが・・・・・俺の・・・　邪魔を、すんじゃねぇエ

ェエエエエ！！！」

叫びと共にノイトラは更に霊圧を解放する。
放たれるそれはアベルの灰光を押し退け、形を成せぬ程切り刻んだ。
ノイトラのそれは限界を超えるような行い。
自分の身体、自身の今後、その全てを度外視し、ただ一瞬目の前に浮かぶ十字架を叩き折る力を、自らの内から呼び起さんと。
死肉を喰らい、怨念に蝕まれ、出会い、失い、それでも失わなかった己。
その己という証を打ち立てるためにノイトラは今を駆ける、今こそが駆け抜けるときだと。

ノイトラは砂漠を駆けると、一息に跳び、アベルの眼前へと瞬時に移動する。
振り被られた大鎌は先程よりも増えた６本、必殺を誓った６撃を前に、アベルはやはり動かない。

一発目の斬撃が振り下ろされる。
だがそれは途中で止まり、しかし弾かれる事はなかった。

（想定以上の霊圧・・・！？　全てを弾くのは不可能か・・・・・・ならば！）

ノイトラの必殺を誓った一撃は、アベルの想定以上の霊圧を纏い彼女に襲い掛かっていた。
本来ならこの一撃だけでノイトラの身体ごと弾き返そうとしていたアベルだが、彼女に視えているもの以上の力をノイトラは発揮している。

それに若干の困惑を内心で浮かべながら、アベルは即座に別の方法に出た。

アベルの眼前で彼女の霊圧と、いや、己と彼女の霊圧と拮抗していたノイトラの腕が、グシャリと音を立ててあらぬ方向へと曲がる。
それはアベルが面としてノイトラを押し返すのではなく、方向性を持たせて霊子を流し、ノイトラの腕を捻るようにした為。
ノイトラを激痛が襲う。
しかしその程度で今のノイトラが止まることはなかった。
2本目、3本目と攻撃するノイトラの腕は、しかしその全てを捻折り曲げられる。
それでもノイトラは止まらない。
彼の矜持、彼の決意がそれを許さないが故に。

（気でも振れたか、第8十刃？　このままでは貴様の十刃としての・・・いや、破面としての未来が終わるぞ。無意味な戦闘によって無意味な傷跡を残すのは愚かしいにも程があるというのに・・・・・・貴様は一体何がしたいと言うのだ・・・・・・）

思考するアベル。
だがその思考に明確な答えは出ない。
出るはずが無いのだ、如何に素晴らしい眼を持とうと、如何に相手の霊子を視、如何に相手の動きを高い精度で予想できようと、その答えは出ない。
それは彼女の眼でも視る事が出来ないから、そして誰しもがその眼にすることが出来ないから、故に触れ合い、互いに確かめ合うことでしか存在できない存在の為。

”こころ”という破面にとって何よりも近く、そして遠い存在ゆえだった。

一瞬の思考はしかしアベルに一瞬の隙を生んだ。
振り下ろされたのは1本ではなく3本。
ノイトラの持つ残り全ての大鎌が、アベルを突き刺し、切裂かんと振り下ろされた。

アベルは弾き返す事が不可能だと瞬時に判断すると、その翼を渾身羽ばたき、響転によってその場を逃れる。
黒い髪は波打つように揺れ、ドレスもその裾を僅かに揺らす。
それは彼女が移動したため、そしてそれは回避行動、そう、避けたのだ、ノイトラの一撃を、全てを有利に運んでいたはずのアベルが。
ノイトラはその必殺の一振りが避けられると、襲い来る激痛に耐えながら砂漠へと下りた。
そのまま留まってもよかったが、今は足場に割く霊圧すら惜しいと、そうするくらいならば全てを手に握った大鎌へ送るためにと。

対してアベルは自分の現状に戸惑っていた。
何故自分が避けなければいけないのか、解放前ならばいざ知らず、帰刃状態での回避など今までした事が無かったと。
そしてふと、アベルがその手を視れば、赤が、赤い液体が流れていた。
それはほんの少しではあるが、彼女がノイトラによって傷を負ったということ、傷を負わされたという事の証明。
その傷を視て、アベルは己の一瞬を悔いた。
只の一瞬、思考が挟まれたせいで自分は状況を悪くした。
それはあまりにも非効率的、言ってしまえば無意味な行為でしかないとアベルは結論付ける。

無意味な思考、ならばその思考した内容自体が無意味だと。
そうして悲しくも結論付けてしまった。

そしてアベルは決断する。
これ以上戦闘を長引かせるのは得策ではないと、長引けば先程のような状況が、そしてまたあの無意味な思考が浮かび上がるのではないかと。
故にアベルは勝負を決するために動き出す。

「貴様の無意味な特攻に付き合わされるのは不快だ・・・・・・故に早々に決着とさせてもらおう、第８十刃。」

「なに・・・言ってやがる。　それはテメェが決めることじゃねぇだろうが・・・・・・」

「いいや、私が決めることだ。　見えるか？　貴様の周りにあるモノが・・・・・・」

アベルの言葉に視線を奔らせるノイトラ。
彼の周りにある物、白い壁、白い砂、それだけの筈だった、ただノイトラの目にはもう一つ、異彩を放つモノが映ってしまった。
そう、それは”黒”。
白い砂漠のそこかしこに、黒い羽が落ちているのだ。
敷き詰められるほどではないにしろ、闘技場の円形の砂漠に満遍なく配された黒い羽、それはノイトラの周りでも同じ事だった。

「私が・・・・・・　無意味に羽を撒き散らしていたと、そう思っ

ていたのか？ならば稀に見る浅慮だな、第８十刃。　知るがいい・・・・・その黒い羽の全てが、貴様を啄ばむという事を。」

ノイトラが跳び上がろうとするのと、アベルがその翼をはためかせるのは同時だった。
強い風がノイトラを圧し戻し、砂漠へと釘付けにする。
そしてその風は砂と無数の黒い羽を舞い上がらせ、その風に乗せ運んでいく。
乱気流、乱れる風のうねりと視界を覆う砂と黒。
最早ノイトラからアベルの姿を見ることは叶わず、彼はその檻に閉じ込められてしまった。
アベルの創り出した黒い檻に。

（チッ！　なんだ!?　コイツは・・・・・・何も、見えねぇ！）

捻られ、折り曲げられた腕はダラリと垂れ下がり、健在である腕の一本を目の前に翳すノイトラ。
しかし視界は砂と、それ以上の黒い羽に遮られまったく無いといった状態。
この状況を生んだのは間違いなくアベルであり、いったい自分をここに閉じ込めてどうする心算なのかと怪しむノイトラだったが、それは後手。
既にアベルは体勢を整え、攻撃は始まろうとしていた。

（ッ！・・・なに!?　斬られている・・・だと？あの女ァ、一体何しやがった！）

残された腕の一本に鋭い痛みが奔り、ノイトラはその腕を確認した。
するとそこには一筋の赤い傷跡、そうそれは間違いなく鋭利な刃物によって切裂かれたのと同じ傷跡だった。
何時斬られたのかすら判らぬほどの早業、一体誰が、そんなことを考えるノイトラだがそんな事は判り切っていたと再認する。
アベル・ライネス、今この場でこんな事をやってのけるのは、あの忌々しい女しかいないと確信したノイトラ。
しかし方法がわからない。
どうやって斬りつけたのかすら、だがその思考の余裕をアベルが与えるはずが無かった。
次々と、ノイトラの身体、それも身体のあちらこちらが鋭い何かで切裂かれていく。
刃物が近くにあるわけでもなく、在るのはアベルの黒い羽のみであるというのに。

「羽・・・？　羽が啄ばむ・・・・・？　ッ！クソがぁ！　嵌めやがったな！　５番（クィント）ォォオオオ！！」

「嵌めたのではない。　貴様風に言うなら、布石（・・）だろう？第８十刃。
私は始めから用意していたのだよ、私の黒い刃達（・・・・）を・・・・・・」

ノイトラの叫びに、黒い視界の向こうからアベルの声が答えた。
そう、ノイトラの周りを飛び交う黒い羽、その全てがアベルの”刃”なのだ。
彼女の霊圧を通す事で刃となる黒い羽、アベルはそれでノイトラを覆いまさしく刃の檻を創り出していたのだ。

それに気付いたノイトラは、それから抜け出すべく残った３本の大鎌を振るう。

しかし、振るった大鎌がアベルの刃達を捉えることはなかった。
まるでノイトラの大鎌を避けるようにして舞う刃達、そして避けたそれはノイトラを嘲うかのように彼に傷跡を刻んでいく。

「クソが・・・・・・　クソッタレがぁぁぁぁあああ！！！！」

「無意味だよ、第８十刃。　こればかりは本当に無意味だ。今、私はもてる探査神経（ペスキス）のほぼ全てで貴様を完全に捕らえている。そしてその私が操るその檻から抜け出すことは不可能。貴様は既に詰んでいるんだよ。」

アベルの刃は霊圧の流れに乗っている。
その流れをアベルは完全に制御し、また標的であるノイトラの全てをも捉えた彼女の前では彼は余りに無力。
刃を叩き落そうにも、刃はノイトラの放つその霊圧の大きさ故に避けてしまうのだ。

上空から落ちる一枚の紙を掴み取ろうと、また、水中に漂うモノを掴もうとする時、早く、そして強く掴もうとすればするほどそれは逃げるようにして手をすり抜ける。
それと同じなのだ、空気中なら空気の流れが、水中なら水の流れが、見えぬそれはしかし確かに私達の動きによって生じ、それによって欲しいものはすり抜けていくのだ、その手から。
今、ノイトラに起こっているのはそういう事。
強い霊圧、強力な一撃は強いが為に流れを生み、それによって黒い羽はその一撃をすり抜け、そしてその流れに巻き込まれるようにしてノイトラを切裂くのだ。

これがアベルの必勝の構え。

その大量の刃で相手を包囲し、閉じ込め、そして屠る。
超精密な霊圧操作を要求するそれは、千里眼によって全てを把握できる彼女だからこそ出来る技、

「短剣の軍勢（エヘルシト・ダーガ）。　黒翼の檻の中、啄ばまれ、潰えるがいい・・・・・・」

その呟きはノイトラにとって死刑宣告に等しかった。
如何にその霊圧を増そうとも、如何に限界を超えようとも、それが逆に彼を追い詰める。
そして探査神経のほぼ全てを使って彼を捕らえているのはアベル。
手加減、慈悲といったものは今、この場に挟むはずのない人物、故に彼の死は最早確定事項。
別ったのはたった一瞬、一瞬でも早くノイトラが跳び上がっていれば結果は変ったのかもしれない。
だがそれも今は無意味な事。
現実として彼は捕らえられ、このまま切り刻まれるしかないのだから。

そう、誰もが思っていた。

「あぁん？　この”神”たるオレ様に、何の許可も無く飛んでんじゃねぇよ！塵雀がぁぁあああ！！」

狂乱の暴君が現れる、その瞬間までは・・・・・・

その男

暴を好むが性
その男
暴を振るうが性
その男
全てを殺すが性

BLEACH El fuego no se apaga. 43（後書き）

出来る限りのことはしました。

ノイトラにはツライ展開となってしまった。
でも自分なりに彼の成長と見せ場は作ってやれたかと思います。
台詞も増やしてみました。
まぁ罵りあいですけどねｗ

ですが・・・・・・

ここでヤツが登場するんです！
前々から決めていた流れではあるんですが、やっぱこいつダメなヤツだなｗ
てか、今までの読者様の反応からすると、塵雀と呼んだ時点で嫌われるなマジでｗ

これからこの強奪決闘篇は佳境へと向かいます。
そして、いつ登場する！？主人公よ！

下卑な声と、それが飛来するのは同時だった。

飛来するのは緋色の弾丸。

瞬(またた)きの間に疾走するそれは、まるで吸い込まれるように美しき黒翼を撃ち抜いていた。

「な・・・に・・・・・・・？」

そう呟いたのはアベル。

中空に留まり、眼下で吹き乱れる砂と黒い羽の嵐の全てを制御していた彼女の口から零れたそれ。

驚愕というよりむしろ不可解といった声色のそれは、自らの翼の片割れにおこった事態への困惑の色。

黒い翼に空いた穴、翼の中心が打ち抜かれているという現象に彼女はその困惑を隠せない。

それもその筈、彼女にとって、いや彼女だからこそその困惑は大き

さを増すのだ。
アベルという破面の最たる能力、十刃最高の霊圧知覚を持つ彼女。
身の回り、それも全方向をくまなく視るその探査神経（ペスキス）は、本気になればそれこそ千里の彼方すら見通せるのではないかと言われるほど。
無論そんな事は不可能なのだが、そう思わせるだけの能力を彼女は有している。
その彼女が傷を負った、それもノイトラが与えたような小さなものではなく、彼女を脅かすほどの大きなものを。
翼へと送った視線、それを彼女はゆっくりと別の方向へ向ける。

「第2十刃（ゼグンダ・エスパーダ）・・・・・・ネロ・マリグノ・クリーメン・・・　貴様・・・・・・。」

その視線の先には巨大な男が一人。
筋肉と、それ以上の贅肉でその身体を覆い固めた大男。
手入れなど皆無であろうボサボサの緋色の髪、鬣（たてがみ）を思わせるそれを靡かせながらゲラゲラと下品な笑い声を上げるその男。
首から龍の顎（あぎと）を思わせる仮面を下げ、その顔に紫の仮面紋（エスティグマ）を刻みつけ笑う男の名はネロ。
ネロ・マリグノ・クリーメン、この虚夜宮において最低、最悪、暴威と暴慢の限りを尽くす暴君がそこには立っていた。

視線を送り、ネロの姿を確認するもアベルはそのままゆっくりと落ちるようにして砂漠へと着地する。
翼に負った傷はある種、彼女にとって最も避けねばならないものだった。
超高精度での霊圧操作、霊子の流れを読み取りそれすらも御するその全ては今、彼女の翼が行っているのだ。

彼女にとっての不幸は只一つ。
その抜きん出た探査神経のほぼ全てを使ってノイトラに対していた事。
ほんの一瞬でも彼女を脅かし、そして無意味な思考を行わせた敵を確実に、そして迅速に屠るためのその行為。
常の彼女が使う探査神経を”円”とするならば、今の彼女が使っていたのは”点”。
自分を中心にしたのではなく、標的であるノイトラを中心としその全てを、それこそ揺れる髪の一本すら捕らえようという尋常ならざる精度での探査神経を彼女は使用していた。

しかしそれが彼女に災厄を招き入れる。

闘技場という一対一の空間、そして彼以外の敵の存在を考慮する必要が無かったからこそ使用した。
だがそれは裏を返せば自身の守りを薄くするも同義。
集中する余り疎かになる、しかし敵は自身の檻の中であり完全に自身の監視下にあると、それならば何の問題もないはずという考えは、たった一体の災害に近い破面の登場で崩れ去ったのだ。

彼女に手痛すぎる傷を残した上で。

「ゲハハハハ！　そうだ！　それでいいんだよ！塵ほどの価値も無ぇテメェらは、オレ様に見下され初めて生きてる価値があるんだからなぁ！！」

砂漠へと下りたアベル、片方の翼を大きく傷つけられたため、砂漠

に吹き荒れていた霊圧の嵐は止み、黒い羽もはらはらと再び砂漠へと舞い落ちる。
観覧席よりその姿を見下ろすネロは、それを満足そうに大声を張り上げて笑う。
響く笑い声にも、そして叫ぶ言葉にも、その全てに一切の嘘偽りは無く。
ネロという破面は、本当に本心からその存在する全てを見下している。
自分こそが至高の存在であるということ、それを欠片も疑う事無く信じて、いや、確信しているのだ。

「何の、心算だ・・・・・・第2十刃（ゼグンダ）・・・・・・」

「あぁん？　テメェ耳が無ェのか？　”神”たるオレ様の許可なく飛ぶんじゃねぇと、オレ様が言っただろうが。神の言葉だ、従わねぇんなら制裁は当然だろうが！塵屑（ごみくず）！」

アベルの問にネロは憮然として答える。
自分の許可なく飛ぶことは罪であると、それを神たる自分が罰して何が悪いと。
彼が考え、誰に言うわけでもなく、しかし自分が布いた法に従えと彼は言い切るのだ。
それが当然であると言わんばかりに。

ネロは拳を振り被り、そして突き出す。
そしてそこから生まれるのは、アベルの翼を貫いた緋色の弾丸。
虚弾（バラ）と呼ばれる破面共通の技であるそれを、何の躊躇いも無くアベルにむけて撃ち放つネロ。
しかしアベルも只でそれを喰らう心算などなく、冷静に回避する。

常時のアベルであれば、これくらいのことは当然出来るのだ、故にその翼に負った傷は異常と言える。

「判っていないのか？　これは強奪決闘。　貴様が気紛れで介入すべきものではない、という事が。」

「知るかよ！　玩具（オモチャ）も皆、殺しつくしてオレ様が暇だから態々出向いてやったんだ。派手な殺し合いをみせろ！　オレ様を満足させる為に死ね！」

暇だから、たったそれだけの気紛れでこの場に現われたネロ。
玩具というのは2年前、藍染が彼に用意した一万人分の魂魄のことだろうか、それを殺し尽してしまったというネロ。
そしてその暇だからというたったそれだけの理由で、決闘に横から割り込んだのだ。
あまりに無粋、無粋の極地たる行動。
だがネロ本人にそんな自覚は露ほども無い。
あるのは只一つ、神たる自分の暇をそれ以下の塵芥の類が愉しませるのは、当然の義務だという捻れ、屈折した思考のみ。

その余りに愚かしく、独善的で自己中心的な行動でこの決闘の場は穢（けが）されたのだ。

ネロはアベルの言葉などお構い無し、両腕から交互に虚弾をアベル目掛けて撃ち続ける。
アベルとてそれを避け続けているのだが、そんなことすらネロにはお構いなし。

闘技場は見る間に惨状を増し、砂は抉れ、壁は結界が在るにも拘らず罅割れ、崩れていく。
アベルと同じようにこの闘技場事態も傷ついていた。
度重なる破面同士の戦闘、そして極めつけは十刃クラスの連戦。
本来それを考慮されていないこの場所に、もうこれ以上の衝撃を防ぐことも、崩壊を止める事も出来る訳が無かった。

（クッ・・・・・　第8十刃以上に論理的思考の無い・・・・・・・只の単細胞が・・・宮殿に篭り、虚飾と陶酔で塗り固めた偽天の座に収まっていればいいものを・・・・・・）

そうしてネロの攻撃を避けつつもアベルは一人、内心毒づいていた。
アベルにとって理論的思考の無い者は、取るに足らない存在である。
先程のノイトラとのやり取りをみれば判るとおり、彼女に感情面での機微を期待するのは難しく。
それから派生する理論を無視した行動もまた、理解から遠い存在なのだ。

だがネロはそのノイトラ以上に理論というものが当て嵌まらなかった。
まずもって論理的思考というものを、ネロが持ち合わせているかが怪しい。
自分の正当性、それこそが万物に共通する真理だと盲信し、一分の疑いも抱かないネロ。
何故、どうして、という思考がその考えには挟まれていないのだ、自分がこう考えている、故にそれは正しく従わぬ方が悪い、それを罰して何が悪いと。

今もゲラゲラと醜悪な笑い声を上げ続けるネロ。

その姿をアベルはそのヴェール越しに眼にし、嫌悪感を顕にする。
そしてあんなモノに傷を付けられた事を何よりも恥じていた。

「逃げ回ってんじゃねぇよ！　派手に弾けて死ね！　雀女ぁぁああ！！」

叫びと共にネロは大きく振り被り、今までで一番強力であろう虚弾を放つ。
しかしアベルは確実にそれを捕らえている。
そのアベルがただ真っ直ぐに飛んでくるだけの霊圧の塊を、避けられない筈がないのだ。
いや、筈がない筈だった。

（何時までも無意味な攻撃を・・・・・そんなものに当たるはずがなッ・・・何だと！？）

響転による回避を試みるアベル。
しかし初動へと移ろうとした瞬間、彼女の膝がガクリと落ちる。
彼女も気がつかなかったある種の盲点、それはほんの一瞬顔を覗かせた疲労によるものだった。
その千里眼と呼ばれる類稀な探査神経を持って他者の全てを見透かすアベル。
更に解放する事でその能力は増し、相手の内部構造すら視ようと思えば視えてしまう程、しかしそうして能力を使うには並々ならぬ集中力が必要である。
集中する事、それだけならばいいだろう、だが集中する事と集中し続ける事は違うのだ。
特にアベルの場合、今この状況に至るまでノイトラと戦っており、

その戦いの中精密な霊圧操作とそれに付随する探査神経の常時全力使用。
更には切り札である『短剣の軍勢』を使用した結果、アベルは彼女が気付かぬほど疲労をその身に抱えていた。
他者を見透かすアベル、しかしそれ故に自分を、自分という存在を見るということを彼女は蔑ろにしてしまったのだ。
それが今、この瞬間顔を覗かせた、この最悪の瞬間に。

（クッ・・・・・　避けられな・・・か。　我ながら呆気なく、そして不様な最後だな・・・・・・）

避けられないと、そう悟った瞬間アベルは諦めた。
彼女の司る死は『諦観』、何もかもを諦めてしまう悲しい価値観。
そして彼女は今、自分が生き残ることすら諦めてしまったのだ、どう足掻こうときっと自分が助かることは無いと。
そうして瞳を閉じ、己の生を諦め、死を受け入れようとするアベル。

「何諦めてやがんだよ・・・・・・・　クソ５番。」

そんな声がアベルの耳に届いた。
ネロの襲撃によってその探査神経を向ける事を止めた存在。
その存在の声が今、彼女に向かって投げかけられたのだ。

「貴様・・・・・・　一体何をしているのだ・・・・・・・」

顔を上げたアベル、その視界に映ったのは自分を殺す為に飛来した緋色の弾丸を、その手に持つ大鎌で受け止めている男の姿。
ボロボロの白い死覇装、そして身体中、顔も、腕も、脚も、胴も、その手に握った大鎌すらも傷で覆いつくし、大量の血を流しながらもその男は立っていた。

まるで死に瀕したアベルを、その身を挺して護かのように。

「ハァァァ、ウラァァアア！！」

咆哮と共に緋色の弾丸をその大鎌で打ち返す。
傷だらけで痛んだ大鎌は、その衝撃に耐え切れずに砕けた。
そして男の腕もまた、その一本が耐え切れずにダラリと垂れ下がる。
だがしかし、それでも確実にアベルはその危機を脱したのだ、先程まで自分が殺そうとしていた相手、ノイトラ・ジルガの手によって。

アベルにはその光景は理解できなかった。
何故この男が自分を助けるのか、何故自分を殺そうとした相手を、何故、何故、何故と思考だけが巡る。
論理的に考えてまず理由が無い、あったとしてもその身を危険に曝してまでそうする価値がない。
あり得ないのだ、アベルにとってその光景は。

だがそうして、まるでアベルらしくもない気の抜けた様子でいる彼女に、ノイトラは無遠慮に近付く。

そして彼女の髪を鷲掴みにすると、そのまま自分の方へと引き寄せた。

「何諦めてんだって訊いてんだよ！　俺を此処まで襤褸カスにしやがったテメェが何諦めてやがる！　ふざけんじゃねぇぞ！　テメェの諦めは！テメェ自身が泥の中を這い回って足掻くのを、足掻いてでも生き残ろうとするのが不様だと！そう思ってるからじゃねぇか！　えぇ！」

引き寄せられたアベルに映るのは、怒りに燃えるノイトラの瞳だった。
それも自分が此処まで傷つけられた事よりも、アベルが足掻く事を諦めた事に対する怒りにに燃えていたのだ。

「何でも諦めた振りしやがって・・・・・本当はテメェが不様に足掻くのが許せねぇだけだろうが！その不様を曝すぐらいなら！泥を這いずり、呑む位なら諦めちまった方が楽だとでも思ってんだろうが！それが気に喰わねぇんだよ！そんなヤツが俺の上にいるのが！スかして見下して、不様を曝す俺を嘲いやがる！俺は諦めねぇ！　泥に塗(まみ)れても必ず勝つ！テメェに気概は無ぇのかよ！　５番(クィント)！」

その叫びはおそらく彼の本心なのだろう。
男と女、オスとメスという己の拘り、２年の時を費やしそのちっぽけな価値観から抜け出した彼には、色眼鏡越しでなく彼女を見た彼にはそれが良く見えていた。
無意味だ、諦めろと口にする彼女、しかし彼にはそれが気に喰わなかった。
その無意味は、その諦めは、挑戦することを放棄し、自分を守ろう

とする口実にしか彼には見えなかったからだ。
自分という存在を一点の汚れなく守りたい、その為に泥に塗れるような事はしない、ならば諦めてしまえばいいと、そんな思考の様に彼には見えた。
無論それは間違いかもしれない、だがそれでも彼はそう感じたのだ。
それ故に彼は負けられないと、泥の中を這い回り続けた彼だからこそ負けるわけにはいかないと、必ず勝つと誓っているのだ。

「貴様が、何を、言っているのか・・・・・・私には・・・理解できない・・・・・・」

「だったら引込んでろ！　戦場に女は！　それ以上に勝利を諦めた奴は必要無ぇんだよ！！」

途切れ途切れ答えるアベル、しかし彼女にノイトラの言葉は理解できなかった。
いくら考えたとて答えが出ない、自分の諦めは論理的、そして総合的に出た結論によるもので、気概などといったありもしない不確定要素は参考に値しない筈なのにと。
そんなまるで急に弱ったかのようなアベルを、ノイトラは髪を掴んだまま持ち上げると蹴り飛ばし、壁の際まで吹き飛ばす。
その言葉通り必要ないと、諦め、勝利の意思無く戦場に立つ者など必要ないとして。

「ゲハハハ！！　とんだ茶番だなぁ～、えぇ？　８番の羽蟲よぉ。にしてもアレは5番だったのか？　見た目じゃ判らなかったぜ。だが・・・それにしてもどういう心算だ？　このオレ様の邪魔をするとはよぉ～。」

「・・・・・臭ぇなぁ・・・・・・・　臭くて堪らねぇ・・・・・・・テメェの臭ぇ息が、ここまで臭うぜ・・・汚ぇブタが。」

「何だと？　　あぁそうか・・・　死に損なったから死にてぇんだろう？この・・・・・・羽蟲がぁ！」

それまで気分良く醜悪な笑いを上げていたネロ、しかしノイトラの一言はそれを一瞬にして憤怒に変えた。
観覧席から勢い良く飛び降りるネロ。
急転直下、爆発が起きたかのような豪音を轟かせて砂漠へと着地する。

「そんな襤褸クソの身体で、オレ様に楯突いた事は褒めてやるよ！だから・・・・・・　じっくり甚振ってから少しずつ殺してやる！」

砂漠に降り立った巨漢、指をボキボキと鳴らすようにしてノイトラに近付いていく様には、怒りと、そして命を刈り取る事への快楽が滲む。
対するノイトラは満身創痍、ネロの虚弾を打ち返しはしたものの、立っているのが奇跡ともいえる状態。
もともとアベルの諦めた様子があまりに気に喰わない、というそれだけで動かした身体だった、それ故今、彼にネロに対する勝機は欠片も無い。
だがそれでもノイトラはその手に持った大鎌を構える。
その数は既に2本にまで減っていたが、それでも彼は戦う事を諦めはしなかったのだ。

だが、気概は何にも増して戦場を左右するが、それでも決定的に変えるほどの力は今は無く。
満身創痍と完全無欠の戦いは、どう転ぼうと完全無欠の暴君に歩があった。

「おらおらどうした！　デカイ口を叩いたんだ・・・その大層な鎌でオレ様に抗って見せろや！　羽蟲ィィイ！！」

ネロはその巨体に似合わぬ速度でノイトラを追い立て、攻撃を加え続ける。
それも一撃必殺ではなく、ただ甚振り、詰る為に加減を加えて。
張り手、鉄拳、前蹴り、踏み付け、その全てにおいてノイトラの身体は面白いように宙を飛ぶ。
それは既に戦いとは呼べず、一方的虐殺以外に他ならなかった。
誰もそれを止める者はいない、誰だって死にたくは無いからだ、態々死地に飛び込むような真似をしたがるものなど居る筈も無いのだから。

「ケッ！　つまらねぇなぁ～。　そう思わねぇか？羽蟲。　これじゃァ人間共を殺し合わせてた時の方がよっぽど面白かったぜ・・・・・」

大きな手でノイトラの頭を鷲掴みにし、持ち上げながらネロはそう零した。
その顔は憤怒から心底つまらないといった落胆へと変わり、しかしその手に込められた力は緩むことは無くノイトラの頭を締め上げる。
ノイトラは然したる反撃も出来ず、ただされるがままにネロの攻撃にその身を曝し続けていた。

これがアベルとの戦いの様に布石だったならばいい、だが今のノイトラにはそれを行うほどの力すら残っていなかった。
その証拠に頭を掴まれたままのノイトラからは急速に霊圧が抜け、そしてその姿は6腕の魔戦士から常の姿へ、そして6振りの月の欠片達は再び背中合わせの双月へとその姿を戻してしまったからだ。

「ゲハハ！　ゲハハハハ！！　おいおい勘弁してくれよ！この程度で解放が解除されるようじゃァとても十刃は名乗れねぇなぁ～。そんな塵はこのオレ様が綺麗サッパリ消し飛ばした方が、オレ様の世界のため、ってもんだろ！」

極度の霊圧消費と、重度の身体的外傷の数々、それはノイトラに帰刃（レスレクシオン）の維持すら困難にさせた。
だがそれは当然、帰刃とは破面にとっての切り札、爆発的霊圧の上昇と殺傷能力の上昇はそれと同等に霊圧も消費する。
更にノイトラは自分の限界すら超えた霊圧をアベルとの戦いで見せ、更にアベルの必殺の計をその身に隙間無く受け止めている。
その上でのネロの攻撃、ノイトラの身体が耐え切れるはず等ありはしないのだ。

それをネロは大声で笑う。
それに至る経緯も、そこまでに至る思いの全てを知らず、知っていたとしてもこの男は大声で笑うだろう。
不様だと、見るに耐えないと、そしてお前は弱者であると。

手に掴んだノイトラをそのまま振り被ると、ネロは勢い良くその身体を投げ飛ばした。
面白いように砂漠と平行に飛ぶノイトラの身体、そして壁に達すると彼の体は壁へと大の字になって深くめり込んだ。

衝撃で壁には大きく亀裂が奔り、めり込んだノイトラは気を失ったのか、うな垂れるようにして頭を下げる。

「塵掃除にはデカ過ぎるが・・・・・・　久々にぶっ放したくなっちまったぜ。オレ様も・・・虚閃をよぉ・・・・・・」

ニヤニヤと投げつけたノイトラの姿を眺めながらネロはそう呟いた。
目の前、そしてその瞬間の衝動というものをこの破面は何よりも優先する。
その先の展望、それをすればどうなるか、などということをこの破面は一切考慮しない。
何故ならそれは正しい行為だから、何にも増して正しい行為、まさしく神の行いなのだからと。

呟きの後、ネロは口を大きく開け、息を吸い込むようにして造り出す、その緋色の砲弾を。
見る間に膨れ上がるその砲弾、禍々しく光る緋色はネロという破面の愉悦の弾丸。
命を刈り取る弾丸なのだ。

「ガァァアアア！！！！」

まさしく吼えるようにして放たれた虚閃。
だがそれは通常の虚閃ではなく、一つの弾丸から幾本もの虚閃が同時に放たれる異様なものだった。
それはノイトラだけでなく、ノイトラが貼り付けにされた壁、更には観覧席に至るまでの全てをその射程に納め進軍する。
直後の着弾、壁に張り巡らされた結界にも着弾したその光の軍勢は、

いとも簡単にその壁を貫き、壊してしまう。
綻びをみせていた結界は、その虚閃の群れに対しあまりに無力だった。

その後訪れるのは悲鳴の嵐と崩壊の音。
安全であったはずの観覧席は脆くも崩壊し、物見気分で戦いを眺めていた多くの破面達に襲い掛かるのは、死を告げる緋色の光り。
光に飲まれ消える者、命は繋いだが避けきれず体の一部を失った者、運よく避けたが瓦礫の下敷きになった者、たった一撃の虚閃が闘技場の一部を崩し、阿鼻叫喚の舞台を作り出してしまったのだ。

「ゲハ！ゲハハハハハ！！　どうだよオレ様の『吼虚閃（セロ・グリタール）』はよぉ！
呆れるほどの威力だと思わねぇか？　えぇ！」

誰に言う訳でもなく、自身の強力なる攻撃に酔うネロ。
それは愉悦であり陶酔、他の誰にも出来ない事、それは即ち自分が特別であり誰よりも上に立っている事に他ならないと。
そうである事を証明しているといわんばかりの笑い声が響く。
狙った標的であるノイトラ、それ以外の多くの破面を巻き込み、闘技場を破壊しながらもそれになんら負い目を感じない。
おそらくそれを責められればこの男ならばこう言うだろう。
自分が攻撃する方向に居た方が悪いと、そしてそれで壊れるような構造のこの闘技場が脆すぎるのだと、故に自分に非はなく悪いのはお前達だと。
そうして笑うネロ、眼前には崩れた闘技場の瓦礫と失われた壁、粉塵とそこかしこから上がる煙が広がる。
闘技場はその一角を失い、その様子を見ていた多くの破面達は強力無比なネロが放った虚閃に恐怖していた。
一部の破面はその後先を考えない傍若無人な振る舞いに溜息をつい

ていたが、それはまた別の話。
粉塵が収まり始め、視界は徐々に開けていく。
だがその視界が開けようが開けまいが、ネロにとってそれは重要なことではなかった。
何故なら全ては消し飛んでいるからだ。
壁に貼り付けたノイトラも、その彼がいた壁も、彼がそこに居たという痕跡の全てを自分が消し去ったと、ネロは確信している。
当然の結末、強力無比たる己の虚閃、それを正面から受けて生きているはずが無いという絶対の自負、それだけがネロには溢れていた。

「ゲハハ！　ゲハハハハハ・・・あぁん？」

だからそれは予想外。
吹き飛んだはずの壁、その一角が者の見事に残っている。
そう、ノイトラがめり込んだ壁だけがぽっかりと、崩壊から免れ、そして逆に抜け落ちたかのように。
不可解な現象、だがそれは誰によるものか直にわかった。

「5番・・・・・　テメェ、薄汚ェメスの分際で、何オレ様の楽しみ奪ってんだよ。」

「奪ったと・・・言うなら、貴様の方だ・・・・・・この男は、私、の獲物だ・・・・・・　食い意地の張った、醜い、獣に・・・くれてやる道理が、無い・・・・・・」

「そいつを殺すのがテメェの目的だろうが！だったら代わりにオレ様が殺してやろうって言ってんだよ！」

「必要、ない・・・・・・　この男は、私が、殺す・・・・・・そ

の無意味な大声を・・・上げるな、口を・・・閉じていろ・・・・・・」

そう、ノイトラがネロの虚閃によって死んでいない理由。
それはノイトラがそうした様に、今度はアベルがノイトラを護った為だった。
残った片方の羽を盾にし、その上を霊子を滑らせるようにしてネロの虚閃を逸らしたアベル。
だがそれでも衝撃は凄まじく、受け流すだけの作業ですら疲労を色濃くした声が彼女の限界を知らせている。
それでも彼女は護りきった、壁で気を失い、無防備を曝すノイトラを。
ノイトラが気を失っていたのはある意味幸いだったかもしれない。
何故ならこうして彼女に護られた、という現実を目の当たりにすれば彼は二度と立ち上がることは出来なかっただろうから。

「私は・・・　この、男の言葉が・・・　理解できない。私の、諦めは、合理性に基づいた・・・　完全な結論だ・・・・・・だが、その結論を、合理性を、この男は超えて魅せた。・・・・・・私には不可能な、事を、一瞬でもやって、のけた・・・・・・ならば・・・　ならば私の、完全性を証明する・・・には、この男を殺すより、他、無い。　故に・・・貴様に殺させる訳には、いかない。」

途切れ途切れに語るその言葉は、彼女の奥底の言葉。
自分という確固たる存在、その考え方を否定された彼女。
自分には不可能、そして他者であるノイトラには不可能だと全てを断じた彼女。
しかし、ノイトラは彼女の攻撃から生き残り、更には彼女を救って

見せた。
彼女の把握しているノイトラの能力ではおそらく不可能だと、出来る訳が無いはずのその行動を彼はやってのけたのだ。

それは彼女にとって価値観の崩壊に他ならない。
そして価値観の喪失は、自己の喪失と同義だ。
故に彼女はそれを認めるわけにはいかない、彼女が築き上げて来たものがたった一瞬の変数によって覆されるなどあってはならないと。
ではどうするか、それは勝利するしかない、勝利し、証明するしかない。
自分が間違っていないという事を。

だから彼女はノイトラを護ったのだ。
自分を証明するためには、自分を脅かした者を倒し、そして証明するより他無いと。

「チッ！　興醒めだ・・・・・・　仲良しゴッコなんか見せやがって、反吐が出る・・・・・・そんなにその羽蟲を護りたいなら、そうして護りながら死に曝せ！塵屑がぁぁぁあああ！！」

吐き捨てるような言葉、心底気持ちの悪いものを見たような、そんな表情を臆面も無く浮かべるネロ。
庇いあう事、助け合う事、それはネロにとって馬鹿らしい行為。
それを見て笑い、罵ることもあれば、今のように怒りを見せることもある。
要するに気分次第なのだ、彼にとって全ての事は、全てを握っていると盲信する彼だからこそそれは顕著に現われる。

「テメェ等塵屑に、生きてる価値も理由もありはしねぇんだよ！せ

めてオレ様に殺される事で価値を見出せ！塵共が！」

ネロは再び息を吸い込み緋色の砲弾を形成しようとする。
それも先程以上に霊圧を込めたものを、その様子を見ながらアベルはその探査神経を上へ、彼等の主の下へ向けた。

（・・・・動く様子はない・・・か。結局私達は、貴方にとって駒でしかないのですね、藍染様。そして・・・それ程までに私が、邪魔ですか・・・・・・）

内心呟くアベル。
そう、彼女は知っていた、藍染が彼女を疎んでいるという事実を。
彼女の能力は藍染にとって不確定要素、如何に藍染の鏡花水月が全てを欺く完全催眠能力を持っていようとも、アベルの能力はその優位性を崩す恐れがある。
霊子を見るアベルならば、その催眠かであってもその違和感に気がつく可能性を充分に持っているのだ。
故に藍染にとってアベルという破面は強力であっても、必要ではない破面。
それどころか喉元に抱えた逆襲の短剣にすらなりえる存在、そんなものは必要ない、それ故に藍染はノイトラをけしかけ、そして今の状況すら静観しているのだ。

（そうだよ、アベル。　君は聡く優秀だが、私の部下に聡明過ぎる者は必要ないんだ。君の能力は私に唯一、毒を飲ませる可能性がある。故に君には退席してもらわねばならない。　十刃の座から・・・ね。）

この惨状を見下ろす藍染の眼は、まるでそう語っているかのように、そして口元には黒い微笑が浮かぶ。
全て、全ては藍染の意のまま、この虚圏で藍染の思い通りにならない事などありはしないのだ。

砲弾は時期に完成を見、そして一息に放たれる。
先程は何とかそらせたが、今度もうまくいくとは限らない。
いや、おそらくはうまくいかないだろう御、アベルは内心結論に達する。
だがそれでも何故か、彼女はその場を引く気にはならなかった。
例え死ぬこととなろうとも、彼女らしくない結末を迎えようとも、そこを退く気にだけはならなかったのだ。

砲弾は完成した。
そして今か今かと解き放たれるのを待っている。
身構えるアベルに力は無い、しかしそんなことなど関係なしにネロはその口の中に出来た砲弾を解放しようとした。

「汚ぇ口は閉じてろよ。　クソデブ。」

その瞬間、声と共にネロの下顎が強烈に蹴り上げられる。
無理矢理に閉じられた口、しかし砲弾は既に発射体勢、行き場を失ったそれはネロの口を暴れ周り幾本かの歯を吹き飛ばして外へと押し出された。

それは金色の髪を振り乱し、ネロの間合いの内側に瞬時に現われると、弧を描き、開脚するようにして上へと強烈な蹴りを見舞っていた。
蹴ったというより突き刺したという方が似合っているような、そんな一撃。
うめき声すら上げずに口から漏れ出す破滅の光を撒き散らすネロ。
しかし金色の乱入者はそれだけでは止まらず、足を戻すとそのままネロの腹部の前へ拳を構える。
そして次の瞬間、口から光を漏らし続けるネロの身体はくの字に折

れ曲がり、反対の壁まで吹き飛ばされた。
ただ拳を構えただけに見えるその動作、しかし確実にそれによってネロは吹き飛ばされたのだ。

しかし吹き飛ばされながらもネロはその怖ろしいまでの執念を見せる。
半ば漏れ出した緋色の光り、しかしそれを再び集め一筋の虚閃としてはなったのだ。
金色の乱入者すら予想外、反応の遅れたそれは一直線にアベルへと、そしてその後ろにいるノイトラへと向かっていく。

「チッ！　クソが！」

乱入者が声を上げるが時、既に遅し。
乱入者の横を高速で横切り、その緋色の光は駆ける。
愚かなる者を屠る神の神罰として、命という代価を払わせるために。

そして着弾。
爆発と轟音、そして粉塵を伴うそれは間違いなく虚閃が着弾したことを示す証。
残っていた壁は崩壊し、光が消えた跡には何一つ残っていなかった。

「ゲッ！ゲハ、ゲハハ！ゴハッ・・・・・ったぞ・・・　殺じてやっだぞ塵共めが！　ゴフッ、えぇ、残念だっだなぁ～、あの時の小蠅！」

壁から這い出してきたネロは、口から大量の血を吐き出しながらも笑っていた。

突然の奇襲により攻撃を喰らいはしたが、それでも奪ってやったと。
せっかく助けに来ただろうにそれが叶わず、残念だったなと見下すように笑う。
それに対するは小蠅と呼ばれた金色の乱入者、紅い瞳でネロを睨みつけるその乱入者は言うまでも無くフェルナンド。
理由は判らないがこうして闘技場に乱入してまで止めたネロの砲弾。
だがそれは止めきれずに最悪の形でその男を喜ばせる結果となってしまう。
しかし、フェルナンドの顔に悔しさは欠片も浮かんでいなかった。

「クソデブ。　良く見ろよ・・・・・・　それに・・・探査神経ってもんが無ぇのか？テメェには。」

「何言ってやがる！　見ろ！　あの消し飛んだ跡を！オレ様の虚閃だぞ！　生きていられる筈が・・・・ねぇ・・・・・・」

フェルナンドに浮かんだのは、いつもと同じ皮肉気な笑み。
どこか呆れるようにしてネロに話しかけるその姿は、どこかというより本当に呆れている様子だった。

フェルナンドにそう言われても、ネロは目に映る光景に真実を見出そうとする。
眼に映る件の場所は崩れ去り跡形の無く消し飛んでいた、それこそが真実だと、自分が殺し消し飛ばしたと声高に叫ぶネロだが、その鈍い探査神経に引っ掛かる霊圧が二つ。
さすがに気がついてしまえばもう他所を見ることなどで気はしない。
その探査神経こそが真実を語り、自分が浸っていた愉悦はあまりにも滑稽であるという事を。

「ば、馬鹿な・・・・・・」

崩れていない闘技場の壁、観覧席の辺りにその霊圧はあった。
一つは壁に貼り付けたノイトラのもの、もう一つは虫の息だったアベルのもの、そして最後、三つ目の知らない霊圧がそこにはあった。

視線を向けるネロ。
その先にはやはり二人の姿があり、そしてそのどちらもネロに背を向けた一人の男によって抱えられていた。
ノイトラをゆっくりと床へ下ろし、意識の在るアベルを丁重に下ろす男。
そして男は二人を下ろし終えると振り返り、ネロを見据える。

男は細身ながらもがっしりとした骨格、野生的というよりはどこか擦れているような気だるい雰囲気で佇んでいた。
身に纏う白い死覇装は比較的標準的であるが、上着の裾は半分だけが長く、結んだ腰紐の端がやや長く垂れ下がっている印象。
胸の中心に孔を穿ち、首にはネロと同じこちらは人骨の下顎骨のような仮面の名残を残す。
肩口辺りまで伸びたバラバラの黒髪を後ろへ流し、顎の先には髭が、そしてその眉は難しそうに寄せられ、その瞳には身体から発する雰囲気とは違う強烈な意思を湛えていた。

「テメェ・・・・・・何者(なにもん)だ・・・・・・」

見下ろされている、という事に不快感を滲ませながらもネロはその男に問う。

充分な威圧感と、そして霊圧を込めたその言葉、しかし男は押し寄せるその霊圧をまるで柳のように受け流し、やり過ごしてしまう。
まるで一陣の風がその頬を撫でただけかの如く。
その男はそうしてネロを見据えたまま、彼の問に簡潔に答えた。

「・・・・・・コヨーテ・スターク。　只の・・・新入りさ・・・・・・」

孤高なる狼
暴虐の王
百眼僧正
紅い修羅

終わりのはじまり

BLEACH El fuego no se apaga. 44（後書き）

死なせねぇ～よ！（我が家ｗ

冗談はさておき、最速での更新となります。
意外とスラスラ筆が進みまくりましてｗ

実際ネロはクズですが、書きやすいんです。
三下感が半端ナイからｗ

そして展開は互いを庇い合うというまさかの展開（になってる？
完全無欠に見えるアベルも能力の高さゆえの弱点がチラホラでました。
集中なんてそう長く続くもんじゃないしね。

そして、フェルの方は乱入予定は無かった筈だけど出てきちゃうしどうやってりゆうつけようか・・・・・・
でもスタークは前から考えてたんですよ。

なんか狩人っぽくないですか？　ＫＹ魔獣を狩る・・・ね。

「・・・コヨーテ・スターク。　只の・・・新入りさ・・・・・・」

軽くもなく、かといって重くもなく、いたって凡庸に響くその声。
誰かと問われたから答えた、下手に出て取り入る心算も、まして自分を大きく見せるつもりなど皆無の声。
ネロの放った虚閃から逃れた高い闘技場の壁、その上からネロを見下ろすようにしている顎鬚の男。
風貌はいたって凡庸、どちらかと言えば見るものにやる気がないと断じられるような男は、ネロの問に答えた後もその黒髪を無遠慮にガシガシと掻いている姿は、何か面倒ごとでも抱えたかのようだった。

「新入り、だぁ？　オイコラ、テメェ・・・・・誰の邪魔したか判ってんだろうな！　オレ様はお前等塵屑が、到底たどり着けない高みにいる”神”だぞ！新入りの目立ちたがりが！　塵の底辺はオレ様の威光の前に隅で縮こまってるのが礼儀だと知らねぇのか！」

まさしく吼えるかの如く、見下ろされるというネロにとって耐え難い行為、そらに彼の最も愉悦の時である搾取の瞬間を邪魔された事がそれに拍車をかけていた。
先程と同じ霊圧を伴った咆哮がスタークを襲う。
しかしスタークに動じた様子はなく、それどころかその咆哮に対して小さく溜息をつく始末だ。

「・・・・・目立ちたくはなかったし、出来りゃ隅っこの方でゆっくりもしてたいかったんだがな・・・・・・」

溜息の後に続いたのはそんな呟きだった。
反論するどころか、出来ればネロの言う通りにしていたかったと、そう呟いたのだ。
字面、言葉だけを聞けばなんいう面倒くさがりの言葉か、だがしかし、彼の行動はその言葉通りではなく寧ろ逆。
ノイトラ、そしてアベルを救出するということは今この場において何より目立つことであり、そして隅でゆっくりしたいといっていた彼は行動を起していた。
表面だけを見れば面倒くさがりの言葉、しかしその語尾にはこう続いているのだ、していたかった、と。

「テメェもだ小蝿！　覚えてるぞ！　テメェ昔オレ様の頭を足蹴にしただけじゃなく、またオレ様に触れやがったな！あの時痛めつけてやったのを忘れたか！あぁん！？」

スタークの小さな呟きは彼には届かなかったのか、ネロの矛先はもう一人の乱入者、フェルナンドへと向けられる。

なんだかんだと罵るネロ、しかしフェルナンドの視線は先程までのネロと同じくスタークの方を向いていた。
その顔には大げさではないにしろ確実に喜色が浮かんでおり、たった一度の邂逅の後、再び現われたその男がやはり自分の睨んだとおりの強者である事を確認できた事が、その理由なのだろう。

そうしてネロに一瞥すらくれないフェルナンドの横を、緋色の弾丸が通り過ぎる。
実際にはフェルナンドを狙っていたのだろうが、それは寸前で彼に避わされ、着弾を見ることはなかった。

「無視してんじゃねぇよ・・・小蠅・・・・・・殺されてぇのか？」

「ハッ！　そいつは笑えるな、クソデブ。まぁこっちもそれなりに頭にキテはいるんだ・・・・・・もう百発ほど殴ってその顔、整形してやろうか？」

一瞬にして温度の下がったネロの声、目の前に神たる自分が居り言葉を発しているにも拘らず、それを無視する。
それだけでも万死に値するが、更には一瞥すらくれないなど自身に対する冒涜以外ないと、ネロは怒っていた。
対してフェルナンドもまた若干の怒りを抱えていた。
粛々と進んでいた決闘、好敵手たる男の全力の戦いと、戦士としての熱。
この場には怨念が満ちている、と藍染は言ったが、フェルナンドには一対一で戦う破面達の戦士としての意地が、その熱さが満ちているように感じていた。

眼を閉じればそれは顕著に感じられ、肌を刺すようなその熱は決し

て悪いものではなく、寧ろ彼の中の熱さを更に加速させる。
出場者として控え室に入るようにいわれてはいたが、そんな事は知ったことではないと、暗い壁に囲まれた部屋に閉じこもるくらいならばこの熱さを感じている方が、よっぽどイイと彼は観覧席に居座っていたのだ。
順番が後ろへと送られる中、それでもフェルナンドはそれが苦ではなかった。
グリムジョーとドルドーニ、更にはアベルとノイトラ、違いすぎる戦場ではあるがその熱は同じ。
グリムジョーの野生の熱さも、ドルドーニの嵐風の熱さも、ノイトラの激情の熱さも、そしてアベルの冷たい熱さも、その全てがフェルナンドにはどこか心地よく、昂ぶりを加速させるものだった。

しかし、その熱で満ちた闘技場は穢れを孕む。

理由なき介入、それもただ愉悦を満たすためだけの蛮行は、それだけで熱を奪い、泥を塗る。
2年という歳月の経過、それぞれが何かしらの成長と変化を遂げる中で、その男はまったく変化を見ることがなかったのだろう。
いや、変化を拒み、今が完成しているという考え。
それは沈み、凝り固まり、遂には強靭な鉄をも凌ぐ硬さの”欲”の塊と為るかの如く。
欲望、自身の愉悦を満たす、それが全てであり他は消費される手段であると考える思考の持ち主であるネロが、全てを台無しにしたのだ。

まさに衆人環視の中、暴威を振るうネロ。

愚味その戦場は見るに絶えず、一気に気勢をそがれたフェルナンドは沈黙を選択した。
耳に届く声に不快感を感じながらも、黙っていたとてこの場には藍染がいる、明らかな蛮行であるネロの行動を咎めないはずもない、と。
しかし藍染は沈黙を護り、立会人である東仙もまたネロの凶行に対し割って入る気配は無かった。
自分が出ればややこしくなる、と珍しく気を利かせてみた結果は見事裏切られ、フェルナンドの眼下では魔獣が猛威を振るい続ける。

そこが限界点だった。

いい加減下衆の行いを見ているのはフェルナンドにとって不快でしかなく、それは彼の内で極まり、彼の中で一瞬でもこの場を収める間を与えたにも拘らずそれは為されなかった。
ならばそれは彼にとって遮るものは何もない、という事。
誰も止めずにいるのならば、誰もが眼を背けるのならば、自分があの愚味な獣を殴り飛ばしたとて一体何の問題があるのかと。

そうして闘技場へと降り立ったフェルナンド。
もとより目の前の魔獣を倒すつもりでいる彼と、コケにされて我慢出来る筈のないネロ。
緊張、一触即発の雰囲気が辺りを包み込み始めていた・・・・・・

フェルナンドとネロの睨み合いが始まった最中、前しか見えないネロから忘れ去られた様子のスターク。
ネロの中では出しゃばった只の新入りである故に、それが顕著だったのかもしれない。
そんなスタークの元に一人の男が息を切らし走りよってくる。

「ノイトラ様！　ご無事ですか！」

スタークの横を通り過ぎ、一直線に血塗れのノイトラの下へ駆け寄ったのは、彼の従属官であるテスラ・リンドクルツ。
己が主と定めた男の無残な姿に動揺しながら、無事とは言えずとも生きている、という事に安堵の息を零す。

「すまない・・・そして、感謝する・・・・・・」

ノイトラの安否を確認したテスラは、意識を失っている主を支えて立ち上がりると振り返り、スタークにそう告げた。
言葉を受けたほうのスタークは若干ではあるが何故か驚いたような表情をみせる。
しかしそれを直に仕舞い込むと、先程と同じように頭を掻きながら

空いている方の手をヒラヒラとテスラに対して振ってみせる。

「あぁ～別に・・・・・・　俺が助けたかっただけだ、お前さんに感謝されるような事じゃないよ・・・・・・」

なんともバツが悪そうにそれだけ告げると、「さっさと行きな・・・」と続けテスラを促すスターク。

テスラはその言葉にもう一度頭を下げると、急ぎノイトラを治癒するために運んでいった。

それを見送ったスタークは小さく溜息をつく、そんな彼に今度はもう一人、彼に助け出されたアベルが話しかける。

「貴様は・・・・・・　一体、何だ・・・・・・・？」

「言っただろ？　只の新入り・・・ってな。」

「そうでは、ない。　貴様・・・貴様程の霊圧に・・・・・・何故・・・私が気付かなかった、のだ・・・・・・」

アベルの言葉はスタークが誰か、ではなく何かということを問うものだった。

探査神経の鈍いネロは気がつかなかった、そしてこの場にいる多くの破面も別の理由で気がつく事はないだろう。

だがアベルは気がついた、その卓越した探査神経故に気ががついたのだ、目の前の男の異常性に。

フェルナンドはそれを気配と直感で感じていたが、感じるのではなく理解していた。

明らかに自分よりも上、自身が十刃最弱であるということを差し引

いてもスタークの力は彼女を著しく超えていたのだ。

「人より影は薄い方でね・・・・・・まぁそんな事気にしなさんな、お嬢さん。　さて、俺は用事があるもんでね、だが・・・お前さんを抛って置く訳にもなぁ・・・・・・」

「ならば彼女は私が、責任を持って預かろう。」

アベルの問いをはぐらかす様に答えるスタークは、用事があると言う。

しかし傷ついたアベルをそのままにするのも気が曳けるのか、どうしたものかと思案していた。

助けたいから助けた、といった割にはその後のことは特に考えていないようで、先程の事は本当に衝動的な行動だった事を伺わせる。

そうして悩むスターク、そんな彼に助け舟の声がかかった。

「お前さんは？」

「第３十刃　ハリベルだ。　第５十刃、そこにいるアベルと同じ十刃、という事になるか・・・・・・」

助け舟として現われたのはハリベルだった。

座り込むアベルの隣まで歩み寄ると、ハリベルはそのままアベルに肩を貸すようにして立たせる。

ハリベルに寄り掛かるようにして立ち上がったアベル、ハリベルの行動に対し特に抵抗する素振りを見せないのは度重なった心労と疲労が噴出し、その消耗具合が限界寸前といったところなのだろう。

そんな彼女達の様子を確認したスタークは、「さてと」と小さく呟

いた後、ハリベルへと視線を向けた。

「すまんね・・・・・だが、お前さんなら大丈夫そうだ。」

「あぁ、任せてもらおう。同じ女だ、それに・・・此方も一人逃がしてしまったからな、手が空いている。」

スタークの言葉にハリベルは苦笑しながら答える。
彼女が逃がしたというのは、言うまでもなくフェルナンド。
態度をただす事も然ることながら、フェルナンドを大人しく観戦させる為に彼女は彼の下へ行ったのだ。
だが結果としてハリベルが止めるより早くフェルナンドは闘技場に降り立ち、そして次の瞬間にはネロに痛烈な蹴りを見舞っていた。
もくろみの失敗したハリベル、結果手が空いた彼女は従属官がいないアベルを引き取る為スタークの下へと向かっていたのだ。

苦笑交じりだったハリベル、しかしスタークが踵を返し背を向けた瞬間に彼女は彼に声を掛けた。

「行くのか？」

ただ一言、何処へ、何故、どうして、そういった類のものを排し、ただ簡潔に放たれた言葉。
それはハリベルがスタークのとろうとしている行動を確信しているためなのか。
誰もが思い、そして実行しないだろう選択肢、今まさにフェルナンドがとったその選択肢をこの男も取ろうとしているという確信が。

「あぁ・・・・・・　アイツは・・・やりすぎた。」

それだけを言い残し、スタークの姿はハリベルの前から消えていた。
去り際にみせた表情は硬く、何かしらの決意めいたものをハリベルに感じさせる。
そし再びスタークが現われたのは眼下の戦場。
ネロと対峙するように、そしてフェルナンドに並び立つようにして彼はその身を戦場へと投じたのだった。

―――――――――

その場に満ちる空気はチリチリと音を立てるように張り詰めている。
それは霊圧の衝突以前に互いが放つ”気”の衝突によるもの。
気勢、気合、気運、気概、怒気、そして殺気、そうした内在的なもの全てを総じて”気”と表現するならば、この場はまさしく気に満ちていた。

睨み合うフェルナンドとネロ。
互いに殺る気の面では充分すぎるだろう。

ふとした拍子、例えば壁が崩れ、小さな破片が落ちるといったそんな些細な事で二人は殺し合いをはじめる。
そういった緊張感が其処に満ちていた。

「両者とも待て。　お前達が戦う事は許可されていない。」

そんな緊張感の二人に割って入ったのは立会人である東仙要だった。
両者の丁度中間、その場所にたった彼は二人が戦う事を許可されていないとし、止めようとする。
そんな東仙の登場に笑い声を上げたのはフェルナンドだった。

「ハッ！　今頃登場とは随分と怠慢な立会人だな。なら、なんでそこのクソデブが入ってきた段階で止めねぇんだよ。そいつが横槍入れるのは許可が下りてた、とでも言う心算か？」

「そうだ。　藍染様より第2十刃への許可は下りている。」

皮肉気に笑いながら東仙へと言葉を投げつけるフェルナンド。
確かに立会人という公正の立場にいる東仙の行動は不可解なものだった。
ネロという決闘にとって異分子の乱入、今の状況を認めないというのならばネロが介入した時点で止めないのはおかしな話。
それを皮肉ったフェルナンドの言葉に、東仙はアッサリと答えた。
藍染様が許可している、と。

それが全てなのだろう。
この虚夜宮においてそれが全て、藍染惣右介の意思こそが絶対であり、この場での真理に違いないのだから。

「ゲハハハ！　当然だな！　オレ様は誰にも縛られねぇ！そもそもオレ様は”神”だ。　藍染程度に許可を貰う必要すらねぇんだよ！！」

一人ご満悦といった風で笑うのはネロ。
その言葉には東仙も眉間を寄せ、若干の不快感を示している。
対してフェルナンドは視線を上へ、遥か上にいる藍染へと向けていた。
そうしたとて藍染が見えるわけではない、しかし、それでもフェルナンドはそうして睨み付けねば気が済まなかったのだ。

（無粋だな・・・・・　テメェの都合のためには勝負にだって平気で水をさす・・・ってか。反吐が出るぜ、藍染・・・・・）

見えぬ相手、しかしそれに向かって意思を乗せたかのような眼光を向けるフェルナンド。
だがいくら睨んだところでそれは無意味、藍染にその意思がとどくことなどありはしなかった。
視線を戻し東仙を睨むフェルナンド、東仙はただ必要なことは言ったと、そして藍染の決定である以上闘うことを認めはしないと続ける。

「フェルナンド・アルディエンデ。貴様には強奪決闘が控えている。それ以外での戦闘は認められない。」

「ゴチャゴチャ五月蝿ぇんだよ・・・・・・　俺は頭にキテるって言っただろうが。」

「それは関係ない。　藍染様の決定である以上戦闘は許されない。もし第2十刃に手を出せば、その時は私が貴様を誅殺する。」

無粋な思惑によって穢された熱。
心地よかったそれを穢された事は、フェルナンドにとって許しがたいものだった。

故に怒る。

フェルナンドの周りにあった小石が弾ける様にして消えていく。
霊圧でもなく、ただ彼から漏れ出した怒気に押しつぶされるようにして。
そんなフェルナンドを前にして、東仙もまた退く事はなかった。
藍染への忠義、藍染の言葉こそ彼の最も優先するべきものであり、それを守らぬと言うのならば即ちそれは悪であると。
そして自分の前で悪を行うというのならば誅するのみと。

「まぁ落ち着けよ、フェルナンド。」

フェルナンドの重心が僅かに前に傾き、今まさに飛び出さんとした瞬間、声と共に彼の肩に手がかかった。
軽く置かれたその手、だがその効果は絶大、背後を取られるという最大の不覚とそれに気がつかなかった自分の加熱ぶり、フェルナンドにそれを理解させるのにその手は充分な効果を持っていた。

「スターク・・・・・・　アンタが俺も俺を止めるのか？」

冷えた声がフェルナンドから零れた。
怒りによる過度の加熱、それは視野を狭める要因の一つであり、総じて未熟さの具現である。
普段の彼ならそんな事はないのだろうが、彼とて戦いに生きる者、戦いを穢すような行いは許せるはずもない。
ましてその戦いとは彼の捜し求めるもの、”生きているという実感”を得るために彼が持つ唯一の手段なのだ。
戦いの穢れとは即ち彼にとって、求めたものまでも穢れるような、そんな感覚といえばいいか、故にフェルナンドは怒りを燃やしていた。

しかしそれは突如彼の傍へと現れたスタークによって鎮火される。
怒りによって狭められた視野、そうでなくともこの男ならば可能だったかもしれないが、こうして接近を許したのはフェルナンドの未熟だ。
戦場で未熟を曝す事、その先は死以外なくフェルナンドはこの場で一度死んでいても不思議ではない。
それが逆に彼を冷静にした、冷静に怒気を納め、しかし殺気だけは収まる事無くフェルナンドを包んでいた。

「そうだ。　お前さんの気持ちもわかるが・・・な。此処は、俺に預けちゃくれないか？」

顔だけをスタークに向け、彼を睨むようにしているフェルナンドにスタークは真剣な眼差しでそう答えた。
気持ちはわかると、しかしそれでも自分はお前を止めると、そう答えるスターク。

真剣で、静かで、僅かな憤りとそして悲しみを綯交ぜにしたその瞳、それは彼の優しさでありそしてそれ故に感じる痛みなのか。
その痛み、何の理由もなく失われていく命の痛み、そしてその失われゆく命とはスタークにとって等しく、漸く手に入れたものなのだ。

「・・・・・・・・チッ！　そういう眼は苦手だ、他人の為に悲しむ・・・かよ。物好きめ・・・・・・」

スタークの自分を見る眼を覗いたフェルナンドは、視線を切り吐き捨てるようにそう呟いた。
どこか苦い表情のフェルナンド、他人を思いやる、他人の為に悲しむ、他人と手をとり合う、そのどれもがフェルナンドには難解すぎるもの。
彼に理解できない感情を映すスタークの瞳、その瞳にフェルナンドは不快感と言うよりむしろ責められているとすら感じていた。
自分にはそういった瞳はつくれない、自分に出来るのは他人の戦いを穢した存在に怒りを燃やす事だけだったと。
それが悪いとは思わない、しかしフェルナンドには、自身の怒りがその瞳の前では酷く薄いものに見えてしまう気がしてならなかった。
だがそれは同じ事なのだろう。
フェルナンドが感じた怒りも、スタークの瞳に映る悲しみも、根源は同じなのだ。

「立会人さん。　悪いんだが藍染サマに、俺とこのデカイのが戦う許可をくれないか、と聞いちゃもらえないかい？

フェルナンドの肩を二度ほど軽く叩き、スタークは東仙に向かって一歩前に出る。
そして彼の口から出たのは、この場にいるほぼ全ての破面の想像を超えるものだった。
あまりに軽く放たれたその言葉、しかしその意味は重い。
十刃、それも第2十刃、破面の頂点から数え2番目にいる者に対してのそれは挑戦状だった。
ざわめきが包む闘技場、しかしその中で東仙は冷静なままだった。

「悪いがそれは出来ない相談だ。　義憤に駆られた心意気は素晴らしいが、安易に命を捨てる選択をするのは愚かしい。藍染様に問う事もないだろう、私の権限でそれは了承できｎッ！・・・・・・暫し待て。」

スタークの願いに対し、東仙はそれを一刀の下に斬り捨てようとする。
確かにそうだろう。
1スタークの提案は無謀でしかない、数字すら持たないそれも新入りが、第2十刃に挑むことの愚かさは誰もが判る事だ。
特にネロという破面はその暴虐な振る舞いの数々から、ただでさえ恐れられる存在。
皆が腹の底に不満を抱えながらも、それを形にすれば待っているのは死、だけだ。

スタークのとった行動は、多くの破面から見ればその我慢ならない状況を打破すべく起したもの。
暴虐の限りを尽くす振る舞いに、それを正す為の義憤に駆られた尊い行為であり、同時に最も愚かな行為だった。
それを知るが故に東仙は斬り捨てる。

無用に命を落す事は愚かしいと、その選択は義憤ではなく特攻の類だと。
そうしてスタークの願いに否を突きつけようとする東仙、しかしその寸前、彼はその言葉を止めスタークに向かって掌を向けると暫し待て、と言い放った。

「っ！　・・・・・本当によろしいのですか?はい・・・いえ、そのような事は・・・・・・はい、判りました。」

スタークに向けた掌と逆の手を軽く耳に当てるようにして、何事か呟き続ける東仙。
その間も闘技場のざわめきは収まらず、決して大きくないそれは漣（さざなみ）のように辺りを包む。

「ゲハハハ！　面白い冗談だなぁ、新入り。　オレ様と戦いたいだと?相手の力も計れねぇのか?　テメェじゃぁオレ様の相手は2秒と出来ねぇよ!ゲハハハハハ!!」

その漣の中、ネロはスタークの発した言葉が心底おかしいと笑い声を上げていた。
口からは微量の血を撒き散らし、しかしそんなものにすら気をとめず笑うネロ。
只の新入りが自分と戦うと豪語する現実、常のネロなら自身を甘く見られ激昂するような場面だが、ネロから見ればあまりにも傲慢な自負を見せるスタークの姿は滑稽ですらあった。
この只の新入りは、自分と戦い尚且つ何故か勝つつもりでいる、ということが。

「冗談だったらよかったんだがな・・・・・・」

高笑いを続けるネロの声にまぎれ、スタークのその呟きが彼にとどくことはなかった。
悲しみの浮かぶ瞳、しかしその瞳には同時に決意めいたものも浮かんでいた。
その決意が、スタークにそう呟かせたのかもしれない。
決意はある、しかしそれでもその決意は彼にとっては辛く、悲しいものでしかないのだから。

「静粛に！　簡潔に伝える。　藍染様は第2十刃とこの破面との戦闘を許可された。よってこの二人の戦闘は咎められるものではない。」

東仙の言葉で一瞬静まり返った闘技場。
その後に起こったのは再びのざわめきだった。
歓声でも怒号でもなく、只ざわざわと空気が揺れるような音。
それは戸惑いの音だろう、藍染惣右介という絶対の君臨者が降した許可、何故それを許すのか、何故フェルナンド・アルディエンデではなくこの初めて見る新入りなのか、そういった戸惑いがざわめきとして音を持ったのだ。
真意は見えず、しかし下された許可は何にも増してこの場で絶対の力を持っていた。

ざわめきが支配する闘技場。

そんな漣の中、それを断ち切るように一筋の光が奔る。
光の色は緋色、それは只真っ直ぐに奔りそして砂漠は爆ぜた。

「ゲハハ！　言っただろうが2秒と持たねぇ、ってなぁ！テメェが欲しがってた藍染のお許しが出たんだ、その後死んだなら文句は言えないよなぁ！」

緋色の光り、それはネロが放った虚弾（バラ）であり魔獣の最初の、そして終わりの一噛み。
ネロに藍染の許可など意味はない。
彼にとって藍染は詐術で全てを支配しようとする弱者であり、それに従う理由などないのだ。
故に整えた戦場を待つ必要など彼にはない、戦いたいならばやってやる、しかしお前の思い通りには動いてやるものかというネロの意思がそこにはあったのだろう。

砂煙収まると、そこには一人の人影があった。
そこに立っているのはフェルナンド、見れば片方の拳の甲から白い煙が立ちこめ、足元には砂が弾けて陥没した後が見える。
おそらくはネロの放った虚弾をその手の甲で叩き落し、砂漠へとぶつけた後であろう。
だがそこにいるのはフェルナンド一人、フェルナンドより一歩前に立っていた件の破面、コヨーテ・スタークの姿は既になかった。

「なんだぁ？　テメェは生きてんのか小蠅。　お前ごと消し飛ばす心算だったが失敗したな、お前程度の塵ならカス程の霊圧の虚弾で死ぬと思っていたんだがなぁ。」

ニヤニヤと下卑な笑いを浮かべながらそう口にするネロ。
フェルナンドを甘く見ている、というよりは自身の絶対的力への自負がそうさせたのか。
さほど霊圧を込めていないという言葉とは裏腹な虚弾、充分な威力のそれをカス程度と呼ぶことがその証拠だろう。
自負、絶対的、そして圧倒的である自身の力への自負こそこの男の歪んだ人格の一端と言える。

「だが・・・あの新入りは消し飛んだらしいな。ゲハハ！　塵めが！　口ほどにもなさ過ぎるぜ！」

フェルナンドが生きていることを以外がりながらも、それ以上にスタークを消し飛ばしたことに愉悦するネロ。
彼にとって所詮は雑魚である相手、取るに足らない存在であると断じたスターク、しかし殺したという喜びは同じといわんばかりに笑うネロの姿は一層醜いものだった。
搾取するものの愉悦、その快楽に浸る姿、狂気に見開かれる瞳、割れるように裂ける口元、それがネロだからではなく誰もが畏怖と恐怖を感じる表情。
それをして笑うこと自体が既に狂っている証明であり、化物の証明。

「だから・・・テメェには探査神経（ペスキス）、てもんが無ぇのかよ、クソデブ。」

フェルナンドの声、怒りが収まり常の彼に戻った彼の呆れを含んだ声が落ちる。
その言葉に怪訝な表情を浮かべるネロだが、その理由は直にわかっ

た。

「お前さんはやりすぎる・・・・・・　ここで暴れられると余計な犠牲が出るんでね。悪いが付き合ってもらうぜ。」

その声はネロの直ぐ傍、まさしく眼下といっていい場所から聞こえていた。
ネロが視線を向ければそこには黒髪の男、彼が消し飛ばしたと、そう思っていた男はその実生きており完全にネロの間合いの内側に立っていたのだ。
半ば反射といった具合で、間合いの内にいるスタークに攻撃を試みるネロ。
しかしそれが彼に届くよりも随分と早く、スタークの手がネロの首を鷲掴みにした。

「グェ・・・！」

筋肉と贅肉で武装された首は太く、スタークの手でも締め上げるには至らない。
しかし今必要なのはそれではなく、スタークはガッチリとネロの首を掴むとそのまま場所を移動するように響転（ソニード）によって移動を開始する。
目指すのは上空。
遥か遥か上空の偽りの空、虚夜宮の天蓋のその外。
このネロという破面の力は侮るべきでなく、それによって生じる被

害を最小に納めるため、そしてなにより自分も全力を振るう為にスタークは虚圏の夜空の下を目指していた。
その響転はまさしく風の如く、ぐんぐんと天蓋は近付き、スタークはその天蓋に向けて何の予備動作も無く虚閃を放ち穴を穿った。
バラバラと崩れる天蓋の欠片を通り過ぎ、遂に青空ではなく暗い夜空の下へと至ったスタークとネロ。
其処が彼等の戦場。

暗い暗い夜に浮び、燐光放つ三日月が見守る、静かな静かな戦場だった。

ネロという災害が消え去った闘技場は一瞬弛緩していた。
誰もが少しの安堵を感じ、スタークを哀れみ、極少数は彼の見せた力の片鱗に戦慄を覚える。
しかし命を繋いだ、という安堵が大半を占めるその戦場で一人不完全燃焼の男がいた。

「チッ！　結局スタークの野郎に、クソデブは持ってかれちまった・・・かよ。」

そう、フェルナンドだ、獲物はスタークに譲る形となり、いい具合に昂ぶっていた自身の熱は彼にとって不様な怒りでその熱さを若干

下げていた。
だがそれは仕方が無い事、此処で怒りに任せ暴れれば彼はおそらく手に出来ない。
求めるもの、生きているという実感、ただ忘我の内に戦う中でそれを見つけられるのならば、彼は大虚の頃とっくにそれを見つけられていただろうから。

「まぁいい・・・か。　漸くだと思えばよぉ・・・・・・」

まるでスタークのように、その金色の髪を掻きながら呟くフェルナンド。
気持ちを切り替え、逃がした魚を思うよりも目の前にいる魚を見ることにしようと考える。
そう、目の前にいる魚を。

フェルナンドはおもむろに腕を上げる。
上げた先にあるのは闘技場の大扉、その大扉に向かって掌をかざすようにするフェルナンド。
そしてかざした掌には直ぐに変化が現われる。
紅い霊圧、フェルナンドの紅い霊圧がその掌へと集中し、紅い砲弾を作り出す。

弛緩し、安堵した闘技場に吹き荒れる再びの戦いの香り。
そう、ネロの登場はあくまで不測の事態。
本来ならばこの戦場は第５十刃対第８十刃の決闘の場であるが、二人がいなくなりそれはもう叶わないだろう。
ならば次は、次は一体誰の戦場だったか。

決まっている。

一人はこの男フェルナンドアルディエンデ。
荒れ狂う自身の霊圧にその髪を靡かせながら立つ紅い修羅。

「なぁ、そう思うだろう・・・・・・？」

そして紅い霊圧の砲弾は完成し、何を待つでもなしに大扉へと向かって放たれた。
紅い流星の如きその虚閃（セロ）は一直線に大扉へと向かい、結界という守りを失っていた大扉は容易く貫かれ崩れ去る。
バラバラと崩れ落ちる大扉、粉塵がたちこめるもゆっくりとではあるがそれは収まっていく。

そんな粉塵に映る影、人型の影は周りの惨状に動じる事無く佇んでいる。
そうして立つ人影に対し、フェルナンドは言う。
熱が冷めた、といってもそれは微々たるもの、この男の熱が消えるはずもなく猛禽類のような瞳は揺れる事無くその人影を射抜いていた。

「アンタも・・・よぉ！」

晴れた粉塵から現われたのは、この強奪決闘最後の十刃。
泰然とした風で立つ十刃第7位の男。
第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルー。
この戦場に立つ資格を有する最後の男であった・・・・・・

忠義の剣

断頭台

愛とは平等

愛とは与えるもの

そして愛とは

支配する事

BLEACH El fuego no se apaga. 45（後書き）

活動報告にも書いたが何だろう?この感じ。

文章がバタバタしている、と言うかなんと言うか。
自分の中でシックリきていない様な……

内容的に大きな山場がなかったのも関係しているのか?

まぁ今回は戦場の推移が主。
乱戦も考えたけど、どうしようもないくらい難しくて断念。
才能を下さい。

さて、後はもろもろどうやって決着つけようか・・・・・・

感想お待ちしております。

BLEACH El fuego no se apaga. 46（前書き）

2011．4．30投稿
2011．5．01修正、予告追加

崩れた闘技場の大扉、崩壊する残骸とそれが巻き起こす粉塵の影から現われたのは、黄色の瞳、浅黒い肌の大男。
筋骨隆々、角張った顎に三本の黒い仮面紋が奔り、厚めの唇を一文字にした表情は憮然とした印象を感じさせる。
薄手の死覇装を着込み後ろ手に組んだ手に自らの斬魄刀を握り、まるで何事も無かったかのようにその場に立つ男は第7位の十刃。
第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルー。
その顔にも、態度にも感情の色を表すものを伺わせないその男、だがその男こそフェルナンドをこの強奪決闘の舞台に上げた張本人であり、その上で彼を誅殺すると本人の前で宣言した人物だった。

「さぁ、お互い随分待たされた・・・・・はじめようぜ、第7十刃サンよォ。」

無表情のゾマリに対するフェルナンド、その顔は戦いを欲する顔となっていた。
スタークにネロという相手を奪われた形にはなったが、それは彼の

中で決着がついていた。
奪われたのは自分が曝した未熟さ故、怒り、それに身を任せ飛び出し、周り全てに牙を剥き、結果視野を狭めスタークに背後をとられる。
戦士としてあるまじき行為、怒りは力を与えると同時に力以外を奪い去っていくのだ。
そして戦いとは往々にして力のみで勝てるものでなく、それに身を任せたのはフェルナンドの未熟。
曝したそれは取り消せるものでなく、それを曝した罰は受けねばならない。
結果、フェルナンドはネロをスタークに譲った。
曝した未熟、そしてスタークの瞳に浮かんだ悲しみに、彼が耐えられなかった故に。

「獣・・・・・　やはりアナタにはその言葉がよく似合う。捧げるべき主君に背き、ただ己の為だけに牙を振るう・・・・・・まったくもって許し難い・・・・・・」

フェルナンドの戦いの気配をその身に受けながら、ゾマリは臆する事無く歩き出した。
その最中、頭を何度か振りながら言葉を零す彼。
その言葉はフェルナンドの姿、フェルナンドの気配、その全てを指して”獣”と断じ、零れ落ちるその全てに哀れみの感情を深く乗せていた。

「ハッ！　別に誰に許してもらう必要は無ェよ。俺は、俺の求めるものを得るために”力”を得たんだ。あんな無粋な輩に仕える為じゃないんで・・・な。」

ゾマリの呟きをフェルナンドは鼻で笑い飛ばす。
まるで哀れみを含んだその言葉の何を恥じるべきなのかがわからない、といった風で。
当然だろう、フェルナンドにとって力は他が為に費やすものではない。
今まで結果としてそうなった状況はあれど、その全ては彼の行動原理からくるものの副産物。
彼が今も昔も、そしてこれからも求めるのは一つ、”生きている実感”だけであり、その手段は戦う事、そして戦うための力を振るうことの何処に哀れまれねばならない理由が在ろうか。
そして捧げるべき主君など彼には必要ない、全ては己の為に、ましてや自分の目的の為に戦士同士の戦いに平気で水を差す様な、厚顔で無粋な輩に仕える道理が彼には無かった。

「・・・・・その物言い・・・・・・　その全てが侮辱と冒涜以外でないと・・・その事に気がつかない時点で、アナタはやはり獣・・・・・・いや、それ以下の愚物ですね。」

歩を進めながらもフェルナンドの言葉に応ずるゾマリだが、言葉が出るまでには些かの間があった。
その間が何を示すのか、おそらく何かしらの感情を押さえつけたであろうその間。
その感情こそ彼の本心、あくまで彼の口から零れる言葉は丁寧だが、しかし丁寧ゆえに滲む。

滲むのだ。
彼の怒りが。

「アナタが言うその力、アナタが得たというその力、ではその力はいったい誰から頂いたものか、それすら理解せず己がものだとそれを振るう・・・・・・
なんと嘆かわしく、愚かしいことか・・・・・・”王”とは慈悲深く、アナタのような愚物にすらその恩恵を分け与える。だがそれを”王”の為に使わないというのならば・・・・・・誅されねばならないのですよ。」

一人語るゾマリ。
淀みなく前へ、フェルナンドへと向かって歩くその姿は、彼の精神を表す。
揺れず、止まらず、疑わず、彼の考えは一本道、信じるものが疑いを抱く余地すらない”王”であるが故の一本道。
疑いは即ち冒涜であり、それ以上に心酔し崇拝する”王”の代行者を自負するゾマリ。
故にぶれない、故に唆されない、故に猛進する。
代行者としての使命を果たそうと。

彼の王とは言うまでもなく藍染惣右介その人。
絶対的な支配者、逃れられぬ支配の具現はそれだけで彼には盲信に値する。
そしてその神がもたらした数多の恩恵の上に自分達は居ると、その恩恵に報いる事は当然の義務でありそれを蔑ろに、更には礼すらとらないフェルナンドの存在は、ゾマリにとって容認できるものでないのだ。
故に彼は宣言する。
フェルナンドからある程度の距離をとった位置で止まったゾマリは、

再び宣言したのだ。

「よって私がアナタを断罪して差し上げましょう。罪状は不敬と冒涜、刑は・・・・・・”斬首”です。」

身長差からか、はたまたその態度ゆえか、フェルナンドを見下ろすようにして放たれたそれは、死刑宣告。
丁寧に、まるでそれが世界共通の望であるかのように語るゾマリには、微塵の迷いも躊躇いも見えなかった。
あるのは使命感。
王の代行者、御使いである自分に課せられたであろう最上の使命、それを果たさんとする強烈なまでの使命感だけ。

「不敬も冒涜も、なにも覚えは無ェんだが・・・な。まぁいいさ、大層なお題目は済んだらしい・・・・・・はじめようぜ、喧嘩を・・・よぉ！」

対するフェルナンドも変化したゾマリの気配を察したのか、戦いの気配を色濃くする。
自然体の体勢からゾマリへと向き直ると、身体を半身気味にしながら両足を肩幅程度に、両腕は目線より下あたりに構え、拳は硬く握りこむのではなくやや開いた状態にして構えを取る。
それは彼が本気の証。
取るに足らぬ相手ならば、彼はその構えをとることはない。
それは切り替える事。
精神的なものはもとより、自分の中で決めた動作、フェルナンドの

場合ならばその構えをとることで切り替えるのだ、日常と戦場、それを明確に。

高まる戦いの気配に、立会人である東仙はその腕を高く上げる。
彼の先程までのフェルナンドに対する戦いの意思は消えていた。
あるのは只粛々と、主である藍染から命ぜられた使命、立会人としての使命を全うするという考えだけ。

「それでは・・・・・・はじめ！」

振り下ろされた腕は火蓋を切って落とす。
先に仕掛けたのはフェルナンドだった。
東仙の開始の合図と共にゾマリに向かって飛び出したフェルナンドは、怖ろしい速度でゾマリとの間合いを詰め、一瞬で自分の間合いに彼を納める。
そしてその突撃の勢いを残したまま、片足を跳ね上げ、ゾマリの顔面目掛け上段蹴りを叩き込まんと。
まさに電光石火、残像すら残さずその蹴りは一瞬にしてゾマリの顔まで到達しようとする。

（ほぅ・・・・・　これは想像以上に速い・・・大帝殿が一目置くのも頷けます・・・・・・が・・・）

フェルナンドの蹴りがゾマリの顔を捉える。

何の防御もなく、無防備にそれを受ければ昏倒するは必至、いや、昏倒で済めばいいだろう、二度と目覚める事などない可能性の方が強い、そう、死だ。
それを前にゾマリはなんら動く気配を見せなかった。
只無防備に、只立ち尽くすそのサマは一見フェルナンドの蹴りに対応できていないかのようで、その実違っていたのだ。

当たる、とそれを見る誰もがそう思った瞬間それは起こった。
只無防備に立ち尽くしていたゾマリ、そのゾマリの身体が一瞬ぶれるとそのまま消え去ってしまう。
ありえない光景、ほんの数瞬、いや、刹那の後にはフェルナンドの蹴りが当たるかと思われた、だがそれは結果何もない中空を通過するに終わる。
一体何が起こったのか、そんな当惑を見るものに与えるその光景、しかしそんな困惑の隙すらありはしなかった。

「私の方が”速い”・・・・・・」

その声はフェルナンドの傍らから。
今までフェルナンドの正面にいたはずのその声の持ち主、しかしそれは一瞬にしてフェルナンドの側面へと回っていた。
そしてその言葉と共に煌き奔るのは鈍色の光。
横向きに一振り、他の何を狙うわけでもなくフェルナンドの首だけ

を通り過ぎようとするその一閃は、寸前の所で首を捕らえるには至らなかった。

沈み込むようにしてその一振りを避けるフェルナンド。
目の前から消え去った相手の横合いからの攻撃、余裕があった訳ではない、だが対応できない程の攻撃でもなかったそれを避けた彼は、そのまま距離を置くことはせずに再び攻撃に転じる。
素早く戻した蹴り足はそのまま次は砂漠を蹴り推力へ、沈みこんだ身体もそのままに剣を振りぬいた体勢のゾマリの、そのガラ空きの胴を目掛け渾身の拳を打ち込まんとする。

拳は奔り、そのままゾマリの鳩尾へ。
振りぬいた刀が戻るには些か足りないであろうフェルナンドの拳、防御という手段を失ったゾマリは本来ならばその攻撃に身を曝す以外ない。
そうしてなにも起せぬまま突き刺さるフェルナンドの拳。
めり込む、というよりは本当に突き刺さったかのようなその光景は、戦いの早期決着をうかがわせる光景だった。

だが違う。

それを誰よりも強く感じているのはフェルナンドだろう。
眼に映る光景は、自分の拳が相手の身体に突き刺さる姿、だがその突き刺さった拳からは何も感じないのだ。
正確には何かを貫いた感覚はある、しかしそれは眼に映る光景から想像できるものとは違うのだ。
肉を裂き抉る感覚も、骨が拉(ひしゃ)げ、砕ける感覚も其処にはなかった。
そう、相手を貫いたというのにまるで本当は、そこに何も無いかのように。

「〝ハズレ〟ですよ。　それは・・・・・・」

違和感を感じるフェルナンドに、その違和感を作り出したであろう男の声が降る。
それはまたしてもフェルナンドの横から。
だがフェルナンドの前には確かに自分の拳に貫かれたその男が、ゾマリが立っているのだ。
が、そんな事で思考を止めるのは戦いのさなかにおいてあまりに愚か、再び自分の首を襲うゾマリの凶刃をフェルナンドは、咄嗟に抜いた自分の斬魄刀で受け止める。
が、もとより今の彼の体勢は受け止めるという事に適するものではない。
結果、確かに刃による斬撃は防げはしたが、横ではなく下から掬い上げるようにして放たれた斬撃の力は止められず、吹き飛ばされるフェルナンド。
逆手に刀を持ったまま吹き飛ばされたフェルナンドは、ゾマリから距離をとった形で砂漠へと着地する。
そして彼の眼に映ったのは、砂漠に立つ二人のゾマリ・ルルーだった。

「双児響転（ヘルメス・ソニード）、通常の響転に私独自のステップを加える事で生まれる、云わば分身のようなものです。言ってみれば手品の類、お遊びですが・・・・・・アナタ程度の相手には丁度いいでしょう。」

フェルナンドが身体を貫いた方のゾマリが残像のように消えていく中、再び彼の首を刈りに来ていた方のゾマリはそう口にした。
双児響転、ゾマリの言からすればそれは彼独自の響転という事なの

だろう。
只残像で分身を作り出すのではない、それ自体が彼の霊圧で少なからず物理的法則を受けるほどの存在になる分身。
いや、分裂したといったほうが近いのか、ともかくフェルナンドが攻撃したのはその分裂体であり、本体ではなかった、という事のようだった。

「・・・・・随分と速く動くじゃねぇか。そのデカイ図体の割りによぉ・・・・・・大体俺と同じぐらいか、とは踏んでたんだが・・・な。」

そうしてフェルナンドの攻撃を受けたのが分裂体の方だと説明するゾマリに、別段悔しがる様子もなく答えるフェルナンド。
そのゾマリの速さ、それはある意味フェルナンドの想像を超えたものだったようで、最低でも自分と同程度と考えていた様子からそれは窺い知れる。
だがその自分とゾマリを”同列”として扱う、という事がまた一つゾマリの不興を買う事となった。

「愚かな思考。　大方自分の想像以上だった私の速度に、内心焦っているのでしょう?それを敢えてそう思っていたと口にすることで、精神の安定を図ろうと?・・・まったくもって愚かしい・・・・・・そもそも前提が間違っているのですよ、私とアナタが”同列”だ、という思考が。」

言い終わるか終わらないか、その瞬間にゾマリの身体が消える。
まるで自らの影すら追いつかせぬと言わんばかりの響転、それをもってゾマリが再び現われたのはフェルナンドの正面。

刀を振り上げた姿勢で現われたゾマリ、しかしその姿は一人ではなく今度は三人だった。

「そう、それこそが驕りであり、不遜であり、冒涜。私は藍染様より”7”の数字を下賜され御使いたる第7十刃。そして私の響転は十刃中最速。私とアナタは”同列”ではない。云わば”隔絶”されているのですよ、速さの地平、その端と端で・・・・・・」

不遜、冒涜、同列ととること自体がそれに値する罪であると、そうフェルナンドの言を断じるかのようにして振り下ろされる三振の刃。頭上高くから振り下ろされるそれは、断頭台の刃に似て無慈悲に刈り取る死招きの輝き。

三方を囲まれ、フェルナンドにそれを避ける術はない。

あるのはその手に握った己が一振りの斬魄刀のみ、しかし彼にそれだけでこの局面を乗り切れ、というのは酷な事だ。

フェルナンドに刀の才は無い。

壊滅的でなくともその才は”二流”なのだ、とてもその刀一本で乗り切れるような才能の煌きを放つものではない。

が、フェルナンドがこの局面でみせたのは、いつもと変らぬ笑み。

どこか他人を食ったような皮肉気な、そんな笑みを彼はいまだ浮かべているのだ。

自分が囲まれた状況、フェルナンドはそれに対応すべく動く。

真正面に立つぞマリには突き刺さるような前蹴りを見舞い、両脇から迫る刃の一方をその手に握った斬魄刀で受け止める。

先程は弾かれたが、来ると判っているものに対応するのだ、たとえ蹴りを打った片足立ちの状態でもそうそう崩されるものではなく、その斬撃を受け止めるフェルナンド。

しかし此処まで。
一人を反撃で、一人を刀で防いだフェルナンドだったが、迫る刃の数は三。
あと一撃を残し彼の状況は手詰まりといえる状態に陥っていた。

（獲った！　所詮アナタはこの程度、曝した罪をその首を持って償いなさい。愚かしい獣めが！）

ゾマリを確信が通り抜ける。
彼からしてみればフェルナンドは格下もいいところの相手であり、その相手に三体の双児響転で挑めば獲るのは容易いと。
その根拠はなくとも真理に近い核心をもって下した攻撃。
そしてその確信は見事的中し、今まさに相手は手詰まり、がら空きとなった首を刎ねる事のなんと容易い事か。
振り下ろされる刃は何一つ迷う事無く勝利へ、首を刎ね、曝し、罪を償わせるために奔った。

だが、その刃は首にかかる寸前で止まる。

「な・・・なんだと！？」

その呟きはゾマリから零れていた。
獲った、という確信。

その確信のもと奔っていた自分の刃は、フェルナンドの首にかかる直前止まった、いや、止められてしまったのだ。

「驚く程の話じゃねぇだろう？　第7十刃サンよォ・・・・・・たかが刃を掴んだぐらい・・・なぁ・・・・・・」

状況はフェルナンドの言葉が全てを物語っていた。
ゾマリが振り下ろした最後の刃、首を刎ねようとするその刃をフェルナンドは只単純に掴んで止めたのだ。
掴んだ、といっても掌で握り込むようにして止めたのではなく、軽く握っていた拳、その人差し指と中指の間にゾマリの斬魄刀の刃を挟み込むようにして掴み、止めている。
それはまさしく刹那の業。
早ければ掴めず、また遅ければ手を真っ二つにする斬撃、その刹那の拍子をフェルナンドは掴み、刃をも掴んだのだ。

ゾマリは先程までの無表情を驚愕に染める。
目の前で件の破面がやってみせた事、不可能とは言い切れないそれ、そしてこうして現実として目の前にあるということはこの破面にとってそれは不可能ではないことの証明だった。
だが出来るだろうか、少なくとも自分に同じことが出来るだろうか。
ただ真正面から振り下ろされ、そして来ると判っており、尚且つ十全の体勢ならばゾマリにも容易いであろうその御業。
しかし目の前の破面は体勢を崩し、虚を突かれ、それをして更に指二本でそれをやってみせたのだ。

ありえない、そんな思いがゾマリに膨れ上がる。
それが出来る出来ないの話ではない、その破面がそれをしたという

事が彼にとっては重要。
格下、自分とは隔絶された存在であるはずの破面、罪深き愚物にそんなことが出来る筈がないというゾマリの自尊心がそれを否定しようとするのだ。

「・・・・・・クッ！」

分裂体は消え、残るのはゾマリの本体。
その本体といえばフェルナンドに刀を掴まれたゾマリであり、存外強い力で掴まれたそれを無理矢理外した彼は一度フェルナンドと距離を置いた。
ありえない事をしでかした罪深き者、偶然なのか必然なのか、確かめようがないにしろその出来事はゾマリを揺らす。
戦いとは精神の安定。
安定した精神は戦いを冷静に見つめ、勝利への道筋を照らし出す月光。
しかしそれが揺れればとたん道筋は消えうせ、勝利は遠のくのだ。
故に揺れる、ということは敗北に繋がる一つの要因、それをゾマリは充分に理解し一呼吸の後にその揺れを小さく留める。
そう、彼にとってこの戦いは勝利して当然の戦い、負けなど許されない、いや、はじめから彼にとって負けなどありないのだから。

「なるほど・・・・・・　流石は藍染様がお与えになった力だ、愚物にもこれ程の能力を与えられるとはまさしく”王”の御業、といった所でしょう。だが・・・調子に乗らない方が懸命です。　私の双児響転は三体だけではない、最大数は・・・・・・五体です。
五対一、いかに藍染様の御業が優れていようとも、この戦力差を覆

せるものではありません、まして扱うのがアナタでは・・・ね・・・・」

ゾマリが至った結論、精神を揺らさずにすべてに理由をつける答えはそれしかなかった。
優れているのはこの破面ではなく、この破面に力を与えた彼の王、藍染惣右介の御業によるものだと。
先程の出来事は王の御業による能力、それがほんの一瞬現われたに過ぎず、この破面が持ちうるものを凌駕しているのだと。
そうでなければ先の出来事に説明などつけられるはずもない、と。

そう結論付けたゾマリはいよいよ本気でフェルナンドを仕留めにかかる事を宣言する。
双児響転、その最大の分裂数である五体、それをもってフェルナンドを断罪すべく仕掛けると宣言するのだ。

「知るかよ・・・・・・　三体だろうが五体だろうがやることは同じだ。それに・・・コッチは一対多でやるのは慣れてるんでねぇ・・・・・御託が済んだならさっさと来いよ、無粋な輩の御使いさんよォ・・・・・・・」

「ギッ・・・・・・侮辱も大概にしろ！　この・・・駄獣めが！」

ゾマリの見下すような言葉の雨を、フェルナンドはバッサリと斬り捨てる。
三体が五体に増えようが知った事ではないと、やることは結局同じ、戦って倒す以外にないと。

更にフェルナンドは普段から一対多数の戦いには慣れたいた、ハリベルの従属官三人を一手に相手にすることが出来る彼にとって多数との戦いは苦手の部類には入らず、むしろ彼の目指す理想形は一人で大軍を打倒するような、そんな姿だったからだ。
故にフェルナンドは怯まない、二度追い込まれていたとしても怯むことはないのだ。
そして怯まないと同時に彼の言葉はゾマリの神経をこれでもかと逆撫でしていた。

彼が崇拝する王を無粋な輩と言った事も然ることながら、まるで彼自身の使命たる王の代行者、御使いという崇高なものすらも小馬鹿にしたようなフェルナンドの物言いは、揺れを抑えた精神をかき乱すには充分だったのだろう。
鬼のような形相となったゾマリ、丁寧な口調すらかなぐり捨て吐き捨てる言葉、おそらく腹の底に抱え続けた言葉は遂に日の目を見ることとなったようだ。

其処から始まった光景はある種異常だった。
闘技場、四分の一ほどを崩壊させたその場所の中心である砂漠には七人の人影が。
一人は立会人である東仙要、付かず離れずの距離で決闘の行方を見守っていた。
もう一人はその決闘の主役であるフェルナンド・アルディエンデ、襲い来る刃の事如くを避け、或いは捌きつつも纏った服はそこかしこが斬れ、しかし出血が薄っすらとしか見られないところを見れば、彼が自身を襲い来る攻撃を紙一重で避わしているのが伺えるだろう。
残るは五人、その全員が同じ顔、同じ身体つき、そして同じ剣捌きで同じ標的を襲う。

闘技場を所狭しと駆け回るフェルナンドの周りを囲み、張り付くようにしてその首を落とそうとするのはゾマリ・ルルー。
一対一の決闘においてその光景は五対一、しかしその実は一対一というなんとも奇怪なものがそこには広がっていたのだ。

襲い来る幾多もの刃をフェルナンドは避わし、その全てとはいかずともゾマリに対し反撃を試みる。
仰け反って避わすと同時にそのまま倒立し放つ『弧月』や、攻撃に対してカウンターとなる『朔光』といった業を用いつつ、しかしその全てがまるで空を切るかのごとく不発に終わる。
当たった感触は何時も同じなんともいえない手応えの無さのみで、しかし迫る刃だけは殺気の乗った現実だった。

（チッ！　どうしても速度では負ける・・・かよ。まぁそこで張り合っても仕方がねぇか・・・・・大体ヤロウの考えは読めてきた。
後はそれが当たるかどうか・・・・・賭けだな、だがそういうのは嫌いじゃねぇ・・・・・！）

襲い来る刃を避け、今連続の回転蹴りである『旋風』で反撃しながらも、フェルナンドは考えをめぐらせる。
勝利への思考、戦いの最中でも止める事許されぬそれが彼の頭の中を光速で駆け巡り続けていく。
速度ではどうしても劣る、流石は十刃最速と言うだけの事はあると認めるフェルナンド、かといって其処で張り合ったところで何があるでもなく、負けている、劣っているなら他から補えばいいと考えを決める。
後は賭け、攻防の間にゾマリの大方の思考は読めたというフェルナンドだが、それは完璧というわけではなく、どうしても賭けの要素

が絡んでくる。

だがフェルナンドは決断した。
往くと、その賭けの道を往くと。
その先に勝利があるのならば往くと、そうしなければ駄目だというのなら迷うことはしないと。
そしてそんな賭けは嫌いではない、と。

終始動き回り続けていたフェルナンドが止まる。
砂漠にしっかりと足を着け、どっしりと構えるかのようなその姿。
だがそれは下策といえる。
止まれば囲まれるのは必定、動き回っていたとて半ば同じではあったが完全に囲まれるという事の危険度の差は大きい。

（・・・・・諦めたのか？　いや、あの不遜なる態度、それほど殊勝ではあるまい。だがなんにしろ私にとっては好機！　決着をつけさせてもらいましょう、念には念を入れて・・・ねぇ・・・・・・）

フェルナンドの姿を見たゾマリは、それを訝しがりながらも好機と捉えた。
何かある、それは判っている、だがあの破面の考えることなど高が知れているという考え。
強者特有の考え方、何が起こっても自分が負けるということを考えられない思考、絶対の自負による驕り。
フェルナンドの驕りを断罪するというゾマリも、その実では驕って

いるのだ、自分でも気がつかぬほどに。

足を止めたフェルナンドを仕留めんと、刃は間を置かずに襲い掛かっていた。
その数は四、四方から襲い来る刃は死を宣告する悪魔の指先。
その指先をフェルナンドは驚異的とも言える反射で避わしていくが、足を止めた弊害か紙一重とまではいかずに身体に浅い刀傷を負っていく。
だが、それでもフェルナンドはその悪魔の指先を、死を招き、死へと誘うその指先の全てを避けてみせた。
体勢を崩しながらも、しかし確実に避けて見せたのだ。

四本の刀を。

「・・・・・・刑を、執行しますよ。　愚かなる獣・・・・・・」

背後、集中は切らさずとも体勢が崩れたフェルナンドの背後にそれは立っていた。
念には念を、という言葉通りゾマリは分裂体での決着ではなく、体勢を崩す事を優先して攻撃し、最後の一撃のための状況を作り出し

たのだ。
背後を取る、という相手にとって屈辱的な状況を。
背後とは不覚の現れ、それを取られたのは例え策を弄されようとも一重にフェルナンドに責がある。

天高く掲げられたゾマリの斬魄刀。
そして激昂の後再び無表情となった顔で静かにそれを宣言する。

終わりだ、と。

言葉から間を置かずに刃は放たれた。
振り下ろすというあまりにも単純な動作、間違いようの無い動作がフェルナンドへと迫りそして血潮が弾けた。

振り返ったフェルナンドの左の肩口、そこに刃は食い込んだ。
フェルナンドが体勢を変えたため斬首に至らなかった結果の光景。
そして肩から切り落とされてもおかしくない斬撃が肩口に食い込む程度で済んでいるのは、フェルナンドが片手でゾマリの腕を止めた結果だった。
振り向き様、肉に刃が食い込んでいきながらもフェルナンドはゾマリの腕を掴み、それ以上の刃の進入を防いだのだ。

「悪足掻きを・・・・・・　何れ償うべき罪、永らえたとて結果が同じならば、その命に意味などありはしませんよ。」

フェルナンドの対応にウンザリしたようにゾマリは答えた。
永らえてなんになると、お前が自分に殺されるのは決定事項、それが今か先かの違いしかないなかで何故足掻くのかと。
尚も振り下ろそうとするゾマリの腕を止めるフェルナンドを侮蔑の

瞳で見るゾマリ。
悪足掻き、不様で不様で、まるで見るに耐えないとそうその瞳は語っている。
が、フェルナンドはそんなものの何一つを気にしていなかった。

「よぅ・・・・・・　テメェは”ホンモノ”か・・・・・・？」

一つ零し、ゾマリの腕をしっかりと掴んだままフェルナンドは一歩、ゾマリへと踏み込む。
そして空いていた右の拳を握りこむと、そのままゾマリのわき腹辺り、そこから拳一つ分無い程度の位置までもっていく。
その動作を見ていたゾマリは別段何の反応も見せなかった。
振り被ったならまだしも、そんな位置から拳を放っていったい何が出来ると、所詮は悪足掻きの延長程度でしかなく、そんなものに構う暇があるならこのまま腕の一本も斬り落とした方がよほど断罪足りえるとしたのだ。
その行為から視線を切り、再び自分の刀の方へと視線を向けたゾマリ。

だがそれは大きな間違い。

フェルナンド・アルディエンデは近接戦闘に特化した破面。
その彼を相手に密着状態が如何に危険か、ゾマリは理解していなかった。
たった拳一つ分に満たない隙間、その隙間が自分にとって如何に危険で、フェルナンドにとって如何に有利な間合いかを理解していなかった。
そして、最後にゾマリは理解していなかった。

自分が背後をとったのではなく、フェルナンドにとらされた、ということにも・・・・・・

闘技場に鈍く耳に残るような音が響く。
敢えて表現するならば肉が潰れ、骨が潰れ、そこに鉄の板を叩いて凹ませたかのような音、といえばいいか。
とにかく胸に重く残る嫌悪感を感じさせる音が闘技場に響いた。

その直後闘技場の様子は劇的な変化を見せる。
吹き飛んだのだ、片方が。
闘技場で戦っていた二人の内一方、それも終始攻め立てていたであろう方が、第7十刃ゾマリ・ルルーが吹き飛んでいるのだ。

理屈も何も無い、ただ目に見える光景が全て、その光景を言い表す言葉はやはりゾマリが吹き飛ばされたという一言、それが全てだった。

そのゾマリが吹き飛んだ基点となった場所、そこに立つのは当然の如くフェルナンド・アルディエンデ。

左の肩から血を流しながら、右の拳を振りぬいた体勢で立つフェルナンドの姿。

吹き飛んだゾマリとそのフェルナンドの姿から想像できる経緯は一つ、フェルナンドの攻撃でゾマリが吹き飛ばされた、という単純なもの。

そしてそれは間違いではなく、拳一つに満たない隙間がフェルナンドに起死回生の一撃を与えたのだった。

「『虎砲（ティグレセール）』・・・・・・・どうやら、賭けは勝ちらしいな・・・・・・」

虎拳一擲

驕るは九死

しかし一生を得る

天上の戦

狼の片割れ

何を思う・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 46（後書き）

フェルナンドＶＳゾマル開戦です。

ゾマリの最初の能力、双児響転をどうフェルナンドが攻略するか、がポイントでした。
それまでの道筋に、若干強引さがあるのはご愛嬌ｗ

あまり詳しく描写しませんでしたが、今まで生まれた業も使用して戦ってます。
『雷』は無理そうですがｗ

そしてついに陸奥を代表する技の一つ、『虎砲』を出せました。
長かった・・・・・・
次でまたもう少し詳しく描写したいと思います。
スペイン語での読みはまた今度、チョッと時間がないんで更新優先します。

それに伴って次回予告もあとで。
明日には書いておきますから、気になったら覗いて下さいｗ

２０１１．５．０１
次回予告追加しました。
これでひと段落・・・か。

吹き飛ばされる浅黒の大男。
吹き飛ばしたのは金色の髪の青年。
何が起こったのか、何故そうなったのか、それはある意味瑣末なことなのかもしれない。

重要なのは結末。
闘技場の砂漠を囲むようにしてそれを見る者達の目に映った光景。
その光景を見た者は一様にこう言うだろう。

十刃を、番号無しが一撃で吹き飛ばした、と。

拳を振りぬいた体勢でいたフェルナンドが残心を終え姿勢を戻す。
その左肩には今だ彼が吹き飛ばした男の斬魄刀がしっかりと食い込んでいたが、彼にそれを気にする様子はなかった。
確かにフェルナンドの肩はその刃によって斬られはしていたが、傷

はそれ程深い訳ではなく、精々一寸程度、人であれば判らないが生憎彼等は人でなしの破面（アランカル）だ、死にはしないといった所だろう。

対してもう一人の男、浅黒の大男ゾマリ・ルルーは混乱の極地にいた。

何が自分のみに起きたのか彼にはわからなかった、かろうじて判るのはあの時フェルナンドが自分の脇腹に添えるようにして出した右の拳、アレが原因だということだけ。

ゾマリにとってそれだけは確定だった。

なにせ吹き飛ばされ、砂漠に膝を着く屈辱を味わい口から血を吐き出しながら触った自分の脇腹は、信じられない事に拳大の陥没を刻まれていたのだ。

猛烈な痛み、鋼皮（イエロ）の守りなど役に立たないという程の衝撃は、彼の内と外を一撃で破壊していた。

「ギザ・・・マ・・・・・・　私・・・に、一体、なにを・・・しだ・・・・・・！」

ゾマリのその形相は、既に無表情とは懸離れたものだった。

相手を見下ろすようなそれではなく、困惑、屈辱と怒り、そして激痛に歪む苦悶が入り混じった様な、そんな顔でフェルナンドを見る彼。

額からは一気に脂汗が噴出し、呼吸は浅く整うことは無い。

浮かぶのは明らかなダメージ。

たった一撃、拳一つ分にも満たない隙間から放たれた一撃、しかしその絶大な力の一撃によってゾマリは今砂漠に膝を付いているのだ。

「別に？　何も特別な事はしちゃいねぇよ。　ただ、力一杯殴っただけだ。」

荒れ狂う感情とそれを上回るかのような痛みを抱えたゾマリの問に対し、フェルナンドは何を包み隠すでもなく答える。
それはそうだろう、何をした、と問われれば彼の持つ答えは一つ、”殴った”という単純なもの以外ない。
フェルナンドに他の解など無いのだ、ただ付け加えるならばそれが彼の言ったとおり”力一杯”だった、という事以外。

『虎砲』、フェルナンドがそう呼んだ業は、突き詰めれば本当に彼の言ったとおり力一杯殴りつけた拳だ。
だがその”力一杯”というのが曲者、拳をほぼ相手に密着させた状態からというのは如何に腕力の強い者でも、そう威力のある攻撃など出来ない。
体勢的不利はそのまま攻撃の威力となり、結果悪足掻き程度の攻撃にしかならないのだ。

だが、フェルナンドがそんな攻撃をよしとする訳がない。
超密着状態、誰もが有効打を持たない間合いだからこそフェルナンドは磨く、拳の届く範囲で自分に死角などあってはならないと。
腕だけでは駄目、体の捻りを加えてもまだ弱いという試行錯誤、もっぱらその試行錯誤の相手はハリベルの従属官三人であり、今この光景を見ているであろう彼女等は、一様に自分の脇腹を摩っている事だろう。

そんな膨大な試行錯誤と尊い犠牲の生まれたのがこの業、虎砲。
全身の力、それは腕であり、胴であり、脚、それらを覆う大量の筋肉が産む莫大な力、それを支える基盤たる骨の強度、そしてその莫大な力を円滑に伝える全身の間接、更には霊力という駆け巡る奔流、そしてその動作の膨大な反復。

全てが連動し、収束し、昇華した巨大な力、それが相手に密着した拳から放たれるのだ。
その先にあるのは死、よくて骨と内臓の著しい損傷。
先ず初見で避けられるはずもなく、こうしてゾマリが生きているのは一重に彼が十刃まで上り詰めた実力者ゆえだろう。

「ふざげるな!!　ゴホッ!　・・・た、ただ殴っただけだと?それだけの事で、この、私が膝を・・・　キザマ程度を相手に、膝を付ぐものか!」

当然ではあるがゾマリがそれを認められるはずも無い。
彼の自尊心、それも絶対的王である藍染の御使いを自称する彼の自尊心が、ただ殴られたというだけで膝を付いた事を認められるはずも無いのだ。
なにかある、そうに決まっている、そうでなければ、そうでなければ自分より格下であるフェルナンドが自分に膝を付かせる事など出来る筈がないと。
疑いというよりも彼の中では確信に近い感情が否定するのだ。
只の打撃だ、という事実を。

「アンタがどう考えようと、俺には関係ねぇんだが・・・な。まぁ、賭けに勝ったのが俺だった、って事さ・・・・・・」

「賭け・・・だと・・・・・・!?　そうか!やはりぞうか!　そうでなければおかしい!ゴホッ、所詮、運に任せた、攻撃!そうでなければ”最速”たる私が、キサマの攻撃を受けるなど、ありえる筈がない!」

フェルナンドが零した呟き、それに対し声を大にして叫ぶゾマリ。
賭け、という運の要素が絡む攻撃、それが全てだと。
その運任せの攻撃、どちらに転ぶかもわからない攻撃が偶々自分を捕らえたに過ぎないと、ゾマリは確信していた。

「・・・・・確かに”運”だったな。　アンタが俺の背後をとるかどうかは・・・・・まぁ歩が悪い賭けじゃなかった。　おそらく当たる・・・と確信はしてたんだ、アンタは絶対背後に来る、ってな。」

「ふざけた事を・・・・・・　アナタ程度が私の行動を予測した・・・と？」

「あぁ。　アンタははじめっから正面から攻撃して来なかった。”決め”は大抵後ろをとろうとする・・・・・大方俺に屈辱を、とでも思ってやがったんだろう？だから賭けた・・・・・・　足を止めればアンタは必ず背後に来る。はじめは違っても俺の首を獲る時は必ず来る、ってなぁ。」

フェルナンドの賭け、それはゾマリが来るかどうかという賭け。
しかしその賭けは決して歩の悪いものではないと、彼は確信を持っていた。
最後の一撃、その瞬間に至るまでの全ての攻防、その全てでゾマリは必ずといっていいほど背後を、フェルナンドの背後を取ろうとしていた。
動き回る事で確かに攻撃を避ける事は出来る、しかし自分の攻撃は悉く避けられ、当たったとしても分裂体のみ。
その状況を打破するため、フェルナンドは賭けたのだ、足を止めた

自分の背後にゾマリは来る、ということに。

今までほぼ全て背後を取りに来ていたゾマリ。
だが足を止めたその時、再び其処に来るとは限らない。
別から来れば背後に気を張っている自分は、避けられる保障はないと。
だがそれをする価値はあった、このまま攻撃を避け続けて何になるのか、それが戦いと呼べるのか、自身になんの危険も背負わずに勝利など獲られるはずが無い。
危機を乗り越えた先に勝利があるというのなら、フェルナンドはいくのだ。

そして彼は掴んだ、一撃を、回生の一撃を穿つ機会を。

「・・・認めない・・・・・・　認められるものか！私がアナタ程度に見透かされたなどという事が、認められるはずが無い！」

なんと滑稽な事か、ゾマリからすればそう思えてくる現状。
確かにフェルナンドの言ったとおりだった、この破面に最大の屈辱を与えるにはどうするべきか、それを考えたときゾマリが思い至った答えはまさしくそれ。
戦士、自らをそう自覚するものにとって最大の屈辱、背後を取られ死す事。

最も大きな死角であり、それ故に戦士たるもの常に気を張り獲られることを許さぬ背後。
その背後を取りどうしようもない実力差を判らせ、いや、背後を取

られたことすら気付かないという最大の屈辱に沈め、後悔の海に沈める事。
それがゾマリの考えた屈辱的な死と、最上の勝利の姿。

だがフェルナンドはその考えを見透かし、敢えて踏み込ませ利用したというのだ。
ゾマリにそれを認められるはずが無い、格下であるフェルナンドに言うなれば操られたという現実。
”支配”を知る彼からすれば、フェルナンドに自身を支配されたのとそれは同義であり、これ以上ないほどの屈辱なのだ。

「知るかよ、アンタが認める認めないなんてもんは・・・な。コッチだって無傷って訳じゃねぇ、見ろよ。アンタの刀がいい具合にめり込んで、やがる・・・クッ！っと。」

叫ぶゾマリに対し、フェルナンドは知った事かとそれをバッサリと斬り捨ててしまった。
確かにそうなのかもしれない。
認めるも認めないも、その個人の了見の中の話でしかなく、それを押し付けたところで押し付けられた方からすれば関係ないのだ。
そんなゾマリの叫びなど何処吹く風、といった風でフェルナンドは自分の左肩に食い込むゾマリの斬魄刀に手をかける。
今の今まで刀が肩に刺さったままだった、というのがおかしな話ではあるが、フェルナンドの虎砲の威力に思わずそれを放してしまったゾマリ。
そうして刀を肩から外す様子をゾマリは苦々しくも見つけている。

斬魄刀とは死神、そして破面に共通する全ての鍵といっていい。
死神はその霊力を押し固め刃とし、その手に持った己が内にいる斬

魄刀本体の名を呼ぶことで更なる力を発揮し、戦う。
破面とて同じ、虚としての力の核を封じ刃と成したそれ、その名を呼ぶことで彼等は真の姿と力を解放するのだ。
その斬魄刀が己が手の内にない、というのは彼等にとって翼をもがれたに等しく、そのまま戦闘を行えば結果など見えている。

ゾマリの不覚、それはフェルナンドの攻撃をその驕りによって受けたことも然ることながら、その手から斬魄刀を手放してしまった事。
そしてその斬魄刀を敵が所持している、ということに他ならない。
現状を見ればこの勝負は決したといっていいだろう。
ゾマリが受けたダメージはあまりに大きすぎる、肋骨の多くは砕け、内臓にも深刻なダメージを追っている可能性があり、そんな状態、十全でない状態では如何に十刃最速と謳われようと、その十全の速さを発揮する事などできないのだ。

たった一撃、フェルナンドはたった一撃で十刃最速の足を奪った、その一撃はどちらにとっても重い一撃となったのだ。

どうしようもない状況。
ゾマリにとってはある意味絶体絶命といえる状況。
どうやってそれを打破するか、多少回復したのか脇腹を押さえながらも立ち上がったゾマリ、そのゾマリに鈍色の流星が奔る。
流星はゾマリの目の前の砂漠へと一直線に奔り、そして突き刺さった。

「・・・これは一体何の心算です・・・・・・」

「何の心算もねぇよ。　抜け、アンタの刀だ・・・・・・」

ゾマリの正面、その砂漠に突き刺さった鈍色の流星、それは刀だった。

そう刀だ、斬魄刀、丁寧にも一振りされ血が飛ばされた第7十刃ゾマリ・ルルーの斬魄刀がそこには突き刺さっていた。

突き刺さった刀を見たゾマリは困惑の声でその理由をフェルナンドに問う、一体何の心算だと。

だがフェルナンドは答えない、というか答えるべき解がないといった風で左手に持った自分の斬魄刀を鞘に収めながら答えた。

そう、フェルナンドに他意はない。

他意はないのだ、その言葉が全て、自分の肉を半ば切裂き止っていた刀、それをただ持ち主に返した、というそれだけの事。

言葉通り、それはお前の刀だから返した、だから抜け、と言い放ったのだ。

「・・・・・私は、私は今までこれ以上の屈辱を知りません・・・・・フェルナンド・アルディエンデ、愚かなる獣よ・・・・・・・不遜なる態度、藍染様への度重なる不忠、そして・・・・・・そしてその傲慢が過ぎる驕り！　許し難い！　何にも増して！」

そう、フェルナンドに他意はない、だがそれがない故にその行いはあまりにも残酷だった。

ゾマリの顔には苦悶も屈辱もなくなりただ怒りだけが、激怒の表情だけがありありと浮かぶ。

屈辱、その行動はあまりにもゾマリにとって屈辱的。

自分の圧倒的有利を呆気なく手放すフェルナンドの行動、そしてそ

の行動はゾマリに確信させる。
その圧倒的有利を返そうとも、この破面は自分に勝つ気でいる、という事を。
許し難い傲慢、度が過ぎる驕り、どこまでも不遜なその態度、その全てがゾマリの癇に障り逆鱗を掻き毟る。
王である藍染への忠義と崇拝が彼の全て、その王を穢し尚且つ自分自身をも軽んじるこの破面を、ゾマリは今、猛烈に殺したかった。

「それで結構！　漸く喧嘩らしくなって来たじゃねぇか！えぇ！
お題目なんかいらねぇ！　気に入らない、だから倒す！戦いにこれ以上の理由は余分なだけなんだよ！」

「黙りなさい！　例え怒りに染まったとて、アナタのような獣と同じ考えを私は抱かない！この刀・・・　私に返した事を後悔して死になさい！鎮まれ！　『呪眼僧伽』！！」

高まったゾマリの怒りに、フェルナンドははじめて叫んだ。
そう、彼が待ち望んだのはそういった反応。
フェルナンドが望んだのは只の喧嘩なのだ、制裁、誅殺、断罪などといった御託の類、大義名分に頼った戦いなど彼は一切望んでいない。
あるのは個と個の戦い、何も介在するもののないただ戦うことだけを目的とした戦いなのだ。

そんなフェルナンドの叫びにすらゾマリは異を唱える。
たとえ怒りに染まり、目の前のフェルナンドに憎しみを持って挑もうともそれが喧嘩という低俗なものになることはない、と。
あくまでこれは誅殺、その為の決闘であると。

そしてゾマリは叫びながら突き刺さった斬魄刀を抜き放つ。
再び帰ってきた自分の斬魄刀、だが今彼にそれを感じる余裕はない。
引き抜き、そして構えると彼はすぐさまそれを叫ぶ。
真なる姿、真なる能力を呼び覚ますその名を。

霊圧の上昇、悲鳴を上げる大気と闘技場、その中で一人獣の笑みを浮かべるフェルナンド。
戦いは次の段階に移行しようとしていた・・・・・・

フェルナンドとゾマリの戦いが始まるその幾分か前。
その小さな破面は焦っていた。
頭には片方の角が折れた兜の仮面の名残を被り、肩口でそろえた色の薄い黄緑色の髪、瞳もまた非常に薄い紫色で、息を切らしながら走っている。
振られる腕も踏み出し脚も一言で言えば華奢であり、とてもではないが戦闘に堪えられるようには見えないその破面は今、焦っていた。

その小さな破面は常にもう一人の破面と行動を共にしていた。
何時も傍らにいた大きいほうの破面は、この目の前で行われる決闘を見ながら終始不機嫌で、難しい顔をして、そしてその不機嫌さよりも尚深い悲しみをその瞳に浮かべていた。
小さな破面とてそれは同じだった。
傍らに立つ大きな破面の服の裾をその手でギュッと握りながら、それでも目を逸らす事をしないのは、小さな破面なりの意地なのかもしれない。

「・・・・・別に、見てなくてもいいんだぜ・・・・・・？」

そんな小さな破面の雰囲気を察したのか、大きな破面はぶっきらぼうにもその破面を気遣って見せる。
自分は一切闘技場から視線を切らないまま、見たくなければ見なくていいと。

「だったら・・・自分だって見なきゃいいじゃん・・・・・・」

大きな破面の気遣いにも、その小さな破面は視線を逸らす事はしなかった。
それは一重に大きな破面の為。
自分だけが痛みと悲しみから遠ざかるのは、小さい破面には耐えられなかった。
大きい破面だけがそれを背負おうとするのは卑怯だと思っていた。
痛みも、悲しみも、楽しみも、嬉しさも、全て二人で分かち合うの

だと、小さい破面は決めていたのだから。

だが、たった一体の破面の登場が繋がる二人を別つ。
暴虐、暴慢を尽くし、目の前に命があるということすら目に映らないかのように振舞うその巨大な破面。
その振る舞いを見た小さな破面の手は、先程より強い力で裾をつかみ、そしてかすかに震えていた。
その裾を掴む手に、大きな破面の手がそっと重なる。

ぬくもり、震える手に感じたぬくもりは自分以外の他者の体温。
そしてそのぬくもりは絶対的な安心感、だがその手のぬくもりに小さな破面の手が緩んだ瞬間、大きな破面は小さく呟く。

「ここで大人しくしてろよ？　・・・・・リリネット。」

「えっ？」と、リリネットと呼ばれた小さな破面が呟いたときには、すでに大きな破面は其処にはいなかった。
彷徨う視線、リリネットの視線が次にその大きな破面を捉えたのは闘技場のど真ん中、巨大な破面に対するようにして立っているその姿だった。
そしてリリネットが声を上げるよりも早く事態はめまぐるしく変化する。
緋色の霊圧が飛び砂漠は弾け、砂煙が晴れた其処には大きな破面の姿はなく、その姿は巨大な破面の懐、そして大きな破面はそのまま巨大な破面の首を掴むと上へ、リリネットだからこそ感じたその動

き、そして大きな破面はリリネットを残し天蓋の外へとその姿を消してしまった。

リリネットは焦っていた。
置いてけぼりを食らった事も然ることながら、また背負わせてしまうと。
大きな破面は何時もそうだと内心愚痴るリリネット。
何時だって自分ひとりで背負おうとする、自分が居るのに、せっかく二人になったのに何時も何時も、と。
それが大きな破面の優しさである事もリリネットは理解していた、失いたくない、失わせてなるものか、ならば泥も火の粉も敵の刃も、その全てを自分が受けようという、そういう優しさ。
だがそんなものはリリネットとて同じなのだ。
失いたくない、絶対に一人になんかしないという思いは同じなのだ。

だから焦る。
大きい破面の力を疑うわけではない。
でももし、万が一、あの巨大な破面が強かったらと思うとリリネットは焦らずにはいられない。

だから自分が、自分が傍にいなければ、とリリネットは焦る。
闘技場の通路、皆が舞台たる砂漠へとその視線を向け閑散とするその通路を、リリネットは一人上に向かって走っていた。
どうすればいいかなんて判っていない、でも上へ、とにかく上へとリリネットは駆けているのだ。

「ハァ、ハァ・・・・・・　馬鹿・・・・・・・・・スタークの大馬鹿！　いっつも、一人で、カッコつけて・・・いっつも一人で、背負

い・・・込んで！」

走りながらも口をつくのは恨み言ばかり。
大きな破面、スタークに対する恨み言ばかり。
気に入らない、気に入らないと、子ども扱いが気に入らない、護っているという考えが気に入らない、自分は護られるために生まれてきたわけじゃないと。
どっちが元かも判らない。
でもどちらを護るだとか、そういう関係ではないだろうとリリネットは思う。
片方が片方を、ではなく、両方が共に支えあい寄り添って生きるために、自分達はいるんだからと。

「わぷっ！」

一心不乱に走るリリネット。
誰もいない通路は好都合であり、全力で駆け抜けるリリネットはそのまま全速力で角を曲ろうとする。
だがその角の先には思わぬ壁があった。
全力で走っていたリリネットは無論止まる事など出来ずに、その壁へと正面からぶつかってしまう。

どこか可愛らしい声を漏らしながらぶつかるリリネット。
そしてそのまま後ろに倒れるか、と思いきやそうはならなかった。

「あらぁ、ビックリしたなぁ～。　どや？　怪我ないか？　ちっこい破面サン？」

リリネットがぶつかった壁、それが倒れ掛かったリリネットの腕を掴み、それを阻止していた。
銀色の髪に糸のように細い眼、笑ったまま固まったような顔に意匠は違うがリリネット達破面と同じ白い死覇装を纏った男。
仮面もなく、仮面紋もなく、漏れ出す霊圧すら破面の者でないその男は死神、リリネットがぶつかった壁の名は『市丸ギン』といった。

一度リリネットの身体をひょいと持ち上げて立たせると、市丸はリリネットに視線を合わせるようにしてしゃがむ。
リリネットの方も急いでいるのだが、自分からぶつかった手前ばつが悪そうであった。

「なんや急いどったみたいやけど、ちゃ～んと前見なアカンで？　ええな？　ほな、僕はもう行くよって。　上のドンパチ見て来い言われてしもたんや。ほなな、ちっこい”坊”。」

ポンポンとリリネットの頭を二度ほど叩くと、市丸は立ち上がりその場を去ろうとする。
が、去り際に市丸が残した言葉は、リリネットの脳天から身体を駆け巡るような衝撃を残していた。

振り返ったリリネット、その視線の先には意外と歩くのが早いのか遠ざかりつつある市丸の姿が、急ぎ後を追いかけるリリネット。
此処でコイツを逃す訳にはいかない、といった風で必至に後を追い、そして横合いから市丸の脛を目掛け強かに蹴りを放った。

ゴン、という鈍い音が響き、その格好のまま固まる二人。
そして廊下を半ばすべるようにして蹴りを放ったリリネットは、そのまま蹴った足を押さえて床をのた打ち回る。

「なにすんねや?坊。　いきなり蹴るなんてヒドイやないか。」

のた打ち回るリリネットに対し、市丸は別段痛みを感じていないといった風で転がるリリネットに話しかける。
市丸からしてみればなんとも理解できない初対面の破面の行動に、若干困惑していたがあまりそれは表に出ていないようだった。

「ッ～～～!!　ちょっとアンタ!いったいどんな脛の硬さしてんのさ!」

「どんな、言われても普通やで?　坊こそ一体どないしたんや。」

自分から蹴っておいて何ともな言い草であるが、リリネットは瞳に涙を溜めながら市丸を指差しながら叫ぶ。
そんな理不尽なリリネットの言葉に市丸は普通に答えたが、その光景はなんとも微妙ではあった。

まぁ行動の選択やその他もろもろに疑問はあるが、ここまでして自分を止めた小さな破面に市丸は理由を問う。
おそらくは先ほど急いでいた用件に関することなのだろうとアタリは付けていたが、リリネットの答えはまさにその通りだった。

「アンタ上にいくんだろ？　だったらアタシも一緒に連れてってよ！お願いだ！」

「・・・・・・　止めとき。　君が面白半分で見に行っていいもんと違う。命は大事にするもんや、行けば君・・・・・・死ぬで。」

リリネットの答えは明確。
上に、上に行くといった市丸に自分も連れて行け、というもの。
自分で向かったのでは遅すぎる、悔しいが自分に間に合う程の力はないとリリネットは理解していた、だからこれはリリネットにとって天恵であり、唯一残された道なのだ。
だが市丸はそれを止めようとする。
其処に至るまでの経緯も何も知らない市丸からすれば、この小さな破面が言う言葉は軽いものに聞こえた。
故に止める、幼い容姿の破面、感じる力も大きくないその破面があの化物と、その化物を有無を言わさず連れ去った破面の戦闘の現場にいれば、
どうなる蚊など目に見えていたからだ。

「違う！　面白半分なんかじゃない！　アタシが・・・アタシがいなきゃスタークが・・・・・・スタークが死んじゃうかもしれないんだ！そんなの駄目だ！　ゼッタイ駄目なんだ！」

それは何にも増した必死の叫びだった。
スタークが死ぬ、何時も傍にいたスタークが死ぬ、そんなものリリネットに耐えられる筈がない。
本当にそうなるかは判らない、可能性は低いのかもしれない、だがそれでもゼロではない。
だから行く、何処へだろうと駆けつける、自分が居るのは護られるためではないと、自分もまたスタークを護るのだという決意がその薄い紫の瞳には刻み付けられていた。

「・・・スターク・・・・・・　あの破面の兄さんの名前か？坊はずっと・・・あのスタークいう兄さんと一緒やったんか？」

リリネットの必死の声と瞳に映る熱意、それを感じた市丸。
スタークと呼ばれたあの破面、その破面とこの小さな破面はどういう関係なのか、市丸は知らなかったがずっと一緒だったのか、と問えば小さな破面はコクリと頷く。

「アタシとスタークはずっと一緒だった。　生まれた時からずっと・・・・・だから行くんだ。　傷つけさせたりしない、アタシが一緒にいて護るんだ！」

「っ！・・・・・・・・・」

頷いた後俯くようにしていたリリネット、その手が握り締められそして再び上げた顔には、強靭な意志があった。

見た目は幼子、しかしその中身は確固たる人格を持った精神が宿っている事を感じさせる、そんな強い意思。
ずっと一緒だった、ずっと一緒に生きてきた、大切な大切な存在、だから傷つけさせはしない、だから自分が護るのだと。

その決意の視線と言葉、それは市丸にとって過去の自分とダブって見えた。
生まれた場所は違っていた、だが支えあって生きてきた、ずっと一緒に生きるのだと、そう思っていた。
だが現実は残酷で、大切だったものは傷つけられた、彼はそれを許さなかった、許せなかった。
だから何時か、何時か必ず作ろうとした、大切なものが”泣かないで住む世界”を、その為に大切なものから離れる事になろうとも。

（・・・・・同じや。　この子も、僕も、大事なもんが傷つくのが見とぉないんや・・・・・・でも違うのは、この子は傍で、僕は遠くで護ろうとしてる事。どっちも同じ、でもどっちも違う・・・・・僕は・・・僕はあの時、どっちを選んどったらよかった思う？・・・・なぁ、乱菊・・・・・・）

心の呟きは儚く、ただ響いて消えていく。
どちらも同じ、だがどちらも違う。
方法の正しさ、選択の正しさ、それは一概に言えたものでなく、言うなればどちらもが正解であり、またどちらも不正解。
傍にいることで護れる事、遠く離れたからこそ護れる事、片方しか選べないというのならそのどちらもが正解。
そして重要なのは選択したその道で何を成したか、という事なのだろう。

「・・・・・わかった、　連れてったる。　大事な人の為、やもんな。」

再びしゃがみ込んでリリネットの頭をポンポンと叩いた市丸は、リリネットの願いを受け入れた。
大切な人、大事な人、その為に生きる事を示したリリネットの願いを、市丸は無碍にすることが出来なかったのだ。
自分もまた、大切な人の為に生きているが故に。

「ほんなら行くで、坊。　ちゃんと付いて来ぃや。」

「・・・・・・・・違う。」

立ち上がった市丸がリリネットを伴い上へと向かおうとする。
しかし市丸が歩き出してもリリネットはその場から動かない。
どうかしたのかと市丸が振り返ると、プルプルと振るえるリリネットの姿がそこにあった。
今更になって震えているのか、と思い市丸が近付くとリリネットはガバッと顔を挙げ、市丸の顔を指差しながら叫んだ。

「いいか！　アタシはリリネット！　リリネット・ジンジャーバック！男じゃなくて”女”だ！　よく覚えとけ、糸目！！」

天上の戦
月下の決闘
暴慢なる竜骨
狂乱し
割れた狼
逡巡に惑うか

BLEACH El fuego no se apaga. 47（後書き）

GW中の投稿はコレにて最後。

ホントはもう1話位・・・　と思ってたんだけど予定的に無理。
詳しくは活動報告『急いで急いで！』に書いてますんで、知りたい方はどうぞ。

まぁそんなこんなで47話。
二面作戦の前後編みたいな感じに仕上がりました。

描けば描くほどゾマリは駄々っ子に、フェルは唯我独尊になっていったよw
陸奥の代名詞といえる『虎砲』、ゾマリにはとりあえず一撃で足を止める業を
という事で虎砲採用しました。

後半はもうなにってリリネット！
やっと出て来たよ・・・・・・巧くかけてるかな？

そして市丸がリリネット移動のキーパーソンでした。
その市丸の内心の部分も意外とお気に入りだったりします。

さて次回は上の戦い。
一体どうなることか、作者もわかりません（考えていない、とも言うw

それではまた、感想などありましたらお気軽にどうぞ。

BLEACH El fuego no se apaga. 48

BLEACH El fuego no se apaga. 48

今、月だけがその二人を見ていた。

白い天蓋を群青の輝きは容易く突き破り、それを追うようにして飛び出してきた一つの塊は宙で弾け二つに分かれる。
大きな塊と小さな塊に分かれたそれ、片方は滑る様に、もう片方は削るようにして着地し、群青の光が穿った穴を中心に止まった。

袴に付いた砂埃を面倒そうに手で払うのは分かれた小さい方の塊、コヨーテ・スターク。
ぞんざいに払われた埃は幾分残ってはいたがその程度なら気にならないのか、スタークは視線を今だ砂煙に埋もれる大きな塊へとその視線を向けた。
その瞳、灰色がかった青い瞳は射抜くような鋭さは感じられないが、どこか見透かすような雰囲気を感じさせる。

「クソ塵の新入りがぁ！　このオレ様の呼吸を一瞬でも止めただと？お前みたいな塵が生きていられるのは、このオレ様の存在あってこそだと知らねぇのか！こいつは神殺しに等しい原罪だ！　死に続けて詫びろ！塵めが！！」

自らが削り取った天蓋から生まれた砂煙を割るようにして、叫びながら姿を現したのは第2十刃（ゼグンダ・エスパーダ）ネロ・マリグノ・クリーメン。
巨体を揺らすようにして歩を進める姿は、まるで壁が迫るような威圧感を見るものに与える。
巨大な身体、そして其処から迸る膨大な霊圧がそう感じさせるのか、一回りも二回りも大きく錯視するようなネロの姿を前に、しかしスタークはなんら怯んだ様子を見せなかった。
声高に叫ぶネロ、その叫びの内容はやはり暴慢で自己中心的、いや、”的”ではない。
彼にとって世界の中心こそは自分、その中心を脅かす、神を脅かす事が罪でなくてなんだと言うのだと。
それ故の発言、それゆえの咆哮が月下の白い地平に響き渡る。

「・・・・・・・・」

「何だ新入り！　オレ様に恐れをなしたか？　オレ様に背いた罪を今頃自覚したのか？今更遅いんだよ　塵め！　テメェの死は確定事項だ、オレ様が決めた、だから確定。それが世界の理である”神”の意思だ！　ゲハハハハ！！」

スタークはただ黙っていた、目の前で下卑な笑い声を上げるネロ、目の前で自らを神と称するネロ、そのネロの姿をスタークはただ、

黙ってみていた。
言っている事は理解できなかった、何が面白いのかも彼には判らなかった、ネロという破面が何を目指し何処へ向かっているのか、何を求め何を成そうとしているのか、その全てがスタークには理解どころか想像すら出来なかった。
だからスタークは知りたかった、たった一つの事を、スタークにとっては何よりも重要である事が、この破面には一体どういったものであるのかということを。

「・・・・・一つ・・・　アンタに訊きたい・・・・・・」

「ゲハハハハ！　あぁん？　なんだ？　今更、神である俺に縋ろうってぇのか？塵が・・・・・　まぁいいだろう。　神の慈悲だ、死ぬ前に慈悲を受ける事を泣いて喜べ、新入り。」

スタークが発した言葉、ネロはその問に答えるという。
特に考えがあるわけではない、しいて言えば虫の居所がよかった、と言う程度だろうがスタークにとっては良い方に事は転んだ。
灰色がかった青の瞳はしっかりとネロを捉え、真っ直ぐに見据える。

「アンタにとって・・・・・　アンタにとって俺達は・・・アンタと同じ破面は一体どういう存在なんだ？」

その問は何の変哲もなく、何の捻りもなく、ただ真っ直ぐな問だっ

た。

ネロという破面、その彼にとって彼以外の破面とは一体なんなのか、他者を卑下するようなこの破面にとって、彼以外の破面はその瞳にどう映っているのか、スタークは知りたかったのだ。

彼にとってはその存在、それ自体が”特別”であるが故に。

「・・・・・ゲハッ・・・・・ゲハ、ゲハハハハハ！！褒めてやるよ新入り！　笑わせるじゃねぇか、えぇ？他の破面？　いや、それ以上にアンタと同じ、だと？・・・・・ゲハハハ！　誰と誰が同じだって？テメェら塵とこのオレ様が同じ？ゲハハハッゴホッ、ゴホ！　駄目だ、腹が割れる、ゲハハ、ゲハハハハ！！」

スタークの真っ直ぐな問に帰ってきたのは嘲笑、それも特大の嘲笑、いっそ爆笑しているとも言えるのものだった。

何一つ笑える部分などないその問い、しかしネロは笑う。

この上なく可笑しいと、その問があまりにずれていると言わんばかりに笑うのだ。

「テメェら塵とオレ様が同じ筈無ェじゃねぇか！判るか？　オレ様は”神”、至高の存在。　お前達は塵、一吹きで消え去る哀れな塵屑と同じ。どういう存在も何も無いんだよ！　しいて言えば娯楽だ、オレ様が殺して愉しむ為に産まれる娯楽人形だ。・・・・・そうだな、今度からお前等は娯楽人形に格上げしてやろう。派手に弾けたヤツは褒めてやっても良い。ゲハハハハ！！」

これがこの男の理論。
独善的、自己中心で自尊心に溺れ、見下す事に価値を見出す。
そもそも見下しているという感覚があるかすら怪しい、何故なら彼にとってそれは当然だから、神が人を見下ろすのを当然としているかのように彼にとってそれは当然なのだ。
自分以外の他者を塵と呼ばわり、殺すための娯楽人形と呼ばわり、そう呼ぶことすら慈悲のように考える思考。
破綻している、破滅的で狂気に溢れしかしその狂気すら正気と疑わない男、ネロ・マリグノ・クリーメン。
悪の結晶ともいえる破面達の中において、その結晶を絞り生まれた最後の一滴かのような男。
悪だけがそこにはあり、悪だけがある故にそれが悪だと知る事ができない、そしてそれを知る必要すら感じない、そんな男の理論がそこにはあった。

スタークはそうして笑うネロの笑い声を、瞳を閉じて聞いていた。
その言葉、自らが問うた故に返ってきたその言葉はやはり、彼に理解できるものではなかった。
彼にとって自分達以外の存在、自分達と共にいることができる存在、他者という存在はそれだけで特別なのだ。
強すぎる霊圧、それによって魂が削れ死んでいく虚や大虚を彼等はそれこそ山のように見てきた。
彼等が何をしたわけでもない、ただ皆が死んでいく光景、それをただ見ていることしか出来ない自分達、空しく、遣る瀬無く、そして悲しい光景。

故に彼等は此処に来て漸く見つけられた、自分達以外と呼べる他者という存在を。
だから”特別”、他者というだけで彼と彼の連れにとっては何より

も特別。

その特別の名は”仲間”。

他者を、仲間を何よりも欲した彼等にとっての特別。

だがその特別な存在をネロは笑い飛ばす、塵だと、人形だと笑い飛ばす。

価値観は個人のもの、誰もが共有できるものではなく共有するべきでもない。

だがしかし、相容れない価値観は時に相容れるべきでない価値観となる。

それが今なのだ。

ネロは知らない、だがスタークは知った。

この巨大な破面と自分は相容れない、いや、相容れてはいけないのだと。

「さぁて、最後にオレ様を愉しませた事は褒めてやるよ。だから次は・・・・・・　派手に汚ぇ血を撒き散らして弾けてみせろ！新入りィィ！！」

一頻り侮辱に満ちた笑い声を上げたネロ。

それが治まるとネロは一息にその拳を振りかぶり、それをスタークに向けて突き出した。

風を巻き込み、その風すら蹴散らすようなその拳。

その拳の加速と共に収束し、圧縮された霊圧の塊はそのまま拳の狙う先、スタークを目掛けて飛び出していた。

虚弾（バラ）と呼ばれる破面の基本的戦闘術、固めた霊圧を打ち出すという単純な攻撃はしかしそれ故に強力で、膨大な霊圧を持つ十刃クラスの虚弾はそれだけで脅威。
それが、その緋色の弾丸がスタークを目掛け夜空を駆ける。
虚閃の２０倍とも言われる速度で迫るそれ、視認など到底不可能であるそれがスタークを捉えようとしていた。

だがそれは叶わない。

振り上げられた一本の腕。
自分の目の前を払うようにして動かされたそれによって、緋色の弾丸は砕けながらあらぬ方向へと弾かれてしまった。
黒く、軽い癖毛の様に波打った髪が揺れる。
その揺れる髪の毛から覗くのは開かれた双瞳、眉間には皺がより眉が幾分しかめられたせいかその表情は厳しさを増していた。

「判った・・・・・　アンタは何れ全てを殺す・・・・・・俺の欲しかったものも、俺の大切なヤツも・・・だから・・・・・・・俺はアンタを殺さなくちゃならねぇ・・・・・・・」

静かに響いたスタークの声。
深い群青色の霊圧が静かに広がり、その場を支配していく。
帯から鞘を少し引き出し、添えた左手で鍔を弾くと右腕は滑るようにしてその刃を引き抜いた。
鈍く光る刀身に彼の霊圧の光が映りこみ、その刃は蒼を纏うかのように光る。

それを引き抜くという事、それが彼にとってどれほど重い決断か。
出来れば殺したくない、どんなに救い様がなく、どんなに傲慢な者だろうと殺したくは無い。
何故ならそれは”仲間”だから、彼にとって、スタークにとって破面とは等しく仲間であり、上も下もありはしないのだ。

だが彼は刀を引き抜く。
殺したくは無い、しかしそうしなければ護れない。
大切な人、大切な仲間、大切な日々というものを。

「俺の”仲間”を護るため、”仲間”のアンタを、俺は・・・斬るぜ・・・・・・」

その言葉は何処までも矛盾を孕み、しかしその矛盾を抱えてでも成さねばならないという想いに溢れていた。
決断、冷静さと悲しさと遣る瀬無さが綯交ぜになったようなスタークの心情、矛盾を感じる決断が彼に与えるのはそんな想いだけ。
引き抜いた刀の切っ先を斜め下にして構えるスタークの姿は、口にした決意に比べ何処か揺らいで見えた。

「オレ様を斬る・・・だと？　ゲハハハ！　塵が！オレ様の虚弾を弾いた位で随分デカく出たじゃねぇか。まぁいい、テメェは精々オレ様を斬れる様に足掻け、まぁ・・・・・・無駄だとは思うがなぁ

！！」

スタークの言葉を一笑にふしたネロは、そのまま両手から虚弾を打ち出す。

弾幕のようにして打ち出されるそれは忽ちスタークの前を覆い尽くし、緋色の壁を作り出した。

込められた霊圧も先ほど以上、より硬質化した虚弾は速度を伴い全てを圧殺するかのような威圧感を生む。

だがスタークには慌てた様子も恐怖した様子もなかった。

下を向いていた切っ先はそのまま上へと向かい、片手で振り上げられた刀は上段へ、そして振り下ろされた刃は硬い緋色の壁を一刀の下に切裂いてしまった。

容易く、あまりにも容易くそれを成したスターク。

硬くとも薄い虚弾の壁など彼にとっては紙も同然、己が技量で持って両断するのは容易いと、そしてその行為は言外に虚弾（それ）は自分には通用しない、とネロに示しているも同義だった。

その様子を苦々しい表情でネロは見据える。

所詮は塵、雑魚であると断じた相手に本気ではないとはいえ、自分の虚弾を二度に渡って防がれては面白くはないと。

既に殺すと決めた相手、だがそのイラつきはその相手に更なる死を上乗せする事を彼に決定させる。

だがネロがその傲慢な決定を下している最中、既にスタークは動いていた。

響転（ソニード）、破面の高速移動術、己の影を断ち切る速度で移動したスタークが次に現われたのは、下の闘技場のときと同じくネロの直ぐ目の前。

瞬間移動にすら感じるそれをもって間合いを一瞬で潰したスターク、そして下段に構えられた刀は弧を描いて奔り、もう一つ。
赤い血潮の弧を描く月を宙に作り出していた。

「なん・・・だ、と？」

呟きを零したのはネロ、目の前、振り上げられた刀に映りこんだ自分の顔は驚愕に染まり、そしてその刀とそれに映る自分の顔の間には、宙を舞う赤いしぶきが舞っていた。
それは一体何か、何処から流れ何処へ行き何故生まれたのか、一瞬理解する事を拒んだ彼の頭脳はしかしむき出しの腹部に走る痛みで否応なしに理解する。
自分が、斬られたのだという事を。

「悪いな・・・・・・　斬っちまえそうだ・・・・・・」

彼の眼下から聞こえたそんな呟き、それが契機となった。
理解を拒んだ現実は一息に理解され、そして業火は、怒りの業火は瞬時に燃え上がる。
傷は深くない、彼がその暴慢と怠惰によって身につけた肉が斬られただけで、生命になんら支障は無い。
だがそんな事は問題ではなかった、問題なのは斬られたという事、いや、斬ったという事、愚かなる塵、自身が殺すための娯楽人形風情が自身を逆に傷つけたという事実、それだけあれば彼を激怒らせるには充分だった。

「この・・・・・・　ゴおおおミいいがァァアアア！！！！」

拳を振り上げそして叩き落す。
スタークはそれを素早く避け距離をとったが、拳はそのままネロの足元の天蓋へと埋まった。
直後足元の天蓋は大きく陥没し、亀裂が四方八方へと長く伸びる。
吹き上がり暴れまわる緋色の霊圧、渦を巻き地を叩き、それそのものが怒りという感情が形を持ったものかのように荒れ狂う。
彼、ネロ・マリグノ・クリーメンが怒りを顕にするのはこれで何度目か、だが今回は今までの怒りとは次元が違う。
足蹴にされた、指を切られた、そんなものは些細な事とすら感じる怒りが辺りを包み渦巻く。

「塵が塵が塵がァァあぁ！！　オレ様を斬りやがって！斬りやがて斬りやがって！　血が流れたじゃねぇか！　”神”の血だぞ？　テメェら塵虫を生かしてやってる神が血を流したんだぞ！お前が流させた！　ぶっ殺してやる！　殺して殺して殺して！霊子の欠片すら残さねぇほど殺してやるぞ！　塵ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！！」

その形相はまさしく怒り一色といった様子、相手を見下すのではなく、睨みつけるようにしているネロ。
鼻筋には幾本もの皺がより、眉間にも深い皺が刻まれ、浅い呼吸と剥き出しになった歯は食い縛られギリギリと音を立てるかのよう。

緋色の髪の毛は逆立つように持ち上がり、その怒気と霊圧によって大気は震え、締め上げられたかのような悲痛な鳴き声を上げる。
ネロ・マリグノ・クリーメン、神を自称して憚らない男、その振る舞いは暴虐無人であるが忘れてはいけない。
この男は第2十刃、虚夜宮最強の十刃第2位の実力を持つ魔人である、という事を。

腰に挿した斬魄刀をネロは荒々しく抜き放つ。
その斬魄刀もその巨体に似合う巨大なもの、ネロが持つゆえ普通に見えるという代物であり、刀というより大剣に近い代物だった。
それを抜き放ったネロ、その斬魄刀を振り被ると次の瞬間には距離を置いていたスタークの目の前へと移動し、そして振り下ろしていた。
その光景にスタークの眼が若干見開かれるが、ネロにとってそれは知った事ではない。
何の躊躇いも無くそれどころか逸るように振り下ろされた刃、天蓋にまで達したそれはまるで爆発を伴ったかのように其処を消し飛ばす。
その煙の中から飛び出すスターク、驚きは下がそれでもその攻撃を避けるのは彼の実力ゆえか、だがネロの攻撃はそれだけに留まらない。
スタークが飛び出したのを見るとそれを追って響転によって移動し、大上段から叩き下ろすように再び剣を振るう。
巨大な身体、贅肉に覆われたとてその下には他を圧倒するほどの筋肉が隠れ、それが生み出す力はまさしく強力無双、その一太刀をも交わしたスタークだったが、鉄槌にも似た斬撃はスタークを執拗に追い続ける。

「死ね！　死ね！　死ね死ね死ね死ねぇぇ！　塵ぃぃぃぃぃぃ！！」

（こいつは・・・　甘く見すぎたか・・・・・・出鱈目だが強い。
暴れてるだけだってぇのに・・・・・いや、違うな。　こいつは確かに強いが、問題は其処じゃねぇ。問題は・・・俺、か・・・・・・）

互いに宙に浮いたまま攻防を続ける二人。
太刀筋も何も無い、ただ獲物目掛けて振られるだけの剣、だがそのどれもが必殺の威力を十二分に有し、暴れまわる故の不規則さが困惑を生む。
それはスタークの読みの甘さなのか、いや、誰にだって予想を上回る事などいくらでも起こる。
ネロ、筋肉とそれを覆い隠す贅肉の鎧を纏った巨大な破面、だれが予想しただろう、この破面がここまで速く動けるということを。
スタークを追い越すわけではない、だが最低限追従し続けられる体力と速力、それがこの巨体には備わっている。
刀による全力の攻撃を延延続けられるほどの力も備わっている。

その外見から防御、または虚閃などを使用した砲撃を得意とする破面と判断されやすく、現にスタークも虚弾の使用頻度からそう判断したが実際は違う。
神を自称するだけあってネロは大抵の事をこなす、近接、中距離、遠距離、その全てに対応する能力を有している。
何が得意で何が不得意と言うわけでもない、あえてネロの長所を言うなれば殺す事に長けていると言えるのだ。
それも技能ではなく、本能的な部分での長所、故にそれは型に嵌ら

ず命を奪う事を知っている。

だが問題はもっと別、スタークが攻め立てられ続ける理由はもっと別のところにあった。

それは”迷い”だ。

斬る、と口にしながら、このままこのネロという存在を許せば何れ大事なものを失うと理解しながら、それでもスタークには迷いがあった。

決意を持った、決断を下した、そうしたと思っていた、思いたかったというスタークの内面。

その決意が、決断がホンモノならば、斬るという意思が真実ならば先ほどの一太刀で決着は付いていたかもしれない。

腹部という中途半端すぎる場所でなく、首を刎ねてしまえば決着は容易だったのかもしれない。

だがスタークにそれは出来なかった、理由を彼に問うたとて判らないと言うだけだろう。

判らないがそれでも殺せなかったという現実が、彼の迷いの証明、この期に及んで彼は逡巡している、口にした決意は偽物ではないが真実ホンモノでもなく、彼にとってはやはりネロとて”仲間”の内側という事なのだろう。

「逃げんじゃねぇよ！　塵新入りがぁ！　威勢がいいのは最初だけか！！さっさと死にやがれ！　死ね死ね死ね死ね死ね！！塵屑ぅぅう！！　グアラァァァアアァァァ！！」

喚き散らすように、しかしその手に握った斬魄刀の攻撃を止める事無くネロは叫ぶ。
スタークの最初の一太刀から幾分時間は過ぎたが、その攻撃に衰えは無い。
刀を振るう、と言うよりは寧ろもう振り回すと言った風の攻撃であるにも拘らず、その威力は今だ絶大だった。
対するスタークは最初の一太刀以降その手に握った刀を振るう事はなく、ただ眉間に皺を寄せた表情でネロの攻撃を捌き、避け続ける。

迷いは刃を鈍らせ、鈍った刃は決意を揺るがせる、揺らいだ決意は更なる迷いを生みまた、刃は鈍る。
そんな連鎖の最中にいるスタークと、対してネロはその逆、燃え上がるという事は天井を知らずに際限なく、怒りの贄に怒りをくべるかのようにして激しく燃え上がり敵を燃やし尽くさんとする。

迷い抱かぬ殺意と迷い彷徨う決意、その行方など知れている。

（面倒くせぇ事になっちまったな・・・・・・ガラじゃねぇ事した俺が悪いのか？まったくよぉ・・・・・・　リリネットのヤツは・・・怒ってるな。置いてけぼりをくらわせちまった。　・・・まぁいいか、アイツが生きてりゃそれで・・・・・・）

そう、知れた行方とはそういう事。
このまま行けばスタークは死ぬ、という事。
何の反撃もしないのならばその先は死、戦いにおいて相手を殺す事を躊躇うならば死、迷いを孕んだ刃を握るならその刃は何れ自身の喉を貫く、その先は死あるのみなのだから。

刃を避わしながらも、スタークは一人そんな思考を浮かべ始める。
結局自分に仲間を斬る事は出来ないのだと、いつかこの天蓋の上で出会った破面フェルナンドに言ったように、自分の力は仲間同士で殺しあうためにあるのではないのだ、と。

その思考は全てを納得しようとしている。
その思考は死を前にした者の思考であり、何の悔いも残さず逝けるかどうかを考える思考。
敗北者の思考だった。

何一つ、思い残す事はないとして逝けるかどうか、大切な人が生きていてくれればそれで自分は満足なのだと。

「スターーーーーク！！！　真面目にやれぇぇぇ！！」

響いたのは今だ幼さを残す声の叫びだった。
振り下ろされるネロの刃、それを前にした瞬間スタークに届いたその声に、彼の眼は見開かれそして眠っていた刃は振り下ろされた刃を受け止め、そして弾き返していた。
自分でも何故そうしたのか判らないスターク、だが彼の身体は響いたその声に反応し、応えたのだ。

チラと上空から天蓋を見下ろせば其処には人影が二つ。
一つはよく判らないが、もう一つは遠目からでもしっかりと判るその姿。
頬の辺りに両手を添えるようにして叫ぶその姿、見間違うはずもな

いその姿は彼が何よりも、誰よりも大切な人の姿だったのだから。

「あの馬鹿・・・・・・」

小さく零れたのはそんな言葉。
大人しくしていろと言って置いた筈だと、其処に居ろと言って置いた筈だと、そんな想いを完全に無視してこの場に来てしまったもう一人の自分に対する呟き。
ちょっと位は言う事を訊けよ、と内心で零すスタークの姿が其処にあった。
強大な敵を前にしてもそちらが気になってしまう程、スタークにとって重要な者の登場は、しかし彼の不の意思を取り払う兆しであった。

「なんだ？　塵が増えたか？　クソがぁ！！　オレ様は今機嫌が悪いんだよ！オレ様の視界に入った罪で死ね、塵餓鬼がぁぁぁ！！」

だがその兆しはこの男にとっては邪魔な存在でしかない。
怒りに燃え、その怒りの一太刀を防がれた、そこに新たに現われた彼にとって塵である存在。
言うなればそれは居合わせた不幸、避けられたのでなく防がれたという事がまた一つ、ネロの怒りの温度を上げ、あろう事かその怒り

の矛先は現われた二つの人影に向けられた。

叫び終わるなりその口には緋色の砲弾が産まれ、そこから数条の虚閃がすべて天蓋へ、人影を飲み込まんと放たれた。

”吼虚閃（セロ・グリタール）”　ネロの膨大な霊圧を圧縮して放つ虚閃、一発分の虚閃の砲弾に無理矢理に霊圧を詰め込み、炸裂させる事で幾本もの虚閃を生み出し、広域を殲滅する虚閃。

本人にも虚閃の行く先は制御できず、ただ多くを殺す事を目的としたそれをたった二人に向けて使用するネロ。

下の天蓋のことなど知った事ではない、考える必要も無い、あるのは殺すという行為、その正当性だけで充分だと。

「クッ！　リリネット！！」

その光景を見たスタークに色濃く焦りが浮かぶ。

あんなものを喰らえば死んでしまう。

馬鹿げた霊圧、闘技場で使用したものに比べ明らかに強力なその虚閃軍。

アレは駄目だ、アレはまずいと、あんなものを浴びせられれば死んでしまう、大切な人が死んでしまうとスタークは焦る。

届くかは微妙だ、今から間に入ることができるかは微妙。

だが行かねばならばい、出来る出来ないではなく、やらねばならない。

救えるのは自分、救いたいのも自分、ならばやる事はひとつだと。

例えこの身を盾にしても、例え四肢を失う事となろうとも構わない、大事なのは自分ではなく他者、もう一人の自分、自分を孤独の砂漠から救ってくれた大事な大事な自分以外の存在。

その為ならば死すら厭わない。

「頼むッ・・・・・・！」

スタークのそんな呟き、その呟きからそう間を置かずして緋色の雨は、天蓋を濡らす事無く、降り注いだ・・・・・・

賭け事

絶対王と髑髏大帝

愛の瞳

映るのは

彼の者の死か

BLEACH El fuego no se apaga. 48（後書き）

若干短い？
いいえ、コレが普通ですよ？　最近が長すぎただけさｗ

いやぁ～GWは疲れたけどそれなりに楽しかった。
休みで疲れたとか本末転倒な気がするけど、それでも楽しかったからいいやｗ

さて、結局今回の中でスタークは”仲間”を優先してしまった訳で・・・・・
殺すくらいならいっそ、というダメ理論すら展開しそうになりました。
それを阻止するのはリリネットなんですがね。
どっちもどっちかが居ないとダメなんだよ、この二人はきっと。

次回は再び下へ。
今だ死亡フラグを量産し続けるゾマリさんの方へと、目線を向けたいと思います。

ではまた次回。

（フン！　上も騒がしくなって来よったわい・・・・・・）

豪奢な椅子に深く腰掛け、肘掛に肘を立てて頬杖を付くように座った老人は内心そう呟いた。
遠くから木霊するように響く爆発音、その音源は彼が今いる場所よりももっと高い高い場所から響いている。
そんな音を聞きながらも動じる様子なく座すその老人。

第1十刃（プリメーラ・エスパーダ）バラガン・ルイゼンバーン。
自ら”大帝”を称し、そしてその冠した称号に恥じぬ王気を溢れさせる筋骨隆々の老人は、その響く音に意識を向ける。

（ネロの阿呆（アホウ）が暴れだしたか・・・・・まったく、考え無しに暴れよって・・・・・欠片も成長しとらん。　・・・・・・が、じゃからこそアレは”強い”ともいえるが・・・のぅ。）

音源へと向けた意思、そして探査神経はその音の源が第2十刃ネロ・マリグノ・クリーメンである事をバラガンに教えた。

響く音、そして探査神経にかかるネロの霊圧、其処から鑑みるにネロの行動に論理的思考は見られず、おそらくは衝動的に暴れまわっているだけだろうと推察するバラガン。
藍染惣右介に幽閉され、そして解放されて後2年。
何かしらの成長を遂げるには短いかもしれないが、変化を起こすという点では決してそうとも言えない月日。
しかしバラガンの感じたネロは、幽閉される以前、それどころか彼が初めてネロに出会ったときから欠片も変ってはいなかった。

斬り捨てるには充分な理由がそこにはあった。
成長しない者、成長しようとしないも者、成長できないと限界を定めた者、バラガンにとってそれらは不要な存在。
伸びる事無く、伸びる努力を怠り、ここまででいいと満足する。
花の咲かない木はいらない、花をつけず、枝葉すら伸ばす事がないのなら切り倒してしまえ、と。

だがバラガンはネロを切り倒す事はしなかった。
それはネロが先に上げた例から漏れる為、成長しないのではない、成長しようとしないのでもない、限界など決して定めていない。
ただ暴威を振るう、それが当然であるかのように、奪う事が呼吸であるかのように。
”暴”を”理”でもって制する事は必要な事だ、それが戦士としてのあり方なのだから。
しかし、それは戦士としての枠にネロという事象を当て嵌めた場合の話しであり、何よりネロは戦士ではない。
ネロのアレは戦いではない、命あるものに等しく襲い掛かり奪う災害、戦っているのではなく一方的に蹂躙する事こそネロという破面の存在定義なのだ。

それが正しいとバラガンは思うわけではなかった。

戦士としての在り様を身に付ける事は、ネロという破面が一つ上の段階へ進む為必要な事。
だがそれで弱くなるのでは話にならない、ネロという破面がとるべき二つの道、そのどちらもがわかる故にバラガンがネロを切ることは今だないのだ。

（それにしてもあの若造・・・・・・　ネロの阿呆を有無を言わさず連れ去る実力がありながら、何故戦わん・・・・・・？臆病・・・という訳でもあるまいに・・・・・・それにあの若造には”ボス”も一枚噛んでおる様子・・・・・・キナ臭いことじゃい。）

ネロの事も然ることながら、バラガンが気にかかるのはネロを一瞬にして闘技場から連れ出した一人の破面。
その眼で捉えるまで存在すら気が付かなかったその男。
取るに足らぬと無意識で他の破面と一絡げにしていたのか、いきなり現れたようなその男はまさしく刹那の間にネロの喉を掴み、そのまま闘技場から消え去った。

去り際、バラガンに膨大な霊圧の気配を感じさせたまま。

バラガンが感じたのはあくまで気配、それがどれほどの霊圧かはわからないがそれでもネロという規格外の存在に然したる抵抗も許さず、連れ去るというのは生半可な実力でなせる事ではない。
ネロに迫る、或いは同等、それ程でなければ説明はつかないのだ。

しかし、今バラガンが探査神経に感じるのは荒れ狂うネロの霊圧。
もう一人の男の霊圧も大したものではあるが、その霊圧から戦って

いる気配をバラガンは感じ取ることは出来なかった。
不可解な事、自ら戦いを望み、それこそ許可までとって連れ出した相手と戦わないという不思議。
そしてその不可解な出来事と同等にバラガンが危惧するのは藍染惣右介。

藍染があの男にネロと戦う許可を出した、という事実。
本来ならば枝葉である破面の言葉が藍染に届くなどということはありえない中、藍染はそれを聞届けそして許可を降した。
ありえない。
座興だったのかとも考えるバラガンだが、その考えは彼自身に否定される。
彼の知る藍染は座興と称しながらも、その実その全てにおいて”利”を求める男。
下す決定に無駄は無く、無意味と思える事柄もいつかは彼にとって大きな”利”を齎す布石なのだ。
故にありえない。
藍染があの男に許可を出した、という事実には必ず裏があるとバラガンはほぼ確信していたのだ。
そしてその確信は動き出した。

《やぁ、バラガン。　少し良いかい？》

突如バラガンの頭に響くのは藍染の声。
驚きながらもそれは表に出さず視線だけを動かし、周りを確認する

と彼の従属官達に藍染の声は聞こえていないのか、彼等の視線は闘技場の砂漠へと向けられていた。

《心配要らないよ。　私の声は今、君にしか聞こえていないからね。》

まるでバラガンの心理を読んだかのように、藍染の声が再び響く。
それに若干の不快感を滲ませながら、バラガンは視線をやや上へ、藍染がいる一番高い観覧席の方へと向ける。
そして視線におさまる藍染の姿、相変わらず気に喰わない笑顔を貼り付けていると、バラガンはまた顔をしかめた。

《なんじゃい。　なんぞ儂に用事でもあるのか?》

《用事、と言うほどのものではないよ。　ただ、ギンを”上”に行かせてしまってね、話し相手がいないんだ。相手をしてくれるかい?》

《フン！　断れもせんのじゃろうが・・・・・それに前置きは要らん。　何を狙っておる。》

バラガンの視線に藍染はやはり笑顔を貼り付けたまま応えた。
『天廷空羅（てんていくうら）』、死神の術である鬼道、その中で捕捉した対象との交信を可能とする術。
本来ならば多くの仲間に情報を伝播する事を目的とするこの術で、藍染はバラガンと二人だけでの交信を試みた。

傍に控えさせていた市丸ギンに”上”、ネロとスタークの戦いを見させに行かせた為話し相手がいないと、なんとも彼らしからぬふざけた理由でのこの会談。
しかし、言外に断る事は許されないという圧力を言葉に込めたそれに、バラガンは一つ鼻で笑うと了承するが、バラガンも然るもの。
藍染の話し相手がいないなどというふざけた前置きなど必要ないと、本題を言えと言って切り返した。

口先、腹の底を隠した化かし合いなど他所でやれと。
バラガンとて弁は立つがそういったものを彼は好まず、藍染が何かしら狙っているという確信があったゆえの発言。
そんなバラガンに藍染は小さく笑うと、一つの提案を持ちかけた。

《狙っている、とは心外だな。　私は何も狙ってなどいないよ。こうして二つの戦いを見るのもいいが、それでは些か面白みに欠ける・・・・・そこで、だ。　どうだい？　私と君で一つ、賭けをしないかい？》

その提案とは”賭け”。
二つの戦場、繰り広げられる二つの戦い。
それも悪くはない、しかしそれだけではなくもう一つ楽しみがあってもいいのではないか、と藍染は言うのだ。

《賭け・・・じゃと？》

《そう。　簡単な事さ、”上の戦い、勝者はどちらか”という単純な賭けだよ。勝敗はギンが見届ける。　あぁ、心配しなくても彼に手出しはさせないよ。無論私もしない、それではつまらないから・・

・ね。》

藍染の言葉を訝しむバラガン。
賭け、という予想外の提案はそれだけではバラガンになんら脅威とはならない。
だが持ちかけてくる相手は藍染惣右介、〝利〟を重んじる男が何の勝機もない賭けを仕掛けてくるだろうか、ありえる訳がない、必ず裏があると怪しむバラガンを他所に藍染は賭けの内容を公開した。

天蓋の上、そこで戦う二人の内、勝者はどちらか。

単純極まりない賭け、そしてバラガンには見え透いている賭けだ。

《フン！　なんともふざけた賭けじゃな。　じゃが何を賭ける？ボスが欲しがる〝モノ〟を儂が持っておるとは思えんのじゃがなぁ・・・・・》

《あぁ、それは簡単な事さ。　君には〝座〟を明け渡してもらえればそれでいい。もしネロが負ければ君には第2十刃（ゼグンダ）になってもらう。》

《なんじゃと・・・・・・？》

王と王、先王と現王、そして支配する者とされる者。
彼等の関係はそんなものだった、バラガンにとっては忌々しい事この上なく、それでも圧倒的な〝力〟で持って彼等を支配する藍染。
その藍染が欲するもの、ただ欲しいというだけならば有無を言わさ

ず奪えばいい、しかし”賭け“等というふざけた事を言ってまで藍染が欲するものに、バラガンは思い当たる節がなかった。

だが藍染はその欲するものをいとも簡単に明かす。

それは”座”だった。

バラガンの冠する称号、第1十刃（プリメーラ）。

この虚夜宮で最も強く、殺戮に長けた者にのみ冠する事を許される称号、そして座す位階の名。

藍染は賭けの対象としてそれを差し出せ、とそう口にしたのだ。

《随分と・・・　ふざけた事を言ったもんじゃな、ボス・・・・・・・それを口にするからには、儂が勝った時の見返りもさぞ、大きいはずじゃのう・・・・・・？》

明らかに温度が下がり、数段低くなった声のバラガン。

それは気配にも及び、突然機嫌の悪くなった主に対し、従属官達は何事かと訝しむがそれを口に出せば自分の首が跳ぶかも知れないほどの主の気配はそれすら許さない。

戦々恐々と言った雰囲気の従属官を他所に、バラガンは藍染を挑発する。

既にバラガンは一度”座”から追い落とされていた。

それは”王の座”、虚圏の王として君臨していたバラガン、圧倒的な力の前に敵などなくその圧倒的過ぎる自身の力にどこか飽いてしまうほどの、それ程の力によって手中としていた王の座。

だがその座は彼の前に突如として現れた藍染によって、脆くも崩れさり、そして奪われた。

その後に残ったのは屈辱。
殺すでもなく部下として仕えろ、と言う藍染にバラガンは燃え滾る怒りを飲み込み、従った。
だがその飲み込んだ怒りは消えることなく永劫燃え続ける地獄の猛火、いつか、いつか必ず追い落とすと、再び”王の座”を奪い返すと誓ったがゆえの隷属。

その隷属の中、彼から”王”を奪った男はさらに彼を追い落とそうと言うのだ。
許容など到底出来よう筈もない、燃え盛る屈辱、それを隠そうともしないバラガンにしかし藍染はただ笑顔を貼り付けたまま、その怒りに脅威など露ほども感じていないと言わんばかりの態度。
そしてバラガンの自分の座を明け渡すに釣り合う代価を見せてみろ、という問に藍染は再びいとも簡単にそれを口にした。

《そうだね・・・・・・　では私も”座”をかけようか。”王の座”、私が君から貰った玉座を賭けよう。君が勝てば再び君は”王”だ・・・・・・　互いに”座”を賭ける、これ以上に釣り合うものは無い・・・君もそう思うだろう?》

笑みの藍染から投げかけられた言葉に、バラガンは眼を見開く。
王の座、玉座という栄光の頂。
藍染はバラガンの第1十刃の座とその玉座を賭けようと言うのだ。
”座”という性質からすればそれは釣り合っていた、しかしその重みは決して釣り合っているとはいえない。

それでも藍染は賭けの供物としてそれを差し出すと、いとも簡単に言い放つ。
それすらもバラガンにとっては屈辱的であったが、それ以上にバラガンが気にかかったのはそれを、その重みを藍染が知らぬはずが無いという事。
この男がそう簡単に手中としたものを手放す筈が無い、という事。
その賭け、藍染が提案したその賭けに、彼は確実に勝てる気でいるという事だった。

《フン！　見え透いた賭けに煌びやかな供物・・・・・・それ程あの若造は強い・・・か。　最早賭けの体裁だけしか保っておらんのう。もし儂がこの賭けを受けなんだらどうする心算だったんじゃ、ボス？》

《まるで私がスタークに賭ける、とでも言いたげだね。別に君が退いたとて私は責めないよ。・・・・・・だがどんな戦場にも不測の事態は付き物、勝敗など毛先程の差で容易く変る。それに・・・受けなかったら、と言うという事はこの賭け、受けるという事だろう？》

《まぁそういう事じゃい。　その賭け、受けるぞボス。》

その会話はある種の通過儀礼。
バラガンは思った事、感じた事をそのまま口にし、藍染はそれを理

解しながらも知らぬ存ぜぬ、腹の底で何を考えているかを見せびらかしながらそれでも隠すフリをして応じる
ワザとスタークの名を出したのがそのいい例だろう。
若造としか口にしないバラガン、誰もが知らなかったネロを強襲した破面の名を自分は知っている、そしてその実力もと言外に伝える藍染。
だが藍染にはそうしてもバラガンがこの賭けに乗ってくる、という確信があった。

何故ならそれは彼が今も”王”であるから。
王とは退く事が許されない存在、王が退く事は、王が逃げる事は根幹を揺るがす。
揺らぐ王に使える臣はなく、揺らぐ王に国を治めることは出来ない。
王とは前へ進む者、王とは座して尚掴み取る者、例え罠であるとわかっていても進みその先で栄光を掴み取る者こそ王者足り得るのだ。

故にバラガンは退かない。
それが、その賭けが藍染が張り巡らせた罠だと知りつつも退かない。
玉座などという煌びやかな罠にかかったわけではない、王として立つそのあり方が退く事を許さない。
そして何より、藍染が送り込んだ刺客よりもネロの方が強いという確信が、バラガンにはあったからだ。

《では、私はスタークに・・・・・・》

《儂は当然ネロの馬鹿タレに・・・・・・》

互いの選択に二人は異を唱えたりはしない。

それもまた通過儀礼。
判り切った選択、しかしそれ以外ない選択。

《賭けるのは互いの”座”という訳だ・・・・・・おや？　どうやら下の戦場も賑わいだしたようだね・・・・・・ではバラガン、後はただ愉しみに待つとしようか・・・・・・彼等と彼等の行方、というものを・・・・・・》

賭けが成り藍染はその笑みを増す。
そして賭けが成ったその直後、彼が見下ろす闘技場に向けて歓声が沸いた。
その歓声、そして歓声が向けられた光景に藍染の笑みは更に増していく。
上の戦い、それも然ることながら下の戦いもまた、彼にとっては愉しみなものであった。

（さぁ・・・・・・　2年ぶりの君は、私に何を魅せてくれるんだい？フェルナンド・アルディエンデ・・・・・・）

「フハハハッハハ！　お嬢さん方、そう固くならず吾輩と一緒に、少年（ニーニョ）の戦いを観戦しようではありませんか！あぁ、因みに吾輩の横、空いてますぞ？　遠慮なく座ってくれ給え。」

「「オッサン！　そこどけよ！！」」

「・・・・・・・・・」

「まぁまぁ、可愛い小鹿（シエルボ）ちゃんも可愛い小獅子（レオン）ちゃんも落ち着きたまえ。それと吾輩の事は紳士（セニョール）または叔父様と呼んでくれて一向に構わないよ？あぁ、お薦めは断然、叔父様だがね！」

「「誰が呼ぶか！！」」

なんとも姦しいやり取りがそこには響いていた。
髭を生やした包帯だらけの男、その男に食って掛るのは左右の瞳の色が違う女性と、褐色で長身の女性。
そんな女性達の声が届いているのかいないのか、男は一人黙っている長い黒髪の女性にも声をかける。

「さぁ、可愛い白蛇（セルピエンテ）ちゃんも恥ずかしがらずに吾輩を、叔父様と呼んでごらん！さぁ！！」

「・・・・・・・・・」

「？？　おやおや？　どうしたね可愛い白蛇ちゃん？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・あれ？」

「・・・・・・・・・・」

「無視！？　無視なの！？　紳士とか叔父様とかそういう段階ですらなく、いきなり無視なのォォォ！？」

ハリベルが傷ついたアベルを伴って、自らに与えられた観覧席へと戻ると、そこには混沌が広がっていた。
アベルは道中、解放を維持できなくなり常の白い外套姿へ戻り気を失っており、そんなアベルを気遣いながら戻ったハリベル。
彼女の従属官、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンが姦しいのはいつもの事なのだが、そこに一人の異物が、眼下の砂漠で何よりも熱い戦いを繰り広げた男の一人が混ざった事で、その姦しさは輪をかけて大きくなっていた。

「ドルドーニ・・・・・・　貴様、一体何をしているのだ・・・・・？」

普段冷静なハリベルでさえ若干呆れさせるようなその光景、壮年の男性が若い女性に無視されたことに絶叫し、そして項垂れるというあまりに痛々しい姿。
そしてなにより本来居る筈も無い、いや、居れる筈もない人物、ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオが観覧席のテラス、その一等いい場所に陣取って彼女の従属官と噛み合わない会話を繰り広げている光景が彼女の前には広がっていたのだ。。

「む、無視はヒドイ・・・・・・　？　おぉ！！これは美しい淑女（セニョリ～タ）。やはりいつ見てもお美しい、まさしく一服の清涼剤の如き涼しげな

眼差し！吾輩恋に落ちても宜しいですか？」

ハリベルを見つけると、ドルドーニは大げさな仕草で彼女に世辞の嵐を見舞った。

本来ならば絶対安静であろうこの男、それは当然グリムジョーから受けた傷がこの短時間で塞がる筈も無く、身体中に包帯を巻いている姿は痛々しくあるはずなのだが、この男の雰囲気ゆえかそれは感じない。

「私は何をしている、と訊いたのだがな・・・・・・」

「何を、と言われましても、この程度の傷で病床に寝転がり少年（ニーニョ）の戦いを見れないとは、あまりに理不尽。よって戦いを見るため治療から抜け出し、どうせ見るなら美しい女性に囲まれようと思い此処に来た次第。いやはや美しい淑女もお美しいが、お嬢さん方も今後が楽しみなことですｎ・・・・・・やや、その淑女は一体！？」

ハリベルの問に何の迷いも無く答えるドルドーニ。

彼としてはグリムジョーに勝ち、そのままフェルナンドの戦いを見る算段だったがそれは叶わず、気が付けば自分は病床の上。

だがしかし、傷を負ったからといって彼の少年の戦いを見逃すのは惜しいと抜け出してきた、というのだ。

その後に若干不純な動機も垣間見えたが、ドルドーニはその視線をハリベルが肩を貸す女性へと向け、そして瞬時にその前まで移動していた。

「あぁ、お嬢さん。　まるで眠り姫が如きたおやかなお姿よ・・・・

・・今まで吾輩、貴方の様な美しい方に出会った事はありません。
もし許されるのならば、きっとこの世の何よりも美しいであろうその声を、不肖この吾輩に聞かせて頂くことは出来ませんか・・・・・・」

もはやそれはこの男の性(さが)なのだろう。
歯の浮く台詞を並ばせながら、恭しく跪くドルドーニ。
何故か戻らなかった仮面によって、その素顔を晒していたアベルにまるで臣下の礼をとるかのように振舞う彼。
そんな彼にハリベルは普段どおりの声で真実を突きつけた。

「彼女は第5十刃(クイント)・・・　アベル・ライネスだ・・・・・・今は気を失っている、あまり騒ぐな・・・・・・」

「な、なん・・・ですと・・・・・・・!?」

雷に撃たれたかのようにその顔を驚愕に染めるドルドーニ。
アベルの素顔、というよりも女性だったということがそれ程衝撃なのか。
いや、それよりもアベルが女性だったという事に気がつかなかった事の方が、彼にとっては衝撃だったようだ。

「そ、そんな・・・・・・　吾輩が今まで気が付かなかった・・・だと?クッ!　このドルドーニ、一生の不覚っ・・・・・・・!」

血涙を流しそうな顔で拳を握り締めるドルドーニ。
気が付かなかった事がそれ程の事なのか、自身の不覚を悔いている

様子だった。

そんなドルドーニを他所に、ハリベルはアベルを近くにあった大きめの長椅子に横たえる。

眠るようにしているアベル、その顔を時折苦悶に染める彼女、その肌は一層青白く消耗している事を伺わせた。

「スンスン。　すまないが彼女の介抱を頼む。」

「はい。畏まりましたわ、ハリベル様。」

ハリベルは他の従属官、アパッチとミラ・ローズから少し離れた位置に立っていたスンスンにアベルの介抱を頼む。

他の二人に比べそういった部分にスンスンは長けており、スンスンも手馴れた様子で取り掛かった。

彼女等はアベルとノイトラの戦いをその眼で見ている分、驚きもい小さい様子で他の二人は手持ち無沙汰なのか居心地が悪そうだった。

「・・・・・で、傷は本当にいいのか、ドルドーニ。」

「美しい淑女に心配していただけるのは嬉しい限りですが、これしきの傷で倒れる吾輩ではありません。それにこれは”誇り”でもありますからな。」

アベルをスンスンに預け、ハリベルはドルドーニに向き直るとそう口にした。

平気な顔をしているが、実際その動きはどこか精彩を欠いていることをハリベルは見抜いていた。
それは当然、肩からわき腹に抜ける大きな傷、それ以外にも戦いの爪痕はドルドーニの体に刻み付けられ彼の命を脅かしたのだ。
だがドルドーニはそれを口にはしない。
男などというものは皆そうなのだ、痛くとも痛くない、辛くとも辛くない、本当のことは口に出さずに耐える。
それが善意の心配の前ならばなおの事、言える訳が無い。

それ以上にドルドーニにとってその傷は、彼の言葉どおり”誇り”だった。
全力、何の遠慮も無く叩き込まれた一撃、故に誇り。
そしてその傷を与えた者が自分を超えていったという事の証明、それ故に誇りなのだ。

「そうか・・・・・・　やはり私は貴様が羨ましいよ・・・・・・」

「何を仰る。　誇りあろうと負けは負け、今の吾輩は只の破面ですぞ？」

「ならそれを悔いているのか？」

「いいえ、欠片も。」

ドルドーニの誇りある態度、彼をそうさせる戦い、ハリベルはそれを素直に羨ましいと言った。
対してドルドーニはそうは言っても負けは負けだと、肩をすくめる様にしておどけてみせる。

只の破面、十刃からの落差は如何ほどのものか、数々の特権は剥奪されその身に残ったのは誇りある傷だけ。
ならばそれを悔いているのか、と問われればドルドーニは真剣な面持ちで否と応えた。
悔いるはずが無いと、何一つ、あるのは満ち満ちた想いだけだと。
そんなドルドーニを見て、ハリベルはやはり羨ましいと内心思うのだった。

「ハリベル様！」

大きな歓声が闘技場に響き、それにつられてテラスから身を乗り出したアパッチが叫ぶ。
その声は目にした光景に対する驚きか、急かすようにして呼ばれたハリベルはドルドーニと共にテラスへと移動した。

「ほぅ・・・・・・」

「おや、これはこれは・・・・・・」

ハリベル、ドルドーニから零れたのはそんな言葉。
アパッチ、ミラ・ローズと共に眼下の砂漠を見下ろす二人。
そこにアベルの介抱が一段落したのかスンスンも合流し、その観覧席にいる全員が一様に砂漠に注視する。
眼下にあるのは三つの人影。

一つは立会人東仙要。
もう一つは彼等がよく知る人物、フェルナンド・アルディエンデ。
そして最後の一つ、最早人としての形を放棄したその姿で高笑いを上げるのは、第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルー。
彼女等の耳に響く笑い声は、まるで勝利を確信したかのようなそれであった。

「クハハハハハ！！　どうしました愚かなる獣よ！その腕、その腕ではもう戦えないでしょう？ハハハハ！　それは貴方が招いたもの、傲慢にも私に解放させてしまったが故の代償！まったくもって愚か！　救済に値しない愚かさの爪痕ですよ！ハハ！　ハハハハッハハハ！」

狂ったように笑うのは最早、人ではなかった。
眼、眼、眼。
身体を覆うようにしてある眼の大軍。
その眼には等しく狂気を宿し、その狂気はすべて眼前の罪人へと向けられていた。
ゾマリはただ狂ったように笑う。

それはあまりの愚かさ故。
一度は得た確実なる勝利を自らの傲慢さで手放し、そしてその傲慢さによって傷を負った男の愚かさ故。
笑うしかないと、笑う以外にこの状況に正しい選択はないとまで彼は感じているだろう。

彼の目の前、少し離れた場所で立つ愚かな男。
名をフェルナンド・アルディエンデ。

彼の眼は今、確かに見ていた。
左腕を力なく、ダラリとぶら下げるようにしているフェルナンドの姿を。
痛みかそれとも悔いなのか、俯くフェルナンドの姿を。
その左腕にしっかりと刻まれた自らの『愛』の証を。

故に笑う。
奪ってやったと、その男が最も信じるものを、拳という手段を支配してやったと。
明らかな優位。
一度は逃げていった絶対的な有利を、彼は再びその掌中に納めたと確信していた。

だから彼は気付かなかった。

優位を確信し、それに溺れた故に気付かなかった。

多くの眼を見開いているのに気付かなかった。

俯くフェルナンドの顔が、修羅の喜色に染まっているという事を・・・・

愛眼
暴緋
深蒼
紅鬼
真なるは
須らく化生

BLEACH El fuego no se apaga. 49（後書き）

間繋ぎの回。

そして悪い癖が出た回。
最初の王様達の会話は、もっと短い予定だったのに結局１０ＫＢも・・・・・・
取捨選択が出来ていないのか、盛りすぎたかな？

後半は・・・・・・

久しぶりに出しちゃったｗ

まぁ半分は必要だった、という理由もあるんだけどね。
久しぶりに出したせいか、何時もよりぶっ飛んでいる印象に・・・・・・

でも許されるよね、だってドルドーニだものｗ

さて、ゾマリの『愛』を受けたフェルナンドがどうなるのか
次回お楽しみに。

感想、誤字など気軽にお送りくださいませ。

Ｐ．Ｓ　ＰＶが１，０００，０００を突破しました。
読んでくださった皆様には、本当に感謝感謝でゴザイマス。

BLEACH El fuego no se apaga. 50（前書き）

本編のみで50話となりました。
そして爆弾（？）アリ。

BLEACH El fuego no se apaga. 50

BLEACH El fuego no se apaga. 50

最初に砂漠に響いたのは、グキリという嫌な音だった。

その音の発生源は金色の髪をした青年の左腕、見れば青年の腕は肘から下が本来捻る事ができる範囲の限界を超え、親指が逆を向いているのではないかというほど捻り上げられていた。

なんとも不可解な光景、敵を前にし何の前触れも無くいきなり自分の腕を捻りあげる、そんな事をする必要が今、どこにあろうか。

あるはずが無い、しかも自らの五体を凶器として使用するこの青年からすれば尚の事、現に青年の顔にも僅かばかりであるが疑問の色が浮かんでいた。

そう、疑問が浮かんでいるのだ。

自分の五体という名の凶器、それが自分の意思に反旗を翻したとい

うことに。

「鎮まれ　『　呪眼僧伽（ブルヘリア）』！！」

叫ばれたその名は主に、第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルーに劇的な変化を齎した。

大きく足を開き掌を胸の前で叩き合わせるゾマリ。

その間彼の斬魄刀は、彼の腹の前、中空に横たわるようにして留まり続ける。

手を叩き合わせたと同時にゾマリの首は耳障りな音を立てながら真横に倒れ、そして黄色い瞳が暗い光を放った。

すると腹の前に留まっていた斬魄刀はベキベキと音を立てながら拉（ひしゃ）げ、菱形に折れ曲がるとそこから白い粘液のようなものが噴出し、ゾマリの体を包み込む。

見る間に全身を包み込まれたゾマリ、彼の体に纏わり付くようにして流れる白い液体は必要以上な分だけが彼の身体を伝い砂漠へと零

れ、気泡を弾けさせるようにして白い水溜りを作った。

後の現われたもの、それは異形。
上半身は今だ人の面影を残してはいたが、下半身に至っては既にそれは人の域を出、足は無く端的に最も近いもので表現するならばカボチャの様。
褐色の肌が見えるのは顔と掌程度で、残り全ては白い外皮に覆われそして異形となった彼の身体には眼が、首、胸、腹、腕、そして人ならざる下半身、その全てを目が多い尽くしていた。
瞼無く見開かれた眼、彼の回り全てを睨むでもなくただ写す様な眼があったのだ。

憮然とした表情のゾマリ、対するフェルナンドはその顔を喜色に染める。
フェルナンドからすればここからが本番、全力の相手、全力の喧嘩、だからこそ価値がある。
求めるものはきっと戦いの先、それも命削る戦いの先、その先を見るためにはより高い次元の戦いが必要なのだ。

フェルナンドの喜色を他所に、激怒に染まっていたその顔を無表情へと戻したゾマリは胸の前で合わせていた手を離し、その右腕をフェルナンドへと向けられた。
開かれた掌にもやはり眼は存在し、それがフェルナンドへと向けられ、彼を視界へと収める。

そしてその瞳は、収縮するように暗い光を帯びた。

直感は即断の行動へと移る。
”来る”、そう感じたフェルナンドは直感とほぼ同時に動き出し、その場から飛び退いた。
何かは判らないがそうするべきであるという直感に従い、動いたフェルナンド。
ゾマリの左側に回りこむようにして移動した彼、しかしフェルナンドが目にしたのはただ右腕を前へと突き出すゾマリの姿。
別段何かが変わったわけではない、それ故に不可解な光景。
向けられた右腕には確かに攻撃の意思が宿っていた、それ故に避わした、何の不思議もない行動の結果は不可思議な光景を生んでいるのだ。

「避けましたか・・・・・・　意外と臆病な反応ですね・・・・・・」

「別に普通だろうが、ならアンタは俺の拳を避けないとでも?」

「えぇ避けませんよ。　何故なら既に・・・・・・避ける必要が無いのですから。」

自らの腕の前から移動したフェルナンドへ、ゾマリは冷ややかな声を掛けた。
それは何処までも見下すような、侮蔑するような響きを宿し、そしてその行動すらも愚かさの証といわんばかりの声色。
そして彼は言うのだ、避けるという事は臆病の現われであり、自分は避けないと。

いや、避ける必要が無いのだと。

その言葉にフェルナンドの眉がほんの少ししかめられる。
怪訝な表情、何を言っているのか判らないがそう言うからには、何かしら理由があるのだと。
その理由とは一体何かという疑問、しかし浮かんだ疑問は即座に解決される。
彼に起こった違和感によって。

「っ！　何だ・・・こいつは・・・・・・？」

零れた呟きが全てを物語る。
フェルナンドにそう呟かせるほどその出来事は不可解だった。
動かないのだ、彼の左腕が。
見れば左腕にはなにやら奇妙な文様、黒い円の周りに八枚の葉をあしらった様な文様が浮かび上がっていた。
そしてその文様が浮かんだ左腕はまるで彼の意思から離れたような、左腕から伝わる感覚はそのままにただ動かすという命令だけが伝わらないかの様な、まるで自分の左腕が反旗を翻したような感覚。
それが今、フェルナンドを襲っていた。

「気が付きましたか。　愚鈍なる貴方にしてははやく気が付いた方…と言えるでしょう。貴方は私の右腕、正確にはこの”眼”に脅威を感じた、それは間違いではありませんよ。そして避けた心算でいたようですがそれは間違い。何故なら既にその左腕は私のモノだからです・・・・・・」

「そいつは一体・・・どういう意味だ？」

フェルナンドの方へと向き直りながら、ゾマリはその顔をニヤリと歪ませる。

さしずめ自分の仕掛けた罠に嵌った、愚かな獣を見るかのように。

フェルナンドが自分の右腕が向けられた事でその場から飛び退いた事を、臆病だと言いながらもゾマリはそれが正しかったという。

脅威を感じた事に間違いは無いと、しかしその脅威からフェルナンドが逃れる事は出来ていないと。

そしてそのニヤついた笑みを深めながら、ゾマリは言うのだ。

フェルナンドの左腕は、もう自分のモノであると。

「支配権・・・・・・　ものには全て支配権が存在します。上司は部下、民衆は王、雲は風、破面で言えば十刃と従属官だと言えばアナタにでも理解できますか？我が呪眼僧伽の能力・・・・・・　それはこの眼で”見つめたものの支配権を奪う”能力。私はこの能力を『愛（アモール）』と呼んでいます。」

それぞれの手で上と下を指差しながらそう語るゾマリ。

彼の能力、それは彼の身体を覆う眼が見つめた存在の支配権を奪い、自分の支配下に強制的に加えるというもの。

自らの能力を愛と呼ぶゾマリ、彼にとってその能力はまさしく愛そのものなのだろう。

無能な者、無用な者、そういった意味を成さぬ者達を彼は自らが与える愛によって縛り、支配する。

意味成さぬ者に意味を持たせるように、支配してやる事で初めて意味を持つかのように、その支配こそ正統な行いであり誰もが望むも

のであると疑わないから。

「まぁ、アナタに言葉で説明したところで理解出来る筈もありません。その身を持って知りなさい、アナタの左腕が私の支配下にあり、私の思うとおりに動くという事を！」

言葉と同時にフェルナンドの左腕は彼の意思を無視して動き出す。
掌を返すようにして動く彼の腕、下げられた腕は外側へとひらかれ関節の動く限界を迎えた。
しかし彼の左腕は止まらない。
間接の存在など無視するかのように、フェルナンドが鍛え上げた腕の筋肉の力に任せてギチギチと尚も腕を捻り続ける。
そして訪れる耳に残る不快音。
発せられたその音は、フェルナンドの左腕が断末魔であり、彼の左腕が使い物にならなくなったであろう事を示していた。

「・・・・・ククク・・・・フハハハハ！無力！　私の前ではアナタのような愚かな獣はあまりにも無力！捻じ切ってしまってもよかったのですがそれではあまりにも滑稽すぎる。骨もおそらく折れてはいないでしょう？　そう加減したのですから、そうしてその左腕がただぶら下がっているだけの棒になるように加減したのですからねぇ・・・・・・」

ゾマリの顔に浮かぶ嘲笑。
フェルナンドの左腕をいとも簡単に破壊した彼、それもただ破壊したのではない、筋力にものをいわせ千切る事も出来た、骨を折る事も容易かった、しかし彼はそれぞせずに通常腕を動かす事などでき

ない程度に破壊を留めたのだ。
それは手加減ではなく一重に屈辱のため。
フェルナンドという破面にただただ屈辱を与えるための行為。
拳脚による打撃に特化した破面フェルナンド、その彼の手段を奪う、攻撃手段である拳という形を残した上でしかし使えないという屈辱を味あわせる、それだけの行為だった。

「ハハハはハハ！　どうです？　その使い物にならない左腕で私を殴れますか？出来はしない！　故に避ける必要は無い、と言ったのですよ！フハハハハ！　不様！　滑稽！　やはりアナタは私の足元にも及ばぬ存在なのです！」

笑うゾマリは言う。
だから言っただろうと、だから避ける必要はないと言っただろうと。
見ればフェルナンドの左腕に浮かんでいた文様は既に消えていた、おそらくそれもゾマリの意思、もう使えない腕を支配しても仕方がないという意思の表れか。
そしてゾマリの言葉、確かに彼の言葉は真実だった、使えぬ拳、普通に考えて折れていないにしろ腕全体を挫いたような腕で満足な攻撃など出来よう筈もない。
まんまと自分の術中に嵌ったフェルナンドをゾマリは言葉でも責め立てた。
対するフェルナンドは痛みなのか、それとも悔しさなのかその顔を伏せておりゾマリに表情を窺うことはできなかったが、そんな事は彼に必要ではなかった。
決まっているのだ、彼にはあの伏せられた顔は屈辱に歪んでいると、解放を許した自分の愚かさを呪っているのだと決まっているのだから。

そうして重大な誤解を孕んだまま、ゾマリはただ笑い続けていた。

――――――――――

「左・・・だな・・・・・・」

「左ですね。」

「そうですわね、左でしょう。」

「絶対ェ左に決まってる！」

観覧席、砂漠にいるフェルナンドとゾマリを見下ろす形でハリベル等は口々にそう言った。

その眼には呆れと確信が満ち、誰一人それに異を唱える事はしない。
まるで彼女等の中でそれが常識であるかのように。

「あ～美しい淑女(セニョリータ)にお嬢さん方、一体何のお話ですかな？吾輩、まったく内容が掴めないのですが・・・・・・」

そんな彼女等の中で唯一人、同意しかねる存在はドルドーニ。
彼女等が口々に零す”　左　”という単語、その意味を彼は図りかねていたのだ。

「もしや少年(ニーニョ)が壊された左腕の事ですかな？まぁ切り落とされた訳ではありませんし、養生すれば問題はないでしょう。・・・・・・少年が生きて戻れば・・・ですがな。」

彼女等が言う”　左　”という単語が、どうやらフェルナンドの左腕だという当たりをつけたドルドーニ、おそらくは心配しているのだろうと踏んで彼はハリベル等を気遣うようにそう口にした。
そうした優しさは年の功、年長者たる所以と言えるだろう。

が、そんなドルドーニに帰ってきたのは随分と冷ややかな視線と溜息と、コイツ何言ってんだ？という疑問の視線だった。

「おい、オッサン。何ズレた事言ってんだよ！」

「そうさね。　あたし等は何一つ心配なんかしちゃいないさ。」

「・・・無能・・・・・・？」

まず帰ってきたのは従属官三人の言葉。
三者三様の返答ではあるが、共通しているのはどうやら彼女等は何一つ、欠片もフェルナンドを心配しているわけでは無いという事だった。
心配ないという心遣いを”ズレている”とまで言い放つ彼女等、ドルドーニの困惑は深まるばかりだったが、その困惑はハリベルの返事で更に深まっていく。

「違うのだ、ドルドーニ。　貴様は私達がフェルナンドを心配していると思ったようだが、それは違う。私達が言っていた”　左　”とは、これからの戦いでフェルナンドの初撃は、間違いなく左腕での打撃だ、という意味なのだ。」

「・・・・・・・・・・・・は？」

ハリベルの言葉に続き、充分な間を空けてドルドーニはなんとも間の抜けた声を上げた。
ドルドーニの耳がおかしくなったのでなければ、彼の耳には間違いなくこう届いたのだ。

フェルナンドは必ず左腕でゾマリを殴る、と。

しかしそれは現実的ではない。
というよりもありえないのだ、あの左腕は使えない、元十刃であるドルドーニの目に狂いは無い。
あれを動かす事は容易ではなく、もし動かせたとしてもそれであの

腕は完全に死ぬ可能性すらあると。
彼等破面は人間と体構造はほぼ同じ、いかに強度が並外れているといっても無理をすれば動かなくなるのは道理というものだった。

「いやいやいや、あの腕で・・・ですかな？しかし、それはなんとも無謀というものでは・・・・・・」

「そう思うのも無理は無い。　・・・・・だがアレは往く。いや、アレだからこそ往くだろう・・・な。」

確認するようなドルドーニにハリベルは確信に満ちた瞳と声で応える。
フェルナンドとはそういう男だと、あの程度であの男が止まる等ありえない。
左腕は挫いた、左腕は使えない、相手がそう思っている、だからこそ往くと。
そう思っている相手を思い切り殴り飛ばすのだろうと。

「そうだぜオッサン。　腕を挫いた位でアイツが止まるかよ。寧ろ燃えてんじゃねぇか？」

「だろうね。　本当にフェルナンドのヤツを止めたきゃ折るしかない。いや、折っても止まらないかもな。」

「あら、やっぱりおバカさん同士、仲がよろしいわね。・・・・・・まぁ、私(わたくし)もあれでは甘いと思いますが・・・・・・」

「「うっせぇぞ！　スンスン！！」」

続いてアパッチ、ミラ・ローズもハリベルに同意するように声を上げる。
彼女等の場合は予想というよりも経験なのだろう。
幾度と無くフェルナンドにそういった思考の外からの攻撃を見舞われ続けた彼女等、だからこそ判る。
フェルナンドはあの程度では止まらないと。

「・・・・・なんとも・・・　不思議な間柄ですな、少年と美しい淑女(ヨリータ)達は・・・・・・」

「そうなのか？　私達にはもう日常なのでな・・・・・・さて、それでも信じられないのならその眼で確かめるといい・・・・・・そろそろ、戦場が動きそうだ・・・・・・」

奇妙な信頼、ドルドーニには彼女等とフェルナンドの関係はそう見えた。
自分とグリムジョーとはまた違う、どこか通じ合っているかのようなその間柄。
今まで見た事が無いその在り様に、ドルドーニは不思議な感覚を味わいながらも、今だ信じられずにいた。
そうなればもう方法は一つしかない。
ドルドーニは黙って見据える事にした。
見るしかない、確かめるしかないのだ、自分自身のその瞳で。

フェルナンド・アルディエンデが自分の想像を超える存在であるという証明を。

―――――――――

「クハハハハハハ！！　どうしました愚かなる獣よ！その腕、その腕ではもう戦えないでしょう？ハハハハ！それは貴方が招いたもの、傲慢にも私に解放させてしまったが故の代償！まったくもって愚か！救済に値しない愚かさの爪痕ですよ！ハハ！　ハハハハッハハハ！」

狂い笑う声は自らの絶対優位に酔う。
片腕は奪った、これで自分が受けた数々の屈辱と脇腹の痛みを帳消しに出来たか、といえば否だろう。
まったくもって釣り合わない、受けた屈辱、そして何にも増して彼の”王”へ対する不遜はこの破面が、自身の死をもってのみ贖える罪。
王の御使い、代行者、その下賜された使命の始まりにゾマリは酔っていた。
陶酔。

己の絶対的支配力と、下賜された王命の遂行、これ以上に彼を満たすものは無く、恍惚の境地に立った彼はやはり狂ったように笑うのだ。
見える光景は今だ砂漠に立つ大罪人ではなく、その大罪人が穢れを孕んだ血を流しつくし地に這い、許しを請うようにして頭を垂れる姿。
垂れた頭を稲穂を刈り取るようにして斬り飛ばす光景。
それが今ゾマリの中にある全てだった。

対するフェルナンドは左腕をダラリと下げ、そして顔は俯いていた。
右手だけを上げた構えはしかし、彼の意思がまだ折れていないという事を知らしめるのには充分だっただろう。
高笑いを上げるゾマリなど眼中に無いのか、フェルナンドは無言のまま立ち尽くす。

「さぁ、どうしました愚かなる獣よ。はやくその残った四肢で私を倒して御覧なさい。まぁ、私に近付く事ができなければそれも叶いませんがね、幾ら近接戦闘に長けているといっても、アナタの間合いに入らなければどうという事も無い。私の支配は絶対！　その前にあなたは屈するのです！」

ゾマリの言う事はまさしく正論だ。
近接戦闘に長けるフェルナンド、その分野ならばゾマリは彼に勝つことは出来ないだろう。
だが、勝てないのならば態々それで勝負をする必要は無いのだ、勝つ事、断罪が目的であるゾマリにとって自らを危険におく必要など無い。
相手の手の届かぬ間合いから一方的に此方は攻撃を仕掛ける事がで

きる、ならばそれを選択する事になんら不思議は無い。
一芸に長けたフェルナンド、そしてゾマリもまた一芸に長けてはいるがその相性はゾマリに歩があると言えるだろう。

声高に自身の有利を叫ぶゾマリに、フェルナンドはただただ無言だった。
その無言は一体何故なのか、常の彼なら皮肉の一つも返しそうなものだがその口は閉ざされている。
ゾマリの眼には屈辱と後悔に沈んでいるように見えるフェルナンドの姿、しかしその実は違う。
彼の顔は今、喜色を浮かべているのだ。

それは壮絶な笑み、痛みを紛らわすわけではない、自棄になったなどもっての他、彼は今愉しいのだ。
置かれた自分の状況は打破するに容易ではなく身体は十全ではない。
しかし、しかしそれでも彼は愉しい。
いかにしてこの状況を突破するのか、この状況この状態の自分は一体何処まで戦えるのか、それを考えると彼は喜びで背が震える。
それは狂った思考だ、しかし彼にとってこれ以上ない正常な思考であり、それ故に彼の顔には喜色が浮かぶ。

只の笑みではない、壮絶な修羅の笑みが。

フェルナンドの影が消える。
小さな砂煙を立て、フェルナンドは立ち尽くしていた場所からその姿を消した。
響転による移動、影を絶つ速度で動き回るフェルナンドは今、視認できる状態ではない。

それは即ちゾマリの支配、「愛」を受けないということなのだが、
それではあまりにも決め手に欠ける。

「なんと！　不様にも逃げ回りますか！だがそれでいい、それがアナタには似合いというものでしょう。ですが、ただ逃げ回るだけでは勝てませんよ！私に、この私に近付いてこなければ・・・ねぇ。」

対するゾマリは動かなかった。
フェルナンドの行動を嘲いながらも彼は動かない。
それは解放状態の彼はその能力と形状ゆえ十刃最速とは言い難い状態であるためと、なによりも今の彼には動く必要が無いのだ。
相手は嫌でも自分の傍に、傍にこなくてはならない。
そして傍に来る、ということは自身の視界に入るという事、そしてそれはゾマリにとって勝利の瞬間と同義だったからだ。

（さぁ、いつまで不様に逃げ回る気が知りませんが、早く来なさい。直ぐに殺して・・・・・　いいえ、まだです。もっともっと、更なる屈辱を味あわせて差し上げましょう・・・・・）

歪に変る顔をゾマリは抑えられない。
優位と陶酔、その中にいる彼にそれを抑える事など不可能だった。
早く、早く来い、そして自分の支配を受けろ、受けて更なる屈辱に沈め。
そんな思考がゾマリを駆け巡る。

そして期待に胸膨らませるゾマリに、待望の瞬間が訪れた。

影を絶ったままフェルナンドが消えて後数分、時たま起こる砂煙と空を切る音だけが彼がその場にいる証明だった。
ゾマリを中心とし、おそらくその周りを回るようにして動いていたであろうフェルナンド、その姿が遂に顕となる。
ゾマリの背後、そこに突如現われた人影。
中空に飛びゾマリの頭目掛け蹴りを放つ寸前の体勢のフェルナンドが、そこに現われたのだ。
背後からの奇襲、完全なタイミング、只の戦闘ならばこれで決着といえる場面。

しかし、これは只の戦闘でなくそしてそこは背後ですらなかった。

「捉えましたよ。」

彼の背、そこにも眼はあるのだ。
背中にある眼が複数、暗い輝きを放ち収束する。
そしてフェルナンドの身体に刻まれる多くの文様、脚に、肩に、胸にと刻まれるそれは支配と敗北の烙印。
逃れられぬ支配の中、命ぜられるまま彼の身体は彼の意思を裏切り、そして彼に反逆するだろう。
ニヤリと口を歪ませるゾマリ、勝ったという確信、断罪の瞬間の夢想、しかしその歪んだ口は驚愕の形へと変る。
何故ならそれはありえない光景をその眼達が見たから。

フェルナンドの身体、文様を刻まれた彼の身体がゆらゆらと歪み、
そして霧散したのだ。

「双児（ヘルメス）・・・・　双児響転（ヘルメス・ソニード）・・・だと・・・・・・・・！？」

一目見てゾマリは理解した。
何故ならそれは彼が、彼だけが持つ技術だったはずのもの。
彼が編み出した独自のステップを織り交ぜた、彼だけの響転。
それを使ったのだ。
彼の敵であるフェルナンドが。

ゾマリの『愛』を受けて後霧散するフェルナンドの分裂体。
その霊圧を纏った残像が消えるのと時を同じくし、もう一人のフェルナンドがゾマリの正面に現われる。
動揺駆け抜けるゾマリ、しかし彼とて十刃である。
駆け抜けるそれをして尚、彼の身体は顕われたフェルナンドの姿に反応し、右腕を突き出しその掌の眼による支配を試みていた。
視界に入れば、意識して見つめさえすればそれでお終い。
何より早い意思の雷撃、脳から掌までを貫くそれをしかしフェルナンドは読んでいたかのように超人的反応で回避する。
神速の踏み込み、退いて避けるのではなく踏み込んで避わすという彼らしさ、そして踏み込んだそこは彼の間合いだった。

再度の密着状態。
当然構えられるのは右の拳、フェルナンドがゾマリに対し多大なダメージを与えた一撃への布石。
それを見た誰もがまたあの一撃が来ると感じ、そしてゾマリもまた同じだった。
その拳は危険だという意識、なまじ無防備に喰らっていたためその意識は極度に高まっていたのだ。

そして彼はその脅威であり危険な拳の無力化を執行した。

「貰いますよ！　その右腕も！！」

そう、彼の身体の眼は掌だけではない、腕にも、胸にも、そして腹にもそれは存在するのだ。
構えられるフェルナンドの右の拳、しかしその動作は見られていた、多くの眼達に。
捉えられた右腕、ゾマリがそうと思えばその右腕は瞬時に彼に支配されるだろう。
そしてそれが成った暁には勝利が、ゾマリの勝利がほぼ確定する。
如何にフェルナンドといえど両腕を失えばその戦闘力は格段に下がり、勝利は夢と消えるのだ。

だがそれは、その支配が、本当に成ればの話ではある。……

ゾマリ・ルルーの失敗は止めてしまった事。
左腕は奪った、左腕は壊した、左腕は使えない、だから左腕からの攻撃は無い、ある筈が無いと。
更に言えば彼自身が右腕を伸ばしていた事も大きかった。
腹部ならば別ではあるが、もしフェルナンドがゾマリの頭部を狙うのならばゾマリの伸ばした右腕は障害となる。
腕を避け内側からの打撃は不可能、かといって腕の外側からではフェルナンドのリーチでは届かないと。
まぁその仮定も全てはフェルナンドの左腕が使える、という前提での話であり、実際その場でそれを考える事の方が難しかったのかもしれない。
何故ならゾマリの中でその可能性は完全に排除されてしまっていたのだから。

それゆえの停止、思考の停止であり決め付けた結論。
ありえない、ある筈が無い、その状況の中でフェルナンドの右腕からは恐るべき威力の大砲がその放火を放とうとしている。
ゾマリの中に生まれた彼も気付かぬ程小さな恐怖、蘇るような激痛の再来は彼に当然のようにそちらへの注視を選択させる。

故に気が付かない。
その眼の群れ達は捕らえていたというのに気が付かない、いや、気付けない。

フェルナンド・アルディエンデの左の拳が固く握られている、という事に。

「グッェ・・・・・・」

漏れたのは不恰好な声。
その声が漏れ、そしてゾマリ・ルルーが次の瞬間に感じたのは激痛だった。
今まさに脅威となる敵の右腕を支配しようとした瞬間に走ったその痛み。
しかしその右腕は今だ放たれること無く彼の視界に収まっており、そして痛みが訪れたのは相手の拳が構えられた自身の左側ではなく、右側からだった。
その痛みと衝撃はゾマリの顎を的確に貫き、彼の身体をそのまま吹き飛ばす。
転がるようにして砂漠を跳ねる彼の身体、理解できない痛みと理解できない状況はそのまま動揺へとつながる。

（い、一体何が・・・・・・　何が起こったのです！）

転がりながらも起き上がるゾマリ、自身に走った再びの激痛、その理由も判らぬまま痛みは思考すら鈍らせ続ける。
しかし痛みは思考を鈍らせながらも自身の存在を叫ぶ、そしてゾマリが感じるのは顎の痛みだけではないのだ。
ゾマリが自身の身体を確認しようと奔らせた視線、そこには明らかな異常があった、どうしてそうなったのかは判らない、しかし確実にそれは起こり、視認し認識したが故に痛みは更なる叫びを上げる。

痛みを上げるのは彼の右腕。
ダラリと下がりそして関節の稼動方向とは逆に折れ曲がったその腕は、激痛をもって存在を叫ぶ。
そう、折れているのだ、ゾマリ・ルルーの右腕は。

右腕を庇うように左腕を添えるゾマリ。
ありえない、顎に奔る痛みも右腕の痛みも、その全てが本来ありえてはいけないものの筈。
だが彼が今その眼の群れで捉える人影が、そのありえない出来事の理由である事だけは彼にも判った。

左腕を振りぬき、鋭い眼光でゾマリを睨みならがもその口元に笑みを浮かべる。
フェルナンド・アルディエンデこそがこの出来事の原因であるという事が。

―――――――――

「まさか・・・・・　本当に左腕で殴るとは・・・・・・・・それもあれは只の打撃ではない。　一体なんなのだ・・・・・・・」

観覧席からその一部始終を見ていたドルドーニからはその全てがよく見えた。
しかし見ていたのと理解していたのとでは違う。
双児響転と呼ばれる第7十刃独自の技術をフェルナンドが使った事も驚きだったが、それ以上に彼を驚かせたのはフェルナンドの左腕が放った攻撃。
先程来からハリベル等が言っていた通りフェルナンドは左腕でゾマリを殴った。
なんとも無茶であり無謀であり、驚嘆に値する行動。
そしてその左腕の攻撃が放たれた後、ゾマリは打ち抜かれた顎だけではなくその右腕を折られていたのだ。

それも左腕の打撃と同時に。

「『獅子吼（レオンルデール）』、と言うらしい。話には聞いていたが・・・・・・
相手の腕を自身の首を支点にして逆に極め、自身の打撃で間接を折り、そのまま外からは届かないはずの拳を叩き込む業のようだな。
まったく・・・　左だとは思っていたが、更に折にいった・・・か。」

ドルドーニの戸惑いを伺わせる声に、ハリベルはそう応えた。
ハリベル自身初めて見るその業、話の種に出てて来ただけの代物ではあったがフェルナンドはどうやらそれを完成させていた様子。
本来は相手の打撃に対するカウンターとして用いる技であり、相手が打撃によってくり出し伸びきった腕を自身の首を支点として逆に極め、そして相手の腕の外側から打ち込む自身の腕、その腕の内肘を使って関節を折り、尚且つ相手の間接を折った事で自身の打撃は本来届くはずの無い外側から、防御の手段を失った相手の顎を打ち抜く。
フェルナンドがやったのはそういう事、今回は偶々ゾマリが腕を伸ばしていたのがフェルナンドには幸いし、ゾマリには災いした形となったのだ。

「・・・はは。　恐れ入りましたな、少年（ニーニョ）には・・・・・・」

「第7十刃は相手が悪かった。　アレ相手でなくともああも手加減を加えては何れ大きな代償を払うのは見え透いている。絶対の自負、

自身の力に酔って見誤ったな・・・・・相手の本質というものを。
」

脱帽、といった風のドルドーニ。
捻られ、挫かれ、本来ならば使う事叶わぬはずの左腕。
それを意志の力だけで動かし戦うフェルナンド、下手をすればその腕は動かなくなる可能性もある。
しかしドルドーニはそれでも彼は同じ場面で躊躇無くそれを使うと確信した。
それがこの破面の本質、勝利、その先の求めるもののためならば己が犠牲など厭わないという事を。

そしてハリベルはそれを理解した上でゾマリの失策を感じていた。
”陶酔”、司る死に違わず彼は酔いしれていた、自らの絶対的支配力に、その前には何者も無力であるという事に。
屈辱と不敬を断ずるためにと、そして屈辱を与えようと自ら戦いを長引かせる事を選択したと言う事に。
戦いとは瞬間だ。
決着など一瞬だ。
長引くのは互いの力が拮抗しているが故であり、それ以外は自己満足。
そして長引けば長引くほど勝利と敗北の距離は近付き、そして背中合わせとなりどちらにもその顔を覗かせていくのだ。

眼下の戦闘はその類。
ゾマリ・ルルーに勝機は多々あった、しかしその全てを彼は力に酔うことで逃し続け、そしてその度に多大な傷を負い続けている。
対してフェルナンドは傷を負いながらもその気勢は留まるを知らず、それどころか傷を負い、追い詰められるほどに彼の纏う気配は鋭く、

研ぎ澄まされ、そして燃え上がる。

ハリベルが見る眼下の戦場。

傷は五分、能力はゾマリに優位がありしかし、ハリベルにとって既にフェルナンドの勝利は疑うべきものではなくなっていた。

―――――――――

「貴様・・・・・・　何故双児響転を・・・・・・・・いや、それ以上に何故その、左腕が使え・・・るッ！その腕は、私が、破壊、したはずだ。　何故、何故だ！答えろ！！」

不可解と痛み、激痛の中ゾマリは右腕を庇いフェルナンドを睨みつける。

どうして双児響転が使えたかはこの際彼にとってどうでもよくなっ

ていた、ただ、破壊したはずの左腕がその攻撃を放ったことだけが、ゾマリには理解できなかったのだ。
確かに骨は折れていない、しかしそれだけ。
筋は伸び、筋肉は断裂をおこし、とても動かせるものではない左腕。
それが攻撃をするというありえない出来事は、ゾマリを動揺と困惑に陥れていた。

「・・・・・温いんだよ、テメェは・・・・・・」

「温い・・・だと？」

困惑のゾマリに帰ってきたのはフェルナンドのそんな言葉。
何を指しているのか理解できないゾマリは、ただその言葉を繰り返す。
しかしフェルナンドはそんなゾマリの様子など構わず、思うとおり言葉を紡ぎ続ける。

「あの時、俺の左腕を奪ったあの時・・・・・・　テメェは最低でも腕を折るべきだった。捻じ切れたんなら捻じ切るべきだった。
俺なら間違いなく折る、折れる時に折る。与えられる最大の攻撃をぶち込むのが戦場の理。だがテメェはダメだ・・・・・・　ただ俺を笑うために加減しやがった、使えないと決め付けやがった・・・・・・」

静かにかたるフェルナンドの言葉、それは戦場の理だった。

ただ相手に屈辱を与えるためとゾマリは加減していた。
もっと大きなダメージを与えられる機会を作りながら、それを生かす事をせずに戦いを続ける愚。
ただ己が愉悦にためにそうしたという取るに足らない愚かな選択。
フェルナンドはそれをして”　温い　”と言う。
自分ならば折ると、折れる時に確実に折ると、それが戦い、それが戦場の理だと。

「だから俺は決めた。　テメェの顔を殴るのは”左”だと、テメェが使えねぇと決め付けたこの拳をぶち込んでやると。御誂え向きに眼晦ましには重宝するもんがあったからな・・・・・・あんだけ見たんだ、足の運びくらい覚えるだろ?見せ過ぎなんだよ切り札を、それも含めてテメェは”　温い　”んだ。」

”　温い　”、フェルナンドはゾマリの全てをその一言に尽きるかのように断じた。
双児響転も、『愛』というなの支配の眼も、確かに驚異的ではあるがその脅威を曇らせているのはほかでもないゾマリ自身。
屈辱を、断罪を、誅殺を下す為にと先延ばし、鹿を追い立てる獅子にでもなったかのように振舞い続けたゾマリ。
しかしそれは間違いでしかないとフェルナンドは言う。
そしてフェルナンドの言葉どおりゾマリは手痛い反撃を受けた、双児響転という彼独自の響転もこの至近距離で見続けたフェルナンドはその脚運びを体得し、利用した。
右腕から放たれるであろう『虎砲』に恐怖し、意識を逸らした。
その結果、鹿を追い立てた獅子たるゾマリは、鹿の放った獅子の咆

哮の前に重大な傷を負ったのだ。

「ふざけた事を・・・・・・　ふざけた事を言うな！私が温いだと！？　まるで私が戦場を理解していないような口ぶりで！私のかけた慈悲を踏みつけにして！　ならば死ね！我が『愛』を破ったわけでもない愚か獣めが！」

コメカミに額にと青筋をいく本も浮かべ激怒するゾマリ。
フェルナンドの放つ温いと言う言葉に侮蔑の色を見つけたのか、その激昂は留まるを知らなかった。
だがそれでもゾマリの言う事にもいまだ真実はある。
そう、フェルナンドはゾマリにダメージを与えはしたが、彼の『愛』を破ったわけではないのだ。
その支配の力は今だ健在、先程は予想外の痛みに意識は乱れ、右腕を奪うには至らなかったがそれも時間の問題であるのは自明の理である。

「死ね！死ね！死ね！　我が支配の前に死ｎッ！！な、何だこの霊圧は・・・・・・！！」

ただ怒りに負かせ、全身の眼を見開きフェルナンドを睨む。
冷静で礼節な振る舞いを見せたゾマリの姿はもうそこには無い。
あるのは仮面の下に隠れていた本性なのか、それをしてフェルナンドの死を望む彼、しかし彼の眼がフェルナンドを見つめようとした瞬間、彼を感じた事もない霊圧が負った。

その発生源は上、観覧席ではなく、上空の空でもなく更にその上、天蓋の上から圧し掛かるような霊圧。

それが二つ、ゾマリにははっきりと感じ取れた。

「第2十刃が解放？　馬鹿な・・・・・・　いや、それ以上にもう一つの霊圧は何だ・・・・・・？第2十刃と同等だと？　一体誰が、誰なのだ！？」

激昂する精神を冷やすかのような霊圧の波濤。

一つは第2十刃ネロ・マリグノ・クリーメンの霊圧、しかしそれは只の霊圧ではなく莫大なそれ。

そしてその莫大な霊圧が示すのは一つ、第2十刃が刀剣解放を行った、という事実。

ただでさえ化物じみたネロ、それが解放するという事はそれだけで驚異的な出来事であり、しかしゾマリを更に驚かせたのはそれと同じ大きさの霊圧がもう一つあるということだった。

ありえない。

今日何度目になるかわからないそんな言葉が、ゾマリに浮かぶ。

第1十刃であるバラガンはこの場にいた、第3十刃も同様、第4十刃はこの場にはいないが感じる霊圧は彼のものではないと。

では誰が、第2十刃という虚夜宮のトップに相当する霊圧の持ち主と同等のそれを放つのは、一体誰なのかと。

激昂にも増す畏怖と脅威、ゾマリをそれが襲う。

しかしそんななか響いたのは笑い声だった。

「・・・ククククッ！　・・・・クハハ！・・・・・フハハハハハハ！　最高だ!!やっぱり俺の睨んだとおりアンタは強ぇよ、スターク!それもまだ全開じゃねぇんだろ？　きっとそうだ!そうに決まってる！　俺には判るぜスターク!最高だ！　最高に気分がいい！！」

笑い声を上げるのはフェルナンドだった。
ゾマリ同様彼も感じ取った二つの霊圧、ゾマリが畏怖と脅威を感じたそれをフェルナンドは笑うのだ。
それも狂ったのではなく、歓喜の声を上げて。

「あぁそうだとも。　上がこれだけ派手にやってんだ、下の俺達がこんなチマチマした戦いなんてしてられねぇ!だったらやるしか無ぇだろう！　えぇ！　派手にやるしかねぇだろうって・・・言ってんだよ!!」

ゾマリに語りかける様に、しかしその実ゾマリなど眼中に無く燃え上がるフェルナンド。
感じた霊圧はまさしく戦いの狼煙、これから始まるのは全力の殺し合いだと言う事を示す狼煙。
それがフェルナンドを熱く燃え滾らせる。
感じてしまったからには、触れてしてしまったからにはもう止まれないと。

そう叫びながらフェルナンドは勢いよく腕を腰の後ろに回し、斬魄刀を引き抜く。
フェルナンドからはまるで燃え滾るような紅い霊圧が吹き上がり、そして引き抜かれた斬魄刀もまたその紅に負けぬほどの煌きを放つ。
逆手に持たれた斬魄刀、それをまるで勝ち名乗りかのように天高く突き上げるフェルナンド。
渦巻く霊圧、内向きに収束する霊圧は臨界を超え、そして掲げた片割れの銘を呼ぶと同時に解き放たれた。

「刻めぇえええ!!　『輝煌帝(ヘリオガバルス)』!!!!!」

砂漠には一本の巨大な火柱が産まれた。
膨大な炎の柱は天を衝かんと上へ伸び、膨大な炎に見合った熱を発し続ける。

荒れ狂うのではなくただ上へ上へと燃え上がる火柱、それは男の生き様を表しているのか。
ただ上へ、目指すものへと脇目も振らず邁進するかのような、そんな生き様に。

火柱は次第細くなり、中心へと向かっていく。
そして火柱の中腹辺り、火柱が細くなるに攣れ顕になるのは一つの影。
腕や脚から見え始めたその影は、次第その姿をはっきりと見せはじめ、そして火柱が消えるとその影の全身は顕となる。

身体つきに変化は無い。
筋肉質な身体、強靭でなにものをも弾くような鋼の身体、纏っていた死覇装は上着が無くなり上半身が顕と成っていた。
袴は前のように足首で絞られ、足は裸足のまま。
額に穿たれた紅い菱形の仮面紋（エスティグマ）は、その頂点が延び、何処か十字架を思わせる。
紅い瞳は爛々と輝き、その輝きが瞳の紅をより鮮烈にさせていた。

さほど変化の見えないその姿、身体つきから外見に至るまでを虚としての本質に戻す刀剣解放『帰刃（レスレクシオン）』、ある者は角を生やし、ある者は強固な外装をまとい、そしてある者は翼をはためかせと大きな変化を齎すそれは、フェルナンドにさほどの変化を齎してはいないかに見えた。

しかし、解放前と解放後では彼の姿は明らかに違っていた。
身体つきは変わっていない、眼光の鋭さはそのまま、しかし彼は燃えているのだ、轟々と。
そう、それは気概の話ではなく身体の話。

フェルナンド・アルディエンデの身体は今、炎となって燃えているのだ。

正確に言えば燃え盛っているのは彼の髪と帯、そして袴の下部。
袴は膝の上を過ぎたあたりから徐々に赤みを増し、そして脛まで来た頃にはそれは袴でなく完全な炎となって燃え盛る。
後ろでぞんざいに一纏めに縛られていた髪は解かれ、長く伸びた金髪は風に揺れながら。
髪は後ろへと流れ、逆立つように跳ねながら立ち上がり、そしてそれは次第金から色を変えていく。
首の後ろを過ぎた頃から徐々に金髪は赤髪へと、そして腰を通り過ぎればそれは最早赤い髪ではなく、轟々と燃え盛る紅い炎となっていた。

二度ほど首をかしげ、コキコキと骨を鳴らすフェルナンド。
そして彼は胸の前で両の拳を一度叩き合わせると、獰猛な笑みを浮かべて叫ぶ。

「やってやろうじゃねぇか！　派手な喧嘩をよぉぉ！！」

竜の咆哮地を穿つ
狼の咆哮天を衝く
竜の化身暴を成し
狼の化身誅を成す
群れなす怒り
降り注ぐ。

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．５０（後書き）

とりあえず長い・・・・・・

大体３７ＫＢで１５，０００文字かな。
２話に別けてもよかったけど、ここは一気にいくところだと書き上げました。
詰め込んだというよりは書いてたらこうなった、という印象。
いろいろ書きたいこと、言いたいことを書き散らかしたね。

前書きに書いた爆弾（？）は一応フェルナンドの解放をさします。
名前は前に出したけど、姿の描写は今回が初めて。
だいぶ、かなり、とてもシンプルな形です。
燃え盛る髪の毛と、袴ですね。
イメージ沸かなかったら「ゴーダ○ナー」を想像してください。
表現力がほしいです・・・・・・

次回はまた上かな。
感想などお気軽にどうぞ。

暴威なる咆哮は天へと降り注ぎ、地を削らんとする。
虚閃、それも数条、数十条にも及ぶ虚閃が地を削ったたった一つの理由は、命を奪う事に他ならず。
それもただ”自分の視界に入った”という理由に満たないような理由でそれは降ったのだ。

根絶やしに、消し去るために、細くはあるが大量の虚閃はたった二つの命を奪うためだけに放たれ、その緋色の破滅の光を身に受ければその者は自分が死んだという事を認識する前に息絶える事だろう。
過分、あまりにも過分なその威力、それを何の躊躇いもなく放つネロ・マリグノ・クリーメン。
彼にとって真理ともいえるこの行動、目に付く命を殺さずにはいられない、ただ等しく命を殺す為に行き、殺すための理由を探しているかのようなこの男は”神”を自称し、制裁と鉄槌の名を持って命を殺す。

そう、全ては奪い、殺す為に。

だが今、その暴慢な理に抗おうとする者が空を駆ける。
コヨーテ・スターク。
彼が駆けるたった一つにして何よりも重い理由、それは降り注ぐ破光の先に何よりも大切な者がいるため。
自分を孤独の砂漠から掬い上げてくれたたった一人の他人、別け合い、分かち合い、支え、共に歩いてきた存在がいるため。
失えるはずは無く、失う事など考えたくも無い存在がその先にはいたのだ。

故に彼は駆けた。
ただ護るために、大切な者を護るために。
自分などどうなっても構わない、だから、だからアイツだけはどうか助けてくれとその内側で叫びながら。
自己を省みず、ただ護るという一念のままに駆ける彼、その尊さ、その悲しさ。

そして、爆音が辺りを包み込んだ。

「ゲハハハハ！　死んだか？　死んだのか？　死んだんだろうが！死んだに決まってんだろうがよ！！ゲハハハハヒハハ！　塵共が！　オレ様の視界を汚した罪は重いんだよ！それにしてもあの新入りも馬鹿なこった、自分からオレ様の吼虚閃（セロ・グリタール）の餌食になりに行くたぁな！いや、馬鹿だから喰らいに行った・・・のか？ゲヒャヒャヒャヒャ！！」

爆音の後に響いたのは、大音量で笑うネロの下品な声だった。
一面を爆煙が包んだ天蓋の大地、それを上空から見下ろすようにして笑うネロ。
その狂い笑う姿は大きく膨らんだ腹を抑えるように、まさしく腹を抱えて笑うといった風で、ただただその光景が愉快で仕方が無いと物語っていた。
奪い去ったのは二つの命、いや、三つの命か。
一つは見た事も無い小さな子供、彼にとって見る事すら値しない小さな命であったがそれでも、視界に入ったという罪とも言えぬ罪で

殺したと。
もう一つは見た事がある優男、藍染惣右介が連れてきた彼の腹心であるという男『市丸ギン』。
それでもネロにそんな肩書きなど一切の効果を持たず、小さな子供諸共吹き飛ばし殺したと。
そして最後はつい先程までその手で握る斬魄刀で殺そうとしていた、自分に傷を負わせた許し難い新入り。
理由はネロには想像もつかないが、それでも何故かその新入りは自ら彼自身が放った吼虚閃へとその身を投げたしたのだと。

彼の中で間違いなく奪われた命たち、それを愉快だと笑うネロ。
命の価値、その重さ、こうと決める事など叶わないそれを彼はまるで埃以下のように扱い、踏み潰し、その様を見て笑う。
明らかな異常性、しかしその異常性もこの男にとっては至極全うで正常な思考。
それに則ってネロは殺したと叫び、そして笑っていた。

「いやぁ～吃驚したなぁ。　上がってきた途端コレや、ホンマ物騒でアカンな虚夜宮(ここ)は。」

爆煙が晴れ始めた隙間、そこから漏れるように聞こえたのはどこか間延びしたような、至極ゆったりとした口調の声だった。
まるで日常の会話のように紡がれる言葉たちはその光景にはとても不釣合いで、しかしその不釣合いも日常にしてしまえるほど、その男の持つ雰囲気は独特だった。
銀に近い色の髪は揺れ、糸のように細い眼とつり上がったような口

元はその場に似つかわしくない笑顔、顔の前の煙を片手を振って払うようにして現われたのは、ネロが殺したと思っていた者達の内の一人、市丸ギンだった。

「なんだ市丸！　テメェ生きてやがったのか。大人しくオレ様に殺されてりゃいいものを・・・・・だがまあいい、お前程度いつでも殺せる。　今回は運よく生き延びたテメェを生かしてやる。神の慈悲だ、ありがたく思え死神。」

「はぁ、そらどうも。　でもええんか2番サン、そんな事言うて。」

「あぁん？　塵滓のテメェらが神である俺に出来る返事は”ハイ”と”ありがとう御座います”だけだ。よぉ～く覚えとけ！　それに塵二匹は始末したんだ、テメェは生き延びた慈悲に縋ってればいいんだよ！だが、一撃で殺しちまったのは失敗だったがなぁ、まったく・・・強すぎるオレ様の力は罪だぜ！　ゲハハハハ！！」

降り注ぐ虚閃から生き延びた市丸。
その姿を確認すると、ネロは死んでいればよかったと口にしながらも今回は見逃すといってその場を収めた。
だがそれはなんとも彼らしくない行動、生きていた事すら罪だといって殺そうとする方が余程彼らしく、あっさりと引き下がる事に違和感すらある。
市丸もそう感じたのか、驚きながらも気の抜けたような返事を返した。
言ってしまえばそれは気まぐれに過ぎなかった。

ネロという破面は刹那を生きる。

過去を振り返ることなど無く、未来を思い筋道を立てることもしない。
彼にあるのは今、今この瞬間どうしたいか、それだけなのだ。
今回の市丸に対する対応もそれに準じ、ただ生かしてやろうと思っただけの事に過ぎないという事。
それだけの事だった。

「まぁ生き延びて生かしてくれる言うんならエエけど・・・・・・
それやったらこっちの二人も生かしてあげる、いう事になるで？」

生意気な新入りを殺したということも然ることながら、何度も綴り殺す心算だった相手を一撃の下に沈めてしまうほどの自身の虚閃の威力に酔いしれていたネロ。
下卑な笑い声を上げながら死を笑う彼に、市丸はいたって普通の会話のようにそれを言い放つ。
顔の前で煙を払っていた手で自分の横の方を指差す市丸。
そして煙に隠れた天蓋の大地が見え始めるのと同時に、薄くなり始めた爆煙に影が浮かび上がる。
輪郭のぼやけた影は煙が晴れるにしたがって鮮明になり、そして人型をとっていく。

晴れた煙、そして顕になった人影は、ネロに背中を向けながらも自らの肩越しに彼を睨み、そしてしっかりとネロと小さな破面の間に隔たるようにして立つスタークの姿であった。

リリネットには最初何が起こったのか判らなかった。
市丸に連れられスタークの下へ、青空を映す天蓋の外へとやってきた彼女。
自分に置いてけぼりを食らわし、そしてまた一人全てを背負おうとする大切な片割れを追って此処まで来た彼女。
その眼に映った片割れは巨大な破面に押される一方で、しかしそれは一重に片割れの気概によるものだとリリネットには直ぐ見て取れた。
故に彼女は叫んだ。
ふざけるなと、どうせ自分がいなくなっても大丈夫程度に思っているんだろうと理解し、リリネットは怒る。
良い訳が無いと、いなくなっても大丈夫なわけが無いと、だから彼女は叫んだ、自分に出来る精一杯の大きな声で。

その後の記憶はリリネットにはほんの少ししかない。
あるのは敵の剣を弾き返す片割れの姿、そして目の前を覆うかのような緋色の光り。
疑問の声が彼女から零れるよりもはやく光は彼女に迫り、そして彼女を爆音が包んだ。

迫る光と爆音に、リリネットは咄嗟に硬く眼を閉じた。
眼を閉じながらも彼女は緋色の光を感じ、しかしその光は何かに遮られたのかなにか自分に影が差したことを感じる彼女。
少し経ってリリネットが恐る恐るその閉じた目をあけると、そこに

はもう緋色の光の群れは無く、替わりによく見知った人影がたっていた。

「・・・・・スター「馬鹿野郎ッ！！」　ッ！」

そのよく見知った人影の名を呼ぼうとした瞬間、リリネットに言葉の雷が落ちる。
人影、スタークは彼らしくもなく怒りを顕にし、リリネットを叱りつけたのだ。

「大人しくしてろっつっただろうが！それがこんなところまで来ちまって・・・・・判ってんのか、　此処は戦場なんだぞ！　お前が一人で来たってどうしようもない場所なんだ。危ねぇ場所なんだよ！　わかったらさっさと下に戻ってろ！」

一息に捲くし立てるスターク。
ネロを睨んでいた視線を戻し、正面からリリネットを叱る姿は兄妹、というより親と子のような光景。
何故こんな危ないところに来た、来ては駄目だと言った筈だ、大人しくして居ろと言った筈だろうと。
間一髪で間に合い、失わずにすんだ安心感よりもスタークにはそれが重要だった。
何のために遠ざけて戦ったのか、その意味を失わせるようなリリネットの行動。
自分が一人で戦えば済む話、自分が一人で背負えばいい話、態々この苦しみを分け合う事など無い、ただ傍にいてくれるだけで自分はこれ以上ないほどのものを貰っているのだと。

だからせめて、辛い思いだけはさせまいとしたスターク、それ故に語気は強められてしまうのだろう。

「なっ！　なんだよそれ！　アタシはスタークが心配で・・・・・・だ、大体さっきのはなんだよ！　スタークさっきもう面倒くさいとか、別に俺が死んでもいいとか思ってただろ！ふっざけんな！　大体いつもはやる気無いくせにいきなりカッコつけんなよな！それであのデカイのにやられそうになるとかホント信じらんない！べ～～だ！」

「なんだとこの野郎！人の気も知らねぇで・・・・・・コッチがどんだけ心配したと思ってんだ！まともに喰らってたら死んでんだぞ！」

スタークの一喝に対し、リリネットも負けじと応戦を開始する。
スタークがここは危ない場所だから近づけたくないと思っている事など、リリネットははじめから判っている。
それでも来ようと思ったのは、一重に彼を心配する気持ちがそうさせたのであり、自分ばかりが相手のことを考えているようなスタークの発言はリリネットには許容しかねるものだった。
そして一方的に叱られたまま彼女が追われるはずも無く、強がりのような言葉が口をついて出て行く。
最後には舌を出してしまう始末、なんとも反省の無い、というよりも素直ではない態度のリリネット。
そんなリリネットの態度にスタークも同じ温度で対応し、二人は段々と親子の光景から兄妹の光景へと様変わりしていく。

「だいたいアンタだアンタ。　リリネットを此処まで連れて来たんなら、最後までキッチリ面倒診てくれ、死神さんよ・・・・・・」

「いや～堪忍やで？　君がコッチに来ぇへんかったらこの子、守ったっても良かったんやけど・・・・・君が2番サンの攻撃を受け止めるいうなら話は別や。僕、藍染隊長から君らの戦いには手出し無用や言われてるよって、この位置で嬢ちゃん守ろうとするとどうしても君らの戦いに手出しする事になってまうからね。」

スタークの憤りの矛先、それは近くにいた市丸にも向けられる。
流石にリリネットが一人で此処まで来ることは不可能であり、誰かが手を貸したのは明白。
そしてそれは誰かと問われれば、此処にいる第三者、市丸以外ありえなかったからだ。
しかしそんなスタークの責めるような口調も、市丸は何処吹く風、手出しが出来ないのだから仕方がないという一言で逃げおうせる。

「ほんなら僕は遠くから見とるよって。　・・・その子、大事にせなアカンよ・・・・・・」

去り際にポツリと一言零し、市丸はその場から消えた。
霊圧の感触からさほど遠くにいった、という訳でもなさそうだがこれは本当に手を出す気がないのだとスタークは理解する。
市丸のそんな態度にスタークは深い溜息をこぼすが、そんなスタークにはお構い無しに、彼の背中には殺気の塊のような一撃が飛来した。

「ッつ・・・・・・！」

振り返りもせず刀を振るったスターク。
僅かに声を漏らすもスタークはそれを刀で捉え、振りぬく。
刃と、そして何か硬いものがぶつかり合ったかのような音が響き、
そして弾かれた硬質は天蓋を砕き穴を穿った。

「塵がぁ・・・・・・　オレ様を無視するんじゃねぇよ！！オレ様は”神”だぞ！　テメェら塵がオレ様に向けるのは敬いだけだ！生き延びたんなら丁度いい！　まだ殺したりねぇ！このオレ様を傷つけた罪はこんなもんじゃ償えねぇんだよ！あと軽く百回ほどオレ様に殺されろ！　塵カス新入りぃぃぃ！」

「・・・無視なんかしてねぇよ・・・・・・するわけ無いだろ？
アンタだけは・・・な・・・・・・」

「ゲハハハハ！　殊勝な事だ！　褒めてやる。だが・・・・・・
その襤褸カスの腕じゃぁ次は厳しそうだなぁ、えぇ？そんな餓鬼なんぞ見殺しにすればいいんだよ！馬鹿が！　ゲハ！ゲハヒハハハハ！！」

スタークに飛来し、そして彼の斬魄刀によって弾かれたのは緋色の弾丸。
上空から撃ち下ろされたネロの虚弾であった。
自らが放った吼虚閃、その圧倒的攻性能力によってリリネットを、
ひいてはスタークを殺したと思っていたネロ。
しかし現実彼等は今だ息をし、瞳には生の輝きを宿し、確固としてこの場に立っていた。
その光景、ネロにとってはあまりにも面白くない光景。
奪ったはずの命が生きている、それもまるで何事も無かったかのように彼の眼下で言い合いすらする始末。

しかし命が繋がれた事も、自らの攻撃が命奪うに至らなかった事も、ネロにはどうと言うことではなかった。

ただ一つ、許せない事は一つだけ。

彼等は今、自分の存在を無視しているという事。

”神”である自身、その圧倒的なまでの存在感を前に彼等はそれを無視していると。

神を前にした愚衆の行動はただ一つ、跪き、頭を垂れ地に擦り付け、その額を泥で汚しながらも感謝と賛辞を述べる事以外ありえないと。

それをしない彼等、それどころか此方を見ようともしない彼等、それはネロが怒りを表すのには充分だった。

怒りと愉悦、起伏する感情線、底見えぬ谷と雲を貫く山が交互に訪れるかのようなネロの感情、愉悦の谷を見た彼が次に昇るのは当然怒りの山。

故の虚弾、最も硬度を上げた強烈な一撃を見舞う彼に不意打ちなどという思考は無い。

あるのは鉄槌、神の粛清という名の鉄槌という感情のみ。

対するスタークはネロの怒りの大音声に対し、何処か静かで重い声。

声の重さ、言葉の重さは決意の重さ、先程よりも明らかに増した重みは何故か。

理由は定かではなくしかし、スタークの中で何かが、何かが決定したということだろう。

しかし、その決意も何もかもを水泡に帰してしまう事柄があった。

「えっ・・・・・？　スター、ク・・・・・・・・その腕・・・・・・」

下卑なネロの笑い声が響く中、小さくか細いその声は何故かよく聞こえた。
リリネットの呟き、先程まで子供の癇癪のように意地を張っていた彼女、しかしその眼に映った彼の腕、ネロの攻撃を受け止めるために振り上げられた右腕、先程までリリネットから死角となるようにして隠されていた右腕は肘から先の袖は無く、残った袖の端は焼け焦げ、そして斬魄刀を握る彼の腕もまた、同じように焼け焦げ爛れていたのだ。

ネロが笑うその傷、まるで襤褸だと笑うその傷はいつ出来たかなど明らかな傷。
駆け抜け、形振り構わず、自らすら厭わずに割って入った。
当然それが限界。
割って入る事、間にはいる事、破滅の緋から大切な者を護る事こそが目的でありそれ以外は無かった。
結局のところ迫り来る光を斬魄刀で受け止めることになり、当然のようにその光はスタークの刃だけでなく彼の腕も飲み込んだのだ。

そして負った傷。
リリネットの行動を叱りながらも心配させまいと隠していた腕、注意してはいたが飛来した弾丸を止めるにはそれしかなく結果腕はリリネットの眼に触れてしまった。
不安と悲しみと、そして後悔に染まるリリネットの顔、それを見てスタークは小さく舌打ちをし、バツの悪そうな顔で頭を掻いた。

「・・・・・気にすんな。　只、俺が間の抜けた受け止め方をした、それだけの話だ。」

自分が悪いと、そして言外にお前のせいではないと、そう言い聞かせるようなスタークの声。
彼に出来る精一杯、ただ彼は護りたかっただけで彼女さえ生きていたなら自分の腕の一本ぐらいどうと言うものでもないのだ。
が、現実はそうはいかず、その焼け爛れた腕を見たリリネットは瞳に涙を浮かべ、俯きながら手を伸ばしスタークの死覇装の裾をギュッと握る。
近すぎず、しかし遠くない距離、ふれ合い、他人を感じられる距離に納まる二人。

「・・・ごめん、スターク・・・・・・　アタシ、スタークが心配で、スタークの力になりたくて・・・・・・スタークの事、護りたくて・・・・・・」

ぽつぽつと零れる言葉に強がりは感じられず、リリネットの本心が垣間見れた。
ただただ心配だった、それが彼女の全て。
それをただ伝える、素直に、そして真摯に。

「スタークはいつもそうだ。　危ない事も、辛い事も、悲しい事も、みんな独り占めしちゃうんだ・・・・・・それがスタークの優しさだってアタシにも判るよ?でも・・・でもそんなのアタシは嫌だ。せっかく二人になったんだ、だったら辛い事も、悲しい事も、楽しい事も、嬉しい事も、みんな二人で分け合わなくっちゃダメだ・・・・・」

隣に立っていながら、彼女は背中ばかりを見ていた。
同じ存在、しかし違う存在であり強く、そして自分は弱いと。
強さによって護る、傷つけない為に、敵から、災厄から、襲い来る全ての害なすモノから。
それは判る、だが、しかし、それでも、与えられるのは幸福だけで、それ以外の全てを一人背負おうとするその背中は彼女には悲しすぎた。
二人になった意味はなんだっただろうか、片方が片方を護るためか、片方が背負い片方が享受する為か。

いいや違う。

リリネットはずっとそう感じていた。
理屈もなにもなく、それだけは違うと。
ずっと伝えられなかった言葉、背中に声をかけたとて届かぬ言葉、それを今、彼女は正面からスタークにぶつけていた。

「だからアタシも・・・・・・　スタークを護りたかったんだ。何が出来るかわかんないけど、それでも護ってやりたかったんだ・・・・・・　でも、ダメだな・・・・・・・・結局アタシが来たからスタークに怪我させちまった・・・・・・・ハハ・・・　やっぱりアタシは・・・　足手纏いだ・・・・・・」

自嘲気味の笑いが零れる。

護りたいと思って此処まで来た、何が出来るか判らないまま、それでも何かしなければと。
そしてその結果は大切なものに血を流させる。
なんという皮肉、なんという不様な結末かとリリネットは自分を笑った。
想いだけ、それだけでは何も出来ないと、力なき想いでは何も、何一つ出来ることはないのだと。
悲しさと不甲斐なさとで彼女の頬を涙がつたう。

そんな彼女の頭に大きな手は優しく置かれた。

のは始めだけで、その大きな手はそのまま彼女の頭を鷲掴みにすると、ぐるぐるとその場で円を描くようにして回しだす。

「えっ？　ちょっ！　なっ！　何すんのさ～～！　や～め～ろ～よ～～！！」

結構な勢いをつけて回される彼女の頭。
視界もまたぐるぐると回り、間延びするような声はリリネットの頭の中までがぐるぐると回っている事を伺わせる。
その勢いがついたまま離される大きな手、リリネットは暫くの間その勢いのままフラフラとよろめいていた。

「ハァ、ハァ・・・　うぇ、気持ちワル・・・・・・って！てんめぇスターク！　何すんのさ！」

よろめきながらも自分を取り戻したリリネット。
即、この回る世界の犯人であるスタークに食って掛る。

せっかく自分が伝えたかった事がいえたというのに、台無しだとばかりに。

「それだ・・・　それでいいんだよお前は。　湿気た面してんじゃねぇよ、ったく・・・・・・いいか？　お前は今のままでいいんだよ。　ガキがごちゃごちゃ要らねぇこと考えんな、お前の言いたい事はちゃんと・・・判ったからよ。」

飛び掛らんばかりのリリネットに返ってきたのは、そんな言葉だった。
目の前で消沈し、涙を流す片割れの姿、スタークにそれはどうしようもない後悔を感じさせた。
結局自分がしてきた事は自己満足、大切にする、危険にはあわせない、自分を殺してでもコイツにだけは悲しみを、苦しみを味合わせはしないと。
そうしてきた自分の行動、しかし実際はそれ自体がなによりも深くこの小さな片割れを傷つけてしまっていたと。
リリネットはきっとずっと前からそう感じていたのだろう。
それを自分は見てやろうとしなかった、感じ取ってやろうとしなかったと。

（何が”護る”だ・・・・・　ガキを泣かして・・・傷つけて、遠ざけて、勝手に一人で背負い込んで、それで護ってる心算になってただけじゃねぇか。それをこうして真正面から向けられるまで気が付けねぇとは・・・な。ザマぁ無いぜ、まったく・・・・・・）

何処までも身勝手な思考だったのか、護るという一念、それに間違いは無かったのかもしれないがしかし、結果は護りたい者を悲しませた。
内心スタークは自分の馬鹿さ加減に呆れを感じる。
独りよがりの思考、あれほど独りを拒んでいたのにいつしか独りで全てを背負おうとしていた自分。
それに気が付いたのは自分ではなくもう一人の自分で、そしてその涙を見るまで自分は気付かなかったと。

世界にたった一人だけ、何よりも大切なものを泣かせたのは自分だったのだと。

自然とスタークは無事な左手をリリネットの頭に乗せていた。
触ればその小ささがよりよく判るもう一人の自分。
その小さな身体一杯に詰め込んだ想いをスタークは感じ取っていた。
さびしさ、悲しさ、不甲斐なさに遣る瀬無さ、自分は弱いからと口に出さなかった彼女の想い、感じ取ったその想いは彼の何よりも深い部分に染み渡る。
そしてそれを感じ取ったスタークはいつの間にかリリネットの頭を掴んでぐるぐると円を描いていた。
その行動にさして意味は無い、しいて言えばこうすればきっと沈んだ様子の彼女が元に戻る気がしただけ。

活発で気の強い跳ねっ返り。
そんな彼女が彼の唯一の救い。
孤独から掬い上げてくれた救いであり、背負った全ての重みも彼女の笑顔が忘れさせてくれた。
独りではない、そう感じられるだけで彼にはそれ以上の幸福などない。

自分が流させてしまった涙なら、せめてそれを止めるのも自分であろうとスタークは行動していた。
方法は微妙、しかしそれは些細な事だと、やはり彼女には涙より元気な姿の方が似合うのだからと。

最初何をスタークが言い出したのかわからない様子だったリリネット。
しかしよくよく反芻し、それが自分の言葉は届いたのだと知ると照れくさそうに、しかし嬉しさを滲ませてニカッといい笑顔をスタークに返した。
彼等の間にあった小さく、しかし深い溝は少しだが縮まり、そして埋まる。
そしてそれは彼等がまた一つ、他人という存在を知った証でもあった。

「茶番は終わったか？　塵。　なら・・・そろそろ殺してもいいよなぁ？」

振ってきたその言葉には、呆れと汚物でも見るかのような侮蔑の感

情がしっかりと刻まれていた。
上空から見下ろしていたネロ。
その怒りの眼差しに映ったのは茶番劇。
涙、謝罪、寛容、そのネロにとっての茶番劇が見せたのは彼にとって等しく”弱さ”。
そもそも支えあう、共に生きるなどという言葉をネロは好かない。
彼にとってはその言葉は弱者の証明、一人で生きる力がない弱者が都合よく群れなす為の言い訳に過ぎないからだ。

燃え上がるようだった彼の怒りは次第その色合いを変え、怒りの炎は赤から黒へ、どす黒いものへと趣を変えた。
群れなければ生きられない、弱者はしかし束になろうと弱者でしかなくそれが自分に盾突いたのだとネロは理解した。
故にその怒りは憎しみすら纏う。
弱者の刃がこの身に届いたという彼の人生において最たる汚点。
絶対的強者である自分を弱者が傷つけたという罪、”神”に対し、愚民が石投げるが如き暴挙、許せるはずもない、と。

「・・・意外だな。　アンタなら直ぐに斬り掛かって来るもんだと思ってたんだが・・・・・・。」

「慈悲だ。　テメェら塵程度いつでも消せる。なら最後に弱者同士、傷を舐め合う茶番でも・・・と思ったが・・・・・・　思った以上に虫唾が走る光景だった・・・・・・どうしてくれる、オレ様は今、不快だぞ。それも今までに無いほど物凄くだ・・・・・・えぇ？　どうしてくれるんだ？　新入りぃぃぃぃぃぃ！！！」

リリネットを庇うようにして上空のネロと正対するスターク。

彼の言葉どおりネロという破面の今までの所業を鑑みれば、話の途中に何かしら仕掛けてもよかっただろう。
だがネロはそうはせず、待っていた。
彼等二人の話が終わるのを。

ネロはそれを慈悲だという。
弱者の傷の舐め合い、彼にとっては三文芝居以下の茶番劇ではあろうが、それでも見せてみろという慈悲だった。
しかし、その茶番劇はネロに憎しみすら抱かせるほど虫唾の走る光景だった。
先も話したとおりネロにとってその光景は”弱さ”の証明、支えあうという都合のいい言い訳を並べ立てる愚かしい光景に他ならなかったからだ。
そして憎しみは不快感となってネロを支配する。
吼えるネロ、身に巣食う不快感をどうしてくれると、どうやってこの罪を贖うのかいってみろと、ネロは吼えていた。
だがそのネロの咆哮に、スタークは静かに、しかし明確に答えた。

「だったら消してやるよ・・・・・　アンタの存在ごと・・・な。」

「なんだとぉ・・・・・・・？」

強い言葉、何にも増して強い言葉。
存在を消す、お前という存在が消えればその不快感も消えるだろうとスタークは言い放ったのだ。
”仲間”は殺せない、それが全であれ悪であれ、仲間と定めた枠のうちにいるならば自分には殺せないと、そう考えていたスタークか

ら放たれたそれは言葉の強さ以上に意味を持つ。

「アンタはコイツを殺そうとした・・・・・俺の何より大事なもんを。　判るか？　いや、アンタには判らねぇだろうな、俺の怒りは。　いいか？　大事なもんを傷つけられて黙っていられるヤツなんていないんだよ。アンタは俺の仲間だった・・・　だがな、コイツに手を出した瞬間から、アンタは俺の・・・・・・・”　敵　”だ。」

それは決意と決別。
許せないのは此方も同じだと。
大事なものが傷つけられようとする、そんなものは誰だって許せず許容できるものではない。
そしてその大事なものを傷つけようとした者もまた、許してやれるはずも無いのだ。
憎しみ、コヨーテ・スタークという破面がはじめてて抱いた感情、それも”仲間”であるはずの破面に対して抱いた感情。
だがそれは正等で、間違いは無い感情でもある。

リリネットがスタークを護りたいと思うのと同じぐらい、スタークもまたリリネットを護ろうとしているのだから。

「”敵”・・・だと？　テメェがオレ様の敵？ふざけた事言ってんじゃねぇよ！　テメェは塵だ！塵芥だ！　敵ってのは対等な力があって始めて存在する、テメェと俺の何処が対等だっていう心算だ！

あぁん!?」

「デカイ声出すなよ、うるせぇな・・・・・・威嚇の心算か？　だったら止めとけ、そいつは無駄だ。アンタ程度にビビる訳ねぇだろ？この・・・俺が・・・・・・」

「な・・・に・・・・・・・？」

群青の霊圧は夜空の如く天蓋を覆った。
大気が震え、空は啼き、地は揺れるかの如く。
荒れ狂うわけでもなく、ただ水面を広げるかのように覆い尽くす霊圧。
スタークから広がるそれはまさしく強者の証、ネロの霊圧に拮抗するかのごときその霊圧は強大で、そしてその霊圧はネロの理論を用いれば”敵”として立つには充分なものだった。

「解放しろよ、第2十刃。」

「なんだと？　テメェ・・・・・・　このオレ様に命令とはどういう心算だ！」

見上げながらもどこか降るようなその言葉はスターク。
霊圧の拮抗をして敵と認めさせた相手に対し、更に奥の手である解放を要求する様は泰然とし、灰色がかった蒼い瞳はネロを射抜き続ける。

新入りであるスタークが第2十刃であるネロにとる態度としては、あまりにも憮然としたものだったがそれに違和感を感じなかったのは生来の彼の気質なのか。

「命令なんかしちゃいねぇよ。　ただそうした方がアンタの為だ、ってだけの事だ。なにせ・・・・・・　いきなり死なれちゃコッチも困るから・・・な。」

それは傲慢が過ぎるような言葉だったと言える。
スタークが言い放ったのは難しい事ではない。
解放しなければお前は死ぬと、ネロに向かってそう言い放っただけ。
まるでネロの身を案じるかのようなそれは、言うなれば自分の方が圧倒的であるという意味とも取れる。
そしてその前ではお前など、簡単に消す事ができると。
しかしそれでは困る。

そう、死なれては困るのだ簡単には。

そんなスタークの言葉は彼の思惑通り引き金となった。
ブチブチと音を立てるようにネロの額、コメカミには無数の青筋が隆起していく。
ネロ・マリグノ・クリーメン、破面の”神”を自称し、それに違わぬ力と暴虐の限りを尽くす男。
誰しもが彼を畏怖し、彼の視線から逃れ、彼の手の届かぬ場所を望む。
彼にとってそれは当然であり、神である自分は全て思い通りにしていいという思考の下彼は生きていた。

しかし、今眼下にいる破面は畏怖も恐怖もなにも自分に対して抱かず、お前を簡単に殺せるとまで言い放った。
最大の怒りはそのまま手に握る斬魄刀へ、大剣が如き巨大な斬魄刀は彼の怒りに震える手によって震え、音を立てる。

「塵ぃ・・・・・・　そこまで言うならみせてやる。神の力を、霊圧が同等だからっていい気になるな、圧倒的な神を前にして自分の愚かさを呪え！」

ネロから噴出す霊圧が更にその激しさを増す。
地上から放たれるスタークの霊圧を押し込めるように、上空から押しつぶすように放たれるそれをしかし、スタークは顔色一つ変えずに拮抗させる。
群青と緋色、境界をして二つに分かれた空、美しい朝焼けか夕焼けの海を思わせる空、だが禍々しく、近付けば死をもたらす化生の空。

「いくぜ、リリネット。　力・・・貸してくれるか？」

隣に立つリリネットの頭に再び手を載せ、ネロを睨みつけたままスタークはそうリリネットに問う。
戦場には近づけたくなかった、危ない目にも本当は今だってあわせたくない。
だが、決めた。

全て二人で分け合うと。
辛い事もあるだろう、悲しい事もあるだろう、だがそれでも片方が

背負い込むのではなく、半分はもう片方が背負おう、そうすれば半分、二等分で少しは軽くなるだろう、と。

「当然！　スタークに怪我させたんだ！　アイツ絶対ェ許さない！」

両者の準備が整う。
上空と地上、二つに分かれた群青と緋色の世界の中、互いがただ互いを殺す為に研ぎ澄ませる。
霊圧を、意識を、そして刃を。

計った訳ではなく、示し合わせたわけでもなく。
だがしかしそれは同時だった。
内向きに収束する霊圧、自己の根源へと向かい細胞の一つ一つが来るべき変容に供え、そして時を待っている。
溜め込まれた霊圧はやがて臨界に達し、内側から爆発を起し言霊を伴って外界へ。

刀という器に押し込めた力。
本能であり、本性であり、己を象徴するもの。
癒しなどなく、救いなどなく、ただただ殺戮だけを目的に研ぎ澄まし続けた魔性なる力。

そしてスタークとネロは同時に化物の力、その銘を、力持つ言霊で解き放った。

「皆殺(みなごろ)せェェェエエエエ！！　『暴君竜(ティラノサウロ)』！！！」

「蹴散らせ・・・・・・　『群狼(ロス・ロボス)』。」

竜の顎（アギト）

狼の瞳

五月雨

荒れ狂い

失え

BLEACH El fuego no se apaga. 51（後書き）

思ってたのと違う！

いや、構成の話です。
本当は解放後までいければ、と思っていたんですが
想像以上に中盤、具体的には孤独な二人の部分が長くなってしまいました。
でもコレはコレであり、かｗ

言っておきますが、頭を掴んで揺さぶっているのであって首が回ってる訳じゃないですからね？

そしてネロ解放。
もう名前もそのまんまですｗ
実際「暴君竜」という漢訳もあるそうで、コレ幸いとｗ

そして今回、書き終わって思ったことが一つ。
孤独な二人の会話が終わるまで待つネロ・・・・・・

何？ネロが空気を読んでいる・・・だと！？

「皆殺(みなごろ)せェェェエエエエ!!　『暴君竜(ティラノサウロ)』!!!!」

「蹴散らせ・・・・・・　『群狼(ロス・ロボス)』。」

互い叫ぶのは自らの名。
切り離し、別ち、封じた本性。
今それを再び結び、合わせ、解き放つための儀式。

膨大な霊圧は互いの境界線で火花を散らすように弾け、それでもお互いを主張するように相手を押し込めようと鬩ぎ合う。
破壊という単一の方向にしか向かないその力、しかし今必要なのはまさしくそれ。

どちらもが憎しみを持って相手と対し、それをもって打倒する為。
それだけの為に今、彼等は叫ぶのだ。

リリネットの頭に手を置いたスターク。
撫でるわけではなくただ置かれたその手、そしてその手を感じたリリネットはその瞳を閉じた。
苦痛も恐れもその表情には無い、ただあるのは安堵。
彼女にとってそれは呼吸にすら等しい感覚、何か特別な事をするわけではない、ただ還るという動作なのだ。

瞳を閉じたリリネットの姿は瞬時に消えた。
霧散したわけではなく、ただ頭に置かれた手のぬくもりに還る、リリネットが消えたのはそんな理由。
そう、リリネットは今その身体という器を脱し、スタークの中へと還ったのだ。

これが彼、いや、彼等の解放の儀式。
彼、コヨーテ・スタークと彼女、リリネット・ジンジャーバックは誰よりも特別な破面。
破面化時に他の大虚がその身体と斬魄刀へと分ける肉体と能力、しかし彼等は本来刀として分けるその能力を”二つの身体”に分けたのだ。

一人で二人、二人で一人の破面（アランカル）。
それが彼らという存在、そしてその彼等が再び一つに還る時、彼等はその真なる姿を顕現させるのだ。

「ふぅ・・・・・・　よっこいしょ・・・っと。」

自らが巻き起こした霊子の嵐、その中から聞こえたのはやや低い男性の声。
わざとらしく声を上げ、嵐の残滓を纏いながら立ち上がったのはコヨーテ・スターク。
左目には眼帯と照準機の合わさったような仮面を着け、黒い髪は相変わらず癖毛で波打っている。
纏っていた白い死覇装は白のコートと黒いズボンに、白いコートの背中からは分厚い黒のベルトが二本長く延び、両腕の肘辺りに一本ずつ繋がり垂れ下がっていた

服装的な変化、和装から洋装へと変った彼、そして今の彼を色で評するならばそれは”灰色”だった。
膝から脛、踝にかけてと、そして白いコートの襟元、肘から袖口に、そして腰から膝の裏辺りまでに至るコートの裾の全てを灰色の毛皮が覆っていたのだ。
それは煌びやかで皇(すべら)かな美しい毛皮ではなく、ただ無骨で野性味に溢れた毛皮、群れを成しながらもただ孤高な狼のそれに見えた。
灰色の男スターク。
その彼の変化として最も最たるものはその両手に握った二丁の拳銃だろう。
弾倉は見られず、黒で塗り固められたような大きな銃身とその中程から伸びた独特な引き金、そして銃把には銀の狼の意匠が刻まれていた。

両手に握った二丁拳銃、その片方で軽く肩を叩きながら上を見上げるスターク。

彼から発せられる霊圧は先程の非ではなく、しかし上空から押しつぶす霊圧はそれに拮抗していた。
そしてスタークの眼に映るのはその霊圧の主であろう者の姿、しかしそこにあるのは人の姿ではなくただ巨大な一枚岩。
空中に浮かぶ巨大な岩の姿だった。

空中の巨岩、ただただ巨大なそれが空に浮かんでいるという怪、ありえざる光景がそこに広がる。
やや楕円形で表面は整っているわけではなく凹凸のある岩肌、その姿は只の岩であると同時に何処か卵の様な印象すら与える。
浮かぶ岩という奇怪な物体、しかしそれはその巨岩が本物の岩だったなら、の話であり実際は違う。
その巨岩、固く、大きく、雄々しいその岩は紛れも無く霊圧を放つものであり、その霊圧は緋色、そしてその色の霊圧の持ち主などしれている。
ネロ・マリグノ・クリーメン、全てを思うとおりと信じる暴慢の神、贅肉を纏うかのような巨体の彼は今、その姿を常以上の巨大な岩へと変えていたのだ。

宙に浮かぶ巨岩、スタークはそれを注意深く睨む。
解放という戦闘能力の格段の増加、それを前に気を抜く事は自殺行為に等しく、解放とはえてして特異な能力の発現と同義である。
故の注視、ただ霊圧が噴出すのではなく突如として現われた緋色の霊子を振りまく巨岩は、それを更に厳にさせるには充分すぎた。

（さて・・・・・　鬼が出るか蛇が出るか・・・・・・まぁ、どっちが出ようとやる事は変らない・・・か。）

内心そう呟くスターク、どんな姿となって現われるかは未知数、しかしそれでもやる事など変わらないと。
既に”敵”と定めた相手、姿形がなんであれ彼が取るべき道は既に一つ、そしてその一つは何にも増した怒りの行く先なのだ。

そして遂に、スタークの視線の先で巨岩に変化が起こる。
巨岩の頂上部、岩の卵の先端から小さな欠片が弾けるように砕けた。
その小さな欠片、小さな罅は呼び水となり罅は加速度的に巨岩全体へと広がっていく。
罅割れ、そしてそれにより所々が崩れ始める巨岩、そうして巨岩を日々が覆いつくしたその時、巨岩は内側から爆発するかのように四方八方へと爆裂したのだ。

「ゲハ！　ゲハハハハハ！！　”神”の降臨に歓喜しろ塵共！！見やがれこの漲る力を！　神々しい姿を！　誰にも屈しないまさしく神以外の何者でもないこの姿を！！そして呪え！　このオレ様に解放させた愚か過ぎるテメェをなぁ・・・・・・新入りぃぃぃぃぃぃ！！！」

放たれる言葉はまるで衝撃波のように大気を震わせ、歪ませるかの如く。
巨岩の卵を割り、その中から現われたのはやはりネロ、ネロ・マリグノ・クリーメン。

そしてその姿は解放前にも増して大きく見え、そして何処までも攻撃的だった。

何より見る者の目を引くのはその左腕、巨体であるネロをして更に巨大だと言わざるを得ないその左腕は彼の身長を易々と超え、倍に届くほどの長さにまでその姿を変えていた。

そしてその巨大さに負けじと存在を主張するのは左腕の先、本来、手があるべき場所に彼の手は無く、代わりにあるのは顎（あぎと）。

閉じられて尚その牙は鋭く光り、眼光は鋭く、荒々しいその威容は何にも増して捕食者という言葉が似合うような竜の頭に変っていたのだ。

左腕の約三分の一をしめる巨大な竜頭、そこから伸びる上腕もまた太く大きく、何よりまるで切り立った山のように乱立するまるで鉱石のような岩が覆い。

左肩もまた隆起した無骨な岩、触れずとも見ただけで硬いと判るような岩の剣が如き太く無骨に尖った棘に覆われ、上へと長く伸びる。

巨大な左腕、多大な衝撃を見るものに与えるそれ、しかしネロの変化はこれだけにとどまらない。

左腕を覆っていた黒く尖った岩の如き鎧、それは彼の身体全身に及び、左腕ほどではないにしろその棘は隆起し彼を包み込む。

背を丸めたようなその姿勢、背中にも多くの岩の棘は生い茂り、正面から見るとまるで胸から首が生えた様、人というより獣に近い外見へ。

右腕は人型ではあるものの棘で覆われ固く鋭い爪を持ち、顔には竜の牙を模した額宛が顔の輪郭に沿って顎までを覆いつくす。

足は既に人型ではなく竜脚そのもの、無骨な棘に覆われた脚は人とは逆に膝が曲がり三本の鋭く大きい爪がつま先で光る。

身体全体が前傾姿勢、その巨体の崩れた重心を一手に保つのが長く、そして太く伸びたまるで岩でできたような尾。

そのほぼ全てを黒く硬い岩で覆われたネロ。
見えるのは顔の僅かな部分と、そして緋色に染まった風に靡かぬ硬い髪だけであり、まさしく今の彼は黒い岩山のようだった。

神々しさよりも寧ろ禍々しさが際立つその姿、『暴君竜』の名に相応しき黒き竜は今、この場に岩の殻を破り生まれ落ちたのだ。

「どうした！　神を前にして竦んだか！　今更遅ぇんだよ塵がぁ！！このオレ様の姿を拝めた事を誇って死に曝せぇぇぇえええ！！！」

暴竜となったネロ、まさしく人より竜に近い身体となった彼が動く。
踏みしめられた脚、三本の爪がまるで空に食い込んだかのようにしっかりとそれを踏みしめ、そして彼の身体は隕石となって一息にスターク目掛けて落ちた。
空を蹴ると同時に振り上げられた顎（あぎと）の左腕を叩き付けるネロ。
それだけの作業、叩き付けるというそれだけの作業で頑強な虚夜宮の天蓋は容易く砕け、そしてその地点を中心として放射状に深く長い罅とそれに伴う隆起した瓦礫を産み出す。
天蓋の巨大な罅、それはそのまま左腕の威力を物語るがしかしその一撃はスタークを捉えてはいなかった。

ネロが振り下ろした左腕をさもなく避けたスターク。
そして避けざま彼は左手に持った銃の銃口をネロへと向け、それを引き絞った。

放たれたのは群青の砲火だった。
大虚、そして破面、その全てに共通し誰しもが撃つ事ができるそれは基本的能力。
誰もが扱えるが故にその技はどこか軽んじられ、個々が持つ固有能力こそが有用であると決め付けられる。
しかし、基本的で単純な攻撃であるからこそ意味はある。
只の破面ならばそれは取るに足らぬ一撃、しかし、超絶たる霊圧を持った者が放つそれは違うのだ。
霊圧を撃つというただ単純な攻撃は単純であるが故に、それだけに弱点がない。
放たれた放火の名は『虚閃(セロ)』、やや距離をもって放たれたその群青の波濤は狙い違わず、ネロを飲み込んだ。

だがネロを飲み込んだにも拘らずスタークの砲火は止まない。
二回、三回と引き金を引くごとに虚閃は銃口から放たれ、その全てが寸分の狂いもなくネロがいる地点を飲み込んでいく。
更に数度の砲火の後スタークはその銃口を下げ、腰に下げた灰色の毛皮で覆われた銃嚢(ホルスター)へと左の銃を戻す。

《よっしゃ！　ザマみろ！　アタシとスタークにかかればあんなヤツイチコロだぜ！》

響いた声はスタークが手に持つ黒い銃から。
幼さを残したその声は彼の片割れ、リリネット・ジンジャーバックのものでありどうやら彼等が一つになったとき、リリネットはその銃へと姿を変えた様だった。

「ちょっと黙ってろリリネット・・・・・・」

《えぇ！　なんでだよスターク。　もう終わっただろ！》

「・・・・・こんな簡単に終わるなら、最初にやり合ってた時にケリはついてるさ。たとえ俺の剣に迷いがあったとしても・・・な。」

自分とスターク、一つになった自分達の能力、その強さをリリネットは理解していた。
そしてそれ故に勝利したと彼女は言ったのだ、強力な虚閃を一度ではなく何度も浴びせかけそれでも生きていられる訳がないと。
自分達の力を理解しているが故にその勝利は確定し、故に終わったと。
しかしスタークは毛先程もその緊張を緩めてはいなかった。
確かにリリネットは自分達の力を理解しているだろう、それはスタークも同じことでありしかし、スタークにはもうひとつ知っている事がある。
それはネロという破面の力、解放前、躊躇う刃の行く先すら定まらなかったスターク。
確かに躊躇い、迷いのある刃では敵を斬ることなどできない、しかしたとえ迷っていたとしても実力が懸離れていれば刃は敵にとどき、その実力差故にその勝負は決してしまうだろう。

だがそれは起こらなかった。
ネロはスタークと対峙し、運ではなく確実な実力で生き残りそして攻め立てていたのだ。
それはネロという破面が純粋に力持つ者であるという証明、その力の向く先がすてべを殺す暴虐であったとしても今は関係なく、その力を持つ者であるが故にスタークには確信があった。

この程度でネロが死ぬ筈がないと。

「ゲハハハッハハ！　終いか？　足りねぇなぁ～、この程度じゃ”今の”オレ様の鋼皮は抜けねぇんだよ！！」

スタークの予想通りネロは生きていた。
爆風と霊子の奔流から現れたネロの姿は健在そのもの、巨大な左腕を盾にするようにしてスタークの群青の弾丸を防いだのだろうか、しかしその左腕に傷などは見当たらなく、それどころか何故か彼の腕に乱立する岩の棘はその鋭さを増しているかのようだった。

（やっぱり・・・か。　見た目通り硬いな、それにどうやら厄介な仕掛けもありそうだ・・・・・）

ネロの健在ぶりにスタークは冷静だった。
相手が生きていた、その程度で揺らぐような精神を今の彼は持たない。
あるのは一つ、敵を倒すという目的の下にある冷めた理性、燃え上がりながら加速するフェルナンドとは違う、どちらかといえばハリベルの様な戦いへの考え方が伺えた。

「塵がぁ！　いくらテメェが解放しようと、カス程度の虚閃じゃぁオレ様に届くはずが無ぇんだよ！！判ったならオレ様にさっさと殺させろ！　何度も何度も何度もなぁぁぁああ！！」

天蓋をその長い尾でしたたかに叩き、その反動でスタークへと向かい跳び上がるネロ。
叩きつけられた天蓋はまた大きくひび割れ、大小の瓦礫となってあたりに飛散する。
巨体が生む存在的圧力、壁というより寧ろ山が迫ってくるような感覚はそれだけで重圧となり相手の足を竦ませるだろう。
しかしスタークにその気配は無い。
再び自身へと突撃してくるネロに対し、今度は右手に握った銃を向けその引き金を引き絞る。
放たれるのは再びの群青の放火、しかし今度は先程の比ではなく程太く、速く、そして力に満ちた虚閃が放たれる。
同じ銃というものから放たれたそれは先程のものを弾丸とするならば、まさしく砲弾であり一発で先程の数発を凌駕する程の威力が見て取れた。
再び砲火に沈むネロ、群青の光に飲まれその姿は見えなくなる。
しかしそれでもスタークの砲火がその銃口からおさまる事はなく、太く強力な虚閃の放出は続いた。
そんな群青の放火、光の帯から最初に見えたのは鋭いものの先端、まず上下から四本、そこから順々に現われたのは牙だった。
黒く光る鋭い牙、虚閃の奔流から現われたのはまさにそれであり、その牙の正体は顎を開いた竜のそれ。
開かれた顎、スタークの強力な虚閃の中をものともせずその竜の頭は進み、今その姿を現しそしてそのままスタークを丸呑みにせんと迫っていたのだ。

「っと！」

竜の顎はその頑強で力強い輪郭に違わず、猛烈な勢いを伴って閉じる。
それは咬むというより寧ろ削り取るかのような印象、そこにあった空間というものをすべて削り取り口の中に収めたかのような、そんな規格外の一撃。
それをからくも避わしたスターク、虚閃の放出を瞬時に中断して回避を選択した彼、ほんの一瞬でもその判断が遅れれば彼の身体は今頃あの顎の中にあったかもしれない。

「避けるのだけは上手いらしいなぁ、新入りぃ。だが頭の方は随分と弱いらしい・・・・・・オレ様にテメェの虚閃は効かねぇと、今言ったばかりだろうがよ！」

吼えるのネロの声には何処か優越感が滲んでいた。
それもそうだろう、放たれる虚閃は確かに強力なものに分類されはするが、彼自身を傷つけるには至らないのだ。
怒りもあろうがそれをして尚その愉悦は大きく、そしてその愉悦は彼にまた自身が神という盲質を強める要因となっていく。

「なるほど・・・な・・・・・・・」

「あぁん？　何がなるほど、だ。　今更理解したのか塵が！これだから塵は困るぜ・・・・・・　まぁ、神である俺と同じ次元で話が出来るはずも無いがな！ゲハハハハ！！」

何かに納得したのか、スタークは小さく呟く。
スタークの様子をネロはそれをただ見下し笑い飛ばすが、それはまた別の方向、スタークが納得したこととは別である。

そんなネロの様子に構うことなくスタークは納得の理由を明かし始めた。

「アンタのその鋼皮、そいつはどうやら攻撃される度に鋭く尖っていくらしいな。敵の攻撃を通さず、攻撃される度にアンタの身体はより鋭利な武器に覆われていく、って訳だ・・・・・・」

「なんだぁ？　テメェもうそれが判ったのか。ゲハハハ！　テメェの言う通りオレ様の『黒曜鋼皮（イエロ・オブシディアン）』は最強の守りであると同時にオレ様の武器だ！敵の攻撃を受ければ受けただけ黒曜鋼皮は割れ、その鋭さを増し、そして霊圧で研がれていく！テメェの攻撃は全部オレ様を更に強くする意味しか無ぇんだよ！！」

スタークが見抜いたのは先程、虚閃連射後のネロの変化。
外見上そう変ったわけではないがただ一つ、彼の身体を覆う無骨な岩の棘が何故かその鋭さを増していた、ということの理由だった。
何故ネロの黒い鋼皮がその鋭さを増したのか、それは微々たる変化ではあったが捨て置けるほど軽い変化でもなく、ではそれが起こったのは何が切欠で変化が起こる前後には一体何が起こっただろうか、スタークが考えたのはそんな事。
単純にネロの意思による変化なのか、とも考えたがそれはあまりに考えづらい事柄、その意思で変化できるというなら何も段階を置いてする意味が無い。
霊圧の上昇なども見られない事から、肉体的変容という線も消え、では一体何が残るかと考えたスタークが思い至ったのは、変化の前と後の間にあった事柄。
自身の虚閃という答えだった。

しかしそれはあくまで仮説の域を出ず、おそらくそうだろうという決め付けの思考のまま戦う事は敗北を招きかねない下策。
故にスタークは確かめることにしたのだ、もう一度ネロに、今度はより強力な虚閃を撃つ事によって。
結果は重畳、予想通り自らの虚閃をものともせずに現われたネロの姿はより鋭利な印象へと変り、なによりその黒い岩のような鎧がパキッと音を立て、より鋭利な断面をつくっていく様を彼はその眼で捉えたのだ。

『黒曜鋼皮』、スタークの指摘にアッサリとその正体を明かしたネロ。
彼の全身を覆う岩山の如きそれは彼の鋼皮であり、切り立った岩山を連想させるその鋼皮は硬く、そして割れやすいという矛盾した性質を持っていた。
敵の攻撃を防ぐには充分であり、しかし敵の攻撃によって割れていく鋼皮。
しかし割れれば割れるほどその鋭さは増し、敵の、そして自身の放つ霊圧によってその鋭い岩は砥石で研がれていくかのように更に鋭利さを増していく。
時が経てば経つほどその姿は鋭くなっていき、ただ腕を振るう、ただその尾を振るうだけでそこには何十もの刃が付いて来るのだ。
触れる事すら叶わなくなっていくであろうその身体は、まさしく自身を”神”と自称する彼の思想そのもの、と言えるかもしれない。

「判ったらいい加減さっさと死ね！　塵がぁ！！『竜吼虚閃（ドラゴ・グリタール・セロ』！！」

「チッ・・・・・・！」

スタークに己への攻撃の無意味さを語ったネロは、そのまま戦いを決しようとする。
巨大な左腕、その竜の顎が再び開き、スタークの方へと向けられる。
何かを感じ取ったのかスタークはその場から上へ、上空へと移動するがそんな事などお構い無しにネロの左腕は彼の後を追いかけ、そしてひらかれた巨大な顎の中にはこれまた巨大で禍々しい緋色の光を放つ砲弾が形成された。
形作られた緋色の砲弾、それは充分な溜めをもって一息にスタークに向けて放たれる。
巨大な砲弾から産まれるのは巨大な虚閃、ではなく普通よりもやや太い程度のもの、しかしその数は尋常ではなく、十や二十ではきかない数の虚閃がスターク目掛け、いや、スタークだけではなくまるで夜空全てを撃ち貫かんと闇夜を駆けた。

上空へと移動したスタークは自らに迫る緋色の壁が如き虚閃郡を確認すると、右手の銃を銃嚢へと納め先程納めた左の銃を抜き放つと、緋色の壁に向かって構え、そして引き金を引く。
放たれるのは先程と同じ群青の砲火、だがそれはあまりにも非力に見えた。
面を制圧するネロの緋色の砲火に対し、スタークのそれは点、それもまるで針が壁を穿とうとしているかのごとく何処までも非力。
しかし退く事などできない、そもそも退く場所が無い、空を消し去らんとさえしているかのようなネロの虚閃、何処に退く場所、逃げられる場所があるというのか。
進むしかない、穿つしかない、無闇に迎え撃つのではなくただ細く、研ぎ澄まし細く細く、壁を穿つしかないのだ。

だがその姿は非力なる抵抗だったのか。
スタークの姿はあえなく緋色の壁の中へと消えてしまう。
壁の中は荒れ狂う攻勢の霊子、ただ敵意だけを向ける暴虐の檻、その只中にスタークはその身を沈めるよりほかなかったのだ。

「ゲハハハ！　呆気無ぇ！　オレ様の！　神の一吼でテメェら塵は存在すら残さず消え去るんだ！まさに神！　命を片手に握るこの感覚！　握り潰すこの感覚が堪らねぇんだよ！！ゲハハハハ！！！」

緋色の砲火はそれ程長くは続かずに治まった。
その後に響くのは笑い声、もう幾度と無く響いたそれはしかし、いつまで経っても耳障りな下卑なもの。
その声に、その言葉に見えるのは何処までも傲慢な色、命というと尊いものを何の躊躇いも無く殺し、その感覚に酔いしれる怖ろしき色。
掌に乗った命、生かすも殺すも掌の持ち主次第となったとき、ネロは躊躇い無くその手を握る、力の限り、そして笑みを浮かべたまま。
それはある意味彼の生き様、自分以外の命に娯楽以外の価値を見出さない彼の生き様そのもの。
掌から伝わる砕け、潰れ、そして滴る感覚こそ彼が何処までも求め続ける命が終わる感覚、命を奪ったという感覚。
それに酔い、震え、更に求めるという破綻した者、それこそがネロ・

マリグノ・クリーメンなのだろう。

「悪いが・・・そう簡単に握り潰されちゃやれねぇな・・・・・・」

声がしたのは高笑いを上げるネロの左側から。
そしてその声の持ち主は言わずともかなスタークであった。
ネロが放った緋色の壁と見紛うばかりの虚閃、竜吼虚閃。
その虚閃郡の中をスタークはからくも生き延びたのだ。
壁、といっても実際は虚閃の群れであり少なからずではあるが隙間はある。
スタークは左手に構えた銃から発射される自身の虚閃で持って自分に都合の悪い虚閃、自身に直撃するであろう虚閃だけを撃ち落しその群れの中を進んでいたのだ。
ネロの放った技は確かに強力無比であり、とみに大量虐殺に関しては頭一つも二つも抜きん出た性能を誇っている。
しかしそれはあくまで大量の獲物を殺す事においてであり、一対一という現在の状況においては些か不似合いな技でもあったのだ。

それを生き延びたスタークは言うが早いか言葉と同時に右手を振り上げる。
すると彼の背中から右腕へと繋がった黒い革のベルトから霊子があふれ出し、瞬時に彼の手の中に霊子で構築された刀が出来上がる。
既に振り上げるという動作が終わっている右腕、そして後はただ振り下ろされる右腕。
振り下ろされた霊子の刀はそのままネロの黒岩の棘を目掛けて奔り、数本を根元から両断した。

「グオラァァ！！」

棘が斬り飛ばされた後、ネロはその巨大な左腕を払うようにして横薙ぎに振るうが、スタークはからくもそれを避ける。
見た目以上にネロの動きは速く、巨大であるということは愚鈍であるという考えは彼には通用しないようだった。

「テメェ新入り！　塵の分際でダラダラ生き延びてんじゃねぇよ！」

「・・・・・・」

ネロはそう叫びながら二、三度スタークに対し追撃を加えるが、反撃ではなく何故か避ける事に重きを置いたかのようなスタークの軌道には流石についていけない様子だった。
近付いたとてスタークはその右手に握った霊子の刀で攻撃を弾き、また距離をとるを繰り返す。
大きく速いとは言っても流石に大きすぎるネロ。
小回りという点では圧倒的にスタークに分があり、弾かれ、距離を置かれればそれ故に追いきれていないというのが現状なのだろう。

「ちょろちょろとぉぉぉぉ！！　逃げてんじゃねぇ！！」

ネロの叫びと共に今度は彼自身の口から虚閃が放たれる。
吼虚閃ではなく通常の虚閃、一条の光となって進むそれをスターク

は右手の霊子の刀を消し、素早く右の銃嚢に納まった銃を抜くと引き金を引き応戦した。
ぶつかり合う虚閃と虚閃、緋色と群青の鬩ぎ合いはしかし一瞬で、緋色の砲火は群青に圧し負けネロはその身体をまたしても群青色の光に沈める。
しかしそれは彼にとってなんら問題のない事。
それどころか攻撃を浴びれば浴びるほど彼はより鋭く、研ぎ澄まされていくのだ。

「効かねぇ、効かねぇ、効かねぇんだよ！　塵がぁぁぁぁ！！」

叫びを上げながら尚スタークに追いすがるように迫るネロという名の岩の山。
しかしスタークの方といえば、ネロの激情を他所に冷静に戦況と状況を見定めていた。

（なるほど・・・・・・　棘を斬っても後から後から生えてくる、いや、岩が生まれてくるって寸法かよ・・・・・・それなら幾ら割れようが問題は無い・・・か。ったく・・・面倒な事だ・・・・・・）

そう、スタークはただ逃げ回っている訳ではない。
ネロの虚閃を逃れて後、斬り落とした彼の岩の棘。
時を置き観察すると、斬り落とされたネロの棘はその根元から再び隆起し始め、またはじめの無骨な岩の棘へとその姿を戻していった。
それはつまり、ネロの鋼皮は再生、いや、新たに生まれ続けているという事。

割れて後、斬られて後、そのしたから馳走が隆起していくかのように次々と新たな岩の鋼皮は生まれ、ネロの身体を覆い続けているという事だった。
幾ら割れようが傷つけられようが問題ない、割れ続けて短く、そして無くなる事も無い。
まるで無限に再生しているかのような鋼皮、攻撃に特化し、しかし強力な護り、それをして黒曜鋼皮ということなのだろう。

「だがそれでも・・・・・・　俺が・・・俺達が勝つ・・・・・・・・！」

背中合わせ
常に二人
常に一人
翻り覗け

BLEACH El fuego no se apaga. 52（後書き）

ギ、ギリギリ・・・・・・

いや、明らかに書く時間の配分を間違った・・・・・・
今日は地区対抗の球技大会があったんだった・・・・・・
おかげで午前中はつぶれ、酒は飲まされ夕方までぐっすりさｗ

今回の内容はほとんどネロの見せ場・・・かな。
大昔に頂いたアイディアを元に、自分の中で混ぜ合わせ妄想を膨らませた産物ｗ
どうだったでしょうか？

しっかし今回のファンブックはまさに俺得！
巻末の小説は待ちに待ったものでしたよ！

あと、従属官三人娘の名前、ドルドーニの技名など判明しましたので、後日修正します。
では～

BLEACH El fuego no se apaga. 53（前書き）

今回、原作ナニソレ爆弾があります。

闇色の空は暗く、その暗さは全てを飲み込む暗黒の証。
その証をもってその場所は、化生達の住まう場所である事を物語る。
暗い黒だけをもって塗りつぶされた空、深い深い黒い空、だがしかし、その黒い空は今色に満ちていた。

まるで夜空に咲く花火のように群青の光と緋色の光が交錯し、衝突し、そして弾ける様はただ美しくもある。
しかしその光は見る者の目を奪うと共に命すら奪う禍々しき光。
互いに相手を死に至らしめんと放つ光すら、漆黒の空にはただ美しく栄えてしまうのか、化生住まう虚圏（ウェコムンド）の色彩を排した世界にはその光すら劇的な変化だったといえるだろう。

二色の光はただ一直線に奔り、時にその本数を増やしながら交錯する。
時折その光の交錯点では刃鳴りと火花が弾け、そして再び光が放たれ続けた。

第2十刃（ゼグンダ・エスパーダ）　ネロ・マリグノ・クリーメンと二人で一人の破面（アランカル）、コヨ

ーテ・スタークとリリネット・ジンジャーバックは猛烈な砲撃戦と刃を削るかのような接近戦をめまぐるしい速さで展開していたのだ。

「随分粘るじゃねぇか新入りぃ！　そんなに生きる事に必死か！見苦しく命に執着するってのか？　塵の命に執着する程の価値なんか無ェんだよ！だからさっさと・・・・・・　死ねやぁぁぁ！！」

自らの口、そして左腕の巨大な竜の顎から虚閃を放ちスタークを撃ち落さんとするネロ。
彼からすれば小さすぎるその的は素早くその虚閃を避け、今だ直撃らしい直撃を与えるには至っていなかった。
その様、彼からすれば無意味な反撃しかして来ない無意味に逃げ回る様なスタークの姿は無様以外に他ならない。
散発的な反撃、攻撃を避けただ時を稼ぐかのようなその姿、それはネロから見れば”逃げの姿勢”、そしてその逃げは死にたくないという願望の現われであった。
死にたくないから逃げる、自らの命に、生に執着し永らえる事だけを考えるかのようなそれは滑稽と言うよりも寧ろ見苦しさすらネロには感じらた。
何故ならそれは無駄な事、彼にとってその命への終着は無駄な事だからだ。
”塵”、自分以外の全てをそう称するネロにとって、無価値である塵がその生命に執着する事もまた無価値極まりない事であるから。

虚閃を放ったネロがスタークへと肉薄する。
人とは比べ物にならないその下肢、つま先というよりも鋭い爪が宙をしっかと踏みしめ、巨大に膨張した大腿から伝わる規格外の力は余すところなど無く全てが推力へと、彼の身体を一塊の砲弾とする

ための推力へと変換させる。
踏み出したその瞬間から既に最速、初速など無くいきなり最高速度をたたき出しスタークへと突進する。
左肩を前に出すように突進するネロ。
だがそれは只の突進ではなく、岩の剣山が突き進むのと同義であり、スタークの虚閃を浴び続けたネロの黒曜鋼皮（イエロ・オブシディアン）は既に岩というより無数の剣が乱立していると言った方が正しいほど研ぎ澄まされつつあったのだ。

迫り来る剣の群れと化したネロを、スタークは迎え撃つ。
先程まで撃っていた左の銃を銃嚢へと素早く納め、背中から腕へと繋がる黒い皮製の弾倉から霊子を集め産まれる霊子の刀。
銃という武器は間合いが命、近付かれすぎれば有効な攻撃手段は限られ、与えられるダメージもおのずと下がる。
ただ突っ込んでくるだけの相手ならばそれをされようとも間合いを潰される前に撃ち落すのが上策だろう、だがこのネロという破面はその程度では止まるわけがない。
間合いを潰されてから対応したのでは遅い相手、故にスタークは銃をしまい刀を手にする。
だがこれは攻撃というよりも防御の意味合いが強く、剣という物理的なものを防ぐならば同じようなものの方がまだマシだというだけの事。
そもそも突進してくる剣の群れに態々付き合ってやる必要も無く、ギリギリまでネロを引き付けるとスタークは身体を翻すようにしてネロという名の岩の山を回避する。

巨体から発せられる圧力、撒き散らされる霊圧、そして猛烈な速さで迫るネロであるがただ真っ直ぐ自分に向かって迫ってくるだけの

相手に遅れなどとりよう筈も無く。
身体を翻したスタークの横を通り過ぎるだけのネロ。
砲撃戦に業を煮やせば突進し、しかしそれは敵を捕らえる事かなわず再び吼えるように虚閃を放つ。
ネロが繰り返したのはそんな行動、あまりに短絡的、あまりに稚拙なその行動は先程来よりの一種定型となりつつあり、それに付き合わされるスタークからしても無意味さすら酔うものであった。

だが、戦いに定型などありえるのだろうか。
剣の型、戦術、戦略、連綿と積み上げられてきた定石という名の道。
しかし、そのどれもが時をかけ削ぎ落とし単純かつ強固という側面を持ちながら、時に敗れ去る。
それは戦いに定石、定型などないという証明であり、それはこの戦場においても同じ事。
繰り返すのは無意味な行為、しかしその無意味さに付き合ってしまうが故に気が付かない。
気が付かない故に生まれる僅かな緩み、弛緩。
……また同じ事の繰り返し、という本人すら自覚の無い決め付けてしまう思考がそこには生まれていたのだ。

《スターク！！》

叫び声が聞こえたのは彼が右手に握る黒い銃から。

片割れであるリリネットの意思が宿ったその銃から発せられた声にスタークは反応し、その視界の端に僅か見えたものを捉えた。
それは黒く長く、そして何処までも攻撃的な無数の棘に覆われた尾。
彼の横を通り過ぎたはずのネロから生えた黒岩の尾であった。
先程まで、こうして突進を繰り返すネロの身体にただ追従するように通過して行ったその黒い尾は、今回だけはそうではなく、通過する勢いのままスタークを切裂き抉ろうという軌道を描いていた。

迫る黒い尾をスタークは霊子の刀を使い受け止める。
しかし、備えていたわけではない攻撃は不意ゆえに自然その威力を増し、長くそして岩の剣で覆われたネロの尾はまるで鎖鋸のようにスタークの刀を削っていく。
いつ果てるともない連刃、スタークは解放後はじめてその表情に苦悶を浮かべ、己が僅かな緩みを悔やんだ。

そう、戦いに無意味などあるはずが無いのだ。
特に実力を持ったものの戦いのそれは削り落とされるべき部分、無意味、無駄、無用なるものをそぎ落としてこそ戦い。
すべては相手の命を死に至らしめるための行動であり同時に結末への布石、ネロとてそれは例外ではなかった。
叫ぶ声も、罵りも、ただ力任せに見えた突進も、その実全ては一瞬への布石。
同じ事を繰り返す事で生まれる相手の油断、ほんの僅か、数瞬にも満たないそれを狙い済まし絶命至らしめる。

こと命を奪うという事に関してネロという破面は抜きん出ている。
その圧倒的な攻撃性能、その圧倒的な命への嗅覚、そして他を寄せ付けない命を奪う事への執着。
それをして第2十刃（ゼグンダ・エスターダ）、それをしてネロ・マリグノ・クリーメンなのだ。

火花と甲高い音を存分に響かせる鎖鋸と霊子の刀の衝突。
やがて鎖鋸は根元である岩山、ネロに追従しスタークの下から離れていった。
スタークがその手に握る刀、その刃は度重なる黒い刃の乱撃に耐え切れず刃毀れをおこし、今尚ボロボロと崩れている。

（ちょっとばかし危なかった・・・な。　助かったぜ、リリネット・・・・・・だが、ヤツの鋼皮・・・・・・・　一体どうなってやがる・・・・・・・？）

それを見やりながらスタークは片割れの存在に感謝していた。
二人で一人というものの利点、それは二つの思考、意思が並行しているという点。
今で言えばスタークは度重なるネロの突進に僅かな緩みを見せていた。
それはおそらくリリネットとて同じであり、どちらかといえば彼女の方がその傾向は強かったとも言える。
しかし主観、便宜上の本体といえるスタークからは見えなかったネロの攻撃は、今やその姿を銃へと変えたリリネットからは見えていた。
迫り来る攻撃に対して対応が遅れている片割れに対し、警鐘を鳴らす。
一人ではどうしても生まれる小さな穴、思考の小さな穴をもう一人が埋める。
視界に捉え、思考し、予測し、そして伝える事で彼等二人の死角は極限まで少なくなっているのだ。

今回はそれがスタークを救った、片割れであるリリネットの叫びがあったからこそスタークは僅かな緩みの淵から瞬時に帰ってくる事ができたのだろう。
だがしかし、窮地を脱したといえどスタークには疑問が残った。
そらは彼の視線の先にある刃毀れをおこした刀、あれだけの乱撃を受けたのだからそれはある意味し方がないと言えるかもしれない。
しかし、その刃毀れは本来ならばありえない現象。
ぶつかり合う岩の剣と霊子の刀、拮抗し火花を散らしていたそれ。

だが思い出して欲しい、スタークの刀は始め、ネロの岩の剣を切り裂いていたのだ。
ネロの鋼皮が回復する、新しく生まれるということを確認するためスタークはその手に持った刀で確かに彼の鋼皮を切り裂いた。
それはネロの鋼皮の固さに対してスタークの刀、その威力が勝っていたという事。
もちろん武器の威力だけで切れ味が決まるわけではない、しかしスタークは先程と同じように、同じ刀を造り出しネロの刃を受け、それでもネロの岩の剣はきり飛ばされること無く逆にスタークの刃を削り取って行ったのだ。

不可解、顔に、表情に出さずとも僅かに滲むスタークが纏ったそんな気配。
そうした感情の変化は戦場では色濃く映る。
そしてその変化を見逃すほどネロの目は曇ってはいなかった。

「解せねぇか？　新入りぃ。そりゃぁそうだよなぁ、さっきまではテメェのその出来損ないの刀で斬れてたオレ様の鋼皮が、どういう訳か斬れなくなっちまったんだろう？判る、判るぜその気持ち。
判らない事は怖いよなぁ？不安だよなぁ？　えぇ？」

ニヤニヤと笑いながらスタークを見下ろすようにして宙に立つネロ。
互い立つのは空の上、しかしネロは常にスタークより高い位置を保っている。
それは戦場の有利不利を嫌ってではなく、ただ自分より上に立たれるのが気に食わないという単純なもの、そうして見下ろす事こそが自分の在り様だというネロの考え故に。
そうして見下ろし、ニヤつきながらネロはスタークの疑問は当然だと言い放つ。
その疑問、判らない、解せないという気持ち、それを嘲いながらネロは”神”の慈悲として答えを与えた。

「塵にも判る様に教えてやろう。　ゲハハ！よぉく聞いとけよ？
オレ様の鋼皮、黒曜鋼皮はなぁ・・・・・新たに生まれれば生まれるほど硬度を増していくのさ！割れやすく脆い鋼皮は尖り、研ぎ澄まされながら洗練され、次第硬くなりそして遂には割れなくなる！その時テメェ等塵は絶望するのさ！　オレ様は最強の矛と盾を手にし、テメェ等は道化！そのお手伝いだったって事を知ってなぁ！！」

恐るべきはネロ。
アッサリと自らの鋼皮の能力を明かしたかと思っていた矢先、彼はまだその性能を隠していた。
脆く割れやすい、しかし割れるほど鋭く、霊圧を浴びるほど研がれていくような彼の鋼皮、その岩の剣。
割れ、研がれ短くなりながらも後より生まれる新しい鋼皮に押上げられるようにして途絶える事無く、常にネロの身体を覆い続けるそれ。

しかし新たに生まれる岩の鋼皮は次第その硬度を増していき、相手の攻撃で割れる彼の鋼皮は遂には割れなくなる。

それは単純に防御力が上がった、というだけの話ではない。
鋼皮が割れることが無くなった、それは即ち無傷であるということ、そしてそれは相手の攻撃を完全に遮断したという事なのだ。
研がれながらも割れていく鋼皮、ならばそのすべてを割ってしまえばいいというのは愚かな考え。
ネロの鋼皮はそういった輩を跳ね返す最強の守り。
割るという目的、ダメージを見込めないにしてもそれは行えていた敵にとってそれは死刑宣告に等しい。

何故なら鋼皮を割る事すら出来ない攻撃は、ネロの身体に届くはずも無いからだ。

打つ手無し。
敵対者たるネロは鋭い無数の岩の剣をその鋼皮に宿し、此方の攻撃はその鋼皮によって最早完全に防がれる。
そしてその手伝いをしていたのは自分、自分が攻撃し、割り続けた事により鋼皮は硬度を増していったのだから。
戦いにおいて気概は重要な因子、気概、気勢、気合、それを叩き折るネロの鋼皮、その真実。

ネロという”神”を自称する彼の考える”神”という存在の体現。
その身に何人（なんぴと）の手がとどく事も無く、触れる事すらできない存在。
触れればその罪深さに身は切り裂かれ、そして愚かなる反抗はその全てが神の贄としかならない。
無敵、そんな言葉が頭をよぎるかのようなネロという存在、そしてその相手を嘲うかのような性能を秘めた鋼皮をしてネロは高らかに勝利を宣言するのだ。

「どうだ塵がぁ！　テメェはもうオレ様にとどかない！虚閃しか撃てないその無力な銃も！　その手に握った竹光も！今後一切オレ様の身体に傷一つつけられはしねぇ！絶望だ！　テメェには絶望しかねぇ！　付属品の餓鬼を吸収して粋がってたがそれも終わりだ！！オレ様の！　神の前に平伏せ！ゲハハハハハ！！」

確かにネロの言う事は正しくはあった。
スタークとて今だその全てを見せた訳ではなく、虚閃の威力も上げる事は可能だった。
しかし、それは先の見えた戦いでもある。
いくら攻撃の威力を上げようともいつかはそれは弾かれ、その前にネロの霊圧が尽きる可能性にかけるのはあまりに薄い賭け。

どうするべきか、スタークはそれを悩む。
手が無いわけではない、それこそやりようによっては幾らでも打開策は出るだろう。
だが今、最も効率的で最も効果が期待できる手段は一つ、しかしそれは躊躇われる一手でもあった。
護ると決めた、しかしそれは独りよがりの考え。
それに気が付く事は出来た、しかし、この選択肢はそれをしてもスタークに躊躇いを覚えさせてしまうのだ。
一人逡巡するスターク、しかし彼のその一瞬の迷いを片割れは察知し、そして言い放った。

《スターク・・・・・・・　アタシと替わってよ。》

彼が握る銃からその声は零れた。
気負うわけでも、焦るわけでもなくただ淡々と。
二つの思考、片方はそれを躊躇いしかしもう片方はそれを請う。
どうするべきか、どうしなくてはならないかは二人とも判っている、
手段として最も有効であると。
故に小さな片割れは言うのだ。
自分と替わってくれ、という決意の台詞を。

「・・・・・・・・・やれんのか？」

充分な間を置いてスタークが零したのはたったの一言だけだった。
否定する事も、拒否する事もスタークには出来た、しかし、それを
してしまうのはつい先程の涙を無碍にする行い。
護りたいという自分と同じ思いを抱いた片割れの決意、それを無碍
にする事は酷な事だ。
故に間は空き、充分な思考と選ばれた言葉を発するスターク。
その一言にそれ以上の多くの意味は込められ、リリネットへと向か
っていく。

《大丈夫。　今のアタシなら・・・・・・それにこれ以外にいい方
法・・・ないでしょ？》

スタークの言葉に答えたリリネットの声は、どこか落ち着いた印象
を与えるものだった。
活発で勝気な様子よりむしろ大人びた印象を与えるその雰囲気。
それは彼女もまた戦いに身を置くが故の変化なのか、その落ち着い

た様子は頼もしさすら感じられた。

「・・・・・わかった。　ただ、無理だけはすんなよ？いいな？」

《うん。　わかってる・・・・・・》

二人だけにしか通じない会話。
何をどうするという言葉を欠いたそれでも、二人は通じ合う。
多くを語る必要など最早無い、今の彼等には必要ない。
やる事は決まった、誰よりも今近くにいる二人のやる事はひとつに絞られたのだ。

スタークは右手に握っていた銃すらも銃嚢に納め、更には左手に握っていたボロボロの霊子の刀すらその結合を解き、霊子へと還す。
無手、丸腰の状態となったスターク。
ネロはその様子を絶望の現われとみたのか更なる高笑いを上げ、侮蔑の声を上げる。
しかし今のスターク達にそれは届かない。
ただ今、彼等がやる事はひとつだけであり、そのひとつは決して勝利を諦めるという事ではなかったのだから。

瞳を閉じるスターク。
身体は脱力し自然体に、しかし霊圧は衰える事無く吹き上がりまるで彼の身体を覆うようにして吹き上がり次第その姿を見えなくさせる。
群青の柱、ただ上を目指し貫くようなそれはスタークを完全に覆い隠し、一瞬強く光ったかと思うと爆発した
爆発に伴う霊子の乱気流、視界は遮られネロはスタークの位置を見

失った。
右から左から叩きつけられる霊子を伴い白く濁った風をしかしものともしないネロ。
彼にとって今や視界を失った事はなんら問題ではないのだ、何故ならどんな攻撃が来ようとも彼の磐石の鋼皮（守り）がある限り、彼が傷を負うことなどないのだから。

「いくよ・・・・・・スターク！」

《あぁ・・・　ぶちかませ、リリネット！》

そうしてニヤけた顔のままただ風が治まり行くのを待つネロ。
その彼の耳に、風に乗り何処からか声が聞こえた。
聞こえる声は当然先程まで相対していた敵の声であり、この塞がれた視界の中何かしてくるのは明白。
それを察知し、理解しながらもネロは何一つ行動を起さない。
する必要が無いから、防御などという行動すら最早彼には必要ない、”神”の外套は既に完成し誰も自分を傷つける事など叶わないのだからと。

傲慢、暴慢、不遜であり外道、省みず、慢心し、酔いしれる。
それだけの実力、それだけの性能を持っているからこそ出来る余裕、
ネロがいるのはそんな境地。

しかしそれは総じて”油断”である。

スタークの攻撃を浴び続け、硬度を増しに増したネロの鋼皮。
最早ただの虚閃では割る事すら困難な段階にまで達したそれは、スタークの攻撃を悉く弾く事だろう。
しかしネロは考えていない。
それはあくまで普通の虚閃であったらという限定的なものであり、
それだけしか攻撃手段が無いなどという馬鹿げた事などありはしないという事を。

「喰らいな！　『圧縮装弾（セロ・コンプレシオン）虚閃』！！」

視界を覆い尽くすような白く濁った霊子の風。
それに穴を穿つように放たれたのは一筋の虚閃だった。
一般的な虚閃よりも明らかに細いその虚閃、しかしその緑色の虚閃

は白い風を払い除けながら進み、まったく勢いを衰えさせる事ないまままるで暗い夜空に一筋の線が何処までも続くように浮かび上がっていた。

世界を二分するかのような緑色の細い線、それは二、三度の明滅の後、空に解け消える。
辺りを包んでいた白く濁った風は完全に霧散し、残されたのは巨大な黒い岩山ともう一つ。

靡くのは肩口で切りそろえられ、前に行くにつれて少しずつ長く伸びた黄緑色の髪。
絹糸のように細いその髪から見え隠れするのは、静かではあるが意志の強さを感じさせる非常に薄い紫の瞳。
左目には眼帯と照準気が合わさったような仮面の名残を、それがコメカミまで伸びそこから先の折れた角が生えていた。
スラリと伸びた手と足、身体は丸みを帯び女性的な印象を強くし、上半身を覆うのは皮製の黒いビキニ。
狼が刻印された大きいバックルのベルトと丈の短いホットパンツ、そして長くしなやかな足の腿までを覆うのはローヒールのサイハイブーツ。
そしてスタークが着ていたのと同じ白と灰色の毛皮のコート、しかし袖に腕を通し肩にかける程度で前は肌蹴たままだった。

総じて大人の女性、背は高くはないがそれでもそう思わせるだけの雰囲気を纏った女性が、そこには立っていた。
一丁の、彼女の身の丈以上の巨大な銃をその脇に携えて。

「ギャァァアアア！！！　痛ぇ！　痛ぇイテェ痛ぇぇ！！ふざけんな！　テメェ何者だ！！　オレ様の！オレ様の腹に・・・腹に

穴がぁぁぁあ！！　グギャァァァァ！！！」

巨大な銃を携えた女性、抱えた銃は拳銃というより猟銃、対物小銃近く、長く伸びた銃床には銀の狼の意匠、弾倉なく、全体を黒で固められたような頑強な印象と、そして引き金付近にあるのとは別にもう一つ、銃身の横から飛び出した銃把が備えられていた。

その女性の前方に鎮座していた黒く巨大な岩山が揺れ、悲鳴を上げる。

かろうじて人型を保っていた右手をかざし、腹部を押さえる岩山、ネロ。

その手にはドクドクと流れる赤い液体が、そして彼の胸に穿たれた孔とは違う”穴”が彼の腹には穿たれ、彼の身体を挟んだ向こう側の景色を覗かせていた。

放たれた細く、何処までも伸びるかのような一筋の虚閃。

白い風を穿ち、まるで空に鎮座する月すら穿ち割らんとしたかのようなその一筋の緑の流星は、進む先、月との間にあった巨大な岩山すら貫通していたのだ。

「クソが、クソガクソガァァ！！　何者だテメェ！どっから現われた！　あの新入りを何処に隠した！！それ以上に判ってんのか！テメェが傷つけたのは”神”だぞ！この虚圏の頂点であるオレ様という名の”神”なんだぞ！！あぁん？　何とか言えや！　塵ィィィィィ！！！」

「・・・・・うっさいんだよ、デブ。」

痛み、それも特大の痛み。
それを味わいながらネロは唾を撒き散らし叫んだ。
本来ありえないはずの出来事、彼の今の姿、解放をして痛みを味わうなどということをネロは今まで経験した事がなかった。
その痛みと、無いより目の前にいる見た事もない女性に彼は混乱を喫していた。
いたはずのスタークは消え、現われたのは女。
逃がしたか、或いは別なのか、そんな思考とそれ以上にそんな事よりこの痛みを与えた女が何者なのか、ネロには見等も付かなかった。
そうしてただ大声を張り上げるネロに対し、黄緑色の髪の女性はただ一言、簡潔に拒絶の色を滲ませた一言を叩きつける。

「アタシが誰かって？　まぁアンタには一生判りそうもないから教えといてあげるよ・・・・・・アタシの名前はリリネット。　リリネット・ジンジャーバック。アンタがさっきまで戦ってたコヨーテ・スタークの片割れ・・・・・・アンタが付属品扱いした女だよ。」

「何・・・だと・・・・・・・・！？」

痛みに顔を歪ませていたネロは、驚きに顔を歪ませる事となる。
リリネット・ジンジャーバック。
その名前に聞き覚えは無く、どんな顔かだったかもネロには定かではない。

だがしかし、自分が付属品扱いし、微々たる能力上昇の為に吸収された小さな破面は彼の記憶の片隅に存在していた。
そして今、目の前にいる女性は彼にその小さな破面、付属品だと言い放ったその破面こそ自分だと告げたのだ。

「馬鹿な！　テメェ・・・付属品は餓鬼だったはずだ！それにあの新入りは何処に逃げた！」

《・・・逃げちゃいねぇよ・・・・・・》

理解できない、そんな感情が存分に乗ったネロの言葉。
今目の前にいるのはどう見ても子供ではなく大人、しかし彼が付属品と罵ったのは子供の破面。
さらにはリリネットが出てきたからといって、だからどうしたというのだとネロは言うのだ、先程まで戦っていた、いや、殺そうとしていた新入り、スタークという名の破面は一体何処に消えたというのかと叫ぶネロ。
そのネロの叫びに答えたのは低い男性の声、それは先程までネロと対峙していたスタークの声であり、しかしその声は今、リリネットが抱える巨大な銃から響くのだ。

「どういう事だ！あぁん！？」

「なんだ、まだ判んないの？　アタシとスタークは元々一人、二人で一人の破面（アランカル）。」

《そして俺達はどっちが本体でも、どっちが付属品でもない・・・・・・》

「アタシ達は互いに支えあう、片方が表になれば片方が裏になるコインと同じ事・・・・・・アタシが表ならスタークが裏に。」

《俺が表ならリリネットが裏、ってな・・・・・・どっちも表でどっちも裏、片方が”人”なら片方はそれを支えるための”銃”になるのさ・・・・・・》

二人で一人の破面、コヨーテ・スターク＝リリネット・ジンジャーバックであり、リリネット・ジンジャーバック＝コヨーテ・スターク。

それが彼等の本当の名前、そしてスタークが表の男性の姿も、リリネットが表の女性の姿も、そのどちらもが彼等の本当の姿なのだ。

「ま、なんでか知らないけどアタシが表になると大人になっちゃうんだけどね。気に入ってるから別にいいんだけど。」

《見た目は・・・な。　中身はガキのまんまだろうが。》

「う、うっさい！スタークは黙って次の装弾圧縮しとけばいいの！」

《ヘイヘイ・・・・・・》

その空気は戦場にはそぐわないながらも、実に彼等らしいものだっ

た。
自分が抱える銃に噛み付かんばかりの勢いのリリネットと、銃であるが故に判らないがおそらくはそっぽを向いたまま答えているであろうスターク。
大人の女性の姿ではあるが、スタークの言う通りその中身は小さな子供のリリネットと同じなのだろう。
奇異な光景にも見えるそれはしかし彼等の日常でもあり、戦場に不釣合いではあるが彼らがそれを見せるという事は逆に周りが見えているという事。
緊迫すべき場面でそれが見せられるということは、それをして尚、起こりえる事態に対応できるからなのだろう。

だから避わせる、迫り来る緋色の閃光も。

「・・・・随分余裕の無い事するんだね。　今アタシ達話してたんだけど？」

「うるせぇんだよ塵ィ！！　テメェ等が誰だとか、裏だ表だなんてぇのはもうどうでもいい！この痛みぃ・・・・・・　許せるはずがねぇ！！テメェの身体も穴あきにしねぇと俺の気が治まらねぇんだよ！塵ぃぃぃぃ！！！」

ネロが自らの口から放った虚閃、それをリリネットはヒラリと避わす。
身の丈以上の巨銃、いっそ大砲といったほうが適切かもしれないそれを抱えながらも、その素早さはスタークに引けをとらなかった。
だがネロはそんな事はお構いなし、痛みと怒りに燃えながら次々と

虚閃を放ち続ける。
今だかつて味わった事のない屈辱と痛み、腹部に穿たれた穴はその象徴、自動的に黒曜鋼皮が盛上り、棘が絡み合うようにして今やその穴は見えないがそれはあくまで表面的なもの、肉体の喪失、穿たれた腹部の再生までは如何に彼でも易々とは行えない。
鋼皮とはあくまで皮膚の延長であり肉体の内と外を隔てる境界線、外皮なのだ。
外向きにいくら強く、再生を繰り返し硬度を増すとしてもそれは外側への話、解放し肉体の強度を増しているといっても”再生”は行えない。

それが破面という存在のある種の弱点。
大虚に備わる”超速再生”と呼ばれる霊圧を使用した肉体の瞬間再生能力を、彼等破面は失っている。
それは大虚から破面に進化する際に失われ、故に彼らは腕を切り落とされれば隻腕に、目を潰されれば盲目になってしまう。
力を得、死神、ひいては人という外殻に近付いたがために失った”再生能力”。
それ故に、如何にネロが傷跡を塞ごうともそれは何の解決にもならないのだ。

受けた痛み、失った肉体は戻らない。
ならばその痛みも何もかも、同じように返してやらねば、いや、それ以上、倍返し出なければ彼の気は治まらない。
故に撃つ。
ネロはその緋色の閃光を発し続けるのだ。

《・・・・・いけるぞ、リリネット》

そんなネロを他所に二人は淡々と事態を進める。
巨銃、スタークが発したその言葉がリリネットに次の行動を促していた。

「オッケー、スターク！」

届いた声にリリネットはネロの虚閃の連射を避けながら叫ぶように応え、抱えたスターク(銃)を構えた。
巨大な銃、その銃床の付根辺りを脇に挟み込むようにして構え片手で引き金の付いた銃把を、もう片方の手で銃身の横から飛び出した銃把を握り構えるリリネット。
荒れ狂うかのようなネロの虚閃の中、足を止めしっかりと宙に立つ様に空を踏みしめるリリネット。
戦いの最中足を止めることは褒められたものではないが、必殺の一撃にはどうしようもなくリスクが伴う。
これはそういった類の一撃、足を止めるリスクと天秤にかけたとき勝利がその重さで勝るという一撃。

そうして足を止めたリリネット、しかし運悪く彼女の正面から緋色の虚閃が迫る。
その虚閃は敵を容赦なく飲み込む禍波、怒りを糧にその威力を増し、歯止め無く暴走するような命奪う閃光。
だがリリネットは動かない。
銃をしっかりと構えたまま、微動だにする様子すら見せないのだ。
必殺の一撃とは翻せば必滅の一撃、それは相手を殺すのと同時に自らも死のリスク、必滅を背負うという一撃。
それがまさに今、そのリスクを避けることは即ち勝利を自ら手放す

のと同義、そして自ら手放した勝利は自然相手の手中に収まる。
それが勝負、死合いという極限では尚更に。

故に動けない、いや、動かない。

真正面から迫る緋色の波は迫る毎その威圧感をまして行く。
銃を構えたままのリリネット、しかしその瞳に恐れはなく、ただ必殺の意だけが浮かび、揺れる事はなかった。

「許せないのはコッチも同じ。　アタシの大切なものを傷つけようとするなら容赦なんかしない！アタシも・・・護るんだ！！」

揺れない瞳は揺れない決意の表れか、迫る緋色を前にしてリリネットは叫ぶ。
護られ続けた自分、護りたくとも護れなかった自分、しかし今、この瞬間においては護れる自分。
奪わせない、傷つけさせない、そんな強い決意が今彼女を動かす全て。

そして彼女は、その引き金を引き絞った・・・・・・

何も無い
何も残らない
唯一つを失えば
何一つとして残らない
狂信者よ
炎海に沈め

BLEACH El fuego no se apaga. 53（後書き）

やっちまいました・・・・・・

いってしまえば要するに魔改造な訳ですよ・・・・・・

しかし！　自分に一切の後悔は無い！！

アリだとすら思っています！！（開き直りｗ

実際、二人で一人な訳だから、どっちが本体って訳でもないと思うんですよ。

ジャンプ王道的にも悪くないと思うんですが・・・・・・どうでしょう？

爆弾として楽しんでいただけたでしょうか？

そして追記、というか補足情報を一つ。

リリネットの銃の形がおそらく伝わっていないと思います。

書いていて自分でも表現し切れていませんでしたから（ダメだね

スタークの銃のデザインをそのままガナーザクウォーリアにした感じというのが今のところ一番近い自分のイメージかと思います。

まだまだ表現力が足らんなぁ・・・・・・

彼の人生は順調だった。

生前という遠い昔の事まではわからないが、死後という今を見る限りおそらくは順調だった事だろう。

今という瞬間を見ただけでそう思ってしまえるほど、彼の人生は順調だった。

他より突出した霊圧、元々高かった知能、そして圧倒的な能力。

”支配”という絶対的なそれをもって彼は死後、第二の人生を、虚（ホロウ）としての人生を謳歌していた。

はじめは彼もその他の虚と同様に人間を襲いその魂を喰らう、という本能の部類の中で生きていた。

しかし、いつしか彼は人間を襲って喰らう事よりも、人間をその能力で支配し、思うように操る事に快感を見出していく。

自らの意思を残したままの人間はただ操られるまま、その自らの肉体に起こったありえない出来事に困惑し恐怖する。

だが人間の身体は持ち主である本人の意思など無視して動いてしまう。

意思を離れ動く身体、伸ばされる両腕、徐々に強く握られる両手、
そしてその両手が握るのは自由を奪われ支配された人間の愛する者
の首。
身に起こった不可解な出来事よりも、人間は意志を離れた自分の身
体が行う凶行に悲鳴を上げる。
やめろ、とまれと叫ぶ口とは裏腹に、人間の両手はその人間が愛し
てやまない者の命を奪おうと強く握られていく。
愛する者の困惑と疑問の眼差しを受けながら、人間は恐怖と絶望の
淵から底へと突き落とされた様に苦しみの声を上げながらしかし、
その手を緩める事は出来ない。

いつしか愛する者の呼吸は止まり、それでも締め上げられた首はゴ
キリという音を立てて折れ曲がる。
両の手が離されればそれはまるで手折られた花のように地へ落ち、
路傍で踏みつけられた草木と変わらない姿を人間に晒すのだ。
絶望、怨嗟、恐怖と憎しみ、向ける先の無いそれが人間の中を支配
し慟哭の叫びをあげさせる。

それを彼は後ろから眺め、笑うのだ。

耳にと届くのは心地よい悲しみの叫び、眼に映るのは血の涙を流し膝を折るちっぽけな人間。
何の理由も無く、何の前触れも無く自らの愛する者を自らが殺すという想像もしなかった出来事。
人間の”心”というものが壊れるには充分な出来事。
その壊れゆく様を彼は笑い、見下し、観察する。

彼の意思が人間に手に奪わせた、人間の愛する者の魂を喰らいながら。

これこそが支配だと言わんばかりに、一方的に命じ実行させる支配というものだと言わんばかりに。
支配し、その快感と喜劇でしかない涙する人間の姿を眺め、それに浸る愉悦の瞬間こそ彼の至福のとき。
自らの圧倒的な支配に酔うことこそ彼の生きがいだった。

だが、そうして人間を使って自らの愉悦を満たしていた彼に予期せぬ変化が訪れる。
それは”渇き”だった。
どうしようもない渇き、喉ではなく、腹でもなく、しかし全身を襲う猛烈な渇き、枯渇感とでもいうべき猛烈なそれが彼を苦しめていく。
渇き、餓える彼。
いくら人間を殺し喰らい、ときたま彼を殺しに来る死神を殺し喰らってもその渇きは一向に癒える事は無かった。

猛烈な渇きは比を追う毎強くなり発狂寸前にまで追い込まれた彼。
そんな彼の視界の端に偶然にも一体の虚が捉えられる。

そこから終わりまでは速かった、気が付けば彼は虚の血肉を喰らっていた。
必死に、ただただ必死になって肉を噛み千切り血を啜る。
訪れたのはこの上ない充足感、自分が虚を殺し喰らっているという事をその充足感は彼に理解させたがそれでも彼が止まる事は無く、一体の名もない虚はその姿を消してしまう。
それはまるで砂漠に落とされた一滴の水、瞬く間に吸収されるそれは彼を襲う”渇き”に対抗する唯一の手段がそれであると彼に明示していた。

同属、虚を殺し、喰らえという事を。

理解してからの行動というものは早く、彼は手当たり次第に同属を殺し喰らっていく。
餓え以上の渇きを消し去るためにと一体でも多く虚を殺し、喰らう彼。
しかしそれでも”渇き”の根本は消え去る事無く彼の中に在り続け次第虚を喰らう事でも彼の渇きは癒えなくなってしまう。

順調だった彼の人生、それに立ち込めた暗雲はしかし彼に再びの転機を齎す。
”渇き”という不測の事態、それを抱えるのは彼だけではなかったのだ。
同じ”渇き”を抱えた虚、どういう理屈か、あるいは奥底に眠った化生としての本能なのか、同じ苦しみを抱えた彼らは何故か一箇所

に集まっていく。
そして集まった先ではじまるのは螺旋の晩餐。
互いに殺し合い、喰らい合い、血と肉とに別れ、或いは腹におさまる事で同化しながら彼らは次第に”ひとつ”になっていく。

そして最後に残るのは一体の巨大な化物。
頭から黒い外套を被り、白い仮面以外何も彩るものが無いかのような巨大な虚、大虚（メノスグランデ）。
それも大虚の中で最下層である最下級大虚（ギリアン）の誕生である。

しかしその最下級大虚は画一的な仮面ではなく、大量の眼をもった仮面をつけていた。
それは虚が集まって出来た大虚にあって”個”という自我を失わなかった証、百を超える虚の集合の中”一”を保ち続けた者の証。
彼という自我、彼という個、彼の他者を支配し自らが上であるという強烈なまでの自尊心が、彼という”一”を存在させ続けた証だった。

”渇き”という逆境から彼は更なる力を持って生還した。
そして得た力は強大、彼は再び自らの力に酔いしれる。
力に酔う、というのは総じて愚かな結末を招く事となるが、その時の彼はどうやらその例から漏れる存在だった様子。
彼の”支配”は完全無欠、愚鈍な最下級大虚など恐れるに足らず、さらにその上位存在である中級大虚（アジューカス）ですら彼の敵ではなかった。
彼が誇る”眼”の威力、その一点を持って彼は逆らうものを悉く屈服させそれを糧として生きていく。
そうして糧を得つづけ、彼がその身体を覆い隠す黒い外套を脱ぐ事にそう時間はかからなかった。

黒から白へ、その色を変えた彼の身体。
黒い外套は強靭な白い外皮へと変わり、身体は小さく縮んでも霊圧は反比例するようにより強大となっていく。
仮面のみに留まっていた”眼”は身体全体にいきわたり、彼の視線そして人生にも死角は無いものとなった。
彼の敵は彼を害する前に彼によって支配され、その時の気分如何で終わりが決まる。
首をゆっくりと捻じ切るか、身体中の間接という間接を一つずつ外していくか、自分の内蔵を全て自分の手で引き出させるか、総じて悪趣味な死に様、殺し方を彼は嘲笑の下実行する。
それこそが”支配”、何人も寄せ付けない支配の姿である事を確認し、そしてそれに酔いながら。
支配とは絶対、絶対とは唯一無二、その支配力を有する自身こそは誰よりも優れ、その支配を受ける事は他者にとって誉れですらある。
そんな独りよがりで狂った持論、しかし彼にとっての真理、支配とは絶対、そしてそれを受ける事は至上の喜びですらあると。

持論、真理、自らが定めた理（ことわり）の至高性。
疑う余地すらなく存在し続ける”支配”という力。

全てを平伏させるこの世で最も尊い力の名。

そして彼が崇拝する”支配”は、遂に彼の前に具現した。

「私に仕える気はあるかい？」

彼の能力をおそらくその男は知っていた。
それでも尚、男は彼の正面に立ち、彼に向かってそんな台詞を言い放ったのだ。
彼の視界に入る、それは即ち自らの自由を放棄したという事と同義なのだ、だが男にそんな気配は微塵も無い。
あるのはただ圧倒的な存在感、ただ立っているだけの男はしかしその気配だけで他を圧倒する。
薄く笑った顔も、黒縁の眼鏡の奥に見える暗すぎる瞳も、そして発する常軌を逸した霊圧も、全てその男にとってはごく自然なことでしかし他者にとっては尋常ならざるもの。

彼は、支配の眼を持った彼はそんないきなり現われ、自分に仕える気はあるかと彼に問う男を前にただ呆然と立ち尽くしていた。
見た目は人間、しかし霊圧から見て死神であろうその男。
死神が虚である自分を殺そうとするのではなく生かし、尚且つ自分の配下に加えようとする不思議。

異常である、そして何より傲慢であるその言葉。
”支配”を有する彼を支配しようという傲慢、それも死神という彼にとっては取るに足らない存在が、だ。
彼の能力からすればその男が立っている位置はまさしく必殺の間合いの内側、もとより視界に入ってきた時点で彼の勝利は、支配は確実に成ったと言っていいのだ。
傲慢なる死神の言、不遜ともいえるその態度、支配を支配しようという理に逆らうかの如き振る舞い。

しかし、それを前にして彼は能力を持ってその死神の男を支配する事はなかった。
何故ならその男が発する気配、纏う気、視線から、表情の機微から、頭の先から指先、そして足の先に至るまでから、それら全てを合わせその男という”存在”が発するものは、彼が信じ、崇拝してやまない”支配”そのものだったからだ。

何より彼を魅了したのはそれがその男の能力ではなく、存在であったということ。
能力という云わば技能の一つとして他者を支配するのではなく、その男はただそこに立っているというだけで彼以外の存在を支配している。
それは人という形に収まる筈がないほどの力、超自然的ともいえる存在感。
古来英雄、革命家と呼ばれる人間達が悉く有していたそれ、他を惹きつけてやまない能力ではない才覚の部類に当たるもの。
”王”の資質とでも呼ぶべきそれを存分に有し、そしてそれを意識して振るう事ができるこの死神の男はただその場に立ち、ただ彼を

見つめるだけ。

しかし彼には言葉が聞こえる。
降り注ぐように、闇空しかない虚圏にあってそれは彼に光を指したかのように注がれていた。
そこにあることが当然、そうあるべきが当然だとその男の気配は、纏う気は彼に言うのだ。

私の前に屈せ、と。

”王”の言葉。
彼にとってそれは天啓だった。
支配という力を他の誰よりも理解し、信じ、崇拝する彼だからこそその言葉は天啓たりえた。
彼は自身の能力とその男との差を理解した。
自分の支配はただ押さえつけ、無理矢理に権利を剥奪するものと。
しかし、しかし目の前にいるその男の発する支配は彼から何一つ奪う事無く、そうあることが理だと告げる。

彼はその膝を折る事に何の疑問も感じなかった。
”格”が違う。
支配の格、存在の格、立っている場所、見ている景色、その全てが違いすぎる。
余人が求めて手に入るものでなく、しかしそれを当然と、ごく自然

な事だと振るう男。
彼が求めた彼自身の理想像はその男であり、しかし今はそれを口にすることすら憚られるほど大それた事だと彼は認識していた。

届くはずが無いと、この男、いや、この方に届く者など居はしないと。
支配の愉悦、しかしそれ以上にこの絶対的支配者に仕えられるという幸運。
支配されるという事に何の違和感も感じないのは、彼が支配という力を知る故に。

絶対の支配とは、至高の喜びであるが故に。

死神の男、藍染惣右介に屈した彼はそこで更なる力を得る。

破面化。

虚、大虚、それらを象徴する仮面。
それを脱ぎ捨てる事で更なる力を得る方法。
藍染惣右介はその方法を確立し、自らの軍勢を創り上げていた。

そして彼もまた破面化を経て力はより強大となっていく。
人の身体、脆く儚く、彼にとって愉悦の為に心と共に壊しつくしたその入れ物にその身をやつした彼。
しかし彼に後悔はない。
何故ならそれは彼の”王”、藍染によって為されたものであったから。
王の言葉、王の行い、それらは疑う余地など彼にとって皆無、故に

後悔などは存在しないのだ。

破面という桁外れの力を有する化生達。
その中にあって彼は頭角を現し、上へ上へと昇っていく。
それはただただ王の為に、王に仇なす者をより多く排するためには自らの力を高めるより他無いと。
そう、全ては王の為、支配の具現たる王の為、その支配を更に揺るぎ無いものにするのが自身の勤め、その為に命奪う事こそ自身の宿命と。
なにも王である藍染がそれを望んだわけでも、彼に命じたわけでもない。
しかし彼はそれが天意であると、勅命であると信じて疑わないのだ。

勅命、天意、天啓、そして彼に下賜されたのは『7（セプティマ）』の号。
下賜された数字を身体に刻み彼は自らを天意の、王意の代行者、御使いとして歩みだした。

これが彼の、第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルーが歩んだ軌跡。
何の問題もなく、それどころか余人が羨むほど軽やかに階段を駆け上がったかのような彼の人生。
順風満帆、不利に出会おうともその悉くを乗り越え、更なる力へと換えてきた彼の人生はまさしく順調だったといえるだろう。

そう、順調だった・・・と。

王の御使い、一桁の数字を賜りし者達の名を十刃（エスパーダ）。
しかし彼らはゾマリとは違い、それぞれの思惑や突きつけられた支配に対し否応無く従っている部分があった。
中には藍染に対し、崇拝とまでは行かずとも敬意を払うものもあったがそれもまたゾマリとは違ったもの。
崇め奉る事こそ自分達の”王”に対し自分達が許される唯一の振る舞いと理解しているゾマリは、只の敬意ですら軽く感じられた。

だがそれは詮無き事。
如何にゾマリが自らの理想と信仰を説いたとて、十刃という個性の塊のような集団がそれに同調するわけも無いのだ。
故にゾマリは唯一人、王の御使いたる使命を遂行せんと動く。
王の歩む道、ただ真っ直ぐに些かも曲る事無く一直線に敷かれるべき道、その行く先、進む先の万難を排する事こそ自らの使命として。
だが彼が奉る”王”に本来、万難等というものは存在しない。
それがあると思う事すら不敬に当たる、そう思わせるほど”王”の力は底知れず、そして強大だった。
だがそれでも、王からすれば何の障害にすらならない存在であっても王が進む道にあることがゾマリには許しがたかった。
故に排する。
逆らう者、否を唱える者、それらを悉く排しゾマリは王の進む道を整える。

万難にはなりえない存在達、しかし王を煩わせる事すらあってはならないと。
進む道は清廉潔白に、一転の汚れなく敷かれた絨毯、或いは万里の彼方まで続く小石一つ無い道、覇道とも言うべき道。
自らは露払いとして、そして尖兵として蹂躙するのみと。

しかし、そうして覇道の露払いを行うゾマリの前に”石”が現れた。
これから進むであろう道の真ん中に忽然と現われた小さな石、ただそこを歩くのみならば気にも留めないであろう小さな石。
しかしゾマリはそれに気がつき、どうしようもなくその石を嫌悪した。
跨げば、或いは無視すれば済む筈のそれを彼はどうしようもなく排したくなったのだ。
只の小石、それが道の真ん中にまるで鎮座しているかのようにあるという不快感、そうあることが当然、誰も自分を退かせはしないというゾマリからすればなんの根拠も無い自負がその石には溢れていた。
故にゾマリはその石を踏み潰すことに、いや、踏み潰すのではなく存在を消し去る事を決断した。
彼にとってあまりに不遜なその石を、あまりに不快なその石を。

力の差は歴然のはずだった。
ゾマリは今まで挫折というものを知らず、歩む傍から道が開けるように順調に、そして順当に力を付けて来た。
それゆえの自負、自分は確実に強いという自負があり、故にその自

分が下位の者に後れをとるなどということは想像すら出来ない夢幻の域。
その自負に間違いは無い、現実彼は強くその能力は確かに他を圧倒し彼に勝利を呼び込むだろう。

だがしかし、彼は溺れているのだ。
その強力無比な能力に、”支配”を奪うという誰も逆らう事が出来ないであろう自身の能力がある故に。
行き過ぎた自負、即ちそれは溺れ酔いしれる陶酔であり傲慢でしかない。
だがそれに彼は気付かない。
何故なら酔いしれているから、溺れ、甘美なる酒の海に身を沈めるかのように酔いしれているから。
自らの傲慢とも取れる自負と高すぎる自尊心、忠誠という名を借りた身勝手に。

そして気が付かないからこそ他者のそれが眼に栄える。
自分以外の他者が自分と同じように酔いしれているのが無意識に眼に映るのだ。
それが彼には気に入らない、何にも増して。
陶酔は、甘美なる美酒は自分にのみ許されるべきだという捻れた思考が彼を突き動かす。
その捻れた思考の先に居たのが件の小石、フェルナンド・アルディエンデという名の彼にとっての小さな小石だった。

粛清、断罪、王命、そのどれもが借り物の理由。
そしてその借り物の理由で覆い隠されていたのはゾマリ・ルルーの醜い怒り。
許せない、ただ暴として力を振るうう数字も持たない破面風情が自

分に出来ない事を平然とやってのけた事が。
”王”に対する不遜、自分が膝を屈し、それが当然の理とまで理解した相手にまるで対等に振舞う下郎。
それはフェルナンドという破面が支配されていないという証明、自分が支配された相手に支配されなかった事の証明。
そして支配を跳ね除けたという事は自分よりあの愚かしい破面が”上”だという事の証明となってしまうと。

許せない、何にも増して。

鬱屈した思考、達観と静寂の表層からは伺えない”不”。
身に渦巻くそれをしかし自覚せず、王命、断罪、御使いの使命を声高に叫ぶゾマリ。

そして開かれた戦端は彼が望んだものとは違いすぎていた。

勝っていたはずだった。
体躯も、霊圧も、速さも、剣技も何もかもが。
事実彼は戦いを優位に進め、圧していたと言って良かっただろう。
しかし戦いは必ず相手に、フェルナンドに傾いていく。

只の一撃、打ち抜かれた拳で彼の”最速”は奪われた。
許容しきれない事態だった。
自分が追い込んだと思った相手、しかしその実追い込まれ誘い込まれていたのは自分だったという現実。

認められない現実がそこにはあり、怒りのままに彼は真の姿を解放する。

真の姿、支配の眼を有する白の僧正。

見開かれた眼はゾマリに告げる、奪え、奪え、屈服させろと。

その言葉にゾマリは従い、フェルナンドの腕を奪う事で屈辱を与えんとした。

結果は成功、フェルナンドの左腕は破壊されとても動かせるはずが無い状態に追い込まれる。

ゾマリはその姿に、フェルナンドのその姿に歓喜していた。

当然だ、やはり自分は強く、支配は絶対であるとその時フェルナンドの姿は彼に物語っていたから。

支配とは絶対、そしてその支配を有する自分が屈した藍染惣右介という”王”の支配はさらに究極。

その支配を跳ね除けることなど出来はしない、自分が屈した支配を跳ね除ける事など不可能、故に自分方が”上”であると。

笑う自身と俯く敵、その構図こそ彼が最も望む図式。

見下す者と見下される者の図式、勝者と敗者の図式なのだ。

だがそれをして尚、戦いはフェルナンドへと傾いていった。

左腕、ゾマリが破壊したと思っていたそれをフェルナンドは攻撃に使い、尚且つ彼の右腕を打撃に絡めて折ったのだ。

ありえない戦法、少なくともゾマリには一生思いつかない方法、壊れた左腕を使うという常軌を逸したフェルナンドの攻撃によってゾマリはまたしても傷を負ってしまう。

混乱と困惑の中ゾマリはそのありえない出来事を必死で否定してい

た。
自分が傷を負う、それも開放した姿で、だ。
ありえない、解放前と解放後では傷を負うという意味合いの重さが違いすぎると。
ありえない、ありえない、ありえない、内心でその事実を否定するゾマリ、しかし彼の打ち抜かれた顎と折れた右腕はその痛みが現実である事を必死で彼に伝えている。

「・・・・・・温いんだよ、テメェは・・・・・・」

そんなゾマリに叩きつけられたのはそんな痛烈な言葉だった。
温いと、自らの快楽の為に相手への攻撃を中途半端に止めたお前は”温い”と路傍の石、フェルナンドは言い放った。
ふざけた物言い、そして何処までも自分を見下したかのような物言い。
自分に向かってそんな物言いは許されない、自分は支配者だと、”王”である藍染惣右介に支配という能力を持って最も近い存在だと。
お前は”下”だ、何処までも、地の底より尚暗く深い深淵に立ち、自身は”点”に最も近い存在だと。
我慢の限界。
最早容赦など無い、見開いた五十の眼、その全てを持って貴様を支配し、貴様自身の力で持って貴様という存在を引き千切るとゾマリは決定する。
容赦など無く、ただ全力で。
そしてこの時が、初めてゾマリ・ルルーが何の驕りも侮りも無くフェルナンド・アルディエンデという存在を見た瞬間。
愚かなる獣と御使いではなく、ただ”敵”として認識した瞬間。

だがそれは、些か遅きに失した。

彼の眼に映ったのは炎の柱だった。

紅く、ただ紅く燃え盛るその柱は何処か神々しくさえあり、しかしゾマリはそれを全力で否定していた。

そう、その燃え盛る炎の柱は彼の”敵”なのだ。
フェルナンド・アルディエンデの刀剣解放、帰刃（レスレクシオン）。
燃え盛るのは長く伸びた金の髪と帯、そして袴。
鍛え上げられた上半身は顕となり、その力強さはそれだけで他を圧倒する。
瞳は爛々と輝きただ戦いに胸躍らせるかのように、ニィと持ち上げられた口角、嗤っている、獰猛に歯を覗かせて。

霊圧も何もかもが紅く、そしてその紅は全てを燃やし尽くすように。
離れた位置でも肌を焼くような熱風を生じさせ、しかしそんなものは派生した余波に過ぎずなんの攻撃ですらないのだろう。
視線の先で拳を叩き合わせ、叫ぶフェルナンドを睨むゾマリ。
両の拳を叩き合わせるという事は、解放による超回復によって彼の左腕は回復したという事なのだろう。
もともと壊れた左腕でも何の躊躇いも無く使う手合、治った治っていないなどというのは瑣末な問題か。
そう瑣末、相手が回復したかどうかなどという事は瑣末な事だ。
ゾマリがするべきことはただ一つ、敵を屠る事一つ。
その磨き上げた究極の一をもって、支配という名の絶対をもって殺す事のみ。

そしてゾマリの身体中の眼は暗く光り、時は”今”へと追いついた。

「解放したからどうしたというのです！！そんなもの私の前では無意味！　私の『愛（アモール）』受けなさい！！」

叫びと共に放たれるのは愛という名の烙印。
支配者の刻印であり押し付けの愛。
ゾマリ・ルルーの身体に無数存在する”眼”、その数五十あまりのほぼ半数から放たれる暗い光は叫び声と共にどれ一つ他所を向く事無く、中空に立つフェルナンドに向かい疾走し、そして直撃した。

「ハァ、ハァ、はぁ、はっ・・・はは、ははは・・・・・・ふはハははははははは！！！無意味！　解放すら私の”愛”の前では無意味！やはり支配とは絶対にして孤高！　お前のようなものが私に勝てるはずが、私の上の筈があるものか！そして最早私に油断は

ない！　即刻その五体、引き千切ってくれる！！」

命中したのは絶対の支配。
相手の支配権を奪うという誰も抗えない力の烙印。
それをしてゾマリは己が勝利を叫んだ。
当然だろう、最早敵に逆転の目などなく、後は自分が敵の身体を敵の力で引き裂き、千切れば事は終わるのだから。
完全勝利、油断らしい油断をした覚えはゾマリには無いが受けた傷と痛み、しかしそれでも勝利に変わりはない。
故に叫ぶ、故に笑う、その勝利を。
束の間の勝利を。

「随分と愉しそうじゃねぇかよ。　えぇ？　十刃サンよぉ・・・・・・」

その声は彼の視線の先から、身体中、それこそ隙間無く頭の先から

足の先までを刻印に埋められた男から。
今や炎の化身となったフェルナンド・アルディエンデから放たれていた。

「馬鹿・・・な・・・・・・」

ゾマリから零れた驚愕は今の彼唯一の感情。
ただ刻印を受けただけではない、フェルナンドはその頭にも確実に刻印を受けているのだ。
それはゾマリからすれば完全勝利の場所。
ゾマリの能力『愛』は刻印を刻んだ部位の支配権を剥奪し、己がものとする能力。
だがそれにはひとつ例外がある。
それは”頭部”、意思の集合たる脳があるこの場所に刻印を穿つ事で彼は身体全体を支配できるのだ。

「ありえない・・・・・・　ありえない、ありえないありえないぃ！！貴様何故意識がある！　何故そうも平然としている！何故私の支配が効いていない！！」

そう、勝利の光景を眼にしたあまりゾマリは失念していた。
自らの愛、自らの支配がフェルナンドに有効となっているかを確かめる事を。
そして顕現した不可解はゾマリからある意味で完全に余裕を奪い去っていた。
そうなのだ、フェルナンドの意識があることでわかるようにゾマリの支配は彼に効いていない。
身体に刻印を穿たれたというのに、無数の刻印を刻まれたというの

に、だ。

「コタエロォォォ！！　フェルナンド・アルディエンデェェェェエエ！！」

怨嗟がそのまま物質化してしまいそうなほど濃い叫び。
支配という彼の絶対を崩されそうになったゾマリはただ恨みを込め叫んだ。

「うるせぇなぁ・・・・・　簡単な事じゃねぇか。テメェの攻撃は俺には届いてねぇんだよ。」

ごく自然に、首筋を伸ばし軽く筋を伸ばすように傾げながらフェルナンドは応えた。
届いていない、ゾマリの問にそう答えたフェルナンド。
的を射ているようでそうでないような答え、しかしその答えは次の瞬間白日のものとなった。

何処がはじめかはおそらく誰も判らないだろう。
ゾマリとてそれは判らず、それよりも目の前で起こった信じられない光景にただ驚きを隠せずに居たのだ。
黒い点に八枚の葉を放射状にあしらった様なゾマリの刻印、フェルナンドの身体に刻まれているであろうその刻印がどれともなしに燃え上がった。
端から燃え上がるようにその姿を消していく刻印達、フェルナンドはごく自然に、何か特別な動作をするでもなくただ立っているだけ。

それでも刻印は燃え上がり続け、そしてその姿を完全に消すのにさほど時間は要さなかった。

「そんな・・・馬鹿、な・・・・・・」

愕然とした呟きは何処までも彼の内面を表していた。
消える。
自分の刻印が、力の刻印が、支配の刻印が。
それも消え去ったのではなく消し去られたのだ、たった一体の破面によって。
どのような原理原則を用いたのかは判らない、しかし事実として彼の眼に映るのはただ轟々と燃え盛る炎髪の男。

ギリと奥歯を噛締め砕いてしまいそうな音が鳴る。
ゾマリ・ルルーにとって何よりもありえない事態、そしてありえてはならない事態。
それは”支配の敗北”に他ならない。
『愛』という名の支配、それを今、彼は目の前で覆されたのだ。
支配を尊び崇拝する彼、そんな彼がその光景を許せるはずもなく。

「ウォォォオオオォォオオォォオオ!!　受けろ!受けろ受けろ受けろ受けろ受けろ受けろウケロォォォォ!!私の『愛(支配)』をぉぉぉおおぉお!!!」

ゾマリの身体に残る全ての目が暗く光り力を発する。
支配の力、何者も抗えないはずの強大で、不可侵で、そして圧倒的で絶対の力。
冷静な姿などそこには無く、額に汗をながし目を見開き、口を大きく開けて叫びを上げるゾマリ。
達観の僧の姿はそこには無く、ただただ認められないものを認めたくないという感情だけを浮かべる。

「それで？　気は済んだかよ。　えぇ？　」

それでも、ただ認めたくないという感情だけの支配は届く事は無かった。
ゾマリの狂気にも似た叫びと共に放た『愛』、しかしフェルナンドは平然と佇む。
それもその筈だ、何故ならゾマリの刻印は今度はフェルナンドの身体に到達する前、瞬時に燃え尽きてしまったのだから。

最早ゾマリは呆然と、ただ呆然と立ち尽くすのみ。
支配は今崩れ去った。

たった一体の破面に、その全ては瓦解させられたのだ。

「何故だ・・・・　どうして・・・・・・どうして支配できない・・・・・・」

理解不能の現象、瞳は戸惑いに揺れ、同じく震える両の掌を見つめるようにして俯くゾマリ。
信仰の崩壊は個の消失、依って立つ地の崩壊は根幹を薙ぎ倒す。
揺れ惑うゾマリ、最早回復の兆しすらおぼろげな彼に声は降る。

「言っただろうが、届いてねぇってよ。虚閃でも何でもねぇテメェの霊圧なんざ、俺の霊圧が焼き尽くしちまっただけの話さ。一回目はくらってみるのも面白いかと思ったが駄目だな・・・・・俺の肌に届く前に止まって燃えちまいやがった。」

そう、それは支配するしないではなくその段階にすら至っていないという事。
フェルナンドの放つ紅い炎の如き霊圧、それを前に攻勢能力の欠片もないゾマリの『愛』はあまりに脆弱だったのだ。
もの皆焼き尽くす炎、それを思わせるフェルナンドの霊圧、それは物質に留まらず霊圧すら焼き尽くしていた。
ゾマリの霊圧、『愛』は彼に届く前に彼の霊圧という炎に焼き尽くされ、彼に届く頃にはその力を失っていたのだ。

「さて、もういいだろ？　テメェの番はこれで終わり・・・・・・次は・・・”俺の番”でいいよなぁ！！」

叫び、そしてフェルナンドは僅かな炎の欠片を残しその場から消えた。

ついで動いたのはゾマリ、いや、正確には動いたのではなく彼の身体は吹き飛ばされていた。

腹からくの字に曲り、宙へと吹き飛ばされるゾマリ。

その顔は再び驚愕の極地へ、瞬きにも満たない間に彼の間合いは潰され、そこは彼の敵の間合い。

防御も何も無く吹き飛ばされるゾマリ、腹部に奔るのは激痛という言葉すら生ぬるい痛み、殴られたというより突き刺さったかのような拳の一撃。

腹から背に腕が貫通しなかったのは一重に彼が十刃としての性能であり僥倖、生きているという僥倖だった。

だが彼への攻撃は止まらない。

宙へと吹き飛ばされたゾマリにかかる影、そして彼がその影を視認するより速く奔る二連の衝撃。

両肩に一撃ずつ、叩き下ろされたのはおそらく踵落とし、それをもって宙へと吹き飛ばされたゾマリの身体は砂漠に叩き落される。

仰向けに叩きつけられたゾマリ、瞳は開いているが痛みで思考は追いつかず、ただ浅い息を繰り返すのみ。

だがその一瞬の休息すら彼の敵は許してはくれない。

ゾマリの視界を覆う砂煙から現われたのは足。

上空から充分な加速をつけて叩き下ろされるその足は、ゾマリの顔ないし首を踏み抜かんとしていた。

”死”

ゾマリに明確な自身の死が見える。

今までありえなかった死の光景、それも自分の死の光景が。
そして死を前にしてとる行動など一つ、抗う事。
痛みにさいなまれ、死を目の前にしながらも彼とて十刃、そして最速の十刃。
残る力を振り絞った響転（ソニード）でその死の光景、それを招く敵の攻撃から離れ距離をとる。

その行動、感じた感情の名に蓋をして。

「ハッ！　意外と臆病な反応だな、十刃サンよぉ・・・・・・」

ゾマリが距離をとった砂煙、その中から現われた炎の男はゾマリにそう呟いた。
いつか自分が口にした台詞が帰ってくる、ゾマリにとって苦く屈辱的なそれだが今はそれどころではない。
激痛と疲労、受けたのは都合三発、だがそれだけで彼の体力は根こそぎ持っていかれた。
打撃の痛み、骨も折れているだろう痛み、そして何より腹と両肩を刺し抉るように苛む”熱傷”が彼の息を荒くする。

（馬鹿な・・・・・！　私がまったく眼で追えていないだと！？
ヤツの位置がわかるのは攻撃を喰らった後だけ、それも反撃どころではない強力なそれの後だけだ！そしてこの傷っ！　肉を抉り骨を砕き、なにより触れただけで此方の鋼皮が焼け爛れるなどありえないではないか！）

声を発する事などできない、しかし思考は高速で回転ししかし答えらしい答えも無くただ否定の感情だけが加速していく。
ありえない、今日何度目かもわからない否定の言葉、それが駆け巡るゾマリの内側。
速さ、強さ、攻撃の威力、その何もかもが桁を外れている。
下位、それも数字すら持たない者の力を逸脱していると。
認められない、自分は今追い込まれている、しかしそれは認められないとゾマリは否定だけを繰り返し続けていた。

「右腕完全骨折、顎骨には罅、肋骨の何本かの骨折と罅、鎖骨にも罅で腹と両肩に熱傷、その他大小の傷が多数・・・と。あぁ、左の脇腹はある程度回復してるのか・・・・・・」

なんとしても否定せんと思考を繰り返すゾマリに聞こえたのはそんなフェルナンドの声。
そしてその内容はゾマリ自身の傷、ダメージの度合いだった。

「それが・・・・・・　どうしたと、いうのです。グッ・・・・・・」

そう、それを口にする理由がゾマリにはわからない。
態々それを言わずともそんな事は彼自身がよく判っている。
重症、それも戦闘続行など困難なほどの重症であると。
それを今更何故口にする必要があるのか、自分の戦果を誇らしげにでも語る心算かとゾマリはフェルナンドを睨みつける。

さぞ気分がいいだろうと、自らが刻み付けた傷の数々を列挙するのはさぞ気持ちがいいだろうと。

だがしかし、フェルナンドはそんな心算など欠片もなく、そしてこう言い放った。

「大した事じゃねぇさ、ちょっとした確認だ。よかったぜ、どうやらまだまだ軽症らしい。これならまだ派手な喧嘩が出来るってもんだろうが！」

この破面は一体何を言っているのか、ゾマリには理解できなかった。軽症、フェルナンドはゾマリに対しそう言い放ったのだ。誰が見ても明らかな重傷を負った相手に、戦う事など困難であろう相手に平然と嬉々として。

逸している、明らかに。
普通ではない、明らかに。
おそらくは狂っているのだと、ゾマリははじめて理解した。
この破面は狂っている、この何処が軽症か、このどこがまだまだ戦

えると言うのかと。

”支配”が『愛』が効くのならばまだ手はあった、だがこの敵にはそれは効かない。

ではどうすればいい、退く事はできない、ではどうすればいいと。

そこで彼は思い至る。

自分にはすでにもう何も残っていないという事に。

彼という大地、彼という天、彼という世界の根幹を支えていた”支配”という名の柱。

だがしかし、それは既に瓦解し、崩壊した。

では、支配の柱が崩壊した彼の世界には一体何が残るだろうか。

そう、何も無い。

何一つ無い、彼という存在を支えるのはたった一本の柱だけだったのだから。

それが崩れ去った今、彼には何も残っていなかった。

支配からなる愉悦も、恍惚も、陶酔も何もかも、支配を失った彼には届かぬ幻想に過ぎない。

瓦解の音が響く。

彼という存在が崩れる音、自己価値の崩壊音。

存在価値の消失、であり至高の王に最も近かった自身は無価値へと落ちていくと。

なんと薄い、なんと薄い事か。

たった一つを失うだけでこうも薄い背中へと成り果てたゾマリ。
何一つ背負う事無く、背負う事を放棄し愉悦の海に浸り溺れ続けたツケはいま訪れた。
皆それぞれがそれぞれの信念を背負い生きている。
それは彼も同じ事、だが彼の信念は他者を害し愉悦に溺れる事、なんと薄くなんと軽くおぞましい事か。
故に瓦解は訪れた、それも彼が小石と、路傍の石と決め付けた炎の化身によって。

「認められるものかぁぁぁああ！！！私は絶対者だ！私は支配者だ！　誰もが私に平伏し誰もが私に逆らえない！こんな！　こんな事が！　こんな姿が認められてたまるものかぁぁぁあぁアア！！！」

だがゾマリにそれを認められるはずも無い。
ただ支配だけも盲信し、支配を有する自分こそ最も尊いとすら考えた彼。
その彼が自分の失態、支配の瓦解など認めるわけが無い。

ゾマリの身体中の目から黄色の霊圧が放たれ彼の前でぶつかりフェルナンドへ向け放たれる。
それは紛れも無い攻勢の霊圧、虚閃、彼に残された唯一の攻撃手段。
それこそ身体に残る全てを込めた虚閃は禍々しく光りフェルナンド

へと迫る。
虚閃、禍々しくも光るそれは意地の光り、認められないというゾマリの意地が乗り移りその虚閃は常軌を逸した威力となってフェルナンドへと猛進していく。

対するフェルナンドは迫り来るそれを見てただ嗤っていた。
獰猛な笑みは、それだけで彼の血が熱くなっている事を如実に語る。
彼が待っていたのはこういう戦い、断罪だ、粛清だなどという言葉遊びなど彼には何の意味も無い。
戦いに過分な意味を求めてはいけない。
意味なき戦いは愚かだが、意味で飾り立てた戦いは愚味に過ぎる。
戦う事の理由など単純でいい、そして単純だからこそ、一つの方向にしか向いていないからこそ力は集約され増し高まるのだから。

「いいじゃねぇか!!　これこそが戦いだろうが!これを超えていくからこそ意味があるんだろうがよ!派手な喧嘩だ!　こいつは喧嘩だ!　喧嘩なんだよぉォォオオ!!」

叫びフェルナンドは右足を退く。
充分な貯めを右足におき、そして右腕を引き絞りながら拳を硬く握り締める。
左手は前へ、迫り来る黄色の虚閃へと向けられた。
握り締めた拳には次第彼の霊圧が収束し、燃え盛るように紅く紅く輝く。
そう、今彼の腕は燃えていた。
それは比喩ではなく彼の腕は人間の形を保ちながら、しかし今炎の腕へとその姿を変えていたのだ。

燃え盛る彼の腕、炎となっても力強く握られた拳ははっきりと判り、その拳に乗るのは必殺の意。
今や肩から肩甲骨にかけてまでが炎となったフェルナンド、炎髪は激しく燃え上がり、肩から背に掛けての炎もそれに負けじと燃え吹き上がる。

眼前へと迫った虚閃を前にフェルナンドの準備は整っていた。
迎撃、そして反撃であり猛撃の拳。
既に限界まで引き絞られた炎の腕はただ解放のときを待つ。
迫る虚閃は禍々しさを増しながら、遂にフェルナンドを飲み込まんと牙をむいた。
今まさに伸ばした左腕に虚閃が触れるその瞬間、迎撃としてはあまりに遅いだろう拍子、しかしフェルナンドの顔にはただ獰猛な笑みだけが。
嬉々とした笑みだけが浮かび、そして右手を封じる意思の枷は解き放たれ、彼の拳は解放される。

振り遅れているはずの右の拳、しかしその拳は最早拳ではなく、炎に拳の意を乗せたそれは黄色の虚閃より先に着弾し、瞬間、紅く力強い波濤となって黄色の虚閃ごとその撃ち手であるゾマリ・ルルーの身体を飲み込んだ。

彼の者の断末魔の如き叫びと共に。

情を棄てよ
理を排せ
心を閉ざし
全てを封じ
禍招く
”獣”とならん

BLEACH El fuego no se apaga. 54（後書き）

下の戦い決着篇（？）となります。
長かった・・・・・・
それにしても随分あっさり風味になったなw
瞬殺希望が多かったのがどこかで影響をおよぼした？

まぁそんなこんなで何故かゾマリメイン風な回。
最後は主人公が締めたけどね。（いろんな意味でw
フェルの能力の一端がチラホラと見えましたがまだ内緒だよ？

最初の方のゾマリ部分は何故か書かなければいけないと思ったんだよねぇ。
ここの彼ってやっぱ原作以上に壊れてしまっていて半ばオリ化してるし
それを保管する意味で書くべきかと。

所詮は捏造な訳だけどさw

ではお気軽に感想などお待ちしております。

緋色の閃光が迫り来る。
破滅の光り、虐殺の咆哮、ただ命を奪う事しかできない緋色の光り。
それを前にし、白と灰色のコートを翻しながらその女性は微動だにしなかった。
彼女目掛け一直線に、彼女を殺すという意を存分に滾らせた光を前に彼女は動けない、いや動かないのだ。
脇に抱え込まれるようにして構えられた巨大すぎる銃、いっそ大砲だと言ってしまった方がわかり易い様なそれを構え女性は動かない。
それは彼女もまた意を示しているが故。
必殺の意、今まさに放たれるであろう砲火に乗せた覚悟を示しているが故。

眼前に迫り来る緋色の光、それをして瞳を揺らす事無く銃を構える彼女。
緋色を写す薄紫の瞳は緋色の光よりもその光の先を、それを放った黒き剣の山を射抜く。
他の景色を排し、それこそ迫る緋色の光すら余計であるとして排し貫く彼女。

そして、引き金は引き絞られた・・・・・・

奔った極光は緑。
細く細く、極限まで絞られしかし僅かの威力すら落とさず、それこそ絞られる事でより威力を増したかのような緑色の細い虚閃は、彼女に迫っていた緋色の光を何の苦も無く貫き、瞬く間に掻き消しながら進み再び虚園の夜空を二分する境界線を描いた。

『圧縮装弾虚閃（セロ・コンプレシオン）』
リリネット・ジンジャーバックが放った虚閃の名。
表である”人”の彼女と、裏である”銃”のコヨーテ・スタークによって放たれるその虚閃。
その名の通り圧縮し、装弾された弾丸を極限まで絞り放つことで”点”としての圧倒的貫通力と弾速、そして威力を併せ持つ技。
だが恐るべきはその圧縮率、ネロの吼虚閃（セロ・グリタール）が数発分の虚閃を無理矢理押しつぶして放つのに対し、リリネットとスタークが放った圧縮装弾虚閃は圧縮するという工程を片方が集中し担う事で、完全に統制されネロとは比べ物にならない量の虚閃を圧縮している。
先の一撃、ネロの腹に風穴を開けた一撃でおおよそ虚閃百発分、それも一介の破面ではなく霊圧を見ればネロと肩を並べるほどの者の放つ虚閃がだ。

百を百としてではなく、百を一として放てるという異常性。
それに耐えうるスタークという名の銃、その為の巨大さ、取り回し

の悪さであり重さではあるがそれを鑑みても目を奪われるは圧倒的な破壊力だ。
何故ならば、今となっては十刃最高硬度を誇るノイトラ・ジルガの鋼皮すら凌ぐであろう彼の黒曜鋼皮（イエロ・オブシディアン）を、割るのではなく貫通したのだから、それも苦も無くという言葉を窺わせて。

その圧縮装弾虚閃の第二射、ネロがその怒りのままに放った虚閃を難なく貫いた攻撃。
やや撃ち下ろし気味で放たれたリリネットの虚閃は遠く彼方の砂漠を貫き、虚夜宮の高さにすら引けをとらない巨大な爆発を産み出した。
放たれた虚閃、その圧縮弾数実に千発。
四桁に及ぶ虚閃の一撃、どうしようもないほどの威力によって彼方で発生した爆発は間を置きながらもその爆風と衝撃波を彼女に伝え、黄緑色の髪と、そして白と灰のコートが翻った。

「ごめん、スターク。　ちょっと外したみたいだ・・・・・・」

≪・・・気にすんな。　それに外したんじゃなくてヤツが避けたらしい・・・・・・流石は第2十刃、って事なんだろうがな・・・面倒なこった・・・・・・≫

爆風の強い風、そして空間が爆ぜた事による衝撃波を前にリリネットはその瞳を閉じる事無く、冷静に眼前の敵を見据える。
そして零れた言葉は謝罪、放った圧倒的攻撃に対して眼前の敵はそれに見合わずその身体の形を残していたのだ。

心臓を狙ったリリネットの千の一撃を標的である黒き剣の山、ネロ・マリグノ・クリーメンは寸前で避わしていた。

巨大な剣の山と化し隆起した左肩を根こそぎ抉り取られながらも。

放たれた虚閃の大きさは同じ、しかし、込められた力は単純に見ても十倍。

そして千を一として放つということは、百を一としたそれよりも自然威力が高まるのは自明の理。

ただ腹部を貫通したのみの最初の一撃、だが二撃目の圧縮装弾虚閃はネロの左肩を貫き、それだけに留まらずその周りの彼の岩剣の鎧も、そして彼の肉体も抉り取っていったのだ。

圧倒的な威力、そうとしか言いようが無いリリネットが放つ虚閃、だがそれをネロは生き延びた。

それは本能、リリネットの虚閃を前にし、まさにそうとしか言いようが無いものがネロを突き動かしたのだ。

理由も思考もない、ただその身に感じた感覚、おそらく彼にとって人生において一度しかなかった感覚、”大帝”バラガン・ルイゼンバーンへ挑み返り討ちの目に合わされた折に感じた感覚が叫んだのだろう。

避わせ、避けろ、抗え、何をおいてもその一撃に、例え痛みを覚えようとも、例え矜持に反そうとも、でなければ死ぬぞ、何者でもないただ確実な死だけがお前に降りかかるぞ、と。

その感覚の名は”恐怖”

圧倒的に迫る死に感じる恐怖であり、ネロ・マリグノ・クリーメンという破面にとって自身へと一身に集まるものであり、同時に彼の内側からは最も遠かっただあろう感覚。

それがネロを突き動かし、左肩、そこから繋がる左腕が僅かに残っ

た肩を介して胴とかろうじて繋がっている状況ではあるが、彼の”命”を取り留めた感覚の名であった。

しかし恐怖を感じるという事は同時に、それを彼の身に覚えさせた者は彼にとって脅威であるという事の証明でもある。

だがそれは許されない事だ。

少なくとも彼、ネロにとっては許されない、許される筈が無い事。

見た事もない新入り、不遜にも彼に楯突き、更には彼を敵として倒すと、そして簡単に死んでもらっては困るとまで言い放った不貞の輩。

ただ一方的に虐殺するべき対象に、虐殺者である自身が脅威を感じたという現実。

許し難い。

ネロにとっては何よりも。

”弱者”とすら呼べぬはずの塵が、至高の”神”である彼に弓を引き、その番えられた矢に神が脅威を感じるなどという事はあってはならないのだ。

「塵が・・・・・・　塵が、塵が塵が、塵が塵が塵がゴミガァァアアアアアア！！！オレ様は”神”だ！！　その神に対してテメェは何をした！！！グゥアァアアア！！　オレ様の！　神たるオレ様の血肉が失われる！痛ぇ！！　ふざけんじゃねぇ！　死ね死ね死ねシネェェエ！！クソ塵が！　ありえてたまるか！　お前等に塵に！オレ様に殺される為だけに生きてる娯楽人形に！このオレ様を傷つける許しを与えた覚えは無ぇ！！クソがぁぁあぁぁあぁあ！！！」

支離滅裂な叫びは、しかし彼の精神を物語る。
多くの感情と感覚、怒りであり痛みであり、そして僅かな恐怖とそれを否定する傲慢なまでの自尊心。
それらが綯交ぜとなれば思考など追いつくはずも無く、思考無くただ垂れ流される叫びは理を欠きながら叫ばれるのだ。

ぶらりとただ垂れ下がるだけのネロの左腕。
巨大で強力無比な彼の左腕、竜の顎（アギト）を持つ命を殺し喰らう彼の左腕は最早動かない。
当然だろう、破面という強大な力を持つ存在、肉体の強度は人間を軽々と上回る。
しかし、いかに強力で頑強な身体とて構造は人のそれとそれ程替わりはなく、肩の大部分を喪失した状態で腕を動かすことなど出来ない。
フェルナンド・アルディエンデは腕全体を挫かれようともただその”意”をもって無理矢理に動かしたが、これは状況が違いすぎる。
意をもって動かそうにも、そもそも動かすものが存在しない、肉も骨も肩を構成する肉体をネロは喪失している。
故に彼の左腕は完全に”死に体”、動かすことなど叶いはしないのだ。

「グァラァァアアア！！　死にさらせ塵がぁぁあ！！神を殺そうとした罪を償え！！　その塵滓以下の命を差し出せ！殺してやる！　殺してやる殺してやる、殺してやるぞ！！ガァアァァアアアア！！！」

叫ぶが早いかネロはリリネット目掛け神速の加速で持って突進する。

左の巨椀はただ彼の加速に追従するのみとなっていたが、今の彼にそんな事を考える思考は存在しなかった。
ただ殺す事、それだけが今ネロを支配しつつあり、それだけを追い求める彼に左腕を気遣う思考は余分でしかない。
ネロの視界から周りの景色が徐々に消えていく、いや、消えていくというより標的であるリリネット以外の景色は赤く染まっていった。
視界の端から徐々に、中心に捉えたリリネットの姿を覆いつくさんとして徐々に広がる赤がネロを支配しつつ、リリネットに肉薄したネロはただ大きく振り被った右腕をリリネットへと叩きつけようと振り下ろす。

リリネットはその一撃を大きく後方へ跳ぶことで避わすがネロはそれだけで止まらず、再び宙を蹴りリリネットを追うように迫っていた。
繰り出されるのは右手の斬撃にも似た爪と、無数に乱立する岩の剣で武装した彼の尾、或いは強力な下肢での蹴り等、ただ支離滅裂の叫びを繰り返しながらリリネットを追い立てるネロではあったが、その実追い立てる攻撃の全ては感情の揺れを感じさせない的確なものであった。
それは一重にネロ・マリグノ・クリーメンという破面の根源。
ただ命を奪う事だけに特化し、それを暴慢の意をもって振るう彼ではあったがその力は本物。
殺す、余計な感情を排し、それこそ暴慢な意を排して振るわれるそれはただ貪欲なまでに命を奪おうと動くのだ。
理性、感情、情動、その全ての箍が緩み、顔を覗かせるネロ・マリグノ・クリーメンの力、暴竜の片鱗、それが今リリネットを追い立てる。

「まだかよ！　スターク！！」

荒れ狂いしかし研ぎ澄まされる暴竜の攻撃を前に、リリネットはやや大きな声で抱える銃、スタークに声を飛ばす。
余裕をもって避わせてはいるが、こうも攻め立てられ距離を潰されてはいかにリリネットとて焦りの一つも見せるだろう。
リリネットは遠距離からの圧倒的突破力と攻撃力による戦闘を得意とする破面。
遠距離攻撃に特化する、ということは当然近距離での戦闘は想定しておらず、強大な威力を得るための代償である巨大な銃は取り回しが悪く近距離では使い物にならない。
まして間合いの内側に入られればそれは由々しき事態、彼女が単独で戦闘をするならばそれは死すら意味する事態なのだ。
それゆえ距離を潰し、間合いを潰し、攻撃の隙を与えまいとするネロの行動は彼女にとっては厄介極まりないもの。
故に叫んでしまう、片割れの名を。

《もうちょい待ってろ！　流石に”千発”の後はキツイ。だがもう少しだ、お前はこれしか無いんだから気合入れて避けろよ！》

「わかってる！　アタシだって出来れば”狼”は使いたくないんだ。」

《あぁ・・・・・・　だから判ってんな？やばかったら・・・・・・・》

「うん。　いつでも大丈夫・・・・・・・」

ネロの尾による横薙ぎを宙返りをするようにして避わしながら、スタークの言葉に再び叫ぶようにして答えるリリネット。
装弾を催促していた先程の彼女の言、それにスタークは厳しさを滲ませながらも答えた。
虚閃という名の弾丸、その圧縮は技量と集中を必要とし、それ故に次弾の圧縮には時間を要する。
先も、そして今もリリネットがネロの攻撃に反撃すらせずに避け続けるのはそういった理由。
そしてなによりリリネットがもつ攻撃手段は、スタークという名の銃から放たれる圧縮装弾虚閃以外に存在しない。
いや、厳密にはもう一つ攻撃手段はあるのだが、出来れば使いたくないという言葉からそれを積極的に使用する事は考えづらく、結果たった一つの攻撃手段しか持たないのがリリネット・ジンジャーバック＝コヨーテ・スタークという姿の二人の欠点。
強力な一撃を持つ故の弊害か、唯一つに特化したためにそれ以外を行えない、攻守のバランスなどという事を無視した攻撃性能が今、この場においては仇となっていた。

「オォオォォォオオオオォオオオ！！！　死ねぇ！！死ね！　シネ！　死ねぇぇえぇぁあああああ！！！ウォアァアァアア！！」

叫ばれる言葉に最早理性は見えない。
ただ死を、敵を死に至らしめんとする本能だけがネロを支配していく。
理性を失う事に反比例するようにより鋭くなるネロの攻撃。
それは己の持つ力を彼自身がもてあましていたという事なのか、それとも理性というものがあるが故に、己が暴慢を満たさんと彼がし

ていた為に埋もれていたものなのか。
ネロという破面のおそらく最高の形、もし彼が戦士として鍛錬を積み、己が力を過信、慢心する事無く進んだ先にあったかもしれない鋭さ。
戦士ネロ・マリグノ・クリーメンの姿がおそらく今リリネットを追い立てている鋭さの正体。

しかしそれは叶わぬ姿。
何処までいこうともネロは戦士にはなれない。
理性の箍、感情の箍が外れかけていたとしても、そこで見え隠れした姿、攻撃の鋭さが如何に素晴らしかろうともそれは幻。
ネロ・マリグノ・クリーメンの性は他者を己が欲望を満たす為の道具としてしか見れない”暴虐の徒”であり、その暴を意識して振るう”暴君”でしかないのだから。

《いけるぞ！　リリネット！》

ネロの攻撃を跳びはねる様にして避わし続けていたリリネットに、遂に待ち望んだ言葉が届く。
その言葉に反応し、リリネットは叩きつけられたネロの黒い岩の尾を紙一重で避わすと、乱立する剣の腹の部分を強かに蹴り無理矢理に距離をとる。
間合いは必殺、敵は攻撃後の僅かな硬直を彼女に晒し、彼女に自身の勝利を疑わせるものは何一つない。

「喰らいな！　圧縮装弾虚閃（セロ・コンプレシオン）！！」

引き絞られた引き金、長く伸びた銃身の先にある細く絞られたような銃口から放たれたのは緑色の極光。
速く、研ぎ澄まされ何者をも貫く狼姫の一撃は、放たれた瞬間に既に必殺。
徐々に硬くなっていくネロの黒曜鋼皮をもってしても防ぐ事はかなわず、今すぐ硬化することは出来ないその鋼皮では守りにはあまりにも薄い。

故に決着。
リリネットはもとよりおそらくスタークすらもどこかでそう思ったであろうその光景。
神速にまで達したかのような攻撃の速度は避わす事など叶うはずがないだろうと。
引き金を引いた瞬間が決着、二度の砲撃でリリネットの誤差は修正され、狙いを違う事などないと。
故に決着。
誰しもがそう思う光景がそこにはあった。

「アカンわ。　そら、ちょっと甘すぎるなぁ。」

その声の主は市丸ギン。
戦場より遠く離れた場所、白い羽織と銀色の髪を靡かせながら戦場を見守る彼から零れたのはそんな言葉。
誰に言うでもない、まして戦う者達に届くとも届けようともしているわけでもないその言葉。
しかし確信に満ちたかのようなその言葉。
笑顔の下に隠れた怜悧な彼の一面がそう告げる。
甘いと、そんなにも簡単に決着が着くわけがないと、仮にも神を自称していた者をそう易々と討(と)れる筈がないと。

そしてその言葉は図らずも現実となった。

「嘘・・・でしょ・・・・・・」

零れた呟きには驚愕しかなかった。
銃口から放たれた緑の極光はその威力を存分に発揮し遠く彼方の空へと消えていた。
しかし、しかしそれを放ったリリネットの目には異常なものが映る。
それはネロ・マリグノ・クリーメンの姿。
ネロが居る事、それ自体になんら異常な事はない筈、だがそれは何より異常なのだ。
リリネットが放った必殺の極光、その光が治まりそこに立つのはネロ、ネロ・マリグノ・クリーメン。

無傷のネロ・マリグノ・クリーメンがそこに立っていたのだ。

それは、彼がそこに立つという事は証。
肩を抉り取られたその姿、腹部に開いた穴は鋼皮の棘によって塞がれて入るが、その隙間からは血が零れ落ちる。

しかしそれだけ。

ネロが負っている傷はそれだけ。
そう、三度放たれた極光によって負った傷は二つ。
それは即ち無傷の証。
ネロが三度目に放たれたリリネットの圧縮装弾虚閃を完全に避わしたという証なのだ。

「銃ゆう武器は確かに強力や。　速いし強い、おまけに相手の間合いの外から好き放題攻撃できる。願ったり叶ったりの武器や。　でもなぁ・・・・・そんな万能はありえへん。　銃には欠点がある、それは弾は絶対に銃口の向いとる方に真っ直ぐにしか飛ばんゆう事。なら後はその向きと、撃つ拍子さえ掴んでもうたら避けられるゆう算段や。えらい強力な一撃も、ただ避けられたら目も当てられんゆう事やねぇ。」

独り言、呟きの域を出ないその言葉はしかし的確で的を射ていた。
銃という武器、その有用性、破面達は虚閃という遠距離攻撃をもっているがそれを主に使う者はいない。
その爪で、或いはその牙で敵を殺し喰らってきた過去を持つ彼らは

皆一様に肉体による戦闘に特化していく。
それは獣の本能であり、闘争の姿。
それに対する銃という武器は実に有効なものと言える。
なにしろ間合いが違いすぎる、相手は近付かねば攻撃を出来ずしかし銃はお構い無しに攻撃が可能。
より遠くから、自らの身の安全を確保しつつ如何に相手を仕留めるかを追及した武器、それが強力でないはずが無い。

しかし、市丸はそれを理解した上で欠点を指摘した。
銃という武器がもつ最たる欠点、それは直線的な攻撃であるという事。
込められた弾は火薬の炸裂によって銃身を高速で進み銃口より発射される、そして弾はただ真っ直ぐに標的目掛けて奔り射抜く。
そう、銃とは銃口から真っ直ぐに伸びた直線上にいる敵しか射抜けない武器。
標的との最短距離をいく弾丸、直線上を走る弾丸、しかし理解してしまえばどうという事はない。
ネロがしたのは至極簡単な事、市丸が示したとおり銃口の向きから射線を導き、放たれる寸前で回避しただけ。
だがそれは簡単なことであってその実そうではない、早ければ気付かれ遅ければ射抜かれる、刹那の攻防、”撃つ”というリリネットの”意”を捉えたネロの感覚の勝利。
リリネットの圧縮装弾虚閃は威力を極限まで高めるために、その範囲を絞り放たれる。
それが彼女には災いだったと言えるのかもしれない、そうして絞られているからこそネロは刹那の勝利を手にした。
研ぎ澄まされた今の彼、理解しての行動ではなくただ本能がそれを行わせた結果彼は生き延びたのだ。

「グァオォォオオォォオオオォオオ！！！」

その刹那の勝利とは裏腹に、ネロの咆哮は次第言葉を失っていく。
言葉は無く、ただ叫ぶ事が今の自分を表すのだと言わんばかりに、
その太い喉を震わせ大気を震わせる。
失われつつもただ一つ彼から失われないのは、”殺す”という彼にとって最も重要な事柄。
それさえあれば彼はネロ・マリグノ・クリーメンたり得るとさえいえる行為。
今それが彼には満ち、他は彼方へと排除されている。
そして踏み込まれた一歩は、まるで距離など無かったかのように瞬時にリリネットへと肉薄していた。

そこは絶死の間合い。
巨大すぎる銃は取り回しが悪く、肉薄されれば只の巨塊と成り下がる。
しかしリリネットは動けない。
強力な攻撃にはリスクが伴う、それは彼女の攻撃手段がそれしかない事もそうであるが、砲撃後の隙というのは消せるものではない。
なにより自らの必殺の一撃を完全に避けられたという衝撃は動揺を誘い、彼女に精彩を欠かせるには充分。
必殺の一撃の裏返しは必滅の一撃、そしてその必滅とは自らの破滅を表し振り上げられたネロの右腕はまさしく彼女にとっての必滅であった。

そう、彼女にとっては。

ガチャリ、という音がしたのはネロの眼下。
リリネット・ジンジャーバックが今の今まで立っていた場所から。
振り上げた右腕はそのままに、ネロの瞳が音の方へと向けられる。
そして向けられた瞳に映るもの、それは黒く塗り固められた二つの銃口。
その先に居るのは小柄で白地に灰色の毛皮のコートを羽織った黄緑色の髪の女性ではなく、波をうつ黒い癖毛に顎鬚を生やし、彼女と同じコートを身に纏った長身の男の姿。

コヨーテ・スタークが彼の眼前に二丁の銃を構え立っていたのだ。

「言ったろう？　俺とリリネットは二人で一人、一枚のコインの裏と表、そのコインの裏と表が返るのに、一瞬の隙もありはしないんだよ。」

そうして引き絞られる二つの引き金。
連射に適した左の銃、強力な一撃に適した右の銃、その特性など無視した強烈な連射がネロの顔面にほぼ距離の無い位置から浴びせ掛けられる。
攻撃の反動でその場から後ろへと飛ばされるスタークだがそれでもお構い無しに、ただ虚閃を撃ち続けた。
ネロの守り、黒曜鋼皮が唯一覆っていない彼の顔、おそらく彼が晒している唯一の弱点らしい弱点に放り込む、何十発という虚閃を。
スタークがその銃撃を止めたころにはネロが居たであろう場所は砲撃による霊子の乱れとネロの鋼皮に弾かれた虚閃の残滓とで爆煙の山が出来、ネロがいたであろう場所を包み込んでる。

《ごめん、スターク・・・・・・　迷惑かけちゃって・・・・・・》

「ったく・・・　迷惑なんて思って無ぇよ。　俺等の生き方はこういうもんだろうが、二人で支え、補えばいいんだよ。」

《うん・・・　ありがと・・・・・・》

二丁の銃へとその姿を再び変えたリリネット、自らの窮地を救ったスタークにどこか後ろめたさを感じたのか、彼女の口から零れたのは謝罪だった。
しかしスタークはそんなものは必要ないという。
彼にとって、いや彼らにとってそれは当然の事なのだろう。
支えあい生きてきた彼ら、片方の危機をもう片方が救うことになんの疑問があるというのか。

そうしたリリネットとの短い会話の中でも、スタークはその視線をネロを包む爆煙から外さない。
残心、仕留めたかも定かではない相手に警戒を解くほど彼は愚かではない。

（さて、あれでどれだけ効いてるもんかねぇ・・・・・俺だって”狼”は使いたくない。だが、”切り札”の方が駄目ならやるしかない・・・か。）

一瞬の思考、逡巡の間にネロを包んだ煙が晴れていく。
そこには当然のように黒い巨岩が、ネロが立っていた。
しかし違うのはネロが俯きその顔からはいまだ煙が上がっているという事、やはり無防備な顔にスタークの虚閃の乱撃はネロにとっても痛手という事か。
だがスタークはその姿を見てほんの少し眉をしかめる。
本当ならあれで頭が消し飛んでくれた方がよかったと、おそらく効いていない訳ではないがそれでも効果は薄かったという事に、眉をしかめずに入られないスターク。
しかし、そのスタークに追い討ちをかける出来事が今、起きようとしていた。

煙が晴れ、視界も晴れ、互いの姿を確認できるまでにいたってもネロに動く気配が見えなくなった。
それはどうにも不可解な事。
先程まで支離滅裂に叫び、言葉すら失ったかのように吼えていたネロが、動かず、そして叫ぶ事もしなくなったのだ。
つい先程までの行動が嘘のように、俯き動かないネロ。
その姿に怪訝な表情を浮かべるのはスターク。
まるで勢いを失ったかのようなネロの姿、顔面への攻撃が彼の気勢を削いだのか、はたまた別の何かなのか。
暴威を振るっていた者の急停止、それがスタークには何処か不気味にすら感じていた。

そしてその感覚は間違いではない。
嵐の前の静けさ、それも只の嵐ではない。
理性の箍、感情の箍、そして本能の箍、厳重に架せられた数々の錠前。
ネロ・マリグノ・クリーメンという破面の本質を何重ものそれらは覆い、鍵をかけ、締め上げていた。

だがしかし、その全ては今外れようとしている。

ネロという破面がかつて感じた事が無いほどの怒り、かつて感じた事が無いほどの痛み、そして感じた感情を許容できないという圧倒的な圧迫感。

理性が押しつぶされ、感情は振り切れ、そして本能は際限なく加速しとどまる事をしない。
すべての停止装置が今彼の中で破壊され、それを失った彼の全てがが際限なく燃え上がり、或いは加速し、そして限界を超えそれでも止まらない。
止まれないのだ。

「■■■

失われた左の肩、その断面から瞬時に肉が盛上り肩を形成し、それでも飽きたらず膨張を続ける肉はその内側から黒い岩の剣を生み出しながら遂にその先端に竜の顎を創り出した。
新たに左肩より生まれた竜は瞬時に黒の鋼皮に覆われ、肩が再生を果たした事により左腕の竜もまた息を吹き返したかのように顎を開く。
そして変化はそれだけに留まらない。
右腕の爪は更に長く鋭く伸び、腕の大きさはそのままにその手だけは巨大に、不恰好ながらも変化を果たし、背中に乱立していた岩の剣山もその長さと本数を増していき最早ハリネズミの様相。
一本だけだった尾は同じ根元より一息のうちに伸びたもう二本の尾により三本に、皮膚を失った顔はその全てを黒い鋼皮の鎧に覆われ、爛々と輝く眼以外は見えなくなり、怒りの意匠を伺わせる外観へと変化を遂げた。

双頭の竜、三叉の尾、長い爪と覆いつくす剣の群れ。
果たした変化は最早、人型を捨てた姿。
人よりも竜に近い姿へと変化したネロ。
それも本来超速再生という能力を失っているはずの破面が肩を再生し、更には新たな肉体の部位を産み出すという規格外。
化物、そうとしか言いようが無い今のネロの姿とその性能。

それは一重に彼という破面の異常性。
有り余る霊圧、それを破壊と殺戮の為に使うネロ。
破面はその個々が抱える霊圧を無意識下で押さえ込んでいる。
なぜなら霊圧の全てを開放すれば待っているのは”死”だからだ。
まずもって肉体が耐えられない、強すぎる霊圧、肉体が受け止め切れない霊圧はそれだけで肉体を傷つける。

フェルナンドがいい例だろう。

子供の姿だったころの彼は、霊圧だけは不釣合いなほど強く、それを開放する事で力を得る事はできたが同時に霊圧を肉体の許容する以上に解放する度、自らの肉体にも多大なダメージを負っていた。
それが自明の理、無意味な自殺行為でしかないのだ。

だがネロは違う。
肉体がその完全な霊圧の解放に耐えられる。
しかし、彼自身がそれを意識して行えるわけではない。
無意識下で抑えているものを意識して外す事は容易ではないのだ。
だが今のネロはおおよそ意識と呼べるものが無い。
理性も、感情も、そして本能までもが停止、或いは振り切れ、本来それで止まるはずの肉体はしかし止まらず更なる加速と燃焼を続け限界は破壊される。
その後にあるのが無意識の開放。
霊圧が噴出し、負った傷はその莫大な霊圧によって無理矢理に修復されそれで終わらず更なる強靭で強力無比な肉体を求め、構成した。
意思を離れただただ強力な力を求め、止まる事無く最早意思すら止める事叶わずに。
産み出したのだ、魔獣を、双頭の暴竜を。

莫大な霊圧はその殆どを回復と進化に費やされ、しかし明らかに纏うそれも強力になっている。
その姿を目の当たりにし、その霊圧を目の当たりにしたスタークからどうにも面倒そうな溜息が漏れた。

「はぁ・・・・・・　こいつはどうも・・・　骨が折れそうなこったな・・・・・・」

溜息と呟きは大きすぎる咆哮に掻き消され闇へと消えた。

ネロ・マリグノ・クリーメン。
第2十刃にして虚圏の”神”を自称して憚らない暴君。

そして、彼が十刃として司る”死の形”、それは・・・・・・

”暴走”

歯止め無き暴
暴れ狂いしかし止まらず
途絶えぬ弾丸
飲み込む群青
王の名の下に
執行す

BLEACH El fuego no se apaga. 55（後書き）

今回は若干短め。
時間がない中必死に書いてみました。
本当はもう少し先まで書く予定でいたのですが、これ以上書くと一話の文量がとんでもない事になるｗ

ネロの死の形、これを決めた時こういった展開も同時に浮かんでいました。
歯止めなく、本人の意思を介す事が出来ず、際限なしに暴れる。
敵はもとより自身の身体すら考えることは無く、ね。
そして私はまだ変身を残している的展開もまた、テンプレをいくこの小説には必要かとｗ

次で一応長かった強奪決闘の戦いの部分は終わりとなります。
いや～、思えば予想を遥かに超える話数になってしまったｗ

では最後の一話、気合入れますかね！

作者からの身勝手なお願い

毎回、時々、そして初めてお読みになられております読者様方。
この作品『ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．』をお読み頂き、ありがとう御座います。
作者の更夜で御座います。

今回は小説本編、また番外篇の投稿などではなく申し訳ありません。
実は今回は作者である私から、大変勝手ではありますが読者様方に一つ、お願いがありこうしてこの文章を書いている次第。
皆様におかれましては拙作をご愛読、または興味を持って読んで頂いている事、誠にありがとう御座います。
温かいお言葉、厳しくもこの作品を想い頂くお言葉など毎回更新と共に感想を頂ける事は
作者の自分としましてもとても嬉しく、何より作品造りにおいての活力となっています。

おかげさまでこの作品も本編、番外を合わせ６０話を越え、今だ原作の影すら見えない現状ながら
続きが楽しみだ、と言って頂ける作品となりました。
週間ユニークＰＶも３０００～４０００という数を平均的に頂き、この数字よりは低いとは思いますがそれでも多くの方々がこの小説に目を通されているかと思うと身が引き締まる想いです。

さて、感謝の気持ちは絶えませんがそれはこの辺りとし、今回これを書くに至った本題に入らせて頂こうかと思います。

昨日、名前は伏せさせて頂きますがとあるユーザー様よりメッセージを頂戴しました。
何事かと思い携帯より急いでそのメッセージを確認すると、内容は作品に対する感想ともう一つ、気になる事があるという内容でした。

遠まわしに言ったところで仕方が無い事なので言いますと、それはこの小説の”感想”について。

この小説の感想はある意味本編よりも盛上っている、と言いますか若干のカオスとなって来ています。
そのメッセージはそうした感想欄での言葉の応酬、言い方は厳しいものがあるかもしれませんが言葉遊びを憂慮するものでした。

作者としましては、この『にじファン』という場所は作品を投稿する場所であるのと同時に、ユーザー同士、またはユーザーと作者の交流が大変盛んな場所であると認識しています。
メッセージ機能に代表されるユーザー間のやりとり、個々の感想への返信が可能であるなど私にとっては非常に素晴らしいものです。

しかし、確かに最近の感想欄の暴走振りは私から見ても若干目に余るものがある、とも思われます。

作者自身、感想を頂ける事に非常に感謝し、出来るだけ書いて頂いた感想にはそこでも楽しんで頂けるよう返信する事を心掛けており

ます。
そうした事を目指すあまりネタを自ら追加するような書き込みをした事も自覚しています。
それは一重に私の人間的な未熟さであり、不徳、深慮が足りない部分です。

作者自身も感想欄で展開されるカオスな状況を見て、ただ「楽しいことを考える人がいるなぁ」程度にしか考えていませんでした。
しかし、頂いたメッセージにはこんな言葉も添えられていました。

感想は作品に対する書き込みをする場であり、読者同士が言葉遊びをする場ではない。
非難、罵倒ではないにしろ感想に対する感想というのはあまりよろしくなく。
そして、もしも初めて感想を書き込もうと考えた方がこのカオスを目の当たりとした時、感想を書き込み辛くなってしまうのでは？

頂いたメッセージの原文とは違いますが、言わんとしておられる内容はこれで伝わるかと思います。

作者である私自身が煽っているような返信をした事を自覚しているため、強く言う事は出来ません。
しかし、上記のメッセージを読んだとき私は正直自分の未熟さを自覚しました。

感想を頂く事が嬉しくて、ただその返信を楽しく面白くと考えていた自分のなんと浅い事か、と。
第三者から見て”身内”感の強い感想欄というのは確かに書き込みづらいのではないか、と。
冒頭にも書きましたが、この作品は一週間で少なくとも１０００人単位の方々が読まれている作品にまで成長する事ができました。
それは一重に読者様からのご声援あっての事、しかしこうした感想欄の状況を作者自身が助長していたと言う事は、この小説を書き、また管理すべき立場の人間としてあまりに軽率だったのではないか。

もし、感想を書き込もうとして躊躇いを覚えさせてしまった方がいたなら、それは全て作者の責任です。
感想を書き込んで頂いた読者様方にはなんら落ち度はありません。
頂いた感想から刺激を貰い、またそれを糧とする。
そしてただ小説を書いていればいいのではなく、多くの方々がこれを読んでおり、またお言葉を頂戴する立場に自分がいるのだという自覚が私には決定的に足りていなかったのです。
もう一度言いますが、感想を書き込んでくれている読者様方に落ち度はありません。
事実感想をもらえる事はこうして投稿してる人間にとっては何より嬉しい事は、私のみならず投稿した事がある方ならば全員が判る事と思います。
ただその嬉しさのあまり、歯止めをしなかった自分の落ち度です。

そこでひとつ、作者よりお願いがあります。
現在感想で展開されている、この小説の裏側というかもう一つの一面にまで成長しているものに
幕を引いては頂けないでしょうか？

確かに読んでいて楽しくはあります。
毎回どんな事が起こるのか、どんなネタが飛び出すのか期待もあります。
しかし既に感想という域を超えていることもまた事実かと思います。

そしてこれは強制や命令、書き込みの禁止を意味するものでは無いという事だけはご理解頂きたいのです。
作者である私自身が調子に乗ってネタを追加し、裾野を広げていった事は目の逸らしようが無い事実で、そんな自分が一方的に善意で感想を書いて下さっている方に命令など出来る筈がありません。
毎回感想を頂く方、ときたま感想を頂く方、はじめて感想を頂く方、内容に関係など無く、そして頂いた感想に優劣など無く、どれもが作者にとって本当に嬉しいものなのです。
故に感想の削除等も一切行いません。
そして出来れば消す事もしないで貰いたい。
私にとっては大切なものなのです。

今回の件、個人へのメッセージでこの一件を済ます事は出来たかもしれません。
感想を頂いている身でありながら、こうしてこの文章を投稿する事で関わった方々が不快な思いをすることも充分にあり得る事だと自覚しています。
しかし、それはユーザー間でのみ解決する事象であり、この作品は感想の制限を外しており、非ユーザーの方にも知って貰うべきと、この文章を投稿しました。
そして何より私自身がこの作品を読んでくださっている方に、不快な思いをされた方がいるなら謝らねばならないと思い、投稿する次第です。

至らない作者で申し訳ありません。

最後に。
事の発端は頂いたメッセージではありますが、こうする事を決めたのは私の意思です。
たった一通のメッセージに左右されるほど、弱い意思の心算はありません。
もともとどこかで思っていた事に、切欠が齎されたという事だと思います。

今、非常に苦しい思いと共にこれを書いています。
もし、こうしてこれを書いたことで誰かを傷つける事があるとすれば、それもまた自分の負うべき痛みなのか、と。
文章を投稿する以上それは起こりえる事なのかもしれませんが、改めて自覚する事は辛い事ですね。
この感覚は恐怖に近いです。
他者を傷つける事、またネットという環境ではあっても拙いながら出来た繋がりが絶たれてしまうのではないか、というのは恐怖以外ありません。
顔が見えず、声が届かず、こうして文章という感情表現が難しいものでしか伝えられないというのは辛い。

しかし書かない訳にはいかないのです。
こうして衆目の下に作品を公開し、それを管理するべき責任から目を背ける事は人として。

長々と、そして重ね重ね書きましたが、これが作者の考え、想いと

お願いです。
拙く読みづらいものではありますが、察して頂けると幸いです。

今後もこの作品が皆様に愛されるものとなることを目指しつつ
それでは失礼致します。

更夜。

２０１１．０７．０５

作者からの身勝手なお願い（後書き）

これに対する感想、ご意見などは感想欄ではなく活動報告に『コチラにどうぞ』という記事を立てましたのでなにかございましたらそちらにお願いします。

彼の視界に今や色彩は無い。
いや、正確には色はある。

それは赤。

その一色だけが彼の視界を塗りつぶし、他を排し景色を写していた。
何故そうなったのか、何が起こったのか、本来ならば疑問に思うべき事態であるが彼はそれを気にも留めない。
ただあるのは”薄い”という気持ち。
目に映る赤、視界を塗りつぶした赤、しかしその赤は彼からすれば酷く薄い赤。
もっと、もっともっと濃く、もっともっと鮮烈で、もっともっと艶やかな赤を彼は求めていた。
他には何もいらず、考える必要も無く、ただ求めていた。
自分の視界が赤に染まった事、その理由を求めるよりも尚、赤を求める彼。

彼にとっては今やその理由とやらは瑣末に過ぎないのだろう。
最も重要なのは、この薄い赤を濃い赤へと変える事だけ。
そしてその方法だけが彼の中には今満ちている。

より濃い赤を見るためには、全てを殺せばいいのだという事が。

「■■■

っては最も似合うものですらある。

ネロ・マリグノ・クリーメン。

虚圏の神を自称し、憚らず、思うがままに振舞い、そして蹂躙する暴虐の嵐の名。

十刃として司る彼の死の形こそ今の彼を何よりも端的に顕す。

曰く”暴走”。

肉体、精神、その全ての箍、錠前が壊れ、止まる事無く加速し、行く末すら定まらずただ猛威を振りまく。

ネロに起こっているのはそういった類の出来事。

本来無意識に押さえ込まれた霊圧、それは自身の肉体と精神を安定して保つための一種の防衛本能に近い行為。

しかしネロはその防衛本能を破壊し、理性を放棄し、本能を凌駕し、意思と呼べる全てを手放して押さえ込まれた霊圧を開放した。

その対価として得たのが今の彼の姿。

消し飛んだ肩の肉を補いながらそれ以上に膨張し生まれた二本目の竜頭、歪に巨大化した右手、新たに生えた岩の尾、そしてより強固に全身を覆う黒い鎧。

機能ではなくただ殺すというために大きく、或いは鋭く変化したその姿は恐ろしさすら漂う。

まるで底なしかのような霊圧にものを言わせた再生と強化を得た代わりに、彼が失ったのは彼自身。

愉悦も、快楽も、喜びも、悲しみも、怒りも、その何もかもを彼は手放した。

無意識に押さえ込まれたものを無理矢理に表へと引き出すことへの代償。

本来許容できないものを扱うために、しかし許容できる範囲が決ま

っていると言うならばその為の場所を空けてやればいいとでも言うかのように、かれはその膨大な霊圧を得るために、自らを定めるものを手放していったのだ。

今の彼にあるのは最低限のものだけ。
理由もとうに失った、しかし譲れ無いものだけ。
ただ敵を、それ以上に命を殺す為に必要なものだけ。

そう、殺意だけだった。

衝撃波のような雄叫びの後、ネロはその竜脚をもって一息に宙を駆けスタークへと肉薄する。
その後にあったのはただ一方的な乱撃の舞台だった。
竜爪が、竜脚が、竜牙が、そして竜鱗までもがスタークを切裂き、或いは引き千切らんと乱舞する。
反撃の暇(いとま)など無くそれ以上に反撃に転じる事すら考えられないかのような乱撃は、一つの区切りも迎える事無くスタークを追い立て続ける。
その悉くをギリギリの間合いで避わし続けるスターク。
大きく避ければ危機は減る、しかし同時に勝機も減る。
命の奪い合いとは常に表裏一体の理の中にあり、転じる事に刹那の間すらないのだ。
それ故にスタークは間合いを詰める。
銃という特殊な武器、本来間合いは開いていてもそれ程勝機を逃すものではない。
しかし、本能の部類でリリネットの射撃を避けたネロならば、スタークの攻撃も避けられてしまう可能性は捨てきれない。
故に接近する。

避けられぬ距離からの掃射をスタークは狙っていた。

乱撃の最中、振り上げられたのは手首から先が異様に巨大化した右腕。

巨大な掌とそこから伸びる五指、そして五爪、肩から腕が今まで通りである為その巨大さは際立ち、そして明らかに広がった攻撃範囲でもってスタークを切裂こうと振り下ろされる。

だがスタークはネロの右腕から繰り出された素早く強烈な攻撃をギリギリで避わすと銃を構え、反撃を試みた。

しかしネロの攻撃はこれだけに止まらない。

右腕の攻撃は空を切り、しかしネロの身体はその右腕の勢いのまま前転するように回転していく。

そして現われるのは無数の黒き剣と見紛うばかりの岩の棘が乱立した背中。

右腕よりも更に攻撃範囲が広く、そして殺傷能力に優れたそれがスタークへと襲い掛かる。

いかにスタークとて隙間無く乱立する剣の群れを掻い潜れるはずも無く、紙一重での回避を断念し後ろへと飛び退いた。

そしてそこは絶対の安全圏、二段構えの攻撃の外側、背中の剣さえやり過ごしてしまえば後は背中を向ける敵の姿があるだけの場所。

背中というのは全てにおいて共通の死角であり、それを晒す事は負けに直結してもおかしくない場所。

故にそこは絶対の安全圏であると同時に絶死の間合いとなるべき場所でもある。

が、今は違った。

スタークとてそれを理解していた。

右腕、背中、それをやり過ごしたとておそらく次があるという直感。
戦いにおいて自らの行く末を左右するものがスタークに警鐘を鳴らしていたのである。

そして黒い岩山の影から現われたのは三本の大太刀。
無数の棘に覆われ長く伸びた黒い三本の尾、身体の回転に合わせて振り下ろされ叩きつけられようとするその様は巨大な太刀にも似た雰囲気を感じさせる。
飛び退いた筈の絶対の安全圏は、一転し太刀による攻撃の最上の間合いへとその姿を変えた。
それをネロ自身が狙っていたとは考えづらい。
何よりそういった”思考”は今の彼には無く、強いて言えば彼の”殺意”という唯一残されたものがその動きを可能にしている。
どうすれば殺せるかという事をその殺意が追い求めていたが故に。

振り下ろされる三本の太刀、それを前にスタークは左右の銃を構えそのうちの一本を集中的に撃ちぬいた。
黒い岩の鋼皮、霊圧を込めたスタークの弾丸はまだそれに対して有効で、黒い棘を蹴散らしながら三本のうち一本を圧しとどめる事には成功する。
それによりややタイミングのずれた太刀と太刀の間をすり抜けるように響転によって移動したスターク。
そしてその彼の眼に晒されるのは今度こそガラ空きとなったネロの背中。

そして構えられる二丁の銃、硬度が増しているといってもその銃から撃ち出される虚閃が完全に弾かれたわけでもなく、今だ削れる事は先の一撃で証明済み、ならば再生を上回る速度と物量、そして威力でもって攻撃すればいいと考えたスタークは構えた銃の引き金を引こうとする。

が、しかしそれは叶わなかった。

彼が引き金を引こうとした瞬間、彼の視界の端に光る緋色の極光。
僅か、捉えたというのはあまりに微かなそれは、しかし彼に再びの警鐘を打ち鳴らす。
しかしそれは些か遅きに失し、彼を横合いから一発の虚閃が襲ったのだ。
彼を飲み込むには充分な範囲と、そして威力を伴ったその虚閃は竜の顎（アギト）から。
肩から新たに生じた双頭の竜の片割れは、本来あるべき骨格の稼働範囲など無視し、回転する肉体に引かれる事などお構い無し、回転に逆らうようにその首を捻り背中へとその鼻先を向けると、開いた口から強烈な虚閃をスタークへと見舞っていたのだ。

その竜頭の動きは既に常識の範疇から外れ、しかしそれ故にスタークへと”虚”を突いた一撃を見舞う事に成功していた。
明らかに首の骨が折れる挙動、首が一蹴したかのようなその動きをして尚、その首の先の竜頭は顎を開き、雄叫びを上げる。
それはネロが既に外れているという事を顕すには充分。
暴走した霊圧、暴走した肉体は既に常識という範疇から外れ、彼が唯一残した殺意を具現するためならばどんな事でも可能と判断するかのように、不可能すらその肉体を破壊しながらでも成してしまおうとするかのように動く。
そこに痛みは無い、痛みという感覚すら今の彼には無い、殺した後にある愉悦を感じる事すら今の彼には無い。
今の彼に最も重要なのは”殺す”という行為であり、それによって何かを満たそうとしてるわけではないからだ。

「■■■

な事になっちまったな・・・・・・」

呟きながらスタークは自らの足へと視線を落とす。
そこにはまるで脛から下が焼け焦げたような彼自身の右足、ネロが放ったスタークの”虚”を突いたかのような一撃。
スタークはそれを察知し、即座に回避行動に移ったがそれでも間に合わず、ネロの虚閃にその右足をもって行かれたのだ。
その傷を心配そうに気遣うリリネット、そんな彼女の言葉にスタークは問題ない風で答える。
実際ネロの間近からある程度の距離を置いた現在地までを片足で駆けたスターク。
移動という点で言えばまったく問題は無いが、戦闘においては不安が残らないわけではない。
更に予想外であったネロの動き、首が捻れ折れることすら関係無しに彼を狙い撃った様はスタークにとって不安材料でしかなかった。

予想、それは経験から導かれる積み重ねの幻視。
数多の戦いを潜り抜けた者のそれは、経験の裏打ちによってより確実性を増していく。
敵が次にどう動くか、何を狙っているのか、数多ある選択肢から或いは可能性からの取捨選択、思考を読み、戦いの流れを読み、身体の微細な動きを読み、そこから導かれる敵の一手。
そして戦いが高度になるにつれそれは先読みの戦いとなる。
一手先、二手先、と敵に先んじる事を己が利としての戦い、心静かに戦う者に見られる極地の思考。
スタークという破面はどちらかと言えばこちらに分類される戦士。

敵を見通す事に長けたその戦い、しかし今のネロにその戦い方は通用しなかった。

まずもって読める思考が無い、行動原理に殺意という一過性はあるもそれだけで流れを読めるはずも無く、自らの身体の稼働範囲、傷つく事など無視した攻撃はそもそも読めるものではない。
手詰まり感が否めないその状況、スターク自身も面倒な事と言っている通りあまりに割に合わない戦いですらある。

しかし、スタークの瞳は戦いを投げたそれではない。

口では面倒だと言いながらも、その瞳にあるのは勝利への道筋を探す狼の意。
どうすれば勝てる、どうすれば倒せる、どうすれば殺せる。
それを探し続ける餓えた狼の意が、彼に瞳には浮かんでいた。
如何に相手が強くなろうとそんな事は彼には今関係なく、彼にあるのは大切なものを傷つけられそうになった事への蒼く燃える怒りと、その大切なものを必ず守るという強い決意。
それがあるからスタークは諦める事は無いのだ。

「さて、どうするか・・・・・・って、オイオイ。いきなりどうなってんだ?あれは・・・・・・」

痛む右足を意識から切り離し、戦いへと意識を向けたスターク。
上げた視線の先に映るのは黒く巨大な岩山とそこから生える竜の頭と尾。
だがその巨大な岩山を見たスタークは驚きと困惑の声を上げる。
それは視線の先で起こった不可解、考えられない光景によるもの。

スタークの視線の先にいるネロ、その彼は今、双竜の顎から幾本もの虚閃を無差別に、それこそ天地の区別無くただ無差別に吐き出し、連射していたのだ。

冴え渡り、尚且つ意表をつくかのような攻撃を見せたのは最初だけ。ネロが、その殺意が追い求めた最良の形を見せられたのは、本当に最初の一合だけだったのだ。

冴えは影を潜め、ただ暴が暴として、そのあらん限りを撒き散らすその光景。

殺意の最良すらもが暴れだし、ただ粗野で粗暴、見るに耐えないながらしかし、力のみは本物であるが故に手におえない。

何を狙うでもなく、何か目的があるわけでもなく、ただただ降り注ぎ、或いは天を逆昇る緋色の雨。

雄叫びと、竜の顎から放たれる虚閃、竜吼虚閃（ドラゴ・グリタール・セロ）はただ無差別に放たれ続ける。

空の彼方、或いは地平線の彼方、時には眼下に広がる砂漠、そして彼等の居城である虚夜宮を掠めるようにして放たれ続ける虚閃群。

その行動に、とうに意味は無かった。

スタークを仕留めたのか、そうでないのかも今のネロには判っているか怪しい。

それは今のネロが一つの命を奪う事に執着しているのではなく、ただ命さえ奪えれば何でもいいと、殺戮し、虐殺し、よりこの赤の世界を濃くできればそれでいいとしている為。

質よりも量、大量の血が彼の視界を染め上げる事だけが今、彼がその殺意でもって求めるただ一つ。

故に荒ぶる。

もっともっと殺させろと、その叫びはただの音ではなく虚閃を伴っ

た雄叫びへとその姿を変え、いまや降り注ぐ暴雨とすら思える。
災害、ネロ・マリグノ・クリーメンを称するのに最も端的なのはこの言葉かもしれない。
暴君も、暴虐の徒も、そして彼が自称する”神”もすべては霞む、今の彼の姿の前では。
前触れ無くただ等しく降り注ぎ、無慈悲に、そして救いなく奪い去っていくその様はまさに災害。
巨大な台風、それが唯一つの肉体に収まったかのような、虚閃を雨の如く降らせる彼の姿はそう思わせるに充分たるものだった。

考えなど無く、ただ無計画に際限なく放たれ続ける虚閃。
暴雨の中鳴り響き天を引き裂かんばかりの雷が如き雄叫び。
まるで自分の霊圧に底等無いと言わんばかりの姿、霊圧を弱め数を増やしたわけではなく、常時以上の霊圧を込めた虚閃の大軍。
抛っておけば程無くこの場が更地になるのではないかというほどの暴雨。
それはネロが意図した行動ではないのかもしれない。

暴走。

行動に理由も意思も感情も何も無い、理論的思考は無く、説明する事さえ不可能。
どうしてそれに至ったのか、また至るのかを論じるのはあまりに無謀でありそもそもたどり着けるはずも無い。
何故ならそれに理由など無いから、思考も、理論も存在しないから。
唯一ある殺意だけが彼の指針を決め、その感情すら暴走し、何のためのそれだったのかすら忘れている始末。
故に行動に意味は無い。

ただ撒き散らされた災害と同じという事。

それを前にし、スタークは意を決した。
こんな馬鹿げた者をこのまま抛っては置けないと、彼ら二人がいるのは天蓋の上、そしてその下には同胞が、数多くの同胞が居りこのままでは目の前の竜の餌食になることは目に見えていた。
天蓋の下にいる者にとっては今はどうという事は無い存在であるスターク。
しかしスタークにとっては、スタークとリリネットの二人にとっては彼らは等しく尊い存在。

ならばどうするか、問わずとも答えなど決まっている。
彼自身が決着をつけるという答えが。

銃嚢に納めていた彼の分身を引き抜くスターク。
銃把を握る手に力が篭り、霊圧はただ巨大に発するのではなく細く研ぎ澄まされる。
穿つ、それは大河の奔流ではなく一滴の水が如く。
自らの意思をそう在らんと変革し、その意思を弾丸に乗せるために。

宙を左足で蹴り、その一歩でネロを最も彼の武器が有効である間合いで捕らえたスターク。
近すぎず、しかし遠すぎず、敵を捉え逃がさぬ間合いでありスタークの必殺の間合い。
もっともこれから彼が放とうとしている技を敵が避ける術は無い。
一度放てば敵がその欠片すら残さず消え去るまで続くかのようなスタークがもつ”切り札”。
故に間合いなど関係ないのだが、それは気構えの問題。
自らの状況、それが最良のものであるという自覚、それがある故に自分は負けないという一種の暗示。

強き想いとは力へと直結する。
自分は負けないという気概が無く戦いに挑む者が負けるのと同じ事であり、”負けない”と考えるか”勝つ”と考えるかの違い。
それをもってスタークは殺意すら暴走させ、命奪う暴雨の源となったネロと対峙したのだ。

再び自らの視界に現れたスタークをネロは岩の仮面に埋もれた瞳と、双頭の竜の瞳、合わせて六つの瞳でその姿を確認した。
しかし、今の彼にスタークをスタークとして認識する術は無い。
あれだけの屈辱、あれだけの痛みとそして僅かばかりの恐怖という恥にも似た感情を抱かせた相手、それが目の前に再び現われたというのに彼にはそれを認識する術が無い。
人も獣も、破面も大虚も死神も、今の彼には等しく同じ。
ただ殺戮の対象という区切りでしか認識できない。
血を撒き散らす肉塊としてしか。

「■■■

「相変わらず声だけはデカイな・・・・・・だが言ったろう？　威嚇の心算ならそいつは無駄だ。・・・・・・まぁ、これを言ってもきっと無駄、なんだろうが・・・な・・・・・・」

雄叫びと衝撃波、それを全身に浴びてもスタークは揺るがない。
それはリリネットと同じ揺るがない瞳と決意、倒すという、そして護るという決意がそうさせる。
故に揺るがない、何の覚悟も無いただ撒き散らされるだけの力には。

「■■■

の砲弾が顎の中で解き放たれるその時を待つ。

「なんだよ、そういう事ならこっちも望むところだ。手間が省けたな・・・・・・」

二つの顎に生まれた無数の砲弾を前に、スタークはそう零した。
まるで脅威を感じていないかのようなその言葉。
そしてそれを待っていたとすら言いたげなその言葉をスタークは発したのだ。

スッと両手に握られた銃の銃口がネロへと向けられる。
それは迎え撃つという合図、ネロの双頭の竜が放つ強力な虚閃を迎え撃つというスタークの意思表示。
単純に竜頭が増え二倍となったその量、そして尋常ならざる霊圧をもってして形成された砲弾の威力、それをスタークは逃げる事無く正面から迎え撃とうというのだ。

そんなスタークの決意、意思表示など今のネロに伝わるはずは無い。
ただ殺意の砲弾が完成したという理由で、或いは血肉が弾け赤く視界が染まる事を望んで緋色の砲弾は放たれた。
無数の砲弾からさらに生まれる数える事すら馬鹿らしくなる数の虚閃の群れ。
そのどれもが触れただけで命を奪う死の光、そのどれもがネロが暴走の果てに産み出した虐殺の雨。

それを前にスタークは銃を構える。
目の前を覆うほどの緋色の群れを前にやはりその瞳は揺れない。

精神は波立つ事無く、全てを見通すかのようなその灰色がかった蒼い瞳はただ見据え、そして引き金は引き絞られた。

「――――――　無限装弾虚閃（セロ・メトラジェッタ）。」

小さく、しかし明確に発せられたその言葉、そしてその後の変化は劇的だった。
目の前を覆うかのようだったネロが放った緋色の虚閃群、竜吼虚閃。
その強大な波濤はスタークを飲み込む事無く、それどころか彼の遥か手前で押し留められていた。

スタークの銃から放たれる際限ない虚閃の嵐によって。

威力、弾速、連射性、そのどれもが規格外だった。
ネロの放つ虚閃の群れ、その虚閃一発に対し数え切れないほどの虚閃が迎え撃つようにぶつかっていく。
まったく衰える事が無いその攻撃、ネロの虚閃が点によって面を覆い尽くすものとするならば、スタークのそれは点など生ぬるいまさしく壁そのもの。
それを何の苦も無く行っているスターク、そして銃として彼を支えるリリネットの二人。
無限装弾虚閃、リリネットの圧縮装弾虚閃が”千”を”一”として放つ攻撃とするならば、スタークのそれは”千”を”千”として、しかし一度に放つかのように、そしてそれを維持し続けられるかのうような攻撃。
完全な面制圧、敵に逃げ場など与えない単純且つ苛烈な攻撃。
それをしてスタークはネロの虚閃を迎え撃ったのだ。

いや、”迎え撃った”という言葉には語弊がある。
攻撃をしたのはネロが先、それに合わせたスタークは確かに迎え撃ったともいえる。
しかし今攻撃をしてるのはネロではなくスターク。
スタークは今攻め立て、そしてネロは押されているのだ。

その証拠にじりじりと緋色の光が根元へと向かって後退を始める。
押し込むのは当然群青色の壁、僅かの衰えも見せずただ淡々と、しかし確実に緋色の光を圧し戻していく。
ネロの虚閃はスタークのそれと似て無数の虚閃を放つ技。
しかしそこには違いがある。
それはスタークの虚閃が関する”無限”という名。
ネロの虚閃には限りがあり、そしてスタークのそれに限りは無いという事、細々とした違いは多々あれど全てはそこへ集約される。
そして有限と無限のぶつかり合いに勝利するのは必然、無限である……

のだ。

最早竜頭の鼻先まで圧し戻されたネロの虚閃。
スタークは面で制圧していた虚閃を器用に撃ち分け二つに絞り、双頭の竜へと撃ち続ける。
顎を閉じる事もできず、ただ押し込まれ続けるネロ。
そして有限とは終わりがあるという事、ついにネロの虚閃はその照射を終え消え去ってしまう。
それはよくもった方といえるだろう、無限を相手に有限が出来た抵抗という点で言えばよくもった方、だがしかしそれだけ、そしてスタークの攻撃はまだ終わっていない。

開かれた竜の顎（アギト）、そこにスタークの無数の弾丸が次々に叩き込まれる。
際限無く、次々と、止む事無く叩き込まれ続ける群青の弾丸。
口の中にまでネロの鋼皮、黒曜鋼皮は存在せず外皮に比べれば格段にやわらかいその肉を突き破るのに、スタークの虚閃が苦労するはずも無い。
次々と撃ち込まれる弾丸は肉を裂きしかしそれでも収まらない。
見る間に膨れ上がる双竜の頭、そして腕であり首。
だが硬すぎる外皮はその膨張を許さず、自らの肉体の膨張すら押さえ込んでしまう。

押さえ込まれた膨張、しかし無限に撃ち込まれる弾丸は止まらず、次第その砲撃の勢いに圧されネロの身体は天蓋へと落とされていく。
天蓋に脚が着き、しかしそれでも無慈悲な弾丸達はネロに襲いかかり続ける。
足元の大地、天蓋に罅が入り徐々に彼の身体が沈んで行こうともお構い無しに。

それが戦い。
無慈悲に、容赦なく、敵と定めたならばそんなものをみせる事無く進む。
それこそが戦いであり、スタークが選んだ道。

「悪いな・・・・・・　アンタには、容赦はしないって決めてんだ。」

膨れ上がりしかし押さえ込まれた膨張は、竜の頭から徐々にその根元へと広がっていく。
鋼皮は押さえ込める限界に達し、ひび割れを起ししかしいまだその存在を全うするために新たに生まれ、そして硬くなりしかし割れていった。
最早限界、もしネロに今も痛みというものがあり、苦しみというものがあったならば叫び声を上げていたかもしれない。
しかしそれも群青の弾丸によって叶わず、発しようとした音は群青の流れに圧され喉へと戻っていくだろう。

双頭の先からの膨張は肩という竜と竜が交わる部分にまで達し、それでも撃ち続けられる弾丸と霊圧を内包したそれは、外皮と膨張の危うい均衡によって形をとどめていた。
いまや雄々しき竜の姿はそこに無い。
あるのは醜く肥大した最早竜とは呼べない膨張した肉とそれを覆う黒い岩。
悲しきその姿、しかし自分の現状すら今のネロには判らないのかもしれない。

何も無い、最早彼には何も無い。
雄叫びすら今の彼はあげる事ができない。

そして遂に、均衡は尚も打ち込まれる弾丸によって崩され、彼の肉は巨大な爆発を伴い、天蓋を巻き込んで爆ぜた。

崩れ落ちる天蓋、今まで奇跡的に形をとどめていたそれが今崩れた。
大きな穴を開け、しかしその破片すら消し飛ばした爆発。
膨大な量の霊圧が圧し留められ、限界を迎えたために起こった爆発は蒼い火柱のような霊圧と爆煙を発生させた。

「殺った・・・か？　・・・・・いや、まだ生きてる。”下”に落ちたってのかよ。　こいつはどうもマズい・・・な。」

爆発によって乱れた霊子の流れ、その中にあってスタークはいち早くネロの生存と行方を掴んだ。
天蓋へと押し込んでしまったのは拙かったと内心で零すスターク。
あのまま消し飛んでいたならば問題は無かったが、霊圧を見る限りネロはいまだ生きており、天蓋の上にその身体が見えずまた感じられない事から天蓋の下へと探査回路を広げれば案の定、高速で落下するネロを感知する。
それもどういう確率か、広い虚夜宮の中で今もっとも命が集まる闘

技場へと落下するネロの姿を。

小さな舌打ち、それは悪運を引き寄せるネロに対してか、それとも戦場を移したというのに結局意味を成さなかった自分の間抜けさに対してか。

しかしそれでもスタークは駆けねばならない。

今あの場所にネロを解き放つ事はあまりにも危険、理性の欠片すらなく、ただ殺戮を行おうとする彼を解き放つのはあまりにも危険であるが故に。

その為に彼は駆ける、暗い夜空から明るい晴天の下へと急ぐように。

――――――――――

炎の波濤、拳の意を乗せた炎拳とも呼べる一撃はその行く先にあった事如くを灰燼と化し、無に帰した。

波濤が治まると炎へと変わっていた拳、そして腕は人のそれへと戻り、残心の後フェルナンドはその構えを解く。

元々崩れていた闘技場の一角、それが今は何も無く外へと繋がる巨

大な穴となり果てていた。
瓦礫も、そこで息絶えていた破面もそして彼が戦っていた相手、第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルーすらも飲み込んだフェルナンドの炎はそれらを何の区別も無く焼き尽くし、消し去った。
火葬、そう呼ぶしかないその出来事。
その場面を見ていた多くの破面は言葉を失っている。
解放の後あまりにも呆気なく訪れたその結末、十刃が文字通り手も足も出ず、いや、出す事すらなく圧倒的な敗北を喫したという事実。
元々弱っていた闘技場の結界だが、しかしものともせず突き破り、まるで彼方まで炎で道を開いたかのような一撃。
世の開闢にも似た炎の波は、言葉を失わせるには充分に強力で、なにより美しかった。

「ぼさっとしてんじゃねぇよ。　終いだ、俺は行くぜ。」

炎髪を靡かせながらフェルナンドは立会人である東仙に対しそれだけ告げると踵を返し、その場を後にする。
一瞬目の前の出来事に呆けていた東仙は、しかし慌てた様子を見せずにフェルナンドの勝利を宣言した。
だがフェルナンドはそれを背にし、別段気にしている様子すら見せない。

彼からしてみればその場所は既に用済みの場所であった。
戦いが過ぎ去ったその場所は既に彼の居場所ではなく、戦いの内にこそ目的を見出すフェルナンドにとって”終わった”場所は無意味だったのだ。
戦いの方も確かに面白くはあったが未だ燃え尽きるほどのそれではなく、当然それで彼の求めるものが手に入ったわけも無くまだ彼の

胸は空虚。
十刃が相手でも満たされない彼の実感、そしてそれを得るにはただ強者であるというだけではなく恐らくはもっと別の、”力”だけではない何かを持つ相手が必要だと、フェルナンドは感じ始めていた。

（確かに厄介で強い相手だった・・・・・だがそれだけだ。それだけ、他に何も無ぇ・・・・・俺が求めてんのはこれじゃ無ぇ、もっと熱く血が滾るような敵だ。血が沸き立ち、だが身震いが止まらねぇ様な、そんな戦いだ。グリムジョー、ウルキオラ、スターク、そしてハリベル・・・・・やっぱりお前らしか居ないのか、俺の答えをみせてくれる敵ってぇのは・・・よぉ・・・・・）

戦いの後に残ったのは空虚の実感。
そしてそれを満たす術を更に求めるフェルナンドの姿だった。
戦って、戦って、戦い続けた先にある”生”の実感。
追い求めるのはそれ一つ、他は余分で瑣末な事。
故に彼は戦いを求める、戦いが終わったその瞬間から次の戦いを。
空虚を実感したが故にそれは強く、彼の瞳にはより強い炎が宿ったかのように紅を深める。
全ては究極の戦いの先にあるだろう、たった一つを手に入れるために、と。

背に降りかかる歓声は無い。
罵声も、謗りも罵りも、その背にかかるものは何も無かった。
皆が無言、それぞれがそれぞれに思う事はあれど口には出さない。
無音の闘技場を悠然と歩くフェルナンド、その姿は堂々としたものでただ触れれば火傷では済まない熱を帯びていた。

その無音の闘技場に突如巨大な音が響く。
音の主は巨大な砂柱を伴って現われ、それを雄叫びによって消し飛ばした。

「■■■

ネロの身体を覆っているかのような岩は所々砕け、その裂け目から血を滴らせ右腕はおかしな方向へ曲り、垂れ下がる。
背中に生えている棘は悉くが折れ、或いは拉げ、そして何より左腕が肩口より先を失い、その付根から大量の血を流し続けていた。

明らかに瀕死といえるその姿、だが今尚続くその雄叫びに痛みや苦しみの色は無い。
そもそも感情の色がその雄叫びにはなかった。
理由など要らずただ叫ばずにはいられないといった風のネロの姿。
尋常ではない、それだけがその姿を見た全ての破面の共通した見解でありそれは正しかった。

ネロの霊圧が一瞬膨れ上がる。
すると折れた右腕は跳ねるように暴れまわりながら元通りに。
そして腕を失った左肩は、その根元から肉が盛上ると竜の首が伸びるのではなく、左肩から直接巨大な竜の顎(アギト)が生まれ、誕生の雄叫びを上げたのだ。
最早”異形”と言うより他無いその姿。
人を捨て竜となり、竜を捨て魔となったその姿でネロは吼える。

そして雄叫びと共に生まれたのは、巨大な竜の顎から放たれた極太の虚閃だった。
何の前触れも無く突如として放たれた虚閃は闘技場の一角をそこにいた破面ごと消し飛ばし、消失させる。
突然の凶行、それは今にはじまったことではないがそれでも理解不能の行動は、それを見た者達を恐慌に陥らせるには充分すぎた。
ただ命を奪う、という行動しか出来なくなったネロがその蛮意を存分に振るい続ける。
彼の視界の赤は深まり、それでも満たされずただもっと多くの赤を

求めるネロ。

「見境なし・・・か。　とてもじゃねぇが見るに耐えねぇな。」

そんな言葉がフェルナンドから漏れる。
それは最早戦いとすら呼べない暴力であり、それ故にネロらしくしかし、醜悪でもあった。
意志なき力の愚かさ、それが今闘技場に産み落とされ如何なく振るわれ続ける。
意思も、目的も無いその行動。
それ故に醜さと愚味は際立ち見るに耐えない。

そしてそれはフェルナンドのみならず、この場に居る力ある者達の総意でもあった。

叩きつけられた拳によって豪奢な椅子の肘掛が崩れる。
そこに座す老人、第1十刃（プリメーラ・エスパーダ）”大帝”バラガン・ルイゼンバーンはその顔を怒りに染めていた。
眼下で繰り広げられるあまりに醜悪な見世物、何の意思も無く暴走する目をかけていた者の姿は彼を怒らせるのに充分すぎた。

「馬鹿タレめが・・・・・・　御すべき力に溺れ、更に溺れた力に飲まれるとは・・・・・・なんという醜態！　十刃の恥曝しめが！
最早彼奴に何の価値もありはせん。聞こえておるか！　ボス！　この賭け儂の負けじゃ！あのような愚物に僅かばかりでも期待した儂

の愚かさよ・・・・・・席などくれてやる！　誰なりと座らせるがいい！！」

轟々と燃える怒りの中、バラガンはネロを完全に斬って捨てた。
少しでも、ほんの少しでもネロが成長し、戦士たらんとするならばバラガンもここまでの怒りを見せないあっただろう。
だがしかし、彼の眼下に広がるのは己が力に飲まれた愚か者の姿。
暴を振るうのではなく暴に振るわれる見るに耐えない末路の姿だった。

故にバラガンは怒った、そして何よりそんな愚物を見抜けなかった自らの愚かさに彼は怒った。
虚圏の王が聞いて呆れると、あの程度の者を見抜けずに何が王かと、そしてあのような醜悪なものが勝ち取る醜悪な勝利で玉座を得るなど耐えられないと。
それ故バラガンは藍染に向かって叫ぶとそのまま観覧席を後にした。
もしこのまま見ていれば彼自身、他の破面など気にせずネロに”死”を吹きかけてしまいそうだったため。
賭けという訳の判らぬ単語を叫ぶ主をして、しかしその後に続くかのようにバラガンの従属官達もその場を後にしていく。
従属官を引きつれ大股で肩をいからせながら歩くバラガン。
その瞳に浮かぶ怒り、そしてその怒りに隠れた哀れみが何処か悲しさを誘っていた。

「フフッ・・・・・・」

ネロが暴れ、バラガンが去った闘技場で藍染は一人笑みを深めていた。
眼下で繰り広げられるのは、些か滑稽に過ぎる喜劇。
その主役たるネロの姿は藍染の想像以上に醜悪で、しかし滑稽な道化だった。

だがその微かな笑い声を聞き取ったのか否か、ネロが藍染へと向けて竜の顎を開き、そして虚閃を放ったのだ。
極太の虚閃、極光は奔りしかし藍染は座したまま動くことは無い。
それが当然であるかのように、それをせずとも自分には何の問題も無いという事を示すように。
そして事実、藍染に迫った緋色の光は上空から降り注いだ群青の雨によって遮られた。

「すまなかったね、スターク。　おかげで私は無事だ。」

「別に・・・・・・　それに俺が何もしなくても、怪我一つなかったと思いますがね。」

「そんな事はないさ、感謝しているよ。」

「へいへい・・・・・・」

群青の射手は上空から藍染に背を向けるようにして彼とネロの間へと降り立った。
藍染の謝辞にどこか呆れた風で答えたのはスターク。

天蓋よりネロを追い、駆けつけた彼が見たのは消し飛んだ無数の命の残滓だった。
護れなかった、そんな苦い思いがスタークには浮かび、ギリと奥歯を噛ませる。

「すんませんね、藍染サマ。　俺が・・・俺達が直ぐに終わらせますんで。」

そう言って両手の銃を銃嚢へと納めようとするスターク。
それは決意の表れなのだろう。
この状況で銃を納めるという事は銃を用いた”切り札”、無限装弾虚閃ではなく別の何かを示唆する行為。
そしてそれは即ち、スターク、そしてリリネットが使用を躊躇った”狼”というものに他ならない。
それは覚悟、使いたくないといったものを使う、使わざるを得ない状況を前にそう決断する覚悟の現われ。
多少の強張りをみせるスタークの表情がそれを物語る。

が、それは思わぬ人物によって止められた。

「いいや、いいんだよスターク。　彼の相手は私がしよう。」

そう言って立ち上がったのは彼の後ろにある玉座に座していた彼等の”王”。
笑みを浮かべ、しかし暗い瞳で世界を見る尸魂界はじまって以来の大逆人。
世界をその掌中に納めんと、いや、世界は既にその掌中だと言わんばかりに誰も座った事が無い”天の座”に自分こそが相応しいと豪語し、そう言えるだけの尋常ならざる力を持つ異端の死神。
その人物こそ、”絶対王”　藍染惣右介その人であった。

君は優秀だ
他の誰よりも
だから
君は

私の為に

消えてくれるかい？

BLEACH El fuego no se apaga. 56（後書き）

まだ決着がつきませんでした・・・・・

ネロの暴走、本当はここまでする心算なんてなかったんですが
いつの間にやらこうなってしまって・・・・・・
暴走が作者にもうつったのか？

そして大帝お冠の後、スタークと思いきや藍染さんという・・・・・・
・
カオスｗ

さてさてネロは一体どうなるんでしょうか。
それは作者も書き始めないことには判りませんｗ

まぁ今週はチラッと主人公も出せたし良かったかな。
・・・・・もう言ってることがおかしい。
主人公出せてよかったとかどんだけだよ。

「いいや、いいんだよスターク。　彼の相手は私がしよう。」

さほど大きい訳でも無く、しかしその声は絶対的な力を帯びていた。
やや低く、しかしよく透るその声。
口元に笑みを浮かべ、だがその瞳には虚圏の夜空より尚暗い闇を宿したその声の主の名は藍染惣右介。
虚夜宮において唯一人に座すことを許された玉座の主、死神でありながら破面という存在を生み出し、束ね、支配する絶対の王はその言葉と共に静かに玉座から立ち上がった。

眼下には未だ雄叫びを上げる魔獣の姿。
第2十刃（ゼグンダ・エスパーダ）　ネロ・マリグノ・クリーメン、その成れの果て。
暴走した精神、暴走した肉体、それをしてなお暴走に暴走を繰り返した彼の姿は既に人型を捨てている。
しかしネロに止まる気配は無い、それどころか加速しているとすら

思える。
雄叫びを上げ、そして肩から生えた巨大すぎる竜の顎（アギト）から時折放たれる極太の虚閃は今尚闘技場を崩していた。

その姿を藍染は笑みを浮かべて見下ろす。
笑み、怒りでも悲しみでも憤りでも哀れみでもなく、ただ笑みを浮かべている。
まるで全てを判っていたかのように、まるで全てが上手くいったとでも言わんばかりに。
その笑みからはただ絶対的な自信と、自負が溢れていた。

「は～、それにしても二番サン、益々けったいな格好になってしまいよったなぁ。もう面影も殆ど残っとらへんのとちゃいます？」

「戻ったね、　ギン。　ご苦労。　」

そうして眼下のネロを見下ろしていた藍染の隣に、白い羽織を靡かせる様にして降り立ったのは銀髪の死神、市丸ギン。
藍染の”眼”として天蓋の上で戦うスタークとネロの戦いを見守っていた彼。
しかし天蓋の上で戦いの決着は着かず、二人が図らずも天蓋の下へと降りたことから彼もまた天蓋の下へと降りてきたのだ。

「あら？　もしかして隊長自ら二番サンと戦（や）りはるんですか？」

「あぁ、これもまた必要な事なんだ。彼らにとって、そして私にとって・・・ね。　」

何処か意味深な言葉を残し、藍染はスタークと市丸の前から掻き消えるようにして姿を消した。
その言葉が持つ意味、藍染がネロという御せぬ駒を生かし続けていた理由。
藍染が自ら戦いに挑むという由々しき事態、しかしそうして戦場に赴いたであろう藍染の姿に市丸、そしてスタークも何一つの不安を感じてはいなかった。
藍染惣右介という”王”の力を知っているが故に。

闘技場の砂漠、その中央に陣取り意味も何も無い雄叫びを上げ続けるネロ。
その声というより音と言った方がいいかもしれないそれに、感情の色は何一つ無かった。
ただ叫び、雄叫びを上げずにはいられないというそれだけの理由、叫ぶ事に理由は無くただ叫ばなければいられないネロ。
何もかもをなくしつつ駆る彼は、次第動きにすら精彩を欠いていく。
虚閃もただ放たれるだけで狙いなど一切つけず、三本の尾はただ意味も無く暴れまわるようにして砂漠を叩く。
その姿はどこか痛々しくさえあり、しかしそんな感情を抱けるものはこの場にはいなかった。
皆が必死なのだ、ネロという脅威から逃れるために必死にその場か

ら逃げ惑う。

愉悦の為に他者を殺していたネロ、しかし今の彼にはそれすらなく、それ故に性質が悪い。

理論だった攻撃ではないそれは、突如として放たれそして理解不能な位置を撃ち抜いていく。

一介の破面がとても避けられるものではなく、まして下官、モドキといった位が低いものからすればなおの事。

ただ彼らは自らの運だけを頼りにこの場から逃げようとしているのだった。

押し迫るかのごとき暴雨から。

「みっともねぇなぁ、えぇ？　クソデブ。それじゃぁ餓鬼が暴れてるのと変わらねぇよ。」

そんな虚閃の暴雨と雷の叫びの中心たるネロに、今話しかける者が居た。

フェルナンド・アルディエンデ、第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルーとの強奪決闘、十刃越えを終えてこの場から去ろうとしていた彼はあろう事か未だその場から去る事無く、縦長の大扉の前に座り、寝ろと相対していた。

それはあまりに無謀というもの。

敵、と呼べるかは疑問であるがそれでも味方ではない者の前で座るというのはリスクが大きすぎる。

初動、重心、その他もろもろ座っているという事は不利に働く場合があるからだ。

いかに解放したままであるといってもそれはあまりに浅薄、ネロと

いう存在を軽く見ているとしか言いようがない行為。
それをフェルナンドがしているという事への疑問、拭えぬ不可解がそこにはあった。

だがそれは常人から見たならば、ということに尽きるだろう。
今、フェルナンドが座りながらも対しているモノは既に”人”ですらない魔獣。
そんな疑問を感じる事など無く、そして相手がフェルナンドであるという認識すらなく、ただ声がしていたというあまりにもな理由で彼の端が裂けたかのような人の口からフェルナンド目掛けて虚閃は放たれる。
緋色の閃光は瞬時に駆けフェルナンドを焼き尽くさんとして迫るが、それは片手を前に突き出したフェルナンドが創り出した炎の壁によって阻まれてしまった。
高密度の炎と霊圧、それによて阻まれたネロの虚閃。
だがネロはそれになんら動揺する様子を見せず、それ以前に動揺という自称を失った彼にそれは存在せず、人の口が駄目ならば竜の口でといわんばかりにフェルナンドへ向けてその左肩の竜の顎を向けた。
開かれる顎、鋭い牙が鎖鋸のように並び唾液を滴らせる様は醜悪で、しかし強烈な“力”を感じさせる。
だがそれを前にしてもフェルナンドは動かない、それは油断でもなんでもなく彼が理解しているから。

この場の主役、それはネロでも自分ではなく彼であるという事が。

「ハッ！　変ったのは形（ナリ）と馬鹿みたいな霊圧だけか。ったく、何遍も言わせんじゃねぇよ、テメェに、探査神経（ペスキス）ってもんは、無ぇのかよ。それにテメェは俺の獲物じゃ無ぇ、俺はただ此処で見物だ。そら、テメェの相手はテメェの後ろにいるだろうが。」

「そういう事だよ、ネロ・・・・・・」

竜の顎の射線上にながら、フェルナンドが勤めて冷静でありそして戦いの気配を見せていなかった理由。
それはネロと戦うのは自分ではないと理解していたが為。
もともとネロはスタークに譲った獲物であり、それが目の前に再び現われたからといってこれ幸いと喰らい付く様な野犬まがいの行いをフェルナンドがよしとするはずが無い。
誰彼構わず牙を剥くのは威嚇と同じ、牙とは本当の戦いまで研ぎ澄ましておくものなのだから。

フェルナンドはネロの虚閃を弾くために前に突き出していた手で彼の後ろを指差した。
その指先にいるものこそネロが今、最も戦わなければいけない相手。
探査神経が無いのか、とネロに言い放ったフェルナンドだが実際彼がその者の存在に気が付いたのは探査神経もあるが、戦闘後の研ぎ澄まされた感覚ゆえだった。
暴れるネロの霊圧、その暴風に紛れフェルナンドに走った直感。
そして見上げた視線の先には、まるで自分がそちらを向くことが判っていたかのように彼を見下ろす暗い瞳があった。
故にフェルナンドは気がつけた、瞳の奥、その真意は闇に包まれ見えないながらもその男が纏う気配を見たために。

「■■■

上辺だけの褒め言葉を述べ、ネロと相対した藍染。
それ程離れていない二人の距離は、それこそネロが一息だ藍染にその爪を突き立てられる距離。
何の優劣も区別もなく、ある意味平等でしかし無慈悲にその爪を、牙を振るう今のネロに対しその距離感は非常に危うい。
こちらが対話の姿勢をみせたとてネロにそれが通ずる筈も無く、噛み付かれ、引き裂かれるのは微々たる時の差でしかない。
だがそんなネロを前にして藍染は常通りの笑みと、何処か芝居がかった口調をそのままに相対していた。

「君の先程の虚閃、　スタークが止めなければアレは私に当たっていたよ。これがどういう事か判るかい？　私は君達の”王”であり、君は・・・君達は私の”臣”にすぎない。そして先の虚閃は”王”に対する”臣”の反逆に当たるとは思わないかい？王とは寛容であるべきだが、寛容と甘さは違う。先の攻撃、理性が無いからといって許されるものではないよ、ネロ。」

淡々と、しかし明確に発せられた言葉は言うなればネロの未来を閉ざすような言葉。
王である藍染、その藍染に対してネロが放ったのは完璧なまでに殺意が篭った死の閃光。
そしてそれは逆臣の刃、王の喉下を突き刺し、或いは心臓を貫かんとする逆臣の刃そのもの。
ネロの普段の行い、藍染への態度、そのどれをとっても良き臣とはいえなかっただろう。
しかし、それは藍染が寛容という名の下許していたというだけにすぎない、殊更ネロに対して寛容に振舞っていた藍染、ともすれば優遇とすら感じられるそれは恐らく間違いではないだろう。
それはただただ藍染にとってネロが必要な駒であったが故、しかし

それもこれまで。
先の一撃はネロに対する優遇をもってしても目に余り、そして決定的だったのだ。

「残念だよ、ネロ。　君は非常に優秀だった。ある意味他の誰よりも、こうして私自ら手を下さねばならないのは辛い事だ。だがこれも”王”の務め、反逆には”力”を持って制裁とするより他の選択肢など、ありはしないだろう？」

「■■■

それこそ理由など何でも良かった。
不敬が過ぎる、命令に背いた、争いを起しすぎた、それこそ上げれば限が無いほどネロを処分する口実など溢れている。
それを今までしなかったのは一重にこの時、この場において処分するため。

藍染が創り上げた集団、破面という名の化生たちが成すその集団、それは一つの目的の為に集まったのでも利害が一致したため形成された集団でもない。
彼らは皆一様に藍染惣右介という一人の死神が、自らの目的の為に彼等の意思など関係なくその”力”によって使役し、支配した集団。
云わば”力の支配”によって形成された集団なのだ。
それは絶対的な支配の形、逆らう事は許されず逆らえばそれ即ち死。
表立って見せしめを殺すのではない、ただ彼等破面の中に圧倒的な恐怖を、恐怖より生まれた彼らに恐怖を刻み付ける藍染の絶対的な力、それによる支配の形。
それはあまりに圧倒的で彼らに逆らうという思考を与えない。
自由に振舞わせ、それぞれの思惑を許し、しかしその実彼等の奥底を雁字搦めに絡めとる恐怖の鎖こそ、藍染が彼らを繋ぐ手綱。
それをして”力の支配”、圧倒的なそれを見せ付けることこそ彼等破面は藍染に着き従うのだ。

だが、圧倒的に見えるそれもその実脆くある。
恐怖とは与えすぎれば壊れ、しかし与え無さすぎれば弛緩してしまう。
時を置けばおくほど、恐怖を与えられていた者達はその恐怖を急速に忘却の彼方へと押しやり、忘れてしまう。
それは”力の支配”にとっては看過できぬ事態。

言うなれば絡め獲っていた奥底の鎖が緩みだすという事、そして緩んだ手綱を引いたとて彼らは思い通りには動かないという事なのだ。

藍染惣右介の計画、その第一歩である『崩玉（ほうぎょく）』の入手にはどうしても時間が必要だった。

それは長い長い下準備の末、万全をもって彼の手の零れ落ちる一滴に他ならず。

万全を期すためには詰めを誤ることはできない。

そしてその誤ることの出来ない詰めを、尸魂界と虚圏を行き来する中で行うことは計画の万全を期す上では危うい事。

その為藍染は2年の間この虚圏に、そして虚夜宮に足を踏み入れることは出来なかった。

2年。

短く、しかし長くもある月日。

そしてその年月は、彼等破面の恐怖の鎖を緩めるには充分すぎる月日でもあった。

少しずつ、藍染という絶対の恐怖の対象がいないことによって緩んでいく鎖。

誰もが藍染惣右介の絶対的”力”を恐怖と共に薄めていき、それは”力”によって集団を形成するうえであってはならない王に対する侮り。

居ない者に従う事はできない、そして従わずとも何を恐れる事があろうかという思考の芽生えとなる。

集団の崩壊は藍染が望むものではなく、彼の目的のための戦力として破面達は必要だった。

それ故に藍染が導き出した答え。

それは実に単純で、しかし効果的な答え。

薄まり、緩んでしまったのなら再び与えればいいと。

それもただの破面ではなく恐怖と畏怖と暴力、それを一身に集める者を凌駕する圧倒的な”力の恐怖”を、と。

ネロ・マリグノ・クリーメン。
自らを”神”と称していた暴君。
暴虐を尽くし、暴慢を飲み干し、味方ともいえる破面からすら恐れ、避けられる恐怖の対象。
その生き様はまさしく”悪”であり、誰もが疎み畏怖する者。
これこそが彼が今まで藍染に生かされ続けていた理由。

”力の支配”を再び強固にする為だけの生贄それが、それだけがネロの藍染にとっての存在価値だった。

「どうしたんだい？　先程から叫ぶばかりじゃないか。此処は君の領域だろう？　その爪で、その牙で、私を引き裂こうとは思わないのかい？」

前傾姿勢で雄叫びを上げ続けるネロと、それを前に佇む藍染。

その構図は一見あまりに危ういものに見えたが、どちらが危うく、またどちらが危うくないのかは見た目から受ける印象とは違っていた。

両手をやや広げるようにして僅かばかりあげる藍染。

さぁ、とまるで攻撃を待っているかのように腕を広げる仕草には余裕が溢れていた。

対してネロは三本の尾で砂漠を打ち鳴らしながらも雄叫びを上げるにとどまり、その鋭い爪を振り上げる事も、まして巨大な竜の顎を向けることもしない。

誰とも判らぬ相手、そもそも相手というより赤を撒き散らす肉塊程度にしか他者を認識出来なくなってしまったネロ、本来ならばこれほど藍染が語る暇すら与えず彼は飛び掛っていることだろう。

しかし、現実として藍染は傷どころかまともな攻撃すら受けていない、その不思議、その違和感、それはいつしか逃げ惑う事をやめ、眼下の戦いに再びその目を向け始めていた多くの者達にも共通する疑問だった。

いったい何故ネロは藍染に攻撃しないのか、圧倒的な霊圧を誇る藍染も今はさほど霊圧を発しているわけではなく、寧ろ霊圧はネロが勝っているといってもいい。

刀すら抜いておらず、両手を広げ武器らしい武器を持たない藍染と、その身体の全てが今や武器といえるネロ。

それが何故こうも、まるで攻めあぐねていると言わんばかりの緊張を生むのか、誰もが理解できなかった。

ネロのその行動を見るまでは。

一歩。
ただ一歩、藍染がその足を踏み出す。
間合いを詰めるという訳でもなくただ一歩、何気なく踏み出されたそれ。
そして何故かネロもまた一歩を踏む。
しかし此方は前に出るのではなく、後ろへと下がる様に一歩を退いて、だ。

まるで藍染の一歩から遠ざかろうとする様に。

「後退りかい？　君らしくないな、ネロ。それではまるで・・・・・・・・君が、私に、恐怖している様に見えるぞ。」

後退り、引き下がる事。
相手を、敵を前にして敵の一歩から引き下がる事は危機を感じる防衛本能。
これ以上近付かれる事は危険だ、そしてこれ以上自ら近付く事も危険だ、保たれた一歩の間合いは即ちネロという化生が危機を感じたという現われに他ならない。
理性を失くし、感情を失くし、本能すら投げ捨てただ殺す事だけを追い求める魔獣へとその身を堕としたネロ。
その彼が藍染を前にし、その一歩に危機を感じたという事実は本来ならばありえない。

危機を感じるという事、即ちそれを生む恐怖という感情をネロは失っている。
故に危機を、危険を感じるなどという事はありえず、己が身を裂かれていようとも獲物を殺す事を優先するはずなのだ。

だが事実、ネロはその足を退いた。
それは何故か？
答えは藍染の言葉どおり、まるでありえないものを見たような口ぶりでしかし、確信に満ちている言葉通り。
ネロ・マリグノ・クリーメンは理も、情も失っている、だが藍染はネロに対し何か特別な事をするわけでもなく、ただ前に立ち己が存在を認識させるだけで彼の失われた恐怖を呼び起こしたのだ。
霊圧が強大なわけでもない、禍々しい武器を持つわけでもない。
しかし、ネロがその赤に染まった視界に捕らえたのは他の誰と同じように赤く染まる獲物の姿ではなく、まるでそこだけが切り取られ、或いは塗りつぶされたかのように闇色に染まった藍染惣右介の姿だった。
視界に映る他とは違う姿、そしてその闇は何処までも深く全ての飲み込み這い出る事を許さない。
何もかもをなくしてしまったネロが見たありえないもの、それに対する僅かばかりの不安が彼の内には再び芽生え、芽を出したそれは”恐怖”と言う名の華を咲かせたのだ。

そしてその恐怖の華は何もかもを持たぬゆえ急速にネロを支配していく。
今のネロにその恐怖を押さえ込む術はない、理性による否定も、感情を移し変える事も、尊大な自尊心で覆い隠す事も、今までの彼が藍染に対して行えた全ての誤魔化しは獣となってしまった彼には出来なかった。
故に恐怖する、根源的な恐怖は呼び起こされそれは後退りとして表

へと姿を現したのだ。

藍染惣右介という男へ、ネロが覆い隠していた恐怖と畏怖の証明として。

「■■■

「ありがとう、ネロ。　やはり君は優秀だ。」

爪にその身を晒しながら、誰にも聞こえない音量で呟かれたのは感謝だった。
誰でもない、藍染からネロへの感謝の言葉。
この一撃を持って全ては整ったと、虚閃の誤射では未だ弱く、しかし明確な殺意を込めたこの爪は反逆に足り、そして制裁にたる代物だと。
故の感謝、愚かなる道化への感謝であり、哀れで滑稽な生贄への感謝だった。

「縛道の九十九　“禁”」

それは力を行使するための言葉。
そして言葉と共に現われた変化は激烈だった。
振り下ろされたネロの爪は藍染のまさしく眼前で止まる。
それはネロが振り下ろす事をやめたのではなく、藍染が振り下ろせないようにネロを拘束したため。
ネロの身体には今黒い皮製のベルトが巻きつき、それこそ彼の鋼皮の刃などお構い無しにきつく締め上げ、拘束していたのだ。

「縛道の九十九　二番　”卍禁(ばんきん)”　初曲『止縄(しりゅう)』、弐曲『百連閂(ひゃくれんさん)』・・・・・ここまでで充分かな。」

更に紡がれるのはより強固な拘束の術。
霊子によってあまれた白い布とそれを固定する無数の鉄串、その布すらもネロの刃で裂かれる事は無く、逆に締め上げる事で悉くを折り、鉄の串は鋼皮などないかのように深々と彼の肉に突き刺さった。
拘束され身動きできず倒れふしたネロ。
竜の顎は無数の鉄串に貫かれ縫い止められ開くこと叶わず、人の口には布が巻きつき音を閉ざした。

「些細な違いはあれどあの時と・・・　2年前のあの時と同じだね、ネロ。あの時は”終曲”までだったが今回はそれも必要ないだろう。判るかい？　目に視えるものは同じでも、違っているんだよ・・・そう、何もかもがね。」

倒れ伏すネロと見下ろす藍染。
それはまさしく2年前と同じ光景、ハリベルを殺そうとするネロの凶行を止めるため、今と同じように藍染が今と同じ術を用いてネロを拘束したときと同じ光景。
縛道の九十九　二番　”卍禁”、その完成形である”終曲”『卍禁大封(ばんきんたいふう)』をもって藍染がネロを拘束したあの時と同じなのだ。
だが今はあの時とは違う点もある。
一つはネロの姿、人ですらなくなったネロの姿ともう一つ、今回の拘束は弐曲までで止まっているという事、そしてネロの霊圧が桁違いに上がっているにも拘らず、その彼を現状身動き一つ出来ない状

態で拘束出来ているという事だ。
威力の低い術で以前より強くなった者を拘束できる、その不思議がそこにはあった。

「覚えているかな、ネロ。　2年前のあの時、君に架けたこの術を解いた時私は君にこう言ったんだ。”急な事で力を加減してやれなかった”と。あれは咄嗟の事で全力を出してしまった、という意味ではないんだよ。あれはね・・・・・・咄嗟の事で、極力絞りはしたが君を殺さぬよう力を絞りきれていなかったら済まない、という意味だったんだ。」

その告白はどこまでも桁外れなものだった。
そこかしこで息を呑む音と、驚愕の雰囲気、そして恐怖の気配が滲みだす。
あの光景を、2年前のあの光景を見ているものからすればその衝撃は尚大きいだろう。
2年前、術をもってネロを拘束した藍染、その時もネロは身動き一つとることができなかった。
それは術の威力も然ることながら、込められた霊圧が強大過ぎる故だと誰しもが思っていたのだ。
しかし、語られた真実は彼等の考えを根底から覆す。
全力ではなく絞っていたと、それも殺してしまわぬよう極力、最低限の出力を目指して。
そんな操作は本来必要ではない、術をかけるということは霊圧を込めるという事。
しかし藍染は言うのだ、”絞った”と。
その強大すぎる霊圧を本来必要無い最低限に絞るという操作をしなければ、あの時ネロを殺していた、と。

規格外、何処までも。
その強大すぎる力はすでに彼ら破面の想像の域を超えていた。
想像を絶する者、そしてそれは同時に怖ろしい者。
逆らう術はない、逆らうという思考すら浮かべたその時には自分は死ぬだろう、そんな思いが破面達に広がっていく。

「判るかい？ネロ。　私はそう思えば何時でも君を殺せたんだ。君は自由に奔放に振舞っていた心算でも、その実全て私が許していたからに過ぎないんだよ。今、君には皆の恐怖と畏怖と、怨念、恨みが詰まっている。しかし彼らにそれを晴らす術はない。　圧倒的な恐怖を振りまくのが君だとしたら、それを苦も無く処分する私は、彼らの目にどう映るのだろうね・・・・・・」

観覧席には届かない、しかしネロにだけは届く音量で語る藍染。
その顔にはやはり笑みが張り付く。
全てが掌の上、自由など本当は存在せず全ては藍染の掌の上の出来事。
ネロ・マリグノ・クリーメンという存在は、虚夜宮の不平と不満、恐怖、畏怖、恨み、不の感情の全てが満たされた受け皿。
ネロの傲慢な性を見抜き、自らそれを認めるような振る舞いを獲った藍染。
その藍染の振る舞いはネロの傲慢を助長し、そして何時しか暴走した彼の傲慢は自らを”神”と自称するまでにいたる。
それすらも藍染の掌の上、ネロの役目は一身に恐怖を集める事。
集められた恐怖、誰しもが煙たがり、しかし勝つ術がない相手。
それをたった一人で、圧倒的に処分する藍染惣右介は一体彼らにど

う映るのだろうか。
”王”か、”英雄”か、”神”か、それとも彼等の”死”そのものか。
藍染にとってはどれでも構わない。
ただ一つ”力”を、彼らには決して届かない圧倒的な”力”の存在を魅せられればそれでいい。

彼等の内に藍染の持つ”力への恐怖”が生まれればそれでいいのだ。

「さて、一方的な語らいにこれ以上意味などありはしない。最後の時だよ、ネロ。君は何処までも私の思惑通りに動いてくれた、君の役目はここで終わりだ。これは私のせめてもの礼だ、棺は・・・私が用意しよう。」

終わりの時が来る。
身動きも出来ず、雄叫びすら上げられず、ただ砂漠へと縛り付けられるネロ。
最早彼に抵抗する術はない。
只の拘束術式で彼の鋼皮の刃は折られ、竜の顎は縫いつけられた。
桁違いの霊圧と再生のたびに人から離れる肉体を持とうともそれに今意味は無い。
遅い来るであろう終末の一撃にネロは耐えられないだろう。
霊圧の差とは絶対的に越えられない壁、そしていまネロの前に聳え

立つのは天を鎖すかの如きそれなのだ。
故に死。
待つのは死。
ネロ・マリグノ・クリーメンの先には最早、死以外の選択肢は無かった。

藍染の片手が上に伸ばされる。
そして天を指すように伸びる人差し指。
直後襲ったのは全てを押しつぶすような霊圧の波濤だった。
まるで天井がそこにはあり、それが降下し押しつぶすような感覚。
それはネロだけにではなく闘技場全体へと及び、霊圧に当てられ気を失う者、ガチガチと歯を鳴らし蹲る者、片膝を付くにとどまる者など差はあれど全てに等しく降り注いでいた。
王の、藍染惣右介の霊圧、全てを押しつぶすかのような、まるで物理的に存在するかのような濃密でしかし冷たく、何処までも暗いその霊圧。
それこそ舞台の総仕上げとでも言わんばかりに、見せ付けるのは処分の光景だけではなくそれを行う自分の力だと。
何者をも抗えぬ”王”の力であり、お前達の”創造主”の力であると。
それを存分に感じさせ、そして藍染は詠った、ネロにとっての葬送曲であり鎮魂歌を。

「滲み出す混濁の紋章、不遜なる狂気の器、湧きあがり・否定し痺れ・瞬き眠りを妨げる、爬行する鉄の王女、絶えず自壊する泥の人

形、結合せよ、反発せよ、地に満ち己の無力を知れ。破道の九十・・・・・・”黒棺”。」

ネロを包み込んだのは巨大な黒い直方体だった。
四方を取り囲むようにして現われた線、それらが頂点へと向かって延び、直方体の辺が完成するとその後は早かった。
黒い、何処までも黒く暗い光。
その直方体の内側を満たしたそれはただ全てを飲み込む黒い光だった。
破道の九十”黒棺”、黒い光は重力の波、囲われた範囲の中を駆け巡るそれはぶつかり合い、反発し、時に巨大な波となって対象を切り刻み、そして押しつぶす。
包まれた後生き残る事は至難、そしてこれは”詠唱破棄”と呼ばれる簡易的発動ではなく”完全詠唱”とよばれる術の力を十全で発揮する手段を踏まれ放たれたもの。
それに藍染惣右介の超絶的霊圧が合わさった時、それはまさしく屠った者のための棺となるのだ。

（感謝するよ、ネロ。　君は本当に、誰よりも優秀な捨て駒だった。）

藍染の内心の呟きは誰にもとどく事は無い。
それでもその言葉は藍染惣右介の数少ない真実だった。

重力の波濤、その奔流へと飲み込まれたネロ。

理性無く、感情も無く、ただ恐怖だけが満たされたその身体。
その彼の視界は赤ではなく黒に染まった。
何も見えない、何も聞こえない暗闇の中彼の身体は押しつぶされ消滅の一途を辿る。
これが終わり、彼の終わり、暴慢を尽くし、命を命とも思わず殺しつくし、捨て駒としてしか他者に必要とされなかった彼の終わり。
棺の内、拘束が解けた彼は断末魔の如き雄叫びを上げる。

しかし、その雄叫びすらも重力の波に飲まれ、誰に届く事も無くその身同様、闇へと消え去るのだった・・・・・・

カツン、カツンと靴の音が響く。
何もない、誰も居ないその場所に、その靴の音は異様によく響いた。
そこは第2宮（ゼグンダ・パラシオ）、今は亡き虚飾の神が居城だった場所。
その場所を唯一人歩くのは、まさしくその場所の主を屠った男藍染惣右介。

あの後、ネロを処分した後藍染はその場で解散を命じた。
各々が勝ち取った”号”、その他の事後処理は後日藍染の居城である奉王宮にて行うと通達し、その場は解散となる。
多くの命が散り、最後には恐怖が満たした強奪決闘は終了したのだ。

そして藍染はその足でこの場所に、第2宮へと赴いた。
何もないように見えてその実その場所には無数の跡が見えた。
血痕、刀傷、割れた床に折れた柱、そして濃密なまでの怨念と腐臭。
藍染がこの場所を訪れたのは興味深い報告を目にしたため。
2年前、藍染がネロへと渡した一万の魂達、その末路が藍染の興味を惹いたのだ。

報告によればネロはその一万の魂を喰らうのではなく、その全てに殺し合いをさせていたというのだ。
武器を与え、ある程度の数を一箇所に集め、そしてただ一言、彼らにとって唯一の救いを見せびらかす。

「最後まで生き残ったヤツは尸魂界に帰してやってもいい。」

その一言は余りに甘く、魅力的だった。
元々尸魂界外縁部は治安が悪く、殺し合いなど日常茶飯事、元々彼らが持つ狂気と一縷の望み、生きてこの化物達の住処から帰れるという望みは彼らに容易く凶行を選択させる。
その後に広がったのは人と人の殺し合いだった。
皆が必死に、ただ自分が生き残るために他者の命を奪い続ける光景。
切裂き、或いは殴り、貫き、噛み千切る。
時が経つにつれそれは人ではなく獣のような戦いに様相を変えていった。
それは彼等の人格が崩壊していったという事もあるが、それ以上に彼らが人から外れていったという事の証明だろう。
その手を血に染め、それを拭う事すら許されず、命を奪った呵責と生き残りたいという欲望。
奪われた命達は怨念へと姿を変え、怨念の満ちたその場所は更なる血によって濡らされる。
人の身がそんなものに耐えられるはずも無く、彼らは一様に人ではなくなっていったという。

その報告を見た時、藍染は可能性を感じた。
自分が闘技場の地価に建設した実験場。
あの場所から生まれた虚と、ネロが殺し合わせた人間たちは同じではないかと。

怨念を背負い、それに食い殺されしかし止まらず殺しあう。
それは、その先には藍染惣右介が求める彼の目的のための道具、そうなる為の施術に耐えられる者が居るかもしれない。
その期待をこめ、藍染はその場所を訪れたのだ。

そして見つけた。

「やぁ、君が九千九百九十九の魂、その怨念と怨嗟を背負った生き残りかい？」

問いかけた藍染の言葉に答えは返っては来なかった。
膝を抱え込むようにして座るのは少年。
膝を抱え、片手の親指の爪をかむようにして虚ろな目をした金髪の少年がそこには居た。
この場には彼以外の気配は無い。
故にこの少年が一万の魂、その唯一の生き残りである事は間違いなかった。
虚ろなその目は藍染を捉えてはいない、何を見るでもなくただ開かれているそれはとっくにこの少年の精神が死んでいることを意味していた。

それを見て藍染は笑みを深める。
素晴らしいと、怨念と怨嗟と、呵責と欲望に苛まれしかしこの少年の肉体は生きていた。
藍染にとってこの少年の精神など瑣末に過ぎないもの、重要なのは肉体、藍染が求める能力を持てるかどうかの施術に耐えられる肉体だけなのだ。

「辛かったかい？　それとも苦しかったかい？もし君がそれを疎み、忘れたいというのならば私が忘れさせてあげよう。思いを発する事も、考えを巡らせる事も、過去を思い出すことも私は君に求めない。私が君に安らぎを与えてあげよう・・・・・・」

藍染の言葉に虚ろだった少年の目が向けられる。
藍染の顔を見ているというよりはただそれを写しているに近いその瞳。
目の下の隈、こびり付き爪の間に入り固まった他人の血、そして藍染へと伸ばされる手。
伸ばされたそれは少年の救いを求める願いなのか、その手を握った藍染は笑みを深めた。
思わぬ収穫、そしてこの少年は”アタリ”だという直感。
これで藍染の計画はまたひとつ問題を消化した、後はただ邁進するのみ、己が手に入れたいものの為に全てを犠牲にして。

そして藍染は感謝する。
それこそ本当に、心底感謝した。
つい先程自らの手にかけた愚かしい捨て駒に、この少年を偶然にも創り上げた愚かな道化に。

（ありがとう、ネロ。　君はやはり誰よりも優秀だったよ・・・・・・）

深められた黒い笑み、少年はただそれを見上げていた。

新たなる座
新たなる主

埋まる十の円卓

遅れ来る者

去りゆく者よ・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. 57（後書き）

強奪決闘篇これにて終了。
いやぁ～我ながら長すぎｗ
この後はたまったリクエストを消化しつつ、数話挿んで原作かな？
まぁその数話が一桁か二桁かは分かりませんがｗ

ここで一つ小ネタを。
ネロの死にざま、これにはもう1パターンありました、概要は。
闘技場への墜落後、解放が解け意識を取り戻し、しかし藍染さんに拘束、処分されそうになると
恐怖に苛まれ命乞いをします。
当然却下され、今度はバラガンに「なんなら従属官になってもいい」ぐらいの発言。
バラガン無言のまま砂漠へ降り立ち、ネロの頭に手を置きます。
そして当然”老い”発動。
「馬鹿タレが・・・　命乞いなど塵がすることよ。貴様は今までそれを聞き届けた事があるか？ありもせん事を他人に望むなど以ての外よ。せめてもの情けじゃ、儂自ら殺してやる。」
そしてネロ盛大な喚き声と共にご臨終。

とまぁこんな感じです。
個人的には本編の方が好みだったものでｗ
流石に救いが無さ過ぎるかな、と。

それと、最後に出てきたのは言わずともかなです。
オリっぽくなってるけど、闘技場の怨念云々はこのために書きました。

BLEACH El fuego no se apaga. extra6（前

番外篇6投稿です。
短し、そしてキャラ崩壊気味

俺達は反発する
私達は反発する
俺達は譲らない
私達は譲れない
それが己の往く道だから

「それは違うな、間違っているぞフェルナンド。」

「そいつはコッチの台詞だ。　間違ってんのはお前のほうだぜ、ハリベル。」

ぶつかる視線に火花が散る幻想が見える。

やや距離を置きながらも決して視線は切らず、互いを睨みあう二人。
その二人とは第3十刃（トレス・エスパーダ）ティア・ハリベルと破面（アランカル）Ｍｏ．ｎａｄａ（アランカル・ナーダ）番号無しの破面（アランカル）　フェルナンド・アルディエンデ。
その雰囲気は険悪といったものではないにしろ、互い何か譲れ無いものがあるのだろうか、一歩すら退く気は無いという雰囲気がありありと浮かんでいた。
フェルナンドに比べやや身長が高いハリベルは見下ろすように、対してフェルナンドは状況から言えば見上げている筈なのだが、そんな雰囲気など感じさせない尊大さを纏い対峙していた。

本来こんな事はありえない。
破面という集団において番号の序列というものはそのまま力の序列に直結する。
数字持ち（ヌメロス）の間ならば多少の誤差はあるにしろ、その上、十刃（エスパーダ）においては数字とは力そのもの。
より数字の小さい者ほど殺戮能力に優れている、というのが虚夜宮における絶対の真理。
その中で”3”の数字を背負う彼女、ティア・ハリベルにこのような態度を取れるものがどれだけいようか、それも同じ十刃ではなく番号すら持たない破面の中で。

「あれ？　あの二人またやってんのかよ・・・・・・」

「みたいだね・・・・・・で？　今度は一体何が原因なんだい？」

「あら二人とも随分と遅かったのね。　私心配したんですのよ？貴方達が練武場の場所さえ思い出せなくなったのかと思って。」

「「馬鹿にしてんのか！　スンスン！」」

睨みあう二人、その二人から離れた位置にあるその空間への入り口から二人の人影が現われる。
左右の瞳の色が違う小柄な女性はエミルー・アパッチ、大柄で筋肉質の快活そうな女性はフランチェスカ・ミラ・ローズ。
どちらも睨み合いを続けるティア・ハリベルの従属官であった。
その場所、ハリベルの居城である第3宮にある練武場に入るなり何処かげんなりした様子で肩を落とすアパッチ。
次いでミラ・ローズも、「またか・・・」という雰囲気をありありと浮かばせながら先にその場に来ていた彼女等と同じ従属官、シィアン・スンスンへと話しかけた。
何処か棘、というか毒の篭ったスンスンの応対に二人揃って食って掛るアパッチとミラ・ローズ。
そんな二人を意に介しながらあえて流すスンスン、このやり取りは恐らく永遠に変らない事を伺わせるものだった。

「いいや、間違っているのはお前のほうだフェルナンド。その場合敵の戦力が明確になるまで様子を見る事が最善だ。敵の力も策も判らず攻める事は、自らの首をしめる事に繋がる可能性がある。」

「それが間違ってるって言ってんだよ！　敵の能力も策も関係あるか、それに付き合うほうが馬鹿なだけだろうが。俺なら能力を使わ

せる暇を与えないって言ってんだよ！」

「ほぅ・・・・・・　それは遠まわしに私が馬鹿だと言っているのか？敵の攻撃に付き合う私は馬鹿だと・・・・ならばお前はなんなのだ、そもそもこれは敵が新たな能力を使用したという前提の話であって、能力を使わせないなどという馬鹿げた発言こそ、そもそも本末転倒だとは思わんのか！」

「なんだと！　この堅物の分からず屋が！」

「そちらこそ意地っ張りの頑固者め！」

「説明・・・いりまして？」

「「いや、いい・・・・・・」」

長い袖に隠れた指先でちょんちょんとフェルナンドとハリベルの方を指し、振り返るようにしてアパッチとミラ・ローズに告げるスンスン。

言葉とは雄弁で、先の二人の会話を聞いていればおおよそ何が原因かはわかることだろう。

はじめは簡単な問答だった。
もし、自分と実力が拮抗している相手がいたとして、その相手が新たに何らかの能力を使用したと仮定したとき、どう対処する事が最善であるか、という戦闘理論を問うただけの事。
これに対し、ハリベルはその冷静な判断力から無闇に敵に攻め込む事無く、敵の能力を把握した上でそれを凌駕し、倒す事を。
フェルナンドは能力など関係なく、苛烈に攻め続け押し切り、打倒する事を語った。

それはどちらも正しいのかもしれない。
そもそもこの問にははじめから正しい答えなど存在しない。
戦い方、それに定石と呼ばれるものはあれど”正しい戦い方”というものはない、それに定石と呼ばれるものはあれど”正しい戦い方”というものはない、そもそも毎回同じ戦場が続くなどという事などなく、その場、その時、その瞬間の最善こそが言うなれば”正しい”のだ。
この問の本当の目的は一つの考えに囚われず、他者の考えを聞くことで自分とは違った視野から戦いを見る事を養うためのもの。
本来ならばこの問いかけを行ったハリベルが抑えなければいけない場面だったのだろうが、どうにもこの二人、退くという事を知らない。

自分の考えの方が正しいと言い出したのはどちらだったか、それは今となっては瑣末ですらあった。
問題なのはどちらも退く気がまったく無いという事
そしてこれは今回が初めての事ではない。

事ある毎に二人の意見は対立し、こうして睨み合いは起こっていた。
それは二人の生き方、考え方、そして在り方が余りにも違うゆえ。
水の如く流麗に、何物にも流されず受け流し、しかしいつしか全てを押し流す大河の如きハリベルと、炎のように苛烈に、何者にも遮られず、遮られればそれごと焼き尽くしただ、己のが思うままに広

がる炎海フェルナンド。
何もかもが真逆といっていい二人、故に二人の意見は違え、そして論争は熱を帯びていくのだ。

「あぁ、もういい判った・・・・・こうやっていくら口で言ったって判んねぇんだ。だったらコイツで決める他無いだろうが、えぇ？ハリベルよぉ。」

「これは奇遇だなフェルナンド。　私も今丁度その考えに思い至ったところだ。最近は随分と力を付けたようだが、それもまた私には遠く及ばないという事を思い知らせてやろう・・・・・」

言い争いを続けていた二人だったが、フェルナンドが遂にといった具合に両手を挙げその論争を止めた。
もはや論争というよりは口喧嘩に等しくなっていたそれ、しかし止めたという事は折れたという事かと、従属官の三人はある意味胸を撫で下ろす。

が、そう簡単に折れないのがこのフェルナンドという破面である。

口で言ったところで判らない、ならばその段階はもう終わりだと、そして口で言って判らない者に物事を判らせる方法など一つしかないといわんばかりにその硬く握った拳をハリベルに向けて突き出し

たのだ。
対してハリベルも普段の彼女からは想像も付かないほど血が上っていたのだろう。
あっけなくそのフェルナンドの誘いに乗り背に背負った刀の鍔にその指を掛ける。

これに慌てたのは従属官の三人、アパッチ、ミラ・ローズ、スンスンだ。
よもやここまで発展するとは思っていなかった三人。
そんなところで気が合わなくてもいいだろうにと、本当にこの二人はよく判らないと三人それぞれに内心で零す。
抛っておけば何れ収まると踏んでいた口喧嘩は今や第3宮の存続に関わる大事へとその姿を変えていたのだ。
彼女等の脳裏に最悪の景色がありありと浮かぶ。
崩れた壁、折れた柱、そこにあるのは自分達の暮らす宮殿の成れの果て、瓦礫の山でありその上で今だ戦う主ともう一人の姿。

これはマズイ。
三人の思考が久々に協調した瞬間であった。

「「「スト～～ップ！　二人ともスト～～ップ！」」」ですわ！」

睨み合い今にも戦いを始めそうな二人の間に滑り込むようにして割って入る三人。
その顔には一様に焦りと、そこから来る冷や汗が滲んでいる。
ハリベルの前にはアパッチが、フェルナンドの前にはミラ・ローズ

が割って入り、スンスンはその中央でどちらにも加勢できる状態を作る。
ある意味見事な連携、彼女達の錬度の高さを伺わせるそれはしかし、この場においてはどこか悲しく映る。

「ハリベル様やめましょうって、こんなつまらない事で宮殿壊すなんてシャレにならないですって！」

「フェルナンド！　アンタもいい加減しときなよ。どっちでもいいだろそんな事。」

「そうですわ。　お二人とも気を静めてくださいまし。」

二人を何とかして静めようと必死の説得を試みる三人。
それは必死になるだろう。
何故ならもしここで二人を止められなければ彼女等は今日から宿無し、そしてもしこの二人が本当に全力で戦ったら彼女等とて無事で済む保障はない。
故に必死、とにかく止める事、静める事を優先する三人。

だがそれが災いの元。
静める事を優先する余り、必死になり過ぎたばかりに零れる。
重要性の違い、当事者と第三者の違い、それ故に零れる。

どうしようもない失言というものが。

「つまらない・・・事・・・・・・・？」

「どっちでもいい・・・・・・・だぁ？」

熱を持っていた空間が急速に凍結する。

それはしかしハリベルとフェルナンドの闘気が静まった、という訳ではなかった。

反転、熱は振り切れ冷へ、どうしようもない冷たさを感じさせる声と共に二人から呟かれたのはそんな言葉。

ここへ来てアパッチとミラ・ローズは自分達の失言を自覚する。

だが時既に遅し、零れた言葉を再び呑む事など叶わず、零れた言葉は言霊となり届く、今最も届いてはいけなかった二人へと。

「一体何がつまらない事だというんだ？アパッチ。私の戦い、その考え方の何処がつまらないと？」

「ハッ！　こいつは笑えるなぁミラ・ローズ。どっちでもいい、だぁ？　それはなにか？　俺の考えもハリベルの考えもお前にとっちゃぁ大差ないって言いてぇのか？」

言葉の地雷、それも出来れば避けられたそれはしかし確実に起爆していた。

最早フェルナンド、ハリベルに互いを武によって制するという気配は消えた。

しかし、治まらない”気”はまさに今、二人の間にいる三人へと向けられている。

割って入ったつもりが今は挟まれていると言った方が、三人の状況

を表すには正しいかもしれない。
そしてこうなると、途端息が合う人物たちがいた。

「おい聞いたかよハリベル。　俺達の戦いの考え方はコイツ等からしたらまだまだ甘いらしいぜ？」

「あぁ、確かに私も聞いたぞフェルナンド。どうやらこの娘達には私達が及びもしない素晴らしい理論があるらしい。これは早急に私達もご指導頂かないといけないとは思わないか？」

「あぁそうだ。　そうだとも。　えぇ？　そう思うだろう？お前達三人も・・・よぉ。」

これが先程まで睨み合う様にして戦いの一歩手前にいた者達なのか、と疑いたくなるほど息の合った二人。
若干の拡大解釈によって歪められたアパッチ等の言葉は、二人によって今や彼女等を追い詰める鎖であり槍。
弁明を試みようにも一睨みで黙らされ、特に二人の前に立つアパッチとミラ・ローズは先程にもまして自らの危機を悟り、冷や汗が止まらない様子だった。

「「で、お前は何処に行こうってんだスンスン。」」

フェルナンドとハリベルの注意がアパッチ、ミラ・ローズに向いて

いるのをいいことに、一人静かにその場から遁走を諮ろうとしたのはスンスン。
しかしそれは他ならぬ同じ従属官の二人に肩を掴まれることで阻止される。
この状況のマズさは三人とも同じ、その中で一人逃げるなど許さないというアパッチ等の執念がその肩を掴ませた。
二人の目には一様に「お前一人逃がしてたまるか！」という意が浮かんでおり、口元を隠しながら小さく悲鳴を上げたスンスンは悪くないだろう。

「さて、それではご教授願おうか・・・・・・三人とも準備はいいか？」

「当然問題ないよなぁ。何せ俺達に”指導”する立場だぜ？まったく俺達程度を相手に”指導”してくれるとは恐れ入る。」

まったくもって気が合うのか合わないのか、先程の姿など嘘のように二人は協調する。
三人を挟み込むようにして立つフェルナンドとハリベル。
そして二人はまるで鏡合わせの様に手を組み、ポキポキと指を鳴らす。
その瞳は紅と翠の光が爛々と輝き、どこか楽しそうですらあった。

気が合わない二人、しかし気の合う二人。
二律背反、しかしそれがこの二人。

そして響き渡ったのは三色の悲鳴は哀れなり。

そんな第3宮の一日・・・・・・・

俺達は反発する
私達は反発する
俺達は譲らない
私達は譲れない
それが己の往く道だから
だから俺達は
だから私達は

認め合う

互いの譲れぬ”道”を知るから

BLEACH El fuego no se apaga. extra6（終）

番外篇の6となります。
内容は読んで頂いたとおり「ハリ×フェル」です。
誰がなんと言おうとハリ×フェルです、えぇそうです。
そしてこれはれっきとした「ほのぼの系」である事をここに明記しておきます。

キャラは崩壊しているかもしれません。
でも書いてて楽しかったから良しw

戦うといっても小競り合い程度だと思います。
それで宮殿崩壊とかどんだけというツッコミはスルーですw

かなり早く番外の投稿が出来てよかった。
まだあと2~3話くらい番外が続くかと思いますが、お待ちください。
書かないと申し訳なくて。

57話の感想返信はまた後日行います。

BLEACH El fuego no se apaga. extra7（前

番外篇7となります。

そして・・・・・もしこれを読んだ関西圏に住む方申し訳ない。

これが作者の限界です・・・・・・

BLEACH El fuego no se apaga. extra7

BLEACH El fuego no se apaga. extra7

キミが想うその世界に
ボクの居場所はありますか？

「さいなら、乱菊・・・・・・　ご免な・・・・・・・」

ボクが言えたんは、そんな一言だけやった。
でもボクにはそれしか言えへんかった。
なにせこれはボクが背負(しょ)わなアカン事、ボクが決めて、ボクが望んでした事や。

これが、こうする事がボクの”目的”への一番の近道、遠回りは出来へん、する心算もあらへん、だからボクはその手を振り払ってでも行かなならんかったんや。

例えそのせいで、涙を流させる事になったとしても。

乱菊を泣かせる事になったとしても。

自分で言っといてホンマ本末転倒もエエとこやとは思う。
死神になって、あの時乱菊がとられたもんを取り返して、乱菊が泣かんでもすむようにしたるって思うて、でもそうする為に結局乱菊を一番泣かしとるんはボク。
しょうもない話や、ホンマ、しょうもない・・・・・・

でもボクは決めたんや。
焼け落ちた僕等の小屋、倒れた乱菊、すれ違った死神達とその死神が持っとったモノ、そして・・・そしてそれを受け取ったあの人。
その光景、そしてあの人の暗くて何も写さない眼を見たあの時、僕

の中で全ては繋がったんや。
壊された僕等の平穏、乱菊が倒れとったんもその後長い事目ぇを覚まさへんかったんも、みんなみんなコイツのせいやって。

コイツが、親玉なんやって。

ボクの中に黒い炎が燈ったのがその時わかった。
その炎はボクの中で直ぐに大きくなって、でもボクはそれを外には出さんように、悟らせんようにしたんや。
出せば悲しませる、乱菊はその時の事を忘れとったから。
あの時何があったのかボクは知らん、せやけど何をされたにせよそれはきっと辛い記憶や、だったらそんなもん忘れとった方がエエにきまっとる。
せやからボクはその炎を外には出さん、悟らせもせぇへん、一人で・・・・・一人でやるって決めたから。

色々考えて、考えて考えてこれが一番やって判ったんは、僕自身が死神に・・・・・あの人と同じ死神になるゆう事やった。
僕はまだ弱かった、霊力をもっとる言うてもそれはホンマに持っとるだけや。
使い方も判らんし斬魄刀も持ってへん、そんなんで勝てるはずが・・・取り戻せる筈がない事ぐらいボクかてわかっとった。
せやから決めたんや、死神になるって。
死神になって、力をつけて、そんであの人の近くに潜り込んでそして・・・・・そしていつかこの黒い炎を吐き出したるんやって。

手始めにあの死神を・・・・・乱菊から”何か”を奪っていった死神をボクは・・・・・殺した。

刃物なんてその辺に転がっとったもんで充分。
戦い方なんてあの時のボクが知るわけないし、向こうは一人いうても死神、戦うことが仕事みたいなもんや。
それでもボクは、ボクの内側を焦しよる黒い炎の燃え滾るまま、気が付いたときには初めて人の命を奪っとった。

そん時のボクは恐れも、悲しさも、辛さも何にも感じひんかった。
手に感じた肉を貫く感触も、頬を伝った血の暖かさも、それが急に熱を失っていく感覚もどっか他人事。
それはきっと、そん時のボクにとってその死神の命なんてまったく取るに足らんもんやったからかも知れん。
恨みはあった思う、憎しみもあったんやと思う、でもそれはこの死神へやのうて別の、もっと上の、あの暗い瞳の死神に向いとったんや。
そこで、そこで初めてボクはこの胸を焦す黒い炎の正体が、ボクの復讐心やって事に気がついたんや。

殺した死神の死覇装を剥ぎ取って、ボクは雪の中を歩いた。
白い雪景色の中で奪った死覇装を羽織ったボクの姿は浮き上がったように、拒絶されたように映っとったと思う。
でもそん時のボクはそれでエエ思うとった。
それでエエ、人を殺したボクと乱菊の世界が別々になったんやったらそれは寧ろエエ事や。

ボクはもう後戻り出来へん、進む道は一本だけ、歩いた後は端から崩れる一本道。
崩れた後に残るのは奈落や、落ちるわけにはいかん奈落、落ちたら終わりや、落ちたらそこで終い、何にも手に入らんと・・・何にも取り戻せへんままで終いや。

崩れた道の根っこには乱菊が立っとる。
でもボクは振り返らへん。
道が崩れていくのは僥倖やった、崩れれば追いかけては来られへん。
乱菊はボクと違って死神なんかにならんでエエんや、乱菊はただ平穏に・・・出来れば笑っとってくれたらボクはそれでエエんや・・・・・

でももし・・・・・・

でももしそん時・・・　ボクが振り返っていたなら。
もしそん時振り返って、乱菊の事を見ていたらなら。
もしかしたらボクの・・・ボク等の”今”は変っとったかもしれへんなって、最近になって思う事がある。

でもそれはもう意味のない幻想なんや。
ボク等の世界はボク自身が引き裂いた。
手が届かんように、声が届かんように、そして災厄が降りかからんように・・・・・・

”死神殺し”
死覇装を奪ったボクを捕まえようとやってきた死神はボクに向かって口々にそう言いよった。
何を今更、そん時のボクはそう思うとった。
当たり前の事を口にされてもなんも響くわけないやんか、って。

「そうや・・・・・　ボクが殺した。あんなんが死神なんて笑わせるわ。あれやったらボクが死神になったほうがよっぽどマシやで。」

ボクの口から出たんは存外に強い言葉やった。
ボクを捕まえに来た死神にも見覚えがあった。
あの死神と・・・ボクが殺した死神と同じようにあの人に傅いていた死神。
それが判っとったから知らずボクの語気も強まったんかもしらん。
それにそん時のボクには判っとったんや、ここに来たんはコイツ等だけやない、あの人も一緒やって。

「面白い事を言うね、”死神殺し”の少年。なら私が試してあげようか？　君が・・・死神になれるかどうかを。」

それが・・・それがボクが初めてあの人を・・・・・藍染惣右介を真正面から見た瞬間やった。
顔には柔和で人のよさそうな笑みを貼り付けて、そんでもその黒縁の眼鏡の奥にある瞳はこれ以上ないほど暗かった。
ホンマあん時からアホみたいな霊圧しよって、それをまだ子供のボクにぶつけるんやから始末に終えんわ。
そしてその霊圧に震える身体を必死に隠しながら僕は見た、あの人の目を。

あの目は何にも見てへん。

真正面からあの人と向き合って、ボクはそう確信した。
アレは硝子球かなんかと一緒や、景色は映ってもそんだけ。
人が映ろうが虚が映ろうがあの目にはみんな一緒に見えてんねやって、そう確信した。
あの人は人を人とも思わんのや無くて、自分以外を”人”やなくて”物”と思っとる。
はなっからあの人には”人”が見えとらん。
あるんは”道具”かなんかと同じ扱いだけで、使い捨ての鼻紙みたいなもんや。

そんでもボクは真正面から対峙せなアカンかった。
子供の頃のボクがいくら背伸びしたってあの人に勝てん事ぐらい判っとった。
せやからボクも利用してやろう思うたんや。
ボクの内を焦がす黒い炎、その復讐心を燃え上がらせる矛先であるあの人を利用して、復讐してやるんやって。

ボクの大事なもんに手ぇ出した報いは、キッチリ返してやる為に。

「ならボクがコイツ等みんな殺したら、ボクを死神にしてくれる？」

顔には・・・僕の顔にはそん時あの人と同じ笑顔が張り付いていよった。
昔っからこんな顔やったけど、そん時のボクの笑顔は楽しさや嬉しさやのうて、人を騙す為の笑顔やった。
それはあの人から最初に学んだ事。
人を上手く使うには、思い通りに動かして自分の目的を達成するにはこれが一番いいって、それだけはあの人に会ってよかった思う。

笑顔で人を騙す。
自分の心、奥底は分厚い笑顔の仮面で覆い隠して見せへんで。
三日月みたいになった仮面の目の奥に、本当の瞳を隠しておく。
歪んだ仮面の口の奥で、本音は音になることは無い。

他人を騙す笑顔の仮面。
そしてボク自身も騙す笑顔の仮面を、ボクはその時手に入れた。

そしてその仮面で・・・　心を燃やす黒い炎にその笑顔の仮面でボクは蓋をしたんや。
あの人の傍で、誰よりも近くで待つために。
誰よりも近くで刃を研ぐために。
研いだ刃でいつか必ず、喉下を突き刺してやるために。

「君は本当に面白い事を言うね、”死神殺し”の少年。・・・・・・いいだろう、君がもし彼らを全て倒せたなら、私が君を死神にしてあげよう。」

あの人はそん時、貼り付けた笑み以上に笑っとった気がした。
きっとあの人にとってそん時のボクは取るに足らない存在やったんやろうけど、暇つぶしと興味の対象位にはなっとったんやと思う。
それも出来るならやってみせろ程度のもんやろうけど。

なんにせよボクは最初の一歩を上手く踏み出した。
あれがボクのはじまりの一歩。
目の前に立ちはだかる死神達を見ても、そん時のボクに不安は無かった。

それはボクが強いからいう意味やのうて、やらなアカンっていう覚悟があったから。

ボクが取り返す。
奪われたもんを。
奪われた全てを。
乱菊が奪われたもんも、貧しくても平穏な日々も、そして・・・ボク自身の幸せも。
すべて・・・すべて取り返してみせる。
例えどんだけこの手が血で汚れようとも、例えどんだけ忌み嫌われようとも、嘘吐きと、裏切り者と罵られようとも絶対に・・・・・・
そう・・・絶対に・・・・・・・

「驚いたな・・・・・・　年端もいかず、霊力の何たるかも知らない少年がこれ程のものを魅せるとは・・・・・・名を聞こうか”死神殺し”の少年。」

「ギン・・・・・・　市丸ギンや。　よろしゅう頼むな、死神はん・・・・・・」

血染めの死覇装。
それも自分のやのうて相手の返り血でや。
あの人は本当に驚いた様子でボクを見とった。
でもその驚きは直ぐになりを潜めて、あの笑みに戻る。
名を訊くあの人にボクはあの人と同じ種類の笑顔で答えた。
それがその時ボクにできた精一杯。

そこで僕の意識は途切れた。
極度の緊張と戦闘の疲労、そして終始浴び続けたあの人の霊圧はボクを衰弱させるには充分なもんやった。
それがボクとあの人の出会いで、ボクの復讐の始まり。

そしてそれももう少し・・・・・・　もう少しで全部終いや。
何もかもがもう直ぐ動き出す。
そうなったらいくらあの人でも全部は把握しきれへん。
計画にも必ずどこかで綻びが出る。

その時が・・・・・・
その時が唯一の機会なんや。

あの人が油断するほんの一瞬。
その時の為だけにボクは生きてきた、強うなった。

何処までいっても自己満足やって事ぐらいボクにかて判ってる。
でもそれでエエ。
ボクはどうなったって構わへんねや。

ただ乱菊はきっと怒っとるやろうな。
ホンマ・・・　死神になってまでボクを追っかけてくる事なかったのになぁ。
こんな・・・　こんな裏切ってばかりの碌でも無い男、朴っといたらエエのにな・・・・・・・

この戦いが終わった後、全てが上手く転がったとしても、ボク等の世界が全部元通りになることなんて・・・・・・そんな御伽噺みたいな事なんて、あるはず無いのにな・・・・・・

そう思えばあの時、別れ際に謝っといたんは正解やったかもしらん。
きっともう乱菊の目をみて謝れる事なんてなさそうやし。

あぁ、きっとそうや。
あれが正解やったんや。
久しぶりに笑顔の仮面の奥から零れたボクの”本音”。
あれが伝えられただけできっとそれは正解やたんや。
ならよかった。
後はただ、進むだけやから。

全てが終わる、その時まで。

「また部下で遊ばはって・・・・・・　意地が悪いなぁ・・・・・・」

「見ていたのか・・・・ギン。」

白々しい台詞やったけど、それを追求する心算なんてない。
この人は何でもお見通しや、そしてこの人はああやって掌で命を弄ぶんが癖みたいなもんや。
せやからボクも本気で意地が悪いなんて言わへん。
そんなもん、言わんでも誰にもわかることやから。

「予定に寸分の狂いも無い。　最上級(ヴァストローデ)を揃え、十刃(エスパーダ)が揃えば・・・・・”我々”の道に、敵など無い。」

死んでいった最下級(ギリアン)なんぞ気にも留めず外を眺めながらそう口にするこの人は、本当にそう思っていた。
確かに敵は無いかもしれん、破面の力は圧倒的や。
それに加えて要(かなめ)もいる、そしてなによりこの人は例え十刃が全て倒れても一人で全て終わらせるだろう。
だからこの人は言う、”敵は無い”と。

でもそれは間違いや。
確かに進む道にて気は無いかもしれん。

歩みの先に敵は無いかもしれん。
でもその道は”我々”やのうて、アンタが一人で進む道や。
アンタは精々前だけを見て、その道を進んだらエエ。
ボクかて前だけを見て進むよって。

アンタのガラ空きの、その背中を目掛けてなぁ・・・・・・

キミが想うその世界に
ボクの居場所はありますか?
ボクとキミは離れたけれど

二度と交わらないけれど
それでもキミの
想う世界に
キミの世界のキミの隣に
ボクの居場所はありますか？

BLEACH El fuego no se apaga. extra7（終）

番外篇の7でした。

エセ関西弁、というか京都弁？
いや、そもそもどっちだったとしても破綻している気がしてならない。

難しいね、方言。
それも自分が普段使っていないものって。
そういう自分も標準語圏ではないんだけどもｗ

さて、内容は言わずともかな「市丸なんかどう？」というリクエストから。
虚圏に渡った市丸が過去を振り返る、みたいな？
妄想を何とか膨らませてみたけど、どんなもんでしょうか？

血に染まり悲鳴を上げ、血に染まり勝利を叫ぶ。
血に濡れた手を洗うのは新たに滴る血の雫であり、故に彼等の手から血が拭われることはない。
歓喜を叫び、怨嗟を叫び、雄叫びと罵声、賞賛とそれ以上の嫉みを溜め込んだ闘技場は今や見る影も無い。
”号”を得た者、失った者、勝利を得た者とその影で命を落とした者。
彼らを突き動かすのは突き詰めれば欲であり、我欲を満たさんが為の闘争は終着をみた。
終着の光景は鮮烈。

砂漠に形作られた黒い棺は黒い魔竜を一瞬にして飲み込み、悲鳴の欠片すら残さずに閉じられた。
棺は竜の悲鳴の代わりに低く重く、そして暗い叫びのような残響を残し消える。
その叫びが終わり閉じられた黒い棺が開かれた後には、もう何も残っていなかった。
ネロ・マリグノ・クリーメンが存在していたという証明は何も。

いや、正確には一つだけ残ったものがある。
それは何よりも重い”畏怖”と”恐怖”。
全てを殺しつくすかのような黒き竜を前に尚その顔には笑みを湛え。
何をするでもなくただそこに居るだけで竜を怯ませ、脅えさせる存在感。
腰に挿した斬魄刀を抜くことすらせず、ただ己が圧倒的な霊圧とそれを用いた術によって触れる事すらなく竜を屠った規格外の力。
それはまさに”死”を連想させる。
誰もが自らを無意識に黒き竜に、ネロ・マリグノ・クリーメンという名の竜に置き換えそして戦慄した。
勝てる訳が無いと、前に立てば自分に待っているのは”死”だけだと、怖ろしい、ただ怖ろしいと、そして認識するのだ、その怖ろしい存在こそ自分達の王であると。

藍染（あいぜん）　惣右介（そうすけ）という名の我等の”王”であると。

僅かばかりの時が流れ、その場所には再び多くの破面達が集結していた。

その場所の名は『奉王宮』、虚夜宮における藍染惣右介の居城でありその中の一角、この虚夜宮で唯一人藍染のみが座ることを許される王の証明、玉座の据えられた広間、『玉座の間』である。

度重なる闘技場の破壊と崩落、それに巻き込まれ、或いはネロによる無差別な虐殺によって恐慌状態となった破面達。

その場を逃げ出した者も多く、そのまま強奪決闘（デュエロ・デスポハール）は終了となり本来その場で言い渡されるはずの最終的な”号”の通知等は行われなかった。

残った者だけに通達するという手段もあったが、今回の強奪決闘は図らずも四つの十刃越えを抱え込むものとなり、その結末を皆が納得行く形でという建前の下、今日改めての通達となったのだ。

下官、破面もどき、号を持たぬ破面から数字持ち（ヌメロス）、十刃落ち（プリバロン・エスパーダ）、そして付き従う従属官を連れた十刃達（エスパーダ）。

彼等の居る場所よりも高い位置に据えられた玉座に近付くほど強くなるその並びは彼らにとって誇らしいものであり、それ以上に羨望と嫉妬を呼び起こす。

見える背中は大きく、しかしいつかお前を血の海に沈めてやるとい

う殺意が満ち、それを背に浴びながらも平然とする者達の連なり。
下位では微々たる変動はあるものの、長らく不動であったその最前列に構える虚夜宮の十傑。
背に刺さる視線を平然と、いやそれ以上に感じる事すら不要だといえる実力を個々に持つ十体の破面、十刃。

それが今回大きく動いた。
二つの十刃越えは誰の眼にも明らかな結末。
片方が片方をその力をもって降し、或いは殺したという勝者と敗者の構図を。
もう一つの十刃越えは誰もが勝利者を決められない結末。
片方が戦いを優位に進め、とどめの一歩手前まで迫るも横槍によって沈み、最後は両者共に闘技場を去るという水入り、言うなれば引き分けの構図を。
最後の一つ、これは十刃越えと言っていいのかも怪しい代物で誰もが困惑を抱える結末。
虚夜宮の”暴力”の結晶をいとも簡単に連れ去り、それをも超える霊圧を発してみせ、再び現われたその結晶に瀕死の重症と呼んでいい傷を負わせていたが、”王”の登場により決着が着いたという結末。

この四つの十刃越え。
その結末がどういったものを迎えるのか、下官やもどき、数字持ち、それ以上に十刃達も興味はあった。
順当に行ったとて大きな変動が訪れることは必定。
そして何事も順当に、順調に行くはずが無いのがこの虚夜宮という場所であり、その認識になんら間違いなど無い。
故に興味がある。
先の戦い、その結末、行く末に。

「皆、よく集まってくれた。　先の強奪決闘、その顛末を知る君達なら判ると思うが、あのような形でしか終わらせることが出来なかったのは悲しい事だ・・・・・だが皆には覚えておいて欲しい。
　私はあの選択が間違いだとは思わない。そして、同じ事が起これば私は、同じように”力”をもって制するという事を。」

玉座の後ろにある通路から現われた藍染は、一度ぐるりと眼下の破面達を見回すとそう口にした。
その顔には僅かながらの悲痛さを滲ませ、しかし強い意思を持って続いた言葉に多くの破面は息を呑む。
彼らに浮かぶのは一様に恐怖の感情。
僅かではある、表情を変化させるにも至らない僅かな恐怖。
しかし浮かんだそれを藍染は見透かす。
それは藍染の確認作業であり、彼等の内に恐怖の華が開いたかどうかを知る為の言葉。
僅かばかり浮かんだそれを藍染は満足そうに見下ろし、普段どおりの”笑み”を貼り付け玉座へと腰掛けた。

「さて、皆に集まってもらったのは他でもない。先に行われた強奪決闘、その結果を皆に伝えるためだ。本来ならばその場で言い渡された”号”を得て終わりとなるのだが、今回はそれ以上に皆が知りたいことが多いと思ってね。そう・・・・・・　新たなる十刃が誰なのかという事を。」

玉座に深く腰掛けた藍染、その光景は余りにも似合いで、やはりこ

の玉座に座すべきはこの男であるという事を再認識させるものだった。

そして藍染が語ったのは強奪決闘その結果について、彼の言う通り下位の者達の決闘ならばこのように再び全員を集めてまで言い渡す必要など無いだろう。

だが今回は違う。

虚夜宮の中でも実力の突出した十刃がその席の多くを入れ替える、いや、奪われ剥奪されともすれば簒奪されるその出来事はただそういう事があった、という情報の伝播だけで納得するには些か無理があった。

故の招集、そもそも異論など上がるはずも無いがしかしそれでも皆に直接伝え、そして皆が納得したという形こそを必要とし今回の招集はかけられたのだ。

事の中心にいる十刃達、その反応はそれぞれであった。

多くの従属官を引き連れたバラガン僅かばかりの怒気、というよりも苛立ちを滲ませながら豪奢な椅子に腰掛け、藍染を睨みつける。

それは玉座に座す藍染への苛立ちであり、なにより自らが招いた失態に対する自身への苛立ち。

己が願望により目を曇らせた自身への苛立ちに他ならず、しかし王である自らが犯した失態がこの上なく愚かだった事を自覚するゆえの苛立ちだった。

ハリベルはどこか複雑な心境を抱えその場に立っていた。

恐らく彼女がこの虚夜宮へと連れてきた者、フェルナンド・アルディエンデは今日自分と同じ十刃という位階まで登り詰める事だろう。

それは喜ばしい事であるし、何よりいつかと思っていた約束の時が

近付いたという事でもあった。
しかしそれは同時にもう二度と、”手合わせ”という形で彼と戦うことは無いという事でもある。
”十刃同士の私闘は厳禁”
秩序を重んじる彼女にとってそれは当然の事であり、それ故に”手合わせ”という形をとろうとも彼女がそれを選択することは無いだろう。
それゆえの寂しさ、しかしそれ以上に再び相見える瞬間への期待が彼女には高まっていた。

が、今はそれすらも瑣末。
彼女が今もっとも危惧しているのは一つ。

フェルナンド・アルディエンデが、素直に十刃の席に着くか否かの一点のみであった。

第４十刃（クアトロ・エスパーダ）ウルキオラ・シファーはただ目を閉じ佇んでいた。
彼にとって他の十刃がどうなったのか、そもそも新たな十刃が誰なのか等ということは瑣末の極み。
関係ない、彼がその思考を揺らす必要すらない出来事、それが彼にとっての強奪決闘とその顛末。
故に彼は目を閉じていた。
その目で見ることすら、必要は無いといわんばかりに。

自らに向けられた奇異の視線を無意味と内心断じながら、アベル・ライネスはその場に立っていた。

相変わらずの白い外套のような死覇装、手も足も見えず存在を隠すようなその外套を身に纏い、しかし今彼女は奇異の視線に晒される。それは彼女の顔に、あの嘴を模し、目の文様が刻まれた仮面がないからだ。

あるのは黒い厚手のヴェール、普通ならば視界を遮るそれも彼女にとってはなんら障害にならず、仮面の代わりに彼女の顔の上半分を覆い隠していた。

元々隠していたわけでもない性別、しかし既に周知の事実となったそれを再び仮面で覆い隠すのは無意味と断じた彼女は、代替としてそれぞれ選択した。」

顔を隠す、というよりも自らの視界を覆う事を目的としたそれ、裸眼では見えすぎるその目を覆うことだけを目的にしたそれは無意味を嫌う彼女らしい選択ともいえた。

向けられた奇異の視線、しかしその中で他とは違う一つの視線も感じながら、彼女はただ佇む。

その内に一つの決断を抱えて。

第8十刃（オクターバ・エスパーダ）ノイトラ・ジルガは藍染の言葉など意にも介さず、ただ一人だけを見ていた。

アベル・ライネス、彼に屈辱を与え、彼が越えることを望みなによりそのあり方、考え方が気に喰わない相手。

達観、ともすれば諦観をそのあり方とする彼女は、彼にとって何処までも気に喰わない相手だった。

彼は諦めない、たとえ腕を全て落とされようと、両の足をもがれ様と、その意思さえ残っていれば決して諦めない。

戦いの内側に居る間は決して勝利を諦めない、その末に自らが死んでも構いはしないのだ、戦いの内側で死ぬ、最後まで戦って死ぬ事こそ彼が追い求めるものだから。

故に彼はアベル・ライネスを睨む。
彼の中でまだあの戦いは終結を迎えてはいない。
両者共に生きているなどという都合のいい結末を彼は許せないから、
それが彼の戦いの哲学なのだろうから。

残る二名、第９と第１０であるアーロニーロ・アルルエリとヤミー・リヤルゴにとってはこの結末がどう転ぼうが関係は無かった。
アーロニーロに関していえば彼が負う役目ゆえに十刃からの排斥は考えづらく、何より自分がまったく絡んでいない強奪決闘などやっていようがいまいが関係なかった。
ヤミーに関してもそれは同じで、しいて言えば今日この場でなにか面白いことが起これればそれはそれで儲けもの程度にしか考えていない。
そもそもヤミーにとって強奪決闘は茶番にしか映らない。
誰が最強か、それを論ずることすら彼には無意味。
自らの”号”を知る彼からしてみれば。

そして残る十刃、第６十刃（セスタ・エスパーダ）ドルドーニ・アレッサンドロ・デル・ソカッチオと第７十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルーはこの場にはいない。

正確には片方はこの場に来ることを良しとせず、もう片方は来る事すら出来ないと言った方がいいだろう。
ゾマリ・ルルーという存在は既にフェルナンドによって葬られ、灰燼へと帰した。
戦いの結末としてこれ以上ないほどの勝利と敗北の図式、片方が生き片方が死ぬ。
それに則りフェルナンドは生き、ゾマリは死んだのだ。

引き替え第６十刃であるドルドーニは傷を負いながらも存命、しかし彼はこの場に来る事はなかった。

”既にこの身は十刃ではない。”

それだけが彼が語った言葉。

十刃ですらない自身が藍染に拝謁する事は出来ないと語り、何より今更告げられずとも彼自身誰が今最も第６十刃に相応しい者であるかを理解している故に、彼はこの場に来る事はない。

門出を祝うなどという事を望むような男ではないと、ドルドーニは理解しているから、そしてあの男にとって第６の座は”到達点”ではなく”通過点”であると知っているから。

そして自らがいない事で語りかけているのだ、お前が第６十刃なのだ、と。

「それでは皆に紹介しようか、新たな十刃達を。そしてその頂点、第１十刃は彼だ・・・・・前に来てくれるかい？　スターク。」

それぞれの思惑を抱えた十刃達、それを前に藍染は新たなる十刃を告げ始める。

そして最初に呼ばれた名前、その名に広間がざわりという音と共に揺れた。

”スターク”、藍染は確かにそういったのだ、第１十刃と、”バラ

ガン”ではなく”スターク”という名を。
広間全体を、一体どういうことだというざわつきが支配する。
最初に多くの視線が向かったのはバラガンへ、藍染の発言に対し彼がどういった反応をするのか、それが藍染の一存なのかそれともバラガンも承知のことなのか、困惑と疑問の視線がバラガンへと向かう。
視線の先のバラガンは、脇に控えた従属官が驚きで声を上げようつするのを軽く手を上げて制していた。
おそらくどういう事かを問おうとした従属官を制するバラガン、そしてその行為は同時にこの出来事がバラガンも承知の事である事を、見る者達に感じさせる行為だった。

次いで視線の群れが向かったのは藍染。
呼んだはいいがその人影は十刃達のいる最前列にはおらず、一体何処にいるのかと探す破面達は自然藍染の視線を追うために彼へと目を向ける。
そして彼らが見た藍染の視線は遠くを、彼ら多くの破面達がいる場所よりもさらに後ろを見ていた。
視線が一斉に後ろを向く。
そして彼等の視線が捉えたのは、広間へと入るための大扉に寄りかかるようにして面倒くさそうに頭を掻いている一人の男と、その隣に立つ小柄な少女だった。

扉の前の男、スタークは一つ盛大な溜息をついた後藍染の座す玉座の方へと歩き出し、少女の方も同じように後に続いた。
彼らが視界に捕らえたその男、彼らはその男の事を知っていた。
いや、知っているというよりも見たことがあると言う方が正しいだろう。
強奪決闘の最中、第5と第8十刃の決闘に乱入した第2十刃ネロの凶行から彼らを救い、そして闘技場から瞬く間にネロを連れ去った

男。
そして天蓋の上でネロに相当、いやネロを凌駕する霊圧を発してみせた男それが彼、スタークだったのだ。

最前列へと向かうスターク。
その前を遮るようにしていた破面達は自然、道を開けるようにその場を退いていった。
その視線に困惑と、疑問を、それ以上に殺気と怨念じみた感情を滲ませながら。
しかしスタークはそれを意に介した様子もなく開かれた道を進む、対して少女、リリネットのほうはそれに過敏に反応したのか何の反応も示さないスタークの代わりだと言わんばかりに、あかんべぇをしてみせるも頭上から降ってきた拳骨によってそれを止められる。
そんなやり取りをしながらスタークとリリネットは遂に最前列の更に前、玉座の最も近くへとその歩を進めていた。

「態々後ろで霊圧を抑えていることなど無いだろう？キミは第1十刃（ブリメーラ）なんだ、もっと誇ってくれないか？スターク。」

「・・・・・ガラじゃないんですよ、そういうの。」

「フフッ、まぁいいさ。　キミがどう思おうともキミが示した実力は第1に相応しい。・・・・・そう思うだろう？　バラガン。」

藍染がどこか親しみを込めるように語りかけた言葉に、スタークは先程と同じように頭を掻きながら答えた。
第1十刃、この虚夜宮でもっとも殺戮能力に長けた者に与えら得る称号、それはお前にこそ相応しいと語る藍染だが、スタークはただ

自分のガラではないと言う。
本来ならば誇るべきそれも彼にとってはそれほど価値のある物では無いという事なのだろうか、しかしその様子を見ても藍染は咎める事はせずただ笑みを浮かべていた。
そして、藍染は事もあろうにスタークの実力が第1に相応しいものだという事の証明をバラガンに、現第1十刃のバラガンに求めたのだ。
空気が凍りついたように静まり返る広間。
現第1十刃のバラガンに対して、その座を簒奪する者をそれに相応しいかどうかを評価して見せろと言う藍染の言葉は酷以外のなにものでもないだろう。
ともすればこの場が死地に変る可能性すら秘めたその言葉、しかしバラガンも然る者、そのうちに救う感情など露ほども見せない。

「・・・・・その若造がネロの阿呆(アホウ)を追い詰め、殺す一歩手前だったのは事実。正面から戦えば儂とて無事では済まん・・・・・・何よりボスが決めたことじゃ、逆らう余地など端からありはせん・・・・・」

それは事実上バラガンが位を下げる事を認める言葉だった。
決して自分が劣っていると言っているわけではないだろう、しかし、戦えば無事ではすまないこともまた事実。
なにより藍染の決定こそ全てであるこの虚夜宮において、一人我を張ったと意味など無いとバラガンは語った。
そしてその口から藍染との”賭け”については一切零れることはなかった。
それもまた王の矜持、賭けに負けたから仕方なく座を譲るという言い訳は余りに無粋で惨めな代物。

確かにこれは”賭け”によって成された降格ではあるが、しかしそれ以上にそれを招いた自身の愚かさがバラガンには際立っていた。故に認める、王として、自らの失態を戒めるために。

「そんな事はないさ。　ただキミに認めてもらう事が、皆に対して最も説得力がある。なにせキミは今でも”王”なのだから。」

「フン、どこまでも言いよるわ・・・・・なら儂はあの阿呆の後釜、という事か。なんとも座り心地の悪そうな事じゃい。」

「そう言わないでくれ。　ネロの処断は避けられない事だった、そしてキミにはこれからも私を支えてもらわねば困る。」

互い本心は見せない会話。
上辺を取り繕い、しかし他者には解らぬ様に刃を交わすかのようなそれ。
なにも本物の刀を交わすことだけが戦いではない、こうした戦いも確かに存在する。
水面下、互い主導権を握り合うための舌戦、武勇ではなく知略の戦い。
派手さは無く、しかし場合によっては”武”に勝るそれ、そうして二人は刃を交わしているのだ。

「皆も聞いたとおり第1十刃にはスタークを、そして空位となった第2十刃にはバラガンに座ってもらう。更に第3にはハリベル、第4はウルキオラがそれぞれ在位のままで皆、異論は無いだろう。そして次は・・・・・　アベル、ノイトラ、前に出てくれるかい？」

言葉の刃の交わしあいが終わり、藍染が決定事項として第1から第4十刃の名を告げた。
そう、ここまでは決定事項であり多くの破面達からしてもバラガンの事を差し引けばおおむね予想通り。
しかしここからは違う。
藍染によってそれぞれ前へと進み出た二つの人影。
アベルとノイトラは互い距離を置きながらも藍染へと正対する。
進み出た二人は決着が着かなかった決闘の当事者、互いボロボロとなりしかし決しなかった戦いの当事者だった。
勝利者もなく、敗者もなく、互い生き延びしかし決さねばならない。
どちらが勝者なのか、そして敗者なのかを。

ネロの介入前までを見れば勝者は明らかにアベルだろう。
短剣の軍勢（エヘルシト・ダーガ）、そう呼ばれたアベル・ライネス必殺の計によりノイトラは死を迎えるはずだった。
だがそれはそうなったであろう未来であり、どこまでいっても想像でしかない。
もしかすればあの状況からノイトラは抜け出し、反撃し、そして勝利を収めていたかもしれない。
誰にもそれは否定できないのだ、アベルの勝利を想像するのと同じように、ノイトラの勝利もまた如何様にも想像出来る可能性を持っているから。
故に誰もが知りたいのだろう、どちらが勝利者でありどちらがその”号”を奪われる敗者であるのかを。
藍染がどういった決定を下すのかを。

「二人にはすまない事をしたね。　私がネロを遇するあまり、キミ

達の戦いに水を指す結果となってしまった。・・・・・これは私の不徳ゆえの結末だね、しかし決着はつけなくてはいけない。十刃に欠けは許されない、特にこれからを考えれば尚更・・・ね。決定を下す前に二人とも、何か言いたい事はあるかい？」

まず藍染は謝罪の言葉を述べた。

決闘の未完は自らが招いた不徳、ネロを優遇する余りの不慮の出来事であったと。

しかしその言葉は上辺だけなのだろう。

藍染惣右介の言動、それに多く用いられるその手法。

まず相手を気遣い、時に褒め称え、謝辞を述べる。

それは相手の精神を僅かばかり緩めるための手管、強大な力を持つ自身が下手に出るという行為は相手にとっては恐れ多く、時には優越感すらあるもの。

だがそれは最初だけ、謝り、時に感謝しながらその後に続く言葉は否定を許されない決定事項であり、誰もがそれに逆らえない。

相手が、藍染が一度下手に出たことによって生じる僅かばかりの罪悪感、向こうは一度謝罪し、或いは感謝を述べた、ならば自分もある程度の譲歩はしてもいいだろうという思考の芽生え。

故に許してしまう、多少無理のある願いであろうとも。

逆らう事は元から許されず、しかし相手はそれを振りかざすのではなく自分に頼んでいるのだと錯覚してしまう。

それが藍染惣右介の狙いであるとも知らずに。

先のアベルとノイトラに対する言もそうだ。

謝り、どこか謙りながらもその後に続く言葉は決定的なもの。

おそらく藍染の中で答えは出ており、そしてその思うとおりに進める心算が垣間見える言葉たち。
それでも一応彼ら二人に意見を求める方向へと向け、しかしそれを踏まえたという形をとって自らが望む形へ導く。
藍染惣右介にとって重要なのは、”思い通りの結果”であり、そこにたどり着くまでのそれぞれの意思などと言うものは始めから存在していないのだ。

「・・・・・・では、私から一つよろしいでしょうか？」

「なんだい？　アベル。　まさかとは思うが自分こそ勝利者に相応しい、等という事をキミが言うとも思えないのだが・・・・・・」

二人へと言葉を求めた藍染、そしてそれに帰ってきたのはアベルの言葉だった。
一つ、言いたい事があるというアベル。
それを藍染は寛容に受け入れるが、一つ釘を打つことも忘れない。
勝利を声高に叫ぶ様な者は十刃たりえない、”武”による戦いの勝利とは血に濡れた結果であり、言葉によって齎されるものではないのだから。
だがそんな事はアベルとて先刻承知、彼女が言いたい事はそんなことではなかった。

「無論です。　言葉による勝利など無意味極まりない。私が言いたい事・・・・・・　いえ、聞き届けていただきたい事は一つ。私が十刃を辞す事をお許し頂きたいのです。」

その言葉は多くの者に衝撃を伴って聞こえた。

十刃を辞す。

かつてこんな事を願い出たものがいただろうか。
数々の特権と、自らの力を示すための階級、その頂点に立つ十刃。
それらをアベルは自ら捨てるという、不可解であり不可思議なその決意、彼女が口にした言葉は余りにも理に叶っていなかった。

「それは本気かい？アベル。　十刃の・・・・・・第５十刃の位をキミは自ら捨てるというのかい？」

「そうです。　今の私ではおそらく十刃としては不足でしょう。そのような者がただ特権と位階にしがみ付く事は不様であり無意味だ・・・・・ならば潔く一度身を退く事が最良の答えと判断しました。そして出来れば空位となる第５の座は、現第８十刃（オクターバ）に預けさせて頂きたく存じます。」

流石の藍染もこのアベルの申し出は予想の範疇にはなかったらしく、珍しく驚きの表情をみせる。
対してアベルは顔の半分は隠れていたとしても、その僅かに見える表情、雰囲気に揺らぎはない。
熟考の末の回答、自らが相応しくないが為に十刃を辞すという選択。
合理的な彼女の自身への客観的観測に基づく結論がそこには見えた。
そしてさらに周囲を驚かせたのは、自らが座した第５の座が空位となるため、そこに第８十刃、ノイトラを据えて欲しいと言うのだ。

受け取り用によっては事実上の敗北宣言とも取れるその言葉。
負けを認め、彼こそが第5に相応しいとでもいいたげなその言葉は周囲を驚かせる。

しかし、驚きではなくその言葉を怒りを持って聞いていた者が在った。

「ふざけんじゃねぇ・・・・・ふざけんじゃねぇぞ！　第5（クイント）！！なんだその腑抜けた台詞は！　なんだその選択は！俺を第5の座に・・・だと？　ふざけんじゃねぇ！！施しの心算か！　哀れみの心算か！　どこまで・・・・・・どこまで俺を虚仮にすれば気が済みやがるんだ、テメェは！！」

その叫びは純粋な怒りだった。
十刃を辞す、その言葉だけでもノイトラにとっては怒るに充分であり、その後に続いた自分を第5の座にという台詞で彼の怒りは一息に頂点を振り切った。
その言葉はノイトラからすればどこまでも自身を馬鹿にし、哀れみ、見下しているかのようだったのだ。
確かに自分は負けそうになっていた、あのまま行けば十中八九負け、そして死んでいただろう。
だがそれでよかったともノイトラは思うのだ。
戦いの内側で死ねればそれでいい、勝利を積み重ね、”最強”を手にし、そして死ねれば尚いいがそれでも、戦いの内側で死ねるならば本望であると。
だが現実こうして自身は生き残り、そして敵であるアベルもまた生き残った。
ならば、ならばと、ならば再び戦いによって雌雄を決するより他選

択肢などありはしないと彼は考えていたのだ。

だが現実は違う。

アベルは戦う事ではなく十刃を辞すことを選択した。

そしてそれはノイトラにとってこの上ない”逃げ”だった、勝ち逃げだった。

自らを瀕死に追いやった相手は勝ち逃げを決め込み、そして空位となった座をお前にやろうとまで言い放つのだ。

虚飾、どこまでも、煌びやかなその座はしかし勝ち取ったものではなく、譲られた愚者の座だった。

ノイトラの怒りはもっとも、そしてその怒りが彼の手を伸ばし、アベルに掴みかかろうとしたのもまたしょうがない事でもあった。

「無意味だな、第8十刃。　そうやって不様な霊圧を撒き散らしても私に勝てない事は、貴様がよく知っているだろうに・・・・・・それに貴様は勘違いをしている。　無意味に怒るのは貴様の勝手だが、よく私の言葉を思い返してみるが良い。私が何時貴様に座を譲るといった？　私はこう言ったのだ座を預けると・・・・・・」

ひらりと、それこそ舞う羽の如くノイトラの掴みかかろうとする腕を避わすアベル。

彼女からすればその腕を避けることは容易、怒りで乱れた霊圧では彼女には届かない。

それを忘れるほどノイトラの怒りは凄まじく、それ故に彼が心底怒っているのだという事を伺わせる。

そのノイトラに対しアベルはいつもの通り、鷹揚の少ない声で言葉を返した。

自分は座を”譲る”のではなく”預ける”のだ、と。

「先の戦い、私はそこで必要以上の傷を負った。特に”翼”に傷を負うという事は私にとっては死活問題に等しい。私の翼はその特性上非常に繊細だ、傷が塞がろうともそう簡単に機能が回復するものではない。故に今の私では十刃には不足なのだ、戦闘力の落ちたものは十刃足り得ないのは当然だろう？」

語られるのは真実の理由。
アベルが十刃の座を辞す理由だった。
ノイトラとの強奪決闘、そのなかでアベルは解放後の自身の翼に多大なダメージを負った。
穴が穿たれ、その表面に強力な虚閃を受けたことによる傷を抱え、彼女の翼は傷ついているのだ。
ただ飛ぶことが目的のそれならば、今日までの期間をおけばある程度の回復は見込めただろう。
だが彼女の翼は飛ぶことよりも彼女自身の能力に直結する重要な機関のひとつだった。
その目で霊子の流れすら見る女性アベル。
そして解放後はその黒い翼をもって精密で微細な霊子を感じ、或いは操作する事で戦うのが彼女なのだ。
故にその翼は生命線、そして微細な霊子操作を可能にするその翼は精密機器の集合体ともいえる代物で、そう簡単に回復が見込めるようなものではない。

それこそが理由、彼女が辞す理由なのだ。
翼という生命線を欠いた今の彼女では十刃として求められる殺戮能力を、自身のそれを十全に発揮できない。

それ故に彼女は十刃の座を辞そうと言うのだ、客観的で合理的な結論の下。

「だがこの傷は決して癒えない傷ではない。　時を置くことで回復は充分に見込めるだろう。だから私は貴様に”座”を預けるのだ、私が回復した暁には再び貴様と戦い、”号”を奪い返し、そして・・・・・貴様の死をもって私の完全性を再び証明するために。その為に、一度くらいは泥にまみれるのも悪くはあるまい。」

そう、アベルの真意はそこに終結した。

”今の”自分では不足、そして座は”譲る”のではなく”預ける”と。

始めから彼女の言葉に”諦め”は存在していなかった。

傷を負ったままの自分では十刃たりえない故に今は辞す、しかし、傷が癒えたその時は再び十刃へと舞い戻ろうと。

その為に自分の座は貴様に預けてやろうとアベルは言っているのだ。

だがそれは確実に勝てるという目論見の下にある言葉ではない。

ノイトラ・ジルガはアベル・ライネスの先見にも似た予想を、一瞬ではあるが越えて見せた。

それは彼女にとって自らの価値観、それから導かれる完全な理論の崩壊を意味している。

許されるものではない、価値観の崩壊は自己の崩壊にすら等しくそれを容易に認められるような者がこの場にいるはずもない。

それ故彼女は傷が癒えたその時は、再び戦い、そして自らを再び証明することを望む。

なにもノイトラだけが戦いを望んでいたわけではないのだ、アベルもまた自分の譲れぬもののため再び戦うことを望んでいたのだ。

「この俺を間繋ぎに・・・だと!?　ケッ!どこまでもふざけた事言いやがって・・・・・・その言葉、忘れんじゃねぇぞ。　テメェの傷が癒えたその時は、どっちが強いか必ずハッキリさせてやるぜ。あぁん？　十刃落ち(プリバロン)よぉ・・・・・・」

「その挑発は無意味だが・・・・・・まぁ受けるだけなら問題あるまい、第５十刃(クイント)よ。」

アベルの言葉に怒気を滲ませていたノイトラから怒気が薄まっていく。

彼にとって戦いを諦めたこと、そして何より情けをかけられたことが怒りの原動力であり、それが情けではなく再戦の誓いであるというならば話は別なのだ。

そして今すぐ戦っても意味がないことも彼は理解した。

敵が今傷を負っている状況、そこを攻めて卑怯だ卑劣だとさわぐのは偽善者だ。

戦いとは常にそういうものであり、互いが十全で戦えることの方が稀とも言える。

だが今、ノイトラはそれを望んでいた。

このアベルという破面だけは真正面から、完全となった彼女を真正面から叩き潰さねば自分は進めないという直感。

ネリエルと同じ、経験を積んだ自分が彼女と相対したいと思ったのと同じようにアベルにもまた正面から、そして勝つ事が自身の”最強”の証明となると。

「・・・・・話は、終わったかな？　些か私の考えていたものとは違ったが、キミ達が納得しているというのならばいいだろう。で

は第5十刃（クイント・エスパーダ）には新たにノイトラを、そしてアベルは十刃落ち（プリバロン・エスパーダ）となってもらう。二人とも、これからも私を支えてくれ。」

若干置いて行かれていた感がある藍染が、決着を告げる。
第5にはノイトラ、十刃落ちにはアベル、これがこの二人の決着が着かなかった戦いの決着。
そして図らずも藍染の思い描いた決着に近いもの。
元々アベルを排斥するために整えたノイトラとの強奪決闘。
ネロがアベルを殺す事がもっとも効率的ではあったがそれは叶わず、次点として十刃から排し、十刃落ちとして遠ざける心算でいた藍染。
図らずもそれは彼ら二人の合意という最も理想的な形で叶い、藍染はその笑みを深める。
廻っていると、世界は今自分の思い通りに、それ以上に思いもしない部分までが自分に都合のいいようにと。
これが天の座、世界の中心、願えば全て叶ってしまいそうな錯覚を覚えるほどの力だと。

「では次は第6十刃だが・・・・・・　その前に今し方空位となってしまった第8十刃を決めようか。私にとっても少々想定外の出来事でね、これという者がいないのだが・・・・・・誰か、自分こそが十刃に相応しいというものはいるかい？」

アベルとノイトラが下がり、再び藍染が口を開く。
ノイトラが第5となり、アベルが十刃落ちとなった今、第8の座は空位となった。
それは藍染とて予想していたことだが、それでも口に出さないのは彼のいやらしさとも言える。

今もって十刃は完成しつつある、そして第８の座に誰が座ろうともその磐石は揺らぐ事ないと。
ならば座りたいというものを座らせるのもまた、一興だろうと。
ざわざわと揺れる広間、こんなにも簡単に十刃の座が手に入ることへの僅かばかりの不安と牽制がその場を支配する。
容易には動けない、そんな空気の中その空気など意に介さず、それ以上に異質な空気を纏ったものが前へと進み出た。

「ではその第８の座、僕にくれませんか？藍染様。　最近少々研究室が手狭でして・・・・・僕としては苦もなく十刃の施設を手に入れられるならもうけものですし。」

進み出た者、桃色の狂気がそこには立っていた。

巡る円卓
狂気と獣

そして修羅
満つる座をして
黒き思惑

BLEACH El fuego no se apaga. 58（後書き）

作者の悪い癖が発動しています。

一話で終わらせる心算が何故こんな文量・・・・・・

あれか？　久々にアベルとノイトラ書いてテンションでも上がったか？

まぁ別の要因もあるのだけれど、それは内緒さｗ

本当は番外をもう一つ、と思っていたのですが書き始めて気がついた。

この番外は、番外というよりｉｆなんじゃねぇか、と。

この小説の番外はある意味作中の別視点というか、大きな流れの中での”点”としてのキャラの描写であると位置づけているので、ｉｆというのはどうにも違うな、と。

ということでそちらは見事完結出来た際に書こうかと思います。

それに番外は端っこでやるから面白いのであって、それを何回もメインを差し置いて書くのはどうにも・・・ね。

これからはある程度本編が続きます。

原作突入も間近ですので、お楽しみに。

進み出た者は他の破面に比べ、何処か異質な空気を纏っていた。
それは突き刺すような殺気でも、押しつぶすような威圧感でもなく言ってしまえば気味が悪いもの。
何処かおどろおどろしい粘着質の瘴気と言ったらいいのか、そしてそれを纏った男は中指で眼鏡型に残った仮面の名残をくいと持ち上げる。
口元には口が裂けたような深い笑みを湛え、その目に輝くのは爛々とした狂気。
そう狂気だ、この男の纏う雰囲気、それは壊れ狂った者だけが発することができる狂気そのものだった。

「ザエルアポロ。　キミが再び十刃になると言うのかい？十刃の責務によって自らの時間を削られる事を嫌い、十刃の座を降りたキミが。」

ザエルアポロ、藍染によってそう呼ばれたその男。
名をザエルアポロ・グランツ、その階級は破面（シエント・ドス）Ｎｏ．１０２でありその三桁の数字が示すのは、彼が十刃落ち（ブリバロン・エスパーダ）であるという事実。
桃色で独特の癖毛は整えられ、手には白の手袋、同じく白の死覇装はどこか人間の医者が纏う白衣のような印象を与える。
しかし彼は医者ではない、彼は”研究者”なのだ。
目に視えるもの見えないもの、触れられるものそうでないもの、何故見えないのか、何故触れられないのかが判らないことが彼には我慢ならない。
それこそこの世で自分の理解の外にあるものが存在する事が許せない。
故に彼は考え、試み、実証し、理解する研究者。

だがそれには犠牲が伴う。
彼が、ザエルアポロが知りたい事は常に命の犠牲なくしては知り得ない事ばかり。
そして彼はその命の犠牲を尊い犠牲ではなく、自分が知識を得るという崇高な目的の為の当然の犠牲と捉えている。
彼が纏う狂気とはそういった類の命を軽んじる、いや、目に映るそれは命ですらないという狂気。
恍惚の中命を弄ぶ狂人研究者、それがザエルアポロなのだ。

「昔とは状況が違いますので。　研究と義務との比率を考えたとき、例え義務としての任務に時間をとられようとも、宮殿規模の施設が手に入るのならば今の僕なら、研究はよりはかどるかと思いまして。僕にとって”利”の大きい御提案です、受けない方がどうかしているかと。」

どこか恭しく藍染に対し頭を下げるザエルアポロ。
その様子は一見すれば礼節を弁えた良き臣と見えるだろうが、恐らくその実態は違う。
その実態はどちらかと言えば藍染惣右介に近いだろう。
騙し、陥れ、思い通りに進め、犠牲をして”利”を得る。
そしてどちらも全ては”自分だけのため”であり、他の犠牲など知ったことではない。
その性(さが)を思えばこうした良き臣の姿など面の皮、その下に潜むのは己の実利だけを追い求める利己主義者でしかなかった。

「なるほど・・・・・　私としては他に名乗り出るものがなければキミになってもらって構わないが・・・・・どうだい？　誰か他に名乗り出るものはあるかな？その時はザエルアポロとどちらが相応しいか、証明してもらうことになるのだが・・・・・」

ザエルアポロの答えに藍染が返した言葉、それが全ての決定打となった。
藍染にどんな思惑があるのかは判らない、しかし藍染が放った言葉、どちらが相応しいか証明してもらうという言葉は事実上の戦闘を意味する。
それも只の戦闘ではない、ザエルアポロ・グランツという名の狂人との戦闘をだ。
戦いの中の出来事、不慮の事故、不測の事態に時の運、言い方などそれこそ幾らでもあるそれを利用しこの狂人は恐らく何かを仕掛けるだろう。
そういう性だ、そういう男でそういう生き方、あり方の破面だとい

うことは誰もが知っている周知の事実。
そのザエルアポロと戦う、そんな事は自分から彼の実験材料に諸手を挙げて志願するようなものだ。
そして彼の実験材料になるということは即ち、世にも怖ろしい死を見るということに他ならない。

そう、その言葉は決定打。
誰もが目を背ける、藍染から、ザエルアポロから、そして自らの死から。
その後も誰が名乗り出るはずもなく、充分な時間を置いた後藍染はその口を開いた。

「誰もいないようだね。　では第８十刃にはＮｏ．１０２　ザエルアポロを再び十刃へと格上げし、その席を担ってもらう。よろしくたのむよ、ザエルアポロ。（精々、私の掌の上で己が知欲を満たしてくれたまえ。）」

「畏まりました。　藍染様。（　・・・ふん、死神風情が・・・・・・僕の知識を利用する心算か知らないが、逆に僕が利用してあげるよ・・・・・・）」

思惑をそれぞれに抱えながら、第８の座は埋まる。
どちらもその目的のため、それがなんであれ始めから利用するためだけに互いを尊重する。
知識と謀略の渦、謀略と詐術の渦、二人の間で渦巻くのはそれ。
謀り合い、それを表には出さない。
顔には笑みを、内には毒の刃を抱え二人の邂逅は終了した。

「それでは次は第6十刃（セスタ・エスパーダ）だ。これは皆が納得する形だろうね。そうだろう？グリムジョー・ジャガージャック。」

笑みを湛えた藍染が見下ろす先、一本の折れた柱の上に彼は腰掛けていた。

柱の下には付き従うかのように数体の破面が、柱の上の彼が自分達の王であるとするかのように。

柱の上の彼、グリムジョー・ジャガージャック。

顔はやや伏せたまま、目線だけを藍染に向けるその様はまるで藍染を睨みつけているかのよう。

全てを殺すと、その意を存分に湛えたその水浅葱色の瞳はしかし赤を湛えたかのように滾る。

これがこの男の真なる姿か、内なる獣を解放し、飼い慣らすのではなく思うがままに解き放った男の姿か。

気配は静かだ、だがしかしその目を見れば明らかだろう。

この男が戦いを欲しているという事が。

「発する気、気配、霊圧、そのどれもが2年前とは比べ物にならない・・・・・ウルキオラに敗れたあの時に比べて・・・ね。よい師を見つけたね、グリムジョー。そして師であったドルドーニには感謝しなくてはいけない。彼のおかげで私の十刃はより磐石となったということを・・・・・・」

その藍染の言葉は真実だった。

今のグリムジョーは過去の彼とは違う。

力を付けた、力を磨いた、力を支配しそして凌駕した。

彼の師は戦い方など一度も教えなかった、いいとも悪いとも、合っているとも間違っているとも言わなかった。
ただ彼が求めれば彼が力尽きるまで戦う、彼の師がしたのはそれだけ。
だがそれこそが彼に力を与えた。
濃縮された戦闘経験、戦いに正解はなくならば積み重ねるしかない。
あらゆる状況に対応できる自身の力、あらゆる敵を凌駕できる自身の力を。

そして彼は凌駕した。
彼に力を、その力の全てを導いた師を。
故に彼はここに居るのだ。
並み居る破面の最前列、誰に劣る事もなく、誰に蔑まれることもなく、そんな言葉を全て己が示した”力”によって捻じ伏せて彼は居るのだ。

今、十刃の一角として。

「・・・・・いや、ドルドーニだけではないか。力を磨いたのはドルドーニだが、その力の根源は、力を求めた理由は違う。理由、衝動、渇望と言った方が正しいかな。君は求めた、凌駕するための力を・・・・・彼を凌駕するための力を・・・ね。」

藍染が続けた言葉にグリムジョーの視線はほんの一瞬だが強くなった。
彼に力を与えたのはドルドーニだけではないと藍染は言ったのだ。
そしてそれは間違いではない。
確かに戦い、力を磨き、身につけさせたのはドルドーニだろう。

だが、そうしてグリムジョーが力を望んだ理由、追い求めた理由は別にある。
求める衝動、求めるという渇望を糧に彼は力を得た。
その理由、衝動の理由は別にあるのだ。

「フフッ。　ではグリムジョー、ドルドーニより奪い取った第6十刃（セスタ・エスパーダ）の座、受けてくれるかい？」

「・・・・・・ハイ。」

問と答えは簡潔。
だがあえて告げるのではなく答えさせる事に意味があるその問い。
一方的に押し付けるのではなく、彼が彼の意思を持って受諾し、そして仕えるという形こそが重要。
王は何も強要しない、ただ意思を尊重するということが重要なのだ。
たとえそれが断る事など無いような問であったとしても。

グリムジョーの答えに満足そうに藍染は一度頷くと。
最後となった者へと視線を向ける。
藍染惣右介にとってある種予想がつかない相手であり、重要な因子を孕む相手。
彼をもって十刃は完成となり、彼の揺るがぬ城は完成する。

「グリムジョーは押し通すため力を求た・・・・・そしてそれは

きっとキミも同じなのだろうね。圧倒的な力でゾマリを凌駕し、屠り、それでも恐らくは実力の一端を覗かせただけのキミと同じ。キミもまた”力”を求め、その渇望にも似た衝動によってそれを得た。自分という生き方を押し通す為の力をね。・・・・・私の言葉に間違いはあるかな?フェルナンド・アルディエンデ。」

藍染の言葉の矛先は下。
その先はやはり最前列の中の一人へ。
元々十刃が座するはずのその最前列に、思えばその男は始めから平然と座っていた。
まるでそうある事が当然かのように。
ある種の客分であるという事を差し引いてもそれは異常なこと。
だが誰もそれを咎めない。
王である藍染も、その臣である十刃も、そして更にそれを支える多くの破面達の誰もが。
彼らは皆知っているのだ、その男が持つ力を。
ある者はその目で、ある者はその耳で、またある者はその身をもって知っているのだ。
そこが、その男が本来相応し居場所であると。

フェルナンド・アルディエンデ。
黄金色の髪と紅く鋭い眼光を持つ修羅の如き男。
その拳でもって己が力を示し。
溺れる事無く修練を積み。
苛烈なる戦いをもって十刃を降した男。
彼は今、虚夜宮の高みへとその手を掛けているのだ。
その眼光で藍染惣右介を確と捉えながら。

「そう怖い顔をしないでくれ。　それではまるで敵を見るような顔だよ、フェルナンド。まぁそんな事はどうでもいい・・・・・ゾマリを倒し、奪い得た第7十刃（セプティマ・エスパーダ）の座。当然、受けてもらえると思っていいのかな？」

藍染の言葉通り、なにか機嫌でも悪いのか彼を睨みつけるフェルナンドに、しかし笑顔のまま語る藍染。
それは虚勢などでは断じてなく、本当に敵と見做していないかのような態度。
尊大であるがそれでもこの男にはそれが当然だと思わせる雰囲気がある。
その雰囲気をして、フェルナンドにもグリムジョーと同じように自らが奪った座に着くかどうかを尋ねる藍染。
断る理由が無いその問い、示した力に相応しいく用意された座に付く事になんら違和感も疑問も挟まる余地など無い。
無い筈だった。

「あぁ。　そんなもんは当然お断りだ。」

誰しもが受けるものと、そう思っていた藍染からの問いという名の命令。

だがフェルナンドはいとも簡単にそれを蹴った。
それは数瞬の思案すらなく、彼の中で既に決まっていた事として放たれたのだ。
涼しい顔、というよりは何処か機嫌が悪そうな彼の表情は、ここにこうしている事すら不快だと言っているかのよう。

どちらにせよ申し出を断ったフェルナンド。
至極当然にそれを言い放った本人とは別に、何故か慌てるのは周りだった。
多くの破面はフェルナンドが何を言っているのか、聞こえはしても理解は出来ず、理解できたとしても納得など尚出来ないだろう。
ざわざわと浮き足立つ広間、その中でハリベルは「やはりか・・・・・」という雰囲気を存分に吐露し、額に片手を当てて軽く頭を振る。
そしてバラガン等は大袈裟ではないにしろ、「いい気味だ」という雰囲気を滲ませ口元を歪ませていた。

「理由を・・・・・・　聞かせてくれるかな、フェルナンド・・・・・」

ざわつき、浮き足立つ広間の中、藍染はいまだ余裕でその顔に笑みを湛えたままだった。
予想外と言うほどのものではないと、藍染の中でこういった答えが返ってくる可能性は充分に考えられるものであったのだ。
それ故に問う、何故なのかと。
それによって自分の出方を考えるために。

「俺には階級なんてもんは必要無ぇからだ。　位の上下にどれだけの価値がある？そんなもんに欠片ほどの意味もありはし無ぇ。重要なのは示した力だ、それだけが全てを証明する。そもそも俺は十刃なんて位階が欲しくてヤロウと戦ったんじゃ無ぇ、俺の目的は戦いで、その後に残ったもんに意味も興味もありゃしねぇんだよ。」

簡潔に示されるそれは、彼が貫くもの。
位階の上下、それに一体どれだけの意味があるのか、どれだけの力があるというのかという言葉。
番号をひけらかし、上だ、下だと叫ぶ事はあまりにも愚か。
それは番号の大きさが強さに直結するこの虚夜宮では当たり前だと思われがちだが、実際それは間違いでもある。

何故ならそれは他ならぬ強奪決闘が証明している事。
号を奪うための強奪決闘、だが号を奪われるということは即ち、下位の者が上位の者より優れているという事を指す。
それならば数字の大きさだけで強さを測ることなど元から出来ないという事だ。

その事実、それは虚夜宮の根幹を揺るがすようなもの。
強さが、数字の示す強さが一つの大きな秩序である虚夜宮において、それの崩壊は秩序の崩壊に等しい。
もちろんそれだけが全てではない、だが大きな要因でもある。
無意味な位階、それを自分が欲する必要がどこにあるとフェルナンドは言うのだ。
それ故に彼は位階よりもその仮定、それを得るために示した自身の力こそ重要だという。
位階という判りやすいようでその実曖昧なものではなく、それぞれがそれぞれの目で見、肌で感じたものこそ重要なのだと。

そしてなにより、フェルナンドは位階を求めてゾマリと戦ったわけではない。
彼はゾマリとの戦いを終始こういっていた、”喧嘩”と。
そう、フェルナンドにとって先の戦いは強奪決闘でも十刃越えでもなく、ただの喧嘩に等しいものなのだ。
粗野で野蛮に聞こえるが、しかし突き詰めれば、飾り立てるものが無ければ戦いとは喧嘩である。
お互いがお互いの主張をぶつけ、それを押し退け押し通すために他者を叩きのめす。
戦いという要素の始まり、フェルナンドはただそれを全うしただけなのだ。

それ故にその後に残ったもの、今回で言えば第7十刃の座等というものは彼にとって余分なものであり、必要すら無いものなのだ。

「なるほど、確かに君の言う事もある意味での真実ではある。だが、世とは往々にして真実のみで形作られるものではないのだよ。」

フェルナンドの答えを聞き、藍染は笑みを湛えたまま静かに語る。
その顔に焦りは無い、自らを蔑ろにされたような状況でもこの男に漲るのは圧倒的余裕。
それは不気味とすら言えるほどの余裕だった。

「確かにそうだろうな、アンタには真実よりも裏に隠れたものの方が興味を惹くらしい。だが、思惑やら計画やら、そんなもんはテメェの頭ん中だけで巡らせとけ。他人の戦いに横槍入れて平気な顔し

てるような無粋は見たくも無ぇ。第7十刃とかいうご大層な位だか知らないが、無粋な輩に仕える心算は俺には無ぇんだよ。」

「フフッ、それは心外だな。　私の対応も遅れはしたがあの時私は何もしていないよ、全てはネロの暴走によるものだ。それともキミはネロの全てを私が操っていた・・・とでも言う心算かい？」

「よく言う、やっぱりテメェは無粋だ・・・・・・」

フェルナンドが発する言葉は常に明確な拒絶を孕んでいた。
位階の無意味さ、彼にとっての必要の無さと、なにより位を得たことで藍染に仕えるという事を彼は良しとしない。
決定的だったのはノイトラとアベルの強奪決闘。
藍染はその思惑の為にネロという魔獣の乱入を見逃し、アベルを屠ろうとしていた。
それまで両者が互いの存在と、なにより意地と誇りをかけて戦っていたその戦場にこれ以上無い汚泥を投げつけるかのように。

無粋、余りにも。
両者の戦いはフェルナンドにとっては好ましい部類に入り、しかしそれは一瞬にして穢れる。
穢したのはネロではあるが、それ以上に全てを把握しながら表に立つ事無く”利”のみを得ようとする藍染にフェルナンドは怒りを覚えた。
ただの小競り合い程度ならばいい、だが目の前で行われていた戦いは互い全霊をかけたそれ。
それを見ても何も感じず、ただ己が目的の手段としてしか見ない藍染の行いはフェルナンドにとって無粋極まり無いものだったのだ。

その感情、無粋とまで呼ばれようとも藍染は今だ余裕。
あくまで不慮であり、不測の事態だと言い放つ。
誰もがそんなものは嘘だと理解している、だが藍染がそういうならばそれが”真実”。
なぜなら彼は”王”だから。
誰も逆らう事ができない絶対の王だからだ。

「取り消せ、フェルナンド・アルディエンデ。」

僅かな鍔鳴りと、その言葉がかけられたのは同時だった。
フェルナンドの首筋に冷たい刃が触れる。
僅かでも力が篭ればそのまま首を落としそうな勢いが伝わるその刃。
滲むような怒りを湛えたその声、それはフェルナンドの横から放たれ、浅黒い肌の男は盲目のその目でフェルナンドを睨みつける。
藍染が尸魂界（ソウルソサエティ）から連れてきた彼の部下、東仙要がフェルナンドにその刃を突きつけた本人だった。

「これはこれは、怠慢が過ぎる統括官殿。・・・で？　この刃は一体どういう心算だ？」

「先の言葉、取り消せと言っている！フェルナンド・アルディエンデ！」

「お断りだ。　自分の言葉を曲げる心算は無ぇ。」

「貴様ッ・・・！」

主である藍染への暴言、なにより藍染を再三に亘り”無粋”呼ばわりするフェルナンドにたまりかねた東仙は、藍染に許しを請う前にその刃を奔らせていたのだ。
首筋に刃を突き当て、僅かでも避ければ逆に首が飛ぶように。
だがこの破面は避ける事などせず、それどころか向かう気配は自分ではなく今だ主である藍染に。
その言葉通り曲げないという意を気配で示していた。

「止すんだ、要。」

フェルナンドの返答に本当に首を刎ねる事もじさぬと、刀を握る手に力を込めた東仙に藍染の言葉が降る。
静かに、しかし明確な言葉。
だが、東仙とてこのまま止まれるはずも無く。

「藍染様！　このような者の存在は虚夜宮の秩序を乱します！秩序を乱す者、それは”悪”！　処断する許可を！」

「私は”止めろ”と言っているんだよ、要。　今、彼と話しているのは私だ、邪魔をしないでくれ。」

「しかし！　・・・・・クッ！」

強大な霊圧と共に放たれた言葉、”止めろ”という藍染の言葉に東仙は僅かに逡巡をみせるが、刃を退いた。
目の前にいるのは彼にとって”悪”でしかない存在。
しかし彼の主がその悪を”是”とするならば、東仙にそれを断ずることは出来ない。
ネロの時と同じように。

「すまなかったね、フェルナンド。　だが要の行動はその御し難いまでの忠義によるもの、許してやって欲しい。」

「知るかよ。　俺は言いたい事は言った、帰らせてもらうぜ。」

今だその重苦しい霊圧を発したまま、笑みの藍染は心無い謝罪だけを述べる。
藍染にとって何処までも言葉とは手段でしかなく、言葉を尽くすなどという事は彼には存在し無い概念なのだろう。
平たい謝罪、本当に言葉面、音だけの謝罪をフェルナンドは斬って捨てる。
それと同時にフェルナンドは踵を返し、その場から立ち去ろうとしていた。
彼の言葉どおり言いたい事を言い終え、その後に残るものなど知ったことではないという風に。
その行動、それは本当に彼が位階に、十刃という座に興味が無いという事の証明であり、それは破面という力を示す事を性とする化生にとっては異質ともいえるものであった。
自分こそが強い、それを示す事は彼らにとって存在意義にも等しく。
それをする事無くしかし強力な力を持つフェルナンドは、異質、異様であり不可思議な存在であった。

「逃げるのかい？　フェルナンド。」

背を向け、歩き出したフェルナンドに対し、藍染が放り投げた静かだがしかしこれ以上ない言葉。
”逃げる”と、藍染は沿うフェルナンドに対し言い放ったのだ。
それが耳に届くとフェルナンドの歩みはピタリと止まる。
シンと静まり返る広場の中、それからの声はよく響いた。

「逃げる・・・だと？　笑えるな、藍染。　俺が一体何から逃げてるって言う心算だ？」

背を向けたままのフェルナンド。
振り返る事もなく、ただ藍染に背を向けたままで語りだす彼。
それは振り返る事を良しとし無いためか、それとも振り返ってしまえば引き返せないためなのか。
ただただ響くその声、静かで通るその声が今は逆に耳に痛い。
静か過ぎるその声が今はただ、周囲に不安を撒き散らす。

「あぁ、勘違いさせていたらすまない。　何もキミが私から逃げる、という意味ではないんだ。キミにそんな事はありえないだろう？
私が言いたいのはね、フェルナンド・・・・・キミがキミの行動によって生まれた結果から逃げるのか、という事だよ。」

振り向かないフェルナンドに藍染は笑みを湛えたまま語りかける。
逃げる、と自分が投げかけた言葉の真意。
行動による結果、藍染惣右介という人物からではなく、自分が齎した結果、結末から逃げるのかと。
その逃げは本当に君が求める縛られない生き方なのかと。

「フェルナンド、キミは何にも囚われず生きてきた。それはこれからも変らないだろうし、変える必要も無い。・・・・・だが、キミが起した行動、選んだ選択とその結末が、君の望んだものと違うからといって放り出すのは、自由ではなく逃避だよ。」

「・・・・・・・・・」

何者にも囚われず自由に、それは耳に心地よく誰もが望むものかも知れない。
だが、そんなものはこの世の何処を探したとて存在し無いのだ。
自由奔放に振舞い、誰の言う事も聞かず、関係ない、知ったことではないと言えるのは確かに力ある物の特権だろう。
フェルナンドは力を示し、数字を持たずともそういった振る舞いを他者に認めさせるだけの実力を魅せた。
それは驚くべき事であるし、驚嘆、賞賛に値することなのかもしれない。
だが、今の彼と今までの彼では状況が違いすぎる。

彼は自らが望まなくとも十刃の一角を下したのだ、強奪決闘という”号”を奪い合う戦いの中で。
そしてそれに勝利したという事は、こうして藍染が告げずとも既に十刃の座は彼の、フェルナンドの手の中にあるということ。

フェルナンドが幾ら認めずとも、彼は既に破面達の中では第7十刃の座についているのだ。
それが事実、覆しようのない現実であり彼の行動の結末。
だがフェルナンドはそれを良しとし無い、自分には関係のないことだと、知ったことではないと言い放つ。
今までの通りに。

それは何も無い者の振る舞いでしかなく、今の彼にその振る舞いは許されないのだ。

「キミが望む望まざるは既に通り過ぎた議論だ。君は既に座を手中とし、そして座しているのだよ。それはキミにとって何にもまして不自由なのかもしれない、だがそれはキミが招いたもの、キミが起し、キミが決し、キミが残した結果によるものだ。それから逃げる事はキミという破面の進む道から目を背ける事と同じだとは思わないか？」

そう、彼が必要ないと言った階級、それはしかし彼にとって不必要ではあるが、多くの破面にとっては必要なもの。
目的は様々であれ彼らは皆、高みを目指し血を流す。
その血が築き上げ、染込んだ座はそう簡単に蹴れるものではない。
なによりそれを蹴る事は自らの行い、招いた結末に目を背ける事と同じだ。
フェルナンドは自身の望む望まざるを通り越し、既に十刃であり、その行動には不自由という名の責任が伴う。
それから目を背け、逃げるのかと藍染はそう言っているのだ。

「フェルナンド、キミが何者にも囚われず、自由に振舞いたいと言うのならば此処を去るがいい。だが、君が求めるものが此処にあるというのなら、キミは君が掴んだ不自由を認めなければならない。真の自由とは、数ある不自由と戦った先にこそあるものだと、私はそう考える。キミはどう思う？　フェルナンド・アルディエンデ。」

不自由、フェルナンドの場合十刃という名の座。
今彼は藍染により選択を迫られていた。
我を通す事でこの虚夜宮を去るか、此処に残り不自由と戦いながら己が目的、求めるものを探すのか。
二つに一つ、二者択一の問い。

”数ある不自由と戦わずして、真の自由は得られない”という藍染の言葉。

真理に等しいその言葉がフェルンドに突き刺さる。
逃げると言う言葉、それが癪に障り止めた足。
だがその後に続いた言葉たちは、どれもが彼を射抜くもの。
何者にも反抗するだけが自由ではない、それは自由に振舞うのではなく別のものであると。
そう、藍染の言葉通り誰もが不自由と戦っているのだ、座というものに縛られ、しかしその中で各々が思い描く目的の為に。
あのスタークですらその不自由を良しとし、十刃の、それもその頂点という厄介ごとを受け入れた。
それもまた目的のため、全ては不自由の先にある目的と、自由のためなのだ。

（気に喰わねぇな・・・・・・　が、ヤロウの言う事にも真実はあ

る・・・か。アレを殺したのは俺だ、なら背負うべきは俺・・・かよ。）

静かだがしかし重たかったフェルナンドが纏う雰囲気が霧散する。
相変わらず背は向けたまま、藍染の方を見ようともし無いが、その雰囲気は既に一触即発のそれとは違っていた。
それは何かしらの変化か、フェルナンドという破面が何か変わったという事を意味するのか。
向けられた背、その背に向けられた降る視線とその他多くの視線。
誰もが待ち、誰もが考える、その答えを。

「・・・・・一つだけ、条件がある。」

「なんだい？」

「テメェの命令は聞かねぇ。俺はテメェの部下になる心算は欠片も無ぇ、それだけは覚えておけ。」

「そんな事か・・・・・・構わないよフェルナンド。私は押えつける事は好まない、キミがキミの意思で、十刃として私に”協力”してくれるだけで充分だ。」

「そうかよ・・・・・・なら、今度こそ話は終わりだ。」

短いやり取り、だがそれは劇的な変化と結果でもある。
フェルナンドが示したのはただ一つ、命令は聞かないという一点のみ。

それを藍染はアッサリと了承し、全ては決着した。

そう、フェルナンドが第7十刃の座を受ける、という形で。

止めていた歩みを再び進め、フェルナンドは広間を後にする。
残ったのは静寂、まるで彼が嵐であったかのような静寂だった。
その静寂の中、一つ手を叩いた音が響き視線はその音の方へ、藍染惣右介へと再び集まる。

「さて、残る十刃、第9十刃（ヌベーノ・エスパーダ）にアーロニーロ、そして第１０十刃（ディエス・エスパーダ）にヤミーの二名を在位とし今日此処に新たなる十刃が完成した。何にもまして強固で堅牢で、戦いとなれば苛烈であり超絶の集団、私の剣、十刃が・・・ね。」

そう、ここにそれは完成した。
入替を繰り返し、弱者を排し強者を求め、その強者を排した最強の十傑。
迫る敵の事如くを圧しとどめ、押し返し、そして殺し尽くす最強の集団。
殺戮という単一の方向性しか持たず、しかしそれ故に突出した存在たち。
数多の血を流し、数多の血を啜り、昇華し、生まれ出でた化生たち。
第１十刃（プリメーラ・エスパーダ）コヨーテ・スターク＝リリネット・ジンジャーバック。

第２十刃（ゼグンダ・エスパーダ）”大帝”　バラガン・ルイゼンバーン。

第３十刃（トレス・エスパーダ）　ティア・ハリベル。

第４十刃（クアトロ・エスパーダ）ウルキオラ・シファー。

第５十刃（クイント・エスパーダ）　ノイトラ・ジルガ。

第６十刃（セスタ・エスパーダ）グリムジョー・ジャガージャック。

第７十刃（セプティマ・エスパーダ）フェルナンド・アルディエンデ。

第８十刃（オクターバ・エスパーダ）ザエルアポロ・グランツ。

第９十刃（ヌベーノ・エスパーダ）アーロニーロ・アルルエリ。

第１０十刃（ディエス・エスパーダ）　ヤミー・リヤルゴ。

以上十名をして十刃。

藍染惣右介の十本の剣であり、向けられる者達からすれば悪夢か災厄でしかない存在たち。

それが今此処に完成し、藍染惣右介の戦力は磐石を喫しつつある。

目的のため、彼の行く道を、進む道の尖兵であり露払い。

血に染め上げることしか出来ないがそれでも必要な戦力たち。

それは完成を見、それ故に藍染の黒い笑みは深まる。

「ここに私の剣は完成を見た。　皆・・・・これからも良く私を

支えてくれ・・・・・・」

比類なき霊圧と黒い野望、混沌渦巻く瞳の主は笑う。
新たなる十刃、その誕生と祝福を。
断われよう筈もない言葉に、その黒い笑みを添えて。

呑み込まれる
遠ざかる。
重なる蹄の音
重なる嘲笑
呑み込まれる

呑み込まれる

BLEACH El fuego no se apaga. 59（後書き）

引き続き十刃決定の後編となります。

今回の悩みどころなんてものは、皆様お気づきかとは思いますがコレ。

「絶対断るフェルナンドを、どうやって十刃にするか」です。

悩んだ・・・・・その末がこのお話です。
どうしたって断るんですよ、彼は。
今までの言動を鑑みるとね・・・・・・・

書いたら書いたで、自分で強奪決闘の矛盾を書きながら見つけてへコむしさ・・・・・

それでも何とか納まったとは思います。
難産だったけどね。

因みにですが、作中の藍染さんの言葉。
”真の自由とは、数ある不自由と戦った先にこそあるもの”
というのは、高橋ヒロシ先生著、『ＷＯＲＳＴ』にでてくるお気に入りの台詞のオマージュ。
鈴蘭の頂点に図らずも立ってしまい、そのせいで要らぬケンカが絶えず
ヤル気のない花木九里虎に対し、米崎　隆幸が言った台詞。
”数ある不自由と戦わずして　自由は手にできねーんだぜ”という一言が元です。

高橋先生の漫画はキャラもイイし、何より台詞がカッコイイね。

自分もカッコイイ、というか印象に残る台詞を残せればと思います。

出来るかどうかは別としてねｗ

新たなる十刃（エスパーダ）の誕生。
挿げ替えられた首は四つ、そう四つだ。
この数は異常な事。
十刃という虚夜宮最強の戦力をそれぞれが有する集団の中で、四つの首が、席が入れ替わるという異常事態。
だがそれは現実に起こり、その入替は下らぬ策や騙し討ちの類ではなくただ純粋な力によって成されたと、誰もが認識していた。

異常な事態、しかし彼等破面が崇拝するのはどこまでも”力”であり、それは他の何よりも雄弁に語る。
力の形はそれぞれ、純粋な武であり、一人の軍団であり、禍々しき知であるようにそれぞれだ。
だがそのそれぞれの有するものは紛れも無く力。
そしてその力を示した彼らをして、多くの破面は思い知るだろう。
誰一人、その座に相応しく無い者などいない、という事を。

「チッ！　面倒くせぇこったぜ・・・・・・」

虚圏（ウェコムンド）の闇空の下、フェルナンド・アルディエンデは舌打ちをし、一人愚痴を零した。

目線を上げれば何もかもを飲み込む暗い空、下を見れば白く美しく、しかし生命の存在を拒むかのように延々と続く枯れ果てた砂漠。

黒白の世界、以前の彼がその長い人生を過ごした場所であり、そしておそらくこれからも更に長い人生を歩む場所、虚圏。

破面（アランカル）である彼は今、破面の居城たる虚夜宮（ラス・ノーチェス）ではなく何も無い虚圏の砂漠にいた。

目的は単純、殲滅だ。

新たに彼が手に入れた彼の不自由であり、しかし背負うべきものの為に。

彼が新たに手に入れた『第7十刃（セプティマ・エスパーダ）』という号の責務の為に。

「良く来たね。　フェルナンド。」

彼の上から降る言葉はいつもの如く笑みを湛えた声。
余裕か、術(すべ)か、それとも別の何かなのか、男の湛えた笑みは確かな笑顔であると同時に何処までも他者を萎縮させる。
その笑顔の主、藍染惣右介。
彼の告げた言葉によってフェルナンドが十刃となって後数日、彼は再びフェルナンドを玉座の間へと呼び出していた。

だがフェルナンドがそう容易く藍染の呼び出しに応じるはずは無い。
ただでさえ自らが招いたとはいえ不自由な十刃という号を背負ったフェルナンド。
そして宣言どおり彼は藍染の部下になった心算など欠片もなく、その居を第7宮(セプティマ・パラシオ)に移しはしたがそれだけ。
下官に何を要求するわけでも、号をもって何かを命ずるわけでもなく、ただ本当に寝床を変えた程度の扱いしかしていなかった。
そんな彼が藍染からの呼び出しだからといって十刃として馳せ参じるなどあろう筈もなく。

しかし、その辺りは藍染の方が一枚上手と言ったところか。
そもそも”武”を誇るフェルナンドが”知”、あるいは他者を御する事に長ける藍染に及ぶはずも無く。
藍染が用意した彼を動かすのに最も適切で確実な人物によって、彼は半ば連行される形で玉座の間へと来る羽目になったのだった。

「キミも手間をかけてしまったね、ハリベル。私の言葉よりキミの言葉の方が彼には届くと思ったんだ。」

「いえ。　一度はこの者を預かった身としては不甲斐ない限りです。申し訳ありません。」

「ケッ！　アホらしい・・・・・・」

藍染の言葉になんとも気まずそうに答えるのはハリベル。
彼女の下に下官より藍染の言葉が伝えられたのは少し前。
それによりればどうやら藍染の再三の呼び出しにもフェルナンドが応じず、出来ればハリベルに彼を連れてくる事を頼めないかとの事。
それを聞いたハリベルは下官には悟られぬよう溜息を零しそれを了承した。
第7宮へと急ぎ向かったハリベル。
如何に雲のように掴み所の無いフェルナンドとはいえ今は昔とは違い、ハリベルと同じ”一ケタ”である。
それは不自由という名の責務を背負うとう事であり、なにより実質上は藍染惣右介の部下である。
なによりフェルナンドの行為は十刃という責務を鑑みずとも礼を欠く行為であり、ハリベルに見過ごせるはずも無かった。

第7宮へと着いてみれば案の定、フェルナンドは宮殿屋上にて寝転がり、何時かのように空を眺めていた。
それも、ハリベルが来ている事などとっくに判っているだろうに、だ。
そこからの展開など言わずともかな、棘のある言葉の応酬と睨み合い、霊圧のぶつかり合いにまで及び、とにかく来いというハリベルの怒気を前に渋々と言った様子でフェルナンドが続いた、といった具合である。

藍染に対して頭を下げ、一時は自らが預かり、しかし礼の一つもとらないフェルナンドの態度を我が事のように詫びるハリベルと、その隣に立つフェルナンド。
なんとも対照的な光景に藍染は僅かばかりその笑みを歪に深める。

「まぁいいさ、さてフェルナンド。　今日はキミに渡すものが”二つ”あるんだ。」

「渡すもの・・・だと？　」

訝しむようなフェルナンドの声に「そうだよ。」とだけ答えた藍染がチラと目線を彼らから外す。
その先には一人の下官が何かを盆の上に乗せ、恭しく運んでいた。
その下官はフェルナンドの前まで移動すると、跪き、その盆を彼に献上するかのように頭上へと掲げる。
ハリベルはその光景を知っている様子で黙って見守り、フェルナンドはその盆の上へとその視線を向けた。

「”　７　”・・・・・・　なるほど、俺の数字・・・かよ。」

その盆の上には淡く光を放ちながら浮かぶ一文字の数字が。
”　７　”という数字が浮かんでいた。
その数字は誰あろうフェルナンドが今持つ号と同じ数字。
彼が第７十刃であるという事の証明、その為の数字だった。

「十刃はその身に自らの号を刻むんだ。　あぁ、場所は身体の何処でも構わないよ、それは重要じゃない。　”号”を”刻む”事こそが重要なんだ。」

自らを証明する号を刻む事。
それは証明であり宣言。
自らが十刃であるという宣言であり、それを刻み負ったという証明だった。
身体に刻まれた号から逃げる事はかなわず、常にそれを意識し、戦う。
そしてそれを背負ったからには戦場で敗北は許されない。
十刃の敗北は藍染惣右介の剣が折れるのと同じ、それは何にもまして許されない。
それが例え望まぬ号であろうとも、一度背負ったからには敵に折られる事は許されない剣となる事を、それをその身に刻み、証明することをその数字は指すのだ。

十刃という最強の号を背負う事で。

「ハッ！　随分とご大層なこった。　まぁいいさ、背負ったところで俺が俺である事になんら違いは無ぇ。」

自分に対し、恭しく献上されるそれをフェルナンドは無造作に掴むと軽く上に放り投げる。
一瞬驚いた表情を見せるハリベルだったが、その後のフェルナンドの行動でそれは杞憂となった。
放り投げた後フェルナンドはその場でやや猫背になる。
放り投げられた数字は最高到達点を過ぎると緩やかに落下を始め、そしてフェルナンドの背中へと着地した。
彼の着る白い死覇装をすり抜けるようにして数字はフェルナンドの背に、正確には右の肩甲骨辺りへと着地し、一瞬僅かに強く光るのみ。
だが確実に、今確実にそれは刻まれた。
”　7　”という数字、十刃であるという明確な証明が今、フェルナンドの背には刻まれたのだ。

「そうだね。　これは只の通過儀礼だ。　キミがそうあろうとする事、それこそが必要なのだよ。それでは次だ、キミに渡すもう一つのもの・・・・・・『死の形』についてだね。」

藍染もフェルナンドの言葉に同意を示す。
彼にとってもこれは通過儀礼、そうあるべくして行われるだけの儀式にすぎない。
数字を刻む事は確かに重要な事ではあるが、藍染にとって重要なのはフェルナンドが数字をその身に刻む事よりも、彼が十刃であると

いう事実。
それがあれば例えもし彼が数字を刻む事を拒んだとて問題ですらないとさえ、彼は考えていた。
だが事は彼が思うより容易く進み、それがまた藍染自身に自分が天の座、中心に納まっていることを実感させていた。

「死の形・・・だと？　それが何だってんだよ。」

「フフッ。　まぁ聞いてくれ。　十刃にはそれぞれがそれぞれに司る”死の形”が存在する。それは人が数多持つ死の要因の一つであり、同時に十刃それぞれの思想、能力、存在理由でもある。その者の起源と言ってもいいかもしれない、そしてキミにもそれは存在するんだ。」

「そうかい・・・・・・　なら何なんだ？　その俺の司る死の形ってぇのは。」

十刃という虚夜宮の最高戦力。
そのそれぞれが司り、また抱えるのは人の死の要因たる形、その概念。
現十刃を例に挙げるのならば、”孤独”、”老化”、”犠牲”、”虚無”、”絶望”、”破壊”、”狂気”、”強欲”、”憤怒”。
それらは人があまた持つ死の形の一つであり、それを司る彼ら十刃が人にとって”死”以外の何者でもないことを意味する。
ある者はその思想により、またある者はその能力により司る死は表され、その死の形を起源とする彼らはそれだけに純粋な化物と言えるだろう。
そしてフェルナンドにもまた、その死の形は存在する。

だがそれは十刃になったから存在するのではない、彼らは皆その死の形を内包して存在するのだ。
誰に与えられた訳でも、決められ、押し付けられた訳でもない。
常にその内側にあり、そして発露するものこそが彼らそれぞれの”死の形”。

藍染のそんな言葉に何処か挑発するような眼差しを向けるフェルナンド。
隣にいるハリベルが窘めようとするがそれは藍染によって制される。
フェルナンドの瞳は語っていた、お前に俺の生き様がわかるのかと、お前に俺を解ぜるのかと。
その瞳を藍染は笑みをもって受け止める。
あぁ判ると、その瞳の奥に燃え滾る炎、その奥に見え隠れするお前という存在の根本が、と。

「キミが司る死の形、それは・・・・・『飢餓(きが)』だ。
それは空腹であり何より癒える事ない渇きと似て、その後に待つ死の形。だが渇きとは肉体だけではなくその内側にも言える。求め、手を伸ばし、届かず、だが何時か必ずとその手を伸ばすことを諦めない。絶望的なまでの渇きを抱え、それを潤し、満たすために骨と皮になっても進む様は、キミの”理由”の姿に良く似ているとは思わないかい?フェルナンド。」

「・・・・・・・・・・」

藍染が言い放ったフェルナンドの死の形、それは『飢餓』

水に餓え、食物に餓え、だがそれは手に入らず、何時しか身体は干乾びそして死を迎える。

何に満たされる事もなく、ただただ空になっていく身体を抱えしかし、その内側からは絶えず求める思いだけが叶わぬというのに溢れ出す。

その欲求、満たされぬ身体を、満たされぬ思いを満たそうとする様を藍染は似ているというのだ。

フェルナンドに、どうしようもなく己が”生の実感”を求め続ける彼の生き様に。

誰が無理だと言おうとも耳を傾けず、直向に、時に頑ななまでに求め、邁進する彼の姿に。

”生”という名の飢えを満たそうとするその姿に。

「・・・ククッ。　クハハハハ！！　言うじゃねぇか藍染。確かにそうだ、そうに違いない。　俺はきっと餓えている、どうしようもなく・・・なぁ。その死の形、悪くないぜ・・・・・・」

黙って藍染の言葉を聞いていたフェルナンドは笑う。

それはもう盛大に。

藍染の言葉、語る死の形、その理由、どれもが彼には愉快でならなかった。

なぜならそれは正しかったから。

そう、フェルナンド・アルディエンデは餓えている。

生の実感に、その実感を感じさせてくれるであろう至高の戦いに。

内面を言い当てられたという不快感はそこには無く、ただそうだと、自らはそういう存在だという事の再確認が出来た事がフェルナンドには愉快でならなかった。

「気に入ってもらえて何よりだよ。　ならば事のついでだ、一つ頼まれ事をしてはくれないか、フェルナンド。」

「なんだ？　俺を持ち上げておいて本当の目的はそれか？ハッ！言っておくがお断りだぜ、機嫌はいいが俺はテメェの部下じゃ無ぇ。命令は聞かないと言っといた筈だろうが。」

「よせ、フェルナンド。　お前は既に十刃、号を得、その身に数字を刻んだのだ。そのような勝手が許される立場ではないのだぞ。」

「いいんだよ、ハリベル。　これでいい、これでこそ彼らしい。キミもそう思いはするのだろう？」

「公と私の別はつけねばなりません。」

続けざまに藍染が語ったのは、頼みごとがあるという言葉。事のついで、ややフェルナンドを持ち上げてからのそれは何か見え透いたものすらある。

だがフェルナンドとて愚かではない。

確かに機嫌は良かっただろう、だが彼は自らが最初に言い放ったとおり、藍染の部下ではないと再び口にした。

見え透いた方法、ついでだといいつつもそれは恐らく命令なのだろうという雰囲気を察知し、フェルナンドはそれに否を叩きつける。

だがそれを制したのは藍染ではなくハリベル。

幾ら口でそう語ろうとも立場としてその号を受け、今まさにその身に刻んだ数字の重さを自覚しろというハリベルの言葉は間違いではない。
間違いではないのだが、それは誰にとって間違いではないのかという部分がこの二人、いや、自分と他人を別ける境界なのかもしれなかった。

「実直だね、ハリベル。　キミのそういった部分は評価に値するよ。だが今はいいんだ。　それにフェルナンド、これは命令ではないよ。言っただろう？　頼まれ事だと・・・・・そう、これは命令ではなく頼み事さ。私から、キミへの・・・ね。」

フェルナンドに苦言を呈するハリベルを制する藍染。
その言葉の最後には、こうする彼の姿はキミも彼らしいと思っているのだろう？という雰囲気をもった言葉が添えられる。
それに対し答えるハリベルは、あくまで公と私事（おおやけわたくしごと）は別けるべきであり、例え思ったとしても口には出さないと答えた。
その時点で思っていることは確定なのだが、それについての言及は避けられたようだ。

そして藍染はそんなハリベルとのやり取りの後こういった。

命令ではなく、頼み事だと。

あくまでこれは王から臣への命令ではなく、藍染惣右介という個人からフェルナンド・アルディエンデという個人への頼み事だと。
言ってしまえば言葉遊びの類、その域を出ない藍染の言葉。
命令ではなく頼み事、違うのは見た目だけ。

王から臣という上から下への位階を伴った言葉ではなく、その位階を取り払いあたかも同列の存在からのものであるという見た目。
だがやはりそれは見た目だけ、言葉は降り、そして搦め手は一つのみとは限らない。

「内容は”殲滅”だ。　十刃としての任務、その一環としての不穏分子の殲滅。数はそう多くは無いし、キミが殺す必要も無いと思えば殺さずとも構わない。逆らう、という気概さえ確実に折ってくれればね。キミにしてみれば造作も無い事の筈だが・・・・・どうだい？　フェルナンド、頼まれてくれるかい？」

そう、それは搦め手。
直接ではない、ただ言葉の端々に折り込まれ、しかし完全には隠されていない符丁の存在。
丁寧にもフェルナンドとハリベルの足元に虚圏の地図までが現われ、件の地点を表示している。
頼むという言葉を口にしながら、フェルナンドが背負う事を自らよしとした”十刃としての不自由”をチラつかせる言葉、そして状況。
断る事は藍染が造作も無いと言った事すらこなせぬ弱さを表し、そして突き刺すのではない、ただ軽くつつくだけの言葉の針がフェルナンドには今、纏わり付いていた。

「随分と・・・汚ぇやり口じゃねぇか・・・・・・端っからこうする心算だったのが透けて見えるぜ、藍染。まぁそれも、あえて見せてるんだろうがな・・・・・・チッ！　これが不自由・・・かよ。
面倒なこった・・・・・・」

「おや？　それは私の頼みを了承した、と取っていいのかな？」

「・・・・・あぁ。　だがこれっきりだ。　この不自由は俺が自分で背負うことを決めた、だから今回はそれもしょうがねぇ・・・・・が、次は無ぇぞ、藍染。」

剣呑とした空気、それが辺りを包みしかし藍染はその笑みを崩さない。

そのフェルナンドが放つ”気”さえも彼には心地良いものかのように、鋭い眼光を向ける彼を見下ろす藍染。

不可視の檻、目に見え、武によって突破できる檻ではなく、その内側を絡め取る言葉の檻、不自由の檻。

その檻は今回、見事にフェルナンドという獣を閉じ込め、思うように御することに成功する。

だが、檻に閉じ込められ、それを自覚しているこの獣がそう易々とそのままでいるはずが無い。

そして獣は捕らえられたのではなく自らその檻の中にいるのだ、その意思を持って。

故にその檻は檻でありながら彼の獣を拘束するには足りず、何れ破られる。

人の身を持つ獣、その一撃で容易く。

語るべき事は終わったと、フェルナンドは藍染の言葉を待たずしてその場から去る。

振り向かず、ただ虚圏の砂漠に面倒事を始末しに向かうために。

その背に責務から感じた気負いは無い。

あるのは手早く事を済ませ、面倒ごとから解放されたいという気持

ちともう一つ。
どうせ行くならば、そこに自身の身が震えるような強者の影はないだろうかという希望。
『飢餓』を冠する者らしい、戦いと強者への飢えであった。

「よろしかったのですか？」

フェルナンドが去って後、ハリベルは藍染へとそう問いかける。
主語を欠いたその問い、何が、という事を明確にはせず、しかし言わずとも伝わる多くの問い。
あのまま行かせてよかったのか、上下の区切り無く曖昧なままでいいのか、一度はっきりとさせるべきなのではないのか。
その問いには多くの疑問が、ハリベルの実直さから来る疑問が含まれる。
だが藍染はそれらを全て理解した上で微笑んだまま答えた。

「キミとて彼には甘いだろう？」

「・・・・・私自身はそうは思っておりません。」

「それが判っていない時点で、やはりキミは彼に甘いのさ。まぁいい。　私にとって彼は有用なのだよ、それが全て、他に余分な理由

など必要はないだろう？」

そう、藍染惣右介にとって甘さは理解より遠い感情。
その無意味さ、不要さを理解する藍染にとって甘さなどというものは不確かな揺れでしかないのだ。
有用性、藍染惣右介にとって他者の評価とはその一言に尽きる。
彼にとってどれだけ有用であるか、どれだけ優秀な駒であるか、それが唯一無二の判断材料。
それからすればフェルナンドは彼にとっては有用であるといえるだろう。
藍染がその言葉の計をもってしても十刃へと座らせた事が、その証明であるといえる。

「さて、それでは私は彼の”戦果”を期待して待つこととしよう。
キミも下がっていいよ、ハリベル。　ご苦労だったね。」

そう言って一人、玉座の後ろへと消える藍染。
残されたハリベルは一人、恐らく一筋縄では行かない頼み事へと向かったフェルナンドを危惧するのであった。

―――――――――――――

そして話は冒頭へと帰結する。
宙に立ち、見下ろすように件の場所を見るフェルナンド。
そこには多くの虚（ホロウ）、最下級大虚（ギリアン）、中級大虚（アジューカス）の姿があった。
そして彼らは一様にそこで形成された集合体、というよりは掻き集められたかのように統率の取れていない動きを見せる。
まるで何かに備え、集められたかのように。

「さて・・・・・・　面倒事はさっさと済ませる・・・か。」

そう零すとフェルナンドは足場としていた霊子を解き、そのまま真下へと真っ直ぐ落下する。
ぐんぐんと速度を増し、しかし体幹はぶれずに真っ直ぐ、眼下の集団の中心目掛け。
それは流星のように落下し、そして砂漠へと着弾した。

突如として起こった衝撃。
その場にいた虚や大虚達は何事かとそちらへと視線を向ける。
何かが落ちてきた、彼らからしてみればこの程度の認識しかなく、誰もが予想だにしない。
これから自分達に起こるのは、災厄以外の何者でも無いという事を。

落下地点を取り囲むように多くの大虚達が集まる。

円形にぽっかりと空いたその部分以外を埋め尽くすように、好奇という名の感情によって彼らは近付いていた。
彼らは一人一人が禍々しいまでの力を持つ虚という存在、悪性の塊でありたとえ何が起こってもこれだけの戦力があれば簡単に切り抜けられると、そう思っていた。
故にその瞳は好奇に染まるのだ、絶対的な自負、自らの、そして集団としての戦力、例え寄せ集めだとしてもこれだけの数を相手に出来る存在などいるはずが無く、その好奇は何処か見下すような視線となって落下地点へと向けられる。

狭い視野に狭い知識、狭い了見。
それらを容易く凌駕する存在を知らないが故に。

最初に大気が震えた。
それを感じ取れたのは、恐らく中級大虚でも一握りだろう。
だがそれはもう遅い、感じ取れる事と対処できることは違うのだ。
その後彼ら落下地点を取り囲む群集を劇的な変化が襲う。
吹き上がり、辺りを支配したのは紅い霊圧。
血の紅、炎の紅であり、そして彼らにとっては死の紅。
落下の衝撃によって立ち込めた砂煙は霊圧の波濤によって瞬時に払われ、落ちてきたもの、いや、落ちてきた者の姿は顕となる。
彼ら虚、とくに大虚達からすれば小さく、脆く見えるその外見。
だが彼らは今身をもって理解している、それは見た目だけの話し、発する霊圧は彼らを軽々と凌駕しまるで砂漠に縫い付けられたかのように動くことは叶わない。

金色の髪は靡き、白い上着もはためく。
口元は皮肉気に歪み、その紅い霊圧よりも尚紅い双瞳は貫かんばかりの眼光を見せていた。
破面、誰もがその者がそう呼ばれる存在であることを察知し、しかし彼らが知るそれとは桁違いであることもまた認識する。
そして紅い霊圧の中、その持ち主が静かに声を発した。

「一度しか言わねぇぞ。　・・・・・・散れ。二度と逆らおうと思うな、確かにヤロウは気に喰わないが・・・な。逆らわないと誓うなら生きてこの場から逃がしてやる。だが・・・・・・　それでも逆らう気概があるなら俺が・・・・・・　”殺す”・・・・・・」

あぁ、これが死だ、彼らはそれを理解した。
言葉は脅かすでもなく、ただ淡々と告げるだけだった。
だがそれだけにこの破面、フェルナンドが本気でそう思っていることを雄弁に語り、その言葉が偽りではない事を彼らに知らせる。
そして何より、強大な霊圧の中放たれた言葉、そして”殺す”と言う言葉と共に放たれた”気”。
それが決定打だった。
あんなものに耐えられるわけが無いと、あんなものを向けられてまだその言葉に逆らうことなどあろう筈がないと。
霊圧だけで感じていた自らの死の幻視、それが確実なものとなって彼等を襲い、殺した。
これが死、逆らうことなど始めから愚かだったと思わせるほどの死。
ほぼ全ての群集はそのフェルナンドの霊圧と気に呑まれ完膚なきまでに折られていた、反骨を、その気概を。

だが、それはほぼであり全てではなかったのだ。

「ケッケケケケ。　怖い怖い。　霊圧だけで殺されちまいそうだ。」

群集を割ってすすでたのは巨大なトカゲのような虚。
白い外皮、首から腹にかけては赤、居並ぶ黒い外套の最下級大虚と比べれば小さいながらも、大きさで言えばフェルナンドよりはるかに大きいそれは、その虚が中級大虚であることを示していた。
わざとらしく器用に肩をすくめ、語る言葉とは裏腹にその仮面の奥に潜む瞳は恐れよりも余裕が見て取れる。
後ろ足二本で立ち上がり、人間のような振る舞いを見せるその中級大虚。
細いがしなやかそうな手脚とその先にある鋭い爪、一本伸びた角と小さな仮面に対し、首から背中、胴は太めでありトカゲというより寧ろ羽のない竜のような印象。
それが進み出たのだ、フェルナンドの正面に。

「ハッ！　そう思うならさっさと散れ。　警告は一度までだ、その後で俺に向かってくるなら容赦はし無いぜ？面倒事は手早く片付けたいんでなぁ。」

「まぁそう言うなよ、破面のニイサン。ゆっくりしていきな・・・・・　そのまま干乾びちまうぐらいになぁ。ケッケケケケ。」

フェルナンドの正面に立ち、その霊圧と気を受けながらその中級大虚は平然と、どこかフェルナンドを馬鹿にしたかのような笑い声を上げる。
再三、フェルナンドという人物を鑑みれば破格ともいえる警告をして、その中級大虚はそれを拒絶した。
それもフェルナンドを挑発するかのような言葉を添えて。
いや、挑発ですらない、その言葉はいっているのだ、殺す、と。

「なるほど・・・・・・　ただの寄せ集めかと思えば、それなりに気骨のあるヤツもいるらしい・・・・・まぁ、それが本物か、は別として・・・な。どうだ？　他には居ねぇのか？　・・・・・・・・そうかい・・・ならさっさと散れ、目障りだ。」

図らずもそれなりに戦えるであろう敵の登場に、フェルナンドの口角が上がる。
なかば嵌められ、押し付けられたものではあるが戦える、というのならばこの際どうでもいいと。
では他にも多少気骨のある者はいないのか、とフェルナンドが問うてみても答えは無く皆フェルナンドに気圧されたまま。
そうなればもう用はない、と言わんばかりに眼光を強めたフェルナンドのそれが契機となった。

わらわらと我先にと逃げ出す虚、最下級、そして中級大虚。
彼らとて命は惜しい、ここで逃げて永らえるのならばそれを選択することに迷いなど無いのだろう。
だがこうして逃げていった者達に先など無い。
往々にして強き者達に”永らえよう”等という思考は存在しない。

刹那を積み重ね、その全てに勝利してきたものが強き者。
刹那の闘争、それから逃げずに立ち向い、勝利し続けたものが強き者なのだ。
故に今、フェルナンドに背を向けた者達に先は無い。
ある者は喰われ、ある者は斬られ、またある者は退化し、ある者はそれに耐えかね死ぬだろう。
如何に敵が強大であっても、立ち向うべき時、そこで踏み出さないものに未来など無いのだから。

「ケケケ。　脆いなぁ・・・・・・　そうは思わないかい？ニイサン。　あの藍染とかいう死神に堪りかね、倒すと息巻いていた連中がニイサンの気当たり一つでこのザマだ。脆すぎて逆に笑えるぜ、ケッケケケ。」

先ほどまで溢れかえっていたその場所は、今や閑散としていた。
居るのは向かい合った一人と一匹。
見上げるような巨体と、小柄の男。
巨体の方は蜘蛛の子を散らすかのように逃げ去った群衆を皮肉り、笑う。

この場に集まっていた多くの虚達は皆、藍染惣右介という死神が突如として虚の王して振舞う事を良しとしていなかった。
それ故に集まり、反抗勢力として立とうとしていたのだ。
だが現実は叫ぶばかり。
死神風情が、思い上がるな、簡単に殺せる、周りの奴等も同罪だ、皆殺しだと好き放題。
その叫びのなんと空しいことか、行動が伴わないそれのなんと愚かしいことか。

結果、彼らはただ睨まれただけで逃げ去った。
フェルナンドの”武”を目の当たりにすることも無く、彼の目の前に居る中級大虚の言う通り気当たりだけで容易く。

「それはテメェが他の連中とは違って特別だ、とでも言いてぇのか？だったら底が知れるな、トカゲ。　自分が特別、なんて思ってるヤツにろくなのは居ねぇんだよ、経験上・・・な。」

「そうじゃないさ。　ただせっかく自分で選べるのに逃げを選択すんのは勿体無い、そう思っただけさね。一度しかない機会かも知れないってのによ。」

それは妙な構図であった。
眼光鋭いフェルナンドと、それを前に平然としているかのような中級大虚。
どうにも不均等で釣り合いが取れておらず、まるで友人かなにかのように語り合う。
だが彼らは完全な初対面。
友人などでは決してなく、今この瞬間に友情が芽生える等ということもない。
現に彼等の間では霊圧がチリチリと焦げ付き、火花を散らすかのように鬩ぎあっている。
そう、彼らは既に立っているのだ、戦いの地平に。

「名を・・・　聞かせてくれるかい。　ニイサン。」

「・・・・・フェルナンド・アルディエンデだ。」

「俺はサラマ。　サラマ・Ｒ・アルゴスだ。　アンタとは相性がよさそうな気がするんでね、楽しくやろうぜ？フェルナンドのニイサンよぉ。」

呑み込まれる
重なる叫び
残響
呑み込まれる
呑み込まれる

BLEACH El fuego no se apaga. 60（後書き）

いい様に操られております。
まぁ口先の魔術師に勝てるはずもなく、といったところでしょうか。

数字と死の形を与えられる、というお話。
捏造ではありますが、こんな風かな、と。
死の形は一応『飢餓』としました。
戦いに、何より生の実感に飢えている彼らしいかな、と。

このお話を数話挿み、原作突入としたいと思います。
若干前回の予告とは違ってしまったのは（作者にしかわからないかｗ
書き始めて、これはナイと思い書き直したせいです。
申し訳ない。

それと、「みてみん」様にイラストを投稿してみました。
よかったら作者のＨＮで探してみてください。

満ちるのは気。
大きく燃え上るかの如き紅い霊圧と、それには劣るが吹き上がるのは赤紫色の霊圧。
その霊圧を引き連れて二つの影が激突していた。
自身の倍はゆうにあるある巨体へと挑みかかるのは紅い霊圧の主、フェルナンド。
自分より小さいながらも恐るべき圧力を放ち迫るフェルナンドを相手取るのは、巨大なトカゲの様な中級大虚（アジューカス）サラマ・R・アルゴス。
十刃として赴いた殲滅任務、その地で唯一人フェルナンドの前に立ったのがこの中級大虚だった。

流線型の身体の線、それを覆う白い外皮があり顎から喉、そして腹の辺りまでは赤色でやや小さい爬虫類らしい仮面と、そこから伸びる首は太く力強さを感じさせ、胴、そして尾に至るまで引き締まった肉が詰まっていることを伺わせる。
細めではある後足二本で立ち上がり、その先には鋭い爪が三本、腕

の方も同様に細くしかしこちらは人とまでは行かずとも五指が揃っていた。
放つ霊圧からも恐らくその中級大虚が強いであろうという事を存分に伺わせるものではあったが、しかしそれは中級大虚の中での話し。

今その中級大虚、サラマが相手にしているのはその上、それもただ手を伸ばせば届くという次元ではない相手、破面（アランカル）である。
それを知ってか知らずか戦いを挑んだサラマという中級大虚は、彼と同じ大虚達から見れば阿呆の類だろう。
勝てる訳がない相手に挑むのは愚かしいと、十人居れば十人がそう答えたかもしれない。
負けて死ぬより逃げて永らえる方が利口である、と。

だがこのサラマという中級大虚はそれを選択しなかった。
理由は定かではないが、しかし選択しなかったのだ。
明らかに自分が不利であることが判り切っているこの戦場を。

「ハァァアアア！！」

幾度かの激突の後、裂帛の気合と共に、五爪の一撃が奔る。
身長差による上からの打ち下ろし、そして明らかに歩がある筋量とそれからくる膂力によってそれは敵を引き裂く一撃となる。
サラマが放ったその一撃、フェルナンドはその一撃を払い落とすようにして避わすとその払う動作の回転を利用し、くるりと廻りながら飛び上がるとその勢いのままサラマの仮面に廻し蹴りを叩き込む。
本来ならこの一撃で終わり、破面と中級大虚、身体の大きさは大虚に歩はあれど強さは往々にして破面に歩がある。
それ故顔面に痛烈な一撃を見舞えば大抵片はついてしまうのだ。

が、このサラマという中級大虚、見た目以上に頑丈なのかそのフェルナンドの一撃を耐え、今だその意思を残し立っている。

その光景にニィと口を歪ませるフェルナンドが、ならばこれならどうだと言わんばかりに砂漠を蹴るとサラマへと更に肉薄した。

「シッ！！」

放たれたのは拳の連撃。

迫るフェルナンドに対し、咄嗟に顔の前で腕を十字に交差させ攻撃に備えたサラマの、その防御の上からお構い無しに放たれるそれは拳の雨。

猛火の如きその攻め様、相手に付入る隙を与えずただ押し迫る猛火の勢いによって敵を圧倒し、呑み込む。

フェルナンドという破面を象徴するかの如き攻め様は、防御の上からとはいえど敵には響く。

（ケケ。　防御を固めてこれかよ。　まいったねぇ・・・・・・が、やられっぱなしってのも格好がつかんでしょう！）

拳の雨の中防御を固め、それをして尚、全身に響くフェルナンドの拳にサラマが内心愚痴る。

一撃貰うごとに防御は押し込まれ、腕の骨は軋み悲鳴を上げていた。

が、そこに後悔の色はない。

状況的には追い詰められている、と言われても仕方が無い状況。

もともと中級大虚が正面から破面に挑むこと事態間違っている、そ

う言われても仕方ない状況の中、サラマは今だ飄々としていた。

「ッシャァアアァアア！！」

咆哮と共にサラマが十字に交差させていた腕を力任せに押し解き、フェルナンドの拳の雨ごと彼を押し戻す。
だがそう簡単にフェルナンドも下がるはずもなく、僅か圧し戻されたに止まりそこは今だ彼の間合い。
再び襲いかかろうとするフェルナンドにサラマは押し解いた右腕を振り上げ、フェルナンドが前に出る前に振り下ろす。
それはまるで刃の一撃に似て、切裂くというより断ち切るが如き一撃はフェルナンド目掛け振り下ろされる。
だが直線的な攻撃はフェルナンドに容易に見切られ、腕が下げられた事で身体は連動し、肩、そして頭も下へと降りた事によりフェルナンドの間合いへと侵入してしまっていた。
斬撃にも似た一撃を見切り避わしたフェルナンドは、同時に右の上段蹴りをくり出しサラマの頭を再び打ち抜こうとする。
吸い込まれるようにサラマへと迫るフェルナンドの蹴り、しかしサラマに焦りの色はなく寧ろその瞳はギラつきを増していた。

「フッ！！」

短く吐かれた息、サラマの口から漏れたそれは彼の意気の表れか。
その実この流れは彼の思い描いた通りに進んでいた。
先の一撃は避けられ、それまでにおこなった幾度かの攻撃もその全ては有効打にはなりえていない現状。

その流れの中くり出した一撃、”質”を変えた攻撃といえどそう易々とフェルナンドには通用し無いとサラマは理解していた。
が、しかし彼はそれを繰り出す。
云わばそれは布石だ、同じような攻撃、避わす事は容易でそこからの攻撃もまた容易であると。
そして一度避わしたという思考さえ植えられれば充分であると。

振り下ろされたサラマの腕、その肘が返り掌もまた返る。
下を向いていた爪は上へ、そして返った腕は先にも増した勢いで振り上げられた。
まるで返す刀の一閃が如く。

サラマの頭を打ち抜くために伸びたフェルナンドの脚。
それを下から刈り取るようにして迫るサラマの右腕。
腕が僅か上へと戻り、サラマの上体が起きた事でフェルナンドの蹴りはサラマの鼻先を掠めるにとどまってしまった。
必殺の裏に潜む必滅の一撃、フェルナンドに迫るのはその類の攻撃。
サラマという中級大虚が自ら呼び入れたフェルナンドにとって必滅であり、彼にとっては必殺となりえる一撃。

が、フェルナンドはその”上”をいった。

振り抜かれた右の蹴りは避わされはしたが、勢いを止める事無く進み弧を描く。
フェルナンドの描く弧の軌道、そしてサラマが描こうとした直線の

軌道はほんの僅かの差で交わる事はなく、無情にもフェルナンドの脚の踵の直ぐ傍を通過するにとどまってしまった。
もしフェルナンドが避けられたという事に僅かでも動揺し、その動きに硬直を見せていたなら彼は右脚の先を失っていたかもしれない。
だが、フェルナンドは動じる事無く蹴りを振り抜く事で結果的にサラマの逆撃を避わしてみせたのだ。
しかしそれはただ単純にフェルナンドが攻撃を外した事に動揺しなかった、という訳ではない。
何故なら彼の攻撃は今だ終わってはいなかったからだ。

彼の右脚が描いた弧、それは止まる事無く加速し円の軌道を描き出す。
振り抜かれた脚の加速に合わせる様にフェルナンドは軸足としていた左脚で砂漠を蹴ったのだ。

（なッ！　おいおい嘘だろ!?　その体勢からもう一発かい！）

驚きと共にサラマの見開かれた眼が捉えたのは予想外の動きと、そこから繰り出されるであろう一撃。
跳ね上がりながら回転するフェルナンドの身体、初撃での蹴りの加速と軸足に溜まった力による再加速、さらに上体を捻る事でそれは増し、体幹を中心として一回転するその姿は独楽の如く、そして渦巻く風の様。
サラマの返す刀の一撃を避け、そして放たれるのは止まる事無く放たれた二撃目の蹴り。
伸びた左脚、空中で放つというのにその蹴りは一撃目を凌ぐ威力が込められ、その左脚の踵がサラマの仮面、その右頬の辺りに直撃した。

やや斜め上へと跳ね上げられたサラマの頭。
頭が弾き飛ばされてもおかしくはないような一撃を、太く強靭そうな彼の首は何とか受け止め頭部と首は繋がったまま。
しかし頭部に受けたであろう衝撃は凄まじいもの、何度も言うが大虚と破面ではその強度からして違うのだ、その点から見れば頭部が残っていることの方がある意味奇跡的とも言えた。
受けたであろう衝撃はそのまま後ろに倒れたとてなんら不思議は無いのだが、サラマはその場で数度踏鞴(たたら)を踏みながらも、その脚と尾によって身体を支えて立っており、何とか意識は繋いだ様子だった。

「ハッ！　『旋(ヴォルテス)』を喰らってまだ立てる・・・かよ。悪くないぜ、トカゲ。」

蹴りを見舞いそのまま着地したフェルナンド。
構えを解く事無く、しかし口元の皮肉気な笑みは僅かだが深まっていた。
元々は一撃目で決める心算でいた彼にとって、二撃目、『旋』と彼が呼んだ業を出したのは不測の出来事ではあった。
が、しかし、その二撃目をもってしても目の前の中級大虚は倒れてはいない。
状態を見る限り無理をしているのは目に見えているが、それは今関係ないこと。
重要なのは彼の前に今だこの大虚は立ち、それは戦いの意思を示す行為だという事。
故に深まる。
身体がどうのという事ではなくその意思が折れない事に、戦いを諦

めないかのようなその意気に。
深まるのだ、フェルナンドの笑みは。

「ニイサンやるねぇ・・・・・・　ケケケ、あんなの見た事ないぜ。ッツぅ～痛ぇなぁ～、頭が吹き飛んだかと思った。」

その目は笑っていた。
仮面の口の端から赤い血を流し、脚に力が入らないのか膝が笑い、しかしそれでも倒れてしまう事を良しとはせず。
身長差により見下ろす形となったサラマの目は苦境に立ちながらそれでも、笑っていたのだ。
フェルナンドと同じように、純粋に戦いを楽しいと思う笑みで。

「吹き飛ばす心算で蹴ってんだよ。　吹き飛ばなかったテメェが頑丈だったってだけの話だ。ただのトカゲじゃぁ無ぇって事か・・・・・」

「ケッケケケ。　そいつは褒められた、と思っていいのか？まぁこっちもただのトカゲの心算は無い・・・からねぇ。」

「だったらもう少し見せてみろよ。　”ただの”じゃ無ぇところを・・・よぉ！」

「言われなくても・・・・・・　その心算さね！」

フェルナンドの拳とサラマの拳がぶつかり合う。

拮抗は一瞬、サラマの拳はフェルナンドのそれより大きいながらしかし、後方へと弾き飛ばされる。
種としての違い、それがこの戦場においての絶対的格差。
容易に埋める事などかなわず、ましてこの戦場のみで凌駕することなど不可能に近いそれ。
フェルナンドにとっては絶対的有利であり、サラマにとっては決定的不利。

しかし両者にそれを考慮する心算などない。
フェルナンドは己が力が勝っていたとしても、その拳に込める力になんら翳りは無く。
サラマとて力が劣っていたとしてもそれを悔いる事はない。
現に片方の拳が弾かれた傍からもう片方の拳を突き出し、フェルナンドを迎え撃とうという気概を見せるサラマ。

気概のみで戦場は覆らない、しかし気概すらなくては勝利などありえない。
明確ではなく、しかし思い描くのは常に勝利の光景。
それなくして戦場に立てばそれは死、勝利を求めずして残るのは死のみなのだ。

拳が、或いは蹴りが、それらが二人の間で交錯する。
打ち出される砲弾のようなフェルナンドの拳に対して、サラマのそれはいうなれば鞭。
しなやかな腕と脚を利用したそれを駆使し、彼はフェルナンドに迫る。
しかしそれでもフェルナンドは下がらない。
まるでその場に根の生えた大樹の如く、或いは鎮座する巨岩の如く。
退かぬ、下がらぬという意思かそれとも、自分を下がらせて見せろ

という挑発か、そのフェルナンドに対しサラマはさらに苛烈に攻勢を強めていく。

幾合か続いたその苛烈なる攻防の中、サラマは砂漠を蹴り宙へと跳び上がった。
巨体はそれを感じさせぬほど軽やかに跳び、やや体勢を斜めにした彼はその落下の勢いに乗せ打ち下ろすように鞭の蹴りをくり出す。
しなるようなその蹴り、爬虫類、ひいては動物特有の曲線的脚部に集約された力を存分に乗せたそれがフェルナンドへと迫る。
が、フェルナンドはそれを完全に見切り、蹴りは彼の鼻先を掠めるか掠めないかのギリギリの位置を無情に通過してしまう。
それはサラマの攻撃は完全にフェルナンドの眼によって見切られている、という証だった。

巨体だがしかし膂力では敵わず、奔らせた拳の悉くは弾かれ、そして蹴りは見切られる。
どう足掻いたとてそれは勝利には足りぬ結果達。
足りないのだ、それでは足りないのだ、勝利には。

ならばどうするか。
とどかず、足りぬと言うのならばどうするか。
サラマには答えがあった、それも目の前に。
足りぬ、とどかぬというのなら”上乗せ”するしかない。

とどかず足りぬそれに、”業”という力をもってして。

「ウラァァアアア！！」

咆哮博撃。
蹴りを避わされたサラマはしかし、その体の回転を止める事無く。
脚はフェルナンドの鼻先を通過し、半ば彼に背を向ける形となっても首を捻り、その視界に彼を捉えるサラマ。
そして振り下ろす。
確かとその目に捉え振り下ろす、彼の蹴りと同じ軌道を描き、しかし脚に倍するほどの射程を持った彼の白く太い尾を。

砂漠に響く鈍い衝撃音、そして起こる砂煙。
サラマがとったのは二段構えの攻撃。
蹴りなど当然避けられる事は承知の上、先程の刃のような手刀と同じではあるがそんなものは織り込み済みの事と。
同じような手が二度通用する相手ではないことも承知ではいたが、それでも勝つには賭けに出るより他、彼に道など無い。
故の選択、蹴りは避けられ、しかしその後から来るのが本命である尾による一撃。
打ち込むにはそれより他道は無く、しかしその一撃、その動作はサラマが思う以上の精度で放たれていた。

その理由は簡単。
彼は目の前で見て、そしてその身をもって受け、体感したのだ、同種の一撃を。
つい先程、フェルナンドという彼が戦っている相手から。

経験の反映、それがサラマの攻撃の制度と鋭さを上げた要因。
ただ思い描いたのとそれに経験が加わることで、思い描いただけの動きはより正確に、そして精密に再現されたのだ。
『旋』というフェルナンドの業を見、体感した事によって。

「思った以上に上手くいったな。・・・・・が、使い手じゃない俺が見様見真似じゃこの程度、とどきはしない・・・って事かい。」

尾を叩きつけ、半ば背を向けながらも着弾点を見据えていたサラマはそう零す。

彼にとってもその動きは予想以上に上手くいったもの、それは結果的には重畳と言えたがしかし、彼の言葉どおりそれは思った以上であった、という事だけでありとどいたという事とは別であった。

砂煙が晴れる中現われるのは一つの人影。

頭上で両手を交差し、太く、白く難い外皮に覆われたサラマの尾を受け止めているのはフェルナンド。

衝撃波凄まじく、あたりの砂を弾き飛ばすほどのその尾の一撃を彼はその身、その腕でもって受け止めたのだ。

顔はやや俯くように、そしてその下を向いたままのフェルナンド。

そしてそのこめかみ辺りからは一筋の赤い線が流れていた。

（ケケ。　とどきはしなくても無傷、って訳じゃぁない・・・か。あの一撃は喰らって正解だったってところかｎッ！！！）

フェルナンドが流した一筋の血、それを見たサラマは内心、僅かなりとも上手くいった自身の攻撃を評価いていた。

が、次の瞬間かれは背筋に感じたゾクリという感触に、一も二も無くその場を飛び退く。

充分すぎる距離をフェルナンドとの間にとり身構えるサラマ。

だがその全身は粟立ち、冷や汗と僅かな震えが彼を襲う。
彼の視界に捉えられているのは、見た目の変らぬフェルナンドの姿。
だが、彼には今そのフェルナンドが別人に見えていた。
姿形は変らない、だがその”気”が、放たれるそれが明らかに先程とは違っていた。

先程の殺気漲るそれとも違う、怒りや、憎しみといった感情とも違うそれは、ただその場にいるだけで恐怖を呼び起こされるような威圧感。
気圧されるというのがある意味最も適切で、まるで目の前にいるのは人の形をした別物。
破面とも違う化物と相対しているかのような感覚をサラマは今、全身で感じていた。

「それが・・・・・　それがニイサンの”本気”ってやつかい？
さっきまでので、充分本気だとばかり思ってたんだが・・・・・・
ケケケ、コイツは見誤ってたかねぇ。」

「・・・・・”本気”だったさ。　だが・・・・・いいのを貰って起きてきた、ってぇところだろう・・・な。」

ゆっくりと頭上で交差していた腕を解くフェルナンド。
サラマはそれを信じられないものでも見ているかのように、そしてそれは言葉としても現われる。
先程まで自分が必死に喰らいついていた男の実力。
本気であると、そう確信できるものをもっていたサラマにとっては驚きでしかなく。

そう思い込んでいた自分に僅かばかりの悔しさを滲ませるが、しかしフェルナンドはそれを否定する。

本気であったと。

何にもまして本人がそう語ることの意味。

手加減、というものを好まない彼らしいその答え、だがしかし、本気ではあったがフェルナンドの言葉にはその先があった。

”起きてきた”

まるで自分の中に何かが眠っていたかのようなその答え。

彼自身にも感覚的なそれは、しかし確実に、そして明確に変化を齎している。

下ろされた腕、そして俯き加減だった顔は上げられ、見えたその顔には壮絶な笑みが浮かんでいた。

ニィと歪み、牙の如き犬歯をのぞかせる口元と、相手を睨み、そのまま射抜いて絶命至らしめんとしているかのような瞳。

化生、虚や破面といった類のそれではなく、別物のそれを思わせるその笑み。

フェルナンドの内より起きてきたそれが彼にその笑みを浮かばさせるのか、それとも彼の気質によるものか。

どちらにせよその笑みは語っていた。

焦がれ、渇き、飢え望む彼の願いというものを。

「悪くないぜ、トカゲ。　”ただの”トカゲじゃぁないってのは判った。久しぶりに目を覚まさせてくれた礼だ、”本気”の”上”を魅せてやるよ。」

「ケケケ。　今のままで俺にはもう充分なんだが・・・ねぇ。」

「そういう台詞は笑いながら言うもんじゃねぇよ。・・・・・・いくぜ？　――――　刻めぇぇ！　『輝煌帝（ヘリオガバルス）』！！！」

内側で目を覚ましたもの、飢え、渇望の権化でありフェルナンド・アルディエンデを象徴するもの。
自らの内で目覚めたそれ、久々に戦いのうちで目覚めたそれにフェルナンドは滾りを見せる。
それを目覚めさせた相手に向けて。
ただの中級大虚、戦いぶりは素晴らしいが何処までいこうとも相手はただの中級大虚、そういう見方も出来るだろう。
だがこの中級大虚の攻撃でフェルナンドは僅かばかり、ほんの僅かばかりの傷を負った。
掠り傷とはいえど傷は傷、それを与え、目を覚まさせた相手が本気というものを望んでいるというのなら魅せてやろうと、フェルナンドはその腰の後ろに挿した斬魄刀を抜き放つ。

そんなフェルナンドに、サラマはおどけた風で今のままでも充分だと答えて見せる。
だがそんな上辺の言葉など誰も信じないだろう。
何故なら彼の目は笑い、待ち望んでいるかのようにギラつきを見せているから。
弱気な発言の裏に、本当の真意を潜ませているからだ。

本気の力を見せてくれ、という真意が。

抜き放たれた刃に映るのは紅の霊圧。
燃え上がり、燃え盛り、燃え散らす炎の霊圧。

遮るものの悉くを打ち倒し進む炎海の炎がその刃に映り込み、そして銘と共に力は解放された。

天を衝き立ち昇る火柱と巻き起こる熱風。
ものみな焼き尽くす炎は解き放たれ、集約され、人の形へと収まる。
収束する火柱から現われたのは炎の化身となったフェルナンド。
金の髪は半ばより赤みを増しそして炎髪へと変わり、帯も、そして袴の下部もまた炎へと変じていた。
霊圧はそれ自体が熱を持ったかのように吹き上がり、空気をチリチリと焦すよう。
気はさらに燃え上がるようにその威圧感を増し、その場を支配する。

刀剣解放。
破面の真価であり切り札と呼ぶべきその力。
それを中級大虚に向けて使用する事の過剰さ。
本来そんな事はせずともフェルナンドの勝利は揺るがない。
目覚めたものが求めるまま、その拳を振るえば勝利はその手中となることだろう。
だが、フェルナンドは解放を選択した。
それは純粋に中級大虚という破面には到底及ばない存在でありながら、自分に一矢報いたサラマへの敬意ともう一つ。
もし自分が解放したならば、この中級大虚はどこまで拮抗することが出来るのか、或いは更なる驚きと目覚めを齎すのではないかという興味故に。
好奇、フェルナンドには珍しいその感覚が彼に刀剣解放という過剰戦力の使用を選択させていたのだ。

「ケッケケケ。　こいつは・・・・・・　化物だねぇ・・・ニイサ

ン・・・・・・」

「そうだろうよ。　だが・・・俺もテメェもそう考えれば大差は無ぇ。ただ戦いを求める化物だろうが。」

解放し、炎を纏いまた一体となったかのようなフェルナンドを見たサラマが呟く。
その肌が感じるのは絶対的な戦力差。
先程でもかろうじて手の先、爪の突端が足元に届いたかどうかといった状態であった彼にとって、その後にフェルナンドが魅せた”気”とこの刀剣解放は絶対的なまでの差を見せ付けられるには充分過ぎた。
だが、彼の声に絶望は無い。
不安も、恐怖も、そして畏れも、その声には含まれてはいた。
だが、それを押し退けて前面に現われているのは賞賛にも似た感情。
高められたその力、それと相対せること、そしてそれを自分という存在に魅せてくれたという事への感謝にも似た感覚。
サラマを今だ立たせているのと同じように、戦いに対する感謝がそこにはあった。

「じゃぁ行こうか、ニイサン・・・・・・ウラァァアアアアア！！」

叫びと共にサラマはフェルナンドに突撃する。
その叫びは自らを鼓舞するために、叫びにより粟立ちと畏れを追い出そうとするかのように。
しなやかで筋肉の塊かのようなサラマの全身が産み出す加速力、像

がぶれる様なそれをしてサラマはフェルナンドに肉薄し、拳をくり出した。
今打てる最高のそれ、しかしフェルナンドはそれを払いのけるようにして防ぐと、サラマが次の行動を起す前に腹部に数発の拳を放り込んだ。

「ッガハッッ！！」

自らの突進力が加算されたフェルナンドの目にも止まらぬ連撃の拳。
腹部に放り込まれたそれはサラマの胴をくの字に折り曲げ、突進による慣性など無いかのように後方へと吹き飛ばす。
そのサラマが砂漠に投げ付けられるより前に、フェルナンドは次の初動へと入り終える。
瞬間フェルナンドが立っていた場所には僅かな炎だけが残り彼の姿は消え、次の瞬間には今だ吹き飛ばされた状態のサラマの隣へと移動していた。
そして振り上げられたフェルナンドの脚。
何の躊躇いも無く振り下ろされるその蹴りは、僅かな炎の尾を引きながら再びサラマの腹部に突き刺さり、砂漠へと叩きつける。
苦悶の声すら上げる事無く叩きつけられるサラマ。
たった数発、十にも満たない打撃によって彼は先程以上の自身の窮状を理解した。

（化物め・・・・・　何にも見えやしないじゃないか・・・・・・ケケケ、まったく・・・運が良いのか悪いのか・・・・・・だがやっぱり最初の直感は当たってたな、相性は悪くなさそうだ。まぁ、偶然なんて事でもなし、当たり前なのかもしれんが・・・ねぇ。）

いいように放り込まれた拳と蹴り、身体に刻み付けられた痛みは激烈であり、その身に受けたことでより自分の相手が化け物であるという事を自覚するサラマ。
こうしてフェルナンドと見えられたことは彼にとって幸運といえるのか、それとも隔絶された力は彼にとって不幸な出来事なのか。
ただ、彼の目にいまだ力が残っていることを鑑みれば恐らくは前者なのだろう。
そして力を残した瞳は、今だ逆転の可能性を彼自身が信じていることの表れなのかもしれない。
それがどれだけ薄く、細い望であろうとも。

「炎・・・か。　ケケケ、ニイサンには、似合いだな。俺も、ゴホッゴホ！俺も炎は嫌いじゃないんでね、楽しくなりそうだ・・・・・・」

「ボロカスでも口は達者なまま・・・か。　見栄か虚勢か、どっちにしろ手は抜かねぇから安心しろ。」

「嬉しい事言ってくれるじゃ、ないか。　なら付き合ってもらおうか・・・・・・とことんまで・・・ねぇ！」

サラマに漲るのは気概、気合、気勢。
精神は今だ折れず、それどころかフェルナンドの炎に呼応するように燃える。
彼にとってこの戦力差は始めから判っていた事。
自分より相手の方が数段強い事など判りきっていた事なのだ。

それがこの期に及んで、二段三段とその強さが上がったとて然したる違いなど無い。

が、それは気構えの話であり、肉体はその精神の昂ぶりに追従は出来なかった。

ほぼ一方的に受けた打撃の数々。
それは確実にサラマの身体を痛めつけ、戦うという機能を削り取っていた。
視線は定まらず、足元はふらつき、呼吸は浅く、拳も蹴りも奔らない。
全ては蓄積されたダメージによるものであり、フェルナンドの的確な攻撃による結果。
ただこの場合それだけの攻撃を受けて今だ原形を留め、尚且つ意識を保っていられるサラマの方を褒めるべきなのかもしれないが、それは詮無き事。

それでもサラマは止まらない。
そしてフェルナンドもまたその手を緩めることは無い。
一の攻撃に対し返ってくるのは倍以上の数の雨。
それを受け吹き飛ばされ、そしてまた特攻するを繰り返すサラマ。
彼に他の手段は無い。
出来るのはこれしかなく、後は待つだけしか出来ない。
サラマが唯一現状を打破できる状況が訪れる事を。

「粘るなぁトカゲ。　勝てねぇ、と判ってようが関係無ぇ、押し通すか・・・テメェの道を・・・・・・」

「ゲホッ・・・・・　ケッ、ケケ・・・・・・　勝てない、と決まった訳、じゃぁ無いから・・・ねぇ。何だってそう・・・だろう？　諦めた、方が、馬鹿を見るのさ・・・・・・・」

「違いねぇ。　ならコイツを・・・くれてやるよ。」

フェルナンドが片手を天高く掲げる。
すると彼の掌は炎へと変り、そこから勢い良く紅い炎が噴出した。
紅い炎はみるみるあふれ出し渦巻き、掌の上に巨大な炎の塊を作り出す。
直径にして５ｍはあろうかという炎球、炎が織り交ざり膨大な熱量を発するそれをフェルナンドは掲げていた。

「こういう攻撃は不慣れでな、調節が効かねぇんだが・・・・・・ただ丸焼きにするにはもってこいだろう？」

「ケケケ・・・・・　言ってくれる、ねぇ・・・・・・」

「終いだぜ。トカゲ。　喰らいな！」

振り被り、投げ付けるようにして腕を振るうフェルナンド。
その動きに合わせるかのように炎球は飛び出し、砂漠を焦しながらサラマへと一直線に向かう。
彼を呑み込み、内から外からと焼き尽くし、灰燼へと帰す為に。
フェルナンドにしてもその攻撃方法は模索の域を出ないものであっ

た。
近接戦闘に長けているフェルナンド、それは彼自身も自らの長所として自覚しており何より絶対の自信がある領域。
だが反対に中、遠距離の戦闘となればその戦力は格段に下がることもまた事実。
彼が十刃となるきっかけとなった前第7十刃（セプティマ・エスパーダ）ゾマリ・ルルーとの戦闘でもそれは証明されており。
結局のところ敵の油断と、傷を負って敵を間合いへと引き込むという手法でしか致命傷を与えるには至らなかった。
一芸に長ける、といえば聞こえは良いがそれはつけ込まれる隙と同義。
フェルナンドがそれをよしとするはずも無く、まずは一つの手段としてこの炎球を打ち出す方法を考えたのだ。

だがそれをこの場で試すのは、決してサラマが彼に劣り、格好の標的だからという訳ではない。
自らの業は恐らく未完成の代物。
そしてそれは往々にして破られるのは自明の理、何故ならそれは未完成であり未熟、付入る隙など幾らでもある代物だからだ。
故にフェルナンドはサラマに対しそれを使用した。
フェルナンドのサラマに対する評価は決して低くは無い。
もしかすればこの攻撃は避けられる可能性すら充分にあると。

だがそれでいい。
そうでなければ業は磨かれない。
始めから完成している業などこの世に存在し無いのだ。
数多の試行錯誤、その道程の中思わぬ反撃を食らうことも十分に考えられる。
だがそれでいい。
そうしなければフェルナンドが求める業は完成しない。

未熟な攻撃、それを使用する理由。
それはサラマという中級大虚との戦いで、フェルナンドが求める業に近づける可能性の存在。
そうフェルナンドに思わせるだけのものを、サラマは血反吐を吐きながらも彼に見せていた。
このサラマという名の中級大虚ならば、覆すという確信めいた予想がフェルナンドにはあったのだ。

そしてそれは、彼の予想通り現実となる。

「あぁ、喰らわせてもらうぜ、ニイサン。」

着弾の直前、サラマの口から零れたのはそんな言葉。
そして大きく開かれる彼の顎(アギト)。
開かれたそれはまるであたりの空気を全て呑み込むかのように吸い上げる。

フェルナンドが放った炎球さえも。

丸呑み、そんな言葉が良く似合うそのサラマの行動。
フェルナンドが放った炎球はサラマの顎から喉を通り、そして腹へと収まった。
腹へとそれを納めた後、サラマの口から零れた小さなゲップと共に

僅かばかり炎が吐き出される。
が、それだけ。
別段サラマに変化は無くフェルナンドの炎に焦され、燃え尽きていくような様子もない。
端的に、そして的確に言ってしまえばサラマは喰ったのだ。
フェルナンドが放った炎球を。

「ハッ！　こいつは・・・また・・・・・・」

半ば呆れたようなフェルナンドの声。
避わすだろう、防ぐだろうという予想はあった。
それは確信めいていたし、結果だけを見ればそういえなくもないと。
だが、まさか喰うとは思っていなかったフェルナンドにとってその光景は衝撃的であったし、呆れすら覚えさせていたのだ。

「ふぃ～、　ご馳走さん。　いや～ニイサン炎熱系だってのに能力使わないから、このまま殴り殺されるんじゃないかとハラハラしたぜ。ケッケケケ、まぁ何にせよこれで回復出来たからコッチとしては問題ないんだがねぇ。」

言うなりサラマの身体中の傷が癒えていく。
超速再生、霊圧を消費して傷を回復するその手段は、破面が破面化の際に失う能力。
だがそのサラマの超速再生はどこか毛色が違い、元通りというよりは逆に力が漲っているかのような印象すら与えるものだった。

「テメェ・・・　喰った俺の炎を・・・・・・・」

「あぁ、存分に使わせてもらってるよ。　言っただろう？俺とニイサンは相性がよさそうだ・・・って。」

そう、今サラマの身体に漲っているのは彼の力だけではなく、彼が喰らったフェルナンドの力もであった。
膨大な熱量、その内に秘められたエネルギーをサラマは取り込み、自らのものとした。
サラマに残された唯一の道、それがこれ。
彼自身の唯一の能力を持ってフェルナンドの力を我がものとする事。
炎を喰らう事だけが、彼に残された唯一無二の逆転の目だったのだ。

「ニイサンの言う通り俺は”ただの”トカゲじゃぁない。　”火喰(サラ)いトカゲ(マンダー)”、それが俺さ・・・・・・さてニイサン、もう少しだけ・・・付き合ってもらおうかね。」

首から背中、尾の先、吹き上がる赤紫の霊圧の中でも特に濃いそれはまるで炎のように見えた。

火喰(サラマンダー)いトカゲ。

それがサラマ・Ｒ・アルゴス。
炎の化身と炎を喰らう竜の戦い。
燃やし呑み込むのか、喰らい呑み込むのか。

戦いの天秤は今だ揺れたままであった・・・・・・

呑み込まれる
決着の時
闘げ
呑み込まれる
思惑の仲へ
呑み込まれる

BLEACH El fuego no se apaga. 61（後書き）

決着つかず！

申し訳ない・・・・・・

自分が思う以上に長くなるのは何時ものことですが、いい加減その辺を管理できるようになりたいです。

さて本編の方はなんと言いますか・・・・・・
書いていて楽しかった、というのが正直なところ。
特に”旋”
ぶっちゃけ修羅の刻を読んだことがある方なら、この展開、判ると思います。
自分の中では旋が刀相手に最もキレイに決まった場面かな。

名前の方は「サラマ」でトカゲじゃぁ判っていた人が居たかも知れませんねぇ。
安直過ぎたか？

次こそ決着となりますので、お待ちください。
・・・・・・きっとね。

「ニイサンの言う通り俺は”ただの”トカゲじゃぁない。”火喰(サラ)いトカゲ(マンダー)”、それが俺さ・・・・・・さてニイサン、もう少しだけ・・・付き合ってもらおうかね。」

滾る赤紫色の霊圧。
首から背にかけて、そして尾の先から殊更に濃く立ち昇るそれはまるで燃える炎のようだった。
身体には見るからに力が漲り、先程までのボロボロの姿からは想像出来ない程。
飄々としたその気質こそ変らないものの、明らかに力を増したであろう事は想像に難くない。

”火喰いトカゲ”

自らをそう称した中級大虚（アジューカス）、サラマ・R・アルゴス。
炎の化身たる男、フェルナンド・アルディエンデが放った炎球を彼はその身体に取り込んだのだ。
その名が示すとおり炎を喰らい尽くして。

「ハッ！　随分と・・・・・都合のいい能力だな。えぇ？　トカゲよぉ・・・・・・・」

燃え盛るかのような霊圧を噴き上げるサラマに対し、フェルナンドが呟く。
確かにその能力はまるで彼という存在を狙い済ましたかの様。
炎を己の武器とするフェルナンドにとって、サラマという存在はまさしく”天敵”と呼べるものと言えた。
それが偶々、十刃として赴いた初めての戦闘において現われるという現実。
運命、という安い言葉を思わず使いたくなる程の、いや、それ以上の何かを勘繰らずにはいられないかのような出来過ぎた出会いがそこにはあった。

「ケッケケケ、まぁそう言いなさんな。　火喰い（サラマンダー）トカゲなんて言ってはいるが、便宜上それが一番しっくり来るってだけの話さね。正確にはもうちっとばかし違う能力な訳なんだが・・・ね。」

「・・・・・・・・・・・・・」

サラマはフェルナンドの言葉に鼻の頭をポリポリと掻きながら答える。
戦いの最中だというのにその余裕、能力から来るのかそれとも生来の気質か、おそらく後者であろうそれでフェルナンドに対峙するサラマ。
火を喰うという行為を見せておきながら、自身の持つ能力は厳密にはそれとは違うと匂わせるかのような彼の言。
真実か、あるいはペテンなのか、真偽は彼以外には判らずそしてフェルナンドはそれを問いただす事も無く無言であった。

「訊かないのかい？　本当の俺の能力がなんなのか・・・って。」

「ハッ！　馬鹿らしい。　ならテメェは俺が訊けば答えんのか？テメェ自身の能力を態々自分でバラす意味なんか無ぇし、そんな事したがるのはただの阿呆(アホウ)だ。それに知りたきゃ俺が俺のやり方で調べりゃいいだけの話だろ？こうやって・・・なぁ・・・・・・」

一刀両断。
自らの能力が気にならないのかというサラマの問いを、問えば答える訳でもなしとフェルナンドは即断をもって返す。
そして問うて答えぬは戦いにおいてはある意味当然の事。
能力の秘匿、その重要性は戦場において大きな有利となる。
敵にそれを知られる事なく、また知られる前に倒してしまう事が一つの理想形であるように。
戦いとは如何に手の内を見せずに勝つかであるという点を考え、さらにあるにしろないにしろそれを匂わせる事もまた駆け引きの内側。
それにどう対処するのか、どう凌駕するのかもまた戦いという事。
敵に解き明かされ、看破されたのならいざ知らず、ただ自らの能力

を絶対として疑わずに敵に説く事は総じて愚かであり、下策、敗北を呼び込む。
能力とは隠すもの、そして言葉ではなく自らの力で解き明かすものとフェルナンドは言うのだ。
故にフェルナンドは問わない。
ただ彼の場合言葉で知るくらいならば、力ずくで解き明かす事に意義を見出している様子ではあった。

その証拠にフェルナンドの掌が再び天へと伸ばされる。
掌は肌色から紅へと変わり、吹き上がる炎は渦を巻き、織り交ざりながら炎球を形作った。
先程と同じ、いやそれ以上の大きさとなった炎球。
当然大きさを増したそれは威力も上がっている事だろう、そしてフェルナンドの眼は言っているのだ。
もう一度受けられるのかと、喰らえるのかと。

「ケケ、こいつはなんとも・・・・・・　意地っ張りな御人だねぇ、ニイサンは。」

その姿を見たサラマは一度驚いた表情を見せる、がそれはその後に続いた心底面白いものを見たかのような笑みで消されていく。
炎球を構えるフェルナンド、それはもう一度それを放つという意思表示。
それは余り頭のいい方法とは言いづらい選択だ。
一度それを呑み込み、喰らい我が物とした相手にもう一度同じ攻撃をするという選択。
たしかに炎の量は増し、炎球も大きくなってはいるがそれだけで凌駕出来るのかどうかは定かではない。

下手をすれば更に相手に力を与えるのとその選択は同義であり、上策とは言いがたいもの。
今までの状況を鑑みれば炎球の様に炎を放つような攻撃は避け、接近戦による打撃で決着を着けることが今もっとも理に適った選択と言えるだろう。

「意地を張って通すのが道だ。　枉げて退く道なんて端から持って無ぇんだよ。」

だがいくら理に適っていようとも、自らの選択が上策と言い難いものと判っていようとも、この男は進む。
元々破られて上等という気概で放った一撃、それを見事破って魅せたサラマ。
ならば自分も破って魅せねば釣り合いが取れないと、すくなくともフェルナンドの中でそれは決定された。
能力を持って能力を破り返す、という選択が。

「ケッケケケ。　なら・・・　やって魅せてくれよ、ニイサン。」

「あぁ。　やってやる・・・よッ！」

炎球が再びサラマへと投げ付けられる。
轟々と燃え盛る炎、それを前にサラマは平然と佇みそして顎（アギト）を開く。
そこからは先程の再現と同じ。
大きく息を吸い込む要領で胸をそらせるように一息で炎を飲み込むサラマ。

炎の大小などまるで関係ないとでもいいたげな吸い込む動作。
嚥下する喉の動きの後立ち昇る彼の霊圧はより激しさを増していく。

しかしフェルナンドもこれでは終わらない。
一発でだめならば二発、三発と両の掌から炎球を産み出しては投げ付けるを繰り返す。
弾幕とまでは言えずとも押し迫るかのような炎球の群れ、サラマはそれを時折避けながらも喰らう動作を繰り返す。
意地、いや半ば意固地ともとれるようなフェルナンドの様子。
これならどうだ、こうすればどうだ、そうしたらお前はどうするのだ、魅せてみろ魅せてみろと嬉々として炎を投げ付ける様は戦いというものがこの男にとって格別で、満たすという行為そのものであることを伺わせる。

十数程の炎球を打ち出して後、フェルナンドがその手を止めた。
その視線の先には先の比ではない霊圧を燻らせるサラマの姿。
いまや身体より背負う霊圧の方が大きいのではないかというサラマの姿があった。
フェルナンドの炎を喰らい、その悉くを自らのものとして立つサラマ。
背負う霊圧は強大、しかしそれは同時にフェルナンドの放った炎球の持つ力が強力であったという事の証明でもある。
褒めるべきは強力な攻撃を惜しげもなく放ち続けたフェルナンドか、それともそれを喰らい、押しつぶされる事なく立っているサラマの方か。
どちらにせよ状況だけを見れば、この一連のやり取りはサラマに利のあるものであった事は間違いない事であった。

「ゲプ。　流石に腹一杯・・・ってヤツだな。　量というか質とい

うか、どっちにせよ俺にとっちゃありがたい事だったがね。どうだい？　ニイサン。　何か判ったかい？　」

「それなり・・・ってぇところだな。」

「ケケ。そいつは良かった。　・・・あぁ、こっちも奢って貰ってばかりじゃなんだ、そろそろ攻めてもいいかい？」

「一々訊くなよ、来たきゃ来な。　待ってくれ、なんて恥知らずな事俺が言うとでも思ってやがんのか？」

霊圧を背負い飄々と。
燻らせる赤紫、目元に浮かぶ笑みは愉悦ではなく喜び。
まだ戦えるという、先程よりもなお戦えるという喜びに満ちているサラマ。
炎球を喰らい続けた彼が遂に攻撃を受け止める側から攻撃を与える側へと立場を入れ替えようと動く。
踏み出した脚は砂を噛締めるように音を立て、身体は矢を番えた弓、その引き絞られた弦のように放たれるを待つ。

対するフェルナンドもまた構え、時を待っていた。
軽く前に出された腕、僅か握られた拳を目線のやや下に、左脚を前に出し半身気味で構えるフェルナンド。
状況はおそらく彼自身がより悪くした、と言えるものであったがそれでも彼の顔には笑みが。
牙を剥いた笑みが浮かんでいた。

「なら・・・いかせてもらおうか！！」

言葉が終わるや否やサラマが飛び出す。
番えられた矢は射られ、フェルナンドという的目掛けて飛ぶサラマ。
赤紫の霊圧は尾を引きながらサラマに続き、大きなそれは圧力としてサラマを一回りも二回りも大きく見せる。
それを前にしてもフェルナンドに退く気配は微塵も無い。
いや、始めから彼に”退く”という概念が存在していないかのように。
前へ、ただ前へ、進むことでしか求められず、1手に入らないものを彼が求めているが故に。

今や全身が放たれた矢となったサラマ。
その突撃力から突き出された腕がフェルナンドを襲う。
開かれた手と突き立てられる様に伸ばされた爪、その掌と迎え撃つようにして放たれたフェルナンドの拳がぶつかり合う。
ぶつかり合う掌と拳、衝撃は放射状に拡散し大気が爆ぜる。
鬩ぎあう掌と拳、互いを凌駕しようという一瞬の中の鍔迫り合い。
先程は一も二も無く弾かれたサラマの攻撃は、今拮抗するにまで至っていたのだ。
独力ではなく上乗せ、しかしそれでも”力”であることに変りは無く存分に振るうそれはまさしくサラマという中級大虚（アジューカス）が持つ力。
が、拮抗とは釣り合った力でのみ生まれるものでありそう長く続くものではない。
徐々にではあるが片方が押し込まれていく掌と拳、そして押し込まれているのは掌の方であった。

「ハッ！　こいつは俺の炎を褒めりゃ良いのか？それともテメェを褒めてやりゃいいのか・・・どっちだと思うよ？　トカゲよぉ・・・・・」

突進力と奪い我がものとした霊圧の上乗せをもってしても優位はフェルナンド。
その拮抗は彼の中でも評価に値するものなのか、言葉を交わす余裕を見せる彼。
如何に破面（アランカル）の霊圧、それも十刃（エスパーダ）のそれを得たとしてもそれを扱う身体は中級大虚。
生物としての構造、強度、肉体的限界、そのどれもが懸離れた次元にある存在を霊圧の過多だけで凌駕するのは厳しい。
その霊圧も奪われたとはいえ今だ余力があるフェルナンドを前にすれば尚更である。

「ケケ。　出来ればそいつは俺を褒めてもらいたい・・・ねぇ！！」

掌を押し戻されるサラマ。
だが諦めの様子は微塵もなくそれどころか戦いの意思はその瞳に溢れていた。
そしてその意思と言葉に呼応するように彼に変化が起こる。
変化が起こったのは正確には彼の背後、特に濃く炎のように立ち昇っていた背と尾の先の霊圧、ゆらゆらと立ち昇っていたその霊圧が一斉に方向性を持ち噴射されるように爆ぜたのだ。
サラマの背を押すように、そして押し込まれた掌を再び押し返すように。

ぶつかり、鬩ぎあっていた掌と拳。
拮抗の後僅か上回りつつあった拳を掌は再び押し戻し、そして遂には押し返した。

「オォオォォオオオ！！！」

叫び、魂の咆哮が響く。
奪い喰らった霊圧を背負い、そしてそれを推力としてフェルナンドを押し込むサラマ。
砂漠に根を張ったかのようなフェルナンドの脚が遂に動き、サラマの圧力に圧されて彼ともども砂漠を削り滑る。
爆ぜ押し出す腕と爪、その爪がとどいたとて果たしてフェルナンドに傷を負わせられるのかは彼には判らない。
だが今彼に重要なのは自らの力が通用し、ただ一瞬でも凌駕出来るのか否かという部分。
先程は簡単に弾かれた攻撃、しかし今ならばどうか、少なくとも拮抗は出来た今ならばどうか。
自分は届くのか、高みに、その高みに手をかける資格があるのか、確かめずにはいられない。
飄々とした振る舞い、しかしその奥に覗く彼の熱い部分が叫ばせる、魂の咆哮を。

戦士の雄叫びを。

赤紫の流星が白い砂漠に一筋の線を描きながら、紅い炎の壁を貫かんと進む。
雄叫びを上げ進むサラマ、無言で拳に力を込め続けるフェルナンド。
裂帛の気合と静かなるをして闘争は加速していく。

押し込まれ続けるフェルナンド、しかし彼とてそのままをよしとするはずも無く、彼から吹き上がる霊圧が増すとサラマの突進はその威力を削がれ、弱まっていった。
だがサラマとてそれで終われる筈もなく、それが駄目ならと拳脚の乱撃をもって凄絶なまでにフェルナンドに攻めかかる。
その拳も蹴りも噴出す霊圧によって加速し、増幅された威力を持ってフェルナンドを捉え、打ち据える。
十合、二十合、三十、四十と止まる事無く繰り出される乱撃。
その事如くをフェルナンドは防ぎながらもその身に受け、しかし倒れる様子は見せない。
ただ笑みを浮かべ、サラマを睨みつけながらその暴風が如き攻撃の只中にいるフェルナンド。
紅い瞳に陰りは無く、ただサラマの瞳を射抜き続ける。

（ケケ。　効いてるのか効いてないのか・・・・・・コッチはニイサンの前に立ってるだけで精神削られてんだから、それぐらい見せてくれたってバチはあたらんでしょうに・・・・・・ったく、難儀なもんだねぇ。）

苛烈な攻めの中、いまだ思考には余裕を残すかのようなサラマであったがそれは風前の灯といった様子。
もともとフェルナンドとの地力の差は歴然で、そこに来て彼の”本気”を目の当たりとした彼の精神は削られる一方。
フェルナンドの瞳を見ればそこにあるのは自分が負ける姿の幻視、それは戦いの最中において禁忌に近い想像であり振り払うべきもの。
だが対峙するからには否応無くそれはサラマを襲い、しかし己が持つべきは勝利の姿という二律背反。
精神をすり減らすのにはそれは充分な理由であり、ここまで彼が持

っているのは普段の彼の気質によるものが大きいといえるだろう。
そして精神の磨り減りは如何に威力を増しているとて拳には伝わり、鈍りとなって現われ五十を越えた乱撃は遂に終わりを見せた。

「終(しま)いか・・・・・・？」

乱撃に訪れた終わりは僅かなもの。
だがそれをこの男はただ待ち続けていた。
ガラにも無く防御を固め、捌き、ただ耐えるという行為。
それはまるでサラマという中級大虚の全てを、十全を見たいが為。
霊圧同士の衝突により生まれた白煙、その隙間から覗くのは紅の眼光。
そしてその瞳は語るのだ、十全を出せと、だがそれでも自分が勝つと、己に絶対の自信があるが故に。

言葉に反応したサラマ。
彼の瞳に映ったのは人の肌ではなく、肘から先が炎となったフェルナンドの腕。
燃え上がり、先程まで彼が放っていた炎とは格が違う密度と威力を秘めているであろうことが一目で判るそれを見た瞬間彼はその腕の範囲から逃れるように跳ぶ。

アレは駄目だ、アレは無理だ、アレを受ければただでは済まない。

そして何より、アレは自分が喰える限度を越えている、と。

直後、彼の鼻先を掠めるかのようにその炎が通過する。
ただしたから打ち上げるようにして放たれたフェルナンドの腕、そしてその射線上に生まれた竜巻のような炎の柱。
そう、それは炎の竜巻だった。
肘から先は炎へと変じ、そして炎は竜巻となってサラマの鼻先を通過したのだ。

竜巻は一瞬闇夜を照らすとその形を崩し、熱風を伴いながら瞬時にフェルナンドの下へと舞い戻るようにして赤い腕を形作ると、再びフェルナンドの腕となる。
とうのフェルナンドはその腕を見ながら二、三度拳を握っては開きを繰り返す。
その仕草はまるで、あぁ、こんな使い方もあるか、といった風で頭で考えたというよりは身体が勝手に動いた、といった風。
考えるよりも先に反応したそれ、加減も何も無くただ屠るために放たれたそれ。
それを避けたサラマの反応は、ここへ来ておそらく最高潮と言って良いだろう。

だがその一撃を避けてしまった事が、彼に、そしてフェルナンドにとって決定的な行為であった。

「避けた・・・な、トカゲ。　どうした？　避けずに喰えばよかっ

たじゃねぇかよ。俺の、炎なんだから・・・よぉ。」

「・・・・・言ったろ、今は腹が一杯でね。知ってるか？　暴飲暴食は身体を壊すんだぜ？ニイサン。」

「知るかよ。　・・・まぁ何にせよアタリはついた、後はまぁ・・・・・試してみりゃ判る話・・・かよ。」

何故喰わない、何故炎を喰わないと問うフェルナンド。
半ば察しはついていたが、それでも言うのはより確信を得るため。
何処まで掴んでいるのかは彼にとっても定かではないが、それを飄々とした言で煙に巻こうというのか、サラマはおどけた様子でそれに答える。
だがフェルナンドにそんなものが通用するはずも無く、後はやはり自分で確かめるといった風で再び掌を天に掲げた。
現われるのは炎の球。
轟々と燃え盛るそれを掲げるフェルナンドと、対峙するサラマ。
だがそれは既に効果は無いと証明されたも同然の攻撃。
サラマが喰らい、己が力としてしまうのが落ちの彼に対しては欠陥とも言える攻撃であった。

「なんだい？　また驕ってくれるってのかい？」

当然それを見てもサラマは怯まない。
彼にとって最早フェルナンドの炎球は脅威とは言い難く、補給の意味合いすらある。
これを喰らえばもう暫く戦える、そんな思考がよぎるサラマ。

だが、そんな思考を抱えて勝てるほどフェルナンド・アルディエンデは甘くない。
そしていつまでも破られた攻撃を続けるほどフェルナンド・アルディエンデは愚かではなかった。

「あぁ、くれてやるよ。　だがこんなにデカくちゃ喰い辛いだろう？だから・・・・・・　俺が喰い易いようにしてやるよ。こうやって・・・なぁ・・・・・・・」

瞬間、燃え盛っていた炎球は形を崩し、再び掌へと吸い込まれるように戻っていく。
怪訝な雰囲気でそれを見るサラマ。
その行動に意味を見出せず、ただ何故か僅かばかりの不安だけが彼を苛む。
本能、そういった根源的な部分が警鐘を鳴らしているかのように。

掌に収まるように収束した炎。
それが収まりきるとフェルナンドは、天に掲げた掌を強く強く握り締める。
指の隙間から微々たる炎が零れそれでも強く、強く。
そして掲げられていた腕は下ろされ、同時に開いた手の上には紅い何かが乗っていた。
巨大ではない、だが掌には収まりきらない程度のそれ。
約１５ｃｍ程度のそれは細長く、先端が尖った円錐形をしており頂点とは逆の、円錐の底に当たる部分はいまだ炎の趣を残していた。

（おいおい・・・・・　アレだけの炎をそんなになるまで無理矢

理霊圧で押し固めた、ってぇのか？）

僅かばかりの不安は驚愕となってサラマを襲う。
同じ炎、総量からすればこれもまた同じ、しかしその密度は桁外れであった。
巨大な炎球のその全てを己が霊圧を持って無理矢理に押し固めたフェルナンド。
炎球の全てを内包する炎の棘、それを前にサラマは驚愕そして戦慄の表情を見せることしか出来ない。

そんなサラマを他所に掌の上で遊ぶようにして二、三度軽くそれを投げ、感触を確かめるようなフェルナンド。
だが次の瞬間、まるで腕が消えたのかと思うほどの神速が如き振りにより、その炎の棘をサラマに向けて投擲したのだ。

狙いはサラマの頭、眉間の中心。
しかし炎の棘は狙いを違い、サラマの仮面、その頬を切裂き、背に背負った赤紫の霊圧に穴を穿って通過していく。
そして一泊の間を置いて、サラマの後ろで起こったのは爆発だった。
棘が何かに当たったのか、太く大きな火柱を上げて燃える着弾地点、それを振り返り確認してしまうサラマ。
戦いの最中において相手から目を逸らすという愚、しかしそれをしても背後で起こった出来事は強烈なもの。
もしアレが自分の身体に刺さっていたなら、想像するだけで冷や汗が噴出す代物。
そしてあの炎はサラマが己が能力を持ってして喰える限界を超えている類、故に防御も適わぬ代物であった。

「チッ。　形は上々、だが思い通りの場所にはいかなかった・・・かよ。これじゃぁテメェに効果があるのか無ぇのか判らねぇなぁ・・・・・」

己が放った一撃、威力は上々としても狙いを違えた為に、本当に確かめたかった事は判らずじまいのフェルナンド。
ただ対するサラマの表情からおそらくはそれでアタリだろう、という確信は得ていた。

「まぁいい。　トカゲ、テメェには喰える限界があるんだろう？だがそれは”量”じゃなく”質”、硬さ、密度みたいなもんだ。液体は呑めても固体は無理、だから俺の竜巻は避けたんだろう？俺の身体が直接変化してんだ、テメェに投げつけた炎とじゃぁ格が違うから・・・な。」

「・・・・・・・・・・・・・」

「ダンマリ・・・か。　だがここでのそれは肯定と同じだぜ？・・・まぁそれでもいい、俺は俺のやり方で確かめればいいだけの話だ。」

フェルナンドが見当をつけたサラマの能力。
それはサラマにも食べられるものとそうで無いものがある、という事。
質、フェルナンドの言をすれば硬さ、或いは密度といった類。
水はすんなりと呑み込めても固体となれば話は別であるのと同じ事。
総量は何処までも同じ二つの炎、片方はそのまま、もう片方は霊圧を持って押し固め、大きさは小さいがそれでも硬度はそのままのも

のの比ではない炎。
どちらも等しく炎であるがしかし、違う炎。
サラマが喰らい、我が物と出来るのは前者の炎だけである、フェルナンドはそうアタリをつけていたのだ。
それゆえの炎の棘、投擲する炎、密度を増し、硬度を増し、霊圧によって無理矢理押し固められた炎はそれ故に炸裂し爆発する。
格闘ではなく能力を使用した戦闘、その足がかりともいえるものをフェルナンドはその手中とし始めていた。

再びフェルナンドの手が強く握られる。
今度は掲げる事無く、炎球を産み出すことも無くしかし開かれた掌には炎の棘があった。
炎球を一々発生させるのは無駄な行為、一度実践してしまえば自分の能力なのだ、応用などいくらでもきくと言わんばかりのフェルナンド。
その証拠に掌の上にある棘は一本ではなく三本。
馬鹿げた圧縮率の炎の塊、棘が三本乗っており、それを指と指の間に挟みこみ、サラマにフェルナンドは対峙した。

「どの辺から・・・・・・　俺の能力にアタリをつけてたんだい？」

口を開いたサラマ、そして零れたのは疑問だった。
そうフェルナンドに問うた時点で、フェルナンドの予想は当たっていると言っている様なものではあるが、今の彼にそれは重要ではない。
知りたいのはこの男がどこから見抜いていたのか、という事。
知ったとて無意味ではあるが、それでも知りたいと、知る事がこの

男の”底”を知ることに繋がるような気が彼にはしていた。

「テメェが最初に炎を喰った時だ。炎が喰えるなら何故俺が解放した時にそうしない、ってな。なにせ俺は炎の塊みてぇなもんだ、なら何故喰わない、何度も接近してきたってぇのに何故喰わない、何故炎球を投げるまで喰わないのかってなぁ。」

「なら・・・何度も炎を投げつけたのは・・・・・・」

「無理矢理喰わせれば破裂するのか、とも思ったんでな。結果としては失敗だったが、存外面白い事になったのは重畳だったぜ。楽しめたから・・・な。」

出鱈目、サラマの脳裏にそんな言葉が浮かぶ。
殆ど始めからこの男はサラマの能力にアタリをつけていた。
確信ではない、しかし疑問を挟む余地は十分にあったと、そしてそれを捨て去らず思考し戦っていたのだ。
フェルナンドからしてみれば炎球の乱打も一つの可能性を潰す作業、霊圧を喰う、というのならば食わせ続ければ限界が訪れ、そのまま限界を超えさせれば爆ぜるのではないか、という事の確認に過ぎなかった。
実際サラマは無闇矢鱈に喰らうことはせず、御しきれるだけのものしか喰らわなかったためそうはならなかったが、自分の不利を呼び込む結果を残す可能性があるにも拘らず、躊躇無くそれを実行するフェルナンドの潔さ。
そしてその呼び込んだ不利すら再び自らの力で凌駕してしまう大胆さ、度量、格の違い。

「おっかないニイサンだ・・・・・　化物みたいな気、ふざけた霊圧、馬鹿げた炎、そのうえコッチの事はお見通し・・・か。底知れない御人だねぇ・・・・・・」

「ハッ！　底なんて無ぇんだよ・・・・・・・」

「ケッケケケ。　違いない。　アンタに底は無いのかもしれない、抗ったところでただ深くに呑まれて消えるだけ・・・ってか。」

どこか吹っ切れた様子のサラマ。
勝てない。
いつからか彼の中に芽生えていたそんな想い。
それは実力か、或いは別に理由があるのか、ただサラマには今、フェルナンドに自分が勝る姿は思い描くことが出来なかった。
始めから無理な話ではあった、適当に切上げてしまうというてもあった、しかし、対峙してみて本気で戦いたいと思わされた。
爪は届かず、牙は届かず、炎を喰らってもなお届かず、しかし悔しさは無い。
全てを出し切った、その全てをこの男は受けきり、その上で自分の遥か上を悠々と飛んでいたのだ。

サラマが背負っていた赤紫の霊圧が揺れ、そして消えていく。
それ以外の彼が放っていた霊圧も全て、戦いの気配を微塵も残さず治まっていく。
怪訝な表情を浮かべそれを見るフェルナンドを他所に、サラマは両の手を高く上げると高らかに宣言した。

「俺、降参するわ。　ニイサンみたいな化物の相手は俺じゃぁつとまらないし、割にもあわねぇよ。やめやめ～～。」

その後に訪れたのはなんとも気まずい沈黙。
ほんの数瞬前まで命がけの戦いをしていた片方が、その全てを放り出して降参すると言い出したのだ。
如何にフェルナンドとて呆気にとられずにはいられないだろう。
なにかの策か、とも思われるサラマの行動であったが纏う雰囲気、なにより仮面の奥の瞳が彼の言葉が真実である事を伺わせる様に疲れきったものだったのが決定打となった。

「テメェ・・・・・　ふざけてんのか？」

「いやいや、コッチは大真面目さね。　中級大虚の俺じゃぁ正直端から勝てる訳無いって事。能力の相性ったってそんなもんで覆るほどニイサンが弱い訳無ぇし、事実殺す気でかかってまともに攻撃の一つも入れられないんじゃ話しにならんでしょうが。頑張ってみてもこんなもんさ、人生気合と勢いだけじゃ乗り切れんって事さね。」

若干の怒気を孕んだフェルナンドの声、しかしサラマは飄々と、上げた両手を器用に振りながらそれに対する。

勝つ気ではいた、殺す心算でかかった、しかし倒せず、殺せず、まともな攻撃一つ入れていない。
肉体の差か、能力の差か、あるいはそれ以前のもっと根源的な部分によるものか、なんにせよ勝てないと完全に悟ったからには戦う意味が最早サラマには無い、ということだろう。
戦士として通用するか否か、という点では確かに最後までいってみたいという気はあったが、今はまだ死ねない理由が彼にはあった。

「・・・・・チッ！　馬鹿らしい・・・・・興が削がれた。
殺し合いの一歩手前、って事で今回は殺さないでいてやるよ。そもそも藍染の頼み事とやらはもう済んだ、その後の事でとやかく言うほど小さい男でもないだろうし・・・なぁ。」

言うなりフェルナンドの炎が一箇所へと急速に収束する。
身体を覆うかのようだった炎、立ち昇る紅い霊圧も全てが収束し、そして出来上がった短めの鍔の無い斬魄刀を握るとフェルナンドはそれを腰の後ろの鞘へと納めた。
それは完全な戦いの終わりを意味する。
解放を解き、再刀剣化した力の核を納めたフェルナンド。
彼という人物からしてみればいやにアッサリとした引き際な気もする。
だが元々乗り気ではない今回の殲滅任務、任務というものの内容を考えれば既に砂漠に降り立った時点で完遂しており、その後のサラマとの戦闘は座興の部類に入るもの。
やや本気になりはしたが、それでも彼の飢えを満たすには些か足りない戦闘であったのもまた事実。
能力の開発、という点で見れば利はあったものであり、更に言えばこの飄々としたふざけた中級大虚は彼の中で”悪くない”部類に入

る者であったため、といった所か。

「ケッケケケ。　これで一件落着ってね。　あ～ぁシンドイ、もう当分ニイサンと戦るのは御免だぜ。」

「そうかよ。　・・・・・あぁそうだ、ひとつ忘れてた。」

「ん？　どうかしたかい？　ニイサン。」

ドスンと尻餅をつくようにして座り込むサラマ。
実際それが限界だったのだろう、如何にフェルナンドの霊圧を吸収していたといっても身体は中級大虚、破面との戦闘にそう長く耐えられる筈も無いのだ。
そうして座り込むサラマに近付くのはフェルナンド。
忘れていた、という言葉を吐きながら近付く彼をサラマは特に警戒する風も無く迎える。

それは油断といっては言いすぎであり、しかし緩みではあっただろう。
近付いて来たフェルナンドの片足がまるで掻き消えるようにしてサラマの視界からなくなる。
ついで襲ったのは頭部に奔る尋常ではない衝撃、力を抜き、気を抜いていたサラマには対抗することは出来ず、備えていたわけでもない身体はもろにそれを喰らってしまった。
頭部から吹き飛ばされるようにしてそれに追従するサラマの身体。
砂漠と平行に移動し、飛んでいく彼はその進行方向にある砂丘へと直撃した。
全てはフェルナンドが放った一撃の蹴りによって。

「そいつでチャラだ、いろいろと・・・なぁ。」

それだけ言い残し砂漠を去るフェルナンド。
いろいろに含まれるのは何であったのかは判らない。
ただ思い当たる節のある者には判る、という類の事だろう。
例えばたった今、頭を蹴りぬかれ砂漠に突っ伏している者などは。

「ケッ、ケケ・・・　化物め・・・・・・やっぱり、割に合わない・・・ぜ・・・・・・・」

それだけ呟くとサラマはその意識を手放した。

―――――――――――

暗い廊下、明かりはポツポツと灯るのみで全てを照らすには至らない。
その廊下に響くのは靴音。
数は二つ、どちらも同じ方向へと進み、しかし並び立つのではなく片方がもう片方の後ろに続く形のようだった。

「よかったのかい？」

先行する靴音の主がそう呟く。
暗い廊下でその表情はわからずとも、声色はどこか見透かし、笑みを浮かべている様子。
声色から男であり、雰囲気は”上”に立つものといった様子だった。

「何の事です？」

後ろに続いていた靴音の主は、呟かれた声にそう応えた。
此方の声も男のようで、声が聞こえたのは最初に声を発した方よりも上の位置から、頭一つ分ほど抜きん出ているのか、後ろに続く方

は長身、というより巨躯と伺える。
その返事に「フフッ」と小さく笑うのは先行する男。

「せっかく野に出たというのに、戻ってきてしまってよかったのか・・・・・と訊いた心算だったのだがね。　言葉とは難しいものだ・・・・・・」

「あぁ、そういうことですかい。　別に構いやしませんよ、野にいるより此処に居た方が今は何かと面白そうだ、ってだけの話でさぁ。」

互いに淀みなく進む二つの靴音。
先に見える出口まではもう暫くあり、この語らいももう少し続きそうであった。
明かりの傍を通り過ぎた靴音の二人。
照らし出されたのは茶色の髪とついで黒髪、そのどちらも口元には笑みを浮かべていた。

「キミならば最上級大虚（ヴァストローデ）にも至れる器だと、私は考えていたのだが・・・・・少し残念だよ。」

「そいつはどうも。　それなら仮面を半ば叩き割っちまったあの人に、文句言ってもらえますかい？まぁどっちにしろ俺じゃぁ最上級は無理だったでしょうが・・・ね。」

「ほぅ・・・・・　殊勝な事だね、参考までに聞かせてもらえるかな？キミが至れない理由・・・というものを。」

互い笑みを浮かべる茶髪と黒髪の男。
だがどちらも互いを見てはいない、一人は遥か先を、もう一人は出口の先を。
会話が噛みあっているのがある種不思議ですらあるその二人。
茶髪の男は黒髪の男が言った言葉に興味を抱いたのか、理由を問う。
参考までに、暇潰しに、座興の類として求められるそれに、黒髪の男は別段嫌がる様子もなく答えた。

「中級と最上級を分ける明確な理由なんて特に無いとは思いますがね。ただ・・・俺があの人を見て思ったのは・・・・・・”欲”ですよ。それもその欲以外全て捨てたっていい、っていうとびっきりの”我欲”。そういうぶっ壊れた部分が分れ目なんじゃないかって、俺はあそこまで貪欲にはなれそうに無いもんで・・・・・・まぁ、合ってるかどうかなんて判りませんがね。」

「フフッ・・・なるほど、思いのほか興味深い・・・・・・」

進む二人、出口はもう近い。
再び照らされた二人の内、先行する茶色の髪の男の顔には張り付いたような黒い笑みが浮かんでいた。
その笑みは暗く、何処までも、何もかもを飲み込んでいく混沌に見える。
軽やかに語る茶髪の男の声とは異なる様子で、それがまた不気味さを煽っていた。

「何にせよ今回は良くやってくれた。　キミのおかげで炎熱系の能力に対する有効な対処法の確立と、その実用化に措ける問題点、さらに最高クラスのサンプルを入手できたよ。私も彼を飼い慣らした甲斐があった・・・というものだ。惜しむらくはキミの能力では対抗するには至らない、という点だろうね。」

「そりゃ俺にだってよく判ってますよ。　相性がいい、ってだけでそれ様の能力じゃ無いもんでね。あんなもんは始めから使えないようにしちまうか、底なしの胃袋かなんかをもって来なけりゃ相手になりませんわな。」

出口間近で二人は一度立ち止まった。
正確には先行する茶髪の男が止まったため、黒髪の男も止まったということなのだが。
茶髪の男は振り返ると黒髪の男を見上げる。
見上げられているというのに黒髪の男は、まるで自分が見下されているような圧迫感をその男から感じていた。
暗い笑み、そしてそれより尚暗い瞳。
背筋が冷える錯覚を覚える黒髪の男、戦いの中で感じる恐怖よりも何よりも、その瞳から感じる薄ら寒い恐怖の方が勝っているとさえ彼には思えた。

「感謝しているよ、サラマ。　キミのおかげで私の計画は全て順調に進んだといっていい。」

「そいつはどうも、藍染様。　」

「それでは行こうか、始まりを告げるために・・・ね。」

サラマ、サラマ・R・アルゴス。
それが後ろに続いていた黒髪の男の名。
正確には破面化したサラマ・R・アルゴスだった。
そして彼を従え、そして今もまた存在感によって彼を恐怖させている男は言わずともかな藍染惣右介（あいぜんそうすけ）。
全ては、そう全てはやはりこの男の掌の上。
何者も抗えない絶対王の掌の上という事なのか。

再び踵を返し、暗い廊下から光が照らすその先へと歩を進める藍染。
その後に続くようにしてサラマもまた、光の下に歩を進める。

「やっぱり、割に合わねぇなぁ・・・・・・」

そんな誰に当てるでもない呟きを、暗い廊下に残しながら・・・・・・

橙の髪
黒い衣
映る姿は
敵に能(あた)わず

ＢＬＥＡＣＨ　Ｅｌ　ｆｕｅｇｏ　ｎｏ　ｓｅ　ａｐａｇａ．６２（後書き）

サラマ篇（？）終了です。

なんとなく伸びそうな雰囲気でしたが、無理やり一話に押し込めて見ましたｗ

大方の皆さんが思っていた通り、全ては口先の魔術師の計というｗ
サラマすら・・・ね。

サラマの能力の詳細はまた作品の中で語ろうかと思います。
フェルナンドの推理も合っている様で微妙に違ってるんですけどね。

飄々とした人物、というのがサラマの大前提。
個人的にはファン・ガンマ・ビゼンのペテン具合とか言葉の選び方が大好きなわけですけど
それだともう主人公クラスなので、そこまではいってないと思います。

なんにせよ予告でも原作を匂わせてみました。
一体原作主人公はあとどれくらいで登場するのか・・・・・・
気長にお待ちください。

それと、心配ないとは思いますが、作者はＢＬＥＡＣＨで嫌いなキャラはおりません。
故にアンチやらにはしる事はありえませんのであしからず。
要らぬ心配とは思いましたが、今回の予告はそれを匂わせてしまいそうでしたので
参考ばかりに、と。

白い壁と黒い床、その中央にはこちらも黒塗りで設えられた長机、それを囲むようにして背もたれの長い椅子が十一脚並んでいた。
そこは虚夜宮の頂点達、十刃（エスパーダ）のみが座すことを許された椅子。
特に指定された席は無く、それ故位階をそこから推し量ることは出来ないがしかし、彼らが皆尋常ならざる力を持ち、彼等以外の全てに対する脅威であることだけは変らなかった。

今、その部屋にある椅子に座っているのは二人、向かい合うわけでも、ましてや隣同士という訳でもなく。
長机を挟んで座っている人物は勿論二人とも十刃。
黒髪に涙の後のような緑色の仮面紋（エスティグマ）、角の生えた兜の仮面の名残と首元までしっかりと締められたコート型の白い死覇装を纏い、目を閉じて座るその男は第４十刃（クアトロ・エスパーダ）ウルキオラ・シファー。
もう一人は金色の髪に額には紅い菱形の仮面紋、左目を縁取る仮面の名残を持ち死覇装の袖をまくり、ファスナーを腹の辺りまで開け胸元を肌蹴させ、口元に皮肉気な笑みを浮かべた男、第７十刃（セプティマ・エスパーダ）フェルナンド・アルディエンデ。

この場所に二人が共にいること、それは何も偶然という訳ではない。
藍染惣右介。

言ってしまえば全てはこの一人の男に起因する。
フェルナンドは藍染によって半ば嵌められる形で頼まれた殲滅任務、その事後報告。
といってもその任務が彼の手によって完遂されてより既に数日が過ぎており、報告と呼ぶには些か遅すぎる部分もあったが、藍染が今まで何も言ってこないことをいい事に別段何もしなかったフェルナンド。
しかし、遂に藍染より参集してくれという知らせが届き、面倒ながらもこれで終わりだとこの場に来たという次第。
対してウルキオラもまた藍染によってこの場に呼び出されていたが、フェルナンドとは違い藍染からの呼び出しだ、という理由だけで何を言うでもなくこの場へと参集していた。

面倒ごとを済ませたいだけのフェルナンドと、疑うことなき忠誠を見せるウルキオラ。
あり方、そして考え方もおそらくは別方向を向いているであろう二人。
何一つ求めないウルキオラと唯一つを求めるフェルナンド、僅かな違いであるがしかし決定的な違いを抱える二人。
互い会話をするでもなく、ただ時は過ぎ続ける。
だがそれはこの二人にとって苦痛ではない、それはどちらも語らうことなど求めていないから。
相容れるものの無い二人が口を開けばそれは衝突の始まり、そして彼等の衝突とは即ち殺し合いであり、フェルナンドとしてはそれもまた良しと言ったものだろうが、ウルキオラにとっては瑣末なことでしかない。

そう、戦うことも、フェルナンドという存在自体も。

「待たせてしまったようだね、二人とも。」

無言の空間、その静寂の空気はその声で破られた。
十段ほどの階段、その上にあった白い両開きの扉から現われたのは破面の王、藍染惣右介。
どこか芝居がかった声でそう告げる藍染は、その後ろに一人の破面を伴っていた。
黒い髪に黒い瞳、右眼の下辺りに僅かに残った仮面の名残と、左の頬には切りつけられた傷跡のような仮面紋。
巨躯と、それを覆う鎧のようなしなやかな筋肉が見て取れ、頑丈そうな印象。
口元には不敵な笑みが浮かび、その瞳は座す二人のうちの一方、フェルナンドの方を向いているような気がした。

二人のいる長机へと歩み寄る藍染。
そしてその周りに並ぶ背もたれの長い椅子、その中でも一等大きなそれに腰掛ける。
黒髪の男は椅子に掛ける事無く藍染の座る椅子の斜め後ろに控えるようにして立っていた。

「御用件は何でしょうか？　藍染様。」

藍染が座り一息つくなりウルキオラはそう切り出した。
彼は余り回りまわった物言いをしない。

まるで機械の様に淡々と、与えられた命令だけを完全に完遂する。
そこに自身の思考や感情を挟む事は無く、ただ藍染の命と望む結果だけを奉じるのだ。
故に語らう必要を彼は見出さない、必要なのは主の命のみ、それ以外は瑣末であると。

「そう慌てる事もないだろう、ウルキオラ。　先ずは紅茶でもどうだい？無論キミも・・・ね、フェルナンド。」

「・・・・・・・・・」

藍染の答えにウルキオラは再びその口を噤んだ。
別にウルキオラに紅茶を嗜む習慣があるわけではない。
だが主である藍染が慌てるな、というのならば自分はただ言葉を待つのみとそれ以上の言及を避けただけ。
能動的ではない、受動的でしかしそれを寸分違わず完遂するのがこの男なのだ。

「要らねぇよ、そんなもん。　俺が此処に来たのは面倒事を終わらせるためだけだ・・・・・・」

両の腕を組み、椅子に腰掛けていたフェルナンド。
視線すら藍染には向けず、藍染の申し出を一刀の下に切り捨てた彼。
紅茶、というよりは藍染の勿体つけたかのような演出が気に入らないのだろうか、そしてウルキオラとは違い藍染の言葉を待つ、などという事をする心算も無い彼。

あくまで能動的、ともすれば我が強すぎる感もあるがそうでもなければこの虚圏で生き残れるはずもない、という事か。

「テメェから頼まれた任務とやらは終了した。あれで逆らってくる気概のあるようなのは居無ぇだろうさ。」

完結で明瞭な報告、しかしそこに嘘は何一つ無い。
敵として何一つを満たしていなかった彼の地の虚達。
殺す価値すら見出せぬ彼らをフェルナンドはその”気”をもって征し、気概の事如くを叩き折った。
怯えしか写さなくなった彼等の瞳を見る限りもう二度と逆らう事は考えられない、と。

「そうか・・・・・・　殲滅任務、とは言ったものの殺さずとも構わないと言ったのも私だ。その口ぶりから気概は折ってくれた様子。フフッ、今回の頼み事はキミにとっては少々簡単すぎたかな？」

「まぁ・・・な。　測るにはもう少し足りなかっただろうさ。」

藍染の言葉、そしてそれに対するフェルナンドの答え。
どちらも互いの腹積もりを理解した上でそれに言及する事はない。
今回に限って言えばどちらかと言えばフェルナンドの負けである事には変らないのだ。
言葉巧みに方向を決められ、赴いた先では奇跡じみた能力を持った相手が待っている。
偶然にしては出来すぎの出会い、そしてそれから答えを導き出す事

はそれほど難しい事ではない。
彼の勝利すら予定調和の一部であり、気に入らないながらもその流れに乗らざるをえなかった時点でフェルナンドの敗北なのだ。

笑みを深める藍染と、藍染を直視しないながらも皮肉を飛ばすフェルナンド。
そのやり取りを藍染の後ろに控えた黒髪の巨躯は、堪えるようにクックッと笑ってみていた。

（足りなかった・・・か。　まぁ足りないというよりはアンタが化物過ぎた、って方が正確なんだが・・・ねぇ。）

内心零す黒髪の男、足りなかった、という部分はおそらく自分の事が当てはまることを理解しているだけに苦笑が漏れる。
だがそれでも悔しさは無かった。
元々あの時点で自分が彼に勝てる要素など探すほうが難しいぐらいのもの、予定調和である以前に負ける事は自然の理にすら近い。
それでも足りなかった、の前に”もう少し”という言葉がついているだけ救いがある、とすら思えてならない彼。
取るに足らない、よりはまぁ楽しめたくらいに思ってもらっていた方が面目は立つ、というものだろう。

もっとも、今や同じ土俵にたったからにはそう簡単に”足りない“と言わせる心算も無いわけではあるが。

「それで？　テメェは何でこんな所に居やがるんだ、トカゲ。」

その言葉に驚いたのは黒髪の男だった。
此方に一瞥もくれる事無く、しかし彼の男は見抜いていたと。
姿は変った、大虚から破面となって霊圧にも変化はあった、だがこの男はなんなくそれを見抜いたと。
自分が、自分が彼と戦い敗れた者、サラマ・R・アルゴスであると。

「気が付いていたのかい？　フェルナンド。」

「当たり前だ。　一度戦った相手の霊圧だぞ？　姿（ナリ）が変ろうが霊圧の感触が変ろうが、それで気が付かないほど阿呆になった覚えは無ぇんでな。」

笑みを深める藍染にフェルナンドは相変わらず視線を向けず答える。
姿が変った、破面化によって霊圧は大虚のそれとは比べるべくも無くなった、だがしかし、それだけで見失う事などないと。
一度戦い、その霊圧をその身で感じたからには如何に感触は違おうともその根幹を忘れるわけが無いとフェルナンドは言うのだ。

「ケケ。　それが判ってて”足りない”、と言っちまう辺りがニイサンらしいねぇ。」

鼻の頭を掻きながら声を発したサラマ。
巨躯ではあるがその仕草や言葉からはどこか軽やかな印象を受ける。
元々彼が持つ気質がそうさせるのか、それともそういった人物を演じているのか、どちらにせよその気安さは不快なものではないように思えた。

「ハッ！　足り無ぇものに足り無ぇと言って何が悪い。それにしてもこれまた随分と都合よく破面化したもんだな・・・えぇ？」

サラマの僅かばかりの皮肉も、フェルナンドはさも当然といった風で切り返す。
そしてフェルナンドから零れる言葉は、既に判りきっていた藍染とサラマの繋がりへと。
フェルナンドがサラマを下してよりそれ程の日数は経っておらず、その中でサラマが破面化する、というのは余りにも都合が良すぎるというフェルナンド。
だがその問いは結局は通過儀礼であり、互いに判り切ってはいるがそれでも知らぬ顔をするのが藍染惣右介の手管である。

「フフッ。　結果はどうあれキミを相手に彼は生き残ったそうじゃないか。中級大虚でその実力、野に置いておくには惜しい人材だと思ってね。」

「ついでに言えばニイサンが俺の面を割ってくれちまったもんだから、俺には破面化するか死ぬかの二択しか残ってなかった訳さ。まぁ死ぬのはまだ御免なんでねぇ。　此方サンの申し出を受けたわけ

よ。」

互いの言葉から面識は浅い、という事を匂わせる二人。
結局そんなものは無意味なのかもしれないが、様式美というものはなんにでも存在し、今この場で必要なのは自分達は初対面に等しいという見た目であった。
もっとも藍染、そしてサラマからしてもこの破面化は予定外。
破面とは大虚よりも高い完成度を持つ、そしてその完成度とは手を加える余地が少ない事を指す。
完成されたものに手を加える事は時として蛇足となり、完成度を下げる結果を残す可能性があり、破面化後での成長はあったとしても外部的調整は意味を成さないのだ。

藍染は彼の目的のため、そしてその目的のための手段として”ある能力”を欲していた。
サラマはその能力を体現できる可能性を持っており、それ故に今回フェルナンドと戦わせることを決めたのである。
そしてサラマの能力は藍染が求めるそれに一定の効果を上げ、そこから派生する様々な問題点、そして改善点を彼に示した。
しかし肝心のサラマは戦いの後仮面を割られてしまう。

仮面を割られる、という事は虚、そして大虚に至るまで全てに共通する忌み事である。
彼等の仮面とは人として”こころ”の中心を失い、そこに喪失の孔を開け、剥き出しとなった本能を覆い隠すという意味合いがある。
その仮面が割れてしまえば本能は剥き出しとなり、剥き出しとなった本能はせっかく呼び戻した理性をいとも簡単に喰い尽くし、彼らをただの獣以下に貶める。
そこから再び理性を呼び戻す事は不可能に近く、それ故仮面を割ら

れたサラマに残されている道は実質一つだけ、破面化以外なかったのだ。

サラマという能力の体現者を失う結果となった藍染。
彼とすれば予想以上の被害、とも言えるものだがしかし、彼は今、天運すら味方につけているのか。
サラマを失おうとも彼には今や何の痛手すらない。
必要な情報はえた、能力の基礎的な研究も済んでいる、後はその改造に耐えられる器を用意するだけでありそれは既に済んでいるのだ。

ネロ・マリグノ・クリーメンが創り出した、人の業を背負う少年として。

「面が割れただけで済んだならもうけものだと思うがな。」

「ケッケケ。　まぁ・・・ね。　これでニイサンとは同じ土俵・・・って事になるわけだ。」

「ほぅ・・・・・・　それは俺と決着がつけたい、って事か?」

自分がサラマの面を割ったにも拘らず、何一つ悪びれた様子は無いフェルナンド。
サラマの方も別にそれを理由に彼を恨んでいるという訳でもなく、どちらかと言えばもうけもの、といった程度。
そしてサラマの同じ破面である、という発言はフェルナンドの琴線に触れたのか、視線を向けなかったフェルナンドは遂にそん視線をサラマへと向ける。
力強い視線がサラマを射抜き、その視線を受けながらもサラマは不

敵な笑みを浮かべしかし、あの時と同じように両手を挙げた。

「冗談さ。　言っただろう？　ニイサンとはもう当分戦りたくない・・・ってね。」

フルフルと首を振り、降参といった様子のサラマ。
なんとも毒気を抜かれるその仕草に、フェルナンドも視線に込める力を緩める。

だが彼は聞き逃さなかった、サラマは当分戦りたくないと言い、それは二度と戦りたくないとは意味合いが違う、という事を。

「フェルナンド、サラマ、随分とキミ達は気が合うようだね。そこでどうだろう？　フェルナンド、サラマをキミの・・・従属官にしてみてはどうだい？」

二人の会話をその間で聞いていた藍染、その藍染から放たれた言葉は唐突なものだった。
サラマをフェルナンドの従属官に。
無理な話ではない、フェルナンドは今や十刃、従属官として下位の破面をその支配下に置く事になんら不思議は無い。
が、その提案が出されたのが藍染というのが問題である。
この男が自分に何の利益も無い事を提示するだろうか？
答えは否である、その言葉の裏には何かしら思惑があると考えるほうが自然であり、あながち今回も間違ってはいないだろう。

もっとも、その思惑以前にフェルナンドの答えなど決まっていたのだが。

「お断りだ。」

「・・・・・・でしょうね。」

当然のようにフェルナンドの答えは拒絶。
そしてそれに続くように発せられたサラマの言葉も、そうだと思っていた、という感情を滲ませていた。

「悪い話ではない・・・と思うが。　キミもサラマの力は判っているだろう？」

「確かに・・・な。　だが従属官なんてもん俺には必要ない、そんなもんが居れば戦いが”薄まる”。」

薄まる。
それは感覚的な部分に過ぎないが、フェルナンドにとってはそれこそ重要なもの。
求めるものは命削る戦いの先にある、と考えるフェルナンドにとって戦いは常に一人だけのもの。
傍に自分以外の者などいらず、余計な者の存在は濃密な戦いを薄くさせる要因でしかないのだろう。

「だから言ったでしょう？　藍染様。　この人が首を縦に振るわけないってね。―（そもそもこの人に”首輪”嵌めようなんてのが、そもそも間違ってんですよ・・・・・・）」

フェルナンドを援護するようなサラマ。
フェルナンドが従属官などというものを好むとも求めるとも思っていなかった彼にとって、フェルナンドの発言はいわば当然のものであり、サラマを首輪とし、そして”良くなる鈴”として用いようとしていた藍染からしてみれば、その考えは鈴の付いた首輪によって妨げられたといってもよかった。
かといってサラマがフェルナンドから離れる、という事が決まったわけではないのだが。

「・・・・・仕方が無い、従属官を選ぶのは十刃の権利、それを無理強いする事はしないよ。」

僅かな間を置き、しかしその笑みは僅かも崩れる事無く藍染はアッサリと引き下がった。
常ならば詐術と話術によって巧みに思考を誘導し、彼の思い描く結果を手に入れる藍染らしからぬほどの引き際。
逆にそれが不安を煽るような引き際ではあるが、今はそれを考えるときでもなく。
この話は終わりだといわんばかりに藍染はフェルナンドではないもう一方、ウルキオラへとその視線を向けた。

「待たせてしまったね、ウルキオラ。」

「いえ・・・・・・」

にこやかな藍染と表情というものを感じさせないウルキオラ。
まるで鋼鉄で形作られ冷たさしか感じないその顔、白というよりもやや灰色よりのその肌が無機質さを際立たせる彼。
鷹揚など無いその声には何一つ感情は浮かんでいなかった。

「今日キミを呼んだのは他でもない、ある人物を君の眼で査定してもらいたいんだ・・・・・あぁ、フェルナンドも見ていくといい、これがその人物だよ・・・・・」

藍染の言葉が終わると、彼らが囲む黒塗りの長机の中心が円形に凹み、凹んだ部分が螺旋状に開くとそこから映像が浮かび上がる。
見える風景は虚圏でも虚夜宮でもなく、和風のつくりの建物と黒い着物を纏い刀を振るう一団、そして映像が主立って捉えているのは彼らと同じように黒い着物を纏い、しかし誰の眼にも鮮やかな橙色の髪をした一人の青年だった。

「彼の名は『黒崎一護（くろさきいちご）』、死神代行と呼ばれる死神が人間にその能力を譲渡して死神の力を得た者だ。この映像は私が尸魂界において

崩玉を得る為に動いた際、僅かばかりの犠牲として死ぬ筈だった死神の少女を助けようと現世から乗り込んできた彼らを捉えた映像だよ。」

橙色の髪の少年、名を黒崎一護。
身の丈ほどの大刀、鍔も柄も無い出刃包丁のようなそれを背負った少年は多くの死神達と戦い、そして戦いを経る事に急速にその戦闘力を増していくのが映像からも見て取れた。
霊圧、体捌き、剣術、そのどれもが荒削りで我流であるがそれでも必死で戦う少年の姿。

が、彼等破面にそんな必死さなどは何一つ響く事はない。

「この塵を・・・ですか？」

「確かにな、話にならねぇぞ。」

居合わせた十刃の評価は評価にも値し無いようなものだった。
この程度の人間をどう査定すればいいのか、既に結果など見えていると言いたげなウルキオラ。
疑問を挟まない彼にすらそう思わせるほど、ウルキオラにその橙色の少年は取るに足らない存在に見えた。
それはフェルナンドも同様で、態々呼び止めてまで見せる価値がその映像には何一つないとすら彼に思わせる代物。
死神の程度もこれならば自分の求めるような戦いは彼らには期待できないと、評価せざるを得ないものだった。

「そうだね、この彼ではキミ達がそう思うのも無理は無い。だがここからが面白いところなんだよ・・・・・・」

最低の評価を下す二人に対し、藍染は意味深な笑みを浮かべる。
その藍染の言葉に呼応するように場面は切り立った崖の上に、橙色の髪の少年はそこで桃色の青年が優位、血塗れの少年はしかし諦めず立ち上がりそして強大な霊圧を放ち爆発させた。
戦況は圧倒的に桃色の青年が優位、血塗れの少年はしかし諦めず立ち上がりそして強大な霊圧を放ち爆発させた。
立ち昇る砂煙、それが渦を巻くように収束し晴れる。
そしてその煙が晴れた場所に立っていたのは橙色の少年、姿の変った少年だった。
手に握る刀は柄尻に鎖を下げ卍型の鍔、身の丈ほどの長さの漆黒の刀となり、身に纏うのは黒いロングコートの様に変化した死覇装。
そしてその少年はそこから圧倒的な速力をもって桃色の青年を凌駕していく。

「『卍解（ばんかい）』。　死神が用いる斬魄刀戦術最終奥義、本来習得に最低でも１０年以上の時を必要とするそれを、この少年はたったの３日で習得した。恐るべき成長率だとは思わないかい？」

画面では少年が青年を圧倒し続け、青年が操っていた桃色の波を解き、彼らを覆うように剣の葬列を産み出していた。
卍解と呼ばれる死神達の奥義、それをたった３日で習得するという離れ業。
”才”がある、という言葉だけでは片付けられない出来事なのだろう、藍染の眼には珍しく喜色が浮かんでいた。

「ではその成長率が、俺にこの塵を査定させる理由である・・・と。」

ウルキオラが藍染の言わんとする事を察するように語る。
成長率、才ある死神に比べてその成長率は尋常ではない。
故に、もしこのまま成長が続くような事があればこの少年は藍染の前に立ちはだかる、という可能性を持っていると。
その可能性があるのかどうかを査定せよと、藍染は言っているのだろうとウルキオラは理解していた。

「確かにそれもある・・・が、本当に見せたいのはこの後なんだよ。」

映像に映る戦況は少年が圧しているものから再び拮抗へと移行していった。
第三者の目線から見るそれは戦況をよりよく見渡せる、それは少年の速力が明らかに遅くなっていく事を如実に顕していた。
次第追いつかれ、そして追い越され反応できず、それでも力を行使する少年は遂にその足を止めてしまう。
そこから訪れるのは終わりの瞬間だろう、誰もがそう思い、藍染が本当に見せたいものの真意を測りかねる中、それは起こった。

「　！　」

「ハッ！　なるほど・・・・・・」

「こいつはまた・・・・・・」

ウルキオラとフェルナンド、そして盗み見るようにして映像を見ていたサラマからそれぞれ零れるもの。

その映像に映った少年黒崎一護、振り下ろされた桃色の青年の刀を素手で握り締める彼が俯くその顔を上げた時、彼の顔には舞い違いなく虚の仮面が張り付いていた。

顔の四分の一を覆い隠すようなそれは辺りの霊子を集め、尚も覆いつくさんと増殖する。

その後、黒い霊圧を放ちながら仮面を着けた橙色の少年黒崎一護は、圧倒的な戦力を持って再び桃色の青年を圧倒する。

だがそれは”人”としてではなく明らかに化物、”虚”としての戦い方であり異様でしかなかった。

「どうだい？　この少年、黒崎一護は片鱗ではあるが『虚化（ホロウ）』というものを見せたのだよ。私も１００年程前にキミ達破面を産み出す過程として、”死神の虚化”を研究した時期があった。結果として出来たのは不様な失敗作だけだったがね・・・・・だが彼は独力で虚化という魂の限界を超えるすべを見出した、非常に興味深い個体なのさ。」

映像が終わり藍染が彼らにそれを見せた理由を語る。

虚化、と呼ばれる魂の限界を超える方法、黒崎一護という少年はその成長率も然ることながら更に上の力すら手に入れようとしているのだと。

そして死神よりも虚、そして破面に近い存在である彼をフェルナンドらに見せたのだ。
揺れ、危ういこの少年を。

「ウルキオラ、キミに頼みたいのはこの少年の査定。キミがどう思ったか、で構わないよ。　この少年をその眼で見て、霊圧を感じ、どれだけ成長しているか、そしてキミがどう思ったかを報告してくれ。だがもし、キミから見てこの少年が我々の妨げとなると思ったそのときは殺して構わない。人選はキミに任せる、誰を連れて行っても構わないよ・・・・・無論、ここに居るフェルナンドでも・・・ね。」

「こんな塵が我等の妨げとなるとは思えません。が、御命令とあらば遂行します。この程度の任務、俺一人で十分かと。」

そう、藍染惣右介にとってこれは座興の部類に入るもの。
しかしただの座興ではなくそれなりに価値あるもの。
それ故にウルキオラに任せるのだ、私情というものを一切挟まず冷淡で客観的に物事を見、そして完璧な報告を可能とする彼に。
対してウルキオラは珍しくも自分の意見を述べていた。
藍染が気にかけるこの少年、確かに虚化と呼ばれる力の増大はあったがそれでも取るに足らない塵である事に変わりはないと。
塵がいくら力を付けようと元が塵である以上塵は塵のままであると。
だがそれでも命令は命令、そして命令は完遂されねばならず赴く事になんら不満など無い彼。
そしてウルキオラは立ち上がると藍染に軽く一礼しその場を去った。
すでにそこにいる必要はなく、果たすべきは命令の完遂であるというように。
何も映さぬその瞳に、橙の少年の姿を映すために。

「いいのかい？　フェルナンド。　キミも行って構わないんだよ？」

ウルキオラに続き、もはや何の用事もなくなったフェルナンドもまたその場を去ろうと立ち上がる。

だがその背にかけられたのは藍染の言葉、気にならないのか、行きたくば行くがいいとささやくそれをフェルナンドは一蹴する。

「興味が無ぇ。　ウルキオラの野郎が言った通りあのガキじゃ相手にならねぇよ、俺にも・・・あのウルキオラにもな。見る価値も無い様なガキ一匹の為に態々現世くんだりまで誰が行くかよ。」

それは歯牙にもかけぬ物言いだった。

役不足、全てはそこに集約される。

今のままのあの少年では戦ったところで結果など見えている、十回やろうが百回やろうが勝つのは自分だと。

そんなものに何の意味があるのか、勝利が見え透いた戦いに何の意味があるのか、命削る戦いは先など見えない。

先の見えぬ中勝利を信じ、確信へと変えて勝利するのが戦いである彼にとって、今の橙の少年、黒崎一護は取るに足らない存在でしかなかった。

「そうかな？　あの少年の成長率は異常だよ。もしかすればそう遠くない未来で彼はキミにも、そしてウルキオラにも追いつく可能性すらあると、私は思っている。」

「ハッ！　随分と甘い見通しだ、テメェらしくも無ぇ。あのガキに何を期待してるか知らねぇが、もしあのガキが俺の前に覚悟を持って立ったなら。その時は容赦なく・・・・・・潰すぜ？」

それだけ言うとフェルナンドはウルキオラとは違う扉からその場を後にした。
その背中から先の言葉は真実だろうことを物語ったまま。

「さってと、じゃぁ俺も行きますわ。」

フェルナンドが去って後、二度ほど首を鳴らすとサラマもまたその場から動き出す。
向かう先はフェルナンドが出たのと同じ扉、当然だ、彼はフェルナンドの後を追うのだから。

「サラマ、キミを信頼しない訳ではないが従属官の件、頼んでもいいんだね？」

僅かばかりの霊圧の解放と共に放たれる藍染の言葉がサラマへと降る。
藍染の思惑では先程の段階でサラマを従属官とする心算でいた。

しかし、その思惑はサラマ自身に潰されたと言って等しく、その責は当然負ってくれるのだろう？とその言葉は言外に語っている。良くなる鈴も抑える首輪も鳴らなければ、嵌められていなければ意味などないのだからと。

「だから言ったでしょう？　従属官なんてあの人は絶対作りゃしませんて。」

「・・・・・・ではどうする心算だい？」

また藍染の霊圧が強くサラマに圧し掛かる。
物事は全て己が掌中のうち、その上で己を謀る様な者を藍染は許さない。

それが自らが手塩にかけて”改造”した大虚であり、その中での唯一の成功例であったとしても。

「・・・やりようは何も従属官だけじゃない、って事ですよ。あの人たぶん押し付けられたりするのが邪魔なんですよ。それに”従属官”なんてお題目が付いちゃ余計嫌がるに決まってる。別に階級なんて要らないんですよ、あの人は・・・・・それと、いい加減霊圧納めてくれませんかねぇ、立ってるのもしんどいんですわ。」

従属官、名が付くそれはそのまま重さとなる。
そしてその重さを嫌うものが居るのもまた事実。
フェルナンドの場合十刃という名すら煩わしく思っているだけに、

その上従属官などというものを抱えてはそれこそ要らぬ荷物でしかない。
ならばどうするか、サラマの答えはなんとも単純なもの。
別に従属官である必要は無い、従属官として配下に加わる必要は無い、要は近くに居ればそれで良く、位階を用いる必要も無いと言うのだ。
そうして説明した最後に、どこか情けない声で霊圧を抑えてくれという辺りがなんとも彼らしく、締まらない三枚目な印象を与えるのだが。

「・・・・・フフッ、キミは面白い男だ。いいだろう、キミの思うとおりにするがいい。結果さえ出してくれれば私に不満など無いよ。」

発する霊圧を納め、藍染はその笑みを深めた。
サラマの方も大げさに息を漏らし、辛さをこれ見よがしに見せる。
そのご、そそくさとフェルナンドの後を追う様にその部屋を出て行くサラマ。
残された藍染は一人頬杖を付いて微笑む。

「私の前に障害など無い。　全ては私の掌の上、天に立つ私の思惑の内。残すは一つ、私の思い通りに彼が成長するか否か、その為の邪魔はされたくないのでね、キミには大人しくしていてもらうよ・・・・・フェルナンド。」

天に立つ男、藍染惣右介。
その思惑はいまだ遥か高き雲の上に・・・・・・・

従属官？

馬鹿言っちゃいけねぇ

俺は

アンタの

子分になりに来たんだぜ？

BLEACH El fuego no se apaga. 63（後書き）

まずは更新が1週間更新が遅れてしまい申し訳ない。

何とか書きあがりました。

従属官やら何やらと、そして遂に登場した原作主人公。
まぁ本人というか映像の中ですけどねｗ

実際あの頃の一護を見た所で、破面が脅威を感じる要素は無いと思う。
それでも救出後1月もしない内に渡り合えるようになってるあたり、流石は原作主人公、恐るべし。

それはそうと誰か破面篇の正確な時系列を教えて～。
潜入篇までは何とか追ってみたけどどうにも正確さに欠ける。
微妙な辺り（虚化習得後から織姫がハッチの結界に侵入するまでとか）は適当でいいんだろうか？

追記
ヤミーを共に現世へ連れて行く⇒ウルキオラ一人で行くに変更。

見上げるのはいつもと変らぬ偽りの空。
あてがわれた巨大な宮殿、ただ権力を主張するためだけに巨大化を辿ったかのようなその宮殿は彼にとっては過分でしかない。
積み重ねられた業(ごう)の宮殿、欲望の上塗りとも取れるその宮殿の新たな主となってしまった彼、背負う事は彼自身納得の事、しかしその欲望の連鎖に彼が連なる事はないだろう。
なぜなら彼に権力は無意味だから、そしてその権力を振るう事もまた彼は好まない故。

その巨大さこそが”力”の証明だなどという事は彼にとっては理解できない思考であり、本当ならこんな宮殿すら彼には必要ない。
背負うべき名は既にその背に刻まれている、そして背負う事もまた納得している。
それがあれば充分、そしてそれこそが証明でありそれさえあればいい。
宮殿に居るからではない、そこに居られる資格を彼自身が示した力によって得たことこそが重要。
そこに居らずとも、例えそこが無くとも彼はその称号を背負うに相応しく、異を唱える者は無い。

故にその宮殿は彼にとって不要に近いものであり、しかし誰よりも彼に相応しい場所である。

不要な宮殿、しかしながらもその屋上から眺める空は、偽りであっても彼には悪くないものであった。

「第七十刃様（セプティマ・エスパーダ）。」

「・・・・・なんだ・・・？」

屋上で空を見上げ横になっていた宮殿の主、フェルナンドに声がかかる。

藍染の宮殿、『奉王宮』に出向いた翌日、別段やることも無いフェルナンドは空を眺めていたのだ。

仰向けのままチラとフェルナンドが横を見ればそこには膝を付き、傅いて頭を垂れている者が一人。

細い縦縞がいくつも入った茶色の死覇装を身に纏うその人物は破面ではあるが、破面としては使えない者、『下官』であった。

破面ではあるが彼らは戦うことを前提としない破面。

姿形は人に近い、破面化後に人型を確実に取れるのは高位の大虚（メノス）のみであり、下位の大虚、さらに普通の虚と格が下がるにつれ破面化後も人よりは化生に近い外見となる。

そう考えると彼等下官は高位の大虚という事になるが、彼らは皆須らく下位のそれか只の虚が破面化したものだ。

では何故彼らが人型をとっているか、その理由は簡単、彼らは破面化前にそうなるように調整されているからだ。

戦闘能力よりも人型である、という事を優先して破面化されたのが

彼等下官。
化物として戦い、殺す事が日常であるこの虚圏で戦うことを求められもしない彼らは、破面という分類に入るのかどうかも怪しくある。
そんな彼等の存在理由は十刃（エスパーダ）、数字持ち（ヌメロス）といった戦闘用破面の補佐、補助である。
高位の大虚である戦闘用破面は皆、破面化後は人型となる、その身の回りを補佐するのに化物である虚の身体は不向き。
それゆえに同じ人型である、ということが優先され彼らは調整後、破面化されたのだ。
更に言えば下官とは消耗品としての側面が強く、広大な虚夜宮を管理するにはとにかく数が要る。
それならば虚圏に腐るほど居る虚を調整したほうが、高位で人型になるものを連れてくるより手間がないといったところか。
閑話休題、そうした大勢の中の一人である下官はフェルナンドの方を見ることもなく、頭を垂れたまま用件を口にした。
「第3十刃（トレス・エスパーダ）様が従属官の方々と共にお越しです。」
「ハリベルが・・・かよ。　用件は何だ？」
「存じ上げません。　第3十刃様が第7十刃様を呼べとの事でしたので、お呼びに参った次第です。」
あくまでも事務的にフェルナンドに告げられたのは、彼の宮殿『第7宮（セプティマ・パラシオ）』に第3十刃、ティア・ハリベルがその従属官達を伴って来ている、という事だった。
予想などつく筈もない突然の来訪、それを伝えた下官にハリベルの

用向きは何だと問うてみても答えは知らぬの一言だけ。
彼らは皆あくまで事務的に仕事をこなす、そう調整されたのかはたまた彼らが皆一様に真面目なのかは論ずるべきでもないが、彼等の眼をみるかぎり、真面目というよりは寧ろ諦めのような感情が強く浮かび、下官というものに分類された時点で先の無い自分達の存在を、そういうものだと割り切っている様子にも見えた。
そんな眼をした下官はただ同じ十刃でありしかし更に高位であるハリベルの命を優先し、内容を問うでもなくただ言われた通りにフェルナンドを呼びに来た様子。
職務には忠実である、しかし自らの思考を閉じたかのようなその振る舞いは物悲しさすら感じられた。

「居無ぇと伝えろ・・・と言っても無駄か・・・・・・ったく何だってんだ・・・・・・」

至極面倒くさそうに起き上がったフェルナンドは、傅く下官にヒラヒラと手を振って下がる様に促す。
傅いたままの下官はその雰囲気を察し、更に深く頭を下げるとその場から立ち去った。
その後、軽く伸びをしたフェルナンドはハリベルが待つであろう宮殿の入り口へとその歩を進めるが、その足取りは緩やか。
急ぐ心算など欠片もなく、そもそもハリベルがこの宮殿を訪れる時というのは先の藍染の頼み事然り、決まって彼にとっての厄介事と相場は決まっている。
急ぐ心算がないのは元々の気質故でもあるが、その歩みが殊更遅くなるのも仕方が無いことに思えた。

「「　遅い！！　」」

フェルナンドが第七宮のエントランスホールに姿を見せるなりそんな声が飛ぶ。
視線を向ければ小柄で左右の瞳が違う女性と、長いウェーブがかった黒髪に褐色の肌の女性がフェルナンドを指差しながら叫んでいた。
フェルナンドにとってはどちらも見慣れた者、そしてその後ろに立つ人影もまたよく見慣れた者である。

「あいも変わらず・・・　五月蝿ぇな・・・・・・」

ホールへと続く階段を下りながら呟くフェルナンド。
ハリベルは別として彼女等に会うのは久方ぶり、それ故日常的だったその声は何時にもまして大きく聞こえるのだろう。
前傾姿勢、まるで犬が敵を威嚇して唸る様な姿を思わせるのはハリベルの従属官の一人であるエミルー・アパッチ。
もう一人はこちらもハリベルの従属官で、アパッチ程ではないにしろ自分ではなくハリベルを待たせた事を怒っている様子のフランチェスカ・ミラ・ローズ。
三人いるハリベルの従属官の中で五月蝿い方の二人である。

「もう少し速く来れませんでしたの？フェルナンドさん・・・・・・」

「悪いか？」

「えぇ。　悪いですわ。」

ホールへと降り立ったフェルナンドに二人の後ろに佇んでいた人影の一人が話しかけた。
長いストレートの黒髪で癖なのか口元を隠すようにして話す女性、ハリベルの三人目の従属官、シィアン・スンスンである。
常日頃毒を言葉に浮かばせる彼女、フェルナンドに贈る言葉にも些かその傾向が見える。

（（いいぞ！スンスンもっと言ってやれ！））

フェルナンド相手に物怖じもせずに悪いと言ってのけるスンスンの豪胆さ。
それを見たアパッチとミラ・ローズは、内心でスンスンを煽る。
彼女等とてフェルナンドに怖ける心算などないが、言葉で勝つ見込みがあるのはスンスンが一番だろう事は理解している。
それ故下手に口を挟む事はせず、スンスンの毒舌に期待を込めた様子だった。

が、そんな期待は常に裏切られる為だけに存在する。

「フェルナンドさんが来ないおかけで、そこのおバカ二人が五月蝿くて仕方ありませんでしたの。私（わたくし）、同じ従属官として恥ずかしくてもう・・・・・・」

「「てめぇスンスン!!　裏切りやがったな!!」」

言葉の矛先は真逆へと向かいアパッチ等へと突き刺さる。
言うなりスンスンは、ギャァギャァと喚きたてる二人を他所にあさっての方を向いている始末。
溜息を吐くのはフェルナンド、彼が五月蝿いながらも日常として見ていた風景が、場所を移しそこには広がっていた。

「で？　本当に何しに来たんだ、ハリベル。」

「久しい・・・という程でもないか。　何、別段用事があった訳ではないのだがな・・・・・・道を尋ねられたついでにお前の顔を見に来ただけだ。」

「道・・・だと？　ハッ！　それでテメェがここに居るのかよ、トカゲ・・・・・・」

騒がしい三人を他所にフェルナンドは、彼女等の後ろに立つハリベルに話しかける。
彼と同じ金色の髪と彼とは違う翠色の瞳、乳房の下半分が見えている露出の高い死覇装を着ながらも、鼻までを覆い隠す襟で顔の下半分を覆い隠したその女性。
幅の広い鞘に収まった斬魄刀を背負った彼女こそ第３十刃、ティア・

ハリベルその人である。
何をしに来たと問うフェルナンドの言葉に、ハリベルは濁すでもはぐらかすでもなくただ事実だけを答えた。
言ってしまえばその答えは道案内、なんとも第3十刃がする仕事とも思えない事ではあるが場所がここであったが故という事だろう。
それを受けてフェルナンドはその視線をハリベルの更に後ろ、彼女の従属官ではない巨躯の人物へと向ける。
そして向けられた視線に巨躯の人物は口元に不敵な笑みを浮かべて受け止めていた。

「いや～　昨日ぶりだねぇニイサン。まっさかいきなり見失うとは思ってなかったもんだから焦った焦った、此処の場所も知らなかったしねぇ。（今更藍染様に訊きには戻れんし）それにしてもこちらのアネサンに出会えたのは我ながら運が良かった。道案内までしてもらって在り難い限りでさぁ。」

「気にする事はない。　それ程大した事はしていないのだから。」

「いやぁ～アネサンは器がデカくていらっしゃる。ニイサンもそう思うでしょう？　」

不敵な笑みを浮かべながらも口を開けばその不敵さが失せるのがこの男。
黒髪と黒い瞳、左頬に奔る傷跡のような仮面紋（エスティグマ）、筋骨隆々という訳ではないが2ｍを越える巨躯であるその男の名はサラマ・Ｒ・アルゴス。
破面化後の彼にフェルナンドが出会うのはこれで二度目、一度目は昨日であり藍染が彼にサラマを引き合せた時。

何かしらの思惑を持ってであろうがサラマを従属官にしてはどうだ、と言う藍染の言葉を斬り捨てて以来であった。
サラマの話しぶりからすればフェルナンドが去った後彼をサラマが追っていた、という様子。
しかし見事に見失い途方にくれていたところを翌日、偶然にも通りかかったハリベルに道を尋ね此処まで来た次第だと言う。

なんとも間の抜けたような出来事に見える一部始終、運よくハリベルに出会わなければどうしていたのだろうかと疑いたくなるような行き当たりばったり。
今回は運よくハリベルに巡り合えたからいいようなものの、それでもハリベルが名も知らぬ破面化したての者に取り合う事をしかなった可能性を鑑みれば、昨日の今日でこの場にいることすら驚きといえる。
言い換えればそれはサラマが強運を持っている、とも言えるのだがそれが本当に強運なのかは別の話であった。

「何しに来た、トカゲ。　まさかとは思うが今更自分を俺の従属官にしてくれ、なんてつまらねぇ事言いに来たんじゃねぇだろうな？」

対するフェルナンドはその何処かのらりくらりとしたサラマに付き合うような事はせず、ただ射抜くように彼を睨みつける。
フェルナンドが思いつく彼がこの場に来た理由は幾つかあるが、その最たるものは先の場でも出た従属官の話だろうとアタリをつけていた。
思えばいやにアッサリと藍染が退いた事も彼には違和感があり、彼が無理矢理従属官を決めるのではなく、サラマ自身が望んで従属官になりたいと言わせた方が可能性は高い、とでも考えたのだろうと

予想するフェルナンド。

だがそれでは駄目だ。

情に絆されて、などという事を藍染が当てにするとも思えないが、当然そんなものはフェルナンドにはありえない。

従属官などというものは彼にとっては不要な荷物そのものだ、”薄まる”と彼が表現するように戦いにおいてそれを濃度、濃さとして見た時、自分は常に一人でなければならない。

並び立つ者がいれば確かに戦いは速く終結するだろう、だがフェルナンドが戦う理由は戦いの終結ではなくその過程にある。

結果ではなく過程、その過程の中で自分は生きているのだという実感を求める彼にとって、それを求めるための戦場に他者の存在は不必要。

更に言えば従属官、などという飾り立てた言葉も彼には不要でしかなく、彼が背負うべきは倒し殺してきた者達と”７”という数字で一杯で、それ以上に背負う事は苦痛でしかないのだった。

「ほぅ・・・　フェルナンド、この男はお前の従属官候補だったのか。意外だな、お前が従属官を従えるとは・・・・・・」

「違うな、ハリベル。　俺はコイツを従属官にする心算は無ぇ。お前はどうだか知らないが、邪魔なだけだ。　俺にとっては・・・な。」

居合わせたハリベルが従属官という言葉に反応する。

彼女からすればそれは意外中の意外、彼女の知るフェルナンドという男は一人を好む男。

それは彼女等と共に過ごしていた日々の中でも変らず、共に居はす

るが彼の中の線引きから先には決して踏み込んでくることは無かった。
一人を好むフェルナンド、そんな彼女の知る彼の姿からすれば従属官を迎えるなどという事は意外でしかない。
そしてその意外さはやはり当の本人によって証明される。

従属官をとる気は無い。
はっきりと、明確に発せられる否定と拒絶。
不要なものは不要だと、誰の眼を気にするでも誰かに気を使うでもなく言い放つのがこの男。
ハリベルの意外を肯定する言葉がフェルナンドの口から紡がれる。
その言葉を聞き、やはりか、と内心零すハリベル。
だがだからといって従属官を迎えた方がいい、などという事を彼女は口にしない。
十刃となって後、一人ぐらいは従属官を迎えてもいいのではないか、などという事を彼女は口にしないのだ。

何故なら既に彼は彼女と同じ高さに立っているから。
十刃、という虚夜宮最高位の場所に立っているから。
同じ十刃として十刃の特権である従属官の選任権を行使するかしないかは、彼に任されるべきもの。
所詮外野であるハリベルがあれこれと口を出すべき事項ではないのだ。

故にハリベルは口を鎖す。
内心、これは芽がないな・・・　と理解しているだけに。
如何にこのサラマと呼ばれた破面が懇願しようとも、フェルナンドが従属官として彼を向かえる事は無いと。
本心から従属官になりたいと彼が思っているのならば不憫な事だ、とすら思うハリベル。

しかし、当のサラマは気にする様子もなくこう言い放った。

「邪魔ですかい・・・・・・　ケケ、歯に衣着せぬとはニイサンらしい。だけど勘違いしてもらっちゃ困る、従属官？馬鹿言っちゃいけねぇ、俺はねニイサン。アンタの・・・・・・　子分になりに来たんだぜ？」

何一つ飾る事無く、ごく自然に放たれたそんな言葉。
ヤイヤイと騒いでいたハリベルの従属官達すら黙らせるそれは、誰もが予想外だったという証拠だろう。
子分、従属官ではなく子分になりにきたと、サラマはそう言い放ったのだ。
不可思議なるその真意、疑問だけが頭に浮かぶ中フェルナンドが口を開く。

「子分・・・かよ。　だがそれがどうした、要は言葉面が変っただけで従属官と変りゃしねぇぞ。」

言ってしまえばそういう事。
こんなものは方便の類、言葉遊びである。
耳に届く音、字面が変っただけで中身など殆ど変りはしないという事。
そんなものだけでフェルナンドを騙しおおせる筈などなく、しかしサラマもまだ退かず不敵な笑みは浮かんだまま。

「ケッケケ、でもそれだけで随分と違うでしょう？ニイサンが嫌であろう重荷だって減る、それに俺は一度ニイサンにボロ負けしてるからねぇ、負けた奴が負かした奴につくのはそれ程不思議な事じゃないと思うけどね。」

「言い訳はそれだけか？　ならさっさと消えろ。」

それでもフェルナンドの答えは否。
理屈で彼を説く事は至難、やってのけられるのはおそらく虚夜宮で藍染惣右介唯一人だろう。
いくらそれを捏ねようとも一度否と決めたからには、そう簡単に覆せるものでもない。
それを覆せるだけのものをサラマがフェルナンドに提示できるかどうか、それが今求められるもの。
サラマの言を斬って捨てたフェルナンドは、踵を返し階段を上る。
話は終わり、そんな雰囲気を背で語るフェルナンド、その背にサラマは言葉を投げかける。

「俺は別に従属官の地位なんて要らないんですよ、ニイサンに護って貰おうとも思わないし、ニイサンの戦場に手を出す心算だって更

々無い。そんな事して諸共殺されちゃぁ割に合わないんでね。ただニイサンの近くに居れば俺も、もう少しぐらいは強くなれそうな気がするんですよ。」

背にかかる言葉、歩みを止めないフェルナンドはしかしその言葉に何処か懐かしさを覚えていた。
言葉のやり取りも、使われる言葉のどれもがあの時とは違うがしかし、その中身がきっと似ていたのだろう。
それはフェルナンドが破面となってまもなくの事、ハリベルへと挑みかかりその実力の前に敗北を喫したときの事。
床に大の字となり、指一本動かせなくなったフェルナンドにハリベルは、自分に挑む心算があるのならば自分の下で学んでみる気はないか、と言ったのだ。
その時、そのハリベルの問いにフェルナンドはこう答えた。

近くに居た方が何かと都合が良い。

それはフェルナンドが何れハリベルと戦うことを望み、その為に力を付け、更にその者の近くに居る事でより強くなる事を望んだ為に出た言葉。
図らずもサラマはそれに似た言葉をフェルナンドに向けて口にしたのだ。
フェルナンドとハリベル、その台詞を言った者と言われた者の前で、同じ趣旨の台詞をそれを口にした者に向けて。
だがフェルナンドの歩みは止まらない。
それではまだ足りないと、図らずもではあるがそれは所詮情に訴えかける代物であり、意味など無いと。

そんなフェルナンドの内心など知らぬサラマ。

やはり一筋縄ではいかないか、と思いながらもそれが何故か嬉しく思っている自分に、自分も大概馬鹿だと自嘲を浮かべる。
先程語った言葉、それは勿論本心であるし、嘘偽りを並べたとてこの男にとどく事は無いと直感している彼。
ならば此処は後腐れなく、自分の思いとは別のもう一つの真実も告げてしまう事を決定し、あとは出たとこ勝負と腹を括る。

「とまぁここまでが俺の理由でしてね。後はもう一つ藍染様の理由ってのもあるんですが、こっちの方が単純ですよ？何せアンタに首輪着けようって腹積もりらしいですからね。まぁ、その首輪ってのは俺の事ですが・・・ね。」

おそらくそれは秘すべき事柄。
首輪をつけようという相手に態々それを明かす意味などありはしない。
しかし、サラマは本来最後まで秘すべきそれを今明かしてしまった。
驚いたのはその場にいたサラマ以外の者達だろう。
従属官の三人は展開についていけず、ハリベルは藍染が何故そんな事をするのかを気にかける。
そしてその驚きはフェルナンドも同じ事で、それは歩みを止めるには充分な様子だった。

「トカゲ・・・・・　何だってそんな事を俺にバラす。それを言っちまえば、普通は絶対にテメェを傍には置く訳無ぇと考えなかったか？」

「でしょうね。　俺だって普通はこんな事黙ってますよ、相手がニ

イサンじゃぁ無かったら・・・ね。」

サラマに背を向けたままのフェルナンド。
その背に不敵な笑みを浮かべるサラマ。
真意の探りあい、どちらが優勢かというものでもなくただ、互いの腹の底にある本音を見つけ出そうという戦い。
だが今フェルナンドがその足を止めている現状を見れば、サラマが一歩先をいっている様に見える。

「ニイサンにはあまり嘘は通用しそうに無いと思ってね。こっちも言っちまった方が後が楽だし、何より俺が首輪だと判っていて、それを嵌めようってのを見せ付けられて、それからニイサンが逃げるとは思えないし・・・ねぇ。」

サラマがフェルナンドを納得させるために用意したもの、賭けたものは一つ。
フェルナンドの性、退く、逃げる、という事を彼は好まない。
退くぐらいならば進む、逃げるくらいならば進み続ける、それが死地であろうとも関係は無い、それが彼の性なのだ。
目の前に逃げ道を用意され、或いは逃げても構わないと言われれば彼はその意思の逆をいく。
あえて困難な道を選択するが如く、その身を危険と滅びに晒し続ける。

サラマが賭けたのはそんなフェルナンドの性。
僅かな戦いの中、フェルナンドの人物像を読み取った彼が出来る唯一の策。

見え透いた挑発、しかし見え透いているからこそこの男はその道を行くだろうという直感。
あえて相手の敷いた道に乗り、その道の末に相手の思惑を打倒する事こそこの男の歩み方であるという直感が、サラマには見えていた。

「なるほど・・・・・・　確かに俺相手にこれ以上有効な事は無い・・・か。それに藍染に一泡吹かせるのも一興・・・かよ。」

振り返り再び階段を下りるフェルナンド。
顔には獰猛な笑みが浮かび、”入って”いるのが見て取れる。
その顔を見てサラマは不敵な笑みを更に深めた。

「笑う・・・かよ。　いけ好かねぇ顔だ。」

「ニイサンこそ、その怖い顔どうにかした方がいいんじゃないですかい？」

「俺は元々こんな顔だ。」

「なら俺も元々こんな顔だからしょうがない、って事にしといてください。」

「ハッ！　笑えるな。」

歩み寄り止るフェルナンド。
頭二つ以上は違う背丈の二人、見上げながらも見下ろし、見下ろし

ながらも圧される。
きっとそれは奇妙な関係、王と臣ではなく、主と隷でもない。
ことこの虚夜宮でその関係性は奇妙なものとなるだろう。

「俺の戦いの邪魔だけはするな、それが条件だ。後は好きにしな、見張るなり何なり・・・な。」

「俺は良い子分なんでね、余計な事はしませんよ。」

それだけで充分だった。
尊大なやり取りも、どちらが上だと示す事も、そこには無い。
あるのは認める意思と仕える、というよりは近くに居る事。
上に立つ者として命令を下すわけでもなく、下だからといって謙るわけでもない。
今までとさして変らないのだ、この二人はきっと。

「何にせよ上手く纏まった様子だな。　こんな事ならば態々私を待ち伏せる必要も無かったかもしれんな、サラマとやら。」

話が一段楽したのを見計らいハリベルが声を発する。
それを受けてギョッとした表情を浮かべるのはサラマだ。
待ち伏せる、そうハリベルが口にした事に彼は驚きを見せる。
それも仕方が無い事だろう、なにせその言葉は的を射ていたのだから。

「気付いて・・・いたんですかい？」

「当たり前だろう？　ああも測ったように現われれば疑いもする。それでも邪な気配は無かった故、ついでにフェルナンドの顔でも見に行くのも良いか、とお前に付き合ってやったまでだ。」

「こいつはどうにも・・・・・・　ニイサンの周りは化物だらけですかい・・・・・・」

「褒め言葉、として受けてやろう。」

フェルナンドの子分となるためサラマは、ハリベルというフェルナンドに最も近い人物を用いる事にしていた。
別に何かを期待して、という訳ではないがその場で援護の一つでもあれば上等といった程度、その思惑は見事成功しこの場に彼女を伴ってくることも出来た。
しかし、その実はサラマが彼女を連れてきた、というよりはその思惑を見透かした上で彼女がサラマに付き合ったという事。
偶然を装った出会いも何もかも、ハリベルは見抜いた上でサラマの茶番に付き合っていたのだ。

それを知らされた当のサラマは、ケケケと笑うと両手を挙げて降参、といった様子。
化物の周りはやはり化物だらけだと思い知らされたようだった。
それでも笑っていられるのは、彼の強みといえるだろうが。

「おうコラ！　デカイの！　従属官になったってんならアタシらはアンタの先輩って訳だ、敬語使えよ敬語！」

「随分とガラの悪い先輩じゃないのさ、アパッチ。それにコイツは従属官じゃなくて子分だ、子分。」

「うっせぇんだよミラ・ローズ！　従属官も子分もさして変んねぇじゃねぇか！」

「その違いを今まで論じていたのでしょう？あぁ、その小さな脳では理解できなかったのね？可哀相・・・・・・」

「馬鹿にしてんのか！　スンスン！！」

降参の様子のサラマの前に、アパッチが進み出て下からねめつける様に睨みを利かせる。
細かい事は抜きとして同じ十刃の下に付く者として先輩風を吹かせようとするアパッチ。
しかしそんな彼女の行動も、他の二人の従属官に間違いを指摘されなんとも締まらない。
その辺が実に彼女らしいといえば彼女らしいのだが、悲しくも面子は潰れたと言っていいだろう。

「いやぁ～元気の良い嬢チャン達ですねぇ。・・・・・・にしてもニイサンがこの環境に居た、と思うと俺は激しい違和感を覚えますが・・・ね。」

「うるせぇよ。　良い子分の心算なら余計な事は言うんじゃねぇよ・・・・・・」

「ケッケケケ。　親分の気持ちを代弁するのも良い子分の仕事だ、と思いましてね。」

「確かに、良い子分じゃないかフェルナンド。」

またも三人で姦しい事この上ない三人を他所に、精神年齢の高い三人。

サラマの言葉になんとも複雑そうな顔をするフェルナンドと、フェルナンドの言葉に”良い子分”として答えるサラマ。

そんな二人のやり取りに、軍配はサラマにあると見たハリベルがフッと小さく笑いながら続いた。

かつて第3宮で繰り広げられた日常がそこにはあり、そして今、その中に新しい者が加わる。

それが良い変化を生むのか、はたまた別のものを産み出すのかはまだ判らない。

ただ、相性は良さそうだし悪い気はしない、と思うサラマがそこに居たのだった。

砕かれた瞳
緑が弾け
追憶す
橙の死神に
何を視るのか

BLEACH El fuego no se apaga. 64（後書き）

何とか今日中に投稿出来てよかった。

昨日まで一文字も書いてないとかどんな状況だよ・・・・・・

それでも頑張った甲斐はあった、かな。
チョッと短いですけどね。

サラマ、何とか子分になれました。
藍染さんの思惑？　そんなもん知りませんｗ
というかばれたからといって問題ないんだと思います。
堂々と見張れるわけですしｗ

久しぶりにハリベル達も出せたことだし、急いだ割には良い内容・・・かな。

今回は言葉の掛け合いが書いてて楽しかった。
お気に入りは最期のフェル、サラマ、ハリベルかな。
その前の顔がどうこうってのも嫌いじゃないけどね。

さて、次回はようやっと原作突入と言える回となります。
気合を入れ直して書いていこうか！

《全十刃（エスパーダ）、及びＮｏ．２０までの数字持（ヌメロス）ちに通達する。本日正午、奉王宮『玉座の間』へと参集せよ。》

大気を揺らす事無く、音の波を用いずに直接頭に響いたその声。
驚く者、無反応な者、逡巡すらなく動く者と、無視を決め込もうとする者。
反応はそれぞれにあれど、総じてそれが響いたという事は彼らはそれなりの実力者であるという事。
与えられた数字がおおよそ実力を示す虚夜宮において、その上位層と呼べる者達が一様に呼び出される事は少ない。
それが成され様としてるという事は、そうするだけの理由があるという事。
情報らしい情報すら開示されていない現状で、彼らにその理由を推し量る事は難しくはある。

しかし、彼らに不安は欠片も無い。
何故なら彼らが歩む道は”覇道”であるから。
藍染惣右介という彼等の絶対王が歩む圧倒的なまでの覇道であるから。
故に彼らに不安は無い。
恐怖より生まれた彼等破面（アランカル）に唯一恐怖を与える者。
その歩みは彼らにとって月光のように眩く、その眩さに彼らは誘われ進む。

僅かばかりの不安など、その眩さが晦まし、消してしまうが故に。

「で、ニイサンは当然無視を決め込もうとしている訳ですかい・・・・」

第7宮（セプティマ・パラシオ）の屋上、そこには寝転がる者とそれをやれやれといった様子で見下ろす者。
見下ろす方の名はサラマ・R・アルゴス、寝転がる方の名はフェルナンド・アルディエンデ。
つい先日彼の子分となったサラマ、その彼が屋上へと足を運べばやはり当然のようにフェルナンドは寝転がっていた。
頭に響いた報によれば参集の時刻は正午、しかし寝転がる男に動こうなどという気配は微塵も無い。

が、それも半ば予想が出来ていただけにサラマに焦りの色は見えなかった。
困ったような顔をしてフェルナンドへと近付くサラマだが、その実困っているようにも見えないのは気質ゆえか。
それでも彼をせっつくのもサラマの仕事であり、割に合わないと言いながらも律儀にこなす辺り、義理堅い性格なのだろう。

「聞こえといて無視、しかも天蓋に堂々と姿を晒す・・・と。正直挑発にしか見えないのは俺だけですかい？」

「そう見えるんならそう・・・　なんだろうさ・・・・・・」

僅かばかりの嫌味を浮かばせた言葉も、ヒラリと避わされてしまうサラマ。
それでも口元には不敵な笑みだけは浮かび続け、見た目の余裕は崩さない。

「ここに来た、って事はテメェにも聞こえたらしいな・・・・・・」

「えぇまぁ。　数字持(ヌメロス)ちって訳でもないですが、俺は色々と事情が込み合ってますから・・・ね。」

「・・・・・流石は”首輪”、ってぇ事かよ。」

「ケケ、こいつはお褒めに預かりどうも。」

フェルナンドの嫌味にも笑顔で答えるサラマ。
そう、本来先程の報はサラマには聞こえ得る筈は無い。
何故なら彼は数字持ちでも、まして十刃でもないからだ。
破面化したのも然程前という訳でもなく、一週間は経っていないだろう。
では何故彼がその報を聞き取り、おそらく無視を決め込むであろうとアタリをつけフェルナンドの下に来れたのか。
理由は簡単、彼が”特別”であるから。

何せ彼の役目は”首輪”だ。
まぁ機能しているかいないかは別として、ではあるがそれでも首輪である事に違いは無い。
そして首輪とは何も繋いで止めるだけが仕事ではなく、ある意思の下思い通りに御するのもまた仕事であるのだ。
その仕事を考えたとき、そのある意思というものを首輪は理解していなくてはならない。
故に今回の報はサラマに届いたのだ、ある意思のものであるが故に。

「まぁそんなしがない首輪としては、ニイサンには玉座の間に行って貰いたいんですがね。」

「興味が無ぇ。　ウルキオラとヤミーの野郎が帰ってきたんだ、話なんて一つしか無ぇだろうし、それ程収穫があるとも思え無ぇよ。
何せ相手はあの死神のガキだ・・・・・・」

やや自分を卑下するようにしてフェルナンドを促そうとするサラマ。
しかし、そんなサラマの言葉もフェルナンドは取り合うことをしない。

屋上にいたフェルナンドが感じとった空間の揺れ、破面が用いる『解空（デスコレール）』と呼ばれる現世、尸魂界（ソウルソサエティ）への移動術特有のそれと、その後感じ取ったウルキオラとヤミーの霊圧。
それだけあれば充分だった。
ウルキオラ達が何処へ行き、何をして戻り、そして何の為に参集が掛かったのかを予想するのには。
元々興味無しと断じた死神の少年の事など今更改めて見る必要も無いと、フェルナンドは決定していたのだ。

「そんなこったろうと思いましたがね。でもどうです？　もし何かニイサンの興味をソソるような情報が一緒に持ちえられていたら、と考えたら。それにあの死神のボウズだって急に強くなってるかもしれませんよ？」

「そう都合よく進む訳が無ぇだろうが。　昨日の今日で強くなれりゃ世話無ぇぜ。」

「（ケケ、なっちまいそうな人がそれを言いますかい）まぁまぁ、子分の心情、頼みを酌んでやるのも親分の仕事、と思っちゃぁくれませんか？」

結局は過程の話ではあるが、サラマは”もしも”という情報でフェルナンドを動かそうとする。
それは甘美な言葉であるし、あらゆる可能性の幻視。
故に完全に捨てきることなど適わず、それはフェルナンドの答えを見ても明らか、否定的ではあるが完全には斬り捨てていないからも明らかであった。
そんなフェルナンドの答えに、もう一押しとサラマは攻勢に出る。

情に訴えかけるようなそれはフェルナンドには無力ではあるが、今は言葉を重ねることに意味があると。
しかし、そのサラマの言葉は意外な形でフェルナンドに届いていた。

「・・・・・・・・」

「ど、どうかしたんですかい？　ニイサン。」

先程まで何処吹く風であったフェルナンドの表情が、露骨に険しくなる。
嫌悪感、と言えばいいのか、顔をしかめ眉間に皺を寄せ眼を細める様は、嫌なものでも見たか聴いたかをした様子だった。
そんな明らかに変ったフェルナンドの表情に、サラマも動揺を見せる。
何かマズい事でも言ったかと思うサラマに、フェルナンドは苦々しい声で答えた。

「どっかで聞いたな、その胸糞悪い頼みってぇ台詞・・・・・・」

「え？　あぁ、そ、そうですかい・・・・・・」

「流石はあのヤロウが寄越した首輪なだけある・・・か。頭も切れるんだろうしよく似てやがる・・・・・・」

「あの～、なんだかぜんぜん褒められてる気がしないんですがねぇ・・・・・・」

「当たり前ぇだ、褒めて無ぇんだから・・・な。」

なんとも緩慢な動きで起き上がるのはフェルナンド。
動作からやる気も何も感じないが、どうにも気圧されるような気配だけは感じられる。
サラマは知らないが故に気付かないが、この流れは彼が藍染に一杯食わされたものとどこか似通っていた。
その流れの中でこれは頼み事だ、といった旨の言葉を言ったのが良くなかったのだろう。
フェルナンドにとってはあまり思い出したくない部類のその記憶、というよりは言葉によって藍染のあの笑みが彼の目の前には浮かび、それが彼に件の顔をさせた原因でもあった。

「まぁいい。　別にテメェの心情なりを酌む心算はさらさら無ぇが、これでまた厄介事を押し付けられでもしたらそれこそ馬鹿らしい。
不自由ってぇのは窮屈なもんだぜ、なぁ首輪よぉ・・・・・」

立ち上がったフェルナンドはサラマの横を通り過ぎながらそんな言葉を零した。
内容から言えば玉座の間には行く、という事だっただけにサラマとしては上々の出来ではあるのだが、最後に浴びせかけられた言葉にどうにも嫌な汗が流れるサラマ。
知らぬうちに地雷を踏みしめていたかのような感覚に渇いた笑いだけが零れる。
固まったように動かぬ彼の身体、漸く動けたのはフェルナンドが屋上からその姿を消して後であり、そんなサラマはそのまま屋上へ大の字で倒れこんだ。

「はぁ・・・やっぱり割に合わねぇな・・・・・・一々おっかないっての。　それにしても藍染様、アンタ一体ニイサンに何したんですかい・・・・・・？」

至極当然ではあるが、身に覚えの無い感情をぶつけられ辟易するサラマ。

もっとも、その感情の出処に関しては藍染によってしっかりと、その片棒を担がされている事を彼は知るよしもなかった。

暗く広いその空間。

端から端を見通すことは適わず、光は進むにつれ闇に呑まれ無明と化す。
その闇の中ただ一角だけが僅かに明るく、そこに彼らは在った。

皆一様に白い衣をまとい、個々に砕けた仮面をつけた彼らは破面（アランカル）。
人とそう見た目が変らぬ者、人に倍する巨躯を誇る者、人の形をしながらも明らかに”外れている”者。
その姿は人と同じく千差万別、しかし皆違う彼らが共通している事もある。
それは彼らが一様に害をなす者であるという事、命を殺し、居場所を壊し、全てを奪い去るだけの機能しか持たない日常への侵略者であるという点だ。

だが彼らにとってはそれこそが日常。
命を殺し、壊し、奪う事が彼等の日常であり呼吸にすら等しいもの。
故に彼らは害をなす者。
その呼吸に等しい行為を、ただ当然に行使する為に。

「皆、急な呼び出しですまない。」

その害なす者たちに声が降る。
彼らがいる場所よりも高い位置に設けられた一脚の椅子。
過度な装飾など一切無く、ただ白いその椅子は玉座だった。

彼等の王、絶対王　藍染惣右介（あいぜんそうすけ）。
白いその椅子に腰掛けながら眼下に集った二十の破面にそう告げる

彼の声はとても気安い印象を与える。
しかし彼は王、その気安さの仮面に隠れた冷徹さと深慮遠謀、そして圧倒的な”力”によって彼らを束ねる王なのだ。
白い玉座、それに腰掛ける様も実に相応しく威厳に溢れる。
だがそれはその白い玉座が彼の為に設えられた為、等という事ではない。

玉座に座るから王なのではなく、王が座るからこそ玉座。
相応しく見えるのはそれが彼の為の玉座だからではなく、彼から放たれる”王気”故。
究極的に言えば彼が座る全ての椅子が玉座であり、豪奢さで飾る必要など無いという事なのだ。

「　中身も話さずに呼び付けるだけ呼び付けるとは・・・・・・相変わらずじゃのぉ、ボス。」

玉座へと腰掛けた藍染、その藍染に言葉を投げかけるのは筋骨隆々の老人。
王冠型の仮面の名残と年経た皺、顔に刻まれた傷跡と鋭い眼光を持つのは第2十刃（ゼグンダ・エスパーダ）”大帝”バラガン・ルイゼンバーン。
それは王に対する言葉としては不適切ではあったが、誰もそれを咎める事はしない。
とうの藍染もそれは同じで、彼からすればそんな些細な事に囚われるのは愚かしいことなのだろう。

「そう言わないでくれバラガン。　何せつい先程だったものでね、前もって知らせておくという訳にもいかなかったんだ。」

バラガンからの棘のある言葉にも、藍染はその笑みを崩す事無く答える。
実際どうなのか、という部分はきっと誰にもわからないだろう、しかし藍染がそうだと言うのならこの時この場ではそれが真実なのだ。
追求する事はおそらくは徒労に終わる部類、そもそも智謀に関して藍染惣右介に適う者はそうは居ない。
煙のように逃れ、霧のように覆い隠し、紡がれる言葉もまた実体を掴ませない幻惑。
その夢幻夢想を捉える事は至難であり、また捉えたとしてそれに意味などない。
何故なら彼らは臣であり、藍染は王であるから。
王の真意が何処に向かうのか等、彼らが知ったとて意味など無いのだ。
それが何処に向けられ、何処に向かうこととなろうとも彼らにとれる選択肢は一つ、王の後に続き、またその尖兵となって全てを殺す。
遮る全てを殺す事以外に彼らに出来ることはなく、真意を知る事よりもそちらの方が彼らにとっては余程重要なことであるのだから。

それを知るバラガンはあえて追求する事無く、フンと鼻を鳴らしてそれ以上口を開くことはな無かった。
そんなバラガンを藍染は笑みを浮かべたまま見届けると、丁度その瞬間扉の開く音が暗い空間に響き、コツコツと床を叩く二人分の足音が藍染と破面達の居る場所へと近付いて来る。

「只今戻りました、藍染様。」

闇から現われたのは二人の男。
一人は平均的な身長にやや細身の身体つき、黒髪で角の着いた兜のような仮面の名残を持ち、病的なまでに白い肌と感情を一切感じさせない緑色の瞳で藍染を見上げるのは虚夜宮の十傑、十刃（エスパーダ）。
その一角を担うのがこの男第４十刃（クアトロ・エスパーダ）ウルキオラ・シファー。
もう一人はそのウルキオラをやすやすと越える巨躯を持ち、やや褐色気味の肌と、下顎骨を思わせる仮面の名残に頭には角のような突起があり、襟足から伸びた硬めの髪が後ろに束ねられていた。
人のような外見ではありながらどこか化物じみて見えるその男もまたウルキオラと同じ十刃である第１０十刃（ディエス・エスパーダ）ヤミー・リヤルゴ。

しかし常と変らぬウルキオラとは違い、ヤミーの方は血と泥にまみれ、何よりその右腕は上腕の中ほどからものの見事に、それこそ美しくある断面を晒し切断されていた。
目にした光景に僅か破面達の気が揺らぐ。
末席の１０とはいえヤミーは十刃、それがこれ程の手傷を負わされるという事態は彼らにとってはあるべきではない事であった。

「おかえり。　ウルキオラ、ヤミー。さっそくだが見せてくれ、キミが現世で見たもの、感じた事を。我等二十の同胞の前に、その・・・全てをね。」

そのヤミーの姿を眼下にし、しかし藍染はそれに触れる事無く話を進める。
今回の招集はこの二名の帰還によって発せられたものだった。
藍染の命を受け任務へと赴いたウルキオラ。
そして任務のため現世へと向かうウルキオラに、暇つぶしにと無理に同行を頼んだのがヤミー。

その任務の理由を知るものは少なく、この場でそれを知るのは片手にも満たない数だろう。
故に彼等多くの破面達はその二人の帰還が何を意味し、そして何を齎すのかを知らずにいる。

やや暗い笑みを浮かべた藍染、その言葉からも判るとおり、彼等二人が赴いた先は現世。
脆く脆弱な人間達の住まう世界であり、彼らにとっては酷くつまらなく生き辛い場所。
そこで感じた全て、そこで見た全てを藍染はこの場に居る二十の破面に伝えてくれと、ウルキオラに言うのだ。

「ハイ・・・・・・」

ひどく鷹揚の無い声。
無感情のその声が響くとウルキオラはその手を自らの目に向ける。
眼球へと近付いていくその手、その指。
それは淀みなく、そして止まることなく眼球へと近付き、そして遂には瞼の裏へと侵入した。
白い指は眼球をつまみ、抉ろうと力を込める。
おそらくは嫌悪と恐怖の対象でしかないその行為、自らの眼球を自らひねり出そうという意味を成さないその行為。
誰もが目を背けたくなるような異常な光景を、しかしウルキオラは能面のような表情で、それこそ痛みなど些かも見せずに遂行する。
それはその行為を見ている者達にもいえることで、その異常な光景を誰一人嫌悪や恐怖の眼差しで見るものは無い。
狂っているのだ、彼も彼らも。

「どうぞ・・・御覧下さい・・・・・・」

自らの眼球を苦もなさげにひねり出したウルキオラ。
伽藍洞となった瞳のあと、痛々しくしかし魔的なそれを気にすることも無く、ウルキオラは今し方ひねり出した眼球をぞんざいに握ったままその手を前へと伸ばす。
そして、先の言葉と同時に握ったその瞳を、自らの瞳を何の躊躇いも無くその手で握り潰したのだ。

まるで硝子球のように砕け弾ける緑の瞳。
砕かれた欠片はまるで風に誘われるように舞い、その最中大きな欠片は次第小さくなり小さくなり、粒子を経て更に砕けたそれは玉座の間へと広がっていった。
破面達はその瞳を砕く行為に何の反応も示さずに目を閉じる。
次第広がる瞳の粒子たちは、遂に広間へといきわたりそれを吸い込んだ破面達に届けていった。
ウルキオラ・シファーが現世で見たこ事、感じた事、その全ての事柄を。

それが彼の能力なのか、それともこの場にそういった機能が設けられているのかは定かではない。
だが今重要なのはそのどちらかを論ずることではなく情報。
ウルキオラの記憶が情報として伝わることであり、その伝播の過程などは語る意味を成さないのだ。
情報が伝わるという一点だけが必要とされ、そしてその必要事項は

今十二分に機能していた。

破面達に見えるのは、やや砂嵐が掛かった画面のような風景。
共に現世へと赴いたヤミーへと愚かにも挑みかかる人間と、返り討ちにあったその人間を見たことも無い術によって癒しながらヤミーに攻撃とも呼べない無意味な行為を行う人間、そしてその人間達を庇うようにして現われた橙色の髪をした死神。
姿が変り霊圧が跳ね上がった橙の死神はいとも簡単にヤミーの右腕を斬り飛ばすと、そのまま一方的な攻勢に転じた。
傷だけが増えていくヤミーを前に攻勢に出ていた橙の死神は、しかし突然としてその動きを鈍らせた。
それを機に攻守は逆転し、死神はヤミーによって押し込まれるが、その死神を庇うように更に増援が現われる。
浦原喜助、四楓院夜一、情報と一致する外見を持った二人、ヤミーは四楓院夜一の拳足による打撃によってたった二撃の下に地に這い、浦原喜助の技によって虚閃すら防がれる。
そしてそれが戦いの終わりだった。
これ以上の戦闘は無意味であり、さしあたっての任務は終えたと判断したウルキオラは退くことを選択する。
最後に見えるのは空間の裂け目が閉じきる間際の光景、うな垂れ血にまみれながら肩で息をする橙色の髪の死神。
その姿にウルキオラが感じたのは無価値。
態々殺す価値すらなく、ただ揺れる霊圧を御し切れていない正にも負にも容易く転ぶ死神もどき。
そんな評価が彼らに見える最後だった。

「・・・・・成程。　ヤミーの腕を斬り落とす霊圧硬度には目を見張るものがある。が、総合的に見て『この程度では殺す価値なし』

、と判断したという訳か・・・・・・」

「はい。　頂いた情報以上のものはありませんでした、ご命令では”妨げになるようなら”殺せ、との事でしたので。それに―」

「微温(ぬり)ィな・・・・・・　妨げになる、ならないなんてのは関係無ぇ。殺せって一言が入ってんなら殺した方がいいに決まってんだろうが！」

「・・・・・・グリムジョー。」

藍染の言葉に対し補足としての説明をするウルキオラ。
しかしその言葉は一人の破面により遮られる。
水浅葱色の髪、右の頬に右顎を象ったような仮面の名残を着け、挑発するような、まるで野生の獣のように好戦的な眼差しを向けるその男。
胡坐をかいて座り、背後には数名の従属官を従えた男の名はグリムジョー。
第6十刃(セスタ・エスパーダ)　グリムジョー・ジャガージャックであった。

「大体ヤミー！　テメェはボコボコにやられて不様に腕まで落とされてんじゃねぇか！遊びの心算で付いてってそのザマじゃぁ目も当てられねぇな。あぁ！？」

「テメェ・・・グリムジョー。　俺がここまでやられたのは下駄男と黒い女にだ、あいつ等が来なけりゃ今頃あのガキは俺が殺してたのが判らねぇのか。」

「わからねぇ奴だな・・・・・・　俺ならその二人も纏めて殺すって言ってんだよ！」

次にグリムジョーの矛先が向いたのはヤミー。
自ら無理にウルキオラの現世行きに同行し、暇潰しの心算が予想外の深手を負って返ってきた彼。
十刃にあるまじきその失態、あまつさえ誰一人殺す事無く戦場から退いた恥曝しとグリムジョーは怒りを顕にする。
敵ならば殺せ、遮り、立ちはだかるのならば誰であろうと殺せ、これがグリムジョーの考え方であり彼の真理。
そのグリムジョーにヤミーの姿は逃げたように映っていた。

グリムジョーの挑発めいた言動にヤミーが前に出ようとする。
それをウルキオラは「止せ。」と呟きながら手を上げて制した。
頭に血が上りやすいヤミーに対し、ウルキオラはまるで氷のように冷たいそれが流れているかのように、冷静に、そして冷徹にグリムジョーへと対する。

「グリムジョー。　確かにこの塵を今殺すのは容易い。だが藍染様が興味を示されているのはこの塵の成長率だ、俺からみてもこの塵の潜在能力は相当なものだった。が、それはその大きさに不釣合いなほど不安定、放っておけばおそらくは自滅する可能性も、コチラの手駒と出来る可能性もあると俺は判断した。」

ウルキオラの緑の瞳がグリムジョーを捉え、淡々と語る。

彼から見てあの橙色の死神を殺すことは容易いことだった。
それこそあの死神が自分が死んだ事すら気付かせる無く殺すことも難しくないだろう。
だが、ウルキオラが藍染から命ぜられた任務はあくまで査定、そして脅威を感じなかった時点で”殺す”という選択肢は発生しないのだ。
そしてその査定の中、あまりに大きく揺れる死神の霊圧、おそらくは藍染が言っていた『虚化』が原因だろうと当たりをつけたウルキオラは、ここで殺してしまうよりも、上手くすればこちら側に取り込める可能性も充分にあると判断したのだ。
驚異的な潜在能力とそれを引き出す成長率、引き出されるに連れて揺れる霊圧と虚の気配、引き込めれば強力な破面として戦力となり藍染の歩む覇道はより磐石となると。
藍染の命令は殺すことよりも、寧ろそういった今後の可能性を判断するための材料を欲したものだと考えたウルキオラは、あえて橙色の死神を生かしたのだ。

「チッ！　・・・・・馬鹿が。　それが微温ィって言ってんだよ！こんなガキ一人に何が出来る！　それにもしソイツがテメェの予想以上にデカくなって、俺らに楯突いて来たらどうする心算だ、ええぇ！？」

だがグリムジョーにそんなウルキオラの理屈は通用しない。
何故なら彼が感情に生きているから、感情の全てを理屈で制することなど誰にも不可能であるからだ。
そしてその感情からの言葉は存外間違いでもない。
可能性とはどこまでも不確定であり、確かに死神が自滅して堕ち、コチラの手駒と出来る可能性もあるだろうが、それと同じぐらいに

件の死神が急成長を遂げ彼らに刃向かう可能性もありえるのだ。
その二つを比べたとき、一体どちらが有益であるのか。
グリムジョーの答えは簡単、不確定な戦力を期待するぐらいならば殺してしまえばいい、刃向かう可能性が少しでもあるのなら殺してしまった方がいい。
故にウルキオラの対応は彼にとって何処までも微温く、癪に障るものだったのだ。

が、そのグリムジョーの感情的な言葉にもウルキオラは何一つその内側を見せる事無く淡々と。
それこそ至極当然であり何の迷いすらなく、そして確実に遂行するという確信を持って言い放った。

「その時は俺が始末するさ・・・・・・　それで文句は無いだろう？」

あまりにも冷淡に、そして微塵の疑いもなく放たれた言葉。
始末は自分で付けると、ウルキオラはグリムジョーにそう言った。
それは自分の失態は自分で決着を付ける、という意味でもあるし同時に、例えどれほど敵が強大になろうとも自分に及ぶ事は無いという自身への絶対の自負、いや、確信に満ち満ちていた。
その言い様、当然その心算だというウルキオラの言葉に勢いを削がれるグリムジョー。
そしてそこが終わりだと彼らに王の言葉が降った。

「・・・そうだな、それで構わないよウルキオラ。君の好きにするといい。」

終わりである。
それ以上の追及も言及も、彼等の王は望んでいない。
故に終わり。
この話はここで、ウルキオラの自由にさせるという判断で終わりとなる。
だがそれはあくまでも藍染にとってそちらの方が何かと都合がいいという事であり、彼がウルキオラの意思を尊重した、などという事では断じて無いという事だけは確かだった。

「有難う御座います・・・・・・」

藍染へと向き直り、頭を下げるウルキオラ。
別段自分の考えが尊重されたことに彼は感慨を持たず、藍染がそう決めたのならば従うまでといった様子。
自分の意思は無く、あくまで優先されるのは藍染の意思であるという雰囲気を纏うウルキオラ。
そして今回の参集はこれにて終了となり、破面達は思い思いに解散していく。

結局のところこの参集に然したる意味は無かった。
見せられた映像も多くの破面にとってはなんら価値がある物ではなく、寧ろだからどうしたという部類に入るものだろう。

見えたのは脆弱な人間と死神、唯一価値があったといえるかもしれないのは尸魂界（ソウルソサエティ）における最上位の実力者、その一端を見られたという部分だけであり、それでも”危機”と呼ぶには些か足りないものだった。
故に多くの破面にとって今回の参集、そして見せられた映像は無意味であり無価値な代物。

だが、それでいい。

多くにとっては無価値、しかし一部にとっては無価値ではないのだ。
ではその一部とは誰か。
それは当然これを見せることを決めた人物、藍染惣右介。

彼にとって今、映像の死神『黒崎　一護』が死んでしまうのは些か困る。
今彼が破面と、それも上位のそれと戦えば死ぬのは明らかなのだ。
だから、だからこそ藍染はこの死神、黒崎一護の姿を彼等破面に見せた。

価値無し。

大多数の意見。
無価値に興味を示す者は無い。
ウルキオラという破面でも屈指の実力者が障害にすらならないと断じた事で、彼等の黒崎一護に対する興味は失せたと言っていいだろう。

それでいいのだ。
藍染はこれにより時を稼いだ。
黒崎一護がより強く成長するための時、何れ自らが手にする”力”を更に磨くための時を。
そして黒崎一護をより強く育てる為の策もまた、既に藍染にはあった。

頭を下げるウルキオラの姿を今だ不満さを滲ませて睨む男、グリムジョー。
彼は彼の言う微温さを許容する事はできないだろう。
故に彼は行動に出る、微温さではなく業火の苛烈さを持って敵に対する彼だからこそ必ず行動にでると藍染は見抜いていた。

”力”、それの成長を促すために必要なのは壁。
それもただの壁ではない、低くては意味が無く、しかしギリギリで乗り越えられるような壁でも駄目なのだ。
特に黒崎一護という人物を考えたとき、必要なのは圧倒的に高い壁。
頂は見えず、乗り越えること叶わぬような圧倒的な壁の存在、普通の者ならば超える事を諦めてしまうようなそれが、黒崎一護にとっては最も適した壁の大きさ。
何故ならそれを前にした時、黒崎一護は諦めないのだ。
超える事を、打ち倒す事を、打ち破る事を決して諦めないのだ。
そしてその諦めないという強い決意は、黒崎一護に幾度と無く”力”を与え、成長させてきた。

今回必要なのもまたその大きな壁。
破面、その最上位たる十刃。
その中でも好戦的な部類に入り、特殊な能力ではなくその爪と牙によって敵を凌駕する野獣グリムジョー。
藍染惣右介にとって黒崎一護の成長を促すのには丁度良い壁。

故に彼は黙認する。
グリムジョーが配下の従属官に指示を出したことも。
彼が何処に向かうことも。
そしてまた解空が開かれる事の何もかも。
後はおりをみて黒崎一護が死なない程度で退かせれば済む話だと。

だがそんな藍染にも見落としはある。
グリムジョーの不満を見定める事で彼はらしくもなくそれを見逃した。
今後の展望、それに割いた僅かな思考の時間故に。
それは些細な事で、そして彼に着けた”首輪”の存在も僅かばかりの油断を誘ったのかもしれない。

だから彼は見逃した、珍しく参集に応じていた金色の男の事を。
つまらなそうに、面倒そうな雰囲気で僅かばかりのイラつきを滲ませていた彼の表情を見逃していた。

映像を見終わったその直後、ほんの一瞬だけではあるがその金色の男の口角が、ニィと持ち上がっていた事を。

三日月が照らす夜。
立ち並ぶコンクリートのビルの群れたち。
そのうち一棟屋上、その縁に腰掛けるようにしてその男は居た。
月光が照らし出す彼の姿は逆光で表情までは見えないが、その雰囲気は常の彼らしく攻撃的なもの。
触れれば斬られ、千切られ、噛み砕かれるような、そんな雰囲気だった。

「・・・・・揃ったか。」

チラと視線を上げればそこには先程まではなかった人影がある。
数は５人、何れも宙に立ち只人ではない事は確かだった。
そう、彼らは人ではなく人に害する者、破面。
ビルに腰掛ける男、第６十刃　グリムジョー・ジャガージャックを筆頭とし、残る５人は彼を王として仕える従属官。
左目から頭部にかけて横長の仮面の名残を着けた、痩躯に細面で辮髪を結った男、破面Ｎｏ.１１シャウロン・クーファン（アランカル・ウンデシーモ）。
鼻の頭に仮面の名残を載せ、左側半分が坊主右側半分が長髪といった髪形をした巨漢の男、破面Ｎｏ.１３エドラド・リオネス（アランカル・トレッセ）。
頭の右半分を覆う仮面を残し、エドラド程ではないが肥満型の巨漢の男、破面Ｎｏ.１４ナキーム・グリンディーナ（アランカル・カトルセ）。
角の付いた左前頭骨の仮面、金髪で長髪、どこか伊達男風の男は破面Ｎｏ.１５イールフォルト・グランツ（アランカル・クインセ）。
頭に大きな半月上の仮面を載せ、その右半分に布を巻きつけた口から尖った歯が覗く男、破面Ｎｏ.１６ディロイ・リンカー（アランカル・ディエシセイス）。

「誰にも見られて無ぇだろうな？」

「無論だ。」

「・・・・・チッ！」

グリムジョーの問いに従属官を代表してシャウロンが答える。
おそらく彼が従属官の中でのトップという事なのだろう。
そんなシャウロンの言葉に僅か間を置いて舌打ちをするグリムジョー、一体なんなのかは定かではないが、然程大した事でもないだろうと判断したシャウロンはそのまま言葉を続けた。

「此処へ来る途中、複数の強い霊圧を感じた。ウルキオラの報告とは一致しない・・・・・・」

「・・・・・探査神経（ペスキス）を全開にしろ。」

シャウロンの言葉、報告とは一致しない複数の強い霊圧の存在。
グリムジョーとて感知していたそれを、探査神経を解放する事でより正確に捕捉する。
それこそ強い霊圧だけではなく、辺り一帯に存在する僅かな霊圧を放つ者全てをも。

「「「「「　！！！　」」」」」

探査神経を全開にした事でグリムジョー以外の破面はついにその存在に気がついた。
探査神経により僅かでも霊圧を放つものは捕捉できる。
それは当然今霊圧を抑えている彼ら自体にも及ぶ事で、しかしそれは目の前にいるのだから捕捉出来て当然。
言うなればその霊圧を放つ者が居る事は当然の事なのだ。

だが、彼等の探査神経はありえないものを感知した。
報告とは一致しない複数の霊圧ではない、予想以上に強い霊圧でもない。
それは彼らが知っているが、今この場に居る筈の無い者の霊圧。

彼ら五人の視線が一斉に上空へ、彼等のいる更に上へと向けられる。
そこにあったのは人影。
この距離に至るまで発見できなかった事はこの際どうでも良く、その居る筈の無い人物の存在が彼らを困惑させる。

月光に照らされる金色の髪、照らされる事で陰影の付いた鍛え上げられた肉体、月を背負う様にして立ち、本来逆光でその表情は見えないはずにも拘らず何故か爛々と輝いて見える鮮血を湛えたような真紅の瞳。
居る筈の無い人物、彼らにとっては苦い記憶を呼び起こさせるその人物の名はフェルナンド。

第7十刃（セプティマ・エスパーダ）フェルナンド・アルディエンデが月夜にその姿を照らされていたのだ。

「何しに来た・・・・・・クソガキ。」

「ハッ！　流石にテメェは気付いてる・・・かよ。まぁそうでなくちゃいけねぇが・・・な。」

動揺する従属官をして唯一人、王たるグリムジョーだけは冷静だった。
それも当然だろう、何故なら彼一人だけは探査神経を解放する以前からフェルナンドの存在に気がついていたのだから。
シャウロンに問うた言葉、その後の舌打ちの理由はこれ。
彼らがフェルナンドの存在に気がついていない、という愚かしさに向けられたものだった。
だが彼らを責めるのは筋違いでもある、何故ならそれは仕方が無い

事。
実力が違いすぎるのだ、彼らとフェルナンドとでは。
彼らとグリムジョーの実力がどうしようもなく隔たっているのと同じだけ、彼らとフェルナンドの実力もまた隔たっているのだから。

「俺はテメェに何しに来たかを訊いてんだ・・・・・・」

立ち上がり、睨みつける様にしてフェルナンドを見上げるグリムジョー。
別段怒りを顕にしている、という訳でもないが友好的な雰囲気など在ろう筈も無く、その視線に乗るのはどこまでいっても敵意だけ。
それを受けてフェルナンドはゆっくりと彼等の下へと降下していく。
小柄でありながら従属官を圧倒する存在感はグリムジョーに共通するものがあり、知らず従属官達の緊張は高まる。
この二人がこの距離感でこうして言葉を交わすこと事態彼等には想定外の事態であり、何が起こっても不思議ではないと思わせるものだった。

ゆっくりとした降下が終わり、グリムジョーと同じビルの上へと降り立つフェルナンド。
数瞬視線がぶつかるが、それを機に何かが起こるわけでもなく。
ただ口元をニィと歪ませるフェルナンドと、それを不機嫌そうに睨むグリムジョーの姿がそこにあるだけ。
そしてフェルナンドの口が開くと、彼はこう言い放った。

「別にテメェ等を止めに来た訳じゃ無ぇよ。今回は偶々目的が同じ

だっただけだ、だから俺にも戦(や)らせろよ・・・・・・・グリムジョー。」

静寂の破壊
警鐘は遅く
戦火に呑まれる
破壊の権化
飢餓の旅人
黒は赤に
染まりゆく

BLEACH El fuego no se apaga. 65（後書き）

原・作・突・入！
胸を張ってそう言えるよ・・・・・・

大体２２～２３巻のあたりですかね。
今までは好き勝手書いてたけど、ある程度原作の流れや台詞といったものがるのでまぁ書くのが大変で大変で・・・・・・
おかげで連休の最期まで延びでしまった。

台詞なんかも原作のものがあるからあまり大きく変えられないしね。
かといってそのまま書くのは・・・ねぇ？
手抜き感が出ちゃうと思うんだ。

まぁ重要だったり印象深いのはそのままで、あとは分量の関係でバッサリってのも出てくると思いますｗ

次回は何とか死神達を出したいな、なんて思ってますが
作者の悪い癖として、話が伸びでしまわないことを祈るばかりです。

「別にテメェ等を止めに来た訳じゃ無ぇよ。今回は偶々目的が同じだっただけだ、だから俺にも戦らせろよ・・・・・グリムジョー」

やや見上げるようにして放たれ、しかし何処までも同列の言葉。
視線の高さ、身長差、そんなものに上下優劣を判断する材料など無く、そして彼らは何処までも同格だった。
水浅葱色の髪の男、グリムジョー・ジャガージャック、黄金色の髪の男、フェルナンド・アルディエンデ。
共に十刃（エスパーダ）でありそれぞれが背負う数字は”６”と”７”という近しい数字。
数字の上で上位に立つのはグリムジョーの方であるが、その数字もまた彼らにとっては意味など無いもの。
彼等の背負う数字はそれぞれに”通過点”であり”不自由の証”で

しかなく、共に目指すもの、求めるものを手に入れるのには必ずしも必要ではなかった。
だが例え不用であろうとも彼らがそれを背負っている事に異議を唱える者はない。
何故なら彼らにはそれを背負うに相応しい”力”があるから。
誰もが真似を出来るものでもなく、そしてしようとしても出来ない事を彼らは平然とやってのける。
それだけの力を、単一で汎用性は無く、しかし超絶なる”破壊の力”をその身に宿し使役しているから。

故に彼らは十刃。
彼らには不用であろうとも、誰よりも相応しい者。
その二人が今現世にて、まもなく戦場と化すであろうこの場所で邂逅を果たしていた。

「なんだと・・・・・・？」

フェルナンドの言葉に訝しげに言葉を返すグリムジョー。
彼の従属官であるシャウロン達が現世へと侵入したのと時を同じくし、フェルナンドが彼らと同じように現世、空座町（からくら）と呼ばれる場所に出現したのをグリムジョーは探知していた。
理由などは判るはずもなく、おそらくの可能性ではあるが彼の従属

官が後をつけられ、そして彼が侵攻を開始する前に止めようという藍染の差し金か、とも考えていたグリムジョーにとってフェルナンドの先の言葉は少々予想外ではあった。

「別に難しい話、って訳でも無ぇさ。　お前等はお前等で勝手に人間でも死神でも殺せばいい。俺の方も勝手に戦うからな。・・・・・が、ゲタの男と黒い体術使いの女は俺に寄越せ。この二人だけは俺が貰う。　後の残りはテメェらにくれてやるよ、簡単だろう？」

さも当然、といった風で語るのはフェルナンド。
グリムジョーを前にして気負いも萎縮の欠片も無く、普段通りの皮肉気な笑みを浮かべる彼。
彼が言うには何も”共闘”などという事ではなく、”別々”に互いに戦いたいように戦えばいいとの事。
だが一点だけ、彼らがウルキオラの報告で視る事となった”ゲタの男”と”黒い女”だけは自分に戦わせろというもの。
残りの敵には特に興味は無い様子で、好きに殺せば良いとさえ言う始末。

獲物の数からすればアタリハズレはあろうが明らかにグリムジョー達の方が多いだろう。
だがその物言いはどうにも癇に障るものであったのも確かだった。

「オイコラ、フェルナンド。　テメェ十刃になったからって調子に乗ってんじゃねぇぞ。何で俺達がテメェに獲物を恵んで貰わなくちゃならねぇ」

「確かに・・・・・・　まるでアナタの残した獲物を啄ばむが如く・・・到底受け入れられるものではありませんね　」

このフェルナンドの提案にグリムジョーよりも先に否を唱えたのは、彼の従属官であるエドラドとシャウロンだった。
他の従属官も声さえ出さないが同じ雰囲気なのが見て取れる。
そう、フェルナンドの言葉は二人だけでいいと同時に、二人意外は要らないとも聞こえる。
そして言われる方からすればそれは、残りの自分が興味の無い獲物を　恵んでやると言われているのと同じなのだ。

それは屈辱だろう。
本人にその自覚があるかはわからないがフェルナンドの言葉はそういった意図で彼らに届き、彼らはそれを拒んでいるのだ。
獲物を恵まれる、などという事は戦いに生きる者にとって屈辱と恥辱でしかないが故に。

「・・・・・・好きにしろ・・・・・・・・」

だが、彼等の王であり主であるグリムジョーから出た言葉は、肯定であった。
その言葉に従属官達は、何を言っているんだという風で驚きの表情を見せる。
フェルナンドの言を認める、などという類の事がグリムジョーの口から吐かれるなどという事は予想外。

それはフェルナンドも同じ事で、いやにアッサリと受け入れるグリムジョーの態度を今度は逆にフェルナンドが訝しんでいた。

が、やはりグリムジョーの真意は別にあった。

ツカツカと歩を進めるグリムジョー。
それ程離れていた訳ではないフェルナンドとの距離は直ぐに詰まり、二人の距離は遂には人一人分という超至近距離にまで接近する。
見上げるフェルナンドと見下ろすグリムジョー。
約頭一つ分ほど違う二人の身長、見下ろされる事は不快であるが今はどうでもよく。
見下ろすグリムジョーの顔には怒りというよりも、挑発的な意図を浮かばせた睨み付けるような笑みがあった。

「俺もテメェも、殺したいだけ殺せば済む話だ。獲物なんぞ選んでる方が馬鹿を見るぜ？　俺が皆殺しにした死体の中にテメェの目当ての残骸があったところで、俺より早くソイツを見つけられなかったテメェがノロマだった、ってだけの話だろうが」

そう、この男には端から譲るという選択肢は存在しない。
フェルナンドが相手となればそれは尚の事、二人だけでいい等というのは悠長な話であり、結果皆殺しとすることが決まっている彼の中ではそれが二人だろうが十人だろうが、それこそ百人だろうが結果は同じ。

殺し尽くすという結果は同じなのだ。

「ゲタの男？　体術使いの女？　知った事じゃ無ぇな。テメェの目的なんてもんは俺には関係無いんだよ！ウルキオラもテメェも存外微温(ぬり)ぃ事だ・・・・・敵は全員皆殺しなんて事は、大昔から決まってんだろうが！敵は殺す・・・　徹底的にだ！！」

叩きつけられるのは圧倒的殺意の嵐。
これこそがグリムジョー・ジャガージャックの本質。
敵は殺す、薙ぎ倒し、蹂躙し、撃滅する。
そうして進む道こそ彼の往く”王道”であるが故に、彼が目指す”戦いの王”の姿であるが故に。
その殺意の嵐の強烈さ、近くにいる彼の従属官ですら顔を歪ませているほど。
だが、その殺意を誰よりも近くで受け止める男の顔だけは違い、口角を吊り上げる笑みであった。

「微温い・・・かよ。　言ってくれる・・・・・だが俺はあの二人以外の相手をする心算は無ぇ。更に言えばゲタの男よりもあの黒い女、あの女の体術に興味があるだけの話だ。テメェの考えは良くわかった。　殺したけりゃ殺したいだけ殺してりゃ良い・・・・・・だがな、俺の獲物は俺のもんだ、譲る心算なんか無ぇし、横取りする心算なら・・・容赦はしねぇぞ？」

「容赦だと？　相変わらずよく吼える口だ・・・・・出来るもんならやってみな、その時はテメェが死ぬだけの話だ。・・・・・・チッ！　霊圧が動き始めたか。全員霊圧は捕捉したな？　いくぜ・・

・　一匹も逃がすな！皆殺しにしろ！！」

溢れる殺意には殺意で返す。
口角をニィと吊り上げたフェルナンドは、グリムジョーの瞳を正面から見据えて返した。
グリムジョーの言っている事はおそらく正しい、敵に情けをかけるのは三流、情けなどというものは自己満足と陶酔でしかなく、絶対的優位を振りかざしている傲慢さだ。
そして傲慢に身を委ねる者は足元を容易くすくわれ、死ぬ。
戦いとは何処までも苛烈に、緩める事無く勧めるべきもので僅かでも情けを見せればそれは負けなのだ。
徹底的にそして圧倒的に蹂躙してこそ勝利、それが彼ら破面にとっての戦いであり勝利の姿である事は誰の目にも明らか。

だが、だからといって自分を曲げる事などフェルナンドに出来よう筈もない。
皆殺しにしてしまった方が確かに都合はいいのだろう。
しかしそれは敵に限っての話であり、フェルナンドはまだ死神を敵と認識していない。
正確には今だ敵足りえないといったところか、故に興味対象以外を手間をかけてまで殺すのは彼にとって無駄、敵足りえず、求めるものも得られそうにない戦いなど座興の部類であり今それは必要とされていないのだから。

それでも、自分の興味対象まで奪われたのでは面白いはずも無く。
譲る心算など毛頭無いという事を明確に口にするフェルナンド。
彼の目的はウルキオラの持ち帰った情報の中にいた黒い女、ヤミーをその拳足のみで叩き伏せる女だった。

身のこなしも、拳と蹴りの鋭さも、何よりその速さも、その全てがフェルナンドには新鮮に映るもの。
映像ではなく自身の目でそれを見てみたいという思い、フェルナンドが態々現世まで足を運ぶ気になったのは単純にそれだけであり、それを邪魔させる心算など毛頭ないのだ。
殺気を浴びせるグリムジョーに対し、同程度のそれを返すことでその言葉には意思が乗る、本気だという意思が、邪魔をすればお前からでも殺してやると。

だがそれで怯むグリムジョーではない。
彼からしてみればある意味そちらの方が、死神を皆殺しにするより余程面白いものといえる。
やれるものならやってみろ、という挑発に挑発を返すような瞳、滾る意思を湛えたそれで紅い瞳を射抜く彼。

が、その二人が放つ殺気が仇となった。
霊圧を押さえていたというのにあふれ出した殺気は大気を啼かせ、辺りに伝播していた。
そして戦いに身を置く死神達はその異変を察知したのだろう、彼らが捕捉した霊圧に動きが見え始めたのだ。
といってもこれが状況を不利にした、という訳ではない。
元々戦闘になることは明らかであり彼らには奇襲をかける等という予定も無かったのだ。

正面から叩き潰す、策など必要なくこれで充分であると。
力への絶対的自信、フェルナンドやグリムジョーだけではなくシャウロン等従属官にもまた、死神に遅れなどとる筈がないという自負があった。
故にこれは何の不利にもならない事。
グリムジョーがフェルナンドの前から動き、中空へと移動する。

そして彼の号令と共に彼の従属官達は弾ける様に四方へと散らばっていった。
一瞬にして見えなくなる彼等の姿、響転（ソニード）による移動、さしあたり近くにいる者、大きな霊圧を目指す者と行動方針は分かれたが問題など無い。

皆殺しにするという意思だけが共通していれば、何一つ問題など無いのだから。

そんな従属官達を見送る形となったグリムジョー。
フェルナンドもまたその場に残っており、そのフェルナンドへ一瞥をくれるとグリムジョーもまたその場から掻き消える。
更に僅かな間を置いてフェルナンドもまた、その場から掻き消えるようにしていなくなった。

残ったのは月光照らすビルの群れと静寂の夜。
そしてその夜はまもなく、その静謐を打ち破られようとしていた。

「ッ！　なんだ、この殺気・・・・・・　空が啼いてる・・・？」

突如として無差別に襲い掛かったのは殺気の波だった。
近くではなく、ある程度距離を置いてはいるがはっきりと殺気だとわかるのは、彼がつい最近からそれを受ける事を日常としてしまったからか、それともその殺気の鋭さ故か。
悲鳴を上げるかのような空の異変を感じ取ったのは一人の少年とその隣に立つ小柄な少女。
少年の名は『黒崎一護（くろさきいちご）』、橙色の髪に茶色の瞳、細身ではあるが均整がとれガッシリとした身体を高校指定の制服に包んだ彼は普通の高校生、という訳ではない。

”死神代行（しにがみだいこう）”

それが彼の二足の草鞋。
人でありながら死神の力を手にし、世にあまねく人の魂に害なす者、虚（ホロウ）を死神と連携して退治する魂の調節者。
そして死神代行でありながら死神が属する組織、護廷十三隊の隊長格にもひけをとらない霊圧と戦力を有し、尸魂界（ソウルソサエティ）の中心、瀞霊廷全てを巻き込んだ通称『藍染の乱』最大の功労者でもあった。

その遠くから響くような殺気を感じながら、一護は隣に立つ少女へとその視線を向ける。
小柄で黒髪、肩にかかる長さのそれは後ろ髪が跳ね上がり、大きな目はつり目がちで強さと同時にどこか繊細さも感じさせる。
彼女の名は『朽木(くちき)ルキア』、死神の組織護廷十三隊の十三番隊に所属する死神。
現世での任務中思わぬ事態により負傷し、緊急措置として一護に死神の力を譲渡した本人であり、黒崎一護の運命を変えた人物。
そして藍染の乱では藍染の目的、崩玉の入手の為に施された策によって処刑される寸前で黒崎一護が救い出した人物でもあった。

「待て、今調べて・・・・・・ッ!!　この霊圧は!」

「クソッ!　この霊圧・・・!　間違い無ェ、破面(やつら)だ!　ルキア!!」

「わかっている!」

一護と同じようにその殺気を感じ取ったルキアは、伝令神機(でんれいしんき)と呼ばれる携帯電話のような死神の情報端末を操作する。
だがその最中、殺気を感じた方向から今度は強大な霊圧が迸った。
感じる霊圧は大小、差異こそあれ全て数日前に現世へと出現した二体の化物、破面のものと同種のもの。
そしてそれは、破面の再びの現世侵攻を示していた。

一護の声に画面に齧り付く勢いで目を向けるルキア。

画面には感知した破面の霊圧が点となって次々と浮かび上がる。
そしてその点が一つ、また一つと浮かび上がるのと同時にルキアの表情は険しさを増していった。

「1・・・　2・・・　7体だと!?　・・・多い・・・!」

険しさが一層強まるルキアの表情。
然程間をおかず、それもこれだけの量の戦力が現世へと侵攻してくる事は死神側からすれば予想外の事。
先の破面出現によって現世へ先遣隊として送り込まれている死神の数は6人であり、一護を入れても敵と同数。
戦力、能力共に未知数である相手に対し、数の利が無いのは不安要素ではあったが、今はそれを悔やむ時ではなかった。

「こっちに向かって来てんのか!?」

「いや、霊圧を探っていた様だがこちらには向かって来てはいない。・・・・・だが奴等、近くにある霊圧反応へと迷わず向かっている・・・・・・」

「どういう事だよ!?」

敵の出現、そしてそれが攻めて来ているという現状。
迎撃するためか一護がルキアに敵の動向を問うが、その答えは彼にとっては不可解なものだった。
何故なら敵である破面は彼には目もくれず他の霊圧反応へと向かっ

ている、というのだ。
自惚れる心算は無いが先の侵攻の際、破面が自分を探していた事から今回のそれも自分が目的だと考えていた一護。
しかし現実侵攻して来た破面達は彼など眼中に無いかのように散り散りとなっている。
一護にとって不可解である敵の動き、そしてその不可解の理由は彼の予想を超える残酷な形である可能性を彼の隣にいる少女、ルキアが彼に告げた。

「霊圧の大小は関係ない・・・という事だ。奴等は・・・　この町にいる少しでも霊圧のある者を全て・・・・・皆殺しにする心算だ・・・！」

一護に衝撃が奔る。
そう、それは眼中に無いのではない。
同じなのだ、誰を狙おうが誰から襲おうが、最後に残る形は。
彼等の目的、皆殺しという終わりの形は。

「先の殺気に反応して恋次（れんじ）や日番谷（ひつがや）隊長は既に迎撃に動いている様だ。だが・・・・・ッ！　まずいぞ一護！　茶渡（さど）に向かって一体・・・・・近付いている・・・！」

「ッ！！」

夜の静謐は破られ警鐘は鳴り響く。
だがそれは自分の命ではなく友の命、その危機の警鐘。
戦火の夜が開く、そしてその夜明けはまだ、遠かった。

―――――――――

青い氷で出来た翼、それに突き刺さるのは白く長い爪。
爪はいとも容易く翼へと突き刺さり、分厚い氷で出来たその翼はあっけなく裁断された。

「フム・・・・・流石は隊長格。　これだけの戦力差を見せられて尚立ち向ってくるとは素晴らしい！実に・・・ね　」

異様に長く鋭い刃のような爪に付いた血を払うようにして語るのはシャウロン・クーファン。
長く伸びた両腕と、更に長く伸びた指、そして鋏のように鋭い爪、上半身と辮髪は昆虫の様な装甲覆われ、長く伸びた辮髪の装甲の先には大きな鋏状の刃が付いていた。
その姿は人というよりも化物に近い、そう姿を見れば一目瞭然それが解放状態だという事が伺える。
『五鋏蟲（ティヘレタ）』、という名の彼の斬魄刀が解放され、本来持つ力の核を回帰させたその姿。

それに対しているのは腕と背中に竜を模したかのような氷の鎧と翼を纏った死神の少年。
人で言えば年の頃おおよそ１０歳前後、しかしその見た目などは死神にとって然程意味はない。
月光照り返す銀髪、碧眼の瞳は力強く凛とした雰囲気を湛えてシャウロンを見据え揺れる事無く。
小柄ではあるが放たれる霊圧は十二分に力を宿し、氷を纏ったせいかそれとも気質からか冷たさを感じさせる外見と、しかしその内側に紅蓮の様な熱さを秘めたその少年。
名を『日番谷（ひつがや）　冬獅郎（とうしろう）』、護廷十三隊十番隊隊長にして史上最年少で隊長となった天才児である。

しかしその冬獅郎の纏う死神の証、黒い死覇装は所々を彼自身が流す血によって赤く染め上げられていた。

そう、今彼は圧倒的に不利な状況に立っている。
死神が持つ斬魄刀、その斬魄刀戦術の奥義たる卍解をして彼は押されているのだ。
白く長い爪を打ち鳴らす目の前の男、シャウロン・クーファンに。

切裂かれた冬獅郎の氷の翼、それを含む彼が纏う卍解『大紅蓮氷輪丸』。
氷雪系と呼ばれる死神の斬魄刀の分類の中で最強を誇るそれは、例え切裂かれたとしても大気中の水分によって幾らでも再生する。
現に切裂かれた筈の翼もその断面から再生を始め、時を置かずに元通りとなった。
が、現状彼が劣勢であることに変りはない、副官である松本乱菊も早々に下され、戦えるのは彼のみの状況。
実際一太刀も敵に攻撃を与えられていない情況は、不利を通り越していた。

（チッ。　予想以上に強い・・・・・・　だが”　許可　”が下りるまでは俺が時を稼ぐより他無い・・・か）

血を流し荒い息をしながらも冬獅郎は冷静だった。
敵はこちらの予想を超える戦力を有し、”今のまま”では勝利すら拾えない。
故に勝利できるその時まで、その時が来るまで耐えるより他無いと。
そして只時を稼ぐだけではなく、何か一つでもこちらが有利となるものを見つけなければと。

「シャウロン・クーファンと言ったか・・・・・・一つ訊きてぇ。
てめぇは自分を破面Ｎｏ．１１、つまり１１番目と言ったな。
それはてめぇの力の格が破面の中で上から１１番目・・・ってことか？」

冬獅郎の口をついて出たのはそんな言葉だった。
ただ徒に逃げ回り時を稼ぐことも出来る、だが同じ時を稼ぐならば一つでも有用なものを。
破面という彼ら死神からすれば多くの未知が存在する敵を前にした時、最も必要だと彼が判断したのは”情報”だった。
問えば敵が答えるという訳でもない、しかし問わねば欠片すら拾えない。
答えればよし、答えずとも何かしら別のものが拾えればいいと、不足しすぎている敵の情報の入手こそが重要であると冬獅郎は考えたのだ。

「・・・・・そうですね。　確かにそういった側面を持っている事も否定はしません。基本的に私達が最初に与えられる番号は生まれた順番です。しかし上位の番号を持つ者を倒す事で奪い、自身の番号を上げることも可能なのです。ですから一概には言えませんが、番号は”生まれた順”であり”強さの序列”でもあるのです」

冬獅郎の問いに律儀にもシャウロンは丁寧に答えた。
それは優位であるための余裕なのか、それともこれから殺す相手に情報を渡しても問題ないと判断したのかは定かではない。
だが、その答えもひどく曖昧なもの。
強さの序列かそうでないかという問いに、”そうでありまたそうで

ない”という答えはあまりに揺れが大きいもの。

しかし、これが正答なのだ。

彼等の数字には揺らぎがある。

生まれた順である番号と、それを強奪決闘によって奪い上げるという側面。

下位だから弱い、という判断は早計であり、おそらくシャウロンよりも強い破面は下位にもいる事だろう。

それでも彼らが１０番台の番号を死守できているのはグリムジョーという絶対的な強者の存在があったためであるのだがそれは今論ずる事ではなく。

ともかくとしてシャウロンの答えは正しくはあるが、冬獅郎にとっては番号は当てにならないといった程度のものであった。

が、続くシャウロンの言葉が日番谷の動揺を誘う。

「ただし・・・・・・”Ｎｏ．（わたし）１１より上には”そんな考えは無意味ですが・・・ね」

「　！？　」

そう、要領を得ず揺らぎがある数字と力の関係。

しかしそれは１１番以下に限っての事、そこから上は別次元の話。

揺らぎなどというものを抱えては足を踏み入れる事すら出来ず、半端な力で手を伸ばせば死を自身に招く世界。

疑問を感じているような冬獅郎を他所に、シャウロンは彼を絶望に

叩き落すような愉悦を感じながら言葉を紡いでいく。

「判りやすく言いましょうか？　私より上には『十刃（エスパーダ）』と呼ばれる破面が更に１０人存在します。彼等の殺戮能力は私達の比ではありませんよ？純粋な殺戮者の集団・・・・・それが十刃であり彼らを下すことは同じ十刃でも難しい。判りますか？　無意味なのですよ。　番号によって彼らの強さを推し量ろうとする事など。彼等の強さはハッキリ言って別次元。　今のアナタのように足掻く暇すら、彼等は与えてはくれませんよ」

「――　・・・！」

無意味。

番号の大きさ、それによって推し量れるおおよその実力。

そんな思考は無意味だとシャウロンは言う。

それは決して誇張ではない、事実として彼は言っているのだ、無意味であると。

日番谷が息を呑むのが見て取れる。

そのシャウロンの言葉が、語る雰囲気がそれが嘘ではない事を証明していると判ってしまったが故に。

だが、シャウロンの言葉はいまだ止まらず、絶望は更に深まる。

「・・・・・そして、更に言うならば現在コチラに侵攻した中に居るのですよ、十刃が・・・・・・それも『２体』・・・ね」

突き落とすには充分すぎるのかもしれないその言葉。

現在目の前にいるシャウロンに図らずも圧されている冬獅郎にとって、彼が”別次元”と呼ぶ者の存在。
それが2体、殺戮という単一の機能に特化した化物が更に2体この現世へと降り立っているというのだ。

「一人目は藍染様より第6の数字を与えられし者、『第6十刃（セスタ・エスパーダ）』グリムジョー・ジャガージャック。・・・・・そしてもう一人は同じく第7の数字を与えられし者、『第7十刃（セプティマ・エスパーダ）』フェルナンド・アルディエンデ。どうです？どちらもアナタ達にとっては死と絶望と同義の名・・・ですよ・・・・・・」

告げられた名。
姿も威容も何もかもが不明ではあるがしかし、どこか重く圧し掛かるそれ。
それを感じた冬獅郎は、今後続くであろう破面との戦いが一筋縄ではいかない事を確信するのだった。

「残念だったな。　袖白雪（そでのしらゆき）は”地面を凍らせる剣”ではない。この刀で描いた円にかかる天地、その全てが袖白雪の・・・氷結領域だ」

時は僅かばかり遡る。

聳えるのは氷の柱。
天高く間で伸びたそれには、まるで琥珀に閉じ込められた太古の昆虫のようにも見える破面が一体。
名をディ・ロイ・リンカー、グリムジョーの従属官の中でも最下位

ではあるが彼とて破面、一介の死神に遅れをとるものではない。
しかし彼の相手をしたのは、不運にも”一介の”死神ではなくそれ以上の実力を秘めた者だった。

朽木ルキア、それが彼を屠った死神の名。
聳え立つ氷の柱に囚われた彼はその肌のみならず瞬時に体の内側までを凍りつかされた。
その後、間を置かずして崩壊する氷の柱、そして既にその身を凍らせていたディ・ロイの身体もまた、その崩壊と共に崩れ往く。
そしてルキアが氷の柱に背を向け、刀を一払いした時には彼の存在はこの世から消えていた。

「うーでーがピョンと鳴〜る♪」

「いでででででぇ〜〜!!　腕折れる腕折れる!ギャオオオぁぁぁぁ〜〜!」

苦も無く、という訳ではないが破面との初遭遇を勝利で飾ったルキアを迎えたのは、気の抜けたやり取り。
まぁ約一名に関しては骨折の危機ではあるのだが、止める気も失せるような光景ではあった。
そんなやり取りをしているのは死神の姿となった黒崎一護と、制服姿のルキア。

正確には制服姿のルキアの義骸に入っている義魂丸のチャッピーであるのだが、それは言及するに足りないだろう。

「何をしているのだ、たわけ共・・・・・・」

戦いよりも寧ろこの光景を目の前にした方が余程疲れる、といった風のルキア。

ルキアに止められた事でからくも骨折の危機を脱した一護は、いまだルキアの義骸に組み伏されたままながら、彼女へと視線を向ける。

「ルキア・・・お前無事なのか？　アイツはどうしたんだ!?倒したのかよ!?」

「無論倒した。　でなければこうして戻って来られる筈があるまい」

矢継ぎ早に声を発する一護に、ルキアは至極当然といった風で答えた。

あまり大げさなそれは返って嫌味となるが、一護のそれは仕方が無い事。

何せ彼は今日始めて彼女が死神としてまともに戦うところを見たのだ。

現世任務で深手を負い、今日に至るまで霊力の減衰などの理由から戦線に加わる事が出来なかった彼女、それ故に死神としての彼女の戦闘力を知らない一護は、その無事を心配していたのだ。

「あっ・・・・・・　お前、その斬魄刀・・・・・・・」

そして一護の視線は自然と彼女がその手に握る白い斬魄刀へと向かう。

刀、というにはそれは余りにも潔白だった。

人を、また化物を斬る為に拵えられた刀という武器、鉄で出来た鈍色のそれは研ぎ澄まされ確かに美しいが、ルキアの持つ刀はそれとは別の美しさを持っているように一護には見えた。

「『袖白雪』、ルキア様が持つ氷雪系の斬魄刀にして、現在、尸魂界で最も美しいと言われる、刃も、鍔も、柄も、全てが純白の斬魄刀・・・だピョン」

「台無しだな、お前・・・・・・」

ルキアの義魂丸チャッピーの最後の一言が残念な説明はさて置き、その斬魄刀は確かに美しかった。

説明のとおり刃、鍔、柄、そして柄頭から伸びた長い帯に至るすべてが白いその斬魄刀。

そして斬魄刀を持つ、という事はルキアが完全に死神としての力を取り戻しかつ、席官にも食い込むであろう実力を有している事を伺わせるものであった。

「ルキア様は本来席官クラスの実力をお持ちのお方。だけど席官ともなればヒラ隊士に比べて危険は格段に増す・・・・・だからそれを嫌ったある方が隊長達に密かに根回しをして、ルキア様を席官

候補から外させた・・・・・・」

「ある・・・方・・・？」

「そう・・・・・・　朽木（くちき）　白哉（びゃくや）様・・・・・・だピョン」

「・・・だから全部台無しだよな、お前・・・・・・」

チャッピーの説明は続く。
それは本来ルキアの実力は今の境遇よりも上であるという事だった。
今現在ルキアは十三番隊に所属してはいるものの、席官と呼ばれる上位隊士ではなく官位の無いヒラ、下級隊士である。
しかしそれは彼女の実力が足りていないという訳ではなく、一重にある人物の不器用すぎる思いゆえだった。

朽木白哉、ルキアの血の繋がらぬ義理の兄。
四大貴族の一、正一位の称号を持つ大貴族の当主である彼。
彼には死に別れた妻がおり名を”緋真（ひさな）”　といった。
そしてその緋真こそがルキアの実の姉であり、病に伏し、命の火が消える寸前に緋真が白哉に託したのがルキアの事だった。

”守ってやってくれ”と”兄と呼ばせてやってくれ”と、姉として共にいる事が出来なかった自分の代わりに、姉として守ってやることが出来なかった弱い自分の代わりにと。
その妻の最初で最後の我儘を白哉は聞き届け、ルキアを義妹とし、そして危険が及ばぬようにと守り続けていたのだ。
結果としてその白哉の不器用すぎる守るという意思が、ルキアを実力とは釣り合わないヒラ隊士につける事となった。
だがそれでも、例え席官ではなくとも育つものは育ち、才ある芽は

芽吹き花を咲かせる。
その結果が今のルキアであり、守られながらも他人を守れるだけの強さを見につけた彼女は、破面という難敵を退けられるまでに至っていた。

が、その不器用な兄の優しさもチャッピーの残念な語尾が台無しにしているわけであるが。

一護の若干ゲンナリとしたツッコミに再び彼の腕を折ろうとするチャッピー。
そんな様子を呆れた顔で見ているルキアが、そのやり取りをやめさせ、他の戦場への援護に向かうことを提案しようとしたその時。

彼等の心臓はその気配を感じ、ドクンと跳ね上がった。

「・・・何だ？　ディ・ロイの奴は殺られたのかよ？仕方ねぇな・・・・　俺が纏めて殺すとするか。第６十刃（セスタ・エスパーダ）　グリムジョーだ。よろしく頼むぜ？　死神ぃ！」

現われたのは水浅葱色の髪をした男。
丈の短い白い上着、筋肉質な身体つきと鳩尾の辺りには彼ら特有の孔が開いていた。
ギラつく双瞳、楽しくて仕方が無いといった風につりあがる口角、そして何より発せられる野獣の如く荒々しい霊圧。
化物、そんな言葉が浮かんで嵌るような、そんな印象をその男は一護とルキアに与えていた。

（何だ・・・　此奴（こやつ）の霊圧は・・・・！？此奴も破面・・・・！？　しかし本当に同じ種族なのか・・・・・・霊圧のレベルが・・・・　違いすぎる！）

ゆっくりと降下してくる水浅葱色の男、グリムジョー。
だが目の前の男から感じる霊圧にルキアは困惑を隠せない。

違いすぎるのだ。
先程彼女が戦い、勝利した破面とはその何もかもが。
発する霊圧も、気配も、威圧感も、そして漲る殺気も、その何もかもが違いすぎる。
同じ種族だというのに此処までの差が開く、それが敵の実力、これから自分が戦うであろう敵の実力。
ルキアに戦慄が奔り、そしてそれは一護にも同じ事が言えた。

敵の出現により主の義骸を守る事を第一とする義魂丸のチャッピーはいち早く戦場を離脱し、一護はその拘束から開放される。
そして素早く立ち上がると背に背負った自身の斬魄刀、唾も柄も無い、ただ研ぎ澄まされた刃だけの斬魄刀である大刀『斬月（ざんげつ）』を構えた。

彼にも判っているのだ、目の前の敵が如何に危険であるが、そしてその敵が自分達を確実に殺す心算でいる事が。
殺気に満ちたその霊圧、それを前にして一護は斬月を握る手に一層の力を込める。
敵の一挙手一投足、それこそ眉の動き一つ見逃さないために集中する。
そう、そうしなければいけないと彼の中で誰かが叫ぶのだ、そうしなければいけない、そうしなければ一瞬で終わると。

が、その一護の集中が見たのは不可解な行動だった。
外したのだ、彼等から。
目の前に現われたグリムジョーという破面は、何故か彼らからその視線を、意識を外したのだ。

まるで彼等以上に意思を向けるべき者が現われたかのように。

（ッ！　よし！）「一護！！　一端退くぞ！！」

意識を外すという敵の愚行。
それを一護同様見逃さなかったルキアが声を上げ叫ぶ。
今この場でこの敵とぶつかる事は避けられるのなら避けるべきだと。
敵の放つ霊圧は隊長格にゆうに匹敵し、自分一人ではとうてい敵いそうも無いと。
一護と共闘すれば或いは勝機はあるかもしれないが、今の一護は”

万全ではない”。

虚化と呼ばれる現象により、彼の戦力は今非常に不安定で、下手をすれば完全に虚へと堕ちてしまう可能性がある中での戦闘は極力避けさせるべきだと判断した彼女は、迷わず撤退を決めたのだ。

その判断は正しく、勝てない敵に挑むのは勇猛ではなく蛮勇、特攻でしかない。

故にその判断は正しかったのだ、敵がグリムジョー唯一人であったのならば。

「女ァ・・・　悪ぃが逃がす訳にはいかねぇな・・・・・・お前等には興味は無ぇが、どっちでも構わねぇから答えて貰うぜ？あの二人の居場所を・・・よぉ・・・・・・」

唐突に背後から掛けられる声。
そして先程まで何も感じなかった背後からは、彼等の前に立つグリムジョーと同質の霊圧と、気。
威圧感というよりは寧ろ呑み込む様なそれに二人は視線を後ろへと向ける。

そしてそこに立っていたのは金色の髪を靡かせた、紅い霊圧の修羅であった。

前門の豹

後門の業火

どちらもが死地にて

逃げ場など無し

BLEACH El fuego no se apaga. 66（後書き）

話が若干ぶつ切りで、時系列の前後もあったものではないですが演出という事でご納得をｗ

ぶっちゃけ従属官の戦闘やらをいちいち書く心算はありません。
なので彼等に言ってもらいたい台詞だったりは、今回全部言ってもらいました。
南無。

そしてフェルナンドの介入はまさか（？）のグリムジョーと同時。
書いといてなんですが無理ゲー感がビシビシ出てんな・・・・・・・

実際日番谷とも迷ったのですが、シャウロン戦後すぐに倒れてしまい、満身創痍過ぎてキビしいかな・・・と。
それ故に今回の展開と相成りました。

それにしても原作に入ると難しいですね。
原作と、フェルによって生まれた誤差の辻褄合わせとか。
でもそれが楽しかったりもするｗ
大変だけど・・・頑張るかね。

２０１１．９．２４誤字「ヘタレ」を修正。

彼等二人の前に立つのは、荒々しく、野獣の如き殺気を惜しげもなく撒き散らす男。
彼等二人の後ろに立つのは、殺気というよりは威圧感、存在感に近くしかし異質なそれを纏う男。
どちらもが白い衣に身を包み、そのどちらもが胴に孔を穿っている。
そして穿たれたその孔は喪失の証であり同時に人ならざる者の証。

破面（アランカル）

人と同じ姿の器、しかし人とは次元の違う化生。
それこそ余りにも容易く他者の命を奪い去る事が出来る力を有した者。
その化生が二匹彼等を、死神代行　黒崎一護と死神朽木ルキアを挟むようにして今、その場に立っていた。

（クソッ！　何なんだコイツ等・・・・・・とんでもねぇ・・・・・

・！　）

内心で零す一護の言葉が全てを物語っていた。
二体の破面に挟まれる形となってしまった一護とルキア。
前に進む事も退く事も、ましてや下手に動く事すら出来ずにその場に釘付けにされてしまう二人。
ただそうしているだけだというのに一護も、そしてルキアも全身から汗が噴出すような緊張感を覚えていた。
それは強烈な殺気と気当りに前後から挟まれたが故の緊張。
どちらか一方に意識を振りすぎればそれだけで命取りとなりかねないような、二人にはそんな予感が過ぎり、それ故に集中の糸は限界近くまで張り詰めたまま。
それだけの重圧の中に今二人は居り、それは何が切欠で切れるとも知れない綱の上を渡るが如く。
ただただ状況は時を置くにつれ彼らに不利に傾いていくという、非常に厳しいものだった。

「・・・・・クソガキ。　テメェ何の心算だ・・・・・」

不意に口を開いたのは一護達の目の前に立っていた破面。
グリムジョーと名乗ったその破面は、一護とルキアなどまるで眼中に無いかのように彼等二人の背後、そこに立つもう一体の破面へと話し掛ける。
放たれる殺気は相変わらず荒々しく、その表情には若干のイラつきが見て取れるような気がした。

「何の心算も何も無ぇよ。　思ったより速くテメェの従属官（フラシオン）が殺（や）られたんだ、それなりの奴かもしくは目当ての奴等かと思って此処に来た・・・ってだけの話さ　」

おそらく浴びせかけられている殺気の量は一護達となんら変らないにも拘らず、その金髪の破面はどこか皮肉気な笑みすら浮か平然とそれを受け止め、グリムジョーの問いに答えていた。
まるでそれが日常的な一コマだとでも言わんばかりに、まるでこんな殺気は挨拶程度だとでも言わんばかりに。

”　化物　”そんな言葉がそのやり取りを見ていたルキアに過ぎる。
彼女が死神として戦ってきた敵、虚（ホロウ）とは違う、ただ差異があって違うのではなく次元が違う化物。
住む世界が、身を置いている世界が、戦いの次元が、彼女の基準としていたものとは懸離れている。
只の会話で彼女にそう思わせてしまうほど、破面二人のやり取りは彼女の眼には異常に映っていた。

「・・・・・チッ。　だったらコイツ等はハズレだ、テメェが探してる奴等じゃ無い。　他を当たるんだな」

「ハッ！　確かに違う・・・が、別に構わねぇさ。あてもなく探すより、コイツ等のどっちかに吐かせた方が早ぇに決まってる」

「・・・先に見つけたのは俺だ、俺がブチ殺す。二匹共な・・・・・・　文句は言わせねぇ　」

「違うな。　見つけたのは同時だ、此処へ来たのも・・・な。だか

ら俺にもコイツ等を殺る権利はあるに決まってんだろうが」

獲物を挟み言い合う二人。
やはりまるで一護達の存在など無いかのように己の意見だけをぶつけ合う。
そこに譲歩などというものは存在せず、ただ我を通す事だけが存在した。
どちらも決して退かないその場の雰囲気、グリムジョーの方は睨みつけるように、もう片方の方は口元に笑みを浮かべたままそのグリムジョーの強烈な意思を受け止めしかし怯まない。
その態度にグリムジョーの表情は更に険しさを増したかのようだった。

「・・・・・邪魔すんならテメェから殺すぞ、クソガキが・・・・・」

「ハッ！　俺の台詞だったそれをテメェが言う・・・かよ。だがまぁ、それはどこまでもソソられる話ではあるが・・・なぁ・・・・・」

立ちはだかるのならば、邪魔をするのならば殺す。
それが例え同じ種族、同じ破面という存在であっても些かの躊躇いも無く。
グリムジョーが発した言葉からはそんな意思がありありと見て取れた。
それは人間、死神というモノから見れば異常。
何処までも”　個　”を、そして”　我　”を追及し、協調や同調

といったものをまるで嫌悪でもするかのような振る舞い。
そしてその考えは何もグリムジョーだけのものではなく、その意、その異常性を前にしてもう一人の破面はニィとその笑みを深めている。
怯む事など皆無、その笑みに浮かぶ感情はどこまでも喜色でありお前を殺すという言葉をこの破面が嬉々として受け止めている事の証明に他ならないという事実。
それもまた異常なのだ、殺すという強い言葉を歓喜を持って受け止める事。
そしておそらくは只で殺される心算など皆無であり、逆に殺してやろうかという意思すら透けて見えるその笑み。

ここへ来て一護、そしてルキアも理解した。
目の前にいるこの二人はおそらく、破面と呼ばれる種族の中でも一等”外れている者”であろうという事を。
化物の集団である破面、その化物の集団の中でも更に化物と呼ばれる部類に入る尋常ならざる者達であるという事を。
化物の中の化物、それは生粋の強者であるという事実を示し、命を刈り取る者の証明。

それを前に足を止める事の愚かさ、状況に流される事の無意味さ、ただ時だけが過ぎるのみでそれが事態を好転に導く可能性の希薄さ。
ただただ雰囲気に、状況に、殺気に気迫に異常さに呑まれ行動を起さず、”　下手に動けない　”という自らが架した呪縛によって自らを大地に縛り付けるようにしている二人の現状。

それは怯えだ。

力ある者を前にし、その力にどうしようもないかのようなその差に彼等の心は震え、怯えていたのだ。
だがそれは仕方の無い事でもある。
誰しもがそんな心の弱さを持ち合わせており、それが顔を覗かせるのは彼らが至極全うな精神と生き方をしてきた証でもある。

しかし、戦場に全うな精神等というものは必要ない。

そして今一護とルキアに必要なのは、状況を静観する事ではなく状況を作り出す事。
流されるのではなく自らが流れとなって現状を動かし、事態を動かし、好転には足らずとも今を打破しようと自らが動く事。
目の前にチラつく死の予感をして尚、前へ前へと進もうとする”覚悟”を見せることより他無いのだ。

死地に踏み入って尚、自らの往く先を見据え信じる”覚悟”を見せるより他、道など無いのだ。

（何やってんだよ・・・・・・　退けば老いるぞ・・・臆せば死ぬぞ！・・・・・ビビってんじゃ無ぇよ、俺！　俺が此処で止まってる間にも、誰かが危ねぇ目に会ってるかもしれねぇじゃねぇか！だったら進めよ俺！　俺が・・・護るんだ！！）

決意とは、覚悟とは、強く瞳に浮かぶもの。
そしてその瞳に覚悟と決意を浮かべたのは一護だった。

立ち止まらない、退かない、臆さない。
彼の分身、彼が持つ斬魄刀、斬月から贈られた言葉を心の内で呟く一護。
只進み、愚直でも進み、足を前へと踏み出す事をやめない事が彼の強み。
精神の揺れはいまだ大きい、甘さも多分に残してはいるのだろう、だがそれでも。
それでも彼の決意は、覚悟は確実に彼に力を、踏み出し進み、護るための力を与えるのだ。

「・・・・・いくぜ、ルキア」

「ああ・・・・・」

呟くように零れたその声には、怯え等の負の感情は見えなかった。
あるのは言葉通りの意思だけ。

行く、と。

進むという意思だけがその声には乗り、それはやや遅れてではあるが一護と同じように覚悟を決めたルキアに確と伝わる。
踏み出したのは二人同時。
一護は前方へ、そしてルキアは後方へと示し合わせた訳でもなく二人は同時に踏み出した。

今死神の二人に出来る最善は、最悪の状況を避ける事。
目の前の尋常ならざる破面が二体同時に彼らに襲い掛かって来る、という状況を回避する事だった。

二対二ではなく一対一、もしもどちらか一方が倒れたとき、二対一となれば状況は不利を通り越して逆転が不可能なものとなるだろう。
それは一見破面側にも言える事ではあるが、実力が突出した者に敵の数などはそう問題ではない。
だがそれでも一護達にとっては一対一でも歩が悪い事には変りは無い。
しかし、ただ状況を静観し、無意味に過ごすよりは余程そうする価値はあると、彼等二人は決断したのだ。

既に飛び出しと同時に二人の斬魄刀は振り被られ、それぞれの前に立つ破面へと向けて初太刀は振り下ろされる。
状況を見るのではなく初太刀から相手を倒しに行くその太刀筋、彼等二人に残された道は少なく、此れが今彼らに出来る精一杯でありそれはある意味実ったと言えるものだった。

破面達二人からしてみれば、今や一護達の姿は自分達の間にある風景に近いものだった。
意識を向けるべきはその風景の一部ではなく、この場で唯一自分の敵足りえるだろう相手のみ。
それ故に意識を二人に向けてはおらず、結果一護達の瞬時の攻撃は奇襲めいたそれとなり彼等二人に襲いかかったのだ。
覚悟を決めた彼等死神二人それぞれの一撃、それを奇襲めいたそれで受ける事となった破面二人。
当然備えていた相手ではない者からの攻撃に、彼等破面二人は意表を突かれるか形となる。

が、それはあくまで奇襲めいた攻撃であり、それでは彼等二人には

足りなかった。

「なっ！？」

「くっ！！」

それぞれ一護とルキアから声が漏れる。
それは驚きと苦い思いの浮かぶ声。
一護の驚きは加減など無く振り下ろした自身の斬魄刀、斬月という名の彼がただ斬る事だけを追求し研ぎ澄ませたかのような斬魄刀を、その腰に挿した刀でもなんでもない、破面グリムジョーの前腕だけで受け止められ、そこに傷一つ残していないという事に。
ルキアの苦い声はコチラも加減無く一撃で仕留める覚悟を持って振り下ろした斬魄刀が、鼻先を掠めるか掠めないかのギリギリで敵を捉えられなかったという事、そしてそれは自分が外したのではなく、目の前の破面が完全に太刀筋を見切って避けた事が判ってしまった為だった。

初太刀によって決する事は始めから目的ではなかった二人。
言うなればどうしようもなく破面それぞれに自分一人を意識させる事が目的であり、それは達成されたと言っていいのだがそれでも、近付き、刃を振るったからこそ見える”　差　”には動揺を隠せない様子だった。

「なんだ？　テメェ・・・　せっかく生かしてやってたのに、よっぽど死にたいらしいな・・・・・・」

尚その両腕に力を込め、刃を押し切ろうとする一護。
しかしそれでもグリムジョーの片手はピクリとも動かず、そして薄っすらとも傷つく事は無い。
それどころか刃が突き立てられようとしているにも拘らず、グリムジョーは平然と言葉を発していた。
平然と、何もなかったように。
そう、何もないのだ、彼にとって今の状況は何もないのと同じ、危機を感じる必要性がまったくない普通の状況でしかなかった。

露骨ですらある実力差、そして圧しても切れぬそれは、一護が過去一度体験した感触と酷似していた。
それは一護が尸魂界きっての戦闘凶である凶獣、更木（ざらき）剣八（けんぱち）を相手取った時と近い感触。
意識して研ぎ澄ました自身の霊圧と刃、それが無意識に敵が発する霊圧に負け、傷を負わせる事が叶わない。
ただ剣八のときと違うのは、発する霊圧ではなく破面の外皮、鋼皮（イエロ）の硬度を一護の剣が上回っていないという事なのだが一護にそれを知る術はなかった。

「無手の相手にいきなり斬りかかる・・・かよ。ハッ！　存外死神も悪くないもんだ・・・な」

対してルキアの方は初太刀が避けられると同時にやや後方へと跳び目の前の破面と距離を置いた。
初太刀が避わされて尚その場に止まるのは下策、何故ならそこは敵の間合いの只中であり自分にとっての危険地帯。

例え前に出る覚悟を決めようとも敵の間合いも掴めていない中では、無策で攻め続けるのは覚悟ではなく無謀な事。
よって彼女は距離をとった、緊張は最大に高められ刃の切っ先は常に敵を捕らえたままで。

だが彼女と相対していた破面はといえば、その彼女の攻撃がよほど意外だったかのようで、しかし顔には驚きではなく喜色が浮かんでいた。
どこまでも、どこまでもその破面には喜色が浮かぶ。
それは戦いというものが好きなのか、あるいは意外だった事が嬉しいのかは定かではないが、言えるのはその破面にとって今のルキアの行動は思った以上に喜ばしいものだったのだろう、という事だけであり、それは同時にルキアの攻撃はこの破面にとってその程度。
危機を感じる以前のものでしかない事の証明でもあった。

そして、二つに分かれた戦場は急激に加速した。

「ウラァァ！！」

短く吐かれた気の入った言葉。
それは一護と相対する破面、グリムジョーのものだった。
声と同時に発せられたのは彼の霊圧、一護の斬魄刀と拮抗する彼の腕の甲から発せられた水浅葱色の霊圧は一護の斬魄刀を容易に押し返し、それにとどまらず一護の身体ごとそれを弾き飛ばした。

「フン・・・・・・　死神風情が・・・・・・・まぁいい。　テメェとの決着は死神共を皆殺しにした後にしといてやるよ、クソガキ」、

一護をその霊圧で吹き飛ばしたグリムジョーは、一度弾かれる一護を鼻で笑うと、もう一人の破面に今度は視線すら向けずにそう言い放つ。
そして次の瞬間にはまるで掻き消えるようにその場から姿を消してしまった。
おそらくは弾き飛ばした一護を追ったのであろう破面グリムジョー、そしてその場に残されるルキアともう一人の破面。
ある意味一護とルキアの目論見は成功した、と言っていいのだろう。
戦場は二つに分かれ、同時に襲われるという挟撃の状況は回避された。
だが此処からが一護とルキアそれぞれにとっての本番、明らかな化物をたった一人でそれぞれが相手にしなくてはいけないという事実。
彼等にとっての正念場であり瀬戸際が始まったのだ。

（どうする・・・・・？　初太刀は見切られ避わされた。もし同じ事をしたとしも避わされるのが道理、ならば直接攻撃ではなく鬼道系の攻撃で撹乱してやれば・・・・・・）

一護が吹き飛ばされ戦場を弾き出されてもルキアは動じなかった。
正確には動じるという隙を見せることはなく、それは見せなかったと言うよりは見せられなかったという表現の方が適切だろう。
意識を割けば隙が生まれる、そして隙が生まれれば戦いは決してしまうかも知れないのだ、自らの死をもって。
故にルキアは動じず、自分の勝利のための道筋を、その可能性を瞬時に思考し続ける。
それは決して勝利を諦めていない事の証明、敵が強大だという事な

ど関係はない、勝利を諦めず絶えず模索する事がその者に勝利を呼び込むのだから。

「ハッ！　まぁそう気張るなよ、死神。　俺は別にお前と戦う心算は無ぇよ、お前に興味は無いんでな・・・・・ただ俺の質問に答えさえすれば何処へなりとも消えて構わねぇし、追いもしねぇよ」

（何・・・　此奴（こやつ）、一体何を・・・・・・？）

だがそうして一人気を張るルキアとは対照的に、彼女の目の前に破面は戦いの気配を見せはしなかった。
気当たりはそのままに、おそらく生来のもので御し切れていないかのようなそれを発したままで、しかしその破面にルキアに質問があると言うのだ。
そして、ただその破面はルキアに質問があると言うのだ。
まるで気安く、道でも尋ねるかのように。
そのあまりの不釣合いに困惑を浮かべるルキア、もしや何かの罠かと疑ってしまった彼女は決して間違いではないだろう。
だが、そんな罠は始めから無く、その破面は本当に只質問を口にした。

「話は簡単だ・・・　さっきの死神のガキ、あのガキがヤミーの野郎に殺されそうになった時助けにはいった二人・・・・・『　ゲタの男　』と『　黒い体術使いの女　』、その二人の居場所さえ吐いてくれればテメェは用済みなんでな・・・・・」

（ッ！！　）

それを聞くなりルキアは内心僅かながら動揺してしまう。。
確かに自分達が現世へと赴く際、最初の破面侵攻時に一護達の救援のため二人が向かった事は情報として彼女も知っていた。
ゲタの男とは名を『浦原(うらはら)　喜助(きすけ)』、現世にて浦原商店と言う名の店の店長をしているが、その実はとある事件によって尸魂界を追われた死神であり、追われる以前の職は護廷十三隊十二番隊隊長にして同隊技術開発局初代局長を務めた鬼才。
そしてもう一人、黒い体術使いの女の名は『四楓院(しほういん)　夜一(よるいち)』、彼女もまた浦原喜助同様追われる身の上。
浦原喜助が尸魂界を追われる切欠となった事件において、彼の逃走を幇助した罪によって追われる彼女は元大貴族。
天賜兵装番『四楓院家』の当主にして四楓院家が代々長を務める隠密機動総司令官と護廷十三隊二番隊隊長を兼務した女傑。

その二人を目の前の破面は探していると言うのだ。
理由は定かではない、が、何かしら思惑を持って浦原と夜一を探している事は事実。
ルキアには想像でしかない可能性ではあるが、もしかすれば藍染が障害となる可能性がある二人を排除しろと命じているのかもしれないという考えすら浮かんだ。
そしてその可能性は充分に考えられ、それ故彼女は僅か見せた動揺を即座に仕舞い込んだ。

「どうだ？　知ってんのかそれとも知らねぇのか、早いとこ答えろ死神」

「・・・・・もし、私が貴様の言う二人の居場所を知っていたとして、私が・・・それを素直に答えると思うのか？」

「答えるさ。　テメェだってこんな簡単な問答で死にたくはない、だろう・・・・・・？」

問う破面、余計な時間は使いたくないのか僅か急かすようなそれに、ルキアは是でも否でもなく答える。

戦いにおいて単純な戦力は脅威である。

しかし、それと同等に大事なのは精神力。

強大な戦力もそれを振るう者の精神が追いつかねば、伴わねば腐り果てる。

真に怖ろしいのは冷静な暴力であり、怒りの熱に浮かされたそれは脅威ではないのと同じように、精神を乱した力は往々にして地に堕ちる。

ルキアの言葉はそれを誘うもの。

問いは単純、しかしそれを煙に巻くような答えは相手の精神に僅か爪を立てる。

決して傷つける訳ではなく、しかし不快には思う程度のそれ。

だがそれがいい。

不快感とは心にたつ漣（さざなみ）。

小さなそれは時を置く毎に大きくなり、何時しかその精神は戦いの最中荒れていく。

何も純粋に保有する戦力だけが戦局を完全に左右する事は無いのだ。

戦局の外、番外からの一手、搦め手に近いそれもまた戦いには必要なもの。

敵との戦力差を自覚しているルキアには、勝つための手段の全てを用いる必要があり故に彼女はこう答えたのだ。

だが、そんな彼女の言葉も破面に漣をもたらす事はなかった。
それはどこか確信めいた言葉。
簡単な問答、それは答えに窮する事など無くあるのは是か否かの二つに一つ。
故に単純、迷う事も何も無い只どちらかを答えればよく第3の解など存在しない。

こんな簡単な問いで、窮し迷いそして虚言によって命を落とすのは馬鹿だと、その破面は言うのだ。
そしてその言葉は暗にこう言っているのだ。
戦う心算は無いと言った、だがしかし。

謀ろうとすれば殺す、と。

言葉に嘘はないだろう。
何故ならその言葉と同時に、破面から吹き上がるものがあったから。
霊圧、簡単に言ってしまえばそれだけの事だがそれでも、吹き上がるそれは強力だった。
まるで大気を焦すような、そんな錯覚すら覚えるその霊圧。
明らかに先程倒した破面と目の前の破面とは次元が違う事を、改めてルキアが認識するのには充分すぎるそれ。

だがそれでも、彼女はそこに覚悟を持って立っている。
そしてその覚悟とは、敵を倒すことも然ることながら、朽木ルキアという死神としての覚悟でもあった。

「戯け！　脅しの心算か！例え・・・　例え私がそれ知っていたとしても、私が貴様にそれを教える事は無い！誰かの命を売って永らえる事など私はしたくない！私の・・・私の死神としての誇りにかけて！それで例え私が死すとも、私は・・・・・・　黙したまま死す事を選ぶ！死神を舐めるな！　破面！」

決意の言葉が響いた。
彼女の決意、覚悟を載せたその言葉。
例え自らが死すとも仲間を売るようなことはしない。
決意、覚悟、そして誇りが彼女にそれを選択させる。
守られるべきは何かを問うた時、今の彼女は自らの”　命　”ではなく”　誇り　”をとったのだ。
もしものときは永らえる事よりも殉じて死す事を選ぶと。

「・・・・・成程。　死神にも誇りだのなんだのと言う輩は居るらしい・・・・・だがな、テメェが喋らねぇからハイそうですか、と退く程俺は優しくは無ぇよ。吐かせてやるさ、程々に痛めつけてでも・・・なぁ」

誇り、という言葉に僅かに反応を見せた破面。
それが誇りある行動に対する敬意か、それとも誇りなどくだらないという事かまではルキアには判断できない。
だがルキアにも判ることが一つ。
この破面が退く気は無い、という事。
話さないというのならば、吐かせると。
黙して死す事すら辞さない覚悟を前にしても尚、吐かせると。

一度決めた道、それを曲げずに貫き通そうとするかのような破面。
ルキアが口を割る可能性は限りなく低いかもしれない、だがそれでも、目指す者に最短で届くにはこれが一番早そうだという直感。
そしてその直感を疑わず信じる意志力、瞳、霊圧から溢れるその意思がルキアにも見えていた。

「だがまぁ、困ったことに痛めつけると言っても俺は手加減が苦手でね・・・・・早々死なれても困るだけだ、だから・・・・・・俺に出来る最大限の手加減ってやつをしてやるよ、死神」

「なっ！？」

破面はごく自然にそれを宣言した。
その宣言は何処までも自然で、まるで疑いも驕りも何も無い純粋な言葉。

手加減をしてやる。

宣言されたそれは屈辱的な言葉。
手加減をする、という事はある意味本気を出すに足らないと言われている様なもの。
そしてそれは同時に”　お前など敵ですらない　”と面と向かって言われているのと同義なのだ。
今回の場合は死なないようにする、という事が破面の目的でありその為にそれは必要な事なのだろう。
だが、それが判ってしまうが故にその言葉は屈辱感を増す。

敵足り得ないのではない、敵ですらなく、丁重に扱われるのと同じ事であるが故に。

怒りが沸き立つ感覚をルキアは覚えていた。
敵の心を乱そうとした自分が結果、心を乱しているという状況はあまり褒められたものではないがそれでも。
そうなってしまうだけの屈辱感が彼女には芽生えていたのだ。
しかしそれは同時に研ぎ澄まされた精神を冒す漣。
隙を生む要因であり、あまりにも迂闊な精神の揺れ。

それを見せ始めた精神は、奇しくも敵の言葉により静まりを得た。

「研ぎ澄ませよ。　テメェに死なれると俺が困る。俺に出来る最大限だ・・・・・・　心を細くしろ、針よりも細く研ぎ澄ませて穿て、風景は見るな、極限に集中して絞って解くんじゃ無ぇぞ」

響く言葉はまるで助言にも似たものだった。
ルキアの怒りに沈みそうだった精神が急速に冷えていく。
敵の言葉に、しかしその言葉はルキアに確実に響いていく。

目の前の破面が腰の後ろに挿した鍔の無い鉈のような刀を抜く。

おそらく斬魄刀であろうそれを抜く様が、ルキアにはしっかりと見えた。
意識は手に握った刀と、その刃の切っ先、そしてその先に捉えた敵の姿を一直線に結びつける。
切っ先から細く伸びるのは彼女の意識、集中が高まるのがわかりそれでも尚、集中は高まり続ける。

そこに怒りは無い。
あるのは敵と、自分と手の刀だけ。
そして戦いに向く意思だけだった。

敵の言葉によって高まった集中。
いや、引き戻されたと言うべきそれ。
乱した集中が再び波紋一つ無い水面（みなも）へと帰っていく。
何故敵がそんな事を言ったのか、今はそれを考える事すら忘れ、ただ敵である破面へと集中するルキア。
そして、戦いは始まった。

敵が消えたのは一瞬。
次の瞬間には敵は彼女の目の前へと飛び掛っており、振り被られた刃は彼女目掛けて振り下ろされる。
が、極限の集中の中ルキアはそれに反応し、自らの斬魄刀で振り下ろされる破面の一撃を受け止めた。
甲高い金属音が響く、斬魄刀と斬魄刀、刃と刃のぶつかり合いにより発せられた霊圧は弾け四方へと爆ぜる。
木々を揺らし、家々を揺らし、電柱を揺らし電線を撓ませて。
上段から振り下ろされたそれと迎え撃った白い刃は互いを押し返そうとほんの一瞬であるが拮抗し、そして一方が競り負けた。

衝突地点から弾かれるのは黒い影、死神だった。
距離にして１０ｍ程か、破面の一撃に耐えかねたのかルキアは後方へと弾き飛ばされる。
が、その姿に傷を負った様子はなく、敵の初太刀は受け止めたと言っていいだろう。

「そうだ、それでいい。　俺の手加減とテメェの集中、これでチャラってもんだろう・・・な。あぁ、そう言やぁまだ名乗ってなかったな、俺の名はフェルナンドだ。生き残れよ？死神・・・・・・奴等の居場所を吐くまでは・・・なぁ・・・・・・」

余裕を見せる破面　フェルナンド。
彼からすればこれ以上の手加減など無く、これで死なれればそれはもう仕方が無い事。
死神、朽木ルキアからみれば何が手加減なのかわからないそれは、知る者が見れば口をそろえて彼が戦ってすらいないと答えるものだった。
だがそれでも、それでもルキアは弾かれる。
それは生物としての根源的な強度の差であり、自ら最も得意な事を封じても尚横たわる川の如く。

彼女はいまだ気付けない。
只の一太刀でそれを見抜けという方が酷な話ではなるがしかし、気付いてはいない。
そしてそれに気付く事に遅れれば遅れるほど、彼女は劣勢に立たされる事になる。
フェルナンドの手加減の意味を、彼を知る者からすれば珍しさすらある最大限の譲歩を。

戦いの夜は今だ続く。
長い長い戦いの夜が、長い長い試練の夜が。

そして何処かで、空が裂ける音がした・・・・・・

牙を突き立てる意味
喉を噛み千切る理由
追いすがり仕留める価値
お前に無いのは
その全て

黒き瞬き

照らせよ炎

BLEACH El fuego no se apaga. 67（後書き）

戦闘開始。

というか場面的にはそう動いていない、という罠。
また書いてるうちに長くなったパターンですねw
といっても最近に比べるとやや短め、ではありますが。

さて、今回は更新の早さに比べ意外と難しい回でいた。
なぜなら、どうしても二人が・・・・・・
フェルとグリムジョーが戦う流れになっていくんです！

いやいや、お前等此処はまだ早いでしょうに、と諌める感じでしたw
そしてルキアには、フェルが出来る最大限の手加減を。
あまり手加減が好きでないフェル、しかしそれも已む無し。
破面の身体能力考えると、これで丁度よさそう・・・だよね？

２０１１．１０．０１
”彼等”、”二人”という表現が誰を指しているのか判りづらいという
ご指摘を頂きましたので、修正してみました。

BLEACH El fuego no se apaga. extra8（前）

番外篇8投稿。
名前はあえて書かない。

我等三人諸共に
生きる意味は主の為に

響き渡る鋼鉄の悲鳴。
甲高く、数瞬の間もなく弾かれ火花を散らしあう。
もしそれに残光が尾を引いたとすればそれは曲線、弧を描いただろう。
黄金と紅、二つの光は時折交わりを見せながらも弧を描きながら離れ、そしてまたぶつかり交わる。
ただ惜しむらくは一方の軌道、具体的に言えば紅い軌道の方はどうしようもなく無骨で、粗野で、美しき黄金の軌道と相対しているだけにそれは際立ち、超一流とは言い難いものに見えた。

「・・・・・今更判りきっていた事ではあるが、フェルナンド。やはりお前は刀の”　才　”には恵まれていないな・・・・・・・・

「判りきってんなら今更言う事も無いだろうがよ・・・・・・・」

数合の打ち合いの後、二人はその足を止めた。

幅広の刀でその中心が空洞となっている刀を持った女性と、刀身はやや短く、鍔も無くどちらかといえば刀より鉈に近いそれを持っている男。

第３十刃（トレス・エスパーダ）　ティア・ハリベルと、破面（アランカル・ナーダ）Ｎｏ．ｎａｄａフェルナンド・アルディエンデ。

客分というよりは居候に近い形でハリベルの宮殿、第３宮（トレス・パラシオ）に住まうフェルナンド。

戦う為に、自らの生の実感を得る為に、そしていつかハリベルを殺す為にフェルナンドはその目標たるハリベルに師事していた。

といっても立場はあくまで対等、師事といってもあれこれと口を出すわけでもなく、戦い、叩きのめし、その身を持って教えるといった格好で。

師と弟子、というよりは共に切磋琢磨する者同士のようにも見える二人。

今日とてそんな日頃の一幕に過ぎず、練武場にてハリベルの従属官達の前で戦う二人。

しかしフェルナンドの方はといえば気に食わないという雰囲気を漏らしてはいた。

「”　才　”に恵まれてねぇ、なんてのは端から判ってんだ。だったら斬り合いなんて鍛えてもしょうがねぇ、敵が刀を、武器を振り

回そうが俺はこの五体で全て吹き飛ばす。それに何の問題がある」

フェルナンド・アルディエンデに刀をあつかう”才能”は無い。
壊滅的、という訳ではないがそれでも、超一流、生死を賭けた戦いにそれでは足りないのだ。
だが彼にはそれを補って余りある”力”があり、それ故に今日のように刀を使った戦いなど鍛えても仕方がないと。
それ故にあまり気乗りしていないフェルナンド、しかしそんなフェルナンドにハリベルは落ち着いた雰囲気で言葉を返す。

「確かに、お前ならそれも可能だろう・・・・・だがな、それは同時にお前自身がお前の可能性を潰しているのと同じなのだ。戦いとは常に紙一重、その中で全てを拳で切り開く事は容易ではない。ときにその刃が必要になることもあるだろう。その時、不得手だからとそれを抜かないのは愚かだ。一点突出もいいが、全体の底上げもしなくては足元を掬われるぞ、フェルナンド」

それは諭すような声で語られた。
自ら不得手であると自覚し、しかし他があるからとその不得手をそのままにすれば何時か困ることになる。
不得手とは才能如何もあるがその者の意識によるところも大きく、不得手であると自ら忌諱するのは愚かな事だと。
確かに一点に突出し、それが飛び抜けていればいる程その不得手を必要とする場面は少なくはなる。
だが、それがまったく無くなる等という事は無く、何時かその場面に直面したとき、それはあまりにも脆く見えるのだ。
故にハリベルはフェルナンドに刀を持たせ、戦っていた。

不得手、それも才は無くとも決して伸びないわけではないそれを放置するのは、あまりに愚かしく。
またそんな事で倒れてもらっては困るという想いから。

「なるほど・・・・・・　戦いの可能性・・・ねぇ・・・・・・だがハリベルよ、可能性が増えるって事は、当然間違う可能性も増えるって事だ。それで馬鹿を見る事になったらそれこそ目も当てられねぇぞ？」

「なに、心配など要らんさ。　お前がそんなヘマをするとは思えん・・・し、何よりそうなったとして、それを切り抜けられぬお前ではあるまい？」

「ハッ！　随分と高い評価なこった・・・・・・」

戦いの中の可能性、選択肢の広さの優位性を語ったハリベルに対し、フェルナンドは皮肉気な笑みを口元に浮かべて答える。
確かに可能性、選択肢は多いほうがいいのだろう。
それは一つの状況により多く対応でき、その中から最も最善である行動を導き出す事が出来るという事。
だがしかし、選択肢の多さはときに間違った選択を誘発し、それ故に窮地に陥ったとすればそれこそ愚かではないかと言うフェルナンド。

だがハリベルも然る者、それは彼女からすれば通り過ぎた問答であり、答えなど決まっていた。
それはフェルナンドという男への信頼、彼女が知るフェルナンドという人物が選択肢の多さから最善を間違う、などという事をする筈

がないという思い。
絶対的な信頼、そして自負。
万が一それがおこったとしても、その窮地を前にフェルナンドという人物がその状況を脱せない等ということはありえないという、信頼を越えた確信。
何の根拠もない、だがしかし彼女の中にある確信がそう言わせる。
心配する必要などない、と。

「さぁ、もう一度いくぞフェルナンド。　いいか？よく覚えておけ、”己を細くしろ、川は岩を砕けても穴は穿てぬ、水滴だけが岩に穴を穿つ”のだ。水滴となり集中しろ、何も刀を持った時だけではない、戦いとは極限の集中の只中で生き続ける事なのだから・・・な」

贈られた言葉は一つの真理。
戦いとは集中の連続である。
そして力で押しつぶす事は容易ではあるが、それだけでは決して成し遂げられない事があると。
それは細く絞った己が精神、心であり、力を只力として振るうのではなく、その力をどう用いるかこそが肝要なのだと。
そしてそれは刀を持った時のみならず、すべてにおいて通ずるものなのだと。

届いた言葉にフェルナンドは一度小さく笑みを見せる、そしてその笑みがゆっくりとだが消えていった。
次第表情も退いていき残ったのは敵を、ハリベルを見据える強い瞳だけ。
気配はいまだ荒く、無手の時とは比べようもなく隙が見えるそれは極限の集中とは言いがたい。

彼の刀に構えはない、その手に握っただけの斬魄刀をただ敵目掛けて振るう以外の方法を彼は知らない。
だがそれでも、先程までの彼とはほんの少し違いがあった。
それは、刀をただ握っているのではなく、握ったそれにまで意識が通りつつあること。
それだけで超一流の仲間入りなどという事は、おこがまし過ぎて言えないだろう。
どこまでも彼の剣は超一流には届かない、それはこうして鍛えても決して届かないのだ。

だがそれでも、僅かながら彼の剣は前に進んだ。
集中、武器を持っているのではなく、武器もまた己が一部であるという事実。
気が付いたとはいえずとも、その一端を彼は今、見つつあるのだ。
極めるには遠く、おそらく極める事は叶わないであろうそれ。
しかし、それでも彼はまた一つ、自身の”幅”を僅かに広げたのであった。

ハリベル様とフェルナンドの奴が打ち合ってる。

こういう光景は結構見慣れたもんだけど、今日はいつもと違ってフェルナンドの奴も斬魄刀を持ってた。

まぁ言っちまえば相変わらずヒドイもんだ。
刃筋も何も無い、ただハリベル様目掛けて思いっきり振り下ろしたりするそれは、斬撃なんておこがましくて言えもしない。
あれくらいならアタシにだって捌ける気がするのは、きっと間違いじゃない。うん。

ホント、アイツはよく判らない奴だぜ。
武器持った方が弱くなる、とかどんな冗談だよ。
どう考えたって武器使った方が強くなるのが当たり前だろ！

・・・・・って、こういう当たり前って思考が既にダメなんだろうな。
アイツを相手に当たり前、とかあるわけが無い、とかってのはダメだ。
フェルナンドの奴はそういうのを平気で越えてきやがる。
あの馬鹿に勝ちたきゃ、どんな小さな可能性もアイツならやってのける、って考えてないとな。

でもその辺ハリベル様は流石だよなぁ～。
アイツと戦っててどんな状況になっても絶対油断しないんだもんな。
絶対に緩めないんだ、ハリベル様は。
これが本物の殺し合いじゃないってわかってても、絶対緩めない。
そのなかであの馬鹿はそれを承知で挑んでくんだから、手に負えない。
絶対ハリベル様の方が強いに決まってんだろうが！ったく・・・・・・
でもアタシはあそこまで挑んでいけんのかな・・・・・

そういう所はフェルナンドの奴のスゲェとこかも知れねぇけど。

ん？　なんかフェルナンドの奴の気配が変ったような・・・・・・
こう・・・なんつーか、意識がよりハリベル様だけに向いてるっつうか・・・・・・
集中が増してる・・・・・・？
うぉ！　なんか剣捌きがさっきより鋭くなってねぇか！？
元が悪いから五十歩百歩かもしれねぇけど、こんな一瞬で変んのかよ・・・・・・

スゲェ・・・・・・　やっぱスゲェな、あの馬鹿野郎！
ハハ！　強ぇ！　ダメダメな刀振ってあれだ！無手になったらどんだけだよ！
見てみてぇなぁ・・・あぁ、見てみてぇ。
ハリベル様とアイツ、ホントに強いのはどっちなのかを！
きっと震えるほどスゲェ戦いに決まってる！
そんでハリベル様が勝つに決まってんだけど、でも！見てみてぇなぁ！！

見て・・・・・・みたい・・・・・・よな？あたし・・・・・・

―――――――――

ハリベル様とフェルナンドが打ち合ってる。
にしても珍しいねぇ、フェルナンドが斬魄刀使ってるなんてさ。
実際あいつが斬魄刀使ってるのなんて、あたしが知る限り最初の一回だけだった気がするよ。
まぁハリベル様に使え、って言われて渋々だってのは雰囲気で判るけどね。

破面は鋼皮(イエロ)があるから、ある程度素手で戦ったって問題は無いさね。
でもさ、だからってフェルナンドみたいに斬魄刀使わないってのは中々いないよ。
敵が、同じ破面が斬魄刀抜いて斬りかかって来る。
そしたらこっちも抜いて対応するのが常識だと思うけど、あいつは違うんだよなぁ・・・・・・

前なんてあたしが振り下ろす斬魄刀を、避けきれないと判断するや逆に踏み込んできたんだから。
実際面食らったね、アレは。
避けられない、というか避けりゃ腕の一本も落としてやれたのに、あいつ踏み込んで鍔元を肩の肉で受けたんだから。
間合い潰されて、しかも鍔元じゃ幾許も斬れやしない。
それどころかそのままあたしに掌底食らわして、さらに砂漠に叩き付けんだからさ・・・・・・

あいつはきっと頭がおかしいのさ。
自分の命が戦いの後に残る、残らないなんてのは二の次。
戦いに生きる、戦いの中に生きる、そういう類の馬鹿野郎なのさ。
嫌になるねぇ、まったく・・・・・・

ほぅら、またあの馬鹿が一つ階段を上ったよ。
『穿心』、だったかな。
ハリベル様の教えの一つ。
まぁ”　炎　”のフェルナンドに”　水の理　”が実際どんくらい利があるのか判らないけど。
それでも、あいつの集中が増したのは確かさね。

あ～あ、またあいつ強くなったよ、きっと。
こっちが一歩進む間に、あっちは二歩も三歩も前に行きやがるから始末におえない・・・・・・
もうとっくに追い越されてるしね。
流石だよ、まったく。
ハリベル様が気に掛けるだけの事はある、ってもんだろうね。

・・・・・でもさ、正直あたしは残念なんだ。
アパッチの馬鹿はきっと、どっちが強いのか知りたいとか、見てみたいくらいにしか考えてないんだろうけど。
判ってんのかねぇ・・・・・・
それを見て、決着が付くって事はさ・・・・・・

どっちかが死んじまう、って事だってさ。

そう思うとあたしは残念だよ。
あたしはそんなに”今”が嫌いじゃないからさ、こうして5人でいるのが、嫌いじゃないからさ。

だからこそあたしは残念なんだよ。

その結末を止められない事が・・・さ。

――――――――――――

ハリベル様とフェルナンドさんが打ち合ってらっしゃいますわ。

それも何故かフェルナンドさんの方は、斬魄刀をつかって・・・・・・

気でも触れたのでしょうか？

ハリベル様に才は無いと言われ、御自身でもそれを認めてらっしゃるというのに・・・・・・

実際はハリベル様が、不憫なフェルナンドさんの為を思って鍛えて下さっている、と言ったところでしょうけど。

あの方の規格外ぶりは今に始まった事ではないけれど、それでも全部完全でないというのは、正直安心しましたわ。

何者にも得手不得手がある、それは長所と短所、そして短所とは弱

点ですわ。
あの馬鹿げた攻撃力と、打撃、組技、投げ技を使うフェルナンドさんにもそれがあった。
決して完全無欠な者などいないといういい証明ですわね。

それにしてもハリベル様は本当に嬉しそう。
口元は隠されておられますから見えませんが、目元が薄っすらとですが緩んでますわ。
ちょっとした嫉妬を覚えますわね。
私達従属官の誰が相手でも、ハリベル様があんなに楽しそうに戦う事はありませんもの。

でもそれも仕方が無い事かもしれませんわね。
ああも目の前で伸びていく力を見せ付けられれば、誰だった嬉しくなるはずですもの。
戦いの中で育っていく力、相手を凌駕しようとする力。
戦士としてフェルナンドさんを鍛えようというハリベル様からすれば、喜ばしい事この上ない事。
そしてなにより、その戦いの中でハリベル様ご自身もまた力を磨いているという事実が、その思いを大きくするのでしょう。
凌駕させまいと立ちはだかる、その為に力をより高みへと自ら押上げる感覚。
そうさせるフェルナンドさんの圧力、不謹慎かもしれませんが、ハリベル様は楽しくて仕方が無いのでしょうね。

でもやっぱり妬けますわ。
だって私達では、ハリベル様にそこまで迫る事が出来ませんもの。

あら、フェルナンドさんの気配が変りましたわ。

力、というより精神的に何かを掴んだのかしら？
いえ、掴んだというには及ばずとも、触れた、といったところでしょうね。
それでもまた先に行かれたことは確かですわ。
悔しい。

ほら、やっぱりハリベル様が楽しそうな御顔をしてますわ。
私達には見せない、そして引き出せない御顔。
嬉しいような、でも少しだけ寂しいような、複雑な気持ちですわね・・・・・・

にしてもあの二人、お互いの事を本当はどう思っているんでしょう？

ハリベル様は・・・・・・弟子？　いえ、どちらかといえば弟のような感じかしら？
手の掛かる弟をなんとか一人前にしようと頑張っている、そんな印象？
麗しいですわ。

対してフェルナンドさんは・・・・・・・　標的・・・・・・・獲物・・・・・？
なんとも殺伐としてらっしゃいそうですわね。
でも聞いた話によれば、ネロがハリベル様を殺そうとした時に、「誰にもこの女は渡さない」と言ったそうですし、もしかして奥底では・・・・・・・
いえ、ありえませんわね。

きっと自分の獲物だ、とか思ってたに決まってますわ。
どっちもどっち、浮いた話の一つも無し、ですわね。
最後に残るのは殺伐とした戦場と、殺し合いの風景。

あの二人もきっとその只中に立つのでしょうね・・・・・・
遣りきれませんわ・・・・・・

でもそれは当然の事ですわ。

何せ私達は破面。

”　こころ　”を失った血塗れた獣。

その私達に”　愛　”や”　恋　”なんてものが存在する筈ありませんもの。

我等三人諸共に
生きる意味は主の為に

そして主を思えばこそ
時よ止まれと思うは罪か

今よ続けと
思うは罪か

BLEACH El fuego no se apaga. extra8（後）

番外篇の８でした。
本編書けよ、は言わないお約束です。

前半三人称、後半それぞれの一人称です。

どれが誰だか判りましたか？
あまりｓｉｄｅと安易に書いてしまうのは好きではなく
書かずとも判ってもらえてこそ、と思いまして。

「ハリ×フェルの端（三人娘）から見たら良い雰囲気の日常」というお題の下
書きましたが、案の定良い雰囲気が出ていない気が・・・・・・
どうしたら出るんだ！良い雰囲気よ・・・・・・

因みにハリベルが言った「己が心を細く・・・」は、微妙に変えていますが出展は
『うしお〇とら』に出てくる『穿心』、自分が好きな言葉です。趣味で出したｗ

今回は急募したネタ募集に応えてくださった、なおぽんさんに感謝を。
楽しく書けましたｗ

そして番外のネタがまた・・・・・・

音が響く。

鋼鉄と鋼鉄の鬩ぎ合い、火花散らすそれは只の鋼鉄同士がぶつかり合うのではなく、更なる殺傷力を高めた一振り。

刀という命を奪うという目的を追求し、何時しかその中に美しさすら内包した、”血と美”の結晶が響かせる音。

振り抜かれ、激突した刃が響かせるその音の強さは振り抜いた者の意を示すかのよう。

打ち倒す、斬る、という意思が存分に伺えるそれは、しかし未だその意を遂げてはいない。

そして何より驚くべきは、その音は刃同士の奏でる音ではない。

一体誰が信じるだろうか、その甲高い鬩ぎ合いの音が奏でられていたのは。

刃と肌がぶつかり合う為だ、という事を。

「くそっ！！」

打ち込み、止められ、傷はつけられず。
そんな事を幾度も繰り返したのは、黒い着物に橙色の髪をした少年、死神代行黒崎　一護。
手をかざし、止め、弾き返すを繰り返すのは、白い着物に水浅葱色の髪をした男、破面（アランカル）グリムジョー・ジャガージャック。
別段表情を変えもしないグリムジョーに対し、一護の額には薄っすらと汗が浮かび、僅かな焦燥が浮かぶ。

距離をとった一護に対し、グリムジョーはただ表情もなくそれを目で追うに留まっていた。
一護からすれば追撃が無いことが不思議ではあったが、現状ではそれは彼にとって好都合。
敵が攻めてこないのならば一気呵成に攻め立てるより今彼に取れる選択肢は無く、故に彼は再びグリムジョー目掛けて突進し自身の身の丈ほどある斬魄刀を振るった。
たとえそれと同じ行為が、今に至るまでただの一度も敵に傷を負わせていないとしても。

より激烈に、より深く強く踏み込み繰り出される斬撃は回を追う毎にその威力を増してはいるのだろう。
だが、それでも届かない。
キンという甲高い音を響かせる一護の斬魄刀と、グリムジョーの素肌。

そう素肌だ。
グリムジョーは振り下ろされる一護の刃にただ手を翳すだけ。
それだけで彼は微動だにすることも無く一護の斬撃を受け止めてし

まった。
鋼皮（イエロ）、破面の皮膚にはそう呼ばれる一種の装甲がある。
それは人肌のようでその実堅牢な外皮、そしてその鋼皮は破面の主な防御手段であり、それ自身の霊圧硬度を上回らなければ破面には傷一つつけられないという代物だった。
一護が未だグリムジョーに傷を負わせられない理由は全てそれ。
一護の斬魄刀、斬月の殺傷力よりも尚グリムジョーが展開している鋼皮の硬度の方がそれを上回っている、という事なのだ。

左腕の甲で一護の刃を受け止めたグリムジョー。
迫る一護の瞳を真正面から見ていた彼の視線は、ついで自分が片腕で受け止めている一護の斬魄刀へと向けられる。
そしてその顔には僅かばかりではあるが落胆に近いものが浮かび、そして一護の刀を受け止めていた左腕の甲から一息に霊圧を放出すると再び一護をその場から弾き飛ばした。

弾き飛ばされた一護は空中を錐揉みしながらも霊子を集め足場を作り、それを削るようにして制動をかけて体勢を立て直す。
その顔には先程よりも濃くなった焦燥が浮かび、息も僅かに上がりつつあった。

「・・・オイ、死神。　テメェ舐めてんのか・・・・・・？」

空中で膝を付くようにしていた一護に、地上から声が投げ付けられる。
視線を向ければそこには先程自分を吹き飛ばした破面、その顔は至極つまらなそうであり、それを怪訝に思う一護をよそに破面グリムジョーは言葉を続けた。

「俺はテメェをそのまま殺す心算なんか無いんだよ。さっさと出せよ、テメェの卍解。　ただの雑魚を皆殺しにするのはつまらねぇ・・・・・ちったぁ抗ってみせろ死神、俺がテメェの全部をぶっ潰してやるよ！それが出来ないなら死ね！　他の奴等より一足速く・・・・なぁ・・・・・・・・！」

「てめぇ・・・・！！　」

覚悟を決め攻勢に出た一護、しかしそれは何処までも届いていなかった。

グリムジョーの言葉は一護にこう告げているのも同じだった、今のままでは遊びにすらならないと。

斬月、一護がその手に持つ彼の斬魄刀。

鞘も柄も鍔もなく、柄の変わりに握りには晒が巻かれただけの身の丈に及ぶ巨大な刀である彼の斬魄刀。

ただ”斬る”という一点だけを追求し、攻撃力と耐久力だけを高め他の全てを引き替えにしたかのようなそれは、斬魄刀の中でも上位に食い込む攻撃力を有しているだろう。

だが、その刃は通らない。

幾度と無く打ち込み、その度に更に深く、強くと踏み込んだ一護の斬撃。

それは敵を斬る、倒すという意思の現われに他ならず、彼がグリムジョーに本気でぶつかっていた証だった。

しかしそれでも届かない。

それどころかその一護の攻勢を、グリムジョーはつまらないと言い

放つのだ。

グリムジョーにとってこの侵攻の勝利、結果は判りきったものだった。

楯突く者は皆殺し、邪魔する者も皆殺し、敵は全て皆殺して進む、それが彼の生き方。

情けなどかけない、気まぐれすら起きない、立ちはだかる全ては殺して進む、そうすれば後の遺恨などありえない。

残るのは屍と、圧倒的な力の残滓、そして恐怖だけ。

だがもしかすれば復讐に燃える者もいるかもしれないが、それはそれで構わない。

何故ならそれもまた立ちはだかる者であり、殺して進むという行動になんら変りはないのだから。

しかし、立ちはだかるのならば抗ってもらわねば困る。

ただ敵を殺すのは呼吸をするより簡単なことだ。

簡単すぎて欠伸出て、感情は波立たず高揚も感じない。

それではつまらない。

立ちはだかるのなら、抗うというのなら、せめて”戦いと呼べる次元”には踏み入ってもらわねば困る。

グリムジョーは一護にそれを求めているのだ、彼は一護が卍解出来る事を知っている。

今その刃が通らないと知りながら、それをしないのは一護の都合かそれとも別の理由があるのか、グリムジョーにそれを推し量る事は出来ず、そしてする心算も無い。

抗うのなら、自分を殺すという意思を見せるのなら全力で戦え、そ

れが出来ないのならば死ね。

グリムジョーにあるのはそんな簡単な選択肢のみ。
彼はそれを一護に突きつけたに過ぎなかった。

「どうすんだ？　死神・・・・・・　戦って死ぬか、何もしねぇまま死ぬか、さっさと決めろ」

それは最後通告。
死ぬ、という結末はおそらく決まっている事なのだろう、だがその過程をどうするか、卍解して戦うのか、今のまま死ぬのか、道は二つに一つであり、そのどちらを一護が選ぶかなど決まりきっていた。
たとえ卍解することでアレが表に出てこようとも、卍解し続ける事でアレに自分が侵食されるのが判っていたとしても。

仲間を、護りたい人達を護るにはここでグリムジョー（この男）を倒さねばならないのだから。

瞳は一段と強くなる。
そこに僅かばかりの不安と、更に僅かな恐怖が浮かんではいた、しかしそれ以上に浮かぶのは護るという決意。
そしてその決意の元、一護は覚悟を決める。
大刀”斬月”、右手に握った自らの斬魄刀を前へと突き出す一護。
左手は斬月を握る右手に添えるように、グッともう一度柄を握る手に力を込め、斬月を一護は更に一段前へ突きだす。

霊圧は急速に高まり、内包されたそれはまるで解放の時を待つように膨れ上がっていく。
『卍解』、死神という者達が絶え間ない修練の末辿り着く一つの境地。
戦う為に日々研鑽を重ね、霊圧や肉体などの単純な力だけでなく精神的な力、自らの斬魄刀と対話し、同調し、更に自らの分身たるそれを屈服させることで得られる極地の力。

その力、単純に見積もって現状の5倍から10倍。

それを持って今、一護はグリムジョーに相対そうというのだ。
突き出された斬魄刀と右腕、霊圧の上昇に呼応するように柄に巻かれて余っていた晒が一護の右腕を螺旋状に取り囲みながら背へと伸びる。
尚も高まる霊圧、青白い光となったそれが吹き上がるように一護の周りを取り囲み、光の壁となっていた。
そして時が、霊圧が、意思が決意が満ちたとき、一護はその言葉をもって解き放った、今自分に出来る究極の一、その姿を。

「・・・卍、解ッ!!」

言葉と同時に霊圧は爆発を伴って弾けた。
空中に生まれる霊子の渦、その奔流。

それだけで力の増大を知る事ができるような爆発を、グリムジョーは地上から静かに見上げる。

「・・・・・そいつか」

その顔は、先程よりも鋭く見える。
ここから、全てはここから。
グリムジョーにとってはここからが本物だった。
抗え、抗え死神と。
ただ皆殺しにするのは簡単な事だ、なんの障害もない戦いなど児戯にも劣ると。
俺の往く道、王の道、戦いの道を塞き止めて見せろと。
抗い、立ち塞がり、そして俺に殺されろと。

グリムジョーの内に住ま獣が吼える。
これから始まるものが殺し合いとなるか、それとも一方的な殺戮となるか。
結末など誰にも見通せるものではなくしかし、戦いは始まろうとしていた・・・・・・

―――――――――

「ウラァァ！！」

「くっ！」

言葉と共に振り下ろされた刃は相手を捉える事無く空を斬り、そのまま地面、アスファルトで舗装された道路へと直撃し亀裂を生んだ。後方に飛び退いてそれを避わした黒い着物の死神は、白い着物の男が刃を地面に叩きつけた瞬間を狙い駆け、男目掛けて突きを繰り出す。

しかし突きは頭を逸らした男によって避わされ、かわりに跳ね上がるようにして下から死神目掛けて刃が跳ね上がった。

跳ね上がった刃は死神の黒い着物を僅かに裂き、しかし肉までは届かず死神は再び距離を置く。

黒い着物の死神　朽木ルキアと白い着物の男、フェルナンド・アルディエンデの戦闘は、決め手を欠き長引いていた。

「やっぱりそう簡単には当たらない・・・かよ。これだから刀ってのはいけねぇ、まぁコイツがそれ様じゃないってのもあるが・・・な。・・・・・・だがもう少しか？　息が上がってきたようだぜ？女ぁ・・・・・・」

距離を置いたルキア、その前ではフェルナンドがどこか愚痴めいた

言葉を吐いていた。
右に左にと刀を投げるようにして遊びながら、その都度握りを確かめるようにしているフェルナンド。
まるで久しぶりに握ったとでも言うかのようなその行動、実際彼は久しぶりにその刀を握り戦っているのだが、ルキアにそれを知る術はなく、彼女からすればその行動は余裕の顕らに見えただろう。
なによりフェルナンドの指摘どおり、ルキアの息は上がり、呼吸も浅くなりつつある。
対して運動量はおそらくルキアを上回ってるにも拘らず、息一つ乱さないフェルナンド。
種族、肉体の強度を考えれば当然なのかもしれないが、それもまたルキアには余裕の表れと見えていた。

（なんという力だ・・・・・・　斬撃の威力、一撃の鋭さも気をつけねばなるまい。これが破面・・・・・・　やはり先程私が倒したものとは次元が違う。認識が甘かったか・・・・・・・　だが・・・・・）

乱した息を整えながら、視線は外さずフェルナンドを注視するルキア。
一護と別れ、戦闘に移行してからの事を彼女は頭の中で整理していた。
敵、フェルナンドと名乗った破面はその発する霊圧に見合った圧力を持って彼女を攻め立てていった。
手に持ったおそらく斬魄刀であろう鉈のようなそれを振るい、鋭い一撃を持って彼女を追い立てるフェルナンド。
その刃の一撃は圧倒的膂力から来る威力を有し、ルキアの身を切裂かんと迫り続ける。

迫り来る刃を避わしながら反撃を試みるルキアではあったが、刃自体は完全に見切られており、かといって鬼道を発動する隙もなく状況は膠着、いや、攻め立てられている分彼女の方が若干不利ともいえた。

が、そう思う中彼女には引っ掛かるような違和感が残り続けていた。

（だが・・・・・　鋭さ、威力に対して剣技はどこか不釣合い。鋭さも二撃三撃と続くうち次第に褪せていく・・・・・なんなのだこの違和感は、　発する気配に対して圧倒的に伴わない・・・・・誘いか、或いは膂力に任せて戦うのが破面達の戦い方なのか・・・・）

そう、ルキアが戦闘開始時より程無くして感じ始めた違和感、それは不釣合いという感覚。

発する気配、霊圧、その他全てにおいて目の前の破面は明らかに強者、しかし、振るわれる剣にだけはそれを感じないと。

確かに鋭く、威力も充分なそれは命を奪うには足るもの、だが何かが違うと。

強いて言えばそれは恐怖。

フェルナンドの刃からルキアは恐怖を感じなかった。

だが恐怖といっても命を奪われる、という事に対するものではなく別のもの。

強者、剣技を極めた者の刃には吸い寄せられるような美しい殺意が乗るのだ。

まるで誘われるように、刃が迫ってくるのではなく自分がそれに吸

い寄せられ、斬られる事を望んでいるかのような感覚。
無論実際そんな事はありえない、だが戦いの中でそう感じていしまう事。
描かれる軌道に、極められた超一流の皇かさに、誘蛾灯にどうしようもなく引き寄せられてしまう虫達のように、吸い寄せられるそれは美しく、同時にこの上ない恐怖、魅入られるという恐怖なのだ。

しかしルキアはそれをフェルナンドの刃に見ることはなかった。

それがルキアの感じた不釣合いさ、とでも言うべき感覚。
放つ強者の気配に対して圧倒的に釣り合わない刃の冴えの無さ、鋭くはある、威力もある、だがそれだけ。
言ってしまえば斬られる気がしないのだ。
あの刃が自分を完全に捕らえ、斬り伏せる光景を想像出来ない。
自分に対して消極的な場面を想像したくないのではなく出来ないという事実、それが違和感、どうしようもない違和感なのだ。

（考えた所で答えなど出ない・・・・・ならば、この違和感を自らの好機とするより他無い！いや、おそらくこれだけが千載一遇の好機！）

意を決したルキアが動く。
罠の可能性は未だ捨てきれず、勝機と言うには拙いものかもしれない。
だがしかし行く。
進まねば、僅か見えるだけの光明でも前に出ぬ者に勝利は無く、躊躇えば時期を逸し水泡に帰す。
故に行く、戦いとは常に紙一重、それを潜り抜けてこそ勝利は手中

となるのだから。

「縛道の二十一！　赤煙遁（せきえんとん）！」

ルキアが叫ぶと同時に彼女の周りに赤い煙が立ち昇り、それは瞬く間に増えフェルナンド諸共辺りを飲み込んだ。
煙が迫ってもフェルナンドに動じた様子はなく、ルキアの姿を見失いながらもその顔に焦りはない。

（目眩まし・・・か。　普通ならこのまま逃げるんだろうが、それなら始めからそうしてる・・・・・・ってぇ事はこれに乗じて殺（や）りにくる、と見た方がいい・・・か。ククッ・・・・・・）

そう、この場においてこの煙が意味するところはつまりそういう事。
遁走と奇襲、現状において敵が取るであろう選択肢は二つ。
しかし逃げる事が目的ならば、戦いが始まる前にそうするべきであり、〝誇り〟を口にするような類の人間にそれは考えづらいと、フェルナンドは踏んでいた。
故に残るのは奇襲、煙に乗じ姿を暗まし、襲い掛かる心算なのだろうと。
だがそれが判っていてフェルナンドに焦りはない、元々今彼に敵の死神、ルキアを殺す心算はあまりなかった。
情報を聞き出す、吐かせる事が目的である今の彼にとって殺してしまえばその勝ちは無い。
故にこうして今自分に出来る最大の手加減をしながら戦っており、敵が優位に戦いを進めようとするのは寧ろ歓迎される事。

そう、歓迎するべき事なのだ、敵の優位、敵の力が増せば増すほど。

うっかり殺してしまう確率は減るのだから。

赤い煙の中、右手に刀を持ち特に構えも取らずに立つフェルナンド。
元々彼に刀の構えなど無く、それに対して修練を積む心算も無いまま今に至っていた。
所詮彼にとって刀は選択肢の一つ、それも低い選択率のものでハリベルとの修練も最低限のもので留まっており、剣士には到底及びはしない。
故に自然体、敵の存在に反応する形でしか今は刀を振るえない状況下で、無意味未熟な構えは余計に大きな隙を生むだけなのだ。

僅かに時を置き、そして次の瞬間煙に影が掛かる。
目の端でそれを捕らえたフェルナンドは、片腕を、刀を持った右腕を振るいそちらを縦に斬り付ける。
彼の右側、刀を振りぬいた威力だけは強力な斬撃によって煙が吹き飛ばされ、そこに見えたのは黒い影、死神朽木ルキアの姿。
しかしフェルナンドの斬撃は彼女を捉えてはおらず、紙一重で避わされていた。
その光景にニィと口の端を吊り上げるフェルナンド、やはり奇襲かと、自分の予想が当たった事も然る事ながらルキアが逃げずに立ち向ってきた事にその笑みは零れていた。

だがそんなフェルナンドの笑みはルキアには何の関係も無く、彼女は自分の光明を見つけるべく進むのみ。
案の定、赤煙遁による目眩ましで敵の斬撃は荒れていた、目視して敵目掛けて振り下ろすのではなく気配を感じた方に叩きつけただけ

のようなその斬撃、避わすのは容易であり斬撃後の体勢も崩れた敵の懐に入るのもまた容易。
水平に構えられた自身の斬魄刀、溜めは既に成され後は振りぬくのみの状況。
詠唱破棄した鬼道ではおそらく倒せない、かといって詠唱の時間は流石に無く袖白雪（そでのしらゆき）の技は現状では隙がやや大きい。
故に斬撃、それも敵に一撃手致命傷を与え尚且つ、もし倒せずとも敵が退くに足りる傷を与えられる場所、首目掛けて斬撃を放つ事。
敵の剣に陰り、ないし隙があるのならばそれを掻い潜り斬る、ルキアが好機と捉えたそれは今成されようとしていた。

「甘ぇよ！　女ぁ！！」

だがフェルナンドがそう簡単にそれを許す筈も無い。
地へと叩きつけるような斬撃、それを打ち込んだ体勢から無理矢理手首を返し、やや後ろに倒れるようにして体勢を作ると刃は再び跳ね上がるようにルキアへと向かおうとする。
それは剣技でもなんでもない、身体操作と力にものを云わせただけの攻撃。
流麗、などという言葉は断じて浮かばないような、無骨さだけの剣がルキアに迫ろうとしていた。

「縛道の四！　這縄（はいなわ）！」

「！？」

しかしルキアもまたそれを予見していた。
一つ前の攻防で敵が崩れた体勢からでも剣を振るえる事は判っていた、故に返す刀が襲い来る事も想定され、対処法は既に彼女の中にあったのだ。
言葉と共にフェルナンドの刃に霊子で編まれた縄のようなものが無数に巻きつき、地面へと刀を縫い付ける。
それは時間にすれば一瞬の事だろう、如何に無数の縄であろうとも所詮は霊子、フェルナンドが力を込めれば引き千切ることは容易。

しかし、その一瞬というものが戦いでは命取りなのだ。

何故ならフェルナンドが刀を拘束され、迎撃を妨害されたその一瞬でルキアの刃は彼に届く。
ほんの一瞬の差、しかし生死を別つ一瞬の差、ルキアが見つけた僅かな光明。
所詮は奇襲、避けられず止められなければ自分を危うくする綱渡り、しかしそれだけが彼女の勝機。

「甘いのは貴様の方だったな、破面」

甘い、と。
何の策もなく敵の懐に踏み込む者などなく、事態は想定し対処してこそ。
その点で言えばルキアはよくやったと言える。
よく考え、決断し、実行する、それを一瞬のうちにやってのけるのは才覚のある証拠だろう。
故にこの状況、あとは敵の首を刎ねられるかどうかにかかってくるがそれでも、この状況は彼女の勝利に近い光景だった。

自らが引き寄せた勝機を、彼女はものにしたと思っていた。

フェルナンドが、その手に握った刀から手を離さなければ。

（なに！？　だが・・・！）

戦いの最中自らの武器から手を離すという行為。
それを捉えたルキアに困惑が奔る。
ありえない事だった、少なくともルキアにとってその行為はありえない、ある筈のない行為。
だが目の前の破面はそれを苦も無く行った、それもあっさりと、何の躊躇いもなく。
武器を捨てた事よりも寧ろルキアヲ困惑させ、驚かせるのはそれ。
欠片の躊躇いも見せない即断、武器というものにまったく固執しないような素振り。

だがしかし、そうだとしてルキアが決定打を放とうとしている事に変りはなく、武器を捨て何かしらの防御をしたとて傷は免れない筈とルキアは止まらずに握りへと力を込める。
後は振りぬくのみ、間に何が入ろうが関係なく全力で振りぬくのみなのだ。
何故なら勝利は目前なのだから。

そして彼女は自身の刃を振りぬこうとするその時おかしな感覚に晒された。
景色は急に色あせ、それどころか色を失い黒に塗り固められる。
何も見えない暗闇、戦いを決する、少なくとも彼女がそう思った瞬間にそれは襲ったのだ。
その目には映らないものの敵は刃を離し体勢は崩れ死に体、自分は斬魄刀を構え力を溜め、後は振りぬくのみという瞬間に。
それがなんなのかルキアは理解できなかった。
だがそれでも、振りぬこうとする動作を彼女はやめない。
決さなければ、勝たなければという意思、覚悟が彼女を事の外後押しするかのように。

そして次の瞬間、不意に視界が戻り気が付けば彼女は今し方眼前にいたはずの破面フェルナンドから、ある程度離れた場所まで知らぬ間に移動していた。

何が起こったのかルキアには理解できなかった。
見ればフェルナンドの方は散り散りとなりつつある赤煙遁の残滓、地を覆うようなそれの中膝を付くようにしており、顔は俯きがちで表情はよく見えない。
何故敵が膝を付いているのか、それよりも何故敵に攻撃を見舞おうとしていた自分が、こんなにも離れた場所に移動しているのか。
少なくともそれはルキア自身の意思でも、また彼女の無意識でもなく。
驚愕する彼女はその声が掛かるまで自分とフェルナンドの間に、自分達以外の人影がある事に気が付かなかった。

「どうやら・・・間に合ったようじゃのぉ。無事か？　ルキアよ・・・・・」

「よ、夜一殿・・・・・・・」

夜の闇に煌くは月光を受ける黒髪。
長い黒髪は一つに結わえられ、風を受けて僅か揺れていた。
肌は艶やかで褐色、身体つきは女性らしさを存分に感じさせながらも引き締まり、すらりと伸びた手足は美しさと同時にしなやかさと強さも併せ持つように見える。
釣り目がちの目元、口元に浮かべた笑み、そして身のこなしからどこか猫科の生き物を思わせるその人物。
その女性の名は『四楓院（しほういん）　夜一（よるいち）』。
尸魂界（ソウルソサエティ）にて四大貴族と称される内の一つ、四楓院家の第２２代当主にして同家が代々長を務める組織、隠密機動の総司令官、更には護

廷十三隊二番隊隊長すら兼務して見せた女傑こそ彼女であり。
そしてフェルナンドが現世へと足を運んだ最大の理由でもあった。

「な、何故夜一殿が・・・・・　いや、それ以上に何故私を彼奴から引き離したのです!?あのまま行けば最悪決着は望めずとも退かせる程度の手傷なら負わせられた筈・・・・・」

そう、ルキアがフェルナンドから自らの意思でなく離れ、敵が膝を付きそこに夜一が現われた。
状況から見れば子供でも判る過程、それは夜一がルキアを彼女が気付かぬうちにフェルナンドから引き離し、去り際にフェルナンドに何らかの一撃を見舞った、という事。
少なくともルキアが推測した事は彼女の物差しの中でなんら間違いではなく、正しい事だろう。
あの視界を奪ったかのような感覚も夜一によるものであり、それ故に自分が打ち込む前に彼女に引き離されたのだろうと。
結果からの推測、今という状況に辿り付く為の過程、その想像。
それになんら間違いはない、その行動自体になんら間違いはない、
だが、その想像には間違いがあった。

「手傷?　馬鹿者、よく見るがよい。　もし、あのままおぬしが打ち込んでおれば、ああなっていたのはおぬしだったのだぞ・・・・・?」

「なに・・・を・・・・・・?」

思いもよらぬ言葉にルキアに困惑の表情が浮かぶ。
いまだ構えたままの自分、その先に居るのは膝を付いた敵、間に立つ夜一。
その夜一の言葉、そして視線に促されるようにルキアは再び敵へ、フェルナンドへとその視線を向けた。
相変わらず赤い煙の中膝を付いたようなフェルナンドの姿、ルキアには不意の攻撃を受け思わず膝を付いたように見えていたそれは、煙が晴れる毎にその様相を変えていった。

最初に見えたのは褐色の肌だった。
フェルナンドのそれとは明らかに違う色の肌、正確には腕が見え、フェルナンドに絡め取られる様にしているそれは、煙が晴れるにつれ歪に曲っている事が見て取れた。
ついで見え始めるのは地面、アスファルトに舗装された黒い地面は赤い煙が晴れたというのに今だ赤いまま、それも煙ではなく赤い液体によって塗りたくられたように。
そして見え始める全様、フェルナンドの膝は地面についていたなどという表現は生易しく地面に突き刺さるようで、その傍らには彼以外にもう一つ”何か”があった。

足があり、正常な腕とそれとは逆に折れ曲がっているが腕があり、それらが繋がる胴があり胸があり、ただ首から先が無い”何か”、が。

最後に僅か残っていた赤い煙も晴れ、全てが顕となる。
最後に残っていた煙、それに覆われ今姿を現したのは、首から離れ路傍に転がる石の如く。

ただ薄っすらとその目をあけ、まるでルキアを見ているような、血に濡れた夜一の頭だった。

「っ！！！」

声にすらならない驚きがルキアを撃つ。
目の前に立つ夜一、しかし屍をさらす夜一。
目の前の出来事があまりに衝撃的で、常軌を逸した光景過ぎて、ルキアは正常な思考を失い混乱する。
だがそれも仕方が無い事、如何に戦いを生業とし死と隣り合わせである死神とて、いきなり生首、それも目の前で今し方話をしていた者のそれを見れば動転もするだろう。
だがそんなルキアの動転など他所に、夜一は淡々と全てを説明していく。

「心配せずともあれは儂の義骸(ぎがい)じゃ。喜助のヤツが寄越した携帯用義骸、の試作品らしいがの。おぬしを助ける為の”空蝉(うつせみ)”に使っただけじゃ。・・・・・まぁ、自分の死に様を見る、というのはあまり気分が良いものでもないが・・・のぉ・・・・・・」

簡潔に語られたそれ、眼前に転がるモノは自分の義骸であり、お前を助けるための身代わりにしたと。
そしてその言葉はこうも取れる、もし自分が割って入らなければあそこに転がる首はお前のものだった、と。
敵はただ膝を付いていたのではなかった、ましてや攻撃を受けた訳でもなかった。

敵が、フェルナンドが膝を付いていた理由、それはそれ自体が攻撃だったから。

それは如何なる動きか。

無抵抗とはいえ義骸の腕を投げを打つと同時にへし折り、その勢いのまま自身の膝を敵の首に叩き落す事で首の骨を折り、そのままの勢いで切断まで行った所業。

よくよく見れば俯く顔には、つりあがりながらまるで牙を剥く様な笑み、目は獰猛に敵を射抜く獣のそれ。

気配は先程までが嘘のように更に燃え盛り圧を増し、大気に悲鳴を上げさせていた。

発せられるそれは尋常ではなく、とても抑えられるような代物では無いとさえ感じられる。

「不用意じゃったの、ルキアよ。　敵の目を封じ、武器を封じたまでは良かったが・・・・・覚悟に引き摺られて自分が感じた死の恐怖に飛び込もうとするとは・・・・・そこに飛び込まねば得られぬものがあるのも確かじゃが、それは切り抜けられる実力がある者だけが出来る事、おぬしにアレの相手は・・・荷が勝ちすぎる・・・・」

そこでようやくルキアは本当の顛末を理解した。

最初に視界を覆ったのは夜一の術でもなんでもなく、ただ敵が発した気に感じた自らの死の予感。

ただそれが圧倒的過ぎて、まるで自分が暗闇に鎖されたように感じたというだけの事だったのだと。

死の恐怖、それを目の前にしながらもただ敵を倒せるという思いだけが逸り、結果夜一が割って入らねば自分は死んでいたと。

更には視界に再び捉えた敵が膝を付いている事、夜一が居るという事で勝手に敵が倒れたと思ってしまっていたと。
あまつさえ自分が決着をつけられた戦いだった、などという愚かに過ぎる台詞を吐いたという事を。

なんという甘さか、とルキアは唇を強くかむ。
敵は確かに最大級の手加減をしていたのだと。
敵のそれを測れず、助けられ、命を救われ、その重大さに気付かずに不満を顕とする。
なんという甘さ、なんという未熟かと。
敵の刃に冴えが無く、斬られる姿も想像できず、故に彼女は高をくくったのだ。
技術の伴わない敵である、と。
その愚かさ、甘さ、未熟さ、ともに慢心ともいえるそれが今、彼女に跳ね返り重く圧し掛かっているのだ。
彼女の生真面目さ故に、愚直すぎるが故に許せないのだろう、自分のその愚かさが。

（まったく、兄妹そろって真面目が過ぎよう・・・・・・）「・・・・・ルキアよ、そう自分を責めるでない。現にオヌシは一体敵を倒しておるのだ、上出来と思え、ただ・・・アレは少々次元が違うようじゃから・・・・のぉ・・・・・・」

自らの愚を責めるルキアの姿、夜一にはそれが彼の兄、朽木白哉に通ずるものがあるように見えた。
血の繋がりは無いこの兄妹、しかしこんなところは似ずとも良いのにと。
小さな溜息の後、ルキアを気遣う夜一だったがゆらりと立ち上がっ

た敵の姿を捉えると、意識はそちらへと集中させる。
当然だ、仲間を気遣うために気を割いて殺されては自分がかつて背負った名が泣くというものだろう。

「どうやら・・・話は終わったらしいな・・・・・・」

「なんじゃ、待っておったのか？　破面というのは意外と律儀なものじゃのぉ。・・・・・・それとも・・・　武器で態と加減をして敵を油断させ、緩んだところを仕留めようとする卑劣な輩・・・かのぉ？」

立ち上がったフェルナンド、先程までの獰猛な笑みは治まり常の皮肉気なそれに戻った彼。
一頻りルキアと夜一の会話が終わったと判断し、声を掛けた様子だった。
それに対し、夜一はやや意地の悪い顔でフェルナンドへと対する。
だが、その言葉の中には探るように、また威嚇を込めるように強い意思が込められていた。

「ハッ！　加減なんかしちゃいねぇさ。　刀を使えばあれが俺の限界、って事だろう。それを攻めたあの女に間違いは無ぇ・・・・・・ただ、あの女が刀を封じるもんだから、つい・・・普段の方が出てきちまった。それだけの話さ、まぁ更に言えばアンタが出て来たせいで少しばかり気が入りはしたが・・・な」

「ほ～ぅ。　その口ぶり、まるで儂を探していたようだのぉ。生憎と破面に知り合いは居らん筈じゃが・・・・・・？」

夜一の言外の威嚇や牽制もフェルナンドには意味を成さない。
ただルキアの行動に間違いは無いと答えるフェルナンド。
剣の実力が追いつかず、それを鋭くはあるが振り回すのみの敵を前にした時、ルキアの選択はそれほど悪いものではない。
だがしかし、刀を封じれば勝てるというその一点が間違っていたのだ。
何も手に持ったものだけが、長く、鋭く、硬く強い武器だけが、敵を倒す術ではないというのに。

死神側に何らかの動きがあったことはフェルナンドにも判っていた。
だが、刀で戦い、そしてその刀を封じられた事は存外彼にとってストレスとなっていたのだろう。
そして刀を封じられ、意味を成さなくなったそれに彼は執着しない。
何故ならそれ以上の武器を彼は手にしており、溜め込まれた意識外のストレスは解放を望んでいた。
故にそれが何であれ叩き付けねば気が済まず、ただ本能のあるがままに殺気も闘気も何もかもを解き放ち、それにぶつけたのだ。

投げる、折る、極める、そして殺す。
彼が理想とする一つの形、彼が編んできた名も無きそれら。
それを叩きつけられた人型は無残にも屍とかし、しかし彼にとってそれは僥倖。
何故なら彼が殺した人型は彼が求めていた人物そのままで、そしてその人物はいまだ彼の目の前に立っていたのだ。

僥倖、何たる僥倖。
結局のところ聞き出すことは叶わなかったがそれは瑣末。
目的は聞き出すことの先、その人物と対峙する事でありそれは今成

された。
故に瑣末、瑣末であり僥倖。
フェルナンドの現世侵攻の目的はその半分は達成された、と言っていいほど。

後はここから。
そしてここから先は何を弄する必要も無い。
ただ見てみたい、自分の目で。
ただ味わってみたい、自分の肌で。
ただぶつけてみたい、自分の鍛えたものを。

それが通用する、しないの話ではない。
すれば良し、しないのならばするようにすればいい。
目指す形を得るための糧、そう糧なのだ全ては。

「探してたさ、アンタを。　判るんだろう?体術使いのアンタなら。
　俺がどういう類の男か、アンタに何を求めているかを・・・よぉ。
魅せろよ、死神の体術を。　知りてぇのさ・・・・・・どっちが強ぇのかが・・・よぉ・・・・・・」

瞬きは刹那
修羅が嗤う
翻る黒衣
しかし届かず
舞い降りる双璧
夜が明ける

BLEACH El fuego no se apaga. 68（後書き）

微妙なタイミングでの更新です。

話の流れはおおよそグリムジョーの方は原作通り（？）な感じ。
対してフェルナンドの方は・・・・・カオスｗ

夜一さん、出てきちゃったｗ
ルキアが気を張って絶対しゃべらないといった矢先にね。
諸々含めてルキアが可哀想な気もするが、話の展開的に・・・・・・
駆け足那感じも含め、許せ、ルキア。

実際今回の話はツッコミ所がある程度あります。
ルキアが赤煙遁を使えるのか、とか這縄でどんだけ刀を止められるもんなのか、とかね。
まぁそれだけでもない気がするけどね。
一応詠唱破棄でも破道の三十三が使えることから、それ以下の破、縛道は一通り使えるんじゃないかと想像。

這縄は・・・・・束で出した、という事でｗ

肌が粟立つ感覚。
霊圧は強大ではあるがしかし、それ以上にその男が発する気配に場は支配される。
殺意と歓喜、そして知りたいという純粋な好奇心。
無邪気さと狂気という相反するものがその気配には混在し、それを発する男の顔は何処までも獰猛な笑みだった。

（なるほど・・・のぉ・・・・・・　気質は更木(ざらき)の奴に近いようじゃ。やりにくそうじゃのぉ・・・・・・・）

その敵、破面　フェルナンドを目の前にし、夜一は内心でそう零す。
彼女が見立てるに目の前の破面は純粋に戦いを望む類に見え、その他の事、例えば使命であるとか他者と足並みをそろえるといった事は考えないであろう人種。

戦うことを目的とし、その為ならば、求めるものを手に入れる為ならその他全てを斬り捨てる事になんら躊躇いを見せない。
そういう類の人種であろうという事。

つまりは”　戦闘狂　”の類なのだと。

戦いに狂う獣、目の前にいる男からその気配を存分に感じた夜一、
そしてその気配は彼女が知る尸魂界（ソウルソサエティ）きっての戦闘狂である護廷十三隊十一番隊隊長、更木剣八（ざらきけんぱち）に近いものであった。

その更木　剣八に似た気配を放つ破面フェルナンド。
嬉々として歪む口元、爛々と殺気を漲らせる瞳、尚発せられる霊圧、
そして闘気。
殺る気に満ち満ちていると言ってなんら間違いは無いその気配、故に夜一はやりにくさを感じていた。

元々言葉でどうにかなるとは思っていなかった夜一、しかし目の前の敵は更に性質が悪い事に戦いに餓えた獣。
しかも自分を探していたという敵の言葉を信じれば、この機会は彼にとって千載一遇。
易々と逃がす手は無い、というものであろう。
現に敵の気配が、そして言葉がそれを裏付けている。

（知りたい・・・か。　儂の事を体術使いと呼び、死神の体術を見せろと言い放ち、そしてあの見た事も無い組技・・・・・・おそらくは向こうも白打（はくだ）の使い手、という事であろう・・・・・・）

僅か発したフェルナンドの言葉、見せられた奇怪な組技、そしてソ

レを使う者独特の気。
それらを鑑みて夜一は目の前の敵もまた自分と同じ白打、体術の使い手であろうと予測する。

斬拳走鬼（ざんけんそうき）、という言葉がある。
これは死神の基本的戦闘術を端的に表した言葉とされ、斬は斬魄刀、走は歩法、鬼は鬼道を示す。
そして拳は白打と呼ばれ、斬魄刀を用いずに五体、拳や蹴りを用いての戦闘術を示すのだ。
四楓院（しほういん）　夜一（よるいち）はその白打の使い手である。
斬魄刀を携行せず、己の拳と蹴りを持って敵を打ち倒すのが彼女の戦い方。
彼女が総司令官を務めていた隠密機動と呼ばれる組織では、斬魄刀戦術も然る事ながら白打での戦闘にも重きを置いており、その中で彼女は屈強な男の隊士が束でかかろうとも掠り傷一つ負わせる事すら出来ないほどの使い手であった。

その彼女を前にフェルナンドはどちらが強いのかを知りたいと、それを知るために自分と戦えと言い放つのだ。
フェルナンドに夜一の経歴を知る術は何一つない。
だが彼にとってそんなものは瑣末の極み、過去の経歴が何だというのだと、自分に必要なのは今だけであり、自分が見たヤミーを打ち据える彼女の姿こそ必要なのだと。
自分と同じようにただ敵を殴り、蹴り、殺す事だけを追い求めてきた術。
当然自分よりも長く、それこそ気が遠くなるほどの大昔から追及されてきた技の大系、それを扱う者。

知りたい、味わってみたい、出来るならその全てを。

ただ力を、戦い、求めるための力を欲するフェルナンドだからこそ欲する。
求めるのは戦い、そして自分をより昇華させるのもまた戦い、そして昇華とは新たなものに触れる事で起こる進化だ。
フェルナンドには自分の業が、敵を打ち殺す為の業がまだまだ伸びる確信がある。
確信もまた力、自分の力を疑わぬ意思、そして力とは意思あってこそ初めて目覚める。
その為の引き金を、何かしらの切欠をフェルナンドは求めているのだ、夜一がもつ技の中に。

「さぁ・・・やろうじゃねぇか。　こんな人形幾ら殺した所で意味は無ぇ、殺し殺されるギリギリの中でこそ磨かれるものがあるだろうが、極限の中だからこそ視えるものがあるだろうが・・・・・・その為に、俺と戦ってもらうぜ？　体術使い」

フェルナンドは這縄に捉えられ手放した斬魄刀を再び握り、苦も無く霊子の縄を引き千切ると刃を鞘に納める。
そしてゆっくりと常の構えを、本来の彼の構えをとった。
瞬間ルキアには彼から発せられる闘気が増したように感じた。
ここでルキアは再び自分が如何に手加減をされていたかを理解する。
最大級の手加減、フェルナンドが言ったそれにおそらくは嘘はなかったと。
武器を抜き放ったときの姿とは比べ物にならない、そこに隙など無くこちらから打ち込める気もしない。
いくら近付こうともどこか斬られる気がしない様だった彼の間合い、しかし今の彼を見ればそんな考えは微塵も浮かばない。

打ち込める気がしないのは何も隙が無いからだけではないのだ、打ち込めない理由、それは打ち込めば殺される気がしてならない為。
今し方首と胴が離れた夜一の義骸を見てしまったが故その思いは尚の事強いのかもしれない。

「ルキアよ、下がっておれ・・・・・・・」

「し、しかし夜一殿・・・・・・・」

「異論は認めん、早くせよ。　・・・・・・おぬしを庇って戦える程、今の儂に余裕は無い・・・・・・・」

「ッ！！　夜一殿、やはり御身体が・・・・・・・」

敵は既に臨戦態勢、それをして夜一はルキアにこの場から退くように命じた。
ルキアも食い下がりはするが後に続いた夜一の言葉に息を呑む。

余裕は無い。

それはある意味敵に対する最大級の褒め言葉。
余裕を持ってあたる事は出来ない、余力を残す事は叶わない、死力をもってして対さねばならない。
ルキアは夜一の言葉にそれを感じたのだ。

そしてルキアは知っている。
夜一が余裕は無いという言葉を選んだ本当の理由を。
それはただ敵、フェルナンドの実力が見過ごせぬものであるという

だけではないのだ。
何故なら彼女は今、万全の状態ではない為。
それを知る故ルキアにはより夜一の言葉は重く感じられる。
万全ではない彼女、そして自分が居る事で夜一の足枷となる、それが今の自分なのだと言う事、その事実を苦々しく思いながらルキアは「・・・御武運を」という言葉を残し、その場から離脱した。
その手に血が滲むほど、強く拳を握りながら。

「待たせたのぉ。　破面よ・・・・・・」

「ハッ！　あの女はもう用済みだ。　居ても居なくても大差は無ぇが、消えてくれるんなら黙って見てるさ」

「そうか・・・・・・」

ルキアが去って後、夜一はフェルナンドと相対した。
瞳は幾分か鋭さを増し、気も滲む。
対するフェルナンドは既に万端、今か今かと戦いの時を待っている。

いや、待っている訳が無かった。

つい先程まで夜一が居た場所の地面が放射状に陥没する。
中心にあるのは裸足の踵、フェルナンドが叩きつけた彼の踵だった。
そう、戦いはもう始まっていたのだ、姿勢を低くまるで地を這うような体勢のフェルナンド。
瞬時に跳び上がり全体重を乗せた踵落としは、大地を易々と陥没せ

しめたがしかし、夜一を捉えてはいなかった。

「いきなり仕掛けて来よったか・・・・・・」

「速い・・・な。　だが今のを卑怯だ、とでも言う心算かよ」

「まさか、言う筈がない。　戦いとはそういうものじゃろう」

先制攻撃を仕掛けたのはフェルナンド、しかし夜一はそれを避わしていた。
その動きはフェルナンドが零したとおり速く、余裕が無いといいながらもそうは見えないものだった。
だがそれは当然の事、夜一からすれば当然の事なのだ。

”　瞬神　”

彼女がもつ二つ名である。
歩法に精通し、何者もその影を踏む事叶わぬとまでうたわれたのが彼女、四楓院夜一。
如何に今の彼女が万全ではないと言えども、ただ敵の攻撃を避わす事など容易い事であった。

突如としての攻撃にも対応して見せた夜一。
いきなり襲い掛かってきた様なそれではあったが、事無く。
それを卑怯だ、と言う事も無かった。

そもそも戦いに始まりと終わりの明確なものなどない。
これは遊戯でも試合でもなく戦場、殺し合いの場。

そこに始まりの合図は無く、突如とした攻撃にさらされてそれを卑怯と喚き散らすことは、愚を曝すより更に愚かな事でしかない。
戦いとは一瞬の積み重ね、それを掻い潜りつつ敵を倒す事こそが戦い。
要は気を抜いていた方が間抜け、という事なのだ。

「そうさ！　殺し合いに卑怯なんてもんは無ぇ。テメェの矜持が許す全てが有効だ！　アンタが速ぇのは判った、じゃぁコッチもちょっとばっかし上げていくぜぇ」

少しずつ昂ぶっていくフェルナンド、大地を蹴るようにして夜一との間合いを詰め、肉薄する。
その言葉通り先程よりもその攻撃は鋭く、速く、そして途切れなかった。
上段、中段、下段への蹴り、拳による打撃、打ち、払い、突くといった一連の全てがめまぐるしく夜一に襲い掛かる。
それは最早拳足の暴風に近かった。
吹き荒れるそれは間合いに入った全てを粉々に打ち崩すかの様、その拳足の嵐の中、夜一はその事如くを避わしていた。
身に迫る事如くを、軌道を逸らし払い或いは身を反らし避わし続ける夜一。

（凄まじい威力じゃの・・・・・・　払うだけで腕が持っていかれそうじゃ。更に暴れているようでその実、鋭く急所を狙う一撃が端々に隠れておる・・・・・・そしてこれだけの攻撃をして息一つ切らさずそれどころか・・・・・・・嗤っておるとは・・・のぉ・・・・・）

フェルナンドの猛攻を掻い潜り捌きながら、夜一は冷静に見極めていた。
敵はどちらが強いのか知りたい、というだけあってやはり白打に長けていたと。
猛攻の中それぞれが強力な一撃でありながら、その中でまるで殺意の塊のような一撃が急所目掛けて飛んでくる。
虚実の攻撃、実の一撃を隠す為の虚であるが、それだけでも並みの敵なら易々と決することが出来る威力。
そして何よりその攻撃の嵐を続けざまに見舞いながら、息の上がる様子もなく尚且つ、嬉々として嗤っているその様。
やはり更木に通じるものがある、と思う夜一であったが、こうして避け続けたとて戦いが決するはずも無かった。

（さて、どうしたものか・・・・・・”瞬閧（しゅんこう）”は使えん。
あれを使えば確かに攻撃は通るが、現世の霊なる者に影響が強すぎる。かといって無為に攻めては儂の身体が保たん。打撃はここぞという所まで取っておかねばの。・・・・・・ならば、彼奴の勢いを利用させてもらうとしよう！）

敵の猛攻を捌きつつ思考する夜一。
刹那の思考は今自分に出来る事出来ない事、するべき事避けるべき事を駆け巡らせる。
正面から殴り合う、という選択肢は始めからない。
敵の持つ外皮、その霊圧硬度を夜一は嫌と言う程知っていた為、何の策も無く殴り蹴りつければ確かに敵にダメージは残せようが、それと同程度に自身もダメージを負ってしまうと。

だがそれを無にする策もまた夜一にはあった、瞬閧と夜一が呼ぶ術、これを用いれば自身へのダメージを軽減させ敵に更に大きな痛手を負わせることも可能だろうと。

しかし、この選択肢は避けねばならない。
瞬閧と呼ばれる術は確かに強力なのだろう、だが強力な業、攻撃というものは自然強大になりそれは広域に及ぶ。
これが周りに木々の生い茂る森であるとか、尸魂界外縁部に代表される荒野であったならばそれもいいだろう。
だが、ここはそうではない。
ここは、彼女が今居る場所は現世、それも現世の健全な魂、整達（プラス）が多く住まう市街地なのだ。
そんなところで本人すら予期出来ぬ程の威力を持った技、強大な霊圧を発するそれが用いられれば、整達に影響が出るのは必至。
最悪魂が磨り減り押しつぶされ消滅しかねない、現世と尸魂界、両者の魂の均衡が崩れるのは夜一にとって、いや霊なるもの全てにとって望ましいものではないのだ。

ではどうするか。
瞬閧は使えず打撃も数は限られる。
出来る事、出来ない事、避けるべき事は判ったと。
ではするべき事は何か、避わし続けるのではなく反撃の手は何か、夜一に見えるのは猛威を振るう敵の拳達、その勢いは猛然の一言でありこれを利用しない手は無いと、夜一はするべき事を固めた。

「避けてばかりじゃつまらねぇだろうが！　打って来いよ！俺を殺す為に！　それを突き詰めんのが戦いだろうが！ッ！！」

燃え盛る己が意を叫ぶフェルナンド。
避けてばかりでは何も始まらない、避けてばかりではつまらないと。
手を伸ばし足を振りぬき、殺意を乗せて襲い掛からせなければ何も始まりはしないと。
磨き上げたそれらは飾りではないだろう、俺を、他者を殺す事だけを思い磨いたのだろうと。
己が拳にそれを存分に乗せ叫ぶフェルナンド、そしてその意思を存分に乗せた彼の右腕が夜一の顔面へと伸びる。

そしてその瞬間、彼の世界は回転した。

天地は逆様に、空が大地となり大地は空となる。
足元が急に抜け、そして大地が頭上から降ってきたような感覚。
ありえざる感覚と、大地が陥没するほどの衝撃をフェルナンドは味わっていた。

合気、柔よく剛を制す。
夜一が行ったのはそれだった。
それは夜一が先日ヤミーに見舞った一撃と同じ、不用意に夜一へと手を伸ばしたヤミーは次の瞬間大地が割れるほどの衝撃を伴って地面へと叩きつけられたのだ。
敵の放つ攻撃、その方向性をずらし自らの力も上乗せして敵へと返すその技。
敵の攻撃が強力であればあるほど跳ね返るかのようなその一撃は威力を増す。

フェルナンドの攻撃は決して不用意、という訳ではなかった。
しかしフェルナンドの攻撃を見切り、刹那の拍子でそれをずらし、

己が力を乗せ敵を回転させ地面へと叩きつけた夜一の技量。
フェルナンドの殺意の拳よりも、連綿と積み上げられ培われた技量がそれを上回っていたのだ。

（うまくはいった・・・か。　だが所詮は時間稼ぎ、この程度の攻撃では幾分の痛手もなかろう・・・・・・しかし彼奴の攻撃、まさか・・・・・・）

フェルナンドを叩きつけて後、彼から距離を置いた夜一。
まずは自身の思惑通りの展開と先制を得た夜一だったが、それだけで勝敗が決したなどという思考は浮かぶことは無い。
こんなものはあくまで機先を制するためだけ、只投げ、叩き付けただけで死ぬ筈が無い。
少なくとも目の前の男がその程度で死ぬ姿を夜一は想像できず、想像できない事は決して起こりえない事。
目的はあくまで敵の気勢を削ぐ事、猛烈な攻撃はまた今と同じ状況を作り出すと相手に認識させる事こそ肝要なのだ。

気勢を削ぐとはそういう事、敵の選択肢を潰し、如何にこちらに有利な状況を作るか。
勢いをそがれれば敵は自然と下り坂、その後のやりようなど幾らでもあるのだから。
只一点、僅か気にかかるものを抱えながら。

「成程、ヤミーの野郎がすっ転んだのはこういう仕掛け…かよ。まさか自分の力が跳ね返って来る、とはなぁ・・・・・・だがこんなもんはお遊びだろう？」

夜一の考えどおり叩きつけられた方のフェルナンドは苦も無く起き上がった。
服には所々埃が付いていたが、別段外傷らしい外傷も無く損害は軽微の一言だろう。
自身が喰らった攻撃を彼なりに分析し、納得した様子のフェルナンド。
しかしこんなものが磨き上げた技、殺す為の技とは思えない彼にとって、それはどこまでもお遊びでしかなかった。

「オラ、攻めて来いよ。　受けてばかりじゃつまらねぇだろ?それともそんな消極的なもんがアンタの積み重ねた技なのかよ」

構えながら嗤うフェルナンド。
獰猛、その一言だけがその笑みには浮かび、意識の全ては夜一へと向かっている。
対して夜一はそんなフェルナンドの挑発に乗る事無く。
あくまで自分から攻めかかる事はしなかった。

「なんだよ、来ねぇのか?　アンタはもう少しこっち寄りだと思ってたんだがな・・・・・やっぱりその左腕と左脚じゃぁ本気じゃ来れねぇ、ってことかよ」

「ッ!!　」

夜一が思ったとおり、どこか気落ちしたようなフェルナンド。
だが続いた言葉に夜一は目を見開く。
それは彼女を震撼させるに充分足るものだった。
左腕と左脚、そう、彼女がこの戦いに消極的であり尚且つ万全ではないという理由はそれなのだ。
先のウルキオラ、そしてヤミーの現世侵攻の際彼女はその迎撃に赴き、その腕と足でヤミーを打ち据えた。
その後、二体の破面は虚圏へと退きはしたがその為に彼女が払った代償、それが彼女自身の左腕と左脚であった。

破面の外皮、鋼皮（イエロ）と呼ばれるそれを殴り、蹴りつけた夜一。
それは洗練された体術と四肢が発する威力をもってヤミーを打ち据えはしたが、何の防護策も無くそれを行った夜一は、予想以上の霊圧硬度を誇る鋼皮によって自身の手足にも傷を負ってしまっていたのだ。
動かすことに支障は無い、しかし戦闘の負荷にはおそらく耐えられるものではないその手足。
打てない訳ではない、蹴れない訳ではない、しかし万全とは呼べず破面の本格的侵攻に備えこれ以上の傷を負うことは避けるべき事。
故に夜一はこの戦い、フェルナンドを打ち倒す事を目的とせず戦っていたのだ。

しかしそれは見抜かれていた。
それも的確に、左腕と左脚と明確に指摘して。
夜一にそんな素振りを見せた心算はなかった、敵にそれを悟られるという事は自分の弱点を悟られるのと同じ。
戦場においてそれはあまりにも不利が過ぎる。
故に悟られぬよう注意は払っていた心算だったが、目の前の破面はそれを看破している。

だがそうなると一つおかしな事が、辻褄が合わない事があると夜一は思い至った。
それは僅か感じていた違和感、気のせいとしてしまえばそれまでではあったが、この事実がわかった以上それは気のせいではなく真実なのだろうと。
では何故、夜一にそんな思いが過ぎる。
では何故、この破面は左側から攻めてこなかったのか、と。

「・・・・・おぬし。　それを見抜いておきながら、何故そこを攻めぬ・・・・・・」

「ハッ！　別に戦いながら俺が見つけたなら攻めても良かったんだが・・・な。だがあの女が言っちまっただろう？　身体がどうの・・・とかよぉ」

どうしても判らぬ夜一はそれを直接聞いてみる事にした。
答えが返ってくるとも思っていなかったが、投げかけてはみようと。
そして答えはいとも簡単に返ってきた。
曰く何も戦いながら全てに気が付いた訳ではないと、ただその前に、ルキアが零した一言が切欠だと。
余裕が無いという言葉の後に身体を心配するかのような言葉、そんなやり取りがあれば誰だって気が付くだろう。
敵は身体を損なっていると、決して万全の状態ではないと。
どこか、までは攻防の中の僅かな動きから、しかし事前に知らせがあったこと自体は間違いないのだ。

「それがどうしたと？　戦いに・・・殺し合いに卑怯なぞというものは無い、と言ったのはおぬしであろう・・・・・・」

「そうだ、殺し合いに卑怯なんてもんは無ぇ。だが・・・誰かに教えられた弱点を攻めるのは別だ、そんなもんはここを攻めろと言われてんのと同じだ。他人に与えられた勝利も同じだ、そんなもんにはクソ程の価値も無ぇ。そしてそれを勝利と呼ぶ事は、俺の矜持が許さねぇ」

愚直、フェルナンドの言葉を評するにはそれが適当だろう。
弱点を突くことは卑怯ではない、しかし、示されたそれを突く事は違う。
少なくともフェルナンドにとってそれは許せない事、自分がそれを行うのは許されない事なのだ。
彼の信念が、曲げられぬ矜持がそれを否定する。
その先に得た勝利は無価値、そして無価値な勝利の先に求めるものは無いと信じるから。
得られるものは無いと信じるから。

「だがアンタはどうだ？　本気を出さないのと出せないのはまた違う。その腕もその脚も、蹴れねぇ殴れねぇって訳でもねぇだろう？　これ以上痛めるのが怖いか？　この先に支障があるのが拙いか？　ハッ！　俺も随分と・・・・・・　甘く見られたもんだぜ！」

フェルナンドの強い意志に僅か気圧された夜一。
勝利よりも矜持を優先する、例え己が身を犠牲にしたとしても。
戦いに、勝利に餓えながらしかし、どこか高潔さを感じさせる精神。

これが敵、これが破面、只の化物ではない信念を持つ者達、それが向いている方向は多々あれどそこに強い意思がある。
ただ暴を振るう集団ではない、それゆえに感じる苦戦の予感。

その夜一にフェルナンドはまるで見透かしたような言葉を投げ付け再び突進する。
確かに全てをかなぐり捨て、彼を倒す事だけを考えれば遣り様は幾らでもある。
しかし夜一にとって此処が全ての終わりではない。
先を見据えればこそ彼女は温存しているのだ、自身が本当に力を使わねばならない場面がくると。
そしてその場面は今ではないと。

「ウラァァアァア！！」

裂帛の気合漲るフェルナンドの拳。
迫り来るそれを夜一は避わしながらも再び柔法によってフェルナンドを大地に叩きつける。
しかし今度は離脱の隙が無かった。
叩きつけられたフェルナンドはその後直ぐに立ち上がり、そのまま夜一へ再び襲い掛かったのだ。
自身の頑強さにものを言わせたかのような攻勢、だがそれでも夜一は冷静に対処し、再びフェルナンドは大地に叩きつけられる。

その後はそれの繰り返しだった。
夜一が投げ、フェルナンドが跳ね起き再び襲い掛かり、そしてまた投げられる。
目的が見えぬフェルナンドの攻勢に次ぐ攻勢、敵の勢いを削ぎ事

を目的としていた夜一であったが、目の前のフェルナンドは気勢が下がるどころかまるで燃え上がる炎のように勢いを増していく。

そして嬉々として嗤っているのだ。

「ハッハハハ！　どうした！　ただ転ばせるだけで敵が死ぬかよ！　殴れ！　蹴り飛ばせ！　腕を足を首をヘシ折れ！　”先”なんか見据えてんじゃねぇよ！　”今”が全てだろうが！先の事は今俺を殺した後で考えやがれ！！」

そう、先を見据えることは大事なことだ。

だがしかし、今目の前の敵を蔑ろにする事が先を見据える、という事ではない。

夜一にとって先にある戦い、藍染惣右介が仕掛けてくるであろう侵攻の方が重要であるのと同じだけ、フェルナンドにとって今彼女と戦う事は重要な事なのだ。

故に叫ぶ。

転ばせるだけでは死なない、投げ付けただけでは死なない、これは倒すための技であって殺す為の技ではないだろうと。

急所を殴り、頭を蹴りつけ、腕を折り足を折り、首をヘシ折り捻じ切る事。

それこそが殺すという事であり、今求められるのはそれ以外ないとフェルナンドは叫ぶ。

いや吼えるのだ、彼の魂が。

先ではなく今を、今目の前にいる俺を殺して見せろと。

（成程。　この破面、やはり更木と同じ類。　今という刹那を生き

る獣・・・いや修羅か・・・・・・この手の者は幾ら時を掛けようが気勢など落ちん。ならば・・・儂も覚悟を決めねばなるまい・・・・・・）

一向に衰える気配無く、それどころか気勢を増しながら迫り来るフェルナンドを前に、夜一もまた覚悟を決めようとしていた。
こういった類の者を相手に気勢を削ぐ等という事は無意味、何故なら彼等の様な者達にとって、この状況もまた戦いの内側。
自分が圧される事、攻め込まれ窮地に立たされる事もまた戦い、そしてそうでなければ面白くないという思考回路。
要するに馬鹿なのだ、どうしようもなく、そうどうしようもなく戦いを求める戦闘馬鹿、それが彼等の正体であり全て。

退(しりぞ)けるには最早道は一つしか無い。
敵が諦めて帰る事は無い、増援もおそらく望めない、身体は万全ではないがしかし、やるしかないのだ。

再び跳ね起きるフェルナンド、獲物を見据えると襲い掛かるように駆け拳を打ち出す。
それは最早殺意の固まり、お前を殺す、そして俺を殺して見せろという反する感情が乗る拳。
魅せろ魅せろとせっつく様なそんな拳だった。

先程と同じならばこのまま拳は避けられ、逸らされ、次いで天地は逆転し大地はフェルナンドに落ちてきただろう。
だが今回は些か状況が違っていた。
拳を打ち出し、避けられる所までは同じだった。
しかし次の瞬間夜一の姿がフェルナンドの視界から消えたのだ。

まさに一瞬の出来事、フェルナンドですら目で追えないそれは最早消失に近く、次にフェルナンドが彼女の存在に気が付いたのは、彼女の両手が彼の二の腕辺りを握った時であった。

瞬間視線だけをそちらへと向けるフェルナンド。
延びきった自身の腕、その二の腕辺りに見えるのは褐色の指先。
しかし視線を横にずらしたとて見えるのは夜一の手と腕のみ、彼女自身の姿はそこには無く、腕が続く方へと視線を奔らせたフェルナンドが見たのは、彼の二の腕の上で逆立ちをしている夜一の姿だった。

”吊柿（つりがき）”。
夜一が編み出したその技は、敵が放った蹴りや拳を足場とし、攻撃の軸とするもの。
本来ならばありえない敵を足場とするという攻撃、それ故に敵には虚を突かれた僅かな硬直が起こり、尚且つ普段では考えられない位置角度から襲い掛かる攻撃は驚異的だろう。
夜一はフェルナンドの腕を足場とし倒立し、そして伸ばしていた脚、その膝をフェルナンドの脳天目掛けて振り下ろした。
それはまるで振り上げられた斧、処刑台に括り付けられた罪人の首を落とす斧を思わせる鋭さを持ってフェルナンドへと襲い掛かる。
頭上からの攻撃に生物はあまりに弱い。
そこは死角であると同時にもっとも防御が薄い場所のひとつ、薄い皮膚と頭骸骨を突き破ればそこにあるのは脳であり、それさえ潰せば敵に残るのは死だ。
故に夜一は狙う。
一撃必殺、今彼女にあるのはそれだけ。
その瞳に最早迷いは無い、先を見据え自身を温存する気など無い。
ここで最悪自分の膝が壊れても構わない、この者を後々まで永らえ

させる方が彼女には今余程危険に思えていた。

（獲った！）

そう思い膝を叩きつける彼女、鈍い音と共に衝撃が弾け、叩き付けたと同時に夜一はフェルナンドの腕から飛退く。
最悪膝が壊れても構わんとさえ思い放った一撃であったが、幸いにも膝は無事。
無論ダメージはあったがそれでも重畳と言えるだろうと、夜一は結論付けた。

そこに今だ立っているフェルナンドの姿を見るまでは。

（これは・・・・・・　まったく、どうりで儂の膝が砕けん訳じゃ、彼奴め・・・土壇場で避わしよったか・・・・・・）

夜一に見えるフェルナンドの姿、頭部は無事であり損傷は見られない。
そして首筋から肩にかけて立ち昇る煙のような残滓、まるで何かを高速で擦ったような、そんな痕はまさしく夜一の膝が一撃の痕。
夜一の姿、そして何をしようとしているかを見たフェルナンドは瞬時に頭を反らし、さらに足場として使われている腕を動かして脳天への攻撃を回避してみせたのだ。
しかし出来たのはそこまで、脳天への攻撃は確かに逸らせはしたが換わりに首筋を抉り、そして彼の肩に深々と突き刺さったのだった。
夜一の膝が砕けなかったのはフェルナンドが刹那の回避を行った為、

骨と骨のぶつかり合いともなれば如何に霊圧の加護があれど、破面の鋼皮も伴って膝は砕けただろう。
だが、首に当たり勢いを削がれ、更に筋肉で覆われた肩であったためまだ砕けずに済んだという事。
獲るには至らなかったが、それでも致命的な痛手を負うこともなかった夜一。
まだやれると僅か身体を沈ませ、次に備える。

「クク・・・ククク・・・クハハッ、ハハハハハハ！！そうだ！俺が待ってたのはそれなんだよ！！　俺を足場にしやがった！ハハ！　俺が考えた事も無ぇような攻撃だ！あるじゃねぇかあるじゃねぇかよ！　敵をブチ殺す為に磨いた技がよぉ！」

備える夜一に聞こえたのは歓喜の叫びだった。
自分が攻撃を喰らったというのに、浅くは無いであろう攻撃を受けたというのにその男は嬉々として嗤うのだ。
求めたのはこれだと、自分が思いもよらなかった攻撃が、自分が思いつきもしなかった攻撃が自分を殺しに向かってくる。
それが楽しくて嬉しくてたまらない、そんな雰囲気すらあるその笑い声。
やはり狂っている、夜一にそう感じさせるには充分なそれは、更なる喜びを求めていた。

「オラ次だ！次をやろうぜ！　漸く殺し合いらしくなってきたんだから・・・なぁ！！」

その肩に受けた傷等ものともしない様子で歓喜の声を上げるフェルナンド。
傷より、痛みより、それを凌駕する興奮、高揚が彼を支配する。
虚圏に彼と同じような使い手は少ない。
皆己が拳を武器として戦いはするが、それを主としている者など殆どいないのだ。
それが不幸だと彼は思わない。
思ったところでその状況は変らず、自分の境遇を嘆くのは彼には違う気がしたのだ。

だが、目の前の女性は彼と同じような事を突き詰めた人物。
故に歓喜する、その力に、その技に、彼が思いもよらなかった全てに。
敵は自分が望み求めていたものに足るものを魅せた。
ならば、自分も魅せなければ釣り合いが取れないと。
殺し合いと口にしながらもそう思ってしまうフェルナンド、それはきっと嬉しさなのかもしれない。

自分と同じだという事。
種族ではなく、性別ではなく、生き様も価値観も何もかもが違うがしかし、極めようとするものが同じ者。
敵を打倒する、只その為だけに拳を、蹴りを、それらを用いる事を続けた者。
彼よりももっともっと長い間、生を受け今に至るまでそれを止める事が無かった者。
その者に対する敬意、本人にその意思は皆無であろうがその行動は確かにそう取れるだろう

夜一へと突進するフェルナンド。
対する夜一は構えを崩さず迎え撃つ気配を見せる。

迫るフェルナンド、そして夜一の間合いへと入った瞬間彼は大地を蹴り、跳んだ。
低空での横回転、大きく開かれた脚が描く弧の軌道、胴廻し回転蹴り、その踵が夜一に襲い掛かる。
夜一の顔の目の前へと迫るフェルナンドの踵、上体を反らす様にしてそれを避わす夜一だったが直後、眼下で旋風が巻き起こり避けた筈の踵の後を追うようにしてもう片方の足が彼女に迫っていた。

（”　風車（かざぐるま）　”　!?　いや、違う・・・が、なんという動きじゃ！）

瓜二つと言うわけではないが自分が使う技にも似たフェルナンドの動き、そしてそれを可能とする身体操作と肉体。
先程までの拳と蹴りの連打から白打の使い手とは読んでいたが、思いのほか完成度の高いそれを前にし夜一も驚いていた。
だが、似ているという事は避わせるのもまた道理、一撃目以上の速度で迫った追撃、フェルナンドの”　旋　”も夜一の薄皮一枚捉えるのが精一杯であった。

が、フェルナンドの攻撃はまだ止まらない。

旋を避わされ後重力に引かれ落下する身体、それをフェルナンドは片腕を突っ張り止める。
掌をつき、握力にものを言わせて大地に爪を立てると身体の勢いを止め、最初に振り抜いた方の脚を再び夜一の腹部目掛けて蹴り上げたのだ。
”　弧月　”、本来ありえない下方向から突き上げるようなその蹴りは、予想だにしないだけに防ぐに窮するもの。

（なに！？　）

そしてその蹴りによって、夜一の身体が後方へと吹き飛ばされた。
放物線を描き吹き飛ばされる夜一、フェルナンドから離れた位置に着地した彼女は、腹部を押さえながらも今だその脚で立っていた。

「ハッハハ！　流石、だなぁ。　初見で俺の弧月に反応して、更に衝撃は自ら跳ぶ事で消した・・・かよ。いいねぇ・・・・・・　俺が睨んだ通りだ。あんな死神のガキよりよっぽどアンタの方が強ぇじゃねぇか」

「フッ、それは喜んでいいのかのぉ。・・・・・・だが、一護の奴を甘く見ておると、おぬし等・・・いつか痛い目に合うぞ・・・・・・？」

弧月を撃った体勢から素早く立ち上がるフェルナンド。
そして今だ立っている夜一の姿を確認すると、その笑みはまた深くなる。
やはり、というその笑み。
そう、彼女が立っているのは当然、何故なら彼女はフェルナンドの攻撃を防御していたのだから。
下から迫るフェルナンドの蹴り、それを腕を交差させるようにして受け勢いを殺し、それでも尚押し切ろうとする彼の蹴りを受ける直前に夜一は自ら後ろへと跳んだのだ。
蹴りの力の方向と同じ方へと跳ぶ事で威力を消す為に。

それは蹴りを撃ったフェルナンドが一番良く理解していた。
蹴った感触が明らかに軽い、突き刺さったような感覚など無く、しいていえば触れた様な撫ぜた様な感覚のみ。
それで敵を倒したと思えるほど彼は馬鹿ではない。
故にその光景は、大地に立つ夜一の姿はフェルナンドにとって想定内であり当然であった。

夜一の方は自ら後ろへ跳び、蹴りの勢いも何とか殺したおかげで大事には至っていなかった。
しかし口の端から僅かに流れる血が、彼女の受けた攻撃の威力を物語る。
勢いを殺し、自ら跳び衝撃を殺して尚、威力を残すその蹴り。
化物と呼ぶに相応しいとさえ思えてしまうそれ、そしてその一撃を喰らうまでの敵の一連の動き。

ありえない、と思った所から飛んでくる必殺の一撃達。
虚と実、織り交ざり思考の外から襲い掛かる絶死の顎(あぎと)。
白打の使い手としては荒削りと言っていいがしかし、拳に宿る熱、魂は一級品。
振るう業もどこか彼女の先祖代々が振るうものに通じるような魔技の様相を見せる。

そう、全ては只無手にて敵を殺す為に、と。

「痛い目・・・かよ。　そいつは望む所だなぁ。あのガキが俺達を殺せる程強くなるならそれもまた良い。寧ろそうなってくれた方が良いに決まってる　」

「ほぅ・・・おかしな事を言うものじゃ・・・・・・・敵が強いほうが良い・・・と？」

「そうだ。　敵が強ければ強い程、俺を殺そうとすればするほど良い。そうすれば見える筈だ、その敵を殺した後には見える筈、感じる筈だろう？俺は今、生きているんだってぇ実感が・・・よぉ・・・・・」

その言葉に夜一は決定的な破綻を見た。
自分を殺そうとする者、強者との戦い、その先にこそ求めるものはあるとフェルナンドは言うのだ。
生きている実感、自分が今を生きているという実感、長い長い年月、破面になる前、大虚になる前、虚となって後途方も無い時間の中で喪失した誰しもが持つであろう時間。
彼はそれを求める、どうしようもなく、それに餓えている。
故に彼は戦いを欲するのだ、戦い、命と命を削りあう舞台を。
その存在をぶつけ合い火花散らす場所の先にこそ、極限の舞台の先にこそ見えるとこの男は確信している。

自分は今、確かに今を生きているという実感があると。

（なんという・・・・・・この男、自らも”　先　”を求めながらその先を得る為に”　今　”に命を懸けるのか・・・・・・いや・・・先を求めるからこそ今を戦える、というべきかのぉ。今という戦いの先にこそ求めるものがあるというのなら、その今に全てを賭けねば先など手に入りはしない・・・と）

自分は先を見据え今を守った、しかし敵は先を求めながら今を賭けたのだ。
そこに差は無く、どちらもが正しいのだ。
自らに信念に基づいたのならそれは正しい、殉じるものが違う時点でどちらか一方こそが正解という事はありえない。

そう思いながらも夜一はどこかその男を自由だと思った。
自分は気ままな野良猫暮らし、しかし背負った責任は捨てきれるものではなかった。
今という刹那を生きるような振る舞いをしながらしかし、どこか先を見据えていた気がしてならないと。
その自分を見たとき、ひどく目の前の男は自由だ。
求めるもののためならば容易く全てを捨て去れる、そう決断できる自由さ。
それが正しいとも思えはしないが、そんな身軽さは夜一には羨ましくも見えた。

「あぁそうだ。　こんな程度じゃ得られる筈が無ぇ。もっとギリギリの戦いが必要だ！　蹴りは見せた、次は・・・この拳を見せてやるよ！女ァァアァア！！」

尚燃え上がるフェルナンド。
気勢は燃え盛る炎、殺気は焼き焦す熱波の勢い。
叫べば霊圧は漲り気迫は尚も増していく。
受けたダメージも何もかも、吹き飛んでしまったかのような昂ぶり。
それをしてフェルナンドは、再び夜一に襲いかかる為足を踏み出そ

うとする。

しかしそんなフェルナンドの意気などお構い無しに。

「邪魔して悪いけどお楽しみはそこまでやで？坊（ぼん）」

ゆらりとした声が、月光の如く戦場へと響くのだった。

夜明けの使者

王命

思惑

蛇の笑み

BLEACH El fuego no se apaga. 69（後書き）

ＶＳ夜一さんでした。
意外と長くなったけど、それは作者の迷い故。

最初は瞬閧使う予定だったけど
作中でも書いたとおり、原作描写の威力だと当たり一面消し飛ぶんじゃね？
という事で自粛。

空間凍結も先遣隊にのみだったと思うので、ルキアが離れては危ないかな～と。
結局傷をおして戦ってもらう羽目になってしまいました。

吊柿自体は砕蜂が使った技ですが、当然夜一も使えると判断。
まぁ使い方があってるかは疑問ですが、そのへんどうだったでしょうか？

そして止めに入ったのはあの人。

久々の登場です。

空に立つのは柳が如き人影。
ゆらりゆらり、のらりくらり、そんな雰囲気を纏った人影だった。
口元に浮かぶ笑みは裂けたように深く刻まれ、月光を照り返す白銀の髪が揺れる。
半ば目を隠すほど伸びたその前髪、キラキラと美しく輝くその髪の奥には怪しさ漂う双瞳。
細く緩やかに弧を描くそれは口元と相まって笑顔と呼ぶべきもの。
薄ら笑いではあるがそれでもその顔の形は笑顔と呼ぶものだった、
しかし覗く瞳には喜や楽といった感情は見えない。
あるのはただ怪しさ、踏み込まれる事を拒み決して奥底など見せないかのような、何を考えているのか判らないような、そんな怪しさだけがその男の瞳には見て取れた。

「貴様・・・・・・市丸（いちまる）・・・ギン・・・・・・・」

夜一が呟いたそれが人影の名。
市丸　ギン、藍染惣右介と共に尸魂界（ソウルソサエティ）を離反した元護廷十三隊三番隊隊長。
月を背にして立ち、その後ろには彼以上に背の高い巨躯で黒髪の破面らしき男を従えている。
そんな裏切りの蛇を思わせる顔を持つその男が今、現世へとその姿を現したのだ。

（何故彼奴が此処に・・・・・・　離反した彼奴が態々我等に姿を晒す意味など無い筈・・・・・・）

予期せぬ人物の登場に夜一は思考を巡らせる。
藍染と共に尸魂界を離反した市丸、それは明確な反意の行動であり重罪に他ならない。
それを犯した者が尸魂界から干渉不可能である虚圏（ウェコムンド）に留まっているのではなく、現状死神が多数駐在している状態の現世、空座町に現われる意味などある筈がないと。

「あら、これはこれは、元二番隊の隊長さんやないですか。まさかこない大物まで出て来とるとはなぁ、こらもうちょっと早めに連れ戻しに来た方が良かったみたいや。」

夜一の方へと目をやり、あたかも今気がついたかのような市丸。
視界、そして霊圧がある時点で誰がいるかなど判りそうなものだが、こうして自らのペースに他人を巻き込んでいくあたり。
流石は藍染惣右介の右腕か、と彼を睨む夜一の視線が険しくなる。

しかし夜一は市丸の言葉に彼の目的を見ていた。
連れ戻しに来た、市丸は確かにそう言ったのだ。
そして誰を連れ戻しに来たのかという部分は言わずともかな、今もそこかしこで戦闘を繰り広げている現世へと侵攻した破面達。
言葉から察するにではあるが、おそらくこの侵攻は彼の、ひいては藍染の本意ではないのだろうと当たりをつける夜一だったが、それ以上の思考は続かなかった。

「時に・・・・・・　こっちばっかり見とったら「余所見してんじゃねぇよ！女ぁあぁぁぁあ！！」」

外したのはほんの一瞬、予期せぬ人物の登場につられほんの一瞬外した視線。
しかしその一瞬は大きい。
聞こえた声は既に彼女の間合いの内側、感じる濃密な殺気と霊圧は既にそこに居るのだ。
振り被られた左腕、既に放たれつつあるそれを捉えた夜一は自分の失態を責めた。
如何に予期せぬ事態があったとて今は戦いの内側、その中で敵から僅かでも注意を逸らす事の愚かさを。
驚きながらも聞こえた言葉に、同じ藍染の配下であり味方と呼べるであろう市丸の言葉に目の前の男は止まると。
”　そこまでだ　”という意味合いの市丸が発した言葉に、目の前の破面はその拳を収めると決め付けてしまったと。

だが現実は違う。

制止の言葉など意味を成さない。
聞こえていないのか、聞こえていて無視しているのか、おそらくは前者であろうその破面フェルナンド。
高揚が、歓喜が、愉悦が彼の視界から思考から、戦い以外のものを排除しているのだ。
今ある戦いこそすべて、それ以外は必要無いとしているのだ。

避わせない、そう判断した夜一、そして叩きつけられる拳を彼女は遂にまともに右腕で防ぐ破目となった。
右腕だけでは足りない、本能的にそう感じた夜一は畳み込んだ右腕の裏に更に左腕を押し付け衝撃に備える。
直後襲ったのは腕が拉げるような衝撃、大地を踏みしめていた脚などお構い無しに彼女の身体は吹き飛ばされ、現世の建物を薙ぎ倒しながら吹き飛ばされる。
たった一撃、今まで払い避わしす事で正面から受ける事のなかった衝撃は、彼女がその中で感じていた通り凄まじく、圧倒的だった。

「オラ！　一発で死ぬ程やわじゃねぇだろうが！もっとだ！　もっと魅せ付けてやるよ！　俺の力を！！だからアンタも俺に魅せろ！　もっと上を・・・なぁ！！」

歓喜の叫びを上げながら夜一が飛ばされた方向へと駆けるフェルナンド。
まともに入ったとはいえこの程度で敵を倒した、等と思える方がどうかしている。
この程度では今相対している敵は死なないという確信が彼にはあるのだ。

それはある意味信頼に似ている。
たった一撃、自分が放ったたった一撃で死ぬような者の筈が無い。
そんな者が自分にあんな一撃を見舞える筈が無い。
自分以上に途方も無い時間を、ただ敵を無手にて殺す事に費やしたであろう人物が、この程度の訳が無いと。
故に緩めない、気も、霊圧も、攻勢も。
緩める事は即ち侮辱ですらある。
こうしてフェルナンドが攻め立てる事こそある意味歪な彼なりの信頼であり、敬意ですらあるのだ。

そしてそれを越え、殺してこそ自分が高まるのだと。

嗤い駆けるフェルナンド、獲物以外映らぬその瞳がギラギラと輝いていた。

「こっちばっかり見とったら、危ないで・・・・・・って言おうとしたんやけど、遅かったかなぁ」

「ケケ。　まぁ遅いか遅くないかなら、ちっとばかし遅かったんでしょうね。市丸のニイサン」

空に立ち戦いを見下ろしていた市丸。
夜一にフェルナンドの急襲を教えようとしたようだが、それは遅きに失した。
建物やら塀やらを薙ぎ倒し、一直線の砂煙を立てながら吹き飛ばされる夜一。
それを追う様にして駆けるフェルナンド、戦場は移り彼らは言うなれば置いてけぼりを食らった状態となっていた。

「ひどいなぁサラマ君。　ボクの親切心からの言葉をそんな風に・・・・・」

「ケッケケ。　そういう物言い、藍染サマそっくりですよ？市丸のニイサン」

市丸以外のもう一人、黒髪に巨躯の男はフェルナンドの子分兼首輪役の破面、サラマ・R・アルゴスであった。
首輪役などというものは本来相手に気付かれないように置くものだが、彼の場合は別。
なにせ自ら「自分はお前に着けられる首輪だ」と言い放ったのだから。
なんともおかしな物言い、しかし彼は現にフェルナンドの子分としての立場を得ている。
言う方も言う方だが、許す方も許す方という事だろう。

まぁ実際のところその”首輪”は形骸的なものに成り下がり、今回も機能していなかった訳だが。

「ホンマやったらボクは来ぇへんでもよかったんやで？キミが坊(ぼん)をちゃ～んと見張っといてくれたら・・・なぁ」

藍染に似ている、というサラマの言葉にどこか嫌そうな雰囲気を醸す市丸。
しかしそれも僅かな事で、サラマに対してはチクリと刺さる棘が存分に生えた言葉を返した。
その言葉にサラマは「面目ないですねぇ」と悪びれる様子もなく答える。
元々サラマにフェルナンドの行動を制限など出来ないのだ。
弁は立ってもそれだけで彼を止められるはずも無く、今回はフェルナンドの方も藍染への意趣返しを込めた侵攻ゆえ、サラマに告げることもまた見つかる事も無い様事を進めていた。
結果見事出し抜かれたサラマは、一応の任務という事で市丸に同行し、こうして現世まで足を運んでいた。

「にしても・・・・・　口で言うて止まるとは思うてへんかったけど、まさか完全に無視されるいうんは予想外やったなぁ」

「なんか随分楽しそうでしたからねぇ。　俺と戦った時とは比べ物にならないですよ、あの気配は・・・・・」

実際のところ市丸の方も、そう簡単にフェルナンドが止まるとは思っていなかった。
グリムジョーの方には同じように藍染と共に離反した東仙が向かっており、そちらは彼が治めるだろうと。

しかし、まさか気付かれもしないとは考えていなかったようで、どうしたものかと思案している様子。
そうしている間にもまた大きな煙の柱が一つ立ち上り、そこから飛び出してきた夜一を追うフェルナンドの姿が見える。
夜一の方も応戦している様子で、どうやら防御に使った右腕もかろうじて無事、といった様子だった。

「なんや、羨ましいんか？　サラマ君　」

「冗談。　あの時だってこっちは必死こいて戦ってたんですよ？それを誰が好き好んでそれ以上を求める、って言うんですかい。ただの首輪には割に合いませんよ、割にね。・・・・・ただ、そういった意味ではあのアネサンも只者じゃない・・・って事なんでしょうね」

フェルナンドの気配、そして表情から鑑みて随分と意気が上がっていると判断したサラマ。
そんな彼の言葉に市丸は悪戯っぽく声を掛けた。
自分の時以上と言うサラマの言葉に、その時以上を引き出した彼女が羨ましいのか、と。
しかしサラマはベロっと舌を出し、両手を挙げて首を振りながらそれを否定する。
あの時は随分と必死で、結果二度とは御免だとすら思った戦い。
それ以上のものを求めるのは、どうにも割に合う気がしないと。
本音か嘘か、しかしそれを引き出している夜一をサラマは高く評価していた。

が、この二人随分と悠長である。

戦いは今だ進行形。
今し方も夜一の蹴りがフェルナンドの首を捉え、返す刀で引かれた足が今度は彼の顎を打ちぬいた所だった。
それを先程の場所からまるで眺めるようにして見ている二人。
もう片方の戦い、一護とグリムジョーのそれは東仙がいち早く止めている事だろう。
実直、忠実を絵に描いたような東仙要（とうせんかなめ）という人物の人柄を鑑みれば、それは容易に想像できた。

ではこちらの二人はどうか。
片方はゆらりくらりと、わざとらしさすらある程の道化ぶりを見せながらも、時にそれに紛れて真実を穿ち、しかし腹の底は決して見せない。
もう片方はこちらも道化の類、分を弁えていると言えば聞こえはいいが、その実やはり本心は見せない。

要はどちらも道化師であり此処へきたのも命令に忠実だから、と言うわけでは断じてないのだ。

彼らが藍染から命ぜられたのは、現世に侵攻した者達を帰還させる事であり、それを思えばこうして放っておいても事は成る。
フェルナンドが夜一を倒してしまえさえすれば、後は勝手に彼も帰るのだからと。
だが結局のところそうも言っていられないのが現実、フェルナンドが夜一を倒せば済むとも言ったが、もしフェルナンドが夜一に倒さ

れてしまう等ということが起これば問題であり、そうならないという保障はどこにもない。
今もフェルナンドの突撃を避わしざまに、夜一がフェルナンドの突進力を利用して彼の腹に自分の膝を突き刺している。
身体をくの字に折り曲げながらそれでも嬉々としてフェルナンドは嗤いながら裏拳を夜一に見舞ってはいるのだが、一方的に圧しているとは言い難いものだった。

そして何より、市丸にとってあまり死神側の戦力が減るのは望ましくなかった。

（さて、どないしたもんやろか。　坊はあれで大概頑固やからなぁ、そもそも口でどうこう出来そうもあらへんし・・・・・・かといってあんまり尸魂界の戦力減らしてもうたら隙が出来けへんかもしらんしなぁ・・・・・・）

市丸に流れるそんな思惑。
薄ら笑いの仮面の下に潜む蛇、今は時を待っているその蛇が思考を練る。
戦いはどちらに転ぶか判らない。
が、諸々を考えたとき止めた方が良いのは事実としてある。
だが、ここであまり積極的に動くのもどうか、という思考も市丸にはある。
要は止め方、いかにして止めるかという部分なのだ。

「いや～それにしても坊はすごいなぁ。　相手にしとるんは尸魂界でも有数の白打（はくだ）の使い手やのに。けど流石にそろそろ止めなアカン、

と思わへんか？サラマ君　」

「なら自分で止めたらどうですかい？　首輪ってのは巻かれる事が重要で、そこから鎖を引っ張る役目は他に居るんですよ」

「ま、今回の場合は巻かれてすらおらんかったけどなぁ」

さりげなくサラマに水を差し向けてみる市丸。
止めた方がいいと君も思うだろう、と。
ここで相手が「そうだ」と同意してくれれば、そう思うならお前が止めてくれと言えば済むのだが、流石に見え透いたのかサラマもそう簡単には引っ掛からない。
彼からすれば態々死地に飛び込むような真似は割りに合わな過ぎる、と言ったところか。
自分はあくまでも”首輪”であり、それを巻いて鎖をつけ、鎖を引くことで行動を制するのはあくまでも”飼い主”側の仕事だと切り返す。
言ってしまえばどちらも自分から積極的に関わる心算がないのだ。
所詮はやりたくも無い仕事、ならやらずに済むようにするのが上手い生き方であるとして。

「・・・・・痛いとこ突きますねぇ。　でも残念な事に俺、フェルナンドのニイサンに”俺の戦いの邪魔はするな”って言われてるんですよ。どうしても止めろ、って言うなら吝かじゃないですが、その後きっと俺殺されますよ？そしたらせっかく嵌めた首輪が無くなっちまいますねぇ。なんとも残念な事に・・・ねぇ」

ここでサラマが切り札を切る。
彼がフェルナンドの子分となったとき、唯一彼がサラマへと架した事。

”戦いの邪魔だけはするな”

それがサラマが子分となる為のたった一つの条件だった。
現状を見ればフェルナンドは明らかに夜一と戦闘を行っており、ここにサラマが割って入りでもすればそれは明らかに約定を反故にしたという事。
そしてその報いはおそらくサラマ自身の命に関わる。
フェルナンドがそう明言した訳ではない、しかし充分すぎるほどそれは予測できるのだ。

もしここでサラマを失うような事があれば、せっかく嵌めた首輪は外れ、また獣は自由の身となる。
半ば形骸化し、現状巻かれてすらいなかったかの様な首輪ではあるが、それでもあるとないでは違うのだろう。
そして首輪をつける事を決めた藍染自身が、この首輪の失態を責めていない事からまだ彼は必要とされている事が伺える。
以上を持って切り札、面倒事、割に合わない仕事から逃れる為にサラマが用意したそれらしい理由だった。

「あ～こら、どうにも分が悪そうやなぁ」

サラマが放った切り札に、少し前と同じように嫌そうな雰囲気を見せた市丸。

そして言うなればそれは敗北宣言に近いもの。
こうもそれらしい理由を出されたのでは、退くべきは自分だと言う意思が見える声。
まいったまいったという雰囲気も出しながら、観念したように市丸はそう零した。

「でもサラマ君。　キミよう頭が切れるなぁ、まるで藍染隊長みたいやで？ボクなんかよりずっとなぁ・・・・・・・」

「なんでしょうね・・・　前にも誰かに同じ様なこと言われたんですが・・・・・・今の、ぜんぜん褒められてる気がしないんですがねぇ・・・・・・・」

「そうなん？　ま、どうでもエエかそんな事」

サラマの切り札に敗北宣言を出した市丸。
止めに行くのはもう仕方が無い事として、しかし言いたい事は言う様子だった。
やれない事は無い、やってもいい意思もある、しかし。
それをすれば残るのは何か、　メリットかデメリットか、そのどちらが多くなるのか。
二つを見比べた時、最良の選択肢はこれなのかどうか、示された判断材料を元にまるでキミはどう思うと問いかけるかの様な手法。
条件と結末、そしてそれに至る道筋までの殆どを示しながら、あくまで自分が選択したと思わせるその手法はまさしく藍染惣右介そのもの。
感じたままのそれを、お前の方がよっぽどそうだという思いを放り投げる市丸。

対してサラマはそれを渇いた笑みで受け止める。
前にも、正確にはほんの数日前にぶつけられたものに酷似したそれ。
頭が切れる、という言葉の後に続くよく似ているという言葉。
完全に嫌味であるそれをあえて、何故か褒められている気がし無いと言えるのはサラマらしい部分。
その後に続く”どうでもいいか”というような趣旨の言葉に、若干気落ちした彼を他所に市丸は行動に移ろうとしていた。

「ま、しゃ～ない。　ボクが坊を止めるよって。どうせ言うても聞かんのや、ここはさっさと帰ってもらう事にしよか。ボクらとは別になぁ」

そんな言葉を残しその場から消える市丸。
しょうがないと、あくまでも自分は仕方が無くフェルナンドを止めるのだと。
そう言い残した市丸であったがその実は違う。

何故なら彼はさっさとこの戦いを止めたかったのだから。
ただ、積極的に動くのは要らぬ誤解と詮索を招く種。
自身が演じる人柄にそぐわぬ行動は、その種を芽吹かせる恐れがある。
敵戦力を減らせる好機、減らせずとも深手を負わせられる機会を前に無理にでも味方を退かせる事の違和感。
命令を額面通りに受け取ればそれは正解なのだが、藍染惣右介の望む部下はそうではない。
命令の裏を読み、尚且つ命令以上の戦果を暗に求められるのだ。
その点から見れば今までそれを忠実に実行してきた市丸という人物

が、そそくさと命令を遂行する事には微々たるものだが拭いきれない違和感が生まれるのだ。

だが今は違う。

何故なら彼は今、免罪符を得たのだ。

仕方が無いから自ら動くという免罪符を。

サラマが何かそれらしい理由さえ出してくれれば彼には良かった。

後は渋々自分が折れさえすれば、自分が動く事に違和感は無い。

少なくともフェルナンドが圧倒的優勢と判断できない現状、死なれる前に回収したという面目は立つ。

何故ならそれは仕方が無い事だから。

結果的に死神を助ける事になろうとも、それは命令を遂行する上で仕方が無かった事になるのだ。

巧く事を運んだのは市丸。

自分が今被る仮面は、東仙ほど実直ではない。

そんな自分が東仙よろしく命令の為にひた駆けるのはどうしても違和感がある。

その違和感はある程度は消した、後はどれだけ早く、どれだけ多く死神側の戦力を残せるかに掛かっている。

市丸の思惑のためには死神側の戦力は多ければ多いだけ良い。

その為にはフェルナンドにいち早く退場してもらうのが一番なのだ。

言葉で止まればそれが一番良かったのだが、もうそれに意味はない事は証明済み。

なら残るは一つだけであり、既にどうするかの算段はついている。

またしても立ち昇る砂煙の柱、それを目印に市丸は夜空を駆けるのだった。

市丸達が他人事のように眺めていた戦いは今だ続いていた。
何度目になるか判らぬ交錯、黒と白の線、その線と線が交わり交点から弾かれ距離をとる。
黒い方は勿論夜一、息を切らせ苦痛からか僅かに顔を歪ませる彼女、口元から一筋の血を流し、衣服もあちらこちらが破けてはいるが五体は満足。
両手両足に多々怪我はあれど欠けは無かった。
対する白い方はフェルナンド、こちらも僅かに息が上がっているが顔には今だ笑みが浮かんでいる。
身体の方も夜一に打ち据えられた痕をそこかしこに残してはいるが、動かない、失ったという事はない様子だった。

（くっ・・・　やはりやりよる・・・・・・・　体躯も儂と頭一つ分程度しか変わらんというのに何という頑強さじゃ・・・・・・あの外皮に守られている、というだけではないのぉ。こちらも騙し騙し打ち込んではいるがジリ貧じゃ、いずれ拳も脚も壊れる・・・・・・）

距離をとった夜一、巡らせる思考は解決を見出す事は無く。

白打の使い手、という事は早い段階で判ってはいた。
しかしあそこまで練られているとは正直考えていなかった夜一。
”風車（かざぐるま）”にも似た二段式の回転蹴り、その後ほぼ真下から襲ってきた蹴り上げ、初見で防げたのは僥倖の一言であり積み上げた年月と技量があればこそであった。
しかし技術も然ることながら肉体の方もそうとう頑丈で、夜一が幾度打ち込もうとも決して膝を折るような事は無く。
打ち込めば打ち込むほど気勢が上がっていく敵に果たしてどれ程のダメージを与えているのか、正直判断に窮していた。

拳も脚も何とか壊す事無く此処まで渡り合っては来た夜一。
それは一重に彼女の技量が成せる技であり、ヤミーの時とは違い彼等の外皮が高い霊圧硬度を持っている事が判っているのならば、彼女にもやりようはある。
要は打ち方を変えればいい問題であり、急場凌ぎではあるがそれは成功していた。
しかしそれはあくまでも急場凌ぎ、そのまま勝敗を決せれば御の字であるというだけで長引けばいずれ拳も脚も激しい攻撃と鋼皮（イエロ）の硬度に耐え切れず壊れるのは明白だった。

敵がどの程度ダメージを受けているのかは判らず、こちらは刻一刻と終わりの時が近付くというのが今の状況。
事此処に至っては現世への影響はあれど”瞬閧（しゅんこう）”の使用すら頭を過ぎる。
確かに影響はあるだろう、しかしこの男を後々まで残している方が余程危険なのではという思いが、夜一には過ぎってならなかった。

「ハッ！　最高だなぁ・・・・・・　こっちも返しちゃいるが、ここまで好き放題殴られたのは久方ぶりだ。ククッ、だがどうしてだ

ろうな・・・震えるんだよ。クハハ、これが喜びなのか、それとも恐怖なのかは判らねぇが・・・なぁ。なぁ、テメェを倒せば判んのか？　テメェを殺せば判るのかよ！この震えが歓喜か恐怖か！　それともこれこそが、俺の求めるモノなのかがよぉぉぉお！！」

それはまるで熱風のように吹き荒れる”　気　”。
殺気であり闘気であり覇気、それらが混ざり合ったかのような存在が放つ気の奔流。
攻撃を受けた量では明らかにフェルナンドの方が多く、肉体にもまったくダメージが無い等ということはあり得ない。
そんな事は当たり前の事、不死の生命など存在しない、傷を負わない戦士などいない、生命としてそこに存在する以上”　死　”は常に隣人としてそこに居るのだ。
彼とて殴られ、蹴られ、斬られれば傷を負いそれに痛みを感じるのだ。

そして傷が深ければ死ぬのだ、そこに例外は存在しない、フェルナンドとて死ぬのだ。

だが、彼にとって大事なのは”　今　”しかない。
今という刹那を生きられない者に先は無い、今という一瞬を懸命に生きようとしない者に未来は微笑まない。

今に全てを賭けなければ、手に入れられないものがこの世には確かにあるのだ。

フェルナンドはその為に今を生きる。
先の事は考えない、明日やればいいという考えも無い。
やるべき今が、戦うべき今がそこにあるのならばそれに全力になれ

なければ手に入らないと。
少なくとも彼がそう信じている時点で、それは彼にとっての真実で譲れず、曲げられない生き方なのだ。

愚直、不器用、頑固者。
だがそれでいい。
彼という男はそれでいいのだ。
ただ前に進む事しか知らない、後ろを振り返り後悔する事はない、目指す先をただ見据え進む。
手に入るかも定かではないものを見据え、視線を逸らす事無く歩を進めるのが彼なのだから。

今もそうなのだろう。
はじめはただ自分の業がどの程度通用するのかが知りたかっただけ。
通じようが通じまいがその後にあるのは結局同じ事なのだ。
通じれば更に昇華し、通じなければ通じるように研鑽する。
そこに終わりは無くただ”殺す”という一点に集約していく作業なのだから。

しかしフェルナンドは今現世に来た事を正解だと感じていいた。
彼の前居にいる女性は彼よりも小さく、細く、脆い。
それは破面という生物の強度と鑑みれば当然なのだがそれでも、そう見える。
だが、目の前の女性はその小さく細く脆いその腕で、脚で彼を吹き飛ばすのだ。
純粋な技量の差、研鑽し積み重ねた年月の差、踏んできた場数の差、それが彼を吹き飛ばすのだ。

だが彼はそれを嫉まない。
その差はあって当然の差であるから。

敵と自分がまったく同じである筈が無い、差とは常に存在し敵の方が上である事も往々にしてありえると。
しかし、その差が全てではない。
その差を覆してこその業であり力であり意志なのだ。

夜一へと駆けるフェルナンド。
腹部に貰った一撃は彼の速度を落としてはいたがそれでも、駆ける事を止める筈は無い。
見えるのは最早敵の姿だけ、他は排しただ敵を倒し殺す事だけが彼の頭を満たしていく。
今という戦いの果てに、今に全てを賭けたからこそ”　先　”があると信じて。

「射殺せ・・・　『神槍（しんそう）』・・・・・・・」

今まさに激突しようとしたフェルナンドと夜一。
しかし、再び降り注いだのは声。

そして降り注いだのは声だけではなかった。

二人が激突するその丁度中心点に突き立てられたのは刃。
それもただの刃ではない、そこには柄も鍔もどこにあるのか判らないほど長い刀身の刃が突き立てられていたのだ。
声は届かずとも嫌がおうにも目に入るそれ、フェルナンドとて同じ事で反射的に後方へと飛び退く。
そして突き立てられた刀身の根元を目で追えば、そこに見えるのは蛇の笑み。
此処にきて漸くフェルナンドは市丸の存在を認識していた。

「漸く気ぃついたか？　駄目やないか坊、楽しすぎて周り見えんく

なるんは悪い癖やで」

「・・・テメェ市丸。　何しやがる・・・・・・」

あくまでもニコニコと笑みを浮かべる市丸と、怒気を隠そうともしないフェルナンド。

勝負、殺し合いに水を差されたフェルナンドが怒りを顕にするのは無理も無い。

しかし感じただけで肌が粟立つようなその怒気と殺気を前に、市丸はその笑みを崩さずそれどころか余裕すら見える。

底が見えない。

その市丸を見て夜一はそう感じていた。

笑みで覆い隠された腹の底も然る事ながら、あの場所に平然と立っている事の意味。

腹の底だけではなく”　力　”の底すら見せないような市丸に、夜一は敵対した者達の力を改めて確認していた。

「何するもなにも無いわ。　無断での現世侵攻は命令違反やで？せやからキミをボクが、グリムジョーを要が連れ戻しに来たんや。キミ等十刃（エスパーダ）を止められるのなんて、同じ十刃かボク等くらいなもんやからなぁ」

「知るかよ。　俺は藍染の配下になった心算は無ぇ。　”命令”を聞いてやる義理も無ぇ、それよりテメェは俺の戦いの邪魔をしたんだ・・・・・・この落とし前、どうつけてくれる心算だよ・・・・・・」

「こらおかしな事ぬかしよるわ。　別にキミの都合はボクに何の関係もあらへん。それにキミのご機嫌伺うんがボクの仕事とちゃうからね、ボクは言われた通りキミを虚圏に連れ戻せさえすればエエねん。ちゃっちゃと戻ってくれるとボクも楽できて助かるんやけどなぁ」

あくまでスラスラと状況を説明する市丸。
現世侵攻、それも無断であるフェルナンド、そしてグリムジョーの行動は命令違反である。
命令とは守られるべきもの、そして守らせるべきもの。
それを虚夜宮最高戦力の一角がこうも容易く破ってしまっては示しがつかず、規律の緩みに繋がる。
まぁこの程度の事で藍染が恐怖によって縛る鎖が解ける訳も無いのだが、命令違反は裁かれねばならない。

故に市丸は此処に来ているのだ。
グリムジョーの方へと向かった東仙も同じ事。
そして彼等が出向いた理由など一つしか無い、それは彼等でなければ連れ戻せないからだ。
虚夜宮最高戦力『十刃』、その力は伊達ではない。
数字持ち(ヌメロス)や下官など幾ら向かわせても意味など無く、同じ十刃を向かわせるという手もあったが、もし万が一そこで拗れる様な事があれば意味が無い。
故に統括官という立場にある死神二人にお鉢が廻ってきたという次第。

この市丸の発言にフェルナンドの実力がやはり想像していた以上だと確信した夜一。
市丸、そして東仙の二人が連れ戻すというそれだけの為に派遣され

た事実。
藍染直属の部下、その力を鑑みれば自ずと二体の破面の力をより推し量れるというものだろう。

だがフェルナンドにそんなものは関係なかった。

あるのは邪魔された事への不快感と怒り。
それを存分に乗せた言葉を市丸へと投げるフェルナンドであったが、市丸も然る者。
お前の事情など関係ないとフェルナンドの怒りを一刀の下に切り伏せたのだ。
フェルナンドはもとより市丸もまた意志の強さを覗かせる。
互いに通すべきは自分の意思だけであり、態々気を使ってやる必要など無いと。

「そうかよ。　なら俺にもテメェの都合は関係ない、って訳だな・・・・・失せろ市丸。　二度は言わねぇ、まだ邪魔するならテメェから殺す」

「お～こわいこわい。　でも判るやろ？　そんな事言うたかてボクが退く訳無いやないの。それに・・・・・・」

邪魔された事への苛立ちと、まったく退く様子を見せない市丸に業を煮やしたフェルナンド。
これ以上邪魔をするのならばお前から殺す、言葉と同時に更に殺気を市丸へと叩きつける。

普段の彼からすればここまで苛立ちを見せるのは珍しい事だろう。
だが、せっかく愉しんでいた戦いに横槍を入れられた事は、彼を事の外苛立たせるのに十分だった。

だが市丸はその薄ら笑いを崩さない。
どこまでも道化じみた態度、怖いと口にしながら欠片もそれを感じていないかのような振る舞い。
そして殺気を幾ら叩き付けたとて自分が退く事等ありえないと言い放つのだ。
その退く訳がないという言葉を合図に市丸へと飛び出そうとするフェルナンド。
怒りに彩られた拳をそのいけ好かない薄ら笑いに叩き込んでやると決め、脚に力を込めた瞬間、全ては終わっていた。

「これで終いや。　そっちでちょっと頭冷やして来たらエエ・・・・・」

気がついた時には既に市丸はフェルナンドの間合いの中にいた。
怒りが視野を狭める、その典型。
フェルナンドが市丸の存在を認識した瞬間に全ては終わっていたのだ。
市丸の掌、その上にあるのは指の第一関節ほどの大きさしかない小さな匪。
その匪は既にフェルナンドの胸の中心に開いた孔に翳されており、そこからの展開は激烈だった。

小さな匪は一瞬にして解けるように。
無数の光の帯となり四方八方からフェルナンドを覆い隠す。

白い光の帯、しかしその裏は闇の様に黒く相反する属性が背中合わせに縫い付けられ、覆い隠すのだ。

「クソッ！　こいつは！」

「反膜（カハ・ネガシオン）の匪　本来は数字持ちへの懲罰用やけど、暴れる獣を運ぶ檻には充分や。ほな、また向こうでなぁ、坊」

市丸の言葉に何事か叫ぼうとするフェルナンドだったが、その叫びが届く前に光の帯は周囲の空間ごとフェルナンドを包み込み、その姿を消し去った。

反膜の匪、十刃が部下とした従属官（フラシオン）の処罰用に使用するその小さな匪は、捕らえた対象を永久に閉次元に幽閉する機能を持っている。

しかしそれはあくまで従属官、数字持ちを対象とした場合でありそれ以上の霊圧を持つ十刃を対象とした設計ではない。

故に強大な霊圧を持った者を捕らえられる時間は限られ、永久幽閉は叶わないのだ。

それを可能としているのは藍染だけが持つ連反膜（カハ・ネガシオン・アタール）の匪なのだが、今語るべき事でもなく。

市丸にとって要はフェルナンドを捕らえられさえすれば方法は何でも良かった。

それこそ縄で簀巻きにして連れ帰ったとて結果は変らないのだ。

ただ反膜の匪の方が何かと便利で早かった、というだけ。

数時間の後に破られはするだろうが、その時には既に全て終わった後であり、もしフェルナンドが今だ怒りを抱えていようともうどうしようもない事なのだった。

「あ～こわかった。　あんなのが十人もいると思うとボクは怖ろしゅうてかなわんわ。さて、坊は消えたけどアンタはどうします？元二番隊隊長さん？」

姿を消したフェルナンド、その後に残った市丸はパンと一度手を叩くとあっけらかんとした声を上げる。
本当にそう思っているのか疑わしい限りのその声、蛇、腹を見せぬ蛇の声。
フェルナンドが消えた事によりその場に残ったのは夜一と市丸。
正確に言えば戦いによって負傷している夜一と、着物に埃一つつけていない万全の市丸である。
勝敗は誰の目にも明らか、少なくとも現状のままでは夜一の勝ち目は薄いだろう。

「無論、捕らえるに決まっておろう・・・・・・貴様を捕らえれば藍染の目的も見えるやもしれん・・・・・・」

だが、それでも夜一は行く。
勝ち目が薄いから戦わない、というのは既に敗者の思考だ。
そもそも勝ち目とは自ら生み出すもので、戦いの前から決まっているものではない。
敵の幹部がのこのことこちらの目の前に姿を現したのだ、捕らえて根こそぎ吐かせるが常道と。
その為に身体よ、もう少しだけ保ってくれと願う夜一であったが、形勢は更に悪くなる。

「お？　終わったんですかい？　市丸のニイサン」

「あ～、サラマ君やないの。　こら見物どうもご苦労さん」

「・・・・・意外と根に持つんですねぇ。ならこっちも退くとしますか、どうにも現世ってのは息が苦しくて」

「そうやね。　用事は済んだしちゃっちゃと行こうか」

そう、更なる敵方の増援である。
黒髪に巨躯の男、先程も市丸の後ろに立ってはいたが弱くはない、と見抜く夜一。
流石にこの状況で二対一は歩が悪いか、と思う夜一であったがそんな彼女を他所に市丸と黒髪の破面はさっさと撤退を決定する。

「ま！　待て！」

声をかける事におそらく意味は無い。
あるとしたらそれは咄嗟に口をついた、というだけでありそれで敵が止まるほど世界は優しく出来てはいないのだ。
夜一を他所に黒髪の破面がそっと空に触れる。
直後、空が横一直線に割け、更に縦に切込みが入るとそれらが段違いに開いていく。
出来上がったのはまるで歯並びの悪い化物の顎のような穴、空が割けて後に見えるのは何処までも暗い道筋だった。
黒髪の破面、それに次いで市丸がその中に入っていく。

夜一に背を向けて、その行為になんら危機を覚えないといった風に。
屈辱的なことだ、それは。
要するに今、夜一は敵に見逃されたのと同じだった。
負傷を負った自分を仕留める事無く、悠々と帰還される。
命は助かったがしかし、誇りは抉られたかのように。

割けた空の穴、解空（デスコレール）と呼ばれる破面の現世と虚圏の移動術に足を踏み入れた市丸が振り返る。
そして割けた空が再び元に戻ろうとするなか、締まる直前のそこでやや身を屈めるようにして薄笑いを浮かべた市丸は、夜一に手を振りながらどこまでも気軽に言い残し去っていった。

「ほな、バイバーイ」

空が閉じ、残ったのは静寂と戦いの残り香。
長い長い夜、時間にしておそらく1時間にも満たないであろうがそれでも長い夜。
その夜が漸く明けようとしていた。
残された者達それぞれに、悉く苦さを残したままで・・・・・・

裁き
王の意思
忠烈
割れ戻り
何を思う

BLEACH El fuego no se apaga. 70（後書き）

現世侵攻篇一応の終了です。

やっぱり思った以上に伸びたなｗ

そして迎えに来たのは市丸だけじゃなくてサラマも一緒でした。
この二人どっか似ているというかなんと言うか・・・・・・
二人とも藍染さんに似てるって言われて嫌そうにする辺り
忠義も何もあったもんじゃないなｗ
ある意味正直者達です。

そんな二人のやり取りの中、戦い続けていた夜一とフェルナンド。
意外とボコボコにされていたフェルナンド、しかし元気です。
一瞬観戦モードに入りそうになる辺り、市丸もサラマもやる気なしｗ

前回までは戦っていた二人の回でしたが
一転今回は良くも悪くも市丸、サラマの回となりました。

さて、この小説も書き続け早７０話。
そしてＰＶも２，０００，０００を超える事が出来ました。
感謝でゴザイマス。

最期にもう一点。
散々書いてきましたが、この７０話を書いていて気が付いた事がありました。
それは・・・・・・

今まで“虚圏”をずっと“虚園”と誤認して書いていた！

やってくれるぜ藍染さん・・・・・・・

・・・スイマセン。

ちょっとずつ修正入れようと思います・・・・・・・

「おかえり、グリムジョー」

降注ぐ声は何処までも威厳に満ち、ただその声を聞くだけで皆一様に萎縮するような感覚さえ覚えさせる。
深く玉座へと腰掛け、見下ろす目と口元に僅かな笑みを湛えた男が彼等を迎えていた。
彼等が立つ床よりも随分と上に据えられた玉座に座る男。
立つ場所、座す場所の違いはそのまま位の違を告げる様であり、更に言えばそれは力の違い。
隔絶、同じ地平に立つ事などありえないと告げるかの様なその差は圧倒的で、決して縮まる事など無いと言うかのよう。
誰がそれを指摘した訳でもない、誰がその差こそが地位の差だと明言した訳ではない。
しかし、それを見た者が皆一様にそう感じてしまうほど、高くに据えられた玉座に座す男の存在感は圧倒的だった。

「「只今戻りました。　藍染様　」

「あぁ　ご苦労だったね、要。　それにサラマも」

「ケケ。　まぁ俺の場合は自分の尻拭い、ですからねぇ・・・・・・
（ま、働いちゃいませんが）」

一礼し、高きに座る自らの主、藍染惣右介に帰還の報告をしたのは東仙要（とうせんかなめ）。
浅黒の肌に黒髪を編みこんだ髪形をした盲目の将は、恭しくその頭を下げる。
現世より戻って後、数時間の間を挟んでのそれであったが許された謁見。
規範正しく、礼儀正しく、忠節を重んじるその男にとってその行為は当然で、チラと気配に感じる隣に立つ破面が頭の一つも下げないのは彼にとって不快でしかなかった。
東仙の言葉に労いの言葉をかける藍染、その言葉はもう一人にも向けられ、しかし向けられた方のサラマ・R・アルゴスの方はといえば別段畏まった様子もなく、そしてそれ以上に悪びれる事も無くその言葉に答える。

そして残る一人、水浅葱色の髪をした破面グリムジョーだけが今だ沈黙を保ったままであった。

「・・・どうした。　謝罪の言葉は無いのか、グリムジョー」

その沈黙、連れ戻され尚憮然としたその態度に東仙が口火を切る。
何をしている、何故黙っている、何故その口を鎖しあるべき謝罪を述べないと。
東仙からすれば謝罪の言葉などで済まされるべき問題ではないのだが、まず言うべき事があるだろうとグリムジョーに言葉の刃を向けたのだ。
だが、当然のように返って来るべき謝罪は別の言葉に置き換えられていた。

「・・・別に・・・・・・」

謝罪は無いのか、という東仙の言葉にグリムジョーが返したのはそんな一言のみ。
多くを語る事はせず、しかしそれでいて言外に謝る事など無いと告げるその言葉。
尽くす事無くしかし伝わる意思の存在、並び立つ東仙とグリムジョーのやや後ろで一人ヒュゥとおどけて口笛を吹くサラマを他所に、東仙の言葉には心なしか熱が篭る。

「ッ・・・・・　貴様っ・・・」

「いいんだよ、要」

明らかに謝る心算などない、というグリムジョーの態度に僅か怒り

を見せる東仙であったが、それは他ならぬ藍染の言葉によって遮られる。
それでも「しかし藍染様　」と食い下がる東仙であったが、藍染の気配を察し口をつぐんだ。
なまじ彼は目が見えない分敏感に人の気配、それらからくる感情の機微を察する事が出来る。
それ故に判るのだ、藍染に彼の言葉を受け入れる心算が無いという事が。

「私は何も怒ってなどいないよ。　今回のグリムジョーの行動は、彼の御し難いまでの忠誠心からのそれだと、私は考えている。・・・・・そうだろう？　グリムジョー　」

「・・・・・そうです　」

僅か眼を細めるようにして問われた藍染の言葉に、グリムジョーはほんの一瞬間を置いて答えた。
まるで値踏みするような藍染の視線、それを真正面から見据え答えるグリムジョー。
そしグリムジョーが答えると同時に彼の襟首を何者かの手が握り締める。
その手の主は東仙、眉間には深い皺が刻まれ光を解さぬ眼光はしかし鋭くグリムジョーを睨みつける。

「藍染様！　この者を処刑する許可を！！　」

許し難い、東仙に浮かぶのはそんな思い。
この男には無い、この男には存在しないと。
忠義、忠節、忠心、忠誠、忠順。
その全て、主たる藍染惣右介へと向けるべき全てがこの男には欠落していると。
だがグリムジョーはそれを常に持っているかのように平然と口にした。
まるで予てからそうであったかのように、自分が常にそうあったかのように、そしてこれからも続くかのように。

東仙の前で大胆にそう嘯(うそぶ)いたのだ。

故に許せない。
東仙からしてみればグリムジョーの言葉は、ただこの場を助かりたいが為に発した薄い言葉。
自らの保身、助命を考えたただけの言葉、虚飾の言葉。
その為に、命惜しさに藍染への形ばかりの忠誠を口にする事。
言うなれば藍染惣右介を命助かりたいが為に利用するという事。
そう考える東仙にそれは許されていい筈が無いのだ、少なくとも彼にとっては絶対に。

「フン！　私情だな・・・・・・　テメェが俺を気に喰わねぇ、要はそれだけの話だろうが」

「私は貴様のような調和を乱す者を許すべきではない、と考えているだけだッ！」

ぶつかり合う意見は交わる事無く反発する。

無表情だったグリムジョーの顔には、彼からしてみれば自らの意思を大義名分で飾り立てる東仙への嘲笑が。
東仙には大局を見る事無く、ただ”個”としての感情に囚われるグリムジョーへの憤懣が浮かぶ。
どちらもが相手を見下し、どちらもが相手を愚かだと断ずる。
正しいのは自分のみだと主張する。
そこに和解は生まれず、和解が成らないと言うのならばこの虚圏に残された選択肢はそう多くはないのだ。

「組織の為か？　くだらねぇ・・・・・・」

「違う。　全ては藍染様の為だ」

「ハッ！　大義を掲げるのだけは巧いらしい・・・・・・」

噛み合わない会話、交わらない意見、落とし所の見えぬそれらが場に満ち向かう先は一つ。
重んじるものが違う、信じるものが違う、個人を形成する根底が違いすぎる。
それは何もグリムジョーと東仙にだけ言える事ではない。
死神と破面、破面と人間、人間と死神、そして人間と人間。
誰もが自分以外の誰かと真に理解し合う事など出来る筈もなく、統一が図れないからこそ人は言葉を尽くす。
少しでも自分の意思を伝える為に、自分以外の誰かの意思を少しでも理解する為に、誤解無く誰とも理解など出来ないが故に。
だが此処にはそれが無い。

理解できないのなら、伝わらないのなら、ぶつかり合うのなら方法は一つ。
自分以外のそれを捻じ伏せるのだ、己が持つ”　力　”によって。
理解などする心算は無い、伝え合う必要性も無い、ぶつかり合う二つ、二人がいるのならば殺しあえばいい話。
死んだ方の意見は通らず、伝わらず理解される事もない。
二者択一、生と死、裏か表、正しさと間違いをもしこの虚圏で二分するとしたらその境界線、二つを分ける定義は一つ。

殺した者こそ正しく、殺された者は皆間違っていたという事なのだ。

それが摂理。
数多有る諍いのもっとも根源的な解決法。
獣のそれであるがしかし、この虚圏にある数少ない法則の一つ。
故にこの二人が言葉を尽くすのはそう長くない。
後はどちらがはじめるか、それだけの問題なのだ。

「そうだ、大義だ。　貴様にはそれが欠けている。大義無き正義は殺戮に過ぎない、だが・・・・・大義の下の殺戮は・・・・・・」

静かに語りながら左手に握った刀の柄へとその右手を伸ばす東仙。

それを横目で見咎めるグリムジョー。
戦る心算なのか、それともただの威嚇か、どちらにせよグリムジョーとてタダで殺される心算など毛頭ない。
死神の少年との戦いで傷を負いはしたが戦闘に支障など皆無であった。
そんなグリムジョーを他所に柄を握った東仙。
語られる言葉は正義と殺戮の違い、共に結果として凄惨な風景を残すそれを正義と呼ぶか、それとも殺戮と呼ぶか。
その二つを分けるものを東仙は大義であると論じた。

大義、人が守るべき道義であり主君への忠義。
それの有る無しが正義と殺戮を分ける境界だと、東仙は言うのだ。
あまりに抽象的、そして感覚的である事柄。
しかし、東仙要にとっては少なくとも隣に立つ男、グリムジョー・ジャガージャックに大義は無いのだ。

「・・・・・正義だッ！」

その言葉が終わると同時に光が抜き放たれる。
刃は奔り一路グリムジョーへ、正確には彼の左腕の付け根目掛けて最短を駆けた。
それに迷いは無い。
斬り落とす事になんら迷いは無く、大義をもって誅する為にその刃は駆けていた。

「なにが大義だ！　殺戮は本能だ！　理由なんて意味が無ぇんだよ！！」

が、グリムジョーとて易々と腕を斬り落とされるのを許す筈も無い。
。
なまじ東仙が刀に手を掛けているのをその目で見ているのだ、警戒していないというのがおかしな話である。
グリムジョーがとった行動は至極簡単。
斬られる前に殺してしまえばいい、そんな単純で簡潔な行動。
身を翻し東仙を迎え撃つと、その腕を突き出し東仙の頭蓋を打ち抜かんとする。
殺戮という本能に身を任せて。

腕を庇うのではなくそれより先に仕留めんとするグリムジョーと、迎え撃って来たグリムジョーに些かも怯む事なく刀を振るう東仙。
防御は双方無い、敵のそれよりも自分の方が速いという自負が互い共にあり、それ故に防御は選択されない。

どちらも止まらない、止まる事など考えてもいない。
気に入らない、気に喰わない、和を乱す、忠を解さぬ。
ならば滅する、今この時をもって。
簡潔にして強固な意志、自ら止まれない意地が彼らにはあった。

「おっと・・・！　ハイハイ。　その辺で止めといてくれますかい？じゃないと怖〜い御人が出張ってくるじゃないですか」

激突は成る。
しかしそれは彼等二人が望む形とはならなかった。
ぶつかり合うであろう二人の間に立つ者があったからだ。
突き出されたグリムジョーの腕は東仙の頬を深く抉りはじめる寸前、振り下ろされた東仙の刀はグリムジョーの左腕に深々と食い込んでいたが、刎ねるには至らない。
そう、それはどちらも決定的ではないのだ。
突き出される腕と振り下ろす腕、その両方を寸前で掴み、止める者があったが故に。

「貴様・・・　サラマ・R・アルゴス。　何故邪魔をする」（私の斬撃を止めた、というのか・・・・・・）

「誰だ？テメェ・・・　邪魔すんならテメェから殺すぞ・・・・・・」（何だ、コイツ・・・　俺の腕をとりやがった）

二人の腕を掴んだ者、それは彼等二人を後ろから眺めていた人物、サラマであった。
サラマの巨躯からそれに見合った強さで握られる両者の腕、彼等二人からすれば振り払うのは容易いのかも知れなかったがそれでも、掴まれたという事が彼等の動きを止めていた。

サラマからすれば二人がぶつかり合う前、グリムジョーの腕に刃が入る前に止められるのが最善ではあったのだが、それは高望みとい

うもの。
こうして決定的な状況となる前に止められたのが、寧ろ僥倖であるとさえサラマには思えていた。
形式上グリムジョーは東仙よりも下であり、その東仙にグリムジョーが傷を負わせたとなれば事が荒立つのは必定。
対して大義を掲げる東仙ではあったが、それは突き詰めれば彼だけの意見、大義とは所詮掲げる人の数だけあり、それだけで十刃の一角を欠いてしまうのは視野狭窄気味。
そしてサラマがこれから此処に戻って来るであろう人物を刺激するような状況はあまりよろしくない、と考えたからかもしれない。

まぁもう一つはこのまま殺し合いなぞ始まれば、自分諸共彼の王に霊圧で押しつぶされるのは目に見えており、出来ればそのとばっちりは御免被りたいというのが本音なのかもしれないが。

「フフ、その怖い人、というのは私の事かな?サラマ 」

「物の例え、ですよ。 ・・・・・それに統括官サマ、自分で許可求めておいて許可無く斬りかかったんじゃ意味無いですぜ?それじゃ大義じゃなくて独善ですよ。 確かまだ許可は降りていない・・・そうですよねぇ? 藍染様? 」

「・・・・・そうだね。 要、刀を退くんだ 」

その言葉に一度眉間の皺を深くする東仙であったが、彼はそれ以上食い下がる事は無かった。
主の命は”退け”、それに更に食い下がるような事があればそれは不忠、彼にとって許し難い行為なのだから。

少々乱暴にではあるがサラマの腕を振りほどく東仙。
グリムジョーの腕からどろりと血が流れ、それが付いた刀を素早く一振りして血を払うと東仙は納刀し、藍染に深く頭を下げる。

「申し訳ありません。　御前を穢しました事、深くお詫び申し上げます」

王の前での刃傷沙汰、仕える者として恥ずべき行為。
如何に大義の為といえ場を弁えなかったのは自分の非であると、東仙は藍染に頭を垂れる。
その様子に藍染も一言構わないと告げ、東仙の方は一応の落とし所となっただろう。

「クソがぁ・・・・・・！　東仙！　テメェこれで終わりだとでも思ってんのか！ただ斬られて黙ってる程俺は微温(ぬる)か無ぇんだよ！！」

収まりが付かないのは寧ろこちらの方。
グリムジョーも力任せにサラマの腕を振りほどくと叫びを上げ、腰に挿した斬魄刀へとその手を伸ばす。
左腕は深く斬りつけられ、そう易々とは動かせはしないだろうが刀を抜くのは右腕、振るうのも右腕、ならば何の問題も無く。
敵は無傷で自分だけが傷を負い、そのままで終わらせられるほど彼は腑抜ではない。
寧ろ逆、戦いは既に始まっており、もう東仙を殺すより他はグリムジョーに選択肢など無いのだ。

「止めるんだ、グリムジョー。　サラマが君の攻撃を止めた意味が判らないか？お前がまた要を攻撃するのなら、私はもうお前を許す訳にはいかなくなる・・・・・・」

が、グリムジョーが刀を抜こうとするより早く声が響いた。
常の藍染とは違う、霊圧を存分に纏っている訳でもないただ言葉だけが響き。
しかし霊圧を纏わぬというのにその言葉は圧倒的な威厳と重圧で、グリムジョーの行動を止めたのだ。

藍染を見上げるグリムジョー。
彼を見下ろす藍染の瞳は些かも揺れず、その顔にも笑みは無い。
いっそその笑みのない顔の方が珍しいとさえ思わせる藍染という男、それだけにその真剣みを増した表情が語るのは真実。
もしその刀を僅かでも抜けば、藍染はその瞳に宿った冷酷さでグリムジョーをあっけなく処分するだろう。

それが容易く出来るだけの力を、この男が持っているが故に。

「チッ！　クソが・・・・・・」

藍染を見上げていたグリムジョー、彼は一つ舌打ちをするとギリっと奥歯を噛締め踵を返した。
片腕からは尚も血が流れ続け、ボタボタと床に流れ落ちるがしかしその痛みではなくグリムジョーの顔は怒りに歪む。
瞳に浮かぶ怒りは今だ消えず、だがその怒りは東仙にではなく自分

へと向かう怒り。
何故、何故こんなにも。

何故こんなにも自分は弱いのかと。

力が欲しい、力が欲しい、何者にも屈さない力が欲しい、何者をも屈服させる力が欲しいと。
彼の視線の先にいた藍染惣右介は今彼が望むモノに最も近い場所にいる。
だがその場所に、その男に自分のなんと遠い事かと。
それが腹立たしくて憎らしくて、グリムジョーは怒りの炎を燃やしているのだ。

怒りの炎を湛えた瞳に、野望の薪をくべる様にして。

グリムジョーがその場を去り、残ったのは藍染、東仙、そしてサラマのみとなった。
再び笑みを湛えた藍染と、無表情となり沈黙した東仙、残るサラマはこういう空気は苦手なのかはたまたこの後に起こるであろう惨事に頭を悩ませていた。

（市丸のニイサンも人が悪いったら無い。　怒らせるだけ怒らせて

閉じ込めるとか何考えてんだか・・・・・・それでいて自分はフケるとかありえないですぜ・・・・・・ったく、割に合わねぇなぁ・・・・・・）

そう、彼がこの場にいるのは彼の親分たる男の帰還を待っている為。
反膜（カハ・ネガシオン）の匪、破面の懲罰用閉次元幽閉展開装置であるそれに、彼の親分たるフェルナンド・アルディエンデは囚われているのだ。
といってもそれはあくまで数字持ちクラスを永久に閉じ込められる程度の強度しか持たず、それ以上の力を持つ者を長い間閉じ込めて置けるような代物ではない。
彼の親分もおそらくそのうち閉次元より脱出し、予め繋げられたこの場所に出てくる事だろう。

だが問題となるのは出てきた後だ。
サラマには大人しく閉次元より帰還し大人しく藍染に罰せられるフェルナンドの姿が、それこそ欠片も想像できなかった。
比較的落ち着いていたグリムジョーとて今の騒ぎ、市丸によればそれはもう怒っていたというフェルナンドならどうなるか、最早及びも付かないといったところなのだろう。

それでも止めるのは彼、サラマの役目。
巻かれた首輪、なにより子分として親分の暴走を止めるのもまた良い子分の仕事であると。
そんな事を考えるあたり律義者ではあるサラマ、だがその律儀さが悉く報われていないのが彼らしいと言えば彼らしいのだが。

「不服かい？　要　」

サラマの心労を他所に藍染が東仙に声を掛ける。
沈黙を守っていた東仙、その顔に表情はないが藍染にはその無表情に不満が浮かんでいるのが見えていたようだった。

「・・・・・いえ、藍染様が決められた事、私が何を申し上げるものでは御座いません」

僅かな間を置いて答える東仙に、藍染は「キミらしい答えだ」と微かに笑う。
自分の意思はある、考えも有る、しかし忠節の前にそれは無意味と斬り捨てられる潔さ。
自らを持ちながら滅私をもって使える臣、それが東仙要の姿なのだ。

「だが私は本当に彼を罰する心算は無かったんだ。現世無断侵攻、破面戦力の無断投入及び損失、そんなものは些細な事だよ。グリムジョーはそれに勝る功をしっかりと上げているんだ。彼の成長を促す切欠となる、という功を・・・ね」

サラマは元より東仙もその言葉には怪訝さを浮かばせる。
多くを語るようでその実、多くは語っていないのが藍染惣右介という事の性。
秘するべきは秘す、明かすべきも正しく明かす事はせず、相手には常に疑念と欺瞞を。
その性故に、今語られた言葉すらそれに順ずるものなのかはたまた本心なのかを誰もが測りかねる。

おそらく正しく藍染惣右介を理解できる者などこの世には存在しないのだろう。
そして存在しないからこそ彼は孤高足りえるのだ。

「フフッ、さて話はここまでとしよう。どうやら・・・戻って来たようだ・・・・・・」

怪訝さが浮かぶ二人の表情に笑みを深める藍染。
言葉に意味があったのか、ただそうやって他人を欺瞞に陥れたかっただけなのか。
真実は常に見えず、そして藍染の言葉と共に東仙とサラマの前、何も無い空間に突如として罅が入った。

まるで欠ける様に空間の一片が砕け、次の瞬間まるで硝子が割れるように大きく空間が砕けると、次いで噴出したのは紅い炎だった。
噴出した炎はそれだけに留まらず、四方へと流れ出し一面を炎の海へと変えていく。
それは狭い場所から解き放たれた事による反発のようで、藍染等の存在などお構い無しに溢れ出していた。

(あ〜〜〜もう、マジですかい。　この霊圧にこの炎、こりゃ完全に帰刃(レスレクシオン)してるじゃないですか、ニイサン・・・・・・)

そう、この場にいる全員がこの霊圧と炎に覚えがあった。
サラマの場合は直に相手をしただけにその思いは強いだろう。
前第7十刃（セプティマ・エスパーダ）をいとも容易く消炭すら残さず燃やし尽くした炎、地獄の業火を思わせるようなその炎の持ち主は一人。

現第7十刃　フェルナンド・アルディエンデであると。

暴れる炎はまるで獲物を求めるように吹き荒れ、東仙、そしてサラマは襲い来るそれを跳び退いて避わしていた。
だが、藍染だけは今だ座したまま動く必要などないといわんばかりに、頬杖を付きながら軽くトンと肘掛を指で叩く余裕さえ覗かせながら、ただ笑みを浮かべたまま紅く燃える炎を見ていた。

一頻り暴れまわった炎、既にあたりへと燃え移り普段そう明るくない虚夜宮の室内を常よりも煌々と照らし出す。
割れた空間の穴より噴出していた炎も次第収まり、次いで炎は急速に引き寄せられるように穴の中へと戻った。
ぽっかりと空いた穴とその奥に広がる暗い空間、今もまた穴の端の方が硝子片のように砕けて落ちる。
そしてその空間の穴から姿を現したのは、自ら燃やした炎に煌々と照らされる金髪の男。
衣服は千切れ破けてはいるが、確かにその足で立っているフェルナンド・アルディエンデ。

その姿は人のそれであり、彼の解放状態ではなかった。
どうやら先程までは解放していたようだが、出てくるにあたり解放を止め、再刀剣化した様子。
一度解放したことにより数時間前に戦闘で受けた傷は粗方治っている様子であった。

そしてフェルナンドが解放状態でなかったことに内心一人ホッと胸を撫で下ろすサラマ。
いくら自分も破面となったからといってアレの相手はそう何度もするものではないという想いからか、再刀剣化は彼にとって救いといえるものだったらしい。

「おかえり、フェルナンド。　キミには随分と窮屈な思いをさせてしまったかな？」

「ハッ！・・・・・・」

グリムジョーの時と同じようにフェルナンドを迎える藍染。
だが彼の時とは違い、反膜の匪という決して良い待遇とはいえないものでの帰還を強いてしまった事に、形ばかりとはいえ気遣いを見せる。
その言葉に何を今更といった風で鼻で笑うフェルナンド。
窮屈など今に始まったことではないと笑うフェルナンドを他所に藍染は話を進めた。

「ギンは随分とキミの怒りを買った様だね」

「知るか。　戦いの邪魔をされて気分の良い奴なぞ居るものかよ。だが俺もだいぶ頭に血が上ってたのは事実だ、だから解放して発散したんだよ。あそこは丁度御誂え向きだったから・・・なぁ」

藍染がちらと零した話題、市丸ギン。

だがフェルナンドはその名に苛立ちを覚えた様子だったが、それは激昂には程遠く。
熱しやすくそして冷めやすいのか、その雰囲気は常よりも多少機嫌が損なわれている、といった印象であった。
先程の解放もその実、怒り狂っての事ではなく自分を諌める為に力を発散させたという事。
本来解放せずとも脱出できたのだろうが、不完全燃焼であったそれを燃え上がらせ、一応の決着を彼なりに試みた結果である様子だった。
苛立ちは浮かべど激昂ほどではなく、精神的にはある程度安定していると判断した藍染は、僅かに口元の笑みを深めるとついに本題へと入っていく。

「さて、早速だが今回キミは私達に無断で現世へと侵攻した。グリムジョー達も同じように侵攻を行った訳だがキミ達が内応したとも思えない。今回の事は偶々同じ時だった、というだけ・・・という訳だ。その目的も彼等と違うとは思うが・・・・・一応訊いておこうか、フェルナンド・・・キミの今回の現世侵攻は私への忠「違ぇよ・・・・・・」」

藍染の言葉は間髪入れずにフェルナンドに遮られる。
それはありえない、という意思がそこからは存分に感じられるようで、荒げるでもないその声は確かなもの。
藍染の言葉を遮り、忠誠を否定するその言葉に東仙の眉間に皺がよるが、先の事もありその鞘を握る手に力が篭るにとどまっていた。

「俺は只あの体術使いの女と戦ってみたかっただけだ。俺の欲を満

たしたかった、ただそれだけでテメェのためじゃ断じて無ぇ」

「フフッ。　あくまで自分の飢えの為・・・と。その答えは実にキミらしいね、フェルナンド」

（確かに“らしい”っちゃらしいですが・・・ね。でも、ただ真っ直ぐだけじゃ世は渡れませんぜ？ニイサン・・・・・・）

確かにその答えは、自分が自分の為だけに起こした行動だというフェルナンドの答えは真実だ。
そして藍染の言う通りその答えは実に彼らしく、何に気を使うことも恐れる事もない己を貫く答えだった。
忠義、忠節ではなく全ては自分の欲望を、飢え焦がれるそれを満たす為の行動に過ぎないと。
何に恥じる事も無く、真実を曝け出し自らにのみ忠実に、”今”を求めた結果であると。

だがそれは不器用な生き方だ。

サラマにはそれが良く判った。
強く強靭な意志、決して曲らず折れない鉄の意志。
だがそれは同時に自らを曲げられないという事である。
どんな状況に陥っても自らを曲げられず、死ぬと判っていても踏み込んでしまう鉄の意志。
サラマにとって自分とは縁遠いその意思。
彼にも曲げられないものはある、しかし死ぬと判っていても曲げないという確信がサラマには持てない。

死んだらそこで終わりだろう、次も続きも無いだろう、なら逃げた

っていいじゃないか、挫けたっていいじゃないか、死ぬよりは、終わるよりはずっとずっといいじゃないか。

サラマに消えず残るそんな思い。
俗世的であるがしかし、それもまた真実であり誰もそれを笑う事は許されない。
自らの曲げられないものに殉じられると言い切れない理由。
器用であるが同時に悲しさがそこにはある。

今のフェルナンドもそうだ。
サラマからしてみれば態々本当の事を言う必要などここにも無い。
十中八九藍染はフェルナンドの理由を知っているだろう、だが知っていて尚、道を用意しているのだ。
忠誠心故の行動、それに頷くだけで事は終わるというのに。

グリムジョーはそれを選択した、彼とて実際は忠誠心の欠片も持ってはいないだろう。
だが、こんな場所で彼は蹲く訳にはいかないと、その為に有りもせぬ忠誠心を騙らねばならぬのであれば幾らでも騙ろうと。
所詮は言葉、内にある真実は誰にも曲げられはしないのだからと。

だが彼は、フェルナンドはその言葉すら曲げられない。
自分というものにあまりにも正直すぎる。
サラマがこのフェルナンドという男を見続けて感じた印象は正にそれ。
確かに強い、驚くほどに、そして怖ろしい程に。

しかしそれと同時に危ういのだ、この男は。

無用な争い、無用な恨み、本来集めずに済むものまでこの男は集め

てしまう。
争いに関しては意図的な部分すらあるがそれでも、サラマにそれは危うく映るのだ。
この男に”長く生きる”という選択はきっと無い。
刹那を、ただ刹那を生きるこの男は、フェルナンドという男はそれ故に危ういのだ。

「だが如何にそれがキミらしい答えであるからといって、易々と許してしまっては示しが付かないのが現状だ。私はキミに生き方を変える必要はないと言った。だがキミが掴んだ不自由も認めなくてはならない、とも言ったね。キミは十刃、その責は重い・・・　好む好まざるではなく、その責を負う者として自覚無き行動は罰をもって処するより他ありはしないよ」

「ハッ！　不自由の責任・・・かよ・・・・・・」

フェルナンドの回答、それを彼らしいと口にしながらも藍染は言う。
責任ある者として罰は受けねばならないと。
フェルナンドは十刃、彼が望んだ地位ではないがそれでも彼は十刃なのだ。
その十刃が命令を無視して好き勝手に行動し、戦端を開くという事の重大さ。
最高戦力というものはそう易々と動かすものではなく、その戦力が強大であるが故に統制と管理が成されなければならない。
個々の意思によって暴れまわる力など戦力とは呼べず、その状況を許す事は戦力を統括し支配する者の無能を晒す事に他ならないのだ。
今回の現世侵攻、グリムジョーは東仙による粛清を受けた、という

事で事態は処理されるだろう。
些か甘くはあるが藍染の語った”功”による影響が大きいのかもしれない。
だが、フェルナンドに現状“功”と呼べるようなものは存在しなかった。
只好きなように暴れ、敵を討った訳でも戦力を減らした訳でもない。
私情により戦端を広げ、ただ戻っただけなのだ。

それで何もお咎め無しでは全ての破面に示しが付かないのだ。

「・・・・・だが、正直私も困っているんだ。キミに罰を与える、と言ってもキミにとって罰らしい罰、というものが思い当たらなくてね」

が、罰という言葉に些か緊張を増していた空間はおかしな方向に推移し始める。
玉座に深く腰掛けた藍染、その彼が僅かに肩をすくめながら言うのだ。

罰らしい罰が思いつかないと。

なんとも似つかわしくない言動、天の座に立つ男は配下の処遇に窮しているとそう彼等に告げるのだ。
だがよくよく考えればそれは仕方が無い事、と言えなくも無い。
フェルナンド・アルディエンデにとって”罰”となり得るものは何か。

これを考えた時、何が適切かはそう判るものではない。

まず一つは十刃としての階級剥奪、おそらく処罰としては重いものであるのだがフェルナンドにとって十刃の位は不自由の足枷でしかなく、剥奪はある種解放に近く、罰として意味を成さない。

もう一つは階級ではなく肉体的に罰を与えるという手はどうか。

これも懲罰的観点からみれば有効であるのだが、如何せんそれは圧倒的強者の存在が不可欠。

藍染自らが完膚なきまでにフェルナンドを痛めつければ、肉体、そして精神的に叩き伏せる事は充分可能ではあるが。

加減を間違えば貴重な戦力を失う事に繋がり、万が一にも反撃を受けることがあればそれこそ意味が無い。

最後、そして落し所として最も有効に思えるのは、連反膜（カハ・ネガシオン・アタール）の匪を使用した幽閉。

かつて暴君ネロ・マリグノ・クリーメンすら捕らえ遂せた件（くだん）の匪ならば、フェルナンドを長期間幽閉する事も充分に可能だろう。

が、これもまた戦力の低下であり、今回の現世侵攻により死神側もより強力な対策を練る事を考えれば、十刃の一角が欠けている状況は避けたい。

言ってしまえば手詰まりなのだ。

「罰は与えねばならず、しかし罰は罰足りえない・・・・・・なかなかに難問だと思わないかい？」

困った、といった雰囲気を言葉に乗せる藍染だったが、その顔はやはり笑っている。

何が楽しいのか、常人では判らない琴線が彼にはあるのだろう。

判らない事が楽しいのか、それとも自分が判らないと言った事に惑う配下が面白いのか。
それともこの欺瞞に巻かれる者達が滑稽なのか。
しかし彼の本当の考えが判らない以上、全ては憶測の域を出なかった。

「罰・・・ねぇ・・・・・・　俺が俺のやりたい様にした結果、それを不自由で清算する・・・か・・・・・・まぁそれなりに愉しんだのは事実だ。　なら落とし前をつけるべきは市丸じゃなくて俺自身・・・かよ・・・・・・」

思いのままに生きる事、その自由。
望まざるも手にした責任、その不自由。
どちらもがフェルナンドの手にはあり、片方だけを掴み取る事は出来ない。
自由を握れば同じ掌に乗る不自由もまた同じだけ握られ、自由を謳歌すればするほど不自由は圧迫されるのだ。

認めた筈の不自由、仕方なくとも渋々でも認めた事には変わりはなく。
だがあまりにも楽しく、満たされた時間はそれを忘我の彼方へと押し遣っていた。
その代償、そのツケは払わねばならない。
そして落とし前をつけるべきは戦いを無理矢理止めた市丸ではなく、自ら止まる事をしなかったフェルナンド自身にあるのだと。

望んでいないが認めた不自由に、今求められる責任。

「目を潰す・・・・・・」

唐突に発せられた声はフェルナンドのもの。
だがその内容は耳を疑うものだった。
目を潰すと、彼の声は確かにそう言ったのだ。
誰の、という事は言わずともかな彼自身であろうその言葉の意味。
どう考えても重過ぎる、釣り合いなど取れていないという声が他から上がるよりも早く、彼の声はまだ続いた。

「腕を刎ねる、脚を刎ねる。　・・・・・要は何だっていい。俺が払える代償なんてこの五体しか無ぇんだ、不自由を握った俺が払えるもんなんて端からそれだけ、好きなとこをくれてやるよ・・・藍染」

「なっ！」

「はぁ・・・・・・」

代償、罰、責任。
重さには重さを。
どんな罰が適切だ、という藍染の問いにフェルナンドは自らの五体の一部を差し出すという。
自分が持っているもの、自分にとって価値があり失う事が罰となるもの。

フェルナンドがそれを考えたとき、思い至ったのはそもそも自分が持っているものはその五体だけだと気が付いたのだ。
地位も階級も興味など無く、固執もする事無く、煌びやかな崩玉を持つ訳でも愛しい者が居る訳でもない。
掌には何一つ無く、だがその掌を握った拳こそが彼の持つたった一つ。
罰が失う事だというのなら、失う事を躊躇うのはきっとこの拳、ひいてはこの身体だけだと。

故に差し出す。

上手い責任の取り方を彼が知らない為に。
愚直なる鉄の意志は、サラマが思った通り危うく。
自らがとるべきと判断した責任に、より過分をもって答えてしまった。

等価で済むものを、過不足無く行われるべきものを。

「少々・・・　驚いているよ、私は。　こんな感覚は随分と久しぶりだ・・・・・だがフェルナンド、キミの言うそれは些か過分が過ぎる。それにキミの力を損なう事は私も本意ではない。私も少し座興が過ぎた・・・・・・　詫びよう、フェルナンド」

驚きの声を漏らした東仙と、何故か溜息をついたサラマ。
それに次いで言葉を発したのは藍染であった。
元々彼の中ではフェルナンドの処遇など決まっていたのだ、彼の能力は藍染にとって今だ価値あるものでありそれをみすみす手放すような事を彼が選択するはずも無い。

だがしかし、この教唆と欺瞞に満ちた男はふと見てみたくなってしまったのだ。
もし、自分自身への罰をお前が決めろと自分が言ったとき、眼下の破面はどんな罰を選択するのだろう、と。

結果は藍染の予想の斜め上を行ってしまった。
可能性として無い訳ではないが、早々に斬り捨てた答え。
まさか罰として自身の五体を引き裂くような真似を選択するとは、現実的にありえないと。

ありえない事はありえない、等という言葉もあるがそれでもありえないと。

何処の誰がただ一度の命令無視で自ら身体を失う選択をするものかと。
だが現実フェルナンドは逡巡なくそれを選択した。
罪、不自由の責任に対する罰としては過分すぎるそれを。
馬鹿げているとしか言いようが無く、彼という男をある種よく表している選択を。

しかし、ここではいそうですかとフェルナンドの自傷を許す訳にはいかないのが現実だった。
何も言わずにフェルナンドが目を潰すなり、腕を刎ねるなりの行動を起さなかったのがせめてもの救いか。
まだ止める余地は充分にあり、故に藍染は詫びたのだ。
弘法も筆の誤り、たてた道筋から僅か逸れたそれを修正するために。
座興が過ぎたというのは藍染惣右介にしては珍しく本当の言葉なのだろう。
そして彼はその座興を詫びたのだ。

今彼の、フェルナンドの力が損なわれるのは藍染にとって望ましくないが故に。

「遠慮は要らねぇよ、藍染。　下手を打ったのは俺だ、落とし前はつける。俺がそう決めた・・・・・・　何処でもいいなら取り敢えず腕をッ！　ガハッ！！！」

だが止まらないのがフェルナンド。
決めたと、自分がそう決めたならばやるのだと。
鉄の意志は貫き通してしまう。
決めた道、決めた結末、その代償もなにもかも。
故に止まらぬフェルナンド、そしてその腕を刎ねる為に腰の後ろの斬魄刀に手を掛けた瞬間、彼は糸が切れたように崩れ落ちた。

「やってられるか、馬鹿馬鹿しい・・・・・藍染様、ニイサンは俺が連れて戻ります。　処遇は追って下官にでも伝えさせてください。どんな内容でもこの御人に文句は言わせませんからご心配なく」

崩れ落ちたフェルナンドの後ろに立っていたのはサラマ。
見ればその手には鞘に入ったままの彼の斬魄刀が握られ、どうやらその鞘でフェルナンドの延髄を思い切り打ちぬいた様子だった。
さしものフェルナンドも解放による傷の回復はなされていても、体力や霊圧までは戻っていなかったのか、それともサラマのまったく遠慮の無い渾身の一撃のためか、意識を失った様子。
崩れ落ちたフェルナンドを抱えるようにして持ち上げたサラマは、藍染にそう言い放つとその場から立ち去ろうとする。

「随分と過激な方法だね、サラマ。　あまりキミらしい様には見えないが・・・・・・」

「あんまり“らしさ”の押し売りはしない方がいいんじゃないですかい？それに、ちょっとばっかし怒ってるのかもしれません。この御人は本当に・・・・・・　自分の命を粗末にし過ぎるんですよ、まったく・・・・・・」

「フフッ。　それは悪い事かな？　そうやって命を賭け続け、削り続けて来たからこそ彼は今それだけの力を手にしている・・・とも言えるとは思わないかい？」

フェルナンドを脇に抱えたままのサラマに語りかける藍染。
サラマは背中を向けたままではあったが、足を止めそれに答えた。
彼らしからぬ行動、常に言葉による解決を念頭に置くかのようなサラマという人物からすれば、強硬な手段というのは確かに珍しくある。
それに及んだ経緯にサラマは自らが怒っているのかもしれないと、自分でも掴みきれていない部分を口にした。
だが一つ、彼に判っている事があるとすれば、それは彼にはフェルナンドがあまりにも自分の命を簡単に投げ出そうとしている、という事だった。

戦いの中でも、更にこうして戦いの外でも。
賭けの供物、代償に容易く自分の命を賭けるフェルナンド。
それしか持たぬからという理由で、あまりにも呆気なく。
そうして命を賭けてきたからこそ、賭け続けてきたからこそ彼は強いのではないか、という藍染の言葉は確かに一つの側面としてある。

だがそれでも、それを差し引いてもサラマにはフェルナンドが余りに容易く命を粗末にするように映ったのだ。
価値観の違いと言われればそれまでだが、しかしサラマにとってあまり気分のいいものではなかったのだろう。

「死にたがりよりも生きたがりの方が幾分かマシだ。・・・そう、言われた事がある気がするんですよ、ずっとずっと昔に・・・ね・・・・・」

そんな台詞を残し、フェルナンドを抱えたサラマはその場を後にしたのだった・・・・・・

得られて死ぬなら
それでいい
得ても死んだら

意味なんてない

BLEACH El fuego no se apaga. 71（後書き）

あぁもう・・・・・・

色々考えて迷走して、結果よく判らん展開に・・・・・・

罰らしい罰、罪に釣り合う罰ってなるとやっぱり幽閉なんだろうけど
何でか知らんが過分も過分な罰を提案する展開。
まぁ何にせよ裁きの回というより、サラマが目立った回かな。
彼の価値観とか考え方の、普通（？）の破面とはちょっと違う感じ。

そして捌きも重要だがおそらく最も重要なのはココ。

グリムジョー十刃落ちフラグはへし折ってやったわ！！

何時言われたのか、何処で言われたのか。
誰に言われたのか、何故言われたのか。
遠い遠い昔故それは彼にも判らない。
その言葉を彼がはじめて聞いたのは中級大虚(アジューカス)になった時か、最下級大虚(ギリアン)となった時か、それとも虚(ホロウ)となった時か。
もしかするとそれは更に前、彼が今だ”　人　”として生きていた時に聞いたのかもしれない。

何時、何処で、誰に、何故。
判らない事だらけであるがしかし、その言葉は何時の頃からか彼の中に確かに在り、虚としての彼という人格を形成する上で一つの大きな因子として作用した事に違いはないのだろう。
“　死生観　”それぞれ千差万別に存在する命への価値観であり、生き死にの分かれ目。
単一、画一、そして統一されたものは存在せず、また完全に共有する事など出来る筈もないそれ。
所詮は唯一人自分だけが価値を見出していくものであり、到底他人に当て嵌まりまた当て嵌めるべきでも無いものではあるがしかし。

自分のそれに照らし合わせた時、彼にとってその男の行動は目に余ったのかもしれない。

死にたがりよりも生きたがりの方がマシ。

そう考える彼にとってその男がどうしようもなく死にたがりに見えてしまったが為に。……

第7宮（セプティマ・パラエストパーダ）、十刃となった者がそれぞれに与えられる巨大な宮殿の一つ。

十ある十刃の宮殿、その中でもおそらく第4宮（クアトロ・パラシオ）に次いで素っ気無く飾り気の欠片も無い宮殿がこの第7宮だろう。

十刃の宮殿というのはある程度住まう十刃の色が出るもの。

豪奢に飾り立てる者、何一つものが無い者、研究施設として改造する者、風流を好む者。

そうした色が宮殿に反映されるとするならば、この宮殿の素っ気無さは何を表すか。

答えは興味の無さだ。

飾り立てる事、住み易く仕立てる事、その他諸々のそういったものに一切の興味を示していないのだ、この宮殿の主は。
何故なら宮殿の主が求めるものは日々の安寧ではなく、戦いの日々故に。
身体を鍛え、業を磨き、それを重ねて戦いへと身を投じる。
それが宮殿の主の興味の対象であり、宮殿を着飾ることなど興味の有り無しですらなく考えもしていないのだろう。
所詮は寝床、その枠が大きいか小さいかの違いしかおそらくは感じていない。
そういう男なのだ、この宮殿の主は。

その宮殿の主フェルナンド・アルディエンデは巨躯の男、サラマ・R・アルゴスに担がれるようにして第7宮殿へと帰還した。
巨大な門をくぐり、そしてそこに広がるのは巨大な空間。
玄関ホールというにはあまりにも広いであろうその場所、だがこういった巨大建造物に慣れている彼らにとってそこは意思の向く先ではない。
担いでいたフェルナンドをややぞんざいに下ろしたサラマ。
子分という立場からすればある意味問題行動であるのだが、心情故に仕方が無いとも言えるだろう。

意識を失い打ち捨てられるように床へと転がるフェルナンド。
当然そのまま床に激突する訳だが、元が頑丈であるためにその程度で眼が醒める筈もない。
フェルナンドを床へと転がしたサラマはそのまま自身も床に胡坐をかいて座ると、大きく溜息を零した。

「はぁ～ぁ。　やっちまったなぁ・・・・・・ニイサンも大概ガキ

だけど、俺も人の事は言えない・・・ってか?ガラにも無く熱くなっちまうなんてよ・・・・・・」

胡坐をかいた両膝に手を置き、溜息をつきながら深くうな垂れるサラマ。

藍染には“らしさ”の押し売りだと言ってはみたものの、やはり彼自身も自分の行動が自分らしくないという自覚はあった様子。

普段なら口八丁で何とか事を納める方を選択するはずの自分、あの場には藍染も居たのだからそれは容易く成っただろうと。

だが、実際は口よりも先に身体が動いていた。

目の前であああもアッサリと自分の身体を斬り落とそうとする男を、フェルナンドを見て彼の身体は動いたのだ。

何故あああも簡単に投げ出せるのか、何故何の躊躇いも無く自分を傷つけられるのかがサラマには理解できなかった。

躊躇ったって誰も笑わない、寧ろそれが普通で引き下がったって何も悪くない、なのに何故と。

自分より強い筈の貴方が、何故そうも簡単に投げ出すのかと。

きっと自分より多くのものを手に入れられる筈の貴方が、何故そうも死にたがるのかと。

どうしようもなく彼の目にそう映ってしまうフェルナンドという人物。

求めるものを得るためならば自分が傷つくことを厭わない。

進む先を見据えたならば他に目をくれる事がない。

一途で一直線であり、不器用なまでに愚直。
こうと決めたなら、自分がこうするのだと決めたなら迷い無く実行してしまう鉄の意思。
鉄でありながら鉄独特のしなやかさ、粘りを持たぬかのようなその意思が、決断が走った今回の凶行。

目を潰す、腕を足を斬り落とすなどという凶行が命令違反の罰として釣り合うとは思え無い。
不自由という鎖に囚われた事、その代償として差し出せるものが自身の身体以外ないというそれだけの理由でフェルナンドはそれを選択してしまうのだ。
それはおそらく釣り合いが取れているかいないか等という事は二の次なのだろう。
罪に対する罰として自分が払えるものがそれだけ、ならそれを支払うと。
不足などありえず過分など度外視して、直情的に思い至ったそれを、払うと決めたそれをその意思で持って完遂する。
サラマが思うフェルナンドという男の先の行動はまさしくそれであり、その選択を即断してしまえる危うさこそがサラマに今回の行動をとらせた一つの大きな要因でもあった。

「大体なんでこの御人はこうも頑ななんだかねぇ・・・・・・良くも悪くも・・・・・・」

そう、サラマが感じるフェルナンドの危うさとは同時に頑なさなのだ。
頑として譲らない、そういう部分がこのフェルナンドという男には多々ある。

負ける事が目に見えているからといって退かない、戦いに決着を着けるために自分から殴られる、己の為に嬉々として戦場に身を投じたかと思えば、助ける為だと到底敵わぬ者にも平然と拳をむける。全ては己の意思、彼という存在のあり方、法則に則っての行動は時に自らの安全を度外視しても遂行される。

そう、自分の命は問題ではないのだ、問題なのは何時もその過程、過程で何を成していくかという事。

刹那の時をいかに全力で駆けたか、という点だけなのだ。

それは誰にでも出来る事ではない。

往々にして意思を貫き通すという事は難しいことであり、それ故にそれを成せる人物は強者といえる。

だが、貫き通したその先で自らが死ぬかも知れない道を進むのは本当に正しい事か、重要なのは一体どちらなのだろうか。

貫く事と、貫いた先を歩む事のどちらなのだろうか。

同じようで違う二つ、僅かではあるがそこに生まれる差は巨大なもの。

サラマはその二つの差を殊更に感じ、フェルナンドが貫く事に固執しているように思えてならなかったのだ。

「なぁニイサン・・・・・・・　アンタは一体、何が欲しくてそんなに生き急いで・・・・・・死にたがるんですかい・・・・・・？」

横たわるフェルナンド、その背中に向けてサラマは零す。

何故、何故なんだと。

何故そうまでして頑なに生き急ぎ、そして死にたがるのかと。

『意地を張って通すのが道。　枉げて退く道など端から持っていない』

かつてサラマが聞いたフェルナンドの言葉。
進む道とは自らを貫き通す事、それを曲げてまで退く為の道など持っていないと。
それはフェルナンドという破面が何処までも自分の意思を貫く事を、雄弁に語る一言だった。
だが何故そこまで、何がそこまでフェルナンドを掻き立てるのか、サラマにはそれが判らない。
自分の命を賭けてまで求めるものとは一体なんなのか、自分の命を賭けてまで貫き通す意地は何処から来るのか。
答えなど返らぬであろう自分よりも幾分か小さな背中、しかし問わずにはいられないサラマ。
知りたい、この男が一体何をそこまで求めているのかを。
何がそこまでこの男を駆り立てるのかと。

「・・・知ってどうする・・・・・・」

背中に向けられ虚空へと消える筈だった問いかけ。
だが消える筈の問いかけに答えは返ってきた。
幾分緩慢な動きではあったが横たわった姿勢から起き上がり、サラマに背を向けるようにして胡坐をかいたのはフェルナンド。
首の後ろあたりを二、三度さすりながら「馬鹿力で殴りやがって・・・・・」と零しつつコキコキと首を鳴らす彼。
もう少し目を覚ますまでには時間が掛かるだろうと思っていたサラ

マには驚きが浮かんでいた。
自分に比べれば細く小さいその身体に宿る頑強さと強靭さ。
本当に同じ破面かと疑いたくなる彼を他所に、フェルナンドは彼に背を向けたまま言葉を発した。

「俺が何を求めてるか、それを知ってどうする?テメェには何の意味も無ぇよ、トカゲ・・・・・・」

「・・・まぁ確かに意味は無いでしょうね・・・・・・でも、興味はあるんですよ。　何故ニイサンがああも簡単に命を投げ出すのか、投げ出せるのか、俺はただその理由が知りたいんですよ・・・・・・」

「ハッ！　物好きな野郎だ」

知ってどうする、どうなる、フェルナンドがサラマへとそう問いかける。
それを知る事に何の意味があるのか、お前にとっておそらく意味など無いそれを知ってどうなるというのだと。
別段隠しているという訳でもなく、しかし問われたその言葉にサラマは正直に答える事にした。
嘘で、口先で語るよりも今は腹の底からの言葉の方がこの男には届くと、彼にはそう思えてならなかったのだ。
彼が抱える疑問、何故、どうしてという問いの答えはそこにあるとサラマには思えてならなかったが故に。
そのサラマの言葉に返したフェルナンドの言葉、それは肯定の意をもって発せられていた。

「俺は・・・　俺はただ欲しいだけだ。　俺は今、生きているんだという実感を・・・な・・・・・・」

とつとつと語られる始める言葉。
目を覚ました瞬間に目なりを抉るのではないかと内心考えていたサラマからすれば、そのフェルナンドの後姿は幾分穏やかに見えた。
そのフェルナンドから語られた彼の求めるものとは生きている実感。
なんとも掴みきれない、形容しがたく目に視えるものでも触れて感じられるものでもない感覚的な事であった。

「テメェも判るだろう？　俺らはそれこそ馬鹿みたいに長い時を生きる化物だ。どいつもこいつもそれが当然だと、当たり前だと思ってやがる。・・・だがな、そんなもんは惰性でしか無ぇ。そういうもんだと受け入れただけ、与えられたそれをただ考え無しに享受しているだけに過ぎねぇんだよ」

語られるそれは彼にとって何よりの真実なのだろう。
破面、いや、そうなるまえの大虚、最上、中級、最下級、更に遡り一匹の虚として二度目の生を受けて後彼らは途方も無い時を生きる。
もちろんその中で死んでいくものもあるが、こうして破面となった者達はおそらくそうならなかった一握りなのだろう。
長い長い時、明けぬ黒い空と何処までも続く白い砂漠の世界、人としての記憶を残し虚となっても何時しか時の流れにそれは擦り切れ磨耗し、忘却の彼方へと追いやられるだろう。

だがそうなっても彼等の生は続く。

記憶とは積み重ねた記録、新たなる記録は記憶となりいつしか虚としての記憶が全てを占め、そうなってもまだ彼らは生きるのだ。
人の魂を喰らい、呼吸と共に霊子を喰らい、そして輩(ともがら)たる虚を喰らいながらも永遠に。
彼等に寿命という概念が存在するのかを知る者は居らず、それ故永遠に近い命の中彼らは次第に忘れていく。

生きているという実感を。

自分は今己として立ち、己として歩み、己としてここに確固として在りつづけているという実感を。
積み重ねた年月、過去から今、そして未来へと続く人生の延長線上にただ居るのではなく、今も確かに自分の足で自分という世界を先頭で切り開いているという実感を。
今も己の命を懸命に燃やし続けているのだという、その実感を。

それを怠る事をフェルナンドは惰性と呼んだ。
ただ日々に流され、それに身を任せることを彼はそう呼ぶのだ。
そして彼はその惰性を嫌った。
流されて生きるのではなく、切り開き生きる事を望んだ故に。

「生の実感、ただその為に俺は戦うんだよ。　俺はそうする事でしか求め方を知らねぇ、それが上手いやり方じゃなくても・・・な。
命を燃やし、削り、磨り減らしてでも先に進む。命を賭けたその先に、命を削ったその先にあると信じているからだ。他の誰でもなく俺自身がそう信じているからだ。生の実感は命を燃やした先にある・・・とな・・・・・・」

きっと彼自身も判っているのだ。
それが一番上手いやり方で無いという事は。
戦い、傷つき、死に瀕し己が命を危ぶませ、削り磨り減らし進む道が一番上手いやり方でない事ぐらい、彼にも本当は判っているのだ。
だが、それでも彼はその道を進む。
他のやり方を彼は知らず、そして知ったとしてもきっとその道を彼は変えないのだろう。
それが一度歩み出した道ゆえに、意地を張り通す事だけが彼に往く道のあり方故に。

意地を張り通したその先に、求めるものがあると彼が信じ続けているが故に。

「俺が欲しいのはそれだけだ。　その為に俺は戦いを求めるし強さを求める。命を賭けなきゃ得られないなら命を賭ける。どうだ？簡単な話だろうが　」

サラマに背を向けたままのフェルナンド。
気恥ずかしい、という概念がこの男にあるかは甚だ疑問ではあるが面と向かって話す事ではない、という事かもしれない。
彼の根源、行動理由、彼を彼足らしめるもの。
求める為に命を賭けねばならないというなら賭ける。
きっと彼にとってそれは容易い事なのだろう、求めるものを得られるというのなら自らの命など安いものだと、本気でそう考えているのかもしれない。
単純で簡単で簡素で、しかしそれ故に強力な思考回路。

確かに簡単な話し、フェルナンドにとっては簡単な話だ。
彼はずっとそうして来たのだから、きっとこれからもそうして進んでいくのだから。
だが、それは彼にとって簡単な話で、他者にとっては簡単でも簡単に済ませていいものでもないのだ。

「くだらねぇよ、そんなもんは・・・・・・」

フェルナンドの背中に投げ付けられた言葉は、思いのほか低い声だった。
常のどこか人をくったような声ではなく、腹の底に響くような、そして苦虫を噛んだようなその声はサラマの声。
フェルナンドには見えぬ彼の顔はきっと険しいものだろう。
事実サラマの顔は険しく、吐き捨てるような声と共に視線はフェルナンドの背中から外れ僅か下を見ていた。

「生きる実感が欲しくて死にたがるのかよ・・・・・・そんなのおかしいじゃねぇですかい。　死んじまったらそこでお終いだ・・・・・・死んだら何にも残らねぇんですよ、死ぬ事に意味なんて・・・・死んで得られるもんなんて・・・何も無いんですよ・・・・・・」

サラマにはフェルナンドの言葉が矛盾しているように思えてならなかった。
生きている実感が欲しい、そういう彼はしかし自ら死地に飛び込み

死に近付くようで。
生を求めしかし死に近付く、相反する二つを求めるフェルナンドの性がサラマにはひどく歪に見えてしまった。
死ぬ事に意味など無く、死して得られるものなど無い。
死に何を見出せるというのか、死に近付く事で何を得られるというのか、そうまでして得なければならないものなのか。

先のフェルナンドの行動もそうだ。
生の実感を求めるという彼はしかし、いとも簡単に自らの肉体を傷つける。
その行為は死へと近付く行為に他ならず、生を求めながら死に近付く矛盾の最たるものと言えるだろう。
生きている実感が欲しい、それには死に近づくより他無い、自らの命を脅かし死を感じる事こそが生の実感を求める術だとでも言わんばかりのフェルナンドの理念。
確かにそれは正しくはあるのだろう。
生と死は表裏一体、死に近付く事はまた強く生を意識する事と同義でありそれ故死に近付く事は生に近づく事だと。

だがそれは歪。

少なくともサラマにとってそれは歪だった。
彼はフェルナンドほど“生きる”という事に餓えてはいないのだ。
実感を求めるほど、どうしようもなく焦がれるほどそれを求める事をしていないのだ。
彼からしてみればフェルナンドの言う”惰性としての生”とて充分価値があるものと。
重要なのはその命があり続け、そこに自らの意志が存在する事。
起伏無く只流れる日々もそれはそれでいいだろうと、惰性だろうと命は、生はそこにあると。

フェルナンドが自らの命を危機に晒し続けてまで追い求める価値が、彼には判らなかったのだ。

「ハッ！　くだらねぇ・・・かよ。　・・・・・・まぁ確かにそうだ。テメェにとってはくだらないだろうし、俺が言ったとおり意味も無いだろうよ・・・・・・だが、それで構わねぇ。テメェに理解してもらう必要はねぇし、俺の考えをテメェに押し付ける心算も無ぇよ、俺は俺の思うままに進むだけだ・・・・・・」

くだらない、と。

自らの求めるものをそう言われたのにも拘らず、フェルナンドはそれを笑った。

そうだろうと、そしてそれでいいと、お前がそれをくだらないと言うのならばそれも良いと。

元々サラマに理解してもらう心算も自らが正しいと言う心算もなかったフェルナンド、今更くだらないと言われたからといって道を変えられる訳でも無い彼にとってサラマの言葉は響くものではないのだ。

進むと決めた、求めると決めた、自らが思い至った唯一の道で、その道を只往く事で。

言い放ったフェルナンドはもう語るべき事はないとその場で立ち上がる。

そして宮殿の外へと向かおうとするフェルナンド。

その行き先がどこかなど誰の目にも判り切っていた。

「待てよニイサン。　また奉王宮に戻って藍染様の前で目玉でも突

く心算ですかい・・・・・・？」

立ち上がったフェルナンドの背中にサラマが投げかけた言葉はおそらく真実だろう。
事実フェルナンドの足はその言葉に止まったのだ。
そう、一度気絶したぐらいでこの男が罰を諦めるはずが無い。
今この場で実行しないのはただ藍染の前ではないから、藍染の前で行ってこそ罰なのだ。
自ら握った不自由の不始末、その罰を自らにも刻むために。

だがそんなものをサラマが許容できるはずも無く、勢いよく立ち上がると再び向けられた背中にサラマは叫んだ。

「そんなもんは馬鹿げてる！　たかだか命令違反一つにアンタが考えた罰は過剰なんだよ！あんなもんは一言『忠誠心だ』と言えば済む話でしょうが！それで手打ちだ！　四方丸く収まる！　少しは利口になれよ！予定調和なんだよあんなもんは！　簡単だろう！所詮は言葉だ！！」

それはサラマ・Ｒ・アルゴスの本音の言葉なのだろう。
藍染の”首輪”としてではなく、”子分”という立場に立ったものではなく、ただ”彼”という個人が叫ぶ言葉。
罰など始めからあって無い様なもの、重要なのは藍染惣右介が例え十刃であっても命令違反をしたものを許さず罰したという事実。
それさえあれば藍染は満足なのだ、罰が思いつかないなどという言葉は所詮藍染の戯れだとサラマは気付いていた。
故にあの場での正解はグリムジョーの取った行動。

ありもしない忠誠心、しかしただそれを口にするだけで全ては収まる。

忠誠心、その言葉が持つ意味を欠片も解さず理解せずその内に持たずとも構わない。

ただそれを口にすれば済む話、意味を持っていようともそれは所詮は言葉に過ぎず、意味を乗せねば耳に届く雨音と同じ。

意思を乗せ届く音ではなくていい、あの場はそれでよかったのだ、雨音を発すればそれで。

だがそれを無視したかのようにフェルナンドは否を唱えた。

そして自らが自らに下した罰は過度、過剰、過分な行い、総じて過ぎたる暴挙。

ただ発すれば済むだけの雨音に意味を乗せ、否を唱える事の無意味さ。

サラマにとっては無意味で、そしてなにより無駄に自らを傷つけ傷つこうとするフェルナンドの危うさが彼には悲しく映ったのかもしれない。

「アンタが求めてるものはそうまでしなきゃ手に入らないものなのかよ・・・・・戦って傷を負って死に自分から近づいてまで得なきゃならないものなのかよ！生の実感を求めて死に急いで・・・・・それでホントに死んだらどうするんですかい！」

サラマには理解出来なかった。

フェルナンドの言う生の実感はそこまでして手に入れなければいけないのかと、死に近づいてまで手に入れなければならないのかと。

今ここで息をし、心臓は脈打ち血が霊子が巡り、今この場に立って

いる。
それでいいではないかと、今こうして自分という命が脈打っている事がどうしようもなく生の実感ではないのかと。
サラマが思う生の実感はそれで満たされる。
”生命が脈打つ事こそ生の実感”、自分達が虚として、そして破面として歩む今こそ生を実感しているのではないかと。

そう考えるサラマにとって死に自ら踏み込み、まるで好んでいるように見えてしまうフェルナンド。
生き急ぎ死に急ぐ。
そんな言葉が当て嵌まってしまうからこそこの男は危ういのだ。
彼が求めるもの、求めた先にサラマには死が見えて仕方が無い、故にその言葉を投げ付けたのだろう。

求めて求めて、求めた先で死んだらお前はどうするのかという問いを。

「・・・・・構わねぇ。　求めた先でそれを・・・生の実感を得られたなら。得られて死ぬなら　それでいい・・・・・・」

応える声に揺れはなく、故にその言葉が真実であると告げていた。
構わない、それで構わないというフェルナンドの言葉がどうしようもない真実であると、彼にとっての真実であると。
求め歩み、傷つき走った先でそれが得られたのならば、その瞬間に生き絶えたとて何の悔いも無い。
生の実感の中で死ねるのならばそれで構わない、フェルナンドはそう言い切ったのだ。

その答えは悲しい答えだ。
生の実感を得た瞬間に死ぬ、相反する究極の光景。
得がたくも得た実感の中彼は死んでいく、漸く得た実感を噛締め死ぬ。
それで構わないと、まるで得る事が目的であり、その先など要らないと言うかのように。

「それがおかしいって言ってんですよ！せっかく得た実感を何でそうも簡単に手放せるって言えるんですかい！アンタは間違ってる・・・・・　生の実感、それを求めるのはもうこの際どうだっていい。・・・・・だが、得ても死んだら意味なんて無い！死んで得る事よりも、アンタはアンタ自身が生きて得られる事に意味を見出すべきだっ・・・・・！」

死にたがりよりも生きたがりの方が幾分かマシ。
サラマの内側に何時からかあったその言葉、あった筈なのに忘れていたその言葉、しかし彼を形作ったその言葉。
言葉に、その意思を自らのものとして”生きたがり”の人生を送ってきた彼にとって、フェルナンドの死んでもいいという言葉は悲しすぎた。
まるで自分というものが勘定に入っていない死生観。
目的の為に命を投げ出す事を厭わず、目的を達したならばその命すら無くて構わないという価値観。

そう、サラマから見るフェルナンドという男は先が無いのだ。
求める先、求めたものを得た先、目的を達したその先が彼には無いのだと。

得た先でどうするのか、何を成すのか、その展望がこの男には欠落してる。
何処までも彼にとっては得がたいもの故に先を考えている余裕が無いのかもしれない、しかしサラマにはフェルナンドがその先を考える心算が無い様に見えてしまった。
下手をすればこの男は、求めたものを得た瞬間本当に死んでしまう。
そんな幻視を見るかのようなサラマは、フェルナンドの背へと吐き捨てるように言葉を零す。

何かを得る事よりも、得た先に意味を見出すべきだと。

「馬鹿野郎が・・・・・・“先”の事まで考えられるなら、もっと利口な生き方も出来るだろうがよ。利口(ソレ)な生き方が出来無ぇって事は、俺は”今”を・・・今の俺で必死にもがくしかねぇんだよ・・・・・」

サラマからの言葉を背に受け、しかし彼は止まらない。
そう止まる筈もないのだ、利口な生き方というものを彼は知らないのだから。
深慮遠謀の彼方、神算鬼謀の行く末、そんなものに彼は幾許の価値も見出さない。
ただ今という刹那を、今の自分のあるがままで生き貫く事しか彼に価値は無いのだ。
それは決して利口な生き方とは呼べないだろう。

寧ろ考え足らずの馬鹿者、いや大馬鹿野郎なのかもしれない。
しかしそれが彼なのだ、彼という男なのだ、フェルナンド・アルディエンデという男なのだ。
馬鹿で構わない、利口になる心算もない、ただ馬鹿が選んだ大馬鹿の道を馬鹿正直に進むだけしか彼には無いのだから。

サラマにもそれは伝わっていた。
何処までも自分とは噛み合わず、価値観は平行線を辿るのみ。
相容れず歩み寄れる訳でもなくズレた価値観と死生観の中、彼にも判った事がある。
幾ら言葉を尽くしたとてこの男は止まらないという事。
己の抱える根源的矛盾を何処かで理解しながら、しかしこの男は進み続けるという事。

どうしようもない”餓え”にも似た衝動、“飢餓”を冠したこの男を象徴するかのような愚かしくも愚直なその生き方を。

言ってしまえばやはり馬鹿なのだ、この男は。
大馬鹿なのだという考えがサラマには浮かび、それが妙に的を射ているとさえ思える。
何処までも変えられない道と、鉄の芯が貫き通す意志。
曲らず折れず、脆さすらその強靭さで弾き返してしまうような意思が、この男が馬鹿である由縁なのだと。

判ってしまったこの男の更なる本質。
餓え求め続ける馬鹿野郎、利口な生き方を知らぬ大馬鹿野郎。
何を言ったとて、どう説いたとてこの男が変る事は無いのかもしれ

ない。
幾ら利口で上手い道を示しても、この男にはきっと意味が無いのかもしれない。

だがそれでも、例えそれが判っていたとしてもこのままフェルナンドが及ぶであろう凶行は、サラマに許せるものではないのだ。

「もういい、アンタが筋金入りの大馬鹿だって事だけは嫌というほど良く判った。どうせ口で言ったって止まりゃしないんだ、だったら何度だってぶん殴って止めてやりますよ。藍染様の所にゃ行かせない・・・・・・！」

「・・・・・笑えるなトカゲ。　殴って止める・・・だと？ハッ！　本当にテメェにそれが出来ると思ってやがるのか？」

「出来ますよ。　こっちは万全、対してアンタは傷は粗方しか治ってないし、体力も霊圧も万全じゃない。それに殴って気絶させるのは、もう一度経験済みなんでね・・・・・・」

言葉での解決は実らず、もう残された手段は他にはなかった。
サラマとてこの選択が自分らしくない、という事は良くわかっているのだろう。
だが自分らしさを優先し、目の前の男が五体を損なう事を容認など出来ない。
使命でもなく立場でもなく、興味を引かれていた男が自ら先を鎖すような事をするのは我慢ならず。
そんな死にたがりを止める為ならば自分らしさなど捨てるという、サラマの強い感情故の最終手段なのだろう。

先を見据えられないという男が、もしかすれば後々こんなつまらない事で行き詰まるのは、サラマには許せないのだから。

そんなサラマの言葉に彼へと向き直るフェルナンド。
その顔には僅かだが皮肉気な笑みが浮かび、値踏みするようにサラマを睨む。
距離はそれほど離れてはおらず、互いもう少し近づけば射程内となるだろう。
やはり何処までいったとて彼等破面に平和的解決など望むべくも無い、という事なのかもしれない。
どうしたとて優劣、正邪を決めるのは戦いという事。

だがフェルナンドとサラマ、互いに僅か爪先に力が篭った瞬間第三者の声が響いた。

「お前達。　幾ら自分の宮殿だからといって、こんな所で何をはじめる心算だ・・・・・・？」

響いたのは凛として涼やかな女性の声。
今し方フェルナンドが背を向けたばかりの門の前にその女性は立っていた。
金色の髪に翠の瞳、褐色の肌をしたその女性は第３十刃（トレス・エスパーダ）ティア・ハリベル。
闘気放つ二人を見てやや呆れた風の彼女がそこに立っていた。

「・・・・・取り込み中だ、用事なら後にしろハリベル」

「そういう事ですアネサン。　用事は後にお願いします」

どちらもハリベルに一瞥もくれる事無く、目の前の相手から目を逸らさない二人。

用件を聞くことも無く今は只打ち倒す事が頭を占めつつあるのだろう。

だがハリベルとてただ遊びに来るという人物ではない。

こうして彼女がここに来たのには理由があるのだ。

「悪いが断る。　私とて遊びに来たという訳ではないのでな。藍染様よりフェルナンドへの処罰を伝えに来たのだ、まったく・・・藍染様は私が“適任”だと仰られたが、私はお前の子守ではないのだぞ?それをお前は・・・・・・　もう少し大人しくは出来んのか・・・・・」

一つ溜息をついたハリベルが言うには、彼女は藍染からフェルナンドへの罰を伝えに来たという事。

彼女からしてもいい迷惑といったところなのだろう。

サラマは下官に伝えさせてくれと言ったが、まかり間違って今のような状況に陥っていたとすれば下官では彼等に近づく事すら出来ない。

故にそれなりの実力者を予め向かわせた、という事なのだろうがフェルナンドへの面倒事となれば挙がる名前は一つ。

フェルナンドが最も言う事を聞く可能性を持っている人物、つまりはハリベルだ。
それ故の藍染の“適任”という言葉、言いえて妙であるが当の本人からすればいい迷惑といったことでしかない。

「処罰・・・ですかい？」

便利使いされる事の哀愁と、またしても問題を起したフェルナンドへの呆れがハリベルの声に混ざる中、いち早くその言葉に反応したのはサラマだった。
そう、命令に反したという事への処罰が下されるという事は即ち、フェルナンド自身が自らを損なって償う必要がなくなるという事。
彼からすれば願ったり叶ったり、という状況ではあるがしかし一抹の不安がサラマには残る。
そんな彼を他所にハリベルはフェルナンドへの処罰を言い渡した。

「フェルナンド・アルディエンデ。　無断への現世侵攻及びそれに伴う死神側への戦力露呈、市丸統括官からの停戦命令無視、同統括官への恫喝、反逆未遂、自傷による保有戦力損失未遂、度重なる不敬等々・・・・・・十刃としてあるまじき行為の数々は看過できるものでなく。よって現第7十刃　フェルナンド・アルディエンデの号を剥奪し、十刃落ち（プリバロン・エスパーダ）とする・・・・・・はぁ・・・呆れてものも言えん・・・・・・」

言い終えて額に手をあて頭を振るハリベルが告げたのは、フェルナンドの号を剥奪し十刃落ちとする、という罰であった。

不様な話である、何せこれでフェルナンドはある意味最速の十刃の名を冠した事となるのだ。
ゾマリの響転最速ではなく、最も早く十刃落ちとなった十刃として。

だがこれはフェルナンドにとっては甘い罰にすぎない。
元々フェルナンドは十刃となる事を望んではいなかったのだから。
それが今更十刃という位に執着するはずも無く、号を剥奪されたとて痛手にはなりえない。

要するにそういう事なのだ。
藍染にフェルナンドを罰する心算などない、という事。
書き連ねられた罪もその実意味のあるものはそう多くなく、見る者が見ればこれがただの茶番だという事は良く判る。
重要なのは藍染が十刃だからといって優遇することは無いという事実。
まるでありもしない平等という名の幻想を見せ付けるが如く、藍染が誰にも容赦しないという外面が出来ればそれでいいのだ。
そしてその外面も大きく意味を成すものではなく、最も重要なのは罰したという事実なのだから。

「さて、明らかに甘い罰ですが罰は罰、これでニイサンの罰は決まった訳ですが・・・・・どうです？　これで手打ち、って事にしませんか？」

「・・・・・トカゲよ・・・　答えが判り切ってる質問をするのは楽しいか？」

「楽しいですよ、それで事が治まるならね。・・・・・まぁ、ニイサンが首を縦に振ってくれりゃ、尚良かったんですが・・・ね」

フェルナンドに下される罰は決まり、故にこの緊張状態は意味の無いものとなった。
という事にしてフェルナンドへと語りかけるサラマ。
その実緊張など毛先程も解いていないのは、きっとその問の答えに予想がついていたせいなのかもしれない。
終わりにしないか、というサラマの言葉。
フェルナンドが答えは否、サラマの予想通り否であった。

「いいか？　罰ってのは誰かに決めて貰うもんじゃ無ぇんだよ。最後に自分を罰するのは何時だって自分自身、自分を罰するなら誰かの天秤じゃなく自分の天秤を使うもんだ」

自分に罰を与えられるのは自分自身をいて他にはいない。
他者から与えられる罰は何処までも他人の価値観でしかないのだ。
第三者といえば聞こえはいいだろう、だが本当に償うべきは自分自身であり与えられたから償うのと自ら償う事は決定的に違う。
自らの天秤にかけて適当かどうか、それこそが重要なのだとフェルナンドは言う。

この言葉にサラマは先ほどの自分の考えが、フェルナンドがその罰を釣り合いを度外視して直情的に決したという自分の考えが間違っていたと知った。
フェルナンドはしっかりと考えているのだ。
自分を罰するに足りるものは何かと、何をもって罰とするのかを。
自らの天秤にそれをかけ考えた上で、彼の中で釣り合いが取れている罰を口にしていたのだ。

それがどれだけ他人の目には常軌を逸し、過剰に映ったところで彼には関係ない。
他人がいくら自ら持つ物差しと天秤でそれを量り、過分だと騒ぎ立てたところでそれは所詮他人の裁量。
真に優先されるべきは償うものが自らに架す罰であり、自分に対する一切の甘さを排した罰をフェルナンドは決していた。

彼と他人の価値観のズレが過分さを際立たせただけで、その実彼にとってこれ以上ないほど釣り合いは取れている。
そして価値観のズレを態々磨り合せる事は必要ない。
高きに合わせる事も、また低きに合わせる事も必要な事ではない。
それぞれがそれぞれの価値観を持つからこそ、”個”は保たれているのだから。

「なら、やっぱり止めるより他ありませんね・・・・・・」

「あぁ。　叩き潰して進むより他なさそうだ・・・・・・」

だがやはり先の言葉のやり取りは決定打となった。
サラマが漸く、僅かながら理解したフェルナンドという男の内面。
それは表層に過ぎないのかもしれないが、確かに彼であった。
けっして利口とよべるものではないがしかし自らに真摯に向き合い、犯した罪に過不足無く償う。
言葉を尽くす事に長けず、それでも彼自身の価値観に添って、何者の妨げも受けず進む鉄の男。
言ってしまえば大馬鹿者、しかし誰にでも出来る事ではない道を進む男。

その男を止めるためにサラマは強く拳を握り、フェルナンドも僅かに身体を沈ませる。
戦いの気運は高まり周囲の大気がチリチリと音を立てる。
霊圧の高まり、闘気の高まり、それらが広間全体に広がりつつある。
紆余曲折はあろうが結局ここに帰結するのが彼等なのだろうか。
拳が、武力が、力が正義であると。
それだけが真理であるとされるこの虚夜宮に、いや虚圏において対立する意見を決める手段など他にないのだ。

「まったく・・・・・・　いい加減にせんかお前達は」

だが再びその二人に割って入るのはハリベル。
伝える事は伝えたのだ、本当ならこのまま放っておいても何も問題は無いのだが、そこは彼女の律儀さ故か。
目の前で明らかに殺しあおうとしてる馬鹿者二人を放って置けるほど、彼女は冷徹ではないという事だろう。
実際目の前の二人、特にフェルナンドが解放などしようものなら辺り一面が焦土となる可能性も無きにしも非ず、放って置ける方がどうかしているとも言える状況であった。

「フェルナンド、この命令が下った時点でお前はもう十刃ではない。そのお前がこの宮殿を壊す事は許されない、少なくとも私の目の前では・・・な。かといって私の眼の届かぬところでまた要らぬ騒ぎを起されるのも馬鹿らしい。・・・・・よって、ここは一つ被害の少ない方法で戦ってはどうだ?」

「被害の少ない方法・・・だと？」

ハリベルの語ることは至極全うな意見だった。
十刃で無い者が宮殿を破壊する、などという事はまた要らぬ諍いと罪を重ねることであるし、かといって何も無い砂漠だからといって解放などされれば被害が広がるのは目に見えている。
ならばせめて自分の目の届かぬところで、という選択もあったがそれはどうにも責任逃れのようでハリベルには受け入れがたかった。
ではどうするか、ハリベルが提案したのはある程度被害を抑えて戦うという事。
まぁ戦う事は前提としてあるあたり、やはり彼女も破面だという事なのだろうが。

「そうだ。　互いに霊圧の放出を用いた攻撃防御の一切禁止、霊圧による肉体強化も無し、当然響転などの移動術も使用不可、刀剣解放は言うに及ばず斬魄刀を使用した攻撃も禁止。要するに五体のみで戦うのだ、これならそう被害は大きくはならないだろう？それにお前達はその術に長けているだろうしな」

ハリベルの提案は簡単に言ってしまえば只の喧嘩だった。
だがそれは破面や死神といった霊なる者のそれではなく、人間が人間どうしで争うものに近かった。
武器の一切を用いずただ己の五体のみで一対一をもって決着とする。
ただ彼らは破面であり人ではなく、その五体のみの持つ力も大きく何より鋼皮（イエロ）という攻防一体の外皮がある為自然と破壊力は上がる。
しかし霊圧という強大な力の放出さえなければ被害は比べ物になら

ないほど少ない事だろう。

妥協案としては最良ではないがまずまず、といった所のそれ。
周りへの被害を抑え、尚且つどちらの命も失われないようにするには咄嗟とはいえ、ハリベルの提案はまずまずと言えるのだろう。
彼女から見ればフェルナンドとサラマは良い関係に見えていた。
どうしても言葉が足らないフェルナンドには、サラマのような言葉を尽くす者が近くにいるのは良い事であるし、何より幾ら藍染への意趣返しとはいえ気に入らない者を彼が近くに置くとは思えなかったために。
なかなかどうして噛み合わない様に見えて噛み合っている二人だと、少なくともそう考えていたハリベル。
その二人が戦いの気運を高め、下手をすれば命を失いかねない状況は彼女には残念なもの。
故の代替案、命を失わない決着という代替案の提示だったのだ。

「俺は別に構いませんがね。　まぁ気に入らない、ってんならニイサンは解放でも何でもすれば良い。それでも俺が勝たせてもらいますがね　」

「随分とよく吼えるじゃねぇか、トカゲ・・・・・・ハッ！　霊圧があろうと無かろうと勝つのは俺だ、それをよく判らせてやるよ・・・・・」

サラマの挑発に食いつくフェルナンド。
こう言えばフェルナンドが乗ってくるのは目に見えてはいたし、もし解放されてもサラマは気概だけではあるが勝つ心算でいた。
行かせない、という強い意思がそう思わせたのか、その行動と意思

は彼自身の為でありまたもう一つ。
フェルナンドという男の”　先　”の為、幾ら彼の中で釣り合いが取れていようともサラマにそんな事は関係ない。
サラマの価値観から言えば馬鹿げた話なのだ、こんな選択は。

この男は車輪なのだと、サラマは思う。
何処までも何処までも際限なく回転し加速し、何時しか壊れる車輪なのだと。
放って置けば直ぐにでも、そして自ら壊れようとする車輪なのだと。

ならば自分は歯止めとなる、サラマはそう思っていた。
そう簡単に壊させはしないし、易々と暴走させる心算もない。
ただ諭すのではなく時には実力をもって無理矢理にでも止めて見せる。
何故なら自分は彼に言ったからと。
進む先にこそ意味を見出せと、死んで終わるのではなく生き続けてくれと。
ならば、その先があると言った自分はついて行くのだ。
この男が生の実感の先にたどり着くまでついて行くのだと。

故に止める。
彼が自らを害そうとする事を。
万難を払うことは出来ないがしかし、陰日向に助ける事は出来るのだからと。

「俺が勝ったらニイサンは藍染様の所には行かないし、自分で目も腕も脚も斬ら無ぇ。何も失わないで言われた罰を受ける・・・・・・いいですね？」

「いいぜ。　・・・・・だが俺が勝ったら俺の好きなようにさせてもらう。文句は無ぇな」

「ありませんよ。　勝つのは俺ですから」

「ハッ！　上等ォ！！」

フェルナンドの言葉を最後に二人の距離が急速に縮む。
まるで元からそこに立っていたかのように瞬時に互いの射程内へと相手を納めた二人。
奔る拳は力強く、打ち出され交差しそして互いの顔へと突き刺さっていた・・・・・・

・・・・・

・・・・

・・・

・・

・

「行かないのか？」

互いに霊圧の全てを用いぬ戦い。
只鍛えられた己の五体のみを武器とし、相手を打倒する戦いの末。
響くのは派手な音ではなくただ拳が、蹴りが敵を打つ鈍い音。
撒き散らされた血と汗、予想通り宮殿は無傷というわけではないがそれでも柱の一本も折れていないのだからマシな方だろう。
そしてその戦いの中心地に、戦いの終わった戦場跡に立っていたのは一人だけ。

決着の形としてこれ以上ないほどの勝者と敗者の光景。
その光景の中心に立つ者に、その戦いを一人見届けていたハリベルは話しかけていた。

「あぁ？　何の話だよ・・・・・・」

ハリベルの声にぶっきらぼうに答えたのはフェルナンド。
戦場の中心にその脚で立ち、視線をハリベルへと向けるフェルナンドは、口に溜まった血を吐き捨てる。
そう、勝ったのはフェルナンドだった。
身体中に拳や蹴りで打ち据えられた痕を残しながらそれでも、勝ったのはフェルナンド。
今やサラマは彼の足元にうつ伏せで倒れるのみ、フェルナンド以上にボロボロである彼、息はしているがそれでも意識は失っている様子。
そしてその傷跡の違いはそれだけサラマが幾度も挑みかかった、という証でもあった。
だがそれは間違いなく勝者と敗者の光景であり、そしてサラマはとどかなかったのだ。

「何故かは知らんが行く心算だったのだろう?藍染様の所に」

「・・・・・その話は無しになったんだよ。今さっき・・・な・・・・・」

行かなくていいのか、と問うハリベルの言葉にフェルナンドの答え

は否ではなく是。
そう、彼は藍染の元にいく必要はなくなったと、いや正確に言えば行くことは出来なくなったと言うのだ。
状況の全てを理解している訳ではないハリベル、何故彼が藍染の元へ向かおうとするのか、それを何故サラマがこうまでして止め様としていたのか、その理由は判らないがしかし先のやり取りを見た限りでは勝利したフェルナンドは藍染の下へと向かうものだと。
少なくともそう理解していたからこそハリベルはいいのか、と問うたのだった。
しかしフェルナンドは無しになったと、行けなくなったと言う。

そう言った彼を見るハリベル、見れば彼の視線はハリベルにではなく下、彼自身の足元へと向けられハリベルもつられてその視線を追えばそこに見えたのは大きな手であった。
その脚で立つフェルナンドの片足、その足首辺りをがっしりとした手が力の限り握っているのだ。
手の主はフェルナンドの足元で気絶し、横たわる男サラマ・R・アルゴス。
そう、その手は例え意識を失っていようとも力を失わず、今もフェルナンドの脚を握り締めている。
握り締められた脚、そして握り締める手にはありありと”意”が浮かんでいた。

行かせやしない。

というサラマの強い意思が。

「それが理由・・・か」

「あぁ・・・・・・」

フェルナンドの脚を握り締めるサラマの手、それを見たハリベルはそう零した。
誰の目にも明らかにその手は強く握り締められていた。
そしてその強さは同時に意思の硬さでもあったのだ。
見事なまでの”意”、例えその意識が失われていようとも並々ならぬ決意がその手を離す事を拒み続けているかのように。
意志の強さ、これもまた鉄の意思。
他者の為に自らを貫き通す鉄の意志の表れなのだろう。

「残念だが俺にはもうこの手を振りほどく力は残って無ぇよ。こんなデカブツ、引き摺って歩けるか阿呆らしい・・・・・戦いに勝ったのは俺だ。　だが、本当に勝ったのはもしかすればコイツかもしれねぇな・・・・・・」

自らの脚を渾身の力で握るサラマの手。
そしてその強さから伝わるサラマの決意にも似た感情。
強い強い思い、それを無碍に出来るほどフェルナンドは外道ではないのだろう。

きっと本当ならその手を力任せに振りほどく事など容易い筈だ。
だがそれをしないのは見せ付けられたサラマの”意”への敬意ゆえに。
戦いに勝ったのは、武力という戦いに勝ったのは間違いなくフェルナンドだろう。
だが何の為に戦っていたかを思ったとき、その勝利者は一体どちら

か。
力で下したフェルナンドか、意を見せつけたサラマか。
フェルナンドにとってこの戦いの真の勝者はきっとサラマなのだろう。
少なくとも彼にとってそうである、という時点で既に勝負はついたのだ。
サラマの勝利という形で。

「良い従属官（フラシオン）・・・いや子分を持ったな、フェルナンド。・・・・・・それによく似ているよ、お前達は」

「どこが良い子分だよ。　口を開けばのらりくらりと・・・・・・どうせ言う事なんか聞きゃしねぇし、コイツの思った通りにしか動く心算も無ぇだろうさ。ったく面倒な野郎だ・・・・・・」

変った、ハリベルは内心そう思っていた。
何処が変ったのか、明確に判った訳ではないがしかし、変ったとハリベルは感じていた。
今までほぼ毎日のように顔を合わせていた彼が、久しぶりに合ってみれば何処かしら成長している。
それは武力であるしそして今回のように内面的にも。
男子三日会わざれば刮目して見よ、という言葉もあるがその通り。
日々成長、日進月歩であろうとも彼らもまた成長し、そして変っていくのだ。

そんなハリベルの内心は他所に、サラマと似ていると言われたフェルナンドは至極嫌そうな顔をしていた。

ハリベルにそんな心算は無いのだがサラマと似ている、という事は彼からすれば藍染とも似ていると言われているようなもので、それは何とも嫌な事である様子。
ああだこうだとサラマと自分は似ていないと説明しようとするフェルナンド。
だがその様子すらハリベルにはどこか可笑しく見えてならなかった。

「フフ。　やはり似ているよ。　今のお前の言葉、まさしくお前そのものじゃないか」

「チッ。　笑えねぇなぁ・・・・・・」

まさしく的を射たハリベルの言葉に、ばつの悪そうなフェルナンド。
こういった言葉尻を捉えるのはサラマの仕事だと内心思う彼。

そんな二人のやり取りの中、フェルナンドの脚を掴み気絶しているサラマの表情はどこかしら、満足気であった。

蔦絡む七座
沈む炎の
眼に映らず
夜明し人等の
苦き思い出

BLEACH El fuego no se apaga. 72（後書き）

サラマは主人公ではありませんw

主人公はあくまでフェルナンドですよ。

今回は何でだかシリアス（？）な展開となってしまいました。
ここまで死とか生とか書く心算なかったんだけどねぇ。
書いているうちに、「あぁ、この二人決定的に違うわ」と思ったのがここまで書いちゃった原因かもしれません。

苦心しながらも取り敢えず、どういう罰かと言う決着まで書きましたが
色々考えながらも、少し強引な展開となってしまっているかもしれません。

まだまだだなぁ・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7253n/

BLEACH El fuego no se apaga.

2011年11月16日19時34分発行